

# 絢瀬天と九人の物語

ムツティ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

共学化のテスト生として、浦の星女学院に入学することになった絢瀬天（あやせそら）。

そこで九人の少女達と出会い、彼女達と交流を深めていく。

果たして天と九人の少女達は、どのような物語を紡いでいくのか？

そして天の驚くべき過去とは？

今、天と九人の物語が幕を開ける！

# 目次

女子校に入学してみた。	1
人には意外な一面があったりする。	17
夢を語る人はいつだって眩しい。	29
損な役回りなど誰もやりたくはない。	39
礼儀正しい人ほど怒ると怖い。	51
足掻くことが出来る人は凄い。	65
足掻いた人にしか見えないものがある。	75
友達とはかけがえのないものである。	75
人から必要とされるのは幸せなことである。	88
人に裏切られるのは辛いことである。	100
支えてくれる人の存在は大きい。	110
好きな人には好きって伝えるんだ。	127
縁は大切にすべきである。	139
借りは返すものである。	149
好きなことは全力でやるべきである。	161
	177

一人じゃないというのは心強いものである。  
191

手を差し伸べてくれる人は必ずいる。

202

準備しておくに越したことはない。

213

試練を乗り越えた先に待っているものが

ある。  
223

自分の気持ちに蓋をしてしまうのは苦し

い。  
237

大切な人の背中を押してあげたいもので

ある。  
247

言葉にしなければ分からないことがある

る。  
256

大切なのはやりたいかどうかである。

268

一步を踏み出す為には勇気が必要であ

る。  
280

自分を変えろというのは簡単ではない。

290

追い込まれた人は何をしでかすか分から

ない。  
298

熱くなると周りが見えなくなるものであ

る。  
310

大切に想うからこそ言えない言葉があ

る。  
320

大切に想うからこそ伝えたい言葉がある。  
328

心からの笑顔に勝るものはない。

336

高いハードルを越えるのは簡単ではない。  
348

誰にでも秘密にしていることはある。

363

人にはそれぞれの事情というものがある。  
375

真剣な気持ちには真剣に向き合うべきで

ある。

387

有り得ないなんて事は有り得ない。

395

ここにしかない魅力がある。

408

人の温かさは心に沁みるものである。

423

チャンスは突然やってくるものである。

433

人は人を思いやるものである。

443

気合いを入れ過ぎると空回りするもの

である。  
457

旅行先ではついはいしゃぎたくなるもの

である。  
467

知らない方が良くても気になるもの

である。  
477

- 見下されて良い気分になる人などいな  
い。 | 491
- 元気の無い人を見ると心配になるもの  
である。 | 499
- 心の優しい人ほど思い悩んでしまうもの  
である。 | 509
- 人から認めてもらえるのは嬉しいもので  
ある。 | 519
- 運命とは不思議なものである。 | 527
- 誰しもが壁にぶつかるものである。  
538
- 避けては通れない道もある。 | 552
- 簡単には受け止められないこともある。  
552
- 思うところは人それぞれである。  
579
- 再スタートはいつだって切ることが出来  
る。 | 596
- 心からの懇願は相手の心を揺さぶる。  
608
- チャンスは全力で掴みにいくべきであ  
る。 | 616
- 誰も報われないことほど悲しいことは無  
い。 | 626
- 人を想つての行動が人を苦しめることも  
ある。 | 634

なりふり構ってられない時もある。

642

優しさだけでは解決できないこともある。

650

素直な気持ちはなかなか口に出せない。

660

過去は変えられなくても未来は変えられる。

674

雨降って地固まる。

688

明確な拒絶は人を傷付けるものである。

696

誰にでも大切にしていることがある。

709

正解が無い問題ほど難しいものは無い。

719

気持ちを伝えないことには何も始まらない。

731

何年経っても変わらない思いがある。

739

大切なものほど簡単に諦められない。

753

迷いがあると心は晴れないものである。

764

人はギャップに弱いものである。

774

届けたい思いがある。

784

想いのこもった言葉は心に響くものである。  
879

離れていても繋がっているものがある。  
815

いつもと様子が違うと気になるものである。  
833

強みは活かすべきである。  
847

何事もほどほどが一番である。  
858

忘れてと言われることほど忘れられない。  
869

い。  
869

物事には意外な真実が隠れていたりす  
877

る。  
877

人に相談するのも大切なことである。  
970

887  
何度でもやり直すことは出来る。  
895

895  
思いのこもった曲は聴く人の心を打つ。  
909

909  
人の心は複雑なものである。  
920

920  
【黒澤ダイヤ】いつかきつと・・・  
932

932

944  
穴を埋めるのは大変である。  
944

944  
距離が近い人だからこそ気を遣う。  
958

958

970  
自分を犠牲にする人を見るのは悲しい。  
970

970

改まつてお礼を言われると照れ臭い。

985

何事にも切つ掛けがある。

998

どこにいても同じ明日を信じてる。

1015

頼りになるのはいつだって仲間である。

1028

これが恋と知ってしまったんだ。

1037

心は通じ合えるものである。

1047

喧嘩するほど仲が良い。

1060

包容力のある人は素敵である。

人は面影を重ねてしまうものである。

1071

1080

受けた恩は忘れないものである。

1093

【松浦果南】これからも……

1105

助けられたことは覚えているものであ  
る。

1123

心配してくれる人がいるのはあり  
がたいことである。

1131

向き合わないといけない時は必ずやって  
来る。

1140

喧嘩した相手と会うのは気まずいもの  
である。

1151

弱っている時は優しさが身に染みるもの

である。

1164

【国木田花丸】いつか絶対に……

答えは自分で探すものである。

1288

1175

【園田海未】特別な貴方へ……

のである。

1303

1194

不器用な優しさは胸を打つものである。

離れていても心は繋がっている。

1312

姉は弟を想い、弟は姉を想う。

1212

人は温もりを求めるものである。

昔は昔、今は今である。

1336

1237

仲間とのふれあいは楽しい。

目の前に僕らの道がある。

1347

【渡辺曜】負けないからね！

1247

【西木野真姫】貴方に出会えて……

【東條希】一番の幸せは……

1403

1383

【津島善子】一番の味方

1403

1271

お世話になった人には頭が上がらないものである。

1288

夏の暑さはハンパない。 ————— 1419

【矢澤にこ】口には出せないけど……

1430

【高海千歌】願わくば…… ————— 1445

【高坂穂乃果】素直な気持ちを……

1458

家族というものは特別である。 ————— 1469

身内を褒められて悪い気はしない。

1479

人から愛されるというのは幸せなこと

ある。 ————— 1491

仲間がいるというのは幸せなことであ

る。 ————— 1503

【南ことり】貴方がいてくれたから……

1515

【桜内梨子】ありがとう ————— 1533

【黒澤ルビイ】心を掴まれた人 ————— 1552

いつだって太陽は皆を照らしてくれる。

————— 1568

人から感謝されると嬉しいものである。

————— 1582

人の底力は侮れない。 ————— 1599

物語は始まったばかりである。 ————— 1608

新鮮な気持ちで臨むことは大事である。

————— 1625

【絢瀬絵里】一生忘れない……

1634

【星空凜】世界で一番・・・

現実には厳しいものである。

16761658

大切なものが無くなってしまふのは悲し

い。

1689

諦めたらそこで試合終了である。

1700

やるしかないからやるしかない。

1713

【黒澤ダイヤ】新たな年が始まった日

に・・・

17381724

人の性格は十人十色である。

【小泉花陽】ありのまま・・・

1747

【松浦果南】バカじゃないの

一人として同じ人はいない。

17811764

心を温めてくれるのは仲間である。

1795

皆違って皆良い。

1804

究極の選択は突然迫られるものである。

1815

簡単には決められないこともある。

1826

解決の糸口は意外なところにある。

1844

正攻法が正解とは限らない。

1852

君のこころは輝いてるかい？ — 1863

【中須かすみ】大好きな人に・・・

1874

【上原歩夢】夢に向かって歩く —

【国木田花丸】背中を押す —

18961883

【桜坂しずく】理想のヒロインに・・・

1917

結果発表は緊張するものである。

1932

『何でもない』は何でもなくない。

1947

【渡辺曜】一緒にいたい・・・ —

簡単に出来たら苦労しない。 — 19701955

気合いが空回りしてしまうこともある。

頑張っても上手くいかないこともある。

1979

【宮下愛】愛だけに！ —

20011990

【エマ・ヴェルデ】あの時の約束

2014

【小原鞠莉】唯一無二の存在 —

【朝香果林】素直に・・・ —

20452028

自分の気持ちからは逃げられない。

2063

頼りになる人がいると安心できる。

2073

距離が縮まるのは嬉しいものである。

2082

可愛いは正義である。

【優木せつ菜】どっちが好き？

【近江彼方】大好きな人

【朝香果林】一生の付き合い

2140211621032091

# 女子校に入学してみた。

「ここが浦の星かあ……」

正門の前に立ち、校舎を見上げる俺。

静岡県沼津市の内浦湾の西に張り出した岬に所在する、全校生徒が百人にも満たない小さな私立高校……それがここ、浦の星である。

俺は今日から、この高校の生徒になるのだ。さて……

「とりあえず到着したけど……生徒会長さんはどこだろう？」  
キョロキョロと辺りを見回す。

学校側からの連絡によると、正門の前で生徒会長さんが待っていてくれるとのことだったが……それらしき姿は見当たらない。

「……まあ良いや。少し待ってみよう」

「何を待ってみるの？」

「うおっ!？」

いきなり背後から声をかけられ、思わず飛び上がる。

いつの間にか俺の後ろには、橙色の髪の子が立っていた。浦の星の制服を着てい

るので、ここの生徒だろう。

「男の子がこんな所で何してるの？ここは女子校だよ？」  
首を傾げている女の子。

浦の星の正式名称は、浦の星女学院高等学校・・・名前の通り、ここは女子校なのである。

「いえ、それは重々承知していますが・・・実は俺、今日からこの高校の生徒になる身  
でして・・・」

「・・・通報して良い？」

「止めて!？」

思わず叫んでしまう。いや、確かに『何言つてんだコイツ』ってなるだろうけども。  
男である俺が女子校の生徒になるのには、れっきとした理由があるのだ。

「千歌ちゃん?どうしたの?」

明らかに俺を警戒し始めた女の子の後ろから、別の女の子がひよっこり顔を覗かせ  
る。

グレーのボブカットの髪にウェーブの入った、活発そうな女の子だ。

「あ、曜ちゃん!ここに怪しい男の子がいるの!」

「ええっ、不審者!？」

橙色の髪の女の子の言葉聞き、グレーの髪の女の子が俺を見て警戒する。

ああ、誤解が広がっていく・・・

「違いますって！れっきとしたこの学校の生徒です！」

「だからここは女子校だって！」

「だからそれには理由があるんですって！」

言い合う俺と橙色の髪の女の子。

するとグレーの髪の女の子が、何かに気付いたような表情で俺を見た。

「あれ？その制服・・・浦の星の制服に似てない？」

「いや、似てるも何も浦の星の制服ですよ。男子用の制服だそうです」

着ている制服を指差す俺。俺が入学するにあたって、学校側が急遽男子用の制服を用

意してくれたらしい。

その説明をしたところで、グレーの髪の女の子がハツとした表情を浮かべる。

「ああっ!?!ひよつとして、君が例のテスト生!?!」

「ああ、やっと分かってくれた・・・」

ようやく事情を理解してくれたらしい。一方、橙色の髪の女の子は未だ首を傾げている。

「テスト生？」



\*\*\*\*\*

「すみませんでした！」

「ごめんなさい！」

「いえ、俺の方こそ申し訳ありませんでした・・・」

何とか落ち着いた俺達は、お互いに深々と頭を下げていた。

いやホント、入学初日から何やってんだ俺・・・

「あ、自己紹介が遅れました・・・今日から浦の星でお世話になります、絢瀬天といいます。よろしく願います」

「これはこれにご丁寧に・・・二年の高海千歌です」

「同じく二年の渡辺曜です」

自己紹介し合う俺達。やっぱり二人とも先輩だったか・・・

「ところで高海先輩・・・その鉢巻き何ですか？」

「あ、これ？」

頭に巻いてある鉢巻きに触れる高海先輩。

『スクールアイドル愛』と書かれた鉢巻きを付けて、この人は一体何をしているのだろうか……

「実は私、新しく部活を立ち上げることにしたの」

「スクールアイドル部ですか？」

「そう、スクールアイドル部……って何で分かったの!？」

「今の流れで分からない方がおかしいでしょ」

「アハハ……はい、これがチラシだよ」

そう言つて紙を一枚渡してくれる渡辺先輩。スクールアイドル部か……

「部員つて、高海先輩と渡辺先輩以外にいますか？」

「あ、私は部員じゃないよ」

首を横に振る渡辺先輩。

「私は水泳部に入ってるから、スクールアイドル部には入ってないんだよね」

「え、じゃあ部員つて……」

「私だけだよ」

何故か胸を張る高海先輩。

意外と大きいな……じゃなくて。

「……生徒会の承認って貰ってます?」

「貰ってないよ?」

「……部活、立ち上げられてないじゃないですか」

「最低でも五人必要だっていうから、五人集まってるから申請しようかなって」

「……申請もしてないのに、勧誘活動してるんですか?」

「嫌だなあ、申請する為に勧誘活動してるんだよ」

能天気に笑っている高海先輩。これは生徒会にバレたらマズい案件なのは……

「あつ! あんなどころに美少女がっ! スクールアイドルやりませんかっ!」

一方の高海先輩は、そんなことお構い無しに勧誘活動を続けていた。おいおい……

「……渡辺先輩、止めなくて良いんですか?」

「いやあ……千歌ちゃん凄くやる気になってるし、良いかなあつて」

「言っときますけど、多分もうすぐ生徒会長さんが来ますよ」

「今すぐ止めなきゃ!?!」

慌てて走っていく渡辺先輩。

仕方なくその後を追うと、高海先輩が二人組の女子を勧誘しているところだった。

「大丈夫! 悪いようにはしないから!」

「いや、マルは……」

茶髪ふわっとしたロングヘアの女の子が、困った様子で対応していた。

その子の後ろには、赤髪の短いツーサイドアップの女の子が怯えたように隠れている。

「千歌ちゃん、その辺にしとかないとマズいつて!」

「曜ちゃん、この子達凄く可愛いよ!絶対人気出るよ!」

焦っている渡辺先輩とは対照的に、高海先輩は興奮状態だった。

あれは人の話なんて聞いちゃいけないな・・・

「すみません、先輩がご迷惑をおかけしました」

「マ、マルは大丈夫ずら・・・」

「ずら?」

「ハッ!?だ、大丈夫です!」

慌てて言い直す茶髪の女の子。何だったんだろう?

「ひよつとして、新入生?」

「あ、はい。そうです」

「じゃあ一緒だね。俺も新入生なんだ」

「ずらつ!?!」

「ずら?」

「ハッ!？」

慌てて口を押さえる茶髪の女の子。どうやら『ずら』が口癖らしい。

「ど、どうして男の子が．．．?」

「ひよつとして、テスト生の人．．．?」

赤髪の女の子が、茶髪の女の子の後ろから恐る恐る顔を出していた。

「うん、そうだよ。よろしくね」

「ぴぎっ!？」

慌てて隠れてしまう赤髪の女の子。えっ．．．

「あ、ゴメンね! ルビィちゃん、人見知りな上に男性恐怖症だから!」

茶髪の女の子が慌てて説明してくれる。なるほど、つまり俺が消えるべきなのか．．

「ゴメンね、ルビィちゃんとやら．．俺は今から屋上に行つてくるよ」

「ちよつと待つずらあああああっ!？」

茶髪の女の子が必死に止めてくる。最早『ずら』を隠す気も無いらしい。

「屋上に行つて何するつもりずら!？」

「アイキャンフライ」

「人は空を飛べないずら!」

「君と出会った奇跡がこの胸に溢れてるから、きつと今は自由に空も飛べるはずだよ」

「それはスピ●ツの曲ずらあああああつ！」

「ねえ二人とも、スクールアイドルやろうよ！」

空気を読まない高海先輩が、俺達のやり取りを見てあたふたしていたルビィちゃんとやらの手を握った。

その瞬間、ルビィちゃんとやらの顔が青くなる。

「っ?!マズいずらー！」

「うおっ?!」

茶髪の女の子が俺の頭を掴んで自分の胸に押し付け、両腕で俺の頭を抱いた。俺の顔が、大きくて柔らかいものに埋まっている。

ああ、幸せ・・・じゃなくて。

「ちよ、いきなり何を・・・」

「ぴぎやああああああああつ?!」

ルビィちゃんとやらの叫び声が響いた。茶髪の女の子の腕に耳が塞がれているから、俺にはそこまで響かない・・・

つてまさか!?

「俺を庇って・・・!？」

「ずらあ・・・」

ルビイちゃんとやらの『ばくおんぱ』を食らった茶髪の女の子は、一撃で瀕死状態になつてしまつたようだ。

倒れそうになる茶髪の女の子を、慌てて抱き留める。

「ちよ、大丈夫!?!」

「オ、オラはもうダメずら．．．ガクツ」

「ず、ずら丸ううううっ!?!」

何かよく分かんないけど、頭に浮かんだあだ名を叫ぶ俺。すると．．．

「キヤアアアアアアアアアツ!?!」

今度は側にあつた桜の木の上から、女の子が降つてきた。そのまま見事に着地するが．．．

「うう、足が．．．ぐえっ」

着地の衝撃に襲われていた。その上、頭の上に鞆が落ちてきて見事にヒツトする。

「えつと．．．色々大丈夫?」

高海先輩が女の子を心配していた。つてかアンタ、至近距離でルビイちゃんとやらの『ばくおんぱ』食らつてよく無事だったな．．．

そんなどうでもいいことに感心していると、その女の子が急に肩を震わせて笑い始めた。

「クツクツクツ……ここはもしかして地上……?」

「高海先輩、この人大丈夫じゃないみたいです。救急車呼んで下さい」

「分かった。ちよつと待っててね」

「私は正常よっ!」

ダークブルーの髪を揺らしながら叫ぶ女の子。いや、正常な人はあんなセリフ吐かないからね。

「コホンっ。ここが地上ということは……貴女達は、下劣で下等な人間共ということですか?」

「えいっ」

「ギャアツ!」

足に軽くチョップしてやると、女の子は足を押さえて蹲った。どうやら先程の痛みが残っていたらしい。

「何すんのよ!セクハラで訴えるわよ!」

「初対面で下劣だの下等だの言うような奴は、女子としてカウントされません。それがこの世界のルールです」

「無いでしょそんなルール!」

「それで?どちら様ですか?」

そう尋ねると、女の子がニヒルな笑みを浮かべる。

「フツ……私は墮天使ヨハネ……」

「……善子ちゃん？」

瀕死状態だったずら丸がガバツと起き上がり、女の子の顔を覗き込む。

「やっぱり善子ちゃんだ！私、花丸だよ！幼稚園以来だね！」

「は……花丸ううううっ!？」

仰け反る女の子。どうやら二人は知り合いらしい。

っっていうか、ずら丸の本名は花丸っっていうのか……

「久しぶりだね！善子ちゃん！」

「善子言うな！私はヨハネ！ヨハネなんだからね！」

そう言っつて逃げていく自称・墮天使ヨハネ。ずら丸がその後を追い、その後をルビィ

ちゃんとやらが追いかけていく。

「どうしたの善子ちゃんあああああん!？」

「花丸ちゃん待ってええええええっ！」

「来るなあああああっ！」

「……何だったんだ？」

多分あの子も新入生だろう。ずいぶん濃いメンツが集まったなあ……

「あの子達……後でスカウトに行こう！」

「アハハ……」

懲りない高海先輩に、苦笑している渡辺先輩。

「高海先輩、まだ諦めてないんですか？」

「勿論！だってあの子達、凄く可愛かったもん！」

「まあそれは認めますけど」

ずら丸もルビィちゃんやらも自称・墮天使ヨハネも、美少女なのは間違い無い。

「あの子達がスクールアイドルになったら、絶対人気出るよ！」

「……そんな単純な話でもないと思いますけど」

俺が溜め息をついていると……

「このチラシを配っているのは、貴女方ですか？」

背後で声がする。振り向くと、美しい黒髪ロングの女の子が立っていた。

手にはスクールアイドル部のチラシを持っている。

「いつ何時、スクールアイドル部なるものがこの浦の星女学院にできたのです？」

凜とした表情でこちらを見る女の子。

立ち居振る舞いがとても綺麗で、俺は思わずその女の子に見惚れてしまった。

「貴女も新入生？」

「ち、違うよ千歌ちゃん!? その人は三年生だよ!」

呑気にそう声をかける高海先輩に、慌てて耳打ちする渡辺先輩。

「しかもその人は……」

「……ひよつとして、生徒会長さんですか?」

もしかしてと思い尋ねてみると、女の子が優しい笑みを浮かべる。

「ええ、生徒会長の黒澤ダイヤと申します。絢瀬天さんですわね?」

「あ、はい。絢瀬天です」

「遅れてしまい申し訳ありません。生徒会の仕事に少々手間取ってしまいました……」  
申し訳なさそうに頭を下げる生徒会長。

「いえ、大丈夫です。そんなに待つてないですし」

主に二人の先輩と、三人の同級生のおかげで。

「すぐに生徒会室までご案内します。ああ、それと……」

先ほどの優しい笑みとは対照的に、怖い笑みを高海先輩と渡辺先輩に向ける。

「貴女方も一緒に来て下さい。お話がありますので」

「は、はい……」

震えながら返事をする二人。恐るべし生徒会長……

「では、参りましょうか」

「はい。ほら高海先輩、渡辺先輩、行きますよ」

「うう、曜ちゃん・・・」

「諦めよう、千歌ちゃん・・・」

絶対に生徒会長を怒らせてはいけない・・・入学初日にして、早くも教訓を学んだ俺  
なのだった。

人には意外な一面があつたりする。

「……つまり設立の許可どころか、申請すらしていないにも関わらず勧誘活動を行なっていたと」

「いやあ……皆勧誘してたんで、ついでというか焦つたというか……」

生徒会室にて、黒澤生徒会長の説教を受けている高海先輩。

ちなみに渡辺先輩は手伝っていただけということで、早々にお咎め無しが決まった。

「そして部員は貴女一人だけ……部の申請には、最低でも五人必要ということは知っていますわよね？」

「だから勧誘してたんじゃないですか〜♪」

高海先輩の答えにイラツとしたのか、バンツと机を叩く会長。

「……いったあ」

と思つたら、叩いた手を痛そうに擦っていた。え、ドジっ子？

「……ぶっ」

「笑える立場ですの!?!」

「ひい!?!すいません!」

噴き出した高海先輩だったが、会長に怒られて慌てて謝る。

「とにかく、スクールアイドル部の設立は認められませんわ」

「・・・そうですか。じゃあ、五人集めてまた来ます」

一礼して去ろうとする高海先輩。その背中に、会長が非情な言葉を投げかけた。

「それは別に構いませんけど・・・例えそれでも承認は致しかねますがね」

「なっ!?! どうしてですか!?!」

慌てて会長に詰め寄る高海先輩。会長は冷たい目で高海先輩を見ていた。

「私が生徒会長でいるかぎり・・・スクールアイドル部は認めないからです!」

「ええええええええええつ!?!」

悲鳴を上げる高海先輩。

「そ、そんな横暴な!?!」

「落ち着いて千歌ちゃん!?!」

尚も会長に詰め寄ろうとする高海先輩を、後ろにいた渡辺先輩が必死に止める。

「とりあえず一回戻ろう! 失礼しました!」

「ちよ、離して曜ちゃん!?!」

渡辺先輩は慌てて一礼すると、暴れる高海先輩を引きずって生徒会室を後にした。

「・・・入学初日から見苦しい姿をお見せして、申し訳ありません」

「大丈夫ですよ」

苦笑しながら答える俺。

「何だか少し・・・懐かしい光景でしたから」

「懐かしい？」

「いえ、こつちの話です」

俺は会長に向き直り、改めて一礼する。

「改めまして、絢瀬天です。これからお世話になります」

「いえいえ、こちらこそ」

優しい笑みを浮かべる会長。

「さて・・・今さら確認するまでもないことですが、絢瀬さんはこの学校で唯一の男子生徒ということになります」

会長が説明を始める。

「最初に念を押しておきますが、不純な行動は絶対に許しません。それを肝に銘じておくように」

「分かりました」

要はセクハラとかするなっということか・・・まあするつもりも無いので問題無い。

え？自称・墮天使？墮天使は人間じゃないし、セクハラにならないから。

「・・・まあ、誰かと交際するのは絢瀬さんの自由です。校内で破廉恥な行動をしないかぎり、私が何か言うことはありませんわ。ですが学生という立場上、節度を持った交際をしていただかないと困りますわね」

「どうやら会長は、結構お堅い人物のようだ。」

「ひよつとして、名家の令嬢とかなのではないだろうか・・・」

「まあそこは気を付けていただくとして・・・とりあえず絢瀬さんには、生徒会に所属していただくことになります。そこで生徒会の仕事をしてもらいつつ、学校に慣れていただきたいのです。勿論、私も全力でサポートさせていただきますので」

「心強いです」

「これは偽らざる本音だった。男子生徒が一人しかない環境で、生徒会長のサポートがあるのは正直嬉しい。」

「とまあ、説明することと言ったらこれぐらいなのですが・・・絢瀬さんの方から何か質問等がありますか？」

「そうですね・・・」

「今のところ、これといって気になることもない。強いて言うなら・・・」

「質問というか・・・お願いでも良いですか？」

「何でしょう?」

「出来たらで良いんですけど・・・苗字じゃなくて、名前で呼んでいただきたいなど」  
「はい？」

首を傾げる会長。そりやそういう反応するよね・・・

「いえ、大した理由は無いです。今までずつと周りから、名前で呼ばれることが多かったので・・・これから生徒会でお世話になるわけですし、出来ればそうしていただけると嬉しいかなあって」

本当に大した理由じゃないよな、コレ。そんなことを思っていると・・・

「・・・フフツ」

会長が急に笑い出す。あれ、何かおかしいこと言ったかな・・・

「ああ、ごめんなさい。恐る恐るといった感じでしたので、何をお願いされるのかと思つたら・・・そんなことで良いんですの？」

会長はひとしきり笑うと、立ち上がって手を差し出してきた。

「これからよろしくお願いしますわね・・・天さん」

ニツコリと笑う会長。どうやら、思つたほどお堅い人では無かつたらしい。

俺は差し出された手を握つた。

「よろしくお願いします、会長」

「ダイヤ、で結構ですわ」

「え？」

思わず驚いてしまう。まさか会長からそんなことを言われるとは……

「あら、私だけ名前で呼ばせるつもりですか？」

悪戯つぽく笑う会長。こんな表情もする人なんだな……

「……まさか。よろしくお願いします、ダイヤさん」

「よろしい」

満足気な笑みを浮かべるダイヤさんなのだった。

\*\*\*\*\*

「……落ち着かないなあ」

自分の席に座り、溜め息をつく俺。その原因は……

「「「じくっ……」」」

クラスの女子達からの視線だった。

ダイヤさんとの話が終わった後、入学式に出席したのだが……唯一の男子生徒とい

うことで、その時点で周りからの注目を集めていた。

そして入学式終了後、教室に移動してもこうして好奇の視線に晒されている。ある程度予想はしていたが、これは想像以上に気まずい。

どうしたものかと頭を悩ませていると・・・

「これ、食べるすら?」

「あ、どうも・・・」

左の席の女の子が、美味しそうな飴を差し出してくれる。俺はお礼を言いながらそれを受け取って・・・

すら?!

「え、すら丸?!いつの間に?!」

「今頃気付いたすら?!」

俺の左隣の席に座っていたのは、俺をルビィちゃんやらの『ぼくおんぱ』から守ってくれたすら丸だった。

「同じクラスだったんだ?!」

「そもそも一クラスしかないすら」

「あ、そうだった・・・」

この学校は生徒数が少ないから、各学年一クラスずつしかないんだっけ・・・

「ってというか、マルの名前はいつから『ずら丸』になったずら?」

「いや、何となく思いついたあだ名なんだけど・・・花丸っていうんだっけ?」

「うん、国木田花丸ずら」

「そっか、よろしくずら丸」

「無視ずら!?!」

何だろ、何故か『ずら丸』ってしつくりくるんだよね・・・

「あ、俺は絢瀬天。天でいいからね」

「じゃあ『そらまる』で・・・」

「うん、それはダメ」

何かよく分かんないけど、それは誰かと被ってる気がするのでダメだ。

「あれ、ちよつと待って・・・一クラスしかないってことは、ルビイちゃんとやらと自

称・墮天使も同じクラス?」

「ルビイちゃんならここにいますら」

「ぴぎっ!?!」

後ろの席を指差すずら丸。そこには、縮こまって涙目で座っているルビイちゃんとやらの姿があった。

「えーつと・・・よろしくね?」

「ぴ、ぴぎい……」

震えているルビイちゃんやら。俺、嫌われてるのかな……

「げ、元氣出さずら！そのうち慣れるずら！」

落ち込む俺を見て、ずら丸が慌てて励ましてくれる。良い奴だな、ずら丸……

「あ、ちなみに善子ちゃんならあそこずらー！」

ずら丸が指差した方を見ると……今朝の痛々しい振る舞いとは打って変わって、優雅に笑みを浮かべて席に座っている自称・墮天使がいた。

「……誰？」

「一応善子ちゃんのはず……ずら」

なるほど、黙っていれば美少女だな……

そんなことを考えていると、先生が教室に入ってきた。

「は〜い、席に着いて下さいね〜」

のんびりとした口調で呼びかける先生。

「コホンツ。新入生の皆さん、入学おめでとうございます。このクラスの担任を務めることになりました、赤城麻衣です。よろしく願います」

ペコリと頭を下げる赤城先生。

「それではまず、皆さんにも自己紹介をしてもらいたいと思います。とりあえず出席

番号順で・・・絢瀬くん、お願い出来ますか？」

「え、俺が出席番号一番ですか!？」

何てこった・・・全然気付かなかった・・・

「確かに入学式の列は先頭だったし、教室でも一番端の列の一番前の席だけど・・・まさか一番だったなんて・・・」

「逆に何で気付かなかったぞら!？」

「ずら丸のツツコミ。いやホント、何で気付かなかったんだろう・・・

席を立ち上がって教壇に立つと、クラス中の視線が俺に突き刺さった。

や、やり辛い・・・

「・・・初めまして、絢瀬天です。この学校で唯一の男子ということで、色々とご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが・・・仲良くしてもらえると嬉しいです。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げる。すると・・・

「よろしくぞら〜!」

「ずら丸が笑顔で拍手してくれた。後ろにいるルビイちゃんや、すまし顔をしていた自称・墮天使もおずおずと拍手してくれている。

それをキツカケに、他の皆も笑みを浮かべて拍手してくれた。

「よろしくね〜！」

「よっ、唯一の男子！」

あつ、ヤバイ泣きそう・・・皆が温かくて泣きそう・・・

「良かったずらね、天くん」

席に戻ると、ずら丸が笑顔で出迎えてくれた。天使や・・・

「・・・ありがとう、ずら丸。ルビイちゃんとやらもありがとうね」

「・・・びぎっ」

恐る恐る小さく頷くルビイちゃんとやら。

自称・墮天使の方にも口パクで『ありがとう』と伝えると、照れたように顔をふいと背けてしまった。素直じゃないだけで、本当は良い子なんだろうな・・・

その後も自己紹介は続いていき、ずら丸やルビイちゃんとやらの自己紹介も終わった。

そして・・・

「フツ・・・墮天使ヨハネと契約して、貴女も私のリトルデーモンになってみない？」

自称・墮天使が思いつきりやらかした。クラスの皆が啞然とする中、やらかしたと気付いた自称・墮天使の表情が強張る。

「ピ・・・ピ〜ンチッ!？」

教室から逃走していく自称・墮天使。

「……リトルデーモンって何？」

「……オラには分からないぞら」

「……びぎい」

それを呆然と見送る俺、ずら丸、ルビイちゃんとやらなのだつた。

夢を語る人はいつだって眩しい。

「え、ルビイちゃんとやらはダイヤさんの妹なの!？」

「う、うん……」

小さく頷くルビイちゃんとやら。

学校も終わり、俺はずら丸やルビイちゃんとやらと帰りのバスに乗っていた。

「マジか……苗字が黒澤で名前も宝石繋がりだから、凄い偶然だなと思ったら……」

「何で天くんはそこで気付かないずら……」

呆れているずら丸。

「黒澤家は旧網元の家系で、この辺りで一番の名家ずら」

「ああ、道理で……」

それなら、ダイヤさんのあの立ち居振る舞いも納得だな……

「それよりマルは、善子ちゃんが心配ずら」

「ああ、大丈夫かなあの子……」

あの後、自称・墮天使は帰ってこなかった。恐らく戻り辛かったんだらうけど……

啞然としていたクラスの皆も、結構心配していた。

「明日あの子が来たら、ちゃんと話したいな。俺も仲良くなりたいたいし」

「天くん……ありがとうずら。きつと善子ちゃんも喜ぶずら」

笑みを浮かべるずら丸。

そんな話をしているうちに、俺が降りる予定のバス停に到着した。俺は席を立つと、ずら丸とルビイちゃんとやらに手を振る。

「じゃあ二人とも、また明日」

「また明日ずら」

ずら丸が手を振り返してくれる中、ルビイちゃんとやらは恐る恐る小さく頭を下げていた。

俺が苦笑しながらバスを降りようとする……

「っ……あ、あのっ！」

ルビイちゃんとやらが声を上げた。驚いて振り向くと、ルビイちゃんとやらが顔を真っ赤にしていた。

「ま……また明日……」

小さく手を振ってくれる。どうやら、ずいぶん勇気を出してくれたみたいだ。

「うん、また明日ね」

笑顔で手を振り返す。恥ずかしそうに小さく笑うルビイちゃんとやらなのだ。

\*\*\*\*\*

「・・・で、何してんですか貴女達は」

「面目ない・・・」

「ごめんなさい・・・」

呆れた視線を向ける俺の前では、高海先輩と赤紫色のロングヘアの女の子がずぶ濡れで凍えていた。

いやあ、ビックリしたよね。ルビイちゃんとやらにほっこりしながらバスを降りて歩いてたら、すぐ側の海で凄い悲鳴と凄い水音がするんだもん。急いで駆けつけてみたら、高海先輩とこの女の子がプカプカ海に浮いてるし・・・

しかも高海先輩はともかく、この女の子はスクール水着を着ている。エロいな・・・じゃなくて、どう見ても自分から海に入ろうとしていた感じだ。

「まだ四月ですよ？沖縄じゃないんですから、そりゃあ寒さで凍えますって」

「反省します・・・」

うなだれる女の子。呆れて溜め息をついていると、ふと女の子の近くに置いてある制服が目に入った。

これって……

「……ひよつとして、音ノ木坂の生徒さんですか？」

「えっ……」

驚いたような表情の女の子。

「どうしてそれを……」

「それ、音ノ木坂の制服ですよ？タイの色が青つてことは、一年生ですか？」

「……今月から二年生。音ノ木坂は先月いっぱい転校して、二年生に上がる今月からこの近くの高校に転入することになって」

「ねえねえ、音ノ木坂ってどこの学校？」

俺の制服の袖を引っ張ってくる高海先輩。えっ……

「高海先輩、スクールアイドルやろうとしているのに知らないんですか？」

「え？スクールアイドルと関係ある学校なの？」

「超有名なスクールアイドルが在籍していた、東京の高校ですよ」

「ええっ!?!東京!?!」

「そこに驚くんですか？」

ダメだ、この人の判断基準が分からん。まあそれは置いてくとして・・・

「どうして海に入ろうとしてたんですか？」

「・・・海の音が聞きたくて」

「デジタル配信されてるんで、ダウンロードして聴いて下さい」

「それ多分『海の声』よね？」

「桐●健太さんのファンなんです、分かります」

「いや違うから。最後まで話聞いてくれる？」

女の子は一通りツツコミを入れると、ポツポツと語り出した。

「・・・私、ピアノで曲を作ってるの。でも、海の曲のイメージが浮かばなくて・・・」

「それで海に潜って、音を聴こうとしていたと・・・」

「コクリと頷く女の子。一方、高海先輩は目を輝かせていた。

「作曲してるの!? 凄いな!」

「・・・べ、別に凄くないけど」

「照れたように顔を背ける女の子。この感じ・・・」

「・・・似てるな」

「似てる??」

「いえ、こっちの話です」

「ねえねえ、誰かスクールアイドル知ってる!? 東京だと有名なアイドルたくさんいるでしょ!」

「・・・スクールアイドルって何?」

「ええっ!? スクールアイドル知らないの!」

驚愕のあまり叫ぶ高海先輩。おいおいマジか・・・

「音ノ木坂の生徒なら、絶対に語り継がれているであろうスクールアイドルがいるはずなんですけど・・・」

「私ずっとピアノばかりやってきたから、そういうの疎くて・・・スクールアイドルって有名なの?」

「有名なんてもんじゃないよ!? ドーム大会が開かれるほど超人気なんだよ!」

興奮しながら語る高海先輩。ポケットからスマホを取り出し、画面を見せる。そこに映っていたのは・・・

音ノ木坂の制服を着て踊る、九人組のスクールアイドルだった。

「何で気付かないんですか、この鈍感オレンジヘッド」

「今何で罵倒されたの私!」

「高海先輩、その人達の制服を見て気付きました?」

「あ、この制服? 可愛いよね〜!」

「スマホ壊して良いですか？」

「急に攻撃的になつたね!?! ホントどうしたの!?!」

「この制服、音ノ木坂の・・・」

「・・・あつ」

女の子の指摘に、高海先輩がようやく気付く。

そして女の子の近くに置かれた制服に目をやり、スマホの画面に目をやり、最後に俺を見る。

「えっ、じゃあこの人達って・・・」

「・・・かつて音ノ木坂に在籍していた人達です」

「ええええええええええええっ!?!」

高海先輩の絶叫。今さらですかそうですか。

「じゃあこの子、この人達と同じ学校にいたってこと!?!」

「だから最初からそう言ってるでしょうが」

「ねえねえ、どんな人達なの!?!」

「い、いや・・・会ったことないけど・・・」

「もう卒業してますよ、その人達」

「ええ・・・何だあ・・・」

がつくりうなだれる高海先輩。 いやいやいや・・・

「つていうか、何でその人達のことには知ってるのに音ノ木坂は知らないんですか」

「いやあ、知ったのつい最近でさあ・・・」

苦笑する高海先輩。 その場から立ち上がり、海へと視線を向ける。

「・・・私ね、普通なの。 普通星に生まれた普通星人で、どんなに変身しても普通なんだつて・・・そう思ってた」

寂しそうに笑う高海先輩。

「それでも何かあるんじゃないかって期待してたんだけど、何もなくて・・・気付いたら高校生になってた」

そこで言葉を切ると、おどけるように『ガオーッ！』とポーズをとる。

「このままじゃ普通星人を通り越して、普通怪獣ちかちーになっちゃううううっ!!」  
「うなじ削ぎましようか?」

「それ怪獣じゃなくて巨人の駆逐方法だよね!!? つていうか駆逐しないでよ!!」

高海先輩はツツコミを入れると、面白そうに笑って空を見上げた。

「そんな風に思ってた時に、出会ったの・・・あの人達に」

目を輝かせる高海先輩。

「動画を見て『何じやこりやあああああつ!!?』つてなって、気付いたら全部の曲を聴い

てた。毎日動画を見て、曲を覚えて・・・そして思ったの。私も仲間と一緒に頑張ってみたい、この人達が目指したところを私も目指したい。私も・・・輝きたい、って」

「それでスクールアイドルを・・・」

気付くと、高海先輩の言葉に引き込まれてしまっていた。輝きたい、か・・・

「・・・ありがとう」

女の子が微笑みながら呟く。

「今の話聞いてたら・・・何か、頑張れって言われた気がする。スクールアイドル、なれると良いわね」

「うんっ!」

女の子の言葉に、笑顔で頷く高海先輩。

「あつ、自己紹介がまだだったね・・・私は高海千歌。あそこの丘にある、浦の星女学院っていう高校の二年生。その男の子は絢瀬天くんで、同じ高校の一年生なの」

「えっ・・・女子校よね・・・?」

「共学化に向けてのテスト生です」

「あつ、なるほど・・・」

高海先輩や渡辺先輩に出会った時のような失態を犯さないよう、端的な説明を考えると良いわね・・・

「タイの色だけで音ノ木坂の学年が分かるみたいだし……ひよつとしたら、女子校好きの変態なんじゃないかって思っちゃった」

「ちよつと海に身投げしてきますね」

「わーっ!?!ストツプストツプ!?!」

必死に俺を止める高海先輩。その様子にひとしきり笑った女の子が立ち上がる。

「じゃあ明日から高海さんは同級生、絢瀬くんは後輩ってことになるわね」

「……え?」

同時にポカんとする俺達。そんな俺達を見て、悪戯っぽく笑う女の子なのだった。

「私は桜内梨子。明日から浦の星女学院に転入する予定だから、よろしくね」

損な役回りなど誰もやりたくはない。

翌日……

「あ、ずら丸とルビィちゃんとやら。おはよう」

「おはようずらあ……」

「お……おはよう……」

浦の星行きのバスに乗ると、ずら丸とルビィちゃんとやらが一番後ろの席に座っていた。

「ずら丸はずいぶん眠そうだね？」

「つい読書に夢中になって、夜更かししちゃったずら……」

欠伸を噛み殺すずら丸。よほど眠いようだ。

「学校に着くまで寝てたら？寄りかかっても良いよ？」

「じゃあお言葉に甘えるずらあ……」

隣に座った瞬間、俺の右肩に頭をコテツと乗せるずら丸。そのまま俺の右半身に体重を預けてくる。

「すう……すう……」

「・・・寝るの早いな」

苦笑しながら、ずら丸の右隣に座っているルビイちゃんとやらの方を見ると・・・

「ぴぎっ!?!」

視線が合い、慌てて逸らすルビイちゃんとやら。どうやらまだ慣れないらしい。

ふとルビイちゃんとやらのバッグに目をやると、女の子の顔が写った缶バッジが付いていることに気付いた。あれって・・・

「・・・もしかしてルビイちゃんとやら、スクールアイドル好きなの?」

「ぴぎっ!?!」

ビクツと肩を震わせるルビイちゃんとやら。

「ど、どうして・・・」

「いや、その缶バッジ・・・小泉花陽ちゃんだよね?」

「っ!?!分かるの!?!」

「うん、μ sのメンバーでしょ?」

μ sというのは、例の音ノ木坂に在籍していたスクールアイドルグループの名前だ。

そのグループを結成していた九人の内の一人・・・それが缶バッジに写っている女の子、小泉花陽ちゃんなのである。

「μ sを知ってるの!？」

「そりゃあ知ってるよ。有名なグループだもん」

目を輝かせるルビィちゃんとやら。これは高海先輩と話が合いそうだ。

「推しメンっている!？」

「俺は東條希ちゃんかな。包容力のある感じが好きなんだよね」

「分かる!大人の女性って感じがするよね!」

「そうなんだよ。ルビィちゃんとやらは、花陽ちゃん推しなの?」

「そうなの!可愛くて憧れてるんだ!」

よほど好きなのか、表情が活き活きとしているルビィちゃんとやら。ちよつと引っ込

み思案だけど、こういう一面もあるんだな・・・

「絢瀬くんは、μ sの曲で好きな曲ってある!？」

「んー、やっぱり『Snow halation』かなー。っていうか、天で良いよ?

俺も何だかんだ、ルビィちゃんとやらのこと名前で呼んじやってるし」

「い、良いの・・・?」

「勿論。っていうか、俺もそろそろ普通にルビィちゃんって呼んで良い?』とやら」

て付けるの大変で・・・」

俺の言葉にポカンとしていたルビィちゃんとやらだったが、やがてクスクス笑い出

す。

「フフツ・・・最初から普通に呼んでくれて良かったのに」

「いきなり下の名前で呼ぶのも図々しいかなって思ってたさ」

「その割には、ほぼ下の名前で呼んでたよね？」

「・・・まあ確かに」

ルビイちゃんとやらはひとしきり笑うと、おずおずと手を差し出してきた。

「えっと、昨日はちゃんと自己紹介できなかつたけど・・・黒澤ルビイです。よろしく

ね・・・天くん」

高海先輩に触れられただけで叫んでしまったこの子が、勇気を出して手を差し出してきている。やはり少し怖いのか、若干手が震えていた。

この勇気に、俺はちゃんと応えないといけないな・・・

「・・・改めまして、絢瀬天です。よろしくね・・・ルビイちゃん」

差し出された手をそっと握り、握手を交わす。

視線が合った俺達は、お互い照れ笑いを浮かべるのだった。

\*\*\*\*\*

「この学校には、スクールアイドルは必要無いからですわ!」

「だからどうしてですか!?!」

「・・・俺のほっこりした朝を返して下さい」

げんなりしてしまう俺。

ダイヤさんからの連絡で生徒会室へ行くと、ダイヤさんと高海先輩が顔を突き合わせて言い争いをしていた。渡辺先輩が、少し離れたところでおろおろしている。

「渡辺先輩、何があったんですか?」

「わ、私もスクールアイドル部に入ることにしたんだけど・・・申請書を出しに来たら却下されちゃって・・・」

「・・・ああ、なるほど」

出来ればスルーしたいけど、渡辺先輩も困ってるみたいだし・・・俺が止めるしかないのか・・・

俺は溜め息をつくど、二人の間に入った。

「はいはい、そこまでにしましょうね」

「絢瀬くん!?!」

「天さん!？」

ようやく俺の存在に気付いたようで、驚いている二人。やれやれ……

「とりあえず高海先輩、この件に関しては貴女が悪いです」

「ええっ!?!何で!？」

「渡辺先輩が入っても、部員は二人だけじゃないですか。最低でも五人必要だつていう話、忘れたわけじゃないでしょう?」

「そ、それは……」

「まずは部員を五人集めてから、申請書を提出しに来るべきです。そこで認められなと言われたら、その時いくらでも抗議したら良いでしょう。高海先輩は昨日、ダイヤさんのことを横暴だと言いましたけど……条件を満たせていないのに抗議している今の貴女の方が、よほど横暴だと俺は思います」

「っ……」

唇を噛む高海先輩。

「それからダイヤさん、貴女も大概ですよ」

「なっ!?!私もですか!?!」

「当たり前じゃないですか」

冷たい目でダイヤさんを見る俺。

「『認めない』とか『必要無い』とか……具体的な理由も言わずに生徒のやりたいうことを否定するなんて、それが生徒会長のやる事ですか？」

「つ……それは……！」

「まあ今はいいです。高海先輩が申請条件を満たせていませんから。ですが、もしちゃんと条件を満たした上で申請に来たら……今みたいな態度は許されませんからね？」

俯いてしまうダイヤさん。

少し言い過ぎたかもしれないが、こういうことはハッキリさせておかないといけない。

「……渡辺先輩、高海先輩を連れて行ってもらって良いですか？生徒会の仕事のことです、ダイヤさんから話があるみたいなので」

「分かった。千歌ちゃん、行くこう？」

「うん……」

渡辺先輩が高海先輩の手を引いて、生徒会室を出て行く。

謝罪の意味を込めて軽く頭を下げると、渡辺先輩は苦笑しながら手を振ってくれた。高海先輩のアフターケアは、渡辺先輩に任せて良いだろう。

問題は……

「・・・申し訳ありませんでした」

俯いたまま、小さな声で謝るダイヤさん。

「生徒会長として、不適切な態度でしたわ・・・ですが、私は・・・」

「・・・何か理由があるんでしょう？」

「っ!？」

驚いたように顔を上げるダイヤさん。

「俺だって、ダイヤさんが何の理由も無くあんなこと言ってるなんて思ってますよ。」

昨日知り合ったばかりですけど、それくらいは分かっているつもりです」

この学校の生徒のことを、とても大事に思っている・・・そのことは、昨日話をさせ

てもらってよく分かった。

スクールアイドルを否定するのは、きっと何かしらの理由があつてのことだと思う。

「無理に話せなんて言いませんけど、高海先輩の想いにはちゃんと向き合つてあげて

下さい。じゃないと向き合つてもらえない高海先輩も、向き合うことをしないダイヤさ

んも・・・二人とも苦しい思いをしますから」

「天さん・・・」

「・・・なんて、ちよつと柄にもないこと言つちやいましたね。さつきもキツイ言い方をしてしまって、すみませんでした」

少なくとも、先輩に対してとるべき態度ではなかったしな．．．  
頭を下げると、ダイヤさんが慌てていた。

「そ、天さんが謝る必要はありませんわ！悪いのは私なのですから！」

「ですよ。悪いのはダイヤさんですよ」

「急に態度が変わりましたわね!？」

「人の足元を見る男、それが俺です」

「ただの最低な人間じゃないですか!？」

「そうですね。それが何か？」

「開き直りも甚だしいですよ!？」

全力ツツコミにより、息切れしているダイヤさん。ようやく本調子に戻ったようだし、この辺にしておくか．．．

「ところでダイヤさん、俺に何か用があったんじゃないですか？」

「ハツ!?! そうでしたわ！」

ようやく本題を思い出したらしいダイヤさん。

「実は今日から転入してくる生徒がいて、もうすぐ生徒会室に来る予定なのです。せつかくですので、天さんにも立ち会っていただこうと思ひまして」

「ああ、桜内梨子さんですね」

「ええ、桜内梨子さん……って何で知ってますの!？」

「実は……かくかくしかじか」

「なるほど、そういうった事情が……って通じるわけないでしょう!?! それで通じるのはアニメやマンガの世界だけですわよ!？」

「おお、見事なノリツツコミ」

「させないで下さいます!？」

そんなやり取りをしていると、生徒会室のドアをノックする音がした。

「どうぞ」

「失礼します」

入ってきたのは、やはり桜内さんだった。緊張しているのか、少し表情が強張っている。

「初めまして、桜内梨子です」

「特技はピアノですよね」

「そう、特技はピアノ……って絢瀬くん!？」

「どうも」

にこやかに手を振ってみる。桜内さんは啞然としていた。

「な、何でここに……」

「俺、生徒会長の下僕なんで」

「下僕!?!」

「誤解を生む発言は止めて下さいます!?!」

ダイヤさんはツツコミを入れると、咳払いをしてから桜内先輩を見た。

「コホンツ・・・初めまして、生徒会長の黒澤ダイヤですわ。天さんとはお知り合いのようですので紹介は省きますが、彼も生徒会の一員なのです」

「そ、そうでしたか・・・」

驚きながらも納得した様子の桜内さん。

「これからよろしくお願ひします、桜内さん・・・あ、桜内先輩か」

「フフツ、どっちでも大丈夫よ。こちらこそよろしくね、絢瀬くん」

「あ、できたら天って呼んで下さい。そっちの方が呼ばれ慣れてるので」

「じゃあ天くん。私のことも梨子で良いから」

「了解です、梨子さん」

「・・・コホンツ」

再びダイヤさんの咳払いが入る。何故か少しモジモジしていた。

「と、ところで桜内さん? 貴女、音ノ木坂から転校してきたそうですわね?」

「ええ、そうですけど・・・」

「音ノ木坂には有名なスクールアイドルグループがいたと噂に、あくまでも噂に聞いていますが・・・お会いしたことはありませんか？」

「いえ、残念ながらありません。私はずっとピアノしかやってこなかったもので、そういったことには疎くて・・・スクールアイドルというのも、昨日初めて知ったくらいです」

「そ、そうですか・・・」

明らかに肩を落とすダイヤさん。あれ、もしかしてダイヤさん・・・

「そ、それでは！いくつか注意事項を説明させていただきますわ！」

慌てて切り替えるダイヤさんに、疑惑の眼差しを向ける俺なのだった。

# 礼儀正しい人ほど怒ると怖い。

「善子ちゃん、来なかったずら・・・」

帰りのバスを待ちながら、肩を落とすずら丸。

結局今日、自称・墮天使が学校に来ることは無かった。よほど昨日のことを引きずっているんだろうか・・・

「連絡先って分かんないの？」

「分からないずら。家は・・・変わってないなら覚えてるずら」

「じゃあもう少し待つてみて、何日経っても来ないようなら家に行ってみようか。俺も付き合うからさ」

「勿論ルビイも行くよ」

「天くん、ルビイちゃん・・・」

涙目のずら丸。俺はずら丸の頭を撫でた。

「ホント優しいな、ずら丸は」

「友達の心配をするのは当たり前ずら」

そんな会話をしていると・・・

「あつ、絢瀬くん……」

「え?」

不意に名前を呼ばれたので振り向くと、高海先輩と渡辺先輩がいた。二人もちょうど帰るところらしい。

今朝のこともあって、高海先輩は気まずそうな顔をしている。俺は二人に歩み寄ると、頭を下げた。

「高海先輩、今朝はキツイ言い方をしてしまつてすみませんでした。渡辺先輩も、不快な思いをさせてしまつてすみません」

「そんな!」

「頭上げてよ!」

慌てる高海先輩と渡辺先輩。

「私がいけなかつたんだよ!絢瀬くんの言う通り、ちゃんと五人集めてから申請書を出しに行くべきだったのに……ごめんなさい!」

「あの場に最初からいた私が、千歌ちゃんと生徒会長の間に入らなきやいけなかつたんだよ!なのに嫌な役を絢瀬くんに押し付ける形になつちやつて……本当にごめん!」

「ですよ。じゃあお二人が悪いということだ」

「「掌返し!」」

「冗談ですよ」

思わず笑ってしまう俺。

「これ以上は、お互い謝り続けることになりますから……この話はこれで終わりにしませんか？」

「絢瀬くん……うん！」

「そうしよつか！」

笑みを浮かべる二人。良かった、どうやら一件落着のようだ。

「天くん、先輩達とケンカでもしてたずらう？」

いつの間にか、ずら丸が俺の隣に立っていた。

「まあ色々あったんだよ、色々」

「あつ、入学式の時の可愛い子！」

高海先輩が顔を輝かせる。

「こんにちは、国木田花丸つていいいます」

「私は高海千歌！よろしくね！」

「渡辺曜であります！ヨーソロー！」

ずら丸達が自己紹介しあう中、ルビイちゃんは俺の背中から顔を覗かせていた。

「び、びぎい……」

「あつ、花丸ちゃんと一緒にいた子！」

「ぴぎいつ!？」

俺の背中に隠れるルビィちゃん。あれ、これつてすら丸の役割だった気が……

「絢瀬くん、ずいぶん懐かれたね？」

「まあ色々あつたんですよ、色々」

渡辺先輩の言葉に、苦笑しながら返す俺。

「あ、この子は黒澤ルビィちゃんです。ダイヤさんの妹なんですよ」

「嘘!？」

「ホントに!？」

驚愕している二人。まあ何と言うか、対照的な姉妹だもんなあ……

「花丸ちゃん、ルビィちゃん、スクールアイドルやってみない!？」

「マルはちよつと……」

「ぴぎい……」

首を横に振る二人。高海先輩がうなだれる。

「ええ……絶対人気出るのに……」

「それより、高海先輩と渡辺先輩は作曲つて出来るんですか?」

俺はそこが気になっていた。高海先輩か渡辺先輩、どちらかが音楽をやっていたりする

るんだらうか……

「作曲？出来ないよ？」

「私も出来ないなあ」

「えっ……」

呆然としてしまふ俺。おいおい……

「……どうするつもりなんですか？」

「え？スクールアイドルって作曲できないとマズいの？」

「……マジかあ」

俺は頭を抱えてしまった。どうやらこの二人は知らないらしい。

「え、何？どういうこと？」

「……スクールアイドルをやるということは、ラブライブを目指すわけですよね？」

「そりやあ当然だよ！」

大きく頷く高海先輩。

ラブライブというのは、スクールアイドルの頂点を決める大会のことだ。その規模は凄まじく、決勝はドームで行なわれるほどである。

しかしそんなラブライブには、出場する為の絶対条件が存在するのだ。

「……ラブライブで披露する曲は、オリジナルの曲じゃないといけないですよ」

「……えっ」

「しかも予選から始まって決勝まで進んだ場合、当然一曲だけでは足りません。複数のオリジナルの曲が必要になります。厳密に言えば、オリジナルなら同じ曲を繰り返し披露しても問題はありませんが……同じパフォーマンスの繰り返しで勝ち進めるほど、ライブは甘くないです」

俺の説明に、顔色が悪くなつていく高海先輩と渡辺先輩。

「……つまり作曲が出来ないと、ライブに出場することも出来ないってこと？」  
「そういうことです」

頷く俺。

俺の背中に隠れているルビィちゃんも、うんうんと頷いていた。流石スクールアイドルが好きなだけあって、この条件を知っていたらしい。

「そ、そんな……」

「早くも夢が断られた……」

その場にへたり込む二人。アララ……

「まあでも、お二人が作曲出来なくても大丈夫じゃないですか？ 要は作曲出来る人を探せば良いわけです」

「そうは言ってもさあ……浦の星に作曲が出来る人なんて……」

「梨子さんがいるじゃないですか」

「・・・え？」

ポカンとしている高海先輩。

「いや、桜内梨子さんですよ。今日二年生のクラスに転入してきた人です。昨日言っていたじゃないですか。ピアノで曲を作ってるって」

「あああああああああつ!」

叫ぶ高海先輩。完全に忘れてたなこの人・・・

「そうだよ！桜内さんがスクールアイドル部に入ってくれたら解決するじゃん！」

「でも千歌ちゃん、今日誘って断られてたよね？」

「もう誘ってたんですか・・・」

「いやあ、可愛かったからつい・・・」

頭を掻きながら苦笑する高海先輩。行動早いなこの人・・・

「スクールアイドル部には入ってくれないとしても、曲だけでも依頼してみたらどうですか？まあ梨子さんにも都合があるでしょうし、引き受けてくれるとはかぎりませんけど」

「それ名案だよ！ありがとう絢瀬くん！」

はしゃいでいた高海先輩だったが、ふと気付いたように俺を見た。

「あれ？ 絢瀬くん、桜内さんのこと名前で呼んでるの？」

「ええ。俺のことは天で良いって言ったら、梨子さんも名前呼びで良いって」

「ええっ!? 私は絢瀬くんからそんなこと言われてないんだけど!？」

「私もだよ!？」

「そうでしたっけ？」

そういうえば、何だかんだで二人には言っただけでなかった気がする・・・

結局この後散々『不公平だ!』と言われ、二人とも俺のことを『天くん』と呼ぶようになった。

そして俺も高海先輩を『千歌さん』、渡辺先輩を『曜さん』と呼ぶことになるのだった。

\*\*\*\*\*

「で、また断られたんですか？」

「そうなんだよねえ・・・」

溜め息をつく千歌さん。あれから数日間、千歌さんはひたすら梨子さんにアタックし

ているそうだが・・・

答えはノー。梨子さん曰く、『そんな暇は無い』らしい。

「もうちよつとな気がするんだけどねえ・・・『ごめんなさい!』だったのが、『・・・ごめんなさい』に変わったし」

「いや、単に迷惑してるだけでしょ。段々うざくなってきたらだけでしょ」

「アハハ・・・やっぱり天くんもそう思う?」

苦笑している曜さん。やはり千歌さんが鈍感なだけのようなのだ。

「・・・貴女達」

ダイヤさんがこめかみをピクピクさせている。

「どうして生徒会室で雑談してますの!?!」

「花丸ちゃんから、天くんがここにいて聞いていたので」

悪びれもせず答える千歌さん。

放課後にダイヤさんと生徒会の事務作業をしていたところ、千歌さんと曜さんが生徒会室へ乱入してきたのだ。

「天くんなら、何か良いアイデアがあるんじゃないかと思って」

「天さんは生徒会の一員ですわよ!?!巻き込むのはお止めなさい!」

「まあまあ、とりあえず落ち着きましょう」

苦笑しながらダイヤさんを宥める。

「ちよつと休憩しましょうか。お茶でも淹れるので、千歌さんと曜さんも適当に座つて下さい」

「わーい！ありがとうございます！」

「ヨーソロー！」

「全く・・・天さんは甘すぎますわ」

何とかダイヤさんが落ち着いたところで、俺はお茶の準備を始める。

一方、千歌さんはダイヤさんにスクールアイドルへの情熱を訴えかけていた。

「私はスクールアイドル部を作つて、皆と一緒に輝いてみせます！」

「ですから、まずは部員を五人揃えてから来て下さいと言っているでしょう？」

「勿論です！今はまだ二人ですけど、『ユーズ』だつて最初は三人だったんですから！」  
生徒会室の空気が凍った気がした。何故だろう、今ダイヤさんの方を見てはいけな  
ような気がする。

「知りませんか!?第二回ライブ優勝！音ノ木坂学院スクールアイドルグループ！  
その名も『ユーズ』！」

いや、『ユーズ』つて・・・マジですか千歌さん・・・

「・・・千歌さん、あれ『ミ्यूズ』つて読むんですよ」

「・・・えっ」

俺の指摘に固まる千歌さん。

「嘘・・・『ユーズ』じゃないの・・・?」

「お黙らつしやあああああああいつ!」

「ひいつ!?!」

ダイヤさんの怒りが爆発した。千歌さんと曜さんが悲鳴を上げる。

「言うに事欠いて名前を間違えるですって!?!ああん!?!」

ヤンキー化するダイヤさん。大和撫子はどこへ行ったんだ・・・

「μ s はスクールアイドル達にとつての伝説! 聖域! 聖典! 宇宙にも等しき生命の源ですわよ!?! その名前を間違えるとは片腹痛いですわ!」

千歌さんに詰め寄るダイヤさん。

ねえ、やつぱりこの人スクールアイドル好きだよね? μ s のファンだよね?

「その浅い知識だと、たまたま見つけたから軽い気持ちで『マネをしてみよう』とか思ったのですね!?!」

「そ、そんなこと・・・!」

「ならば問題です! μ s が最初に九人で歌った曲は!?!」

「え、えーつと・・・」

「第二回ラブライブ予選、μ sがA—RISEと一緒にステージに選んだ場所は!？」  
「う、うくん……」

「第二回ラブライブ決勝、μ sがアンコールで歌った曲は!？」

「あ、それは知ってます! 『僕らは今の中で』ですよね!？」

「ではその『僕らは今の中で』の冒頭でスキップしている四名は!？」

「ええっ!？」

「ぶつぶつぶー! ですわ!」

再び千歌さんに詰め寄るダイヤさん。

もう確定だよ。絶対μ sのファンだよこの人。あまりの豹変ぶりに曜さんが引いてるよ。

「こんなの基本中の基本ですわよ!?! 正解は……」

「絢瀬絵里、東條希、星空凛、西木野真姫」

「その通り……え?」

驚いてこちらを振り向くダイヤさん。

そんなダイヤさんをよそに、俺はお茶を注いだ湯呑みをテーブルに並べていく。

「μ sが最初に九人で歌った曲は、『僕らのLIVE 君とのLIFE』。通称『ぼらら』」

ダイヤさんと一緒に食べようと思って持ってきた和菓子を皿に分けながら、ダイヤさんの問題に答えていく。

「μ s が A—R I S E と一緒にステージに選んだのは、当時 A—R I S E が通っていた秋葉原 U T X の屋上。ちなみにそこで披露した曲は、『ユメノトビラ』ですね」

「あつ、私その曲大好き！」

目を輝かせる千歌さん。

「その曲を聴いて、スクールアイドルをやりたいて思ったの！」

「あ、そうだったんですね」

自分自身に悩んでいた千歌さんなら、確かに大きく心を揺さぶられてもおかしくない。それほど力の込められた歌詞が、この曲には詰まっている。

「凄いな天くん・・・そんなスラスラ答えられるなんて・・・」

「ダイヤさんの言う通り、これくらいは基本中の基本ですよ」

啞然としている曜さんに、笑いながら答える俺。

「μ s に憧れてスクールアイドルをやるなら、もう少し μ s のことを知っておいても損はないと思いますよ？ スクールアイドルとしてどういう軌跡を辿ったのか、参考になる点は色々あるでしょうし・・・はい、お茶の用意ができましたよ」

「おお、美味しそうな和菓子！」

「もらっちゃって良いの!?!」

「勿論。ほらダイヤさん、一緒に食べましょう」

「え、ええ・・・」

俺の方を見ながら、呆然としているダイヤさんなのだった。

足掻くことが出来る人は凄い。

「んー、どうしたら桜内さんを説得できるかなあ・・・」

頭を悩ませている千歌さん。曜さんと別れた俺達は、二人で帰り道を歩いていた。

「諦めてないんですね」

「勿論！桜内さんもルビィちゃんも花丸ちゃんも、私は諦めないよー」

「三股ですね、分かります」

「言い方が悪意に満ちてない!？」

千歌さんのツツコミをスルーして、道路の向かい側に広がる海を眺める。夕陽で海がオレンジ色に染まっている光景は、何度見ても飽きないほど美しかった。

と、浜辺に見覚えのある人物が立っていた。

「あれ、梨子さん？」

「あ、ホントだ」

物憂げな表情で浜辺に佇んでいる梨子さん。絵になるなあ・・・

「おーい！桜内さんー！」

大きな声で呼びかける千歌さん。

こちらからは梨子さんの背中しか見えないが、明らかに肩を落としたのが分かった。よほど千歌さんにうんざりしているようだ。

千歌さんが梨子さんの方へ走っていくので、俺もその後を追いかける。

「あつ！もしかして、また海に入ろうとしてるの!？」

梨子さんの元へ辿り着いた途端、梨子さんのスカートを捲り上げる千歌さん。

「してないですっ!」

「それなら良かった」

慌ててスカートを戻す梨子さんと、笑みを浮かべる千歌さん。と、そこで梨子さんが俺の存在に気付いた。

「天くん!？」

「こんにちは、梨子さん」

にこやかに挨拶する俺。梨子さんの顔が赤く染まっていく。

「み、見た・・・?」

「何をですか?」

「いや、その・・・パ、パンツ・・・」

「何のことでしょう?」

「よ、良かった・・・見てないのね・・・」

「『苗字が桜内だけに、パンツも桜色か・・・』なんて思つてませんよ？」

「バツチリ見てるじゃない!？」

両手で顔を覆う梨子さん。耳まで真っ赤に染まっている。

「ちよつと天くん!?!女の子のパンツ見るなんて最低だよ!?!」

「俺の目の前で梨子さんのスカート捲つた人がそれを言います?」

「うう・・・もうお嫁に行けない・・・」

「何言つてるんですか。そのスカート丈の短さで、これまで誰にも見られてないなんて有り得ないでしょうに」

「・・・ちよつと海に飛び込んでくるわね」

「落ち着いて桜内さん!?!天くんもトドメ刺さないですよ!?!」

千歌さんが必死に宥め、何とか落ち着きを取り戻す梨子さん。涙目になりながら千歌さんを睨んでいる。

「元はと言えば、貴女のせいだ・・・!」

「すいませんでしたあああああつ!」

「まあまあ。本人も反省しているようですし、この辺りで許してあげましょうよ」

「何で他人事なの!?!」

俺に全力でツッコミを入れたことで力が抜けたのか、溜め息をつく梨子さん。

「・・・こんなところまで追いかけてきても、答えは変わらないわよ」

「桜内さん、答えを出すのが早すぎるよ！もうお嫁に行けないだなんて！」

「違うわよ!? スクールアイドルの話！」

「あ、そつちか」

苦笑する千歌さん。

「違う違う。通りがかっただけだよ」

「千歌さん、ストーリーカーは皆そう言うんですよ」

「誰がストーリーカー!? 天くんもここまで一緒に帰ってきたじゃん!」

「俺は千歌さんの掌の上で踊らされたんですね・・・千歌さん、恐ろしい子・・・」

「人の話聞いてくれる!」

「そういえば梨子さん、海の音聴けました?」

「だから聞いてつてば!」

ギヤーギヤーうるさい千歌さんをスルーして尋ねると、梨子さんは浮かぬ顔で首を

横に振る。

まだ聴けてないんだな・・・

「ほら千歌さん、喚いてないで海の音が聴ける方法を考えて下さいよ」

「誰のせいだと思ってるの!」

喚いていた千歌さんだったが、そこでふと何か思いついたような顔をする。

「あつ！果南ちゃんがいるじゃん！」

「え、誰ですか？」

「私と曜ちゃんの幼馴染だよ。実家がダイビングショップやつてるから、桜内さんもダイビングしてみたら良いんじゃないかな？海の音が聴けるかもしれないよ？」

「なるほど・・・スク水で海に飛び込むよりは良い方法ですね」

「それは忘れて!？」

再び赤面する梨子さん。

いや、あれは忘れられないな。衝撃的な初対面だったもの。

「桜内さん、日曜日って空いてる？ダイビングしに行こうよ！」

「・・・代わりにスクールアイドルやれ、とか言わない？」

「アハハ、流石に言わないよ」

千歌さんは笑うと、梨子さんの手を握った。

「海の音、ちゃんと聴いてほしいの。桜内さんが作った海の曲、私も聴いてみたいし」

「高海さん・・・」

驚いている梨子さん。

損得勘定関係無しに、人の為を思って行動できる・・・こういうところが、千歌さん

の美点なんだろうな。

「ねっ?行ってみよう?」

「・・・じゃあ、お願いしようかしら」

「そうこなくっちゃ!天くんも行くよね?」

「俺はアレがアレなんでパスします」

「そっかあ、それなら仕方ない・・・ってならないよ!?アレがアレって何!」

「日曜日くらいゴロゴロさせて下さいよ」

「何そのお父さんみたいなセリフ!」

そんなやり取りをしていると、梨子さんが笑みを浮かべながら俺の肩に手を置いた。

「人のパンツ見ておいて、来ないなんて言わないわよねえ・・・?」

「ちよ、痛いんだけど!?肩がミシミシいつてるんだけど!」

「よ、喜んで行かせていただきます・・・」

「よろしい」

笑顔で手を離す梨子さん。この人、怒らせたらアカン人や・・・

「それじゃあ早速、果南ちゃんに連絡を・・・って、もうこんな時間!」

スマホを取り出した千歌さんが、時間を見て慌て始める。

「急いで帰らなくちゃ!?!果南ちゃんには後で連絡しておくから!?!じゃあまたね!」

それだけ告げると、千歌さんは走って帰っていった。慌ただしい人だなあ．．．

「．．．変な人ね、高海さんって」

「否定はできませんね」

俺はそう言つて笑うと、夕陽に染まる海を眺めた。

「梨子さん、一つ聞いても良いですか？」

「何？」

「梨子さんが海の音を聴きたいのは．．．本当に曲作りの為だけですか？」

「っ!？」

息を呑む梨子さん。やっぱり．．．

「海の曲を作りたいのは本当なんでしょうけど、果たしてそれだけなのかなって。他にも理由があつて、それで必死になつてるんじゃないのかなって．．．梨子さんの様子を見てたら、何となくそう思つたんですよね」

「．．．察しが良いのね、天くんって」

梨子さんは苦笑すると、ポツポツと話し始めた。

「私ね、小さい頃からずっとピアノやつてるんだけど．．．最近はいくらやつても上達しなくて、やる気も出なくて．．．それで環境を変えてみようと思つて、東京からこつちに来たの」

「そうだったんですか・・・」

素直に凄いことだと思った。何かの為にそれまでの環境を変えらるというのは、普通なか出来ることではない。

「海の音が聴けたら変わるんじゃないか、変えられるんじゃないかって・・・そう思ったら、ちよつと焦つちやつて・・・」

自嘲気味に笑う梨子さん。

「みつともないわよね、不確かなものに縋ったりして・・・」

「・・・良いじゃないですか、みつともなくなつて」

「え・・・?」

驚いてこつちを見る梨子さんに、俺は笑みを向けた。

「変わりたい、変えたいと願うのなら・・・どんなにみつともなくなつて、全力で足掻くべきだと俺は思いますよ。それで変わるとは限りませんが、足掻かなければ変わる可能性すら生まれませんから」

「天くん・・・」

「それに、ピアノに対してそこまで足掻けるっていうことは・・・梨子さんがピアノを大切に思っている、何よりの証じゃないですか」

「つ・・・」

「梨子さんは誇って良いと思います。自分はこんなにピアノが好きなんだ、こんなにピアノを大切に思ってるんだって・・・それはとても、素敵なことなんですから」

梨子さんの目には涙が滲んでいた。それを拭おうともせず、俺の方をじつと見てい

る。

「・・・そんなこと、初めて言われたわ」

「マジですか・・・俺が梨子さんの初めてをもらっちゃいましたか・・・」

「その言い方は誤解を招くから止めてくれる!？」

「え、だって俺が梨子さんの初めてなんでしょ?」

「絶対分かってて言ってるわよねえ!？」

「ナニソレ、イミワカンナイ」

「誰のモノマネ!？」

「さあ、誰でしょう?」

俺が笑うと、梨子さんも笑みを零しながら目元の涙を拭う。

「変な人ね、天くんも・・・高海さん以上だわ」

「・・・それはちよつと不名誉なんですけど」

「フフツ、そんな嫌そうな顔しないの」

梨子さんはクスクス笑うと、俺の顔を覗き込んだ。

「・・・ありがとう、天くん。今の言葉、凄く嬉しかった」  
間近で見た梨子さんの笑顔は、夕陽と相まって凄く綺麗で・・・思わずドキツとして  
しまう俺なのだった。

足搔いた人にしか見えないものがある。

迎えた日曜日・・・

「初めまして、松浦果南です。よろしくね」

青く長い髪をポニーテールに結った女性が、笑顔で挨拶してくれる。

梨子さんと俺は千歌さんに連れられて、近くにある淡島のダイビングショップへとやって来ていた。ちなみに曜さんも一緒である。

「初めまして、桜内梨子です」

「絢瀬天です。よろしくお願ひします」

「おお、君が噂のテスト生だね？」

俺をじつくりと眺め回す松浦さん。そして両手を広げ、笑みを浮かべてこう言った。

「じゃあ早速・・・ハグしよう？」

「何だ、ただの痴女か」

「誰が痴女よ!？」

松浦さんのツツコミ。初対面の男にハグを要求するとか、何を考えてるんだこの人・・・

「ほら、いいからハグしよっ!」

「うおっ?!」

真正面から勢いよく抱きつかれた。

松浦さんの柔らかな身体の感触が俺の全身を包み、二つの大きな膨らみが俺の胸に押し付けられて『むにゅっ』と形を変える。

「ちよ、何してるんですか!?!」

俺達の様子を見て赤面している梨子さん。

「何って・・・ハグだよ?」

「同性同士ならともかく、異性同士なんですからもっと恥じらいを持って下さい!?!」  
ていうか、天くんは何でされるがままになってるの!?!」

「いや、何と言うか・・・幸せを噛み締めています」

「戻ってきなさい!」

「アハハ、純情だねえ」

松浦さんが笑いながら俺から離れる。

「えーっと、今日は四人ともダイビングするってことで良いんだっけ?」

「あ、三人です。俺は見学なんで」

「え、天くんやらないの!?!」

「ええ、今回は遠慮しておきます」  
曜さんの問いに答える俺。

ダイビングを経験しているであろう千歌さんと曜さんとはともかく、梨子さんと俺は完全な未経験者だ。未経験者二人が同時に潜ってしまえば、千歌さん達に大きな負担をかけてしまうことになりかねない。

今回の目的は梨子さんが海の音を聴くことなので、梨子さんさえ潜れば問題無いのだ。梨子さん一人なら、千歌さん達の負担も大きくはないだろう。

「ごめんね、天くん……」

何となく理由を察した様子の子の梨子さんが、申し訳なさそうに謝ってくる。

「私のワガママに付き合わせてるのに、待機させちゃって……」

「気にしないで下さい。海の音、ちゃんと聴いてきて下さいね」

「そのことだけど、ちよつといいかなん？」

話に入ってくる松浦さん。っていうか、今の語尾は何だろう……

「水中では、人間の耳に音は届きにくい。だからイメージが大事だと思うよ」

「イメージ？」

「そう、水中の景色から海の音をイメージするの。想像力を働かせてね」

「想像力……」

考え込む梨子さん。海の音が聴けるかどうかは、梨子さんの想像力次第ってことか……

「とりあえず、ダイビングスーツに着替えよっか。向こうに更衣室があるから」

「よし！潜るぞー！」

「ヨーツロー！」

元氣よく走っていく千歌さんと曜さん。

「じゃあ、私達も行こっか」

「あ、はい。天くん、ちよつと待っててね」

「ごゆっくり〜」

梨子さんにひらひら手を振る。と、松浦さんがこちらを振り返ってニヤリと笑った。

「覗かないでね？絶対だよ？」

「おっ、覗けっというフリですか？」

「・・・松浦さん？天くん？」

「すいませんでしたっ！」

梨子さんから放たれるプレッシャーに、反射的に謝ってしまう俺と松浦さんなのだ。た。

\*\*\*\*\*

「・・・うゝみゝはゝ広いゝな、大きいゝなゝ♪」

小型船の甲板に座り、口ずさみながら海を眺める俺。その様子を見た松浦さんが、面白そうにクスクス笑っている。

「海が好きなの？」

「いえ、好きっていうか・・・懐かしいんです」

「懐かしい？」

「ええ、海には色々と思い出がありました。楽しい思い出も・・・悲しい思い出も」  
過去のことを思い出して感傷に浸っていると、いきなり背中に衝撃を受けた。

「隙ありっ！ハグっ！」

「ただだけハグ好きなんですか・・・」

ヤバイよこの人、自分がどれほどスタイルが良いか全く分かってないよ・・・

こんなナイスバディなお姉さんにハグされたら、普通の男はコロツといつちやうどころか野獣化してもおかしくないというのに・・・

「心配しなくても、私がハグするのは女の子だけだよ?」

「松浦さんの目には、俺が女の子に見えてるんですか?」

「何言ってるの? そんなわけないじゃん。大丈夫?」

「すみません、殴って良いですか?」

「アハハ、怖い怖い」

松浦さんは笑うと、俺の身体に回している腕に力を込めた。

「実は君の話、ダイヤから聞いててさ」

「ダイヤさんとお知り合いなんですか?」

「知り合いつていうか、幼馴染だよ。学校でもクラスメイトだしね」

「え、松浦さんって浦の星の生徒なんですか!？」

「あれ? 千歌から聞いてないの?」

首を傾げる松浦さん。幼馴染としか聞いてないんだけど・・・

「つていうか、高校生だったんですね・・・つつきり二十歳くらいかと・・・」

「むっ・・・そんなに老けて見える?」

「大人びて見えるつて言ってもらえます? つていうか俺、松浦さんを学校で見かけた

ことないんですけど・・・」

「ああ、今休学中なんだよ。お父さんが骨折しちゃったもんだから、私が店を手伝わな

いといけなくてさ」

「それは大変ですね……」

「凄いな……休学してまでお店を手伝ってるのか……」

「まあその話は置いとくとして……休学中もダイヤとは連絡を取ってるんだけど、この間の電話で君の話題になつてさ。ダイヤに説教したんだって？」

「いや、説教というか何と言うか……」

思わず苦い表情になる。一方、松浦さんは面白そうに笑っていた。

「あのダイヤに物申せる人なんて、なかなかいないからね。『良い人が入ってきてくれた』って、ダイヤも喜んでたよ？」

「……恐縮です」

いやホント、我ながら先輩に失礼な態度を取ってしまったと思う。

まあああいう場だったし、言うべきことは言わなきゃいけないとは思ってたけども。

「ダイヤは君のことを、『信用に足る人だ』って凄く褒めてた。昔からダイヤの人を見る目は確かだし、だったら私も信用してハグしちゃおうと思つて」

「信用してくれるのはありがたいんですけど、その発想はおかしいですからね？」

「まあまあ。私にとってハグは挨拶みたいなものだから」

「何その海外の人みたいな考え方」

思わずタメ口でツツコミを入れてしまった。大らかな人だなあ……

「そんなわけで、私はこれから君にどんどんハグするから。ちゃんと受け止めてね？」

「自由人ですね、松浦さん……あ、松浦先輩か」

「さつきから言おうと思つてたけど、果南で良いよ。ダイヤのことも名前で呼んでるんだし、私のことも名前で呼ぶこと。これは先輩命令だから」

「パワハラで訴えますよ？」

気付けば松浦さんに対して、あまり気を遣わなくなっていた。松浦さんの大らかな性格に、俺も影響されてるのかもしれないな……

「その代わり、私も君のこと名前で呼ぶからね。よろしく、天」

「……了解です、果南さん」

満足そうに笑う果南さん。その時……

「ふはあつ！」

海に潜っていた曜さんが浮上してきて、甲板へと上がってきた。

「お疲れ、曜。海の音は聴けそう？」

「んー、難しいね。桜内さんも苦戦してるみたいだし……つて、果南ちゃんはまた天くんにはグしてるの？」

「天にはちゃんと許可もらってるよ」

「そんな覚え一切ないんですけど」

果南さんにツツコミを入れてみると、千歌さんと梨子さんも浮上してきた。やはりイメージが難しいのか、梨子さんは浮かさない顔をしている。

「ダメ……景色は真っ暗だし、なかなかイメージが出来ない……」  
「今日の天気は曇りだしねえ……」

空を見上げる千歌さん。確かに、日の光が差さないのは痛いな……

「やっぱり、私には無理なのかな……」

弱気な梨子さん。

「どんなに足掻いても、変えられないのかな……」

「……諦めちゃダメなんっだっ」

「天……?」

果南さんが首を傾げる中、ふと頭に浮かんだ曲を口ずさむ。

「その日が絶対来るっ」

「その曲って……」

千歌さんは気付いたようだ。そう、あの曲だ。

「君も感じてくるよっねっ、始っまりっの鼓動っ」

「天くん……歌上手いね」

「え、そこ?」

曜さんの感心したようなセリフに、咄嗟に梨子さんがツツコミを入れる。

「いや、確かに上手いんだけど・・・何の曲?」

「μ sの『START：DASH!!』っていう曲です」

高坂穂乃果、南ことり、園田海未・・・まだ三人だったμ sが、ファーストライブで披露した曲である。

「まあこの曲を歌っておいて、こんなことを言うのもアレなんですけど・・・『諦めちゃダメなんだ。その日が絶対来る』とか、ぶっちゃけただけの綺麗事ですよね」

「『ええええええええええええええええ!?!?!』」

まさかの否定に、千歌さん・曜さん・梨子さん・果南さんが大きく仰け反る。

「ちよ、天くん!?!何てこと言うの!?!」

「だって思いませんか? 諦めずに頑張ったら夢は必ず叶うとか、そんなのただの理想論じゃないですか。諦めずに頑張っても、夢を叶えられない人なんてたくさんいますよ」

「いや、そうかもしれないけど!」

あたふたしている四人が面白くて、俺は思わず笑ってしまった。

「まあでも・・・この曲の作詞を手掛けた人だって、そんなことは最初から分かっているとしますよ」

「え・・・？」

「諦めずに頑張ったって、夢は叶えられないかもしれないかも。でも・・・諦めてしまったら、叶えられる可能性すら無い」

「つ・・・それ、この間天くんが言ってた・・・」

梨子さんが気付く。覚えててくれたのか・・・

「だから簡単に諦めるな。夢が叶う日が来る可能性は、諦めなかつた人にしか無いんだから・・・勝手な解釈ですけど、俺はそういう意味でこの歌詞を捉えています」

「天くん・・・」

「今日がダメなら、また来週チャレンジしてみましよう。今日は生憎の曇りですけど、来週は晴れてるかもしれません。それでもダメならもう一度チャレンジしたって良いし、違う方法を考えたって良いじゃないですか」

俺は梨子さんに笑いかけた。

「梨子さんが内浦に来て、まだたつたの一週間ですよ？東京から引越してまでここに来たんですし、もう少し頑張ってみませんか？」

「・・・どうして私なんかの為に、そこまで言ってくれるの？」

不思議そうな表情の梨子さん。

「この間も今日も、天くんは私の背中を押そうとしてくれてる・・・どうして・・・？」

「んー、そうですねえ・・・」

苦笑いを浮かべる俺。

「多分ですけど、足掻こうとしてる人を放っておけないんでしようね。ホント厄介な性格にしてくれたよなあ、あの人達・・・」

「あの人達？」

「いえ、こつちの話です」

まあそれは置いとくとして、とりあえず海の音だよな・・・

「とにかく俺も、梨子さんに海の音を聴いてほしいんです。きっとそれが梨子さんにとつての、始まりの鼓動になるんでしようから」

「始まりの鼓動・・・」

梨子さんは小さく呟くと、意を決したように顔を上げた。

「私、もう一度やってみる！」

「よし、私達も行くよ！」

「ヨーソーロー！」

再び海へ潜った梨子さんに続き、千歌さんと曜さんも海へ飛び込んでいった。

「・・・凄いな、天」

果南さんが微笑んでいる。

「天の言葉で、諦めかけてた桜内さんがやる気になっちゃった」

「大したことはしてませんよ」

肩をすくめる俺。

「上手くいかなくて弱気になってたんで、ほんの少し励ましただけです」

「何言ってるの。それが大きいんじゃない」

笑っている果南さん。

「ああいう時にかけられる励ましの言葉って、凄く心に響くもんだよ。それをさらっと言っちゃうんだもん。ちよつと感心しちゃった」

「果南さんに感心されてもなあ・・・」

「何だよ!？」

そんなやり取りをしていると、突如として雲の切れ間から日が差した。日の光が海面を照らし、キラキラと眩く光っている。

やがてその海面から、千歌さん・曜さん・梨子さんが浮上してきた。ここからは何を話しているのか聞こえないが、興奮したように笑いながら抱き合っている。

「・・・聴けたみたいだね、海の音」

「・・・ですわね」

笑い合う果南さんと俺なのだった。

友達とはかけがえのないものである。

「え、曲作りの依頼を引き受けたんですか？」

「うん、そうなの」

頷く梨子さん。

ダイビングの翌日・・・昼休みにぼったり会った梨子さんの話に、俺は思わず驚いてしまった。

「どういう心境の変化ですか？『そんな暇は無い』って断り続けてたんですよね？」

「そうなんだけど・・・まあ色々だね」

梨子さんが小さく笑う。

「今回は高海さんに色々お世話になったから、今度は私が力になれたらって思ったの。スクールアイドルの曲作りなんて初めてだけど、これも良い勉強になるだろうから」

「なるほど・・・ってことは、梨子さんもスクールアイドルやるんですか？」

「それは断ったわ。私がやるのは、あくまでも曲作りだけよ」

肩をすくめる梨子さん。あ、そうなんだ・・・

「そうですか・・・ちよつと残念ですね」

「え、何が？」

「梨子さん可愛いし、スクールアイドルの衣装とか似合うだろうなって思ってたんで」  
「なっ!？」

梨子さんの顔が一気に赤くなる。ホント純情だなあ・・・

「せ、先輩をからかわないのっ!」

「いや、本心ですって。華もありますし、きつとステージ映えするでしょうね」

「も、もういいからっ!」

耳まで真っ赤になった梨子さんが、強引に話題を打ち切る。

まあ梨子さんが決めたことだし、俺がとやかく言うことでもないよな。

「そ、それで早速なんだけど!今日の放課後、高海さんの家で作詞をすることになったの。もし良かったら、天くんも一緒に来ない？」

誘ってくれる梨子さん。俺としても、行けるなら行きたいところではあるが・・・

「・・・すいません。今日の放課後はちよつと、お見舞いの予定があります」

「お見舞い?誰の?」

首を傾げる梨子さんに、苦笑いで答える俺なのだった。

「クラスメイトですよ。自称・墮天使の、ね」

\*\*\*\*\*

「(ト)ずら」

緊張した面持ちのずら丸。

俺・ずら丸・ルビイちゃんの三人は放課後、自称・堕天使が住んでいると思われるマンションの一室へとやって来ていた。

ずら丸曰く、ここが自称・堕天使の家らしい。

「表札もちやんと『津島』になってるし、間違いないずらね」

「え、あの子の苗字って『津島』なの？」

「今さら!？」

ルビイちゃんのツツコミ。『善子』っていう名前なのは知ってたけど、苗字の方は気にしてなかったなあ・・・

「とりあえず、インターホン押そうか」

「ずら」

ずら丸がインターホンを押す。すると・・・

「はーい」

ドアが開き、中から女性が出てきた。ダークブルーの髪にシニヨンを結った女性……あれ？

「津島さん、メツチャ大人になってない？」

「その人は善子ちゃんのお母さんずら」

「マジで!？」

メツチャ似てるなあ……驚いていると、津島母が首を傾げた。

「えーつと、どちら様ですか？」

「あ、あのっ！私、国木田花丸です！覚えてますか？」

「え……?？」

ずら丸の顔をじーつと見つめる津島母。次の瞬間、表情がパアツと明るくなった。

「ああつ、花丸ちゃん!?!善子と幼稚園で一緒だった、あの花丸ちゃん!?!」

「そうです！お久しぶりです！」

「久しぶりね〜！ずいぶん大きくなっちゃって〜！」

嬉しそうに笑う津島母。

「幼稚園の時から可愛かったけど、ますます可愛くなったわね〜！」

「そ、そんな……マルなんて……」

照れているずら丸。と、津島母が俺の方に視線を向けてきた。

「あら？ひよつとして、花丸ちゃんの彼氏くんかしら？」

「か、彼氏っ!？」

ずら丸の顔が真っ赤になる。何だかんだで、ずら丸も純情だなあ・・・

「ち、違いますっ!天くんはそんなんじゃない!」

「そっか、俺とは遊びだったのか・・・」

「天くん!?!何を言い出すずら!?!」

「朝のバスでは、俺に寄りかかって気持ち良さそうに寝てたのに・・・」

「そ、それは天くんが『寄りかかって良いよ』って言ってくれたから・・・!」

「俺を抱き寄せて、俺の顔を自分の胸に埋めさせてくれたのに・・・」

「あ、あれはルビィちゃん可悲鳴から守る為で・・・!」

「『恋人としてよろしくずらく!』って言ってくれたのに・・・」

「それは言っていないずら!『恋人として』なんて言っていないずら!」

「全てはずら丸の掌の上・・・俺は弄ばれてたのか・・・」

「人聞きの悪いことを言わないでほしいずら!」

「花丸ちゃん・・・悪い子に育っちゃって・・・」

「善子ちゃんのお母さん!?!何で信じてるずら!?!」

悪ノリに便乗してくる津島母。ノリが良いなあ・・・

「まあ冗談はさておき・・・初めまして、絢瀬天といいます」

「く、黒澤ルビイです・・・」

「私達三人、浦の星で善子ちゃんと同じクラスなんです」

「あら、そうだったの？」

驚いていた津島母だったが、すぐに笑みを浮かべる。

「初めまして、善子の母・津島善恵です。娘がいつもお世話に・・・って、あの子ずっと引きこもってたわね」

溜め息をつく津島母。やはり重症らしいな・・・

「あの、善子ちゃんの様子は・・・」

「ああ・・・うん」

ずら丸の問いに、津島母は困ったように苦笑するのだった。

「元気は元気なただけど・・・」

\*\*\*\*\*

『やってしまったああああああああっ?!』

家にながらせてもらった俺達が最初に聞いたのは、津島さんの叫び声だった。

『何よ墮天使って!?!ヨハネって何!?!うわあああああん!?!』

「……まあこんな感じなのよ」

津島さんの部屋であろうドアを指差し、溜め息をつく善子母。

なるほど、これは重症だな……

「浦の星の入学式の日からあんな感じなただけど……何か心当たり無い?」

「その日はクラスの皆の前で、自己紹介をやったんですけど……」

「ああ、『墮天使ヨハネ』で自爆したのね……」

一を聞いて十を知る……全てを悟った津島母が頭を抱えた。

「あの子、中学の時もそれでやらかしちゃってね……高校では同じ失敗をしないようにって意気込んでただけど……」

「その割には、キャラが凄く仕上がってましたけど……」

「『墮天使ヨハネ』は、最早あの子にとってキャラじゃないのよ。幼い頃からの設定を引きずった結果、『墮天使ヨハネ』は津島善子の一部に昇華されてしまったの」

「……マジですか」

意図的に演じてるキャラじゃなかったのか・・・恐るべし津島善子・・・

「とりあえず、声をかけてみても良いですか？」

「勿論。どうぞ」

津島母の了承をもらい、ずら丸が部屋のドアをノックする。

「善子ちゃん？」

『っ!?!その声は花丸!?!』

津島さんの驚いた声が聞こえる。

『どうしてここにいるのよ!?!』

「様子を見に来たずら。ルビィちゃんと天くんもいるずら」

「こ、こんにちは・・・」

「どうも」

『うげっ!?!』

呻き声を上げる津島さん。

『わ、私を笑いに来たんでしょ!?!冷やかしなら帰って!』

「いや、そんなつもりじゃ・・・」

『うるさい!良いから帰って!』

明確な拒絶。これは何を言っても聞いてもらえなさそうだな・・・

「・・・ずら丸、ルビイちゃん、とりあえず今日は帰ろう。元気なのは分かったし」  
「ずら・・・」

「そうだね・・・」

意気消沈している二人。顔さえ見せてもらえず、ショックを受けているようだ。

「ごめんね、せつかく来てくれたのに・・・」

「こちらこそ、突然お邪魔してすいませんでした。あ、それと・・・」

申し訳なさそうな津島母に、俺はカバンの中から紙束を取り出して渡した。

「これ、ノートのコピーです。先週分の授業に関しては、一通りまとめておきました。授業で使ったプリントも余分に貰っておいたので、後で渡してあげて下さい」

「そんなことまで・・・本当にありがとう」

恐縮しながら受け取る津島母。俺は部屋のドアに向かって声をかけた。

「じゃあ津島さん、また来るから」

『来なくていい!』

にべもない返事だった。やれやれ・・・

「それじゃ、お邪魔しました」

「本当にごめんなさい・・・来てくれてありがとう」

津島母に見送られ、津島家を後にする俺達。これは時間がかかりそうだな・・・

「・・・全然話せなかったね」

暗い表情のルビイちゃん。

「良かれと思つて来たけど・・・津島さんにとつては迷惑だったのかな・・・」

「・・・顔も見せてくれないなんて、思つてもみなかつたすら」

涙目のずら丸。

「マル、余計なことしちゃつたのかな・・・」

俯いて歩く二人。俺は溜め息をつくど、歩いている二人の間にあえて割り込んだ。

そのまま右手でずら丸の手を、左手でルビイちゃんの手を握る。

「ずらっ!?!」

「ぴぎっ!?!」

驚いている二人。そんなことはお構い無しに、俺は二人の手を引いて歩いた。

「俯いたまま歩くと危ないよ。ちゃんと前を向いて歩かなきゃ」

「天くん・・・」

「まあ確かに、ちゃんとした話は出来なかつたけど・・・とりあえず元気なのは分かつたし、ノートのコピーも渡せたんだから。今回はそれでよしとしようよ」

「今回はつて・・・本当にまた行くつもりなの・・・?」

「勿論」

ルビィちゃんの問いに頷く俺。

「今週の授業のノートをまとめて、また来週お邪魔するよ。津島さんが登校できるようになった時、授業についていけないのは困るだろうから」

「どうして善子ちゃんの為にそこまで・・・」

「・・・大切な友達なんですよ」

「っ・・・」

息を呑むすら丸。俺は苦笑いを浮かべた。

「流石に俺だって、ただのクラスメイトの為にここまでしないよ。でもすら丸は俺の友達だし、困ってるのを放っておけないから」

「じゃあ善子ちゃんの為じゃなくて、マルの為に・・・?」

「そういうこと。まあただでさえ一クラスしかないんだし、どうせなら誰も欠けてほしくないっていうのもあるけど」

呆然としているすら丸。ルビィちゃんがニヤニヤしていた。

「良いなあ花丸ちゃん、大切に想ってくれる男の子がいて」

「なっ!?!ルビィちゃん!?!」

「あなぐたとく、いる日々がぐ、なににも代えぐられぐないぐ、たぐいぐせつぐ♪」  
「天くん!?!急にファ●モンの曲を歌わないでほしいぞら!」

顔を真っ赤にするぞら丸。俺はひとしきり笑うと、握る手に優しく力を込めた。

「せっかくだし、ケーキでも食べて行こっか。さつき良さそうなカフェあったよね」

「賛成！ルビィもそのカフェ気になってたんだよね！」

「マルも行くぞら〜！」

今度は二人が俺の手を引く。苦笑しつつも、二人に手を引かれるがまま歩く俺なのだ。

人から必要とされるのは幸せなことである。

翌日。

「そんなわけで、梨子ちゃんもスクールアイドルやることになったんだよ!」

「どんなわけですか」

千歌さんにツツコミを入れる俺。

いきなり一年生の教室に来て、何を言い出すのかと思つたら・・・

「まさか千歌さん、梨子さんを脅迫したんじゃないでしょうね?」

「天くんには私がどういふ人間に見えるの!?!」

「目的の為なら手段を選ばない極悪非道な人間」

「私が天くんは何をしたつていふの!?!」

ギャーギャー騒いでいる千歌さんはスルーして、俺は梨子さんへと視線を移した。

「梨子さん、良いんですか?」

「うん、自分で決めたから」

ニツコリ笑う梨子さん。

「色々思うところもあって、一緒にやらせてもらうことにしたの。やるからには一

生懸命頑張るわ」

「・・・そうですか」

「どうやら、本当に自分の意思で決めたらしい。」

「どういふ心境の変化があつたかは分からないが、表情も明るいし心配は要らないだろう。」

「つてことは、これで部員が三人・・・あと二人ですね」

「あと二人かあ・・・集まるかなあ・・・」

「自信無さげな曜さん。と、そこでふと俺の顔を覗き込んでくる。」

「どうかしました?」

「いや・・・天くんが入部してくれたらなあつて」

「「え?」」

ポカーンとしている千歌さんと梨子さん。

「何言つてるの曜ちゃん? 天くんは生徒会役員だよ?」

「生徒会役員でも、部活に所属することつて可能だよね?」

「可能ですね」

「そうなの!?!」

曜さんの問いに答えると、千歌さんが目を見開いて身を乗り出してきた。

「そりやそうですよ。部活の兼任だって可能なんですから」

「ハッ!? そういえばそうだった!？」

「ちよ、ちよつと待つて!?! スクールアイドルって女子限定なんじゃ・・・」

「アイドルとしてじゃなくて、マネージャーとして入部してもらえば良いじゃん」

「その手があつたわ!？」

千歌さんや梨子さんも納得している。曜さんが目を輝かせて俺を見ていた。

「天くん、スクールアイドル部に入らない!？」

「オコトワリシマス」

「即答!？」

シヨックを受けている曜さん。俺は溜め息をついて曜さんを見た。

「部を立ち上げる為に、マネージャーで人数稼ぎをするのはいかななものかと思いますよ? ただでさえスクールアイドル部に反対しているダイヤさんの心証は、より一層悪くなると思います」

「うっ、確かに・・・」

「部を立ち上げる為に必要な五人は、スクールアイドルとして活動するメンバーを集めるべきです。そもそもまだ活動さえしてないのに、マネージャーとか要らないでしょう」

「お、仰る通りです・・・」

「どうしてもマネージャーが欲しいなら、スクールアイドル部が正式に設立されてから探して下さい。分かりましたか？」

「はい、すみませんでした・・・」

いつの間にか、教室の床に正座している曜さん。

いや、別にそこまでは求めてないんだけど・・・

「ねえ梨子ちゃん・・・天くんが生徒会長に見えるんだけど」

「奇遇ね千歌ちゃん・・・私も同じことを思ったわ」

何やらヒソヒソと話している千歌さんと梨子さん。俺は二人に笑みを向けた。

「他人事みたいな顔してますが、お二人も曜さんの意見に納得してましたよね？」

「すみませんでした！」

曜さんと並んで正座する二人。

この後クラスメイト達から、『先輩に土下座させた男』として畏怖の視線を向けられる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「新しい理事長、ですか？」

「ええ、来週からお見えになるそうです」

頷くダイヤさん。

放課後に生徒会の仕事を片付けていた俺達は、一区切り付いたところで休憩していた。お茶を飲みながら雑談していた時、ダイヤさんがそんな話を切り出してきたのだ

た。「前任の理事長は三月で退職して、四月から新しい理事長が就任したのですが・・・何でも『日程の都合が付かない』とかで、まだ一度も学校に来ていないのです」

「ああ、そういうえば会ってませんね」

「全く、一体どんな人なのやら・・・」

溜め息をつくダイヤさん。まあ理事長が一度も学校に来ていないというのは、ちよつとよろしくないと思う。

「じゃあ、俺を呼んだのって新しい理事長なのかな・・・」

「呼んだ？天さんは誰かに呼ばれて、浦の星に入学したのですか？」

首を傾げるダイヤさん。あれ・・・？

「ダイヤさん、俺が入学することになった経緯は聞いてないんですか？」

「ええ、何も・・・テスト生として天さんが入学することは聞かされましたが、何故天さんが選ばれたのかについては聞いていないのです」

「マジですか・・・」

それで良いのか浦の星・・・せめて生徒会長には経緯ぐらい説明しなさいよ・・・

「・・・とりあえず説明しておきますね。そもそもキツカケは、俺が通っていた中学の理事長でした。理事長は浦の星の関係者の方と知り合いらしくて、浦の星の生徒数が減少していることについて相談を受けていたみたいなんです」

「まあ、かなり深刻な問題ですからね・・・それで？」

「その問題の解決策について話し合っている中で、共学化という手段があるんじゃないかという話になったらしくて。まずはテスト生として男子生徒を受け入れてみて、様子を見てみようという結論に至ったようなんです。そこで白羽の矢が立ったのが、理事長と仲の良かった俺だったという感じですね」

「あら、理事長さんと仲がよろしかったのですか？」

「まあ色々ありまして」

苦笑する俺。実際、あの人には凄くお世話になったしな・・・

「俺は理事長からテスト生の話を持ちかけられて、引き受けることを決めまして。それで俺がテスト生として、浦の星に入学することが決まったんです」

「なるほど・・・ん？では先ほどの、『呼んだ』という話は一体？」

首を傾げるダイヤさん。そう、そこが俺も気になっているところなのだ。

「・・・実は俺、その関係者の方と一度も会ってないんです」

「え・・・？」

「それどころか、筆記試験や面接さえ受けてないんです」

「はい!？」

驚くダイヤさん。そりやそうだよなあ・・・

「ちよ、ちよつと待つて下さい!?!いくらその理事長さんが推薦したとはいえ、それはおかしいでしょう!?!筆記試験はともかく、面接は顔合わせの意味でも必要なのでは!?!」

「俺もそう思つて、理事長に聞いたんですよ。そしたら理事長曰く、『関係者の方が天くんに来てほしいと言つている。試験なんて要らないらしい』とのことでした・・・」

「・・・有り得ませんわ」

頭を抱えるダイヤさん。

「つまりそうまでして、天さんに来てもらいたかったということですか・・・それは確かに、『呼んだ』に近いですわね・・・」

「でしょう？しかも試験免除を決められる権限を持つているということは、それこそ理事長ぐらいただと思っただんですけど……」

「確かに……ですがその話が決まったのは、前理事長の就任期間中でしょう？新理事長は関係ないのでは？」

「ですよねえ……でも、前理事長ではないですよ？退職されたわけですし」

「それは間違いありませんわ。私が天さんの話を聞いたのは前理事長からでしたが、自分が決めたわけではないとおっしゃっていましたから」

「……謎ですわね」

「……謎ですわね」

ダイヤさんと顔を見合わせる。関係者の方って、一体誰なんだ……

「天さんの中学の理事長さんには、そのことについて聞かなかったのですか？」

「聞きましたけど、『行けば分かる』って言われまして……」

あの時の理事長の面白そうな笑み……絶対何か隠してるんだよなあ……

「ですが天さん、よくテスト生の話を引き受けましたね？今の話を聞くかぎり、色々と怪しげな点がありますが……」

「試験免除に惹かれたので」

「そこですの!？」

「当然でしょう。入学が確約されてるんですよ？おかげで同級生達が受験に向けて勉強している中、これ見よがしに遊びまくることが出来ました」

「もの凄く恨まれそうですわね!？」

「ハハツ、まさか。皆はいつも笑顔で俺に、『くたばれ』『バルス』って話しかけてきてくれましたよ」

「間違いなく恨まれてますわよねえ!？」

「冗談ですよ」

俺は笑うと、急須に入っていたお茶を湯呑みに注いだ。

「まあ一番の理由は、理事長に頼まれたからですな。『嫌なら断ってくれて構わない』とは言われましたけど・・・俺で力になれるなら、是非とも引き受けたいと思ったので」

「・・・理事長さんのこと、大切に思われているのですね」

「ええ、まあ・・・」

ダイヤさんに優しいげな笑みを向けられ、少し照れ臭くなってしまう。どうにも気恥ずかしいな・・・

「とりあえず、以上がテスト生になった経緯です。何か理事長のコネで入学したみたいで、話していてちよつと気が引けましたけど・・・」

「気にする必要はありませんわ。倍率の高い超難関校ならともかく、浦の星は生徒数

が減少している学校ですから。入学方法がコネだろうが、気にする人などいないでしょう」

苦笑するダイヤさん。

「それに・・・私はテスト生が天さんで良かったと、心から思っていますわ。天さんの中学の理事長さんと、浦の星の関係者の方とやらに感謝しなければなりませんわね」

「ダイヤさん・・・心の底から愛しています」

「そ、そういうセリフを軽々しく口にしてはいけませんっ！」

赤面しながら怒るダイヤさん。そんなダイヤさんを見ながら、浦の星に来て良かったと思う俺なのだった。

人に裏切られるのは辛いことである。

翌日・・・

「緊張するなあ・・・」

理事長室の前でドキドキしている俺。今朝ダイヤさんから連絡があり、放課後に新理事長との顔合わせがあると告げられたのだ。

一体どんな人なんだろう・・・

「・・・よし」

覚悟を決めてドアをノックする。

「どうぞ〜」

中から女性の声がした。新理事長の声かな・・・？

「し、失礼します・・・」

恐る恐るドアを開け、理事長室へと足を踏み入れた瞬間だった。

「シャインニー！」

「うおっ!？」

いきなりタツクルをくらい、思わずその場に倒れ込んでしまう。

「な、何事……?」

痛みを堪えながら上体を起こすと、誰かが俺に抱きついていた。ブロンドのセミロングヘアを、三つ編みのカチューシャのように結っている女子だ。

浦の星の制服を着ているので、この学校の生徒だと思うのだが……

「天！お久しぶりデース！」

顔をガバツと上げ、満面の笑みで俺を見つめる女子生徒。

ん……?

「えーつと……どちら様ですか？」

「What!?!覚えてないの!?!」

女性がショックを受けている。いや、俺の知り合いに金髪美少女なんて……

一応いるけど、この人ではないはずだ。

「ちよつと!?!いきなり何をしているのですか!?!」

先に来ていたであろうダイヤさんが抗議する。よく見ると千歌さん、曜さん、梨子さんまでいるし……

梨子さんは何故かジト目でこつちを見てるけど。

「……天くんって、年上の女性に抱きつかれやすい体質なの？」

「そんな体質だったら幸せなんですけどね。梨子さんも抱きつきますか？」

「抱きつきません!」

そっぽを向いてしまう梨子さん。

どうやらご機嫌斜めみたいなので放置して、俺に抱きついているパツキンのチャンネーへと目を向ける。

「で、どちら様ですか?」

「・・・本当に分からないの?」

さつきまでの笑みから一転、寂しそうな表情で俺を見る女子。

何だろう、もの凄い罪悪感に襲われてるんだけど・・・

「鞠莉さん! いいから早く天さんから離れなさい!」

怒っているダイヤさん・・・ん?

「鞠莉・・・?」

今ダイヤさんが呼んだ名前・・・それにこの独特の髪型・・・側頭部に数字の『6』の  
ような形で髪を結ってある・・・

あれ・・・?

「ええ!?! 鞠莉ちゃん!?! 小原鞠莉ちゃん!?!」

「Yes! やつと思いい出してくれた!」

嬉しそうに俺を抱き締める女子・・・小原鞠莉。おいおいマジか・・・

「大きくなつたね、天！」

「鞠莉ちゃんの方こそ、すっかり大人の女性つて感じになっちゃつて」

特に俺の身体に押し付けられている、この二つの大きく柔らかいモノ・・・ずら丸や果南さんより大きいのでは・・・

「つていうか、何で鞠莉ちゃんがここに？」

「フフツ、それはね・・・」

「ちよ、ちよつと待つて下さい！」

俺と鞠莉ちゃんが話していると、ダイヤさんが慌てて割り込んでくる。

「その話に入る前に、お二人の関係についてお聞きしたいのですが!?お二人はお知り合いのですか!？」

「ええ、幼馴染です」

ダイヤさんの質問に答える俺。

「母親同士が友人関係で、小さい頃は家族ぐるみの付き合いをしてたんです。まあ鞠莉ちゃん達が引つ越してからは、会う機会もなくて疎遠になつてたんですけど」

「最後に会つてから、もう十年近く経つもんねえ・・・」

しみじみとしている鞠莉ちゃん。時が経つのは早いなあ・・・

「つていうか鞠莉ちゃん、浦の星の制服着てるけど・・・まさか転校してきたの？」

「No! 私はず元々、浦の星の生徒デース！」

「マジで!？」

「マジですわ」

溜め息をつくダイヤさん。

「留学の為に海外へ行っていたのですが、このタイミングで戻ってきたようです……  
理事長として」

「へえ……ん？」

今ダイヤさん、何か凄いこと言わなかった？

「……理事長が何ですって？」

「例の新理事長というのは……鞠莉さんのことだそうです」

「……ダイヤさんでも冗談を言う時つてあるんですね」

「……冗談であつてほしかったのですけどね」

苦い顔のダイヤさんに対し、鞠莉ちゃんがドヤ顔で一枚の紙を見せてくる。

「これが証拠デース！」

「……嘘やん」

それは鞠莉ちゃんが理事長に就任したことを証明する任命状だった。おいおい……

「鞠莉ちゃん……今すぐ警察に出頭しよう」

「Why!？」

「小原家の力で前理事長を亡き者にするなんて・・・それで鞠莉ちゃんは満足なの？」

「勝手に前理事長を殺さないで!?!天は小原家を何だと思ってるの!?!」

「成金一族」

「それは否定できないけども!」

鞠莉ちゃんの父親はリゾートホテルチェーンを経営している富豪で、鞠莉ちゃんはいわゆる御嬢様というやつだ。

昔からそうだったが、この人達は基本的小金のお金に頼ることが多い。普通なら有り得ない現役女子高生理事長が誕生したのも、恐らく小原家の財力によるものだろう。

「どうせ小原家が浦の星に多額の寄付を納めてるとかで、学校の運営に顔が利くんでしょ?それで鞠莉ちゃんの理事長就任をゴリ押ししたってところじゃないの?」

「・・・君のような勘のいいガキは嫌いだヨ」

「どこの錬金術師?っていうか、嫌いならそろそろ離れてくんない?」

「It's joke!天のことは大好きデース!」

俺の頬に頬ずりしてくる鞠莉ちゃん。スキンシップが激しいな・・・

「それで?何で留学から戻ってきて、いきなり理事長になったりしたの?」

「浦の星にスクールアイドルが誕生したって聞いて、ダイヤに邪魔されちゃ可哀想だ

から応援してあげようと思って」

「本当ですか!？」

嬉しそうな千歌さん。生徒会長であるダイヤさんに反対されていることもあって、理事長である鞠莉ちゃんの応援はかなり心強いんだろう。

「Yes! デビューライブにはアキバドームを用意してみたわ!」

「何やってんの!？」

アキバドームと叫び続けたら、ラブライブの決勝が行なわれるほどのステージだ。そこでデビューライブって……

「そんな!？」

「いきなり!？」

「嘘でしょう!？」

「き、奇跡だよ!」

曜さん・梨子さん・ダイヤさんが絶句している中、顔を輝かせている千歌さん。そんな千歌さんを見て、鞠莉ちゃんは満面の笑みを浮かべ……

「It's joke!」

「ええっ!？」

「……ですよねー」

千歌さんがショックを受ける中、溜め息をつく俺・曜さん・梨子さん・ダイヤさん。小原家の財力なら、アキバドームだろうが貸し切りに出来るだろうからなあ……瞬本気かと思っただけど、流石にそれはないか……

「実際に用意するステージは、もつと身近な場所デーす！」

「身近……？」

「どこですか……？」

曜さんと梨子さんの問いに、鞠莉ちゃんはウインクしながら答えるのだった。

「フフツ、それはね……」

\*\*\*\*\*

### 《梨子視点》

「ステージって……どこですか？」

私達が鞠莉さんに連れられてきた場所は、浦の星の体育館だった。

「Yes！……」が貴方達のデビューライブを開催する場所デーす！」

頷く鞠莉さん。

「ここを満員にできたら、人数に関わらず部として承認してあげるわ」

「なっ!？」

「本当ですか!？」

驚くダイヤさんに対して、千歌ちゃんも喜びを抑えきれないようだった。

まあ念願だったスクールアイドル部を設立できるかもしれないチャンスだし、喜ぶなという方が無理だとは思う。

「鞠莉さん!？何を勝手に・・・」

「理事長権限よ。ダイヤは黙ってて」

「ぐっ・・・!」

鞠莉さんを睨みつけるダイヤさん。この二人、何か因縁でもあるのかしら・・・

「ただし、一つ条件があります」

私達を見回す鞠莉さん。条件・・・？

「もし満員にできなかつたら・・・その時は解散してもらいます」

「「ええっ!？」」

まさかの解散宣告に驚く私達。

こんなに広い体育館を満員に・・・果たして私達に出来るだろうか・・・

「嫌なら断つてくれて結構よ? どうする?」

挑発的な態度をとる鞠莉さん。この人、本当に私達を応援する気があるのかしら・・・  
「・・・千歌ちゃん、どうする?」

「やるしかないよ! 他に手があるわけじゃないんだし!」

鞠莉さんの挑発的な態度に燃えたのか、意気込んでいる千歌ちゃん。

確かに千歌ちゃんの言う通り、他に手があるわけじゃない。やるしかないわね・・・  
「ヨーソロー! 了解であります!」

「頑張りましょう!」

曜ちゃんと私も応える。それを見て、鞠莉さんはニツコリと笑った。

「では、行なうということの良いかしら?」

「はい、やります!」

「よろしい」

千歌ちゃんの返事に頷くと、鞠莉さんは天くんの方を見た。顔合わせが済んだので帰ろうとした天くんを、鞠莉さんはわざわざ引き止めてここへ連れてきたのだ。

この二人は幼馴染らしいけど、それにしても距離が近すぎないかしら・・・さつきだつて、鞠莉さんはずつと天くんにくっついたままだったし・・・

って、何で私はそんなことを気にしているのかしら・・・

「天、貴方にお願いがあなの」

「お願い？」

首を傾げる天くんに、鞠莉さんは微笑みながら口を開いた。

「この子達のマネージャーになってちょうだい」

「・・・は？」

「ちよつと待つて下さい!？」

驚いている天くん。そこへダイヤさんが慌てて割り込んだ。

「天さんは生徒会役員です！勝手に決められては困りますわ!」

「生徒会の仕事は、毎日あるわけじゃないでしょう？それに生徒会役員でも、部活の兼任は可能なはずよ？他の生徒会役員達だって兼任してるじゃない」

「それはそうですが・・・!」

「鞠莉ちゃん、悪いけどそのお願いは断らせてもらおうよ」

苦笑しながら言う天くん。

「そもそもスクールアイドル部は、まだ承認されてもいない部活でしょ？マネージャーなんて早いと思うけど？」

そう、昨日も天くんはそう言っていた。確かにまだ私達は本格的な活動も出来ていないし、マネージャーなんて早いと思う。

昨日は曜ちゃんに乗せられて、『天くんが入ってくれたら』なんて思ってしまったけれど……

「それに俺、マネージャーの仕事なんて……」

「出来ない、とは言わせないわよ」

不敵な笑みを浮かべる鞠莉さん。

「スクールアイドルのマネージャーなんて……天にはお手の物でしょう?」

「っ!?!」

息を呑む天くん。スクールアイドルのマネージャーがお手の物……?

「私は何も知らないと思った? 私達は疎遠になってしまったけど、貴方のお母様と私のママは今でも連絡を取り合っているのよ?」

「……あのお喋りクソババア」

悪態をつく天くん。表情が歪んでいる。

「この子達を、マネージャーとして支えてあげてほしいの。天なら出来るでしょ?」

「出来ないよ」

鞠莉さんの言葉をバツサリ切り捨てて天くん。

「俺で力になれることがあるなら、協力したいとは思ってる。でもマネージャーにはならないし、スクールアイドル部に入る気も無い。鞠莉ちゃんの頼みでも、それは聞け

ない」

明確な拒絶。鞠莉さんが溜め息をつく。

「そう・・・それなら幼馴染の小原鞠莉としてではなく、理事長の小原鞠莉として貴方に命令するわ。この子達のマネージャーになりなさい。さもなければ、貴方を浦の星から追放します」

「鞠莉さん!?!何を言い出すのですか!?!」

ダイヤさんが鞠莉さんに食ってかかる。

「理事長が一生徒に何かを強要するなど、あつてはなりませんわ!そもそも、正当な理由もなく追放など出来るわけが・・・」

「共学化を白紙に戻せば良い話よ。そうすれば天は、浦の星から出ていかざるをえなくなるわ。そして小原家は、浦の星の運営に顔が利く・・・それくらい十分に可能よ」

「正気ですの貴女!?!」

「至って正気よ。そもそも、天を浦の星に呼んだのは私なんだから」

「なっ!?!」

驚いている天くとダイヤさん。鞠莉さんが天くんを呼んだ・・・?

「天の中学の理事長さんから天を推薦された時、運命だと思つたわ。天がいれば、私の願いはきつと叶う・・・そう思つたわ」

「願い……?」

訝しげな天くんに対し、悲しそうに微笑みながら何も答えない鞠莉さん。

一方、ダイヤさんはわなわなと身体を震わせていた。

「鞠莉さん、貴女……最初から利用するつもりで、天さんを浦の星に呼んだというのですか……!」

「……その通りよ」

乾いた音が体育館に響く。ダイヤさんが鞠莉さんの頬を引つ叩いていた。

「見損ないましたわッ! 天さんは貴女の幼馴染なのでしょう!?! その天さんを利用する為に呼んだですって!?! 恥を知らないさッ!」

「……天、貴方ずいぶんダイヤに好かれたのね。こんなダイヤ初めて見るわ」

叩かれた頬を押さえ、天くんへと視線を移す鞠莉さん。

「いくら蔑まれようと、私は要求を変えるつもりは無いわ。天、マネージャーになりなさい。私は本気よ」

「鞠莉さん!?! いくら何でもそんな無理矢理……」

「そうですねよ! 私達だつてそんなやり方は望んで……」

「貴女達は黙つて。天がマネージャーにならないと言うのなら、さっきのデビューライブの件も白紙にするわ。部の承認もしません」

「そんな!？」

千歌ちゃんと同様に冷たい眼差しを向ける鞠莉さんに、私も黙っていられなかった。

こんな状況、天くんがあまりにも可哀想すぎる。やりたくもないマネージャーをやれと強要され、断れば学校からの追放及び私達を不利な状況に追い込むと脅されているのだ。

こんなのって・・・

「・・・分かりました」

溜め息をつく天くん。

「引き受けますよ・・・マネージャー」

「天くん!? 本当に良いの!？」

「仕方ないでしょう。それ以外の選択肢が無いんですから」

私の言葉に、天くんが苦笑する。

「せっかく浦の星に来たのに、追放されたくありませんから。スクールアイドル部だって、ちゃんと立ち上げてほしいですし」

「天くん・・・」

千歌ちゃんと曜ちゃんも、悲痛な表情を浮かべていた。マネージャーになってほしい

とは思ったけど、こんなやり方するなんて……

「……感謝するわ、天」

鞠莉さんが天くんに触れようと手を伸ばし……思いつきり弾かれた。

「……触らないで下さい」

「そ、天……?」

鞠莉さんを見る天くんの目は、見たこともないほど冷たいものだった。その目に見つめられた鞠莉さんは、怯えたように一歩下がる。

「マネージャーの件、確かに引き受けました。ただし条件があります」

「な、何かしら……?」

「まず一つ目……スクールアイドル部が設立された場合でも、スクールアイドル部への所属を強要しないこと。マネージャーとしての仕事はするつもりですが、スクールアイドル部に所属するつもりはありませんので。勿論設立されなかった場合は、マネージャーは辞めます。よろしいですね?」

「え、ええ……マネージャーの仕事をしてくれるなら、所属までは強要しないわ」  
天くんの言葉には、感情が全くこもっていなかった。まるで機械音声のようだ。

「二つ目……生徒会の仕事の優先を許可すること。俺の所属はあくまでも生徒会ですので、そちらが最優先です。よろしいですね?」

「え、ええ……」

鞠莉さんが恐る恐る頷く。今の天くんがよほど怖いらしい。

「そして三つ目……貴女がどこまでこれまでの俺を知っているのか、俺も把握はしていませんが……」

鞠莉さんを睨みつける天くん。

「他の人達に、俺の情報は一切話さないこと……よろしいですね？」

「わ、分かったわ……」

「……では、マネージャーを引き受けます。不本意ではありますが踵を返し、体育館の出口へと歩いていく天くん。

「そ、天っ！」

「人を気安く名前で呼ばないで下さい……小原理事長」

名前を呼ぶ鞠莉さんに冷たく返した天くんは、忌々しそうに吐き捨てた。

「俺は今、この学校に来てしまったことを……心の底から後悔していますよ」その言葉は、私達の胸に深く突き刺さるのだった。

支えてくれる人の存在は大きい。

「・・・ハア」

俺は溜め息をつきながら、廊下を歩いていった。頭の中で、先ほどの小原理事長との会話が繰り返して流れている。

「あの女・・・!」

思い出す度に怒りがこみ上げてくる。

なりふり構わず俺を脅し、千歌さん達のマネージャーを務めることを強要してくるなんて・・・流石は富豪の令嬢、権力を持っている者の脅しは一味違うようだ。

だが・・・

「・・・悲しそうだったな」

あの悲しげな笑みが頭から離れない。恐らく、俺を脅してでもマネージャーにしたい理由があるのだろう。

それでも、今回のことを許すことは出来ないが。

「・・・もう訳が分かんない」

頭の中がグチャグチャで、全く整理できない。とにかく今は帰って寝よう。

そう思い、鞆を取りに教室へと戻ると・・・

「あれ？天くん？」

「ずら丸？」

ずら丸が一人で席に座り、本を読んでいた。

「帰ってなかったの？」

「今日は図書委員会の仕事だったずら」

「ああ、図書室の受付か」

図書委員会の生徒は当番制で、週に何度か図書室の受付をやっている。ずら丸もクラス代表として図書委員会に所属しており、今日がその当番の日だったらしい。

「で、何で教室で本読んでんの？」

「天くんと一緒に帰ろうと思って」

微笑むずら丸。

「当番が終わって教室に戻ってきたら、天くんの鞆が置いてあったから。天くんが戻ってくるのを、読書しながら待ってたずら」

「マジか・・・結構待たせた？」

「今来たところずら」

「何そのデートの待ち合わせで男が言いそうなセリフ」

「マルは女ずら」

「知ってるわ」

笑いながらツツコミを入れる。と、ずら丸が怪訝な表情で俺を見た。

「・・・何かあつたずら？」

「え、何で？」

「・・・酷い顔してるずら」

「うわ、顔をデイスられた。傷付くわあ」

「天くん」

いつになく強い口調で、俺の名前を呼ぶずら丸。

「無理して茶化すのは止めるずら。辛いのは天くんの方ずら」

「・・・そうでもしなきゃやってられないよ」

力なく席に座る俺。

「頭の中がゴチャゴチャで、何も考えたくない・・・何かもう疲れたよ・・・」

どうして小原理事長があんなことをしたのか・・・どうして俺がマネージャーをやらなければいけないのか・・・

「何で・・・どうして・・・」

「ダメずら」

後ろからずら丸の声が聞こえたかと思うと、頭が柔らかいものに覆われる。

俺はそこで初めてずら丸が俺の後ろに移動していたこと、そして後ろからずら丸に抱き締められていることに気付いた。

「今は何も考えちゃダメずら。こういう時に深く考えちゃうと、どんどん良くない方に考えがいつちやうずら」

「ずら丸……」

「今はただ、頭を空っぽにすること……マルに身を任せていれば良いずら」  
優しく抱き締められるずら丸。ずら丸の温もりを感じ、心が安らいでいく。

「……女の子なんだから、あんまり男にこういうことしない方が良いよ」

「マルの男友達は天くんだけだから、他にこういうことする男の子なんていないずら。天くんだけの特権ずら」

「……そっか。ありがたく受け取っとくよ」

大人しくずら丸に身を任せる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「そんなことがあつたずらね・・・」

神妙な表情のずら丸。

俺は帰りのバスの中で、ずら丸に事情を説明していた。あそこまでしてもらつた以上、ずら丸に何も話さないのは良くないと思つたのだ。

「理事長さんも酷いことするずら・・・」

「・・・正直、かなりシヨックだったよ」

溜め息をつく俺。

「久しぶりに会えて嬉しかったし、向こうも純粹に喜んでくれてるんだと思つてた。でも実際は、俺を利用する為に浦の星に入学するように仕組んでたなんて・・・」

「マネージャーを断れば、浦の星からの追放・・・それは断れないずらね」

「いや、それだけで済むなら断つてたよ」

「ずら!?!」

驚愕しているずら丸。

「ど、どういうことずら!?!」

「別の学校に行くつていう選択肢があつたつてこと。ツテが無いわけじゃないから、受け入れてくれる学校なら見つけられると思うし」

「じゃ、じゃあ何で……」

「……スクールアイドル部の為、かな」

もし俺が断れば、小原理事長はスクールアイドル部を認めないと言っていた。それでは千歌さんの夢が叶わないし、せっかく前向きになれた梨子さんの決意が無駄になってしまう。

何より自分達のマネージャーを断ったせいで、俺が浦の星から追放されてしまったら……恐らくあの三人は、責任を感じてスクールアイドルを断念してしまうだろう。

「せっかく見つけた目標を、こんなことで諦めてほしくないから。あの三人には、これからも真つ直ぐ突き進んでほしいし」

「でも天くんが無理矢理マネージャーをやらされることに、先輩方が責任を感じてないとは思えないすら」

「そこは先輩方とも話をするよ。さつきはちよつと冷静じゃなかったけど、ずら丸のおかげでずいぶん落ち着いたから」

俺は笑いながら、隣に座るずら丸の頭を撫でた。

「ありがとう。おかげで助かったよ」

「マ、マルは当然のことをしただけすら……」

ずら丸が顔を赤くしている。可愛い奴め。

「・・・でも、天くんが浦の星に残ってくれて良かったすら  
「え？」

すら丸の言葉に首を傾げる俺。すら丸が優しく微笑む。

「・・・せっかく仲良くなれたのに、離れちゃうのは寂しいすら」

「っ・・・」

思わずドキツとしてしまう。ニヤけるすら丸。

「あれ、天くん顔が赤いすら。どうしたすら？」

「ゆ、夕陽のせいだって！」

「ふーん・・・まあ、そういうことにしておいてあげるすら♪」

くっ、コイツ・・・完全に気付いてるな・・・

「フフツ、天くんの弱点発見すら♪」

「・・・ここにすら丸の愛読書があります」

「すら!?! マルが鞆に入れてた本!?! いつの間にな？」

「そしてここにマツチがあります・・・春とはいえ、日が暮れると冷えるよね」

「ごめんなさいすらあああああつ!?! 堪忍すらあああああつ!?!」

フツ、勝った・・・俺をからかおうなんて百年早いわ。

「うう・・・天くんは鬼すら・・・」

「失礼な。悪魔と呼んでもらおうか」

「余計に酷くなつたぞら!？」

そんなやり取りをしていると、俺が降りるバス停に到着した。自分の鞆を持ち、席を立ってずら丸の方を見る。

「じゃあまた明日」

「また明日ぞら」

手を振ってくれずら丸。

俺はバスを降りようとしたが・・・一度立ち止まり、もう一度ずら丸の方を見る。

「今日は本当にありがとう・・・花丸と友達で良かった」

初めて名前を呼んだ。

俺の言葉に、花丸は目をぱちくりさせると・・・頬を赤く染め、照れ臭そうに笑うのだった。

\*\*\*\*\*

「んー……とりあえず明日、千歌さん達と話さないとなあ……」  
帰り道を歩きながら、どう話を切り出すかを考える。

あの人達、絶対気にして居るだろうしなあ……

「わんっ!」

考えながら歩いていると、犬の鳴き声が聞こえた。思わず顔を上げると、こちらへ向かって大きな犬が駆け寄ってくるところだった。

「おお、しいたけ。ただいま」

「わんっ!」

嬉しそうに身体を摺り寄せてくる犬……しいたけの頭を優しく撫でる。

と、しいたけの後から一人の女性が駆け寄ってきた。

「ちよつとしいたけ、急にどうした……って天じゃん!今帰り?」

「ええ。こんばんは、美渡さん」

明るいブラウン系の短い髪の女性に挨拶する。

彼女は高海美渡さんといって、しいたけが飼われている旅館『十千万』の娘さんだ。

『十千万』は学校の行き帰りで必ず通る為、毎日しいたけを構っていたら美渡さんとも挨拶する仲になったのだ。

「学校の方はどうよ?彼女できました?」

「欲しいのは山々なんですけど、全然フラグが建たないんですよ」

「えー、だつて男子は天だけなんでしょ？ 他は全員女子なんだから、選びたい放題じゃん。選り取りみどりじゃん」

「女子達にも選ぶ権利があるでしょう。こんな冴えない男を選ぶぐらいなら、他校のイケメンを狙いに行くんじゃないですか？」

「そうかなあ？ 天は割りとイケてると思うよ？」

「美渡〜？」

美渡さんと話していると、美渡さんの後ろから違う女性が現れた。黒髪ロングのおつとりとした雰囲気的女性が、しいたけとじやれている俺に気付く。

「そろそろ夕飯・・・つて、天くんじゃない！ お帰りなさい」

「こんばんは、志満さん」

彼女は高海志満さん、美渡さんのお姉さんだ。美渡さんと同じく挨拶する中で、よくおすそ分けをいただいたりする。マジ女神。

「志満さんは今日もお綺麗ですね」

「フフツ、天くんったら上手なんだから」

「本心ですつて。俺が大人だったら放っておかなかつたでしょうね」

「あら、じゃあ天くんは私を放っておくのかしら？」

「志満さんがその気なら、喜んでアタックさせていただきます」

「ちよつと天、私の前で志満姉を口説かないでくれる？」

「まだ口説いてませんよ。MK5（マジで口説く5秒前）です」

「言葉が古くない!?!アンタ高校生よねえ!?!」

美渡さんのツツコミ。面白い人だなあ・・・

「美渡さんつて、俺の先輩に似てますね。ツツコミが上手なんでボケやすいです」

「いや、そこで判断されても・・・その先輩も大変ね・・・」

同情的な表情の美渡さん。

失礼な、これでも千歌さんのことは敬っているというのに。

「そうだ天くん、良かったら夕飯食べていかない？」

「いえ、そこまで甘えてしまうわけには・・・」

「今日のメニューは肉じゃがなんだけど、ちよつと作りすぎちゃつて」

「ご相伴に預からせていただきます」

「急に態度が変わったわね・・・」

呆れている美渡さん。だって前におすそ分けでいただいた肉じゃが、メツチャ美味し

かったんだもん。

「フフツ、じゃあどうぞ」

「お邪魔します」

志満さんに案内され、『十千万』の中へと足を踏み入れる。

「千歌ちゃん、ご飯よ〜」

志満さんが二階に向かって呼びかける・・・え？

「・・・は〜い」

やがて元気の無い様子で階段を下りてきたのは・・・紛れも無く千歌さんだった。

「ごめん志満姉、私あんまり食欲無くて・・・って天くん!?何でここに!?!」

「・・・チェンジで」

「何が!?!」

千歌さんのツツコミが響くのだった。

好きな人には好きって伝えるんだ。

『十千万』の二階にある千歌さんの部屋で、千歌さんと俺は正座して向き合っていた。千歌さんからの連絡を受けたであろう曜さん・梨子さんも加わり、俺達四人はテーブルを囲む形で座っている。

先ほどの一件もあり、部屋の中は重苦しい雰囲気で包まれて……

「もぐもぐ……このクッキー……もぐもぐ……メツチャ……もぐもぐ……美味しい……もぐもぐ……流石は……もぐもぐ……志満さん……もぐもぐ……」

「凄い勢いでクッキー食べてる!?!」

「口の中に物を入れた状態で喋らないのっ!」  
いなかった。

梨子さんから注意されてしまったので、口の中のクッキーを紅茶で流し込む……うん、紅茶も美味しい。

「ごめんなさい、お母さん」

「誰がお母さんよ!?!」

「え、ママって呼んだ方が良いですか?」

「そういう問題じゃないんだけど!？」

「じゃあ間をとってオカンで」

「だからそういう問題じゃないってば!？」

「ぜえぜえ息を切らしながらツツコミを入れてくれる梨子さん。

「まあ、疲れ切っている梨子さんは放置するとして・・・」

「誰のせいよ!？」

「それにしても、志満さんと美渡さんが千歌さんのお姉さんだったとは・・・」

世の中狭いものである。知り合いのお姉さん達が、まさか学校の先輩の家族とは・・・

「確かに苗字は『高海』だし、妹がいるとは聞いてたし、浦の星に通つてるとは聞いて

たし、最近スクールアイドルにハマってるらしいとは聞いてたけど・・・まさかですね」

「全然まさかじゃないよねえ!?!それ私しかいないよねえ!?!何で気付かないの!?!」

「いやあ、鈍感なもので。すみません千歌さん・・・いや、義妹さん」

「何で言い直したの!?!」

「俺が志満さんと結婚したら、美渡さんと千歌さんは俺の義妹になりますから」

「こんな義兄さん嫌ああああああああつ!?!」

梨子さんに続き、千歌さんもダウンして机に突っ伏す。仕方ないので、俺は右隣の曜さんに向き直った。

「ところで曜さん、もう夜ですけど……ここに來てて良いんですか？バスが無くなつて帰れなくなりませんか？」

「あ、それは大丈夫。今日は千歌ちゃんの家に泊まらせてもらうから」  
大きめのリュックを持ち上げる曜さん。

「千歌ちゃんから連絡もらつて、大急ぎでお泊りの準備したんだよ。まさか千歌ちゃんの家に来くんが来るなんて、思つてもみなかつたなあ」

「お騒がせしてすいません……梨子さんは大丈夫なんですか？」

「うん。私の家は隣だから」

「そうなんですか!？」

マジか……つていうか、家の隣が旅館つてある意味凄いな……

「それより、天くんこそ大丈夫なの？」

机に突つ伏していた千歌さんが顔を上げる。

「夕飯のこととか、家に連絡してる様には見えなかつたけど……」

「あ、一人暮らしなんで大丈夫です」

「二人暮らし!？」

三人の声がハモる。あれ、言つてなかつたつけ？

「俺、元々は家族と東京に住んでたんですよ。それが浦の星へ入学することになって、

一人でこつちに引っ越してきたんです」

「天くんも東京に住んでたの!？」

「ええ、一応」

流石に梨子さん一家のように、家族で内浦に引っ越すことは出来なかったが。だから俺だけこつちに来たのだ。

「だから志満さんからのおすそ分けって、ホントありがたいんですね。一応料理は出来ますけど・・・人の作ってくれたものを食べられるって、凄く幸せなことですから」

「天くん、これからはウチで夕飯食べていきなよ!」

「私の家も大歓迎よ!いつでも来てくれて良いからね!」

何故か涙目の千歌さんと梨子さん。あれ、同情されてる?」

「天くん、ウチにもご飯食べに来てね!」

「いや、気持ちは嬉しいですけど・・・曜さんの家だと帰れなくなりますから」

「お泊りでも大丈夫だよ!」

「思春期の男子に対して、もう少し警戒心を持ってくれませんか?」

呆れている俺に構わず、目を潤ませながら俺の手を握ってくる曜さん。いや、気持ちはメツチャ嬉しいんだけども。

「まあそれはさておき・・・とりあえず、マネージャーの件について話しましょうか」

「「っ……っ」」

俯く三人。やっぱり責任を感じているようだ。

「まず最初に言っておきますが、俺がマネージャーをやるのは小原理事長に脅されたからです。悪いのは小原理事長であって、千歌さん達には何の非もありません。なので責任を感じる必要は無いですよ」

「いや、でも……」

「異論は認めません」

千歌さんが申し訳なきように口を開くが、強引に遮る。

「俺はスクールアイドルを目指す千歌さん達を応援してましたし、俺で力になれることがあるなら協力したいとも思っていました。スクールアイドル部に入ったり、マネージャーになったりするつもりはありませんでしたが……それでも、陰ながら支えてくれたらって。だから『自分達がスクールアイドルをやろうとしたせいだ』なんて、絶対に思わないで下さい。そう思われることの方が、俺はよほど悲しいです」

「天くん……」

「……一つ、聞いても良いかしら？」

梨子さんがおぼろげと口を開く。

「天くんならスクールアイドルのマネージャーなんてお手の物だって、あの時鞠莉さ

んが言ってたけど……どういう意味なのかな？」

「……申し訳ないんですけど、今は話せません」

「あ、言いたくないなら大丈夫よ!?無理に聞いたりしないから!」

頭を下げる俺を見て、慌てる梨子さん。気を遣わせちゃったな……

「……まあとにかく。マネージャーをやることになったからには、精一杯やらせてもらいます。経緯が経緯なんで、正直複雑かとは思いますが……」

「本当に良いの……?」

曜さんが気遣わしげに俺を見ている。

「あんなにマネージャーをやることを拒否してたのに……大丈夫なの?」

「……曜さん」

「何……?」

「好きです」

「うん……ええっ!」

ビックリしている曜さん。顔がどんどん赤くなっていく。

「きゅ、急にそんな……!」

「あ、恋愛の意味じゃないですよ。人としてです」

「紛らわしいわっ!」

勘違いが恥ずかしかつたのか、耳まで真っ赤にしながら両手で顔を覆う曜さん。千歌さんと梨子さんが同情的な視線を送っている。

「曜ちゃん、ドンマイ……」

「天くん、今のは誰でも勘違いするわよ……」

「そうですか？」

まあとりあえず、悶絶している曜さんは置いて……

「千歌さんのことも梨子さんのことも、俺は好きですよ。尊敬できる先輩だと思つてます。もしそう思つてなかつたら、学校を追放されるとしてもマネージャーを引き受けたりしなかつたでしょうね」

さつき花丸にも言つたことだが、学校を追放されるだけなら俺はマネージャーを断つていた。それでもマネージャーを引き受けたのは、スクールアイドル部を立ち上げてほしかったから。

それはつまり……尊敬できる先輩方に、夢を叶えてほしかったからだ。

「俺がマネージャーをやりたくなかつたのは、先輩方が嫌いだからじゃありません。まだ理由は言えませんが、それでも……先輩方が好きだから、俺はマネージャーを引き受けたいんです。それだけは覚えておいて下さい」

「天くん……」

涙目の千歌さん。俺は立ち上がると、三人に向かって頭を下げた。

「さつきはちよつと感情的になつて、場の空気を悪くしてしまつてすみませんでした。マネージャーとして精一杯頑張りますので、これからよろしくお願いします」

「っ……天くんっ！」

「うおっ!？」

勢いよく抱きついてくる千歌さん。思わずその場に倒れこんでしまう。

「ごめんね……ひつぐ……ごめんね……!」

「……はいはい、泣かないで下さい」

苦笑しながら、泣いている千歌さんの頭を撫でる。

「謝る必要なんか無いのに……千歌さんはお人好しですね」

「……それは天くんもでしょ」

優しい温もりに包まれる。梨子さんが後ろから俺を抱き締めていた。

「天くんも謝る必要なんか無いのに……本当にお人好しなんだから……ぐすつ」

「あれ、梨子さん泣いてます?」

「泣いてないわよ……ぐすつ」

確実に泣いてるじゃないですか……というツツコミは、流石に無粋だと思つたのでしなかつた。

「うわああああんっ！天くうううんっ！」

「感情を微塵も隠す気の無い人が来た!？」

俺、千歌さん、梨子さんをまとめて抱き締める曜さん。ちよ、苦しいんだけど・・・

「皆で頑張ろうっ！スクールアイドル部を立ち上げようっ！」

「ちよ、曜さん・・・分かったから落ち着いて・・・」

「うわああああんっ！」

「・・・全然人の話聞いてないし」

まあ、不思議と悪い気はしてないけど。今は好きにさせておこう。

「っっていうか梨子さん、結局俺に抱きついてるじゃないですか。やっぱり俺、年上の女性に抱きつかれやすい体質なのかも」

「か、勘違いしないでよね!？これはあくまで友愛的な意味でしてることだから！」

「梨子ちゃん、今のは世間じゃツンデレって言われるセリフだよ?」

「千歌ちゃん!？何よツンデレって!？私はデレてなんかないんだからね!？」

「千歌さん聞きました?テンプレの台詞でしたよね?」

「うん、やっぱり梨子ちゃんはツンデレなんだね」

「だから違うっつてば!？」

「うわああああんっ！」

最早カオスとも言わべき状況である。

それでも・・・先輩方との距離が、少しだけ縮まったような気がした俺なのだった。

縁は大切にすべきである。

「あつ．．．天くん．．．ダメ．．．!」

「そんなこと言っちゃって．．．梨子さんなら、もつとイけるでしょう．．．?」

「ダメ．．．それ以上は．．．あつ．．．!」

「よし、イキますね．．．!」

「ああああああああつ!」

悲鳴を上げる梨子さんに構わず、俺はただ力を込め．．．

「痛い痛い痛い!?!天くん待って!?!ホントギブ!ギブだから!」

「梨子さんの悲鳴が聞けるなら、俺はいくらでもこの背中を押しますよ」

「ドS!鬼!悪魔!」

「おっと、力加減をミスりました」

「いやああああああああつ!」

梨子さんの背中を押していた。

マネージャーを引き受けてから数日、俺は千歌さん達の練習に付き合っていた。今は練習前の柔軟体操をしており、俺は梨子さんとペアを組んで身体をほぐしているのだっ

た。

「天くん、ホント容赦ないよね・・・私もやられたけど、痛かったなあ・・・」

「そうかな？ 私はそんなことなかったけど？」

千歌さんと曜さんも、そんな会話をしながら柔軟体操をやっている。まあ曜さんは水泳部だけあって、身体も柔らかかったしな。

「さて、これぐらいにしておきますか」

「ハア・・・ハア・・・」

練習場所の砂浜に突っ伏し、息切れしている梨子さん。やれやれ・・・

「大丈夫ですか？ 練習はこれからですよ？」

「天くんのせいでしょうが！」

「梨子さんの身体が硬いせいです。だから頭も固いんですよ」

「うぐっ・・・」

悔しそうな梨子さん。どうやら自覚はあるらしい。

「俺の知り合いのピアノやってる人は、キチンと柔軟体操を続けて身体が柔らかくなりましたよ。まあ未だに頭は固いままでですけど」

「じゃあ関係ないじゃない!？」

「でも、ピアノはメツチャ上手くなりました」

「ちゃんと柔軟体操やらなくちゃ！」

チヨロい梨子さん。

まあ上手くなったというより、前より楽しそうにピアノを弾くようになったという話なんだけどね。柔軟体操も関係無いし。

「さて、ランニングいきますか」

「おー！」

「ヨーソロー！」

千歌さんと曜さんが元気よく走り出し、その後を梨子さんと俺が追う。これがいつものランニングの陣形だった。

「ライブ、絶対成功させるんだ！私達なら出来る！」

息巻いている千歌さん。

ライブの日まであまり時間も無いが、それまでに何とかスクールアイドルとしての形にはしたいところだ。会場を満員にできたとしても、パフォーマン스가ダメなら小原理事長も納得しないだろう。

そもそも、μ、s大好きウーマンのダイヤさんがブチギレるだろうし・・・ん？μ、

s？

「千歌さん、一つ聞いても良いですか？」

「ん？何？」

「グループの名前って決まってるんですか？」

「・・・あつ」

今『あつ』って言ったよこの人。完全に忘れてたパターンだよ。

「ちゃんと決めた方が良いでしょう。名前って結構重要ですから」

「そうだよね・・・でも、どんな名前が良いかなあ・・・」

考え込む千歌さん。すると、曜さんが勢いよく手を上げた。

「はいはい！『制服少女隊』なんてどうかない？」

「無いかない」

「無いわね」

「無いですね」

「ええっ!？」

全員から否定され、シヨックを受ける曜さん。いや、まあ何と言うか・・・

「完全に曜さんの趣味が入ってますよね、それ」

「良いじゃん！可愛いじゃん！」

頬を膨らませる曜さん。

曜さんは職業系の制服が大好きらしく、自分で作ったりもするんだとか。なのでライ

ブの衣装は、曜さんが担当することになってる。

「梨子ちゃんはどう？どんな名前が良いと思う？」

「んー、そうねえ・・・」

千歌さんに尋ねられ、考え込む梨子さん。梨子さんならきつと、良いセンスのグループ名を考えてくれるだろう。

「海で知り合った三人組つてことで、『スリーマーメイド』とか・・・」  
そんなことを考えていた時期が俺にもありました。

「さあ、そろそろペース上げましょうか」

「おー！」

「待つて!?今の無し!無しだから!」

顔を真っ赤にしてブンブン腕を振る梨子さん。やれやれ・・・

「仕方ありません。言い出しっぺに決めてもらいましょうか」

「え、天くんが決めてくれるの?」

「脳天かち割りますよ、能天気オレンジヘッド」

「メツチャ罵倒された!?私一応先輩だよねえ!」

「早く考えないと、マジで『スリーマーメイド』にしますからね」

「今すぐ考えなきや!」

「だからそれは無しだってば!」

ギヤーギヤー騒いでいる梨子さんは無視して、千歌さんが必死にグループ名を考え  
ると、曜さんが俺へと視線を向けてきた。

「ちなみに、天くんはどんなグループ名が良いと思う?」

「そうですねえ・・・『シグナル』とかどうでしょう?」

「お、ちよつとカツコ良いかも。ちなみに名前の由来は?」

「イメージカラーですね。梨子さんがサクラピンク、千歌さんがオレンジ、曜さんがラ  
イトブルー・・・それぞれ赤・黄・青に近いですし、番号っぽいじゃないですか」

「・・・うん、由来がちよつとアレかな。まあ名前は悪くないと思うけど」

「っていうか、私のイメージカラーはみかん色だから!オレンジじゃないから!」

「そこに拘るんですか?」

千歌さんのよく分からない拘りはさておき、他にも名前を考えてみる。

「三人のイニシャルで考えるのはどうですか?千歌さんがC、曜さんがY、梨子さんが  
Rだから・・・そう、例えば『CYaRon!』とか・・・」

「『それはダメ』」

「あれ?ダメでした?」

結構良い名前だと思っただけ・・・

「いや、良い名前だとは思うんだけどね・・・」

「うん、良い名前なんだけど・・・何かダメな気がする」

「上手く言えないんだけど・・・この三人のグループ名では無いわね」

何故か微妙な表情をしている三人。まあ皆がそう言うなら仕方ないか・・・

「そういえば、μ、sはどうやって名前を決めたのかしら？」

「ギリシア神話に登場する文芸の女神『ミューズ』が由来なんだって。『ミューズ』は九人の女神が存在するらしくて、そこから『μ、s』っていう名前にしたみたい」

「あれ？でもμ、sって、最初は三人だったんじゃないかったっけ？」

「あつ、確かに・・・じゃあ何で『μ、s』にしたんだろう？」

ダイヤさんの問題に答えられなかったことがキツカケで、μ、sのことを熱心に調べるようになった千歌さんだったが・・・これは流石に分からないだろう。

「天くんは知ってる？」

「まだμ、sが三人だった頃、学校に投票箱を設けてグループ名を募集したみたいですよ。そこに投函されていた紙に『μ、s』って書いてあって、それをグループ名にしたんだとか」

「・・・まさか本当に知ってるなんて」

啞然としている千歌さん。

「じゃあμ、sの名前を考えた人は、音ノ木坂の生徒ってこと?」

「そうです。後に判明したそうですが、投函したのは東條希さんだったんだとか」

「東條希さんって・・・え、μ、sのメンバーの!？」

「ええ。まあ投函したのは、彼女がμ、sに加入する前の話だそうですけど」

「そうなんだ・・・でも、何で『μ、s』だったんだろう?」

「彼女には、九人になる未来が見えていたそうですよ。まあ、嘘か本当かは分かりませんが」

「そういえば希さんは、パワースポットや占いに傾倒していたってネットにも書いてあったっけ・・・それなら、本当に未来が見えたのかもしれないね!」

少し興奮気味な千歌さん。この人、μ、sの話の時はホントに熱くなるな・・・

「で、名前どうします?」

「ああっ!?忘れてた!」

頭を抱える千歌さん。

その後も皆で考えながらランニングしていたものの、結局良い案は思い浮かばず・・・俺達はスタート地点へと戻ってきていた。

「ハアツ・・・ハアツ・・・何か・・・いつもより疲れた・・・」

運動は得意なはずの曜さんが、珍しくしんどそうにしている。千歌さんと梨子さんも

疲れたのか、砂浜に仰向けに倒れ込んだ。

頭を使いながらランニングをすると、いつもより負荷が大きいようだ。

「・・・よし、練習メニューに追加しよう」

「「鬼かつ！」」

三人から総ツツコミを受けたところで、俺はあるものを発見した。

「ん・・・？」

「天くん？どうしたの？」

「いえ、何か書いてあるみたいで・・・」

さっきまで俺達が柔軟体操をしていた辺りに、『A q o u r s』という落書きがしてあった。

走り始めた時は、こんな落書きなど無かったはずだが・・・

「私達がランニングしてる間に、誰かが書いたんじゃないかな？この辺の砂浜って、結構色んな落書きがあつたりするし」

「・・・そうですかね」

曜さんはそう言うものの、俺はどこか釈然としなかった。

そもそも落書きにしては字が綺麗過ぎるというのもあるが、どこかで見た字のよう

な・・・

「ところでこれ、何て読むのかしら？」

首を傾げる梨子さん。俺の知るかぎりこんな英単語は無いはずなので、恐らく造語だとは思うのだが……

「もしかして……アクア、ですかね？」

「アクア……水ってこと？」

「ええ、多分。海辺ですし、水を基にした造語なんじゃないですか？」

「……水かあ」

微笑む千歌さん。あ、この顔は……

「ねえ、この名前……」

「良いんじゃないですか？」

「まだ何も言っていないよ!？」

「グループ名にどうか、っていう話ですよね？」

「天くんってエスパーなの!？」

「千歌さんが分かりやすいだけです」

この人は本当に分かりやすい。考えていることが思いつきり顔に出るし。

「これをグループ名にするの？誰が書いたか分からないのに？」

「だから良いんだよ」

梨子さんの言葉に、千歌さんが笑う。

「名前を決めようとしている時に、この名前に出会った……それって、凄く大切なことなんじゃないかな？」

「……そうですね」

出会いというものは、偶然なのか必然なのか……そんなものはどちらでも良い。

重要なのは、その縁を大切に出来るかどうか……そう考えている俺にとって、今の千歌さんの言葉はとても共感できるものだった。

「賛成であります！」

「このままじゃ、いつまでも決まりそうにないしね」

曜さんと梨子さんも賛成のようだ。これで決まったな。

「じゃあ決定ね！今から私達は、スクールアイドル『Aqours』だよ！」

「おー！」

盛り上がる三人。グループ名も決まり、これでますます気合いが入るだろう。

「さて、休憩はここまでにしましょうか。次はステップの練習をしましょう」

「ええっ!?もう休憩終わり!?」

「ご不満なら、永遠に休憩させてあげましょうか?」

「遠回しの殺害予告じゃん!?最近の天くん、生徒会長より怖いんだけど!」

「いやいや、ダイヤさんは・・・あつ」  
思い出した。あの字、どこかで見たことがあると思つたら・・・  
思わず苦笑してしまふ俺なのだった。

借りは返すものである。

「・・・そうですね。ライブの準備は順調に進んでいるのですね」

「ええ、何とか」

生徒会室でお茶を飲みながら、ダイヤさんと会話している俺。

今日は生徒会の仕事があった為、マネージャーとしての仕事はお休みだ。

「高海さん達は、今日も練習ですか？」

「いえ、今日は宣伝活動ですね。沼津の駅前でチラシを配るそうですよ」

スクールアイドル部の設立が承認される条件は、体育館を満員にすること・・・しかしそこには、一つの問題点があった。

「この学校の生徒が全員集まったとしても、体育館は満員にはならない・・・私が言える立場ではありませんが、鞠莉さんも意地悪ですわね」

溜め息をつくダイヤさん。

そう、浦の星の全校生徒は百人にも満たない。体育館を満員にするには、外部のお客さんに来てもらうしかないのだ。

小原理事長はそれを分かった上で、この条件を出したのだろう。本当に食えない人で

ある。

「ライブライブを目指す以上、学校の中だけで満足してはいられませんからね。それでこんな条件を出したんでしょうけど・・・気に入りませんか」

千歌さん達はまだ、スクールアイドルを始めたばかりだ。

それなのにもうライブをやらせ、満員に出来なければ解散しろだなんて・・・ハードルが高過ぎる。

「あの人が何を考えているのか分かりませんが・・・人を何だと思ってるんですかね」

「天さん・・・」

気遣わしげにこちらを見るダイヤさん。

小原理事長とのいざこざがあつてから、ダイヤさんは本当に俺のことを心配してくれていた。『生徒会長として何も出来ず申し訳ない』と言つて、土下座してきたほどである。

勿論ダイヤさんは何も悪くないので、すぐに肩を掴んで頭を上げてもらったが。

「・・・まあ、今はそんなことを言つても仕方ないですね。とにかく体育館を満員にして、スクールアイドル部の設立を承認してもらわないと」

苦笑する俺。

とにかくやるしかない。今は恨み言を言うよりも、前を向いて頑張つていかないと。

「グループ名が決まって、千歌さん達もますます気合いが入ってますから。素敵な名前を付けてくれた人に感謝しないと……ありがとうございます、ダイヤさん」

「なっ!?!」

驚くダイヤさん。やっぱりか……

「な、何のことか私にはさっぱり……」

「いつも生徒会の仕事でダイヤさんの字を見ている俺が、分からないわけじゃないでしょうに。砂浜の落書きにしては、ちよつと字が綺麗過ぎましたね」

「……参りましたわ」

がつくりと肩を落とすダイヤさん。

「少し練習の様子を見に行ったら、ちょうどグループ名の話をしているのが聞こえたので……あ、あくまでも参考にとまって……」

「千歌さんの性格を考えると、あの名前になる可能性が高いことは分かってたんじゃないですか?つまりダイヤさんにとって、あの名前は特別なものだったんでしょう?」

「うぐっ……」

どうやら凶星らしい。まあ本人が話したくなさそうだし、これ以上は深く聞かない方が良さそう。

「ちなみに、読みは『アクア』で合ってますか?」

「・・・ええ、そうです」

頷くダイヤさん。

「水を意味する『Aqua』と、複数形の所有代名詞『ours』を合わせた造語ですわ」

「それで『Aqours』ですか・・・」

『ours（私達のもの）』ということは、ダイヤさん以外にもこの名前を考えた人があるってことなのかな・・・？

「・・・まあいずれにせよ、良い名前をいただきました。ありがとうございます」

「あの、天さん・・・このことは、高海さん達には・・・」

「分かってます。内緒にすれば良いんですよ？」

言うつもりが無かったからこそ、ダイヤさんはこっそり落書きをするという方法をとったんだろう。ダイヤさんがそれを望むなら、わざわざ暴露したりするつもりは無い。

「それにしても・・・ダイヤさんのおかげで、グループ名が『制服少女隊』や『スリーマーマイド』にならずに済みましたよ」

「・・・どんなネーミングセンスしてますの？」

呆れているダイヤさんなのだった。

\*\*\*\*\*

「あら天くん、いらっしやい」

「こんにちは、善恵さん」

生徒会の仕事を終えた俺は、津島さんの家へとやってきていた。目的は勿論、先週分のノートやプリントを届けることである。

花丸やルビィちゃんも来たがっていたが、前回のこともあるので今回は俺一人であることにしたのだ。

「来てくれてありがとう。本当に助かるわ」

「いえいえ、大したことじゃないですから」

これで津島さんが授業に遅れずに済むなら、お安い御用である。俺もノートをまとめた甲斐があるというものだ。

「それじゃあ私は買い物に行くてくるから、留守番よろしくね」

「了解です。荷物持ちは大丈夫ですか？」

「フフツ、そんなに買う物は多くないから大丈夫よ。それじゃ、行ってくるわね」  
「行つてらっしゃーい」

善恵さんを見送り、俺は津島家へと足を踏み入れる。さて・・・

「善恵さんが帰ってくるまで、テレビでも見てようかな」

「待たんかいいいいいいいいいっ！」

テレビをつけてソファに座った瞬間、津島さんが勢いよく自分の部屋から出てきた。

「あ、津島さん。こんにちは」

「あ、こんにちは・・・じゃないわよ!?!あと、私のことはヨハネって呼びなさい!」

「津島さん、もしくは善子ちゃんじゃダメなの?」

「ダメに決まつてるでしょ!?!私は墮天使ヨハネよ!?!」

「じゃあよっちゃんで」

「人の話聞いてた!?!」

ツツコミを入れまくるよっちゃん。キレの良いツツコミだなあ・・・

「つていうかアンタ、人の家で何してんのよ!?!」

「ソファに座つてテレビ見てる」

「おかしいわよねえ!?!ここアンタの家じゃないわよねえ!?!」

「よっちゃん・・・遂に自分の家さえ分からなくなつたんだね・・・」

「腹立つ！コイツ腹立つ！」

「コラコラ、地団駄を踏まないの。下の部屋の人に迷惑だよ？」

「誰のせいだと思ってるのよ!?!」

ムキーツと怒っているよっちゃん。やれやれ・・・

「実は今日、津島家で夕飯をご馳走になる予定なんだよね」

「ハアツ!?何で!?!」

「昨日善恵さんとラインしてたら、夕飯のお誘いを受けたんだよ」

「ちよっと待って!?!アンタいつから人の母親を名前で呼ぶようになったの!?!いつライ  
ンの交換とかしたの!?!」

「実は・・・かくかくしかじか」

「なるほど、そんなことが・・・って分かるかっ!それが通じるのはアニメやマンガの  
世界だけだわっ!」

「おお、ダイヤさんと同じツツコミ」

「ダイヤさんっていうのが誰かは知らないけど、私は今その人に果てしない同情の気  
持ちを抱いたわっ!」

ツツコミすぎて息切れしているよっちゃん。大変だなあ・・・

「まあとりあえず説明しとくと・・・この前俺達がここに来た日の夜、俺のところ善

恵さんから電話がかかってきたんだよ。『せっかく来てくれたのにごめんなさい』って」  
「うぐつ・・・」

バツの悪そうなよっちゃん。少しは申し訳ないと思っっているらしい。

「な、何でアンタの電話番号が分かって・・・」

「ほら、クラスの連絡網ってあるじゃん？あの紙を見て俺に電話してきたみたい」

「・・・あつたわね、そんなの」

忘れていた様子のよっちゃん。連絡網は入学初日に配布された為、初日しか学校に来ていないよっちゃんでもしつかり貰っていたようだ。

「それで電話で話しているうちに、よっちゃんのこと色々相談を受けたんだよ。部屋で怪しげなことをやってるっぽいとか、気になって覗こうとするんだけど全然部屋に入れてくれないとか・・・」

「人のクラスメイトに何てこと相談してんのあの人!？」

顔を真っ赤にして、両手で顔を覆うよっちゃん。自分のことを墮天使とか言っちゃう割に、そういうことを知られるのは恥ずかしいようだ。

「そして何だかんだ馬が合った俺と善恵さんは、お互いのラインのIDを教え合ったのだった・・・続く」

「今すぐ話しなさいっ!」

「いや、後は特に無いんだよね。昨日ラインで『明日お邪魔しまゆゆ』って送ったら、『せっかくだし夕飯をご馳走しまゆゆ』って返ってきて今に至りまゆゆ」

「語尾が気になって話が入ってこない！」

「よっちゃん、人の話はちゃんと聞こうよ」

「やっぱコイツ腹立つわ！」

疲れ切ってしまったのか、壁にもたれかかるよっちゃん。仕方ないので、座る位置をずらしてソファのスペースを空けてあげる。

「ほらよっちゃん、座りなよ。何か飲む？」

「・・・冷蔵庫に麦茶が入ってるからよろしく」

「あいよー」

もうツツコミを入れる気力も無いらしく、力なくソファに座るよっちゃん。俺は冷蔵庫から麦茶を取り出し、適当なコップに注いでよっちゃんに差し出した。

「へいお待ち」

「・・・どうも」

コップを受け取り、一気に麦茶を飲み干すよっちゃん。良い飲みっぷりである。

「ぶはあつ・・・ああ、生き返る・・・」

「全く・・・体力無いのに全力でツツコミ入れるからだよ」

「誰のせいよ!？」

「あ、気力が戻ったね」

俺はそこで今日の目的を思い出し、鞆の中からクリアファイルを取り出した。

「はいこれ。先週分の授業のノートとプリントが入ってるから」

「あ、うん……」

何とも言えない表情で受け取るよっちゃん。

「……ねえ、何でここまでしてくれるの?」

「あれ?迷惑だった?」

「いや、凄く助かるけどさ……」

複雑そうに俺を見るよっちゃん。

「前回もらったノート、本当に分かりやすくまとめられてた。あれって、黒板に書かれたことをただ写したものじゃないでしょ?その後でアンタが、私にも分かりやすいように色々手を加えてくれたのよね?」

「色々ってほどじゃないよ。要点が分かりやすいようにまとめただけだし」

「それでも、わざわざそこまでしてくれた。どうしてただのクラスメイトの為に、そこまでしてくれるの?」

憂いを帯びたその表情に、俺は彼女の本質を見た気がした。

自分のことを墮天使だと名乗るその豪胆さとは裏腹に、本当の彼女はとても臆病なんだと思う。誰よりも人の目を気にするし、人に対してなかなか心を開くことが出来ない。

恐らくその理由は、自分に自信が無いから。今の質問には、『私にそこまでする価値があるの?』という意味合いもあるのだろう。

まあ、俺の答えは決まってるけど。

「・・・花丸が、いつもよっちゃん心配をしてるんだよ」

「え・・・?」

『せっかく同じ学校になったのに』とか、『このまま学校に来なかつたらどうしよう』とか・・・よっちゃんのこと、凄く気にかけてるんだよ」

花丸は本当に心の優しい子だ。そんな俺の大切な友達に、寂しそうな顔をしてほしくない。

だから俺は、よっちゃんを放っておけない。

「つまり、花丸の為ってこと・・・?」

「それが大きな理由かな。まあ個人的に、よっちゃんには借りもあるから」

「借り・・・?」

首を傾げるよっちゃん。どうやら心当たりが無いようだ。

「入学式の日、教室で自己紹介やったでしょ？」

「ああああああああああっ!? 思い出させないでええええええええええっ!?」

「ていつ」

「あうっ!?」

やかましかつたので、よっちゃんの頭にチョップをお見舞いして黙らせる。

まあよっちゃんの黒歴史確定自己紹介のことは置いといて・・・

「俺が自己紹介した後、花丸やルビィちゃんとすぐに拍手してくれたじゃん。俺、あれに救われたんだよね」

「いや、そんな大げさな・・・」

「拍手してもらえない辛さは、よっちゃんが一番分かっているだろうに」

「だからそれを思い出させないでよおおおおおおおっ!?」

頭を抱えるよっちゃん。どんだけ引きずってんだこの子・・・

「女子校の中で唯一の男子っていうこともあって、周りの皆は凄く注目してくるわけだよ。その好奇の視線を向けられる中で、一番最初に自己紹介だからね。ものすごく緊張したし・・・皆が受け入れてくれるか、不安で仕方なかったよ」

それでも、最初に花丸が拍手してくれて。ルビィちゃんによっちゃんも続いてくれて。

あの時は本当に、凄く救われた気持ちになった。

「だからあの時のことは、本当に感謝してる・・・ありがとう、よっちゃん」

「・・・べ、別に大したことはしてないわよ」

素っ気無くそう言うよっちゃんだが、顔が赤くなっている。素直じゃないんだから・・・。

「そんなわけで、よっちゃんには大きな借りがあるんだよ。それを少しでも返せたらっていうのも、理由としてはあるかな」

「ま、まあそういうことなら・・・しょうがないから受け取ってあげるわ」

「じゃあその対価として、来る度に夕飯をご馳走になるね」

「借りを返す話はどこへいったのよ!？」

「TS●TAYAで借りたCDを返す話?」

「言っていないわよ!？」

全力ツツコミのせいで、またしてもよっちゃんが力尽きそうになっていた。仕方ないからこの辺にしておこう。

「まあとりあえず、心の準備が出来たらまた学校に来てよ。花丸とかルビィちゃんは勿論、クラスの皆とか赤城先生も心配してるから」

「・・・本当に?あの時のことを笑ったり、ドン引きしたりしてない?」

「してないよ。むしろ『何で来なくなっちゃったのかな』とか、『仲良くなりたいたいね』って言ってるぐらいだし」

実際、ウチのクラスは本当に良い人ばかりだ。俺も今では仲良くさせてもらってるし。

「よっちゃんの心の準備が出来るまでは、俺が責任を持ってノートとかプリントを届けに来るから。いつ復帰しても授業についていけるように、ちゃんと勉強はしといてね」

「・・・うん。分かった」

小さく頷くよっちゃん。名前通り、やっぱり善い子だな・・・

「ヨハネよっ!」

「人の心を読むの止めてくんない?」

「どんだけ墮天使ヨハネに拘るんだ・・・」

「・・・まあでも、『よっちゃん』呼びは許してあげる」

「え・・・?」

よっちゃんが頬を赤らめ、髪の毛先をクルクルいじっている。

「あ、あくまでも『ヨハネ』の『よっちゃん』だからね!? 『善子』の『よっちゃん』は認めないからね!」

「両方とも『よっちゃん』だし、どっちでも良いんじゃない？」

「良いのっ！そこは譲れないからねっ！」

よく分からない拘りだけど．．．まあ本人がそう言うんだから良いか。

「了解。俺のことも天で良いからね」

「フツ．．．では天、貴方を私のリトルデーモンに．．．」

「あ、結構です」

「何でよ!？」

そんなやり取りをしている間に、窓の外はすっかり薄暗くなっていた。

千歌さん達、チラシ配り終わったかなあ．．．あつ。

「よっちゃん、スクールアイドルって知ってる？」

「何よ突然．．．まあ知ってるけど」

「実は浦の星でも、スクールアイドルをやるうっていう人達がいてさ。一応俺がマネージャーをやってるんだけど、今度ライブをやるんだよね」

靴の中からチラシを取り出して、よっちゃんに手渡す。

「へえ．．．天がマネージャーやってるのね」

「色々あつたんだよ．．．本当に色々．．．」

「．．．アンタも苦労してるのね」

同情してくれるよっちゃん。優しいなあ・・・

「ま、気が向いたら行つてあげるわ。本当に気が向いたらね」

「よっちゃん・・・マジ善子だわ」

「だからヨハネよっ!？」

よっちゃんが墮天使ではなく、正真正銘の天使に見える俺なのだった。

好きなことは全力でやるべきである。

「・・・言い残したい言葉はありますか？」

「すいませんでしたあああああああああつ！」

全力で土下座している千歌さん。津島家で夕飯をご馳走になった翌日の放課後、俺は千歌さんの家にお邪魔していた。

ライブで披露する曲の作詞を、千歌さんが担当することになっていたのだが・・・

「作詞ノートって書いてありますけど、完全に白紙じゃないですか。何ですかこれ。千歌さんの頭の中と一緒じゃないですか」

「人の頭が空っぽみたいに言わないでくれる!？」

「ああん・・・?」

「返す言葉もございません!」

冷たい目を向けると、千歌さんが再び額を床に擦り付ける。その様子を見て、曜さんと梨子さんが引いていた。

「ま、まあまあ天くん!ここは落ち着こう!ねっ!？」

「そ、そうよ!まだ何とか間に合うわ!」

「・・・ハア」

二人に宥められ、溜め息をつく俺。まあ確かに、千歌さんを責めてる場合じゃないか・・・

「とにかく作詞を終わらせましょう。千歌さん、イメージとかありますか？」

「μ、sのスノハレ！」

「却下です」

「ええっ!？」

ショックを受けている千歌さん。この人はホント・・・

「スクールアイドルを始めたばかりで、スノハレみたいな曲を目指するのはハードルが高過ぎます。μ、sの楽曲で一、二を争うほどの名曲を舐めないで下さい」

「うっ、確かに・・・」

「まあ、恋愛に関する曲を作るのは構いませんけど・・・それこそ、千歌さんの経験を基にして作詞すれば良いんじゃないですか？」

「フツフツフツ・・・自慢じゃないけど、私の恋愛経験はゼロだよ！」

「ライフもゼロにしてあげましょうか？」

「遠回しの殺害予告止めて!？」

ダメだこの人、完全にポンコツだわ・・・

「曜さんとか梨子さんなら、恋愛経験ありそうですね」

「私？無い無い！」

「私も無いわね」

「・・・マジですか」

これはテーマを恋愛じゃないものにすべきかもしれない。それにしても・・・

「梨子さんに恋愛経験が無いのは意外ですね・・・」

「え、そう？」

「だって梨子さん美人だし、絶対モテるでしょう」

「なっ!？」

赤面する梨子さん。

「そ、そういうことを真顔で言わないでっ！」

「だって本心ですし。クラスに居たら、間違いなく男子達の注目の的でしょう。実際

モテたんじゃありませんか？」

「そ、そんなこと言われても・・・本当にモテなかったわよ？ずっとピアノ一筋でやつ

てきたから、恋愛にうつつを抜かしてる余裕も無かったし」

「告白とかされなかつたんですか？」

「全然。中学までは共学の学校に通ってたけど、男子達にとって私は気軽に話せる友

達って感じだったのかも。よく『付き合って下さい』って買い物に誘われたし」

「・・・梨子さんって罪深い人ですね」

「何で!？」

千歌さんと曜さんも、何とも言えない表情で梨子さんを見ている。

その『付き合って下さい』は、どう考えても告白だろうな・・・『買い物に付き合って下さい』なわけが無い。

「ちなみに、買い物には付き合ってたんですか？」

「申し訳なかったんだけど、全部断ってたわ。ピアノのレッスンで忙しかったから」

「うわぁ・・・」

「そ、そんな露骨に引かなくても良いじゃない! 私だって、友達からの買い物のお誘いを断るのは申し訳なかったわよ!」

「いや、何と言うか・・・大丈夫です。梨子さんは知らない方が良いと思います」

「え?」

首を傾げる梨子さん。

梨子さんに想いが届くことなく撃沈していった男子達の人生に、どうか幸多からんことを・・・

「つていうか、曜さんも意外ですよ。モテそうなのに」

「おっ、私のことも可愛いって言ってくれるの?」

「当然じゃないですか。誰がどう見たって美少女でしょう」

「つ・・・あ、ありがと・・・」

頬を赤く染め、照れ臭そうに笑う曜さん。梨子さんと同じで、真正面から褒められることに弱いらしい。

「でも残念ながら、梨子ちゃんと違って本当にそういう経験無いんだよね」

「いや、だから私も無いんだってば」

「被告人は静粛に」

「誰が被告人よ!?!」

抗議してくる梨子さんは無視して、俺は曜さんと会話を続けた。

「じゃ逆に、好きな人とかいなかったんですか?」

「んー、そもそも恋したことが無いんだよね。私も小さい頃から水泳一筋だったし」

「なるほど・・・」

「ねえねえ天くん、私は? 私は可愛い?」

「はいはい、可愛い可愛い」

「何で子供をあやすみたいなの!?」

膨れっ面の千歌さん。

まあ実際、千歌さんもかなりの美少女だと思う。あまりにもフランク過ぎて、俺もこんなノリで接してしまっているけども。

「でも、三人とも恋愛経験ゼロとなると・・・やっぱり、別のテーマで曲を作った方が良いかも知れませんか」

「えー・・・あつ、じゃあμ sのメンバーは恋をしたのかな？」

「どうしたんですか急に」

「いや、だってスノハレみたいな曲を作れたんでしょ？それってつまり、μ sの誰かが恋をしてたってことじゃないの？」

目が爛々と輝いている千歌さん。本当にμ sが好きなんだな・・・

「・・・スノハレって、μ sが全員で作詞した曲らしいですよ」

「え、そうなの？」

「ええ。μ sのメンバーが、色々なものに対する『大好き』という気持ちを込めた一曲・・・それが『Snow halation』です」

『『大好き』という気持ち・・・』

「それをテーマにするのも良いんじゃないですか？例えば・・・スクールアイドルが大好きっていう気持ちとか」

「それだ！」

勢いよく立ち上がる千歌さん。

「それ良い！ 私達の最初の曲にピッタリなテーマだよ！」

「千歌ちゃん、歌詞書けそう？」

「うん！ これなら書ける気がする！」

千歌さんはペンを持つと、白紙のノートに勢いよく文字を書き始めた。書けば書くほど、どんどんのめり込んでいくのが分かる。

「・・・凄い集中力ですね」

「千歌ちゃんはやれば出来る子なんだよ」

笑みを浮かべる曜さん。やれば出来る子、か・・・

「・・・ホント、そっくりだな」

「そっくり？」

「いえ、何でもありません」

適当に曜さんを誤魔化し、千歌さんの姿を眺める。

「これほどスクールアイドルが大好きな人が、スクールアイドルを続けられなくなるなんて・・・そんなのおかしいですよね」

「天くん・・・」

「会場、絶対満員にしましょうね。小原理事長に、スクールアイドル部の設立を認めさ



「はいはい、お疲れ様です」

「むう・・・反応が冷たい」

「毎回ハグされ続けたら、そりや慣れますって」

不満そうな果南さんに、苦笑しながら返す俺。まあ俺の目の前で、平気でダイビングスーツを脱ぐことに關しては未だに慣れないけども。

下に水着を着ているとはいえ、惜しげもなくナイスバディをさらけ出されると・・・正直、目のやり場に困ってしまう。

「やっぱり土日は、お客さんの数が多いんですね」

「そうなんだよ。私だけじゃ手が回りきらないだろうから・・・ホント、天が手伝ってくれて助かってるよ」

笑顔でそう言ってくれる果南さん。

実は梨子さん達と海の音を聴きに行った日、果南さんからアルバイトの誘いを受けていたのだ。これから土日に来るお客さんの数が増えるので、手伝ってくれる人を探していたんだとか。

その誘いを受けた俺は翌週から、果南さんの実家が営むダイビングショップで土日だけアルバイトをするようになったのだった。

「アルバイト経験の無い素人で、ホントに大丈夫なんですか？」

「大丈夫だって。っていうか、ホントにアルバイト経験無いの？接客とか上手いし、初めてとは思えないんだけど」

「コミュニケーション能力には自信あるんで」

「アハハ、なるほどね」

果南さんは面白そうに笑うと、近くのウッドチェアに腰を下ろした。

「そういえば、千歌達のライブって来週の日曜日でしょ？準備は大丈夫なの？」

「ええ。何とかなりそうです」

あの後千歌さんはすぐに歌詞を書き終えたし、それを基に梨子さんもすぐに曲を作ってくれた。振り付けもこの土日三人で考えと言っていたので、後は明日からその振り付けを基に練習するのみだ。

ちなみに衣装は曜さんが制作を進めており、もう間もなく完成することだった。

「明日からの一週間は、ちよつとハードになりそうですけどね。俺も裏方としての仕事を進めていかない」と

「裏方としての仕事？」

「主に会場の設営ですね。スポットライトの位置とか、音響のチェックとかもしないといけませんし。まあそれに関しては手伝ってくれる人もいるので、心配無いですけど」

ちなみに手伝ってくれる人というのは、千歌さん達と同じクラスのよしみさん・いつきさん・むつさんの三人である。通称・よいつむトリオの三人は千歌さん達の良き理解者であり、今回のライブでの手伝いを申し出てくれたのだ。

ライブの宣伝の為にビラ配りもしてくれていて、正直かなり助かっていたりする。

「後は練習の監督ぐらいですね。ライブ前なので追い込みをかけたいところなんですけど、無理して本番に響いたら元も子もありませんから。その辺りはこっちでちゃんと調整して、練習メニューを組もうと思います」

「へえ……しつかりマネージャーやってるんだね」

感心している果南さん。

「千歌達は運が良いね。こんなしつかりサポートしてくれるマネージャーがいてさ」

「……まあマネージャーをやることになったキツカケは、あまり褒められたものじゃないですけどね」

「……鞠莉か」

顔を顰める果南さん。

俺も話を聞いて驚いたのだが、ダイヤさん・果南さん・小原理事長は小学生の時から付き合いらしい。ダイヤさんと果南さんが通っていた小学校に、小原理事長が転入してきたんだそうだ。

つまり俺が幼かった頃の小原家の引越先は、内浦だったということになる。

「ホント・・・相変わらず自分勝手なんだから」

果南さんもダイヤさんから事情を聞いたらしく、俺のことを凄く心配してくれた。

おまけに俺があの子の状況を話すと、『これから一緒に殴りに行こうか』とチャゲアスの名曲みたいなセリフを本気で言い出すほど怒っていた。まあ何とか思い留まらせたけども。

「まあとにかく、ライブに向けて頑張らないといけませんね・・・そんなわけで果南さんには申し訳ないんですけど、来週の日曜日はお休みをいただきます」

「了解。忙しいようなら、土曜日でも休みで大丈夫だよ？来週の日曜日は天気が良くなっているという予報が出てくるせいかな、今のところお客さんの予約も多くないし」

「いえ、大丈夫です。マネージャーの仕事に力を入れ過ぎて、生徒会の仕事やアルバイトを疎かにしたくないので」

「天は真面目だねえ・・・ダイヤに影響されてるんじゃない？」

「ハハッ、そうかもしれないけどね」

思わず笑ってしまう俺。

実際、ダイヤさんはとても真面目な人だ。生徒会長として責任を持って仕事をしているし、俺も見習わないといけない点がたくさんある。

「ただ・・・ダイヤさんにはもう少し、肩の力を抜いてほしいんですけどね。ちよつと頑ななところがあるので」

「ダイヤは昔からあんな感じだからね。黒澤家の名に恥じないようにつて、肩肘張つて生きてるところがあるから」

「なるほど・・・俺の知り合いにも名家の娘がいますけど、確かにそういつたところはありましたね」

「へえ、知り合いにそんな人がいるんだ？」

「ええ、まあ」

せつかくだし、今度電話して話を聞いてみようかな。似たような立場だからこそ、分かることがあるかもしれないし。

「そういえばダイヤさんつて、*M* sのファンなのに何で『スクールアイドル部は認めない』なんて言ってるんだらう・・・」

ふと疑問を口にする俺。これはよいつむトリオの三人から聞いた話だが、これまでに『スクールアイドルをやりたい』という生徒が少なからずいたらしい。

ところがダイヤさんはそれを認めず、スクールアイドル関連の部活の設立を全て拒否してきたんだそうだ。一体何故なのか・・・

と、果南さんが何やら思いつめたような表情をしていた。

「果南さん?どうかしました?」

「ううん、何でもないよ」

すぐに笑みを浮かべる果南さんだったが、どこか笑顔がぎこちなかった。ダイヤさんについて、思い当たる節でもあるんだろうか・・・

「さて、さっさと片付けちゃおうか。今日もウチで夕飯食べていきなよ。お母さんが天の為に、腕によりをかけて美味しいもの作って待ってるってさ」

「ありがたくご馳走になります」

果南さんの表情が気になったものの、深くは聞けない俺なのだった。

一人じゃないというのは心強いものである。

ライブ当日。

雲ひとつない青空が広がり、まさに絶好のライブ日和……

「天くん、現実を見よう？ 凄い雨降ってるから。雲ひとつない青空じゃなくて、雨雲しかない灰色の空が広がってるから」

「人の心を読むの止めて下さい」

紫髪の女の子……いつきさんのツツコミに、俺は大きな溜め息をついた。

確かに予報では、週末の天気は良くないと言ってはいたが……ここまで酷いとは思わなかった。

「いつきさん、ちよつと『雨止めえええええっ！』って叫んでもらって良いですか？」

「いや、それで止むとは思えないんだけど……」

「物は試しです。三、二、一……はいっ！」

「あ、雨止めええ！」

「声が小さい！もう一度！」

「雨止めーっ！」

「もつと！もつと熱くなれよ！」

「雨止えええええつ！」

「・・・まあ、止むわけないですよね」

「急に冷静にならないでくれる!?もの凄く恥ずかしいんだけど!」

両手で顔を覆って恥ずかしがるいつきさん。やはりミラクルは起こせなかったようだ。

「おーい、天くーん」

茶髪をサイドテールにくくった女子・・・よしみさんがこちらへ歩いてくる。

「照明と音響の準備は完了・・・って、何でいつきは耳まで真っ赤になってるの?」

「そつとしておいてあげて下さい。羞恥心に悶えてるところなんです」

「誰のせいだと思ってるの!」

いつきさんの抗議はスルーして、俺はよしみさんへと視線を向けた。

「ありがとうございます。千歌さん達の様子はどうですか?」

「今は振り付けのチェックをしてるけど・・・やっぱり緊張してるみたい。いつもより

表情が硬いもん」

「初ライブだもんね・・・大丈夫かな、千歌達・・・」

心配そうなよしみさんといつきさん。ここはマネージャーの出番かな・・・

「・・・さて、いきますか」

\*\*\*\*\*

### 《梨子視点》

「本当にこんなに短くて大丈夫なの・・・？」

本番用の衣装に身を包んだ私は、鏡の前で顔を引き攣らせていた。

ピンク色の可愛らしい衣装ではあるんだけど、スカートが短い。いつもより太ももが露わになっていて、凄く恥ずかしい。

「大丈夫！ステージに出ちゃえば忘れるよ！」

水色の衣装に身を包んだ曜ちゃんが、そう言っただけでニッコリ笑う。

いや、忘れちゃいけないと思う。晒しちゃいけないものを晒しちゃうもの。

「大丈夫だよ、梨子ちゃん。もう天くんには見られてるじゃん」

「そういう問題じゃないわよねえ!!? っていうか思い出させないで!!?」

オレンジ色・・・もといみかん色の衣装に身を包んだ千歌ちゃんの言葉に、火が出そ

うなくらい顔が熱くなる。

あの時のことを思い出しただけで、とてつもなく恥ずかしいわ・・・

「つていうか、あれは千歌ちゃんのせいでしょ!?!天くんの目の前でスカート捲ったりするから!」

「アハハ、ゴメンゴメン」

苦笑しながら謝る千歌ちゃんに、思わず溜め息をついてしまう。全くもう・・・

「あ、そろそろ時間だね」

曜ちゃんが時計を見て呟く。

その瞬間、空気が張り詰めたような気がした。これからステージに立って、歌って踊る・・・そう考えるだけで緊張してしまった。

そして何より、お客さんは来てくれていいのか・・・もし満員に出来なければ、その時はA q o u r sを解散しなくてはいけない決まりになっている。

「・・・嫌だよね」

消え入りそうな声で呟く千歌ちゃん。

「初めてのライブで解散なんて・・・そんなの嫌だよね」

「千歌ちゃん・・・」

心配そうな表情の曜ちゃん。

スクールアイドルを始めて間もないけれど、私にとってA q o u r s は大切な場所になりつつあった。

失いたくない、解散なんてしたくない・・・そう思えば思うほど、ステージに立つ勇気が無くなっていくのを感じた。

「・・・怖いね」

「・・・うん」

足が震えている。こんな状態で、良いパフォーマンスなんて出来るわけ・・・

『できる〜！できる〜！キミならできる〜！』

「!?!」

急に音楽が聴こえてきた。何この曲・・・

『僕は〜本気だ！キミは本気か!?!』

私達が呆気にとられていると、天くんがスマホを手に持って現れた。え、まさか・・・

『できるく！できるく！キミなら・・・』

「ピツ・・・あ、もしもし？よつちゃん？」

「着信音だったのそれ!？」

思わずツツコミを入れてしまう。

今思い出したけど、それ松●修造さんの曲じゃない！元氣応援SONGじゃない！

「え、来てくれたの？よつちゃんマジ善子だわあ・・・ああ、はいはい。もうそろそろ始まるから、急いで体育館に来てね・・・うん、じゃあまた後で」

天くんは通話を終えると、私達の方へと視線を向けた。

「あ、お疲れ様です。準備できました？」

「何か色々吹っ飛んじやったんだけど!？あれ、私達どんな曲歌うんだっけ!？」

「落ち着いて千歌ちゃん!？えーっと、確か・・・『できるく！できるく！キミならできるく！』」

「いやそれ違う曲だから！曜ちゃんこそ落ち着いてよ!？」

色々パニックになっている二人。とりあえず、私が落ち着かないと・・・

「お、梨子さん衣装似合ってますね。やっぱり梨子さんは桜色・・・もといピンク色ですよね。苗字が桜内だけに」

「あああああああああつ!!」

何であの時と同じようなセリフを言うの?! 思い出しちゃうでしょうがあああああつ!!?

「ああつ!! 梨子ちゃんが耳まで真っ赤になってる!」

「落ち着いて梨子ちゃん!! 『できる〜! できる〜! キミならできる〜!』」

「その曲はもういいから!」

本番前とは思えないほどの騒ぎっぷりだった。そんな私達の様子を見て、天くんが溜め息をつく。

「やれやれ・・・これじゃ本番が思いやられますね」

「天くんのせいでしょうが!」

三人同時にツッコミを入れる。全くもう・・・

「・・・まあ、緊張してるよりよっぽど良いですけどね」

天くんが苦笑しながら言う。あれ、そういえば私達・・・

「何か・・・緊張が消えてる?」

「確かに・・・」

ポカンとしている千歌ちゃんと曜ちゃん。

気付いたら私も足の震えが止まっていた。さつきまで不安に押し潰されそうだった

のに……

一方、天くんは私達の着ている衣装をしげしげと眺めていた。

「やっぱり衣装のクオリティ高いですね……流星は曜さん」

「えへへ……そうかな？」

「ええ、メツチャ良いですよこれ。しかも三人とも、本当によく似合ってます」

笑顔でそう言ってくれる天くん。何だか照れくさいけど、ちよつと嬉しい。

「おーい！千歌ー！曜ー！梨子ー！」

私達の名前を呼びながらやってきたのは、明るめの茶髪に白いカチューシャを付けた女の子……クラスメイトのむつちゃんだった。

「そろそろ時間だからスタンバイ……って、天もいたんだ？」

「今来たところです。むつさんは準備オツケーですか？」

「バッチリだよ！照明は私とよしみに任せな！」

ドンと胸を叩くむつちゃん。と、その後ろからよしみちゃんといつきちゃんも現れた。

「そうそう、大船に乗ったつもりでいてよ！」

「音響は私に任せてね！」

「いつきさん、そう言いながらさつきみたいに叫ばないで下さいね？」

「叫ばないよ!? っていうか、あれは天くんがやらせたんだからね!」

「ちよつと何言ってるか分からないです」

「何で!?!」

天くんといつきちゃんのやり取りに、むつちちゃんとよしみちゃんが爆笑していた。それにつられて、私達も思わず笑ってしまう。

「じゃあ三人とも、頑張れ!」

「私達がサポートするから!」

「天くん、指示よろしくね!」

「了解です。よろしくお願いします」

三人が笑顔で手を振って出て行く。頑張れ、か……

「……頑張ろう」

笑みを浮かべ、両手を握り締める千歌ちゃん。

「応援してくれる人がいるんだもん。全力で頑張らなきゃ!」

その言葉に、曜ちゃんと私も笑みを浮かべる。今まさに、私達の心は一つだった。

「それじゃ、円陣組もう! 天くんも!」

「いや、俺マネージャーなんですけど……」

「ほらほら、早く!」

曜ちゃんが天くんの腕を引つ張り、曜ちゃんと私の間に立たせた。時計回りに千歌ちゃん、曜ちゃん、天くん、私の並びで円陣を組む。

「えーっと、手を重ねるんだっけ？」

「普通はそうですけど・・・ちよつと変えましょうか」

「変える？」

天くんの言葉に首を傾げていると、天くんが曜ちゃんと私の手を優しく握った。

「そ、天くん!？」

「どうしたの!？」

「・・・手を繋ぐと、お互いの温もりを感じられるじゃないですか」

微笑む天くん。

「お互いの温もりを感じられたら、一人じゃないって思えます。一人じゃないって思えたら・・・少しは安心できるでしょ？」

「天くん・・・」

「どうやら、私達が不安がっていたのを分かっていたみたいね・・・」

ホント、天くんには敵わないわ・・・

「・・・ナイスアイデアだよ、天くん」

千歌ちゃんも微笑みながら、曜ちゃんと私の手を握る。私達はお互いの手を握り合

い、笑みを浮かべた。

「さあ、行こう！今全力で、輝こう！」

千歌ちゃんが声を張り上げる。私達は、この日の為に決めた掛け声を叫ぶのだった。

「「A q o u r s ! サ ン シ ャ イ ン !」」

手を差し伸べてくれる人は必ずいる。

「・・・想定以上に厳しいな」

ステージ裏から観客席側へとやってきた俺は、その光景を見て思わず渋い表情になる。

観客は満員どころか、数えられるほどの人数しかいなかった。花丸やルビィちゃん、よっちゃんに来てくれているが・・・

っていうか、よっちゃん変装下手すぎじゃない？サングラスにマスクとか、バリバリの不審者だからメツチャ目立ってるんだけど。

「満員には出来なかったみたいね」

背後から声がする。俺が今一番会いたくない人の声だった。

「・・・冷やかしに来たのなら帰って下さい」

「違うわよ。見届けに来ただけ」

俺の隣に立つ小原理事長。

「スクールアイドルを始めたばかりで、このハードルは高過ぎたかしら・・・」

「それを分かった上で、貴女はこの条件を出したんでしょう？後悔したいなら別の場

所でお願いします。貴女に付き合ってもらえるほど暇ではないので」

「・・・本格的に嫌われちゃったわね」

「自業自得です」

俺が吐き捨てるように言うと、小原理事長は寂しそうに笑った。

そんな顔をされたところで、俺はこの人から受けた仕打ちを許すつもりなど無い。

「・・・もう良いのよ、天。あの子達は体育館を満員にすることが出来なかった。スクールアイドル部は設立されないし、あの子達は解散することになる。もうマネージャーなんてやらなくて良いの」

「・・・つくづく見下げ果てた人ですね」

俺を脅してマネージャーをやらせたくせに、今度はマネージャーなんてやらなくて良いだなんて・・・

俺は今、この人を心底軽蔑していた。

「何もう『終わった』みたいな顔してるんですか？ライブはこれからなんですけど？」  
「勿論、ライブはやってもらって構わないわ。ただ満員にならなかつた以上、あの子達の解散は決定した・・・これ以上、天が望まない仕事をする必要は無いの」

「その望まない仕事を押し付けたのは、一体どこの誰でしたかね？まるで他人事みたいな言い方ですけど、自分のやったことを忘れたんですか？高校の理事長として、頭の

中がお花畑なのはいかげななものかと思えますが？」

容赦の無い言葉を浴び、俯いてしまう小原理事長。自分がやったことの重さを、これで少しは認識してもらえらるだろう。

「小原理事長、貴女はこう言いました。『ここを満員に出来たら、人数に関わらず部として承認してあげる』と」

「……ええ、言ったわね」

「ですが……『ライブ開始時点』とは言いませんでした」

「え……？」

ポカンとしている小原理事長。

「それってどういう……」

「要するに」

俺は小原理事長の言葉を遮った。

「このライブでここを満員に出来たら良いんでしょう？それならタイムリミットは、『ライブ開始時点』じゃなくて……『ライブ終了時点』じゃないですか」

「っ……！」

「つまりライブが終わるまでに、ここを満員にすることが出来れば……条件はクリアしたことになります。確かに今は満員ではありませんが、これからお客さんが来る可能

性だっておりますから」

「天、貴方……」

驚いている小原理事長。俺は小原理事長に冷たい視線を向けた。

「ライブはこれからだって言ったでしょう。勝手に終わらせないで下さい」

「で、でも……この悪天候の中、これから来る人なんて……」

「いないって決め付けるのは止めてもらえますか？それとも……可能性があるにも関わらず、貴女は約束を反故にするつもりなんですか？」

小原理事長を睨みつける俺。

「見届けに来たのなら、黙ってライブを見てろ。あの三人がどれほど頑張ってきたか、その目でしっかりと確認しとけ」

それだけ言うと、小原理事長からステージへと視線を移す。

そしてインカムを通じて、よいつむトリオの三人に合図を出すのだった。

「さて……始めましょうか」

『『了解！』』』

\*\*\*\*\*

《千歌視点》

曜ちゃんや梨子ちゃんと手を繋ぎ、ステージに立っている私。

天くんの言う通り、二人の温もりのおかげで少し安心できていた。私は一人じゃないんだ……

「……来てくれてるかな？」

小さな声で呟く曜ちゃん。

「お客さん……来てくれてるかな？」

私達の前には幕が下りている為、観客席の様子を窺うことは出来ない。

幕の向こうにはお客さんがいるかもしれないし……いないかもしれない。

「……大丈夫だよ」

曜ちゃんの手を強く握る。

「天くんも言ってたでしょ？ 『ライブ開始時点で満員じゃなくても諦めるな。タイム

リミットはライブ終了時点だ』って」

確かに鞠莉さんは、そこまで詳しく指定していたわけじゃない。

でもまさか、そこを突くとは思わなかったなあ……

「・・・フツッ」

面白そうに笑う梨子ちゃん。

「ホント、抜け目が無いっていうか・・・案外ずる賢いのね、天くんって」

「確かにね」

私もつられて笑ってしまふ。頼りになるマネージャーだよ、ホントに・・・

「私達は、私達に出来る精一杯のパフォーマンスをしよう」

「ヨーソロー！」

「うん！」

気合いが入ったところで、ステージの幕が上がる。観客席の光景が目飛び込んだ。た。

「あ・・・」

小さな眩きが口から漏れる。残念ながら、お客さんは十人くらいしかいなかった。

これじゃあ、満員には程遠い・・・

「よっ、待ってました！」

大きな声が会場に響く。視線を向けると、天くんが大きく手を叩いて拍手してくれていた。

天くん・・・

「見て見て花丸ちゃん！衣装凄く可愛いよ！」

「キラキラしてるぞら〜！」

ルビイちゃんと花丸ちゃんも来てくれている。他のお客さんも浦の星の生徒で、皆笑顔で拍手してくれていた。

ただ一人だけ、サンングラスとマスクをした不審な女の子がいるけど・・・あの子もビラを見て来てくれたのかな。

「私達は、スクールアイドル・・・セーのっ！」

「「A q o u r s です！」」

三人で自己紹介をする。

ここにいる人達は、わざわざ私達のライブを見る為に足を運んでくれたんだ。だったら私達は、この人達に報いないといけない。

「私達は、その輝きと！」

「諦めない気持ちと！」

「信じる力に憧れ、スクールアイドルを始めました！」

今は下を向く時じゃない。前を向いてパフォーマンスをしなくちゃいけない。私達がこの人達に出来ることは、それくらいしかないんだから。

「目標は・・・スクールアイドル、μ s です！」

そして最後まで諦めない。ライブが終わるその瞬間まで、絶対に諦めない。

「聴いて下さい！『ディスクだったらダイジョーブ！』！」

私が作詞して、梨子ちゃんが作曲して、曜ちゃんが衣装を作った・・・私達の初めての曲、それが『ディスクだったらダイジョーブ！』だ。

あの日天くんから言われた、スクールアイドルが大好きだっていう気持ち・・・私はその気持ちを、この曲の歌詞に込めた。

この曲の歌詞は、今の私の気持ちそのものだ。

(楽しい・・・！)

私の心は、喜びで満ち溢れていた。

スクールアイドルとして、曜ちゃんや梨子ちゃんと一緒にステージで歌って踊っている・・・それが本当に嬉しいし、とても楽しい。

曜ちゃんと梨子ちゃんも笑顔だし、お客さんも楽しんでくれているのが分かる。いよいよサビに入り、盛り上がりが最高潮に達しようとしていたその時・・・

突如として音楽が途切れ、照明も消えた。

「えっ・・・？」

真つ暗になった会場で、私は呆然と立ち尽くしていた。

そんな・・・どうして・・・

「まさか……停電……?」

「そんな……こんな時に……」

曜ちちゃんと梨子ちゃんも困惑している。

(……やっぱ、私には無理なの?)

普通星人の私が、スクールアイドルになって輝くなんて無理だったのかな……身の丈に合わない願いだったのかな……

もう、諦めるしかないのかな……

『諦めてしまったら、叶えられる可能性すらない』

ふと頭の中に、天くんの言葉が浮かんだ。

海の音を聴きに行った時、μ、sの『START:DASH!!』の歌詞について話していた時の言葉だ。

『だから簡単に諦めるな。夢が叶う日が来る可能性は、諦めなかった人にしか無いんだから』

「つ……」

そうだ。諦めてる場合じゃない。最後まで諦めないって決めたんだ。

「……気持ちだが、つなながりりそうそうなんだ♪」

アカペラで歌う。曲が流れなくても、歌うことは出来る。

「……知らないことばかり、なにもかもかきかき♪」

「……それでも、きたいで、足が軽くいきよ♪」

曜ちゃんと梨子ちゃんも続いてくれる。これならまだ……

「温度差なくって、いつか消しちゃうつてね♪元気だよ……元気を出し

て……いく……よ……」

もう限界だった。涙がこみ上げてきて、歌うことが出来ない。悔しくて、情けなくて、やるせなくて……心が折れる寸前だった。

スクールアイドル部は設立することが出来ず、A q o u r s は解散……おまけに最初で最後のステージはこの有り様だ。こんなにあんまりだ。

もう、私には前を向くことなんて……

「スイッチオン！」

天くんの声が会場に響く。その瞬間、再びステージが照明で照らされた。

「……え?」

驚いていると、今度は会場のドアが勢いよく開かれた。

「バカ千歌あああああつ!アンタ開始時間を間違えたでしょ!」

「美渡姉!」

レインコートを着た美渡姉が、大勢の人を連れて会場に入ってきた。

何が起きているのか、訳が分からない私なのだった。

準備しておくに越したことはない。

「停電!？」

驚いている小原理事長。

曲の途中でいきなり発生した停電に、千歌さん達だけではなくお客さん達も困惑していた。

「まあ、この天気だもんなあ・・・」

俺は溜め息をつくくと、インカムを通じてよいつむトリオの三人に指示を出した。

「むつさんとよしみさん、一度照明のスイッチを切ってください。切ったらそのまま待機でお願いします」

『わ、分かった!』

『了解!』

「いつきさんも待機しててください。何とかしてきますんで」

『何とか出来るの!?!』

「元気があれば何でも出来ます」

『アント●才猪木じゃん!?!』

いつきさんのツツコミはスルーして、俺は出口へと足を向けた。

「天!?どこに行くつもり・・・キヤツ!?!」

足がもつれ、転倒する小原理事長。何してんのこの人・・・

「・・・暗いんですから、下手に動くといけないですよ」

小原理事長の手を掴み、思いつき引き上げる。

「あ、ありがと・・・」

「時間も無いんで、このまま行きますね」

「え、ちよ!?!」

小原理事長の手を掴んだまま、出口から外へと出て電気室へと向かう。そこには既に先客がいた。

「遅いですわよ、天さん」

「ダイヤ!?!」

そう、そこにいたのはダイヤさんだった。

「すみません、このおっぱいお化けのせいで遅れました」

「おっぱいお化けって何!?!」

「ああ、なるほど・・・その無駄に大きい乳をもぎ取ってやりたいですわね」

「ダイヤまで!?!」

ショックを受けている小原理事長。と、俺は陰に隠れているもう一人の存在に気付いた。

「・・・果南さん？」

「ぎくつ・・・」

青い髪のポニーテールを揺らし、恐る恐るこちらを振り向く果南さん。

「何で果南さんがここに？」

「アハハ・・・この悪天候で今日はお店が休みになったから、ちよつとライブの様子を見ようかなあつて・・・」

「会場を覗く様子が完全に不審者でしたので、ここまで連行してきたのですわ」

「ちよ、誰が不審者よ!?! れっきとしたこの学校の生徒なんだけど!?!」

「果南さんうるさいです。おっぱいが大きいからつて、声まで大きくする必要は無いんですよ」

「おっぱい関係なくない!?! つていうか、完全にセクハラ発言だよねえ!?!」

「ハグ魔に言われたくないです」

「うぐつ・・・」

言葉に詰まる果南さん。と、果南さんと小原理事長の目が合った。

「鞠莉・・・」

「果南……」

お互い複雑そうな表情を浮かべる。この二人、何かあったんだろうか……

「時間もありませんし、早速取り掛かりますわよ」

手を叩くダイヤさん。

「早くこの発電機をセットして、電源を復活させるのですわ」

「発電機つて……何でそんなものがここに……？」

「倉庫から引つ張り出してきたので」

小原理事長の疑問に、しれつと答えるダイヤさん。

「念の為に準備しておきたいと、天さんにお問い合わせしましたからね」

「天が……？」

「まあ予報でも、天気が悪いって言うてましたから。雷の影響で停電する恐れもあるので、念には念を入れて準備しておこうと思ひまして」

使うことはないだろうなんて思ってたけど、まさか本当に使うことになるとは……

「ダイヤさんと二人でセットしようと思ひましたけど……三人もいるなら大丈夫そうですね。というわけで、ここはお願いします」

「天さんはどうするのですか？」

「電源が復活したら、よいつむトリオの三人に指示を出さないといけないので。準備

が出来たら、インカムで知らせてもらえますか?」

「承知しました」

「ダイヤさん・・・松嶋菜●子のモノマネしてる場合じゃないですよ」

「家●婦のミタは意識してないですわよ!?!」

ダイヤさんの、ツッコミもスルーして、俺は会場へと戻る。そこで目にしたのは・・・  
「温度差なくんて、いつくかく消くしくちやえつてくねく♪元気だよ・・・元気を出して・・・いく・・・よ・・・」

泣きながらアカペラで歌う、千歌さんの姿だった。見るからに心が折れかかっている。

「千歌さん・・・」

無理も無い。初めてのライブが解散のリスクを伴ったものということで、余計にプレッシャーを感じていたはずだ。

その上こんなハプニングまで起きてしまったのだから、誰だって泣きたくなるだろう。純粋な性格の千歌さんだけに、ダメージも人一倍なはずだ。

「・・・何でああいう真っ直ぐな人にばかり、こういう試練が待ち受けてるのかなあ」  
本当によく似てるというか・・・こんな試練に遭遇するところまで、似なくてもいいんだけど・・・

と、ダイヤさんから連絡が入る。

『天さん、準備完了ですわ』

「了解です」

さて・・・ちよつくら手を貸しましょうかね。

「むつさん、よしみさん・・・スイッチオン！」

『ラジャー！』

再びステージが照明で照らされる。ステージ上の千歌さん達が呆然としている中、今度は会場に大きな声が響き渡った。

「バカ千歌あああああつ！アンタ開始時間を間違えたでしょ!？」

レインコートを着た美渡さんが、大勢の人を連れて会場に入ってくる。

「美渡さん!」

「あつ、天!」

レインコートを脱ぎながら、こつちへ歩いてくる美渡さん。

「遅くなってゴメン!開始時間を間違つて知らされてたみたいで・・・」

「どういうことですか?」

「これよ、これ」

美渡さんが一枚のビラを渡してくる。

これって確か、千歌さんが自分達で配る為に作ったビラ．．．ん？

「．．．ここに書いてある開始時間、三十分遅いんですけど」

「そうなのよ！十五分前に行けば良いかなって思ってた来てみたら、もう始まってるといっただもん！ホント焦ったわよ！」

なるほど．．．

千歌さんが作ったビラの開始時間が間違っていたせいで、ライブ開始時点でお客さんが全然来ていなかったと．．．

逆に来てくれていたお客さんは、かなり時間に余裕を持って来てくれていたと．．．うん、そういうことね。

「すいません美渡さん、ちよつと妹さんのうなじ削いできますね」

「巨人扱い!?気持ち分かるけど落ち着いて!？」

「駆逐してやる．．．この世から．．．一匹残らず．．．!」

「いや、千歌は一人しかないから!」

美渡さんに全力で止められたので、仕方なく駆逐を諦める。

あのオレンジヘッド、マジで覚えてるよ．．．

「それにしても．．．埋まったね、会場」

笑っている美渡さん。気付けば会場は満員になっており、どこもかしこも人で埋め尽

くされていた。

条件達成だな・・・

「・・・Unbelievable」

いつの間にか、小原理事長が近くに立っていた。満員になった会場を見て、眩しそうに目を細めている。

「あの状態から、本当に満員になるなんて・・・」

「・・・言ったでしょう。可能性はあるって」

美渡さんへと視線を移す。

「そもそも、シスコンの美渡さんが来てない時点でおかしいと思いましたよ」

「誰がシスコンよ!? べ、別に千歌の為なんかじゃないんだからね!」

「はいはい、ツンデレ乙」

「ツンデレちゃうわ!」

「っていうか、志満さんはどうしたんですか?」

「留守番してくれてるわよ。旅館を空けるわけにはいかないからね」

「・・・」

「『アンタが留守番してろよ・・・』みたいな目で見ないでくれる!」

「おお、以心伝心」

「全然嬉しくないんだけど!」

ギヤーギヤー喚く美渡さんは無視して、小原理事長へと向き直る。

「・・・条件はクリアしました。今さら約束を反故にしたりしませんよね?」

「勿論よ。スクールアイドル部の設立を許可するわ」

微笑む小原理事長。

「やっぱり貴方は凄いわね、天・・・あの人の言う通りだわ」

「・・・俺は何もしていません。買い被るのは止めて下さい」

それだけ返すと、インカムを通じていつきさんに指示を出す。

「いつきさん、曲を最初から流して下さい」

『え、最初から!?!続きからじゃなくて!?!』

「これだけの人が集まってくれたんです。もう一度初めからライブやりましょう」

『・・・それもそうだね。了解!』

『ディスクだつたらダイジヨウブ』が最初から流れる。千歌さん達は驚いていたが、すぐに曲に合わせて歌い始めた。

「うおおおおおっ!千歌あああああつ!」

興奮して叫んでいる美渡さん。やっぱりシスコンじゃん。

「・・・楽しそうね、あの子達」

小原理事長が呟く。ステージ上で歌って踊る千歌さん、曜さん、梨子さん・・・三人とも活き活きとしていて、本当に楽しそうだ。

それを眺める小原理事長の表情は・・・どこか懐かしそうで、どこか寂しそうなものだった。

「・・・言うべきか迷いましたが、一応言っておきますね」

「天・・・？」

「発電機のセット・・・手伝ってくれてありがとうございます」

俺の言葉に一瞬ポカンとした後、小さく笑う小原理事長なのだった。

試練を乗り越えた先に待っているものがある。

「ライブ凄かったよ天くん！衣装も曲も振り付けも良かったし、先輩方もキラキラしてて輝いてた！それから、それから……！」

「アハハ……ありがとね、ルビィちゃん」

興奮状態のルビィちゃんに、苦笑しながらそう返す俺。

ライブが終わってお客さん達のお見送りをしていた俺に、ルビィちゃんがダツシユで駆け寄ってきたのだ。

本当にスクールアイドルが好きなんだなあ……

「お疲れ様、天くん」

ルビィちゃんの後ろでは、花丸が優しく微笑んでいた。

「ライブ、凄く楽しかったぞら」

「そう言ってもらえると嬉しいよ。来てくれてありがとね、花丸」

「フフツ、天くんの為ならどこでも行くぞら」

「……花丸が天使に見えるわあ」

花丸の頭を撫でる。

「まだ結構雨が降ってるから、気を付けて帰ってね」

「了解ずら!」

「じゃあ、また明日ね!」

手を振って帰っていく二人。さて・・・

「花丸もルビィちゃんも行ったし、そろそろ出てきなよ・・・よっちゃん」

「ぎくっ!?!」

扉の陰から、よっちゃんが恐る恐る顔を出す。

「恐るべしリトルデーモン・・・隠していた我が魔力を感知するとは・・・」

「扉の陰からシニヨンだけはみ出してたら、誰だつて気付くわ」

「うげっ!?!」

「つていうか、マスクとサングラス外したら?完全に不審者だよ?」

「誰が不審者よっ!?!」

そうツツコミを入れつつも、マスクとサングラスを外すよっちゃん。素直や・・・

「今日は来てくれてありがとね」

「フツ・・・リトルデーモンの頼みを聞くのも、主である私の役目・・・堕天使ヨハネ

の慈悲深さに感謝するが良い」

「わー、ヨハネ様慈悲深い」

「棒読みっ!」

正直、よっちゃんには本当に感謝している。まだ登校する決心がついていない中で、ライブの為にわざわざ学校まで足を運んでくれたのだから。

「・・・学校に来るの、しんどくなかった?」

「急に心配してんじやないわよ」

バシッと背中を叩かれる。

「これぐらいどうってことないわよ。まあ、クラスメイト達と会うのは・・・まだちよつと勇気が出ないけど」

「・・・ゆつくりで良いから。焦らずにやっついていこうね」

「・・・うん。ありがとう」

小さく笑うよっちゃん。

「天も今日はお疲れ。帰ったらゆつくり休みなさいよ」

「分かったよ、母さん」

「誰が母さんよ!?!」

「明日ノートとプリント持って行くから。いつものごとく、夕飯ご馳走になります」

「相変わらずその流れなのね・・・了解。じゃあまた明日」

よっちゃんも手を振りながら帰っていく。と、俺の背中がいつもの衝撃を受けた。

「お疲れ様のハグ！」

「・・・慣れつつ恐ろしいですね」

最初の頃はあんなにドキドキしてたのに、今はもう完全に平常心だ。

健全な思春期男子として、これはいかななものだろうか・・・

「次々に美少女と会話しちゃって・・・本命はどの子なの？」

「果南さんってことにしといて下さい」

「おつ、私を美少女の括りに入れてくれるの？」

「誰がどう見たって美少女でしょ。果南さんの可愛さを舐めないで下さい」

「な、何か恥ずかしいんだけど・・・」

顔を赤らめる果南さん。

最近分かったことだが、この人もストレートな言葉に弱い。褒め言葉には特に弱い。

「そういえば、果南さんもありがとうございました。発電機のセットを手伝ってくれて」

「どういたしまして。まあ大したことはしてないけどね」

笑う果南さん。

「それにしても・・・このタイミングで鞠莉に会うとはね・・・」

表情が暗くなる果南さん。やっぱり二人の間には、何かがあるようだ。

「・・・元氣出して、のハグ」

「っ!？」

偶にはこっちから果南さんにハグしてみる。果南さんの顔が真っ赤になっていた。

「そ、天!？」

「いつもハグしてる仲なんですから、そんなに恥ずかしがらなくても良いでしょう」

「そ、そうだけどもさあ・・・男の子からハグされるなんて、経験無いから・・・!」

「よし、果南さんの初めてゲット」

「その言い方は誤解を招くから止めてくんない!？」

「ちよつと何言ってるか分かんないです」

「何だよ!？」

どうやら少しは元氣が出たようだ。やっぱり果南さんはこうでなくちゃ。

「さて・・・こんなところをダイヤさんに見られたら『破廉恥ですわ!』って怒られそ

うなんで、そろそろ離れますね」

「アハハ、確かに・・・」

苦笑する果南さん。

「でも・・・偶には相手の方からハグされるのも、悪くないかもね」

「果南さんは基本的に、自分からハグしに行きますもんね」

「そうなんだよ。だからまあ・・・偶には、天からハグしてくれても良いよ？」  
少し恥ずかしそうに笑う果南さん。

何だか今の果南さんは、『お姉さん』というより『女の子』っていう感じがして新鮮だな・・・

「それじゃ、私も帰るね！」

「ええ。今日は来てくれてありがとうございました」

帰っていく果南さんを見送る。これでお客さんはほとんど帰ったか・・・

「・・・顔を出しに行くかな」

ライブが終わってから、まだ千歌さん達のところ顔を出せていない。

果たしてどんな様子なのか、少し気になっている俺なのだつた。

\*\*\*\*\*

《千歌視点》

「・・・終わったね」

「・・・うん」

「・・・そうね」

ステージ裏で、私達は椅子に座ってボーっとしていた。

ライブが終わって、ステージ裏に戻ってきて、三人で号泣して・・・ひとしきり泣いたら、何だかドツと疲れが押し寄せてきたのだ。

「満員だったね・・・」

「うん、会場を埋められたね・・・」

「条件クリア、よね・・・」

これでスクールアイドル部の設立が認められる。これからもAqoursとして活動することが出来る。

「これから始まるんだ・・・」

ゆっくりと椅子から立ち上がる。

「始められるんだ・・・スクールアイドル」

また涙ぐんでしまいそうになる。ステージでも泣いたし、さつきも泣いたのに・・・

「・・・千歌ちゃん」

そつと隣に寄り添ってくれる曜ちゃん。

「一緒に頑張ろうね」

「曜ちゃん……」

「曲作りは任せて」

梨子ちゃんも隣に立ってくれる。

「絶対に良い曲を作ってみせるから」

「梨子ちゃん……」

「だから千歌ちゃん……作詞は早めにお問い合わせね？」

「うっ……」

「全ては千歌ちゃんにかかっているからね？」

「止めてえええええっ!? プレッツシャーかけないでえええええっ!」

思わず頭を抱えてしまう。そんな私を見て、曜ちゃんと梨子ちゃんが笑っていた。

うう、意地悪……

「勘違いしないことですわね」

厳しい声がかけられる。振り向くと、ダイヤさんが立っていた。

「今までのスクールアイドルの努力と、街の人達の善意があつたからこそライブは成功した……それを忘れないように」

「……分かってます」

言われなくても分かっている。私達の實力なんてまだまだで、今は他のスクールアイドル

ルには到底及ばない。

そんなことは分かっている。

「でも、ただ見てるだけじゃ始まらないって……上手く言えないけど、今しか無い瞬間だから……だから、輝きたい」

ダイヤさんを真っ直ぐ見つめる。

「だから全力で、スクールアイドルをやります。普通星人の私がようやく見付けた、心からやりたいことだから」

「……そうですか」

ダイヤさんはそれだけ言うと、踵を返して出て行った。

「あんな言い方しなくても良いのに……」

口を尖らせる曜ちゃん。

「そんなに私達のことが入らないのかな……」

「……多分、私達の為を思っていてくれてるんじゃないかな」

最初はただ、スクールアイドルが嫌いなんだと思ってたけど……

μsのことをあんなによく知ってる人が、スクールアイドルを嫌いなわけがない。

「何か、そんな気がするんだよね」

「千歌さんって、そういう勘だけは無駄に鋭いですよね」

「無駄って酷い……って天くん!?!」

いつの間にか、すぐ後ろに天くんが立っていた。い、いつの間に……

「お疲れ様です」

「いつからいたの!?!」

「『夢にときめけ!明日にきらめけ!』からですね」

「そんな場面無かったよねえ!?!完全にルー●ーズじゃん!?!川●先生じゃん!?!」

「あれ?『あきらめたらそこで試合終了ですよ……?』でしたっけ?」

「それはスラ● Dankの安●先生!野球からバスケットになるよ!?!」

「あ、曜さんと梨子さんもお疲れ様でした」

「お疲れ」

「お疲れ様」

「無視しないでくれる!?!」

ホントにこの子は……全くもう……

「あ、さつき小原理事長とも話したんですけど……スクールアイドル部、正式に設立を認めてくれるそうです」

「ホント?良かったあ……」

胸を撫で下ろす梨子ちゃん。

まあ約束を反故にされることはないとは思ってたけど、改めて聞くとやっぱりホツとする。

「良いライブでしたよ。ファーストライブとしては上々だと思います」

「色々ハプニングもあつたけどね」

苦笑する曜ちゃん。あ、ハプニングといえは・・・

「天くんの『スイッチオン!』っていう声と同時に、また照明が点いたんだけど・・・あの時、天くんが何かしてくれたの?」

「ああ、ちよつと発電機をセットしてもらいました」

「発電機!?!」

「え、まさか停電になることを予測してたの!?!」

「ええ。あくまでも万が一の為に用意してもらったんですけど・・・正解でしたね」  
苦笑する天くん。この子、ちよつと有能過ぎない・・・?

「まあ用意してくれたのもセットしてくれたのも、俺じゃないんですけどね」

「え、じゃあ誰が・・・?」

「あー・・・本人の為にと言わないでおきます」

「ええっ!?!凄く気になるんだけど!?!」

何故か言葉を濁す天くん。本人の為ってどういう意味・・・?

「まあとにかく、何とかなつて良かったです。ライブも成功して、スクールアイドル部も設立が認められる……最高の結果になりましたね」

「うん、ありがとう……天くんのおかげだよ」

「え？」

驚いている天くんの手を、両手でそつと握る。

「ライブの途中、何度も心が折れそうになった。でも折れそうになる度に、天くんの声  
が聞こえたんだ。だから頑張れた」

「千歌さん……」

「今回のライブだって、天くんの支えが無かつたら成功してないもん。本当に感謝の  
気持ちでいっぱいだよ」

練習メニューを考えてくれたり、作詞に悩んでた私にヒントをくれたり……  
いつだって天くんは、私達に寄り添ってくれた。会場の設営とかだって、誰よりも一  
生懸命やってくれてたつてむっちゃん達から聞いている。

天くん無しで、今回の成功は有り得なかつた。

「支えてくれてありがとう、天くん」

「ホント、天くんにはいつも助けられてるわね」

「曜さん、梨子さん……」

天くと私の手に、曜ちゃんと梨子ちゃんの手が重ねられる。私は天くんを見た。

「これからも、私達のマネージャーでいてくれる？」

「・・・まあ、そうしろって言われてますからね。あの忌々しい理事長から溜め息をつく天くん。」

「でも・・・千歌さんや曜さん、梨子さんと一緒にいるのは楽しいですから。もう嫌々マネージャーをやってるわけじゃありませんよ」

「天くん・・・」

「ここからがスタートですから。練習もハードにするんで、覚悟して下さいね」  
「っ・・・うん！」

私は笑顔で頷くと、勢いよく天くんの胸に飛び込んだ。

「ちよ、千歌さん!?!危ないですって!」

「えへへ、何か無性に抱きつきたくなっちゃった」

「あ、じゃあ私も! ヨーソロー!」

「ちよ、曜さん!?!倒れる! 倒れるから!」

「だ、だつたら私も! えいつ!」

「いや、梨子さんまで来ちゃつたら・・・うわっ!?!」

三人分の重さに耐え切れなくなった天くと共に、私達はそのまま床へと倒れ込ん

だ。

私も曜ちゃんも梨子ちゃんも笑い、天くんはやれやれと言いたげに苦笑している。仲間達とこうして笑い合えることを、とても幸せに思う私なのだった。

自分の気持ちに蓋をしてしまうのは苦しい。

「じゃあ曜さんと俺で、ドアと窓を拭いていきましようか」

「ヨーソロー！」

「千歌さんは棚拭きを、梨子さんは床拭きをお願いします」

「オツケー！」

「分かったわ」

体育館の中にある一つの部屋を、手分けしながら掃除している俺達。

ファーストライブで会場を満員にしたことで、小原理事長は約束通りスクールアイドル部の設立を承認してくれた。それと同時に部室として与えられたのが、今俺達が掃除しているこの部屋なのだが……

長い間使われていなかったらしく、完全な物置部屋と化していたのだ。まずは掃除しないと使えないということで、こうしてせっせと掃除しているというわけである。

「あの腐れ成金理事長……ホント覚えてろよ……」

「アハハ……」

恨み言を呟く俺に、曜さんが苦笑していた。

ライブの時に発電機のセットを手伝ってくれたとはいえ、お礼なんて言うべきじゃなかったな……

「曜さん、デ●ノート持ってませんか？小原理事長の名前を書き込みたいんですけど」

「持つてるわけないじゃん!?!何ちよつと物騒なこと言ってるの!?!」

「じゃあちよつとリユ●ク探してきて下さいよ。多分リングで釣れると思うんで」

「死神を魚みたいに釣れるわけないでしょ!?!?っていうか、そもそもデスノ●トに触れなきゃ見えないよねえ!?!」

「曜さんならいけますって。ヨーソローパワーで」

「ヨーソローパワーって何!?!」

そんな会話をしているうちに、部室内の掃除を終えることが出来た。部室にあった荷物の整理も済ませてあるので、後は机や椅子等を再び配置するだけだ。

「千歌さん、ホワイトボードお願いします」

「はい!?!」

廊下に出してあったホワイトボードを引っ張ってくる千歌さん。と、何やら首を傾げている。

「このホワイトボード、何か書いてあるよ?」

「ホワイトボードに名前を書かれた人間は死ぬって?」

「まだデス●ートのネタを引きずるの!？」

千歌さんのツツコミを受けつつ、ホワイトボードに視線を向ける。確かにホワイトボードいっぱいには、消えかかった文字で何かが書かれていた。

これは……

「ひよつとして……曲の歌詞?」

「そうみたいね」

俺の肩越しにホワイトボードを覗きこんだ梨子さんが頷く。

「でも、こんな歌詞の曲知らないわね……」

「私も知らないなあ……ひよつとして、オリジナルの曲だったりして」

「誰かが作詞してたってこと?」

「そうかもしれないわね」

梨子さん達が話している中、俺はホワイトボードに書かれていた文字を見つめていた。

この筆跡には見覚えがある。もし本当にあの人が書いたものだとしたら、色々と疑問に思っていたことにも説明がつかない……

「天くん? どうしたの?」

「いえ、何でもないです」

「梨子の問いに笑って返す俺。

あくまでも推測でしかないし、俺が踏み込み過ぎるのも良くないだろうな……

「千歌さん、ホワイトボードも拭いちやって下さい」

「え、文字が消えちゃうけど良いの？」

「ええ。このままじゃ使えないですし、汚れも目立ちますからね」

「了解！」

千歌さんがホワイトボードを拭いていき、文字が完全に消えてしまう。

まあ、今はこれで良いかな……

「じゃあ梨子さんと俺で、机と椅子を運びましょうか」

「ええ、そうしましょう」

「曜さん、運んできた机と椅子の表面を拭いてもらって良いですか？」

「お任せあれ！」

「あ、じゃあついでに●スノートも……」

「それは任せないで!？」

悲鳴を上げる曜さんなのだった。

\*\*\*\*\*

「失礼しまーす」

段ボール箱を抱え、図書室へとやってきた俺達。受付に花丸が座っていた。

「あれ？天くん？」

「お、花丸じゃん。今日は当番の日？」

「ずら」

頷く花丸。と、俺の後ろから千歌さんがひよっこり顔を覗かせる。

「おお、花丸ちゃん！」

「こんにちは」

「そしてルビィちゃん！」

「ぴぎやあつ!？」

受付の側に置いてある送風機の陰に、しゃがんで隠れていたルビィちゃんを千歌さんが発見する。恐らく花丸と話している時に俺達がやって来たから、咄嗟に隠れようとしたんだろうけど……

ルビィちゃん、そのしゃがみ方はあまりよろしくないと思う。スカートの中がバツチ

リ見えてるから。パンツ丸見えだから。

「・・・天くん？」

「そんな目で見ないで下さい。今のは不可抗力です」

梨子さんが冷たい目でこつちを見ていた。理不尽や・・・

「不可抗力といえば、梨子さんの時も・・・」

「今すぐ記憶から消しなさい」

「アツハイ」

女帝・桜内梨子、ここに爆誕。俺は梨子さんには逆らえそうにないな・・・

「あ、これ部室にあったんだけど・・・図書室の本じゃないかな？」

段ボール箱を受付の机に置く曜さん。部室の荷物を整理していた時に見付けたので、ここまで持ってきたのだ。

花丸が手に取ってチェックする。

「ああ、多分そうです。わざわざありがとうございます・・・」

「スクールアイドル部へようこそ！」

「ずら!!？」

「ぴぎいっ!？」

強引に割り込んできた千歌さんが、花丸とルビイちゃんの手を握る。

「正式に設立されたし、絶対悪いようにはしないから！二人が歌ったら絶対キラキラする！間違いない！」

「アンタの対応が間違いだわ」

「あたっ!?!」

千歌さんの頭を容赦なく引つ叩く。ホントにこの人は・・・

「その辺にしておかないと、マジでしばきますよ?」

「もうしばかれてるんですけど!?!男の子が女の子の子を引つ叩くってどうなの!?!」

「男女平等です」

「こういう場面で使う言葉じゃないと思うよ!?!」

「とにかく、強引な勧誘はダメです。二人とも戸惑ってるでしょう」

「す、すみません・・・マル、そういうの苦手っていうか・・・」

「ル、ルビイも・・・」

恐縮しながら断る二人。千歌さんは残念そうに苦笑していた。

「アハハ、そつかあ・・・ゴメンね、つい・・・」

「あつ、いえ・・・」

どこか複雑そうな表情をしているルビイちゃん。そんなルビイちゃんを、花丸が心配そうに見つめている。

あれ、もしかしてルビイちゃん・・・

「千歌ちゃん、そろそろ帰ろう?」

「あ、うん。そうだね」

曜さんに声をかけられ、千歌さんが頷く。

今日は部室の掃除に時間を費やしてしまったので、練習は休みにしようということになったのだ。

「あ、千歌さん達は先に帰って下さい」

「あれ?天くん帰らないの?」

「ええ。せつかくなので、ちよつと調べ物をしてから帰ります」

「了解。じゃあまた明日!花丸ちゃんとルビイちゃんもまたね!」

三人が図書室を出て行く。さて・・・

「ルビイちゃん、俺の勘違いだったら申し訳ないんだけど・・・ひよつとして、スクールアイドルやりたいんじゃない?」

「っ・・・!」

息を呑むルビイちゃん。

「ど、どうして・・・」

「千歌さんの誘いを断った時の表情が・・・よく似てたから」

「似てたって……誰に？」

「俺の知り合い。その子は自分に自信が無くて、本当はやりたいののに『やりたい！』って言えなくて……凄く悩んでたんだよね」

「……まるでルビイちゃんずらね」

苦笑する花丸。

「天くんはこう言ってるけど……ルビイちゃんは どう思ってるずら？」

「……やってみたい気持ちはある」

俯くルビイちゃん。

「でも……お姉ちゃん、スクールアイドルが嫌いになっちゃったから。多分、反対されると思う」

「ダイヤさんか……嫌いになっちゃったことは、元々は好きだったの？」

「うん。お姉ちゃん、昔はスクールアイドルが大好きで……一緒に<sup>4</sup>sのマネして、歌ったりしてたんだ。でも高校に入ってからしばらく経った頃から、スクールアイドルが嫌いになっちゃったみたいで……」

「嫌いに、ねえ……」

ダイヤさんが今でもスクールアイドル好きなのは間違いない。でも千歌さんをはじめ、スクールアイドルをやりたいと言った人達に頑なな態度をとってきたのも事実だ。

その原因は、恐らく・・・

「・・・本当はね、ルビイも嫌いにならなきゃいけないんだよ。スクールアイドル」  
悲しそうに言うルビイちゃん。

「お姉ちゃんが嫌いっていうものを、好きなままじゃいけないんだけど・・・」

「・・・嫌いになれないんでしょ？ルビイちゃん、スクールアイドル好きだもんね」

「・・・うん」

ルビイちゃんは俺の問いに頷くと、花丸の方を見た。

「花丸ちゃんは興味無いの？スクールアイドル」

「マル!?無い無い！運動苦手だし、オラとか言っちゃうし・・・」

「・・・そっか。じゃあルビイも平気」

力なく笑うルビイちゃんを、悲しそうな表情で見つめる花丸なのだった。

大切な人の背中を押してあげたいものである。

「ずらあ・・・」

帰りのバスの中で、俺にもたれかかってくる花丸。ちなみにルビイちゃんは用事があつたらしく、一足先に帰ってしまった。

「ルビイちゃん、絶対スクールアイドルやりたいすら。間違いないすら」

「まあそうだろうね」

自分に自信が無いことと、ダイヤさんに反対されるだろうということ・・・この二つが原因で、ルビイちゃんは自分の気持ちに蓋をってしまったている。

でも・・・

「多分ダイヤさんは・・・反対しないんじゃないかな」

「どうしてそう思うずらあ?」

「ルビイちゃんが自分で決めたことなら、それを尊重してくれる人だと思うから。あくまでも個人的な考えだけだね」

そう考えると、問題はルビイちゃん自身がどうするか・・・一歩踏み出すことが出来るかどうかだと思う。

でも今のルビィちゃんは、恐らくその選択をしないだろうな……

「となると、俺達の選択肢は二つに限られるかな」

「黙って見守るか、背中を押すか……ずらね」

「そういうこと」

まあ、花丸が選ぶとしたら……

「勿論、背中を押すぞら」

「言うと思つたよ」

笑いあう俺達。

出会ってからそんなに時間は経ってないけど、花丸が友達思いなのはよく知ってる。

ここで動かないという選択肢を、花丸が選ぶわけがない。

「でも背中を押すって言っても、強引過ぎるのは良くないよね……どうやってルビィ

ちゃんの気持ちを動かすべきか……」

「実は一つ、マルに考えがあるぞら」

「マジで!？」

まさかもう方法を考えているとは……

「天くん……マルをスクールアイドル部に入れてほしいぞら」

「……え?」

唾然としてしまう俺なのだっただ。

\*\*\*\*\*

「体験入部？」

首を傾げる千歌さん。

翌日の昼休み・・・俺は二年生の教室に向き、千歌さん達に事情を説明していた。

「ええ、花丸とルビイちゃんがやってみたって」

「体験入部って、要はお試してことだね？自分に合ってたら入るし、合わなかったら入らないって感じかな？」

「ですね。二人とも興味はあるみたいで、実際にやってみて判断したいらしいです」  
曜さんの問いに頷く俺。

今朝ルビイちゃんにも話したところ、『花丸ちゃんがやるなら』ということでおツケー  
をもらっている。

「き、奇跡だよ・・・！」

目をキラキラ輝かせる千歌さん。

「これで二人が入ってくれたら．．．！」

「でも昨日、こういうのは苦手って言っただけでなかったかしら．．．？」  
首を傾げる梨子さん。

「それが急にどうして．．．」

「思春期だからです」

「いや、それは別に関係ないんじゃない．．．」

「思春期だからです」

「わ、分かった！分かったから！」

額がくっつくほど梨子さんに顔を近付けて、勢いで無理矢理押し通す。

こういう時、勘の鋭い人って厄介だなあ．．．

「そういうわけで、今日の放課後は二人が体験入部に来ますから。後のことはよろしく願います」

「あれ？天くんは？」

「残念ながら、今日は生徒会なんですよ」

ルビィちゃんのごときは花丸に任せて、俺は別の仕事を請け負っている。  
さて．．．

「果たしてどうなるかな・・・」

「「？」」

俺の眩きに首を傾げる三人なのだった。

\*\*\*\*\*

「ふう・・・今日の仕事はこれで終了ですわ」

「お疲れ様です」

息を吐くダイヤさん。

生徒会の仕事も終わり、後は帰るだけなのだが・・・

「ダイヤさん、この後少し時間ありますか？」

「ええ、大丈夫ですけれど・・・何か？」

「これからデートしません？」

「デ、デート!?!」

ダイヤさんの顔が赤くなる。

「そ、そんな破廉恥な……!」

「どんだけ初心なんですか……」

ダイヤさんの恋愛経験はゼロということが判明した瞬間だった。

「まあデートつていうのは冗談で……実はダイヤさんにご相談がありました」

「じよ、冗談つて……まあ良いですけど。それで、相談というのは?」

「ルビイちゃんのことです」

「ルビイの……?」

首を傾げるダイヤさん。

「ええ。ルビイちゃんとは同じクラスつていうこともあつて、仲良くさせてもらつて  
るんです」

「ルビイからも、天さんの話は聞いてますわ。あのルビイが男の人と仲良くしてるな  
んで、私も驚いたのですけれど……ハッ!」

そこで急に息を呑むダイヤさん。

「ま、まさか天さん……私の愛する妹に手を出して……!」

「内浦の海に沈みたいんですか?」

「怖いですわよ!」

このシスコン生徒会長……あんな天使みたいな子に手を出せるわけないでしょ。

「とりあえず外に出ましようか。見てほしいものもありますし」  
「見てほしいもの……？」

訝しげなダイヤさんに、俺は笑みを向けるのだった。

「ええ、見てあげて下さい……愛する妹の頑張る姿を」

\*\*\*\*\*

「……どういことですか？」

驚いているダイヤさん。

俺達は今、学校の屋上に来ているのだが……

「ワン、ツー、スリー、フォー！」

そこでは今、ルビイちゃんと花丸がダンスの練習をしているところだった。曜さんがカウントをとり、手を叩いている。

「少しズレてるよ！テンポを意識して！」

「はいっ！」

「ずらっ!」

真剣に練習している二人を、俺とダイヤさんは階段の陰から覗いていた。

「何故ルビイがスクールアイドル部に……?」

「体験入部ですよ」

説明する俺。

「ルビイちゃん、スクールアイドル好きじゃないですか。それで興味を持つてくれたみたいで、花丸と一緒に体験入部することになったんです」

「ルビイが……スクールアイドル……」

じつとルビイちゃんを見つめるダイヤさん。その表情は、どこか複雑そうだった。

「……反対ですか?」

「え……?」

「ルビイちゃんがスクールアイドルをやること……ダイヤさんは反対ですか?」

「私は……」

俯くダイヤさん。やはりダイヤさんとしては、ルビイちゃんが心配なんだろう。

「とりあえず、もう少し見てあげて下さい。ルビイちゃんの頑張ってる姿を」

ダンスの練習に打ち込むルビイちゃんは、どこか活き活きとした様子だった。スクールアイドルとしての練習が出来ることに、楽しさを覚えているのかもしれない。

そしてもう一人・・・

「花丸ちゃん、良い感じだよ！その調子で頑張つて！」

「ずらっ！」

「・・・楽しそうじゃん、花丸」

笑顔で練習する花丸を見て、俺は口元を緩ませるのだった。

言葉にしなければ分からないことがある。

「おお・・・良い眺めですね」

感嘆の声を上げる俺。

俺達は今、淡島神社へと続く長い階段の途中にいた。少し開けたその場所からは、内浦の海を見渡すことが出来る。

ちやうど夕陽に染まっており、オレンジ色の海がとても綺麗だった。

「でしよう？ 私のお気に入りに入るスポットですわ」

ダイヤさんはそう言って笑うと、近くのベンチに腰を下ろした。

「それにしても、ルビィは大丈夫でしょうか・・・こんな長い階段を、ダツシュで上つていきましたが・・・」

ここの階段ダツシュは、A q o u r sにとって日々のトレーニングの一環となっている。前に果南さんからこの場所を教えてもらった俺が、トレーニングメニューに追加したのだ。

まあかなり長いので、途中で一息入れるようにはしているが。果南さんはこれを毎朝、しかも休憩無しでやっているらしい。

小原理事長がおつぱいお化けなら、果南さんは体力お化けといたところだろうか。

「大丈夫ですよ。千歌さん達が無理させないでしょうから」

ダイヤさんの隣に座る俺。

「それにルビイちゃん、意外に体力ありますからね。体育でやった持久走とか、割と良いタイム出していましたよ」

むしろ心配なのは花丸の方だ。運動が苦手と公言するだけあって、体力があまり無い。途中でバテそうな気がする。

「・・・そうですわね」

浮かない表情のダイヤさん。

「・・・ルビイは、本気でスクールアイドルをやるつもりなのでしょうか?」

「もしルビイちゃんが『やりたい』と言ったら・・・ダイヤさんはどうするつもりなんですか?」

「私は・・・」

俯くダイヤさん。

「私は・・・ルビイが本気なら、その気持ちに応援しますわ。あの子がスクールアイドルに憧れているのは、よく知っていますから」

「・・・それはダイヤさんも同じでしょう?」

「っ……」

唇を噛むダイヤさん。やっぱりな……

「ルビィちゃんと言っていました。高校に入ってしまったらしくして、ダイヤさんはスクールアイドルが嫌いになってしまったと……それを聞いて、何となく想像がきました」  
俺は隣に座るダイヤさんへ視線を向けた。

「ダイヤさん、貴女……スクールアイドルをやってましたよね？」

「ッ!？」

ダイヤさんが息を呑む。

「ど、どうして……!？」

「ダイヤさんが教えてくれたんじゃないですか」

溜め息をつく俺。

「あの日ダイヤさんが浜辺に書いた、『Aqours』という名前……調べたらすぐ分かりましたよ。二年前、東京で行なわれたスクールアイドルのイベントに参加してますよね？出場グループ一覧に、『Aqours』の名前がありました」

『Aqours』という名前には、ダイヤさんにとつて思い入れがあるんだろうとは思ってはいたが……

まさか自分がやっていたスクールアイドルグループの名前だったとはな……

「担任の赤城先生にも聞いてみたんですけど、ちゃんと覚えてましたよ。二年前、浦の星でスクールアイドルをやっていた生徒がいたことを」

「・・・天さんは既にご存知だったのですね」  
苦笑するダイヤさん。

「その様子から察するに、他のメンバーが誰なのかも分かっているのでしょうか？」

「・・・果南さんと小原理事長ですね」

俺の答えに、力なく頷くダイヤさん。

部室のホワイトボードに書かれていた文字・・・恐らくあれは果南さんの字だ。バイトの時に果南さんが書く字は度々見ているから、すぐに果南さんの字だと分かった。

そして小原理事長が留学したのは二年前・・・恐らくイベントが終わった後に留学したんだろう。スクールアイドル部に何かと目をかけるのも、自身が過去にスクールアイドルをやっていたのであれば説明がつく。

「二年前、ダイヤさん達はスクールアイドルを始めた。でも何らかの理由で辞めざるをえなくなり、A q o u r s は解散した。だからダイヤさんは、スクールアイドル関連のものを自分から遠ざけようとしたんでしょう？」

それでも、心の底からスクールアイドルを嫌いになることなど出来なかった・・・μ'sについて楽しそうに語っていたのがその証拠だ。

「スクールアイドルに関わる部の設立を承認してこなかったのは、その人達が傷付かないようにする為・・・スクールアイドルをやっていたからこそ、その大変さがダイヤさんには分かっていたんですよね？どんな事情があったにせよ、辞める決断をするというのは・・・とても辛いことですから」

「・・・敵いませんわね。察しが良すぎますわ」

溜め息をつくダイヤさん。

「そこまで分かっているのなら、私が何を心配しているか分かるでしょう？」

「スクールアイドルをやることで、ルビイちゃんが辛い思いをしないか・・・ですね」  
「ええ。あんな思いをするくらいなら、私は・・・」

膝の上で拳を握るダイヤさんが、俺にはとても弱々しく見えた。

誰かが傷付くことを恐れ、自分が嫌われてでも防ごうと必死になる・・・その行動は、ただただ『不器用』の一言に尽きる。いつもスマートに仕事をこなすダイヤさんとは大違いだ。

でも恐らく、その『不器用』な姿こそが本当のダイヤさんなんだろう。人一倍優しいからこそ、人が傷付くのを黙ってみていられない・・・それが『不器用』な行動に繋がっている。

まったく・・・

「千歌さんがあの人に似てると思ったたら、ダイヤさんはあの人ですか・・・」

「あの人・・・？」

「いえ、こつちの話です」

まあそれはさておき・・・俺がダイヤさんにかけてられる言葉は一つだ。

「ダイヤさん・・・あまりルビイちゃんを見くびらない方が良いでしょう」

「え・・・？」

ポカンとしているダイヤさん。

「それはどういう・・・？」

「そのままの意味です。確かにルビイちゃんは極度の人見知りですし、気の弱いところだつてありますけど・・・しっかりとした芯を持つてる子ですよ」

「っ・・・」

「スクールアイドルが大変だつてことぐらい、スクールアイドルが大好きなルビイちゃんなら分かつてるはずですよ。それでもルビイちゃんは、『やってみたい気持ちはある』と言いました。この意味が分かりますか？」

それはつまり、『大変だとしてもやる覚悟はある』ということだ。千歌さんがゼロから始めたところを見ているルビイちゃんが、『スクールアイドルは楽だ』なんて思っているはずがないのだから。

「ルビイちゃん、言ってみましたよ。『お姉ちゃんが嫌いっていうものを、好きなままじゃいけない』って」

「っ……ルビイが……?」

「ええ。それでも、やつぱりスクールアイドルを嫌いにはなれなかつたみたいですけどね……ダイヤさんと同じで」

「こういうところは似てるよな……流石は姉妹というべきか。」

「要はダイヤさんに遠慮してゐるんです。ダイヤさんがやつてほしくないだろうからやらない……それはダイヤさんが望んでいる答えじゃないでしょう? 貴女がルビイちゃんに望むものは何ですか?」

「私が……ルビイに望むもの……」

ダイヤさんの瞳が揺れ動く。俺はダイヤさんを見据えた。

「しつかりしろ、黒澤ダイヤ」

「っ……!」

俺に呼び捨て、しかもタメ口をきかれて驚くダイヤさん。先輩を相手に失礼だとは思うが、これだけはハッキリ伝えなくてはいけない。

「妹に伝えたいこと、妹に望むこと……それをハッキリ言葉にしろ。言葉にしなくても分かるだなんて、そんなのはただの甘えだ。ルビイが望んでいるのは他の誰でもな

い、貴女の言葉なんだから」

「天さん……」

と、その時……

「え、お姉ちゃん!？」

驚く声が聞こえる。振り向くと、ルビイちゃん達が階段を下りてくるところだった。

「ダイヤさん!?!それに天くんも!？」

「どうしてここに!?!」

千歌さん達も驚いている中、花丸がこちらへ不安げな視線を送ってくる。恐らくダイヤさんを説得できたかどうか、心配しているのだろうが……

俺は花丸に笑みを向けると、千歌さん達へと視線を移した。

「ワー、偶然デスネー」

「棒読みっ!絶対偶然じゃないよねえ!？」

「バアアアアニングウ!ラアアアアブ!」

「何で艦●れの金●さん!？」

「アレです。内浦に対する愛が溢れてしまったんです……メイビー」

「急に!?!しかも今メイビーって言ったよねえ!?!」

「落ち着くネ、ブツキー」

「誰がブツキー!？」

ギヤーギヤーやかましい千歌さんはさておき、俺はルビイちゃんへ目をやった。

「ルビイちゃん、ダイヤさんが話したいことがあるんだって」

「お、お姉ちゃんが……?」

恐る恐るダイヤさんを見るルビイちゃん。スクールアイドルをやることについて、反對されると思っっているんだろう。

「ルビイ……私は……」

言葉に詰まるダイヤさん。俺はダイヤさんの背中に手を添えた。

「……今ダイヤさんが、一番ルビイちゃんに言いたいことを言っただけで下さい」

「一番言いたいこと……」

逡巡していたダイヤさんだったが、意を決してルビイちゃんを見つめた。

「ルビイ……本気でスクールアイドルをやりたいのですか?」

「つ……ルビイは……」

「ダイヤさん、あの……!」

「千歌さん」

慌てて口を挟もうとした千歌さんを、花丸が制する。これはルビイちゃんが答えるべき質問だということを、花丸はよく分かっている。

「ル、ルビイは……」

戸惑っているルビイちゃん。仕方ないか……

「焦らなくて良いよ……ルビイ」

「え……?」

俺はルビイに言葉をかけた。初めて呼び捨てにされたせいか、ポカンとしているルビイちゃん。

「ダイヤさんの質問に、きちんと本心で答えてあげて。ダイヤさんが聞きたいのは、ルビイの本当の気持ちなんだよ」

「本当の気持ち……」

俯くルビイちゃん。そして、意を決したように顔を上げた。

「お姉ちゃん、ルビイね……ルビイ、スクールアイドルがやりたい」

そう言い切るルビイちゃんの表情は、とても真剣なものだった。

「大変なのは分かっている。それでも……それでもやってみたい! 千歌さん達と一緒に、ルビイも輝きたい!」

「ルビイちゃん……」

千歌さん達の目が潤む中、ダイヤさんはじつとルビイちゃんを見つめていた。ルビイちゃんもまた、ダイヤさんをじつと見つめている。

そして……

「……それなら、頑張りなさい」

「っ……!」

微笑むダイヤさん。ルビイちゃんが息を呑む。

「い、良いの……?」

「やってみたいのでしょうか?ならやってみなさい。ルビイが心からやりたいと思うのであれば、私は応援しますわ」

「っ……お姉ちゃん……!」

ダイヤさんの胸に飛び込むルビイちゃん。それをダイヤさんが優しく抱き留めた。

「ひっぐ……ぐすっ……!」

「もう、ルビイったら……相変わらず泣き虫ですわね」

「うう……だつて……!」

「……でも、大きくなりましたわね」

ルビイちゃんの頭を撫でるダイヤさん。俺は二人の側をそつと離れ、花丸の隣へと移動した。

「一件落着……つてところかな」

「そうずらね。これでルビイちゃんの気持ちも晴れるずら」

「だね・・・お疲れ、花丸」

「天くんもお疲れ様ずら」

笑みを浮かべ、拳を軽く合わせる俺達なのだつた。

大切なのはやりたいかどうかである。

翌日・・・

「ルビイちゃん、入部届け出したみたい。梨子さんからラインきたよ」

「良かったぞら」

俺と花丸は、図書室でお喋りしていた。今日は花丸が当番の日なので、俺も普通に受付の椅子に座ってしまっている。

「早速これから練習だつて。ルビイちゃん、張り切ってるんじゃないかな」

「天くんは行かなくて良いぞら？」

「残念ながら、今日も生徒会なのよね」

ダイヤさんが所用で少し遅くなるとのことだったので、それまでの時間潰しにこうして図書室に来ているのだった。

「花丸こそ、良かったの？」

「何がぞら？」

「ルビイちゃんと一緒に、スクールアイドル部に入らなくて」

「・・・オラには無理ぞら」

首を横に振る花丸。

「オラとか言っちゃうし、運動は苦手だし・・・スクールアイドルに向いてないすら」  
「その割には、スクールアイドルの雑誌読んでるじゃん」

「ずらっ!?!」

机の引き出しにしまつてあつた雑誌を取り出す俺。花丸がこういう雑誌をこつそり読んでいることを、俺は前から知つていた。

「そ、それは・・・ルビィちゃんの好きなものを知ろうと思つて・・・!」

「あ、このページの端が折つてある」

「ずらあああああつ!?!」

雑誌を取り戻そうとする花丸を避け、そのページを開く俺。そこには、ウエディングドレス姿の女の子が写つていた。

「星空凛ちゃんか・・・*μ's*の特集みたいだけど、何でこのページだけ折つてあるの?」

「うう・・・それは・・・」

「それは?」

続きを促すと、花丸が観念したように口を開いた。

「何か凄く・・・キラキラしてたから・・・」

「・・・なるほど」

これは確か、凜ちゃんがセンターを務めた『Love wing bell』の時か・・・

「懐かしいな・・・」

「天くん？」

首を傾げる花丸。俺は花丸へと視線を向けた。

「・・・凜ちゃんも、最初はスクールアイドルに向いてないって思ってたらしいよ」

「え・・・？」

「自分には女の子らしい服なんて似合わないからって。凄くコンプレックスを持ってたみたいなんだけど、それを乗り越えられたんだって」

「ど、どうやって・・・」

「同じμ sのメンバーの小泉花陽ちゃんが、凜ちゃんの背中を押してくれたんだって。花陽ちゃんと凜ちゃんは小さい頃からの親友同士で、凜ちゃんにとって花陽ちゃんの存在は大きかったみたいだよ」

驚いている花丸に、俺は笑みを向けた。

「ちなみに花陽ちゃんがμ sに入る時、背中を押したのは凜ちゃんなんだって。自分に自信が無かった花陽ちゃんを勇気付けて、μ s入りを後押ししたらしいよ。それ

にしても、この二人の関係・・・まるでどこかの誰かさん達だと思わない？」

「っ・・・!」

息を呑む花丸。

「花丸はルビイちゃんの背中を押して、A q o u r s 入りを後押しした。なら次は、ルビイちゃんが花丸の背中を押す番じゃないかな・・・ね、ルビイちゃん？」

「ぴぎっ!」

「ずらっ!」

入り口の陰に隠れていたルビイちゃんが飛び上がり、それに花丸が驚いて飛び上がった。

「ルビイちゃん!いつの間にな!」

「ア、アハハ・・・少し前に来たんだけど、二人が話してたからつい・・・」

「花丸は気付いてなかったみたいだけど、ツインテールが丸見えだったよ。隠れるなら透明マント持ってこないと」

「どこのハ●ー・ポ●ター!? そんなもの実在しないよ!」

「じゃあ黒澤家に代々伝わる古の術とか無いの?」

「無いよ!?! 天くんは黒澤家を何だと思ってるの!?!」

「スクールアイドル大好き一族」

「それは私とお姉ちゃんだけだからね!」

ルビイちゃんは一通りツツコミを入れると、花丸の方を見た。

「花丸ちゃん、ルビイね．．．花丸ちゃんのことずっと見てた」

「え．．．?」

「ルビイに気を遣って体験入部してるんじゃないかって、ルビイの為に無理してるんじゃないかって．．．心配だったから」

実際花丸がスクールアイドル部に体験入部したのは、ルビイちゃんをスクールアイドル部に入部させる為だ。そういう意味では、ルビイちゃんに気を遣ったというのは間違いない。

でも．．．

「でも．．．花丸ちゃん、とつても嬉しそうだった。練習してる時も、皆でお話してる時も．．．それを見て気付いたの。花丸ちゃん、スクールアイドルが好きなんだって」

「マルが．．．?」

驚いている花丸。

ルビイちゃんの言う通り、練習の時の花丸はとても楽しそうだった。運動は苦手という意識が強すぎて、自分では気付いてなかったのかもしれないけど。

「花丸ちゃんと一緒にスクールアイドルが出来たらって、ずっと思ってた。一緒に頑

張れたらつて」

「・・・それでも、マルには無理すら。体力も無いし、向いてないすら」  
首を横に振り、俯く花丸。やれやれ・・・

「マルがスクールアイドルなんて、そんな・・・」

「ダメすら」

後ろから花丸を抱き締める。小原理事長に脅されて落ち込んでいた時、花丸が俺にしてくれたみたいに。

「そ、天くんっ!？」

「そうやって自分を卑下して、『無理』とか『向いてない』とか言っちゃダメすら。自分の気持ちに正直になるすら」

「・・・マルの真似しないでほしいすら」

「意地っ張りな誰かさんへの罰すら」

「むう・・・」

ジト目で見上げてくる花丸に、俺は笑みを浮かべた。

「ルビイちゃんが正直な気持ちをぶつけてるんだから、花丸も正直な気持ちを言うべきだと思うよ。花丸はスクールアイドルをやりたいの？やりたくないの？」

「・・・やってみたいすら」

小さく呟く花丸。

「でも・・・マルに出来るかな・・・」

「一番大切なのは、出来るかどうかじゃない・・・やりたいかどうかでしょ」  
花丸を抱く腕に力を込める。

「一緒に頑張ろう。俺もサポートするから」

「天くん・・・」

「花丸ちゃん」

ルビィちゃんが花丸に手を差し出す。

「ルビィ、スクールアイドルがやりたい。花丸ちゃんと一緒に」

「ルビィちゃん・・・」

花丸は笑みを浮かべると、ルビィちゃんの手を握った。

「よろしくずら」

「っ・・・うんっ!」

涙を浮かべるルビィちゃん。良かった・・・

「さて、じゃあ善は急げって言うし・・・入部届けを出しに行こうか」

そう言つて花丸から離れようとすると、腕を掴まれた。ルビィちゃんと握手している  
手と反対の手で、花丸が俺の腕を掴んでいる。

「花丸・・・？」

「・・・もう少しだけ。もう少しだけ、このままでいてほしいすら」

耳まで真つ赤にしながら、小さな声で呟く花丸。ルビイちゃんがニヤニヤしている。

「ひよつとして、ルビイはお邪魔だったかな？」

「そ、そんなことはないすら！マルはただ・・・！」

「失礼しまーす」

花丸が慌てて言い訳しようとしていると、千歌さん・曜さん・梨子さんが図書室へと入ってきた。

「あ、花丸ちゃん。ルビイちゃんはどこに・・・って天くん!?」

「ちよつと!?何で花丸ちゃんを抱き締めてるの!?」

「そういう関係なんです」

「「ええっ!?」」

「天くん!?何言ってるすら!?」

「抱き締めたり抱き締められたりする関係なんです」

「言い方っ！間違ってるないけど言い方を考えるすらっ！」

「間違ってるないの!?」

「やっぱりそういう関係なの!?」

「違うぞらあああああつ!? 違わないけど違うぞらあああああつ!?」

「どつちよ!？」

ギヤーギヤー騒いでる四人。それを見て、ルビイちゃんがクスクス笑っていた。

「フフツ、天くんも悪い人だね」

「ルビイちゃんには負けるよ」

笑いあう俺達。と、ルビイちゃんが微笑んだ。

「・・・今回はありがとね、天くん。天くんのおかげで、お姉ちゃんにも花丸ちゃんにも本音が言えたよ」

「ダイヤさんの件は花丸のおかげだし、花丸の件はルビイちゃんが頑張ったからだよ。俺は何もしてないから」

「そんなことないよ。天くんがいなかったら、ルビイは踏み出せてなかったと思う。本当にありがと」

「ルビイちゃん・・・」

屈託の無い笑顔を見せるルビイちゃん。俺はその笑みに、ダイヤさんの面影を見た気がした。

やっぱり姉妹なんだな・・・

「それとね・・・天くんに一つお願いがあるの」

「お願い？」

急にモジモジし始めるルビイちゃん。どうしたんだろう？

「これからはルビイのこと、呼び捨てで呼んでほしいっていうか・・・ほら！花丸ちゃんのことも呼び捨てで呼んでるし、ルビイのこともそう呼んでほしいなって！」

急に早口でまくし立てるルビイちゃん。顔が真っ赤である。

「了解。じゃあ、改めてよろしくね・・・ルビイ」

「っ・・・うんっ！」

「天くん！早くこっちに来て誤解を解くずら！」

花丸が焦っている。やれやれ・・・

「誤解じゃないでしょ。事実なんだから」

「その言い方が誤解を招いてるずら！」

「それより千歌さん、花丸がスクールアイドル部に入りたいそうですよ」

「ええっ!?! ホントに!?!」

「そ、それは・・・ホントずら」

「やったあああああっ!?!」

「ヨーソーっ！」

「ずらっ!?!」

花丸に抱きつく千歌さんと曜さん。と、梨子さんが俺達のところへやってくる。

「それで？今回も天くんが暗躍してたわけ？」

「いや、暗躍って・・・ひよつとして梨子さん、怒ってます？」

「別にいい？天くんが誰を抱き締めようが天くんの自由だし？」

「うわぁ・・・」

めんどくさいなあ、この人・・・何に怒ってるのか知らないけど。

「ほら、拗ねてないで行きますよ。花丸の入部届けを出しに行かないと」

「ちよ、手を引つ張らないでよ!？」

「良いじゃないですか。俺と梨子さんだつて抱き合つた仲でしょ」

「誤解を招く言い方しないでくれる!？」

「ずらっ!?! 梨子さんとも抱き合つてたずらっ!?!」

「違うのよ花丸ちゃん!?! あれはただのスキンシップで・・・!？」

「何か今の会話だけ聞いてると、天くんって女つたらしみたいたよね」

「曜さん、人聞きの悪いこと言わないで下さい。デスノー●に名前書き込みますよ」

「最後までそのネタ引きずるの!?!」

皆でわいわい騒ぎながら、図書室を後にする。

新しくスクールアイドル部に加わった、引つ込み思案な仲良しコンビ・・・花丸とル

ビイがどんな姿を見せてくれるのか、今からとても楽しみな俺なのだった。

一歩を踏み出す為には勇気が必要である。

「ランキングが上がるらないよおおおおっ！」

部屋に置かれたパソコンを前に、頭を抱える千歌さん。

花丸とルビィが加わったのを機に、Aqoursはスクールアイドル専門のサイトに登録した。ここに登録すると、スクールアイドルを応援している人達の評価によってランク付けされるようになるのだ。

このサイトに登録しているスクールアイドルの数は、およそ5000組。現在Aqoursは4768位なので、かなり下の方ということになる。

「昨日が4856位で、今日が4768位・・・」

「落ちてはいないけど・・・」

梨子さんと曜さんも肩を落としている。思うように順位が上がらないことで、もどかしく思っているのだろう。

「確かに人気は大事ですけど、まだ登録したばかりなんですから仕方ないですよ」

俺は苦笑しつつ、お茶の準備を進めていた。

「とりあえず一息つきましましょう・・・はい、お茶と和菓子」

「ずらあああああつ!」

真つ先に花丸が和菓子を頬張る。

花丸は美味しい食べ物に目が無い上、無限大の食欲を誇る大食い娘だったりする。その割りにはメツチャ小柄なんだけど、摂取した栄養は一体どこへいつているのだろうか……

やっぱりおつ p . . .

「……天くん?」

「すいませんでした」

女帝の冷たい視線が飛んでくる。何で人の思考が分かるんだ……

「ん、美味しい!」

ルビイも目を輝かせながら和菓子を食べている。

「天くんの差し入れてくれる和菓子は凄く美味しいって、お姉ちゃんからも聞いてたけど……どこのお店の和菓子なの?」

「東京だよ。向こうに住んだ時、よく通ってた和菓子屋さんがあるんだ。こつちに来てからは、電話で注文して送ってもらってるんだけど」

「ええっ!? 東京の和菓子!?!」

「早く食べなきゃ!」

「二人ともがつつかないの!」

急いで食べようとする千歌さんと曜さんを、梨子さんが嗜める。

「でも天くん、よく和菓子差し入れで振る舞ってくれるけど・・・こういうのって結構高いんじゃない?大丈夫?」

「大丈夫ですよ」

心配してくれる梨子さんに、笑いながら答える俺。

「その和菓子屋の大将と奥さんには、昔からよくお世話になってまして。電話で注文すると、必ず注文した数より多く送ってくれるんですよ。ありがたいことなんですけど、一人じゃ食べ切れなくて・・・」

「じゃあマルが全部食べてあげるぞら!」

「あつ、花丸ちゃんズルい!ルビイも食べる!」

「食い意地を張らないの!」

梨子さんに怒られる花丸とルビイ。

「まあそういうことなんで大丈夫です。大将と奥さんも、『周りから好評だ』って伝えたら凄く喜んでましたから。遠慮なく召し上がって下さい」

「そういうことなら・・・ありがとう。遠慮なくいただきますわ」

微笑む梨子さん。一方、千歌さんは再びパソコンと睨めっこしていた。

「むう．．．どうしたらランキング上がるかなあ．．．」

「んー．．．例えば、名前を奇抜なものにしてみるとか？」

「今からでもスリーマーメイドにします？」

「ぶふううううっ!？」

お茶を飲んでいた梨子さんが盛大に吹き出す。

「ゴホッ、ゴホッ．．．そ、それは忘れてって言ったでしょ!？」

「あ、今はファイブマーメイドですね」

「そういうことじゃないから!」

「じゃあ梨子さんだけ『ピンクマーメイド』を名乗りましょう。苗字が桜内だけに」

「止めてええええええええええっ!？」

顔を真っ赤にしながら俺の胸倉を掴み、盛大に身体を揺らしてくる梨子さん。そんな

に恥ずかしいのかな？

「いや違うから。恥ずかしがってるのは見られた時のことだから」

俺の心を読んだであろう千歌さんのツツコミに、首を傾げる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「リア充に、私はなる！」

「いや、そんな『海賊王に、俺はなる！』みたいに言われても……」  
墮天使の衣装に身を包んだよつちゃんに、呆れた視線を向ける俺。

いつものごとくノートとプリントを届けに来た俺は、よつちゃんの部屋で突然訳の分からぬ宣言を聞かされていた。ちなみに善恵さんは夕飯の買出し中である。

「あの悪夢の日から一カ月半……もう五月の半ばよ。そろそろ学校に行かないと、マジでヤバいわ」

「そうだね。来週から中間試験もあるし」

流石に中間試験を受けないのはちよつとマズい。

赤城先生からも、『中間試験だけでも受けるように、絢瀬くんから津島さんに言ってもらえないかしら?』とお願ひされたほどだ。

「そこで私は覚悟を決めたわ……明日から学校に行く！」

「……熱でもあるの?」

「ちよ、顔が近いわよ!?!」

額と額をくつつけてみるが、熱は無いようだ。

ということ、マジで言ってるのか・・・

「よつちゃん、本当に大丈夫？無理はしなくて良いんだよ？」

「・・・いつまでも甘えてちゃダメなのよ」

小さな声で呟くよつちゃん。

「そろそろ一歩踏み出さないと・・・私は変わらなきゃいけないのよ」

「よつちゃん・・・」

どうやらよつちゃんは本気らしい。なら俺も、よつちゃんの背中を押しあげないと。

「・・・分かった。じゃあ明日は一緒に学校に行こう」

「良いの・・・？」

「勿論。よつちゃんのこととはちゃんとサポートするから、安心して」

「・・・うん。ありがとう」

微笑むよつちゃん。

「フフツ、流石は我がリトルデーモン・・・褒めてつかわずぞ」

「前言撤回。一人で何とかしろバカヨハネ」

「すいませんでしたあああああっ！」

その場で土下座するよつちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

翌朝。

「フフツ・・・今日も良い天気ね、天」

「ソウダネ、ヨツチャン」

優雅な女子高生として振舞うよつちゃんに、カタコトで返事をする俺。

よつちゃんと俺は、学校へと続く坂道を上っているところだった。

「ちよつと天、返事が不自然よ。それじゃ不審に思われるでしょうが」

「いや、不自然にもなるって。よつちゃんの本性を知ってる身としては、その優雅なキヤラが気持ち悪くて仕方ないんだけど」

「酷い!?女の子に『気持ち悪い』とか言うんじゃないわよ!」

「『初対面で下劣だの下等だの言うような奴は、女子としてカウントされない』って、初めて会った時に言ったじゃん」

「あのルールまだ適用されてたの!」

小声でひそひそと話し合っていると・・・

「あ、天くん！」

「おはよー！」

クラス的女子達が声をかけてくれる。手を上げて応える俺。

「おはy・・・」

「おはよう♪」

一瞬で優雅キャラの皮を被ったよっちゃんが、にこやかに女子達に笑いかける。

「お、おはよう・・・」

「えーつと、津島さん・・・だよね？」

「ええ、そうよ」

戸惑う女子達に対し、笑みを浮かべて答えるよっちゃん。

「今までずっと休んでいたんだけど、今日からまた学校に通えることになったの。これからよろしくね」

「う、うん・・・」

「よ、よろしく・・・」

おずおずと答える女子達。

よっちゃんは微笑むと、そのまま優雅な足取りで坂道を上っていく。

「津島さん、雰囲気変わった．．．？」

「あんな子だったっけ．．．？」

「気にしないで。久しぶりの学校に浮かれてるだけだから」

「そ、そうなんだ．．．」

とりあえずそういうことにしておく。

ちなみに言っておくと、クラスメイト達は皆あの自己紹介の時のことを覚えている。あんなにインパクトの強すぎる自己紹介、そうそうお目にかかれないうし。

それだけにあの優雅なキャラが逆に違和感バリバリだということに、よっちゃんは未だに気付いていないらしい。

「そのうち素が出ると思うから、今は優しく見守ってあげて。っていうか、素が出ちゃっても温かい目で見守ってあげて」

「わ、分かった．．．」

「何か天くん、津島さんの保護者みたい．．．」

そんな話をしてしていると、よっちゃんが途中でこちらを振り向いた。

「天、何をしているの？早く行きましょう？」

「はいはい．．．じゃ、よろしくね」

「り、了解．．．」

何とか二人の理解を得られたところで、小走りによつちやんに追い付く。

「見た!? ねえ見た!? 私メツチャ自然に会話してたわよね!」

「ウン、ソウダネ」

「いける! いけるわ! この調子なら上手くやれる! リア充になれる!」

「頑張ッテ。応援シテルヨ」

「ありがとう天! 私頑張る!」

俺がカタコトで返事をしていることにも気付かず、やる気に満ち溢れているよつちやん。

自分では自然だと思っているようだが、ここは不自然さを指摘すべきなのか・・・

「さあ、行くわよ天! 私達の教室へ!」

俺の手を掴み、満面の笑みで歩き出すよつちやん。そんな楽しそうなよつちやんを見ていたら、俺は何も言えなくなってしまった。

「・・・まあ良いか」

よつちやんが笑顔でいられるなら、それに越したことはない。

俺は苦笑しつつ、よつちやんに引つ張られるがままに歩き出すのだった。

自分を変えるというのは簡単ではない。

「な、何がどうなっているすら・・・」

「ぴぎい・・・」

啞然としている花丸とルビィ。

その視線の先では、よつちゃんぐがクラスメイト達とにこやかに会話していた。

「善子ちゃん、キャラが全然違うすら・・・」

「墮天使ヨハネは封印して、優雅な女子高生でいくらしいよ。『あの時みたいなのは犯さないわ!』って意気込んでたけど」

「確かに似合ってるよね。津島さん美人だし」

そんなことを言うルビィ。

確かによつちゃんやんは美人だし、何も知らない人なら違和感も無くあのよつちゃんを受け入れるだろうな。

「でも善子ちゃんの中で墮天使ヨハネは、自分の一部として昇華されてるはずすら。それを完全に封印できるとは思えないすら」

「俺もそう思うんだよね・・・」

そんな俺達の会話をよそに、よっちゃん達は楽しそうに談笑を続けていた。

「ねえねえ、津島さんって趣味とか無いの？」

「し、趣味……？」

あ、よっちゃんが詰まった。ここで墮天使関連のことを口には出来ない……さて、どうする？

「う、占いをちよつと……」

「ホント!？」

「ずーいー!」

色めきたつクラスメイト達。よっちゃん、占いなんて出来たのね……

「私占ってくれる!？」

「私も私も!」

「良いよ!」

笑顔で答えるよっちゃん。皆が盛り上がってくれたのが嬉しかったらしい。

「今占ってあげるね!」

よっちゃんはそう言う……おもむろに黒い衣装に身を包み、魔法陣のようなものが書かれた布を床に広げ始めた。

えっ……

「これで良し！」

シニヨンに黒い羽を刺し、蠟燭を取り出してクラスメイトに差し出すよっちゃん。

「はい、火をつけてくれる？」

「へっ？あ、うん……」

よっちゃんから渡されたチャッカマンで、蠟燭に火をつけるクラスメイト。

学校に何を持ってきてんのよっちゃん……

「天界と魔界に蔓延る遍く精霊、煉獄に墮ちたる眷属達に告げます。ルシファー、アスモデウスの洗礼者……墮天使ヨハネと共に、墮天の時が来たのです！」

「……どこが占い？」

思わずツツコミを入れてしまう俺。よっちゃんは正気に戻ったのか、大量の冷や汗をかいていた。

あーあ……

「ピ……ピ……ンチッ!？」

教室から逃走していく墮天使……あれ、何かデジャヴだわ。

「皆さくん、席に着いて……って津島さん！やつと登校してきてくれたんですね！」

「うわああああああああんっ！」

教室に入ってこようとした赤城先生を押し退け、ダッシュで逃げて行くよっちゃん。

「ちよ、津島さん!?!どこへ行くんですか!?!」

「赤城先生、ストップ」

追いかけてようとする赤城先生の肩を掴む俺。

「絢瀬くん!?!何があつたんですか!?!」

「何も無いですよ。自爆テロがあつただけです」

「重大事件が発生してるじゃないですか!?!怪しげな黒い布と火のついた蠟燭があるのは何ですか!?!」

「犯人の遺品です。花丸、蠟燭の火消して」

「了解ずら」

蠟燭の火を吹き消す花丸。さて・・・

「とりあえず犯人を捕まえてくるんで、先生はそれを使って占いでもやって下さい」

「占い!?!これで占い!?!」

ツツコミを連発している赤城先生をスルーして、よつちゃんを捕獲すべく教室を飛び出した俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「どうして止めてくれなかったのよおおおっ!?!」

部室の机の下で体育座りをしながら、両手で顔を覆っているよっちゃん。

あの後すぐによっちゃんを捕獲したものの、本人が教室に戻ることを頑なに拒否。

仕方ないので保健室で預かってもらい、昼休みによっちゃんの気分転換を兼ねて部室に連れてきたのだった。

「いやあ、あんな物を持つてきてるとは思わなくて・・・」

「私は中学の時まで、『自分は墮天使だ』と思つてた重度の中二病患者よ!?!舐めんじやないわよ!」

「何で偉そうにしてるすら・・・」

呆れている花丸。つていうか、重度の中二病患者つていう自覚はあるのね・・・

「つまり、中学の頃の癖が抜け切つてないつてこと?」

「・・・そういうこと」

ルビイの問いに頷くよっちゃん。

「分かつてるの、自分が墮天使のはずなんてないつて・・・そもそもそんなもんじゃないんだし・・・」

「だったらどうしてあんな物学校に持って来たの？」

机の上に置かれた蠟燭や黒い布を見る梨子さん。

「それはまあ、ヨハネのアイデンティティみたいなもので・・・あれが無かったら、私は私でいられないっていうか・・・ハッ!?」

ヨハネ化しかけたところで、ハッと我に返るよつちゃん。

墮天使ヨハネは、本当によつちゃんの一部として昇華されているらしい。

「・・・何か心が複雑な状態にあるということは、よく分かった気がするわ」  
溜め息をつく梨子さん。難儀だなあ・・・

「だね。実際今でも、ネットで占いやってるみたいだし」

曜さんがパソコンを操作し、ある動画を再生する。

そこに映っていたのは、墮天使の衣装に身を包んだよつちゃんだった。

『フフツ、またヨハネと墮天使しましよ・・・?』

「うわあああああつ!?」

慌ててパソコンを閉じるよつちゃん。あの無駄に凝った衣装は、これに使う為の物だったのね・・・

「とにかくっ！私は普通の高校生になりたいのっ！」

「普通になる理由は何があるんでしょうか？墮天使じゃダメなんんでしょうか？」

「蓮●かつ！『2位じゃダメなんでしょうか？』みたいに言わないでくれる!？」

「んー、じゃあ俺のことを『お兄様』って呼んでみたら?」

「それ『魔●科高校の劣等生』でしょうが!」

「いや、妹の方だから優等生でしょ」

「どっちでも良いわ!そもそもあの兄妹のどこが普通の高校生なのよ!？」

「自分のことを『墮天使ヨハネ』とか名乗らないところだよ」

「うわあああああん!？」

机に突っ伏すよっちゃん。やれやれ・・・

「そんなに普通の高校生になりたいの?」

「なりたいに決まってるでしょ!？」

涙目ですいっと俺に顔を近付けてくるよっちゃん。

「天あ・・・何とかしてよお・・・!」

「はいはい、泣かないの」

よっちゃんの頬に手を当て、目元の涙を親指で優しく拭う。

よっちゃんを普通の高校生にねえ・・・

「・・・可愛い」

「え・・・?」

ボソツと呟く声が聞こえる。振り向くと、千歌さんがパソコンに映し出されたよつちちゃんをマジマジと見つめていた。

「千歌さん……?」

「これだ……これだよっ……!」

千歌さんは勢いよく立ち上がると、よつちちゃんの手を力強く握った。

「津島善子ちゃん……いや、堕天使ヨハネちゃん!」

目をキラキラ輝かせている千歌さん。あつ、これは……

「スクールアイドル、やりませんか!」

「……え?」

「……言うと思った」

訳が分からないといった表情のよつちちゃん。その隣で溜め息をつく俺なのだった。

追い込まれた人は何をしでかすか分からない。

「こ、これで歌うの・・・?」

モノクロの衣装に身を包んだ梨子さんが、しきりにスカートを気にしている。

放課後、俺達は千歌さんの家へとやってきていた。何でも千歌さんが、ランキングを上げる為の良い考えを思いついたらしい。

ホントかなあ・・・

「この前より短い・・・これでダンスしたら、流石に見えるわ・・・」

「マジですか。じゃあちよつとダンスしてみてください」

「話聞いてた!? 見えるって言ってるでしょうが!」

「良いじゃないですか。俺はもう見てるんですし」

「あああああつ!? 聞こえないっ! 何も聞こえないっ!」

しやがみ込んで耳を塞ぐ梨子さん。やれやれ・・・

「つていうか曜さん、よくこんな衣装ありましたね」

「いやー、色々試作品を作ってたんだよねー! 花丸ちゃんとルビィちゃんも加わったし、次の衣装を考えてたら作業が捗っちゃってさー!」

鏡の前で嬉々として衣装を眺めている曜さん。ホントに衣装が好きだな・・・

「それで千歌さん、良い考えって言うのは・・・」

「よくぞ聞いてくれました!」

腕を組み、ふんぞり返る千歌さん。

「ズバリ! Aquorsは堕天使アイドルでいこうと思います!」

「地獄に堕ちろ、単細胞オレンジヘッド」

「段々と罵倒が酷くなってきてるのは気のせい!?!」

「それだけ千歌さんへの信頼が無くなってきてる証拠です」

「酷い!?!」

ショックを受けている千歌さん。いや、堕天使アイドルって・・・

「そのどこが良い考えなんですか・・・」

「調べてみたけど、堕天使アイドルっていなかったんだよ。結構インパクトあると思

うし、良いんじゃないかな?」

「・・・まあインパクトはあるでしょうね」

この前まで正統派アイドル路線だったのに、急に大きく路線を外れて堕天使アイドルだもん・・・

確かに、見てる方からすると衝撃は大きいと思う。

「な、何か恥ずかしい……」

「落ち着かないずら……」

普段着ない衣装を着ているせいか、モジモジしているルビイと花丸。

つていうか花丸、それ以上スカートを持ち上げないで。見えるから。ワ●メちゃんみたいになるから。

「ほ、本当にこれで良いの……?」

墮天使の衣装に身を包んだよつちやんが、おずおずと尋ねる。

あのよつちやんでさえそんなことを言う時点で、俺達がいかに迷走しているかが分かるな……

「これで良いんだよ! ステージ上で墮天使の魅力を皆で思いっきり振りまくの!」

「墮天使の……魅力……」

あつ、よつちやんの心が揺れてる……

「ハツ!? ダメダメ! そんなのドン引かれるに決まってるでしょ!」

おつ、正常な思考を取り戻したようだ。

「大丈夫だよ! きつと大人気だよ!」

「だ、大人気……ククツ……クククツ……」

ああ、完全に堕ちたな……ダメだこりや……

「ハア・・・私、ちょっとお手洗いに行つてくるわね」

溜め息をついて、部屋から退出する梨子さん。梨子さんのには、あまり賛成できるアイデアではなかったようだ。

「よし！墮天使アイドルとして頑張るぞー！」

「おー！」

意気込む千歌さんと、ノリノリな曜さんとよつちゃん。花丸とルビイは苦笑しているところを見ると、梨子さん寄りの考えみたいだ。

「ここは一言言っておくべきか・・・」

「千歌さん、一つ忠告しておきますね」

「忠告？」

首を傾げる千歌さん。何のことか分かっていないらしい。

「本当に墮天使アイドルとしてやっていきたいのなら、別に止めはしません。ですが、ただランキングを上げたいという理由でやろうとしているのなら・・・路線変更はオススメできません」

「え、何で？」

「意味が無いからです」

「バッサリ切り捨てる俺。」



に映った。

あー、梨子さんって犬が苦手なのか・・・

「梨子ちゃん大丈夫！しいたけは大人s・・・うわっ!?」

部屋の襖をぶち破り、梨子さんが部屋に飛び込んでくる。

そして障子もぶち破り、窓から向かい側にある自分の家のベランダへとジャンプした。

「梨子さん!?!」

慌てて窓へ駆け寄ると、梨子さんが空中で一回転しながらベランダに着地するところだった。

何あの人、凄くない？

「「「「「おお・・・!!」」」」」

思わず拍手する俺達。流星は女帝、そこに痺れる憧れる。

「いったあ・・・」

着地の際にお尻を打つたらしく、梨子さんが痛そうにお尻を擦っている。

「梨子さーん、大丈夫ですかー?」

「大丈夫じゃないわよ!?!何で私はこんな目に遭ってるの!?!」

「日頃の行いが悪いんですね、分かります」

「喧嘩売ってる!?! お尻も痛いし最悪よ!」

「いや、お尻もそうですけど．．．もつと気にしなくちゃいけないことがあるでしょ」  
「気にしなくちゃいけないこと?」

首を傾げている梨子さん。あー、気付いてないのか．．．

「梨子さん、今どんな格好してます?」

「どんなつて．．．さっきの衣装を着てるけど?」

「その衣装つてスカートですよね?」

「そうだけど?」

「さっきその衣装、スカートが短いつて言つてましたよね?」

「そうそう。これでダンスしたら、流石に見え．．．る．．．」

梨子さんの顔がどんどん赤くなつていく。ようやく気付いたようだ。

「そ、天くん．．．?」

「何でしょう?」

「ま、まさかとは思うけど．．．み、見てないわよね．．．?」

恐る恐る尋ねてくる梨子さんを安心させるべく、俺はニツコリ笑つた。

「大丈夫ですよ。『今日は白かあ．．．やっぱ梨子さんは清楚だなあ．．．』なんて

思つてませんから」

「嫌あああああああつ!？」

窓を開け、家の中に逃げていく梨子さん。耳まで真っ赤になっていた。

「あつ、梨子ちゃんのメンタルがやられた・・・」

「天くん、そこは見えないフリしなくちゃ・・・」

「危ないマネをした梨子さんに対する、ちよつとした罰ですよ」

しいたけを撫でながら答える俺。

「とりあえず、梨子さんを回収してきますね。曜さんは千歌さん達の衣装を合わせてあげて下さい」

「了解。梨子ちゃんは任せましたよ」

「任せました」

衣装のことは曜さんに任せ、梨子さんを回収すべく桜内家へと向かう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「あら天くん、いらっしやい」

「こんにちは、奈々さん」

『十千万』の隣にある桜内家を訪ねると、梨子さんのお母さんである桜内奈々さんが出てくれる。

桜内家には何度かお邪魔したことがあり、その度に奈々さんには良くしてもらっていた。

「ごめんなさい、梨子は今いないのよ。千歌ちゃんの家に行くんですって」

「その千歌さんの家から脱走したので、捕獲しに来たんです」

「いや、脱走って・・・どこに？」

「ここです。千歌さんの家の窓から、この家のベランダに飛び移りました」

「何してるのあの子!？」

「いやあ、信じられませんか・・・あの跳躍力」

「そこじゃないわよ!？」

とりあえず家にも上げてもらう。二階へと上がり、梨子さんの部屋の前に立つと・・・

『うう・・・また見られた・・・もう本当にお嫁に行けない・・・』

梨子さんの声が聞こえてくる。あー、ダメーヅ受けてるなあ・・・

「何か凄く落ち込んでるんだけど・・・何があったの？」

「聞かないであげて下さい。本人の名誉の為に」

「そこまで!？」

とりあえずドアをノックしてみる。

「ちわー、三河●です」

『ええっ!?!天くんっ!?!』

部屋の中でドタバタ音がする。

『ど、どうしてここにっ!?!』

「犯人に告ぐ。この部屋は完全に包囲されている。大人しく出てきなさい」

『誰が犯人よ!?!立てこもり犯みたいな扱いしないでくれる!?!』

「こんなことして・・・田舎のお袋さんが泣いてますよ」

『田舎じゃなくてこの家にいるんだけど!?!』

「しくしく・・・梨子、罪を償って・・・しくしく・・・」

『お母さん!?!何でノッてるの!?!』

「ほら、千歌さん達のところに戻りましょう?皆待つてますから」

『うう・・・』

ドアがゆつくり開き、赤い顔をした梨子さんが出てきた。

「全く・・・窓からジャンプした時は肝が冷えましたよ」

「うっ・・・ごめんなさい・・・」

「しいたけは大人しい犬ですから、落ち着いて接してあげれば大丈夫ですよ。まあ身体が大きいんで、犬が苦手な人にとっては怖いかもしれませんが」

「うう……」

涙目の梨子さん。よほど犬が怖いらしい。

「とりあえず美渡さんに頼んで、しいたけは繋いでおいてもらいましたから。もう梨子さんを追いかけてたり出来ませんよ」

梨子さんの頭を撫でる。

「あつ……」

「俺も一緒にいますから、安心して下さい」

「……うん」

俯く梨子さん。耳まで赤くなっているのは何故だろう？

「フフツ、梨子ったら照れちゃって♪」

「ちよ、お母さん!? 何言ってるの!?!」

「はいはい、邪魔者は退散するから。じゃあ天くん、梨子をよろしくね」

「了解です」

ニヤニヤしながら階段を下りていく奈々さん。良いキャラしてるなあ……

「さて、俺達も行きましょうか」

先に階段を下りようとする、梨子さんが俺の手を掴んだ。

「梨子さん……？」

「……手、握ってて良い？」

「……どうぞ」

梨子さんの手を握り返す。これで梨子さんが安心できるのなら、お安い御用だ。

「あ、それから……さつき見たものは忘れなさい。良いわね？」

「アツハイ」

やはり女帝には逆らえない俺なのだった。

熱くなると周りが見えなくなるものである。

翌日……

『ハアイ♪伊豆のビーチから登場した待望のニューカメラ、ヨハネよ。皆で一緒に：墮天使しない？』

『『『『『』』』』』

「……やってしまった」

落ち込んでいる梨子さん。

『とりあえずやってみよう』という千歌さんの号令により、墮天使アイドルっぽい感じでPR動画を撮影したのだが……

「何というか……よっちゃん以外似合ってますね、このキャラ」

「そう？結構カッコ良くない？」

ウキウキしている千歌さん。

撮影した動画は既にネットにアップしており、俺達は部室でその反響を確かめているところだった。

「えーっと、Aqoursの順位は……953位です」

「嘘?!」

「ホントに?!」

慌ててパソコンに群がる皆。一気に上がったな・・・

「コメントもたくさん来てますね。『ルビイちゃんと一緒に墮天する!』、『ルビイちゃん最高!』、『ルビイちゃんのミニスカートがとも良いです!』、『ルビイちゃんの手が素敵すぎる!』、『ルビイちゃん、ハアハア・・・』

「いやあ、そんなあ・・・」

照れているルビイ。こうしてみると、ルビイの人气が凄いな・・・最後のコメントは通報して良いと思うけど。

「まあ確かに、このPR動画を見たらこうなるよなあ・・・」

俺はもう一つの動画を再生する。そこには・・・

『ヨハネ様のリトルデーモン四号、黒澤ルビイです・・・一番小さい悪魔だけど・・・可愛がつてね?』

モジモジしながらポーズを決める、衣装に身を包んだルビイの姿があった。

「・・・・・・・・」

「そ、天くん?何で無言でルビイの頭を撫でてるの?」

「いや、何かもう可愛すぎて・・・俺の妹にならない?」

「同じ年だよねえ!？」

ヤバいわこの子、破壊力抜群だわ。ハートをズッキュンされたわ。

一方千歌さんは、ランキングが上がったことにテンションが上がっていた。

「凄いじゃん! 堕天使アイドルいけるよ!」

「フツ・・・堕天使ヨハネの力をもつてすれば、これくらい造作も無いこと・・・」

「オイそこの堕天使、普通の高校生になりたい願望はどこへいった?」

「ハッ!？」

正気に戻るよつちゃん。全く・・・

「だから言ったでしょう。ランキングは上がるって」

「うん、メツチャ上がったね!」

「そしてこうも言ったはずです。それは一時的なものだと」

千歌さんに釘を刺しておく。

「このまま本格的に堕天使アイドルでやっていくのかは、よく考えた方が良いでしょうよ。」

昨日も言いましたけど、目先のことだけ考えて動くと後々痛い目を見ますからね」

「天くん・・・ルビイちゃんを撫でながら言われても、説得力が無いんだけど」

「・・・やめられない、とまらない」

「か●ばえびせん!？」

髪がサラサラで、撫でていても心地良い。

これはヤバい……あつ。

「ヤバいといえは……そろそろかな」

「何が？」

首を傾げるルビィ。その時、校内放送が流れた。

『スクールアイドル部！今すぐ生徒会室にきなさい！』  
ダイヤさんの怒声が流れる。皆冷や汗ダラダラだった。

「えーつと……天くん？」

「PR動画、ダイヤさんもチェックしたみたいですね。正統派アイドルを好むダイヤさんからすれば、堕天使アイドルは邪道……まあ怒るでしょうね」

「それを先に言つてよ!?!雷が落ちるの確定じゃん!?!」

「千歌さんのアホ毛を避雷針代わりに使えませんか？」

「無理だよ!?!」

頭を抱える千歌さんなのだった。

\*\*\*\*\*

「Oh! Pretty bomber head!」

「これのどこがプリティですの!?! こういうものは破廉恥というのですわ!」

PR動画をみて歓声を上げる小原理事長に対し、完全に激怒しているダイヤさん。

案の定、俺達は生徒会室でダイヤさんに説教されていた。

「いやあ、そういう衣装というか・・・」

「キャラというか・・・」

「ああん!」

「ヒイツ!」

言い訳をする千歌さんと曜さんだったが、ダイヤさんに睨まれて悲鳴を上げる。

だからよく考えろって言ったのに・・・

「ルビイにこんな格好をさせて注目を浴びようなどと・・・!」

「ごめんなさい、お姉ちゃん・・・」

「・・・まあ良いですわ」

あ、ルビイが謝ったら怒りが収まった。やっぱりこの人シスコンなのね。

「とにかく『キャラが立ってない』とか『個性が無いと人気が出ない』とか、そういう

狙いでこんなことをするのはいただけませんわ」

「良いぞー、ダイヤさん。もつと言ってやれー」

「天くん!?!どっちの味方なの!?!」

「黒澤ダイヤ先生ですが?」

「まさかの先生呼び!?!」

「でも、一応順位は上がったし・・・」

曜さんが少し食い下がると、ダイヤさんが溜め息をついた。

「そんなもの一瞬に決まっているでしょう?今のランキングを見てみると良いですわ」

パソコンを差し出すダイヤさん。パソコンを受け取り、サイトを開いてみると・・・

「・・・1526位ですわね」

「嘘!?!もうそんなに下がったの!?!」

「だから言ったでしょう?本気で目指すのならどうすればいいか、もう一度考えることですわね!」

再び怒りがこみ上げてきたのか、口調が強くなるダイヤさん。

「そもそも高校生にもなって『墮天使』だなんて、正気とは思えませんわ!」

「っ・・・」

唇を噛むよっちゃん。マズいな・・・

「ダイヤさん、もうその辺で・・・」

やんわり制止しようとするが、ダイヤさんは止まらなかつた。

「あまりにも痛々しいですわ！いい歳して何を考えているんですの!？」

「分かりましたから、少し落ち着いて・・・」

「このような幼稚な振る舞いをするなど、スクールアイドルの恥晒s・・・」

「黙れって言ってんだろぅがッ!」

「っ!？」

大声で怒鳴った瞬間、ダイヤさんがビクリして言葉を失った。千歌さん達や小原理事長でさえ驚いていた。

「そ、天さん・・・?」

「・・・生徒会長ともあろうお方が、言って良いことと悪いことの区別もつかないんですか?」

ダイヤさんに冷ややかな視線を向ける俺。

「・・・今回の件は、千歌さんを止められなかった自分に責任があります。それに関し

ては本当に申し訳ありませんでした」

「そ、天くんのせいじゃないよっ！元はと言えば私がっ！」

「下がって下さい。邪魔です」

慌てて割り込んでくる千歌さんを睨みつけ、後ろへと下がらせる。

「ですが……『墮天使』そのものを否定される謂れはありません。『正気とは思えない』だの『痛々しい』だの『幼稚な振る舞い』だの……ずいぶん好き勝手に言ってくれればいいですか」

ふっふつと怒りが湧き上がる中、ダイヤさんに怒りの言葉をぶつける。

「おまけにさっき何を言いかけました？『恥晒し』？頑張ってスクールアイドル活動をしている人達に向かって、ずいぶん言い様ですね？」

「わ、私はただ……」

「ただ、何ですか？まさか『貴女達の為を思つて』とでも仰るつもりですか？だとしたら余計なお世話ですよ」

「そ、天！少し落ち着いて……」

「人を脅すことしか出来ないヤツはすっこんでろ」

間に入つてこようとした小原理事長も黙らせる。俺はダイヤさんに詰め寄つた。

「そんなに人を馬鹿にして楽しいんですか？そうやって人を見下すことで、優越感に

浸りたいんですか?」

「ち、違いますわ!そんなつもりは……」

「アンタにそんなつもりが無くてモツ!こっちはそうとしか受け取れねえんだよツ  
!」

「もう止めてツ!」

背中に衝撃を受ける。よつちゃんが俺の背中に抱きついていてた。

「もう、いいからっ……十分だからっ……!」

「っ……」

泣いているのか、よつちゃんの身体は震えていた。それを感じ、頭がスーッと冷えていく。

何をやってるんだ、俺は……

「……ゴメン。もう大丈夫」

身体に回されたよつちゃんの腕を優しく叩く。俺から離れるよつちゃん。

やっぱり泣いてたか……

「……ありがとう。おかげで頭が冷えたよ」

「……柄にも無くブチギレてんじゃないわよ」

目元の涙を拭うよつちゃん。

「でも……ありがとう」

「……もう行こっか」

俺はダイヤさんの方を振り向き、深々と頭を下げた。

「……お騒がせして、申し訳ありませんでした」

「天さん……」

ダイヤさんは何か言いたそうにしていたが、俺はそれを無視して千歌さん達へと視線を移した。

「千歌さん達も行きましょう。話は終わったみたいですし」

「う、うん……」

戸惑いながらも、気遣わしげにダイヤさんの方を見る千歌さん。

俺はよつちゃんの手を引いて、生徒会室を後にするのだった。

大切に想うからこそ言えない言葉がある。

「・・・ハア」

屋上で寝転がりながら、溜め息をつく俺。

少し一人になりたかったので、こうして屋上に出てきたのだが・・・やはり気分は晴れなかった。

「何で怒鳴っちゃったかなあ・・・」

「ホントにね。らしくなかったわよ」

独り言を呟くと、思わぬ返事が返ってきた。空しか映っていなかった俺の視界に、よつちゃんの顔が現れる。

「意外だったわ。天でもあんなに怒ったりするのね」

「人間だもの」

「相田み●をかつ！」

ツツコミを入れてくるよつちゃん。相変わらず、良いツツコミではあるんだけど・・・

「よつちゃん」

「何よ？」

「そこに立っていると、スカートの中が丸見えだよ?」

「ッ!?!」

慌てて俺から離れるよっちゃん。

俺の顔の横に立っていた為、寝転がっている俺からはよっちゃんのスカートの中が丸見えだったのだ。

「天のスケベっ! 変態っ!」

「いや、こっちとしても不可抗力だったんだけど…普通スカートで人の顔の横に立ったりしないでしょ」

「うぐっ…」

「流石は墮天使ヨハネ、衣装だけじゃなくて下着まで黒とは…」

「言わんでいいっ!」

よっちゃんから蹴りが飛んできたので、転がって避ける。そのまま上体だけ起こし、俺はよっちゃんと向き合った。

「よっちゃんこそ、少しは元気出た?」

「っ…」

俯くよっちゃん。

ダイヤさんの言葉に一番ショックを受けていたのは、他ならぬよっちゃんだ。墮天使

をあそこまで否定されたのだから。

「……おいで」

「……ん」

隣の地面をポンポン叩くと、よつちゃんが大人しくそこに座った。

「怒っちゃった俺が言うのもどうかと思うけど……ダイヤさんのこと、悪く思わないであげてね。よつちゃんのことを否定するつもりは無かっただろうから」

「……分かっている。っていうか、あれが一般的な反応よ。むしろ墮天使を受け入れる天の方がおかしいわ」

「友達のことを『おかしい』っていうの止めてくんない？」

「事実でしょ」

笑うよつちゃん。

「でも……嬉しかった。受け入れてくれたことも、私の為に怒ってくれたことも……ホント、天には助けられてばかりね」

よつちゃんはそう言うと、俺の肩に頭を乗せてきた。

「……私、やっぱり墮天使は卒業する。普通の高校生になる」

「……よつちゃんはそれで良いの？」

「勿論。むしろ今回のことでスッキリしたわ。やっぱり高校生にもなって、墮天使な

んて通じないもの」

笑顔を見せるよつちゃん。その笑顔は、何だか寂しげなものだった。

「スクールアイドルも止めておくわ。今回迷惑かけちゃったし、また迷惑かけちゃうのも申し訳ないから」

「・・・そっか」

本心ではないことは明らかだった。それでも、これはよつちゃんが選んだこと・・・そこに俺が口を挟むべきではない。

俺はよつちゃんの頭を撫でた。

「よつちゃんが笑顔でいられるなら・・・それが一番だから。墮天使とか関係無しに、俺はよつちゃんの友達だからね」

「・・・うん」

身を寄せてくるよつちゃん。

「天に出会えて良かった・・・ありがとう」

微笑むよつちゃん。

俺達はしばらくの間、お互いに身を寄せ合いながら静かに時間を過ごすのだった。

\*\*\*\*\*

「先程は見苦しいところをお見せして、申し訳ありませんでした」

部屋に戻った俺は、千歌さん達に対して深々と頭を下げていた。

流石に熱くなりすぎたし、千歌さんに対しても失礼なことを言ったしな……

「大丈夫だよ」

千歌さんが微笑みながら、俺の頭を撫でてくる。

「天くんが怒ったのは、津島さんの為でしょ？皆ちゃんと分かっているから」

「そうだよ天くん。気にすることないよ」

「だからほら、頭上げて。ねっ？」

曜さんと梨子さんも声をかけてくれる。先輩方の優しさが心に沁みた。

「……天くん」

ルビイがおずおずと話しかけてくる。

「その……お姉ちゃんのこと、嫌いにならないであげてほしいの。お姉ちゃんも、ちよつと熱くなつちやつただけっていうか……津島さんのことを侮辱するつもりなんて、無かつたと思うから」

「・・・うん。分かっている」

俺もさつき、よつちゃんに似たようなこと言ったしな。ダイヤさんに、よつちゃんを傷付ける意図は無かったはずだ。

「ダイヤさんとも、一度ちゃんと話すから。心配かけてゴメンね、ルビイ」

「うんっ!」

ようやくルビイも笑顔を見せてくれた。と、花丸がキョロキョロと辺りを見回す。

「ところで天くん、善子ちゃんはどこへ行ったずら?」

「ああ、よつちゃんなら帰ったよ」

昨日から色々あって、よつちゃん的にも少し疲れてしまったらしい。気持ちの整理もしたので、今日はもう帰るとのことだった。

「もう墮天使は卒業するってさ。スクールアイドルもやめとくって」

「ええっ!?!そんな!?!」

シヨックを受けている千歌さん。一番熱心に誘ってたもんなあ・・・

「本人がそう言ってるんですから、仕方ないでしょう」

溜め息をつく俺。

「墮天使だって、本当は卒業したくないんだと思います。でも、『普通の高校生になりたい』っていうのも本心でしょうし・・・」

「どうして、墮天使だったのかな．．．？」

ポツリと呟く曜さん。

「どうしてあそこまで、墮天使に拘ってたのかな．．．？」

「．．．マル、分かる気がします」

花丸が口を開く。

「ずっと、普通だったんだと思うんです。マル達と同じで、あまり目立たなくて．．．そういう時、思いませんか？『これが本当の自分なのかな？』って。『元々は天使みたいにキラキラしてて、何かの弾みでこうなっちゃってるんじゃないかな？』って」

「．．．確かにそういう気持ち、あったかもしれない」

梨子さんが呟く。

『どうして自分はこうなのか』、『本当はもっと違う自分じゃないか』．．．俺もそう思ったことがたくさんあった。

よっちゃんもそうなのかな．．．

「幼稚園の頃の善子ちゃん、いつも言ってたんです。『私は本当は天使で、いつか羽が生えて天に帰るんだ』って。多分善子ちゃんもマルと一緒に、キラキラしたものに憧れて．．．善子ちゃんにとっては、それが墮天使だったんだと思います」

「憧れ、か．．．」

自分の憧れたものに情熱を燃やし、全力でそれになりきる……俺の頭の中には、あの人の顔が浮かんでいた。

「ホント……こっちに來てから、似たような人に出会うもんだな……」

「天くん？どうかしたの？」

「何でもないよ。こっちの話」

ルビイの頭を優しく撫でる。今の花丸の話聞くかぎり、このままではよっちゃんが笑顔でいられなくなってしまうだろう。

さて、どうしたものか……

「……やっぱり、諦められないよ」

千歌さんが呟く。

「私は津島さんと……いや、善子ちゃんと一緒にスクールアイドルがやりたい！」  
力強く言い切る千歌さん。全く、この人ときたら……

「……流石ですね、リーダー」

俺は苦笑しながら、ある決意を固めるのだった。

大切に想うからこそ伝えたい言葉がある。

《善子視点》

「・・・これでよし」

マンションのゴミ捨て場に段ボール箱を置きながら、私は小さく呟いた。

この中には衣装を始め、墮天使関連のグッズが全て入っている。墮天使を卒業すると決めた私には、もう必要の無いものだ。

「これで本当に卒業か・・・」

本当は卒業なんてしたくない。でもこれ以上は、周りに迷惑をかけてしまう。

ただでさえ今回、スクールアイドル部の皆に迷惑をかけてしまったのだ。それに：

「天・・・」

こんな私を受け入れてくれた、大切な友達の顔が浮かぶ。

いつも穏やかで温厚なあの天が、私の為に生徒会長に対して本気で怒ってくれた。本当に嬉しかったけど・・・それと同時に、本当に申し訳なかった。

天は生徒会長のことを、心から尊敬できる人だと言っていた。私がいつまでも墮天使を引きずっていたせいで、天は尊敬する生徒会長を怒鳴ってしまったのだ。

これ以上天に迷惑をかけない為にも、墮天使は卒業しないといけない。私はこれから、天とは友達でいたいから。

「・・・バイバイ」

小さく呟き、ゴミ捨て場を後にする。これで私は、墮天使を卒業・・・

「本当にそれで良いの？」

「っ!？」

聞き覚えのある声に、慌てて視線を向ける。そこには・・・

「天!？」

私の大切な友達が立っていた。どうしてここに・・・

「っていうかよっちゃん、ちゃんと分別した？捨てるにしてもちゃんと分別しないと、業者さんが困っちゃうよ？」

「全部燃えるゴミだから大丈夫よ」

「部屋にあったグッズの中に、明らかに燃えるゴミには出せないものもあつた気がするんだけど？」

「・・・火をつければ全部燃えんのよ」

「シニヨン燃やすぞ中二病」

「ごめんなさい」

容赦の無いツツコミに、思わず謝ってしまう。

「・・・何でアンタがここにいんのよ?」

「善恵さんからラインきたんだよね。『善子が断捨離なう』って」

「相変わらず人の母親と仲良しね・・・」

そういえばこの間、『天くんが息子だったらなあ・・・そうだ善子!天くんと結婚しなさい!そしたら天くんは私の息子になるわ!』とか言ってたわね・・・

まあ確かに、天が相手なら悪くないかも・・・って何考えてんのよ私!?

「よっちゃん?何か顔が赤いけど大丈夫?」

「な、何でもないわよ!それより何しに来たのよ!」

「いや、よっちゃんが堕天使を卒業する瞬間に立ち会おうかと思つて。朝早くに来てスタンバってたんだよね」

「・・・アンタねえ」

大方、私のことを心配してくれたんだろう。そんなことの為に、わざわざこんな時間にここまで来るなんて・・・

ホント、バカなんだから・・・

「・・・わざわざありがとね。私は大丈夫よ。もう堕天使は卒業するから」

「・・・俺の目には、大丈夫そうには見えないけど」

「っ……」

見抜かれていた。こういう時の天は本当に鋭い。

「俺はね、よっちゃん。よっちゃんの決めたことに、俺が口を挟むべきじゃないと思つた。だから墮天使を卒業するつて言つた時、何も言わなかつた。本当は卒業したくないんだつて、分かつてたのに」

私から目を離さない天。

「だからせめて、よっちゃんが墮天使を卒業するところに立ち会おうつて。よっちゃんを一人にしたくなかつたから、ここまで来た。でも……今のよっちゃんの顔を見て、やっぱり思つたよ。よっちゃんは墮天使を卒業すべきじゃない」

「……ふざけないで」

天を睨みつける。人の気持ちも知らないで……

「私は普通の高校生になりたいの。ようやく……ようやく気持ちの整理をつけて、墮天使グッズを捨ててきたのに……何でそんなこと言うの？何で私の気持ちを踏みにじるようなことを言うのよ？」

「じゃあよっちゃん……墮天使を卒業して、これから笑顔でいられる自信ある？」

「っ……それは……」

「……無いよね。やっぱり」

寂しそうに笑う天。

「言つたはずだよ、よつちゃん。よつちゃんが笑顔でいられるのが一番だって。大切な友達が、毎日を笑顔で過ごせないなんて・・・俺は嫌だから」

「天・・・」

「普通の高校生になりたいって気持ちを、否定してるわけじゃないよ。でも普通の高校生になることで、よつちゃんが笑顔でいられなくなるっていうなら・・・無理に墮天使を卒業してほしくない。そんな寂しそうなよつちゃん、見たくないから」

「・・・バカ」

天に歩み寄り、天の胸を叩く。

「バカ、バカ、バカ・・・！」

何度も胸を叩く。本当に、どうしてコイツはいつもいつも・・・！！

「何でそんな・・・私に優しくするのはお・・・！」

天の胸に縋る。気付けば、涙が溢れて止まらなくなっていた。

「何で・・・どうして・・・！」

「・・・さつき言つたでしょ」

優しい温もりに包まれる。天が私を抱き締めてくれていた。

「よつちゃんは大切な友達だって。最初は花丸の友達だからとか、借りを返す為だと

か言つてたけど・・・今はそれ以上に、よっちゃんの力になりたい気持ちが強いから」  
微笑む天。

「墮天使ヨハネだつて良いじゃん。それだつてよっちゃんの・・・津島善子の一部なんだから。全部ひつくるめてよっちゃんだつて、俺はそう思うよ」

優しく頭を撫でられる。ホントにコイツは・・・

「それに・・・そう思つてるのは俺だけじゃないよ」

「え・・・？」

「墮天使ヨハネちゃん！」

大きな声が響き渡る。視線を向けると・・・墮天使の衣装を着たスクールアイドル部の五人が、笑顔で立っていた。

「「「スクールアイドル部に入りませんか!」「」」」

「っ・・・」

息を呑む私。アンタ達まで・・・

「・・・良いの? 変なこと言うわよ?」

「良いよ」

「時々、儀式とかするかもよ・・・?」

「そのくらい我慢するわ」

「リトルデーモンになれっていうかも……」

「嫌だったら嫌だつていうずら」

「ぴぎっ！」

笑顔で頷いてくれる皆。と、私の背中に天の手が触れた。

「思いつきり羽ばたくと良いよ。やりたいことをやったら良い。今のよっちゃんには、それが許されるんだから」

「やりたいこと……」

「憧れてるだけじゃなくて、今度は自分の手で掴みにいきなよ。ここで折れたら、墮天使ヨハネの名が泣くよ？」

笑っている天。

全く、そこまで言うのなら……やってやろうじゃない。

「はい、これ」

千歌さんが黒い羽を差し出す。これ、私の……

「昨日部室に忘れていったよ。墮天使ヨハネのアイデンティティなんですよ？」

微笑む千歌さん。

「一緒に頑張ろう？」

「っ……うんっ！」

手を伸ばし、黒い羽を掴む。そして頭のシニヨンに差した。

「墮天使ヨハネ・・・ここに降臨っ！」

「おお、この痛々しい感じ・・・まさによっちゃんって感じがするよ」

「アンタ喧嘩売ってんの!?!」

「よっ、中二病患者」

「やかましいわ！」

そんなツツコミを入れながらも、気付けば自然と笑顔になっている私がいるのだった。

心からの笑顔に勝るものはない。

放課後……

「ふう……」

生徒会室の前で、深く息を吐く俺。

よつちゃんとは正式にスクールアイドル部に加入することになり、早速千歌さん達と一緒に練習に励むことになった。

俺は生徒会の仕事がある為ここに来たのだが……昨日ダイヤさんとあんなことがあったので、顔を合わせるのがとても気まずい。

とはいえ、顔を出さないわけにもいかないからな……よし。

「……失礼します」

思い切つてドアを開ける。そこには、既に席について仕事をしているダイヤさんの姿があった。

「あつ……」

俺を見て驚くダイヤさん。

どういった言葉をかけようか迷った俺だったが、机の上の書類の山を見て黙って席に

ついた。

「・・・今日はいつもより書類が多いですね」

「そ、そうですね・・・」

「とりあえず、こつちを片付ければ良いですか？」

「え、ええ・・・お願いします」

二人で黙々と仕事を進める。時折ダイヤさんがチラッとこちらを窺ってくるが、口を開くことはなかった。

やがて書類が半分ほど片付いた頃・・・

「あ、あの・・・天さん・・・」

意を決したように、ダイヤさんが口を開いた。

「昨日のことなのですが、その・・・」

「ダイヤさん」

恐らく謝ろうとしたダイヤさんの言葉を、俺は途中で遮った。

「俺には・・・姉が二人いるんです」

「はい・・・？」

戸惑うダイヤさん。

何の脈絡も無くいきなり関係無い話をされたら、誰だつてこうなるよな・・・

「上の姉は、高校時代に生徒会長をやっています。弟である俺の目から見ても、立派に生徒会長としての仕事を果たしていました。ただ……」

「ただ……?」

「……生徒会長だった頃の姉は、良くも悪くも真面目過ぎたんです」

苦笑する俺。

「不器用で頭が固くて、融通の利かないところがありまして……周りに頼らず、一人で突っ走ってしまおうような人でした。『自分がやらないといけない』っていう使命感が強くて、俺も当時は側で見えてハラハラしてました」

心の優しい副会長が支えてくれていなかったら、今頃姉は潰れていたかもしれない。彼女には本当に感謝している。

「だから浦の星に来て、ダイヤさんと出会って驚きました。ダイヤさん、当時の姉にそっくりなんですもん」

「わ、私がですか……?」

「ええ。真面目で不器用で頭が固くて……当時の姉を見ている気分です」

「……素直に喜べませんわ」

複雑そうなダイヤさん。まあ『不器用』とか『頭が固い』とか言われてるしな……「だからですかね……何だかダイヤさんのこと、放っておけないんですよ。『側で支

えないと』って思いますし．．．より感情が入ってしまったんです」

俺は頭の中で、昨日のことを振り返っていた。

「昨日、ダイヤさんが墮天使を否定した時．．．当時の姉と重なってしまったんです。学校の為に一生懸命頑張っていた人達のことを、姉が否定したことがあって．．．俺はそれがとても悲しくて、『何でそんなことを言うんだ』って怒りました。その人達は、俺にとつて大切な人達で．．．だからこそ、姉が認めてくれなかつたことが悲しくて。そんな姉とダイヤさんが重なって、ついあんなに怒ってしまいました」

「天さん．．．」

「ダイヤさんに対して、あそこまで怒る必要は無かつた．．．よつちやんの気持ちも考えたら、もつと穏便に済ますべきだった．．．結果として俺はダイヤさんを傷付け、よつちやんを泣かせてしまいました。とてもじゃないですけど、姉のことを言えた義理ではありませんね」

俺は椅子から立ち上がり、ダイヤさんに対して深く頭を下げた。

「昨日は本当に申し訳ありませんでした」

今の俺にはこれしか出来ない。ダイヤさんから罵倒されても仕方が無い。

だが．．．

「．．．頭を上げて下さい、天さん」

柔らかな両手で頭を支えられ、そのまま元の位置へと戻される。

「昨日家に帰ってから、ルビィに津島さんのことを聞きましたわ。私があの時、どれほど津島さんを傷付ける発言をしていたのか・・・ようやく気付きました」

「ダイヤさん・・・」

「おまけに熱くなりすぎて、スクールアイドル部を貶すような言葉まで言いかけてしまつて・・・天さんが止めてくださつて、本当に助かりましたわ」

ダイヤさんは優しく微笑むと、今度は両手を俺の頬に添えた。

「・・・天さんは、お姉様のことをとても大事に思われているのですね。だからこそ、そんなお姉様と重なる私を大事に思つてくださっている・・・本当に嬉しく思いますわ」  
ダイヤさんの額が、俺の額にコツンと触れた。

「これからもどうか、私のことを支えて下さい。間違つていると思えば、遠慮なく怒つていただいて構いません。私は天さんのことを、心から信頼していますわ」

「・・・優し過ぎますよ、ダイヤさん」

「それはお互い様ですわ」

面白そうに笑うダイヤさん。

「私もルビィも、そしてスクールアイドル部の皆さんも・・・天さんの優しさに助けられた身ですから。これからも頼りにしますわよ、天さん」

「・・・ご期待に添えるよう頑張ります」

「よろしい」

笑顔で頷くダイヤさん。

「さて、残りの書類を片付けてしましましょう。早くしないと日が暮れてしましますわ」

「そうですね。さっさと終わらせちゃいましょうか」

笑い合い、再び仕事を再開する俺達。

「あ、ダイヤさん」

「何ですか?」

「確かにダイヤさんは姉に似てますけど・・・それを抜きにしても、俺はダイヤさんのことを大事に思ってますから。それは忘れないで下さいね」

「つ・・・ズルいですわ・・・」

何故か顔を赤くするダイヤさんなのだった。

\*\*\*\*\*

「お待たせしました」

「遅いよ天くん！私はもうお腹ペコペコなんだから！」

「私もお腹空いた！」

お腹を押さえている千歌さんと曜さん。

生徒会の仕事も終わり、俺はスクールアイドル部の皆と正門の前で合流していた。

「でも善子ちゃん、本当に良いの？大勢で押しかけちゃって・・・」

「ヨハネよ。呼んだのはお母さんなんだから、遠慮する必要なんて無いわよ」

梨子さんの問いに、溜め息をつきながら答えるよっちゃん。実は今朝のやりとりの後、俺はよっちゃんの家にお邪魔して善恵さんに事情を説明していたのだ。

よっちゃんがスクールアイドル部に入ると知った善恵さんの感激っぷりは尋常ではなく、よっちゃんと俺を抱き締めて号泣してしまうほどだった。

その後『今夜はお祝いよ！』と高らかに宣言した善恵さんは、今夜の夕飯の席に俺とスクールアイドル部の皆を招待してくれた。

そんなわけで俺達は、これから津島家で夕飯をご馳走になる予定なのだ。

「全く、何がお祝いよ・・・たかだか部活に入っただけだっていうのに・・・」

「いや、引きこもりの娘が部活に入ったら喜ぶでしょ。善恵さんはよっちゃんのこと、

凄く心配してたんだよ？俺もよく相談に乗ってたもん」

「何であの人は娘の同級生に相談してんのよ・・・」

呆れているよっちゃん。

まあよっちゃんも、心配をかけてしまったことは申し訳なく思っているようだ。善恵さんが号泣してる時、よっちゃんもつられて泣いてたし。

「今日の夕飯は豪華にするんだって、善恵さん張り切ってたっけ・・・食い意地を張るであろう花丸に、ほとんど食べられちゃう気がするけど」

「天くんはマルを何だと思ってるぞら!？」

「胃袋ブラックホール娘」

「否定出来ないのが辛いぞら!」

「だ、大丈夫だよ花丸ちゃん！花丸ちゃんはいくら食べてもスタイル良いもん!」

「ル、ルビイちゃん・・・!」

「そうだね。花丸は栄養がお腹周りじゃなくて、別の場所に行ってるもんね」

「・・・花丸ちゃんはルビイの敵だね」

「ルビイちゃん!？」

瞳から光が消えたルビイの一言に、ショックを受けている花丸。

やっぱりルビイ、気にしてたんだね・・・

「私も花丸ちゃんに負けないくらい食べるよ！」

「私も負けないからね！」

「望むところずら！」

「・・・何でルビイのには栄養が行かないんだろう」

「げ、元気出してルビイちゃん！」

千歌さんと曜さんが花丸と張り合い、梨子さんは落ち込んでいるルビイを必死に励ましていた。

賑やかだなあ・・・

「全く、騒がしいわね」

いつの間にか、よっちゃんが俺の隣を歩いていった。

「どうやら、私の静かな日常は終わりみたいね」

「静かな日常（笑）」

「何笑ってんのよ!？」

「wwwwww」

「草を生やすなっ！」

ムキーツと怒っているよっちゃん。相変わらず面白いなあ・・・

「まあ、静かな時間を過ごすのも大切だと思うけどさ・・・こうやって皆でわいわいやつ

てる時間も、悪くはないでしょ?」

「・・・まあね」

照れたようにそつぽを向くよつちゃん。

「こんな時間を過ごさせるのも、その・・・アンタのおかげよ。ありがとう」

「あ、よつちゃんがデレた」

「デ、デレてなんかないんだからっ!」

おお、ツンデレのテンプレみたいなセリフ・・・よつちゃんはツンデレだったのね。

「・・・よつちゃんの力になれたのなら、良かったよ」

よつちゃんの頭を撫でる。

「スクールアイドル、俺もサポートするから。一緒に頑張ろうね」

「・・・うん」

小さく笑いながら頷くよつちゃん。

「期待してるよ。堕天使ヨハネ様」

「・・・善子」

「え・・・?」

「・・・善子で良いわよ」

顔を赤くしながら言うよつちゃん。嘘だろオイ・・・

「名前で呼ばれるの、嫌がってなかったっけ……?」

「……アンタには、名前で呼んでほしいなって思ったのよ。『ヨハネ』じゃなくて、『善子』って……私の大切な友達だから」

耳まで真つ赤になっているよつちちゃん。そっか……

「……ありがとう、善子」

「っ!」

「これからもよろしくね、善子」

「ちよ、何度も呼ばなくて良いから……!」

「善子おとおおっ!」

「うにゃあああああっ!」

両手で顔を覆いながら、全力で走り去る善子。

「え、善子ちゃん!?!どうしたの!?!」

「ヨハネよおとおおっ!」

「ちよ、待ってよ善子ちゃん!?!」

「だからヨハネだつてばあああああっ!」

「善子ちゃあああああんっ!?!」

「ヨハネえええええっ!」

千歌さん、曜さん、花丸が慌てて追いかけていく。やれやれ・・・

「ほらルビイ、落ち込んでる場合じゃ無いよ」

「ぴぎっ!?!天くん!?!」

「梨子さんも早く。置いてかれちゃいますよ」

「ちよ、天くん!?!」

ルビイと梨子さんの手を引き、笑みを浮かべながら善子達の後を追いかける。

気付けばルビイも梨子さんも、千歌さんも曜さんも花丸も笑っていた。そしてもう一

人・・・

先頭を走る善子の笑顔は、今までで一番輝いて見えたのだった。

高いハードルを越えるのは簡単ではない。

「そ、そうだよねー！」

教室でクラスメイト達と会話している善子。

学校に来るようになり、クラスメイト達と会話することも増えたのだが・・・

「マ、マジムカつく、よねー！」

まだ慣れていないせいも、もの凄くたどたどしい。大丈夫だろうか。

「だよねー！ホント頭にきちゃってさー！」

「いやー、マジないわー！」

そんな善子の様子をクラスメイト達も分かっているの、たどたどしい様子に誰も触れたりはしない。

善子に無理をさせない範囲で親睦を深めようと、こうして善子に話しかけてくれているのだ。

良い人達だなあ・・・

「善子ちゃん、少しずつ普通に会話が出来るようになってきたずらね」

少し安心した様子の花丸。

「また墮天使キャラで暴走するんじゃないかって、最初は心配してたすら」  
「まあそれで二回やらかしてるからね」

もうやらかすことがないよう、クラスメイト達の前では墮天使キャラを出さないようにしたいらしい。墮天使キャラを捨てるつもりは無いが、普通の高校生にはなりたいたいんだそう。

まあ善子の今後を考えると、墮天使を抜きにした普通の会話も出来るようになった方が良いよな。

「これからゆっくり慣れていけば良いんじゃないかな。無理に焦る必要も無いでしょ」

「そうすらね」

頷く花丸。と、そこへルビイが息を切らして飛び込んできた。

「た、大変だよっ!」

「ルビイちゃん!?!どうしたずら!?!」

「学校が・・・学校が・・・!」

「落ち着いて、ルビイ」

ルビイの背中を擦り、ペットボトルの水を差し出す。それをゴクゴク飲んだルビイは、衝撃の一言を口にするのだった。

「学校が・・・学校が無くなっちゃう！」

「・・・えっ!？」

\*\*\*\*\*

「説明していただけますか、小原理事長」

放課後に理事長室を訪れた俺は、目の前に座る小原理事長に冷たい視線を向けていた。

「浦の星が廃校になるとするのは本当ですか？」

「・・・耳が早いわね」

溜め息をつく小原理事長。

「浦の星女学院は沼津の高校と統合し、廃校となる・・・正式に決まったわけではないけど、そういう方向で話が進んでいるのは事実よ」

「・・・統合ですか」

唇を噛む俺。

ルビイは小原理事長とダイヤさんの会話を偶然聞いてしまったらしく、慌ててそれを俺達に伝えに来てくれたらしい。そして今の小原理事長の説明は、ルビイが教えてくれた内容と全く同じものだった。

やっぱり事実だったか・・・

「ずいぶん話が早いですね。共学化を目指す話はどこへいったんですか？」

「・・・運営が水面下で調査した結果、来年浦の星への入学を希望している生徒は今年より少ないみたいなの。最悪の場合、入学する生徒が一人もない可能性もあるそうよ」

「・・・0ってことですか」

「ええ。共学化したところで、状況が良くなることはないだろうというのが運営の判断みたい。ただできさえ今年の入学者数は、運営の想定をはるかに下回っている・・・一気に統廃合の話が進んでも、おかしくはないわ」

肩をすくめる小原理事長。

「元々統廃合の話は二年前・・・私達が一年生の時からあったのよ。決して今に始まった話ではないの」

「・・・それでスクールアイドルを始めて、学校の危機を救おうとしたんですか？」

「ッ!？」

驚きのあまり立ち上がる小原理事長。

「ど、どうして天がそれを・・・!?」

「貴女がダイヤさんや果南さんと共に、スクールアイドルをやっていたことは知っています。動機に関してはあくまでも予想でしたけど・・・どうやら当たったみたいですね」

溜め息をつく俺。

「統廃合を阻止する為にスクールアイドルを始めたものの、何らかの理由で挫折して貴女達は解散した。そしてその二年後、今度は後輩達がスクールアイドルを始めた・・・貴女はそれを利用してしようとしているんでしょ？統廃合を阻止する為に」

冷ややかな目を向ける俺。

「そして俺を脅し、マネージャーをやらせることにした。俺の過去を知っている貴女にとつて、俺はさぞかし利用価値のある駒なんでしょうね」

「天・・・」

悲しげな表情の小原理事長。人を脅しておいて、よくもまあそんな顔が出来るものだ。

「スクールアイドルとして有名になることで学校をPRし、廃校を阻止する・・・五年

前の  $\mu$  s は、それを見事に成功させました。貴女はそれを A q o u r s に求めようとしていたようですが・・・そう上手くいくとは思わないことですね」

強い口調で小原理事長に忠告する。

「このまま浦の星が廃校になるのは、俺だつて嫌です。ですが俺は、あの時の  $\mu$  s の役割を A q o u r s に求めようとは思いません。そもそも  $\mu$  s と A q o u r s では、スクールアイドルを始めた動機が違います」

$\mu$  s がスクールアイドルを始めたのは、音ノ木坂の廃校を阻止する為。一方 A q o u r s がスクールアイドルを始めたのは、輝きたいという思いがあったから。

最初から廃校阻止が目的で動いているならともかく、途中からそんな重荷を背負わせるのはあまりにも酷だ。最悪の場合、責任が重過ぎて潰れてしまうかもしれない。

「貴女がどんな思惑で動こうが、それは貴女の自由です。ですが、それによつて A q o u r s が不利な状況に追い込まれるようなら・・・俺も黙っているつもりはありませんので」

一礼して踵を返し、出口へと足を向ける。

「・・・大事に思っているのね、あの子達のこと」

ドアに手をかけたところで、小原理事長から声をかけられる。

「貴方は昔から不思議な子だったわね、天。人見知りだった私が、貴方に対してはいつ

もベツタリくつついてて。私のパパやママ、使用人の皆も貴方を気に入っていたわ」  
当時は懐かしんでいる小原理事長。

「浦の星でもあの子達は勿論、ダイヤや果南だって貴方を信頼している。貴方なら、  
きつと・・・」

そこまで言いかけて口を閉ざす小原理事長。俺は無言で理事長室を後にするのだっ  
た。

\*\*\*\*\*

「私達が学校を救うんだよ！そして輝くの！あの $\mu$  sのように！」

「雷●八卦」

「ぐはっ!？」

テンションマックスの千歌さんの後頭部に、ハリセンをフルスイングで叩き込む。  
理事長室を後にした俺は、スクールアイドル部の部室へとやってきていた。

「お、女の子を相手に容赦の無い攻撃・・・」

「天くんが鬼・・・っていうか、カ●ドウに見えるのは気のせいかしら・・・」  
「ああん・・・？」

「「ヒイツ!?!」」

悲鳴を上げる曜さんと梨子さん。俺は千歌さんへと視線を向けた。

「そこで机に突っ伏してオレンジヘッド、早く起きてもらって良いですか？」

「誰のせいだと思ってるの!?!」

涙目でガバツと顔を上げる千歌さん。

「今もの凄い衝撃だったよ!?! ツツコミのレベルを超えてたよ!?!」

「人の虫の居所が悪い時に、人が望まないセリフ言うの止めてもらえますか? さっきまでのシリアスな空気がぶち壊しな上に、小原理事長に食ってかかった俺がバカみたいなんですけど。このいたたまれない気持ちをどうしてくれるんですか」

「知らないよ!?! 何があったの!?!」

全く、この人ときたら・・・

「っていうか、何で浦の星が廃校になるかもしれないのにテンション高いんですか」

「だって、sと同じ状況だよ!?! これは私達が学校を救うしかないよ!」

「アンタの脳内はお花畑か」

ダメだこの人、何も分かってない。

そんな簡単に学校の廃校危機を救えるなら、誰も苦労したりしないっていうのに……

「で、何でその胃袋ブラックホール娘まで期待に満ち溢れた顔してんの？」

「ずらあ……！」

目がキラキラしている花丸。ルビイが苦笑している。

「ほら、統合先の学校って沼津でしょ？花丸ちゃん、沼津の学校に通えるのが嬉しいみたいで……」

「ああ、『未来ずら』症候群か……」

どんな生活をしているのか知らないが、花丸は機械的・都会的と呼べるものには本当に目がない。

この間も俺・花丸・ルビイの三人で沼津に行ったら、『未来ずらくっ！』を連呼していたし……

ホントにどんな生活してんのこの子……

「で、逆に何でその墮天使は落ち込んでんの？」

「統廃合反対統廃合反対統廃合反対……」

呪文のようにぶつぶつ呟いている善子。何か怖いんだけど……

「ほら、善子ちゃんの家って沼津にあるでしょ？つまり善子ちゃんが通ってた中学も、沼津にあるわけで……」

「ああ……中学時代の黒歴史を知ってる人が、統合先の学校に進学してる可能性があるのね……」

俺が納得していると、千歌さんが机をバンツと叩いた。

「とにかく！廃校の危機が学校に迫っていると分かつた以上、A q o u r s は学校を救う為に行動します！」

「……本気ですか？」

千歌さんに尋ねる俺。

「簡単なことじゃないですよ。そもそもただの一生徒に過ぎない俺達では、やることに限度があります。それでもやるつもりですか？」

「勿論！」

力強く言い切る千歌さん。

「私、浦の星が好きだもん！やれることはやりたいんだよ！」

「ヨーロッパ！賛成であります！」

「このまま何もしないっていうのも嫌だしね」

「統廃合なんてさせるもんですか！私は断固として抗うわよ！」

「まあ確かに、この学校が無くなっちゃうのは寂しいですね」

「ルビイもこの学校が大好きだし、無くなってほしくないよ！」

他の皆も同じ意見らしい。やれやれ、人の気も知らないで……

「……それで？行動って何をするつもりなんですか？」

「いやあ、まだ何も考えてないんだ……ごはあつ!？」

再び千歌さんにハリセンをぶちかます俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「学校を救う、ですか……」

複雑そうな表情のダイヤさん。

スクールアイドル部の練習後、俺はダイヤさんに呼ばれて生徒会室へやってきた。話があるとのことだったが、恐らく統廃合のことだろう。

「μ'sと同じことが、あの子達に出来るのでしょうか……」

「……今の状態では厳しいでしょうね」

溜め息をつく俺。

「そもそも浦の星は、音ノ木坂と比べて統廃合撤廃のハードルが高いと思います」

「どうしてですか？」

「立地条件が不利なんですよ」

説明する俺。

「音ノ木坂は東京にあるので、交通の便が良く通学しやすい環境にあります。それに対して浦の星がある場所は、沼津の中でも外れの方にある内浦ですから。交通の便はあまり良くないですし、通学しやすい環境とは言えない……これは大きなマイナスですよ」

「確かに……内浦に住んでいるならともかく、外から来る人にとって良い環境とは言えませんわね……」

「ええ。とはいえ入学者数を増やすには、内浦の外に住んでいる人も呼び込まないとけません。となると……」

「多少通学に不便しても、浦の星に入学したいと思わせる何かが無いといけない……つまり、浦の星に入学するメリットをPRする必要がありますわね……」

「そうなりますね。通学が不便というデメリットを抱えている分、超えるべきハードルは音ノ木坂よりも高いと俺は思います」

「……これは難問ですわ」

頭を抱えるダイヤさん。

「勿論、浦の星の良いところはたくさんありますが……外から来る人にとって、デメリットを超えるほどのメリットは何かと聞かれると……」

「……答えに困りますよね」

二人揃って溜め息をついてしまう。メリットかあ……

「まあ、それはこれから考えるところとして……もう一つ、別の話をしましょうか」  
気持ちを切り替えるように、ダイヤさんがパンツと手を叩く。

「別の話というと？」

「実は明日から、教育実習生の方がいらっしやる予定なのです。そのことで少し、天さんにお願ひしたいことがあります」

「……統廃合の話が進んでる中で、よく教育実習生を受け入れましたね」

呆れる俺。そもそも統廃合の問題でバタバタしている中、やってくる教育実習生の方も可哀想だと思っただけ……

「私もそう思ったのですが……鞠莉さんが独断で決めてしまいました」

溜め息をつくダイヤさん。あの成金理事長……

「何でもその教育実習生の方は、自ら浦の星を希望されたそうですよ」

「へえ……浦の星の卒業生の方ですか？」

「いえ、母校は東京の方だそうです」

「・・・何で浦の星を希望してるんですか？」

「さあ・・・不思議ですわね」

首を傾げるダイヤさん。

教育実習って、通常は母校でやることが多いはずだよな・・・東京に母校がある人が、何でよりによって浦の星での教育実習を希望してるんだ・・・？

「まあどんな理由があれ、この学校を希望してくださっているんですもの。私としても無下にしたくはありませんし、出来る限り力になって差し上げたいですわ」

微笑むダイヤさん。ダイヤさんは優しいなあ・・・

「教育実習生の方の指導は赤城先生が担当されるそうですので、実習は一年生のクラスで行なわれることになります。ですので天さんには、教育実習生の方が溶け込みやすい環境を作つてあげてほしいのです」

「つまりクラスの皆と打ち解けられるように、それとなく気を遣つてあげてほしいっていうことですか？」

「そういうことです。赤城先生ともお話しさせていただきましたが、こういった役は天さんが適任だろうと仰っていました。お願い出来ますか？」

「またあの人は・・・」

ウチのクラスはフレンドリーな人がほとんどだし、俺が動かなくても大丈夫な気がす

るけど・・・

まあダイヤさんの頼みだし、断る理由も無いか。

「分かりました。やってみます」

頷く俺。

まさか教育実習生があの人だとは・・・この時はまだ知る由も無いのだった。

誰にでも秘密にしていることはある。

翌日・・・

「そういうわけだから、皆よろしくね」

「「「「おくっ！」「」」」」

朝のホームルーム前、俺は教室でクラスの皆に事情を説明していた。流石はフレンドリー軍団なだけあって、皆快く返事をしてくれる。

「教育実習生ってどんな人かな？」

「イケメンだったりして!?!」

「キヤーツ！」

「いや、女性らしいよ」

「ええっ!?!イケメンじゃないの!?!」

「でも待って！イケメン系女子っていう可能性があるわ！」

「それなら良し！」

「良いんだ・・・」

っていうか、よくそんなテンション上げられるな・・・

あそこで机に突っ伏してゐる墮天使とは大違いだわ。

「知らない人が来る知らない人が来る知らない人が来る……」

ヤバいな、善子……完全に病んでるじゃん……

「ぴ、ぴぎい……こ、怖い人じゃないと良いなあ……」

涙目になつてゐるルビイ。ああ、ここにも人見知りが……

「善子ちゃんもルビイちゃんも落ち着くずら」

二人を宥める花丸。

「こういう時は、教育実習生さんをじゃがいもだと思えば良いずら」

「それは違うと思う」

「ずら!?!」

俺・善子・ルビイが同時にツツコミを入れる。むしろこの場合、教育実習生さんが俺達をじゃがいもだと思うケースだよな……

そんなやり取りをしていると、朝のホームルーム開始を告げるチャイムが鳴った。

「は〜い皆さん、席についてくださいね〜」

教室に入ってくる赤城先生。俺達が席に着くと、赤城先生が俺達を見回した。

「皆さんご存知だとは思いますが、今日から教育実習生の方がこのクラスにやってきます。入ってきてください〜い」

「は、はいっ!」

赤城先生の呼びかけに、上ずった返事が返ってくる。

あれ、今の声って……

「し、失礼しますっ!」

教室のドアが開き、スーツ姿の女性が入ってくる。綺麗な青い髪を腰の辺りまで伸ばした、とても美しい女性……

「えっ……」

「天くん?」

絶句してしまう俺。そんな俺を、隣の花丸が不思議そうに見つめていた。

「それでは、自己紹介をお願いします」

赤城先生に促され、女性が緊張した面持ちで俺達の前に立った。

「は、初めまして!教育実習で浦の星女学院に参りました、園田海未と申します!よ、よろしくお願ひしましゅっ!」

「えっ……ええええええええええっ!」

『今噛んだでしょ』などとツツコミを入れる暇もなく、ルビイの絶叫が響き渡った。

「そ、園田海未さんっ!?! μ s のメンバーのっ!?!」

「ずらっ!?!」



「・・・やってしまいました」

机に突っ伏して落ち込んでいる海未ちゃん。

放課後、俺は海未ちゃんを連れてスクールアイドル部の部室へとやってきていた。

「あんな醜態を晒して・・・もう教育実習なんて出来ません・・・」

「相変わらずメンタル弱いねえ・・・」

溜め息をつく俺。一方・・・

「な、何でμ sの園田海未さんがここにいるの!?!」

「教育実習生ってどういうこと!?!お姉ちゃん知ってたの!?!」

「私も知りませんでしたわ! 一体何がどうなってますの!?!」

ヒソヒソ話している千歌さん、ルビィ、ダイヤさん。

μ s大好きトリオの三人は、海未ちゃんを興奮と戸惑いの入り混じった表情で見つめていた。

「ほら海未ちゃん、あそこに海未ちゃんのファンがいるよ。ラブアローシュートで打ち抜いてあげなよ」

「人が落ち込んでる時に黒歴史を持ち出すの止めてもらえます!?!」

「ちなみに推しは穂乃果ちゃん、花陽ちゃん、エリーチカだつて」

「私のファンじゃないじゃないですか!？」

「えーつと、天くん・・・?」

俺と海未ちゃんが会話していると、曜さんがおずおずと話しかけてきた。

「一応聞いておきたいんだけど・・・そちらの女性は、μ s の園田海未さんで合つてるんだよね・・・?」

「そうですね。恥ずかしがり屋のくせに、ステージ上ではメチャクチャ投げキッスしまくつてた園田海未ちゃんです」

「その紹介やめてもらえますか!？」

「じゃあ、ラブアローシユーターの園田海未ちゃんです」

「それもやめて下さい!」

海未ちゃんはコホンツと咳払いをすると、曜さん達の方に向き直つた。

「改めまして・・・浦の星女学院に教育実習で参りました、園田海未と申します。高校時代はスクールアイドルグループ・μ s の一員として活動していました。よろしくお願い致します」

深々と頭を下げる海未ちゃん。

今の自己紹介が、今朝のホームルームで出来たら良かったのに・・・

「や、やっぱり本物なんですネ！」

「あ、あのっ！サインしていただいても良いですか!？」

「わ、私もお願いします!！」

「私で良ければ喜んで」

差し出された色紙に、スラスラとサインを書いていく海未ちゃん。色紙なんてどこから持ってきたんだろう・・・

「「「やったあ!！」」」

サインを胸に抱え、大はしやぎしている三人。ダイヤさんに関しては、もうスクールアイドル好きを隠す気すら無いようだ。

「フフツ、凄く盛り上がりようね」

小原理事長が笑いながらやってくる。

「Surpriseは大成功といったところかしら?」

「帰れ成金」

「相変わらず辛辣ね!？」

涙目の小原理事長。

この人が関わっていることは間違いないので、ここで洗いざらい白状してもらおうことにしよう。

「で、どういうことですか？」

「単純な話よ。彼女の方から、『浦の星女学院で教育実習をさせてもらえないか』という打診があつたの」

「・・・ホントなの？」

「本当ですよ」

俺の問いに頷く海未ちゃん。

「私は本来、母校である音ノ木坂で教育実習を行うのが普通なのですが・・・やむをえない事情があつて、音ノ木坂での教育実習は避けるべきと判断したのです」

「ああ、ひよつとして、sが有名だから？」

「それもあるのですが・・・それよりさらに重大な問題がありまして・・・」

神妙な表情の海未ちゃん。そんなに重大な問題なんだろうか・・・

「音ノ木坂は・・・生徒数が多すぎて、私の精神が持たないんです」

「教師目指すのやめちまえ」

「酷い!？」

シヨックを受けている海未ちゃん。心配して損したわ・・・

「あれだけの観客を前に歌って踊ってた人が、今さら何『精神が持たない』とか言い始めちゃつてんの？」

「あれは九人いたからです！今の私は一人で教壇という名のステージに立ち、一人で授業という名のライブをしなければいけないんですよ!？」

「何ちよつと上手いこと言ってるの?」

「つていうか、その道を選んだのは海未ちゃん自身だろうに・・・」

「で、生徒数の少ない浦の星を選んだと・・・」

「それもありませんが、やはり天がいるというのが大きいですね。理事長からの勧めもありましたし」

「ああ、あの人経由で打診したのね・・・」

絶対面白がってるよね、あの人・・・

と、俺の制服の裾を誰かが掴んだ。振り向くと、困惑した表情の梨子さんが立っていた。

「ね、ねえ天くん・・・? 園田さんとずいぶん仲が良いみたいだけど・・・あのμ s のメンバーである園田さんと、一体どういう関係なの・・・?」

「そ、そうすら! 何でμ s のメンバーの人とそんなに親しいすら!？」

「こつちはさつきから、それが気になって仕方ないんだけど!？」

花丸と善子も尋ねてくる。ですよねえ・・・

「天、彼女達に何も説明してないんですか?」

「いや、自分から言いふらすのも良くないと思って・・・特にここにいる皆は、μsのこと知ってるしさあ・・・」

「ああ、なるほど・・・とはいえ、もう説明するしかないのでは？こんな状況になつてしまいましたし」

「そうだね。海未ちゃんが俺に黙つてここに来なかつたら、こんな状況になつてないし説明する必要も無かつただろうね」

「すみませんでした」

もの凄いスピードで頭を下げる海未ちゃん。やれやれ・・・俺は溜め息をつくくと、皆の方へと向き直つた。

「俺と海未ちゃんがどういった関係なのか・・・それを説明する為にはまず、皆さんに俺の名前を思い出してもらう必要があります」

「名前？」

首を傾げる千歌さん。

「名前つて・・・天くんでしょ？」

「千歌さん、俺のフルネームつて覚えてます？」

「あつ、バカにしてる!?!」

頬を膨らませる千歌さん。

「私だつてそれくらい覚えてるよ! 『絢瀬』天くんでしょ!」

「正解です。よく言えました」

千歌さんの頭を撫でる俺。千歌さんの顔がニヤける。

「え、えへへ・・・」

「おーい、千歌ちゃん?」

「はっ!」

曜さんの呼びかけで正気に戻る千歌さん。慌てて俺の手を払い除ける。

「そ、そんなのに騙されないとんだから!」

「思いつきり騙されてたことは置いといて・・・ダイヤさん、μ sの中で誰が一番好きなんでしたっけ?」

「エリーチカですわ! アイドルと生徒会長の兼任・・・カッコ良いですわあ・・・!」  
うっとりしているダイヤさん。本当に好きなんだなあ・・・

「じゃあ、エリーチカのフルネームは言えますか?」

「当然ですわ! エリーチカのフルネームは、『絢瀬』絵里・・・え?」

固まるダイヤさん。他の皆も気付いたのか、小原理事長以外は全員固まってしまった。

「あ、絢瀬・・・?」

「ダイヤさんには、前に言いましたよね。俺には姉が二人いて、上の姉は高校時代に生徒会長を務めていたと」

「ま、まさかつ・・・!?」

「そのまさかです」

俺は苦笑しながら、今まで話すことになかった事実を告げるのだった。

「μ, sの絢瀬絵里は・・・俺の姉なんですよ」

人にはそれぞれ事情というものがある。

「エ、エリーチカが・・・!?!」

「そ、天くんの・・・!?!」

「お、お姉さん・・・!?!」

驚愕しているダイヤさん、ルビィ、千歌さん。他の皆も絶句していた。

「う、嘘・・・!?!」

「嘘じゃないわ」

善子の呟きに、小原理事長が口を開いた。

「二人は姉弟よ。幼馴染の私が保証するわ」

「私も、sのメンバーとして保証します」

海未ちゃんも頷く。

「というか、誰も気付かなかったんですか？苗字が同じなのに」

「いやあ、全く・・・」

「たまたま同じだけかと・・・」

呆然としながら答える曜さんと梨子さん。まあ普通はそう思うよね・・・

「じゃあ、天くんがμ、sについて詳しいのつて・・・」

「身内がμ、sのメンバーだからね」

花丸の問いに、苦笑しながら答える俺。

「それに俺、μ、sの活動はずっと近くで見ってきたんだよ。学校同じだったし」

「学校が同じ・・・?」

首を傾げる千歌さん。

「μ、sが活動したのは五年前・・・天くんは小学五年生だったはずだよね? つてい

うか、そもそも音ノ木坂つて女子校のはずじゃ・・・」

「あつ・・・!?!」

梨子さんが何かに気付いたように声を上げた。

「まさか天くん、中学まで音ノ木坂にいたの!?!」

「そういうことです」

「梨子ちゃん、どういうこと?」

「音ノ木坂つて、幼稚園から大学院まで存在するのよ。中学までは共学で、女子校にな

るのは高校からなの」

説明してくれる梨子さん。

「だから男子生徒は中学までしか上がれなくて、高校は外部を受験する必要があるん

「ただど……天くんもその内の一人だったのね」

「ええ。なので俺が中三だった去年、高一だった梨子さんとどこかですれ違ってたかもしれませんか」

まあそれはさておき、話を続けることにする。

「姉が $\mu$ 、sのメンバーで、学校も同じ…… $\mu$ 、sの存在が身近にあつた俺は、 $\mu$ 、sの活動をすぐ側で見えてきました。だから $\mu$ 、sのことは勿論、スクールアイドルやラブライブについてもよく知っているというわけです」

「そうだったのですね……ん？」

そこで首を傾げるダイヤさん。

「そういえば天さん、前に仰つてましわよね？中学の理事長さんから、浦の星のテストの話を持ちかけられたと」

「ええ、言いましたね」

「そして天さんは中学まで、音ノ木坂に通っていたと……」

「そうですね」

「つまり天さんの中学の理事長さんは、音ノ木坂の理事長さん……ということ、まさか……！」

青ざめるダイヤさん。

「μsのメンバーの一人・・・南ことりさんのお母様のことですか?!」  
「その通りです」

頷く俺。あの人には、昔からお世話になってるんだよなあ・・・

「まあまさか俺だけじゃなくて、海未ちゃんまでこつちに寄越すとは思ってませんでしたけど・・・小原理事長、あの人とどういう繋がりがあるんですか?」

「フフツ、小原家のConnectionよ」

「・・・何かもう怖いわ小原家」

思わず呆れてしまう。何なんだ、この成金一族は・・・

「まあいいや・・・ところで海未ちゃん、教育実習つてどれくらいの期間なの?」

「二、三週間といったところでですけど・・・それが何か?」

「いや、住む場所どうするの?まさか毎日東京と内浦を往復するわけじゃないよね?」

「ああ、それでしたら問題ありません。天の家に住みますので」

「ああ、なるほど。それなら問題ない・・・は?」

ん?今何かスルーしてはいけないことを聞いた気がする・・・

「聞き間違いかな・・・俺の家に住むって言った?」

「言いましたよ。最初からそのつもりで来ましたし」

「俺の意見は!?!」

「天が断るわけないじゃないですか。天と私の仲ですよ?」

「まさかの決め付け!? っていうかどんな仲!?」

「当時は空(天)と海(海未) コンビとして、よろしくしあつた仲間じゃないですか」

「そのダサイコンビ名止めてくんない!?!」

「ダサいつてなんですか!」

ギャーギャー言い合う俺達を、皆がポカーンと眺めていた。

「な、仲良いね・・・」

「天くんがこんなにつつこみに回つてるところ、初めて見たかも・・・」

「確かにそうね・・・」

「あの天をつつこみに回すだなんて・・・」

「園田海未さん、恐ろしい人すら・・・」

「ぴぎい・・・」

よく聞こえないけど、凄く心外なことを言われている気がする。一方・・・

「あの園田海未さんと、これから毎日会える・・・フツ・・・フツ・・・!」

不気味に笑っているダイヤさん。何あの人、怖いんだけど。

「そういうわけだから天、教育実習生さんをよろしくデース♪」

「黙れおっぱいお化け。もぎ取るぞ」

「何を!？」

「大体男と一緒に住むとか、海未ちゃんなら『ふしだらです!』とか『破廉恥です!』とか言うところじゃないの!？」

「天は弟みたいなものなので大丈夫です」

「ラブアローシューターが姉とか嫌だわ!」

「それはやめて下さいって言ってるでしょうが!」  
再び言い合う俺達なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《梨子視点》

「それにしても、本当にビックリしたなあ・・・」

千歌ちゃんが眩く。千歌ちゃんと私は、バスを降りて帰り道を歩いていた。

「まさか、sの園田海未さんに会えるなんて・・・しかも天くんのお姉さんが、あの  
絢瀬絵里さんだったとは・・・」

「驚いたわよねえ……」

確かに衝撃だった。スクールアイドルを始めてからというもの、私もμ s について色々調べたので少しは詳しくなった自信がある。

そのμ s のメンバーに会えた上に、天くんのお姉さんもμ s のメンバーであることが分かったのだ。まさかこんな形で関わることになるなんて、思ってもみなかった。

「でも天くん、何で黙ってたんだろう?」

「μ s のファンである千歌ちゃん達に言ったら、大騒ぎになるからでしょ?」

「うっ……否定できない……」

千歌ちゃんが苦い顔をする中、私は別のことが気になっていた。

「……本当に、身内がμ s のメンバーっていうだけなのかな?」

「え?」

「天くんと園田さん、凄く仲良かったじゃない。あれは単なる知り合いつていうより、もつと関わりが深いような気がするのよね」

それだけじゃない。前に鞠莉さんが言ってたセリフ……

『スクールアイドルのマナージャーなんて……天にはお手の物でしょう?』

「まさか・・・」

ある可能性に思い至っていると、千歌ちゃんが顔を覗き込んできた。

「梨子ちゃん・・・もしかして、嫉妬してる?」

「はい!?!」

「なるほど、天くんと園田さんの仲の良さを見て妬いちゃったのかあ・・・天くんも罪な男だねえ」

「ち、違うから! そんなんじゃないから!」

「あ、照れてる! 可愛い!」

「違うって言うてるでしょ!?!」

逃げる千歌ちゃんを、顔を真っ赤にしながら追いかける私なのだった。

\*\*\*\*\*

「ここが天の家ですか．．．？」

「そうだよ」

驚いている海未ちゃんに、苦笑しながら答える俺。

俺が住んでいる家は、アパートやマンションではなく平屋建ての一軒家だ。千歌さんや梨子さんの家より、もう少し歩いたところにある。

「浦の星にテスト生として入学することになった時、学校側が手配してくれたんだよ。前の住人が引っ越してから、しばらくの間誰も使ってなかったんだって。ここだったら家賃も払わなくて大丈夫だから、好きに使って良いってさ」

「そ、そんな都合の良い話ってあります．．．？」

「俺も最初は半信半疑だったんだけどさあ．．．理事長があの人だって分かって、何か色々納得しちゃったよね」

「ああ、なるほど．．．」

恐らく、手配してくれたのは小原理事長．．．というか小原家だろうな。

小原家の力が働いているのなら、こんな都合の良い話があっても納得できてしまう。現役女子高生理事長を誕生させちゃうぐらいだし。

「中也広いですね．．．ここで一人暮らししてるんですか？」

「まあね。なかなか贅沢だと自分でも思うよ」

完全にファミリー向けの家だもんな、ここ……

どう見ても一人暮らし向けの家ではない。俺と海未ちゃんの二人で住んでも、まだまだ余裕たっぷりだ。

「でも安心しました。私はてつきり狭いアパートで、ひもじい思いをしながら暮らしているのではないかと……」

「そんな生活を強要されてたら、とつくの昔に東京に帰ってるわ」

思った以上に酷い想像をされていたらしい。やれやれ……

「それでは、しばらくの間お世話になりますね」

「はいはい……つていうか、そろそろ教えてくれても良いんじゃない?」

「教える?何をですか?」

「海未ちゃんが浦の星に来た本当の理由を、だよ」

「つ……」

息を呑む海未ちゃん。やっぱりか……

「確かに海未ちゃんは緊張しやすいタイプだけど、『人が多いから』なんていう理由で音ノ木坂を避けたりしないですよ。むしろ母校の方が安心するだろうし、縁もゆかりもない浦の星を選ぶ理由は無い。あるとすれば……俺に用があったんじゃないの?」

「……その察しの良さ、相変わらずですね」

溜め息をつく海未ちゃん。

「確かに、そんな理由で浦の星に来たわけではありません。μsのメンバーである私が音ノ木坂に行くことで、混乱を招いてしまう恐れがあることを考慮したのもありますが……一番の理由は仰る通り、貴方に用があつたからですよ」

「わざわざ教育実習で来なくても、プライベートで来れば良いのに……」

「私が一番見たかつたのは、学校での天ですからね。貴方が浦の星でどのような学校生活を送っているのか、自分の目で確かめたかつたんですよ」

苦笑する海未ちゃん。

「だって気になるじゃないですか。何しろ天は……絵里と大喧嘩してまで、浦の星にテスト生として入学する道を選んだんですから」

「……それで南理事長に頼んで、浦の星で教育実習を受けさせてもらえるよう小原理事長に掛け合つたの？」

「その通りです」

頷く海未ちゃん。

「浦の星に来て驚きましたよ。まさか天が……スクールアイドルグループのマナージャーをやっているだなんて」

「っ……っ」

「経緯は黒澤生徒会長に伺いましたが、小原理事長に脅されたそうですね。高海さん達の為に、仕方なくマネージャーを引き受けたのでしょうか？」

俺を見つめる海末ちゃん。俺は海末ちゃんの顔を見ることが出来なかった。

「これでは、天も絵里も浮かばれません・・・私が小原理事長に直談判して、スクールアイドル部の立場を保障させます。ですから・・・」

涙を浮かべ、俺の手を握る海末ちゃん。

「帰って来て下さい、天・・・絵里も亜里沙も、μ'sの皆も・・・貴方の帰りを待っているんですよ」

海末ちゃんの切実な願いに、何も返すことが出来ない俺なのだつた。

真剣な気持ちには真剣に向き合うべきである。

翌日……

「……ん……さん……天さんっ！」

「へっ?」

生徒会の仕事中、名前を呼ばれてハツと我に返る。顔を上げると、ダイヤさんが心配そうにこちらを見ていた。

「大丈夫ですか? 心ここにあらず、といった様子でしたが……」

「ああ、すみません……少しボーっとしてました」

ダイヤさんに謝る俺。仕事に集中しないといけないのに……

「……少し休憩しましょう。今お茶を淹れますわ」

「あ、それなら俺が……」

「私がやりますわ」

腰を浮かせた俺を押し留めるダイヤさん。

「いつも天さんに淹れていたから。たまには私にやらせて下さいな」

「……すみません。お願いします」

大人しく椅子に座る俺。気を遣わせてしまったな・・・

「はい、どうぞぞ」

「ありがとうございます」

ダイヤさんの淹れてくれたお茶を飲む。少し心が落ち着いた気がした。

「そういうえば今日、スクールアイドル部の方で何かあるのですか？ルビィから『今日は帰りが遅くなる』と連絡がありました・・・」

「PVを作るそうですよ。内浦の良いところを紹介して、浦の星の入学希望者を増やそうとしてるみたいです」

内浦のことをよく知らない人は多いだろうし、PVを作って内浦のことを知ってもらおうというのは良いアイデアだと思う。

内浦のことを知ってもらえれば、浦の星にも興味を持つてもらえるかもしれないし。

「PVですか・・・よく思いつきましたわね」

「海未ちゃんが助言したみたいですよ。当時のMsがやっていたことを、千歌さん達に教えたみたいです」

「ああ、なるほど」

納得するダイヤさん。

スクールアイドル部のメンバーと海未ちゃんの距離は、今日一日でだいぶ縮まってい

た。花丸・ルビィ・善子は休み時間になると積極的に質問しに行っていたし、昼休みには千歌さん・曜さん・梨子さんも加わって一緒に昼ご飯を食べたりもした。

海未ちゃんも皆が話しかけてきてくれるのが嬉しかったみたいで、嬉々として質問に答えたり、sとして活動していた頃の話をしたりしていた。

「今日一日見てて思いましたけど、海未ちゃんは教師に向いてますね。生徒に対して真摯に向き合ってくれるところとか、海未ちゃんらしいなって思いますもん」

メンタルの弱いところはあるけれど、真つ直ぐで誠実な人・・・それが海未ちゃんだ。きつと良い教師になってくれるだろう。

「ホント・・・俺なんかに構ってないで、素直に音ノ木坂で教育実習を受けさせてもらえば良かったのに・・・」

「・・・園田先生は、天さんを大切に思っただけじゃないよ」  
「え・・・？」

ダイヤさんが優しい表情で俺を見ていた。

「園田先生だって、母校で教育実習を受けることを第一に考えていたと思います。それでも、あえて浦の星を選んだ・・・それは園田先生にとって、天さんの存在が大きかったからではないでしょうか」

「ダイヤさん・・・まさか、海未ちゃんの嘘に気付いて・・・？」

「μsは音ノ木坂を救う為に結成されたグループですわよ？それほど音ノ木坂を大切に思われている方が、あのような理由で母校での教育実習を避けるはずありませんわ」

苦笑するダイヤさん。

「それでも園田先生は、母校よりも天さんのいる浦の星を選んだのです。よほど天さんを大切に思っていないかぎり、そんな選択はしませんわ」

「ダイヤさん……」

「昨日園田先生と何を話されたのか、一体何があつたのか……私には分かりません。私に言えることは唯一つ……園田先生の気持ちに向き合ってあげて下さい。天さんなら、それが出来るはずですわ」

「……はい。ありがとうございます、ダイヤさん」

ホント、この人には敵わないな……

優しく微笑むダイヤさんを見て、心からそう思う俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「今日も疲れましたあ．．．」

ソファにぐでーんと寝そべる海未ちゃん。昨日来たばかりだというのに、もうすっかり我が家のように寛いでいる。

「とても名家の娘とは思えないだらけつぶりだね．．．」

「家でまで肩肘張った生活をしていたら、身体がもちませんから」

苦笑する海未ちゃん。なるほど．．．

そういえば、前に果南さんと名家の娘についての話をしたことがあったな．．．せつかくだし聞いてみるか。

「名家の娘っていえば、ダイヤさんとルビイもそうなんだけどさ。ルビイはともかく、ダイヤさんは少し頑なというか．．．それこそ、肩肘張って生きてるところがある気がするんだよね」

「ああ、彼女はそういうタイプでしょうね」

頷く海未ちゃん。

「家の名に恥じない振る舞いを心がけないといけない．．．その気持ちは私もよく分かります。人前で肩の力を抜けないんですよね。だからこそ一人の時や、心を許せる人の前では肩の力を抜きたくなるんですよ」

「ああ、身体がリラックスを求めているのね」

「そういうことです。ですので人前で肩の力を抜くという生き方は、私も無理ですし彼女も無理でしょうね。勿論その分、リラックス出来る時間というものを大切にしますのでご心配なく」

「へえ……」

なるほどねえ……今度果南さんにも教えてあげよう。

「私が見た感じでは、ルビィと小原理事長……それと天、貴方の前でも黒澤生徒会長は肩の力を抜いていましたね」

「え、ホント?」

「ええ。私は彼女と似たような立場ですから、見れば何となく分かります。天と話している時の彼女は、全体的に物腰が柔らかいといいますか……いつもの真面目で堅苦しい感じではなく、お茶目で柔和な感じの印象を受けました。心を許していない相手に、あの態度はとれないと思いますよ。それこそ、私達のような人間は特に」

「そっか……それは嬉しいな」

「むっ……」

何故か少し不機嫌になった海未ちゃんが、後ろから俺に抱きついてくる。

「私だって、天に心を許してるんですからね!」

「はいはい、ありがとね」

「軽くないですか!？」

「アハハ、そんなことないよ」

俺のお腹に回された海未ちゃんの両手に、自分の両手を重ねる。

「……ありがとね、海未ちゃん。大事な教育実習の機会を、俺の為に使ってくれて」

「天……」

「でも……ゴメン。今は戻るつもりはない」

昨日の海未ちゃんの願いには応えられない……俺はそのことを詫びた。

「今はまだ、やらなきゃいけないことがある。小原理事長から脅されたとはいえ、今の

俺はA q o u r sのマネージャーだから。最低限の責務は果たさないといけないんだ

よ」

まだA q o u r sは始まったばかり……ここで彼女達を見捨てることは出来ないのだ。

「それを果たしたら、帰って来てくれるんですか？」

「……そのつもりでいるよ」

「絵里とも仲直りしてくれるんですか？」

「それは……あの人の態度次第かな」

「・・・フフツ」

小さく笑みを溢す海未ちゃん。

「本当に・・・似てますね、貴方達は」

「・・・俺はあんなに頭の固い人間じゃないつもりなんだけど」

「いえ、天も十分頑固だと思います」

「マジかあ・・・」

軽く凹んでいると、海未ちゃんがクスクス笑っていた。

「フフツ、凹まないで下さいよ。天のそういうところ、私は好きなんですから」

海未ちゃんはそう言うのと、俺を抱き締める腕に力を込めた。

「・・・待ってますからね、天」

「・・・うん。ありがとう」

海未ちゃんの眩きに、小さく頷く俺なのだった。

有り得ないなんて事は有り得ない。

翌日・・・

『以上、頑張ルビィ！こと黒澤ルビィがお伝えしました！』  
理事長室にて、千歌さん達が製作したPVを見ている俺達。

これは・・・

「よく伝わりますね・・・ルビィの可愛さが」

「「「そつち!」「」」」

「いやあ、そんなあ・・・」

照れているルビィ。いや、照れてる場合じゃないよルビィ・・・

「海未ちゃん、どう思う?」

「いや、どう思うと聞かれても・・・」

返答に困る海未ちゃん。まあそうだよね・・・

「や、やっぱりイマイチ・・・?」

「・・・良い出来映え、とは言えませんね」

「・・・だよねえ」

俺の一言に、ガツクリと肩を落とす千歌さん。自分でも分かっていたらしい。

「なかなか上手くいなくて・・・PVって難しいね」

「経験者として、それは分かります」

頷いている海未ちゃん。俺は小原理事長へ視線を移した。

「小原理事長はどう思いますか？」

「・・・すぴー・・・すぴー・・・」

「●砕」

「痛あつ!？」

足を高く上げ、小原理事長の頭目掛けてかかとを振り下ろす。椅子から飛び上がり、

頭を押さえながら痛みに悶える小原理事長。

「ちよつと天!?!何するのよ!?!」

「どうも、黒足の絢瀬です」

「どこのサ●ジ!?!理事長に暴力だなんて、普通なら退学ものよ!?!」

「出来るもんならやってみて下さいよ。俺を利用する為にこの学校に呼んだのは、一体誰でしたっけ?」

「うぐっ・・・」

言葉に詰まる小原理事長。と、ここで千歌さんが抗議の声を上げる。

「何で寝てるんですか！本気なんですから、ちゃんと見て下さい！」

「・・・本気？」

小原理事長の表情が変わった。今までのおちやらけたものとは違う、冷たい表情だ。

「・・・それでこの体たらくですか？」

「ちよつと!?!それは酷くないですか!?!」

「そうです！これだけ作るのがどれほど大変だったと思ってるんですか！」

「努力の量と結果は比例しませんッ！」

曜さんと梨子さんが反論するも、一言で黙らせる小原理事長。

「大切なのは、このTownやSchoolの魅力をちゃんと理解しているかですッ

！」

「小原理事長、流石に言い過ぎなのは・・・」

「海未ちゃん」

海未ちゃんが間に入ろうとするのを、手を掴んで引き止める。

言い方は厳しいが、今回ばかりは小原理事長が正しい。確かにこのPVを作る為に、

千歌さん達は一生懸命頑張ったんだと思う。

それでも出来上がったPVは、内浦の魅力を伝えるには不十分と言わざるをえないも

のだった。『努力したからそれで良い』という話ではないのだ。

「それってつまり・・・」

「私達が理解していないということですか・・・？」

「じゃあ理事長は、魅力が分かってるってこと・・・？」

ルビィ・花丸・善子に対し、小原理事長は不敵な笑みを浮かべた。

「少なくとも、貴女達よりはね・・・聞きたいですか？」

「結構です」

即座に断る千歌さん。

「そういう大切なことは、自分で気付けなきや意味無いですから・・・皆、行こう」

曜さん達を連れ、理事長室から出て行く千歌さん。俺も後に続こうとするが、海未

ちゃんはそこから動こうとしなかった。

「海未ちゃん？行かないの？」

「先に行つて下さい。私は小原理事長にお話がありますので」

「・・・分かった。程々にね」

海未ちゃんの心情を察した俺は、それだけ忠告して理事長室を後にするのだった。

\*\*\*\*\*

## 《鞠莉視点》

「それで？話って何かしら？」

園田先生に尋ねる私。

年齢は彼女の方が上だけれど、立場は私の方が上・・・彼女は理事長としての私に話があるようだし、それなら私も理事長として接するべきだ。

ここは敬語を使わず、堂々としていくべきだろう。

「今のPVの件なら、私は間違ったことは言っていないつもり・・・」

「・・・少し黙りなさい」

「っ!？」

底冷えするような低い声に、私はゾツとしてしまった。こちらを射抜くような鋭い眼光に、思わず身体が固まってしまう。

「今の件についても言いたいことはありますが、天に止められてしまったので何も言わないでおきます。それより・・・話というのは天のことです」

私を睨み付ける園田先生。

「貴女が天を脅したことは、黒澤生徒会長から聞いています。本来であれば、私として

も黙って見過ごすつもりなどありませんでしたが……天は引き続き、A q o u r s を支えるつもりだと言っていました。それが天の意思である以上、私が出しやばることは出来ません。ですが……」

園田先生は私の目の前に立つと、執務用の机を思いつき叩いた。大きな音に、身体がビクツと反応してしまう。

「これ以上、天を傷付けたり苦しめたりするようであれば……私は勿論、μ s のメンバー達が黙ってはいません。特に絵里が、どれほど天を大切に思っているか……幼馴染の貴女が、知らないはずありませんよね？」

園田先生はそう言うと、踵を返して出口へと歩いていった。

「貴女にどのような思惑があるのか知りませんが……天を脅してA q o u r s のマネージャーをやらせたことを、後悔する日が必ずやって来ます。その時に思い知るといいでしょう……自分のやったことが、どれほど罪深いことなのかを」

それだけ言い残し、園田先生は理事長室から出て行った。その瞬間、何かから解放されたように身体の力が一気に抜ける。

「後悔か……そんなもの……とつくにしているわよっ……」

涙で視界が滲む中、思わず本音を呟いてしまう私なのだった。

\*\*\*\*\*

「魅力かあ．．．」

部室の椅子に座り、考え事に耽る俺。

千歌さん達は作戦会議をするとのこと、最早スクールアイドル部の溜まり場となっている千歌さんの家へと向かった。

俺も誘われたのだが、少し一人で考えたかったので断ったのだ。

「つていうか、海未ちゃん大丈夫かなあ．．．」

理事長室を出る時に顔を見たけど、完全に目が据わってたもんなあ．．．

あれは海未ちゃんがガチでキレている時にする目だ。あの目で睨まれたら最後、身体が固まって動かなくなってしまうのだ。

ちなみにソースは俺。ガチでキレた時の海未ちゃんは、μ'sの中の誰よりも怖いのである。

「．．．まあ、大丈夫か」

相手は仮にも理事長だし、海未ちゃんも少しは自重するだろう。それより、PVにつ

いて考えないと・・・

そう思っていた時、体育館の方から音がすることに気付いた。

「誰かいる・・・？」

今日はどこの部も体育館を使っていないはずだけどな・・・

部室を出て体育館を覗いてみると、体育館のステージ上で踊るダイヤさんの姿があった。

「ダイヤさん・・・？」

あのダイヤさんが、体育館のステージ上で踊っている。それにしても・・・

「・・・凄いな」

優雅で美しいダイヤさんの踊りに、俺は釘付けになっていた。

『踊り』というより、これは『舞い』と言った方が良いかもしれない。見る者をここまです魅了するなんて・・・

そのまま夢中になって見ていると、ダイヤさんが俺の存在に気付いた。

「そ、天さんっ!？」

みるみる顔が赤くなっていく。まさか見られているとは思わなかったらしい。

「い、いつからそこに!？」

「少し前からです。そこからずっと、ダイヤさんに見惚れてました」

「み、見惚れっ・・・!?」

耳まで真っ赤になるダイヤさん。可愛いなあ・・・

「凄いですね、ダイヤさん。思わず引き込まれちゃいましたよ」

「ま、まあダンスには少し自信があるので・・・」

照れ笑いを浮かべるダイヤさん。

「とはいえ、もう披露する機会もありませんから・・・」

「ダイヤさん・・・」

恐らく千歌さんならここで、『一緒にスクールアイドルやりませんか?』と声をかけるだろう。

だが、それに対するダイヤさんの答えはノーだ。何故なら・・・

「・・・果南さんや小原理事長と、また一緒にスクールアイドルをやりたいですか?」

「っ・・・」

唇を噛むダイヤさん。

これがダイヤさんの答え・・・二人が一緒になければ、スクールアイドルはやらない。

この答えが覆ることはないだろう。

だったら・・・

「もし果南さんと小原理事長が、もう一度スクールアイドルをやると言ったら・・・ダ

イヤさんもやりますか?」

「・・・有り得ませんわ」

俯くダイヤさん。

「鞠莉さんは乗り気のようにですが・・・果南さんが再びスクールアイドルをやることはないでしょう。果南さんの意思は固いですから」

「今はあの二人の意思はどうでもいいです」

バツサリ切り捨てる俺。ダイヤさんが目を見開いて驚く。

「俺が聞いているのは、ダイヤさんの意思です。もう一度聞きますが・・・あの二人がもう一度スクールアイドルをやると言ったら、ダイヤさんもやりますか?」

「・・・やりますわ」

目に涙を浮かべているダイヤさん。

「私はもう一度・・・果南さんと鞠莉さんと・・・一緒にスクールアイドルがやりたいですわ・・・!」

「・・・それが貴女の本音ですか」

二年前、何故A q o u r s が解散したのかは分からない。ただ現状から推測すると、恐らく原因は果南さんと小原理事長にある。

何があったかは知らないが、ダイヤさんとしては解散なんてしたくなかつたんだろう

な・・・

「・・・その思い、大切にして下さい」

「え・・・？」

呆然とするダイヤさんに、俺は微笑んだ。

「ダイヤさんは、千歌さんがスクールアイドル部を設立すると宣言した時・・・ここま  
で来るなんて予想してましたか？」

「・・・正直、無理だと思ってましたわ」

「まあ、普通はそう思いますよね」

階段を上り、ステージに上がる俺。

「でもここまで来た。曜さんや梨子さん、ルビィと花丸、それに善子・・・一緒に輝き  
を目指す仲間を集めて、ここまで来たんですよ」

そう、ここまでの流れはまるで・・・

「μ、sみたいだな・・・それが俺の感想です」

「μ、s・・・ですか？」

「ええ。最初は穂乃果ちゃんがスクールアイドルをやると宣言して、幼馴染のひとり  
ちゃんや海未ちゃんがそれに賛同して。そこから仲間が増えていき、μ、sになったん  
です。ラブライブで優勝するほどのグループになるなんて、あの時は想像もしてません

でした」

「いつだって彼女達は、俺の想像を遥かに超える活躍を見せてくれた。周りを巻き込み、スクールアイドルブームを巻き起こしたのだ。」

その中心にいたのは、紛れも無くリーダーの穂乃果ちゃんだった。

「穂乃果ちゃんと千歌さんって、どことなく似てるところがあるというか：何かやってくれそうな雰囲気があるんですね。その千歌さんが今、周りを巻き込みながらスクールアイドルをやっている・・・可能性はあると思いませんか？」

「私達が、再び一緒にスクールアイドルをやれる可能性・・・ですか？」

「ええ。あの人のことですから、そのうちダイヤさん達をも巻き込むことになるでしょう。意思が固いという果南さんだって、心が動くこともあるかもしれません」

「そんなこと・・・」

「有り得ないと決め付けるのは勿体ないですよ」

俺はダイヤさんを真っ直ぐ見つめた。

「だからその気持ち、絶対に捨てないで下さい。今の果南さんと小原理事長を繋いでいるのは、ダイヤさんなんですから」

「天さん・・・」

俺はそれだけ言うとステージを降り、ダイヤさんに一礼して体育館を後にする。

最後に見たダイヤさんの瞳は、大きく揺れ動いていたのだった。

ここにしかない魅力がある。

翌朝・・・

「・・・ん」

鳴り響く目覚ましのアラームを止め、俺は上半身を起こした。

「・・・眠い」

欠伸をしながら、思いつきり身体を伸ばす。

昨日は結局、この町や学校の魅力についての答えは出なかった。勿論良いところは思いつくのだが、外の人達に興味を持ってもらえるような魅力となると・・・

「難しいなあ・・・」

溜め息をつきながら、隣の布団で寝ている海未ちゃんを眺める。すやすやと安らかな寝息を立て、穏やかに眠っていた。

「・・・幸せそうだなあ」

苦笑しながら、海未ちゃんの頭を撫でる。ふと時計を見ると、3時半を過ぎていた。

「・・・そろそろ起きないと」

いつもより全然早い時間ではあるが、今日は早起きしないといけない理由があるの

だ。俺は海未ちゃんの身体を優しく揺り動かした。

「海未ちゃん、起きて」

「んんう・・・」

ゆつくりと目を開ける海未ちゃん。俺へと視線を向ける。

「天あ・・・?」

「おはよう、海未ちゃん。時間だよ」

微笑む俺。

「早く支度して、海に行こう?」

「・・・海未は私ですが?」

「そのボケ懐かしいね」

俺が苦笑していると、海未ちゃんがハツとした表情を浮かべる。

「もしかして・・・私は今、夜這いされているのでは!?!」

「檸檬●弾」

「ギャアアアアアツ?!?目がツ?!?目がああああアツ!?!」

海未ちゃんの顔の上でレモンを握り潰す俺。海未ちゃんの悲鳴が響き渡るのだった。

\*\*\*\*\*

「うう、天あ・・・待って下さいよ・・・」

しきりに目を擦りながら、俺の後をヨタヨタと追いかけてくる海未ちゃん。先ほどのレモンの果汁が、よほど目に染みたらしい。

「早く歩きなよ、ムツツリスケベ」

「ちよつと!?女子に向かって何てこと言うんですか!？」

『『夜這い』とか想像してる時点で言い返せないでしょ』

「うぐっ・・・」

言葉に詰まる海未ちゃん。

「ほら、早く行くよ。集合時間に遅れちゃう」

「あ、待って下さいってば!」

小走りで俺の隣に並ぶ海未ちゃん。

そのまま少し歩くと、『十千万』の前に千歌さんと梨子さんが立っているのが見えた。

「あ、天くん!海未先生!」

こちらに向かってブンブン手を振る千歌さん。朝早くから元気だなあ・・・

「おはようございます。お二人とも早いですね」

「おかげで眠いけどねえ・・・」

欠伸を噛み殺す梨子さん。まあ、まだ日も昇ってないしな・・・

「千歌、海開きってこんな朝早くからやるものなんですか？」

「そうですよ」

海未ちゃんの質問に、笑顔で答える千歌さん。

今日は海開きということで、早朝からこの町の人達が集まって海辺のゴミ拾い等をするらしい。毎年の恒例行事なんだそうさ。

「さて、私達も行きましょうか！」

「行つてらっしゃい。俺は『十千万』でもう一度寝てきます」

「天くん!? 何で行く気ゼロなの!？」

「海を開く以前に、俺の目が開く時間じゃないんで」

「何ちよつと上手いこと言ってるの!？」

「同くく」

「梨子ちゃん!? 海未先生!？」

朝からツツコミを連発する千歌さんなのだった。

\*\*\*\*\*

「「おお．．．」」

感嘆の声を上げる俺・梨子さん・海未ちゃん。既に海辺には、たくさんの人達が集まってゴミ拾いをしていた。

「この町、こんなにな人がいたんだね．．．」

「ええ、驚きました．．．」

海未ちゃんとそんな会話をしていると．．．

「おはようのハグっ！」

「うおっ!？」

いきなり背後から抱きつかれる。こんなことをしてくる人を、俺は一人しか知らない。

「おはようございます、果南さん」

「おはよー!」

果南さんは元気よく挨拶すると、そのまま俺をギュッと抱き締めてきた。

「果南さん、いつもよりテンション高くないですか?」

「だって海開きだよ? そりゃあテンションも上がるよ!」

「本当に海が大好きですよね、果南さんって」

苦笑していると、海未ちゃんが驚愕の表情でこっちを見ていた。

「そ、天に抱きついて・・・まさか、天に恋人が・・・!?」

「いや、違うんだけど」

「初めまして、天の恋人の松浦果南です♪」

「悪ノリするの止めてもらえます? 海未ちゃんは果南さんと違って純粹なんで、冗談とかすぐ信じちゃうんですから」

「ちよつと!? 人が純粹じゃないみたいと言わないでよ!」

「こうしてはいられません! 急いで皆に伝えないと!」

「**檸●爆弾**」

「ギャアアアアッ!? 目がッ!? 目がああああッ!」

慌ててスマホを取り出した海未ちゃんの顔の前で、思いっきりレモンを握り潰した。

再び悲鳴を上げる海未ちゃん。

「よ、容赦ないわね・・・」

「これくらいしないと、海未ちゃんは止められないんで」

若干引き気味の梨子さんに対し、溜め息をつきながら答える俺。

「そういえば、千歌さんはどこに行っただんですか？」

「あそこで曜ちゃんとかゴミ拾い始めてるわよ」

梨子さんの指差した先では、千歌さんと曜さんが談笑しながらゴミ拾いをしていた。よく見るとむつさんやいつきさん、よしみさんもいる。

「じゃあ、私も行ってくるわね」

「行ってらっしゃい」

千歌さん達のところへ歩いていく梨子さん。

そんな梨子さんを入れ替わるように、ルビイとダイヤさんがこちらへ歩いてくる。

「天くん、おはよう！」

「おはようルビイ。ダイヤさんもおはようございます」

「お、おはようございます・・・」

おずおずと挨拶を返してくるダイヤさん。果南さんが首を傾げる。

「どうしたのダイヤ？何かきこちなくない？」

「そ、そんなことありませんわ！」

慌てて否定するダイヤさんだが、恐らく昨日のことが影響しているんだろう。動揺しているのが目に見えて分かる。

「ダイヤさん……」

「な、何ですの……?」

「……おはようのハグ」

「っ!?!」

ダイヤさんに近付き、軽くハグしてみる。硬直するダイヤさん。

「そ、天くん!? 何してるの!?!」

「何って……ハグ?」

「何で!?!」

「そんな気分だったんだよ」

「どんな気分!?!」

「あ、ダイヤだけズルい! 天、私にもハグしてよ!」

「ダイヤさんにハグしたい気分であって、果南さんにハグしたい気分じゃないんです」

「酷い!?!」

「そ、天さん……」

耳まで真っ赤になり、涙目でプルプル震えているダイヤさん。

「は、恥ずかしいので……そ、そろそろ……」

「……昨日は少し踏み込み過ぎてしまって、すみませんでした」

「っ……」

ルビィや果南さんに聞こえないよう、ダイヤさんの耳元で囁く俺。

「それでも、ダイヤさんの本音が聞けて良かったです。ダイヤさん、なかなか自分の思いを打ち明けてくれないから」

「天さん……」

「もつと自分の思いをさらけ出しても良いんですからね。俺なんかで良ければ、いつでも聞かせてもらいますから」

それだけ言うと、俺はダイヤさんから離れた。

「よし、次はルビィとハグしようかな」

「びぎっ!? 何で!?!」

「そんな気分だから」

「その言葉メツチャ便利だね!?!」

「ちよつと天!?! 私は!?!」

「すいません、気分じゃないんで」

「何でよ!?!」

「……フッフ」

口元を押さえ、面白そうに笑うダイヤさん。

「やっぱり・・・天さんは天さんですわね」

「お姉ちゃん？どうしたの？」

「何でもありませんわ。さあ果南さん、私達もそろそろ行きましょう？」

「むう・・・ハグ・・・」

俺からのハグが無いことに、若干不満そうな果南さん。

ダイヤさんは苦笑すると、果南さんを引き寄せて抱き締めた。

「わわっ、ダイヤ!？」

「フフツ、天さんの代わりですわ」

「どうしたのダイヤ!?!何か今日変じゃない!？」

「そんなことありませんわ」

楽しそうに笑うダイヤさん。どうやら元に戻ったようだ。

「では、私達は行きますわ。また後ほど」

「行つてらっしゃい」

果南さんの手を引いて、三年生組の方へと歩いていくダイヤさん。

と、ふと立ち止まってこちらを振り返り・・・

「えいっ!」

「うおっ!？」

勢いよく走ってきて、そのまま俺に抱きついてきた。慌てて受け止める俺。

「ちよ、ダイヤさん!？」

「・・・ありがとうございます、天さん」

先ほどの俺と同じように、耳元で囁くダイヤさん。

「お言葉通り、この思いは捨てないでおきますわ。いつの日か、叶うことを信じて」

「・・・ええ、そうして下さい」

抱き締め返す俺。

「その思いが叶うことを祈ってます」

「フフツ、ありがとうございます」

ダイヤさんは笑みを浮かべると、俺から離れて果南さんの手をとった。

「さあ果南さん、いきますわよ」

「ちよ、待つてよ!?! 私も天とハグするのー!」

果南さんの訴えも空しく、ダイヤさんは果南さんを引きずって去っていった。

「・・・あんなお姉ちゃん、初めて見たかも」

呆然としているルビィ。

「何か・・・凄いな、天くんって」

「変わったことは何もしてないよ」

「むしろ変わったことしかしてないよねえ!？」

「ルビィ、そこはツツコミを入れても仕方ないですよ」

いつの間にか復活した海未ちゃんが、苦笑しながら言う。

「天は昔からこういう人ですから」

「あれ？海未ちゃんどこ行ってたの？」

「顔を洗いに行ってたんですよっ！誰かさんがレモン汁なんてかけるからっ！」

「酷いことをするヤツがいたもんだね」

「ア・ナ・タ・で・す・よ！」

「いふあいふあい（痛い痛い）」

海未ちゃんに頬をつねられる。と、そこへ花丸と善子がやってきた。

「おはようずらく」

「おふあふおく（おはよ〜）」

「朝から仲良しねえ、アンタ達・・・」

呆れている善子。

「ほら、早くゴミ拾い始めましょ。天の分も道具もらつといたから」

「おっ、ありがと」

善子からゴミ拾い用のトングと袋、明かりとなる提灯をもらう。

「さあ、始めるわよ！」

「やるぞら〜！」

「いっぱい拾って綺麗にしようね！」

「私も頑張っちゃいますよー！」

ノリノリでゴミ拾いを始める四人。

海辺に集まった人達は皆、それぞれ笑顔を見せながらゴミ拾いに勤しんでいる。面倒そうにしている人などおらず、皆楽しそうにしていた。

これって……

「フフツ、気付いたかしら？」

背後から声がする。振り向くと、小原理事長が立っていた。

「この町の魅力……もつといえ、この町に住んでいる人達の魅力。この光景を初めて見た時、私は感動したわ。『何て素敵な町なんだろう』ってね」

「……分かります」

俺は素直に頷いた。この町の魅力が、この光景に詰まっていると言っても過言ではない。

「これを他の人達に伝えるには……」

俺の頭の中で、ピンとくるものがあつた。後はこれを、千歌さん達と一緒に形に出来

れば……

と、小原理事長がある方向をジッと見ていることに気付く。その方向には、二人でゴミ拾いをするダイヤさんと果南さんの姿があつた。

「……行かないんですか？」

俺の問いに答えず、寂しそうに笑う小原理事長。ハア……

「えいつ」

「きやあつ!？」

小原理事長の背中を思いつきり押す。前につんのめり、転びそうになる小原理事長。

「な、何するの!？」

「ウジウジしてないで早く行く。ほら、道具もあげるから」

小原理事長の手に、トングや提灯を押し付ける。

「で、でも……」

「全く……普段は威勢がいくせに、肝心な時にヘタレなところは変わりませんね」

「ちよ、誰がヘタレよ!？」

「いいから早く行って下さい。せつかくの機会を逃しますよ」

今度は優しく背中を押す。覚悟を決めたのか、意を決した表情になる小原理事長。

「……行ってくるわ」

「逝ってらっしゃい」

「何か字が違う気がするんだけど!？」

「あの世に逝ってらっしゃい」

「今『あの世』って言ったわよねえ!？」

ツツコミを連発する小原理事長。と、面白そうにクスツと笑う。

「・・・ありがとう、天」

それだけ言うと、小原理事長はダイヤさんと果南さんのところへと向かって行った。

「・・・相変わらずお人好しですね」

いつの間にか、納得がいかない表情の海未ちゃんが俺の側に立っていた。

「自分を脅した相手の背中を押すなんて・・・」

「・・・やっぱりあの人に、悲しそうな顔は似合わないからね」

「ハア・・・天は優しすぎます」

溜め息をつく海未ちゃん。

「まあ、それが天の良いところなんですけどね」

「ありがとう」

俺は苦笑すると、海未ちゃんにあるお願いをするのだった。

「ところで海未ちゃん、ちよっと手伝ってほしいことがあるんだけど・・・」

人の温かさは心に沁みるものである。

「準備は出来ましたか？」

「オッケーだよ！」

新しい衣装に身を包んだ千歌さんが、笑顔で頷く。

俺達は浦の星の屋上で、A q o u r s の新しいPVを撮影しようとしていた。

「海未ちゃん、録画開始」

「了解です」

海未ちゃんがビデオカメラの録画ボタンを押す。

「いつきさん、曲を流して下さい」

『ラジャー！』

インカムを通じて、音響担当のいつきさんに指示を出す。流れ始めた曲は、今回の為に作った新曲『夢で夜空を照らしたい』だ。

海開きの日にこの町の魅力を感じた俺は、すぐに千歌さん達に相談した。そしてその魅力を伝える為、新曲を作ることを提案したのだ。

千歌さん達も賛成してくれて、すぐに新曲の製作が始まった。作詞と作曲は千歌さん

と梨子さん、衣装は曜さんとルビイ、振り付けは花丸と善子に担当してもらった。

そしてもう一つ・・・このPVには欠かせないものがあつた。

「むつさん、よしみさん、お願いします」

『よしきた!』

『皆さーん!お願いしまーす!』

曲がサビに入る前に、インカムを通じてむつさんとよしみさんに合図を出す。

その瞬間・・・たくさんのスカイランタンが、一齐に空へと上つていった。

「わあ・・・!」

目を輝かせている海未ちゃん。

たくさんのスカイランタンをバックに、A q o u r s が歌つて踊る・・・この演出をどうしてもやりたかった。

ちなみにこのスカイランタンは、町の人達が浦の星の近くで上げてくれている。『協力してほしい』とお願いしたところ、皆快く引き受けてくれたのだ。

「凄いな・・・」

想像以上の美しさに、俺も思わず見惚れてしまった。

このスカイランタンの演出は、PVを華やかにする為もあるが・・・それ以上に、町の人達の温かさを表現したいという思いで考えたものだ。

海開きの時の提灯が、良いヒントになったんだよね・・・

「・・・綺麗ですね」

「・・・うん」

海未ちゃんと二人、幻想的な景色に見入る。

放課後に撮影していることもあって、既に日は沈んでいる。しかし夕焼けの名残である赤さが残っており、まさに黄昏時だった。

そこにスカイランタンの明りが合わさり、それをバックにA q o u r s がパフォーマンスをしている・・・これは良いPVになりそうだ。

「『夢で夜空を照らしたい』ですか・・・良い曲が出来ましたね」

「ホントにね。流石は千歌さんと梨子さんだよ」

生まれ育った町に対する郷土愛と、町の人達への尊敬や感謝・・・それをテーマに、千歌さんは想いのこもった素晴らしい歌詞を書いてくれた。

梨子さんもまた、その歌詞を基に心に沁み渡る良い曲を作ってくれた。本当に名曲だと思ふ。

「フフツ・・・何だか私も、久しぶりに作詞がしたくなっちゃいました。今度真姫を誘って、新しい曲でも作ってみましょうか」

「『オコトワリシマス』って言われるんじゃない？」

「じゃあ天も一緒に作詞しましょう。それなら真姫は絶対、『し、仕方ないわね……』って言うてくれます」

「そうかなあ？」

「そうですよ」

笑っている海未ちゃん。

『START：DASH!!』の時もそうだったじゃないですか。あれが私と天、そして真姫の三人で作った最初の曲でしたよね」

「……そうだったね」

「天が考えた『諦めちゃダメなんだ。その日が絶対来る』という歌詞に、当時の私は感銘を受けたものです」

「恥ずかしいから止めて」

口が裂けても千歌さん・曜さん・梨子さん・果南さんには言えない。あの歌詞を書いたのが俺だったなんて……

「あ、真姫から『し、仕方ないわね……』って返事が来ました」

「もう打診したの!?!っていうか返信早くない!?!」

思わずツッコミを入れてしまう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

翌日・・・

「Great! 良いPVね!」

新しく撮影したPVを見て、グツと親指を立てる小原理事長。  
俺達は小原理事長にPVを見せる為、理事長室を訪れていた。

「良かったあ・・・!」

「お墨付きをもらえたね!」

ホツとした様子の皆。まあその前のPVを、あれほど酷評されたもんな・・・

「早速Uploadすると良いわ。きっと反響も大きいんじゃないかしら」

「了解です!」

「ありがとうございます!」

部室に向かう為、急いで理事長室を出て行く皆。俺も出て行くとしたのだが・・・

「天」

小原理事長に呼び止められた。

「・・・海開きの時はありがとう。背中を押してくれて」

「・・・ちゃんと話せたんですか？」

「少しはね・・・まあ、深い話は出来なかったけど」

苦笑する小原理事長。

「私はね、天・・・果南やダイヤと一緒に、またスクールアイドルがやりたいの。もう一度、あのかけがえのない時間を取り戻したいのよ」

「・・・そうですか」

どうやら小原理事長は、ダイヤさんと同じ気持ちらしい。

しかし果南さんがそれを拒んでおり、ダイヤさんも果南さんの意思を尊重している。果南さんの意思が変わらないかぎり、三人が再びスクールアイドルをやることはないだろう。

誰か一人でも欠けてしまえば、スクールアイドルをやる意味が無くなってしまいうのだから。

「以前のAqoursに何があつたのかわりませんが・・・貴女方三人は、肝心な気持ちを言葉にしない傾向があります。スクールアイドルを始める前に、まずは本音をぶつけ合うことから始めるべきだと思いますが」

「・・・ホント、その通りね」

寂しそうに笑う小原理事長。俺は無言で一礼し、理事長室を後にするのだった。

\*\*\*\*\*

「いやあ、良いPVが出来て良かった!」

満足そうに笑う千歌さん。

PVのアップロードを終えた俺達は、帰宅の途についていた。

「そういえば天くん、海未先生はどうしたずら?」

「今日は赤城先生と食事に行くんだって。あの二人、すっかり仲良くなったみたい」

花丸の問いに答える俺。今日の夕飯は俺一人かあ・・・どうしようかなあ・・・

「だったら天くん、今日はウチで晩御飯食べていたら?お母さん、今日の夕飯はカレーにするって・・・」

「ご相伴に預からせていただきます」

「食い気味できたわね!」

梨子さんの提案に全力で乗っかる。奈々さんも料理上手なんだよなあ・・・

「そういえば志満姉が、『最近天くんが夕飯食べに来てくれない・・・』って寂しがってたなあ・・・」

「すいません梨子さん、未来の嫁が待ってるんで『十千万』行きますね」

「志満さんのこと好き過ぎない!？」

「っていうか、未来の嫁って何!?! 私は認めないからね!?!」

「今度ミカン奢ります」

「よろしくお義兄ちゃん!」

「千歌ちゃんがミカンで買収された!?!」

「曜さんのツッコミ。いやあ、軽い義妹で助かったわ。」

「天、ウチの母親も待ってるわよ。いつでも大歓迎って言ってたわ」

「マジで? また善恵さんのご飯も食べたいし、今度お邪魔しようかな」

「ルビイもお母さんから、『また天くんを連れてきなさい』って言われてるんだよね。天くんが初めてウチに来て以来、お母さんは天くんのことを気に入ってるから」

「黒澤家の夕飯は豪華だったなあ・・・『またお邪魔します』って伝えといてくれる?」

「私もママから、『今度はいつ天くんを連れてくるの?』って聞かれるんだよね」

「曜さんの家も行きたいですね。また是非ともお邪魔させていただきませう」

「天くん、皆の家族からモテモテずらね」

苦笑している花丸。思い返してみると、果南さんの家を含め色々なところで夕飯をこ馳走になつてゐる気がするな……

「……やっぱり温かいですね、この町の人達は」  
改めてそう思う。

東京から来た俺を歓迎してくれて、こうやって優しく受け入れてくれる……本当にありがたいことだ。

「……私、ここには何も無いって思ってた」  
千歌さんがそんなことを呟く。

「でも違った。今回PVを作つて、町の人達の温かさに気付いて……この町は、こんなにも素敵な場所なんだって思えた」

俺を見て微笑む千歌さん。

「ありがとう。天くんのおかげで気付けたよ」  
「千歌さん……」

「私達は、この場所から始めよう。スクールアイドルを……Aqoursを！」

「うんっ！」

「そうね！」

「ずらっ！」

「びぎっ!」

「ギラン!」

千歌さんの言葉に応える皆。良いグループになったもんだ・・・

「よし!今日は皆で晩御飯食べよう!志満姉に連絡しなくちゃ!」

「えっ、大丈夫?志満さん大変じゃない?」

「平気平気!志満姉なら何とかしてくれるっ!」

「おいそこのお気楽オレンジヘッド、志満さんに迷惑かけたらスキンヘッドにすんぞ」

「天くん!何で志満姉が絡むと人が変わるの!」

「愛してるの言葉じゃ足りないくらいに志満さんが好きだからです」

「どこのR●k●e●さん!」

「いつまでも志満さんの横で笑っていたいからです」

「それはG●e●e●N!」

「ほら、早く『十千万』に帰りますよ」

「帰るって何!天くんの家じゃないよねえ!」

俺と千歌さんのやり取りに笑う皆。

この場所から始まったAqoursが、これからどんな軌跡を辿るのか・・・とても  
楽しみな俺なのだった。

チャンスは突然やってくるものである。

「あつっい……」

部室の椅子に座っている俺の後ろから、ぐでーんともたれかかってくる善子。

七月に入り、内浦は少しずつ暑くなってきた。

「何言ってるの。本格的な夏はこれからだよ？」

「何で夏なんて季節があるのよ……春の次は秋でいいじゃない……」

「その意見には同意するけども」

苦笑しながら善子の頭を撫でる。

「それよりほら、これ見てみなよ」

「ん？」

パソコンの画面を指差す俺。そこには、この間のPVが映っていた。

「やっぱり綺麗ねえ、スカイランタン」

「いや、それもそうなんだけど……再生回数を見てよ」

「再生回数？」

画面の下へと目を向ける善子。その瞬間、驚愕の表情を浮かべた。

「嘘!? 五万回!?!」

「ずらっ!?!」

「ホントに!?!」

俺達の会話を聞いていたのか、花丸とルビイが慌ててパソコンを覗き込む。

「スカイランタンが綺麗だつて、結構評判になってるんだよ。『夢で夜空を照らしたい』も好評らしくて、どんどん再生回数が増えてるみたい」

「凄いずらあ．．．!」

目がキラキラしている花丸。こんなに再生回数が伸びたの、初めてだもん．．．

「天くん、ランキングはどう!?!」

「えーつとね．．．」

ルビイに尋ねられ、ランキングをチェックする俺。すると．．．

「．．．99位だね」

「ええっ!?!」

「まさかの100位以内!?!」

曜さんと梨子さんも急いで近寄ってくる。マジか．．．

「キタ．．．キタキタキターっ!」

テンションが上がっている千歌さん。

「それって全国でつてことでしょ!? 50000以上いるスクールアイドルの中で、100位以内つてことでしょ!? 私達凄くない!?」

「一時的な盛り上がりかもしれないけど、それでも凄いわね!」  
梨子さんも少し興奮気味だ。

確かに、この短期間でここまでランキングを伸ばしたのは凄い。ランキング上昇率は一位だし、今最も勢いのあるグループといえるだろう。

「何かさあ・・・このままいったら、ラブライブ優勝出来ちゃうかも・・・!」

「調子に乗るな、自惚れオレンジヘッド!」

「その罵倒に慣れちゃった自分が怖い!?」

溜め息をつく俺。ホントにお調子者なんだから・・・

「ラブライブで優勝するということは、全国のスクールアイドルの頂点に立つということです。確かに99位は凄い順位ですけど、裏を返せば上にまだ98組のスクールアイドルがいるということなんですよ?」

「うっ、確かに・・・」

「100位以内に入っているスクールアイドルですから、当然実力は折り紙付き・・・ラブライブの決勝まで進んだことのあるグループもゴロゴロいます。そういったグループを超えないかぎり、ラブライブで優勝なんて出来ないということをお忘れしないで下

さいね」

「も、勿論ですー!」

ビシツと背筋を正す千歌さん。

「でもでも、可能性はゼロじゃないよね!? 私達も100位以内に入ったんだから、ラブライブで優勝出来る可能性は上がったってことだよね!」

「・・・まあ、そうですね」

「やったー!」

喜ぶ千歌さん。

この人、本当に分かってるのかなあ・・・ん?

「メール・・・?」

どうやら、新しいメールが届いたらしい。開いてみると・・・

「東京スクールアイドルワールド運営委員会・・・?」

俺の肩越しに、開かれたメールの差出人をチェックする曜さん。

「東京スクールアイドルワールドって何?」

「近年東京で開かれている、スクールアイドルのイベントですね。どうやら、Aquoursにもお誘いがかかったみたいです」

「」「」「ええええええええええっ!」「」「」

ビックリしている皆。これは突然の展開だな・・・

「開催日は、今週の日曜日ですね・・・どうします?」

「行きます!」

力強く宣言する千歌さん。言うと思った・・・

「お金は大丈夫なんですか?」

「お、お小遣い前借りで!」

「全然大丈夫じゃないパターンですね」

ダメだこの人、何も考えてないわ・・・

「イベントは日曜日の朝から始まるそうなので、もし参加するなら前乗り・・・つまり土曜日に東京へ行って、一泊する必要があります。往復の交通費にプラスして、東京での宿泊代もかかるわけですが・・・本当に大丈夫ですか?」

無言で汗をダラダラ流す千歌さん。はい、アウトー。

『オコトワリシマス』つと・・・」

「わーっ!?!」

メールに返信しようとすると、千歌さんが慌ててパソコンを閉じた。

「お、お金は何とかするからっ!」

「・・・何とかなるんですか?」

「うう……」

涙目の千歌さん。流石に可哀想になったのか、曜さんと梨子さんが助け舟を出す。

「ま、まあまあ！皆で出し合って何とかしようよ！」

「そ、そうよ！こういう時こそ助け合いよ！」

「曜ちゃん、梨子ちゃん……！」

「正直に言つて下さい。懐、潤つてますか？」

「……いえ、全く」

「二人とも!？」

「ゴメンなさい、ルビイもちよつと……」

「マルもそんなにお金は……」

「墮天使グッズ買ったから……」

「皆も!？」

全滅だった。そりやそうか……

「でも、東京のイベントだもんね……」

ルビイが呟く。

「参加、したいよね……」

その言葉に、押し黙ってしまう皆。どうやら皆、気持ちは同じようだ。

「・・・そんなに参加したいんですか？」

「・・・したいよ」

千歌さんが頷く。

「Aqoursをアピールする、絶好の機会だもん。みすみす逃したくないよ」

「・・・ハア」

溜め息をつく俺。こうなりそうな予感がしたんだよなあ・・・

「・・・往復の交通費だけなら、何とかありますか？」

「え・・・？」

「東京での宿泊代が無ければ・・・何とかありますか？」

俺の問いに、皆が顔を見合わせた。

「それなら何とかなるけど・・・」

「でも、イベントって朝からなんですよ？ここからじゃ、当日どんなに早く出発したって間に合わないわよ？参加するなら前乗りしないと・・・」

曜さんと善子が戸惑いの表情を浮かべる。だが、俺には考えがあった。

「大丈夫ですよ。心当たりはあります」

「天ー？」

海末ちゃんがふらつと部室に現れる。

「仕事終わりました。そろそろ帰りましょう」

「お、ナイスタイミング」

「え？」

首を傾げる海未ちゃん。俺は話を切り出した。

「実は今週の日曜日、東京でスクールアイドルのイベントがあるんだけどさ。土曜日の夜、海未ちゃんの実家に千歌さん達を泊めてあげてほしいんだよね」

「ああ、良いですよ」

「「「「「軽っ!」」」」」

ずっけける皆。

「海未先生!?! 本当に良いずら!?!」

「構いませんよ。実家には連絡しておきます」

「で、でも! 流石に大人数で押しかけるのは迷惑なんじゃ!?!」

「全然大丈夫です。ウチはそういうの慣れてるので」

さらっと答える海未ちゃんに、皆絶句していた。苦笑する俺。

「海未ちゃんの家って、日本舞踊の家元なんですよ。家の広さでいえば、黒澤家くらいはあるので大丈夫です」

「そうなんだ・・・」

唾然としているルビィ。

「そういうことなら、私も今週末は一緒に実家に帰ります。その方が千歌達も安心出来るでしょうし」

「ありがとうございます！海未先生！」

千歌さんが海未ちゃんに抱きつく。曜さん達も大喜びしていた。

「やったー！これでイベントに参加できる！」

「良かったですね」

苦笑する俺。

「頑張ってきて下さい。応援してます」

「「「「「え．．．？」」」」」」

俺の言葉に、千歌さん達だけでなく海未ちゃんも固まる。

「えーつと．．．天くん？」

「何ですか？」

おずおずと尋ねてくる千歌さんに、俺は首を傾げた。何だろう？

「まさかとは思うけど．．．行かないつもり？」

ああ、なるほど．．．そういうことね。

「いや、まさかも何も．．．行きませんよ？」



人は人を思いやるものである。

《曜視点》

「よーし！頑張るぞー！」

張り切っている千歌ちゃん。

帰りのバスの中で、私達は東京で行なわれるイベントの話で盛り上がっていた。

「μ'sのメンバーに会えたりして!？」

「東京……未来ずらあ……！」

「ククツ……墮天使ヨハネ、東京に降臨ッ！」

一年生の三人もテンションが上がっている。

そんな中、梨子ちゃんだけが浮かない表情をしていた。

「梨子ちゃん？どうしたの？」

「……天くん、本当に行かないつもりなのかな？」

その言葉に、皆の表情が曇る。

当然天くんも行くものだと思っていた私達は、天くんの『行かない』という発言に

ショックを受けていた。

「・・・仕方ないと思います。アルバイトも忙しいみたいですし  
ルビイちゃんもそんなことを言う。

天くんは今、土日に果南ちゃんのところのダイビングショップでアルバイトをしている。

事前に『休みたい』と伝えているならともかく、いきなり『休ませてくれ』というのは申し訳ないから無理とのことだった。

「・・・そうだね。果南ちゃんも忙しいだろうし、迷惑かけちゃうもんね」

私がルビイちゃんの言葉に賛同すると、梨子ちゃんがポツリと呟いた。

「・・・それだけなのかな？」

「え・・・？」

「私には、東京に行くことそのものを拒否してるように見えたけど・・・」

「どういうことよ？」

善子ちゃんが尋ねる。首を横に振る梨子ちゃん。

「あくまでも、私がそう感じたっていうだけ・・・根拠があるわけじゃない。でも考えてみたら、私達って天くんについて知らないことが多くない？」

「知らないことって？」

「例えば・・・どうして浦の星に来たのか、とか」

「っ……」

そういうえば、考えたことなかったな……

「ルビイ、お姉ちゃんから聞きました。音ノ木坂の理事長さんの力になりたくて、浦の星のテスト生の話を引き受けたって」

「そうだったはずらね……」

ルビイちゃんの話に、驚いている花丸ちゃん。

しかし、梨子ちゃんは納得いかないという表情だった。

「理事長の力になりたかったとはいえ、わざわざ東京を離れてまで内浦に来るかしたら？ 高校生で一人暮らしなんて、ご家族も反対されただろうし……」

「……確かに」

つまり天くんは、その反対を押し切ってまで浦の星に来たということ……

何か理由があるのかな……

「……あれこれ考えても、仕方ないよ」

千歌ちゃんが力なく笑う。

「天くんが、『東京には行かない』って言うてるんだもん。だったらどんな理由があったとしても、私達はそれを強要しちゃいけないんだよ」

「千歌ちゃん……」

「だってそうでしょ？天くんが嫌がることを無理矢理やらせるなんて・・・鞠莉さんのやったことと同じだもん」

「っ・・・」

顔を伏せる私達。

そうだった・・・あの時、天くんがどれほど傷付いたか・・・

「天くんはいないけど、海未先生がいてくれるし心配ないよ。東京のイベントで結果を残して、天くんをビックリさせよう」

そう言つて笑う千歌ちゃん。

「・・・そうね。それが今、私達に出来ることよね」

「天くんの為に頑張ルビィ！」

「マルも気合い入れるぞら！」

「ククツ・・・我がリトルデーモンの為に、一肌脱ごうではないか」

皆の顔に笑顔が戻る。

全く、天くんも罪な男だねえ・・・こんな美少女達から、こんなにも大切に思われてるんだから。

それにしても・・・

「・・・知らないことが多い、か」

天くんのことを、もつとよく知りたい・・・そう思う私なのだった。

\*\*\*\*\*

「んー、海未ちゃんの作るご飯は美味しいね」

「フフツ、ありがとうございます」

嬉しそうに笑う海未ちゃん。教育実習で来てからというもの、海未ちゃんはほとんど毎日ご飯を作ってくれていた。

『Aqoursの親御さん達には負けていられません！私も天の胃袋を掴みます！』と、謎の対抗心を燃やしてはいたが・・・

久しぶりに海未ちゃんの作るご飯が食べられて、俺としても嬉しかったりするのだった。

「それより天・・・本当に良いのですか？」

「ん？何が？」

「東京のイベントの件です。Aqoursの皆に付き添ってあげなくて良いのですか

？」

「ああ、そのことね」

苦笑する俺。

「言つたでしょ？土日は果南さんのところのバイトがあるつて。いきなり『今週は休ませてほしい』なんて、果南さんに迷惑かけちゃうから無理だよ」

「……私には、絵里と顔を合わせるのを避けているように見えるのですが」

「……それが分かつてるなら、聞かないでほしかったな」

溜め息をつく俺。

果南さんに迷惑をかけるというのも理由の一つではあるが、それ以上に……俺は今、絵里姉と顔を合わせたくなかった。

「何故絵里を避けるのですか？確かに喧嘩してしまったかもしれないんですが、天が内浦に来てもう三ヶ月も経つんですよ？いい加減、仲直りしても良いのでは？」

「……海未ちゃんさ、教育実習に来る前に絵里姉と会った？」

「え？ええ、会いましたよ。『教育実習で浦の星に行くので、天の様子を見て来ます』と伝えましたけど」

「それに対する反応は？」

「……『ふーん』の一言でした」

言い辛そうに顔を背ける海未ちゃん。やっぱり・・・

「こつちに来てから絵里姉とは連絡とつてないけど、亜里姉とは定期的に連絡とつてさ。聞いてもいないのに、絵里姉の様子を教えてくれるんだけど・・・俺の話は一切口に出さないみたい。亜里姉の方から俺の話題を振つても、『へえ』とか『そう』としか言わないんだって」

つまり絵里姉は、未だに俺に対して怒っているということだ。

いや、あるいは見限られたのかもしれないな・・・

「『もう』三ヶ月『も』経つんじゃないかと、『まだ』三ヶ月『しか』経ってないんだよ。絵里姉の怒りの持続時間を舐めちゃいけない。あの人が、sを認めて加入するまで、結構な時間がかかったことを忘れてないよね？」

「・・・そういえばそうでしたね」

溜め息をつく海未ちゃん。

「本当に貴方達姉弟は・・・頑固にも程があります」

「一緒にしないでくれる？」

「一緒ですよ。天の頑固さも大概です」

呆れている海未ちゃん。

心外だな・・・絵里姉レベルではないと思うんだけど・・・

「まあとにかく……絵里姉の怒りが収まっていない以上、冷静な話し合いなんて出来ないだろうから。今は顔を合わせない方が良さだよ」

「……そうですか」

残念そうな表情の海未ちゃん。

「それなら絵里と会えなんて言いませんから、東京には一緒に来てもらえませんか？あの友達にとっては慣れない場所ですし、天がいてくれた方が心強いと思います」

「……俺に頼つてどうすんの」

首を横に振る俺。

「俺はずつとA q o u r sのマネージャーを続けるつもりは無いから。小原理事長に脅されたとはいえ、千歌さん達の力にはなりたいたいから最低限の務めは果たすつもりだけど……俺なんかがいなくても、大丈夫なグループになつてもらわないと困るんだよ」

「天……」

海未ちゃんが悲しそうな顔をする。

「貴方がマネージャーという仕事を、そこまで頑なに拒否するのは……やはり私達、  
μ sのせい……」

「止めなよ」

海未ちゃんの言葉を遮る俺。

「誰のせいとかじゃない。俺が自分で決めたことだから・・・ご馳走様」  
俺はそれだけ言うとう椅子から立ち上がり、リビングから出て行くのだった。

\*\*\*\*\*

翌朝・・・

「ふう・・・」

淡島神社の階段を登り切り、一息つく俺。

内浦に来てからというもの、毎朝ジョギングをするのが俺の日課になっていた。Aq  
oursの練習に付き合うにも体力が要るし、この町の風景を見ながら走るのも楽しい  
しな。

「・・・東京か」

昨日の海未ちゃんとの会話を思い出す。

正直、今はあまり東京に戻りたくない。絵里姉のこともあるし・・・

そんなことを考えていた時だった。

「おはようのハグっ！」

「おっと」

後ろから果南さんにハグされる。ホントにこの人は・・・

「おはよう天！」

「おはようございませす。朝から元気ですな」

「勿論！」

笑顔の果南さん。この時間に淡島神社に来ると、結構な確率で果南さんと遭遇するのだ。

まあ果南さんもジョギングが日課だし、お互いジョギングコースは決まってるから当然といえば当然なんだけど。

「天は何か考え事？」

「まあそんなところですよ」

「ふうん・・・東京のイベントのこと？」

「っ!？」

思わず驚いてしまう。何で果南さんがそのことを・・・

「当たりみたいだね」

苦笑する果南さん。

「昨日千歌から、『東京のイベントに出ることになった』っていう連絡があったの。今週末なんだって?」

「ええ。俺は行かないので、バイトのことは大丈夫です」

「・・・そのことなだけどさ」

いつになく真面目な表情の果南さん。

「ついていつてあげてほしいんだ、千歌達に」

「え・・・?」

「今週は予約が入ってるお客さんも多くないし、私一人でも何とか回せるからさ。こつちのことは心配しないで、天は東京に行つて来てほしい」

真剣な表情でそう言う果南さん。

「どうして・・・」

「・・・心配なんだよ、千歌達が」

苦笑する果南さん。

「ダイヤから聞いたけど、私達がスクールアイドルやつてたこと知ってるんでしょ?

二年前、東京のイベントに出たことも」

「ええ、まあ・・・」

「私さ・・・歌えなかったんだよね」

果南さんはそう言うと、切なげに空を見上げた。

「他に出てたスクールアイドル達のレベルの高さに、圧倒されちゃってさ……会場の空気にも呑まれちゃって、歌えなくて……それで打ちのめされて、スクールアイドルは辞めちゃったんだ」

「……そうだったんですか」

「情けないよね。『スクールアイドルとして活躍して、浦の星を廃校の危機から救うんだ!』なんて意気込んでたのに……このザマだもん」

自嘲気味に笑う果南さん。

「だからこそ、千歌達には同じ思いをしてほしくないの。堂々と胸を張って、自分達のパフォーマンスをして……笑顔で帰ってきてほしい」

「果南さん……」

「その為には、千歌達の側に天がいないとダメなんだよ。千歌達にとって、天の存在は凄く大きいから。天が側にいるのといないのとじゃ、気持ちが全然違うと思う」

「……そうですかね」

「そうだよ」

頷く果南さん。

「だから私からのお願い……千歌達と一緒に東京に行ってきてほしい。千歌達のこと

を、側で支えてあげてほしいの」

果南さんのお願いに、俺は素直に頷くことが出来なかった。

果南さんの顔を見ることが出来ず、俯いていると・・・

「・・・ゴメンね、わがまま言つて」

果南さんに抱き寄せられる。

いつもの力強いハグではなく、優しいハグだった。

「千歌から聞いたんだ。天は東京に行きたくないんじゃないかって」

「千歌さんが・・・？」

「正確には、気付いたのは桜内さんみたいだけだね」

梨子さんか・・・鋭いな、あの人・・・

「だから千歌達は、無理に天を東京に連れて行かないって決めたんだって。嫌がるこ

とを強要されて傷付く天を、もう見たくないからって」

「つ・・・」

小原理事長の一件か・・・ずいぶん気を遣わせちゃったんだな・・・

「それが分かつててこんなことを頼むなんて、我ながら最低だとは思うけど・・・それ

でも、これが私からのお願い。ダメかな？」

「・・・ずるいですね、果南さんは」

溜め息をつく俺。

「こんな時だけそんな真剣な顔で、そこまで真摯にお願いされたら……断れるわけないじゃないですか」

「天……」

「……分かりました。今週末のバイトはお休みさせていただきます、Aqoursの皆と一緒に東京のイベントに行ってきます」

「……ありがとう」

微笑む果南さん。

「千歌達のこと、よろしくね」

「了解です。その代わりといっってはなんですけど……」

「何?」

首を傾げる果南さん。俺は果南さんに身体を委ねた。

「もう少しだけで良いので……このままでもいいもらっても良いですか?」

「……フフツ、喜んで」

果南さんは嬉しそうに笑うと、俺を抱き締める腕にギュつと力を込めるのだった。

気合いを入れ過ぎると空回りするものである。

そして迎えた土曜日・・・

「じゃーんー！」

「・・・一体何がどうしたの？」

もの凄く奇抜な格好をしている千歌さんを見て、ドン引きしている梨子さん。

東京に行くからって、気合い入りすぎだろ・・・

「内浦から東京へ行くななんて、一大イベントだもん！お洒落しちゃった♪」

「ピエロのコスプレにしか見えないんですけど」

「酷い!?!」

シヨックを受けている千歌さん。

っていうかこれ、確実に美渡さんの入れ知恵だろうな・・・美渡さんが『十千万』の玄関口で、爆笑しているのが何よりの証拠だ。

まあ美渡さんのことは置いといて、問題なのは・・・

「ちゃ、ちゃんとしてるかな・・・？」

「こ、これで渋谷の険しい谷も大丈夫ずらか・・・？」

仰々しい格好のルビイと花丸だった。

花丸に関しては、ヘルメットを被ってつるはしとか持つてるし・・・お宝でも探しに行く気なんだろうか。

「・・・ルビイも花丸も、普通の服に着替えてきなさい」

「びぎいっ!？」

「で、でも渋谷の険しい谷が・・・!」

「渋谷は険しくないし谷じゃないから。あとそのピエロも着替えて下さい」

「ピエロって言わないでくれる!？」

そう言いつつも、ルビイや花丸と一緒に着替えに行く千歌さん。

と、梨子さんが俺の袖をくいくいと引っ張った。

「天くん、本当に良いの? 『東京には行かない』って言ったのに・・・」

「ええ。果南さんが良いって言うので、お言葉に甘えようかなって」

苦笑する俺。

「ホント・・・ずるい人だよな」

「ずるい?」

「こつちの話です。それより・・・やっぱ梨子さんは、私服姿も可愛いですね」

「なっ!？」

顔が赤くなる梨子さん。

「そ、そういうことを真顔で言わないでっ!」

「本心なんですけど」

「梨子、いい加減慣れた方が良いでしょう」

海未ちゃんが苦笑しながらやってくる。

「天は人を褒めるのに、一切照れたりしませんから。むしろ褒められた方が照れてしまふんですよ」

「海未ちゃんを褒めた記憶は一切無いけどね」

「嘘でしょう! 『海未ちゃんは本当に可愛いね。俺のお嫁さんになってよ』 って言ってくれたじゃないですか!」

「それは確実に言っていないわ」

サラッと事実を捏造したよこの人・・・

「ところで海未ちゃん、今までどこ行ってたの?」

「ちよつと志満さんに挨拶してました」

「おはよう天くん」

海未ちゃんの後ろから、女神様が現れた。

「おはようございます、志満さん。結婚して下さい」

「いきなりプロポーズですか!？」

「フフツ、そんなに私のことが好き？」

「会いたくて会いたくて震えるくらい好きです」

「西●カナじゃないですか!？」

「ありがとう、凄く嬉しいわ。私も会えない時間にも愛しすぎて、目を閉じればいつでも天くんがいるくらい好きよ」

「それも西野●ナですよねえ!？」

海未ちゃんのツツコミが響き渡る。

と、着替え終わった千歌さん達が『十千万』から出てきた。普通の私服姿になっている。

「結局、いつもの服になってしまったずら．．．」

不安げな花丸。俺は花丸の頭を撫でた。

「その服の方が似合ってるよ。花丸は可愛いんだから、服のチョイスさえ間違わなきや大丈夫だって」

「か、可愛っ．．．!？」

赤面する花丸。純粹だなあ．．．

「なるほど．．．海未先生の言った通りですね」

「でしよう？ ああやって素直に人を褒めるのが出来るのは、天の良いところではあるのですが・・・無自覚にフラグを立てやすいのが問題でして」

「・・・納得です」

何やらヒソヒソ話し合っている梨子さんと海未ちゃん。よく聞こえないが、もの凄く心外なことを言われている気がする。

「ねえねえ天くん、私は!?! 私は可愛い!?!」

「はいはい、可愛い可愛い・・・おつ、ルビイもその服の方がよく似合ってるじゃん」

「えへへ、そうかな?」

「何で私だけ扱いが違うの!?!」

抗議してくる千歌さんは放置して、ただただルビイを愛でる。

ホント、この子を妹にしたくて仕方ないわあ・・・

「じゃあ、そろそろ車出すわね」

「ありがとうございます、志満さん。ついでに美渡さんも」

「ついでって何よ!?!」

美渡さんのツツコミ。

曜さんや善子とは沼津駅で待ち合わせている為、俺達は志満さんと美渡さんに車で沼津駅まで送ってもらうことになっていた。

「さて、沼津駅に向かいますでしょうか」

俺がそう言ったところで、俺のスマホに着信が入った。

『できる〜！できる〜！キミならできる〜！』

「まだ着信音それだったの!？」

梨子さんのツツコミはスルーして、着信相手を確認すると・・・あれ、曜さん？

「もしもし?」

『もしもし天くん!?!』

「曜さん?どうしたんですか?」

『お願いだから早く来て!これ以上は私の精神がもたない!』

「え・・・?」

切羽詰った様子の曜さんの声に、首を傾げる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「ククツ・・・魔都にて墮天使ヨハネが、冥府よりリトルデーモンを召喚しましょう」  
「・・・何あれ」

沼津駅に着いた俺達は、石像の前で墮天使ポーズを決める善子を見て呆れていた。  
いつもの墮天使の衣装だけでは飽き足らず、白塗りの顔に赤い付け爪とか・・・もう  
デ●モン閣下にしが見えない。

「天くーんっ!」

「うおっ!?!」

涙目で駆け寄ってきた曜さんが、俺に抱きついてくる。

「もう限界だよ!善子ちゃんの隣にいるだけでもの凄く注目されるし、スマホでメッ  
チャ撮影されるし!私の精神がもたないよ!」

「・・・お疲れ様です」

曜さんの頭を撫でる。

皆からも曜さんに同情の視線が向けられる中、善子はさらに演説を続けていた。

「私の名は・・・墮天使ヨハネッ!」

「!!!キヤーツ!?!」

突然の叫びにビックリした周囲の人達が、一目散に逃げて行く。

完全に怖がられてんじゃん、善子……

「フツ……私の闇の力に恐れをなしたか。下劣で下等な人間共め」

「ックラ●チ」

「ギヤアツ!？」

善子の背後から、首の関節をきめにかかる。

「痛い痛い!ちよ、天!?!ギブギブ!」

「どうも、懸賞金一億三千万ベリーの『悪魔の子』です」

「どこのロ●ンよ!?!ホントにヤバいから!首がミシミシいつてるから!」

「アンタだけは……落とすッ!」

「意識が落ちちやうから止めて!?!」

「それだけで済むと良いね」

「嫌ああああああああつ!?!」

悲鳴を上げる善子なのだった。

\*\*\*\*\*

「うう、首が痛い・・・」

「自業自得だよ」

涙目で首を擦る善子を、冷たい目で見える俺。

志満さんと美渡さんに見送られた俺達は電車に乗り、東京へと向かっていた。出発する直前にむつさん・いつきさん・よしみさんも来てくれて、差し入れにのっぽパンをくれたのだった。

ありがたいことだよな・・・

「のっぽパン美味しいぞら〜!」

「食べ過ぎないでね」

美味しそうにのっぽパンを頬張る花丸に、念の為釘を刺しておく。

花丸の場合、全てののっぽパンを食べ尽くしてしまいかねないからな・・・

「東京に着いたらどこに行こっか!？」

「私はメイドカフェに行ってみたいな!メイドさんの衣装が見たい!」

「ルビィはスクールアイドルシヨップに行きたいです!」

「すっかり観光気分だし・・・」

溜め息をつく俺。梨子さんと海未ちゃんが苦笑している。

「まあまあ、少しくらい良いじゃない」

「そうですよ。せっかく東京に行くんですから」

「・・・ハア」

「これじゃ先が思いやられるな・・・」

「あ、私トランプ持ってきたんだっ！皆でやらない!？」

「よし、大富豪やりましょう。負けた人は罰ゲームで」

「天くんが一番ノリノリじゃない!？」

「梨子さんのツツコミ。隣では海未ちゃんが苦笑している。

「よし！カード配っていくよー!」

「フツ・・・このヨハネに勝負を挑もうとは、良い度胸ね」

「いや、善子にだけは負ける気がしないんだけど」

「何だよ!？」

「だって善子、上条●麻さんばりの不幸体質じゃん」

「その幻想をぶち殺すツ!」

結果として不幸体質は幻想ではなく、本当に一度も勝つことの出来ない善子なのだ。  
た。

旅行先ではついのはしやぎたくなるものである。

「わあ・・・！」

目を輝かせる千歌さん・ルビィ・花丸。俺達は東京・秋葉原に到着していた。

「見て見て！スクールアイドルの広告があるよ！」

はしやぐ千歌さん。一方・・・

「クッククック・・・ここがあまねく魔の者が闊歩すると言い伝えられる約束の地、魔都・東京ね」

ドヤ顔でポーズを決めている善子。魔都って何やねん。

「はいはい、はしやぎすぎないの」

釘を刺す俺。

「とりあえず、勝手な行動はしないように・・・」

「あつ、スクールアイドルシヨップ！」

「びぎいっ！」

「人の話聞いてくれる?!」

近くのスクールアイドルシヨップへと走っていく千歌さんとルビィ。

何してんのあの人達・・・

「すっかり夢中になつてますね」

「皆はいやいでるなあ」

苦笑している海未ちゃんと曜さん・・・って、あれ？

「気のせいかな・・・海未ちゃんと曜さん以外誰もいない？」

「善子は近くに墮天使シヨップがあるらしくて、そちらへ行きましたよ。花丸は秋葉原の街を巡りたいとのことで、付き添いの梨子と一緒に行ってしまいました」

「・・・もう嫌だ」

溜め息をつく俺。内浦に帰りたい・・・

「まあせっかくですし、観光するのも悪くないでしょう。私は先に実家へ戻ろうと思  
います。天と曜はどうしますか？」

「私はちよつと寄りたいところがあるので」

「・・・じゃあ俺も曜さんに付き合おうかな。ついでに全員回収していくよ」

「了解です。ではまた後ほど」

海未ちゃんはその言うと、実家へと戻っていった。

俺は曜さんへと視線を移す。

「曜さん、寄りたいところってどこですか？俺で案内できるところなら、案内させても

らいますけど」

「ホント!？」

目を輝かせる曜さん。

「さつきも言ったけど、メイドカフェに行きたいんだよね!」

「やっぱり俺も海未ちゃんの実家に行ってます」

「ちよつと!？」

慌てて襟首を掴まれる。ええ・・・

「勘弁してくださいよ・・・それはちよつと勇気が必要ですよ」

「大丈夫だよ! 『愛と勇気だけが友達さ』ってアン●ンマンも言ってるじゃん!」

「いや、俺はアンパ●マンじゃないんで。愛と勇気以外にも友達いるんで」

っていうかそれ、『アンパン●ンのマーチ』の歌詞だよな? ア●パンマン本人が言って

たわけじゃないよね?

アンパンマ●にだって友達はたくさんいるわ。

「お願い天くん! 私一人じゃ勇気が出なくて入れないの!」

「それが本音じゃないですか。曜さんも勇気が無いパターンじゃないですか」

「天くん、お願いっ!」

両手を合わせて、上目遣いをお願いしてくる曜さん。

何か今、あの人と被ったな・・・髪色もちよつと似てるし・・・

「・・・分かりましたよ」

「やったあ！」

喜ぶ曜さん。そういや、あの人の頼みも断れなかつたつけ・・・

「それで？どこのメイドカフェに行くんですか？一口にメイドカフェと言っても、色々お店がありますけど」

「フッフッフ、そこは抜かりなく調査済みだよ！」

胸を張る曜さん。大きいな・・・じゃなくて。

「実は一軒、もの凄く気になってるお店があるんだよね！」

「へえ・・・そんなに有名なお店なんですか？」

「うん！『伝説のメイド』って呼ばれてるメイドさんがいることで有名なお店なの！」

「・・・マジかあ」

苦笑する俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「えーつと、この道がここだから・・・」

「こつちですよ」

「えっ、ホント!?!」

スマホと睨めっこしていた曜さんが、慌てて俺の後をついてくる。

俺達は、『伝説のメイド』がいるメイドカフェを目指していた。

「天くん、道詳しいね・・・ひよつとして、そのお店知ってるの?」

「知ってますよ。行ったことありますし」

「ええっ!?!」

驚く曜さん。

「じゃ、じゃあ! 『伝説のメイド』に会ったことあるの!?!」

「ありますよ」

「どんな人!?!」

「それは行つてのお楽しみです」

「ええっ!?! 凄く気になるんだけど!?!」

そんな会話をしているうちに、目的地に到着する。

何だか懐かしく感じるな・・・

「そういえば今日、『伝説のメイド』は出勤してるんですかね?」

「ネットの口コミで調べたら、土日にいることが多いみたい。前は平日の方が多かったみたいだね」

「だろうな。当時は高校生だったから放課後にバイトしてたけど、今は大学が忙しいって言ってたし・・・」

「そういえば、最近新しいメイドさんが入ったみたいだよ。もの凄く可愛いメイドさんで、『伝説のメイド』もイチオシなんだって」

「そうなんですか?」

「あの人がイチオシかあ・・・どんな人なんだろう?」

「よし・・・!」

扉の前に立ち、深呼吸を始める曜さん。

「入る前に、まずは心の準備を・・・」

「こんにちは〜」

「天くん!?!」

扉を開けて中に入る俺。すると・・・

「いらっしやいませ〜♪」

背中までかかる赤い髪を揺らしながら、一人のメイドさんが笑顔で駆け寄ってきた。

えっ・・・

「二名様でよろしいでしょう・・・か・・・」

俺の顔を見て硬直するメイドさん。そんなメイドさんを、曜さんがキラキラした表情で見つめていた。

「うわあ、メイドさんだあ・・・！可愛いなあ・・・！」

曜さんがまじまじと観察していることを気にもせず、ダラダラ汗をかきながら俺を見ているメイドさん。

うん、とりあえず・・・

「スイマセン、店を間違えました」

「待って!？」

踵を返して店を出ようとした俺の肩を、メイドさんがガシツと掴んだ。

「違うの！これは違うの！」

「何が違うンデスカ？」

「何でカタコトなのよ!?!お願いだから事情を聞いて!?!」

「誰カト間違エテマセンカ？俺達ハ初対面ジャナイデスカ」

「冗談でも他人のフリなんてしないでくれる!?!天に他人のフリなんてされたら、私は本気で泣く自信あるわよ!?!」

既に涙目のメイドさん。一方、曜さんは困惑していた。

「えーつと・・・天くん、このメイドさんと知り合いなの・・・?」

「いえ、全く」

「ちよつと!？」

「真姫ちゃん?」

奥からもう一人のメイドさんがやってきた。ベージュ色の長い髪を、独特のサイドテールに結ったメイドさんだ。

「騒がしいけど、何か問題でもあった・・・の・・・」

やはり俺を見て固まるメイドさん。俺もそのメイドさんを見て固まってしまった。

そして・・・

「そつ・・・天くうううううううんつ!」

「ことりちやああああああああんつ!」

「ええええええええええつ!」

お互いの元に駆け寄り、思いつきり抱き合う。曜さんがビツクリしていた。

「会いたかったよ天くんつ!」

「俺もだよことりちゃんつ!」

「・・・相変わらず仲良しね、アンタ達」

ひしと抱き合う俺達を見て、赤髪のメイドさんが溜め息をつく。

「全く・・・私にはそんなリアクションしてくれなかつたくせに・・・」

「天くん、真姫ちゃんがやきもち妬いてるよ」

「アララ、ホントだね。全く、真姫ちゃんったら可愛いんだから」

「べ、別にやきもちなんて妬いてないわよ!?!」

「ゴメンゴメン。ほら真姫ちゃん、ハグしよ?」

「し、仕方ないわね・・・」

と言いつつも、しつかり俺に抱きついてくる真姫ちゃん。曜さんが呆然としていた。

「そ、天くん・・・そろそろ説明してくれると助かるんだけど・・・」

あつ、完全に曜さんを置き去りにしてたわ・・・

っていうか、この二人の顔にまだピンときてないのかな?

「曜さん、今 $\mu$  sの画像って見れます?」

「え?あ、うん。千歌ちゃんからもらったのがあるよ」

そう言つてスマホを操作し、 $\mu$  sの画像を表示する曜さん。それを見た瞬間、曜さんが驚愕の表情を浮かべた。

「えっ!?!」

スマホの画面と二人のメイドさんの顔を、ダラダラ汗を流しながら超高速で交互に見

る。

「ま、まさかつ・・・!?」

「そのまさかです」

苦笑する俺。

「南ことりちゃん、西木野真姫ちゃん・・・二人ともμ'sのメンバーですよ」

「初めまして♪」

「どうも」

挨拶する二人に、完全に固まってしまふ曜さんなのだった。

知らない方が良いことでも気になるものである。

《曜視点》

「はい天くん、あ〜ん♪」

「あ〜ん・・・ん、美味しい!」

「でしよでしよ!?!私が考えた新作メニューなの!」

「ホントに美味しいねコレ・・・しかもことりちゃんに食べさせてもらえたおかげで、尚更美味しく感じるよ」

「もう、天くんつたら♡」

「・・・どこのバカップル?」

「気にしたら負けよ。この二人はずっとこんな感じだから」

溜め息をつく西木野さん。私達は今、メイドカフェの奥にある従業員用の控え室にお邪魔していた。

南さんも西木野さんもちょうど休憩時間に入るところだったらしく、ここまで案内してくれたのだ。

「ことりは天を溺愛してて、昔からメチャクチャ可愛がつてるのよ。天もそんなこと

りにもの凄く懐いてるから、この二人が一緒にいる時の空間はいつも甘々ってわけ。知らない人が見たら、間違ひなく恋人同士だと勘違いされるレベルね」

「な、なるほど・・・」

これで付き合つてないとか嘘でしょ・・・？

今だつて南さんと天くんは隣同士で座つてるけど、ピツタリくつついてるよ？ソファのスペースは全然余裕あるのに、お互いがお互いに寄り添い合つてるよ？

これで本当に恋人同士じゃないの・・・？

「何度も言うけど、気にしたら負けよ。この二人に関しては、『こういうものなんだ』つて割り切らないと」

諦めたような目をしている西木野さん。

あつ、既に達観してらっしやる・・・

「いやあ、それにしてもビックリしたよ」

一通りイチャイチャして落ち着いたのか、天くんが西木野さんに視線を移す。

「まさか真姫ちゃんか、メイドさんに憧れてたなんて」

「違うわよ!？」

慌てて否定する西木野さん。

「人が足りなくて困つてることりが言うもんだから、仕方なく手伝つてあげてる

だけよ！」

「真姫ちゃんは普通のメイドカフェより、ツンデレカフェの方が向いてると思うよ」

「人の話聞きなさいよ!?!?っていかどういいう意味よそれ!?!」

「だってツンデレって、真姫ちゃんの為にあるような言葉じゃん」

「人をツンデレの代表格みたいに言わないでくれる!?!」

「いや、実際代表格でしょ」

「ちよつと表出なさい!」

ツツコミを連発する西木野さん。大変そうだなあ・・・

「まあでも・・・新しく入ったもの凄く可愛いメイドさんっていうのが、真姫ちゃんだったことは納得だわ」

笑っている天くん。

「真姫ちゃん可愛いし、メイド服もよく似合ってるもん」

「・・・ありがと」

照れたようにふいっと顔を背ける西木野さん。確かに西木野さんは可愛い・・・というより、とても綺麗な女性だった。

μ, sの写真では肩にかかるくらいだった髪も、今では背中にかかるくらいまで伸びている。

「これだけ可愛いメイドさんなら、『伝説のメイド』がイチオシするのも頷けるよ……ねえ、ミナリンスキーさん？」

「フフツ、でしょ？」

笑う南さん。噂の『伝説のメイド』とは、どうやら南さん……もといミナリンスキーさんのことらしい。

まさか『伝説のメイド』が、sのメンバーだったなんて、夢にも思わなかったなあ……

「つていうか、こっちこそ驚いたわよ。天がスクールアイドル……Aqoursだけ？そのマネージャーをやってるなんて」

「そうそう！海未ちゃんから聞いた時はビックリしちゃった！」

「……まあ、色々あってね」

天くんの表情に陰りが差した。鞠莉さんのことを思い出してるのかな……

「そのAqoursがスクールアイドルのイベントに参加するから、天も東京に戻ってきたんでしょう？そういうことは前もって教えなさいよ」

「そうだよ！それが分かってたら、私達だってちゃんと時間作つたのに……」

「ゴメンゴメン」

苦笑しながら謝る天くん。

「スケジュール的に皆と会う時間は無いと思って、あえて何も言わなかったんだよ。だから海未ちゃんにも、『皆には何も言わないで』ってお願いしておいたんだ」

「全く……海未は天の言うこと何でも聞きちゃうんだから……」

「やれやれと言いたげな西木野さん。と、南さんがおずおずと尋ねる。」

『皆に』ってことは……その、絵里ちゃんにも……?」

「……伝えてないよ。一応亜里姉には伝えたから、耳には入ってると思うけど」

「絵里ちゃんから連絡は……?」

「何も無いし、俺も会うつもりはないよ。仲裁役の亜里姉も、今週末は東京にいないみたいだしね」

淡々と話す天くん。

南さんの言う『絵里ちゃん』って、*μ* sの絢瀬絵里さん……つまり天くんのお姉さんだよな?」

天くん、お姉さんと仲悪いのかな……

「ホントにもう……天も絵里も頑固なんだから」

呆れている西木野さん。

「二度腹を割って話し合ってみなさいよ。本音をぶつけ合わなきゃ、理解出来るものも出来やしないわよ」

「残念ながら、話し合った結果がこれなんだよ」

西木野さんの言葉をバツサリ切り捨てて天くん。

「もう一度話し合おうにも、お互いが冷静になれなきや同じことの繰り返しになっ  
ちやうでしょ。今はその時じゃないんだよ」

「天くん・・・」

「ゴメンことりちゃん、お手洗い借りたいんだけど」

「え？ああ、どうぞ。廊下の突き当たりにあるよ」

「ありがとう」

天くんは席を立つと、控え室から出て行った。南さんが申し訳なさそうに私を見る。

「ゴメンね、雰囲気悪くしちゃって・・・」

「い、いえ！そんな！」

「もう、真姫ちゃんがあんなこと言うから・・・」

「絵里の話を振ったのはことりでしょ」

溜め息をつく西木野さん。私は思い切って尋ねてみることにした。

「あの、天くんってお姉さん・・・ 絢瀬絵里さんと仲悪いんですか・・・？」

私の質問に対し、困ったように笑う南さん。

「そんなことないよ。二人はとつても仲の良い姉弟なの。ただ、今はちよつと姉弟喧

嘩中で……」

「姉弟喧嘩、ですか？」

「うん、色々あつてね……」

言葉を濁した南さんだったが、そこへ西木野さんが口を挟んだ。

「テスト生の話を受けるか断るかで揉めたのよ」

「真姫ちゃん!？」

「目の前でこんな話しちやっただから、今さら隠す必要も無いでしょ。それにこの子は、今の天と最も関わりが深い子の一人なのよ？天のことを知る権利があると思うわ」

「そうかもしれないけど……」

躊躇いを見せる南さん。私は西木野さんの言葉が気になっていた。

「天くんとお姉さんとの間で、意見が対立したってことですか？」

「まあね」

頷く西木野さん。

「天と絵里のご両親は、仕事の関係でロシアに住んでるの。だから天は、絵里ともう一人の姉……亜里沙っていうんだけどね。三人で東京に住んでたのよ」

そうだったんだ……全然知らなかった……

「天が理事長からテスト生の話を打診された時、絵里は猛反対したの。絵里はこっちで就職が決まってたし、亜里沙も大学はこっちにあるから。つまり天がテスト生になつて内浦へ行くことになつても、二人はついて行くことが出来ない・・・必然的に、天は一人暮らしをすることになるでしょ？絵里としては、それが嫌だったみたい」

「・・・そうですよね」

その反応が自然だと思う。

「ご両親がロシアにいるのなら、今はお姉さんが天くんの保護者みたいなもの・・・心配するのも当然だ。」

「それに天つて、凄く勉強が出来るのよ。偏差値の高い超難関校でも、あの子だったら十分に合格出来る可能性があった。将来のことを考えたら、そういう高校を選ぶべきだつて絵里は主張したんですつて」

その主張も間違つていないと思う。

そういうった選択肢があったのなら、お姉さんとしてはそっちを選んでほしいだろう。

「それでも天は、テスト生の話を受ける意思を曲げなくて・・・それで絵里と大喧嘩になつたのよ」

苦笑する西木野さん。

「その場にいた亜里沙から聞いたけど、かなり激しく言い合つたみたい。二人があん

な大喧嘩をしたのは、五年前以来ですって」

「五年前……？」

「絵里が、sに加入する前に、ちよつと色々あつてね……まあそれは置いといて。そんなことがあつて、二人は今距離を置いてるのよ」

「そうだったんですね……」

天くんが東京に行くことを拒んでいたのは、こういうことだったんだ……

お姉さんと顔を合わせたくなかつたから……

「ウチのお母さん、未だに責任を感じてるんだよねえ……」

溜め息をつく南さん。

「自分が天くんにテスト生の話を打診したせいで、二人の関係を拗れさせちゃつたつて……」

「そういえば、音ノ木坂の理事長さんは南さんのお母さんなんですよね」

「そうだよ。ウチのお母さんも、天くんのごことは自分の息子みたいに可愛がつてて……それだけに、二人が大喧嘩したつて知つた時はショックを受けてたなあ……」

悲しそうな表情の南さん。どうやら天くんとお姉さんの大喧嘩は、周りの人達に結構な影響を与えているようだ。

そんな天くんにもナージャーをやつてもらつてゐる身としては、ちよつと申し訳ない

な・・・

「まあこんな話をしておいて、こういうことを言うのもどうかと思うけど・・・貴女達が責任を感じる必要は無いのよ？」

私の表情から心境を汲み取ってくれたのか、西木野さんが優しい表情で私を見ていた。

「これはあくまでも天と絵里の問題であって、誰が悪いとかそういう話じゃないの。天には天の意見があつて、絵里には絵里の意見があつた・・・それがぶつかり合つてこゝうなつてただけだから、誰にも責任なんて無いのよ」

「真姫ちゃんの言う通りだよ。今は喧嘩中でも、きつとすぐ仲直りしてくれるって信じてる。あの二人の仲の良さは、私達がよく知ってるんだから」

西木野さんと南さんはそう言ってくれたが、私は複雑な気持ちを拭えないのだった。

\*\*\*\*\*

「ご馳走様。休憩時間中だったのに、何かゴメンね」

「気にしないで。久々に天くと会えて嬉しかったから」  
笑顔でそう言ってくれることりちゃん。

千歌さん達も十分観光を楽しんだようで、『そろそろ合流しよう』と連絡が来たのだ。  
こっちはアンタ達を待ってたっていうのに・・・

「内浦へは明日帰るのよね？夏休みにまた東京に戻ってきたりしないの？」

「今のところ、予定は決めてないかな」

真姫ちゃんの質問に、苦笑しながら答える俺。

「逆に内浦に遊びに来なよ。少しは案内出来ると思うから」

「ええ・・・めんどくさいんだけど・・・」

「そっかあ・・・また真姫ちゃんと会いたいんだけどなあ・・・」

「し、仕方ないわね！そこまで言うなら遊びに行つてあげるわよ！」

言葉とは裏腹に、口元が緩んでいる真姫ちゃん。ホント素直じゃないなあ・・・

「内浦つて海が綺麗なんですよ？私も新しい水着買って、泳ぎに行きたいなあ」

「露出多めの水着でお願いします」

「欲望丸出し!？」

曜さんのツツコミ。ことりちゃんが面白そうに笑っている。

「もう、天くんのエッチ♡じゃあその時は、天くんがサンオイル塗ってくれる？」

「はい喜んで！」

「・・・西木野さん、この二人って」

「気にしたら負けよ」

曜さんと真姫ちゃんが何やら話している。仲良くなれたようで何よりだ。

「じゃあ曜さん、そろそろ行きましようか」

「あ、うん」

「天」

真姫ちゃんに名前を呼ばれて振り向くと・・・そのまま優しく抱き締められた。

「真姫ちゃん・・・？」

「・・・また必ず会いに来なさいよ。私だって、天に会えないのは寂しいんだから」

「真姫ちゃん・・・」

「連絡くらい寄越しなさい。いつでも待ってるわ」

「・・・ありがとう、真姫ちゃん」

真姫ちゃんを強く抱き締め返す。

そんな俺達を包み込むように、ことりちゃんが優しく抱き締めてくる。

「私だって、天くんに会えないのは寂しいんだからね。それは皆も一緒だってことを、

忘れないで」

「ことりちゃん・・・」

「私や真姫ちゃんは勿論、他の皆にもちゃんと連絡してあげて。皆待つてるから」

「・・・うん、分かった」

ことりちゃんと真姫ちゃんの温もりを感じ、心が温かくなる。

こうやって自分のことを想ってくれる人がいるって、幸せなことだよな・・・

「じゃあ、そろそろ行くね」

「うん、行ってらっしゃい！」

「イベント頑張るなさい。応援してるわ」

「あ、ありがとうございます！」

恐縮しながら頭を下げる曜さん。

笑顔で手を振る二人に見送られ、俺達は千歌さん達との待ち合わせ場所へと歩き出した。

「・・・幸せ者だね、天くんは」

曜さんがそんなことを言う。

「あんなにも大切に想ってくれる人達がいるんだもん。羨ましいな」

「・・・ええ、俺の自慢です」

他の皆にも連絡しないと・・・ずいぶん心配かけてるみたいだし。

「・・・ねえ、天くん」

そんなことを考えていると、曜さんがおずおずと口を開いた。

「何ですか？」

「あのさ、ちよつと聞きたいことがあるんだけど・・・」

「聞きたいこと？」

首を傾げる俺。

曜さんは口を開きかけたが、思い留まったように開きかけた口を閉じた。

「・・・ううん。やっぱり何でもない！」

笑顔でそう言う曜さん。

どことなく悲しそうな表情をしている曜さんの様子が、少し気になる俺なのだった。

見下されて良い気分になる人などいない。

「ええっ!?じやあ曜ちゃん、南ことりさんと西木野真姫さんに会ったの!？」

「うん。凄く綺麗で、メツチャ良い人達だったよ」

「良いなあ・・・!」

曜さんを羨ましがる千歌さんとルビィ。

合流した俺達は、海未ちゃんの実家へ行く前に神田明神へと向かっていた。千歌さんがどうしても行きたいのだそうだ。

「ちよつと天くん!?!どうして呼んでくれなかったの!？」

「どこかの誰かさん達は、俺に何も言わずにいなくなっちゃったじゃないですか」

「」「」「すいませんでした」「」「」

千歌さん・梨子さん・花丸・ルビィ・善子が即座に謝る。全く・・・

「まあ、また機会があれば紹介しますよ」

「絶対だよ!?!絶対紹介してね!?!」

「ルビィも忘れないでね!?!」

「はいはい」

そんな会話をしていると・・・懐かしい風景が目の前に現れた。

「・・・変わらないなあ」

思わずそんなことを呟く。

神田明神へと続く、長い石の階段・・・ $\mu$  sの皆はあの頃、何度も何度もここを駆け上ってたっけ・・・

「これが、 $\mu$  sがいつも練習していたっという階段・・・！」

目を輝かせるルビィ。

$\mu$  sファンの間ではこの場所は有名で、『聖地』なんて呼ばれていたりするらしい。『仰々し過ぎる』って、 $\mu$  sの皆は苦笑いしてたけど。

「ねえ、ちよつと上って・・・」

「先に行きますね」

「ちよ、天くん!？」

千歌さんが言い終わる前に、俺はもう階段を駆け上がり始めていた。

この階段を見ていたら、身体が勝手に動いてしまったのだ。

「天くん!？ちよつと待ってほしいぞら!？」

「っていうか早すぎない!？」

花丸と善子の悲鳴が聞こえてくる。

それはそうだ。μ sの皆と一緒に、何度この階段を上ったことか・・・

「よっー!」

一番乗りで階段の上に到着する。

目の前に広がる神田明神の境内に、何だかとても懐かしい気持ちになっていると・・・

「ん?」

何やら歌声が聴こえた。誰かが境内で歌ってる・・・?

「やつと着いたあ・・・」

「結構キツいね・・・」

皆が続々とやってくるが、俺の視線は一点に向けられていた。そこでは同じ制服を着た二人の女の子が、見事な歌唱力で歌を歌っているところだった。

あの二人って・・・

「凄い・・・」

千歌さんが眩く。歌唱力もさることながら、二人のハモリがとても美しかった。

やがて歌い終えた二人が、ゆっくりとこちらを振り向いた。

「こんにちは」

サイドテールに髪を括った女の子が、こちらに向けて会釈する。

「っ、こんにちはっ!」

緊張気味に伝える千歌さん。それに対して……

「まさか……天界勅使!？」

「何言ってるの?」

訳の分からないことを言いながら、俺の背中に隠れている善子。相変わらず人見知りなんだから……

と、女の子が千歌さん達を見て何かに気付いた。

「あら? 貴女達もしかして、A q o u r s の皆さん?」

「えっ、どうして……」

「この子、脳内に直接……!？」

「善子、飴あげるからちよつと黙ってて」

「子供扱い!？」

「PV見ました。素晴らしかったです」

微笑みながらそう言ってくれる女の子。千歌さんが嬉しそうに笑う。

「ありがとうございます!」

「もしかして……明日のイベントでいらしたんですか?」

女の子の目が一瞬細められたのを、俺は見逃さなかった。

あの目は……

「あ、はい！」

「・・・そうですか」

女の子は微笑むと、俺へと視線を移した。

「貴方は？ A q o u r s のどなたかの彼氏さんですか？」

「「「「かつ、彼氏!?!」」」」」

顔を赤くする皆。何照れてんのこの人達・・・

「いえ、マネージャーです」

「あら、マネージャーさんがいらつしやるんですか？ 凄いですね」

「大したことはしてませんけどね」

淡々と答える俺。

「貴女の方が凄いと思いますよ・・・ S a i n t S n o w さん」

「あら、私達のことをご存知で？」

驚いた様子の女の子。俺は溜め息をついた。

「これでも主要なスクールアイドルはチェックしているので。貴女が鹿角聖良さんで、お隣が鹿角理亞さん・・・北海道で姉妹ユニットとして活動されているそうですね」

「ええっ!?!この二人スクールアイドルだったの!?!」

「少しは勉強して下さい、世間知らずオレンジヘッド」

「相変わらず辛辣!?!」

全くこの人は……

もつと他のスクールアイドルを見て、勉強しようという心構えは無いんだろわか……

「貴女方も明日のイベントに参加する為に、北海道からいらしたんですね?」

「ええ、先ほど到着したところでした」

笑みを浮かべる聖良さん。

「明日のイベント、お互い頑張りましょう。楽しみにしています」

そう言うのと、聖良さんは一礼して歩き出した。

その瞬間、理亞さんがこちらに向かって勢いよく走り出す。

「「「「「ええっ!?!」」」」」

動揺する皆。

そしてこちらにギリギリまで近付いた瞬間、境内の地面に手をつき……その勢いで空中に跳んだ。

「おお……」

その身軽さに、思わず感嘆の声を上げる俺。理亞さんは空中で一回転すると、聖良さんの横にスタツと着地した。

「……凄いですね」

「・・・どうも」

不敵な笑みを浮かべる理亞さん。いやあ、何が凄いつて・・・

「よくスカートで跳びましたね・・・パンツ丸見えでしたけど」

「「「「「そつち!?!」「「「「「」」」」」」」

「っ?」

聖良さんまでツツコミを入れてくる。

一方の理亞さんは顔が一瞬で真っ赤になり、慌ててスカートを押さえ俺から距離をとった。

「こ、この変態っ!」

「スカートにも関わらず跳んで、人にパンツ見せつけた貴女に言われたくないです」

「うう・・・」

涙目の理亞さん。聖良さんがコホンツと咳払いをする。

「えーつと・・・見苦しいものをお見せして、申し訳ありませんでした」

「見苦しい!?!私のパンツが見苦しいってどういうの!?!」

「そ、そういう意味で言っただんじやなくて!」

「姉様のバカアアアアアッ!」

「ちよ、理亞!?!」

走り去っていく理亞さんを、慌てて追いかけていく聖良さん。あーあ・・・

「理亞さん・・・可哀想に・・・」

「誰のせいだと思ってるすら!？」

「本当にすまないと思ってる（キリッ）」

「絶対嘘ずらっ!」

花丸のツツコミ。まあ正直、俺は申し訳ないとは思っていなかった。

聖良さんのあの目・・・あれは人を値踏みしている時の目だ。さらに俺がマネージャーだと名乗った時の反応・・・『お前達には必要ないだろう』という思いが見えた。

そして何よりも、あの二人の不敵な笑み・・・自分達に絶対の自信がある一方で、明らかにこちらを見下している。

「・・・気に食わないな」

小さく呟く俺なのだった。

元気の無い人を見ると心配になるものである。

「こ、ここが海未先生の実家……」  
啞然としている千歌さん。

武家屋敷のような趣のある古風な家を前に、皆思わず固まってしまっていた。

「何だかウチと似てて、親近感が湧くなあ」

「黒澤家もこんな感じだもんね」

ルビィとそんな会話をする。

初めて黒澤家にお邪魔した時、『まるで園田家だな』って思ったっけなあ……

「とりあえず入りましょうか」

そう言つてインターホンを押そうとすると、その前にドアが開いた。中から着物姿の女性が出てきて、俺達を見て首を傾げる。

「あら？ウチに何か御用ですか？」

「あ、えーつと……」

「お久しぶりです、波未さん」

頭を下げる俺。波未さんは俺を見ると、顔をパアツと輝かせた。

「まあ、天さん！お久しぶりです！」

「お元気そうで何よりです。お変わりないですか？」

「ええ、おかげさまで。天さんもお元気そうで安心しました」

波未さんと談笑していると、梨子さんに袖を引っ張られた。

「そ、天くん・・・こちらの方は・・・？」

「ああ、すみません。こちらは園田波未さん、海未ちゃんのお母さんです」

「初めまして」

微笑みながら一礼する波未さん。相変わらず作法が綺麗だなあ・・・

「お、お母さん!?海未先生の!?!」

「お姉さんじゃなくて!?!」

「フフツ、そう言っていたら嬉しそうです」

皆の驚きのように、口元に手を当てて嬉しそうに笑う波未さん。

まあ確かに、波未さんと海未ちゃんって似てるもんなあ・・・しかも波未さんは若く

見えるし、俺も最初は海未ちゃんのお姉さんだと勘違いしたっけ・・・

そんなことを思い出していると、家の中から海未ちゃんが出てきた。

「お母様、何かあったのですか・・・って、皆もう着いてたんですね」

「遅くなつてゴメンね、海未ちゃん。ちゅんちゅんとイチヤイチヤしててさ」

「ことりと会ったんですか!?!あの子はまた抜け駆けを．．．!」

「あと、ツンデレ姫と戯れてた」

「真姫まで!?!ズルいです!」

『『ちゅんちゅん』と『ツンデレ姫』で通じるんだ．．．』

呆れている曜さん。まあ、sのメンバーなら、大体ニュアンスで通じるからな。

「海未、こちらの方々が浦の星の．．．?」

「ええ、そうです」

「まあ、いつもウチの海未がお世話になってます」

「い、いえ!こちらこそ!」

慌てて頭を下げる皆。俺も波未さんに一礼した。

「すみません波未さん、大勢で押しかけてしまって．．．」

「フフツ、天さんとそのお友達ならいつでも大歓迎です」

ニッコリ笑う波未さん。

「それでは、私は夕飯のお買い物に行ってきます。どうぞ自分の家だと思って、ゆつく

り寛いで下さいね」

「ありがとうございます」

「海未、皆さんに家の中を案内して差し上げて」

「はい、お母様」

波未さんは微笑むと、そのまま買い物へと出かけていった。

「いやあ、波未さんは相変わらず綺麗だねえ．．．結婚しよ」

「出来ませんよ!?!人妻ですからね!?!」

「アハハ、冗談だよ」

「私でしたら結婚出来ますよ?」

「．．．ごめんなさい」

「ガチトーンで断るの止めてもらえます!?!」

「この二人、本当に仲良しすらね．．．」

「[[[[[確かに．．．]]]]」

苦笑する花丸の言葉に、同じく苦笑しながら頷く皆なのだった。

\*\*\*\*\*

「美味しかったぞら〜♪」

幸せそうに寝そべる花丸。園田家で夕飯をご馳走になった俺達だったが、その豪華さに全員が大満足だった。

流石は波未さん、料理も上手とか完璧すぎる。

「俺、料理が得意な人と結婚するんだ・・・」

「じゃあ私しかいませんね」

「ちよつと何言ってるか分かんない」

「何ですか!」

全く、海未ちゃんときたら・・・

「ところで海未ちゃん、俺は今夜どこで寝たら良いの?」

海未ちゃんに尋ねる俺。俺達は今大部屋にいるのだが、ここはA q o u r sの皆に用意された場所だ。

俺はどこか余っている部屋にでも・・・

「ここにすけど?」

「寝言は寝て言え、ラブアローシユーター」

「その呼び方止めてもらえます!?」

何言ってるのこの人。年頃の男女を同じ部屋で寝かせる気なの?

「あのね海未ちゃん、皆の気持ちを考えよう? 男と一緒に寝るなんて、皆嫌に決まって

るでしょ?。」

「私は構わないよ?。」

「私も大丈夫だけど?。」

キョトンとした顔で言う千歌さんと曜さん。いやいやいや・・・

「マルも平気すら」

「ルビイも天くんだったらオツケーだよ」

花丸とルビイもそんなことを言い出す。いやいやいやいや・・・

「ちよ、ちよつと恥ずかしいけど・・・まあ天くんなら・・・」

「クツクツクツ・・・我がリトルデーモンに添い寝をしてやるのも、主であるヨハネの

使命・・・感謝するが良いぞ?。」

「また「クツチ」されたい?。」

「すいませんでした!。」

梨子さんと善子まで・・・この人達の貞操観念はどうなってるんだ・・・

「まあ、天が嫌だというなら仕方ありません。私と一緒に私の部屋で寝ましょう。そ

して二人で、いつものように熱い夜を・・・!。」

「「ここで寝ます」

「ちよつと!?!」

海未ちゃんのツツコミ。『熱い』夜なんて過ごした覚えはないわ。

海未ちゃんに抱き枕代わりにされて、『暑い』夜を過ごした覚えならあるけど。

「じゃあ私もここで寝ます！私だけ仲間外れは嫌です！」

「よし！皆で仲良く一緒に寝よう！」

「「「「おー！」」」」

テンションの上がつている皆。俺と梨子さんは顔を見合わせ、思わず苦笑してしまつた。

と、千歌さんが海未ちゃんの方を見る。

「そういえば海未先生、ここから音ノ木坂つて近いんですか？」

「ええ、近いですよ。私は徒歩で通学してましたし」

「案内してもらえませんか!？」

目をキラキラと輝かせている千歌さん。

♪ sファンにとつて、音ノ木坂は是非とも行きたい場所なんだろうな・・・

「案内するのは構いませんが：今から行くんですか？もう夜ですし、お風呂にも入つてしまいましたよ?」

「はい！行つてみたいです！」

「ルビイも行きたい！」

「賛成であります!」

「大丈夫ずら．．．?東京の夜は物騒じゃないずらか．．．?」

「ククツ、夜こそヨハネの活動時間．．．恐れるものなど何も無いわ!」

「この辺りって夜になるとお化けが出るらしいよ」

「ひいっ!?!」

俺にしがみつくと善子。メツチャ怖がつてんじゃん．．．

と、梨子さんが何やら浮かない顔をしていた。

「梨子さん?どうしました?」

「えっ?あつ、ううん．．．何でもない」

慌てて笑顔を見せる梨子さん。

「千歌ちゃん、ゴメン。私は遠慮しておくね」

「梨子ちゃん．．．?」

「先に寝てるから。皆で行ってきて」

梨子さんはそう言うのと立ち上がり、大部屋から出て行った。

どうしたのかな．．．

「．．．やっぱり俺達も寝ませんか?明日の朝は早いですし」

「．．．そうしよっか」

苦笑する千歌さん。音ノ木坂に行ってみたい気持ちはあるようだが、梨子さん抜きで行くつもりはないようだ。

こういう仲間思いなところは、千歌さんの良いところだと思う。

「とりあえず布団敷きましよう。寝る場所を確保しないと」

「では、私は天の隣で」

「あ、間に合ってます」

「間に合ってるって何ですか!？」

「ちよつと海未先生！リトルデーモンに添い寝するのはヨハネの役目よ！」

「その墮天使もどきもちよつと黙って」

「もどきって何よ!？」

「しょうがないな。天くん、私の隣に来ることを許してあげよう」

「ピッチャー、第一球を投げました」

「ふがつ!？」

千歌さんの顔面に枕を叩き込む。一撃で沈む千歌さん。

「天くんって、相手が女の子でも容赦ないよね・・・」

「男女平等だからね」

「こういう場面で使う言葉じゃないよねえ!？」

ルビイのツツコミ。海未ちゃんが苦笑している。

「天は昔からそうでしたね・・・私達が相手でも容赦ありませんでした。ことりと花陽は例外でしたけど」

「あの二人は天使だもん。それ以外は悪魔だけど」

「誰が悪魔ですかっ！」

「昔から、か・・・」

何やら呟いている曜さん。

憂いを帯びたその表情に、俺は曜さんのことが心配になるのだった。

心の優しい人ほど思い悩んでしまうものである。

《曜視点》

「・・・ハア」

溜め息をつく私。何となく眠れなかった私は、大部屋を抜け出して中庭の縁側に腰掛けている。

ただぼんやりと空を眺めていると・・・

「フフツ・・・内浦と違って、星はあまり見えないでしょう?」

背後から声がする。慌てて振り向くと、海未先生が微笑みながら立っていた。

「どうしてここに・・・?」

「ふと目が覚めてしまったものからです。少し外の空気を吸おうかと思って出てきたのですが、先客がいて驚きました」

笑う海未先生。

多分、私がないことに気付いて探しに来てくれたんだろうな・・・

「隣、いいですか?」

「あ、どうぞ・・・」

私の隣に腰を下ろす海未先生。改めて思うけど、本当に綺麗な人だなあ・・・

「ん？どうかしましたか？」

「あ、いえ・・・海未先生、彼氏とかいないのかなって」

「か、彼氏!？」

顔を赤くする海未先生。

「な、何ですかいきなり!？」

「いや、海未先生って美人じゃないですか。きつとモテるんだろうなって思っ」

「ま、真顔で褒めないで下さい・・・天じゃないんですから・・・」

恥ずかしそうな海未先生。

「彼氏なんて、今まで一度もいたことありませんよ・・・」

「えっ、意外ですね・・・スクールアイドルとしても有名になったわけですし、てつき

り学生時代からモテモテなのかと・・・」

私が首を傾げていると、海未先生が溜め息をついた。

「・・・正直な話、告白されたことは何度かありましたよ。全てお断りしましたけど」

「どうしてですか？」

「そもそも私、男性と話すことが苦手です・・・」

「ええっ!?天くんとあんなに仲良く話してるじゃないですか!？」

抱きついたりとかもしてるのに・・・弟みたいな存在だから大丈夫ってことなのかな？

「・・・実は天とも、初対面の時はまともに話せなかったんですよ」  
苦笑する海未先生。

「当時天は小学生で、私は高校生・・・それでも上手く話せなかったんです。どれだけが男性を苦手としているか、よく分かるでしょう？」

「・・・確かに」

それはちよつと重症な気がするなあ・・・

「じゃあ、どうして天くんと話せるようになったんですか？」

「・・・そうですねえ」

海未先生はゆつくり空を見上げると、何を思い出したのかクスツと笑った。

「・・・天が私に寄り添ってくれたから、ですかね」

「え・・・？」

「上手く話せない私を急かすこともせず、かと言って自分から強引に距離を詰めようとしてくることもない・・・ゆつくり時間をかけて私と向き合い、少しずつ距離を縮めようとしてくれました」

微笑む海未先生。

「私が落ち込んだ時は励ましてくれて、私が不安な気持ちになつて居る時は勇気づけてくれて・・・そんな天だからこそ、私も心を開くことが出来たんだと思います」

「海未先生・・・」

「前に私は、天のことを『弟みたいなもの』と言いましたが・・・正しくは『弟のようであり、それでいて自分と対等な存在』と言うべきでしょうか」

「対等な存在・・・?」

「年下ではあるけれど、子供だとは思っていないということです。自分と対等・・・信頼の置ける相手として見ているんですよ。これは私だけでなく、μ sのメンバー全員に言えることです」

言い切る海未先生。言葉の端々に、天くんへの信頼が窺える。

「曜は今日、ことりと真姫に会ったんでしょう? 天への接し方を見て、何か感じませんでしたか?」

「・・・二人とも、天くんのことを大切に想ってるんだなって感じました」

南さんも西木野さんも、天くんに合わせて本当に嬉しそうだった。

確かにあの距離の近さは、信頼関係が無いと無理だと思ふ。

「・・・天くんとμ sの皆さんの関係って、何なんですか? メンバーの弟っていうだけじゃ、そこまでの信頼関係は築けないですよ」

「・・・天が話していない以上、私から話すことは出来ません」  
首を横に振る海未先生。

「ですが天と貴女達が繋がり続けるかぎり、いずれは明らかになるでしょう。何せ天は、Aqoursのマネージャーなのですから」

「マネージャー、か・・・」

「曜？」

首を傾げる海未先生に、私は自分の気持ちをも正直に話すことにした。

「私、ちよつと分からなくなっちゃって・・・このまま天くんには、マネージャーを続けしてもらっても良いのか」

「・・・天に不満がある、ということですか？」

「違います！」

慌てて否定する私。

「天くんは本当に良い子です！鞠莉さんに脅されてマネージャーの役目を押し付けられたのに、私達のことを考えてしっかりサポートしてくれて！天くんがいてくれたから、私達はここまでくることが出来たんです！ただ・・・」

「ただ・・・？」

「・・・西木野さんと南さんに聞いたんです。テスト生の話巡って、天くんがお姉さ

ん・・・絢瀬絵里さんと大喧嘩してしまったこと」

俯く私。

「南さんが言っていました。二人はとつても仲の良い姉弟だつて。その二人が、浦の星のテスト生の話で揉めたつて知つて・・・何だか申し訳ない気持ちになつてしまつて」  
ふいに涙が込み上げてくる。泣くつもりなんて無かつたのに・・・

「二人が仲直り出来るのなら・・・天くんは東京に戻つて、お姉さんのところに帰つた方が良いんじゃないかって。その方が、私達と一緒にいるよりも幸せなんじゃないかって・・・そう思つたんです」

鞠莉さんに脅された時、天くんは言つていた。『この学校に来てしまったことを、心の底から後悔している』と。

お姉さんと喧嘩してまで浦の星に来てくれたのに、あんな目に遭つて・・・天くんの幸せを考えたら、私達と一緒にいない方が・・・

「・・・ありがとうございます」

背後から海未先生に優しく抱き締められる。

「天のことを、そんなにも大切に想つてくれて・・・嬉しいです」

「海未先生・・・」

「全く、あの二人ときたら・・・いえ、恐らく話したのは真姫ですね？ことりは止めよ

うとしたんでしようけど、真姫に押し切られたのではありませんか？」

あまりにも的確な予想に、思わず驚いてしまう私。

そんな私の表情を見て、海未先生が苦笑いを浮かべる。

「どうやら当たりみたいですね」

「ど、どうして・・・」

「長い付き合いですから。何となく分かりますよ」

溜め息をつく海未先生。

「まあ流石にあの二人も、曜がここまで思い悩むとは思わなかったんでしようね。気を遣わせてしまつてすみません」

「い、いえ！聞いたのは私ですから！」

慌てて首を横に振る。

海未先生は困つたように笑うと、私を抱き締める腕に力を込めた。

「・・・正直、私も天に戻ってきてほしいと思つていました。浦の星での教育実習を希望したのも、天を連れて帰るつもりでいたからなんです」

「そうだったんですか・・・」

「まあ、拒否されてしまいましたけどね」

苦笑する海未先生。

「『今の俺はA q o u r sのマネージャーだから』だそうです。今の貴女達を見捨てることは出来ない、ハッキリ言われてしまいました」

「つ……」

天くん……私達の為にそこまで……

「いくら天でも、義務感でここまで動くことは出来ませんよ。貴女達のことを大切に思っているからこそ、浦の星に残る道を選んでいる……そうでなければ、小原理事長に脅された時点で東京に戻ってきているはずですよ」

それは天くんも言ってくれていた。私達のこと好きだから、脅されたとはいえマネージャーを引き受けたんだって。

「天は自分の意思で浦の星へ行くことを選び、自分の意思で浦の星に残ることを選んだんです。曜が思い悩む必要は無いんですよ」

「で、でも……そのせいでお姉さんと喧嘩を……」

「大丈夫です。いざれ仲直りしますから」

言い切る海未先生。

「天も絵里も、少し素直じゃないところはありますが……お互いのことを大切に想っていますから。亜里沙も含め、あの姉弟の絆は深いですよ。側で見てきた私が言うんですから、間違いありません」

「・・・本当ですか？」

「本当です」

海未先生が優しく微笑む。

「それに・・・貴女達と一緒にいる時の天は、とても楽しそうでしたよ？あれで『一緒にいて幸せじゃない』なんて、そんなバカなことはありません。だからこそ天は、貴女達と一緒にいる道を選んだではありませんか？」

海未先生の言葉に、私は安堵していた。海未先生の目から見て、天くんが楽しそうに見えているのなら・・・それはきつと間違いない。

私達よりもずっと長く、天くんのことを近くで見ってきた人なんだから。

「さて、ずいぶん長く話し込んでしまいましたね・・・明日は朝早いでしょう？早く寝て備えましょう」

「・・・はいっ！」

海未先生と一緒に立ち上がる。心のモヤモヤが少し晴れたような気がして、今ならよく眠れそうだ。

「そうだ海未先生、同じ布団で一緒に寝ませんか？それならもつと安心して眠れるよな気がします」

「そ、それは少し恥ずかしい気が・・・」

「海未先生・・・お願いっ!」

「なっ!?!ことりの入れ知恵ですか!?!」

「え? 何の話ですか?」

「・・・まさかの無自覚ですか。曜、恐ろしい子・・・!」

ブツブツ呟いている海未先生に、首を傾げる私なのだった。

人から認めてもらえるのは嬉しいものである。

「……ん」

夜中、ふと目が覚めてしまう俺。何やら右腕が重いような……

「ずらあ……」

花丸が俺の右腕に抱きつき、幸せそうに眠っていた。そういえば寝る場所をじゃんけんで決めた結果、花丸と梨子さんの間になったんだっけ……

っていうか、俺の右腕が花丸の胸の谷間に挟み込まれてるんだけど。メツチャ柔らかい感触に包まれてるんだけど。

「ムニヤムニヤ……もう食べられないずらあ……」

「……無防備だなあ」

思わず苦笑してしまう。一応俺も思春期の男子だということを、理解してもらいたいんだけど……

花丸を起こさないよう、そつと右腕を抜いた時だった。

「天くん……?」

花丸とは反対側から声がした。

そちらに顔を向けると、俺の方に顔を向けている梨子さんと目が合った。

「梨子さん？起きてたんですか？」

「うん、少し前に目が覚めちゃってね・・・それから眠れないの」

苦笑する梨子さん。

「しかも私が寝てる間に、あんなことになってるし。驚いちゃった」

「あんなこと・・・？」

首を傾げる俺。

梨子さんが視線を向けた先を見ると・・・別々の布団で寝ていたはずの海未ちゃんと曜さんが、同じ布団で身を寄せ合って眠っていた。

マジか・・・

「千歌さんならともかく、曜さんはちよつと意外ですね・・・」

「そうよね・・・あの二人、あんなに仲良かったかしら・・・？」

梨子さんも首を傾げている。

まあ、仲が良いに越したことはないから良いけど。

「海未ちゃんは見知りですし、仲の良い人が増えるのは良いことです。梨子さんも海未ちゃんと仲良くしてあげて下さいね」

「・・・何か天くん、海未先生の保護者みたいになってるわよ」

「昔から海未ちゃんを知ってる身として、心配してるだけですよ」  
お互い布団に身を横たえながら向かい合い、他愛も無い話をする。

気分転換も兼ねて少し話せば、梨子さんもまた眠れるかもしれないし。

「大切に想ってるのね、海未先生のこと」

「・・・そりゃあそうですよ」

何となく照れ臭くなってしまう。

「海未ちゃんも、ことりちゃんも、真姫ちゃんも・・・」  
sのメンバー全員が、俺にとつてかけがえのない人達ですから」

「フッフ・・・海未先生が聞いたら号泣しそうなセリフね」

「オフレコでお願いします」

こんなセリフ、なかなか面と向かって言えないからな・・・

「・・・凄いわね、天くんは。そうやって言い切れるくらい、大切な人達と出会えたんだもの。きつと音ノ木坂で、良い時間を過ごしたのね」

「梨子さん・・・？」

梨子さんの表情が暗くなる。どうしたんだろう・・・？

「・・・私、中学の頃にピアノの全国大会に行ったことがあってね。だから高校から入った音ノ木坂では、結構期待されてたの」

「そうだったんですか・・・」

音ノ木坂は、伝統的に音楽で有名な学校だ。

その方面で腕を鳴らした学生が入ってくることも多く、梨子さんもその内の一人だったんだろう。

「だから期待に応えなきゃって、いつも練習ばかりしてて・・・でも結局、大会では上手くいかなくてね。そのせいか、音ノ木坂に行くことに対して気が引けちゃって・・・」

「・・・なるほど」

それでさつき、千歌さんの提案を断ったのか・・・

音ノ木坂にいた頃、苦しい思いをしたことを思い出してしまっから・・・

「音ノ木坂が嫌いなわけじゃないのよ？ただ・・・期待に応えられなかった自分が情けないし、期待してくれた人達に申し訳ない・・・そんな気持ちになっちゃって」

「梨子さん・・・」

「だから、海未先生やMsの人達は凄と思う。周りからの期待に応えて、廃校を阻止したんだもの。それどころか、スクールアイドルブームまで巻き起こしちゃって・・・千歌ちゃんや天くんに出会うまで知らなかったけど、本当に偉大な人達だと思うわ」

微笑む梨子さん。

「そして・・・その偉大な人達を、『かけがえのない人達』って言い切れる天くんもね」

「いや、俺は別に……」

「曜ちゃんが言つてたわよ？『南さんと西木野さんは、本当に天くと仲が良かった』つて。海未先生も天くに心を許してるし、μ s の人達にとつて天くんの存在は大きいんでしょうね。偉大な人達の支えになっている天くんも、私から見たら凄いいよ」

梨子さんはそう言うと、悲しげに目を伏せた。

「私も期待に応えられてたら……もつと練習して、大会で上手くいってたら……少しは音ノ木坂の役に立てたのかな……」

「……もしそうなら、俺達が出会うことはなかったでしょうね」

「え……？」

驚く梨子さん。俺は梨子さんに微笑みかけた。

「もし梨子さんが、音ノ木坂で順調にいつていたら……環境を変えてみようなんて思わなかったでしょう？浦の星に来ることもなく、俺達と出会うこともなかったはず。少し言い方は悪いですが……梨子さんが音ノ木坂で上手くいかなかったから、俺達は出会えただんだと思います」

「天くん……」

「それとも……梨子さんは、俺達に出会わなければ良かったと思いますか？」

「なっ!? そんなわけないじゃない!」

「しーっ、皆が起きちゃいます」

「あっ……」

慌てて口を押さえる梨子さん。俺は思わず笑ってしまった。

「……俺が言いたいのは、たればの話にしても仕方ないってことです。過去のこと  
は変えられないんですから」

「それはそうだけど……」

「それに苦しい思いをしたからこそ、今の梨子さん……Aqoursの桜内梨子がい  
るんじゃないですか。スクールアイドル、やってみてどうですか?」

「……凄く楽しいわ。心からやりがいを感じてる」

「そう思えるなら、梨子さんの歩んできた道は間違いじゃないですよ。期待に  
応えられずに苦しんだことも、何かを変えようとしてもがいたことも……無駄なことなんて  
何一つありません。全てが梨子さんの礎になってます」

俺は梨子さんへと手を伸ばした。

「梨子さんのしてきた努力が全て分かるだなんて、そんなおこがましいことは言えま  
せんけど……その様子を見ていれば、一生懸命やってきたってことくらいは分かりま  
す。周囲の期待に応えようとして、必死に頑張ったんだらうなって……」

梨子さんの頭を、優しく撫でる。

「前にも言いましたけど、梨子さんはもつと胸を張っていいと思います。引け目とか、情けなさとか、申し訳なさとか・・・そういったものを感じるなどは言いません。ただ、もつと自分のことを褒めてあげて下さい。自分で思っている以上に、梨子さんは凄いい人なんです。俺が保証します」

「っ・・・」

梨子さんの目から、一筋の涙が伝う。

それを機に次々に涙が滴り落ち、梨子さんの枕を濡らしていった。

「本当に・・・ずるいわね、天くんは・・・」

ボロボロと涙を零す梨子さん。

「あの時も、今も・・・私を泣かせにくるんだから・・・」

「良いじゃないですか。嬉し涙なんですから」

笑みを浮かべる俺。

「俺には、梨子さんの心に寄り添うことしか出来ませんから・・・それで梨子さんが、少しでも元気になってくれるなら嬉しいですよ」

「・・・十分すぎるくらいよ」

泣きながら微笑む梨子さん。

「なるほどね．．．だから、sの人達は、天くんのことを．．．」

「梨子さん？」

「フフツ．．．何でもないわ」

梨子さんはそう言うと、おもむろに俺の布団に入ってきた。

「ちよ、どうしたんですか!？」

動揺する俺に何も言わず、抱きついてくる梨子さん。

「お願いだから．．．少しだけ、このままでいさせて．．．」

俺の胸に顔を埋める梨子さん。その肩は震えており、まだ泣いているのが分かった。

「．．．俺で良ければ、喜んで」

梨子さんの身体を、優しく抱き締める俺なのだった。

運命とは不思議なものである。

《梨子視点》

翌朝・・・

「・・・んっ」

目を覚ました私は、ぼんやりとした頭の中で状況を整理する。昨日の夜は海未先生の実家に泊まって、皆で一緒に寝たんだっけ・・・

と、身体が妙に温かいことに気付いた。まるで何かに包まれているような・・・

「っ!？」

そういえば昨日の夜、天くと抱き合って・・・!?

慌てて上を見上げると・・・

「すう・・・すう・・・」

安らかに寝息を立てる天くんの顔があった。そして私の顔が、ちょうど天くんの胸の位置に・・・

つまり私は天くんに抱き締められて、天くんの胸に顔を埋めたまま一晩寝ていたというわけだ。

「っ……!」

耳まで真つ赤になっていくのを感じる。

天くんの前でボロ泣きしたことはまだ良い。問題は自分から天くんの布団に潜り込んで、自分から天くんに抱きついて胸に顔を埋めてしまったことだ。

何やってるの私!もしこの場にダイヤさんがいたら、『破廉恥ですわ!』って怒られるところじゃない!

でも……

「……温かい」

思わず呟いてしまう。

やっぱり天くんも男の子なだけあって、身体つきがしっかりしていた。抱き締められていて、とても安心感を覚える。

「……嬉しかったな」

昨夜の記憶が甦ってくる。

私が歩んでいる道は間違いじゃないと、苦しい思いをしたことも無駄じゃないと言ってくれた。もつと胸を張って良いと、私のことを凄い人だと言ってくれた。

本当に本当に嬉しくて……涙が止まらなかった。

「……天くん」

天くんの顔を見上げる。

穏やかな寝顔を見てみると、何だか可愛く思えてきて・・・とても愛おしく感じた。

「・・・フフツ」

私は小さく笑うと、再び天くんの胸に顔を埋めた。もう少しだけ、このままでも良いよね・・・

そんなことを思いながら天くんに身体を委ね、意識を手放そうとした時・・・

「あーっ!?!」

急に大声が聞こえて、慌てて顔を上げる。

千歌ちゃんが驚愕の表情でこちらを見ていた。

「天くん!?! 梨子ちゃん!?! 何してるの!?!」

「ち、違うの千歌ちゃん!?! これは・・・」

「うゆ・・・?」

「何の騒ぎぞらあ・・・?」

「騒々しいわねえ・・・」

千歌ちゃんの大声で目覚めた一年生三人組が、眠そうに目を擦りながら起き上がる。

そして私達の方を見て・・・

「びびっ!?!」

「ずらっ!?!」

「な、何してんのよアンタ達!?!」

顔を赤くして絶句する三人。

慌てて弁解しようとする、今度は曜ちゃんと海未先生が起き上がった。

「んっ……何かあつたの……?」

「大変なんだよ曜ちゃん……って、何で海未先生と同じ布団で寝てるの!?!」

「えへへ、色々あつて……って、ええっ!?!天くんと梨子ちゃんも同じ布団で寝てるの

!?!しかも抱き合つてるじゃん!?!」

「ふわぁ……朝から何を騒いでるんですか……?」

「海未先生!天くんと梨子ちゃんが!」

「え……?」

こちらを見る海未先生。

マ、マズい……!天く人を溺愛している海未先生が、こんな光景を見たら……!

「……何か問題でも?」

「「「「ええっ!?!」」」」」

全員驚きの声を上げる。意外と冷静な反応なのが怖いんだけど……

「ちよ、海未先生!?!天くんと梨子ちゃんが抱き合つて寝てるんですよ!?!」

「・・・普通ですよね？」

「普通じゃないわよ!？」

善子ちゃんのツツコミ。寝起きで頭がボーっとしてるのかな・・・？

「μ sとして活動していた頃、こういつた光景はよく見ましたからね。外泊する時は誰が天の隣で寝るか、皆でよく争ったものです」

苦笑する海未先生。

「かくいう私も、今は天と一緒に寝てますから。同じ布団で寝ることもありますし」

「そ、そうなんですか・・・」

「・・・ん」

そんな会話をしていると、天くんの目がゆつくりと開いた。

そのまま海未先生達の方へと視線を向ける。

「おはよー・・・朝から騒々しいけど、何かあったの？」

「原因は天くんずらっ!」

「俺・・・?」

花丸ちゃんのツツコミに、首を傾げる天くん。

「それより花丸、人の腕を抱き枕にするのは良いんだけどさ・・・俺も思春期の男子だつてことを忘れないでね?花丸の胸の谷間に腕が挟み込まれて、色々大変だったんだよ

？」

「ずらあっ!？」

耳まで真っ赤になる花丸ちゃん。そんなことがあったのね……

「ちよ、花丸ちゃん!？」

「アンタも破廉恥なことしてるとはじゃない!？」

「……ずらあ」

「ああっ!?!花丸ちゃんが倒れた!?!」

何やら大変なことになっている中、天くんが私の方を見た。

「おはようございます、梨子さん」

「お、おはよう……」

未だに天くんの腕に抱かれている私は、恥ずかしくてまともに天くんの顔を見れなかった。

そんな私に天くんは優しく微笑み、耳元で小さく囁いた。

「……少しはスッキリしましたか？」

「っ……」

ホントにこの子は……優しすぎるでしょ……

「……ええ。ありがとう、天くん」

笑顔でそう返す私なのだった。

\*\*\*\*\*

「この道を歩くのも、何だか久々な気がするよ」

「フフツ、そうですね」

A q o u r s の皆の後ろを、海未ちゃんと会話しながら歩く俺。

イベント会場へと向かう前に、俺達はある場所へと向かっていた。

「着いた……!」

先頭を歩いていた千歌さんが立ち止まる。

目の前には大きなスクリーン、そして白く巨大な建物：秋葉原UTXがそびえ立っていた。

「……変わらないな、ここも」

小さく呟く。ここに来ることを提案したのは、他でもない千歌さんだった。

何でも高一の時、曜さんと二人で秋葉原を訪れたことがあったらしい。その際にこの

スクリーンで、sの映像を見て、スクールアイドルをやりたいと思ったんだそう。千歌さんがスクールアイドルを目指すきっかけは聞いていたが、まさかこの場所だったとは……

それを聞いた時は、海未ちゃんと顔を見合わせて驚いてしまった。

「同じですね……穂乃果と」

「……そうだね」

穂乃果ちゃんも、このスクリーンでA—RISEの映像を見てスクールアイドルをやることを決めた人だもんな……

そしてその五年後、このスクリーンで、sの映像を見てスクールアイドルをやりたいと思った千歌さん……

これは運命なんだろうか……

「そういえば、そろそろじゃないですか？」

「ん？何が？」

「ラブライブのエントリーですよ。时期的にそろそろだと思っただけですが」

「ああ、確かに」

ラブライブは半年に一度のペースで、春と秋にそれぞれ開催されている。予選のことを考えると、そろそろ秋の大会のエントリーが始まる頃なのだが……

そんなことを海末ちゃんと話していると、突然音楽が鳴り響いた。スクリーンに『Love Live!』の文字が映し出され、その下に『ENTRY START!』の文字が浮かび上がる。

「ラブライブ……」

「遂に来たね……」

スクリーンを見上げるルビィと曜さん。梨子さんが千歌さんへと視線を向ける。

「どうするの?」

「勿論出るよ!」

力強く頷く千歌さん。

「μsがそうだったように、学校を救ったように……私達もラブライブに出て、浦の星を救おう!」

「フフツ、言うと思ったぞら」

「やってやろうじゃない」

笑みを浮かべる花丸と善子。μsがそうだったように、か……

「……どこまでもμsの背中を追いかけるんですね。千歌さんは」

「天……?」

海末ちゃんが首を傾げる中、千歌さんが前に出す。

「よし、アレやろう！」

その言葉に呼応し、Aqoursの皆が円陣を組む。曜さんがこちらへ視線を向ける。

「ほら、天くんも一緒に！」

「六人いたら十分でしょう。俺は遠慮しときます」

「ええっ!? ファーストライブの時はやってくれたじゃん!？」

「曜さんが無理矢理やらせたんじゃないですか」

「言い方が酷くない!？」

「俺の初めてが、曜さんに奪われて・・・」

「その言い方も止めて!？」

「まあ、円陣組むの初めてじゃなかったんですけどね」

「今のやりとり何だったの!？」

「まあまあ曜ちゃん、今回は六人でやりましょう? ね?」

「むう・・・」

梨子さんが宥めてくれるものの、膨れっ面になる曜さん。やれやれ・・・

「さあ、いこう! 今、全力で輝こう!」

「「「「「Aqours! サンシャイン!」」」」」

六人の声が響き渡る。

人数が増えたのもあるが、それ以上に・・・ファーストライブの時と比べて、力強さが増した気がした。良いグループになったなあ・・・

感慨に浸っていた俺は、海未ちゃんがこちらを気遣わしげに見つめていることに気が付かないのだった。

誰しもが壁にぶつかるものである。

「うう、こんなになんて多いなんて・・・」

俺の腕にしがみつき、恐る恐る歩いてる海未ちゃん。パフォーマンズの準備に向かった皆と別れた俺達は、イベントを鑑賞する為に客席へと向かっていた。

マネージャーとはいえ、他のスクールアイドル達も使用する控え室には入れないからな。

「どこかの誰かさん達がスクールアイドルブームを巻き起こして以来、スクールアイドルの人口は年々増加してるからね。必然的にスクールアイドルファンも増えて、こういうイベントはいつもお客さんでいっぱいになるんだよ」

「く、詳しいですね・・・」

「Msが解散してからも、こういうイベントにはよく連れて来られてたからねえ：：初代部長と二代目部長と三代目部長に」

「ああ、にこと花陽と亜里沙ですか」

苦笑する海未ちゃん。あの三人は本当にスクールアイドルが好きだからなあ・・・

「まあそのおかげで、最近のスクールアイドルのことも把握出来てるんだけどね。こ

のイベントに参加するスクールアイドルも、ほとんど知ってるグループだったし」

「いや、ほとんど知ってるって・・・凄くないですか？」

「というより、割と有名なグループがたくさん参加してるんだよね」

苦笑する俺。

「何しろ、ラブライブの決勝まで進んだことのあるグループばかりだから」

「ええっ!? このイベント、そんなにレベルの高いものだったんですか!？」

「気付くの遅くない？」

俺が呆れていると・・・

「あら？ A q o u r s のマネージャーさん？」

ふいに声をかけられる。振り向くと S a i n t S n o w の二人・・・鹿角姉妹が立っ

ていた。

「ああ、おはようございます」

「おはようございます」

丁寧挨拶を返してくれる聖良さん。一方理亞さんは聖良さんの陰に隠れ、こちらを

睨み付けていた。

「理亞さんもおはようございます」

「・・・ふんっ」

そっぽを向く理亞さん。聖良さんが困ったように笑う。

「すみません・・・この子、昨日のことを根に持ってまして・・・」

「ああ、パンツの件ですか」

「言わなくていいっ!」

ガルルル・・・とこちらを威嚇してくる理亞さん。どうやら、本格的に警戒されてしまっているようだ。

「天・・・また女の子のパンツを見てしまったんですか?」

「だって理亞さんが見せつけてくるんだもん」

「見せつけてないわよ!?!」

「スカートで跳んだら同じことでしょう」

「うぐっ・・・」

言葉に詰まる理亞さん。と、聖良さんが海未ちゃんの顔を見て首を傾げる。

「ところで、そちらの女性は?」

「初めまして、天の彼j・・・」

「正体バラすぞ(ボソツ)」

「姉ですっ!」

慌てて言い直す海未ちゃん。

ちなみに今の海未ちゃんは伊達メガネとマスクをしており、髪型もポニーテールにしている。要は正体がバレないように変装しているのだ。

こんなところにμsの園田海未がいると分かったら、大騒ぎになりそうだしな……スクールアイドルファンの中で、μsのことを知らない人なんていないだろうし。

「お姉様でしたか。ずいぶん仲がよろしいんですね」

「姉は人見知りなもので、こういった人混みが苦手なんですよ」

「ここは適当に誤魔化しておく。向こうも気付いてないみたいだし。」

「我々は客席でイベントを鑑賞させていただきますので。お二人も頑張ってください」

「あら、他所のスクールアイドルを応援して良いんですか？」

「Aqoursのマネージャーをやっているからといって、他のスクールアイドルを敵視しているわけではありませんから。俺はスクールアイドル好きなので」

「フフツ、ありがとうございます」

笑みを浮かべる聖良さん。

「それではまた……理亞、行きましょう」

理亞さんを引き連れて去っていく聖良さん。去り際、理亞さんがこちらに向かって『アツカンペー』をしてきた。

アララ、嫌われたもんだな……

「・・・大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。『アツカンベ』くらい可愛いもんだし」

「いえ、そうではなくて・・・」

心配そうに俺を見る海未ちゃん。

「あの二人のこと、本当は好きじゃありませんよね・・・？」

「・・・よく分かったね」

素直に驚いてしまった。表面上は上手く取り繕ってたつもりだったんだけど・・・

「丁寧な態度ではありませんが、ちよつと丁寧すぎましたね」

苦笑する海未ちゃん。

「普段の天を知っている身としては、少し冷淡な態度に感じましたよ。もつとも、普段の天を知らない人は気付かないでしょうけど」

「よく見てるねえ・・・」

「これでも長い付き合いですから、それくらい分かりますよ。それに・・・五年前にもいたじゃないですか。天がああいう態度をとった人達が」

「ああ・・・そうだったね」

当時のことを思い出して苦笑する。

今でこそ仲良くなつてはいるが、最初の印象は悪かつたっけな・・・

「懐かしいなあ……って、そろそろ時間か。早くしないと始まっちゃう」

「ええ、急ぎましょう」

「うん、急ぎたいから離れてくんない？」

「それは無理です」

「断言したよこの人……」

俺が呆れていると、海未ちゃんがおずおずと尋ねてきた。

「そういえば天、先ほどの話なのですが……今回のイベントには、かなりの実力者達  
が参加しているんですね？ Aquoursは、その……大丈夫でしょうか？」

「……大丈夫、ではないだろうね」

俺は首を横に振ると……あまり口にしたくない予想を言うのだった。

「恐らく、Aquoursは……」

\*\*\*\*\*

「お疲れ様でした」

千歌さん達を労う俺。イベント終了後、俺と海未ちゃんは千歌さん達と合流していた。

皆の表情は……どこか暗いものだった。

「ダメだった……」

「優勝どころか、入賞すら出来なかつたぞら……」

落ち込むルビィと花丸。

今回のイベントは、観客の投票で優勝グループを決めるというものだった。得票数が一番多かったグループが優勝、八位以内に入ったグループは入賞という形だ。

残念ながらAqoursの名前は、八位までには呼ばれなかつた。

「でも声は出てましたし、ミスもこれまでで一番少なかつたですよ？今までで一番良い出来だったのではありませんか？」

皆のことを気遣い、フォローしようとする海未ちゃん。

確かに俺の目から見ても、今までで一番良い出来だったと思う。ただ……

「……それでも、この結果なのよね」

溜め息をつく善子。

今までで一番の出来であっても、優勝どころか入賞すら出来ていない……その現実が、皆に重くのしかかっているのだ。

「・・・私ね、Saint Snowを見た時に思ったの」  
曜さんが呟く。

「これがトップレベルのスクールアイドルなんだって。このくらい出来なきやダメなんだって。なのに・・・入賞すらしてなかった」

そう、Saint Snowも入賞出来ていなかった。イベントのトップバッターとして登場した彼女達は、大いに会場を沸かせてイベントを盛り上げた。

そのレベルはとも高く、入賞した他のグループと比べても遜色ないものだったと思う。Aqoursの出番はその次だったのだが・・・その前のSaint Snowが良すぎて、イマイチ盛り上がりに欠けてしまったほどだ。

それほど良かったSaint Snowでさえ、入賞すらしていなかったのだ。

「あの人達のレベルで無理なら、そのレベルさえに届いていない私達じゃ・・・」  
「でも・・・全力で頑張ったじゃん、私達」

落ち込む曜さんに対し、笑いかける千歌さん。

「海未先生も言ってくれたけど、今日が今までで一番良い出来だったと思う。周りにはラブライブの決勝まで進んだことのある人達ばかりだし、入賞出来なくて当たり前前だよ」

「だけど、ラブライブの決勝に出ようと思ったら・・・今日出ていた人達くらい、上手

くなきやいけないってことでしょ……?」

「それはそうだけど……でも、今はそんなこと考えても仕方ないよ」

「千歌ちゃん……」

あくまでも笑顔の千歌さん。全く、不器用なんだから……

「……とりあえず、何か食べに行きませんか? お腹空いちやって」

「あ、賛成! 私もお腹ペコペコ!」

俺の提案に乗ってくる千歌さん。と、千歌さんのスマホが鳴った。

「はい、高海ですけど……はい……はい……」

何やら話し込む千歌さん。やがて電話を切ると、困ったような表情でこちらを見た。

「さっきのイベントのスタッフさんが、渡したいものがあるから来てほしいって」

「渡したいもの?」

「うん。参加者全員に渡してるものらしいんだけど、渡しそびれちゃったんだってさ」

「スマホ貸して下さい。『そっちが持ってこいやハゲ』って伝えとくんぞ」

「喧嘩売る気満々!? 女性スタッフさんだよ!」

「だから男女平等ですって」

「だからこういう時に使うセリフじゃないって!」

千歌さんのツツコミ。ホント空気の読めないスタッフだな……

「とりあえず行ってくるよ。天くと海未先生は待つてて」

「大丈夫ですか？ 私達もついていった方が・・・」

「大丈夫ですよ。すぐ戻ってきますから」

千歌さん達がイベント会場へと戻っていく。大丈夫かなあ・・・

「・・・皆、もの凄く落ち込んでましたね」

海未ちゃんの表情も優れない。

「その中でも、一番落ち込んでいたのは・・・」

「大丈夫。分かっているから」

海未ちゃんの言葉を遮る俺。あれで気付かないわけがない。

「ホント・・・似てるよね」

「・・・ですね」

揃って溜め息をつく俺と海未ちゃんなのだ。った。

\*\*\*\*\*

「全く、これだから海未ちゃんは……」

溜め息をつく俺。俺は今、迷子になった海未ちゃんを探していた。

待っている間に、皆の分の飲み物を買に行ってくれたのだが……先ほど泣きながら『助けて下さい!』と電話がかかってきたのだ。

どうやら、帰り道が分からなくなってしまったらしい。

「だから一緒に行こうって言ったのに……」

そんな愚痴を呟きながら、海未ちゃんのことを探していると……

「あら、またお会いしましたね」

ある日、人混みの中、Saint Snowさんにく、出会った♪

「チェンジで」

「何がですか!?!」

聖良さんのツッコミ。熊さんより出会いたくない人達に出会ってしまった……

「まあいいや……お二人とも、ウチの姉を見ませんでしたか?」

「な、何か凄く投げやりな感じですけど……お姉様は見えてませんね。はぐれてしまったんですか?」

「ええ、どうやら迷子になってしまったみたいでして……電話で聞いたかぎりでは、どうやらこの辺にいるみたいなんですけど」

「私達も探すの手伝いしましょうか？」

「ああ、大丈夫です。多分すぐ捕獲出来ると思うので」

「いや、捕獲って……」

呆れている聖良さん。

ふと聖良さんの陰に隠れる理亞さんへと視線を向けると……その目には涙が浮かんでいた。

「えっ……泣くほど俺のこと嫌いですか？」

「違うわよ!？」

慌ててゴシゴシと目元を拭う理亞さん。聖良さんが苦笑している。

「入賞出来なかったことが、よほど悔しかったみたいで」

「姉様!余計なこと言わないで!」

「ああ、なるほど……」

「何よ!?!悪い!？」

「いや、全然」

首を横に振る俺。

「それだけ理亞さんが、このイベントに本気で挑んでたっていうことでしょうか?上から目線みたいになって申し訳ないですけど……立派だと思います」

「っ……ふんっ」

そつぽを向く理亞さん。

「そんなの当たり前じゃない。お遊びで参加してるアンタ達とは違うのよ」

「理亞」

咎めるように声をかける聖良さん。だが、理亞さんは止まらなかった。

「姉様だつてあの子達に、『*M*sのようにラブライブを目指しているのだとしたら、諦めた方が良くもしれません』つて言つてたじゃない」

「それは……」

「……ずいぶん言い方ですね」

「っ!？」

思わずドスの効いた声が出てしまう。それを聞いた鹿角姉妹が硬直してしまった。

「お遊び？ 諦めた方が良く？ 貴女達が*Aqours*の何を知ってるんですか？」

怒りがふつふつと湧き上がり、腸が煮えくり返る。

「それが*Aqours*の為を思つて言つた言葉なら、話は別ですが……とてもそうは聞こえませんね。入賞出来なかつたことが悔しくて、*Aqours*に八つ当たりしたんですか？」

「そ、そんなつもりは……」

震えている聖良さん。理亞さんも再び涙目になっていた。

「やっぱり俺は、貴女達のがきr・・・」

「ストツプ」

誰かに後ろから抱きつかれ、口を手で塞がれる。

「それ以上は言っちゃダメよ、天くん」

ウェーブのかかったセミロングヘアの女性が、優しく微笑んでいた。えっ・・・

「なっ!? 貴女はっ・・・!」

その女性の顔を見た聖良さんが、驚愕の表情を浮かべる。その女性とは・・・

「何でこんなところにいるの・・・あんじゅちゃん」

「フフッ♪」

A—R—I—S—Eのメンバー・・・優木あんじゅその人なのだった。

避けては通れない道もある。

「ゆ、優木あんじゅ……!?!」

「嘘でしょ……!?!」

絶句している聖良さんと理亞さん。

一方のあんじゅちゃんは、嬉しそうに俺に頬ずりをしていた。

「天くん久しぶり〜♪大きくなったわね〜♪」

「まあ、成長期だからね」

あんじゅちゃんの登場ですっかり毒気を抜かれた俺は、苦笑しながら返した。

「あんじゅちゃんこそ……また一段と実ったんじゃない?」

「フフツ、天くんのエッチ♡」

そう言いながらも、俺の身体に二つの立派なモノを押し付けてくるあんじゅちゃん。

いや、何というか……ご馳走様です。

「つていうか、何であんじゅちゃんがここに?」

「半日だけオフになったから、今日のイベントを見に来たの」

笑うあんじゅちゃん。

「どうしても見に来たかったのよね。天くんがマネージャーをやってるグループが出るっていうんだもの」

「えっ、何でそれを・・・」

「あつ！　いたいた！」

「あんじゅ！　探したぞ！」

「こちらに向かってくる二つの影・・・って、あれ？」

「もう、急になくならないで・・・って天じゃない！　久しぶりね！」

シヨートヘアの女性が笑顔で話しかけてくる。この人も相変わらずだなあ・・・

「久しぶり、ツバサちゃん・・・ハゲた？」

「ハゲてないわっ！」

全力でツツコミを入れてくる女性・・・綺羅ツバサちゃん。A—RISEのリーダーである。

「っていうか、久しぶりに会って第一声がそれなの!？」

「ああ、ゴメン。聞き方が悪かったね・・・生え際後退した？」

「オブラートに包んでるようで全然包んでないじゃない!？」

「毛根死滅した？」

「最早ドストレート!？」

「いや、何か前よりおでこが広くなった気がするんだけど・・・」

「そんな疑いの眼差しで見ないでくれる!? 本当にハゲてないから!」

「ハハッ、相変わらず天は面白いな」

ロングヘアで切れ長の目の女性が、楽しそうに笑っている。

「ツバサをそこまでイジることが出来るのは、天だけだろうな」

「英玲奈ちゃんも久しぶり。ますますカッコ良くなったね」

「・・・それは喜んで良いものなのか?」

反応に困っている女性・・・藤堂英玲奈ちゃん。同じくA—RISEのメンバーである。

「一応私も女なのだが・・・」

「大丈夫。ちゃんと知ってるから」

苦笑する俺。

「こんな綺麗な人を、男と勘違いしたりしないよ」

「なっ・・・お前はまたそういう恥ずかしいことを・・・!」

「あら英玲奈、言葉とは裏腹にずいぶん嬉しそうじゃない」

「ツバサ!?!何を言ってるんだお前は!?!」

今度はツバサちゃんが英玲奈ちゃんをからかい、英玲奈ちゃんが顔を真っ赤にしてい

る。

相変わらず仲が良いなあ・・・

「綺羅ツバサと藤堂英玲奈まで・・・!?!」

「どうなってるの・・・!?!」

口をパクパクさせている聖良さんと理亞さん。まあ無理もないか・・・

「あら、この二人・・・確かSaint Snowよね? どうしてこつちを見て驚愕の表情を浮かべてるの?」

「いや、普通はこうなるんだよ」

ツバサちゃんの反応に呆れる俺。

「それほどA—RISEは有名なんだから」

A—RISE・・・第一回ライブ優勝グループであり、μ'sと共にスクールアイドルブームを巻き起こした存在だ。

高校卒業後は芸能界に入り、正式にプロのアイドルとしてデビュー・・・今や大人気アイドルグループへと成長を遂げている。

スクールアイドルの先駆者であり、スクールアイドルファンの間では『神』と呼ばれているグループなのだ。

「マ、マネージャーさん!?! 貴方、A—RISEとどういう関係なんですか!?!」

「んー・・・犬猿の仲ですかね」

「ちよつと!?!」

ツバサちゃんのツッコミ。

「この場面で冗談言ったって通じないでしょ!?!」

「いやほら、出会った頃は仲良くなかったじゃん」

「それは天が私達を敵視してたからでしょ!?!」

「うん、マジで気に食わなかった。特にツバサちゃん」

「うわあ・・・ハッキリ言われると凹むわあ・・・」

落ち込むツバサちゃん。

言われてみると、今のSaint Snowは当時のA—RISEに似てるかもしれ  
ない。

「安心しなよ、今は好きだから」

「えっ、ホント!?!」

「あんじゅちゃんのことか」

「やくん♡嬉しいわ♡」

「うわああああん!?!」

「ああつ!?!ツバサがガチ泣きしてる!?!」

まるでコントのようなやり取りを繰り返す俺達。すると・・・

「ちよつとアンタ達！」

聞き覚えのある声がある。声のした方を振り向くと・・・

「勝手に行動してんじゃないわよ！どんだけ探したと思つてんの!？」

「うう、天あ・・・天あ・・・」

サングラスをかけた長い黒髪の女性と、その女性に手を引かれている海未ちゃんがいた。

「ああ、ごめんなさい。その代わり、ちゃんと天くんは発見しておいたわよ」

「天あああああつ！」

勢いよく抱きついてくる海未ちゃん。やれやれ・・・

「よしよし、もう大丈夫だよ」

「うう、怖かったですう・・・」

「全く・・・相変わらずどつちが年上だか分かんないわね・・・」  
溜め息をつく女性。

「まあそれはさておき・・・久しぶりね、天」

かけていたサングラスを外す女性。

その顔を見た聖良さんが、またしても驚きの表情を浮かべた。

「なっ・・・μsの・・・!?!」

「久しぶり、にこちゃん」

目の前の女性・・・矢澤にこちゃんに挨拶する俺。

まさかになこちゃんにまで会うことになるとは・・・

「あれ？背縮んだ？」

「縮むかつ！むしろ伸びたわっ！」

「になこちゃん・・・そんな悲しい嘘は止めよう・・・？」

「嘘じゃないわよ!?!そんな憐れむような目で見ないでくれる!?!」

「大丈夫。小さくても需要はあるって」

「それ身長の話よねえ!?!胸の話だったらしばくわよ!?!」

ツッコミを連発するになこちゃん。相変わらずイジリやすいなあ・・・

「っていうか、何でになこちゃんがここにいるの？」

「ツバサ達と一緒に、今日のイベントを見に来たのよ」

溜め息をつくになこちゃん。

「昨日ことりと真姫から、『天に会った』っていう連絡が来てね。天がマネージャーを務めてるAqoursが、このイベントに出るっていうじゃない。どんなもんかと思つて見に来たってわけ」

「ああ、だからあんじゅちゃんが知ってたのね」  
納得する俺。

にこちゃんは大学を卒業後、A—RISEの所属事務所で働いている。その為かA—RISEの三人と仲良くなっており、プライベートでも遊びに行ったりする仲なんだとか。

五年前まで、A—RISEの追っかけしてたっていうのに・・・

「それでイベントが終わってこの辺りをうろついてたら、偶然海未を発見してね。話を聞いたたら、天とはぐれたっていうじゃない。この辺りにいることは電話で伝えたっていうから、ちよつと周りを探してみようってことになったんだけど・・・」

ツバサちゃん達を睨むにこちゃん。

「コイツらが好き勝手に動くもんだから、いつの間にかはぐれちゃって・・・どうしようかと思つたわよ」

「アハハ、ゴメンゴメン」

苦笑しながら謝るツバサちゃん。

なるほど、そういうことだったのね・・・

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!？」

黙っていられなくなったのか、話に割り込んでくる理亞さん。

「アンタ、A—RISEとどういう関係なわけ!?!しかもμ sの矢澤にこまで!」

「μ sのメンバーなら、ここにもう一人いるわよ」

「ちよ、にこ!?!」

海未ちゃんの伊達メガネとマスクを外すにちちゃん。

「そ、園田海未・・・!?!」

海未ちゃんの顔を見た理亞さんが固まる。

聖良さんにいたっては、完全に絶句してしまっていた。

「じゃあアンタ、園田海未の弟だったの!?!」

「あー・・・すいません。海未ちゃんが姉っていうのは嘘なんですよ」

苦笑する俺。と、ここぞでにちちゃんが口を挟む。

「この子の名前は絢瀬天・・・μ sの絢瀬絵里の弟よ」

「ハアツ!?!」

「ちよつとにちちゃん、勝手に人の素性をバラさないでよ」

「今さらでしょ。私達やA—RISEとの関わりがバレてるんだから」

「そうだけどさあ・・・」

今のカミングアウトで、鹿角姉妹は完全にフリーズしてしまっていた。

まあA—RISEやμ sのメンバーが登場した挙句、絵里姉のことまで知ってし

まったらこうなるか・・・

「えーつと・・・まあそんなわけです。姉がμ sのメンバーなので、μ sの皆とは関わりがあります。ツバサちゃん達ともその流れで知り合っただけですよ」

「あら、それだけじゃないわ」

ニヤリと笑うツバサちゃん。

「何と言つても天は、あのμ sの・・・」

「えいつ」

「むぐっ!?!」

海末ちゃんが持っていたコーラのペットボトルを開け、ツバサちゃんの口に突っ込んだ。

そのまま傾け、ツバサちゃんの口の中へとコーラを流し込む。

「むぐうっ!?!」

「すみませんね。今の何でもないんで忘れて下さい」

「むぐぐぐうっ!?!」

「ああつ!?!ツバサちゃんがコーラで死にかけてる!?!」

「勘弁してやってくれ天!このバカには後でちゃんと言い聞かせておくから!」

あんじゅちゃんと英玲奈ちゃんが必死に止めてくるので、仕方なく止めてあげた。

コーラから解放され、咳き込むツバサちゃん。

「ゲホツ、ゲホツ．．．ちよつと天!?容赦なさすぎよ!」

「ああん．．．?」

「すいませんでした!」

俺の絶対零度の視線に、即座に土下座を敢行するツバサちゃん。

鹿角姉妹が完全に引いているが、そんなことはどうでもいい。

「まあそれはさておき．．．先ほどの A q o u r s に対する侮辱、俺は絶対に忘れませぬので。人を見下している暇があるのなら、自分自身を磨くことをオススメします。貴女方も入賞できていないという事実を、どうかお忘れなく」

「っ．．．申し訳ありませんでした．．．」

頭を下げる聖良さん。

「理亞、行きましょう．．．」

「う、うん．．．」

その場を去っていく二人。やれやれ．．．

「．．．ありがとね、あんじゅちゃん。危うく言い過ぎるところだったよ」

「フフツ、どういたしまして」

微笑むあんじゅちゃん。

「まあ、天くんが怒る気持ちは分かるけどね。頑張っている人に対して、あのセリフは酷いと思うわ」

「天、何かあったのですか・・・？」

「うん、まあ色々だね」

海未ちゃんの問いに、苦笑しながら答える俺。

と、にこちゃんが溜め息をつく。

「大方、あの二人がAqoursに対して何か言ったんでしよう？何を言ったのかは知らないけど・・・Aqoursのパフォーマンスが、他のグループより劣っていたのは事実よ」

「ちよつとにこ、そんな言い方・・・！」

「海未だつて本当は気付いてるでしょ？フォローするだけが優しさじゃないのよ？」

「それは・・・」

「それに・・・天は分かかってたんじやないの？このイベントにAqoursが参加すれば、こういう結果になるだろうって」

「・・・まあね」

にこちゃんの問いに、溜め息をつきながら頷く俺。

「このイベントで、周りのレベルの高さを実感することになるだろうとは思ってたよ。」

今のA q o u r sのレベルじゃ、優勝どころか入賞さえ出来ないことも分かった」

「そんな・・・だったらどうして・・・!」

「ラブライブを目指す以上、そこは絶対に理解してないといけないところだからね。スクールアイドルを続けていく上で、避けては通れない道なんだよ」

「同感だな」

頷く英玲奈ちゃん。

「他のスクールアイドル達の実力と、それに対しての自分達の実力・・・それを把握出来ていないようでは、話にならないからな」

「そうね。あと大事なのは、強い意思があるかどうかってところかしら」

ツバサちゃんも口を挟んでくる。

「今回A q o u r sは、周りとの実力差を痛感したはずよ。もしこれで心が折れてしまったら・・・キツイ言い方になってしまいうけど、その程度の覚悟しかなかったってことよね」

「そういうことになるね」

苦笑する俺。でも・・・

「もしA q o u r sの皆が、それでもスクールアイドルを続けるというのであれば・・・今より絶対に伸びる」

「・・・信じてるのね。あの子達のこと」

「勿論」

にこちゃんの問いに、笑みを浮かべる俺。

「こんなところで終わる人達じゃないよ。絶対に這い上がってくるから」

「・・・変わらないわね。そういうところ」

呆れたように、でもどこか嬉しそうに笑うにこちゃんなのだっただ。

簡単には受け止められないこともある。

「さて、そろそろ行くわよ」

「ええ・・・せつかく天くと会えたのに・・・」

「文句言わない。これから仕事でしょうが」

不満そうに俺に抱きつくあんじゅちゃんに、溜め息をつくにこちゃん。

「どうやらA—R—I—S—Eはこれから仕事があるらしく、長居は出来ないとのことだった。」

芸能人も大変だなあ・・・

「こっちはマネージャーさんから、時間通りに連れてくるよう厳しく言われてるんだから。これで遅刻なんてしたら、怒られるのは私なのよ」

「じゃあ遅刻しても大丈夫ね。怒られるのはにこなんだから」

「しばくわよハゲ」

「だからハゲじゃないわよ!？」

ツバサちゃんのツツコミ。

A—R—I—S—Eの熱烈なファンだったにこちゃんが、こんなセリフを吐く日が来ると

は・・・

「ほらあんじゆ、気持ちに分かるが仕事に行くぞ」

「うう・・・分かったわよ・・・」

英玲奈ちゃんに宥められ、渋々従うあんじゆちゃん。

「じゃあ天くん、またね・・・んっ」

「っ!?!」

急に頬にキスされ、流石に俺もビックリしてしまう。

「ちよ、あんじゆちゃん!?!」

「フフツ♡」

俺から離れたあんじゆちゃんが、悪戯っぽく笑う。

「頬じゃなくて、唇の方が良かったかしら?」

「あんじゆさん!?!何してるんですか!?!」

慌てて俺を後ろから抱き寄せ、あんじゆちゃんを睨みつける海未ちゃん。

「天は渡しませんからね!?!」

「あら、嫉妬?海未ちゃんも可愛いわね」

「あんじゆ、からかうのは止めなさい」

やれやれ、と言いたげなツバサちゃん。

「じゃあ天、また会いましょう」

「今度はゆっくり話そう。お互い積もる話もあるだろうしな」

「寂しくなったら、いつでも連絡ちようだいね♪」

「ありがとう。仕事頑張ってるね」

三人に手を振る俺。

にこちゃんも三人の後に続こうとしたが、ふと足を止めた。

「・・・A q u o u r s のこと、ちゃんと支えてあげなさいよ。今それが出来るのは、マネージャーである天しかいないんだから」

「分かってる。ほったらかしにしておくつもりは無いよ」

俺の言葉に、にこちゃんが小さく笑みを浮かべた。

「私が認めた男が、『こんなところで終わる人達じゃない』って断言したんだもの。あの子達の成長を楽しみにしてるわ」

それだけ言い残すと、手をひらひらと振って去っていくにこちゃん。

かつてのツイントールではなく、長い黒髪をなびかせながら歩くその背中は・・・とても大きく見えた。

「・・・大人だなあ」

「ですわね」

頷く海未ちゃん。

「絵里や希とは、また違った感じの大人っぽさですよね」

「うん、何と言うか・・・人生の先輩っていう感じがする」  
時には優しく、時には厳しく・・・

にこちゃんには昔から、何かと目をかけてもらってたっけなあ・・・

「全く・・・普段はイジられキャラのくせに、何でもこういう時だけ・・・」  
「フフツ・・・でも、そこがにこらしいですよね」

二人でそんなことを言いながら苦笑していると・・・

「ねえ、あの人ってμ sの・・・」

「嘘!? 園田海未!？」

「えっ、じゃあ横にいる男の子って・・・」

「まさか彼氏!？」

周りがメツチャギわついていた。えっ・・・

「・・・そういえば、にこに伊達メガネとマスクを取られたんです」  
冷や汗をダラダラ流しながら呟く海未ちゃん。

よし、にこちゃんはいつか絶対に泣かすとして・・・

「とりあえず退散っ!」

「ラジャーッ！」

全力でその場から走り去る俺と海未ちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

「ふう．．．」

「危なかったですね．．．」

ホッと一息つく俺達。

全力ダツシユで逃走した俺達は、何とか最初にいた場所まで戻って来ることが出来たのだった。

「そろそろ千歌さん達も戻って来ると思うんだけど．．．あつ」

そんな話をしてしていると、千歌さん達がこちらへ向かってくるのが見えた。どうやら、ちようど良いタイミングだったらしい。

ただ．．．

「．．．何か、元氣無くない？」

「ですね．．．さつきより暗いといえますか．．．」

明らかに落ち込んだ表情の皆。どうしたんだろう？

「お帰りなさい」

「っ．．．」

俺がそう声をかけた瞬間．．．ルビイが勢いよく俺に抱きついてきた。

「おっと．．．ルビイ？」

「．．．ひつぐ．．．ううっ．．．」

俺の胸に顔を埋めながら、泣きじやくるルビイ。

俺は戸惑いながらも、ルビイの頭を優しく撫でた。

「何かあったんですか．．．？」

「．．．これです」

問いかける海未ちゃんに、千歌さんが一枚の紙を渡す。

そこには、今回のイベントに参加したグループの名前が順位で並べて書いてあった。

右側には得票数も書いてある。

「Saint Snowは9位．．．入賞までもう少しだったのか．．．」

手の届く位置にあったのに、掴むことが出来なかったわけか．．．気の強そうな理亞さんが泣いていたのも納得できる。

それより問題なのは・・・

「A q o u r s は・・・最下位。得票数・・・0」

「そんな・・・」

絶句する海未ちゃん。つまりあの会場にいた観客の中で、A q o u r s に投票した人はいなかったということか・・・

俺と海未ちゃんはA q o u r s の身内になるから、あえて誰にも投票しなかったもん  
な・・・

「0・・・だったの・・・」

泣きながら言うルビィ。

「ルビィ達に・・・ひっぐ・・・投票してくれた人は・・・えぐっ・・・誰もいなかったの・・・ううっ・・・」

「・・・そっか」

そつとルビィを抱き締める。

「我慢しなくて良いよ・・・気が済むまで泣いて良いから」

「っ・・・うわあああああんっ！」

大声で泣くルビィ。

そんなルビィの様子を、他の皆も沈痛な面持ちで見つめていた。

「・・・Saint Snowさんからも、言われちゃったの。『μsのようにラブライブを目指しているのなら、諦めた方が良いかもしれない』って」

「『馬鹿にしないで。ラブライブは遊びじゃない』とも言われちゃったよね・・・」

「っ・・・!」

梨子さんと曜さんの言葉を聞いた海未ちゃんが、唇をぐつと噛む。

「あの二人・・・そんなことを言ったのですか・・・!」

怒りの表情を浮かべる海未ちゃん。

「まだ遠くへは行つてないはず・・・!」

「止めときな」

海未ちゃんがあの二人を追いかける前に、釘を刺しておく。

「天!?!何故止めるのですか!?!」

「あの二人に対して怒った俺が、こんなことを言える立場じゃ無いのは分かっているけど・・・今はあの二人のことなんてどうでもいいよ」

淡々と答える俺。

「人を傷つける言葉を平気で言えるようなヤツらに、これ以上構っていたくないから。そんなヤツらに怒りをぶつけてる暇があるなら・・・俺は皆の側にいたい」

「っ・・・天・・・」

「・・・とりあえず、海未ちゃんの家に戻ろつか。荷物をまとめて内浦に帰ろう。早くしないと、帰るのが遅くなっちゃうから」

「・・・分かりました」

力なく頷く海未ちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

「すう・・・すう・・・」

「ようやく落ち着いたか・・・」

俺の肩に寄りかかって眠るルビイを見て、ホツと一息つく俺。

園田家を出た俺達は、電車に乗って内浦へと向かっていた。

「ルビイちゃん、安心したような顔で眠ってるわね」

通路を挟んで俺の隣に座っている梨子さんが、笑みを浮かべながら言う。

「きつと天くんが側にいるからね」

「そうですかね？」

「そうよ。花丸ちゃんと善子ちゃんだつて、さつきまで落ち込んだのに今は穏やかな顔で眠ってるじゃない。天くと一緒にだから安心してるとよ」

俺の向かいの席で身を寄せ合つて眠る花丸と善子を見て、微笑む梨子さん。  
安心して、か・・・

「・・・それなら嬉しいですね」

ルビイによつて握られている手を、そつと握り返す。

「一緒にいるだけで、人を安心させることが出来る・・・そんな存在になりたいつて、ずつと思つてましたから」

「え・・・？」

「・・・フツツ」

首を傾げる梨子さんに対し、俺の言葉を聞いていた海未ちゃんが小さく笑つた。

「それはひよつとして、希の影響ですか？」

「・・・まあね」

照れ臭くなり、海未ちゃんから視線を外す俺。

「天は希に懐いてましたもんね。ことり以上に」

「み、南さん以上・・・？」

「ちよつと曜さん、何でそんなにげんなりしてるんですか？」

「いや、あの甘々な感じを見せつけられてるからさあ……あれ以上ってことは、胸焼けどころじゃ済まないなあと思って……」

「大丈夫ですよ、曜」

胸を押さえる曜さんに、海未ちゃんが苦笑しながら言う。

「あそこまでの甘々空間になることはありませんから。安心して下さい」

「でも、天くんが南さん以上に懐いてるんですよね？」

「そうですが、天と希はああいう感じではないんですよ。会えば分かります」

「は、はあ……」

よく分かっていない様子の曜さん。

全く、海未ちゃんときたら……

「東條希さんか……会ってみたいわね、千歌ちゃん」

「……」

「千歌ちゃん？」

「……えっ？」

梨子さんに話を振られたことに気付かない千歌さん。ようやく気付いたようで、バツの悪そうな顔をする。

「ゴメン、聞いてなかった……」

「千歌ちゃん……」  
心配そうな表情の梨子さん。

「やっぱり千歌ちゃん、イベントの結果を気にして……」  
「ち、違うって！そんなじゃないから！」

慌てて笑みを浮かべ、取り繕おうとする千歌さん。

と、ここで曜さんが真剣な表情で千歌さんに尋ねた。

「じゃあ千歌ちゃんは……悔しくないの？」

「……！」

息を呑む俺・梨子さん・海未ちゃん。その質問は……

「そ、そりゃあちよつとはね……でも、皆であそこに立てたんだもん！私は満足だよ

！」

無理矢理作ったような笑顔を見せる千歌さん。ホント、この人は……

「千歌ちゃん……スクールアイドル、やめる？」

「……」

続けられた曜さんの問いに、答えられなくなってしまった千歌さん。

いつもなら、勢いよく『やめない！』と答えているところだが……

「……そこまでにしましょう、曜さん。これ以上はダメです」

「・・・ゴメン」

素直に引き下がる曜さん。  
重苦しい雰囲気に含まれ、  
電車に揺られる俺達なのだつた。

思うところは人それぞれである。

「何かこの海を見ると、『戻ってきた』って感じがするよ」

「フフツ、すっかり内浦の人になってますね」

海沿いを散歩している俺と海未ちゃん。

無事に沼津駅に到着した俺達は、駅まで迎えに来てくれた志満さんと美渡さんの車でそれぞれの家へと帰った。

帰宅後に何となく風に当たりたくなかった俺が散歩に行こうとしたところ、海未ちゃんも行きたいと言うので一緒に外に出てきたのだった。

「久しぶりの東京はどうでしたか？」

「久しぶりって言っても、引越してまだ三ヶ月程度だけど・・・少し懐かしく感じたかな。『ああ、こんなところだったな・・・』って感じちゃったよ」

それだけ内浦の景色に慣れてしまったということだろう。

そう考えると俺にとつて、三ヶ月という期間は案外長かったのかもしれない・・・

「・・・私としては、それは少し寂しいですね」

そつと俺との距離を詰め、手を握ってくる海未ちゃん。

「確かに内浦は良い所ですが・・・」

「分かってるよ」

海未ちゃんの手を優しく握り返す。

「俺にとつて、東京が大切な場所なのは今も変わらないから。海未ちゃんや皆との思い出がたくさんあるし・・・姉さん達と一緒に暮らしてきた場所だからね」

「天・・・」

「次に東京に行く時は、今回は会えなかつた<sup>々</sup>、sのメンバーにも会いたいな。亜里姉とも会いたいし・・・可能であれば、絵里姉とも」

「・・・会えますよ、きつと」

微笑む海未ちゃん。

「今度は連絡してあげて下さい。皆喜んで天に会いに来ますから」

「・・・うん。そうするよ」

ことりちゃんにも同じ事を言われたもんな・・・

今度穂乃果ちゃん達に連絡してみよう。

「それより、千歌達は大丈夫でしょうか・・・帰り際も意気消沈していましたが・・・」

「・・・大丈夫、とは言えないかな」

とはいえ、今はどんなに励ましても意味が無いと思う。まだ自分達の中で現実を受け

止めきれしていない以上、他の人の言葉に耳を傾けることなど出来ないだろう。

まずは一晩、自分達の中で今回の結果とじっくり向き合ってもらおう。話はそれからだ。

「明日、これからのことについて皆と話してみるよ。とりあえず今日は、考える時間をあげた方が良いと思う」

「そうでしょうか・・・」

心配そうな表情の海末ちゃん。恐らく、先ほどの千歌さんの様子が頭をよぎっているんだろう。

曜さんは千歌さんの反骨心を煽る為に、よく『じゃあやめる?』というセリフを口にする。そうすると負けず嫌いな千歌さんは、『やめない!』と宣言してより一層やる気を出すのだ。

ところが今回、曜さんに『やめる?』と聞かれた千歌さんは何も答えなかった。つまり今、千歌さんの心は折れそうになっているということだ。

海末ちゃんとしては、そこが心配なところなんだと思う。

「このまま『やめる』と言い出したら・・・」

「その時はツバサちゃんも言ってたけど、『その程度の覚悟だった』ってことだよ」  
肩をすくめる俺。

「でも・・・折れないよ。あの人は」

「・・・そうですね。私も信じます」

そんな会話をしていた時だった。

「私は諦めないッ！」

誰かの叫ぶ声が聞こえた。この声って・・・

「必ず取り戻すのッ！あの時をッ！」

小原理事長が涙を流しながら叫んでいるのが見えた。隣にはダイヤさんが立っている。  
る。

そして・・・果南さんが二人に背を向けて、その場を立ち去るところだった。

「・・・あんまり見ちゃいけない場面に遭遇しちゃったね」

「・・・そのようですね」

二人揃って溜め息をつく。こっちはこっちで大変そうだなあ・・・

「どうします？見なかったことにしますか？」

「・・・海未ちゃんも人が悪いよね」

恨みのこもった眼差しを向ける俺。

「俺がそういうこと出来ない性格だって、分かかって聞くんだもん」

「・・・今回に関しては、本当に見なかったことにしてほしいと思ってますよ」

苦い表情の海未ちゃん。

「天がどう思っているのかは分かりませんが・・・私は小原理事長を許していませんの  
で。後の二人には申し訳ないですが、彼女をフォローする気が一切起きません」

「海未ちゃんもなかなか言うようになったねえ・・・」

苦笑する俺。

「悪いけど、俺は果南さんの後を追いかけるよ。海未ちゃんは・・・どうする？」

「・・・人が悪いのは天も一緒じゃないですか」

呆れている海未ちゃん。

「天にそんな聞かれ方をして、『では先に帰ります』なんて言えるわけないでしょう。  
人の性格を分かかって聞くのは止めて下さい」

「海未ちゃん、俺のこと好きだもんね」

「大好きですけど。それが何か？」

「恥ずかしがったりしないのね・・・」

今度は俺が呆れる番だった。逆にこつちが恥ずかしくなるんだけど・・・

「では私は、ダイヤと小原理事長のところへ行つてきます。先ほども言いましたが、  
フォローするつもりは一切ありませんからね」

「何を言うかは任せるよ。海未ちゃんなら大丈夫だろうし」

「ずいぶん信じてくれるじゃないですか」

「いつだつて信じてるよ。海未ちゃんのこと大好きだもん」

「っ・・・ホントに人が悪いですね・・・」

そう言いながらも、頬を赤く染める海未ちゃん。

俺は小さく笑うと、果南さんの後を追いかけるのだった。

\*\*\*\*\*

《果南視点》

「・・・ハア」

歩きながら溜め息をつく私。

「諦めない、か・・・」

キツカケはダイヤからの電話だった。妹のルビイちゃんが東京から帰ってきたらしいのだが、家に着いてダイヤの顔を見た瞬間に泣き出してしまったのだという。

どうやら A q o u r s は、イベントで思うような結果を残すことが出来なかったらし

い。だから私はダイヤと・・・鞠莉を呼び出した。

鞠莉は浦の星の統廃合を阻止する為に、Aqoursを利用しようとしている。それを止めさせないと、千歌達が傷つくことになると思っただけだから。

だけど・・・

「・・・それだけじゃ、ないんだよね」

鞠莉がAqoursを応援する理由・・・それは・・・

「こんばんはのハグっ！」

「うわっ!？」

誰かがいきなり背後から抱きついてくる。この声は・・・

「そ、天っ!？」

「こんばんは。果南さん」

笑みを浮かべている天。ど、どうしてここに・・・？

「海未ちゃんと散歩してたら、果南さん達のシリアスな場面に遭遇したので追いかけてきたってところですよ」

「心の声を読んで答えるの止めてくれない？」

「果南さんは海未ちゃんと一緒に、すぐ顔に出るから分かりやすいですよ」

笑っている天。本当にこの子は・・・

「・・・それで？私を慰めに来てくれたってわけ？」

「甘えんなハグ魔」

「まさかのトドメを刺しに来たの!？」

「冗談ですよ」

天は苦笑すると私から離れ、申し訳なきような表情になる。

「・・・俺が果南さんのところに来たのは、謝罪する為です」

「謝罪・・・？」

「ええ。東京のイベントでのことは、既に聞いてるんでしょう？だからダイヤさんや小原理事長と、今後のAqoursについての話をしてたんじやないですか？」

「・・・鋭いね」

ダイヤも言っていたが、こういうことに関しての天の察しの良さは尋常じやない。まるで全てを見透かされているようだ。

「果南さん、言つてましたよね。千歌さん達には笑顔で帰ってきてほしいって。でも俺は、それを叶えることが出来ませんでした」

悲しそうに笑う天。

「いえ、それ以前に・・・イベントで結果が残せないことは、初めから分かっています。今のAqoursには、それだけの実力が無いということも・・・にも関わらず、俺

はそれを果南さんには伝えなかった・・・何も言い訳出来ません」

「天・・・」

「結果としてA q o u r s はショックを受け、笑顔で内浦に帰ってくることは出来ませんでした。そしてそれが原因で、果南さんは小原理事長と喧嘩になってしまった・・・全て俺の責任です」

天はそう言うと、私に向かって深々と頭を下げた。

「すみませんでした」

「・・・止めてよ」

首を横に振る私。

「鞠莉との喧嘩は私達の問題なんだから。天のせいじゃないよ。それに・・・私だっけ分かってたよ。千歌達が結果を残せないだろうってことは」

それでも二年前、イベントに参加して周りのレベルの高さを実感した身だ。ライブやPVはチェックしていたけど・・・千歌達の今のレベルは、二年前の私達と大して変わらないと思う。

それを分かっているながら、私は天に身勝手なお願いをしたのだ。

「私達は歌えなかったけど・・・千歌達はちゃんとパフォーマンス出来たんでしょ？それはきつと、天が側にいてくれたからだと思う。それだけで十分役目を果たしてくれた

んだから、天は謝る必要なんかないんだよ」

あのお願いをした時、天は最初頷いてくれなかった。それはきつと、東京に行きたくないからだろうと思っていたけど・・・それだけじゃなかったんだと思う。

千歌達が結果を残せないことが分かってたからこそ、簡単に頷くことが出来なかったんだろう。

「・・・私の方こそゴメン。嫌な思いさせちゃったね」

天に頭を上げさせ、正面から抱き締める。

「千歌達を支えてくれてありがとう。それだけで十分だよ」

「果南さん・・・」

私に身を委ねてくれる天。

さつきまで心の中がグチャグチャだったのに、天とこうして触れ合っていると心が落ち着いてくる。

「ねえ、天・・・千歌達は大丈夫かな・・・？」

「・・・心配ですか？」

「そりゃあね・・・心配にもなるよ」

鞠莉が利用しようとしているのは気に食わないし、これ以上傷ついてほしくないとも思うけど・・・

やっぱり千歌達には、スクールアイドルを続けてほしい。歌って踊るあの子達は、本当に楽しそうで・・・キラキラしてるから。

「もし今回のことで、スクールアイドルをやめることになったら・・・」

「ストップ」

「っ・・・」

私の唇に、天の人差し指が触れた。

「そういうネガティブな発言は、果南さんらしくないですよ。果南さんの長所はポジティブなところでしように・・・あっ、おっぱいが大きいところもですね」

「ちよ、だからそれセクハラ発言だってば!？」

「否定しないところを見ると、自分でも大きいって思ってるんですね」

「いや、まあ少しは・・・って何を言わせるの!？」

うう、天つてばエッチなんだから・・・

天はひとしきり笑うと、優しく微笑んだ。

「・・・千歌さんと曜さんのことは、幼馴染の果南さんがよく分かってるでしょう？ 梨子さんも善子も、花丸もルビイも・・・そんなに柔な人達じゃないですよ。少しは信じさせてあげて下さい」

「・・・そうだよね」

心配するあまり、あの子達を信じてあげられてなかった……それじゃダメだよね……  
「もう遅いですから、家まで送りますよ。行きましよう？」  
「……うん。ありがとう」

差し出された天の手を握る。触れた手の温もりに、少し胸が高鳴る私なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《ダイヤ視点》

「果南……」

涙を流しながら、果南さんの去っていった方を見つめる鞠莉さん。私はそんな鞠莉さんに、何も言葉をかけられずにいました。

鞠莉さんは浦の星の統廃合を阻止する為、Aqoursを利用しようとしています。ですが、それだけではありませんでした。

鞠莉さんの真の目的は……

「ダイヤや松浦さんと、もう一度スクールアイドルをやること……」

「っ!？」

驚く私達。海未先生が、冷たい表情で立っていました。

「それが貴女の目的なのではないでしょうか？小原理事長」

「ど、どうしてそれを・・・」

「貴女方が二年前にスクールアイドルをやっていたことは、赤城先生から聞いていました。何らかの理由で解散し、直後に貴女が留学したことも知っています。その事実を聞いた時、ピンとききましたよ」

冷たい眼差しを向ける海未先生。

「何故留学から戻ってきたのか、何故スクールアイドル部を応援するのか・・・何故天を脅して、マネージャーをやらせているのか」

「っ・・・」

凜とした佇まいから放たれる威圧感に、私は言葉を発することが出来ませんでした。鞠莉さんも固まってしまっています。

「二年前の解散は、貴女にとつては不本意なものだったのでしょうか？受け入れざるをえなかったものの、貴女は納得などしていなかった。そして二年後・・・浦の星の統合の話が進んだことを知った貴女は、浦の星に戻ることを決めた」

淡々と語る海未先生。

「まずは浦の星の統廃合を阻止すべく、音ノ木坂の南理事長に相談した。その際に共学化のテスト生として天を推薦され、天を利用することに決めた。恐らく最初は、自分達のマネージャーをやらせるつもりだったのでしょうか？」

「つ……」

何も言うことが出来ない鞠莉さん。

どうやら海未先生の仰っていることは、概ね間違いなさそうですわね……

「ですが、貴女も分かっていたはずですよ。またスクールアイドルをやるうと言ったところで、ダイヤや松浦さんが簡単には領かないだろうということ。そんな時、スクールアイドル部を立ち上げようとしている後輩がいることを知った貴女は方針を変えた。三人で再び始めるのではなく、後輩が作るであろうグループに便乗してしまおうと」

冷やかな目で鞠莉さんを見る海未先生。

「先にグループを作ってもらえれば、理事長として力を貸すことが可能になります。浦の星の統廃合を阻止する為に利用することも出来ますし、ダイヤと松浦さんを説得する時間だって稼ぐことが出来る……だから貴女は、千歌達のマネージャーをやるように天を脅したのでしょうか？」

「……鋭いわね」

「少し考えれば、誰にでも分かることです」

溜め息をつく海未先生。

「私が気付いているのですから、当然天だって分かっています。それなのにあの子は、ダイヤや松浦さんと距離を縮めようとする貴女の背中を押すようなことまでして……お人好しにも程があります」

そう語る海未先生は呆れた様子でしたが……その中にどこか、誇らしげな感じが混ざっているように思えました。

「恐らく天は、貴女のことをそこまで恨んではいけないでしょう。貴女から受けた仕打ちを許してはいけません。理由を察して理解はしているはず。もつとも……私は未だに怒りが収まりませんけどね」

鞠莉さんを鋭く睨みつける海未先生。

「天を傷つけた貴女を、私は許すことが出来ません」

「……本当に天を大切に想っているのね」

「当然です」

言い切る海未先生。

海未先生は、どうしてそこまで天さんのことを……エリーチカの弟だから、という理由では説明が付きませんわね……

「他のメンバースのメンバーも、私と同じことを言うでしょう。天の意向で、貴女のみでか

したことは他のμ sのメンバーに伝えていませんが・・・もし事実を知れば、すぐにも浦の星に乗り込んでくるでしょうね。私達にとって、貴女は決して許すことの出来ない存在なんですよ」

「そんなこと分かっているわよッ！」

耐え切れなくなつたのか、鞠莉さんが叫びました。

「μ sのメンバーがどれほど天を大切に想っているかなんて、絵里を知ってる私から分らないはずないでしょ!?!私がやってしまったことの重さもッ!どれほど天を傷つけてしまったのかもッ!十分すぎるほど感じてるわよッ!」

その瞬間、乾いた音が鳴り響きました。海末先生が鞠莉さんの頬を引つ叩いたので

「・・・ふざけないで下さい」

海末先生の眼差しは・・・これ以上ないほど、冷たく鋭いものになっていました。嫌でも分かります。海末先生は今・・・ブチギレているということが。

「μ sのメンバーが、どれほど天を大切に想っているかが分かる?そんなはずないでしょう。天と十年近く会っていないなかつた貴女が、私達が共に過ごしてきた時間を知ることがないのですから」

鞠莉さんの胸倉を掴む海末先生。

「やってしまったことの重さを感じている？だとしたら勘違いも甚だしいですね。貴女が想像してる以上に、天は傷ついていますよ」

「う、海未先生っ！それ以上はダメですっ！」

拳を握り締めた海未先生を見て、慌てて二人の間に入る私。

海未先生は溜め息をつくど、鞠莉さんから手を離しました。

「・・・ダイヤがいてくれて助かりました。危うく本気で殴るところでしたね」

海未先生の言葉にゾツとする私。海未先生は再び鞠莉さんに視線を向けます。

「貴女にとって、ダイヤや松浦さんと過ごす時間がどれほど大切だったのか・・・私は貴女ではないので分かりません。ですが・・・少しだけ理解は出来ていると思います。私にも思うところがありますので」

海未先生はそう言うど、くるりと踵を返しました。

「だからこそ忠告しておきますが・・・もう少し方法を考えなさい。貴女だって天のことを、大切に想っているのでしょうか？その天を傷つけて、仮に大切な時間を取り戻すことが出来たとして・・・貴女は心の底から喜ぶことが出来るのですか？」

「っ・・・」

俯く鞠莉さん。目からは次々と涙が零れ落ちます。

そんな鞠莉さんに背中を向けたまま、静かにその場を立ち去る海未先生なのでした。

再スタートはいつだって切ることが出来る。

翌朝・・・

「はっ・・・はっ・・・！」

日課のランニングをしている俺。やっぱり内浦は走ってて気持ちが良いな・・・

「・・・果南さん、大丈夫かな」

ふとそんなことを呟く。

昨夜家まで送り届けた時、Aqoursのことは『信じる』と言っていたが・・・小原理事長に関しては、やはりまだ複雑な思いを抱えているようだった。

小原理事長といえば・・・

「・・・あの人こそヤバそうだよなあ」

あの後家に帰ったら、海未ちゃんの機嫌が最悪だったのだ。何があったかは知らないが、恐らく小原理事長が海未ちゃんをブチギレさせる何かを言ってしまったんだろう。

ムスツとした表情のまま抱きついてくる海未ちゃんをあやすのに、どれだけ苦労したことか・・・

そして海未ちゃんがブチギレたのなら、小原理事長が何のダメージも無く済んでいる

わけがない。精神的ダメージを負っているだろうし……海未ちゃんのことだから、思いつき引つ叩いていることも考えられる。

ブチギレた海未ちゃんの怖さを舐めてはいけない。

「……ダイヤさんに、何があつたのか聞いてみようかな」

そんなことを考えながら、ふと海の方へ視線を向けると……

「え……?」

浜辺に千歌さんが立っていた。物憂げな表情で海を眺めている。

スルーするのもアレなので、声をかけようとした瞬間……千歌さんが勢いよく海へと入っていった。

「ええっ!?!」

ビックリしてしまう俺。

慌てて浜辺へと走るが、着いた時には千歌さんは完全に海に潜ってしまった。

「つ……まさかあの人……!」

嫌な予感が出て、急いで俺も海に飛び込んだ瞬間……

「ぷはあっ!」

千歌さんが海から出てくる。服はずぶ濡れ、腰から下は未だに海に浸かたままだ。

「あー、気持ち良い!」

「紛らわしいわっ!」

「ごふっ!」

海水を手で掬い、千歌さんの顔面に叩きつける。マジで焦った・・・

「げほっ・・・ごほっ・・・そ、天くん!?!いきなり何するの!?!」

「カツとなつてやりました。反省はしていません」

「ふてぶてしいっ!?!」

ツツコミを入れつつ、手で海水を拭う千歌さん。

「つていうか、何で天くんがここに居るの?」

「ランニングしてたら、どっかのアホみかんが入水自殺を凶ろうとしてたんで止めに

きました」

「コラッ!みかんをアホ呼ばわりしないのっ!」

「そこにツツコミ入れます?俺がアホ呼ばわりしたのは千歌さんなんで大丈夫です」

「そっかあ、それなら大丈夫・・・じゃないよ!?!何度も言うけど私先輩だよねえ!?!女の

子だよねえ!?!」

「当たり前じゃないですか。アホ過ぎて自分のことも分からなくなつたんですか?」

「辛辣過ぎィ!」

千歌さんはツツコミを入れると、深く溜め息をついた。

「そんなことするわけないじゃん。ちよつと海に潜りたくなっただけだよ」

「服のまま潜るのは止めて下さい。もつと気をつけないと」

「天くん・・・私のことを心配して・・・」

「ただの水ならともかく海水なんですから、服がダメになっちゃうじゃないですか」

「そつちの心配!?!私のことは!?!」

「どうでもいいです」

「酷い!?!」

シヨックを受けている千歌さん。まあ、冗談はさておき・・・

「千歌さん、とりあえず隠した方が良いでしょう」

「え?何を?」

「身体です。思いつきり透けてますけど」

「透け・・・ああつ!?!」

千歌さんは今、白いシャツを着ている。それが海水によつて濡れ、肌にピツチり張り付いた結果・・・下着がくつきりと浮き出てしまっていたのだ。

しかも小柄な割りに大きい胸も、シャツが張り付いたことで強調されてしまつており・・・とてもエロい状態になっていた。

慌てて両腕で隠す千歌さん。

「ちよ、そういうことは早く言ってよ!？」

「いや、あえて見せつけてるのかなって。痴女なのかなって」

「誰が痴女!? 私にそんな趣味はないから!」

「派手なオレンジ色のブラを着けてるのにな?」

「色を言わないで!?! それとオレンジ色じゃなくてみかん色だから!」

「相変わらずそこにこだわりますね・・・」

俺は呆れつつ、ランニングウェアの上着を脱いで千歌さんに着せた。

「少し汗臭いかもですけど、我慢して下さいね」

「あ、ありがと・・・でも、濡れちゃうよ?」

「今さらでしょう。俺も海に浸かってますし」

そう答えながらジッパを上げる。これでよし・・・

「それで? 何で海に潜ったりしたんですか?」

「いやあ・・・何か見えないかなあって」

苦笑する千歌さん。

「前に海の音を聴く為に、海に潜ったことがあったでしょ? だから今回も、何か見えな

いかなあと思つて」

「・・・何か見えました?」

「・・・何も見えなかった」

千歌さんは首を横に振ると、広がっている曇天の空を見上げた。

「でも・・・だからこそ、スクールアイドルを続けなきゃって思った。先にあるものが何なのか・・・このまま続けても0なのか、それとも1になるのか10になるのか・・・ここでやめたら、全部分からないままになっちゃうから」

「千歌さん・・・」

「だから私は、これからもスクールアイドルを続けるよ！」

笑顔で宣言する千歌さん。

「だってまだ0だもん。あれだけ皆で練習して、皆で歌も衣装もPVも作って。頑張って頑張って、皆に良い歌を聴いてほしいって・・・スクールアイドルとして輝きたいって・・・!!」

千歌さんの表情がどんどん歪んでいく。

目には涙が浮かび、歯を食い縛り・・・ついには自らの拳で、自分の頭を叩き始めた。「なのに0だったんだよッ!!悔しいじゃんッ!周りのレベルが高いとかッ!そんなの関係ないんだよッ!」

俯く千歌さん。涙がとめどなく流れている。

「やっぱり私・・・悔しいんだよ・・・!!」

「・・・ホント、不器用な人ですね」

千歌さんをそっと抱き締める。

千歌さんが一番悔しがってることなんて、一目見てすぐに分かった。雰囲気は暗くないよう無理に笑顔を作っていたことも、悔しさを押し殺して皆を励まそうとしていたことも。

多分、その理由は・・・

『スクールアイドルをやろう』って皆を誘った自分が、悔しいからって皆の前で泣くわけにはいかない・・・そう思ったんですか?」

「だって・・・だって・・・!」

泣きじやくる千歌さん。俺は千歌さんの頭を撫でた。

「全く・・・美渡さんの言葉を借りるなら、本当にバカ千歌ですね」

千歌さんを抱き締める腕に、ギュっと力を込める。

「悔しかったら『悔しい』って言えば良いんです。泣きたかったら泣けば良いんです。仲間の前で強がってどうするんですか」

「だって・・・!」

「もつと仲間を頼って下さい。一人で抱え込んで、感情を押し殺して・・・それじゃただの独りよがりですよ」

あやすように、千歌さんの背中を優しく叩く。

「曜さんも、梨子さんも、花丸も、ルビイも、善子も……千歌さんの大切な仲間でしょう？千歌さんが皆を大切に想っているように、皆も千歌さんを大切に想ってるんですよ」

そう、だからこそ……皆この場にやってきたのだ。

「千歌ちゃんっ！天くーんっ！」

「っ!？」

驚いている千歌さん。

浜辺には、A q o u r s のメンバーが全員集合していた。躊躇することなく海に入り、俺達のところへやってくる。

「み、皆?! どうしてここに!？」

「やつぱり千歌ちゃんと、ちゃんと話をするべきだと思つて。朝早かつたんだけど、皆に連絡したらすぐに来てくれたの」

笑っている梨子さん。だがすぐにジト目になり、俺の方を睨んでくる。

「ただし天くんは、連絡したのに返信してくれなかったけど」

「あつ……そういえば、スマホ見てませんでしたね……」

ま、まあ結果オーライってことで……

「しかも海で千歌ちゃんを抱き合ってるし・・・ホント手が早いんだから」

「その言い方やめてくれませんか？まるで俺が女つたらしみたいじゃないですか」

「合ってるじゃない」

「合ってるじゃん」

「合ってるすら」

「合ってるよね」

「合ってるわね」

「よし、今日の練習メニューは淡島神社の階段ダッシュを五往復で」

「一二三！すいませんでしたっ！一二三」

揃って頭を下げる五人。分かればよろしい。

「・・・フフツ」

小さく笑う千歌さん。少しは元気が出たらしい。

「・・・やつと心から笑えましたね」

千歌さんの目元の涙を、指でそっと拭う。

「泣きたい時は泣いたら良いですけど・・・やっぱ千歌さんには、笑顔がよく似合

ますよ」

「っ・・・！」

恥ずかしそうに俯く千歌さん。顔が赤くなっている。

「そ、そういうことを真顔で言わないでよお・・・!」

「千歌ちゃん、いい加減慣れた方が良いわよ。これが天くんなんだから」

「そういう梨子ちゃんも、未だに慣れてないけどね」

「ちよ、曜ちゃん!?!」

「やれやれ、これだから女つたらしは・・・」

「善子のパンツの色はーっ!墮天使を意識した黒ーっ!」

「うにやあああああああっ!?!ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!」

「アハハ・・・流石の善子ちゃんも、天くんには敵わないんだね」

「何だかんだ言いつつ、善子ちゃんは天くん大好きっ子ずら」

「ヨハネよっ!あとずら丸は変なこと言わないっ!」

ギャーギャー騒ぐ皆。俺は思わず笑ってしまった。

「・・・やつぱり、似てるな」

「天くん・・・?」

首を傾げる千歌さん。俺は皆の顔を見回して、笑みを浮かべた。

「確かに今は0かもしれない。それをいきなり100にすることは出来ないでしょ

う。だから・・・まずは1にするとところから始めてみませんか?」

「0から、1に・・・？」

「ええ。そもそもスクールアイドル部だって、最初は0からのスタートだったじゃないですか。部を立ち上げて、仲間が増えて・・・そして、東京のイベントに出ることが出来たんです」

初めて千歌さんと出会った時には、そんな日が来るなんて想像もしていなかった・・・「だから、またここから始めるんです。新たなスタートを・・・もう一度、0からのスタートを切るんです」

「0からのスタート・・・」

やる気に満ち溢れた表情の皆。どうやら、覚悟は決まったようだ。

「お遊びでやっているわけじゃないし、ラブライブを諦める必要も無い・・・Aquoursは本気なんだっていうところを、見せつけてやりましょう」

「天くん・・・うんっ！」

「ヨースロー！」

「やりましょう！」

「ずらっ！」

「頑張ルビィ！」

「ギランツ！」

笑みを浮かべる皆。その瞬間・・・曇天だった空に光が差した。

「「「わあ・・・！」」」

嬉しそうに空を見上げる皆。

そういや、五年前も似たようなことがあったっけ・・・

「・・・懐かしいなあ」

眩しさに目を細めつつ、皆と一緒に空を見上げる俺なのだった。

## 心からの懇願は相手の心を揺さぶる。

『ええっ!?!じゃあことりさんと真姫さん、にこさんとも会ってたの!?!』

「まあね」

『ずるいずるいずるいつ! 私だって天と会いたかったのにいつ!』

電話越しに、悔しがっている女性の声が聞こえる。苦笑する俺。

「仕方ないでしょ。亜里姉は東京にいなかったんだから」

『うう、やっぱり旅行はキャンセルすればよかった・・・』

「でも楽しかったんでしょ?」

『楽しかった!』

俺の問いに声を弾ませる女性・・・絢瀬亜里沙。俺のもう一人の姉であり、キャンパスライフを絶賛満喫中の大学二年生だ。

俺が先週東京に行った時は、旅行に行っていた為に会うことが出来なかった。その旅行先でのお土産を送ってくれた為、近況報告も兼ねて俺の方から電話したのだ。

「それなら良かった。雪穂ちゃんは元気?」

『元気だけど、相変わらず真面目だよ。熱心に勉強するのもいいけど、もっとキャンパ

スライフを満喫すべきだと思うんだよね』

「姉がちゃんらんぼらんだと、妹はすっかり者になるんだよ」

『今サラツと穂乃果さんをデイスらなかつた!?!』

「同じようなちゃんらんぼらんの姉がいる身として、雪穂ちゃんの気持ちはよく分かるわ」

『私までデイスられた!?!』

「まあお土産を送ってくれたから、『ちゃんらんぼらん』から『頭のネジが外れた子』に格上げしてあげるね」

『それ格上げなの!?!むしろ下がってない!?!』

亜里姉のツツコミ。

雪穂ちゃんも穂乃果ちゃんの妹で、亜里姉にとって一番の親友だ。亜里姉と雪穂ちゃんとは同じ大学に通っており、今回の旅行も二人で行ってきたらしい。

「雪穂ちゃんにも連絡しないとね。雪穂ちゃんからもお土産送ってもらっちゃったし」

『そうしてあげて。雪穂、天のこと凄く心配してたから』

俺も雪穂ちゃんとは仲良くさせてもらっており、何かとお世話にもなっていた。

内浦へ行くことが決まった時には、『母親かつ!』とツツコミを入れたくなるほど心配

されたものである。

「了解。後で連絡しとくよ」

『よろしくね。それから・・・お姉ちゃんのことなんだけど』

少し言い辛そうな亜里姉。

俺に気を遣うくらいなら、絵里姉の話題なんて出さなきゃいいのに・・・

「・・・元気にやってるの?」

『・・・何だか最近、無理してるような気がして』

亜里姉の声が暗くなる。

『いつも通りに振舞ってはいるんだけど、少し元気が無いっていうか・・・疲れてるん

じゃないかなって思うんだよね』

「仕事が大変なんじゃないかな。社会人一年目で、慣れないことも多いだろうし」

『・・・それだけじゃないって、天も分かるでしょ?』

溜め息をつく亜里姉。

『天がいなくなつてから、お姉ちゃんはまだ笑いなくなつちやつてさ・・・雰囲気も少し暗くなつたし、自分から話することも減つちやつて・・・その分、凄く仕事に打ち込んでるみたいだけど』

絵里姉は大学を卒業後、公務員として区役所で勤務している。

実に堅実で絵里姉らしいが、今の亜里姉の話だとまるで……

『……μ sに入る前のお姉ちゃんみたい、でしょ?』

「……」

読まれていたらしい。

周りに心を開くことが出来ず、信頼出来る友達が希ちやんしかいなかった頃……音ノ木坂が統廃合の危機に陥り、生徒会長としての責任感だけで行動していた頃……話を聞かきり、今の絵里姉はあの頃の絵里姉と似ているかもしれない。

『……ねえ、天』

いつになく真面目で、それでいて切実な声で俺の名前を呼ぶ亜里姉。

『天がどんな思いでテスト生の話を受けたのか、私には分からないけど……私は天に帰ってきてほしい。いつまでも三人で暮らすことは出来ないかもしれないけど、今はまだ三人で暮らしていたい。お姉ちゃんだってそれを望んだから、テスト生の話を受けることに反対したんだよ?』

「……分かつてるよ」

呟く俺。

「それでも、俺は……」

『お願い、天……』

涙声になる亜里姉。

『天がない生活は、私も寂しいんだよ……帰ってきてよ、天……』

「……ゴメン、亜里姉」

いたたまれなくなり、電話を切る俺。亜里姉の涙声が、耳から離れない。

「天……?」

ちょうどその時、お風呂から上がった海未ちゃんがリビングに入ってきた。

「先にお風呂をいただき……どうしたんですか?」

暗い表情を浮かべる俺に気付き、心配そうに声をかけてくれる海未ちゃん。俺は海未ちゃんに視線を向けた。

「……ねえ、海未ちゃん。最後に絵里姉と会った時、どんな様子だった?」

「どんな様子、とは?」

「いつもより元気が無かったとか、疲れた様子だったとか……」

「……亜里沙から聞いたんですね」

溜め息をつく海未ちゃん。

「天がいなくなってから、絵里が心配で何度か家にお邪魔しましたが……元気は無かったですね。いつも通りに振舞ってはいいましたが、少し無理をしているという印象を受けました。特に最後に会った時は、疲労の色が見えたように思います」

「・・・そっか」

「・・・黙っていてすみませんでした」

「海未ちゃんが謝る必要なんて無いよ。俺の方こそ、気を遣わせちゃってゴメンね」  
海未ちゃんに謝る俺。俺がこのことを知れば、『俺のせいでそうなった』と罪悪感を感じてしまうと思っただろう。

絵里姉も知られたくないから隠そうとしたんだろうし、そんな絵里姉の気持ちも汲んでくれたんだと思う。

「・・・亜里沙は、何と？」

「・・・帰ってきてほしいって」

「・・・どうするんですか？」

「・・・どうしようかね」

力なく椅子に体重を預ける俺。

「Aoursのことが心配ですか？」

「それもある。俺がマネージャーを辞めたら、小原理事長が何をするか分からないし」

「・・・あの女ですか」

忌々しそうな表情の海未ちゃん。

俺が言えることでもないけど、海未ちゃんってホント小原理事長が嫌いだよね・・・

「まあ、それを差し置いても・・・やらなきゃいけないことがあるから」

「マネージャーとしての、最低限の責務というやつですね」

「・・・それだけじゃないけどね」

「え・・・？」

首を傾げる海未ちゃん。まあ、今はそれも置いといて・・・

「絵里姉と喧嘩して、亜里姉を悲しませて・・・我ながら最低の弟だね、俺は」

「天・・・」

「ああ、ゴメン・・・お風呂入ってくるね」

これ以上海未ちゃんを暗い気持ちにさせないように、椅子から立ち上がりリビングを出ようとする・・・

後ろから海未ちゃんに抱き締められた。

「海未ちゃん・・・？」

「・・・私は天に戻ってきてほしくて、浦の星に教育実習生としてやってきました。その気持ちは今も変わりません」

俺を抱き締める腕に、ギュつと力を込める海未ちゃん。

「ですが・・・後悔はしてほしくありません。内浦にやって来たことも、浦の星に入学したことも・・・Aqoursの皆と楽しそうに過ごす天を見て、私はそう思いました」

「海未ちゃん……」

「天が自分自身で選んだ道じゃないですか。だったら何があつても、前を向いて歩かないとダメでしょう。後ろばかり見て歩いているようでは、それこそ絵里や亜里沙に怒られてしまいますよ」

「……そうだよね」

海未ちゃんの言う通りだ。

これは俺自身が選んだ道……絵里姉や亜里姉に反対されても、俺はこの道を選んだのだ。

だったら、後ろを向いてちやいけなよな……

「……ありがとね、海未ちゃん」

身体に回されている海未ちゃんの腕に、そつと手を置く俺なのだった。

チャンスは全力で掴みにいくべきである。

「花火大会ですか？」

「うん。私達に出てほしいんだって」

翌日・・・『十千万』のロビーにて、俺に説明してくれる曜さん。

近々沼津で花火大会が開かれるそうなのだが、運営側から『参加してくれないか』という打診があったらしい。花火大会のステージで、パフォーマンスを披露してほしいのだそうだ。

「沼津の花火大会っていつたら、ここら辺じゃ一番のイベントなんだよ。そこからオファーが来たっていうのは、私達にとってはチャンスだと思う」

「ふあふあふおふいつふえふおふあうふいふあふいふあふふあふえ」

「花丸、のつぽパン食べながら話すの止めて。何かの呪文みたいになってるから」

「ゴツクン・・・A q o u r sを知ってもらうには一番ずらね」

「それが言いたかったのね・・・」

呆れる俺。っていうか、相変わらずよく食べるな・・・

「でも、今からじゃあんまり練習時間無いよね」

ルビイがそんなことを言う。

花火大会の開催日は、およそ二週間後らしい。今から曲や衣装を作って、振り付けも考えると・・・

かなりタイトなスケジュールになるだろうな。

「私は、今は練習を優先した方が良いと思うけど・・・」

遠慮がちに意見を出す梨子さん。

梨子さんとしても出たいのは山々だろうけど、無理をしてまで出るべきではないという考えなんだろう。

「天くんはどう思う?」

「個人的な意見を言わせてもらおうなら、出るべきだと思いますよ」

素直な意見を述べる俺。

「曜さんの言う通り、今回のオフアはA q o u r sにとってチャンスだと思っています。タイトなスケジュールになることは間違いないですけど、不可能ではないですから。やらずに後悔するくらいならばやって後悔したい生涯。蛹はいつか希望を胸に s o f l y」

「途中から『s a ● a g i』の歌詞よねえ!? 『銀●』のエンディングテーマよねえ!」

「梨子さん、よく知ってましたね・・・」

俺が不覚にも感動を覚えていると、曜さんが千歌さんに視線を向けた。

「千歌ちゃんはどう思う?」

「私は出たいかな!」

屈託の無い笑みを浮かべる千歌さん。

「今の私達の全力を見てもらつて、それでダメだったらまた頑張る。それを繰り返す  
しかないんじゃないかな」

「千歌さん……」

どうやら東京のイベントをキツカケに、千歌さんは一皮剥けたようだ。迷いが無くなつたし、良い意味で吹っ切れている。

「ヨーソロー! 賛成であります!」

「ギラント!」

「あ、善子いたの?」

「最初からいたわよ!」

善子のツツコミ。どうやらずっと長椅子に寝そべっていたらしい。

「ふおふいふおふあん、ふあふえふふふいふふあ」

「花丸、ボツシユート」

「ずらあつ!?! マルののっぽパンがあつ!?!」

「ちよつとずら丸! 『善子ちゃん、影薄過ぎずら』なんて酷いじゃない!」

「何で善子は普通に理解出来てんの・・・はむっ」

「ずらあああああつ!?!」

花丸からボッシュートしたのっぽパンをかじる。何これ美味くね?

「天くん!?!何で食べちゃうずら!?!」

「そこにのっぽパンがあるから」

「某登山家の名言をパクるのは止めるずら!」

「っていうか、普通に間接キスなんじゃ・・・」

ルビィがちよつと恥ずかしそうに何かを言っているが、花丸がギャーギャーうるさい

のでよく聞こえなかった。

全く、花丸のヤツめ・・・

「マルののっぽパンを返すずら!」

「それよりずら丸!ちよつと表出なさい!ヨハネの墮天使奥義で・・・」

「えいつ」

「むぐうつ!?!」

「ずらあああああああああああつ!?!」

善子の口にのっぽパンを突っ込む俺。

悲鳴を上げる花丸なのだった。

\*\*\*\*\*

翌朝・・・

「この階段はしんどいなあ・・・」

日課のランニングコースに含まれている、淡島神社の階段を上る俺。

神田明神の比ではない長さの階段を、何とか上り終えようとした時・・・

「復学届、提出したのね」

聞き覚えのある声が聞こえ、思わず足を止める。今の声って・・・

「まあね」

またしても聞き覚えのある声だ。

側にあつた木の陰に隠れ、恐る恐る様子を窺ってみると・・・神社の前で、小原理事長と果南さんが会話しているところだった。

「やっと逃げるのを諦めた？」

「勘違いしないで。学校を休んでいたのは、怪我をしたお父さんの代わりに店を手伝う為・・・スクールアイドルは関係無い」

小原理事長の問いに、冷たく返す果南さん。

「そういや、そろそろ果南さんのお父さんが復帰出来そうなんだっけ・・・近々復学出来そうだって、アルバイトの時に果南さんが言ってたよな・・・」

「それに復学しても、スクールアイドルはやらないから」

「私の知っている果南は、どんな失敗をしても笑顔で次に向かって走り出していた。成功するまで諦めなかった」

果南さんに語りかける小原理事長。

「もしかしなくても、二年前の東京のイベントで果南さんが歌えなかったことを言うてるんだらう。」

「だからもう一度スクールアイドルをやれって？高校卒業まで一年も無いのに？」

「それだけあれば十分じゃない。それに、今は後輩だっているんだから」

「止めて」

小原理事長を睨みつける果南さん。

「千歌達は必死で頑張ってるの。利用するような真似は許さない」

「果南・・・」

「……もう止めて。どうして留学から戻ってきたの？」

悲しそうな表情を浮かべる果南さん。

「私は……戻ってきてほしくなかった」

「っ……ホント、相変わらず果南は頑固ね……」

笑みを浮かべる小原理事長だったが、強がっていることは明白だった。

そしてそんな小原理事長の様子に、果南さんが気付かないはずもなく……

「もう……貴女の顔、見たくないの」

トドメの一言を放つ。絶句して何も言えない小原理事長に背を向け、階段を下りていく果南さん。

今のはキツイ一言だったな……

「……もう隠れる必要は無いわよ」

沈黙の後、俺が隠れている方に視線を向ける小原理事長。

「いるんでしよう？天」

どうやらバレていたようだ。仕方なく出て行く俺。

「乙女の会話を盗み聞きするなんて、悪い子ね」

「乙女（笑）」

「何で笑ってるのよ!？」

「いや、どこに乙女がいるのかなって」

「目の前にいるでしょうが！」

「・・・ハッ」

「鼻で笑われた!?!」

シヨックを受けている小原理事長。冗談はこれくらいにして・・・

「ずいぶんキツイ一撃をもらいましたね。ダメージ大きいんじゃないですか？」

「・・・まあね。とはいえ、私に文句を言う資格なんて無いわ」

寂しそうな表情の小原理事長。

「貴方を脅した上、あの子達を利用したんだもの。当然の報いよ」

「全くもってその通りですね。ざまあみやがれ」

「まさかの追い討ち!?!少しはフォローするところじゃないの!?!」

「被害者が加害者をフォローできるとでも？」

「すいませんでした」

素直でよろしい。まあそれはさておき・・・

「小原理事長、一つ聞きたいんですけど・・・二年前の東京のイベントで、果南さんが歌えなかったっていうのは本当なんですか？」

「・・・よく知ってるわね」

溜め息をつく小原理事長。

「本当よ。歌うこともせず、踊ることもせず……ステージの上で固まっていたわ。会場の雰囲気呑まれてしまったんでしょね」

「呑まれた、ねえ……」

果南さんの性格を考えると、とてもそうは思えない。ましてや一人ではなく、ダイヤモンドと小原理事長も一緒だったのだ。

それで挫折してスクールアイドルをやめるなんて、どうしても信じられないんだよなあ……

「それで？これからどうするつもりなんですか？」

「決まってるじゃない。意地でも果南にスクールアイドルをやらせるわ」  
覚悟を決めた表情の小原理事長。

「一筋縄でいかないことなんて、最初から分かったもの。こんなところで諦めるくらいなら、留学から帰ってきたりしないわ」

「……言うと思いましたよ」

溜め息をつく俺。

果南さんも頑固だけど、この人も大概だよな……

「まあ……精々悔いの無いように頑張ってください」

「そうするわ。ありがとう」

小さく笑う小原理事長。

「……相変わらず優しいわね。昔と全然変わってない」

「……失礼します」

くるりと背を向け、階段を下りる俺。

この人が相手だと、どうにも調子が狂ってしまふ。

「……さて」

ポケットからスマホを取り出し、ある人物へと電話をかける。

数回コールした後、その人物は電話に出てくれた。

『もしもし?天?』

「おはようになこちゃん。朝早くにゴメンね」

そう、電話の相手はになこちゃんだ。起きててくれて良かった……

『全然構わないけど、珍しいじゃない。天が電話してくるなんて』

「色々あつてね」

俺は苦笑すると、早速本題に入るのだった。

「になこちゃん、ちよつと聞きたいことがあるんだけどさ……」

誰も報われないことほど悲しいことは無い。

「かんぱーい！」

「かんぱーい！」

長い銀髪の女性の音頭につき、ビールジョッキを合わせる海末ちゃんと赤城先生。俺は溜め息をついた。

「ウチは居酒屋じゃないんですけど」

「気にしないで絢瀬くん！居酒屋じゃなくても私達は気にしないわ！」

「人の家であることを気にしてもらえますか？」

赤城先生にツツコミを入れる俺。

海末ちゃんと仲良くなった赤城先生は、遂に家にまで呑みに来るようになっていた。

そしてもう一人……

「フフツ、良いじゃない。私達と絢瀬くんの仲でしょ？」

「いや、貴女に關しては大して接点も無いんですけど……鶴見先生」

柔らかく微笑む銀髪の女性……鶴見翔子先生。三年生のクラス担任を務めている先生だ。

一年生である俺は、挨拶程度しか交わしたことが無い。

「酷い!? 私とは遊びだったのね!？」

「いや、遊んでるのは貴女でしょ」

「あの夜のことを忘れたっていうの!？」

「脳天かち割りますよ白髪頭」

「白髪じゃないですよ! 銀髪ですよ!」

「そ、天・・・相手は一応先生ですよ・・・?」

恐る恐る声をかけてくる海未ちゃん。

一方、赤城先生は笑っていた。

「大丈夫よ、海未ちゃん。翔子ちゃんはそういうの気にしない人だから」

「フフツ、まあね」

クスクス笑っている鶴見先生。

「絢瀬くんは面白いわね。そうやって遠慮なくきてくれる子、私大好きなのよよく分からないが、どうやら気に入られてしまったらしい。

嬉しいような、嬉しくないような・・・

「私のことは、気軽に『翔子ちゃん』って呼んでね」

「いや、仮にも先生を相手にちゃん付けはマズいでしょう」

「じゃあ『翔子先生』で」

「・・・まあそれなら」

「あつ、ずるい！ 絢瀬くん、私のことも『麻衣先生』でいいのよ!？」

「何で張り合ってるんですか貴女は」

「だって私、絢瀬くんの担任なのよ!?! 翔子ちゃんに先を越されるなんて悔しいじゃない!？」

「・・・赤城先生つて、案外子供っぽいところあるんですね」

「そうなのよ。いつもは大人の女性つて感じなのにね」

「いや、貴女も大概ですけどね」

「酷い!?!」

シヨックを受けている翔子先生。

まあ親しみやすく、俺は好きだけでも。

「じゃあ俺のことも天で・・・」

「オツケー天くん!」

「了解よ天くん!」

「順応早っ!?!」

な、何だこのノリの軽さは・・・

「こういう人達なんですよ。まあおかげで、私も親しくなれましたけど」  
苦笑している海未ちゃん。

人見知りの海未ちゃんが家に呼ぶほど親しくなっている理由が、ようやく分かった気がした。

「麻衣ちゃんのクラスは良いわねえ・・・天くんもいるし、本当に明るくて良い子達がたくさんいるもの」

「あら、翔子ちゃんのクラスだってそうじゃない。それに来週から、果南ちゃんも復学するんですよ？」

「そうなのよ。今から楽しみだわ」

微笑む翔子先生。

そっか・・・果南さん、来週から学校に来るのか・・・

「翔子先生、ちよつと聞きたいんですけど」

「フフツ、何でも聞いてちょうだい！」

胸を張る翔子先生。

おお、なかなか立派な・・・じゃなくて。

「小原理事長のことなんですけど」

「ああ、鞠莉ちゃんね。何？スリーサイズ？」

「違います」

「B87/W60/H84よ」

「違うって言うてるでしょうが！っていか何で把握してんの!？」

「自分のクラスの子のスリーサイズくらい把握してるわ」

「当たり前みたいには言わないでもらえます!？」

「っていうかあの人、B87もあるのか・・・」

道理で大きいと思ったら・・・

「・・・むう」

「海未ちゃん、痛いんだけど・・・」

海未ちゃんが背後から渾身の力で俺を抱き締めてくる。表情が明らかに不機嫌だ。

「あの女・・・」

「いや、良く思っていないのは知ってるけどさ・・・」

「生意気なんですよ・・・B87だなんて」

「あ、そつち？」

ただ単純に嫉妬しているだけらしい。

俺は再び翔子先生に視線を向けた。

「俺が聞きたいのは留学の件です。小原理事長は二年前、スクールアイドルをやめた

後に留学したそうですが・・・前々からそういう話はあつたんですか？」

「あつたわよ。でもあの子、留学の話が来る度に断つててね・・・」

当時は懐かしむように語る翔子先生。

『自分はスクールアイドルだから』って、頑として首を縦に振らなかつたの。でもスクールアイドルをやめた後は、留学することを決めて・・・まさか理事長になつて戻ってくるなんて、あの頃は想像もしてなかつたわ」

苦笑する翔子先生。

「果南ちゃんやダイヤちゃんと、上手くいかなくなつちやつたのかしらね・・・留学する直前、三人の仲はギクシヤクしてたわ。戻つてきてからも、鞠莉ちゃんとダイヤちゃんは仲が良いって感じじゃないし」

「あの頃はあんなに仲良しだったのにねえ・・・」

寂しそうに呟く麻衣先生。なるほどねえ・・・

「ちなみになんですけど・・・東京のイベントがあつた頃、小原理事長つて怪我とかしてませんでした？」

「ああ、そういえばしてたわね。何か足を痛めちゃつたみたいで、テーピングしてたけど・・・え、何で知ってるの？」

「独自の情報網があるんで」

「何それ怖い」

「翔子先生が合コンで失敗しまくってることも把握済みです」

「嘘でしょ!?!どれだけ凄い情報網なの!?!」

「まあ、麻衣先生が酔っ払って暴露してたのを聞いただけなんですけど」

「ちよ、天くん!?!その話はダメ・・・」

「麻衣ちゃん? ちよつとお話ししましょうね?」

「嫌ああああああああああつ!?!」

麻衣先生の悲鳴が聞こえる中、俺は頭の中で情報を整理していた。

歌えなかった果南さん、足を怪我していた小原理事長、留学の話を断り続けていた：

「・・・何となく見えたな」

「天・・・?」

首を傾げている海未ちゃん。

今朝にこちゃんから聞いた情報も含め、俺の中で全てが繋がったような気がした。

もしこれが事実なら・・・

「・・・千歌さん以上に不器用だな、あの人」

もつと違う方法だつてあつただろうに・・・これでは誰も報われない。

「あ、そういえば・・・」

「痛い痛いっ！翔子ちゃんギブ！ギブだからっ！」

麻衣先生にサソリ固めを極めながら、翔子先生が何かを思い出す。

「二年前、あの子達が東京のイベントに出た後だったかな？また留学の話がきたから、鞠莉ちゃんに打診したら案の定断られたんだけど・・・その時の断り方が、いつもとちよつと違ったのよね」

「違った？」

「ええ。あの時も最初は、『自分はスクールアイドル』だからって言ってただけど・・・その後、『親友が心配だから』って」

「っ・・・」

「果南ちゃんかダイヤちゃんのことだと思っただけど、心配って何の話だろうって思つたのよね。何が心配なんだろうって」

今の翔子先生の言葉で、俺は全てを察してしまった。

つまりこれは・・・

「・・・すれ違い、か」

これは流石にいたたまれないな・・・

「全く・・・本当に誰も報われないな・・・」

深い溜め息を零す俺なのだった。

人を想つての行動が人を苦しめることもある。

日曜日・・・

「んー、美味しい！」

ダイビングショップのアルバイトを終えた俺は、松浦家で夕食をご馳走になつていた。

「流石は西華さん、やっぱり料理上手ですね」

「フフツ、嬉しいこと言つてくれるじゃないか」

笑っている女性・・・松浦西華さん。果南さんのお母さんである。

「最近夕飯を食べに来てくれなかつたもんだから、少し寂しかったんだぞ？」

「すいません。同居人を一人にするのも可哀想なので」

ちなみにその同居人は、今日も麻衣先生や翔子先生と一緒に食事に行っている。まあ教育実習も来週で終わるし、それまで『ガンガン呑みに行こう』みたいなノリなんだろう。

俺も誘われたが、久しぶりに西華さんの手料理が食べたかつたので遠慮しておいた。

「全く、お母さんつたら張り切っちゃって・・・」

溜め息をつく果南さん。

「天が来る時だけ、いつも夕飯が豪勢なんだよね・・・」

「そりやそうさ」

笑顔で答える西華さん。

「何と言つても、アタシの息子になるかもしれない男だからね」

「ぶふううううっ!?!」

飲んでいたお茶を盛大に吹き出す果南さん。

「ゲホツ・・・ゴホツ・・・い、いきなり何言つてんの!?!」

「いや、だつて天は果南の旦那候補だろう?もしアンタ達が結婚したら、天はアタシの息子になるじゃないか」

「け、結婚っ!?!」

果南さんの顔が真っ赤になる。

「な、何でそんな話になつてるの!?!」

「アンタがハグする男なんて、天しかいないじゃないか。お父さんだつて、『天だつたら果南を嫁にやつてもいい』つて言つてたし」

「あ、あの人は・・・また勝手なことを・・・!」

あつ、果南さんが怒つた・・・

果南さんのお父さん、絶対タダでは済まないな……

「天、果南を嫁にもらう気は無いかい？我が娘ながら、果南はとても魅力のある女だと私は思うんだけど？」

「ちよ、お母さん!？」

「確かに、果南さんとの結婚は魅力的ですね」

「そ、天……恥ずかしいよ……」

「果南さんと結婚したら西華さんが義理のお母さんになるわけですし、いつでもこの美味しい手料理を食べられますもんね」

「そつち!?!私の魅力じゃないじゃん!？」

「誰も果南さんが魅力的なんて言つてませんよ。果南さんとの結婚が魅力的だって言つたじゃないですか」

「つー!天のバカっ!」

ぷいっつとそつぽを向いてしまう果南さん。

おお、いつもはお姉さんな果南さんが子供っぽい……何か新鮮だなあ……

「ちよつと天、アンタの嫁が不機嫌になつちやつたじゃないか」

「サラツと嫁発言するの止めてくれませんか？」

「こうやつて外堀つて埋められていくんだね……」

とまあ、それはさておき・・・

「まあ真面目に答えると、果南さんはとても魅力的な女性だと俺も思いますよ。美人でスタイル抜群なのは勿論のこと、性格も良いですし。元気で明るくて、それでいて優しくして・・・果南さんと結婚できる男は、間違いなく幸せ者ですね」

「つ・・・」

そつぽを向いたままの果南さんだが、耳が真つ赤になっていた。

そんな様子を、ニヤニヤしながら眺めている西華さん。

「ほほう、つまり天は果南に不満は無いと?」

「あるわけではないでしょう。でも、果南さんには選ぶ権利がありますから。つていうか選びたい放題でしょうから、俺なんかよりもっと良い人がいると思いますけど」

「つて天は言ってるけど、果南的にはどうなんだい?」

「・・・ノーコメントで」

「えー?天はこんなにぶつちやけたのにー?」

「う、うるさいなあ!いいでしょ別に!」

顔を真つ赤にして叫ぶ果南さん。

「ただ、その・・・天は自分を卑下し過ぎじゃないかな。天は十分良い男だと・・・私は思うよ?」

「何この人可愛いんですけど」

「ちよ、急にハグしてこないでよ!」

思わず果南さんにハグしてしまう俺。

恥ずかしそうにモジモジしながらそんなことを言われたら、誰だつてこうしたくなるだろう。

「フフツ・・・やっぱりお似合いだよ、アンタ達」

笑っている西華さん。

「さてと・・・邪魔者は一時退散して、ちよつと食後のデザートを作ってくるよ。それまで二人でイチヤイチャしてな」

「よ、余計な気を回さなくて良いから!」

果南さんの抗議もどこ吹く風で、西華さんはキツチンへ行つてしまった。

後に残されたのは顔を真っ赤にしている果南さんと、そんな果南さんにハグしている俺だけだ。

「・・・さて、ご飯食べよ」

「嘘でしょ!?! 今までのやり取りは何だったの!?!」

「え、イチヤイチャしたかつたんですか?」

「そ、そんなわけないじゃんっ! もう知らないっ!」

再びプイツと顔を背けてしまう果南さん。

感情の起伏が激しいなあ・・・

「ところで果南さん、明日から復学するらしいですね」

「えっ、何で知ってるの!?!」

「麻衣先生と翔子先生に教えてもらいましたけど」

「ちよつと待って!?!いつの間に名前で呼ぶほど親しくなったの!?!」

「・・・色々あつたんですよ。色々」

この間の呑み会は二人とも酔い潰れて、結局ウチに泊まっていったもんな・・・生徒の家で酔い潰れて泊まっていく教師・・・色々ヤバくね?

「それより復学の件ですけど、前もって教えといて下さいよ」

「アハハ、ゴメンゴメン。ビックリさせようと思ってさあ」

笑っている果南さん。

「天や皆の驚いた顔が見たかったのに、まさか既にネタバレされてたとはねえ」

「ダイヤさんには言つてあるんですか?」

「うん。つていうか、ダイヤにしか言つてないんだけどね」

「小原理事長にも言つてないんですか?」

「・・・理事長なんだし、言わなくても分かるでしょ」

声のトーンが落ちる果南さん。

「この間、ちよつと顔を合わせる機会があつてね。復学について話をしたんだけど、もう知つてたよ。流星は理事長だよね」

すいません、実はその現場にいました・・・とは言わなかつた。

その現場にいて会話を聞いた上で、あえてこの質問をしたからな。

「・・・言わなくても分かる、ですか」

「天・・・？」

首を傾げる果南さんに、俺は一言だけ言っておくことにした。

「前にダイヤさんにも言ったんですけど・・・言葉にしなくても分かるだなんて、そんなのはただの甘えですよ」

「っ・・・」

「・・・まあ部外者である俺が踏み込むのも野暮ですから、これ以上は何も言いませんけどね」

それだけ言い、黙々とご飯を食べ進める俺。

果南さんはしばらく黙っていたが、やがてポツリと呟いた。

「私は・・・間違つてたのかな・・・」

「・・・どうでしょうね」

俺には果南さんを批判する権利は無いし、そもそもこの件に関しては何が正解だったのか明言出来ない。

何故なら……

「果南さんの行動は全て……小原理事長を想つてのことだったんでしよう？ それに対して、俺は『間違いだった』とは言いたくありません」

「っ!？」

息を呑む果南さん。どうやら、俺が知っているとは思わなかったらしい。

「ただ小原理事長も、半端な覚悟で浦の星に戻ってきたわけではないと思います。そんな彼女の気持ちを受け入れるのか、それとも突き放すのか……それはもう一度考えてあげて下さい。小原理事長の為にも……果南さんの為にも」

俺の言葉に、何も返すことが出来ない果南さんなのだった。

なりふり構ってられない時もある。

翌日・・・

「ええっ!? 果南ちゃん、今日から復学するの!？」

「みたいですよ」

朝のホームルーム前、俺は二年生の教室のベランダで千歌さん・曜さん・梨子さんと話をしていた。

果南さんの幼馴染である千歌さんと曜さんも、復学については知らされていなかったようだ。

「全然知らなかった・・・何で教えてくれなかったのかな・・・」

「驚いた顔が見たかったんですって」

「そんな理由!？」

曜さんのツッコミ。

まあある意味、果南さんらしいかもしれないな・・・

「・・・また喧嘩にならないといいけど」

「天くん?」

俺の眩きに首を傾げる梨子さん。

その時、上から何かが降ってきた。

「「え？」」

制服だった。浦の星のものではなく、恐らく衣装用の制服だろう。俺達の目の前を、ヒラリヒラリと落ちていく。

俺・千歌さん・梨子さんの声がハモる中、曜さんの目がキラツと光り・・・

「制服うとうとううとううっ！」

勢いよく飛びついた。ベランダから身を放り投げる形で。

「ダメええええええええええっ!?!」

咄嗟に曜さんの足を掴む千歌さんと梨子さん。そのおかげで、曜さんはベランダから落ちずに済んだ。

「何やってんだアンタ!?!バカなの!?!死にたいの!?!」

「・・・あっ」

我に返った曜さん。

危ねえ、マジで心臓止まるかと思つた・・・

「ゴ、ゴメン・・・制服を見たから、つい反射的に・・・」

「どんな病気!?!頭冷やせバカ曜!」

最早タメ口で罵倒していたが、気にしている余裕も無かった。と、千歌さんと梨子さんがプルプル痙攣している。

「ちよ、ヤバい・・・曜ちゃん重い・・・!」

「千歌ちゃん!?!その言葉は結構グサツとくるんだけど!?!」

「曜さん、体重何キロあるんですか?」

「えーつとね・・・って何言わせようとしているの!?!女の子に体重を聞かないのっ!」

「とりあえず、胸についてる二つの重りを取ったら軽くなるんじゃないですか?」

「ああ、なるほど・・・って取れないよ!?!しかも何気にセクハラ発言だよねえ!?!」

「も、もう無理・・・天くん、手伝って・・・!」

歯を食い縛っている梨子さん。

俺としても手伝いたいのは山々なのだが・・・

「いや、俺はあまり曜さんの方を見ない方が良いかなくて」

「え、何で?」

「・・・色々と丸見えなんで」

「っ!?!」

そう、千歌さんと梨子さんは曜さんのふくらはぎの辺りを持つている。

逆さ吊り状態になっている曜さんのスカートは必然的に捲りあがり、パンツが丸見え

の状態になつてゐるのだ。

しかも上も捲れているので、ブラに包まれた胸まで見えている状況である。

「うわあああああつ!!今の私完全に痴女じゃん!!朝の学校で色々丸出し状態とか、ただの変態じゃん!」

「女子校で良かったですね。共学だったら男子生徒にも見られてましたよ」

「ここにも男子生徒が一名いるんですけど!!この状況をどう思われます!」

「御馳走様です」

「嫌あああああああつ!!」

悲鳴を上げる曜さん。ジタバタ暴れ始める。

「ちよ、曜ちゃん!?本当にヤバいから!腕が結構限界だから!」

「もうなりふり構つてられないわ!天くん、曜ちゃんのあられもない姿を見ても良いから手伝つて!」

「ちよ、梨子ちゃん!?」

「我慢して曜ちゃん!今は羞恥心より、曜ちゃんの安全の方が大事よ!」

「流星は梨子ちゃん!何度も天くんにパンツ見られただけのことはあるね!」

「千歌ちゃん!?後でしばらくわよ!」

「コラコラ、余計な話をしてる場合じゃないでしょう。早く曜さんを助けないと」

「誰のせいだと思ってるのっ!」

何故か三人から怒られた。解せぬ。

「まあそういうわけなんで、我慢して下さい曜さん」

「うう、背に腹は代えられないのかっ・・・!」

諦めた様子の曜さん。

俺は曜さんを引き上げる為にペランダから身を乗り出し、下着丸見え状態になっている曜さんの両太ももを掴んだ。

「ひゃんっ!」

「その露出狂、変な声出さない」

「誰が露出狂!? っていうか、どこ触ってるの!」

「千歌さんと梨子さんがふくらはぎ持つてるんですから、太ももを持つしかないでしょう・・・はい、引き上げますよ」

曜さんの身体を少しずつ引き上げていく。

っていうか、太もも柔らかいな・・・膝枕とかしてもらったら気持ち良さそう・・・

「あっ・・・んっ・・・」

「・・・朝の学校でどんな声出してるんですか」

「し、仕方ないでしょ!?! 天くんが変なところ触るから・・・あんっ」

「ちよ、ホント止めて。何か色々ヤバそうだから」

何とか半分ほど引き上げることに成功したので、今度は曜さんの腰に手を回して思いつき引き上げる。

ようやく完全に引き上げることに成功したが、曜さんは耳まで真っ赤になってペラペラの端つこに座り込んでしまった。

「うう、天くんに至近距離で下着を見られた・・・しかも身体をじっくり触られて、辱められた・・・私、もうお嫁にいけない・・・」

「じゃあ一生独身ですね」

「そこは『責任取ります』っていうところじゃないの!？」

「え、俺と結婚したいんですか？」

「っ！天くんのバカっ！」

ぷいっと顔を背ける曜さん。

あれ、昨日も似たようなことがあったような・・・

「し、死ぬかと思った・・・」

「まだ腕がプルプルしてるわ・・・」

その一方で、ゼエゼエ息を切らしている千歌さんと梨子さん。お疲れ様です。

「ところで曜さん、その制服見せてもらっていいですか？」

「あつ、そういえば……」

握り締めていた制服に目をやる曜さん。

やはり衣装用の制服……ということは、恐らくスクールアイドル用……

それが上から落ちてきたということは……

「この上つて、確か三年生の教室ですよね？」

「そうだよ。でも、何で制服が？」

首を傾げている千歌さん。俺は何となく想像が出来てしまった。

「……絶対揉めてるよなあ」

思わず溜め息をついてしまう。

恐らく小原理事長が復学した果南さんに、再びスクールアイドルの件を持ち出したんだろう。その際に制服を果南さんに見せ、怒った果南さんが制服をベランダから投げ捨てた……

うん、こんなところだろうな。

「今頃教室では、喧嘩になってるんだろうなあ……」

「天くん、さつきから何の話をしてるの？」

「まるでダメな女達、略してマダオ達をどうしようかなって」

「ホントに何の話をしてるの!？」

梨子さんのツツコミ。

まあ、とりあえず様子を見に行ってみるか・・・

「ちよつと三年生の教室に行つてきます。多分騒ぎになつてると思うんで」

「よく分かんないけど・・・私も行くよ！」

「私も行くわ。何が起きてるか知りたいし」

「制服を捨てるなんて許せない！抗議しに行くであります！」

「千歌さん、梨子さん、露出狂の曜さん・・・」

「その呼び方やめてくれる!?!」

「鮮やかな水色の下着を身につけている曜さん・・・」

「長いつつていうか今すぐ忘れてっ！」

「意外と胸が大きい曜さん・・・」

「うわああああああああああっ!?!」

顔を真っ赤にして悶絶している曜さん。

さて、この人は放つておいて早く行くこうつと。

「鬼だ・・・」

「悪魔ね・・・」

何故かドン引きしている千歌さんと梨子さんなのだった。

優しさだけでは解決できないこともある。

「離してっ！離せて言ってるのっ！」

「離さないっ！」

階段で上の階に上がった途端、果南さんと小原理事長の言い争う声が聞こえた。案の定揉めているらしく、教室の前に人だかりができています。

と、教室の前で花丸・ルビィ・善子が中の様子を窺っているのが見えた。

「ちよつと失礼」

「ぐえっ!？」

「あつ、天くん！」

善子の背中に飛び乗り、中の様子を窺う。そこでは・・・

「強情も大概にしておきなさいっ！ たった一度の失敗をいつまで引きずってるのっ！」

「うるさいっ！ 大体、今さらスクールアイドルなんてやるわけないでしょ!?! 私達もう三年生なんだよ!？」

しがみつく小原理事長を、必死に引き剥がそうとする果南さんの姿があった。

うん、思った以上に揉めてたな・・・

「二人ともお止めなさいっ！皆見てますわよ!?」

「ダイヤも何とか言ってよっ！果南を説得してっ！」

「止めなさいっ！いくら粘つても、果南さんが再びスクールアイドルを始めることはありませんわっ！」

何とか止めようとしているダイヤさん。こういう時、間に挟まれる人って大変なんだよなあ・・・

亜里姉、いつもゴメンね・・・

「どうして!?!あの時の失敗はそんなに引きずること!?!千歌っち達だって再スタートを切ろうとしてるのにつっ！」

「千歌達とは違うのっ！」

なおも言い合う二人。どうやら、簡単に収まりそうもないらしい。

「どうしよっかなあ・・・」

「どうしましようねえ・・・」

「・・・何してるんですか貴女」

いつの間にか、俺の隣に翔子先生が立っていた。

困ったような表情で、果南さんと小原理事長の喧嘩を見ている。

「騒ぎに気付いて駆けつけたんだけど、どうしたものかと思つてねえ・・・」

「いや、止めに行つて下さいよ。仮にも担任でしょう、仮にも」

「『仮にも』じゃなくて、れっきとした担任なんだけど・・・お姉さん、怖くて足がすくんじゃうわ」

「・・・ハッ」

「鼻で笑われた!?!」

「『お姉さん』が聞いて呆れるわ。人の家で酔い潰れた挙句、布団の上で思いつきり吐いて・・・」

「ごめんなさい布団は弁償させていただきますのでどうかお許しを」

即座に土下座を敢行する翔子先生。やれやれ・・・

「ところで天くん・・・そろそろ津島さんの背中から降りてあげたら?津島さん、涙目でプルプルしながら耐えてるわよ?」

「大丈夫です。堕天使ヨハネの辞書に不可能の文字は無いんで」

「どこのナポレオンよ!?!ホントにそろそろ限界なんだけど!?!」

「そう言いつつも、俺を落とさないように必死で耐えてくれるところホント好き」

「だつたら早く降りてよ!?!」

「えー、結構乗り心地良いのに」

「降りてくれてら何でも言うこと聞いてあげるから！」

「すぐ降ります」

「素直っ!?!」

迅速に善子の背中から降りる。これで良し・・・

「クッククック・・・これで何でも言うこと聞いてくれるんだよねえ・・・?」

「うっ・・・エ、エツチなのはダメだからねっ!」

「・・・ハッ」

「腹立つっ!コイツ腹立つっ!」

地団太を踏む善子。小娘が何を言っているのやら・・・

「さて、善子イジりはさておき・・・そろそろ止めないとマズいですね」

果南さんと小原理事長の喧嘩はヒートアップしており、このままだと殴り合いになり

かねない。

なかなか喧嘩を止めない二人に、仲裁しようとしているダイヤさんも苛立っている様子・・・このままだと、ダイヤさんまで参戦してしまいそうだ。

「あー、もうっ!私がガツンと言って止めてくるっ!」

「ステイ」

「ぐえっ!?!」

イライラした様子で止めに行こうとする千歌さんを、首根っこを掴んで引き止める。

「ゲホッ・・・ゴホッ・・・な、何するの天くん!？」

「千歌さんが鼓膜が破れそうなほどの大声で、『いい加減にしろおおおおおとおおおつ!』って叫ぶ未来が見えたとんで止めました」

「何で分かったの!？」

「見聞色の覇気を鍛えすぎたせいで、少し先の未来が見えてしまうんですよ」

「どこのカタ●リさん!？」

「まあ冗談はさておき、そんな力技じゃ二人の喧嘩は止められませんよ。俺が行くんで、千歌さん達はここにいて下さい」

「大丈夫?止められるの?」

「まあ見てて下さいよ」

千歌さん達にそう告げて教室の中へと入っていくと、周りの皆が俺に視線を向けた。

「ダイヤさんも俺が近付いていることに気付く中、果南さんと小原理事長は気付かずに喧嘩を続けている。」

「私はスクールアイドルなんてやらないッ!何度言えば分かるのッ!」

「何度だって言ってるわよッ!一緒にスクールアイドルをやりなさいッ!」

俺は激しく口論する二人の顔の前に、ゆっくりと手を伸ばし・・・



明らかに怒っている果南さんと小原理事長。やれやれ……

「別に喧嘩するなどはいいませんが、外でやってもらえますか？教室でやられると、こういうことになるんで」

「……あつ」

ここで二人が、ようやく周りの人だけに気付く。

「しかも果南さん、衣装用の制服を外に投げ捨てましたよね？曜さんがお怒りですよ」「あれ捨てたの果南ちゃんなの!?信じられない!」

「ゴ、ゴメン……つい……」

「おかげで曜さんは死にそうになるわ、露出に目覚めるわで大変だったんですよ?」

「何があったの!?!」

「露出には目覚めてないからっ!誤解を招く発言は止めてくれる!?!」

果南さんと曜さんのツツコミはスルーして、俺は小原理事長へと視線を向けた。

「悔いの無いようにとは言いましたけど、やり方が強引過ぎます。ご自分が理事長という立場であることを、もう少し弁えて下さい」

「……Sorry. 熱くなりすぎたわ」

「果南さんも。いつもの貴女だったら、もう少し冷静に対応出来たでしょう。復学初日から何問題起こしてくれちゃってるんですか」

「・・・ゴメン。ちよつと冷静じゃなかった」

うなだれる小原理事長と果南さん。ようやく頭が冷えたか・・・

「ほらリバーズ先生、後は貴女が対処して下さい」

「その呼び方止めてくれる!?!」

「じゃあゲ r・・・」

「すみません本当に勘弁して下さい」

即座に土下座する姿に、最早教師としての威厳は欠片も無かった。全く・・・

「・・・後処理は頼みましたよ。クラスの雰囲気気まぜくならないよう、翔子先生が上手くやって下さいね」

「・・・任せて。ありがとう、天くん」

教室を出て翔子先生とすれ違う際、短く会話を交わす。後のことは、翔子先生に任せておけば大丈夫だろう。

「さて、我々は教室に戻りましょうか」

「あ、うん・・・」

「天さんっ!」

周りの皆がそれぞれ戻っていく中、ダイヤさんが俺を追いかけてきた。

「あ・・・ありがとうございました」

「大したことはしてませんよ」

首を横に振る俺。

「ただあの二人の問題は、そろそろ看過出来なくなってきましたね。首を突っ込むつもりはありませんでしたけど……止むをえません」

「天さん……?」

首を傾げるダイヤさん。俺はダイヤさんに視線を向けた。

「ダイヤさん、今日の放課後なんですけど……果南さんと小原理事長を連れて、スクールアイドル部の部屋に来て下さい。少しお話ししましょう」

「っ……それは……」

躊躇うダイヤさん。

そうじゃないかとは思っていたが、やはりダイヤさんは……

「……果南さんの行動の理由を知ってるんですね」

「っ!?!」

息を呑むダイヤさん。凶星か……

「ど、どうして……!?!」

「続きは放課後に話しましょう」

くるりと踵を返す俺。

「ダイヤさん、優しいところは貴女の長所だと思いますけど……あの二人を仲直りさせたいなら、優しいだけじゃダメですよ」

「っ……」

俯くダイヤさん。

俺はそれ以上何も言わず、教室へと戻るのだった。

素直な気持ちはなかなか口に出せない。

「正直に答えて！何か事情があるんでしょ!？」

「だからそんなの無いって！何度も言ってるでしょ!？」

「・・・どうしてこうなった」

目の前で勃発している千歌さんと果南さんの喧嘩を眺めながら、溜め息をつく俺。話し合いをする前に、千歌さん達にも事情を説明したのが裏目に出てしまったようだ。

事情を聞いた千歌さんと曜さんは揃って、『果南ちゃんがたつた一度の失敗で諦めるわけが無い』と納得のいかない様子を見せた。そして放課後、スクールアイドル部の部屋へとやってきた果南さんを千歌さんが問い詰めたのだ。

その結果がこれである。

「曜さん、貴女の幼馴染は何で二人とも血の気が多いんですか」

「いや、私に言われても・・・」

「もうっ！何で果南ちゃんはそのなりに頑固なのっ!」

「千歌に言われたくないよっ！もう私のことは放っておいてっ!」

部室を飛び出していく果南さん。あーあ・・・

「果南ちゃん!? 待って……」

「よっ」

「ぐえっ!?!」

果南さんを追いかけてしようとした千歌さんの前に足を出す。

俺の足に引つかかった千歌さんは盛大に転び、勢いよく床に倒れ込んだ。

「ちよ、天くん!? 何するの!?!」

「アンタが何してくれてるんですか。冷静に話し合おうと思ったのに、これじゃ全部パーでしょうが」

「だってだって! 果南ちゃんが意地っ張りなんだもん!」

「アンタも大概だわ」

俺が呆れていると、小原理事長が溜め息をついた。

「……本当に果南はもう、スクールアイドルをやらないつもりなのね」

「だから言ったでしょう」

厳しい表情のダイヤさん。

「いくら粘ったところで、果南さんが再びスクールアイドルを始めることは無いと」  
そこまで言うのと、ダイヤさんは俯いてしまった。

「……もう諦めましょう、鞠莉さん。失った時間は戻ってこないのですから」

「ダイヤ……」

今にも泣き出しそうな小原理事長。この表情……

『うう、天あ……』

『泣かないでよ鞠莉ちゃん……』

『だってえ……』

『もう……じゃあどうしても助けてほしくなったら、俺を呼んでよ。俺が鞠莉ちゃんを助けに行くから』

『ぐすつ……ホント?』

『うん、約束するから。ね?』

『つ……天あつ!』

『うわっ!?もう、鞠莉ちゃんの方がお姉ちゃんでしょ?』

『絵里と亜里沙だって、天に抱きついてるじゃない!』

『ああ、まああの二人はねえ……』

『マリーも天とギューしたいのっ!ダメ?』

『……しようがないなあ』

『えへへ♪やったあ♪』

「・・・何で思い出すのかなあ」

「天くん？」

首を傾げるルビィ。俺は頭を軽く振ると、ダイヤさんに視線を向けた。

「・・・ダイヤさん、いつまで真実を隠し続けるつもりですか？」

「天さん・・・」

「果南さんは歌えなかったんじゃない・・・あえて歌わなかったんでしょう？」

「っ!？」

俺のその言葉に、ダイヤさんが驚愕の表情を浮かべる。

「な、何故それを!？」

「・・・正解ですか」

「やっばりな・・・」

と、小原理事長が慌てて間に入ってくる。

「ちよ、ちよっと待って!? 一体どういうこと!? 歌えなかったんじゃないじゃなくて、あえて歌わなかった!？」

「ええ、そうですよ」

溜め息をつく俺。

「そもそもおかしいと思っただんですよ。果南さんは、ハードルが高ければ高いほど燃えるタイプの人間です。そんな人が、周りのレベルの高さを知って萎縮してしまうはずがありません。ましてや一人ではなく、ダイヤさんと小原理事長が一緒だったんですよ？ ステージ上で歌えなくなるわけじゃないじゃないですか」

「じゃ、じゃあっ！ 何で歌わなかったのっ!?!」

「言っただでしょう？ 『あえて』と」

千歌さんの問いに答えるべく、俺は小原理事長へと視線を移した。

「小原理事長……二年前の東京でのイベントの際、貴女は足を痛めていたそうですね」  
「っ!?! 何で知ってるの!?!」

「μ、sの矢澤にこちゃん、知ってますよね？ 彼女はスクールアイドルが大好きで、μ、sが解散した後もスクールアイドルを追いかけ続けてたんですよ。二年前の東京でのイベントも、しつかりチェックしてたようですよ」  
「にこちゃんとの電話を思い出す俺。」

『にこちゃん、ちよつと聞きたいことがあるんだけどさ……今回Aqoursが参加したイベント、二年前にも行つてたりする?』

『ああ、東京スクールアイドルワールドでしょ?毎年行つてるわよ』

『その時のことつて覚えてる?例えば……Aqoursっていう名前のスクールアイドルがいた、とか』

『えーつと、ちよつと待つて……あつた、二年前のイベントのパンフレット。Aqoursは……あつ、この子達!』

『覚えてるの?』

『覚えてるわよ!ステージに立ったのに歌わなかったんだもの!三人とも凄く可愛かつたのに……勿体無いわよねえ』

『その時、何か気になったことか無かつた?』

『……そういえばステージから袖にはける時、金髪の子がちよつと足を引きずつてたわね。あれは多分、足を痛めてたんじやないかしら』

『足を……?』

『あと、センターの青髪の子だけ……ちよつと表情が気になつたわね』

『表情?』

『上手く言えないんだけど、何かこう……覚悟を決めた、みたいなの?』

『・・・緊張した様子だった、とかは?』

『見た感じ、全然そんなこと無さそうだったわ。終始険しい表情ではあったけど、緊張してるっていう感じでは無かったわね』

『・・・覚悟を決めた、か』

「二年前、貴女はイベントの前に足を痛めていた。貴女の性格を考えると、無理してステージに上がろうとしたんでしょう? だから果南さんは、貴女に無理をさせない為に、あえて歌わなかったんですよ」

「果南が・・・私の為に・・・?」

信じられないといった表情の小原理事長。

「でも、だったら・・・何でスクールアイドルをやめようだなんて・・・」

「それも貴女の為ですよ」

説明する俺。

「スクールアイドルをやっていた頃から、貴女には留学の話があったんでしよう? でも貴女は、それを断り続けた。『自分はスクールアイドルだから』と言って」

「っ!?! どうしてそれを!?!」

「翔子先生から聞きました。それを知った果南さんは、スクールアイドル活動より貴女の将来のことを考えたんでしようね。だからこそスクールアイドル活動を終わらせ、貴女を自由にしようとしたんだと思います」

「そんな……」

息を呑む小原理事長。俺は再びダイヤさんへと視線を移した。

「とまあ、これが俺の推測なんですけど……違いますか？ダイヤさん？」

「……天さんには敵いませんわね」

大きく溜め息をつくダイヤさん。

「仰る通りですわ。果南さんが歌わなかった理由も、スクールアイドルをやめた理由も……天さんの推測通りです」

「っ……!」

小原理事長が部室を飛び出そうとするが、その前にダイヤさんが立ち塞がった。

「どこへ行くつもりですか？」

「ぶん殴るッ!そんなこと、一言も相談せずに……!」

「お止めなさい。果南さんはずっと貴女のことを見てきたのですよ」

小原理事長を諭すダイヤさん。

「果南さんは、誰よりも貴女のことを大切に想っているのです」

「っ……」

小原理事長の目から、涙が溢れ出す。

「果南っ……」

泣き崩れる小原理事長。

皆が沈痛な面持ちで小原理事長を見つめる中……俺は小原理事長の前に立った。

「……立って下さい。小原理事長」

「天……?」

「果南さんをぶん殴るんでしょう? だったら泣いてる場合じゃありませんよ」

「ちよ、天さん!」

慌てるダイヤさん。

「何を仰っているのですか!」

「果南さんが小原理事長を大切に想っていることは、よく分かりました。ですが、果南さんのとった行動が正しかったかどうかは別問題です」

淡々と答える俺。

「部外者である俺には、正しかったかどうかを決める権利はありません。ですが当事者である小原理事長は、果南さんの行動に対して怒りを覚えています。つまり小原理事長にとって、果南さんの行動は正しくなかったということ……ステージをパーにされ

た上にスクールアイドルをやめさせられたわけですから、殴る権利くらいあると思いませんけど」

「それはそうかもしれませんが・・・!」

「つていうか、もうまどろっこしいです。殴り合いの喧嘩で決着つけましょう」

「それが本音ですか!?!」

「分かりやすくして良いじゃないですか。立っていた者こそ勝者なんですから」

「ボクシングじゃありませんわよ!?!」

「天つて、割と過激な思考してるわよね・・・」

「ちよつと恐ろしいすら・・・」

善子と花丸がヒソヒソ話している。失敬な、これでも平和主義者なのに。

「まあ冗談はさておき・・・本音をぶつけ合わないとは解決出来そうにないですから、い加減腹割つて話し合いましうよ」

俺はしやがみ、小原理事長と目線を合わせた。

「貴女も果南さんも、自分の主張をぶつけ合っているようには見えませんが・・・全ての本音を曝け出してないじゃないですか」

「全ての本音・・・」

「果南さんは小原理事長が大切だということや、スクールアイドルをやめた本当の理

由を語ろうとしないし……貴女だって、留学を断った本当の理由を隠したままでしよう?」

「っ!?!」

息を呑む小原理事長。

「ど、どうして……!?!」

「さあ、どうしてでしようね」

俺は小原理事長の頭にポンツと手を置いた。

「いい加減、お互い素直になりましょうよ。そうじゃなきゃ、貴女達はずっとすれ違つたままになってしまう……それで良いんですか?」

「……そんなの嫌」

俯く小原理事長。

「私は……果南と仲直りがしたい……!」

「鞠莉さん……」

涙を浮かべているダイヤさん。俺は小原理事長の頭を撫でた。

「全く……最初からそう言えば良かったのに」

「天……」

「……まあ、約束ですから。ちゃんと果たしますよ」

立ち上がる俺。

「果南さんを連れてきます。待ってて下さい」

それだけ言い残し、俺は部室を出た。

さて、果南さんを探すとしますか……

「……本当にお人好しですね」

聞き慣れた声がする。

「貴方は昔から、本当に変わりませんね……天」

「盗み聞きなんて趣味が悪いよ……海未ちゃん」

険しい表情の海未ちゃんが、部室の外に立っていた。恐らく、先程までの会話は全て聞かれていたんだろう。

と、海未ちゃんが溜め息をついた。

「……松浦さんでしたら、屋上の方に走っていききましたよ」

「あれ？止めないの？」

「……私が止めないことなんて、分かっていたでしょう」

呆れている海未ちゃん。

「あんな話を聞いた後で天を止めるほど、私も薄情ではないつもりですよ」

「……五年前の穂乃果ちゃんのことりちゃんを重ねた？」

「・・・本当に人が悪いですね」

「ゴメンゴメン。俺もそうだったから」

苦笑しながら謝る俺。

「あの時は穂乃果ちゃんも素直な気持ちをぶつけたから、ことりちゃんも音ノ木坂に残つて、*us*を続ける道を選んでくれたけど・・・もし穂乃果ちゃんが自分の気持ちを押し殺したままだったら、果南さんと小原理事長みたいになつてたかもしれないね」

「ですね。間に挟まれたダイヤの気持ち、私にはよく分かります」

「当時の海未ちゃんは、ダイヤさんと似たような立ち位置だったもんねえ・・・」  
当時のことをしみじみと振り返る俺達。

「それで？天は三年生三人を、*Aquors*に入れようとしているのですか？」

「まあね。あの三人が入ってくれたら、きっと*Aquors*は今よりもっと良いグループになれる・・・俺の勘がそう言ってる」

「希ですか貴方は」

「それに・・・」

海未ちゃんのツツコミをスルーし、俺は部室の方へと視線を向けた。

「あの三人が入ってくれたら・・・もう俺は必要無いでしょ」

「つ・・・天、貴方まさか・・・」

「はいそれ以上言わない」

「むぐっ!?!」

俺は海未ちゃんの口を塞いだ。

「・・・果南さんのところに行ってくる。居場所を教えてくださいがとね」  
俺はそう言うのと海未ちゃんから離れ、屋上へと向かうのだった。

過去は変えられなくても未来は変えられる。

屋上へ上ると、果南さんが仰向けに寝転んで空を見ていた。

あれ、前に俺もここであんなことやつてた気がする・・・

「・・・落ち着きましたか？」

「・・・うん」

空を見上げたまま返事をする果南さん。

「・・・ゴメン。今日は天に迷惑かけてばかりだね」

「いえ、千歌さんについては俺のせいでもあるので・・・すみません」

「良いの。元はと言えば私が悪いんだから」

溜め息をつく果南さん。

「・・・天はさ、知ってるんでしょう？私が何で歌わなかったのかも、何でスクールアイドルをやめたのかも」

「あくまでも推測でしたけどね。さつきダイヤさんからお墨付きをいただきました」

「アハハ、そっか」

小さく笑う果南さん。

「昨日の夕飯の時、そうじゃないかとは思ったけど……やっぱりか。ホント、天には敵わないね」

「……小原理事長の足の怪我は、そんなに酷かったんですか？」

「うん、本番直前も凄く痛そうにしてさ……本人は『大丈夫』って言ってたけど、あのままパフォーマンスしてたら事故になってたかもしれない」

果南さんの表情が曇る。

「ダンスの振り付けとかフォーメーションは、私が担当してたんだ。それで東京でのイベント用に、結構難易度の高いやつを考えて……それを練習し続けた結果、鞠莉は足を痛めちゃったの」

「……そうだったんですね」

恐らく果南さんは、小原理事長が怪我をしてしまったのは自分のせいだと思ったんだろう。

だからこそ小原理事長の身を案じて、『歌わない』という決断をしたんだろうな……  
「鞠莉は元々、スクールアイドルには乗り気じゃなくてね……そんな鞠莉を強引に引き込んだ挙句、怪我までさせちゃって……自分が凄く嫌になった」

果南さんの声のトーンが落ちる。

「そんな時、鞠莉と翔子先生が話してるのを聞いてちゃったの。翔子先生は鞠莉に留学

の話をしてたんだけど、鞠莉は断っててさ……『自分はスクールアイドルだから』って笑っちゃうよね。最初は全然乗り気じゃなかったくせに」

言葉とは裏腹に、果南さんの顔に笑みは浮かんでいなかった。

「その時に思ったの。『私は鞠莉の足を引っ張ってるんだ』って。強引にスクールアイドルをやらせた上に怪我させて、挙句の果てに留学の話まで断らせて……私は鞠莉から、未来の色々な可能性を奪ってたんだよ」

「果南さん……」

「だからスクールアイドルをやめて、Aquoursを解散させた。ダイヤにも事情を説明して、協力してもらって……ダイヤにまで辛い思いさせちゃって、最低だよね私」自嘲気味に笑う果南さん。

「その後鞠莉は留学することになって、ホツとしてたのに……帰ってきちゃってさ。何で帰って来ただかつ……」

果南さんの目に涙が浮かぶ。

「またスクールアイドルをやるうなんて……そんなこと出来るわけないじゃん……だって、そんなことしたらっ……」

「……二年前の繰り返しになる、ですか？」

「っ……」

腕で目を覆う果南さん。

流れた涙が、屋上の石床に落ちて染みをつくる。

「もう嫌なの．．．私のせいで鞠莉が傷つくところを見たくない．．．足を引つ張りたくない．．．！」

果南さんの悲痛な叫びが屋上に響く。

果南さんの中にも、もう一度スクールアイドルをやりたい気持ちはあるんだろう。でも小原理事長のことを大切に想うあまり、その気持ちに蓋をして小原理事長を遠ざけようとしている。

ホント、不器用な人だよな．．．

「．．．昔々、あるところに一人の女の子がいました」

ポツリポツリと語り始める俺。

「ある時女の子の通う学校が、生徒不足により統廃合の危機に陥ってしまいました。女の子は幼馴染の二人、そして知り合いの男の子一人と学校を救うべく動き出しました」

「天．．．？」

不思議そうに話を聞いている果南さん。

「女の子は決断したのです。学校の知名度を上げ、入学希望者を増やす為には．．．ス

クールアイドルしか無いと」

なおも語り続ける俺。

「彼女達はひたむきに活動を続け、徐々に仲間が増え……遂に揃ったのです。ギリシア神話の文芸の女神『ミューズ』の名にふさわしい、九人の少女達が」

「っ!?それって……」

息を呑む果南さん。俺は話を続けた。

「しかしある時……女の子はラブライブを目指すことに熱中しすぎるあまり、周りが見えなくなってしまうました。実は幼馴染の一人に、留学の話が持ち上がったのです。女の子がそれを知ったのは、既に留学の話が決まった後のことでした」

「っ……」

「女の子は幼馴染に対して怒りました。『どうして言ってくれなかったのか』と。幼馴染は泣きながらこう言い返しました。『本当は一番に話したかった』と。周りが見えなくなるほど熱中している女の子に、幼馴染は気を遣ってしまい話を打ち明けられなかったのです」

黙って話を聞く果南さん。恐らく、自分と小原理事長の姿を重ねているんだろう。

「自分はどうすべきなのか、女の子は悩みました。そして留学に出発する日……女の子は飛行機に乗ろうとする幼馴染を抱き締め、自分の偽りの無い本音をぶつけました。

『私は貴女とスクールアイドルがやりたい』と。幼馴染は泣きながら頷き、留学をやめスクールアイドルを続ける道を選びました。実は幼馴染も、本当はそれを望んでいたのです。こうして二人は仲間達の下に戻り、笑顔でスクールアイドルを続けるのでした：」語り終えた俺は、深く息を吐いた。

「これが第二回ライブで優勝したアイドルグループ、 $\mu$  sのリーダー・・・高坂穂乃果ちゃんと、その幼馴染・・・南ことりちゃんの間にあつた出来事です。もし穂乃果ちゃんが、自分の本当の気持ちをごとりちゃんにぶつけなかつたら・・・ことりちゃんはその自分の気持ちを押し殺したまま留学したでしょうし、今の $\mu$  sは無かつたでしょうね」

「・・・何か、凄い話を聞いちゃったんだけど」

「果南さんだから話したんですよ。他の皆にはオフレコでお願いします」  
苦笑する俺。

「この話に、果南さんと小原理事長を当てはめるなら・・・果南さんがことりちゃんんで、小原理事長が穂乃果ちゃんつてところですか」

「えっ・・・逆じゃないの？」

「いえ、逆じゃないです」

首を横に振る俺。

「ことりちゃんも穂乃果ちゃんを大切に想っていたからこそ、留学の話を持ち出せなかった。そして果南さんも、小原理事長を大切に想っていたからこそ本当のことを言えなかったわけでしょう？ことりちゃんと果南さんの違いは、自分の気持ちに素直になつたかかってないかですよ」

「・・・悪かったね。素直じゃなくて」

「一方穂乃果ちゃんは自分の気持ちをぶつけ、小原理事長も自分の意思は果南さんに伝えていきます。穂乃果ちゃんと小原理事長の違いは・・・タイミングですね」

溜め息をつく俺。

「小原理事長も、二年前の段階で素直になるべきでしたね・・・だから果南さんに誤解されたまま、留学へ行くことになってしまったわけですから」

「誤解・・・？」

「さつき果南さんが言っていたじゃないですか。小原理事長が留学の話を通る際、『自分はスクールアイドルだから』と言っていたって」

「・・・その何が誤解なの？」

「翔子先生が言っていたんです。東京でのイベントの後、留学の話を持ちかけた時・・・最初は『自分はスクールアイドルだから』と言っていた小原理事長が、『親友のことが心配だから』とも口にしていったって」

「っ!？」

息を呑む果南さん。

「それって……まさか……」

「小原理事長は、本気で果南さんが『歌えなかった』と思っていました。そんな果南さんのことを放っておけるほど、彼女にとって貴女の存在は小さくないですよ」

苦笑する俺。

「小原理事長は、果南さんのことを心配していたんですよ。自分がスクールアイドルだからとか、そういうんじゃないよ……ただ単純に、貴女を置いて留学に行きたくなかったんですよ」

「そんな……」

「東京でのイベントの前にも、留学の話断っていたんですけど……それも多分、果南さんやダイヤさんと離れたくなかっただけ。言い方は悪いですけど、最初はスクールアイドルのことだってどうでもよかつたんだと思います。果南さんやダイヤさんと、一緒の時間が過ごせたら……あの人にとっては、それで良かったんでしょうね」

果南さんの目に涙が溜まっていく。

「だったら……だったらどうして……」

「言ってくれなかったのか、ですか？それは果南さんも同じでしょう」

「っ……」

「二年前、貴女達はすれ違ってしまったんですよ。お互いを大切に想うあまり、本当の気持ちを言えなかった……その結果が今です」

「鞠莉っ……」

泣きじやくる果南さん。やれやれ……

「……立って下さい、果南さん」

小原理事長に言つたのと、同じ言葉を果南さんにもかける。

「確かに二年前、貴女達はすれ違つてしまいました。過去の行動を変えることは出来ませんけど……これからの行動を変えることは出来るんですから」

「ぐすっ……変える……?」

「ええ。今度こそ果南さんの本当の気持ちを、小原理事長にぶつけるんです。同じように小原理事長も、本当の気持ちを果南さんにぶつけてくるでしょう。ひよつとしたら、また喧嘩になるかもしれません」

果南さんに向かって手を差し出す。

「それでも……貴女達はそのから始めるべきだと思います。ちゃんと言葉にして、自分の気持ちを伝えて下さい。昨日も言いましたけど、言葉にしなくても分かるというのはただの甘えですよ」

「天……」

「果南さんはこのままで良いんですか？このまま小原理事長と仲直り出来ず、浦の星を卒業することになってしまつて……後悔しませんか？」

「……嫌だ」

首を横に振る果南さん。

「そうなつたら私……絶対後悔する」

「果南さん……」

「私は……鞠莉と仲直りしたい」

そう言つて顔を上げた果南さんは、覚悟を決めた表情をしていた。  
全く……

「ほら、早く立つて下さい」

「分かつてるよ」

俺の手を掴む果南さん。俺は勢いよく果南さんを引つ張り上げた。

「小原理事長、果南さんのこと『ぶん殴る』つて言つてましたよ」

「うげつ……マジかあ……」

「甘んじて受け入れて下さい。そして殴り返して下さい」

「まさかの殴り合いをオススメ!？」

「それぐらいの気持ちで行ってことですよ」

俺は小さく笑うと、両手を広げた。

「……ほら、頑張れのハグ」

「っ……!」

俺の胸に飛び込んでくる果南さん。

「……ありがとう、天」

「……ちゃんと仲直りして下さいね」

「うんっ」

笑って頷く果南さん。

「小原理事長は、まだ部室にいます。行ってあげて下さい」

「天は行かないの?」

「お互いの気持ちをぶつけ合うのに、俺は邪魔でしょう。ちゃんと二人で話し合っ

来て下さい」

「……うん。分かった」

俺から離れる果南さん。

「じゃあ、行ってくるね!」

「行ってらっしゃい」

笑顔で部室へと向かう果南さんを、手を振って見送る。

今の果南さんと小原理事長なら、きっと大丈夫だろう。お互いに本音をぶつけ合っ  
て、ちゃんと仲直り出来るはずだ。

「……ふう」

俺は息を吐くと、屋上からの景色を眺めた。

やっぱり良いところだよなあ……

「良い景色ですね」

背後から海未ちゃんの声がする。

「内浦は本当に良いところだと、私も思います」

「全く……果南さんとの会話も聞いてたの？」

「すみません。心配だったもので」

ちよつと申し訳なさそうな海未ちゃん。やれやれ……

「……これで果南さんと小原理事長は仲直り出来る。ダイヤさんも含め、三人はまた  
スクールアイドルを始める。きっとAqoursに入ってくれると思うよ」

あの三人には、スクールアイドルとしての経験や知識がある。きっと千歌さん達の力  
になつてくれるだろう。

「これで九人……μsと一緒にだね」

「違いますよ」

首を横に振る海未ちゃん。

「μ sは十人です．．．貴方を含めて」

「．．．ありがと」

小さく笑う俺。そんな俺を、海未ちゃんが心配そうに見つめていた。

「．．．本気ですか？」

「．．．まあね」

何が、とは聞かなかった。

さっきの会話で、俺がどうするつもりなのか．．．長い付き合いの海未ちゃんなら、絶対に分かっているはずだから。

「どうして．．．」

「．．．今、海未ちゃんが言ったことが全てだよ」

溜め息をつく俺。

「μ sは十人、A q o u r sは九人．．．海未ちゃんなら、分からないはずないよね？」

「天．．．」

「マネージャーとして、最低限の責務は果たしたつもりだよ。もう俺に出来ることは

無い・・・いや、俺にしかならないことは無い。後は皆でやっていけるだろうから」  
俺はそう言うと、海未ちゃんへと視線を向け・・・力なく笑うのだった。

「俺は・・・Aqoursのマネージャーを辞める」

# 雨降って地固まる。

## 《鞠莉視点》

「・・・ふう」

天井を見上げ、深く息を吐く私。私はスクールアイドル部の部室で、ダイヤと二人で果南が来るのを待っていた。

千歌っち達が気を遣ってくれて、ここを私達だけにしてくれたのだ。本当に良い後輩に恵まれたと思う。

「果南さんは・・・来るでしょうか？」

「来る」

ダイヤの問いに、ハッキリと答える私。

「私は天を信じるわ」

頭の中に、先ほどの天の優しげな顔が浮かんだ。

『・・・最初からそう言えば良かったのに』

本当にその通りだ。最初から天に事情を説明して協力をお願いしていたら、きつと天は力を貸してくれただろう。

何せ自分を脅した、こんな最低な女の為に動いてくれる優しい人なのだから。

「・・・謝らないとね」

果南と仲直りすることが出来たら、ちゃんと天に謝ろう。

『酷いことをしてごめんさい』って。『また昔みたいに仲良くしてほしい』って。

都合の良いことを言っている自覚はあるけど、それでも・・・私は天と一緒にいたいから。

そんなことを考えていた時だった。

「っ・・・」

部室のドアが開き、果南が入ってきた。覚悟を決めた表情をしている。

「鞠莉・・・ダイヤもいたんだね」

「果南・・・」

「果南さん・・・」

空気が張り詰める。緊張してしまい、なかなか口を開くことが出来ない。

そんな中、一つ深呼吸をした果南は・・・私達に対して頭を下げた。

「・・・ゴメン」

「え・・・？」

「果南・・・さん・・・？」

呆気にとられてしまう私とダイヤ。

あの果南が、私達に対して頭を下げて謝っている。

「・・・私が悪かった」

ゆつくりと頭を上げた果南は、ポツリポツリと語り始めた。

「もう聞いたと思うけど・・・二年前、私は『歌えなかった』んじゃないかって『歌わなかった』の。鞠莉の足の怪我が悪化しないように、パフォーマンス中にアクシデントが起きないように・・・『歌わない』ことを選んだ」

「果南・・・」

「東京から帰ってきた後、鞠莉が翔子先生と留学の話をしてるのを聞いてちゃったの。『自分はスクールアイドルだから』って断る鞠莉を見て・・・申し訳なくなっちゃって」  
俯く果南。

「鞠莉は元々、スクールアイドルに興味無かったでしょ？それを私が強引に引き込ませ・・・怪我させた上に留学まで断らせて、自分が本当に嫌になった。私は鞠莉から、

未来の色々な可能性を奪ってるんだって」

「そんなこと……」

「だからダイヤに事情を話して、スクールアイドルをやめることにした。Aquoursを解散して、鞠莉を自由にしてあげないといけないって。あの時は、それが正しいんだって信じてた。でも……」

果南の目に涙が溜まっていく。

「私は……間違ってた。『鞠莉の為』だなんて言いながら、その鞠莉と何も話さずに勝手に動いて……結果として鞠莉を傷つけてた。鞠莉の為を思うなら、ちゃんと話すべきだったのに……」

「っ……」

私も込み上げてくるものがあつた。泣くまいと必死に堪える。

「……天から聞いた。鞠莉は私が本当に『歌えなかつた』と思つて、凄く心配してくれてたんでしょ？それで留学の話を断ろうとしてたんだよね？」

「……天の鋭さには敵わないわね」

分かつているんだろうとは思っていたけど……本当に脱帽だわ。

「私がちゃんと言葉にしてたら……」

「Stop」

なおも反省の言葉を続けようとする果南の口を、手で優しく塞いだ。

「それは私も同じよ。二年前、自分の素直な気持ちを言葉にして伝えていたら……こんなことにはなっていなかったでしょうね」

「鞠莉……」

「……謝るのは私の方よ、果南。貴女に辛い思いをさせて、気を遣わせてしまったのは私のせい。だから……ごめんなさい」

果南に対して頭を下げる。

果南は驚いたような表情を見せた後……小さく笑った。

「フフツ……あの鞠莉が頭を下げるなんてね」

「それは果南も同じでしょう？ 私だってビックリしたわよ」

「私達、お互いに頭を下げて謝ることなんてなかったもんね」

「フフツ、確かに」

私も笑みを浮かべる。と……

「じゃあ、仲直りの証として……」

両腕を広げる果南。

「ハグ、しよ……？」

笑っている果南。その目には……涙が滲んでいた。

「っ……!」

限界だった。

勢いよく果南の胸に飛び込んだ私は、堪えきれずに声を上げて泣いた。私を受け止めてくれた果南も、子供のように泣きじやくっている。

二年の時を経て、ようやく……ようやく私達は、仲直りすることが出来たのだ。

「……全く」

抱き合いながら号泣する私達を、包み込むように抱き締めてくれるダイヤ。

「お二人とも、子供みたいですよ」

「……そういうダイヤだつて泣いてるじゃない」

「……これは汗ですわ」

苦しい言い訳だった。明らかに目が真っ赤になっている。

「……ダイヤ、ゴメン」

ダイヤにも謝る果南。

「私のせいで、ダイヤにも辛い思いを……」

「……ブツブツ、ですわ」

果南の口を塞ぐダイヤ。

「私も果南さんに協力した身……いわば共犯ですわ。ですから、果南さんが謝ること

など無いのです」

「ダイヤ……」

「……ゴメンなさい、鞠莉さん。私も貴女に謝らなければいけませんわね」

「……もう良いのよ、ダイヤ」

首を横に振る私。

「私の方こそゴメンなさい……ダイヤの気持ちも知らないで、苦しめるようなことばかりして……」

「……良いのです」

ダイヤの身体が震えている。

「もう、良いのです……お二人が仲直りして下さっただけ……私は……私は、本当に嬉しいのですから……!」

「ダイヤっ……」

「っ……!」

とめどなく涙が溢れてくる。私も果南もダイヤも、再び声を上げて泣き始めた。流した涙が、これまでのわだかまりを溶かしてくれるようだった。

「……鞠莉、涙で顔がグチャグチャだよ?」

「果南もでしょ。人のこと言えないじゃない」

「おやめなさい。二人とも同じくらい酷い顔ですわよ」

「いや、一番酷い顔してるのダイヤだから」

「確かに」

「ぴぎゃっ!?!」

思いつきり泣いて、少しでもスッキリした後・・・お互いのグチャグチャになった顔を見て、私達は笑い合った。

「こんなに泣いたのは、いつ以来かしら・・・」

「・・・またスクールアイドルやりましょ。失敗したままじゃ終われないもの」

「・・・しようがないなあ。リベンジに付き合っただけよ」

「そもそも果南さんが歌わなかったから失敗した件について」

「ちよ、ダイヤ!?!それを言っちゃう!?!」

「仕方ないので私もやりますわ。今こそ果南さんの敵討ちを果たしましょう」

「勝手に殺さないでくれる!?!私死んでないんだけど!?!」

「フフツ、決まりね♪」

こうして私達は、新たな一步を踏み出すのだった。

明確な拒絶は人を傷付けるものである。

《鞠莉視点》

「ようこそ、Aqoursへ！」

満面の笑みで私達を迎えてくれる千歌たち。

その後、私達はAqoursの皆に頭を下げて謝った。私達の喧嘩に巻き込んだ上に、私は皆のことを利用するような形をとってしまったのだ。

怒られることを覚悟していたが、皆は笑って許してくれた。それどころか、『一緒にスクールアイドルをやらないか』と誘ってくれたのだ。

Aqoursへの加入をお願いしようとしていた私達にとって、願ったり叶ったりの提案だった。

「千歌、さつきはゴメンね……」

「気にしないで。私の方こそゴメン」

果南の謝罪に対して、苦笑しながら答える千歌たち。

「これから一緒に頑張ろうね、果南ちゃん」

「っ……千歌あつ！」

「うわあ!?!ちよ、果南ちゃん苦しいよお!」

「あつ、ずるい!私もハグするー!」

千歌つちにハグする果南に曜も加わり、楽しそうに笑い合っている。

「ひっぐ．．．ぐすっ．．．!」

「もう、泣き過ぎですわよルビィ」

「だって．．．お姉ちゃんと一緒に、スクールアイドルがやれるなんて．．．!」

「．．．貴女にも色々心配をかけましたわね」

嬉し泣きするルビィを、ダイヤがそつと抱き締める。

「一緒に頑張りましょう」

「っ．．．うんっ!」

「全く、ルビィは泣き虫ね．．．ひっぐ．．．」

「善子ちゃんの方が泣いてるすら．．．ぐすっ．．．」

花丸と善子がもらい泣きしていた。と、梨子が私の方に歩み寄ってくる。

「鞠莉さんも一緒に頑張りましょう、と言いたいところですが．．．」

強い眼差しを私に向ける梨子。

「その前に、言いたいことがあります」

「．．．天のことね」

私の言葉に、梨子が頷く。

「私達を利用しようとしたのは構いません。こうしてスクールアイドルとして活動出来るようになりましたし、統廃合を阻止したい気持ちは同じですから。でも・・・天くんのことは話が別です」

「・・・その通りだわ」

果南やダイヤとの時間を取り戻したい・・・自らの私欲の為に、私は天を脅して傷つけたのだ。

決して許されることではない。

「天くんに謝って下さい。彼の許しが無いかぎり、貴女だけはA q o u r sに入れることは出来ません」

「梨子ちゃん・・・」

千歌っちも他の皆も、複雑な表情で私と梨子の方を見ていた。

梨子の意見は正しいし、皆も同じ意見のようだ。勿論、私も。

「分かってる。天にはちゃんと謝るつもりよ。簡単には許してくれないかもしれないけど・・・許してくれるまで何度も謝るわ」

それは最初から決めていたことだ。既に覚悟は出来ている。

私の答えに満足したのか、梨子は小さく笑った。

「それが聞ければ十分です。私達からも、鞠莉さんを許してくれるよう天くんにお願  
いしますから」

「私も一緒に謝るよ。私にも責任あるし」

「私もですわ。天さんには色々とご迷惑をおかけしましたし」

「梨子・・・果南・・・ダイヤ・・・」

周りを見ると、皆も優しく微笑んでいた。

ホント・・・恵まれてるわね、私は。

「・・・ありがとう、皆」

お礼の言葉を口にした時・・・部室のドアが開き、天が中に入ってきた。

「っ・・・天・・・」

「・・・どうやら、仲直りは出来たみたいですね」

笑みを浮かべる天。

「もうすれ違わないで下さいね」

「分かってる」

頷く果南。

「自分の気持ちは、ちゃんと言葉にして伝えるべきだって・・・天に教わったから」

「・・・それなら良かったです」

安心した様子の天。私は緊張しながらも、天の目の前に立った。

「天……ごめんなさい」

深々と頭を下げる。

「私は、貴方を傷つけてしまった……マネージャーをやりたいと言った貴方を脅して、自分の為に無理矢理貴方にマネージャーをやらせてしまった……何も言い訳出来ないわ」

「小原理事長……」

「……私は、果南やダイヤと一緒にスクールアイドルがやりたい。千歌たち達と一緒に、Aqoursとして活動したい。それを許してほしいの」

自分の願いを口にする。天の顔を見るのが怖くて、顔を上げることが出来ない。

「都合の良いことを言ってるのは分かってる。それでも私は……皆と一緒にスクールアイドルをやりたい」

天は今、どんな気持ちで聞いているのか……怖くてたまらなかった。

「……お願いします。許して下さい」

「良いですよ」

「……え？」

思わず顔を上げてしまう。そこには、穏やかな表情を浮かべている天がいた。

「い、今……何て言ったの……?」

「良いですよ、つて言いましたけど」

「な、何で……?」

「いや、何でつて……貴女が謝ってきたんでしょうが」  
呆れている天。

「……まあ確かに、あの時はとてつもなくシヨックでしたよ。貴女に対して怒りが収まりませんでしたし、だからこそ冷たく接してきました」

苦笑する天。

「でも……何だかんだ言いつつ、貴女を嫌いになりきれませんでした。事情も分かって、貴女の行動の理由も知って……いつの間にか怒りも収まって、貴女に対して理解を示している自分がいたんです」

「天……」

本当にこの子は……どこまで優しいのかしら……

「小原理事長、果南さん、ダイヤさん……貴女達三人がAqoursに入ってくれたら、Aqoursは今よりもっと良いグループになれます。三人の願いも叶うし、千歌さん達もスクールアイドルとして成長出来ますから」

笑みを浮かべる天。

「だからこそ、俺は三人にA q o u r sに入ってほしいと思ってました」

「じゃ、じゃあ・・・本当に良いの・・・？」

「勿論です」

頷く天。

「とはいえ、それを決めるのは千歌さん達なわけですけど」

「私達はウエルカムだよ！」

満面の笑みで頷く千歌たち。他の皆も笑顔で頷いてくれる。

「良かったね！鞠莉！」

「晴れて再びスクールアイドルですわ！」

果南とダイヤも喜んでくれる。

これで・・・これでしょうか・・・

「・・・良かった」

そう呟いた天は・・・何故か寂しそうな顔をしていた。

「これで俺も・・・安心してマネージャーを辞められます」

時が止まった。

天の呟きを聞き、皆が一斉に固まってしまおう。私は固まってしまった口を動かし、何とか喉から声を絞り出した。

「い、今・・・な、何て・・・？」

「A q o u r s のマネージャーを辞める、と言ったんです」  
ハッキリ告げる天。

「どうして、なんて聞かないで下さいね。俺は最初に言っただけですよ。『マネージャーはやらない』と」

「っ・・・」

「小原理事長に『マネージャーにならないと言うのなら、スクールアイドル部は承認しない』と脅されたので、やむをえず引き受けただけです。千歌さん達の目標を、俺のせいで潰したくなかったですから」

淡々と答える天。

「まあさつきも言った通り、脅されたことに関してはもう良いです。許しますし、貴女方がA q o u r s に加わってくれられることを嬉しく思います。ですが・・・それとマネージャーの件は別の話です」

天はそう言うのと、私の目を真っ直ぐに見た。

「マネージャーとして、最低限の責務は果たしたつもりです。果南さんやダイヤさんと一緒にスクールアイドルをやるといふ、貴女の目的も果たされた今・・・もう俺に利用価値は無いでしょうか？そろそろ自由にしていたきたいのですが？」

そう告げる天の目は、恐ろしく冷たかった。私が天を脅したあの時と、全く同じ目をしてる。

私は悟ってしまった。確かに天は、私の愚かな行動を許してくれたのかもしれない。でも……あの時閉じてしまった心を、完全に開いてくれたわけでは無いのだと。

「……どうして?」

梨子が呟く。

「どうしてそんなこと言うの? 確かに最初は、鞠莉さんに脅されて仕方なく引き受けたのかもしれないけど……天くん言ってくれたわよね? 『私達と一緒にいるのは楽しい』って。『もう嫌々マネージャーをやってるわけじゃない』って。なのにどうして……どうしてそんなこと言うの!?! あの時の言葉は嘘だったの!?!」

「落ち着いて梨子ちゃん!」

「答えてよ天くんツ!」

天に詰め寄ろうとする梨子を、曜が必死に止める。

「……嘘じゃありません。皆と一緒にいるのは楽しいですし、嫌々マネージャーをやっていたつもりもありません」

「だっただらツ……!」

「だからこそ、ですよ」

力なく笑う天。

「だからこそ俺は・・・Aqoursの一員にはなれないんです」

「え・・・?」

意味が分かかっていない様子の梨子。他の皆も同じ様子だった。

「・・・スクールアイドルのマネージャーは、アイドルのことを一番近くで支えなくてはいけない存在です。グループのマネージャーであれば、そのグループの一員として皆を支えていく責任があります」

「・・・それが何だって言うの?」

「俺はAqoursにとつて、そういう存在にはなれないと言ってるんですよ」

「そんなことないぞらっ!」

花丸が慌てて話に割って入る。

「天くんはいつだってマル達の背中を押してくれたし、寄り添ってくれたぞら!」

「そ、そうだよ!天くんがいなかったら、今頃ルビイはここにいなかったよ!」

ルビイも花丸に同意するが・・・天は首を横に振った。

「違うんだよ、二人とも。そう言ってくれるのは凄く嬉しいんだけど、問題なのは俺の気持ちの方なんだよ」

「気持ち・・・?」

首を傾げるダイヤ。天は一つ息を吐くと、私達にハッキリと告げた。

「俺は・・・A q o u r sにとって、そういう存在になるつもりは無いんです」  
「ッ!？」

全員絶句してしまふ。

あの天が、A q o u r sを拒絶している・・・？

「ふざけんじやないわよッ!」

天の胸ぐらを掴む善子。

「そういう存在になるつもりは無い!? だったら何で私に優しくしたのよ!? 何で私をA q o u r sに引き込んだのよ!? 最初から放っておけば良かったじゃない!」

「ちよ、止めなよ!」

「離しなさいよッ!」

激高する善子を抑える果南。その様子を、天は悲しげな表情で見つめていた。

「・・・ゴメン」

「何を・・・謝ってんのよっ・・・!」

善子の目から涙が零れる。辛そうに顔を背ける天。

「・・・俺はこれ以上、A q o u r sのマナージャーを続けられない。もうマナージャーはやらないって、あの時決めたから」

天は顔を上げると、再び私に視線を移した。

「・・・そういうわけなので、マネージャーは辞めさせていただきます。もう俺にしか出来ないことはありませんし、スクールアイドル経験のある三人が入るんです。十分にやっつけていけるでしょう」

「天・・・」

引き止めたかった。『続けてほしい』と言いたかった。

でも・・・そもその原因を作ってしまった私に、天を引き止める権利なんて無い。

「・・・今までありがとうございました。短い間でしたけど、楽しかったです」  
そう言つて部室から出て行こうとする天の前に、梨子が立ち塞がった。

次の瞬間、部室内に乾いた音が響く。

「ちよつと!？」

「何してますの!？」

慌てる果南とダイヤ。梨子が天に思いつきりビンタしたのだ。

「っ・・・」

涙を浮かべながら、何も言わず天を睨みつける梨子。

天は叩かれた頬を押さえると、梨子の方を見て力なく笑った。

「・・・ピアノリストなんですから、手は大切にしないと。怪我したらどうするんですか」

「っ……天くんの……バカっ……」

両手で顔を覆い、肩を震わせる梨子。天は何も言わず、黙って梨子の横を通り過ぎた。その時……

「天くん」

ずっと黙っていた千歌つちが、初めて口を開いた。

「私達じゃ、ダメだった？」

天に問いかける千歌つち。

「私達じゃ、天くんにとっての特別にはなれなかった？」

天は何も答えない。背中を向けている為、表情を窺うことも出来なかった。

「私達じゃ……ダメだったのかなあっ……！」

「っ……」

千歌つちは、ただ静かに涙を流していた。寂しそうに笑みを浮かべながら、目からはとめどなく涙が溢れている。

「……俺は、Aqoursの十人目にはなれません」

天の答えは変わらなかった。

「俺にとつての特別は……あの人達だけです」

天はそれだけ言い残すと、静かに部室を出て行ったのだった。

誰にでも大切にしていることがある。

《梨子視点》

天くんが出て行った後の部屋は、重苦しい雰囲気にもまれていた。

涙を流す千歌ちゃんの側に曜ちゃんが寄り添い、俯いて肩を震わせる善子ちゃんの背中に花丸ちゃんが手を添えている。

落ち込むルビィちゃんをダイヤさんが抱き寄せ、唇を囁む鞠莉さんの頭を果南さんが撫でている中・・・私は右手を押さえ、黙って俯いていた。

生まれて初めて人を叩いてしまった・・・叩いた時の感触が、未だに右手に残っている。

そしてもう一つ・・・天くんの言葉が、耳から離れなかった。

『・・・ピアノリストなんですから、手は大切にしないと。怪我したらどうするんですか』

それを聞いた瞬間、感情に身を任せて叩いてしまったことを激しく後悔した。

あの言葉は、間違いなく私を心配しての言葉だった。天くんは叩かれたにも関わらず、私の手のことを心配してくれたのだ。

それなのに……

「……最低だわ、私」

自己嫌悪に陥り、涙を堪えきれずにいると……

「……失礼します」

海未先生が部屋に入ってくる。そして私達を見て、大きく溜め息をついた。

「やっぱりこうなりましたか……」

「やっぱりって……どういうことですか?」

曜ちゃんの問いに、海未先生は悲しげな表情を浮かべた。

「先ほど、天が言っていたんです……Aqoursのマネージャーを辞める、と」

「つ……」

「気になって様子を見に来たのですが……案の定でしたね」

「……海未先生、教えて下さい」

ダイヤさんが真っ直ぐ海未先生を見つめる。

「天さんはこう言っていました。『俺はAqoursの十人目にはなれません。俺に

とつての特別は・・・あの人達だけです』と。海未先生であれば、どういう意味なのかご存知なのではありませんか？」

「・・・ええ、知っています」

頷く海未先生。

「ですが、知っているのは私だけではありません・・・そうですね？小原理事長？」

「っ・・・」

俯く鞠莉さん。皆の視線が鞠莉さんに向けられる。

「鞠莉、どういうこと？」

「・・・どうして私が、天をマネージャーにしようとしたと思う？」

果南さんの問いに、ポツリポツリと語り始める鞠莉さん。

「それは天に、マネージャーとしての経験があるのを知っていたからよ・・・有名なスクールアイドルグループの、ね」

「「「「「「っ!?!」」」」」」

全員が息を呑む。まさか・・・!?

「・・・察したようね」

力なく笑う鞠莉さん。

「天はね・・・スクールアイドルグループ・μ'sのマネージャーをやっていたのよ」

驚きすぎて声が出なかった。天くんが、μ sのマネージャー……？

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

善子ちゃんが慌てて口を挟む。

「μ sが活動してたのつて、五年前の話でしょ!?! 五年前つていつたら、天はまだ小学五年生だったはずよ!?! それでマネージャーつて……」

「事実ですよ」

海未先生が答える。

「確かに天は五年前、私達μ sのマネージャーを務めていました。リーダーである穂乃果から正式に任されていましたし、私達も天をマネージャーとして認めていましたから」

皆絶句してしまふ。その様子を見て、苦笑する海未先生。

「まあ普通、そういう反応になりますよね。ですが、紛れも無い事実なんです」  
懐かしそうに当時を振り返る海未先生。

「天は元々、穂乃果の知り合いだったんです。穂乃果の家は和菓子屋をやっているのですが、天はそのお店の常連客でした。店番の際に何度も顔を合わせるうちに、親しくなつていったそうです」

「えっ……じゃあ、天くんがよく差し入れて振る舞つてくれる和菓子つて……」

「穂乃果の実家の和菓子屋『穂むら』の和菓子ですね」

「「びぎやあつ!」」

黒澤姉妹が同時に悲鳴を上げる。まさか、sのリーダーさんの実家の和菓子だったとは……

「私とことりも穂乃果の家に遊びに行くことが多かったので、天と顔を合わせる機会は多かったですね。もつとも、ことりがすぐ仲良くなつたのに対して……私は少々時間がかかりましたが」

「ア、アハハ……」

何故か遠い目をしている海未先生と、何故か苦笑いしている曜ちゃん。

何かあつたのかしら……?」

「まあそれはさておき……音ノ木坂が統廃合の危機に陥った時、穂乃果はスクールアイドルとして音ノ木坂をPRすることを決めました。その時に声をかけたのが、私とことり……そして天でした。穂乃果は天のことをとても買っていて、『マネージャーは天くんが良い!』と言って聞かなかつたんです」

「そういうことだつたんだ……」

納得している様子の果南さん。どうしたのかしら……?」

「天は二つ返事で引き受けてくれて、私達のことを懸命にサポートしてくれました。

練習メニューを考えてくれたり、ファーストライブを開催する為に動いてくれたり：：まあ我々のファーストライブは、お世辞にも『大成功だった』とは言えなかったのです  
が」

苦笑する海未先生。

「まあそれも置いておくとして：：頑張つて活動を続けていた私達に、少しずつ仲間が増えていききました。花陽、凜、真姫、にこ、絵里、希：：私達と彼女達を繋げてくれたのも、実は天だったんです」

「繋げてくれた：：？」

「姉である絵里は勿論、他の皆も天の知り合いだったんですよ」

首を傾げる花丸ちゃんに、笑いながら説明する海未先生。

「その縁が私達を繋いでくれた：：天がいなかったら、私たちが揃うことは無かった  
かもしれませんね」

天くんがいたから、あの九人が揃った：：凄い事実を聞いてしまった気がする。

「だからこそ天は：：μ sの『十人目のメンバー』なんです。ステージに上がるのは九人でも、実際のμ sは十人だったんですよ」

「つ．．．」

つまり天くんの言っていた『あの人達』というのは、μ sのこと．．．

じゃあ、『A q o u r sの十人目にはなれない』っていうのは……

「『自分はμ sの十人目だから、A q o u r sの十人目にはなれない』……そういう意味だっということですか……?」

「……その通りです」

力なく頷く海未先生。

「五年前……当時高校三年生だった三人の卒業に伴い、私達μ sは解散という道を選びました。一人でも欠けてしまえば、それはもうμ sではないと思ったからです。そしてその後、スクールアイドルを続けることもありませんでした」

「μ sが特別だったから、ですか……?」

「ええ。私達にとつてはμ sが全てであり、あの十人での活動が全てだったんです。だからこそ、μ sを解散した後にスクールアイドルを続けようとは思いませんでした」

私の問いに、微笑みながら頷く海未先生。

「ですが……そういつた決断こそが、天を苦しめてしまったんです」

「どういうことですか……?」

俯く海未先生に尋ねるルビイちゃん。苦しめてしまった……?

「……μ sを解散する時、一番悲しんでいたのは天でした。当時から大人びていた

あの子が、あの時だけは人目もはばからず号泣していたんです。それだけあの子は、μ、sに対して全身全霊で向き合ってくれていましたから」

海未先生の目が潤む。

「その後、天が今後について語ることはありませんでしたが……μ、s解散後、天の姉である亜里沙がスクールアイドルをやることになりました。穂乃果の妹である雪穂と一緒に、天に『私達のマネージャーをやってくれないか』とお願いしたそうなんです。ですが……」

「……断られたのですね？」

ダイヤさんの問いに、海未先生が頷く。

「『俺はμ、sの一員として終わりたい』……そう言っていたそうです。そこで私達は、初めて気が付きました……私達の決断が、天をμ、sに縛り付けてしまったのだと」  
表情を歪める海未先生。

「私達は、天には今後もスクールアイドルに携わってほしいと思っていました。私達が望んでいたのは、スクールアイドルの発展……天にはμ、sで得た経験を生かし、他のスクールアイドルをマネージャーとして支えてあげてほしかつたんです。ですが天は、最後までμ、sであることに拘ったんです……私達のように」

私の中で、今までの疑問が氷解していくのを感じた。

つまり天くんが、あれだけA q o u r sのマネージャーになることを拒否していたのは……最後まで、sのマネージャーでありたかつたから。

それは天くんにとつて何よりも大事なことで、何よりも誇りに思っていたことだったんだ……

「私、何てことを……」

両手で顔を覆う鞠莉さん。

「天の心を傷付けただけじゃなくて……天の誇りまで踏み躪っていたのね……」

「……言つたはずですよ。『後悔する日が必ずやつて来る』と」

鞠莉さんを見つめる海未先生。

「自分のやったことがどれほど罪深いことなのか、これで分かつたでしょう。そしてそのような目に遭つてもなお、あの子は貴女の力になろうとした……幼馴染である貴女が、あの子の優しさを分かつてあげなくてどうするんですか」

「つ……天つ……!」

泣き崩れる鞠莉さん。皆沈痛な表情を浮かべていた。

天くん……

「……もう、天くんを自由にしておいた方が良いのかな」

今まで黙つて話を聞いていた千歌ちゃんが、弱々しい声で呟いた。

「このままマネージャーを辞めてもらった方が、天くんの為になるのかな・・・」

「千歌ちゃん・・・」

千歌ちゃんの言葉に、全員何も言えずにいた。

天くんは、最後まで、sのマネージャーであることを望んでいた。にも関わらず、私達は彼に自分達のマネージャーをやらせてしまった。

これ以上は、天くんをさらに傷付けることになるんじゃないか・・・そんな思いがどうしても拭えない。

「・・・私からは何も言えません」

首を横に振る海未先生。

「天が今マネージャーをやっているのは、私達、sではなく・・・貴女達A q o u r sです。苦しい思いをさせてしまって、大変申し訳ないのですが・・・貴女達は天にどうしてほしいのか、よく考えてみて下さい」

「天くんに、どうしてほしいのか・・・」

色々な思いが入り混じり、頭の中がグチャグチャだった。他の皆も同じようで、表情が歪んでいる。

結局、私達はその場で結論を出すことが出来なかったのだった。

正解が無い問題ほど難しいものは無い。

《善子視点》

「善子ちゃん、大丈夫ずら？」

「・・・大丈夫よ。もう落ち着いたわ」

心配してくれるずら丸に、返事をする私。

あの後『今日はもう帰ろう』ということになり、私は自分の家へと戻ってきていた。ずら丸は私を心配してくれたのか、『今日は善子ちゃんの家泊まるずら』と言ってついできたのだ。

全く・・・

「・・・ゴメンね、心配かけて」

「善子ちゃん・・・素直過ぎて気持ち悪いずら」

「ちよつと!?!」

コ、コイツ・・・まるで天みたいなことを・・・

「っ・・・」

天のことを思い出し、また泣きそうになってしまふ。

我ながら重症ね・・・

「・・・やっぱり大丈夫じゃないすらね」

頭を撫でてくれるすら丸。

「泣きたい時は泣いたら良いすら。我慢するのは良くないすら」

「・・・すら丸は平気なの？」

「平気・・・ではないすらね」

苦笑するすら丸。

「正直マルも落ち込んで、一人になりたくなくて・・・誰かと一緒にいたかったすら」

「・・・ゴメン。無神経なこと聞いた」

「大丈夫すら」

すら丸はそう言うのと、私の肩にもたれかかってきた。

「・・・マルね、自分にはスクールアイドルなんて無理だと思ってたすら」

「え・・・？」

「自分のこと『オラ』って言っちゃう時もあるし、いつも語尾には『すら』ってついちゃ

うし・・・スクールアイドルなんて向いてないって思ってたすら」

「すら丸・・・」

知らなかった。そんな風に思ってたなんて・・・

「でも……実は密かに憧れてたこと、天くんには見抜かれてたずら」  
笑うずら丸。

「自分のことを卑下して、『無理』とか『向いてない』とか言っちゃダメだって。一番大切なのは出来るかどうかじゃなくて、やりたいかどうかだって……マルはその言葉に背中を押されて、Aqoursに入ってたずら」

「……Aqoursに入って、良かったって思う？」

「思うずら」

迷うことなく言い切るずら丸。

「練習は大変だけど、毎日凄く充実してるずら。天くんがいなかったら、きつとマルはこんな日々を過ごせなかった……だから天くんには、本当に感謝してるずら」

「……私だって、天には感謝してるわよ」

ずら丸の言葉を聞き、私も自分の本音を呟く。

「こんな私を受け入れてくれて、支えてくれて……天がいなかったら、今も学校に行けないままだったかもしれない。本当に感謝してるの」

「……だからあの時、あんなに怒ったずらか？」

「っ……」

そう、私はあの時……私達を一番近くで支える存在にはなれない、と言った天に怒っ

た。

だって……

「……シヨックだったのよ。私を一番近くで支えてくれたアイツが、それを否定するようなことを言うんだもの」

またしても涙が滲む。

「ずっと支えてくれるんだって思ってた。でも、天はその気が無いつて……今まで私を支えてくれてたのも、ただの義務感だったんじゃないかって……今までのことを、全部否定されたような気がして……」

涙が溢れた。どんだけ泣くのも私……

「……それは違うと思うすら」

優しい口調で語るすら丸。

「天くんが義務感で動いていただけなら……ダイヤさんが墮天使を否定した時、怒ったりしなかったはずすら」

「っ……」

そうだ、あの時……墮天使を否定した生徒会長に対して、天は本気で怒ってくれた。他でも無い、私の為に……

「マルの時もそう……ただの義務感っていうだけでは説明出来ないほど、天くんはい

つも親身になって接してくれたすら。だから天くんのこれまでの行動は全部、本気でマル達のことを想ってしてくれたことだって・・・マルはそう信じてるすら」

微笑むすら丸。

「だから善子ちゃんも、天くんのことを信じてあげるすら」

「・・・そうよね」

「ずら丸の言う通りだ。何で私は疑ってしまっただらう・・・」

天はいっただって、私の味方でいてくれたのに・・・

「・・・ありがとね、ずら丸」

「善子ちゃん・・・ホント素直過ぎて気持ち悪いすら」

「ちよつと!?!また『気持ち悪い』って言ったわね!?!」

「冗談すら」

面白そうに笑うすら丸。

全く、コイツときたら・・・

「じゃあ、今の素直な善子ちゃんに聞くけど・・・天くんがマネージャーを辞めちゃうつ

て、本当に良いすらか?」

「・・・良くないに決まってるじゃない」

そんなの当たり前だ。天がいなくなるなんて嫌だもの。

「でも…海未先生の話を聞いたら、天の気持ちを尊重すべきなんじゃないかって思っちゃって…」

「…正直、マルもそう思ったすら  
俯くすら丸。」

「天くんが『*μ* s の一員として終わりたい』って思ってるなら、そうさせてあげるべきなんじゃないかって…でもマル、マネージャーは天くんに行ってほしいすら…」

「…私だって同じ気持ちよ」  
「すら丸に寄りかかる私。」

「どうすべきなのか、どうするのが正解なのか…分からないわ」

「多分、この問題に正解は無いすら。天くとマル達、どちらの意思を取るか…それだけすら」

「…難しい問題ね」

身体を寄せ合い、頭を悩ませる私とすら丸なのだった。

\*\*\*\*\*

## 《ダイヤモンド視点》

「お姉ちゃん、大丈夫・・・？」

「・・・何だかドツと疲れましたわ」

自分の部屋のベッドに倒れ込む私。

今日は色々なことがありすぎて、正直もうクタクタですわ・・・

「・・・よしよし」

「・・・どうしましたの？」

何故か私の頭を撫でてくるルビィ。

「頭を撫でられたら、少しは元気が出るかなって・・・ルビィもよく天くんに頭を撫でられるんだけど、何だか嬉しくて元気が出るんだ」

微笑みながらそんなことを言うルビィ。

天さんが・・・

「お姉ちゃんもそうなんじゃない？海開きの時、思いつきりハグしてたもんね」

「っ!？」

顔が一気に熱くなるのを感じる。

そういえばあの時、私は何と破廉恥なことを・・・!

「ぴぎやああああああああつ!?!」

「ぴぎいつ!?!お、落ち着いてお姉ちゃん!?!」

ルビイに宥められ、何とか平静を取り戻した私。

穴があつたら入りたいですわ・・・

「・・・フフツ」

笑みを零すルビイ。

「な、何ですの・・・?」

「お姉ちゃんっていつもは大人の女性って感じだけど、天くんのことになると年相応の女の子になるなあって思ってる」

「なっ・・・か、からかうのはお止めなさいっ!」

「はーい」

クスクス笑っているルビイ。

くっ、ルビイに笑われる日が来るとは・・・

「でも・・・不思議だよね、天くんって」

「え・・・?」

「ルビイ、男の人ってちよつと苦手だけど・・・天くんは一緒にいて、凄く落ち着くん  
だ。安心出来るっていうか、素のままの自分でいられるっていうか・・・お姉ちゃんも

「そうなんじゃない？」

「・・・そう、ですわね」

小さく頷く私。

「天さんの前だと、つい砕けた感じになってしまおうとか・・・ありのままの自分でいられる感じがしますわね」

いつからだだったでしょう、天さんに心を許すようになったのは・・・

本当にいつの間にか、気付いたらすぐ側に天さんがいて・・・

「・・・そう、だから不思議なの」

私の考えを読み取ったかのように、ルビイが頷く。

「でも、それはきつと・・・天くんがルビイ達の心に寄り添ってくれてるから、なんじゃないかな」

「心に、寄り添う・・・」

言われてみるとそうかもしれません。

いつだって天さんは、私の身を案じてくれて・・・私の為に動いてくれました。

「・・・ルビイ、最初はお姉ちゃんに遠慮してた。お姉ちゃんはルビイに、スクールアイドルをやってほしくないだろうなって。だから本当はやってみたい気持ちがあったけど、そんな自分の気持ちに蓋をしてた」

「ルビイ・・・」

「でも天くんはルビイに、お姉ちゃんとお話しする機会を作ってくれて・・・自分の本当の気持ちを伝えられるように、後押ししてくれた」

胸の前でギュッと手を組むルビイ。

「天くんには、本当に感謝してるんだ。もしあの時、お姉ちゃんと向き合ってたから・・・今のルビイはいないから。だから・・・」

目に涙を浮かべるルビイ。

「ルビイは、天くん・・・マネージャーを辞めてほしくない。これからはずっと、ルビイ達を支えていてほしいって・・・そう思うの」

「・・・分かっていきますわ」

そっとルビイを抱き寄せる私。

「貴女が天さんのことを大切に想っているのは、よく分かっていてもりですわ。何故なら・・・私もそうですから」

ルビイの頭を撫でる私。

「天さんはいつだって、本気で私と向き合ってくれましたから。私が間違ったことを言った時は叱ってくれて、私が落ち込んでいた時は励ましてくれて・・・私にとっては、それが凄く嬉しかったのです」

私にとってのそういう存在は、今までは果南さんや鞠莉さんでした。

ですが例の一件で疎遠になってしまい、私の周りにそういった存在はいなくなってしまう……

だからこそ、天さんの存在は私にとって本当に大きかったのです。

「貴女の言う通りですわ、ルビィ……天さんは本当に、私の心に寄り添って下さっていただけですね……」

「お姉ちゃん……」

「私もA q o u r sとして活動させていただくことになった以上、やはりマネージャーは天さんが良い……いいえ、天さんでなければダメですわ」

改めて強く思います。私は天さんと一緒にやっていきたいのだと。

ですが……

「でも……天くんは、μ sのことが……」

「……ええ、そこですわね」

そう、天さんは『μ sの一員として終わりたい』という強い思いを持っています。

それを私達のワガママで『A q o u r sの一員になってほしい』というのは、果たして正しいことなのでしょうか……

「天くんの意思是尊重したいけど、天くんはマネージャーを続けてほしい……矛盾し

てるよね」

「仕方ありませんわ。それが私達の素直な気持ちなのですから」  
溜め息をつく私。

「まあ、それはこれから考えるところとして・・・鞠莉さんは大丈夫でしょうか・・・」  
帰り際の鞠莉さんは、今までに無いくらい酷い顔をしていました。

まあ無理ありません。ただでさえご自分の行いを後悔していたのに、あのような話を聞いてしまえば・・・

鞠莉さんの性格上、激しい自己嫌悪に陥っていきそうですわね・・・

「果南さんが側についてるんだよね？」

「ええ。ですから、多少は安心出来ますが・・・」

「それでも不安だよね・・・」

果南さんは果南さんで落ち込んでいるでしょうから、果たしてどうなっているか・・・不安が拭えない私とルビィなのです。

気持ちを伝えないことには何も始まらない。

《果南視点》

「鞠莉、大丈夫？」

「……」

「お腹空いてない？何か食べる？」

「……」

「……ハア」

思わず溜め息をついてしまう私。

憔悴しきった鞠莉を放っておけず、とりあえず私の家に連れてきたけど……体育座りして顔を伏せたまま動かず、何も喋らない状態が続いていた。

こんな鞠莉、初めて見た……

「……よつと」

仕方ないので、鞠莉の隣に腰を下ろす。

今は私が側についてあげないとね……

「……久しぶりだね。こうやって二人で過ごすの」

鞠莉が留学して以来、二年も会っていなかったのだ。

鞠莉が帰ってきた後も、ギクシヤクしててこんな風に二人でゆっくりすることも無かったし……

「仲直り出来て良かった……天に感謝しないとね」

「っ……」

天の名前を出した瞬間、鞠莉の身体がピクツと反応する。

やれやれ……

「……天つてさ、一緒にいて凄く安心出来るよね。不思議と心が安らぐっていうか、気持ちが落ち着くっていうか……それを本能的に感じ取ったのか、初対面の時に思いつきりハグしちゃってさあ」

いくらハグ大好きな私でも、普通初対面の男の子にいきなりハグしたりはしない。それが何故か天には、不思議とハグしたくなかったのだ。

前もってダイヤから話を聞いていたとはいえ、あれは自分でも驚いたなあ……

「まあ一緒の時間を過ごして、天の人となりに触れてみて納得したけどね。天つて昔からああいう感じだったの？」

「……そうよ」

今まで一言も喋らなかつた鞠莉が、初めて口を開いた。

「誰からも愛される子だったわ。私は勿論、パパもママも使用人の皆も……天のことを気に入ってた。特にママは天のことを溺愛してて、『将来は鞠莉と結婚してもらいマース!』って言ってたくらいよ」

「……マジか」

鞠莉のお母さんって、結構厳しい人なんだよねえ……

あの人にそこまで気に入られてるとか、ヤバすぎでしょ天……

「鞠莉のお母さんと天のお母さんは、連絡を取り合ってるんだっけ?」

「ええ、あの二人は大の仲良しなの。だから絵里がスクールアイドルとして活動してたことも、天がマネージャーをやったことも……私はママから聞いてたわ」

顔を上げ、天井を見上げる鞠莉。

「……ゴメンなさい、果南。貴女にはもう一つ、謝らないといけないことがあるの」

「え……?」

「二年前、果南とダイヤに『スクールアイドルをやらないか』って誘われた時……嘘ついちゃった。『興味無い』なんて言っただけ……本当はちよつと興味があったの」

「ええっ!?!」

思わず驚いてしまう。

「ど、どごういっこと!?!」

「ママに絵里と天の話聞いてから、μ sのライブ映像を見てみたの。凄くキラキラしてて・・・気付いたら引き込まれてた。あの絵里がキラキラしてる姿を見たら・・・涙が出るくらい感動しちゃったわ。その時に思ったの。『スクールアイドルって凄い！』って」

微笑む鞠莉。

「だから実際、スクールアイドルには興味があつたの。でも・・・μ sを見てしまった後で、『自分もやりたい！』とは思えなかつた。私じゃ、あそこまではキラキラ出来ないって思ったから」

「鞠莉・・・」

「だから最初は断つた。でも、果南やダイヤに熱心に誘われて・・・二人と一緒に時間が過ぎせるなら、悪くないなって思ったの。μ sみたいになれなくても、果南やダイヤと一緒にいられるなら・・・私はそれで良いと思った。だからスクールアイドルになることを決めたのよ」

申し訳なさそうに私を見る鞠莉。

「嘘をついた上に、身勝手な理由で話を引き受けて・・・本当にゴメンなさい」  
謝ってくる鞠莉。

私はそんな鞠莉を見つめ、意を決して思いつきり・・・

「『檸●爆弾』」

「ギャアアアアアアアアアアッ!」

鞠莉の目の前でレモンを握り潰した。

「目がっ!?!目があああああっ!?!」

「うわあ・・・気持ちメツチャ分かるわあ・・・」

「分かっているなら止めなさいよ!」

「気分爽快だねえ、コレ」

「そっち!?!私じゃなくて天の気持ち!?!」

「私も今度からレモン持ち歩こうかな」

「止めなさい!理事長権限でレモンの持ち込みを禁止してやるんだから!」

「前代未聞だよな。レモンの持ち込みが禁止された学校って」

「そもそも、現役女子高生が理事長やってる時点で前代未聞じゃない!」

「・・・確かに」

あれ、浦の星って結構変わってる?

まあそれはさておき・・・

「今さらそんなことで謝らないの。私が無理矢理鞠莉を引き込んだことに変わりないんだし、嘘ついたとかどんな理由で引き受けたとかどうでもいいから」

「いや、どうでもよくはないんじゃない？」

「……」

「ゴメンなさい無言でレモンを取り出さないで下さい」

速攻で土下座する鞠莉。私は思わず苦笑してしまった。

「全く……天の言った通りだったね」

「え……？」

「天が言ってたよ。私やダイヤと一緒に時間が過ごせたら、鞠莉にとってはそれ良かったんだろうって」

「っ……天が……？」

「うん。十年近く会ってなかったっていう割には、鞠莉のことを理解してるような感じだったよ。流石は幼馴染だよ」

微笑む私。

「過去の行動を変えることは出来ないけど、これからの行動を変えることは出来る……これも天が言ってた言葉。鞠莉が天にしてしまったことを、無かったことには出来ないけど……これからの行動は、鞠莉次第なんじゃないかな」

「私、次第……」

「……私はね、天にマネージャーを辞めてほしくないよ。天と一緒に、Aqours

としてやっていきたいなあって思う。鞠莉はどう思ってるの?」

「私は……」

鞠莉の目に涙が浮かぶ。

「私も……天と一緒にやりたい。でも……」

「……続けてほしい、って言えない?」

私の問いに、力なく頷く鞠莉。

「私は、あの子の誇りを踏み躪った……その私が、どの面下げてそんなこと言えるのよ……」

「……どんな面を下げてでも、言うしか無いんじゃないかな」

「え……?」

「だって、それが鞠莉の本当の気持ちなんですよ? だったらどんなにみつともなくたって、言葉にして正直に伝えなくちゃ。まずはそこから始めるべきじゃないかな」

これも私が天に言われたこと……

この言葉に背中を押され、私は鞠莉に正直な気持ちを打ち明けることが出来た。そのおかげで鞠莉と仲直り出来て、今こうして二人でいる。

天が私の背中を押してくれたように、私も鞠莉の背中を押してあげないとね……

「まあ後は・・・天の気持ち次第だよな。『μ sの一員として終わりたい』と  
思ってる天が、果たしてこれからもA q o u r sのマネージャーをやってくれるかどうか……」  
私達に出来るのは、気持ちを伝えることだけ……最終的に決めるのは天だ。

天のあの様子からして、よほどμ sの人達のことを大切に想っているんだろう。  
「全く……羨ましいね。μ sの人達が」

あの天にあそこまで想われているなんて……ちよつと妬けちやうかも。

「……それは逆も言えることよ」

鞠莉が眩く。

「天がμ sの皆を想っているように、μ sの皆も天のことを想ってる。特に……」

「鞠莉……?」

首を傾げる私。

鞠莉は深く息を吐くと、意を決したかのように顔を上げた。

「……実はね、果南。私、もう一つ隠してたことがあるの」

そうやって語り始める鞠莉。

その話を聞き、驚きのあまり目を見開く私なのだった。

何年経つても変わらない想いがある。

《曜視点》

「……………」

「……………」

(き、気まずい…………！)

無言で佇む千歌ちゃんと梨子ちゃんを前に、私は何も言葉を発せずに行った。

二人とも凄く落ち込んでいたので、『今日は三人で千歌ちゃんの家でお泊り会しよう』と提案したところまでは良かったのだが…………千歌ちゃんの部屋の空気が、まるでお通夜のようにだった。

とりあえず、何か話題を…………

「…………私達、どうすべきなのかな」

ポツリと呟く千歌ちゃん。

「天くんに、どんなことを言えば良いのかな…………」

(いきなりその話題を切り出したあああああつ!?)

関係無い話をしつつ、さりげなくその話に持っていくつもりだったのにいいいいいい

！  
前フリも無いいきなりぶっこんじゃったよ!?それはダメだつて千歌ちゃん!?

「・・・分からない。多分、正解なんて無いのよ」

「・・・だよね」

(そして会話終わったあああああつ!?)

ちよつと梨子ちゃん!?そこはもつと話を広げてくれない!?

またお通夜に逆戻りだよおおおおおつ!

(うう、何で私こんなに気を遣つてるのかなあ・・・)

それもこれも全部天くんのせいだ!天くんがあんなシリアスな展開にするから!

でも・・・

「・・・やっぱり嫌だよね。天くんがマネージャーじゃなくなるなんて」

「曜ちゃん・・・?」

気付けば本音を口にしていた。

やっぱり私は、天くんにマネージャーを続けてもらいたいんだ・・・

「ファーストライブの時も、内浦をPRする為のPVを撮った時も、東京のイベントの時も・・・どんな時でも、天くんは私達のことを支えてくれた。心が折れそうになったこともあったけど、天くんが励ましてくれたから乗り越えられた。辛い時も苦しい時

も、いつだつて天くんが寄り添ってくれた……もう天くんはA q o u r sにとつて、欠けてはならない存在なんだよ」

私だけじゃない。

千歌ちゃんも梨子ちゃんも、花丸ちゃんもルビイちゃんも善子ちゃんも、ダイヤさんも果南ちゃんも鞠莉さんも……

皆、天くんのこと大好きなんだ。

「千歌ちゃんと梨子ちゃんだつて、同じ気持ちでしょ？天くんはマネージャー辞めてほしくないでしょ？」

「……そんなの当たり前じゃない」

呟く梨子ちゃん。

「私が悩んだり、落ち込んだりしてた時……天くんはいつだつて私のことを肯定してくれたし、いつだつて味方でいてくれた。それがどんなに嬉しかったか……天くんの存在は、私にとつてとても大きい。だからこれからも支えていてほしいし、マネージャーを辞めてほしくなんてない。でも……」

「……だからこそ、どうしたら良いか分かんないよね」

梨子ちゃんの言葉の続きを、千歌ちゃんが引き取る。

「天くんは、A q o u r sのマネージャーを続けることを望んでない。天くんにとつ

ての特別はμ sであって、A q o u r sじゃないんだよ」

「千歌ちゃん……」

『μ sの一員として終わりたい』って言ってる天くんに、『A q o u r sの一員になつてくれ』って言うのは……ちよつと酷なんじゃないかな」

俯く千歌ちゃん。

「天くんは鞠莉さんに脅されて、自分の気持ちに反してマネージャーをやつてくれたんだよ？もう脅されることも無くなった今、天くんにもう一度気持ちに反したことを願うするのは……」

「……A q o u r sの一員になつたら、μ sの一員じゃなくなっちゃうのかな？」

「え……？」

私の言葉に、千歌ちゃんが首を傾げる。

「どういうこと……？」

「だつてそうでしょ？A q o u r sの一員になつたつて、天くんがμ sの一員であることには変わらないじゃん。違う？」

「違うないけど……」

「多分……気持ちの問題なんじゃないかしら」

おずおずと口を挟む梨子ちゃん。

「海未先生達にとつてμ s が全てであつたように、きつと天くんにとつてもμ s が全てなのよ。だからこそ、μ s の一員として終わりたい．．．ううん、μ s だけの一員として終わりたいって思つてるんじゃないかしら？」

「．．．それは思つてそう。天くんって、そういう意思是固いもんね」  
思わず苦笑してしまう私。

「でもさ．．．それなら私達だつて負けられないじゃん」

「え．．．？」

「私達は天くんにもマネージャーを辞めてほしくなくて、天くんはマネージャーを辞めたいと思つてる．．．天くんが私達に自分の意思をぶつけてくれた以上、私達も天くん自分達の意思をぶつけないやダメなんじゃないかな？」

「意思を．．．」

「ぶつける．．．」

「果南ちゃんと鞠莉さんもそうだったじゃん。ちゃんとお互いに思いを伝え合わなかつたから、すれ違つちやつた．．．天くんは思いを伝えてくれたんだから、私達も思いを伝えなくちゃダメだと思う」

私の言葉に、二人が目を丸くしていた。

「．．．何か意外。曜ちゃんって意外と熱いのね」

「今度から修造さんって呼んで良い？」

「修造さんではないよ!?!あそこまで熱くないからね!?!」

「・・・フフツ」

千歌ちゃんが笑う。

「・・・そうだよね。ちゃんと気持ちは伝えないとね」

「・・・そうね。後悔だけはしたくないもの」

梨子ちゃんも微笑みながら頷く。二人とも・・・

「よし!そうと決まれば、早速皆にも連絡しなくちゃ!」

「大丈夫かしら?皆まだ気持ちの整理がついてないんじゃない?」

「大丈夫!きつと皆気持ちは一緒だよ!」

良かった、二人とも元気が出たみたい・・・

「全く・・・君は本当に幸せ者だよ。天くん」

笑みを浮かべつつ、小さく呟く私なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・ふう」

家のベランダに出て、夜空を見上げている俺。

たくさん星が瞬いている空は、目を奪われるほど綺麗だった。

「やっぱり・・・良い所だな、内浦は」

「同感です」

背後から声がある。海未ちゃんがベランダに出てきて、俺の隣に並んだ。

「こんなに綺麗な星空、東京ではなかなか見られませんから」

「確かにね」

笑いながら答える俺。

「でも、μsのファーストライブの前日・・・神田明神で、凄く綺麗な星空を見たよ

ね。穂乃果ちゃんところりちゃんと、海未ちゃんと俺の四人で」

「そういえばそうでしたね・・・懐かしいです」

微笑む海未ちゃん。

「ファーストライブ・・・お世辞にも『大成功』とはいえないものでしたよね」

「・・・いや、大成功だったよ」

俺は首を横に振った。

「花陽ちゃんに凜ちゃんに真姫ちゃん、にこちゃんに希ちゃんに絵里姉……後でsに入ることになるメンバーが、全員揃ってたもん。あのライブがあったから、全員が繋がるのが出来たんだと思う。そう考えたら大成功でしょ」

「……フフツ、そうですね」

面白そうに笑う海未ちゃん。

「貴方は昔からそうでしたね、天。穂乃果が底抜けの明るさで私達のことを引つ張ってくれたのに対し、天は底抜けの優しさで私達の心に寄り添ってくれて……タイプは違えど、私達にとっては二人とも太陽みたいな存在でした」

「……穂乃果ちゃんが太陽なのは同意するけど、俺は違うでしょ」

「違いますよ」

首を横に振る海未ちゃん。

「自己評価が低いのは、天の悪い癖です。貴方が思っている以上に、私達にとって貴方の存在は大きいんですからね？」

「……ありがとう」

嬉しい言葉ではあるけど、少し照れ臭いな……

「そしてそれは、私達も、sだけじゃない……A q o u r sの皆も同じです。彼女達にとつて、天の存在は大きいんですよ。今日話してみて、改めてよく分かりました」

俺に視線を向ける海未ちゃん。

「Aqoursのマネージャーを辞めるという決意は……変わリませんか？」

「……変わらないよ」

ハツキリ答える俺。

『μsの一員として終わりたい』っていう気持ちは……あの頃からずっと変わらない」

「天……」

「海未ちゃん達が、μsを解散した後スクールアイドルをやらなかつたように……俺も他のスクールアイドルのマネージャーをやる気にはなれなかつた。俺にとつても、μsが全てだったから」

空を見上げる俺。

「だからこそ、亜里姉と雪穂ちゃんのお願ひも断つた。スクールアイドルのマネージャーは、そのスクールアイドルの心に寄り添える人がやるべき仕事だと思つたから。『μsの一員として終わりたい』と思つている俺には出来ないし、やるべきじゃない……Aqoursのマネージャーもね」

溜め息をつく俺。

「Aqoursのマネージャーは、Aqoursの一員として頑張れる人……Aqo

ursに身も心も捧げられる人がやるべきなんだよ。成り行き上、今までは俺がやってたけど・・・本来であれば、俺なんかをやっちゃいけない仕事だった。中途半端な気持ちじゃ、一生懸命やってる皆に失礼だからね」

「・・・だからこそ、天は一生懸命やっていたのではありませんか？」

「勿論やってたよ。俺に出来ることは、ちゃんとやってきたっていう自負はある」  
頷く俺。

「でも・・・心は変わらなかった。Aqoursのマネージャーをやっても、『μsの一員として終わりたい』っていう気持ちはずっとあった。そんな気持ちを抱えたまま、Aqoursのマネージャーを続けることは出来ないよ」

だってそれは・・・皆を裏切っているのと同じことだから。

「だから俺は、Aqoursのマネージャーを辞める。そして・・・浦の星も出て行くよ」

「つ・・・転校する、ということですか・・・？」

「そういうこと」

Aqoursのマネージャーを辞める日が来たら、その時は浦の星も出て行く・・・それは以前から決めていたことだ。

マネージャーを辞める以上、俺はもうAqoursに関わるべきではないのだから。

「夏休みに入ったら、一度東京に帰ろうと思う。その時に南理事長に会って、転校について相談するつもりだよ。テスト生としてあの人に推薦されている以上、ちゃんと話しておかないといけないから」

「・・・本気、なのですか？」

「勿論。つていうか、海未ちゃんも俺が東京に戻ることを望んでなかったっけ？」

「それはそうですが・・・」

複雑そうな海未ちゃん。

海未ちゃん自身も A q o u r s の皆と関わって、色々と心境の変化があったのか  
な・・・

「それに・・・そろそろ絵里姉をどうにかしないと。これ以上は亜里姉が可哀想だし」

「・・・仲直り出来るんですか？」

「・・・すぐには無理だろうね」

俺が帰ったからといって、あの喧嘩が無かったことになるわけではない。

絵里姉の態度が変わることは無いだろう。

「まあ、それは帰ってから考えるよ。亜里姉とも相談したいし」

俺はそう答えると、ベランダからリビングへと戻った。

ふと、机の上に置いておったチラシに目が行く。

「・・・沼津の花火大会、か」

Aquoursが出演する予定のイベント・・・確か夏休みに入る直前だったよな・・・  
「そういえば、海未ちゃんもそろそろ教育実習が終わるんだよね？」

「ええ、一学期の終業式の日が最後ですね」

同じくりビングに戻ってきた海未ちゃんが頷く。

大学に行かなければならない都合上、終業式の翌日には東京に帰らなければいけないらしい。

海未ちゃんとの生活も、もう残り僅かなんだな・・・

「・・・これ、一緒に行こっか」

「え？」

驚いている海未ちゃん。

「いや、その・・・良いんですか？」

「何が？」

「いえ、天が誘ってくれるなんて・・・珍しいなと思ひまして」

「ああ、行きたくないなら別に・・・」

「行かせていただきますっ！」

慌てて答える海未ちゃん。

「こうしてはいられません！早速準備をしなくては！」

「早くない？まだ日にちあるよ？」

「何言ってるんですか！乙女の準備は時間がかかるものなんです！」

「あ、そう・・・」

「ああ、楽しみです！どんな浴衣を着て行きましょうか！」

ルルン気分です奥の部屋に入っていく海未ちゃん。

浮かれてるなあ・・・

「・・・ま、いつか」

俺は苦笑すると、椅子に座って花火大会のチラシを眺めた。

A q u o r s、か・・・

『私達じゃ・・・ダメだったのかなあつ・・・！』

「つ・・・」

千歌さんの言葉が頭の中で響く。千歌さん、泣いてたよな・・・

善子のことも泣かせちゃったし、ルビイと花丸にも悲しい思いをさせたことだろう。ダイヤさんと果南さんも心配そうに俺のこと見てたし、曜さんも凄く気遣わしげな表情だった。

小原理事長も辛そうに唇を噛んでたし、梨子さんにはビンタまでされてしまった。叩かれた頬以上に、とても心が痛かったけど・・・多分、梨子さんの方が心を痛めたと思う。

叩いた手にも影響が無いと良いけど・・・

「・・・花火大会、間に合うかな」

A q o u r s にとつてせつかくのチャンスを、俺のせいで棒に振るようなことになったら・・・嫌だな。

「・・・よし。A q o u r s のマネージャーとして、最後の仕事というか」

俺はあることを決め、紙とペンを用意した。

そしてスマホを取り出し、あの人に電話をかけてみるのだった。

「あ、もしもし真姫ちゃん？ちよつと相談したいことがあるんだけど・・・」

大切なものほど簡単に諦められない。

《梨子視点》

翌日・・・

「ええっ!? 天くんが東京に帰った!?!」

「ええ、私も驚きました」

困惑した表情の海未先生。

放課後、私達はスクールアイドル部の部室に集まったのだが・・・そこで海未先生から、驚愕の事実を聞かされたのだった。

「昨日の夜、誰かと電話していたようですが・・・終わつた後、急に『明日は学校を休んで東京に行くてくる』と言い出しまして・・・一応『体調不良の為』ということにしてありますので、このことは内密にお願いします」

「それで今日、天くんは学校を休んでるんだね・・・」

納得しているルビィちゃん。

今日は天くんに、私達の気持ちを伝えようと思ったのに・・・

「東京のどこへ行く、とは言ってなかったんですか?」

「それが『内緒』の一点張りですって……うう、私と天の仲だというのに……」

「海未先生、本当に天のこと好きよね……」

果南さんの質問に落ち込みながら答える海未先生を見て、善子ちゃんが呆れていた。

「今日中には帰ってきますの？」

「……先ほど連絡が来たのですが、今日は東京に泊まるそうです。『明日も学校を休むから、休みの連絡よろしく』とのことでした」

「……そうですか」

明らかに落ち込んでいるダイヤさん。花丸ちゃんも俯いている。

「もしかして天くん、このまま帰らないつもりなんじゃ……」

「……確かに昨日の夜、『浦の星を出て行く』とは言っていました」

「そんな……!」

「嘘でしょ……?」

千歌ちゃんと曜ちゃんが、信じられないという表情を浮かべる。

「ですがそれは、音ノ木坂の南理事長にも相談すると言っていましたし……このまま帰って来ないということは無いと思いますが……」

「天……」

悲痛な表情を浮かべる鞠莉さん。天くん、東京で何をしてるのかしら……

心配になる私なのだった。

\*\*\*\*\*

翌朝・・・

「・・・ん」

目覚める俺。何やら身体が温かかった。

まるで誰かに抱き締められているような・・・

「海未ちゃん・・・ん？」

いや、俺の身体に当たっているこの二つの柔らかいモノ・・・海未ちゃんより大きいな。

視線を向けてみると・・・

「すう・・・すう・・・」

穏やかに寝息を立てている真姫ちゃんの顔があった。

ああ、そういうえば昨日は真姫ちゃんの家泊まったんだっけ・・・

「・・・懐かしいな」

小さく笑いながら、真姫ちゃんの頭を撫でる。

こんな風に真姫ちゃんと一緒に寝るのは、ずいぶん久しぶりな気がする。

「んっ・・・天あ・・・？」

真姫ちゃんの目がゆっくり開いていく。

「あ、起こしちゃった・・・ゴメンね、真姫ちゃん」

「ふわあ・・・構わないわよ。いい時間だし」

時計の方に視線を移す真姫ちゃん。時刻は既に九時を回っていた。

「アララ、結構寝てたんだね・・・」

「昨日は夜遅かったし、しょうがないわよ」

そう、昨日は真姫ちゃんと遅くまで作業をしていた。

ようやく終わった頃には日付がとうに変わっており、俺達はベッドに潜った瞬間に寝てしまったのだった。

「凄いい今さらなんだけど、一緒にベッド使わせてもらっちゃってゴメンね。布団を借りようと思ってただけ・・・」

「本当に今さらね・・・」

呆れている真姫ちゃん。

「そんな気を遣わなくていいのよ。私と天の仲じゃない」

「いや、俺も思春期の男子だからさあ・・・こんな綺麗なお姉さんと一緒に寝たら、何しちゃうか分かんないじゃん？」

「フフツ、その時は責任とって結婚してもらおうから大丈夫よ」

「よっしや、西木野家の財産で毎日遊んで暮らせるぜ」

「ヒモになる気満々!？」

真姫ちゃんのツツコミ。まあ冗談はこれくらいにして・・・

「さて、そろそろ起きよっか」

「・・・もう少しこのままで」

俺をギュッと抱き締める真姫ちゃん。

「今日中に内浦に戻っちゃうんでしょ？次はいつ会えるか分かんないから・・・」

「すぐ会えるって」

笑いながら真姫ちゃんの頭を撫でる。

「全く・・・相変わらず真姫ちゃんは可愛いんだから」

他の人がいるとちよつとツンツンするくせに、二人きりになると急に素直になる・・・

真姫ちゃんは昔からこういう性格なのだ。

「・・・ありがとね、真姫ちゃん。急なお願いを聞いてくれて」

「私が天の頼みを断るわけないでしょ」

微笑む真姫ちゃん。

「つていうか、昨日も今日も学校休んじやって大丈夫なの？」

「もう期末テストは終わってるから大丈夫。後は海未ちゃんが上手く言つといてくれるでしょ」

「・・・海未も大変ね」

呆れている真姫ちゃん。

海未ちゃんには、帰ったら何かお礼をしないとなあ・・・

「仕方ないじゃん。真姫ちゃんが『電話じゃまどろっこしい』つて言うんだもん」

「だって直接会った方が早いじゃない。私だって、まさか学校を休んでまでこっちに來るとは思わなかったわよ」

「俺の行動力を舐めないでほしいわ」

「今回に関しては、威張って言えることじゃないわよ」

ジト目の真姫ちゃん。と、どちらからともなく吹き出す。

「フフツ・・・まあ結果的に良いモノも出来たし、良かったわね」

「おかげさまでね。ホント真姫ちゃん大好き」

「つ・・・ふ、不意打ちは反則っ！」

顔を赤くする真姫ちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

《千歌視点》

「ハア……」

溜め息をつく私。海未先生の言った通り、天くんは今日も学校を休んでいた。

もしかして、本当に帰って来ないつもりなんじゃ……

「天くん……」

自分達の気持ちも伝えられずにお別れなんて、そんなのは絶対に嫌だ。

とはいえ、本人と会えないことには……

「ただいまあ……」

「あら千歌ちゃん、お帰りなさい」

落ち込みながら帰宅すると、居間では志満姉が美味しそうにおやつを食べていた。

「ん〜、やっぱり美味しいわ〜♪」

「志満姉、何食べてるの?」

聞きながらテーブルの上を見ると、『東京ば●奈』の箱が置いてあった。

あれ……?

「私が東京行つた時に買ってきたやつ、まだ残つてたの?」

「ああ、あれはもう食べ切っちゃったわよ」

笑っている志満姉。

志満姉は『東京●な奈』が大好きで、私が東京に行つた時も『絶対に買ってきて!』と念を押されたほどである。

それを食べ切ってしまったのなら、ここにあるのは一体……

「さつき天くんが来て、お土産に持ってきてくれたのよ」

「っ!?!天くんが来たの!?!」

「ええ。天くん、昨日から東京に行つてたんでしよう?『志満さんの大好物だつて聞いたので買ってきました』ですつて。もう天くんホント好き♡♡」

頬に手を当て、身体をくねらせている志満姉。

帰つて来てるつてことは、今家に行けば天くんに会える……

『・・・俺は、A q o u r s の十人目にはなれません』

「つ・・・」

あの時の天くんの言葉が頭をよぎった。

天くんに何を言えば良いんだろう・・・どうやって気持ちを伝えたら・・・

「あつ、そういえば・・・」

志満姉が机の下から、手紙用の封筒を取り出した。

「これ、天くんが千歌ちゃんに渡してくれって」

「天くんが・・・?」

おずおずと封筒を受け取る私。

開けてみると、中には一枚のCDと二枚の紙が入っていた。

「何これ・・・?」

とりあえず、一枚目の紙を見てみると・・・

「つ・・・これって・・・!」

そこに書いてあったのは、歌詞だった。丁寧な文字で、紙いっぱい書き込まれてある。

曲名の横には、『作詞：絢瀬天』と書かれており……

「ええっ!？」

その下の文字を見て、思わず大声を上げてしまう。

「作曲……西木野真姫……!？」

μ'sのメンバーの一人、西木野真姫さんの名前が書かれていた。

じゃあもしかして、このCDには……

「天くんと、西木野さんが作った曲が入ってる……?」

でも、どうしてこれを私に……?

その答えは、次の紙に書いてあった。

『これがA q o u r sのマネージャーとして、俺に出来る最後の仕事です。花火大会、頑張って下さい』

「っ……」

沼津の花火大会……今の状態では、もう間に合わないかなと思ってたけど……

天くん、動いてくれてたんだね・・・

「フフツ・・・天くんらしいや」

目に涙が浮かぶ。

全く、ホント頼りになるマネージャーだよ・・・

「・・・やっぱり、諦められないよ」

改めて思う。天くんはA q o u r sに絶対必要な存在だ。

天くんにとって、*us*が特別であるように・・・私達にとって、天くんは特別な存在なんだ。

「絶対に諦めない。天くんも・・・花火大会も」

涙を拭い、決意を固める。

私はスマホを取り出すと、隣の家にいるであろう梨子ちゃんに電話をかけるのだった。

「あ、もしもし梨子ちゃん!?!今すぐ私の家に来て!早く!」

迷いがあると心は晴れないものである。

「・・・言い残した言葉はありますか？」

「すいませんでした」

海未ちゃんに土下座して謝る俺。

東京から家に帰ってきてきてもったりしていたら、帰宅した海未ちゃんが俺を見て怒りのオーラを出し始めてしまったのだ。

事情を説明したものの、海未ちゃんの怒りは収まらず今に至っている。

「どれほど心配したと思ってるんですか？」

「心配かけてすいません」

「麻衣さんや学校に嘘をつくのが、どれほど大変だったと思ってるんですか？」

「迷惑かけてすいません」

『すいません』しか言えないんですか貴方は」

「それしか言えなくてすいません」

海未ちゃんにガチで怒られるの、久しぶりだなあ・・・

まあ俺が悪いんだけども。

「全く……」

溜め息をつく海未ちゃん。

「……まあ、天が何の理由も無くこんなことをするとは思っていませんでしたけど。せめて私には、ちゃんと理由を説明してほしかったです」

「返す言葉もございません」

まあ確かに、海未ちゃんには説明しておくべきだったかもな……

「それで？曲作りは上手くいったんですか？」

「うん、真姫ちゃんが凄く良い曲を作ってくれたよ」

俺が思い描いていたもの……いや、それ以上の出来映えだった。

流星は真姫ちゃん、本当に頼りになるわ。

「あの歌詞にピツタリな曲調だし、花火大会にも合ってるんじゃないかな。きつと良いステージになると思うよ」

「……ずるいです」

「え……？」

「ずるいですっ！私も天や真姫と一緒に曲を作れたかったです！μsの曲作りは、私達三人でやってたじゃないですかあつ！」

「あー、そうだったねえ……」

作詞が俺と海未ちゃん、作曲が真姫ちゃん……♪ sの曲作りは、基本的にこの三人でやっていったのだ。

「私だけ除け者なんて酷いですっ！何で誘ってくれなかったんですか!？」

「いや、歌詞はもう出来上がってたからさあ……」

「うう……」

涙目の海未ちゃん。

「そんなにすぐ歌詞が出来上がってたんですか？」

「まあ、題材が題材だったからね」

「何を題材にしたんですか？」

「それは花火大会までのお楽しみ」

「そんなあっ!？」

ガツクリうなだれる海未ちゃんを見て、俺は思わず笑ってしまった。

「まあ、本当に楽しみにしててよ。きつと良いステージになるからさ」

「……花火大会、間に合うんでしょうか？」

不安そうな海未ちゃん。

「天がマネージャーを辞めると宣言してから、皆もの凄く落ち込んでるんですよ？あれでは花火大会どころでは……」

「だから曲を作ったんだよ」

溜め息をつく俺。

「衣装は曜さんとルビィが先行して作り始めてたし、ダイヤさんが加わったことで三年生の分もすぐに出来上がるでしょ。振り付けやフォーメーションも果南さんや小原理事長がいるから、花丸と善子の負担は相当軽くなっただろうし。後は曲さえ出来てしまえば、花火大会には間に合うはず……だから俺と真姫ちゃんで作ったんだよ。今の千歌さんと梨子さんじゃ、すぐに作るのは難しいだろうから」

「……何だかんだ言つて、Aqoursのことを考えていたんですね」

「当たり前でしょ。『もうマネージャー辞めるんで関係ありません』って思えるほど、浅い付き合いはしてないからね」

苦笑する俺。

「……Aqoursのマネージャーとして、中途半端には終わりたいくないから。九人での初ステージを見届けて、正式にマネージャーは辞めるよ」

「……そうですか」

複雑そうな表情の海未ちゃん。

「……天がそう決めたのなら、私は何も言いません」

「……ありがとう」

俺はゆっくり立ち上がると、海未ちゃんの頭を撫でた。

「あ、そうそう・・・花火大会、真姫ちゃんも来るって」

「ええええええええええええっ!」

今日一番の大声を上げる海未ちゃん。

「ちよ、何ですか!」

「自分の作った曲がどんな形で披露されるのか、気になるから見たいんだってさ。真姫ちゃんにも見てほしいって思ってたから、ちようど良かったよ」

「私とのデートはどうなるんですか!」

「何でデートってことになってるのか、説明求む」

「男女が二人きりで出かけるんですよ!これはもうデートでしょう!」

「じゃあデートじゃないわ。男一人に女二人だもん」

「うわあああああん!」

奥の部屋へと走っていく海未ちゃん。やれやれ・・・

「・・・これで良かったんだよな」

独り言を呟く。

「俺にとつてμ、sは特別・・・」μ、sの一員として終わりたい」という気持ちは、あの頃からずっと変わってない」

だからこそ、亜里姉や雪穂ちゃんのお願ひも断った。  
それなのに……

「……何でモヤモヤしてんだろ」

Aqoursのマネージャーを辞めると宣言してから、皆の悲しそうな表情を見てから……どうにも心がスツキリしなかった。皆と過ごした日々を思い出しては、『これで良いんだろうか』という思いがよぎる。

「……これで良いんだ」

自分にそう言い聞かせていると、スマホに通知が届いた。  
チェックしてみると、千歌さんからメッセージが届いていた。

『素敵な曲をありがとう！もし花火大会に来なかったら、志満姉にチクるからね！』

「……ハハッ、それは困るな」

思わず苦笑してしまう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「ひつぐ・・・えぐつ・・・」

「ちよつとダイヤ、泣きすぎだつて・・・ぐすつ」

「果南も泣いてマース・・・うう・・・」

千歌ちゃん部屋の泣いているダイヤさん・果南さん・鞠莉さん。

その理由は・・・

「良い曲だね、これ・・・」

「そりやあこの人達も泣くわ・・・」

ルビイちゃんと善子ちゃんがしみじみと呟く。

私達は今、天くんと西木野真姫さんが作ってくれた曲を聴いていた。本当に良い曲だし、特に天くんが書いたこの歌詞・・・

ダイヤさん達にとっては、心に沁みるものだと思う。

「これ、西木野さんの歌声だよな？凄く良い・・・」

「引き込まれるずらあ．．．」  
聴き入っている曜ちゃんと花丸ちゃん。

確かに、西木野さんの歌声は素晴らしいものだった。流石はμ sの作曲担当、作る音楽も歌声も素敵だわ．．．

「花火大会は、この曲でいこうと思う」

千歌ちゃんが真剣な表情で話を切り出す。

「天くんが私達の為に動いてくれて、こんな素敵な曲を作ってくれたんだもん。私達に出来るのは、この曲にふさわしいパフォーマンスをすることじゃないかな」

「千歌ちゃん．．．」

今の千歌ちゃんには、落ち込んだり迷ったりしているような感じは一切ない。覚悟を決めた顔をしていた。

「賛成であります！」

「マルもずら！」

「頑張ルビィ！」

「ククツ、このヨハネにも異論は無い」

次々に賛成する皆。

千歌ちゃんは笑顔で頷くと、三年生達の方を見る。

「果南ちゃん、ダイヤさん、鞠莉さん……力を貸してくれる?」

「当然でしょ」

涙を拭う果南さん。

「もう私達はAqoursの一員なんだから。ね、二人とも?」

「勿論ですわ。良いステージにする為に、私達も全力を尽くしましょう」

「Yes! 久々のステージ、ワクワクするわね!」

ダイヤさんと鞠莉さんも笑顔で頷いてくれる。

スクールアイドルとしての経験がある人達がいてくれると、本当に頼もしいわね……

「曜さん、ルビィ、衣装の方はどうなっていますの?」

「私達の分はほとんど出来てます。後はダイヤさん達の方ですね」

「私もお手伝いします。三人で分担してやりましょう」

「それならすぐ仕上がりそうだね!」

「花丸ちゃん、善子ちゃん、振り付けとフォーメーションどうする?」

「ヨハネよ。振り付けは私とずら丸で、『こういう感じにしよう』っていう大まかな方

向性は考えてるわ」

「じゃあ私と果南で、フォーメーションを考えようかしら。後でお互いの出来上がったものを見て、すり合わせていきましよう」

「了解ずらー！」

それぞれ話し合いが進んでいく。これなら花火大会に間に合いそうだ。

「梨子ちゃん、私達は運営側との話し合いに専念しよう。当日の流れを把握したいし、段取りもしておかないと」

「そうね」

頷く私。本来であれば、天くんがやってくれていたであろう仕事だけど……

天くんはもう……

「……諦めちゃダメだよ」

表情を見て察したのか、私の手を優しく握る千歌ちゃん。

「まだ私達、天くんにも何も伝えられてないんだから。諦めるのは早いよ」

「千歌ちゃん……」

「花火大会のステージを成功させて、その後……天くんにもちゃんと伝えよう？ 『私達には、天くんが必要なんだ』 って」

「っ……うんっ！」

涙をこらえ、笑顔で頷く。そうよね、簡単に諦めちゃダメよね……

「夢が叶う日が来る可能性は……諦めなかった人にしか無いんだから」

前に天くんに言われた言葉を思い出し、気持ちを奮い立たせる私なのだった。

人はギャップに弱いものである。

「ようこそ沼津へ」

「・・・思ったより遠かったわ」

少し疲れた様子の真姫ちゃん。

花火大会当日、俺は沼津駅まで真姫ちゃんを迎えに来ていた。

「ここから天の家まで、まだ距離があるんでしょう？もう足がクタクタで、歩ける気がしないんだけど・・・」

「うわあ、昔はあんなに歌って踊ってたのに・・・歳を取るって怖いね」

「人をおばさんみたいに言わないでくれる!?まだ二十一なんだけど!」

「冗談だよ。お疲れ」

苦笑する俺。

「ちゃんと車を手配しといたから、心配しないで」

「車・・・?」

首を傾げる真姫ちゃんに、俺は後ろに停まっている車を指差した。

運転席の窓から美渡さんが顔を出し、こちらに向かって笑いながら手を振っている。

「・・・誰？」

「A q o u r s のリーダー、高海千歌さんのお姉さん。車を出してくれるっていうから、お言葉に甘えてお願いしちやっただけ」

「相変わらず年上の女に好かれるわね、アンタ・・・」  
呆れている真姫ちゃん。

「海未はどうしたの？」

「家で浴衣の準備してるよ。真姫ちゃんも早く行こう？」

俺はそう言うのと真姫ちゃんの荷物を持ち、美渡さんの車へと向かった。

俺達が近付いてくるのを見て、美渡さんが車から降りてくる。

「おお、この人が天の彼女さん？」

「かのっ・・・!？」

顔を赤くする真姫ちゃん。やれやれ・・・

「はいはい、からかわないの。真姫ちゃんは美渡さんと違って純粋なんですから」

「人が純粋じゃないみたいない方しないでくれる!？」

「真姫ちゃんの純粋さを舐めないで下さい。真姫ちゃんは高校生の時まで、サンタク  
ロースの存在を信じていた稀有な子なんですから」

「ちよっつと!?!その話は止めなさいよ!？」

「・・・自分がいかに汚れた人間なのか、思い知ったわ」

「何で涙ぐみながら頭を撫でるんですかっ!」

ツツコミを連発する真姫ちゃん。

ちなみに真姫ちゃんがサンタクロースの真実を知ったのは、高校三年生の時だ。真姫ちゃんのご両親が『流石にこのままではマズい』と思っただけ、真実を打ち明けたんだとか。

あの時の真姫ちゃん、見ていられないほど落ち込んでたっけなあ・・・

「それにしても、本当に美人だねえ・・・海末ちゃんもそうだけど、何で天の近くには美女か美少女しかいないの?」

「日頃の行いが良いからでしょうね」

「どの口がそんなこと言うわけ!?!」

「こんな品行方正な人間、そうそういないでしょ」

「品行方正の意味を辞書で調べてから言ってくれろ!?!」

「・・・フフツ」

俺と美渡さんのやり取りを見て、真姫ちゃんが笑いを零す。

「真姫ちゃん? どうかした?」

「いや、何て言うか・・・どこへ行っても、天は天なんだなって」

微笑む真姫ちゃん。

「こつちでも上手くやれてるみたいで、ちよつと安心したわ」

「天はもう、すつかり溶け込んでるからねえ」

笑っている美渡さん。

「四月に来たばかりとは思えないくらい、内浦に馴染んでるもん。何て言うか、昔からの知り合いみたいな感覚だよ」

「失礼な。そんなに歳は取ってないですよ」

「私だってそうだわっ！」

「ダウト」

「しばき倒すわよ!?!」

「フフツ・・・本当に変わらないわね」

俺と美渡さんのじゃれあいを、微笑みながら見つめる真姫ちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

「遅いですよ真姫！早く早く！」

「ちよ、海未!?引つ張らないですよ!」

奥の部屋から出てきた海未ちゃんが、到着したばかりの真姫ちゃんを引きずつて奥の部屋へと入っていく。

「ただ花火大会が楽しみなんだ・・・」

「私達はこれから浴衣に着替えますので、絶対に中を覗かないで下さいね!」

「そして俺に覗かれた海未ちゃんと真姫ちゃんは、鶴になつて飛んでいくんだね」

『鶴の恩返し』じゃないですよ!?!とばかりリビングで待つて下さい!」

「ちよ、少し休みたいんだけど・・・」

真姫ちゃんの訴えも虚しく、ドアを閉める海未ちゃん。

真姫ちゃん、ドンマイ・・・

「美渡さん、上がつて下さい」

「いや、放つておいて大丈夫なの・・・?」

「大丈夫ですよ。真姫ちゃんのライフがゼロになるだけなんで」

「全然大丈夫じゃなくない!」

ツツコミを入れつつ、家上がる美渡さん。

海未ちゃんと真姫ちゃんが着替えた後、また沼津まで車で送ってもらうことになつて

いるのだ。

「適当に座って下さい。今麦茶出すんで」

「おつ、サンキュー！」

ソファに腰掛ける美渡さん。俺はコップに麦茶を注いだ。

「つていうか、天はこんなにゆつくりしてて大丈夫なの？千歌はもう、とつくに会場に向かったけど？」

「・・・後のごことは運営側がやってくれるので、本番で俺に出来ることは無いんです。行っても何もすることが無いので」

「ふうん・・・そっか」

麦茶の入ったコップを美渡さんに渡す俺。

美渡さんはそれを受け取ると、一気に飲み干した。

「ふう・・・ねえ、天」

「何ですか？」

「千歌達と何かあったでしょ」

「っ・・・」

どうやら気付かれていたらしい。美渡さんが苦笑している。

「この間、千歌のヤツ凄く落ち込んでたんだよ。それでちよつと心配してたんだけど、

急に花火大会に向けて頑張り始めてさ。他のAqoursのメンバーもウチに来たりしてただけけど、天だけは一回も来なかったじゃん？だから何かあったんだろうなつて」

「・・・まあ、気付かないわけじゃないですよね」

今まで度々来ていたのに、急に来なくなったら普通は勘付くか・・・

「実は色々あります・・・」

「ストツプ」

説明しようとした俺を、美渡さんが遮った。

「何があつたかを聞くつもりは無いよ。天と千歌達の問題に、私が出しやばるべきじゃないと思うから」

「美渡さん・・・」

「まあ本来であれば、『ウチの妹を凹ませたのはテメエかああああつ！』って殴り掛かつてるところだけどね」

「思いつきり出しやばつてるじゃないですか」

思わずツツコミを入れてしまう。言ってることが違うんだけど・・・

「とはいえ、私だつて天のことを少しは知ってるつもりだよ。千歌達を大切に想つてくれることは、これまでの行動を見てれば分かるしさ」

笑っている美渡さん。

「だからまあ、一つだけ言わせてほしいんだけど・・・後悔しないようにね」

「っ・・・」

「はいっ！この話はおしまいっ！」

パンツと手を叩き、コップを俺に差し出す美渡さん。

「麦茶もう一杯！」

「・・・はいはい」

苦笑しながらコップを受け取る俺。

普段は子供みたいなノリのくせに、こういう時だけ大人なのはズルいよな・・・

そんなことを思いつつ、麦茶を注いでいる時だった。

「すみません、お待たせしました」

「ああ、疲れた・・・」

海未ちゃんと真姫ちゃんの声がある。どうやら浴衣に着替え終えたようだ。

「思ったより早かつ・・・たね・・・」

振り向いた俺は、二人の姿を見て固まってしまった。

何故なら・・・

「おおっ・・・！」

感嘆の声を上げる美渡さん。

青と赤の浴衣に身を包んだ海未ちゃんと真姫ちゃんは……目を奪われるほど美しかった。

本当に浴衣がよく似合っている。二人の顔は見慣れているはずなのに、何だかドキドキしてしまっていた。

「天？」

「どうしたの？」

固まっている俺を不思議に思ったのか、海未ちゃんと真姫ちゃんが首を傾げている。

俺は固まった口を必死に動かした。

「いや、その……ゴメン、見惚れてた」

「っ!？」

ボンツと二人の顔が赤くなる。

その様子を見て、美渡さんがニヤニヤしていた。

「いやあ、若いねえ」

「若くない人は黙ってて下さい」

「ちよ、私だってまだ若いんだけど!？」

美渡さんの抗議はスルーして、俺は二人に向き直った。

「えーっと、その・・・二人ともメツチャ綺麗。よく似合ってるよ」

「あ、ありがとうございます・・・」

「な、何か照れるんだけど・・・」

恥ずかしそうに俯く二人。

そういう反応されると、こっちも余計に照れるんだけど・・・

「っていうか、ずいぶん早かったね？」

「慣れてますから。真姫の着付けも私がやりましたし」

「あまりの早技に、全然ついていけなかったわ・・・完全に化け物ね」

「化け物って何ですか！」

「そうだよ真姫ちゃん。せめて怪物って言ってあげないと」

「一緒ですよねえ!? 真姫も天も私を何だと思ってるんですか!？」

「・・・アンタ達、ホント仲良しね」

真姫ちゃんと俺のイジりに、涙目で抗議する海未ちゃん。

それを見て、呆れた様子で苦笑する美渡さんなのだった。

届けたい想いがある。

「わあ……！」

目を輝かせている海未ちゃん。

流石はこの辺りで一番のイベントというだけあって、会場は多くの人で賑わっていた。

屋台もたくさん並んでおり、焼きそばやたこ焼き等の美味しそうな匂いが漂っている。

「片っ端から制覇しましょう！」

「子供か」

呆れている真姫ちゃん。

「つていうか、海未つて人の多いところ苦手じゃなかった？」

「それを気にしないくらい、屋台に心を奪われてるんだらうね」

「穂乃果じゃないんだから……」

溜め息をつく真姫ちゃん。

確かに今の海未ちゃんつて、穂乃果ちゃんに似てるかも……

「それで？ A q o u r s のステージはいつなの？」

「あと一時間くらいで始まる予定だよ。それまではゆっくりしてても大丈夫」

「でも、席を確保しておかないといけないんじゃない？」

「それなんだけど・・・」

俺は苦笑しつつ、ポケットからチケットを取り出した。

「実は美渡さんから、花火大会の有料観覧席のチケットを渡されたんだよね。しかも一番良い席で、ステージも花火も間近で見られるらしいよ」

「嘘でしょ!?! よくそんなチケット手に入ったわね!?!」

「・・・まあ、入手経路の予想はつくけどね」

十中八九、小原家のコネだろう。美渡さんは千歌さんから、俺に渡してくれって頼まれたって言ってたし・・・

『絶対に見に来い』っていうメッセージなんだろうな。

「・・・言われなくても行くっての」

「天？」

「天！真姫！早く行きますよ！」

少し先で、海未ちゃんがブンブン手を振っている。やれやれ・・・

「行くっか」

「ええ」

俺と真姫ちゃんは苦笑すると、先に行く海未ちゃんの後を追いかけるのだった。

\*\*\*\*\*

「んー、焼きそば美味しいですうー」

席に座り、焼きそばを頬張る海未ちゃん。

屋台を巡り色々と買い物をした俺達は、観覧席へと移動していた。  
つていうかここ、本当に特等席だな・・・

「はい真姫ちゃん、あーん」

「あーん・・・ん、美味しいわね」

「屋台で買う食べ物って、何か美味しく感じるよね」

「ちよ、ずるいですよ天！私にも『あーん』して下さいー！」

「はいはい」

苦笑しながら、海未ちゃんの口元にたこ焼きを持っていく。

と、俺の視界が真っ暗になった。背後から誰かに目隠しされたらしい。

「だ〜れだ♪」

その声を聞いた瞬間、冷や汗が止まらなくなる。

あつ、ヤバイ……

「ま、麻衣先生……?」

「ピ〜ンポ〜ン♪」

目隠しが外された瞬間、俺の首に麻衣先生の腕が回される。

「どこかの誰かさんに体調不良と嘘をつかれ、今日まで学校を休まれ、とつても心配していたのにも関わらず、美女二人を侍らせている場面を目撃して、怒り心頭のクラス担任……その名も赤城麻衣先生で〜す♪」

「本当にすいませんでしたあああああつ!」

全力で謝罪する。

俺はA q o u r sの皆と顔を合わせたくなって、東京から帰って来た後も学校を休んでいた。

麻衣先生には申し訳ないと思いつつも、体調不良という嘘をつき続けたのだ。

「体調不良じゃなかったのかな〜?美女二人とイチャイチャ出来る元気があるなら、学校くらい来れるんじゃないかな〜?」

「ちよ、麻衣先生・・・首が絞まって・・・」

「先生悲しいなく？教え子がこんなに悪い子だったなんてショックだなく？」

「あつ、ヤバい・・・意識が・・・」

「ちよ、天!？」

「麻衣さん、勘弁してあげて下さいっ!」

「・・・冗談よ」

力を抜く麻衣先生。

し、死ぬかと思っただ・・・

「っっていうか、最初から事情は知ってたわ。花丸ちゃんにルビイちゃん、善子ちゃんに

吐かs・・・教えてもらったから」

「何か物騒なこと言いかけましたよねえ!？」

「それで事態を把握して、海未ちゃんを問い詰めたの。三秒で吐かせたわ」

「そこは言い直さないんだ!？そして海未ちゃん吐くの早くない!？」

「す、すみません・・・もう隠しても無駄だと思ひまして・・・」

「全く、海未ちゃんは天くんに甘いんだから・・・」

麻衣先生は溜め息をつくつと、そのまま後ろから俺を抱き締めてくる。

「・・・最初から正直に言つてよ。私はそんなに信用出来ない!？」

「いえ、そんなことは・・・」

「もつと私を頼りなさい。分かった？」

「・・・はい、すみませんでした」

「よろしい」

優しく頭を撫でられる。

「クラスの皆も、天くんのこと心配してるんだから。ちゃんと顔見せに来てね」

「分かりました」

「そういや、何度も連絡もらってたっけ・・・悪いことしたな・・・」

「・・・ホント、年上の女に好かれるわね」

「まあまあ。大目に見てあげて下さいよ」

ちよつと不機嫌そうな真姫ちゃんを、海未ちゃんが苦笑しながら宥めてくれている。

「全く、真姫はすぐ嫉妬するんですから」

「なっ!?!別に嫉妬なんてしてないわよ!?!」

「そこが真姫ちゃんの可愛いところだけどね」

「う、うるさいっ!そんな言葉に騙されないんだからねっ!」

「大好きだよ、真姫ちゃん」

「っ・・・うう・・・」

涙目の真姫ちゃん。耳まで真っ赤になっている。

「ちよつと天くん、この可愛い生き物は何？」

「西木野真姫ちゃんです。メイドさんをやってるんですよ」

「ちよ、天!?それは言わなくていいから！」

「ええっ!?真姫がメイド!?」

「た、ただのバイトだから!ことりに頼まれただけだから!」

「西木野さん、赤城家の専属メイドになりませんか？」

「嫌ですよ!?オコトワリシマス!」

「おつ、やっぱり本家の『オコトワリシマス』は違うね」

「本家って何!?」

「麻衣ちゃん!」

聞き覚えのある声がある。

振り向くと、翔子先生がこちらへ向かってくるところだった。

「遅くなつてゴメンなさい・・・って天くん!?会いたかつた〜!」

「No!ベ〜つ〜に〜」

「げふっ!?!」

抱きつこうとしてくる翔子先生を避ける。盛大にずっこける翔子先生。

「ちよつと!?!そこは『Yes!きくみるに』でしょ!」

「A●Bはそうかもしれないませんが、AYSは違うんで」

「AYSって何!?!」

「A・YA・SEの略です」

「略す必要あつた!?!」

「つていうか、何で先生方がここにいるんですか?」

「え? 鞠莉ちゃんから『色々ご迷惑をおかけしたお詫びです』つて、観覧席のチケツトをもらつたからだけど?」

「どれだけ席確保してんのあの人・・・」

呆れる俺。

その時、周りの明りがフツと消えた。

「おつ、遂に始まるみたいね」

「ちよ、私暗いの苦手なんだけど!?!」

「じゃあ何で来たんですか貴女・・・」

俺にしがみつく翔子先生に呆れていると・・・

「皆さん!こんばんは!」

千歌さんの声が、マイクを通して響き渡るのだった。

\*\*\*\*\*

《千歌視点》

「皆さん、こんばんは！」

声を張り上げる私。

「私達は、浦の星女学院スクールアイドル・・・セーのっ！」

「「「「「「A q o u r sですっ！」「「「「「「」

九人で自己紹介した瞬間、ステージが眩い光に照らされる。

観覧席の人達からは、私達が暗闇の中に浮かび上がっているように見えるだろう。

「僭越ではありますが・・・この花火大会を盛り上げるべく、私達A q o u r sが一曲披露させていただきます！と思います！」

たくさんの拍手が聞こえてくる。こちらからではよく見えないが、かなりのお客さんがいるんだろう。

問題は・・・

「天くん……」

隣の梨子ちゃんが小さく呟く。

美渡姉からは『会場まで車で送り届けて、チケットも渡した』と連絡をもらったけど……来てくれてるかな……

「……大丈夫」

曜ちゃんが私の手を握った。

「きつと来てくれてる。信じよう？」

微笑む曜ちゃん。

私も笑みを浮かべて小さく頷くと、再び観覧席の方を向いた。

「今日披露する曲は……私達の大切な人が作ってくれた曲です！」

「その人は、いつでも私達を支えてくれました！」

私に続き、声を張り上げる曜ちゃん。

「どんなに心が折れそうな時でも、その人のおかげで乗り越えることができました！」

「いつでも私達の味方をしてくれて、いつでも私達を励ましてくれました！」

泣きそうな表情で叫ぶ梨子ちゃん。

「その人がいなくなったら……今の私達はいません！」

「不安な時は寄り添ってくれる、とても優しい人です！」

凜とした表情のルビィちゃん。

「いつも勇気をくれるその人には、本当に感謝しています！」

「そつと背中を押してくれる、頼れる人です！」

微笑んでいる花丸ちゃん。

「その人に出会えて、本当に良かったと思っています！」

「いつもいつもボケるから、ツツコミが本当に大変だけど！」

苦笑している善子ちゃん。

「それでも・・・その人の優しさに、私は救われました！」

「ちよつとエツチだし、よく人をおちよくつてくるけど！」

笑っている果南ちゃん。

「その人と一緒にいると、本当に安心することが出来ます！」

「人を思いやることの出来る、本当に心の優しい人です！」

穏やかな笑みを浮かべるダイヤさん。

「あの人の前では、ありのままの自分でいられます！」

「昔から本当に変わらない・・・人を包み込んでくれる人です！」

力強く叫ぶ鞠莉さん。

「皆から愛される・・・私も大好きな人です！」

「そんな私達にとつて大切な人が、私達の為に作ってくれた曲……初めて聴いた時、思わず涙が出てしまいました」

歌詞が三年生の三人に、そして私達の気持ちにシンクロして……皆で聴く前に梨子ちゃんと二人で聴いたのだが、二人揃って泣いてしまった。

「この曲には、その人の心がこもっています！」

「だから私達も、心をこめて歌いたいと思います！」

「その人に、私達の気持ちが届くように！」

「日頃の感謝の気持ちを！」

「その人のことが大好きだつていう気持ちを！」

「私達にとつて、かけがえのない人なんだつていう気持ちを！」

「その人が作ってくれた曲にのせて！」

「私達なりに精一杯頑張つて！」

「その人に届くと信じて……歌います！」

鞠莉さんがそう叫ぶのと同時に、それぞれが開始位置に移動する。

そして……

「それでは……聴いて下さい！」

「「「「「「未熟DREAMER！」」」」」」」

曲が流れ出すのだった。

想いのこもった言葉は心に響くものである。

「ぐすつ……うう……」

「いつまで泣いてんのよ……」

「ひっぐ……だつてえ……」

泣きじやくる海未ちゃんを、呆れながらも擦ってあげている真姫ちゃん。

ライブも花火も終わり、周りのお客さん達は立ち上がって帰宅の途につこうとしていた。

「……良いステージだったわね、翔子ちゃん」

「ええ……ぐすつ」

涙ぐむ翔子先生の頭を、優しく撫でている麻衣先生。

二年前のA q o u r sを知っている二人としては、今日のライブは感慨深いものがあつたんだろう。

「今は帰る人が多いし、動かない方が良さそうね」

辺りを見回す真姫ちゃん。

「周りがもう少し落ち着いてから帰りましょう、天……天？」

俺の様子に気付き、首を傾げる真姫ちゃん。俺はステージの方をじっと見つめていた。

今は誰も立っていないし、暗闇に包まれているが・・・先ほどまでのライブを思い出していたのだ。

本当に良いライブだった。初めてとは思えないほど、九人の息がピッタリ合っている・・・

何より、皆の想いが伝わってくるライブだった。

「・・・全く」

小さく呟く俺。

「ホント・・・勘弁してほしいよ」

「天、貴方・・・」

驚いている真姫ちゃん。俺の目からは、涙が溢れていた。

「こんなライブ見せられたら・・・決心が鈍っちゃうじゃん」

俯く俺。涙が滴り落ちる。

「こんなことなら、曲なんて作らなきゃ良かった・・・」

「・・・天」

海未ちゃんにそっと抱き寄せられる。

「もしAqoursの一員になることが、μ'sに対する裏切りだと考えているのなら……それは違いますよ」

優しく頭を撫でられる。

「たとえば貴方が、Aqoursの一員になろうとも……貴方がμ'sの一員であることに、何も変わりないのでから」

「海未ちゃん……」

「全く……海未から事情は聞いていたけど、そんなに悩んでたのね」

俺達を包み込むように、優しく抱き締める真姫ちゃん。

「天は間違いなく、μ'sの……私達の大事な仲間よ。どんなことがあっても、それは絶対変わらない。私達の絆は永遠なもの」

「真姫ちゃん……」

「もし天の中に、『Aqoursの皆と一緒に頑張りたい』っていう気持ちがあるなら……素直にその気持ちに従いなさい。じゃないと、後で絶対に後悔するわよ」

「おお、素直じゃない人が言うと言われますね」

「何ですって!?!ラブアローシューターに言われたくないんだけど!?!」

「ちよ、人の黒歴史を持ち出すの止めてくれます!?!このツンデレメイド!」

「アンタもそれを持ち出すの止めなさいよ!?!」

「・・・ハハッ」

思わず笑ってしまおう。

本当に・・・変わらないな、二人とも。

「海未ちゃん、真姫ちゃん・・・ありがとう。大好き」

「っ!？」

「ま、またそういうことを照れもせずにつ・・・!」

顔を真っ赤にする二人。

こういうところも変わらないなあ・・・

「ちよつと行つてくるよ・・・皆のところに」

「ええ、行つてらっしゃい」

「ちゃんと話してきなさい」

笑顔で送り出してくれる二人。

「天くん、皆によろしくね」

「良いライブだったって伝えといてね」

「了解です」

翔子先生と麻衣先生の言葉に頷く。

「じゃ、行つてきます!」

俺はそう言うのと、A q o u r sの皆のところへと向かうのだった。

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「……終わったね、ライブ」

「……うん」

千歌ちゃんの言葉に頷く私。

ライブ終了後、私達はステージ裏の待機スペースにいた。衣装も着たまま、皆それぞれ椅子に座ってぐったりしている。

「き、緊張したあ……」

「いっぱい人がいたずらあ……」

「しばらく立ち上がれないかも……」

緊張状態が解け、椅子にもたれかかるルビイちゃん・花丸ちゃん・善子ちゃん。

「ライブなんて久しぶりだったねえ……」

「何だか懐かしかったですわね……」

感慨深そうな果南さんとダイヤさん。一方、鞠莉さんは俯いていた。

「鞠莉さん、大丈夫ですか?」

「平気よ。ありがとう」

気遣って声をかける曜ちゃんに、笑みを浮かべる鞠莉さん。

「ライブは本当に楽しかったんだけど……私達の想い、天に届いたのかなって」

「っ……」

そう、そこが一番の問題だ。

私達なりに精一杯、想いを込めたつもりだけど……天くん、ちゃんと見てくれたか

な……

「……会いに行きましょう」

「え……?」

立ち上がる私を、千歌ちゃんが驚いたように見つめる。

「ライブにも想いは込めたけど……本人に会って、ちゃんと言葉にして伝えたいの。天くんが学校に来るのを待つより、私達の方から行った方が良いと思う」

「梨子ちゃん……」

あの日以来、天くんは学校を休んでいる。私達もライブの準備に追われていて、天く

んに会うことが出来なかった。

そのライブが終わった今・・・ちゃんと天くん会いに行くべきだと思う。

「・・・そうだね。よし、会いに行こう！」

勢いよく立ち上がる千歌ちゃん。

「天くんのところへ！全速前進、ヨーソロー！」

「クツクツクツ・・・このヨハネが特別に、我がリトルデーモンの下へ召喚されてやろうではないか」

「しばらく立ち上がれないって言ってたくせに、もう立ち上がってるぞら」

「やっぱり善子ちゃん、天くん大好きっ子だよね」

「う、うるさいっ！」

「待つのは性に合わないからね。こっちから行ってやろうじゃん」

「ほら鞠莉さん、行きますわよ」

「・・・ええ、行きましょう！」

「行くぜ、東北」

次々と皆が立ち上がって・・・ん？

「ちよつと待って。何か最後の人おかしくなかった？」

「最後の人？」

「そういえば、『行くぜ、東北』って……」

「ちよつと、誰よそんなセリフ言ったの？」

「今はボケるタイミングじゃなかったすら」

「そうだよ。割と真面目な雰囲気だったのに」

「まあまあ。今はそれを気にしてる場合じゃないでしょ？」

「そうですね。唐突なボケに惑わされてはいけません」

「早く天のところへ行きましょう」

「そうだ。京都、行こう」

「ちよ、また!?!いい加減に……」

思わず声のした方を振り向いた私は、固まってしまった。他の皆もその方向を見て驚いている。

そこには……

「んー、美味しい」

椅子に座ってチヨコバナナを食べている天くんがいた。

「な……」

「な……?」

「何でいるのよおおおおおおおおつ!?!」

「うおっ!? ビックリしたあ・・・」

「ビックリしたいのこつちだから! 何やってるの!」

「チョコバナナ食べてます」

「そういうことじゃなくて! そもそもいつからいたの!」

『・・・終わったね、ライブ』からです」

「最初からじゃない!? 何で声かけてくれなかったの!」

「チョコバナナ食べてたんで」

「私達よりチョコバナナを優先したの!」

「当然でしょうが! 暑さでチョコが溶けて垂れたらどうしてくれるんですか!」

「何で私が怒られてるの!」

「マズい!? 完全に天くんワールドに引きずりこまれてる!」

「あ、そうだ。ライブお疲れ様でした」

「何その『ついでに言っておこう』みたいな感じ!」

「差し入れてたこ焼き買ってきたんで、良かったら食べて下さい」

「えっ!? ホント!」

「お腹空いたぞら!」

「千歌ちゃんと花丸ちゃんは食いつかないのっ!」

「とまあ、おふざけはこの辺にして……」

チヨコバナナを食べ終えた天くんは椅子から立ち上がり、私達を見回した。

「九人での初ステージ……良かったですよ」

「っ……」

「どうやら、ちゃんと見ていてくれたらしい。」

「やっぱり三年生の三人が加わって、グループとして安定しましたね。A q o u r s はこの形でいくのが、一番良いんじゃないでしょうか」

笑みを浮かべる天くん。

「細かいところはともかく、全体的に良かったと思います。大成功と言って良いです」

「……ありがとう」

微笑む千歌ちゃん。

「天くんがプレゼントしてくれた曲のおかげだよ。本当に感謝してる」

「真姫ちゃんが作曲してくれたおかげですよ。俺の想像以上に良い曲を作ってくれたので、歌詞が生きました」

「勿論、曲自体も凄く良かったけど……あの歌詞が、凄く心に刺さったんだ。特に三年生の皆には、ね」

「本当にね」

笑っている果南さん。

「あの歌詞の題材、どう考えても私達だよね？」

「ええ、その通りです」

頷く天くん。

「三人のすれ違いを題材にするのも、どうかと思つたんですが・・・もう一度 A q o u r s としてやっていく以上、向き合う必要があるかと思ひまして」

「ええ、感謝していますわ」

ダイヤさんが穏やかな笑みを浮かべる。

「あのような素晴らしい曲になったんですもの。私達のすれ違いが、無駄なものにならずに済みましたわ」

「そう言つていただけるとありがたいです」

笑う天くん。

「ありがたいと言えば・・・嬉しかったですよ、ライブが始まる前の言葉」

「・・・ちゃんと聞いてくれた？」

「勿論。つていうか善子、俺ボケまくつてるつもり無いんだけど」

「どの口がそんなこと言うの!？」

「あと果南さん、『ちよつとエッチ』つてどういうことですか。まるで人が常日頃から

セクハラしてるみたいじゃないですか」

「いや、普通にセクハラ発言してるよねえ!？」

「記憶にございません」

「政治家!？」

「全く、これだからおっぱいが大きい人は・・・」

「それだよ!?!それがセクハラ発言なんだよ!?!」

「ちよつと何言ってるか分かんないです」

「何ですよ!？」

「つていうか、現在進行形でボケまくってるでしょうが!」

果南さんと善子ちゃんのツツコミ。大変そうだなあ・・・

「・・・まあとにかく、嬉しかったです。ありがとうございました」

一礼する天くん。私は一步前に進み出た。

「この間は・・・叩いちゃってゴメンなさい」

謝る私。

「私達はこれからも、天くんにもマネージャーをやってほしいと思ってる。天くんにとって、μ sが特別な存在であるように・・・私達にとつて、天くんは特別な存在だから」

私は天くんに頭を下げた。

「お願いします。これからも、私達のマネージャーをやって下さい」

「梨子さん……」

複雑そうな表情の天くん。

と、花丸ちゃんとルビイちゃんが側にやって来る。

「天くんがいてくれないと、ルビイ寂しいよ……」

「マルもずら。天くんに側にいてほしいずら」

「ルビイ……花丸……」

「……私だって同じよ」

俯く善子ちゃん。

「天がないなんて……そんなの嫌。これからも支えてよ……」

「善子……」

「……皆同じ気持ちなんだよ」

切ない表情で訴えかける果南さん。

「皆、天のおかげで今ここにいるんだもん。本当に感謝してる……だからこそ、天がないなんて考えられないの」

「その通りですわ」

泣きそうな表情のダイヤさん。

「天さんのおかげで、もう一度果南さんや鞠莉さんとスクールアイドルをやれることになったのです。素晴らしい後輩達と一緒に、スクールアイドルをやれることになったのです。そこに天さんがいないなんて・・・私は絶対に嫌ですわ」

「果南さん・・・ダイヤさん・・・」

「お願いだよ、天くんっ・・・」

目に涙を浮かべている曜ちゃん。

「これからも・・・一緒に頑張ろうよっ・・・」

「曜さん・・・」

「ゴメンなさい、天・・・」

涙を流している鞠莉さん。

「貴方の過去を知りながら、私は貴方を利用しようとした・・・本当にゴメンなさい」

「小原理事長・・・」

「その私が、こんなワガママを言えた義理じやないのは分かってる。それでも・・・深々と頭を下げる鞠莉さん。」

「私はっ・・・天と一緒にいたいっ・・・!」

「・・・これが、私達の心からの気持ち」

真剣な表情の千歌ちゃん。

『μ sの一員として終わりたい』っていう天くんの気持ち、無視するような形になつちやつて本当に申し訳ないんだけど・・・それでも、これが私達の本心なんだ」

「千歌さん・・・」

「皆、天くんのごことが大好きなの。かけがえのない人だと思つてるの。だから・・・」  
千歌ちゃんの目から、涙が溢れ出す。

「これからもっ・・・一緒にいてよっ・・・!」

「っ・・・」

天くんの頬を、一筋の涙が伝った。

千歌ちゃんも曜ちゃんも、花丸ちゃんもルビィちゃんも、善子ちゃんも果南さんも、ダイヤさんも鞠莉さんも、そして私も・・・涙が止まらなかつた。

やがて少し落ち着いた頃・・・天くんがポツリと呟いた。

「・・・良いんですか?」

「え・・・?」

「・・・本当に、俺で良いんですか?」

震える声で問う天くん。

「当たり前じゃん。天くんじゃなきゃダメなんだよ」

「・・・A q o u r s の十人目になる覚悟、出来てませんか？」

「それでも良いよ」

「・・・μ, s の十人目だと思つてますよ？」

「それでも大丈夫ずら」

「・・・A q o u r s より、μ, s の方が特別だと思つてますよ？」

「過ごした時間が違うもん。ちゃんと分かつてるよ」

「・・・ボケ倒しますよ？」

「じゃあツツコミ倒してやるわよ」

「・・・セクハラ発言しますよ？」

「本当に嫌だったら、ツツコミ入れたりしないよ」

「・・・またブチギレるかもしれないよ？」

「意味も無く怒ったりしない人だということは、よく分かっているつもりですわ」

「・・・利用価値なんてありませんよ？」

「一緒にいられるだけで、天は十分に価値のある人よ」

「天くん」

呼びかける私。

「私達のマネージャーとして、仲間として・・・一緒にいてくれる？」

「っ……はいっ」

涙を流しながら、微笑んで頷く天くん。

「マネージャー……やらせてもらいます」

「っ……」

我慢の限界だった。

涙腺が崩壊した私は、勢いよく天くんの胸に飛び込んだ。

「うわああああああああああんっ！」

「梨子さん、泣き過ぎですって……」

苦笑しながら頭を撫でてくれる天くん。

と、そこへ……

「天くううううううううんっ！」

「ヨソ口おおおおおおおっ！」

「ずらああああああああっ！」

「びぎいいいいいいいいっ！」

「天ああああああああっ！」

「ハグううううううううっ！」

「びぎやああああああああっ！」

「シャインiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ！」

「ちよ、全員来たら潰れるからああああああああああっ!？」

号泣しながら抱きついてくる九人の重みに潰され、悲鳴を上げる天くんなのだった。

離れていても繋がっているものがある。

『・・・そっか。内浦に残るんだね』

残念そうな声の亜里姉。

あの後家に帰ってきた俺は、亜里姉に『帰らない』ということ伝える為に電話をかけた。

A q o u r s のマネージャーを続けると決めた以上、東京に帰るわけにはいかないから・・・

「ゴメン、亜里姉・・・」

『ううん、私の方こそゴメン・・・この間の電話で、わがまま言っちゃって』  
苦笑している亜里姉。

『天が帰って来ないのは残念だけど・・・理由を聞いて、ちよつと安心した』

「え・・・?」

『μ s が解散してから、天はスクールアイドルに関わろうとしなくなったから・・・正直心配してたの。私と雪穂がマネージャーを頼んだ時も、断られちゃったし』

「・・・ゴメン」

『あ、責める気なんて全く無いの！今回天がAqoursのマネージャーになったって知って、本当に嬉しかったんだ。天がまたスクールアイドルに関わるんだって』

「亜里姉……」

『Aqoursの動画、私もチェックしてるんだ。今回の九人での初ステージも、アツプされる予定なんでしょ？天と真姫さんが作った曲を歌うAqours……早く見たいなあ』

「うん。凄く良いから、楽しみにしてて」

笑みを浮かべる俺。

「それと……夏休みに入ったら、一度そつちに顔出すよ」

『えっ、それって……』

「そろそろ、ちゃんと話そうと思うんだ……絵里姉と」

『っ！』

息を呑む亜里姉。

『ほ、本当に……？』

「うん」

苦笑する俺。

「とりあえず一学期が終わるわけだし、成績とかの報告も兼ねて会いに行くよ。ラブ

ライブもあるから、いつ行けるかはまだ分からないけど」

そう、この夏休みにはラブライブが開催される。Aqoursも参加する以上、この夏休みはハードな練習をすることになるだろう。

まずはしっかりと予選を突破すること・・・アキバドームのステージには、決勝に進んだグループしか立てないのだから。

「まあ一番カッコ良いのは、決勝に進んで東京に行くことなんだけどね」

『フフツ、そうなると良いね』

笑っている亜里姉。

『じゃあ、会えるの楽しみにしてるからね』

「うん、またね」

電話を切る俺。

と、海未ちゃんと真姫ちゃんがリビングに入ってきた。

「お風呂いただきました」

「全く・・・見事に酔い潰れたわね」

リビングの床に転がる麻衣先生と翔子先生を見て、呆れている真姫ちゃん。

花火大会が終わった後、海未ちゃんが麻衣先生と翔子先生をウチに誘ったらしい。

俺がAqoursの皆と別れて家に帰ってきた時には、二人とも既に出来上がって

たっけ……

「そういえば、海未ちゃんはいつも酔い潰れないよね」

「そもそもそんなに呑みませんから。付き合い程度には呑みますけど」

「へえ……真姫ちゃんは？」

「私、これぐらいじゃ潰れないから」

「あ、酒豪だったのね……」

真姫ちゃんの意外な一面を見たな……

「天、誰かと電話していたのですか？」

「ああ、亜里姉だよ。『A q o u r s のマネージャーをやるから、東京には帰れない』つ

て伝えたんだ」

「……そうですか」

「……海未ちゃんの気持ちは、ここに来た頃と変わらない？」

「いえ……少し変わりましたかね」

微笑む海未ちゃん。

「最初はただ、天に帰ってきてほしいと思っていましたが……A q o u r s の皆と触れ合って、天がマネージャーとして頑張る姿を見て……応援したいと思うようになり  
ました」

「海未ちゃん・・・」

「勿論、近くに天がないのは寂しいですが・・・離れていても、私達の心は繋がっていますから」

「ずいぶん変わったわね、海未」

笑っている真姫ちゃん。

「浦の星に教育実習に行くことになった時は、『絶対に天を連れ戻してみせます!』って宣言してたのに」

「あ、あれはもう忘れて下さい!」

「フフツ・・・まあ、私も海未と同じ気持ちよ。頑張つてね、天」

「うん。ありがとう、真姫ちゃん」

俺は椅子から立ち上がると、二人の下へ歩み寄り・・・そのまま抱きついた。

「天?」

「どうしたの?」

「・・・何となく、こうしたいなって」

俺の言葉に、二人は顔を見合わせ・・・同時に笑みを浮かべた。

「フフツ、天は甘えん坊ですね」

「・・・それは否定できないかな」

「まあ、そこが天の可愛いところなんだけどね」

笑いながら俺の背中に手を回す真姫ちゃん。

「海未も言つてたけど……離れていても、私達の心は繋がってる。それを忘れないで」

「……うん」

「そしてこれも忘れないで下さい」

海未ちゃんの額と俺の額が触れ合う。

「どんな時でも、私達は天の味方です。助けが必要になった時は呼んで下さい。どこ

にいても、何をしていても……必ず駆けつけますから」

「……ありがとう」

二人の身体に回している腕に、ギュっと力を込める。

「……もう少しだけ、このままでもいい？」

「ええ、勿論」

「天の気が済むまで、いつまでも」

優しく微笑み、そっと俺を抱き締めてくれる真姫ちゃんと海未ちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

「お世話になりまじだあああああああああつ！」

「海未ぢやあああああああああつ！」

「私達のごど、忘れないでねえええええええええつ！」

「今生の別れか」

号泣しながら抱き合う海未ちゃん・麻衣先生・翔子先生に、呆れながらツツコミを入れる俺。

花火大会から数日が経過した昨日、浦の星女学院は一学期の終業を迎えた。

それに伴い海未ちゃんの教育実習も終了し、俺達は今日東京へ帰る海未ちゃんを駅まで見送りに来たのだった。

「どんだけ仲良くなつてんのよ・・・」

溜め息をつく真姫ちゃん。

花火大会の日にこちらへ来て以来、今日まで真姫ちゃんも内浦に滞在していた。

最初から海未ちゃんと一緒に東京に帰るつもりだったらしい。

「真姫さん、色々ありがとうございますございました」

「ここにこそありがとう。楽しかったわ」

お礼を言う梨子さんに微笑む真姫ちゃん。ここ数日、真姫ちゃんにもA q o u r sの練習を見てもらっていたのだ。

皆が真姫ちゃんに色々と質問する中、特に熱心に質問をしていたのが梨子さんだった。お互いピアノ経験者で作曲担当ということもあり、色々と聞きたいことがあつたらしい。

ちなみに千歌さん・ルビィ・ダイヤさんのスクールアイドル大好きトリオは、ちゃっかり真姫ちゃんからサインをもらって大喜びしていた。

「貴女達は、これからもつと伸びるわ。私も応援してるから、頑張つてね」

「「「「「「はいっ！」「」」」」」」

「ぐすつ・・・伸びるのは当然です」

涙をハンカチで拭い、顔を上げる海未ちゃん。

「何と言っても、天がマネージャーを務めるのですから」

「フフツ、そうね。伸びる以外有り得ないわね」

「何ハードル上げてくれちゃってんの？」

全く、この人達は・・・と、小原理事長が神妙な表情で前に進み出る。

「あの、園田先生・・・今回は本当に・・・」

「ストップ」

謝罪しようとした小原理事長を、海未ちゃんが制止する。

「天は貴女を許し、自らA q o u r s のマネージャーになる道を選んだ……その事実が全てです。そもそも、貴女が私に謝る理由など無いでしょう」

「でも私は、園田先生が大切に想っている天を傷付けて……」

「それなら貴女が謝るべきは、私ではなく天でしょう。そして貴女は天に謝り、許しを得た……ですから、私に謝る必要などありません」

溜め息をつく海未ちゃん。

「謝るべきなのは私の方です。感情に身を任せ、貴女を叩いてしまった……怒っていたとはいえ、アレは流石にやり過ぎました。申し訳ありません」

「そ、そんな!」

逆に謝られてしまい、慌てる小原理事長。

「悪かったのは私の方で……!」

「……もう良いんですよ」

海未ちゃんはそう言うのと、小原理事長に近付き……そつと抱き締めた。

「もうこれ以上、自分を責めるのは止めなさい。仲間達と一緒に、前を向いて進んで良いんですよ」

「……」

小原理事長の目から、涙が零れ落ちる。

「天のこと、頼みましたよ……鞠莉」

「つ……はい、海未先生つ……!」

海未ちゃんの腕の中で泣きじやくる小原理事長。ちゃんと和解できたようだ。

「……鞠莉も律儀よね。μ sのメンバー全員に謝るつもりかしら?」

苦笑する真姫ちゃん。

実は小原理事長、真姫ちゃんにも自分のやったことを打ち明けて謝罪していたらしい。

後で真姫ちゃんからその話を聞いた時は、海未ちゃんと二人で驚いたっけなあ……

「あの人なりのケジメ、なんじゃないかな。そこまでする必要無いのに……」

「そう思うなら、天が言っただけなら良いじゃない」

「……俺が何か言ったところで、あの人は自分の意思を曲げたりしないよ。そういう性格だからね」

「……鞠莉のこと、ずいぶん理解してるのね」

「あ、妬いた?」

「……少しだけ」

「真姫ちゃんが可愛すぎて辛い」

「ちよ、抱きつかないでよ!？」

「あ、じゃあ止め・・・」

「し、仕方ないから許してあげる!」

「安定のチョロ可愛さ」

「さつきから何イチャイチャしてるんですかっ!」

真姫ちゃんとしゃれ合っていると、海未ちゃんが怒った表情でこちらに迫ってくる。

「天は私との別れが寂しくないんですか!？」

「静岡と東京じゃん。いつでも会えるって」

「薄情すぎません!?!今まで一つ屋根の下で暮らしていたというのに!」

「一つ屋根の下じゃ無くなっても、空は繋がってるから」

「何ですかその某ドラマみたいなセリフは!?!」

「みくくんなくそくらくのくしくたく♪」

「絢●!?!」

「とまあ、冗談はさておき・・・」

俺は苦笑すると、海未ちゃんを優しく抱き締めた。

「・・・ありがとね、海未ちゃん。俺の為に内浦まで来てくれて」

「天・・・」

「久しぶりに海未ちゃんと一緒の時間が過ぎて、本当に楽しかったよ。海未ちゃんは絶対良い先生になれる。俺も海未ちゃんに負けないように、A q o u r s のマネージャー頑張るからね」

「・・・もう、天はズルいですね」

抱き締め返してくる海未ちゃん。

「私も楽しかったです。ありがとうございます」

「・・・絵里姉のこと、よろしくね。俺も夏休み中に会いに行くから」

「勿論です。大切な仲間ですから」

「っていうか、帰って来る時は連絡しなさいよ。皆待つてるんだから」

「うん。ありがとうね」

真姫ちゃんの言葉に頷く俺。

久しぶりに、穂乃果ちゃん達にも会いたいな・・・

「あつ、電車来たわよ」

「・・・もうそんな時間ですか」

名残惜しそうな海未ちゃん。こちらを振り向き、寂しそうな笑みを浮かべる。

「麻衣さん、翔子さん・・・本当にありがとうございます」

「うう・・・こちらこそありがとう・・・」

「またいつでも遊びに来てね．．．ぐすつ」  
泣きじやくつている麻衣先生と翔子先生。

「千歌、曜、梨子、花丸、ルビィ、善子、ダイヤ、果南、鞠莉：：ラブライブ、頑張つて下さいね」

「はいっ！」

「ヨーソロー！」

「頑張ります！」

「お世話になりました！」

「また会いましょう！」

「ヨハネよっ！またねっ！」

「お身体に気を付けて」

「今度ウチのお店にも来て下さいね！」

「ありがとうございます！」

元氣よく返事をする皆。

「天．．．応援してますからね」

「ありがとう、海未ちゃん」

笑みを浮かべる俺。電車がホームに到着し、ドアが開く。

「じゃあ天、またね」

「うん。真姫ちゃんも色々ありがとう」

電車に乗り込む真姫ちゃんに手を振る俺。続いて海未ちゃんが電車に乗り込む。

「あっ・・・そうでした」

「海未？」

何か呟いた海未ちゃんに、首を傾げる真姫ちゃん。

海未ちゃんは真姫ちゃんに荷物を預けると、電車を降りて俺に駆け寄り・・・

「・・・んっ」

「っ!？」

俺の頬にキスをした。

「「「「「「「「ええええええええええええっ!?!」「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「おおっ・・・!」

驚いているA q o u r sの皆と真姫ちゃん。

麻衣先生と翔子さんだけ、感心したような表情でこちらを見ていた。

「え、ちよ・・・海未ちゃん!？」

「フフツ」

悪戯っぽく笑う海未ちゃん。

「あんじゆさんに負けていられないので、私もやってみました」  
颯爽と駆け戻り、電車に乗り込む海未ちゃん。

「色々とお世話になったお礼です。また会いましょうね、天」

「ちよ、海未!?!アンタ何やって・・・」

ドアが閉まり、真姫ちゃんの声が途絶える。

笑顔の海未ちゃんと騒いでいる真姫ちゃんを乗せ、電車は駅を出発していった。

「やるわねえ、海未ちゃん」

「見てるこつちがキユンとしちやったわ」

ニヤニヤしている麻衣先生と翔子先生。全く・・・

「・・・やってくれるね、海未ちゃんは」

思わず苦笑してしまう。

あの海未ちゃんに、頬にキスされる日が来るなんて・・・初対面の時から考えられないな・・・

「うわあ・・・」

「だ、大胆だねえ・・・」

「全く・・・これだから天くんは・・・」

ちよっと顔を赤くしている千歌さんと曜さんに、不機嫌な表情で呟いている梨子さ

ん。

「ず、ずらあ……」

「ぴ、ぴぎい……」

「仲良しのレベルを超えてるわね……」

絶句している花丸とルビィに、呆れている善子。

「キ、キス……!?!」

「ア、アハハ……ちよつとビックリしたかも……」

「流星は海未先生デース♪」

困惑しているダイヤさんと果南さんに、ちよつと楽しそうな様子の小原理事長。

それぞれ反応が違って面白いな……

「……さて、行きましようか」

「うんっ!」

元氣よく返事をした千歌さんを先頭に、皆がぞろぞろと後に続く。

俺も後に続いていったが、ふと電車が走っていった方に目をやった。

「天くん?」

「どうしたの?」

俺が立ち止まったことに気付いた麻衣先生と翔子先生が、声をかけてくれる。

「いや・・・本当に帰っちゃったんだなって」

正直、ちよつと寂しかった。海未ちゃんとの生活、楽しかったしな・・・

「・・・寂しい気持ちは分かるけど、天くんは一人じゃないのよ」

麻衣先生が微笑み、前方を指差す。そこには・・・

「おーい！天くん！」

「何してるのー？」

「置いていっちゃうわよー！」

「早く来るずらー！」

「お昼ご飯、皆で一緒に食べよう！」

「お腹すいたし、アンタも来なさいよー！」

「その後は練習ですわよー！」

「みっちりやるよー！」

「頼むわよ、マネージャー！」

皆が笑顔で俺を呼んでいた。皆・・・

「ほら、行ってらっしゃい。皆が呼んでるわよ」

笑いながら俺の背中を押す翔子先生。

そうだよな、寂しがってる暇なんてないよな・・・

「・・・そうですね。行つてきます！」

笑みを浮かべ、皆のところへ駆け出す俺。

μ, sに続く、新しい仲間達・・・A q o u r sとのこれからは、期待を膨らませる俺なのだった。

いつもと様子が違うと気になるものである。

「あゝ、快適・・・」

冷房の効いたリビングで、ソファに寝そべっている俺。

外は三十度を超える真夏日らしいが、家から出なければそんなことは関係無い。

夏休みに入ったから、学校に行く必要も無いしな。

「さて、ちよつと昼寝でもしようかなあ・・・」

ゆつくりと目を閉じたその時・・・

『できる〜！できる〜！君ならできる〜！』

よりよつて、日本で一番熱い人の歌が流れ始めた。

言わずと知れた、俺のスマホの着信音である。

「誰だよ・・・」

若干イラツとしながらスマホを見ると、ダイヤさんからだった。

どうしたんだらう？

「ピッ・・・もしもし？」

『今どこにいるのですかああああああああああつ！』

「うおっ!？」

大声にビックリしてしまふ俺。

「ちよ、ダイヤさん? どうしたんですか?」

『どうしたもこうしたもありませんわ! 今どこにいますの!』

「いや、家ですけど」

『今日はA q u o r sのミーティングを行なうので、十二時に部室に集合という話  
だったはずでしょう!』

「・・・聞いてませんけど?」

『・・・はい?』

「ですから、聞いてませんけど?」

俺の記憶が正しければ、そんな話を聞いた覚えは一切無い。

昨日海未ちゃんと真姫ちゃんが東京に帰った後、皆で『夏休みはラブライブがあるか  
ら頑張ろう』とは話し合ったけど・・・

『・・・千歌さん、天さんに伝えていないのですか?』

『・・・あつ』

『何をしているのですか貴女はああああああああああつ!』

『ゴメンなさあああああああいつ!』

電話越しに千歌さんの悲鳴が聞こえる。

え、何がどうなってるの？

『もしもし？天？』

「あ、果南さん」

今度は果南さんの声が聞こえた。

『ゴメンね。何が何だか分からないでしょ？』

「とりあえず、千歌さんが何かやらかしたってことは分かりました」

『アハハ、その通り』

苦笑している果南さん。

『昨日の夜に千歌とダイヤが電話して、今日ミーティングをやるうって決めたらいいんだ。私と鞠莉にはダイヤが、花丸ちゃんと善子ちゃんにはルビィちゃんが、曜と梨子ちゃんと天には千歌が連絡するはずだったらしいんだけど・・・天にだけ連絡するの忘れてみたいだね』

「何サラツとハブってくれちゃってるんですか、あのアホみかん」

『天くんじゃなきやダメなんだよ』というあの言葉は、一体何だったのか・・・

「よし、東京に帰ろう」

『ちよつと!?!それは勘弁してよ!?!』

「かくえろろくうかく、もうかくえろくうよく♪」

『木山●策じゃん!』』

「かくえろりくたくくなくったよく♪」

『それはいきも●がかりだよねえ!?!お願いだから思い留まって!?!』  
必死に説得してくる果南さん。

仕方ない、果南さんに免じて帰るの止めよう。

「まあ、一割の冗談はさておき・・・」

『九割は本気だったの!?!』

「ぶつちやけた話、暑いから外に出たくないんですよね」

『ホントにぶつちやけたね!?!まあ確かに暑いけどさあ!』

「そういうわけなんで、こつち来てもらって良いですか?」

『こつちつて?』

聞き返してくる果南さんに、苦笑しながら答える俺なのだった。

「決まってるじゃないですか・・・俺の家ですよ」

\*\*\*\*\*

「びぎい……」

「ずらあ……」

「ヨハア……」

扇風機の前で涼む一年生トリオ。

あの電話の後、A q u o r s の皆はすぐにウチへとやってきた。よほど外が暑かったらしく、冷房の効いたリビングで皆ぐったりしながら休んでいる。

そんな中……

「全くっ！貴女という人はっ！」

「うう……すみませんでしたあ……」

正座をさせられ、ダイヤさんのお説教を受けている千歌さん。

やれやれ……

「ダイヤさん、その辺にしてあげて下さい。だいぶ反省してるみたいですし」

「……天さんがそう仰るのですたら」

「天くうううううううんっ！」

勢いよく抱きついてくる千歌さん。

「流石は天くん！心が広いよ！」

「高海先輩、暑苦しいので離れていただけますか？」

「まさかの他人行儀!？」

「何を仰っているのですか？元々ではありませんか」

「ごめんなさあああああいつ！今後は気を付けますから、いつも通りに接して下さいあああああいつ！」

泣きついてくる千歌さん。

全く、この人ときたら・・・

「はいはい、泣かないの。今度から気を付けましょうね」

「ぐすつ・・・うん・・・」

「なるほど・・・こういった反省のさせ方もあるのですね」

「ちよつとダイヤ、アレは怖いから見習わないでくれる？」

感心しているダイヤさんにツッコミを入れる果南さん。

ダイヤさんにコレをやられたら、確かに怖いかもしれない・・・

「ところで、ミーティングは始めないんですか？」

「ハッ!?!そうでしたわ！」

「ホワイトボードならそこにあるんで、適当に使って下さい」

「ああ、それはどうも・・・って、何故家にホワイトボードが!？」

「ホワイトボード用のペンもそこに揃ってますんで」

「準備良すぎません!？」

ダイヤさんはツツコミを入れながらも、手早くミーティングの準備を始める。

「コホンツッ!さて、いよいよ今日から夏休みですが・・・夏休みといえは?」

「海!」

「パパが帰って来る!」

「お婆ちゃんの家!」

「夏コミ!」

「ブツブツ!ですわっ!」

千歌さん・曜さん・花丸・善子の答えに怒るダイヤさん。

答えバラバラやん・・・

「ちよつと、何で分からないんですか?」

「天さんの仰る通りですわ!貴女達それでもスクールアイドルですよ!」

「夏休みといえは・・・夏祭りに決まってるじゃないですか!」

「違いますわよ!？」

「あー、彼女が欲しい・・・浴衣を着た彼女と夏祭り行きたい・・・」

「花火大会の時、浴衣姿の海未先生や真姫さんと一緒だったはずでは!?」

「あの二人は彼女じゃないでしょうが! そんなことも分からないなんて、ダイヤさんは本当にスクールアイドルなんですか!?」

「スクールアイドル関係あります!? 何故私は怒られているのですか!?」

「はいはい、話が進まないから静かにしようね」

梨子さんに手を引つ張られ、無理矢理隣に座らされた。

解せぬ。

「コホンツ! 夏休みといえば・・・はい、ルビィ!」

「ラブライブっ!」

「正解ですわ! 流石我が妹! 可愛いでちゅね〜! よくできまちたね〜!」

「頑張ルビィ!」

イチヤイチヤしている黒澤姉妹。全員苦笑いである。

「・・・何この姉妹コント」

「コント言うなっ!」

「ちよつとダイヤさん、ダイヤさんまでボケたらコントが成立しませんって」

「ボケてませんわよ!?! そもそもコントではありません!」

ダイヤさんは善子と俺にツツコミを入れると、ホワイトボードに大きな模造紙を貼り

出した。

あんな大きな模造紙、どこにしまつてあつたんだろう・・・

「夏といえはラブライブ！その大会が開かれる季節なのです！そこでラブライブ予選突破を目指して、A q o u r sはこの特訓を行います！」

パンツとホワイトボードを叩くダイヤさん。

模造紙には『夏合宿の日程』と書かれており、下には特訓メニューが記入してあつた。

「え、遠泳十キロ・・・？」

「ランニング十五キロ・・・？」

「こんなの無理だよお・・・」

あまりにもとち狂つたメニューに、花丸・善子・千歌さんが呻き声を上げる中・・・

「ま、何とかなりそうね」

「「ええっ!?!」」

ここにもとち狂つた三年生がいた。

「果南さん、本気で言ってます？」

「え、本気だけど？」

「ハア・・・だからゴリラって呼ばれるんですよ」

「ちよ、何の話!?!私ゴリラって呼ばれてるの!?!」

「某アプリゲームをプレイしている人達からは、そう呼ばれてるんですよ」

「某アプリゲームって何!？」

「『果南 ゴリラ』でググったら分かります」

「怖くてググれないんだけど!？」

「とにかく!このメニューをこなせば間違いありませんわ!」

尚も力説するダイヤさん。

「これは、sの合宿のメニューと同じなのですわ!つまりこれをこなせば、我々もラブライブで優勝間違いなし!」

「ええっ!？」

「天くん、ホントなの!？」

「そんなわけないでしょう」

「ぴぎやっ!？」

曜さんの問いを否定した俺に、ダイヤさんが悲鳴を上げる。

「で、ですがっ!私は確かに海未先生から聞きましたわよ!」

「・・・やっぱり犯人は海未ちゃんですか」

溜め息をつく俺。

「このメニュー、五年前の夏合宿で海未ちゃんが提案したものなんですよね・・・まあ

そのメニユーを書いた紙は、俺がビリッビリに破きましたけど」

「何故ですか!?!」

「このメニユーをこなせる人は、ラブライブじゃなくてトライアスロンを目指すべきです。そういうわけなんでGor・・・果南さん、頑張ってくださいね」

「今ゴリラって言いかけたよねえ!?!っていうか目指さないから!」

涙目の果南さん。

ゴリライジリはこの辺にしておこう。

「まあとにかく、*ムダ*sはこんなメニユーやってません。俺がちゃんと現実的なメニユーを考えましたから」

「良かったあ・・・」

胸を撫で下ろす千歌さん。

と、ここで曜さんが声を上げる。

「あつ・・・千歌ちゃんと果南ちゃん、夏休みつていえば・・・海の家は?」

「ああつ!?!」

「忘れてた!?!」

悲鳴を上げる千歌さんと果南さん。

海の家・・・?

「何の話ですか?」

「いやあ、自治会で出してる海の家があるんだけど・・・私達、そこを手伝うように言われてるんだよねえ」

「そんな!?!特訓はどうするんですの!?!」

今度はダイヤさんが悲鳴を上げる。

海の家を手伝わないといけなくなると、練習時間が限られてくるよな・・・

「じゃあ昼は全員で海の家を手伝って、涼しいMorning&Eveningに練習するっていうのはどうかしら?」

「あ、小原理事長いたんですね」

「最初からいたわよ!?!」

涙目の小原理事長。

全然発言しないから忘れてたわ・・・

「それ賛成すら!」

「しかし、それでは練習時間が・・・!」

「じゃあ、ウチで合宿しない?」

今度は千歌さんが提案する。

「志満姉に頼んで一部屋借りれば、皆泊まれるでしょ?」

「あ、それ良い！千歌ちゃんの家なら、目の前が海だもんね！」

「移動が無い分、早朝と夕方に時間とって練習出来るね」

曜さんと果南さんが賛成する。

「でも、急に皆で泊まりに行って大丈夫ずらか？」

「大丈夫！何とかなるよ！」

「おいアホみかん、志満さんに迷惑かけたらどうなるか・・・分かってるよな？」

「相変わらず志満姉のこと大好きだね!？」

「未来の嫁なんで」

「け、結婚する気満々だね・・・っていうか、天くんもウチに泊まるでしょ？」

「いや、俺の家は近いんで別に・・・」

「志満姉の手料理が食べられるよ？」

「お世話になります」

「意見変えるの早っ!？」

フツフツ、志満さんと一つ屋根の下・・・

と、小原理事長がこつちを見ていることに気付いた。

「小原理事長？どうしたんですか？」

「っ・・・な、何でもありません！」

慌てて笑みを浮かべる小原理事長。どうしたんだろう・・・？

っていうか、未だにこの人との距離感が掴めないんだよなあ・・・

何となく隣を見ると、今度は梨子さんが何か考え込んでいた。

「梨子さん？どうかしました？」

「っ・・・ううん、何でもない」

すぐに笑みを浮かべる梨子さん。こっちも何か悩み事だろうか・・・

和気藹々と合宿について話し合っている皆をよそに、小原理事長と梨子さんの変わった

様子が気になる俺なのだった。

強みは活かすべきである。

《果南視点》

「それでは明日の朝四時、海の家に集合ということぞ！」

「・・・ダイヤさんって、時々アホになるよね」

「アハハ・・・否定出来ないかも」

やる気に満ち溢れたダイヤを見て、苦笑しながらヒソヒソ話している天とルビイちゃん。  
ん。

いや、朝四時って・・・

「無理に決まつてるよね、鞠莉？」

隣の鞠莉に話を振るが、返事が返ってこない。

鞠莉は複雑そうな表情で、ルビイちゃんと談笑している天をジッと見ていた。

「・・・天が気になるの？」

「っ!？」

耳元で囁くと、鞠莉がビクツツとしてこつちを見た。

やれやれ・・・

「天と話したいんでしょ？見てないで行っておいでよ」

「・・・何か、距離感が掴めなくて」

寂しそうに笑う鞠莉。

「ずっと距離があつたから、すぐには縮められないっていうか・・・多分天も同じだと思う。未だに『小原理事長』呼びだもの」

「鞠莉・・・」

そういうえば、天はまだ鞠莉のことを『小原理事長』って呼んでたっけ・・・

昔は『鞠莉ちゃん』って呼んでたらしいけど・・・

「これから少しずつ、距離を縮めていけたら・・・天と仲間になれたんだもの。今はそれだけで十分よ」

そう言つて笑う鞠莉だったが、強がっているのが見え見えだった。

全く・・・

「・・・だったら、この合宿で少しでも距離を縮めなきゃね」

「え・・・？」

「焦る必要は無いけど、せつかくのチャンスなんだもん。これを逃す手は無いよ」

「・・・そうね。頑張ってみるわ」

微笑む鞠莉。

二人の間だけ距離があるのは、こっちも見てて寂しいからね・・・

「・・・さて、私も一肌脱ぎますか」

小さく呟く私なのだった。

\*\*\*\*\*

翌朝・・・

「すう・・・すう・・・」

気持ち良く熟睡している俺。すると・・・

『ピーンポーン』

「・・・ん?」

インターホンの音で目が覚める。

むくりと身体を起こして時計を見ると、時刻は五時を過ぎたところだった。

「誰だよ……こんなに朝早く……」

眠りを妨げられて若干イラツツしていると、再びインターホンが鳴った。

『ピーンポーン』

「はいはい、出れば良いんでしょ……」

欠伸をしながら玄関に向かい、ドアを開ける。

「どちら様でs……」

「天くううううううううん！」

「ぎゅっ!?!」

花丸が猛烈な勢いで抱きついてきた。

な、何事……?!

「ちよ、花丸!?!どうした!?!」

「どうしたもこうしたもないぞら!」

涙目の花丸。

「今日は朝四時に海の家に集合のはずなのに、何で誰も来ないぞら!?!」

「ホントに四時に行ったんだ……」

呆れる俺。

誰も真に受けてないと思つてたのに・・・

「マルは三時半から待つてたのに、一時間経つても誰も来なかつたぞら！あまりにも寂しかったから、天くんを迎えに来たぞら！」

「可愛すぎか」

思わず花丸を抱き締めてしまう。

何だろう、今の花丸がメチャクチャ愛おしい。

「とりあえず入つて。皆が来るまでゆっくりしていきなよ」

「ぞらあ・・・」

花丸の手を引いて家に入れつつ、ダイヤさんをしばくことと決意する俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「今度ふざけたマネしたら内浦の海に沈めんど、この前髪パツツン堅物ですわ女」

「うう・・・申し訳ありませんでした・・・」

砂浜で涙目になりながら正座しているダイヤさん。結局全員揃ったのは、朝九時のことだった。

しれっと一番最後にやってきたダイヤさんの頭に全力で『雷鳴●卦』を叩き込んだ俺は、そのままダイヤさんを正座させて説教タイムに入ったのだった。

「つていうか、朝四時つて言った張本人が何で一番最後に来てるんですか」

「合宿が楽しみすぎて、昨晚はなかなか寝ることが出来なくて・・・目が覚めたらあんな時間に・・・」

「遠足前の小学生か」

「このポンコツ生徒会長め・・・」

「ま、まあまあ天くん！もうその辺にしてあげるぞらー！」

花丸が慌ててフオローに入る。

ちなみにあの後、花丸はウチでもう一眠りしていた。一緒に朝ご飯も食べたので、すつかり元気モードである。

「・・・まあ花丸に免じて、この辺にしておくとして。他の皆は？」

「あそこぞら」

指を差す花丸。そこには・・・

「おりゃあつー！」

「とりやあつ！」

「よっ！」

「それっ！」

「あゝ、気持ち良い〜・・・」

「すう・・・すう・・・」

海に飛び込んでいる千歌さんと曜さん、ビーチバレーをしている果南さんと小原理事長、浮き輪に乗ってプカプカ浮いているルビィ、ビーチパラソルの下に寝そべって爆睡している善子の姿があった。

「・・・見事に遊んでるわね」

「・・・本当にあのメニューやらせようかな」

「それは勘弁して!？」

悲鳴を上げる梨子さんなのだった。

\*\*\*\*\*

「さあ、気合い入れていきましよう」

「「「「お、おー．．．」」」」

砂浜に突つ伏した状態で手を上げる千歌さん・曜さん・ルビィ・善子・果南さん・小原理事長。

全員『●鳴八卦』を叩き込まれた後である。

「容赦ないわね．．．」

「怖いずら．．．」

「恐ろしいですわ．．．」

こちらに畏怖の視線を向ける梨子さん・花丸・ダイヤさん。

そんなことはまるで気にせず、俺は辺りを見渡した。

「ところで、海の家ってどこですか？」

「あそこだよ」

千歌さんが指差した方を見ると．．．ボロボロの木造の建物があった。

どう見ても寂れた感じが否めない。

「．．．さて、壊しますか」

「ストップううううううううっ!?!」

慌てて俺を羽交い絞めにする曜さん。

「あれ、何で止めるんですか？」

「止めるに決まってるでしょ!? 何で壊そうとしてるの!？」

「え、だって解体の手伝いでしょ？」

「いや違うから! 営業の手伝いだから!」

「こんな店に客なんて来るわけないでしょうが!」

「それを呼び込むのか私達の仕事でしょうが!」

「俺達にどうしろと!? 曜さんがストリップショーでもしてくれるんですか!？」

「嫌だよ!? それじゃ完全にいかがわしいお店じゃん!？」

「根性見せろよ露出狂!」

「まだそれ引きずるの!?! 違うって言うてるでしょが!」

「はいはい、そこまで」

ギヤーギヤー言い合う俺と曜さんの間に、果南さんが割って入る。

「とりあえず、どうしたら客を呼び込めるか考えよう。エッチな方法は無しで」

「じゃあ無理です」

「諦めるの早っ!?! 他に方法は無いの!?!」

「んー、店に来てくれた人に百万円を渡すとか?」

「まさかの賄賂!?! そのお金はどこから!?!」

「小原理事長が何とかしてくれてくれるでしょ」

「いや無理だから！」

小原理事長のツツコミ。

チツ、無理か・・・

「つていうか、問題は隣の店ですよね」

視線を向ける俺。そこには、とてもお洒落なカフェのような海の家があった。建物も新しく飾りも華やかで、多くのお客さんで賑わっている。

「この二つが並んでたら、そりや皆隣に行くでしょ」

「アハハ・・・確かに・・・」

苦笑する梨子さん。

さて、どうしたものか・・・

「・・・勝算が無いわけじゃないんですけどね」

「えっ、ホント!？」

驚く千歌さん。

何だかんだ言いつつ、可能性はあると俺は考えていた。

何故なら・・・

「ええ。こっちの店には、あっちの店に無いものがありますからね」

「えっ？何かあった？」

首を傾げる善子。

「やれやれ、気付いてないのか・・・」

「皆スクールアイドルじゃん。スクールアイドルがやってる海の家なんて、話題性抜群でしょ。上手くいけば、Aqoursの知名度アップにも繋がるだろうし」

「それですわ！」

顔を輝かせるダイヤさん。

「その点を上手く活かすことが出来れば、こちらにも勝機はあるはず・・・！」

「でしようね」

頷く俺。

「まあそもそも、これほどの美少女が九人もいるんですから。俺だったら、絶対こつちの店に来ますよ」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」」

何故か顔を赤くする九人なのだった。

何事もほどほどが一番である。

「曜ちゃん、ヨキソバ一つ！」

「ヨーソロー！」

「天くん、かき氷のイチゴとメロンを一つずつ！」

「了解です」

千歌さんと梨子さんからオーダーを聞き、迅速に対応していく曜さんと俺。

俺達がやっている海の家は今、隣の店に負けないくらい繁盛していた。

「まさかこんなにお客さんが来るなんて……」

「想像以上でしたね」

曜さんの言葉に苦笑する俺。

そもそも最初は知り合いを呼ぼうということ、浦の星の生徒達に片っ端から連絡したのが始まりだった。

そして来てくれた皆が他校の生徒にも声をかけてくれて、そこからこの海の家が存在が広まっていったのだ。

人の力って凄いな……

「今は果南ちゃんが、外で宣伝してくれてるんだよね？」  
「ええ。効果は絶大でしょうね」

今日の果南さんは水着姿、しかもビキニだ。あの抜群のプロポーションを晒した状態でビラ配りをしてきているので、目を引くこと間違い無しである。

『エッチな方法はダメ』と言っていた果南さんだが、これは大丈夫らしい。  
まああの人、俺の前でも平気でダイビングスーツ脱ぐしな・・・

『是非お立ち寄り下さいー！』

『美味しい食べ物もあるぞr・・・ありまーす！』

外からルビィと花丸の声が聞こえてくる。二人には今、店の前で声がけをしてもらっていた。

可愛らしい女の子二人が店の前に立っていたら、気になって来てくれる人もきつといることだろう。

「ヨキソバをお一つですね？かしこまりました」

「お待たせしました！かき氷のブルーハワイ味です！」

「ありがとうございます！またお越し下さいませ！」

笑顔で接客している梨子さん・千歌さん・ダイヤさん。おかげで客受けは非常に好評のようだ。

そして……

「とりやあつー！」

鉄板の上の麺に、勢いよくソースを投入する曜さん。

曜さんの料理スキルはなかなかのもので、曜さんの作るオムソバ……通称『ヨキソバ』は、この海の家の看板メニューになっていた。

曜さんってホント器用だよな……

「曜さん、パーカーとか羽織った方が良くないですか？」

「いや、暑いから大丈夫。それにソースが跳ねたら汚れちゃうし」

「そうかもしれないですけど……油が跳ねたら火傷しません？」

今の曜さんは水着姿なので、かなり肌の露出が多いのだ。

果南さんも勿論そうだが、曜さんのスタイルもかなり良い。胸は大きいし、腰はくびれてるし……

健康的で色気のある身体を、俺の隣で惜しげもなく晒しているのだ。

「おっ、心配してくれるの？」

「言えない……曜さんの身体がエロすぎて、目のやり場に困るなんて言えない……

（当たり前じゃないですか！俺にとつて曜さんは大切な人なんですよ!?）

「いや建前と本音が逆ううううっ!?心の声がダダ漏れなんですけど!」

「曜さんの水着姿つてエロいですよね」

「もう本音を隠す気も無いの!?!」

ツッコミ連発の曜さん。

「全く・・・『その水着似合ってますね』くらい言えないの?」

「いや、似合ってるのなんて当たり前でしょう。曜さんは何を着たつて似合いますよ。

メチャクチャ可愛いんですから」

「・・・そういうことを照れもせずに言えるんだから、天くんはズルいよ」

頬を赤く染める曜さん。どうしたんだろう?」

「クツクツクツ・・・」

後ろの方で善子の笑い声が聞こえる。

確かアイツは、たこ焼き担当だったはず・・・

「善子、たこ焼きは出来た・・・」

善子の方を振り向いた俺は、思わず固まってしまった。

善子の手元の鉄板には、たこ焼きとはまるで違う黒の球体がいくつも並んでいたのだ。

「墮天使の涙、降臨ッ！」

「オツケー、今すぐ泣かせるわ」

「ぐえっ!？」

背後から善子に関節技を極めにかかる。

何やってんだコイツは・・・

「ちよ、天!?!いきなり何すんのよ!？」

「俺『たこ焼きを作って』って言ったよね？何で暗黒物質を生成してんの？」

「暗黒物質・・・ダークマターってことね!?!その名前も捨てがたいわ！」

「人の話聞けや」

ダメだこの子、完全に自分の世界に入っちゃってる・・・

と、曜さんが引き攣った表情で『墮天使の涙』とやらを見つめていた。

「へ、へえ・・・善子ちゃんのたこ焼きって独特だね・・・」

「いや、独特っていうかもうたこ焼きじゃないでしょ」

「フフツ、食べてみる？」

俺のツツコミはスルーした善子は、『墮天使の涙』に竹串を刺した。

その瞬間、中から赤い液体が溢れ出てくる。

「ひいっ!？」

「あー・・・」

悲鳴を上げた曜さんが、俺の腕にしがみつく。

なるほど、コレの正体が分かってしまった・・・

「曜さん、コレ食べない方が良いでしょう」

「だ、だよね！じゃあ遠慮し・・・」

「えいつ」

「むぐっ!？」

曜さんの口に『墮天使の涙』を突っ込む善子。

突っ込まれた曜さんの顔はどんどん赤くなっていき、そして・・・

「ギヤアアアアアッ!？辛いいいいいつ!？」

その場で悶え苦しむ曜さん。

ああ、やつぱり・・・

「フフツ、そんなに美味しかった？」

「シヤラツプ」

「むぐおっ!？」

善子の口に出れ上がったかき氷をぶち込み、曜さんにペットボトルの水を手渡す。

曜さんはひったくるように受け取ると、そのまま水を一気飲みした。

「くく……くく……くく……ぶはあっ！し、死ぬかと思った……」

「ご愁傷様です」

「あ、頭が……」

アイスクリーム頭痛に悶える善子に、俺は呆れた視線を向けた。

「善子、ハバネロ入れすぎ。売り物にならないって」

「あの赤い液体はハバネロだったの!?!」

衝撃を受けている曜さん。実は善子は極度の辛党であり、ハバネロ大好き人間なのだ。

津島家で夕飯をご馳走になっていた頃、色々なものにハバネロをぶっかけて食べる善子を見てドン引きしたのはここだけの話だ。

善恵さんも遠い目をしてたっけな……

「何ですよ!?!ピリ辛ぐらいでしょ!?!」

「どこがピリ辛!?!私死にかけたよ!?!」

「善子は辛いものに舌が慣れすぎてるんで、これでもピリ辛レベルにしか感じないんですよ。要は味覚がぶっ壊れてるんです」

「善子ちゃん……恐ろしい子……!」

「ヨハネよっ!」

「フツフツフツ……」

俺達が騒いでいると、今度は小原理事長の笑い声が聞こえてきた。

うわあ、嫌な予感しかしない……

「小原理事長、何を作って……」

「Unbelievable……『シャイ煮』、complete……!」

「……もう嫌だこの人」

まるで魔女のように鍋をかき回している小原理事長を見て、俺はもうツツコミを入れる気さえ起きなかった。

十中八九、イレギュラーメニユーだろうな……

「出来たわ天! 『シャイ煮』よ!」

『『シャイニー』とかけてるみたいですけど、何も上手くないですからね?』

「さあ、食べて食べて! 天の胃袋を掴んじゃうわ!」

「むしろ胃がK.O. されそうなんですけど」

この人お嬢様だから、料理とこなかつたんだろうな……

恐る恐る『シャイ煮』を一口食べてみると……

「そ、天……?」

「大丈夫……?」

「・・・美味しい」

「ええっ!？」

驚く善子と曜さん。

何か普通に美味しいんだけど・・・

「フッフッフ・・・『シヤイ煮』は私が世界から集めた special な食材で作った、究極の料理デース！」

ドヤ顔で胸を張る小原理事長。

制服の上からでも分かるくらい大きかったけど、水着になると本当に大きいことが改めて分かるな・・・

「・・・天、視線がいやらしいわよ」

「そんなこと言っただってしょうがないじゃないか」

「何でえな●かずき？私にはそんな視線向けてこないくせに・・・」

「え、向けてほしいの？」

「そ、そんなわけないでしょバカ！」

顔を赤くしてそっぽを向いてしまう善子。

理不尽だなあ・・・

「・・・天くんって、乙女心が分かっているのか分かってないのかハッキリしないよね」

呆れたように溜め息をつく曜さん。

俺が何をしたというのか・・・

「ところで小原理事長、『シャイ煮』の中にちよいちよい高級そうな食材が見えるんですけど・・・いくらしたんですか？」

「んー・・・十万円くらい？」

「高過ぎるわっ！」

「ぐはっ!？」

再び『雷鳴八●』を叩き込む。

全く、これだから成金一族は・・・

「とりあえず作業に戻りましょう。曜さんは引き続き『ヨキソバ』を作って下さい。善子はちゃんとたこ焼きを作ること。ハバネ口は没収するから」

「ヨーソロー！」

「そんなあっ!？」

「それから小原理事長、『シャイ煮』は却下です。俺はちよつと食材の買い出しに行ってくるんで、代わりにかき氷作りをお願いします」

「うう・・・分かったわ・・・」

うなだれている小原理事長。

「・・・やっぱり、『小原理事長』よね」  
何かを小さく呟いた小原理事長は、少しだけ寂しそうな表情をしていたのだった。

忘れてと言われることほど忘れられない。

「あつ、天さん・・・それ以上は・・・!」

「ダメですよ、ダイヤさん。ちゃんとほぐしておかないと、後で痛い思いをすることになるんですから」

「そ、そうかもしれないませんが・・・あんっ・・・!」

「ダイヤさんは敏感ですね・・・それじゃ、そろそろイキますよ」

「あつ、ちよつと待って・・・はああああああああんっ!」

「・・・この会話だけ聞くと、いかがわしいことしてるみたいだね」

俺のマツサージを受けているダイヤさんを見て、果南さんが苦笑する。

海の家の手伝いからのトレーニングを終えた俺達は、お風呂に入った後千歌さんの部屋に集まっていた。残念ながら部屋は全て埋まっていたらしく、借りることが出来なかつたらしい。

なので合宿中は、皆で千歌さんの部屋に泊まることになったのだ。

「そう聞こえてしまう果南さんの方がいかがわしいんですよ」

「なっ!?!天に言われたくないんだけど!?!」

「失敬な。俺は心の清らかな人間ですよ」

「どこが!？」

「果南さんに豊満な胸を何度も押し付けられてるのに、一度も襲ったことないじゃないですか」

「誤解を招く言い方止めてくれる!?!ハグしてるだけだから!」

「結果的に同じことですよ」

「うぐつ・・・」

言葉に詰まる果南さん。

俺は溜め息をつくくと、部屋を見渡した。

「それにしても、果南さんは元気ですね・・・他の皆は屍になってるのに」

そう、この部屋で元気なのは果南さんと俺だけ・・・他の皆は床やベッドに倒れ込み、ぐったりとしている。

「つ、疲れたあ・・・」

「海の家で働いてからの練習とか、キツ過ぎる・・・」

千歌さんと曜さんの表情が死んでいた。

体育会系の曜さんがぐったりしているくらいだし、だいぶキツかったんだろうな・・・

「しつかりして下さい。海未ちゃんが考案したメニューより、全然楽だったですよ」

「いや、アレに比べたらマシだったとは思うけど・・・それでもキツいつて」

「この練習メニューを、*μ*sはきっちりこなしてましたよ」

「頑張らなきゃ!」

急にやる気を出す千歌さん。チョロいな。

「ほらダイヤさん、マツサージ終わりましたよ」

「うう・・・ありがとうございます・・・」

うつ伏せのまま動かないダイヤさん。

相当疲れたんだな・・・

「あとマツサージ受けてない人います?」

「あ、私まだ受けてないんですけど」

「元気な人は対象外です」

「何だよ!」

「あとゴリラも対象外です」

「そろそろ泣いていい!」

涙目の果南さん。やれやれ・・・

「つていうか千歌さん、俺はどこで寝たら良いんですか?」

「え?ここだけ?」

「・・・言うと思った」

海未ちゃんの実家でのこともあったから、まさかとは思ったけど・・・

「今回は果南さんもダイヤさんも小原理事長もいるんですよ？三人の気持ちも考えて  
ですわ・・・」

「私は全然構わないけど？」

「わ、私も・・・少し恥ずかしいですが、天さんでしたら・・・」

「マリーも勿論OKよ♪」

「わー、貞操観念の欠片もない」

俺、この人達の将来が本気で心配になってきた・・・

「っていうか俺、志満さんと一緒に寝たいんですけど」

「どんだけ志満姉好きなの!?!結婚前の男女が一緒に寝るなんて破廉恥だよ!?!」

「そのセリフをそっくりそのまま返すわっ!」

「ぐほおっ!?!」

千歌さんの鳩尾に枕を叩き込む俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「うう、天くんってホント容赦ないよね・・・」

「男女平等がモットーなんで」

「だからこういう場面で使う言葉じゃないって!？」

鳩尾を擦りながらツツコミを入れる千歌さん。

俺達は皆の分の飲み物を運ぶ為、階段を下りて一階のキッチンに向かおうとしていた。

すると・・・

「あら、天くん」

「え、奈々さん?」

玄関口に奈々さんが立っていた。

どうしたんだろう?

「こんばんは。どうしてここに?」

「煮物を作り過ぎちゃったから、お裾分けに来たのよ。今日から梨子がお世話になってるし、そのお礼も兼ねてね」

「わーい! 梨子ちゃんのお母さんが作った煮物、美味しくて大好き!」

「あら千歌ちゃん、嬉しいこと言ってくれるわね」

喜ぶ千歌さんを見て、嬉しそうに笑う奈々さん。

と、ちようどキツチンから志満さんが袋を持って出てきた。

「お待たせしました。良かったらこれ・・・って、天くと千歌ちゃんもいたのね」

「ええ、志満さんに夜這いしようと思って」

「本人の前でそういうこと言っちゃうんだ!？」

「フフツ、天くんってば積極的なんだから♡」

「何で志満姉は満更でもない感じなの!？」

「ちよつと天くん、夜這いならウチの梨子にしてちようだい」

「梨子ちゃんのお母さん!?それで良いの!？」

「そうですね?じゃあ遠慮なく」

「させないからね!？」

「あらあら千歌ちゃん、もしかして自分が夜這いされたいの?」

「どこからそういう結論になったの!？」

「梨子、これは思わぬライバルが出現したわよ・・・!」

「勝手にライバル認定されてる!？」

「千歌さん・・・気持ちは嬉しいんですけど、ゴメンなさい・・・」

「何で勝手にフラれてるの私!？」

ツツコミを連発しすぎて、ゼエゼエ言っている千歌さん。

大変だなあ・・・

「ところで天くん、ちよつと聞きたいことがあるんだけど・・・」

真面目な表情になる奈々さん。

「ピアノコンクールについて、梨子から何か聞いてない？」

「ピアノコンクール？」

「ええ。近いうちにあるみたいで、梨子にも案内が来てたんだけど・・・あの子、出る  
とも出ないとも言ってなくて」

「いや、梨子さんからそんな話は聞いてないですけど・・・千歌さん聞いてます？」

「私も聞いてないなあ・・・」

「そう・・・じゃああの子、出ないつもりなのかしら・・・」

考え込む奈々さん。しかしすぐに笑みを浮かべる。

「変なこと聞いてゴメンなさい。忘れてちようだい」

「え、ええ・・・」

「それじゃ、私は帰るわ。梨子のことよろしくね」

「あ、これどうぞ。煮物のお礼です」

「あら、ありがとう志満ちゃん。ありがたくいただくわね」

奈々さんは志満さんから袋を受け取ると、手を振りながら出て行った。

「ピアノコンクールかあ．．．梨子ちゃん、一言も言つてなかったよね．．．」

「．．．千歌さん、志満さん、ちよつと出てきます。すぐ戻りますんで」

「え？」

「天くん？」

首を傾げる二人をよそに、俺は玄関を出て奈々さんを追つた。

「奈々さん！」

「天くん？」

俺に呼び止められ、驚いてこちらを振り向く奈々さん。

「どうしたの？」

「いえ、ちよつと聞きたいことがあつて．．．」

奈々さんと向き合つた俺は、思い切つて気になることを聞いてみるのだった。

「教えてほしいんです．．．音ノ木坂時代の梨子さんについて」

物事には意外な真実が隠れていたりする。

「はい、お茶どうぞ」

「ありがとうございます」

奈々さんからコップを受け取る俺。

俺は奈々さんに招かれ、桜内家にお邪魔していた。

「・・・音ノ木坂時代の梨子について、だったわね」

俺の真向かいの椅子に腰を下ろす奈々さん。

「ええ。音ノ木坂時代は、ピアノコンクールで上手くいかなかったって聞いてますけ

ど・・・」

「・・・そうね。上手くは行ってなかったわ」

溜め息をつく奈々さん。

「中学の頃までは、いつも楽しそうにピアノを弾いてたの。全国大会に出たことも

あったから、音ノ木坂では結構期待されてたみたい」

それは梨子さんも言ってたっけ・・・

だからこそ、期待に応えられなかったことが申し訳ないって・・・

「その期待が重かったのかしらね・・・音ノ木坂に入ってから、梨子はあまり笑わなくなつたわ。ピアノを弾く時も凄く必死な感じで、全然楽しそうじゃなかった」

「そうだったんですか・・・」

「ええ。その影響もあつたのか、コンクールでも思うような成績を残せなくて・・・『次こそは』って、また必死にピアノを弾いて・・・その繰り返しだったわ」

何となく、その光景が目には浮かぶようだった。

梨子さんは本当に真面目だから、いつも自分を追い込んでたんだろな・・・

「そんなことが続いた時、あるコンクールに出ただけ・・・梨子、弾かなかつたの」「弾かなかつた・・・?」

「ええ。ピアノの前に座って、鍵盤に手を置いたところで動かなくなつてね。しばらくそのままでいたかと思つたら、立ち上がって観客席に向かつてお辞儀して・・・そのまま舞台袖にはけていったわ。あの時は、観客席がざわついたわよ」

苦笑する奈々さん。

そんなことがあつたのか・・・

「あの子曰く、『弾けなかつた』らしいわ。『今まで自分がどんな風にピアノを弾いていたのか、分からなくなつた』って」

「・・・そこまで追い詰められてたつてことですか」

多分、プレッシャーに押し潰されてしまったんだらうな……

「あの子のそんな姿を見るのは、私も辛くてね……『環境を変えてみたら?』って、あの子に勧めたのよ」

「え、奈々さんの勧めだったんですか?」

「ええ。そしたらちようど、梨子も同じことを考えてたみたいだね。内浦への引越  
しと、浦の星女学院への転校が決まったのよ」

「そうだったのか……ん?」

「そういえば、何で引越し先が内浦だったんですか?何か縁があったとか?」

「フフツ、やっぱり気になるわよね」

面白そうに笑う奈々さん。

「実は私、音ノ木坂の理事長さんと知り合いなの」

「ええっ!?!」

嘘だらろオイ!?!奈々さんと南理事長が知り合い!?

「それで相談してみたら、浦の星女学院を勧められたのよ。『知り合いが理事長に就任する予定だから、紹介出来るわよ』って。まあその知り合いっていうのが、現役女子高生だとは思わなかったけど」

苦笑する奈々さん。

「あと、こうも言ってたわ。『私が実の息子のように可愛がつてる子も入るから、何かあつたらその子を頼りなさい』って」

「じゃあ奈々さん、最初から俺のこと知ってたんですか!？」

「まあね。『ついでにあの子をよろしくね』って頼まれたもの」

「・・・あの年増理事長」

よし、今度会つたら絶対しばこう・・・

「まあ私が動くまでもなく、梨子は天くんと仲良くなつてたけどね。おかげで梨子は笑うことが多くなつたし、毎日楽しそうだもの。天くんのおかげよ」

「俺は何もしてませんよ。千歌さん達の影響でしょう」

「・・・天くんは本当に謙虚ね。彼女に聞いてた通りだわ」

微笑む奈々さん。

「私、『その子はそんなに信頼出来る子なの?』って聞いたのよ。そしたら彼女、何て答えたと思う?」

「・・・何て答えたんですか?」

「『娘を嫁にあげたいと思えるくらい信頼してるわ』ですって」

「あの人はまたそういうことを・・・」

「『そうすれば、天くんは本当に私の息子になるもの』とも言ってたわね」

「娘を何だと思ってるのあの人」

まあことりちゃんとは結婚出来るなら、俺としては本望だけでも。

「確かに、千歌ちゃん達の影響も大きいと思うわ。でもそれ以上に、天くんの存在が凄く大きいと思うの」

笑う奈々さん。

「天くんと一緒にいる時の梨子、本当に楽しそうなもの。今まで女の子の友達はいたけど、男の子とここまで打ち解けてる姿は見たこと無いわ」

「・・・まあ、無自覚にフツてたみたいですからね」

当の本人は『モテなかった』とか言ってたけど・・・本当に罪深い人だと思う。

「天くんと接してみて、彼女の言ってたことがよく分かったわ。本当にありがとう」

「よして下さいよ。本当に大したことはしてないんですから」

「フフツ、じゃあそういうことにしておくわ」

クスクス笑っている奈々さん。

「今まで黙っててゴメンなさいね。彼女から『しばらく秘密にしておいて』って言われたから」

「・・・まあ良いです。それより、ピアノコンクールのことですね」

「そうね・・・多分あの子、出ないつもりなんだと思うわ」

天井を見上げる奈々さん。

「今のあの子にとつては、スクールアイドルの方が大事なんでしょうし……あの時のことも、まだ引きずってるんじゃないかしら」

「……奈々さんは、出てほしいと思いますか？」

「んー、そうねえ……」

奈々さんは考え込むと……少し寂しそうな笑みを浮かべた。

「コンクールに拘るつもりは無いけど……私はただ、あの子が楽しそうにピアノを弾く姿を見たい。それだけよ」

「奈々さん……」

奈々さんの切実な願いを聞き、何も返すことが出来ない俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「奈々さんと南理事長が知り合いだったとは……」

俺は砂浜に続く石段に座り、夜の海を眺めていた。

月の光が海に反射し、昼間には見ることが出来ない景色が広がっている。

「ピアノコンクールかあ・・・」

ネットで調べてみたところ、何とラブライブの予備予選と同じ日だった。

梨子さん、ピアノコンテストよりラブライブを優先させるつもりなのか・・・

もしそうなら、A q o u r sとしてはありがたい話なんだろうけど・・・

「・・・本当にそれで良いのかな」

梨子さんが内浦に来たのは環境を変えることが目的であり、それはピアノと向き合う為だったはずだ。

それほどピアノと真剣に向き合ってきた梨子さんが、ピアノよりスクールアイドルを優先しようとしている。

果たしてそれは、梨子さんにとって良い選択なんだろうか・・・

「こんな所にいたんだ」

考え事をしていると、頭上から声がした。

見上げると、二つの大きな山が・・・

「・・・デカいな」

「セクハラ発言禁止」

山の間から顔を覗かせた果南さんが、呆れたように言う。

「千歌の部屋に戻らないの？皆もう寝ちやったよ？」

「いや、寝るの早くないですか？まだ九時ですよ？」

「よっぽど疲れたんだらうね。もう爆睡してたよ」

苦笑する果南さん。

まあ体力に余裕があつたの、果南さんくらいだもんな・・・

「隣、良い？」

「どうぞ」

俺の隣に腰を下ろす果南さん。

髪を下ろしているせいとか、いつもと少し違う印象を受けてドキツとしてしまう。

「ん？どうかした？」

「いや、何でも・・・」

果南さんの問いに言葉を濁す俺。

果南さんは不思議そうに首を傾げると、目の前に広がる海を見つめた。

「・・・ねえ、天」

「何ですか？」

「鞠莉のこと・・・どう思ってる？」

「・・・そうですねえ」

いつかは聞いてくるんじゃないかと思っていた。

俺と小原理事長の間に微妙な距離があることは、果南さんなら気付いているだろうから。

「嫌いではないですよ。イマイチ距離感が掴めないんで、どう接していいか分かりませんけどね」

「……鞠莉が天を脅したこと、まだ引きずってる？」

「……そうだと思います」

正直に答える。ここで言葉を濁すことはしない。

「勿論、許したつもりではいるんですけど……脅された時、本当にシヨックだったんですよ。昔は本当に仲良かったのに、久しぶりに会ったらあんな風に脅されて……正直心のどこかで、小原理事長を信じきれない自分がいます」

「……無理もないよ。鞠莉はそれだけのことをしたんだから」  
溜め息をつく果南さん。

「ただ、私は天のことも鞠莉のことも好きだからさ。二人の間に距離があるのが、見ててちよつと悲しいっていうか……いたたまれない気持ちになるんだよね」

「……すいません」

「あ、天を責めるつもりなんてないよ？さっきも言ったけど、そうなっちゃうのも無理

ないだろうし」

果南さんはそう言うと、俺に視線を向けてきた。

「・・・実はね、天。天がA q o u r sのマナージャーを辞めるって言った時、私は鞠莉からある話を聞いたの」

「ある話・・・？」

「うん、私も聞いてビックリしちゃった。『え、そうだったの!?!』って」

「何ですかその気になるフリは。教えて下さいよ」

「うん、実はね・・・」

果南さんはそう言うと、小原理事長から聞いたという話を聞かせてくれた。

それを聞いた俺は、驚きのあまり呆然としてしまうのだった。

人に相談するのも大切なことである。

翌日・・・

「・・・ん・・・くん・・・天くんっ！」

「えっ?」

千歌さんに呼びかけられ、ハッとする俺。

千歌さんが心配そうに俺を見ていた。

「大丈夫?何か様子がおかしいけど・・・」

「ああ、すみません・・・少しボーっとしちやって・・・」

「ええっ!?!もしかして熱中症!?!」

「いや、ちよつと考え事を・・・」

「大変ですダイヤさんっ!天くんが熱中症かもしれないせんっ!」

「何ですって!?!」

「人の話聞けや」

「それはブーマランだよ、天くん」

呆れている曜さん。

「気分転換に、少し休憩してきなよ。今はお店も落ち着いてるし、私達だけで回せるだろうからさ」

「……すみません。お言葉に甘えさせてもらいます」

俺は曜さんに頭を下げると、店の奥にある休憩スペースに移動した。

ここには畳が敷かれており、横になって休むことも出来るようになってる。

「……ハア」

俺は溜め息をつきつつ、仰向けに寝転がる。

昨夜果南さんと話をしてからというもの、どうしても色々と考えてしまうのだ。

もしあの話が本当なら……

「どうしたもんかなあ……」

「何が?」

「うおっ!?!」

急に顔を覗き込んできた梨子さんに、思わずビクリしてしまう俺。

「ど、どうしたんですか?」

「客足が落ち着いたから、私も休憩して良いって」

梨子さんは俺のすぐ側に座ると、ポンポンッと自分の太ももを叩いた。

「……マッサージしろと?」

「違うわよ!? 膝枕してあげるって言ってるのっ!」

「・・・いくら払えと?」

「お金なんて取らないわよ!? いいから早く来なさいっ!」

「・・・失礼します」

今の梨子さんは水着の上にパーカーを羽織っているだけなので、完全な生足状態だ。

その白く綺麗な太ももの上に、ゆっくりと自分の頭を乗せる。

おお、スベスベ・・・しかも柔らかい・・・

「う、うう・・・」

「自分から来いって言っというて、何でちよつと恥ずかしそうなんですか」

「いや、その・・・男の子に膝枕するなんて、初めてだから・・・」

「じゃあ何で『膝枕してあげる』なんて言い出したんですか・・・」

呆れる俺。

耳を真っ赤にしてまですることないだろうに・・・

「・・・天くん、悩んでるみたいだったから」

「っ・・・」

気付かれてたのか・・・

流石は梨子さん、鋭いな・・・

「だから、少しリラックスした方が良いんじゃないかと思って・・・」

「・・・あのですね、梨子さん。梨子さんみたいな美少女に膝枕されて、ドキドキしない男なんていませんって。リラックスどころか、メツチャ緊張してるんですけど」

俺の言葉にポカーンとしていた梨子さんだったが、やがてクスクス笑い始めた。

「フフツ、天くんも緊張してるんだ？」

「そりやあまあ・・・」

「じゃあお互い様だね」

梨子さんは笑いながらそう言うのと、俺の頭を優しく撫でた。

「・・・天くんって私と少し似てるから、こういう時心配になるのよね」

「似てる？俺と梨子さんが？」

「うん。天くんって、悩み事を一人で抱え込んだタイプでしょ？私もそういうタイプだから、何か放っておけなくて・・・」

確かにそうかもしれない。

あんまり周りに相談しようとしなくても・・・

「それなのに天くんって、他人の悩み事に関しては相談に乗ろうとするじゃない？自分の悩み事は話さないくせに」

「・・・悪かったですね」

「ホントよ。天くんの悪い癖」

俺の頭を撫で続ける梨子さん。

「私は天くんに悩みを聞いてもらって、優しい言葉をかけてもらった。そのおかげで  
凄く救われたの」

「いや、そんな大袈裟な・・・」

「そんなことないわよ。本当に心が軽くなったもの」

微笑む梨子さん。

「だから私も、少しでも天くんの力になれたらって思う。無理に悩みを話せとは言わ  
ないけど・・・せめて側に寄り添えたらって」

「梨子さん・・・」

梨子さんの優しさが心に沁みた。

幸せ者だな、俺は・・・

「・・・一つ、聞いても良いですか？」

「何？」

「昔は仲良しだった人と距離ができて、そこからまた昔みたいに関係に戻り  
たい時・・・梨子さんだったらどうしますか？」

「んー、そうねえ・・・」

考え込む梨子さん。

「答えになつてないかもしれないけど・・・新しい関係を築こうとする、かな」

「新しい関係？」

「ええ。昔の自分と今の自分つて、やっぱりちよつと違つたりするでしょ？どんなに変わつてないつて思つても、人は常に変化する生き物なんだから」

「まあ確かに・・・」

「だからこそ、昔と全く同じ関係になることは出来ないと思うの。昔の自分と昔の相手だからこそ、その時の関係が築けたんだろうし・・・でもそれなら、今の自分と今の相手だからこそ築ける関係があると思わない？」

「・・・なるほど」

今の自分と今の相手だからこそ築ける関係、か・・・

「それなら私は、その関係を築きたいかな。また新しく、その人と関係を築いていききたい・・・答えになつてるかな？」

「・・・ええ、十分です」

今の話のおかげで、自分がどうしたいのかよく分かった。

これから何をすべきなのかも。

「ありがとうございます。何とかかなりそうです」

「そう？良かった」

笑う梨子さん。

この際なので、俺はもう一つ梨子さんに尋ねてみることにした。

「梨子さん、もう一つ良いですか？」

「何？」

「ピアノコンクール、どうするつもりですか？」

「ええっ!？」

驚愕している梨子さん。

「な、何で知ってるの!？」

「昨日奈々さんから、梨子さんにピアノコンクールの案内が来てることを聞きました。

梨子さんが出るとも出ないとも言わないって、奈々さん心配してましたよ」

「お母さん……余計なことを……」

梨子さんが大きな溜め息をつく。

「……天くんのことだから、もうコンクールについて調べてるんでしょ？私はどうす

るつもりなのか、予想がつくんじゃない？」

「ライブの予備予選と重なるから出ない、ですか？」

「大正解」

苦笑する梨子さん。

「確かに、初めて知らせが届いた時は戸惑ったわ。チャンスがあつたらもう一度つていう気持ちもあつたし」

「じゃあ何で……」

「……今の私の居場所は、ここだから」

笑みを浮かべる梨子さん。

「今の私の目標は、今までで一番の曲を作つて予選を突破すること。ピアノコンクールで良い結果を残すことよりも、そっちの方が大切な」

「梨子さん……」

「心配かけちゃってゴメンね。そういうわけだから、安心してちょうだい」

笑顔で俺の頭を撫でてくれる梨子さんに、俺はどこか複雑な思いを抱くのだった。

何度でもやり直すことは出来る。

「ふう……」

お風呂から上がった俺は、少し夜風に当たりたくて外に出ていた。

昨日と同じように石段に座り、海を眺める。

「今日もハードな一日だったなあ……」

相変わらず海の家は大繁盛だったし、練習もみっちり行なった。

当然皆疲れており、千歌さんの部屋で屍と化している。

「……皆、大丈夫かな」

今は頑張らないといけない時ではあるが、オーバーワークで身体を壊してしまつては元も子もない。

マネージャーとして、皆の体調には十分に気を配らないと……

「大丈夫よ」

頭上からそんな声がしたかと思うと、俺の身体にパーカーがかけられた。

見上げると、昨日より巨大な山が二つ……

「……ああ、小原理事長ですか」

「今どこを見て判断したの!？」

山の間から小原理事長の顔が現れた。やっぱり……

「流石はB87……存在感がハンパないですね」

「ちよつと!?!何で私のサイズ知ってるの!？」

「翔子先生が教えてくれました」

「まさかの担任がバラしてた!?!っていうかあの人も何で知ってるのよ!?!」

『『自分のクラスの子のスリーサイズくらい把握してるわ』だそうです」

「ただの変態じゃない!？」

「それについては同感です」

ああ、分かってくれる人がいて良かった……

「っていうか、このパーカーは？」

「私だよ。薄着のままじゃ湯冷めしちゃうと思って」

「……わざわざ持ってきてくれたんですか？」

「果南から『天が外に出て行った』って聞いたから……迷惑だったかしら？」

「……いえ、ありがとうございます」

「……どういたしまして」

何となく気まずい雰囲気の流れる。

小原理事長がA q o u r s に加入してから、こうして二人つきりになることもなかったしな……

「……せつかく来たんですし、座ったらどうですか？夜風が気持ち良いですよ」

「……じゃあ、そうさせてもらおうかしら」

おずおずと俺の隣に腰掛ける小原理事長。

二人並んで、夜の海を眺める。

「……そういえば、ご両親はお元気ですか？」

「ええ、元気よ。パパは相変わらず仕事で忙しくしているし、ママは……相変わらず口うるさいわ」

「厳しい人ですもんねえ……貴女が留学先から浦の星に帰って来たって聞いた時、『よくあの人が許したな』と思いましたよ」

「許してくれてないわよ。半ば強引に帰って来たの」

「……よく連れ戻されませんでしたね」

「パパが説得してくれたみたい。おかげで助かったわ」

溜め息をつく小原理事長。

なるほど、そういうことだったのか……

「……俺も似たようなもんです。絵里姉と喧嘩してこっちに来ましたから」

「それを聞いて驚いたわよ。天と絵里でも喧嘩することってあるのね」

「滅多に無いですけどね。俺が覚えているかぎり、これが二度目です」

「二度目？一度目はいつだったの？」

「五年前です。μ、sのマネージャーをしていた頃、まだμ、sに加入する前の絵里姉と喧嘩しまして」

「へえ・・・喧嘩の原因は何だったの？」

「端的に言えば、絵里姉がμ、sを認めなかったことですね」

「へっ？」

驚いている小原理事長。

その顔を見て、俺は思わず笑ってしまった。

「そんなに驚きますか？」

「だ、だって・・・絵里がμ、sを認めなかったって・・・」

「まあ当時の絵里姉は、ガツチガチの石頭でしたからね・・・今もですけど」

苦笑する俺。

「絵里姉にとつて、スクールアイドルはただの遊びにしか見えなかったみたいです。それでμ、sを侮辱して・・・だから一時期、俺と絵里姉の関係は最悪でしたね」

今でこそ笑いながら振り返ることの出来る話だが、当時はホントに笑えないほど酷

かったっけな・・・

「まあ結局、絵里姉はμ sを認めて自分も加入したんですけどね。それで俺達も仲直り出来たんですよ」

「そうだったのね・・・」

呆然としている小原理事長。

俺と絵里姉の喧嘩を見たことがないこの人からすれば、ちよつと信じられないような話なんだろうな・・・

「ちなみにこれは、後から絵里姉から聞いたんですけど・・・当時の絵里姉は、μ sに嫉妬してたらしいです」

「嫉妬？」

「ええ。当時の絵里姉は生徒会長として、音ノ木坂を廃校にしない為に必死で頑張っていました。それなのに自分の味方だと思っていた俺が、μ sに肩入れしているのを見てやきもちを妬いてたんですけど」

「・・・何その子供みたいな理由」

呆れている小原理事長。

まあ確かに、ちよつと子供っぽいよな・・・

「・・・でも、ちよつと『絵里姉っぽいな』って思いました。周りから『お堅い人』つ

ていう印象を持たれてたみたいですけど、本当の絵里姉は甘えん坊で寂しがりやな普通の女の子でしたから」

だからこそ絵里姉は、俺が内浦へ行くことに反対した。

『出て行つてほしくない』『一緒に暮らしたい』という思いがあつたからこそ、絶対に応援なんてしてくれないだろう。

そう思っていたけど・・・

「・・・小原理事長」

俺は小原理事長へと視線を向けた。

「貴女・・・絵里姉と会っていたみたいですね」

「っ!?!」

息を呑む小原理事長。

「ど、どうして・・・」

「・・・昨日の夜、果南さんから聞きましたよ。俺がA q o u r sのマネージャーを辞めると宣言した日の夜、貴女から聞いたってという話を」

溜め息をつく俺。

「絵里姉に何を頼まれたのか、教えてもらつて良いですか?」

「・・・果南から聞いたんでしょ?」

「貴女から聞きたいんです。他でもない、貴女の口から」  
ジツと小原理事長を見つめる俺。

観念したのか、小原理事長が深い溜め息をついた。

「・・・天が浦の星に来ることが決まってすぐの頃、南理事長と会う機会があつてね。その時、南理事長が絵里を連れてきてたのよ」

ポツポツと語り出す小原理事長。

「久しぶりの再会を喜んで後、絵里から聞いたの。浦の星のテスト生の話を巡って、天と喧嘩しちゃったって。凄く申し訳なくなつて、何度も絵里に謝つたわ。絵里は『鞠莉のせいじゃない』って言ってくれたけど・・・それでも、本当に申し訳なく思った」

俯く小原理事長。

「その時、絵里に説明したの。浦の星の存続の為に、私がもう一度スクールアイドルをやる為に・・・どうしても天の力を借りたいんだって。それを聞いた絵里は、私にあるお願いをしてきたわ」

小原理事長は意を決したように顔を上げ、俺の顔を見つめた。

「天を・・・マネージャーにしてほしい、って」

「っ・・・」

果南さんから聞いた通りだった。

あの絵里姉が・・・

『天は本当に優秀なマネージャーだから、絶対に鞠莉の力になってくれる』って。『天にもう一度、スクールアイドルに携わる機会を与えてほしい』って。あの時の私には、どうして絵里がそんなお願いをするのか分からなかったけど・・・私にとっては願ってもない話だったから、勿論OKしたわ」

そう言つて笑みを浮かべた小原理事長だったが、すぐに暗い表情に変わった。

「でも・・・浦の星で再会した天は、頑なにマネージャーになることを拒否した。私にはその理由が分からなくて、内心ちよつと焦つてたの。このままだと、絵里の願いを叶えてあげられないと思つた私は・・・最低の行動をとつた」

「・・・俺を脅して無理矢理言うことを聞かせる、ですか」

俺の言葉に、小原理事長が力なく頷く。

自分自身の目的を果たす為だけなら、俺に話して協力を求めることも出来たはずだ。

だが絵里姉のお願いを俺に話すわけにもいかず、焦つてとつた行動が脅しだったんだろう。

「海未先生から天の話聞いた時、全て合点がいったわ。どうして絵里があんなお願いをしたのか、どうして天がマネージャーになることを拒否したのか・・・あの時自分がとつた行動を、死ぬほど後悔した」

小原理事長の目に涙が滲む。

「どうして私は、あんな行動しかとれなかったんだろうって。絵里のお願いについては伏せたまま、自分の目的だけを話して協力を仰ぐことだって出来たのに……あの時の私は、天にマネージャーを引き受けてもらうことしか考えてなかった。愚かよね……」

「小原理事長……」

「こんな私が、『もう一度天と距離を縮めたい』だなんて……そんなことを望む資格も無いのに……!」

肩を震わせる小原理事長。涙が次々と石段に滴り落ちる。

「……ハア」

俺は大きな溜め息をつくくと、ゆっくり立ち上がった。

「……よいしょ」

「……えっ?」

小原理事長をお姫様抱っこする。

お、案外軽いなこの人……

「そ、天……?」

突然のことに困惑している小原理事長をよそに、俺は波打ち際まで近付いた。

そしてそのまま海へと入っていく。

「え、ちよつと!?!」

慌てる小原理事長を無視し、腰が浸かる辺りまで進む。  
そして……

「おらあつ!」

「キャアアアアアアアアアアアツ!?!」

小原理事長をぶん投げた。

盛大に水飛沫を上げて落ちて落ちる小原理事長。

「ゲホツ……ゴホツ……ちよ、何するのよ!?!」

「いや、涙を洗い流してあげようかと」

「方法が酷すぎない!?!」

「貴女だって最低な方法をとったでしようが」

「うぐつ……」

言葉に詰まる小原理事長。やれやれ……

「貴女は昔から変わりませんね。思い切りは良くせに、失敗すると今みたいにうじうじして引きずって……ハッキリ言っただめんどくさいです」

「ホントにハッキリ言ったわね!?!オブラートに包むとか無いの!?!」

「貴女にはオブラートが無くても、ビブラートがあるでしょ」

「全然上手くないわよ!？」

ツツコミ連発の小原理事長。少しは元気が出たらしい。

「脅しの件については、『許す』と言ったはずですよ。何を今さら後悔してくれちゃってるんですか」

「で、でも……!」

「それに……ちよつと安心しました」

「え……?」

呆然とする小原理事長に、俺は笑みを浮かべた。

「……脅された時、思ったんです。貴女は最初から、力づくで言うことを聞かせるつもりだったんだって。俺のことも、利用価値のある駒くらいにしか思っていないんだって」

「天……」

「俺を大事に思ってくれてることは、花火大会の時に伝えてもらいましたけど……それでも、脅された時のことを引きずっていたところがあつたんです。だからこそ、貴女とどう接したら良いのか分からなくて……」

でも、悩む必要なんて無かつた。この人は本当に昔と変わっていない。

あの頃のままの、どこまでも純粹で不器用な人だつた。

「貴女はただ、『助けて』の一言が言えなかっただけ……絵里姉の願いを叶えようとするあまり、その一言が言えなかっただけ……それだけだったんですよね」

「っ……」

「利用するつもりは無くても、ただ力を貸してほしかっただけ……それがずいぶん大ごとになっちゃいましたね」

「……そんなつもりが無かったにせよ、結果的にそうなってしまったんだもの。何の言い訳にもならないわ」

「そうやって潔く自分の非を認める割には、うじうじ引きずるんだよなあ……ホントめんどくさい」

「だから直球すぎるんだってば!？」

「ストリートに言わないと、自分の気持ちが相手に伝わらないでしょ。特に……鞠莉ちゃんみたいな人には」

「どういう意味……えっ?」

ツツコミを入れかけたところで、驚いて固まる鞠莉ちゃん。

「い、今……名前を……」

「……ゴメン、鞠莉ちゃん」

俺は鞠莉ちゃんに謝った。

「ずっと勘違いしてて・・・冷たく当たって・・・本当にゴメン」  
俺の態度で、どれほど彼女を傷つけただろうか・・・

本当は誰よりも傷つきやすい彼女が、よく泣かなかったなと思う。

「また、もう一度・・・俺と仲良くしてくれる？」

手を差し出す俺。

鞠莉ちゃんの目に、みるみる涙が浮かんでいく。

「ほ、本気なの・・・？」

「・・・うん」

頷く俺。

「ここからもう一度、新しい関係を築いていきたいなって。昔のこととか、これまでのことを無かったことにするんじゃないかって・・・全てを受け入れた上で、もう一度鞠莉ちゃんとおっ!？」

最後まで言えなかった。

鞠莉ちゃんが勢いよく、俺の胸に飛び込んできたからだ。

「・・・最後まで言わせてよ」

「・・・限界だったんだもん」

俺を強く抱き締め、肩を震わせる鞠莉ちゃん。

「ごめんなさい・・・本当にごめんなさい、天・・・！」

「・・・もう良いんだよ、鞠莉ちゃん」

鞠莉ちゃんを抱き締め、優しく頭を撫でる。

「ここからまた始めよう。ずいぶんすれ違っちゃったけど・・・またこうして繋がれたんだもん。これからよろしくね、鞠莉ちゃん」

「っ・・・うんっ・・・！」

鞠莉ちゃんは頷くと、堪えきれなくなり声を上げて泣き続けた。

俺は鞠莉ちゃんが泣き止むまで、ずっと鞠莉ちゃんを抱き締め続けるのだった。

思いのこもった曲は聴く人の心を打つ。

「……ん」

ふと目が覚める。外が暗いので、恐らくまだ夜中だろう。

もう一度寝ようとしたところで、ベッドで寝ていたはずの千歌さんが椅子に座っていることに気付いた。

「……千歌さん？」

「あ、天くん……起こしちゃった？」

「いえ、何か目が覚めちゃって……」

小声で会話する俺達。

と、千歌さんが苦笑しながら俺の方を見る。

「それにしても……何か違和感のある光景だね」

「ああ、これですか」

苦笑しながら、俺を抱き枕にして寝ている鞠莉ちゃんを見る。

あの後仲睦まじく部屋に戻った俺達を見て、皆もの凄くビックリしていた。

まあ今まで距離のあった二人が、身体を寄せ合って帰って来たらそりやビックリする

よな・・・

「俺としては懐かしいですけどね。小さい頃の鞠莉ちゃんは、いつもこんな風に俺にベツタリくつついてましたから」

「私の中だと、二人の間に距離があるイメージが強くてさあ・・・目の前の光景が信じられないよ」

「すぐに慣れますよ」

笑みを浮かべ、鞠莉ちゃんの頭を撫でる。

「・・・やつと仲直り出来たんです。もう手を離したりしません」

「・・・そっか」

微笑む千歌さん。

「ところで、千歌さんも目が覚めちゃったんですか？」

「ああ、うん・・・ちよつとね」

困ったように笑う千歌さん。

「もう一度寝ようとしたんだけど・・・梨子ちゃんのこと考え始めたら、何か寝れなくなっちゃって」

「・・・ピアノコンクールですか」

あれから千歌さんとは、そのことについて何度か話をしていた。

奈々さんから聞いた話や、ピアノコンクールの日とライブ予備予選の日が重なること……

梨子さんが言っていたことも、千歌さんには全て話してある。

「私ね、考えたんだけど……やっぱり梨子ちゃんは、ピアノコンクールに出るべきだと思う。たとえライブの予備予選に出られなくても」

いつになく真面目な表情で語る千歌さん。

「でも……梨子ちゃんは、ピアノよりもスクールアイドルを優先しようとしてる。そんな梨子ちゃんに、どうやって私の気持ちを伝えたら良いのか……」

悩む千歌さん。どうやって、か……

「……そういえば、ピアノを弾く梨子さんをちゃんと見たことってないですよね」

「ああ、確かに……前にちよつとだけ見たことはあるけど……」

「……じゃあ見せてもらいましょか」

「え？」

首を傾げる千歌さん。

俺は鞠莉ちゃんを起こさないように抜け出すと、寝ている梨子さんの耳元にそつと顔を近付け……

「……わんっ」

「ひいつ!？」

飛び起きる梨子さん。慌てて辺りをキョロキョロと見回す。

「……あれ？」

「……自分でやつといてアレですけど、上手くいきすぎて引きますね」

「どんだけ犬が怖いのに梨子ちゃん……」

呆れる俺と千歌さん。

「天くん？千歌ちゃん？今犬の鳴き声がしなかった？」

「気のせいです」

「いや、でも確かに……」

「気のせいです」

「わ、分かったってば!」

鼻がくつつくほど顔を近付けて、強引に押し切る。

「さあ、梨子さんが起きたところで……行きますか」

「え、どこに？」

千歌さんの質問に、俺は笑みを浮かべて答えるのだった。

「決まってるじゃないですか……夜中にピアノを弾いても大丈夫な場所ですよ」

\*\*\*\*\*

「……ここ、天くんの家だよね？」

「そうですよ」

戸惑いながら尋ねてくる梨子さんに、頷いて答える俺。

俺・千歌さん・梨子さんの三人は、俺の家へとやって来ていた。

「……ここが夜中にピアノを弾いても大丈夫な場所？」

「……そもそもピアノなんてあったっけ？」

「まあまあ、とりあえず上がって下さい」

二人を家の中に招き入れる俺。

玄関から入ってすぐ右手にある部屋のドアを開け、中の電気を点ける。

「じゃーん」

「ええっ!？」

「嘘!？」

部屋の中央を見てビックリしている二人。

そこには、グランドピアノが鎮座していた。

「ちよ、天くん!?! どういうこと!?!」

「んー、話すところとちよつと長いんですけど・・・」

苦笑する俺。

「鞠莉ちゃんから聞いた話によると、この家を建てた人って鞠莉ちゃんのお父さんの知り合いなんですって。その人はピアニストで、このグランドピアノもその人の物だったみたいです」

グランドピアノに手を添える俺。

「でもその人、海外に引越すことになったらしくて。その時に鞠莉ちゃんのお父さんが、この家を土地ごと買い取ったんですって。当時の小原家は淡島のホテルに住んでたそうなんですけど、こっちにも家があった方が便利だろうって考えたみたいですよ。まあ結局、使うことはほとんど無かったみたいですけど」

「流石は大富豪・・・考えることが庶民とは違うね・・・」

啞然としている千歌さん。

確かに、なかなか理解出来ない考えだよな・・・

「まあその人も引越し先が海外っていうことで、家で使ってた物のほとんどを置いていったそうなんですよ。その中の一つが、このグランドピアノっていうわけです」

「こ、こんな高価な物を・・・」  
表情が引き攣っている梨子さん。

きつとその人もボンボンだったんだろうな・・・

「まあ、俺としてはラッキーでしたけどね。家具や電化製品が揃ってるんで、生活するのに困りませんし」

「あ、確かに・・・でも、ちゃんと使えてるの？長年使われてなかったんでしょ？」

「その辺りは小原家の方でチェックしてくれたみたいで、全然問題ありませんでした。入居前の清掃も小原家の方でやってくれたらしくて、隅々まで綺麗になってましたよ」

「・・・至れり尽くせりね」

どこか呆れている梨子さん。

ホント小原家凄いやな・・・

「ちなみにこの部屋、ちゃんと防音対策が施されてるそうですよ。ここなら思いつきりピアノを弾いても大丈夫です」

「ちなみに聞くけど、このピアノの調律は・・・」

「それも小原家がやってたみたいです。この前真姫ちゃんが来た時に弾いてもらったんですけど、『完璧の一言に尽きるわ』ですって」

「・・・もう何も言えないわ」

溜め息をつく梨子さん。

俺は苦笑すると、ピアノの前に置いてある椅子を引いた。

「梨子さん、どうぞ」

「ほ、本当に弾くの・・・?」

「ここまできて何言ってるんですか。家から楽譜だって持って来てくれたのに」

「こ、これは・・・」

手に持つている楽譜をギュッと握り締める梨子さん。

「・・・それ、海の曲ですよね?」

「っ!? な、何で分かるの!?!」

「海の音を聴いてから、頑張つて作曲してることは奈々さんから聞いてましたからね」

「もう、お母さんったら・・・」

恥ずかしそうに俯く梨子さん。

そんな梨子さんの背中に、千歌さんがそつと手を添える。

「私も聴いてみたいな。梨子ちゃんが作った海の曲」

「・・・あんまり良い曲じゃないよ?」

「お願い! 少しでも良いから!」

必死に頼み込む千歌さん。

梨子さんは溜め息をつくど、俺が引いた椅子に腰掛けた。

「・・・少しだけだからね」

「梨子さん・・・真姫ちゃんのツンデレがうつりました?」

「誰がツンデレよ!?!」

「ああ、すみません。元々でしたね」

「しばくわよ!?!」

俺を睨みつつ、楽譜を立て掛ける梨子さん。

楽譜の一番上に曲名が書かれていた。

「『海に還るもの』ですか・・・良い曲名ですネ」

「・・・別に」

「今の時期にそのネタは止めた方が良いでしょう」

「何の話!?!」

ツツコミを入れつつ、鍵盤に両手を置こうとする梨子さん。

しかし、その直前で一瞬手が止まってしまふ。

「・・・大丈夫ですよ」

梨子さんの手に、そつと自分の手を重ねる俺。

「上手く弾こうとか、そんなこと考えなくて良いんです。梨子さんの好きなように弾

「いて下さい」

「天くん……」

「つていうか、何ちよつと緊張してるんですか。俺達の仲でしように」

「……フフツ、どんな仲よ」

クスツと笑う梨子さん。緊張もほぐれたのか、ゆつくりと鍵盤に手を置く。

そして深く息を吸い込み……弾き始めた。

「わあ……！」

顔を輝かせる千歌さん。

梨子さんの奏でる音は綺麗で美しく、聴いているだけでとても心地良かった。

優しくて、それでいて力強くて……まるで『桜内梨子』という人そのものが、音に表れているようだ。

それに……

「……良い曲ですね」

「……うん」

頷く千歌さん。

梨子さんは『あんまり良い曲じゃない』なんて言っていたが、とんでもない。聴く人の心を魅了する、素晴らしい曲だ。

この曲を作るのに、梨子さんがどれほど苦悩してきたか・・それを知っているだけに、余計心に響くものがあつた。

そつと目を閉じ、梨子さんの作り出す世界に浸る俺と千歌さんなのだった。

人の心は複雑なものである。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます」

「いただきます」

麦茶の入ったコップを、千歌さんと梨子さんに差し出す俺。

演奏を終えた梨子さんを労うべく、俺達はリビングに移動していた。

「・・・凄く良い曲だった」

ポツリと呟く千歌さん。

「何て言うか・・・梨子ちゃんがいっぱい詰まっていた」

「千歌ちゃん・・・」

自分の作った曲を褒められて、少し嬉しそうな梨子さん。

一方、千歌さんは何か言いたそうな表情をしている。

「あのね、梨子ちゃん・・・」

「ん？何？」

「その・・・」

言いよどむ千歌さん。

俺は千歌さんの背中にそつと手を添えた。

「……落ち着いて。焦らなくて大丈夫ですよ」

「……うん」

千歌さんは一度深呼吸をすると、梨子さんを真剣な眼差しで見つめた。

「……ピアノコンクール、出てほしい」

「っ……」

梨子さんは息を呑むと、少し悲しげに目を伏せた。

「……私が一緒じゃ、嫌？」

「違うよっ!」

大きな声を上げる千歌さん。

「一緒が良いに決まってるよっ!でもっ……!」

「落ち着けアホみかん」

「あたっ!?!」

頭にチョップをお見舞いする。やれやれ……

「ちよ、天くん!?!何するの!?!」

「チョップです」

「それは見れば分かるよ!? 何でそんなことするのかって聞いてるんだけど!」

「千歌さんのアホ毛が目障りだったんで」

「そんな理由!」

「まあ冗談はさておき・・・落ち着けて言ってるでしょうが」

千歌さんを宥める俺。

「すぐ感情的にならないの。どうして梨子さんにピアノコンクールに出てほしいのか、梨子さんに伝わるように話して下さい」

「っ・・・ゴメン」

千歌さんは一言謝ると、再び深呼吸した。

「・・・思い出したの。梨子ちゃんをスクールアイドルに誘った時のこと」

ポツリポツリと語り出す千歌さん。

「スクールアイドルと一緒に続けて、梨子ちゃんの中の何かが変わって・・・またピアノに前向きに取り組めたら、凄く素敵だなんて。私、そう思ってたなんて」

「千歌ちゃん・・・」

「梨子ちゃんがA q o u r sを大切に思ってくれて、ラブライブを優先しようとしてくれて・・・凄く嬉しかった。私だって、梨子ちゃんと一緒に予備予選に出たい。でも・・・」

悲しそうに笑みを浮かべる千歌さん。

「梨子ちゃんにとつてピアノは、同じくらい大切なものだったんじゃないの？」

「っ……」

「その気持ちに……答えを出してあげて」

梨子さんに手を差し伸べる千歌さん。

「私、待つてるから。どこにも行かないって、ここで皆と一緒に待つてるって約束するから。だから……！」

千歌さんが言い終える前に、梨子さんが思いつきり千歌さんを抱き締める。

梨子さんの目には、涙が浮かんでいた。

「ホント……変な人……」

涙声の梨子さん。

千歌さんの目にも、みるみる涙が滲んでいく。

「でも……大好き」

千歌さんを抱き締める腕に、ギュつと力を込める梨子さん。

「……ありがとう、千歌ちゃん。私、ピアノコンクール出るよ」

「っ……」

堪えきれなくなったのか、千歌さんの目から次々と涙が溢れる。

「梨子ちゃんっ……!」

梨子さんの胸に顔を埋め、泣き出す千歌さん。

千歌さんだつて本当は、梨子さんと一緒にステージに立ちたいはずだ。それでも梨子さんの為を思い、ピアノコンクールに送り出す決意を固めた。

流石、A q o u r s のリーダーだな……

「……梨子さん」

呼びかける俺。

「梨子さんの弾くピアノは、温かくて優しくして……聴いてくれる人達の心に絶対響きます。俺が保証しますよ」

「天くん……」

「梨子さんが心を込めて作ったあの曲を、胸を張って披露してきて下さい。『これが私の作った曲なんだ』って」

俺は梨子さんの頭を撫でた。

「梨子さんは一人じゃありませんよ。梨子さんのことを、心から応援している仲間達がいる……それを忘れないで下さいね」

「っ……ありがとう……」

泣きながら微笑む梨子さん。

「A q o u r s のこと・・・頼むわね」

「勿論です。マネージャーですから」

笑みを浮かべる俺。

「予備予選は必ず突破します。次のステージには梨子さんも出てもらいますから、楽しみにしてて下さい」

「フフツ・・・期待してるわ」

俺に寄りかかってくる梨子さん。

「私も頑張るから。応援しててね」

「ええ、勿論」

梨子さんと千歌さんを、包み込むように抱き締める俺。

俺達はしばらくの間、三人で身を寄せ合って過ごしたのだった。

\*\*\*\*\*

「ふう・・・」

再び千歌さんの部屋へと戻ってきた俺。

眠っている鞠莉ちゃんを起こさないよう、そっと布団に入り込む。

と、鞠莉ちゃんの目がパツチリ開いた。

「お帰りなさい」

「・・・起きてたんかい」

「千歌つちや梨子と一緒に部屋を出て行った時から、ずっと起きてたわよ」

鞠莉ちゃんは小さく笑うと、ギユつと俺に抱きついてきた。

「こんな魅力的な女の子を差し置いて、他の女の子と夜のデートに行くなんて・・・天は浮気者デース」

「デートじゃないし、自分で『魅力的』とか言っちゃうのはどうなのよ？」

「あら、マリーは魅力的じゃないの？」

「おっぱいが大きいところに關しては魅力的かな」

「フフツ、天のエツチ♡」

あからさまに豊満な胸を押し付けてくる鞠莉ちゃん。

うん、ご馳走様です。

「それで、二人はどうしたの？」

「外に出てちよつと汗かいたから、もう一度お風呂に入ることにしたんだよ。まだ

帰って来てないところを見ると、俺の方が先に上がったみたいだね」

合宿中のお風呂は、志満さんのご厚意で大浴場を使わせてもらっている。

今の時間は誰も入っておらず、男湯は貸切状態だった。

女湯の方も同じだろうし、あの二人はもうしばらくお風呂を満喫してくるだろうな。

「鞠莉ちゃんも入ってきたら？お風呂好きでしょ？」

「んー、そうね・・・天も一緒に入るなら行くわよ」

「オツケー、身体の隅々まで洗ってあげるよ」

「いやん♡天つてばホントにエッチなんだから♡」

腰をくねらせる鞠莉ちゃん。

こんな風にまた、鞠莉ちゃんと冗談を言い合えるようになるとはな・・・

「・・・フツ」

鞠莉ちゃんは笑みを浮かべると、俺の胸に顔を埋めた。

「何だか懐かしいわね・・・昔に戻ったみたい」

「・・・うん」

鞠莉ちゃんの頭を優しく撫でる俺。

「改めて・・・これからよろしくね、鞠莉ちゃん」

「・・・鞠莉」

「え……?」

「鞠莉って呼んでちょうだい。ちゃん付けじゃなくて、呼び捨てで」  
微笑む鞠莉ちゃん。

「天、言ってくれたわよね。『新しい関係を築いていきたい』って。その初めの一歩として、呼び捨てにしてほしいの」

「いや、でも鞠莉ちゃんの方が年上だし……」

「……昔も同じこと言ってたじゃない」

ジト目で俺を見る鞠莉ちゃん。

「私は最初から『呼び捨てでいい』って言ったのに、『年上だから』っていう理由で頑なに拒まれて……妥協点がちゃん付けたのよね」

「ハハハ、昔ノコトナンテ覚エテナイヨ」

「誤魔化さないの」

俺の頬をつねる鞠莉ちゃん。

「それとも、さっきの言葉は嘘だったのかしら?」

「いや、勿論本心だけどさ……」

「だったら……お願い」

上目遣いで俺を見る鞠莉ちゃん。

うわあ、その目はズルいなあ・・・

「分かったよ・・・鞠莉」

「っ・・・」

一瞬で耳まで赤くなる鞠莉。やれやれ・・・

「自分から言い出したくせに、何で恥ずかしがってんの」

「・・・うるさい」

鞠莉はそう言っていると、再び俺の胸に顔を埋めた。

「・・・これからよろしくね、天」

「・・・こっちこそよろしく、鞠莉」

鞠莉を優しく抱き締める俺。

俺達はそのまま、再び意識を手放すのだった。

\*\*\*\*\*

《《梨子視点》》

「ふう・・・サツパリしたね」

「良いお湯だったわね」

千歌ちゃんとなんな話をしながら、千歌ちゃんの部屋へと戻る。

眠っている皆を起こさないよう、そっと自分の布団に戻ろうとしていると・・・

「梨子ちゃん、見て見て」

千歌ちゃんが指を差す。

そこには・・・同じ布団で抱き合って眠る、天くと鞠莉さんの姿があった。

全く、天くんだったら・・・

「・・・さっきまで私達のこと抱き締めてたのに、もう別の女の子を抱き締めてるのね」

「あ、梨子ちゃんが嫉妬してる」

「そ、そんなんじゃないからっ!」

「しーっ、皆が起きちゃうよ」

「あっ・・・」

慌てて口を押さえる私。

「・・・でもさ、良かったよね」

微笑ましそうに二人を眺める千歌ちゃん。

「あの二人、ずっと距離があったから。仲直り出来たみたいで、何かホツとしたよ」

「・・・そうね」

幸せそうに寝ている二人を眺める私。

確かにこの二人の間には、ずっと距離があつた。

それが縮まつて仲良くなつたのだから、本当に喜ばしいことだと思う。

「喜ばしいこと・・・なのよね」

「梨子ちゃん？」

首を傾げる千歌ちゃん。

何故かは分からないけど・・・何となく、胸の奥がモヤモヤしていた。

何でだろう・・・？

「・・・何でもないわ。私達も寝よつか」

「うん。おやすみ」

「おやすみなさい」

千歌ちゃんがベッドに入るのを見届け、私も布団に入る。

「・・・気のせいよね」

胸のモヤモヤを無視して、目を閉じる私なのだった。

## 【黒澤ダイヤ】いつかきつと・・・

「えっ、ダイヤさんの誕生日って元旦なの!？」

「そうだよ」

俺の問いに頷くルビィ。

俺・ルビィ・花丸・善子の一年生組は、俺の家に集まって冬休みの宿題を片付けているところだった。

「マジか・・・元旦が誕生日って珍しいね」

「ホントよね・・・もしかしてダイヤ達のご両親は、そこまで計算してヤツたのかしら？」

「女の子が『ヤツた』とか言うんじゃありません。っていうか生々しいわ」

「やった？お父さんとお母さんが何かやったの？」

「ルビィ知らないの？子供っていうのはね・・・」

「〃檸●爆弾〃の代わりに〃蜜柑爆弾〃」

「ギャアアアアアッ!?目がッ!?目がアアアアアッ!?」

「善子ちゃあああああんっ!？」

炬燵の上に置かれた蜜柑を、善子の目の前で握り潰す。

千歌さんに見つかったら怒られそうな行為だが、緊急事態だったので仕方ない。

「気にしないで、ルビィ。何でもないから」

「今の光景を見て『気にするな』っていう方が無理だよ!」

「いいからいいから。そこで転がってる心の穢れた堕天使なんか無視して、ルビィは心の清らかなまま成長してね」

「何で慈愛に満ちた表情でルビィの頭を撫でてるの!」

ルビィのツツコミ。この子は俺が守らないと・・・

「うう、目があ・・・」

「自業自得すら」

目を擦る善子を見て、花丸が呆れている。

「でも元旦つていうことは、マル達は直接お祝い出来ないはずらね・・・」

「冬休み中だし、お正月はA q o u r sの練習も休みだしねえ・・・」

「んー、どうにか直接お祝いしたいけど・・・あつ」

「天くん? どうしたの?」

首を傾げるルビィ。

俺は三人に、あることを提案するのだった。

「皆、大晦日の予定って空いてる？もし空いてるなら・・・」

\*\*\*\*\*

「うわあ、人がいっぱい・・・」

人の多さに唖然としている千歌さん。大晦日の夜、俺達は神社へとやって来ていた。境内は多くの人で賑わっており、俺達と同じく年が明ける瞬間を今か今かと待っている。

「うふふ、天くうん・・・」

「ちよ、梨子さん!?!」

背後から梨子さんが抱きついてくる。

顔は赤くなっており、目もトロンとしていた。

「天くんも甘酒呑む？美味しいわよ？」

「酔ってるんですか!?!しかも甘酒で!?!」

「梨子ちゃん、さつきから結構なペースで呑んだからねえ・・・」

呆れている曜さん。いや、気付いてたなら止めるや。

「何なら、私が口移しで吞ませてあげようか?」

「是非お願いします」

「ちよつと天!? 何で欲望に忠実になつてるの!」

「そうよ天! 言つてくれれば私がやつてあげるのに!」

「鞠莉!? 何言つてんの!」

果南さんのツツコミ。

ダイヤさんが呆れながらこつちを見ている。

「全く、皆さんはしやぎすぎですわよ? もつと節度を持つて・・・」

「あつ、曜ちゃん! 屋台出てるよ!」

「ホントだ! 行つてみよう!」

「食べ物屋台もあるぞら!」

『『激辛たこ焼き』!? 興味をそそられるわ!』

「花丸ちゃん!? 善子ちゃん!? 待つてえ!」

「人の話を聞きなさあああああいつ!」

ダイヤさんの絶叫も虚しく、千歌さん・曜さん・花丸・善子・ルビイが屋台の方へと

走つて行つてしまう。

「おいおい・・・」

「アハハ、行っちゃったね・・・」

苦笑する果南さん。

「私と鞠莉が監督してるから、天とダイヤはどこかに座ってゆつくりしてて。すぐに戻ってくるからさ」

「ついでにこの酔っ払いも回収していきマース」

「ちよ、私は天くんと一緒に良いのお！」

俺から梨子さんを引き剥がす鞠莉。

「うわあ、容赦ないなあ・・・」

「・・・ダイヤのこと、お願いね」

「つ・・・了解」

さりげなく耳元で囁かれ、思わず苦笑してしまう。

「ああ、そういうことね・・・」

「じゃ、ちよっど行ってくるね」

果南さんはそう言うのと、俺に向かって軽くウインクしてきた。

この人もそういうつもりだったのね・・・

「・・・行ってしまいましたわね」

溜め息をつくダイヤさん。

「全く、勝手な行動ばかり・・・」

「まあまあ、良いじゃないですか」

苦笑しながらダイヤさんを宥める俺。

「そのベンチ空いてますし、座って皆を待ちましょうか」

「・・・そうですわね」

二人でベンチに腰掛ける。

こうして見てみると、本当に人が多いな・・・

「・・・フフツ」

「ダイヤさん？」

境内の様子を眺めていると、不意にダイヤさんが笑った。

どうしたんだらう？

「ああ、すみません。楽しくてつい」

微笑むダイヤさん。

「友人と一緒に、賑やかに年越しの瞬間を待つなんて初めてなものですから・・・何だ

か新鮮な気持ちですわ」

「・・・楽しんでもらえてるようで、ホッとしました」

笑う俺。

「ダイヤさんの場合、もつと静かに過ごしたいんじゃないかと思ってたんで・・・」

「静かな時間も良いですけど・・・こういう時間も嫌いではありませんわ」

笑みを浮かべながら、屋台ではしゃいでいる皆の方を見つめるダイヤさん。

「・・・ありがとうございます、天さん」

「え・・・？」

「ルビィから聞きましたわ。私の誕生日を祝う為に、わざわざ皆を集めてくださったんでしょ？」

「・・・バレてましたか」

全くもう・・・ルビィは何で話しちやうかなあ・・・

「元旦が誕生日だと、友達からは直接お祝いしてもらえないもので・・・内心少し寂しかったりもしたのですが、天さんのおかげで良い誕生日が迎えられそうですわ」

「・・・それなら良かったです」

そう言ってもらえるだけで、行動した甲斐があつたというものだ。

俺はバッグの中からある物を取り出した。

「日付が変わるまで、まだ少し時間はありますけど・・・これ、先に渡しておきますね」

「これは・・・もしかして、誕生日プレゼントですか？」

「ええ、気に入ってもらえると良いんですけど・・・」

「フフツ、ありがとうございます」

嬉しそうにプレゼントを受け取るダイヤさん。

「空けてもよろしいですか？」

「・・・何かちよつと恥ずかしいんですけど」

「中身が気になって仕方ありませんの。お願いします、天さん」

「・・・どうぞ」

俺が躊躇いながら頷くと、ダイヤさんがプレゼントを開けた。

その中身を見て、ダイヤさんが驚いたように目を見開く。

「マフラー・・・えっ、もしかして手編みですか!？」

「ええ、まあ・・・売ってる物と比べたら、あまり良い物じゃないかもですけど」

「とんでもない! 凄く上手に出来てますわ!」

目を輝かせ、赤いマフラーを眺めているダイヤさん。

「天さん、編み物がお上手なのですね・・・どなたかに教わったのですか？」

「ええ、ことりちゃんに」

μsのマネージャーをやっていた頃から、ことりちゃんにはよく編み物を教わっていた。

ことりちゃん、こういうの本当に上手かったもんなあ・・・と、ダイヤさんが上目遣いでこっちを見てくる。

「あの・・・巻いていただいても、よろしいですか？」

「え、ええ・・・」

少し緊張しながら、ダイヤさんの首にマフラーを巻いていく。

巻き終えると、ダイヤさんが首元に巻かれたマフラーをギュつと握った。

「・・・ありがとうございます、天さん。大事にしますわね」

頬を赤く染め、少し照れたようにはにかむダイヤさんを見て・・・俺は思わずドキツとしてしまっていた。

すると・・・

ゴーン・・・ゴーン・・・

「除夜の鐘が鳴っている、ということとは・・・」

「年、明けましたね・・・」

いつの間にか、年が明けてしまったようだ。

俺達はゆつくりと顔を見合わせ・・・同時に笑みを零した。

「明けましておめでとうございます、天さん」

「明けましておめでとうございます、ダイヤさん」

何だか呆気なく年が明けてしまったが・・・こういうのも悪くはないかもな。

「お誕生日、おめでとうございます」

「ありがとうございます」

俺の祝福に、笑顔で応えてくれるダイヤさん。

「素晴らしい誕生日プレゼントも頂くことが出来て、私は幸せですわ」

「そう言ってもらえて何よりです・・・へくしゅんっ！」

思わずくしゃみが出る。やっぱり冷えるな・・・

「大丈夫ですか？」

「大丈夫です。やっぱり真冬の夜は寒いですね」

苦笑しながらそう返すと、ダイヤさんはマフラーを外して俺に近付き・・・俺の首にマフラーを巻き始めた。

「ちよ、ダイヤさん!？」

「・・・これでよし、と」

俺の首に半分ほど巻いたところで、残りを自分の首に巻くダイヤさん。

俺とダイヤさんは、同じマフラーで繋がっている状態になった。

「フフツ、これで少しは暖かいでしょう?」

微笑むダイヤさん。

同じマフラーを巻いているので、俺達は自然と密着する形になっていた。

ヤバい、ドキドキが止まらない・・・

「・・・こういうことすると、男は勘違いしちゃいますよ」

「それならご心配なく。天さん以外にするつもりはありませんので」

「いや、俺も男なんですけど」

「フフツ、分かっていますわ」

クスクス笑うダイヤさん。

「天さんでしたら、勘違いしていただいても構いませんから・・・というより、勘違いではないのですけれど」

「えっ、今何て・・・」

「おーい、天くん!ダイヤさん!」

俺が聞き返そうとしたところで、千歌さんの元気な声が響き渡った。

「あけおめー!ことよろー!」

「ダイヤさん!誕生日おめでとーございまーす!」

「んー、焼きそば美味しいぞらー!」

「ちよつと!?!このたこ焼き全然激辛じゃないわよ!?!」

「善子ちゃん!?!もうタバスコかけるの止めなよ!?!」

「すう・・・すう・・・」

「梨子!?!こんなところで寝ないで!?!」

「アハハ、皆ホント自由だねえ」

騒いでいる皆。何やってんのあの人達・・・

「・・・フフツ」

ダイヤさんは楽しそうに笑うと、ベンチから立ち上がって俺の手を握った。

「行きましよう、天さん。皆さんが待っていますわ」

「・・・ええ。そうしましょうか」

俺はダイヤさんの手を握り返し、一緒に歩き始めた。

結局、さっきの言葉については聞き返せなかつたけど・・・今はその方が良いのかもしれない。

でも、いつかきつと・・・

「今年もよろしくお願ひします、ダイヤさん」

「こちらこそよろしくお願ひ致します、天さん」

手を繋ぎ、マフラーに繋がれながら・・・笑い合う俺とダイヤさんなのだつた。

穴を埋めるのは大変である。

「しつかりね！」

「お互いに！」

固い握手を交わす千歌さんと梨子さん。

ピアノコンクールに出場することになった梨子さんを見送るべく、俺達は沼津駅へとやって来ていた。

「梨子ちゃん、頑張ルビィ！」

「東京に負けてはダメですわよ！」

黒澤姉妹が熱のこもったエールを送る。

梨子さんがピアノコンクールへの出場を決めたあの日、梨子さんは他の皆にも事情を説明していた。

皆は凄く驚いていたが、梨子さんの決意を聞いて快く送り出してくれたのだった。

「梨子ちゃん、そろそろ電車の時間みたい」

時計をチエックしていた曜さんが、梨子さんに知らせる。

「あ、ホントだ・・・そろそろ行かなくちゃ」

「チャオ、梨子」

「気を付けてね」

「ファイトずら」

「主として、リトルデーモンの武運を祈ってるわ」

「フフツ、ありがとう」

笑みを浮かべる梨子さん。

俺は一步前に進み出ると、梨子さんに手を差し出した。

「ピアノコンクール、楽しんできて下さい」

『『頑張ってきて下さい』じゃなくて?』

「梨子さんが作った曲を、多くの人に聴いてもらえるんですよ? 頑張るより前に、楽し

まなきや損でしょう」

「・・・フフツ、天くんらしいわね」

梨子さんは面白そうにクスクス笑うと、俺の手をギュつと握った。

「ありがとう、天くん。楽しんでくるわね」

「ええ、いつてらっしゃい」

俺の手を離し、改札を通ってホームへと向かう梨子さん。

「梨子ちゃん!」

千歌さんが大きな声で呼びかける。

「次のステージは、絶対に皆で歌おうね！」

「ええ、勿論！」

梨子さんはニツコリ笑うと、勢いよくホームへと駆け出していった。

「さあ、練習しに行きますわよ！」

手をパンツと叩くダイヤさん。

合宿も終わり、今は学校がA q o u r sの練習場所になっている。

今日もしっかり練習しないとな……

「梨子ちゃんのためにも、予備予選で負けるわけにはいかないからね！」

「んー、気合いが入りマースー！」

燃えている果南さんと鞠莉。

学校へ向かおうとする皆の後に続くようしていると、曜さんがその場から動かないことに気付いた。

「曜さん？どうかしました？」

「いや、千歌ちゃんが……」

指を差す曜さん。

そこには、梨子さんが去った方向を見つめる千歌さんの姿があった。

「いつまで感傷に浸ってんですか」

「あたっ!？」

千歌さんの頭にチョップをお見舞いする。

「次のステージは皆で歌うんでしょう?立ち止まっている暇は無いですよ」

「天くん・・・」

「梨子さんに負けないように、俺達も頑張りましょう」

「うんっ!」

千歌さんは元気よく頷くと、走って皆の後を追っていった。

やれやれ・・・

「さて、俺達も行きましょうか」

「・・・」

「曜さん?」

「あ、うん!行こっか!」

慌てて笑顔を見せる曜さん。

何か様子がおかしいな・・・

「出発進行!ヨーソロー!」

「あ、ちよっと!」

俺の手を掴み、元気よく引つ張っていく曜さん。

何だかそれが空元気な気がして、少し心配になる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「さあ、しつかり磨くのですわ！」

「『竜の●爪』」

「びぎやあああああつ?! 頭が割れますわあああああつ?!」

俺に頭を掴まれ、悲鳴を上げるダイヤさん。

学校にやって来た俺達は、何故かプール掃除をするハメになっていた。

「何で俺達がプール掃除をしないとイケないのか、きちんと説明していただけません

かねえ・・・?」

「ちよ、天さん?! 頭がつ! 頭がミシミシいつてますわつ!」

「それは良かった。少しは柔らかくなりそうですね」

「嫌あああああつ?!」

「も、もうその辺で止めてあげてえええええっ!？」

ルビイが慌てて止めに入ってきたので、俺は仕方なく手を離れた。

「うう、痛かったですわあ・・・」

「自業自得よ」

涙目で頭を擦るダイヤさんを見て、鞠莉が呆れていた。

「『夏休みに入ったら、プール掃除を何とかしろ』って言つといたのに」

「『竜の鉤』」

「ギヤアアアアツ!? 頭が割れるうううううっ!？」

今度は鞠莉の頭を鷲掴みにする。

「生徒会長に仕事を押し付けるなんて、理事長としてどうなんですかねえ・・・?？」

「ゴメンなさあああああいつ!？」

「これで分かったでしょう? 正義は必ず勝つのですわ!？」

「誰が正義ですって・・・?？」

「びぎやあああああつ!？」

「お姉ちゃあああああんっ!？」

「・・・理事長と生徒会長が、普通にしばかれてるんだけど」

「・・・この学校を支配してるのって、案外天だったりして」

善子と果南さんが、表情を引き攣らせながらヒソヒソ会話していた。

ここからだと言えませんが、何か失礼なことを言われている気がする。

「そのこの墮天使（笑）とゴリラに告ぐ。口より先に手を動かさない」

（笑）「って何よ!？」

「ゴリラじゃないもんっ!」

二人の抗議はサラッとスルーして、俺は目の前の生徒会長と理事長を冷たい眼差しで見つめた。

「……この後の練習、二人だけ特別メニューをやってもらうんで。覚悟しといて下さ

いね……?」

「ひいつ!？」

抱き合って身体を震わせる二人。

この罪は身をもって償ってもらうことにしよう。

「ハア……何でプール掃除なんてやらないといけないのか……」

「ダメだよ天くん! 気合いを入れなさい!」

背後から曜さんの声がする。

何だ、元氣そうじゃん……

「いや、気合いなんて入るわけ……何ですかその格好」

「ヨーツロー！」

ビシツと敬礼する曜さん。

白い制服に身を包んだ曜さんは、まさしく船乗りの格好をしていた。

「プール掃除といえばデッキブラシ、デッキブラシといえば甲板磨き、甲板磨きといえ  
ば船乗り！ということで、船乗りのコスプレをしてみました！」

「・・・相変わらず衣装大好きですね」

「どうか?! 似合うかな?!」

「曜さんはメチャクチャ可愛いんだから、何を着ても似合うって前にも言ったでしょ  
「・・・相変わらず真顔で恥ずかしいこと言うよね」

頬を赤らめる曜さん。

と、後ろから鞠莉が抱きついてきた。

「ちよつと天?! 私というものがあいながら、何で曜を口説いてるの!?!」

「口説いてないわ。つてか、いつから鞠莉は俺の彼女になったの?」

「そんな!?! あの夜のことを忘れたの!?!」

「どの夜やねん」

「あんなに情熱的に私を求めてくれたじゃない!」

「うわ、とうとう頭がイカれて・・・あ、元々か」

「ちよつと!？」

「・・・貴方達、本当に仲良くなりましたわね」

呆れているダイヤさん。

「一体何がありましたの・・・?」

「色々あつたのよ。ね、天?」

「・・・あつたねえ、色々」

嬉しそうに頬ずりしてくる鞠莉に、苦笑しながら返す俺。

まあ、鞠莉が楽しそうならそれで良いか・・・

「さて、さつさとプール掃除を終わらせませますかね」

俺は鞠莉から離れると、プールへと降りた。

すると・・・

「うわああああああああつ!？」

「ぐはあつ!？」

「ずらあつ!？」

後ろから滑ってきた千歌さんに追突され、目の前にいた花丸にぶつかって倒れこんでしまった。

「ゴ、ゴメン天くん!ヌルヌル滑るから止まれなくて・・・」

「ふあふおふいふあん、ふつふおふあふ（アホみかん、ぶつ飛ばす）」

「あんっ・・・そ、そこで喋らないでほしいすらあ・・・」

顔を真っ赤にしている花丸。

花丸の上に倒れこんだ俺は、花丸の胸に顔を埋めている状態になっていた。

「ちよつと天さん!?何を破廉恥なことをしているのですか!?!」

「ふいふふえふいふあ。ふいふおふえふふお（失礼な。事故ですよ）」

「んあつ・・・そ、天くん・・・そろそろ退いてほしいすらあ・・・」

「ふおつふえー（オツケー）」

顔を上げる俺。

あー、助かった・・・

「ありがとう、花丸・・・善子だったらアウトだったよ」

「どういう意味よ!?!」

「そのままの意味ですが何か?」

「ぶつ飛ばすッ!」

そのまま始まった鬼ごっこは全員を巻き込んでしまい、結局プール掃除には結構な時間がかかってしまったのだった。

\*\*\*\*\*

「あー、疲れた・・・」

「だらしのないなあ、善子。もつとシャキツとしなよ」

「疲労の原因の半分はアンタだわっ！」

善子のツツコミ。

プール掃除を終えた俺達は、練習をする為に屋上へやって来ていた。

「っていうか、何でアンタはピンピンしてるわけ!？」

「鬼ごっこ程度でへばってるようじゃ、まだまだだよ善子」

「そうだよ善子ちゃん。もつと身体を鍛えなきゃダメだよ?」

「ヨハネよっ! っていうかゴリラは黙ってなさい!」

「だからゴリラじゃないってば!？」

「うるさいですよ果南さん。バナナあげるんで静かにして下さい」

「ぐすつ・・・かなん、おうちかえりたい」

「げ、元気出して果南ちゃん!」

涙目で体育座りしながらバナナを頬張る果南さんを、千歌さんが必死に励ます。と、ダイヤさんが大きくパンパンツと手を鳴らした。

「さあ、練習を始めますわよ！それぞれ所定の位置について下さいー！」

「「「「「はーい！」「「「「「」」」」」」」

全員がそれぞれ自分の位置へと移動する。

既に予備予選用の曲は完成しており、フォーメーションや振り付けも決まっていた。後は練習を繰り返して、本番で良いパフォーマンスが出来るよう備えるのみである。

「じゃあ、曲を流しますね」

全員が位置についたのを確認し、曲を流そうとした俺だったのだが……  
そこであることに気付いてしまった。

「……あれ？」

「天くん？」

「どうしたずら？」

ルビィと花丸が、不思議そうに尋ねてくる。

「いや、今頃になって気付いたんだけどさ……」

苦笑する俺。

「梨子さんのポジション、どうしよう？」

「「「「「「あつ・・・」」」」」」

考えたら当たり前のことなのだが、梨子さんが参加しないということはポジションが一つ空くことになる。

今回は千歌さんと梨子さんのダブルセンターということもあり、今のままでは見栄えが悪くなってしまうのだ。

「どうしましょう・・・全体的にフォーメーションを変えますか?」

「いや、丸々変えるのはキツイと思う。本番まで時間も無いし」

ダイヤさんの提案に、首を横に振る果南さん。

となると、残された手段は・・・

「誰かが梨子さんのポジションに入る・・・しかないかな」

「そうね。それが最善策だと思うわ」

賛成してくれる鞠莉。

「問題は、誰が梨子のポジションに入るかだけど・・・」

「・・・適任者は一人だろうね」

俺は苦笑すると、その適任者へと視線を向けた。

「曜さん、お願い出来ますか?」

「ええっ!?!私!?!」

驚いている曜さん。いやいやいや・・・

「千歌さんとダブルセンターをやる人なんて、曜さんか梨子さんしかいませんよ。急な変更で負担は大きいかと思いますが、俺もサポートしますから」

「う、うん・・・まあ、私で良いなら・・・」

遠慮がちに頷く曜さん。

そんな曜さんの手を、千歌さんが力強く握る。

「曜ちゃん！一緒に頑張ろうね！」

「う、うん・・・」

「決まりですね。とはいえ、フォーメーションの微調整は必要でしょう。九人を想定したフォーメーションを八人でやると、所々見栄えの悪い部分が出てくるでしょうし」

「それもそうだね。その辺りもしっかり決めていかないと」

「では早急に決めてしまいましょう。本番まで時間がありませんわ」

「OK！燃えてきたわ！」

皆で再度フォーメーションを確認し、修正すべき部分を洗い出していく。

そんな中・・・

「・・・ダブルセンター、か」

どこか浮かない表情でそう呟く曜さんなのだった。

距離が近い人だからこそ気を遣う。

「ワン、ツー、スリー、フォー……」

果南さんのカウントに合わせて、二人でフォーメーションを確認しながら踊る千歌さんと曜さん。

しかし……

「あっ!？」

「うわっ!？」

途中でお互いがぶつかってしまふ。

練習を始めてからというものの、どうにも上手くいかない状態が続いていた。

「これで十回目ですわね……」

「曜だったら合うと思っただけど……」

困った表情のダイヤさんと果南さん。

これはなかなか難しいな……

「私が悪いの！同じところで遅れちゃって……」

「違うよ！私が歩幅を曜ちゃんに合わせられなくて……」

「ストップ」

曜さんと千歌さんの間に入る俺。

「どっちが悪いとか、そういう問題じゃないですから。まだ始めたばかりですし、上手くいかなくて当然です」

「天くん……」

「焦らなくて大丈夫ですから、ゆっくりやりましょう。繰り返しやっているうちに、身体で覚えられるはずですよ」

「うん、頑張る！」

「ヨーソロー！」

気合いを入れ直し、再び位置につく二人。

「……流石ね、マネージャー」

隣にやってきた鞠莉が、微笑みながら小さな声で話しかけてくる。

「焦り気味の二人を、あつという間に落ち着かせちゃうなんて」

「……落ち着いてたら良いんだけどね」

「え？」

首を傾げる鞠莉。

俺は溜め息をつきつつ、練習に集中しながらもどこかぎこちない曜さんを見つめるの

だった。

\*\*\*\*\*

「ワン、ツー、スリー、フォー……」

コンビニの駐車場の隅で練習している千歌さんと曜さん。

学校での練習が終わり、俺達は近くのコンビニにやって来ていた。

三年生組は学校に残ってやる事があるらしく、居るのは俺達一年生組と二年生の二人だけである。

「あつ、ゴメン……」

「ううん、こつちこそ……」

またしても二人の身体がぶつかる。

なかなか息が合わないな……

「そらくんっ」

「うおっ!?!」

二人の練習を眺めていると、頬に冷たい物が当たった。驚いて振り向くと、花丸がアイスを持って立っていた。

「はいこれ、マルと半分こずら」

「・・・ああ、明日は雪か」

「マルがアイスをあげるのがそんなに珍しいですか!？」

「いや、だって食い意地を張るスクールアイドルランキングNo. 2の花丸だよ?」

「そんな不名誉な称号は要らないですら!。っていうかNo. 1は誰ですら!」

「白米大好き娘」

「誰ですら!？」

「アハハ、いつか紹介するよ。アイスありがと」

花丸からアイスをもらいつつ、再び二人の練習に目を向ける。

「結構苦戦してるわね・・・」

「二人とも大変そう・・・」

善子とルビイもやって来て、二人の練習を心配そうに見つめていた。

「果南も言ってたけど、あの二人なら合うと思ってたわ。普段から仲も良いし、息ピッタリって感じじゃない」

「だからこそ、じゃないかな」

善子の言葉に答える俺。

「『距離が近い人には気を遣わない』ってよく言うけどさ……俺は逆だと思うんだよ」  
「逆って言うとは？」

「距離が近い人だからこそ、気を遣うんじゃないかってこと。例えば深刻な悩み事を抱えていたとして、それをすぐに家族や友達に話そうって思える？『心配をかけたくない』って思ったりしない？」

「それは……そうかも」

「あの二人も、多分そうなんだと思う。お互いに『負担をかけたくない』っていう気持ちがあるから、遠慮し合ってどうしても息が合わない……そんな気がする」

「相変わらず、人をよく見てるわね……」

驚き半分、呆れ半分といった様子の善子。

「だから天も、お姉さんと喧嘩しちやったの？」

「何聞いてくれちやつてるずらこの似非墮天使いいいいっ！」

「ごはあっ!？」

「天くん気にしないで！何でもないからね！」

善子の顎に花丸の頭突きがクリーンヒットする中、ルビイが慌てて取り繕う。

俺は思わず苦笑してしまった。

「アハハ、気を遣わせちゃってゴメン……っていうか、知ってたんだね」

「う、うん……実は曜ちゃんから聞いてて……」

「え、何で曜さんが知ってたの？」

「東京に行った時、真姫さんと南ことりさんに聞いたんだって」

「……なるほどね」

確かにあの時、絵里姉の話題になったもんな……

恐らく俺がトイレに行った時に、気になった曜さんが二人に聞いたんだろう。

ことりちゃんが積極的に話すとは思えないし、話したのは多分真姫ちゃんだろう

な……

つまりあの後、曜さんの元気が無かったのはそれが原因だったのね……

「……何か、色々と合点がいったわ」

「天くん？」

「ああ、何でもない。こつちの話」

笑う俺。

「……俺と絵里姉の場合は逆だよ。気を遣うどころか、お互いにワガママを言い合っただけ。その結果どっちも折れなくて、今に至る……って、最近まではそう思ってたんだけどね」

鞠莉の話の聞くかぎり、絵里姉は鞠莉に俺のことをお願いしていたみたいだしな……あれだけ内浦行きに反対していたのに、陰でそんなことをしていたなんて……

「……ホント、よく分かんないわ」

そんなことをぼやきつつ、千歌さんと曜さんの練習を見ていると……

「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、セブン、エイト……よし、これなら大丈夫！」

「凄い！流石は曜ちゃん！」

ようやく動きが揃い、喜んでいる二人。

「おお、天界的合致！」

「天界は関係ないすら」

「でも凄い！ちゃんと揃ってたよ！」

善子・花丸・ルビィも喜ぶ中、俺は素直に喜ぶことが出来なかった。

今の動きって……

『さくよな〜らと〜言え〜ばき〜みの〜♪』

「あつ、電話だ」

「着信音がまさかの『オレンジ』!?」

ポケットからスマホを取り出す千歌さんに、思わずツツコミを入れてしまう俺。

「え、そんなに驚く?」

「だって千歌さん、いつも『オレンジ』って言葉を嫌がるじゃないですか!」

「嫌がってはいないよ!? 『ミカン』『ミカン色』を、『オレンジ』『オレンジ色』と一緒にされるのが嫌なの!」

「『ミカン』と『オレンジ』の違いはともかく、『ミカン色』と『オレンジ色』の違いが俺には分からない!」

「何言ってるの!? 全然違うでしょうが!」

「ち、千歌ちゃん! 早く電話に出ないと!」

「あつ、そうだった!」

曜さんに言われ、慌てて電話に出る千歌さん。

「もしもし・・・あつ、梨子ちゃん!」

どうやら電話は梨子さんからのようだ。

千歌さんは一通り話し終わると、スマホをスピーカーモードにしてこちらへ向けた。

「ちよつと待ってね・・・はい、花丸ちゃん」

「ずらっ!? えーつと・・・もすもす?」

「ひねもす?」

『どこのウサ耳博士よ!?』

「ずらあつ!」

梨子さんのツツコミに驚き、俺の背中に隠れる花丸。

やれやれ・・・

「よう・・・五年ぶりだな・・・」

『エレンかつ!今朝会ったでしようが!』

「落ちていて下さい、リコ班長」

『それ駐屯兵団の人だから!っていうか誰のせいよ!?』

相変わらずツツコミがキレツキレだった。

流石は梨子さんである。

「で、久しぶりのシャバはどうですか?」

『私は刑務所を出所した元囚人かつ!そもそもついこの間も東京に来たじゃない!』

「ああ、そういうえばそうでしたね」

そう言われてみると、別に久しぶりの東京でもないのか・・・

『・・・フフツ』

電話越しに、梨子さんの笑い声が聞こえる。

「梨子さん？どうかしました？」

『いや、天くんはいつも通りだなんて』

クスクス笑っている梨子さん。

『皆がいなくて、少し寂しいなって思ってたんだけど・・・何だか元気が出たわ』

「・・・言ったでしょう、一人じゃないって」

笑みを浮かべる俺。

「離れていても、皆ちゃんと梨子さんを応援してますから。ね、皆？」

「勿論！」

「梨子ちゃん、ファイト！」

「墮天使。パワーを送ってあげるわ！」

「それは要らないと思うすら」

「何でよ!？」

ワイワイ騒ぐ俺達。

そんな俺達を、少し離れたところで曜さんが微笑みながら見ていた。

「ほら曜さんも。梨子さんにエールを送ってあげて下さい」

「ええっ!?! えーっと・・・」

突然のことに慌てる曜さん。

その時、千歌さんのスマホからピーピー音が鳴った。

「ああっ!? 電池切れそう!」

「アホ毛で充電すれば良いじゃないですか」

「出来るかつ! 梨子ちゃんゴメン! そろそろ切るね!」

『うん、じゃあまたね』

梨子さんとの電話が切れる。

千歌さんは笑みを浮かべると、スマホを胸に抱えた。

「・・・良かった、喜んでるみたいで」

「ですね。皆の声が聞けて、安心したんじゃないですか?」

「それも勿論あると思うけど・・・多分、一番は天くんのおかげじゃないかな」

「俺ですか?」

思わず首を傾げる。何かやったっけ?

「うん。梨子ちゃん、天くんと話してる時凄く楽しそうだもん」

「え、そうですか?」

「ハア・・・天くんは乙女の気持ちがあんまり分かってないね・・・」

「乙女(笑)」

「何で笑ってるの!?!」

「いやwww千歌さんがwww乙女ってwww」

「ムキーツ！もう怒ったぞー！」

「行きなさい千歌！やっちゃえ！」

「うわ善子、『ヤツちゃえ』なんてサイテー」

「そういう意味じゃないわよ!？」

「善子ちゃん、それは流石に私でも引くよ・・・」

「花丸ちゃん、善子ちゃんは何かイケないことを言っちゃったの？」

「ルビイちゃんは気にしないでほしいぞ。善子ちゃんの心が穢れてるだけの話ずら」

「違うって言うてるでしょうがああああつ！っていうかヨハネよおおおつ！」

「ア、アハハ・・・」

苦笑する曜さん。

その笑みはやはり、いつもより寂しげに見えた。

「・・・何とかしないとな」

それを見て、小さく呟く俺なのだった。

自分を犠牲にする人を見るのは悲しい。

《曜視点》

「ハア……」

皆と別れ、溜め息をつきながら帰り道を歩く私。

心のモヤモヤが晴れず、気が重い状態が続いていた。

「ホント……自分が嫌になる」

憂鬱な気分になりながらも、家に辿り着き玄関のドアを開けた。

「ただいまあ……」

「お帰りなさい、曜さん。ご飯にしますか？お風呂にしますか？」

「んー、とりあえずお風呂で……え？」

曜『さん』？しかもこの声って……

慌てて声のした方を見ると、そこには……

「そ、天くんんんんんんんんんん!？」

「どうも〜」

にこやかに手を振る天くん。

え、何!? どういうこと!?

「何で天くんが私の家に来てるの!？」

「そこに曜さんの家があるからです」

「そんな某登山家みたいな回答は求めてないよ!? っていうか、私達さつき別れたばかりだよねえ!？」

「いや、別れたって・・・そもそも俺達付き合っていないでしょ」

「その『別れた』じゃなくて! 何で私より天くんの方が家に着くの早いのか!？」

「空間移動使ったんで」

「何善子ちゃんみたいなこと言い出してるの!？」

「帰って来て早々、何騒いでるの?」

天くんの後ろから、私のママが呆れた様子でやって来た。

「ちよ、ママ!?! 天くんが来てるんだだけど!?!」

「当たり前でしょ? 天は今日、ウチに泊まるんだから」

「ええっ!?!」

驚く私。何でそんな話になってるの!?

「私聞いてないんだけど!?!」

「ああ、すいません。曜さんと別れてから決まった話なんで」

「どういうこと!?!」

「さっき天から電話もらったのよ。『今日夕飯ご馳走になっても良いですか?』って説明してくれるママ。」

「それに対して、私はこう答えたの……『どうせなら泊まっていきなさい』ってね」「何で!?!」

「だって私と天の仲だも〜ん」

「ね〜♪」

「どんだけ仲良くなってるんの!?!」

お、恐るべし天くん……

流星は『母親キラ〜』の異名を持つ子……

「そしたらさっきのコンビニまで、車で迎えに来てくれたんですよ。いやあ、やっぱり星さんは優しいなあ」

「アハハ、天の為なら火の中水の中よ」

「それで私より早かったのね……」

それなら、私も乗せてもらえば良かったなあ……

「っていうか、何でお泊まり?前は夕飯食べた後、ママが車で送ってたよね?」「曜に夜這いしてもらおう為に決まってるじゃない」

「何で母親が娘を襲わせようとしてるの!？」

「アンタ達が結婚すれば、天が私の息子になるから」

「完全に私欲じゃん!？」

「俺はもう星さんのこと、本当の母親のように思ってますよ」

「我が息子よっ!」

「母上っ!」

「・・・何かもう、ツツコミに疲れた」

お互いの手を握り見つめ合う二人に、私はもうツツコミを入れる気力も無かった。

ツツコミ役って大変なんだなあ・・・

「とりあえず、私はお風呂に入るね・・・」

「あ、じゃあ三人で入る?」

「入るわけないでしょうが!」

「曜さん、背中流しますよ」

「何で天くんは乗り気なの!？」

結局ツツコミを入れるハメになる私なのだった。

\*\*\*\*\*

「いやあ、相変わらず星さんの料理は美味しいですね」

「アハハ、ありがと。遠慮せずにどんどん食べて」

笑顔でそう言ってくれる星さん。

曜さんのお母さんである渡辺星さんとは、以前夕飯をご馳走になってから親しくさせてもらっていた。

ウエーブのかかったグレーの髪が肩にかかるまで伸びており、その若々しさに最初は曜さんのお姉さんだと勘違いしたほどだ。

「ついでに、曜のことも食べちゃって良いからね」

「ぶふおっ!?!ちよ、ママ!?!何言ってるの!?!」

「安心して下さい。今夜美味しくいただきます」

「私は何も安心出来ないわっ!」

顔を真っ赤にしながら自分の肩を抱き、俺から距離を取る曜さん。どうやら警戒させてしまったようだ。

「ねえねえ、天は曜のことどう思ってるの?好き?」

「ちよ、何を聞いてくれちゃってんの!？」

「大好きですよ」

「ふえっ!？」

「人として」

「だから紛らわしいってば!？」

両手で顔を覆う曜さん。耳まで真っ赤になっている。

「どんなところが好き？」

「明るくて元気で、それでいて心の優しいところですかね。一緒に居て楽しいですし、凄く居心地が良いです」

「だってさ曜、良かったね」

「う、うるさいっ!」

「後は何と言っても美少女ですよね。スタイルも良いですし」

「も、もう良いからっ!」

これ以上ないほど顔を赤くし、涙目になっている曜さん。

星さんがニヤニヤしている。

「よし、明日はお赤飯でも炊こうかな」

「余計なことしないでええええええええええっ!？」

曜さんの絶叫が響き渡るのだった。

\*\*\*\*\*

「曜さん、機嫌直して下さいよ」

「ふんっ！天くんのバカっ！」

ふて腐れたようにベッドにうつ伏せになり、枕に顔を埋めている曜さん。

夕食後、俺達は曜さんの部屋にやって来ていた。お風呂にも入ったので、後は寝るだけである。

「っていうか、年頃の男女を同じ部屋で寝かせるってどういうつもりなの!？」

「それを言ったら、東京に行った時も合宿の時も同じ部屋で寝たじゃないですか」

「どっちも皆が一緒だったじゃん！今回は二人きりじゃん！」

「ですね。じゃあ俺、そろそろ寝ますんで」

「早っ!?!天くんは私のこと意識したりしないの!?!」

「・・・ハッ」

「腹立つ！この子腹立つ！」

バンバン布団を叩く曜さん。

情緒不安定だなあ……

「まあ冗談はさておき……ちよつと曜さんに聞きたいことがあるんですけど」

「ど、どうしたの急に……いきなり真剣な表情になったけど」

「……曜さんってレズなんですか？」

「うらあつ！」

「ど(づ)ふっ!？」

俺の顔面に曜さんの枕が命中する。

「真面目な顔してどんな質問してんの!？」

「いや、あくまでも俺の予想なんですけど……曜さん、千歌さんと仲の良い梨子さんに嫉妬してませんか？つまり曜さんは、千歌さんが好きなんじゃないかなって……そういう意味で」

「違うわ！確かに千歌ちゃんのこととは好きだけど、友達としての『好き』だわ！」

「へー」

「一ミリも信じてない!？」

シヨックを受けている曜さん。やれやれ……

「まあ、それがあくまでも多分恐らく仮に本当だとして……」

「ただだけ信じてないの!?!間違いない本当だから!」

「はいはい……で、実際どうなんですか?嫉妬してるんですか?」

「……遠慮なく聞いてくるね」

「曜さんみたいに周りに遠慮しがちなタイプの方は、変に濁しながら聞くと誤魔化しながら答えますから。ズバツと踏み込んで聞くのが良いって学んだんですよ」

「何を学んじやつてるの君は……」

曜さんは溜め息をつくど、観念したように話し始めた。

「……天くんの言う通り、嫉妬してるんだろうね。ホント、自分の心の汚さが嫌になっちゃうよ」

「……曜さんって、ホント千歌さんが好きなんですね」

「アハハ、そうだね」

小さく笑う曜さん。

「……私ね、昔から『千歌ちゃんと一緒に何かやりたい』ってずっと思ってた。でもなかなか、一緒に何かをやる事が出来なくて……だから千歌ちゃんが『一緒にスクールアイドルやろう』って誘ってくれた時は、凄く嬉しかったんだ」

笑みを浮かべ、天井を見上げる曜さん。

「でもすぐに梨子ちゃんが入って、二人で歌を作るようになって……気付いたら、皆も一緒になって……それで思ったの。もしかして千歌ちゃん、私と二人は嫌だったのかなあって」

「……どうしてそう思うんですか?」

「私、『要領が良い』って思われることが多くて。そういう子と一緒に、やりにくいのかなあって……そんな風に思っちゃって」

寂しそうに笑う曜さん。

ああもう、ホントにこの人は……

「……重なるんだよなあ」

「重なる?」

「ああ、こつちの話です。それより……」

俺は立ち上がると、曜さんの枕を拾い上げ……

「雷●八卦!」

「はあつ?」

フルスイングで枕を曜さんの頭に叩き込んだ。

勢いよくベッドに倒れこむ曜さん。

「ちよ、何するの!?!」

「いや、ちょっと『渡辺曜をしばきたい症候群』の症状が出たんで」

「何その私に害しかない病気!？」

「まあそれはともかく・・・とりあえずそこに正座して下さい」

「な、何で・・・」

「良いから正座しろやバカ曜!」

「は、はいっ!」

慌てて正座する曜さん。

「ハア・・・千歌さんのことが好きっていう割に、千歌さんのこと何も分かってないよ  
アంతタ」

「むっ・・・これでも幼馴染だし、よく分かってるつもりだけど・・・」

「分かってたらこんなことで悩まないわ」

溜め息をつく俺。

最早タメ口だが、そんなことはどうでもいい。

「そもそも、曜さんの要領が良いわけじゃないでしょ。制服を見た瞬間にベランダから身を投げるようなバカなんだから」

「うぐっ・・・」

「しかも俺の前で下着を丸出しにするアホなんだから」

「うぐぐつ……」

「そしてドジでマヌケなんだから」

「最後の付け足し要らなくない!? 『バカ』『アホ』『ドジ』『マヌケ』を揃えたかっただけだよねえ!？」

「黙って聞けやバカ曜!」

「はいいいいいいっ!」

背筋がピンと伸びる曜さん。やれやれ……

「……要領が良いように見えるだけで、本当は人一倍努力してることぐらい知ってるよ。バカにすんな」

「つ……」

「それを出会って数ヶ月の俺が知ってるのに、幼馴染の千歌さんが知らないわけないでしょ。『やりにくい』なんて思うわけないでしょうが」

曜さんを睨みつける俺。

「千歌さんを舐めんな。幼馴染のアンタが理解してなくてどうすんだよ」

「……ゴメン」

俯く曜さん。

俺は溜め息をつくくと、曜さんの隣に腰を下ろした。

「・・・今日の最後の練習、梨子さんの歩幅でやってたでしょ」

「っ!?何で・・・」

「いつも練習見てるんだから、分からないわけじゃないでしょ」

千歌さんは梨子さんの歩幅に慣れてしまっていた為、なかなか曜さんに合わせる事が出来なかった。

だから曜さんは自分の歩幅を捨て、梨子さんの歩幅を再現することで千歌さんに合わせられた。

最後に二人がピッタリ合ったのはその為だ。

「あれじゃ曜さんが報われないでしょうが。どっちかが犠牲になるダブルセンターなんて、見てて悲しいですよ」

「でも、合わせる為にはああするしか・・・」

「言ったでしょ、サポートするって」

曜さんの頭を撫でる俺。

「千歌さんと曜さんの、新しい形を作りましょう。二人にしか出来ない形が、きつとありますから」

「天くん・・・」

「それに・・・そう思ってるのは多分、俺だけじゃないですよ」

「え．．．？」

『曜ちやああああんっ！』

曜さんが首をかしげた瞬間．．．外から千歌さんの声がした。

おいおい．．．

「千歌ちやん!? え、天くんが呼んだの!？」

「いや、全く．．．奇跡的な偶然に、俺も心底驚いてるところです」

まさかこんなタイミングでご本人登場とは．．．

凄いなあの人．．．

『曜ちやああああんっ！』

「ほら、呼んでますよ」

曜さんの背中を押す俺。

「行つて下さい。そして話をしてきて下さい。今の曜さんには、一番必要なことでしようから」

「天くん・・・うん、行ってくる！」

「行ってらっしゃい」

部屋を飛び出す曜さんを、笑みを浮かべて見送る俺なのだつた。

改まってお礼を言われると照れ臭い。

《曜視点》

「千歌ちゃんっ!」

「曜ちゃんっ!」

急いで外に出ると、千歌ちゃんが笑顔で立っていた。

びっしりと汗をかいており、側には自転車が置いてある。

「もしかして、自転車でここまで来たの・・・?」

「アハハ・・・バス終わってたし、美渡姉達も忙しそうだったから・・・」

苦笑する千歌ちゃん。

千歌ちゃんの家から私の家までは、それなりに距離がある。

それを自転車で・・・

「どうして・・・」

「練習しようと思って」

微笑む千歌ちゃん。

「色々考えたんだけど・・・やっぱり曜ちゃん、自分のステップでダンスした方が良い

と思うんだ。梨子ちゃんの動きじゃなくて、曜ちゃん自身の動きでやった方が良いでしょう。」

「っ……」

千歌ちゃん、気付いてたんだ……

「合わせるんじゃないかって、一から作り直そう？曜ちゃんと私の二人でさ」

そう言って笑う千歌ちゃん。私の頭の中に、さっきの天くんのセリフが思い浮かんだ。

『千歌さんと曜さんの、新しい形を作りましょう。二人にしか出来ない形が、きっとありますから』

『それに……そう思ってるのは多分、俺だけじゃないですよ』

千歌ちゃんが私のことを考えてくれてることに、天くんは気付いてたんだ……

それなのに、私は……

「何で……何で私の為に……」

「何でって……そんなの、曜ちゃんと一緒にやりたいからに決まってるじゃん」  
笑いながら言う千歌ちゃん。

「・・・私さ、昔から曜ちゃんの誘いを断ってばかりだったじゃん。やりたいことも見つからなくて、せつかく曜ちゃんが誘ってくれても遠慮しちゃうってさ・・・凄く申し訳なく思ってたんだ」

苦笑する千歌ちゃん。

そんな風に思ってたんだ・・・

「そんな私にも、スクールアイドルっていうやりたいことができて・・・曜ちゃんも一緒にやるって言ってくれて、本当に嬉しかったの。だからスクールアイドルは、絶対曜ちゃんと一緒にやり遂げたいんだ」

「っ・・・!」

涙が込み上げてきた。

天くんの言う通りだ・・・私は千歌ちゃんのこと、何も分かってなかった・・・

「私、バカだ・・・バカ曜だ・・・!」

「バカ曜?」

首を傾げる千歌ちゃん。

私は我慢が来ず、思いつきり千歌ちゃんに抱きついた。

「うわあっ!?!ちよ、私汗だから汚れるよ?」

「良いのっ!」

「風邪引くよ?」

「良いのっ!」

「恥ずかしいって!」

「良いのっ!」

「もう、何?何で泣いてるの?」

「良いのっ!」

力いっぱい千歌ちゃんを抱き締めて泣く私。

そんな私の頭を、千歌ちゃんが苦笑しながら撫でてくれていた。  
すると……

「ちよつと曜?何玄関先で騒いで……」

ママが玄関のドアを開けて顔を覗かせ……

私と千歌ちゃんが抱き合っている様子を見て固まってしまった。

「あつ、ママ……これは……」

「あー……曜はそっちだったのね」

「ちよ、違うから!そういうのじゃないから!」

「大丈夫、ママは応援してるから。愛の形は人それぞれよ」

「全然大丈夫じゃないよねえ!?!絶対勘違いしてるよねえ!?!」

「千歌ちゃん、曜を幸せにしてあげてね・・・あ、曜が幸せにしてあげる方？」  
「だから違うって言うてるでしょうがあああああああっ!」  
絶叫する私なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・無事に解決したみたいです」

『それなら良かった』

電話越しに、梨子さんの安心した声が聞こえる。

ベランダから二人の様子を窺っていたところ、机の上に置いてあった曜さんのスマホに梨子さんから着信が入ったのだ。

曜さんが自分のポジションに入ることを聞き、様子が気になって電話したらしい。

『上手くいってないって聞いたから、ちよつと心配だったんだけど・・・』

「誰から聞いたんですか？」

『鞠莉さんよ。さつき電話がかかってきて、私からも何かアドバイスしてあげてく

れって言われたの』

「・・・なるほどねえ」

さてはアイツ、最初から見抜いてたな・・・

素直になれずにすれ違った身として、曜さんに同じ思いをしてほしくなかつたんだらう。

「・・・ホント、鞠莉らしいわ」

『・・・そういえば天くん、鞠莉さんのこと呼び捨てにするようになったわよね』

「ああ、本人がそうしろって言うんで」

『ふうん・・・』

何故かちよつと不機嫌そうな声の梨子さん。

どうしたんだらう？

「ところで、今日から練習は始めてるんですか？」

『一応ね。今日は慣らして弾いた程度だけど、明日から本格的な追い込みをやるわ』

東京ではホテルに泊まることになる為、練習はスタジオを借りてやるのだそうだ。

ちなみに東京には奈々さんが前乗りしており、昨日のうちにホテルとスタジオの手続

きを完了させたらしい。

まるで梨子さんのマネージャーみたいだな・・・

「追い込みすぎて身体を壊したら元も子も無いんで、無理だけはしないで下さいね」  
『心配してくれてありがとう。気をつけるわ』

苦笑する梨子さん。

『あつ、そろそろ戻らないと・・・じゃあ天くん、おやすみ』

「おやすみなさい」

電話が切れる。

ピアノコンクール、上手くいくと良いんだけど・・・

星さんに必死に弁明している曜さんを見下ろしつつ、梨子さんを案じる俺なのだっ  
た。

\*\*\*\*\*

「すう・・・すう・・・」

「・・・いの一晩に寝やがりましたね、この人」

「アハハ、疲れたんだよ」

熟睡している千歌さんを見て、呆れる俺と苦笑する曜さん。

結局あの後、千歌さんも曜さんの家に泊まることになったのだ。

千歌さんは俺がいることにビックリしていたが、事情を聞いて『天くんらしいや』と言つて笑つていた。

「ところで、星さんの誤解は解けたんですか？」

「・・・全然」

ガツクリうなだれる曜さん。

「千歌ちゃんと一緒にお風呂入る時も、『二人だけの時間を楽しんでね!』つて・・・もう何を言つても通じないよ・・・」

「アハハ、ドンマイです」

苦笑する俺。

曜さんは知らないことだが、実は星さんは誤解などしていない。ただ単純に悪ノリして、曜さんの反応を面白がっているだけだ。

まあ俺としても面白いので、曜さんに本当のことを言うつもりは無いが。

「さて、俺達もそろそろ寝ますか」

「そうだね・・・あつ」

「どうしました?」

「いや、そういえば・・・布団が一つしか無いなって」

「・・・あつ」

そういえば、千歌さんが寝てるのって俺の布団じゃん・・・

千歌さんは『曜ちゃんのベッドと一緒に寝る!』って言ってたから、他に布団は無いんだよな・・・

「ハア・・・仕方ないんで、俺は床で寝ます」

「あれ、意外だね?天くんなら、千歌ちゃんを叩き起こすかと思ったのに」

「・・・まあ一応、今回のMVPなんで」

千歌さんの頭を撫でる俺。

本当に良いタイミングで来てくれたし、曜さんに必要な言葉もかけてくれたしな・・・  
流石、頼りになるリーダーだよ。

「フフツ・・・天くんって、意外と千歌ちゃんを大事に想ってるよね」

「意外とは失礼ですね。常に大事にしてるじゃないですか」

「どこが!?!頭とかメツチャ引つ叩いてるよねえ!?!」

「愛情表現です」

「歪んでない!?!」

曜さんのツツコミ。

全く、失礼な人だなあ・・・

「まあとにかく、俺は床で寝ますんで。座布団だけもらって良いですか？」

「ハア・・・お客さんを床で寝かせられるわけないでしょ？」

曜さんは溜め息をつくど、自分が寝ているベッドの掛け布団をめぐつた。

「ほら、こつちおいだよ」

「え、まさかの夜のお誘い？」

「違うわっ！一緒に寝ようって言うてるのっ！」

「やっぱり夜のお誘いじゃないですか」

『『寝る』ってそつちの意味じゃないよ!?!いいからこつち来なさい!』

「・・・失礼します」

お言葉に甘え、曜さんのベッドにお邪魔する。

そこまで大きなベッドではないので、二人で寝ると当然お互いの身体が触れ合っ  
てしま  
う。

「うう・・・」

「・・・A q u o u r s っ て、羞恥プレイが好きな人の集まりなんですか？」

「どんなグループ!?!そんなわけないでしょ!?!」

「この前の梨子さんといい、今回の曜さんといい・・・」

恥ずかしくなることが分かつてるにも関わらず、こういうことやるんだもんなあ……  
「つていうか天くん、さつきは鼻で笑ってたくせに意識してるじゃん」

「……俺も一応男ですからね。こんな美少女と一緒にベッドに寝てたら、意識ぐらい  
しますよ」

「ふうん、そうなんだあ♪」

ニヤニヤしている曜さん。

殴りたい、この笑顔……

「……はいはい、もう寝ますよ。明日も練習があるんですから」

曜さんに背を向けて寝ようとする……背中から優しく抱き締められた。

「……今日はありがとね、天くん」

耳元で曜さんの声がする。

「私のことを心配して、わざわざ家にまで来てくれて……本当にありがとう」

「……星さんの手料理が食べたかったです」

「フフツ、素直じゃないなあ」

曜さんはクスクス笑うと、俺の身体に回している腕にキュツと力を込めた。

「天くんが悩みを聞いてくれて、怒ってくれて、寄り添ってくれて……凄く嬉しかった。おかげでスッキリしたよ」

「・・・大したことはしてませんよ。千歌さんのおかげです」

「確かに、千歌ちゃんの話ができたことも大きかったけど・・・一番はやっぱり、天くんのおかげだから」

曜さんはそう言っただけを離すと、俺の身体を自分の方に向けさせた。

「ちよ、何を・・・」

「ありがとう、天くん」

「・・・どういたしまして」

見つめられながらお礼を言われ、思わず視線を逸らしてしまう。

「こうやってお礼を言われると、どうにもむず痒いな・・・」

「全く、今日の曜さんは最後まで変ですね・・・」

「・・・曜」

「え・・・？」

「曜で良いよ。敬語も使わなくて良いから」

「何言ってるんですか？ 仮にも先輩でしょ貴女。仮にも」

「仮じゃなくて本当に先輩なんだけど・・・天くんって私を怒ってくれる時、タメ口になるじゃん。『バカ曜』って呼び捨てにされるし、そっちの方が良いなって」

「うわあ・・・『バカ曜』って呼ばれたいとか、ただのDMじゃないですか・・・」

「違うわっ！普通に曜って呼んでほしいのっ！」

「いや、今更変えなくても・・・」

「ふうん・・・鞠莉さんは変えたのに、私は変えてくれないんだあ・・・」  
「めんどくさいなこの人!?!」

膨れっ面になる曜さん。

何でこういう時だけ強引なんだ・・・

「ハア・・・分かったよ、曜」

「フフツ、合格」

嬉しそうに微笑む曜なのだった。

# 何事にも切っ掛けがある。

翌日・・・

「ワン、ツー、スリー、フォー、ファイブ、シックス、セブン、エイト・・・おお、揃ってるじゃん！」

「良い感じですよ！」

果南さんとダイヤさんが、千歌さんと曜の動きを賞賛する。

昨日の夜、何度も練習した成果が出たようだ。

「えへへ、やったね曜ちゃん！」

「うんっ！」

嬉しそうにハイタッチする二人。

良かった良かった・・・

「フフツ、微笑ましい顔しちゃって」

後ろから鞠莉が抱きついてくる。

「ウチの敏腕マネージャーが、今回も動いてくれたのかしら？」

「さあ、どうだろうね」

はぐらかす俺。

「どこぞの鋭いお嬢様が、梨子さんにまで根回ししたおかげじゃないの？」

「あら、知ってたのね」

いたずらっぽく舌を出す鞠莉。

「天も曜の様子に気付いてるだろうし、動いてくれるとは思っただけどね。念の為、私も動いておこうと思って」

「お気遣いどうも。今度はもっと率先して動いてくれると助かるんだけど」

「それは天に任せるわ。私はいつまでも貴方の影よ」

「何その黒子みたいなセリフ。俺は火神じゃないんだけど」

「コラーツ！」

そんな会話をしていると、曜がこつちを指差して叫んだ。

「人が一生懸命練習してる時に、二人でイチャイチャしないのっ！」

「いや、曜と千歌さんのイチャイチャには負けるわ」

「誤解を招く発言は止めてくれる!？」

「え、今『曜』って呼び捨てにした……？」

「しかもタメ口……？」

驚いている皆。



「うん、曜ちゃんと一緒にお風呂に入ったよ！気持ち良かった！」

「気持ち良かった!？」

「果南ちゃん深読みしないで!？お風呂が気持ち良かったんだよね、千歌ちゃん!？」

「うん！あと曜ちゃんに身体を洗ってもらって、凄くスッキリした!？」

「スッキリした!？」

「だから深読み止めて!？背中を流しただけだから!？」

「あと曜が、千歌さんを情熱的に抱き締めたりとかね」

「天くんくんくん!？余計なこと言わないでくれる!？」

「そうそう、アレはビックリしたよ!？ずっと『良いのっ!良いのっ!』って……」

「千歌ちゃんくんくん!？その言い方は誤解されるってば!？」

曜が悲鳴をあげる中、皆ドン引きしていた。

「曜……いつの間にそういう方向に……」

「果南ちゃん!？違うからね!？」

「安心しなさい曜。愛の形は人それぞれよ」

「鞠莉ちゃん!？ママと同じこと言わないでくれる!？」

「曜さん……私達は温かく見守っていますわ……」

「ダイヤさん!？そう言いながら何で距離をとるんですか!？」

「ねえねえ、『そういう方向』って何？」

「ルビイは知っちゃダメよ」

「マル達と一緒に大人しく離れるすら」

「だから違うってばあああああああああつ!？」

「まあそういうわけなんで、皆さんこれからも温かく曜を見守ってあげて下さいね」

「「「「「はーい」」」」」

「・・・もう帰りたい」

「曜ちゃん？何で落ち込んでるの？」

首を傾げる千歌さん。

「どうやら無自覚で曜を追い込んでいたらしい。」

「ほら曜、何落ち込んでんの。練習やるよ」

「元凶は天くんでしょうが!」

ウガーツと威嚇してくる曜に苦笑していると、俺のスマホにメールが届いた。

「ん？何だろう・・・おっ、予備予選の順番が決まったみたいですよ」

「えっ、ホント!？」

「ええ、割と早い順番ですね。恐らくですけど、午前中には回ってくるんじゃないかと

思います」

「午前中ですか・・・となると、尚更前日までに完璧にしておきませんか・・・」  
顎に手をやるダイヤさん。

午前中かあ・・・ん？

「千歌さん、梨子さんのピアノコンクールって、午後からでしたよね？」

「え？あ、うん。だから梨子ちゃんの出番は、夕方くらいになりそうって言ってたよ」

「夕方・・・」

A q o u r s の出番は午前中に終わって、梨子さんの出番は夕方頃か・・・

「・・・よし」

「天くん？」

千歌さんが首を傾げる中、俺は皆の顔を見渡すのだった。

「ちよつと相談したいことがあるんですけど・・・」

\*\*\*\*\*

《《梨子視点》》

「……ふう」

練習を終え、椅子にもたれかかる私。

明日はいよいよピアノコンクールということで、今日は最後の追い込みをしていたのだ。

「お疲れ様」

目の前にペットボトルの水が差し出される。

私は笑顔でそれを受け取った。

「ありがとうございます、真姫さん」

「どういたしまして」

微笑む真姫さん。

最後にどうしても真姫さんの意見を聞きたくて、忙しい中をわざわざ来てもらったのだ。

「すみません、お時間を作っていたで……」

「構わないわよ。私も梨子が弾くピアノを聴いてみたかったし」

笑う真姫さん。

「それに、梨子のことは天からも頼まれてるから」

「えっ、天くんが!?!」

「ええ。『ピアノ経験者としてアドバイスを求められるかもしれないから、その時はよろしくね』って」

「・・・もう、天くんったら」

流石は私達のマネージャー、その辺りもフオローしてくれていたようだ。

「ところで梨子、この後って時間あるかしら？」

「え？ええ、特に予定は無いですけど」

「もし良かったら、一緒に夕食を食べない？この辺りに美味しいお店があるのよ」

「私で良ければ喜んで」

「フフツ、決まりね」

笑みを浮かべる真姫さん。

その時、真姫さんのスマホが鳴った。

「あら、誰かしら・・・って、もう着いたの？早いわねえ」

「どうかしたんですか？」

「実は今日の夕食、あと二人来る予定でね。もうお店に着いちゃったんですって」

苦笑する真姫さんなのだった。

「私達も早く行きましよう。一人はともかく、もう一人は待たせると怒られちゃうわ」

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「梨子！」

「海未先生！」

真姫さんとお店に行くと、お店の前で待っていた海未先生が笑顔でハグしてくれた。

「お久しぶり・・・というほどでもありませんが、また会えて嬉しいです」

「私입니다。お元気そうで」

「や〜ん♡可愛い〜♡」

「うわっ!?!」

海未先生の隣にいた人に、いきなり抱きつかれる。

えっ、何!?

「ことり、初対面でいきなり抱きつくのは止めなさい。梨子が戸惑っているでしょう」

「アハハ、ゴメンゴメン。可愛かったからつい」

「『ことり』って・・・もしかして、南ことりさんですか!?!」

「はい、南ことりです♪」

笑顔で自己紹介してくれる女性・・・南ことりさん。

この人が・・・

「つていうかアンタ達、来るの早いわよ」

呆れている真姫さん。

「待ち合わせの時間まで、まだ十五分もあるじゃない」

「何を言っているのですか、真姫。五分前行動は常識ですよ」

「いや、だからまだ十五分もあるんだつてば。しかも海未から『着きました』つていう連絡来たの、三十分前だったでしょうが」

「何を言っているのですか、真姫。三十分前行動は常識ですよ」

「さつきより時間延びてるじゃない!?それで待たせると怒るんだから、理不尽にも程があるわよ!?!この黒歴史がエマー!」

「ちよ、言つてはならないことを言いましたね!?!このサンタクロス信者!」

「アンタもそれ持ち出すの止めなさいよ!?!もう真実知ってるから!」

「二人とも相変わらずだね・・・」

苦笑する南さん。

「梨子ちゃん、私達は先に中に入ろう?」

「は、はい……」

ギヤーギヤー喚く二人をよそに、先にお店の中に入る私達なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《梨子視点》

「そっかあ、天くんはマネージャーとして頑張ってるんだね」

「ええ、本当に支えてもらってます」

食事をしつつ、ことりさんと会話する私。

最初は『南さん』と呼んでいたのだが、『海未ちゃんと真姫ちゃんは名前呼びなのに、私だけ苗字呼びは嫌だ』と言って拗ねてしまったのだ。

なのでそこから名前呼びに変更したのである。

「ああ、何か天くんに会いたくなってきちゃった……今から内浦行ってくる！」

「落ち着きなさい、天依存症患者」

隣に座っていた真姫さんが、呆れたようにことりさんの肩を掴む。

「全く……ことりは本当に天を溺愛してるんだから……」

「それは貴女も同じでしょう、真姫」

「いや、海未ちゃんも大概だよね」

三人は顔を見合わせると、おかしそうに笑い出した。

仲が良いなあ……

「皆さん、天くんのごことが本当に大好きなんですネ」

「勿論！」

笑顔で頷くことりさん。

「天くんが内浦へ行くって知った時は、私も一緒について行こうと思ったもん！」

「ああ、あの時は大変でしたね……本気で行く気でしたもんね……」

「挙句の果てには大学まで辞めようとして……止めるの大変だったわ……」

遠い目をしている海未先生と真姫さん。

そ、そんなことがあったのね……

「でも、どうしてそんなに天くんのことを……？」

「んー、そうだねえ……」

ことりさんは宙を見上げると……柔らかな笑みを浮かべた。

「……救われたから、かな」

「救われた・・・？」

「昔から私、人に遠慮しちやうところがあつてね。幼馴染の穂乃果ちゃんや海未ちゃんにさえ、ちよつと遠慮しちやつたりして・・・それで一度、μ sを辞める寸前までいつちやつたことがあるの」

「ええっ!?!」

驚く私。

それつて結構な事件なんじゃ・・・

「穂乃果ちゃんとも喧嘩しちやつて、そのまま喧嘩別れしちやいそうだったんだけどね・・・そんな時、初めて天くんに怒られちやつて」

苦笑することりさん。

「『本当の気持ちに蓋をしたまま過ごしたつて、辛い思いをするのはことりちゃんなんだよ!』つて。『そんな辛そうなことりちゃんを見るのは、俺も辛いんだよ!』つて。あの時は泣いちゃつたなあ」

「そうだったんですね・・・」

「うん。その後穂乃果ちゃんとは仲直り出来て、μ sも辞めずに済んで・・・だから天くんには、本当に感謝してるんだ」

笑みを浮かべることりさん。

「その一件があつてからは、遠慮しすぎることも無くなったつていうか・・・特に天くんの存在が今まで以上に大きくなって、天くんの前ではありのままの自分でいられるようになったんだよね」

「ありのまま過ぎて、見てるこっちは胸焼けしそうですけどね・・・」

「あの甘々空間は、誰も入り込めないものね・・・」

「アハハ・・・」

げんなりした海未先生と真姫さんを見て、苦笑してしまう私。

曜ちゃんからも聞いてはいたけど、よほど凄いらしわね・・・

「そういえば梨子ちゃん、曜ちゃんは元気でやつてる?」

「曜ちゃんですか? ええ、元気ですよ」

「それなら良いんだけど・・・あの子、私と同じ匂いがするんだよね。人に遠慮しがちつていうか・・・」

「あー・・・確かに、そういうところはあるかもしれないね」

「あつ、曜といえば・・・」

海未先生は何かを思い出したようで、真姫さんとことりさんに呆れた視線を向けた。

「二人とも、曜に天と絵里が喧嘩していることを話したでしょう。可哀想に、曜はそのことで思い悩んでいましたよ?」

「ええつ、ホント!？」

「それは悪いことしたわね・・・」

「まあ私の方でフォローはしておいたので、大丈夫だとは思いますが・・・」

「あつ、それなら大丈夫だと思います」

慌てて言葉を挟む私。

「実は私達、曜ちゃんから天くんとお姉さんの件を聞いたんですけど・・・その時に曜ちゃん、『絶対に仲直りするつて海未先生が言つてたから大丈夫』つて笑顔で言つてましたから。特に悩んでいる様子も無かつたので」

「そうでしたか・・・それなら良かったです」

ホツとした様子の海未先生。

「ですが確かに、曜はことりに似て遠慮がちなところがありますからね。それが原因で思い悩むことが無いと良いのですが・・・」

「天くんが側にいるんだから大丈夫だよ。もしそうなっても、私の時みたいになんか曜ちゃんを支えてくれるはずだよ」

「そうね。それで曜がことりみたいになんか、天とイチャイチャしてなきや良いけど・・・」

「やつぱり内浦行つてくる!」

「落ち着きなさいことり!?!急にどうしたのですか!?!」

「天くとイチヤイチャするのは私の特権なのっ!」

「いつからアンタの特権になったのよ!」

騒ぐ三人を見て、思わず笑ってしまう私。

ホントに愛されてるわね、天くんは・・・

「っ・・・」

何故かまたモヤモヤしてしまった。

何なのかしら、この感じ・・・

「梨子? どうしたのですか?」

「い、いえっ! 皆、今頃どうしてるかなあと思いました!」

慌てて誤魔化す私。

「そうね。予備予選も明日だものね」

真姫さんはそう言つて微笑むと、私の方を見た。

「梨子は仲間を信じて、明日はコンクールに集中しなさい。私達も応援に行くから」

「梨子の演奏、楽しみにしてますね」

「梨子ちゃん、ファイト!」

「あ、ありがとうございます!」

真姫さんの言う通り、今は仲間を信じてコンクールに集中しないと・・・

気持ちを  
入れ直す  
私なのだ  
った。

どこにいても同じ明日を信じてる。

《千歌視点》

「うう、緊張してきたあ……」

「ずらあ……」

表情が強張っているルビィちゃんと花丸ちゃん。

遂に迎えた、ラブライブ予備予選当日……私達は、ステージ裏でスタンバイしていた。

「フツ、情けないリトルデーモン達……このヨハネがついているというのに……」

「そんなこと言いながら善子、足が震えてマース」

「む、武者震いつてやつよ！つていうかヨハネっ！」

「ま、全く……こ、これしきのこと……き、緊張するなど……」

「落ち着きなよダイヤ……」

皆がそんなやり取りをしている中……私は曜ちゃんと顔を見合わせた。

「曜ちゃん、頑張ろうね！」

「うん！練習の成果を見せよう！」

お互いの拳を合わせる。

梨子ちゃんのためにも、絶対に負けるわけには……

「はいはい、気負わないの」

「イタタタタツツ!? 髪が抜けるううううっ!?」

後ろから天くんに思いつきりアホ毛を掴まれた。

「天くん!? 何でここに!?」

「客席で見るんじゃないの!?」

「関係者はステージ裏に来てても良いって言うから、様子を見に来たんだよ」

曜ちゃんと善子ちゃんの問いに答える天くん。

「それに……渡したい物もあったし」

「渡したい物?」

私達が首を傾げていると、天くんが持っていた袋の中からシユシユを取り出した。

「わあ、可愛い!」

「それどうしたずら!?」

「実はこれ、梨子さんから皆へのプレゼントなんだよ」

笑いながら答える天くん。

「東京から送ってくれたんだけど、『本番前に皆に渡してほしい』って。色違いのシユ

シユが九個入つてたよ」

天くんはそう言うのと、袋の中のシユシユを私達に配り始めた。

「千歌さんがオレ・・・ミカン色で、曜がライトブルーね」

「今オレンジって言いかけたでしょ!?!でもありがとう!」

「ヨーソーロー!」

「花丸がイエロー、ルビイがピンク、善子がホワイトね」

「やったずら!」

「可愛いつ!」

「フツ、褒めてつかわす」

「ボツシユート」

「わあああああつ!?!嘘ですごめんなさい!ありがとうごさいます!」

「やれやれ・・・ダイヤさんがレッド、果南さんがエメラルドグリーン、鞠莉がヴァイオレットね」

「ありがとうごさいます」

「梨子ちゃんに感謝しないとね」

「フフツ、そうね」

全員の手にしユシユが行き渡る。

「あれ？天くんのは？」

「もう付けてますよ」

そう言つて右手を上げる天くん。

その手首には、虹色のシユシユが着けられていた。

「おお、虹色ずら！」

「天くんが虹色つて、ちよつと意外かも」

「スカイブルーとかだと思つてたわ」

「俺も意外だつたんだけどね」

花丸ちゃん・ルビィちゃん・善子ちゃんの言葉に苦笑する天くん。

「梨子さんが、『天くんは皆の架け橋だから』つて」

「Wow！それでRainbowなのね！」

「そういう理由なら、確かに天にピツタリかも」

「フフツ、なかなか粋な理由ですわね」

納得している鞠莉ちゃん・果南ちゃん・ダイヤさん。

天くんは笑うと、私達全員の顔を見渡した。

「梨子さんも今日、サクラピンクのシユシユを着けて本番に臨むそうです。俺達もこのシユシユを着けて、梨子さんの分まで頑張りましょう」

「「「「「おーっ！」」」」」」

私達はそれぞれ、もらったシユシユを自分の手首に着けた。

何だか、梨子ちゃんが側にいてくれるみたい……

「……ありがとう、天くん。おかげで緊張せずに済みそう」

「お礼なら後で梨子さんに言ってお下さい。俺は渡しただけです」

笑みを浮かべる天くん。

良いタイミングで来てくれて、皆の緊張をほぐしてくれて……

ホント、良いマネージャーに恵まれたよ……

「よし、円陣組もつか！」

「よし来た！」

「気合い入れよう！」

私を中心に、皆が輪になる。

あつ、そういうえば……

「天くんは……入ってくれる？」

「……ここで『入らない』なんて言ったら、皆の士気が下がるでしょ」

苦笑する天くん。

「入りますよ。A q o u r s のマネージャーなんですから」

「天くん・・・」

「フフツ、そうこなくっちゃ!」

曜ちゃんはそう言つて笑うと、天くんの手を引つ張つて自分と果南ちゃんの間に天くんを入れた。

「それじゃあ皆、手を出して」

私が出すと、その上に次々と皆の手が重ねられる。

全員出した手は右手・・・梨子ちゃんからもらったシユシユを着けた方の手だ。

「さあ、行こう! ラブライブに向けて! 私達の第一歩に向けて! 今、全力で輝こう!」  
声を張り上げる私。

「A q o u r s っ!」

「「「「「「サ〜ンシャイ〜ン!」」」」」」

皆の手が頭上へと上げられる。

心一つにした私達は、いよいよ自分達の出番を迎えるのだった。

\*\*\*\*\*

「天！こつちこつち！」

「はいはい」

美渡さんに手招きされ、隣の席に座る俺。

さて・・・

「星さん、応援の準備は出来てますか？」

「勿論だよ！曜に声援を送らなきゃ！」

「善恵さん、録画の準備は大丈夫ですか？」

「バッチリよ！善子の勇姿をしっかりと撮らないと！」

「西華さん、気合い入ってますか？」

「当然じゃないか！果南に負けなくらい気合い入ってるよ！」

「よし、応援するぞーっ！」

「「おーっ！」」

「アンタ何でメンバーのお母さん達とそんなに仲良くなってるの!？」

美渡さんのツツコミ。

いや、何でって・・・

「愚問ですよ、美渡さん・・・マネージャーだからです」

「答えになってないんだけど!？」

「まあまあ、細かいことは良いじゃない美渡ちゃん」

「そうよ美渡ちゃん。今は応援に集中しましょう」

「気合い入れな美渡。ここから先は戦争だよ」

「何か最後物騒なこと言いませんでした!?!? つか曜ちゃんのお母さんとはともかく、後のお二人は初対面ですよねえ!?!? 何でそんなにフレンドリーなんですか!?!？」

「甘いですよ、美渡さん。それを言ったら、この三人が顔を合わせるのが初めてなんですから」

「嘘でしょ!?!? それでこのノリ!?!？」

愕然としている美渡さん。

まあそれには理由があるんだけどね。

「実は少し前から、メンバーの母親によるグループラインをやってるんですよ。俺も参加してるんですけど」

「何でアンタも参加してんのよ!?!？」

「グループを立ち上げたのが俺だからです」

「まさかの発起人!？」

「まあそんなわけで、そこで交流してきたからこそ皆仲良しなんですよ」

「「ね〜♪」」

「・・・頭痛くなってきた」

頭を抱える美渡さん。

奈々さんを始め、今日来ることが出来なかつたお母さん達の方まで応援せねば・・・

「つていうか、何で俺の嫁が来てないんですか」

「サラツと『俺の嫁』呼ばわりしてるし・・・残念ながら志満姉は・・・」

「旅館の仕事があるからお留守番でしょ。グループプラインで連絡来ましたよ」

「志満姉もグループプライン参加してるんだ!？」

「当然でしょう・・・あつ、そろそろ始まりますね」

会場が暗くなり、ステージが照らされる。

Aquorsの八人がステージ上でスタンバイしており、後は曲が流れるのを待つのみ状態だった。

そして・・・

「お〜も〜い〜よひとつになれ〜♪」

千歌さんが歌い出す。

A q o u r s の新曲『想いよひとつになれ』だ。

「くくのとくきを待っていた〜♪」

周りの皆が、ピアノを弾いているかのように踊る。

そして・・・

「うおおおおおっ！千歌あああああっ！」

「曜最高おおおおっ！」

「善子おおおおっ！可愛いわよおおおおっ！」

「良いぞ果南んんんっ！」

最初の静かな曲調から盛り上がった途端、皆が大きな声で声援を送る。

ダンスも揃っているなので今のところ大丈夫そうだが、問題なのは・・・

「な〜に〜か〜をつかむこと〜♪」

ここだ。千歌さんと曜が何度も失敗したところ・・・

「な～に～か～を～あ～き～ら～め～な～い～♪」

「よしっ！」

無事に成功し、思わず声が出てしまう。

ホツとしていると、ステージ上で踊る曜と目が合い・・・『どうだ！』と言わんばかりにウインクされた。

「・・・ハハッ、流石だわ」

俺は苦笑しつつ、曜に向かって親指を立てるのだった。

\*\*\*\*\*

「いやあ、最高だった！」

テンションマックスの美渡さん。

パフォーマンス終了後、A q o u r s の皆には観客達から惜しみない拍手が送られていた。

「曜、輝いてたなあ．．．！」

「うう、善子．．．立派になって．．．！」

「やるじゃないか、果南！」

星さん・善恵さん・西華さんも感動している。

本当に良いパフォーマンスだった。

「．．．よし」

A q o u r s のパフォーマンスは見届けることが出来た。

後は．．．

「天、すぐに車持ってくるから。会場の前で待ってて」

「お願いします、星さん」

「んっ？」

席を立つ星さんを、不思議そうに眺める美渡さん。

一方、西華さんが俺に手提げバッグを渡してくれる。

「天、これ途中で食べな。向こうに着いたら時間も無いだろうし」

「おお、お弁当ですか？ありがとうございます、西華さん」

「んんっ?」

よく分かっていない美渡さん。

席から立ち上がる俺に、善恵さんが親指を立てた。

「行つてらっしゃい、天くん。気を付けてね」

「ありがとうございます、善恵さん。行つて来ます」

「ちよ、ちよつと待つて!」

慌てて間に入つてくる美渡さん。

「さつきから何を話してるの!」

「ああ、美渡さんには言つてませんでしたね」

苦笑する俺。

「実はこれから、東京に行くんですよ」

「東京!?!何で!?!」

美渡さんの問いに、笑みを浮かべて答える俺なのだつた。

「決まつてるじゃないですか・・・俺がA q o u r sのマネージャーだから、ですよ」

頼りになるのはいつだって仲間である。

《梨子視点》

「梨子、しつかりね」

「はいっ！」

真姫さんの言葉に頷く私。

私達は今、ピアノコンクールの会場のロビーにいた。

これから本番を迎える私を、真姫さん・海未先生・ことりさんが激励しに来てくれたのだ。

「私達は客席から応援してるから。頑張つてね、梨子ちゃん」

「ありがとうございます」

ことりさんにお礼を言う私。

すると、海未先生が前に進み出た。

「行つてらっしゃい、梨子・・・楽しんで来て下さいね」

「っ・・・」

その言葉を聞いた途端、私の頭に天くんの顔が浮かんだ。

そんな私の表情を見て、面白そうに笑う海未先生。

「フフツ……天にも同じことを言われたのではありませんか？」

「っ……どうしてそれを……？」

「私達も、同じことを言われてきましたから」

苦笑する海未先生。

「本番前に緊張していると、『楽しんで来てね』『こんな経験は今しか出来ないよ』って。その言葉に、ずいぶんと勇気づけられたものです」

「分かる分かる。天くんの言葉を聞くと、不思議と勇気が湧いてくるんだよね」  
「当時の私達にとっては、あれほど強い味方もいなかったわね」

海未先生の言葉に頷くことりさんと真姫さん。

私も天くんの言葉に救われてきた身として、その気持ちが良い分かった。

「梨子〜？」

名前を呼ばれて振り向くと、お母さんがこつちへ歩いてくるところだった。

「そろそろ時間……ってあら、海未ちゃんと真姫ちゃんじゃない！」

「こんにちは」

「どうも」

笑顔で挨拶を交わす三人。

海未先生も真姫さんも、内浦にいた時にお母さんとは顔を合わせていた。

「わざわざ応援に来てくれたのね！嬉しいわあ……つてことりちゃん!」

「ご無沙汰してます、奈々さん」

笑顔で一礼することりさん。

そういえば、ウチのお母さんところりさんのお母さんって知り合いなのよね……

私はことりさんとは会ったことが無かったけど、どうやらお母さんは会ったことがあるようだ。

「しばらく見ない間に、また一段と可愛く……いや、綺麗になったっていうべきかしら?ますますお母さんそっくりになっちゃって」

「フフツ、ありがとうございます」

「お母さんの学生時代と同じで、周りの男達が放っておかないんじゃない? 彼氏の一人や二人いるでしょ?」

「ちよ、お母さん!? そんな質問……」

「私は天くん一筋なので、彼氏がいたことはありません♪」

「ちよつと聞いた梨子!? 強力なライバル出現よ!」

「わ、私は別に……!」

「天一筋と言うなら、私もですよ。ことりだけではありません」

「海未ちゃんも!」

「そ、天は渡しませんからねっ!」

「真姫ちゃんまで!?!大変よ梨子!これはもう戦争よ!」

「だから私は……!」

どうしようもなく胸がモヤモヤしてしまった。

もう、こんな時に……!

「つていうか、そろそろ時間なんですよ!?!早く行かないと!」

「あつ、そうだったわね」

ようやく本来の用件を思い出したお母さん。

「控え室までは私も付き添うから。海未ちゃん、真姫ちゃん、ことりちゃん、すぐに戻つて来るから待つてくれる?一緒にコンクールを見ましよう」

「分かりました。梨子、行つてらっしゃい」

「応援してるわよ」

「フアイト!」

「は、はいっ!」

私は三人に一礼すると、控え室に向けて歩き出した。

全く、お母さんつたら……

「・・・天くん」

胸がモヤモヤしつつも、何故だか無性に天くんに会いたくなる私なのだった。

\*\*\*\*\*

「相変わらず人が多いなあ・・・」

周りを見渡し、苦笑する俺。

星さんに車で駅まで送ってもらった俺は、新幹線に乗って東京駅へとやって来た。  
た。

今回はあまり時間も無かったので、お金はかかるが新幹線を利用したのだ。

果南さんのところでアルバイトしてて良かった・・・

「さて、待ち合わせ場所はこの辺りなんだけど・・・」

「天くうううううううんっ！」

「ふっ!?!」

辺りを見回していると、全速力で走ってきた女性に思いつき抱きつかれた。

凄まじい衝撃だった・・・

「会いたかったにやあああああああああつ！」

「はいはい、俺もだよ」

苦笑しつつ、女性の頭を撫でる俺。

「久しぶり、凜ちゃん」

「久しぶりにや！」

満面の笑みを浮かべる女性・・・星空凜ちゃん。

言わずもがな、μ'sのメンバーである。

「今回は急に頼み事しちゃってゴメンね」

「全然問題ないにや！大学も夏休みに入ったから暇してたにや！」

「なら良いんだけど・・・っていうか、ちゃんと進級出来た？」

「かちゃんのおかげでバッチリにや！」

グツと親指を立てる凜ちゃん。

現在大学三年生の凜ちゃんは、花陽ちゃんと同じ大学に通っている。

勉強面で色々と苦労している凜ちゃんは、花陽ちゃんにずいぶんと助けられているらしい。

花陽ちゃんも大変だなあ・・・

「それより、時間の方は大丈夫なのかにや？」

「あつ、そうだった・・・じゃあ凜ちゃん、目的地までよろしく」

「任せるにや！」

ドンツと胸を叩く凜ちゃん。

凜ちゃんはバイクの免許を取得しており、自分のバイクも持っている。

今回は凜ちゃんにお願いして、駅から目的地までバイクに乗せてもらうことになって  
いた。

「フルスピードでぶっ飛ばすにや！」

「うん、お願いだから安全運転でよろしく」

「フツ・・・そんなもの、ゴミ箱に捨ててやったにや」

「今すぐ拾って来いバカ猫」

「辛辣!？」

「ってか、その語尾はいつまで続けるの？」

「これは凜のアイデンティティにや！これが無くなったら凜じゃないにや！」

「うわあ・・・凜ちゃん、よく『アイデンティティ』なんて言葉知ってたね」

「そっち!?!凜だってそれぐらい知ってるにや！」

「はいはい、偉い偉い」

「子供扱いは止めてほしいにや!」

ギヤーギヤー・・・いや、ニヤーニヤー騒ぐ凜ちゃん。

相変わらず面白いなあ・・・

「ぬぐぐぐ・・・昔は凜と同じくらいの身長だったのに、今じゃ完全に見下ろされてるにや・・・!」

「・・・ハツ」

「にやあああああつ!腹立つにやあああああつ!」

地団太を踏む凜ちゃん。

まあそういう凜ちゃんも、*μs*の頃よりだいぶ大人っぽくなっている。

ショートヘアだった髪は肩にかかるくらいまで伸びており、今日はそれをポニーテールに結ってあった。

見た目は十分女子大生である。

「・・・フフツ」

急に笑い出す凜ちゃん。

どうしたんだろう?

「・・・元氣そうで安心したにや。絵里ちゃんと喧嘩したせいか、内浦に行く前の天くんは元氣無かったから」

「凜ちゃん……」

どうやら、ずいぶん心配させてしまっていたらしい。

申し訳ないことをしたな……

「……ゴメンね、凜ちゃん」

「お詫びに今度、内浦での話を聞かせるにや。根掘り葉掘り聞くから覚悟するにや」

「……了解。たっぷり話してあげるよ」

「フフツ、約束にや」

凜ちゃんはそう言つて笑うと、俺の手を握つて歩き出すのだった。

「それじゃあ、キツチリ送り届けてあげるにや……ピアノコンクールの会場まで！」

これが恋と知ってしまったんだ。

《梨子視点》

「すう……はあ……」

椅子に座り、深呼吸を繰り返す私。

既にコンクールは始まっており、私は自分の控え室で出番を待っていた。

「……大丈夫」

サクラピンクのシユシユを着けた右手首を、左手でギュつと握る。

「私は一人じゃない……」

緊張している自分を、奮い立たせるように呟く。

そう、私は一人じゃない。天くんもそう言つて……

「っ……」

天くんの顔が思い浮かぶ。

天くん、今頃何してるのかな……

「っ……ダメダメー」

首をブンブン横に振る。

天くんのことを思い出すと、寂しさが募って無性に会いたくなくなってしまふ。今は本番に向けて、集中しないと・・・

「しつかりしなさい、私。心を落ち着かせるのよ」

「そうそう、人前でパンツを晒さないように気を付けないと」

「嫌なこと思い出させないでよ!?!二回も天くんに見られて、死ぬほど恥ずかしかったんだから!」

「一回目は桜色、二回目は白・・・三回目は何色でしょうね?」

「遠回しに今日の下着の色を聞くの止めてくれる!?!っていうかい加減に・・・」

「そこまでツッコミを入れたところで、私はハツとした。」

「私、今誰と会話を・・・ってどうかこの声って・・・」

「恐る恐る後ろを振り向くと、そこには・・・」

「お疲れ様です、梨子さん」

「天くんがニツコリ笑って立っていた。」

「う、嘘でしょ・・・?」

「・・・夢?」

「えいつ」

「むぐつ!?!」

思いつきり両頬を引つ張られる。

しつかり感触がある・・・夢じゃない・・・!

「おお、柔らかい・・・ちよつとクセになるかも」

「ふあ、ふあふあふいふえ！（は、離して!）」

「はいはい」

大人しく離してくれる天くん。

私は両頬を擦りつつ、未だ信じられない気持ちで天くんを見つめた。

「な、何でここに居るの!？」

「空間移動をしました」

「何その善子ちゃんみたいなセリフ!？」

「いや、空間移動⇨善子っていう共通の認識は何なんですか?」

呆れている天くん。

だって何か善子ちゃんっぽいし・・・

「つて、そんなことはどうでもいいの!」

「うわ、酷い・・・善子のことを『どうでもいい』だなんて・・・」

「善子ちゃんのことじゃないわよ!?!それより話を逸らさないで!」

ここで天くんワールドに引き込まれるわけにはいかない。

とりあえず、現状を把握しないと・・・

「そもそも予備予選はどうしたの!？」

「バツチリ見届けてきましたとも。凄く良いパフォーマンスでしたし、あれなら問題無く通過出来ると思いますよ」

「ホント!?!良かったあ・・・じゃなくて!?!じゃあ何でここにいるの!?!」

「A q o u r s の出番が終わってすぐ、会場を出て新幹線に乗ったんですよ。おかげで梨子さんの出番が来る前に、会場に着くことが出来ました」

笑っている天くん。

「ホント・・・駅まで送ってくれた星さんと、会場まで送ってくれた凜ちゃんには感謝しないと」

「星さん?凜ちゃん?」

「曜のお母さんと、μ'sの星空凜ちゃんです」

「ええっ!?今、曜ちゃんのこと呼び捨てにした!?!」

「食いつくところはそこですか・・・まあ色々ありまして、本人から『呼び捨てにしてほしい』と言われたんです」

「・・・そうなんだ」

またしてもモヤッとしてしまう。

本当にもう・・・

「つていうか、いつ控え室に入ったの？そもそも関係者以外立ち入り禁止よ？」

「梨子さん、一度控え室を出ましたよね？驚かせようと思つて、あの時に入らせてもらいました。ちなみにここに来る前に奈々さんに会つて、関係者用のパスを借りたので何の問題も無く入つて来れましたよ」

「お母さん・・・」

頭を抱える私。

何で勝手にパスを貸しちやうかなあ・・・

「・・・どうして来てくれたの？」

「え・・・？」

「どうしてわざわざ・・・ここまで来てくれたの？」

天くんはAqoursのマネージャーだ。

本来であれば、予備予選を一番に優先しなければいけないはずなのに・・・

いくらAqoursの出番を見届けたとはいえ、マネージャーとして皆の側にいてあげるべきなのに・・・

どうして私なんかのところに・・・

「どうしてつて・・・そんなの決まつてるじゃないですか」

あっけらかんと答える天くん。

「俺がA q o u r sのマネージャーだからですよ」

「だから、それならA q o u r sを優先すべきで・・・！」

「いるじゃないですか」

「え・・・？」

「いや、だから・・・いるじゃないですか。俺の目の前に、A q o u r sのメンバーがもう一人」

私を指差す天くん。

「俺はA q o u r sのマネージャーですから。A q o u r sのメンバー全員をサポートするのが、俺の仕事です」

当然と言わんばかりの表情を見せる天くん。

「メンバーの一人が、東京で頑張ってるんですよ？そりや来るに決まってるでしょう。サポートは全然出来ませんでしたけど、せめて応援ぐらいはと思ひまして」

苦笑する天くん。

「当然皆にも話をして、ちゃんと理解を得てますよ。『私達の方まで応援してきてくれ』ですって」

屈託の無い笑みで語る天くんを、私はただ呆然と見つめていた。

じゃあ天くんは、最初から応援に来てくれるつもりだったってこと・・・？  
他でもない、私の為に・・・？

「それで・・・来てくれたの・・・？」

震える声でそう尋ねた。

「東京までわざわざ・・・新幹線に乗ってまで・・・？」

「梨子さんを応援する為ですもん。大した出費でも無いですよ」

微笑む天くん。

「それに・・・約束したじゃないですか」

「約束・・・？」

「ピアノコンクールに出ることを決めた時、梨子さん俺に言いましたよね？『Aqoursのこと・・・頼むわね』って。俺はこう答えたはずですよ。『勿論です。マネージャーですから』って」

「っ・・・！」

「その『Aqours』に、貴女も入ってるじゃないですか。俺は最初からそのつもりで、ああいう風に答えたんですよ？」

悪戯っぽく笑う天くん。

「どうにかして、両方を見届ける方法を考えてたんですよね。いやあ、Aqoursの

出番が午前中で本当にラッキーでした。おかげで梨子さんの出番に間に合ってえっ!?!  
限界だった。

笑顔で話している天くん、私は思いつきり抱きついた。

嬉しくて嬉しくて・・・涙が止まらなかつた。

「ちよ、梨子さん!?!何で泣いてるんですか!?!」

慌てている天くん。

私は気付いてしまった。

もしかしたら、薄々は気付いていたのかもしれない。

気付かないフリをして、目を逸らしていたのかもしれない。

それでも・・・たった今、自分の気持ちを確かに認識してしまった。

私は・・・天くんのことが好きなのだ。

この心の優しい男の子に・・・恋をしているのだ。

誰よりも私に寄り添ってくれる、誰よりも私の味方でいてくれる彼に・・・惚れてしまったのだ。

今ならハッキリと分かる。

天くと鞠莉さんが一緒に寝ているところを見た時や、天くんについて楽しそうに話す真姫さん達を見た時・・・

あの時に感じたモヤモヤは、嫉妬だったんだ・・・

皆に嫉妬してしまうくらい、私は天くんに想いを寄せていたのね・・・

「ありがとう・・・来てくれて・・・本当に・・・ありがとう・・・！」

「・・・どういたしまして」

優しく微笑み、私を抱き締めてくれる天くん。

天くんと抱き合うのは初めてじゃないのに、胸のドキドキが止まらない。

天くんの温もりに包まれながら、今までで一番の幸せを感じる私なのだった。

心は通じ合えるものである。

《梨子視点》

「大丈夫!?目が腫れてたりしない!?!」

「若干赤いですけど、客席からは分からないと思いますよ?」

「もう、天くんのせいよ!?!あんなに私を泣かせるんだから!」

「梨子さんが勝手に泣いたんでしようが!?!ってか大声で誤解を招く発言しないでもらえます!?!スタツフさん方の視線が痛いんですけど!?!」

ギヤーギヤー言い合いながら、会場の通路を歩く私と天くん。

あの後すぐ、スタツフさんが私を呼びにやって来たのだ。

いよいよ私の出番が迫っていた。

「つていうか、そろそろステージ裏なんだけど・・・ついてきて大丈夫なの?」

「ここまでは大丈夫ですけど・・・ここから先はダメみたいですわね」

立ち止まる天くん。

私達の少し先には、ステージ裏に入ることが出来るドアがあった。

その前には警備員さんが立っており、コンクール出場者と思われる女の子を通して

た。

「あの先はコンクールの出場者しか入れないんですつて。だから俺が付き添えるのはここまです」

天くんはそう言うと、自分の右手を上げ・・・私に虹色のシユシユを見せた。私があげたやつ、着けてくれたんだ・・・

「何度も言いますが、梨子さんは一人じゃありませんから。俺も皆も、心は梨子さんと共にありますからね」

「・・・うん、ありがとう」

私も右手を上げ、サクラピンのシユシユを見せた。

今なら心から実感できる・・・私は一人じゃない。

「頑張ってくるから。見ててね」

「勿論です。梨子さんの勇姿、しっかりと目に焼き付けておきます」

笑みを浮かべる天くん。

ここで私は、あることを思い出した。

「あ、そういえば・・・曜ちゃんのこと、呼び捨てにしているのよね？」

「え？ええ、そうですけど・・・」

「だったら、私のことも呼び捨てにしてくれるわよね？」

「はい!？」

「勿論敬語は無しで。タメ口で話してくれるわよね？」

「ちよ、梨子さん!？」

「梨子、でしょ？」

「いや、梨子s・・・」

「梨・子！」

「・・・梨子」

「それで良し♪」

満面の笑みを浮かべる私。

鞠莉さんや曜ちゃん呼び捨てにされている今、これ以上遅れるわけにはいかないものね・・・

「やれやれ・・・何で皆そんなに強引なのか・・・」

「フフツ、天くんの強引さがうつったのかもね」

「失礼な。『強引』という言葉から最も離れている男だというのに」

「どこが!？」

「どうやら自覚は無いらしい。全く、これだから天くんは・・・」

私が呆れていると、天くんのスマホが鳴った。

「あれ、誰だろう・・・おお、ナイスタイミング」

「え？」

首を傾げる私。天くんは笑みを浮かべると、電話に出てスピーカーモードに切り替えた。

「もしもし？」

『もしもし!?!天くん!?!』

「千歌ちゃん!?!」

『あつ、その声は梨子ちゃん!二人が一緒にいるってことは、まだ梨子ちゃんの出番は来っていないってこと!?!』

「ええ、ちょうどこれから出番なんですよ」

『おお、ナイスタイミング!』

天くんと同じセリフを言う千歌ちゃん。

『梨子ちゃんのこと考えてたら、居ても立っても居られなくて・・・でも今から直接電話したら迷惑かなと思って、梨子ちゃんに会いに行つた天くんに電話したんだけど・・・一緒にいてくれて本当に良かった!』

『梨子ちゃん!』

「曜ちゃん!?!」

今度は曜ちゃんの声が聞こえてくる。

『頑張つて梨子ちゃん！応援してるよ！』

『梨子ちゃん！フアイトずら！』

『頑張ルビイ！』

『負けんじゃないわよ！』

『緊張していませんか!?あつ、シユシユをくださつてありがとうございます！それから……』

『長いよダイヤ……梨子ちゃん、全力でピアノ弾いてきてね！』

『内浦から応援してマース！』

『皆……』

皆からの温かい声援に、また涙が出そうになる。

『梨子ちゃん』

優しく呼びかけてくれる千歌ちゃん。

『梨子ちゃんなら大丈夫。自信持つて弾いてきて』

『っ……ありがとう、千歌ちゃん！』

涙を堪え、力強く答える私。緊張も不安も、もう一切無かった。

仲間達が応援してくれている……そのことが、私の心に勇気を与えてくれた。

「桜内さん！スタンバイお願いしますー！」

スタツフさんに呼ばれた。そろそろ行かなくちゃ・・・

「皆、ありがとう！頑張ってくるからね！」

私は皆にお礼を言おうと、天くと向き合った。

「行ってくるね、天くん」

「あ、その前に・・・」

天くんはそう言おうと・・・右手を私の前に突き出した。

「円陣は出来ないけど・・・掛け声だけでも」

「・・・フフツ、ありがとう」

私は笑うと、天くんの右手に自分の右手を重ねた。

「じゃあ千歌さん、今日二回目ですけどお願いします」

『オツケー！任せて！』

千歌ちゃんの息を吸う音が聞こえた。

そして・・・

『A q o u r s ！』



「にやはははっ！メツチャ似てるにや！」

「爆笑してんじやないわよ凜!？」

「あらあら、本当に仲が良いのねえ」

笑っている奈々さん。

「ところで天くん、梨子の反応はどうだった？驚いてた？」

「ええ、ビックリしました」

笑みを浮かべる俺。

ピアノノコンクールを見に来ることは、事前に奈々さんや真姫ちゃん達に知らせていた。

その上であえて梨子には伏せておいてもらい、サプライズで登場して驚かせようという作戦だったのだ。

「梨子はもう大丈夫です。きっと梨子らしい演奏を聴かせてくれると思いますよ」

「それなら良かった……え？」

驚いている奈々さん。

「天くん、今……梨子のこと呼び捨てにした……？」

「本人がそうしろって言うんですよ。急にどうしたんでしょうね？」

「よくやったわ梨子！流石は私の娘ね！」

「はい？」

何故かガッツポーズしている奈々さん。

どうしたんだろう？

「天くん!? 私というものがありませんがらっ！」

「どういふことですか天っ！」

「イミワカンナイッ！」

「急にどうしたの!?!」

凄い剣幕で詰め寄ってくることりちゃん・海未ちゃん・真姫ちゃん。

一体俺が何をしたというのか・・・

「やれやれ、天くんも罪な男だにや」

呆れたように溜め息をつく凜ちゃん。

いや、罪な男って・・・その言い方だと、まるで俺が女つたらしみたくないじゃないか。

「女つたらしだよね」

「女つたらしですね」

「女つたらしね」

「女つたらしだにや」

「何で人の心が読めるの!?!」

何なのこの人達、怖いんだけど・・・

俺が恐怖を覚えていると、会場にアナウンスが流れた。

『続きまして・・・浦の星女学院高等学校二年、桜内梨子さん』

「っ・・・」

遂に梨子の出番がやって来た。

桜色のドレスに身を包んだ梨子が、凜とした表情で舞台袖から現れる。

「梨子・・・」

心配そうな表情で見つめる奈々さん。

恐らく、以前のピアノコンクールのことを思い出しているんだろう。

「大丈夫ですよ、奈々さん」

微笑む俺。

「Aoursの桜内梨子は・・・以前とは一味違いますから」

「天くん・・・そうね、信じてるわ」

奈々さんはそう言って笑うと、再び梨子の方に視線を向けた。

梨子は椅子に座ると、ゆっくりとピアノの鍵盤に手を置き・・・力強く弾き始めた。

「凄い・・・」

ことりちゃんが驚いたように呟く。

初めて聴かせてもらった時にも感じたことだが、梨子の奏でる音は本当に綺麗で美しかった。

優しくて、それでいて力強くて……いつまでも聴いていたいと思えるものだった。

「これが梨子の弾くピアノ……」

「凄いや……」

感心している海未ちゃんと凜ちゃん。

口には出さないが、俺も梨子の演奏に感銘を受けていた。

初めて聴かせてもらった時よりも、さらに心に響くものがあるというか……

「……フツツ」

笑みを零す真姫ちゃん。

「今日の梨子、ノツてるわね」

「ノツてる?」

「ええ。心の底から演奏を楽しんでるわ」

微笑む真姫ちゃん。

確かに今の梨子は、笑みを浮かべながらピアノを弾いていた。

梨子の想いや感情が音に乗っている分、聴いている人の心により一層響くんだ……

「……ハハッ、流石だわ」

俺も笑みが零れた。

やがて梨子の演奏が終わりを迎え、会場が静寂に包まれる。

梨子はゆっくりと椅子から立ち上がると、客席に向かって深々と一礼した。

その瞬間・・・会場中から盛大な拍手が沸き起こった。

「凄いや梨子ちゃんっ！」

「素晴らしかったですっ！」

「凜は感動したにや！」

「良い演奏だったわ！」

ことりちゃん・海未ちゃん・凜ちゃん・真姫ちゃんも惜しみない拍手を送る中・・・奈々

さんは立ち上がり、涙ぐみながらステージ上の梨子を見つめていた。

俺も立ち上がり、奈々さんに寄り添う。

「良かったですね、奈々さん」

「つ・・・ええ、本当に・・・」

涙を拭う奈々さん。

「ありがとう、天くん・・・貴方のおかげよ」

「俺は何もしてませんよ。梨子の努力の賜物です」

笑みを浮かべながらステージ上へ視線を向けると、ふいに梨子と視線が合った。

微笑み合い、どちらからともなく右手を上げる俺達。  
今この瞬間・・・俺と梨子の心は、確かに通じ合ったのだった。

## 喧嘩するほど仲が良い。

「感動したよ梨子ちゃん！」

「ええ、素晴らしい演奏でした！」

「ありがとうございます」

ことりちゃん和海未ちゃんに絶賛され、照れ笑いを浮かべる梨子。

ピアノコンクールも終わり、俺達は梨子と合流していた。

「練習の時よりさらに良くなってたわ。流石ね」

「真姫さんに意見をいただいたおかげです。ありがとうございます」  
真姫ちゃんに褒められ、嬉しそうな梨子。

すると・・・

「本当に凄かったにや！」

「うわっ!？」

凜ちゃんが目をキラキラさせながら、梨子の手を握りブンブン振る。

「凜はすっかり梨子ちゃんのファンになってしまったにや！」

「えーつと・・・どちら様でしょう？」

「μ、sの星空凜よ」

「ええっ!？」

「よろしくにゃ!」

真姫ちゃんの紹介に驚く梨子。

つてか今ここに、μ、sのメンバーの半分が集まってるのか・・・

「ほら、天くんも何か言うにゃ!」

「うおっ!？」

凜ちゃんに思いつき背中を叩かれる。

俺は苦笑しながら梨子の前に立った。

「・・・お疲れ様」

「・・・うん」

微笑む梨子。

俺も微笑むと・・・梨子を優しく抱き寄せた。

「ちよ、天くん!？」

「・・・良かった」

「え・・・?」

「今までの梨子の努力が、報われたような気がして・・・良かったなって思ったし、凄

く嬉しかった」

「天くん……」

「梨子の演奏が聴けて良かった……本当にお疲れ様」

「っ……」

俺の胸に顔を埋める梨子。

「ありがとう……天くんのおかげよ  
抱き合う俺達。」

感動の余韻に浸っていると……

「むう……天くんの浮気者……」

「ぐぬぬぬ……羨ましい……」

「くっ……やるわね、梨子……」

何故か三つの鋭い視線を感じた。

どうしたんだろう？

「……本当に罪な男だにや」

溜め息をつく凜ちゃん。

俺が何をしたというのか……

「梨子、お疲れ様……って、あらあら……」

こちらへとやってきた奈々さんが、抱き合う俺達を見てニヤニヤしていた。

「こんなところでイチヤイチャしちゃって・・・お熱いわねえ」

「なっ!?! イチャイチャなんてしてないからっ!」

梨子は顔を真っ赤にして、勢いよく俺から離れた。

梨子は恥ずかしがり屋だなあ・・・

「天くん、今夜は私達と一緒にホテルに泊まる? ツインルームだからベッドは二つしか無いけど、梨子と同じベッドで寝れば問題無いわよね?」

「大アリよ!?! 何で年頃の男女を同じベッドで寝かせようとするの!?!」

「あら、海未ちゃんの家でも千歌ちゃんの家でも同じ部屋で寝泊まりしたんでしょ? しかも海未ちゃんの家では、同じ布団で寝てたって聞いたわよ?」

「ちよ、誰に聞いたのそれ!?!」

「名前は言えないけど、みかんをこよなく愛する女の子からの情報提供よ」

「千歌ちゃああああああああんっ!?!」

あのアホみかん・・・帰ったら絶対しばく。

「ダメですよ奈々さん! 天くんはウチに泊まるんですから!」

「何を言っているんですかことり! 天はウチに泊まるんです!」

「天、ウチに来なさい。コスプレ中毒者と顔芸女の家になんて泊まったら、何されるか

分からないわよ」

「真姫ちゃんのことなんてイミワカンナイ！」

「天は真姫の誘いなんてオコトワリシマス！」

「アンタ達今すぐ表に出なさいっ！売られた喧嘩は買ってやろうじゃないのっ！」

「はいはい、三人とも落ち着くにゃ」

「猫人間は黙ってて！」

「ラーメンホリックは黙ってて下さい！」

「貧乳は黙ってなさい！」

「全員今すぐ土下座して謝るにやああああああああっ！」

「やかましいわ」

「ちゅんっ!？」

「はうっ!？」

「ヴェエツ!？」

「にやっ!？」

全員の頭にチョップをお見舞いする。

やれやれ、変わってないなこの子達・・・

「二十歳を超えた女子大生四人が、くだらない理由で喧嘩しないの。分かった？」

「二「はい、すみませんでした．．．」三」

「あの、sの人達を、一瞬で黙らせるなんて．．．天くん、恐ろしい子．．．」  
若干引き気味の梨子。

恐ろしいとは失礼な．．．

「でも天くん、本当に泊まる場所はどうするつもりなの？もう夜だし、流星に今から内浦に帰るわけじゃないでしょ？」

「まあね。つていうか、数日はこっちにいるつもりだよ。やりたいこともあるし」

「やりたいことつて？」

「まあ．．．色々ね」

言葉を濁す俺。

「その間に泊まる場所は、もう決まってるんだよね」

「ええっ!？」

「そんなあつ!？」

「何だよ!？」

シヨックを受ける三人。

それを見て、思わず苦笑してしまう俺なのだった。

「仕方ないでしょ．．．誰よりも先に誘われたんだから」

\*\*\*\*\*

「今日はありがとね、凜ちゃん」

「天くんの為なら、凜はどこにでも駆けつけるにや」

お礼を言う俺に、笑いながら返す凜ちゃん。

俺は凜ちゃんのバイクで、再び東京駅まで送ってもらったのだった。

「でも、本当にここで良いのかにや？」

「うん、車で迎えに来てくれるみたいだから大丈夫。それにこれを持ったままじゃ、バイクには乗れないからさ」

俺の手元には、着替え等が入っている荷物があつた。

会場へ向かう際、邪魔なので駅のコインロッカーに預けておいたのだ。

凜ちゃんに駅まで送ってもらったのは、これを取りに来る為だった。

「むう・・・凜も車の免許取ろうかな・・・」

「そういえば凜ちゃん、車の免許持っていないよね。バイクの免許は持ってるのに」

「凜はバイクで走って、風を感じるのが好きなんだにや。車はいくら走っても、全然風を感じないにや」

「ああ、なるほど・・・」

「車は運転するより、助手席に座ってる方が楽しいにや。かよちんの運転する車の助手席に座って、爆睡するのが凜のお気に入り」

「いや寝るんかい」

花陽ちゃんのことだし、そんな凜ちゃんを微笑みながら見守ってそう・・・

「そういえばかよちん、天くんに凄く会いたがってたにや。せっかく東京に来たんだし、顔を見せてあげてほしいにや」

「そうするよ。ちようど良い機会だし、俺も久しぶりに会いたいから」

「ホントかにや!?!かよちん凄く喜ぶにや!」

嬉しそうな凜ちゃん。すると・・・

「〃わしわしMAX〃!」

「にやあつ!?!」

いきなり背後から胸を揉まれ、悲鳴を上げる凜ちゃん。

うわあ・・・久々に見たな、『わしわしMAX』・・・

「おー、凜ちゃん成長したねえ・・・Bはあるんやない?」

「えっ、何で分かって・・・じゃなくて!?いきなり何するにや!?

「フフツ、ゴメンゴメン」

笑いながら凜ちゃんから離れる女性。

紫の長い髪の女性は、俺を見て優しく微笑んだ。

「久しぶりやね、天くん」

「久しぶり、希ちゃん」

微笑み返す俺。

彼女は東條希ちゃん・・・μ sのメンバーの一人である。

「ゴメンね、わざわざ駅まで迎えに来てもらっちゃって・・・」

「気にせんでええよ。ウチと天くんの仲やろ?」

笑う希ちゃん。

そう、車で迎えに来てくれる人というのは希ちゃんのことだ。

そして俺が泊まる場所というのは、希ちゃんの家なのである。

「それにしても、何で希ちゃんの家に泊まることになったのかにや?」

「実はこの間真姫ちゃんと話した時に、A q o u r sの桜内梨子ちゃんがピアノコンクールの為に東京に来ることを聞いてな」

凜ちゃんの問いに答える希ちゃん。

「天くんのことだから、絶対見に来るだろうと思って・・・そうすると泊まる場所が必要になるはずだから、天くんに連絡して『ウチに泊まりなよ』って誘ったんよ」

「なるほど・・・そういうことだったのかにや」

「うん。真姫ちゃんから聞いた話じゃ、ことりちゃんと海未ちゃんも見に来るみたいだったし・・・どう考えても、天くん争奪戦が勃発するやろ？その前に、ウチが天くんをもらっちゃえと思って」

「策士にや!?!ここに策士がいるにや!?!」

「フフツ、どんなもんや」

ドヤ顔をしている希ちゃん。

やれやれ・・・

「まあ、俺としてもありがたい提案だったよ」

苦笑する俺。

「泊まる場所を確保できたし・・・希ちゃんに会いたかったから」

「っ・・・」

急に顔が赤くなる希ちゃん。

どうしたんだろう？

「全く・・・天くんは本当に女ったらしだにや」

やれやれといった様子で、苦笑しながら呟く凜ちゃんなのだった。

## 包容力のある人は素敵である。

「そっかあ・・・ラブライブの予備予選、今日やったんやね」

「そうなんだよ。レベルの高いグループが結構いて、驚いちやった」

希ちゃんの家で夕飯を食べつつ、ラブライブの話をしている俺達。

希ちゃんとは高校時代と変わらず、マンションで一人暮らしをしている。

相変わらずご両親は仕事が忙しいそうで、なかなか会えないようだ。

「んっ、この肉じゃが美味しい！希ちゃん、また料理の腕が上がったんじゃない？」

「ホント？実は最近、休日は料理教室に通ってるんだ。まだまだ天くんには及ばない

けど、少しでも上達したいからね」

「いや、俺も人並みにしか出来ないって」

「謙遜せんでもええって。あのにこつちから免許皆伝をもらってるんやから」

笑いながら言う希ちゃん。

実は俺に料理を教えてくれたのは、他ならぬにこちゃんだったりする。

μ'sの中で一番料理スキルの高いにこちゃんは、俺に一から料理の基礎を叩きこん

でくれたのだ。

おかげで今一人暮らしをしていますが、自炊で困ることはほとんど無い。まさしくここにちゃん様々である。

「つていうか、何で急に料理教室に．．．ハッ!?まさか男ができたとか!?!」  
「フフツ、だつたらどうする?」

「ううっ．．．希ちゃん、幸せになるんだよ．．．」

「まさかのガチ泣き!?!」

寂しいけど、仲間として希ちゃんの幸せを願わないといけないよなあ．．．

「冗談やつて!?!彼氏なんていたことないよ!?!」

「嬉しくて嬉しくて言葉にできない」

「小●和正!?!」

良かったあ．．．

いや、喜んで良いのか分かんないけど。

「え、じゃあ何で料理教室に?」

俺が尋ねると、希ちゃんは恥ずかしそうに俯いてしまった。

「いや、その．．．天くん『美味しい』って言ってもらいたくて．．．」

「貴女に会えて本当に良かった」

「それも小田●正やん!?!」

勢いよく希ちゃんに抱きつく俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「こうやって一緒に寝るの、久しぶりやね」

「何で俺の周りの女子達って、男と一緒に寝ることに躊躇いが無いのか・・・」  
同じベッドの上で希ちゃんにくっつかれ、溜め息をつく俺。

まあ希ちゃんの家泊まるのが決まった時点で、こうなるとは思ってたけどね。

「男と一緒に寝ることじゃなくて、天くと一緒に寝ることに躊躇いが無いだけだよ。  
皆それくらい、天くんのが大好きってことやね」

「いや、その気持ちは凄くありがたいんだけど・・・何度も言うけど、俺も男だから  
ね？襲われても知らないよ？」

「フフツ・・・ちゃんと責任を取ってくれるなら、襲ってくれてもええよ？」

「女の子がそういうこと言わないの。特に希ちゃんは、自分の身体が凶器だつてこと  
をもう少し自覚して」

「ほほう？どの辺が凶器なん？」

そう言いながら、豊満な胸をこれでもかと押し付けてくる希ちゃん。

うわ、この子絶対分かってるわ・・・

つてか、高校時代よりもさらに大きくなってるだど・・・？

「チクシヨウ、初代おっぱいお化けめ・・・」

「懐かしいね、その二つ名」

クスクス笑う希ちゃん。

元々『おっぱいお化け』というのは、希ちゃんを指し示す言葉だったのだ。

言うなれば、鞠莉は二代目なのである。

「ウチを『初代』って呼んだということは、Aqoursに二代目がおるんやね？もし

かして、小原鞠莉ちゃん？」

「・・・流石はセクハラ親父、見抜いてたか」

「良いモノ持ってるよねえ。後は松浦果南ちゃんと、国木田花丸ちゃんかな？」

「どんだけ見抜いてんの!? つてかどこに注目してんの!？」

ダメだこの子、完全に変態だよ！ド変態親父だよ！

「つてか希ちゃん、ずいぶんAqoursに詳しいね？」

「ウチだけやなくて、μ'sのメンバーは全員Aqoursに注目してるからね。何

といつても、ウチらの仲間がマネージャーやってるグループやもん」  
笑みを浮かべる希ちゃん。

「『天くんがまたスクールアイドルに携わってる』って、皆喜んだんやから」  
「・・・色々あつただけだね」

苦笑する俺。

ホント、思い返せば色々あつたなあ・・・

「正直、今でもちよつと思うよ。『俺がAqoursのマネージャーで良いのかな』つて」

「どうして?」

「・・・俺はまだ、Aqoursの十人目だとは思えてないから。皆が『それでも良い』つて言ってくれたから、マネージャーをやらせてもらってるけど」

それでも、やっぱり思ってしまう。

Aqoursの十人目だと思えていない奴が、仲間としてマネージャーをやつてて良いのかと・・・

「・・・天くんは、Aqoursの皆の側にいたくないの?」

「・・・いたいよ」

希ちゃんの問いに答える俺。

「皆と一緒にいたい。目標に向かって歩み続ける皆に、出来る限りのサポートをしてあげたい・・・そう思うよ」

「・・・そっか」

希ちゃんはそう言うと、優しく俺を抱き締めてくれた。

「なら、それが答えやん」

「え・・・?」

「天くんは、Aqoursの皆と一緒にいたいと思ってる。Aqoursの皆も、天くんと一緒にいたいと思ってくれてるんやろ? だったら答えは出てるやん」

微笑む希ちゃん。

「Aqoursのマネージャーには、天くんが相応しい・・・むしろ天くん以外の人には務まらないと思うよ?」

「希ちゃん・・・」

「だからもつと自信持つて。天くんの力は凄いやから。それは誰よりもその力に助けられてきたウチらが、胸を張って保証する」

「・・・どんだけ胸が自慢なの?」

「そういう意味やないよ!?!」

「冗談だつて」

俺は笑いながら、希ちゃんに身を寄せた。

「・・・ありがとね、希ちゃん」

希ちゃんは昔からそうだ。

人が悩んだり苦しんだりしてる時に、その人が一番欲しい言葉をかけてくれる。不安を取り除くような、安心するような言葉をかけてくれる。

だからこそ俺も、希ちゃんみたいになりたいと思っただのだ。

「ホント・・・希ちゃんには敵わないな」

「フフツ、それはお互い様やね」

頭を撫でてくれる希ちゃん。

「ウチも天くんには敵わないと思ってるから」

「え？どこが？」

「さあ？どこやろうね？」

クスクス笑いながらはぐらかす希ちゃん。

こういうところも相変わらずだな・・・

「ところで天くん、明日はどうする予定なん？」

「とりあえず挨拶回りかな。前回東京に来た時は、そんな時間も無かったから」

「そうやね。ウチとも会ってくれなかったもんね」

「あれ、怒ってる?」

「別に?」

笑顔の希ちゃん。

何か笑顔が怖いんだけど・・・

「一人で回るつもりなん?」

「そのつもりだったんだけど、梨子も一緒に行きたいって。ついでに皆に、梨子を紹介しておこうかなと」

「なるほど。ウチが仕事に行ってる間、天くんはデートなんやね」

「やっぱり怒ってるよねえ!」

「別に?」

もうこの笑顔には騙されない。

絶対に怒ってるわこの子。

「・・・早く帰って来てね。こうやって希ちゃんとも一緒に過ごしたいからさ」

「待っててな天くん!すぐ帰って来るから!」

あれ、希ちゃんってこんなにチョロかったっけ・・・

真姫ちゃん並みなんだけど・・・

「じゃあ、そろそろ寝よつか・・・おやすみ、希ちゃん」

「おやすみ、天くん」

希ちゃんはそう言うと、俺を抱き締めながら目を閉じた。どうやら、抱き枕にする気満々らしい。

苦笑しつつも希ちゃんに身を委ね、ゆっくり目を閉じる俺なのだった。

人は面影を重ねてしまうものである。

翌日・・・

「ああ、緊張する・・・！」

「落ち着きなよ」

そわそわしている梨子を見て、思わず笑ってしまふ俺。

仕事へと向かう希ちゃんを見送った俺は、梨子が借りているスタジオへとやってきていた。

今日はラブライブ予備予選の結果発表がある為、梨子はずっとそわそわしているのだ。

「発表までまだ時間があるし、今から緊張してたら身体がもたないよ」

「・・・天くんは落ち着いてるわね」

「μ'sのマネージャーをやった頃、嫌というほど経験したからね」

苦笑する俺。

「もう俺達に出来ることは何も無いし、後はなるようにしかならないから。開き直ることも大事だって、あの時身を持って学んだよ」

「・・・それもそうね。そわそわしても仕方ないか」  
気持ちを落ち着かせるように、深呼吸を繰り返す梨子。

「すう・・・はあ・・・」

「ヒツヒツフー・・・ヒツヒツフー・・・」

「いやそれラマーズ法よねえ!?! 私は妊婦じゃないわよ!?!」

「あれ? 出産間近じゃなかったっけ?」

「違うわ! そもそも誰の子を身ごもるのよ!?!」

「俺しかいないじゃん」

「ふえっ!?!」

何故か急に顔を赤くする梨子。

あれ? どうしたんだろう?!

「き、急にそんな・・・いきなり言われても・・・」

「おーい? 梨子?」

「わ、私にだつて・・・心の準備つてもものが・・・」

「もしもーし? 聞こえてる?」

「で、でも・・・天くんが望むなら・・・」

「えいっ」

「あたっ!?!」

梨子の頭にチヨップをお見舞いする。

「ちよつと!?!いきなり何するのよ!?!」

「あ、戻ってきた」

完全に心ここにあらずといった感じで、何か色々考え事してたもんなあ・・・

そんなに予備予選の結果が心配なんだろうか・・・

「まあとにかく、ここにいと余計に結果が気になるだろうからさ。もうすぐ約束の時間だし、そろそろ外に出ない?」

「・・・そうね。気分転換も兼ねて、外の空気を吸いに行きましょうか」

深く息を吐き、立ち上がる梨子。

実は昨日凜ちゃん、この近くのカフェでお茶をする約束をしていたのだ。

昨日の演奏を聴いてすっかり梨子のファンになった凜ちゃんは、梨子と色々な話をしてみたらしい。

「そういえば、凜ちゃんが梨子に紹介したい人がいるんだってさ。今日連れてくるって言ってたよ」

「紹介したい人?誰かしら?」

「会うまで内緒って言ってたけど・・・あの人しかないだろうね」

「え．．．？」

首を傾げている梨子。

「天くん、心当たりあるの？」

「勿論。凜ちゃんといったらあの人だもん」

「むう．．．」

何故か頬を膨らませている梨子。

「ん？どうしたの？」

「．．．凜さんのこと、理解してるんだなあつて」

「え？もしかして妬いてる？」

「べつつにい？」

ふいっとそつぽを向く梨子。

やれやれ．．．

「心配しなくても、今の俺はA q o u r sのマネージャーだから。ほら、早く行くよ」  
梨子の手を引いて歩き出す。

全く、梨子は心配性なんだから．．．

「そういうことじゃないんだけど．．．まあ、今はそれで良いわ」

梨子は苦笑しながら何かを呟くと、俺の手をギュッと握り返すのだった。

\*\*\*\*\*

「天くうううううううんっ！」

「俺は“みがわり”を使った！」

「キャアッ!？」

俺の身代わりの梨子が現れた！

俺に代わって身代わりの梨子が攻撃を受けた！

「ちよ、何で急に私の後ろに隠れるのよ!？」

「凜ちゃんの“すてみタツクル”のヤバさを舐めちやいけない。俺のHPが一撃で持っていかれるからね」

「それをもろに受けた私の身にもなってくれる!？」

「大丈夫。女の子が相手だと、凜ちゃんの攻撃力は半減するから」

「どんな特性!？」

「おお、梨子ちゃん細い！肌もスベスベにや！」

「凜さん!? 変なところ触らないで下さい!」

「凜ちゃん!」

待ち合わせしていたお店の前でそんなやり取りをしていると、凜ちゃんの後ろから一人の女性が走ってくる。

女性は俺達のところへ辿り着くと、苦しそうに両膝に手をついた。

「ハアツ・・・ハアツ・・・もう、急に走り出さないでよお!」

「にやはは、身体が勝手に動いちゃったんだにや」

「全くもう・・・」

ようやく落ち着いたのか、ゆっくりと息を吐く女性。

そして顔を上げ、俺の方を見て優しく微笑む。

「久しぶり、天くん」

「久しぶり、花陽ちゃん」

俺も笑みを浮かべる。

一方、梨子は驚きの表情を浮かべていた。

「えっ、もしかして・・・μsの小泉花陽さん!」

「ああっ!?! A q o u r sの桜内梨子さんですよね!?!」

「ええっ!?!」

急に花陽ちゃんにガシツと手を握られ、動揺している梨子。

「まさか本物に会えるなんて・・・感激です!」

「え、えーつと・・・」

キラキラした目で見つめられ、リアクションに困っている梨子。

まさかμsのメンバーからこんな反応をされるなんて、想像もしてなかっただろうな・・・

「花陽ちゃん、ホントにスクールアイドル大好きだよね」

「当然だよ!」

力説する花陽ちゃん。

「しかもAqoursは、今凄く勢いのあるグループの一つなんだよ!?!そんなグループの人に会えるなんて・・・奇跡だよ!」

「・・・何か今、花陽ちゃんと千歌さんが重なって見えたりわ」

「奇遇ね天くん。私も全く同じことを思ったわ」

苦笑する梨子。

「つていうか梨子、よく花陽ちゃんのこと分かったね?」

「ほら、ルビイちゃんが鞆に缶バッジ付けてるから」

「ああ、なるほど・・・ルビイは花陽ちゃんのファンだもんね」

納得する俺。一方、花陽ちゃんは驚きの表情を浮かべていた。

「えっ、ルビイちゃんつて・・・まさか、Aqoursの黒澤ルビイさんのこと!?!」

「そうそう。ルビイはμ'sのことが大好きで、推しメンが花陽ちゃんなんだよ。花陽ちゃんのことを好き過ぎて、鞆に花陽ちゃんの缶バッジ付けてるくらいだし」

「うう・・・生きてて良かった・・・!」

「そこまで!?!」

泣いている花陽ちゃんにツッコミを入れる梨子。

花陽ちゃんは相変わらずだなあ・・・

「ねえねえ天くん、Aqoursに凜を推してくれてる子はいないのかにや?」

「ああ、花丸が凜ちゃん推しだよ。『Love wing bell』の時の凜ちゃんの写真を、食い入るように見てたもん」

「ホントかにや!?!」

「良かったね、凜ちゃん!」

「うん!メツチャ嬉しいにや!」

手を繋ぎ、嬉しそうに笑い合う花陽ちゃんと凜ちゃん。

俺にはそんな二人の姿が、ルビイと花丸に重なって見えた。

「・・・俺もすっかりAqoursに染まったなあ」

苦笑しながら呟く俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「んー、このケーキ美味しい♪」

幸せそうな表情でケーキを頬張る花陽さん。

お店に入った私達は、まったりとティータイムを過ごしていた。

「ほら天くん、これ美味しいよ！あくん♪」

「あくん・・・ん、ホントに美味しいね」

「でしよでしよ!?!」

「こっちのケーキも美味しいよ。あくん」

「あくん・・・んー、美味しい!」

「・・・この二人ってカップルなんですか?」

「全く違うけど、気にしたら負けにゃ」

苦笑する凜さん。

「ことりちゃんみたいにならなかつつくわけじゃないけど、天くんとの距離の近さではかよちゃんも負けてないにや。かよちゃんは天くんをもの凄く可愛がつてるし、そんなかよちゃんに天くんもよく懐いてるんだにや」

「・・・そういえば前に、ことりさんと花陽さんを『天使だ』って言っていましたね」  
カップルでも無いのに、ここまで距離が近いなんて・・・  
もっと私も積極的に行くべきかしら・・・

「そうそう天くん、時間があつたら穂乃果ちゃんに会いに行つてあげて。天くんにもの凄く会いたがつてたから」

「ホントに？ちようどこの後『穂むら』に行く予定だから、そこで会えると良いな」  
嬉しそうに笑う天くん。

「つていうか、穂乃果ちゃん大学卒業出来るの？海末ちゃんに聞いたけど、単位ギリギリらしいじゃん」

「まあ最初の頃、にこちゃんや凜ちゃんと一緒に遊び呆けてたからねえ・・・」  
「うっ・・・」

花陽さんにジト目で見つめられ、気まずそうに顔を逸らす凜さん。

「同じ大学に私達がいたから、何とか勉強を教えられたけど・・・そうじゃなかったら

留年してたかもね」

「えっ!？」

驚く私。

「μ、sの皆さんって、皆同じ大学に通われてるんですか!？」

「正確に言うのと、ことりちゃんと真姫ちゃん以外は皆同じ大学だよ」

答えてくれる花陽さん。

「ことりちゃんは服飾系の大学、真姫ちゃんは医大にそれぞれ進学したの。それ以外の皆は、音ノ木坂大学に進学したんだよ」

「それぞれ学部や学科は違うけど、キャンパスは一緒だからよく会ってるんだにや」

「そうだったんですか・・・」

九人中七人が同じ大学って、ある意味凄いわね・・・

「まあにこちゃん・希ちゃん・絵里ちゃんは卒業しちゃったから、残ってるのは私達と穂乃果ちゃん・海未ちゃんだけなんだけどね」

苦笑する花陽さん。

「穂乃果ちゃんと海未ちゃんが卒業したら、とうとう私達だけになるのかあ・・・寂しくなるね、凜ちゃん」

「大丈夫にや。穂乃果ちゃんはきつと留年してくれるにや」

「うん、縁起でも無いことをサラツと言うの止めよう?」

「いや、穂乃果ちゃんなら有り得るよね」

「天くんまで何てこと言うの!?!」

花陽さんのツツコミ。

あれ? 穂乃果さんって、sのリーダーよね?

何でこんなに信用されていないのかしら・・・

「まあ穂乃果ちゃんはともかく、まだ雪穂ちゃんと亜里姉がいるんだしき。そう寂しがることもないって」

笑いながら言う天くん。

確か雪穂さんって、穂乃果さんの妹さんのよね・・・

そして亜里沙さんが、天くんの二番目のお姉さんだったかしら?

「あつ、亜里沙ちゃんといえば・・・」

少し言いにくそうに口ごもる花陽さん。

「天くん・・・亜里沙ちゃんから、絵里ちゃんのこと聞いてる・・・?」

「絵里姉のこと・・・?」

首を傾げる天くん。

そんな天くんに、花陽さんは心配そうな表情で告げるのだった。

「絵里ちゃん、体調を崩しちゃったみたいで・・・寝込んでるんだって」

受けた恩は忘れないものである。

《梨子視点》

「うう、暑いし疲れたにやあ・・天くん、おんぶ〜」

「立って歩け。前へ進め。あんたには立派な足がついてるじゃないか」

「どこのハガレン!?! いいからおんぶするにや!」

「うわっ!?! ちよ、いきなり飛び乗ってこないでくれる!?!」

「にやはは♪女子大生の身体の感触を、背中であつぷり味わうといいにや♪」

「凜ちゃんに味わえるほどの胸なんか無いでしょ」

「おりやあつ!」

「ぐえっ!?!」

凜さんに首を絞められる天くん。

その光景を見て、私の隣を歩いている花陽さんがおかしそうに笑っていた。

「フフツ、あの二人は相変わらずだなあ」

「昔からあんな感じなんですか?」

「うん、二人とも凄く仲が良いの。天くんは昔から大人びてたけど、凜ちゃんと一緒の

時はあんな風にはしゃいだりもして・・・凜ちゃんも天くんと一緒だと楽しいみたいで、『天くんとは波長が合う』って言ってたよ」

「波長ですか・・・」

私は天くんにとつて、『波長が合う』相手になれてるのかなあ・・・そんなことを考えていると、花陽さんがクスツと笑いを零した。

「梨子ちゃんつて、天くんのこと好きでしょ?」

「ふえっ!?!」

唐突な質問に、思わず変な声を出してしまう私。

「な、ななな何を・・・!」

「分かりやすいなあ」

苦笑している花陽さん。

「天くんを見る時の梨子ちゃん、完全に恋する乙女の表情してるよ?」

「ええっ!?!じゃあ天くんにも気付かれて・・・」

「あ、それは大丈夫。天くんつて人の感情の機微に鋭いくせに、自分に向けられる好意に関してにはビツクリするくらい鈍感だから」

「・・・ですよねえ」

天くん攻略は大変そうだわ・・・

溜め息をつくくと、花陽さんがクスクス笑っていた。

「フフツ、よつぼど天くんに惚れちゃったんだね」

「ええ、まあ・・・それに気付いたのは、昨日のことなんですけど」  
苦笑する私。

「花陽さんは、天くんのことどう思ってるんですか？」

「あ、もしかして恋のライバルだと思われてる？」

「い、いえ！そういうつもりじゃ・・・」

「冗談だよ」

からかうように笑う花陽さん。

「天くんのごときは大好きだよ。大切な仲間だし・・・恩人でもあるから」

「恩人・・・？」

「私と凜ちゃんとは、天くんと小学校の頃からの付き合いだね。私達が小六の時、天くんが小一だったんだけど・・・その頃から天くん、私のことを凄く励ましてくれたんだ」

昔を思い出しているのか、空を見上げる花陽さん。

「私って自分に自信が無くて、ついネガティブになっちゃうんだけど・・・天くんはいつも私に、『花陽ちゃんは可愛いよ』『もっと自信持つて』って言ってくれたの。当時の私にとっては、それが本当に心強かったんだ」

嬉しそうに笑う花陽さん。

「μ s に入る時もそう……自分に自信が無くて、なかなか一步を踏み出せなくてね。そこで背中を押してくれたのも天くんや凜ちゃん、それに真姫ちゃんだったんだ。あの時背中を押してもらえてなかつたら、私がμ s に入ることは無かつたと思う」

「そうだったんですか……」

天くんは当時から、色々な人の背中を押してあげていたのね……

「μ s に入ってから、天くんにはたくさん支えてもらったし……天くんがいなかつたら、今の私は絶対にいないから。感謝してもしきれないよ」

「……それで恩人なんですね」

「うん。だから天くんのごことは大好きだけど、恋してるわけじゃないの。梨子ちゃんのリバルではないから、安心して」

柔らかな笑みを浮かべる花陽さん。

この人はきつと、天くんの幸せを心から願ってるんだろうな……

「あ、でも……天くんが私を求めてくれるなら、話は別だよ？」

「ええっ!?!恋じゃないって言ったじゃないですか!?!」

「だって天くんに『花陽ちゃんしかいないんだ!』って言われたら……キャーツ♡天くんの為だったら、私どんなことでもしちゃうよお♡」

頬に手を当て、身体をクネクネさせている花陽さん。

背中にかかるほどのロングヘア、服を押し上げハッキリと存在を主張している大きな胸、そしてこの包容力……

ヤバイ、天くんの好みにドンピシャじゃない……！

「クツ、私も頑張らないと……！」

「フフツ、だったらまずは絵里ちゃんに認められないとね。絵里ちゃんのブラコンぶりは凄まじいから」

「絵里さん、ですか……」

そこで私は、凜さんをおぶって前を歩く天くんに視線を向けた。

「絵里さん、体調を崩して寝込んでるんですね？天くん、絵里さんの所に行つてあげなくて良いのかな……」

「多分、内心ではメチャクチャ心配してると思うよ」

花陽さんも天くんに視線を向ける。

「でも、今は行かない方が良いと思ってるんじゃないかな」

「喧嘩してるから、ですか？」

「うん。多分絵里ちゃんのことだから、天くんがお見舞いに行つても意地を張つて追い返そうと思うんだよね。本当はメチャクチャ嬉しいだろうけど」

苦笑する花陽さん。

「そうすると、かえって絵里ちゃんの気が休まらないだろうから。天くんもそれを分かった上で、行くのを遠慮してるんだろね。まあ本心では行きたいんだろけど」

「・・・天くんも素直じゃないですね」

「あの姉弟は昔からそうなの。凜ちゃんがああやって天くんにベツタリ絡んでるのも、天くんの気を少しでも紛れさせようとしてるからなんだよ。大好きな天くんが凜ちゃんとベタバタしてるからって、あんまり嫉妬とかしないであげてね」

「し、してませんからっ!」

「フフツ、梨子ちゃんは面白いなあ♪」

顔を赤くする私を見て、面白そうに笑う花陽さんなのだった。

\*\*\*\*\*

「到着にや〜!」

「凜ちゃん重い。早く降りて」

「コラッ！女の子に『重い』とか言っちゃダメにや！」

「・・・ハッ」

「にやあああああつ！また鼻で笑ったにやあああああつ！」

憤慨している凜ちゃんを無理矢理降ろし、俺は目の前のお店・・・『穂むら』に目をやった。

こうしてお店に来るのは久しぶりだなあ・・・

「何かこのお店を見ると落ち着くわ」

「確かに。風情があるよね」

花陽ちゃんも頷く。

一方、梨子は何故か緊張していた。

「こ、ここが『穂むら』・・・」

「何で緊張してんの？」

「だってここ、高坂穂乃果さんの実家なんですよ!?!いくらスクールアイドルに疎い私でも、μ'sのリーダーの実家に来たら流石に緊張するわよ！」

「こんにちは〜」

「人の話聞いてくれる!?!」

梨子が何か喚いていたがスルーして、お店のドアを開けて中に入る。

中では若い女性が店番をしていた。

「いらつしやいます．．．ええっ!? 天くん!」

「久しぶり、雪穂ちゃん」

笑みを浮かべる俺。

赤みがかつた茶髪の女性．．．高坂雪穂ちゃんが、驚愕の表情で俺のことを見つめていた。

「え、何で天くんがここに!」

「ちよつと東京に来たから、挨拶しておこうと思つて。元氣そうで良かった」

「それはこつちのセリフだよバカアアアアッ!」

「ええっ!」

雪穂ちゃんに凄いい剣幕で詰め寄られる。

何!? 何事!?

「内浦に行つたら毎日連絡しろつて言つたでしょうが! 何で連絡してこないの!」

「彼女かつ! 毎日は無理だわっ!」

「心配して亜里沙に聞いたら、『天とは定期的に連絡とつてるよ』つて聞かされてさ

! 何で私とは定期的に連絡とつてくれないわけ! 私も天くんの姉だよ!」

「いや違うよねえ! 穂乃果ちゃんの妹であつて、俺の姉ではないよねえ!」

「じゃあお姉ちゃんをあげるから、今すぐ結婚してきなさい！そしたら天くんは、高坂家の人間になるから！」

「そしたら雪穂ちゃん、俺の義妹になるんだけど!？」

「・・・それも悪くないかも」

「見境なし!？」

全くこの人ときたら、ホント過保護なんだから・・・

と、雪穂ちゃんが笑みを零した。

「全く・・・変わらないなあ、天くんは」

そのまま雪穂ちゃんに抱き寄せられ、優しく抱き締められる。

「元氣そうで良かった。真面目に心配してたんだからね」

「・・・ゴメン」

雪穂ちゃんには全然連絡して無かったもんな・・・

今さらながら、申し訳なさが募る。

「フフツ・・・相変わらず雪穂ちゃんは、天くんのお姉さんやってるね」

「絵里ちゃんや亜里沙ちゃんに負けず劣らずのブラコンにや」

「花陽さんと凜さん！こんにちは！」

笑みを浮かべた雪穂ちゃんは、後ろに立っている梨子を見て首を傾げた。

「あれ？貴女は・・・」

「は、初めまして！桜内梨子といいます！」

「ああっ!? A q o u r s の!？」

「えっ？雪穂ちゃん、A q o u r s を知ってるの？」

「当然じゃん！天くんがマネージャーやつてるって聞いてから、ずっとチエックして  
るもん！まあ、私達はマネージャーを断られちゃったけど・・・」

「ホントすいませんでした・・・」

「あつ、責めてるわけじゃなくてね！天くんがまたスクールアイドルに携わってると  
が、純粹に嬉しかったんだ。亜里沙も喜んでたし」

笑う雪穂ちゃん。

あの当時は二人からマネージャーを頼まれて、頑なに断ってたからなあ・・・ホント  
申し訳ない。

「でも、どうしてA q o u r s の子がここに・・・ハッ!?まさか天くんの彼女!？」

「違うわ。梨子はピアノコンクールに参加する為に東京に来てて、俺はその応援で来  
たんだよ。そのピアノコンクールが昨日終わったから、今日は挨拶回りしてるんだ」

「ああ、なるほど」

納得している雪穂ちゃん。

一方、梨子は何故かムスツとしていた。

「即座に否定しなくても良いじゃない・・・」

「まあまあ梨子ちゃん」

花陽ちゃんが苦笑しながら梨子を宥めている。

何かあつたのかな？

「本当に鈍感な男だにや・・・」

何故か呆れている凜ちゃん。

え、俺何かやらかした？

「でも残念だなあ・・・お姉ちゃん、今いないんだよね」

「えっ、捕まったの？」

「違うわ！何でそういう発想になるの!？」

「いや、別に・・・」

「あの人のモノマネは止めなさい！とにかくお姉ちゃんは捕まってないから！」

「じゃあ高飛びしたの？」

「それも違うよ!?!何も罪は犯してないよ!？」

「逃亡先はどこ？レバノン？」

「だから違うってば!?!その話題も危ないから触れちゃダメ！」

ツツコミを連発する雪穂ちゃん。

相変わらず面白いなあ……

「お姉ちゃんは今、ちよつと一人旅に行つてね。まだ帰つて来ないんだ」

「いや、穂乃果ちゃんが一人旅つて……大丈夫なの？」

「私も不安だったんだけど、本人が行く気満々でさあ……」

溜め息をつく雪穂ちゃん。

見知らぬ土地で迷子になつてなきやいいけど……

ニユーヨークに行つた時も大変だったしなあ……

「穂乃果ちゃん……君のことは忘れない」

「うう、穂乃果ちゃん……さようなら」

「凜は穂乃果ちゃんとの思い出を抱えて生きていくにや……」

「お姉ちゃん……私もいずれはそっちに行くからね……」

「穂乃果さんつて、sのリーダーよねえ!? 何でこんなに信用されてないの!？」

梨子のツツコミが響き渡るのだった。

## 【松浦果南】 これからも・・・

「ねえ天、二月十日って何の日か知ってる？」

唐突に尋ねてくる鞠莉。

二月に入り寒い日が続く中、今日もAqoursは学校の屋上に集まり練習を始めようとしていた。

今はウォーミングアップの為に、二人一組で柔軟体操をやっているところである。

「勿論知ってるよ。誕生日でしょ？」

「Great! 流石は天ね！」

「川口●奈さんの」

「そっち!？」

「急に大河ドラマの代役が決まって大変だろうけど、頑張ってほしいよね」

「それは同感だけでも!もっと身近に誕生日の子がいるでしょうが!」

「冗談だって。果南さんの誕生日でしょ？」

鞠莉の背中を押しつつ、少し離れたところにいる果南さんへと視線を向ける。

果南さんは善子とペアを組んでおり、容赦なく善子の背中を押ししていた。

「イタタタタツ!? もう無理っ! ギブだからっ!」

「ダメだよ善子ちゃん、しっかり身体をほぐさない」と

「ヨハネよっ!?! っていうか、少しは手加減しなさいよゴリラ!」

「アレレ? 手が滑ツチャツタナ?」

「ギヤアアアアッ!」

悲鳴を上げる善子。やれやれ・・・

「果南さんへの誕生日プレゼント、バナナの詰め合わせとかどう?」

「果南さんの誕生日が、天さんの命日になりますわよ」

「命が惜しいなら止めるすら」

隣で柔軟体操をしているダイヤさんと花丸が呆れていた。

「名案だと思ったのに・・・」

「フッフッフ・・・私に Good idea があるわ!」

鞠莉はそう言うのと胸の谷間に手を突っ込み、二枚の紙切れを取り出した。

「天と果南の為に用意したの。ありがたく受け取りなさい」

「うん、その前に『どこにしまっただの?』っていうツツコミを入れさせてくれる?」

そう言いつつ、鞠莉から紙切れを受け取る俺。

背後からダイヤさんと花丸が覗く中、そこに書いてある文字を読んで驚く俺なのだっ

た。

\*\*\*\*\*

「わあ．．．！」

目を輝かせている果南さん。

果南さんの誕生日である二月十日、果南さんと俺は二人で遊園地へとやって来ていた。

鞠莉からもらった二枚の紙切れは、この遊園地のフリーパスだったのだ。

「見て見て天！楽しそうなおトラクションがいっぱいあるよ！」

「そうですね。まずは大人しめなおトラクションから．．．」

「よし、まずはジェットコースターに乗ろう！」

「人の話聞いてます？」

ダメだこの人、完全に浮かれてるわ．．．

『果南は遊園地とか大好きだから、誘ったら絶対食いつくわよ。まあ天からのお誘いなら、たとえ遊園地じゃなくても食いつくでしようけど』

鞠莉の言葉を思い出す。

ちなみにこの遊園地の建設には、小原家も関わっているのだとか。

だからフリーパスとか用意出来たのね・・・

「むう・・・」

そんなことを考えていると、果南さんが不機嫌そうな顔をして俺を睨んでいた。

「果南さん？どうかしました？」

「目の前に私がいるのに、他の女のこと考えてたでしょ」

「何ですかその嫉妬してる彼女みたいなセリフ」

「つてか何で分かるの？」

「そういうのって分かるもんなの？」

「分かるもんなのっ！」

「人の心を読むの止めてもらえますか？」

「とにかくっ！今は私だけを見ることっ！分かった!？」

「・・・了解です」

『だから彼女かつ！』というツツコミはあえて放棄し、俺は果南さんの手を握った。

「ふえっ!?!そ、天!?!」

「人が多いですし、はぐれたら困るでしょう。それに・・・こうしていれば、嫌でも果南さんのことしか見られませんから」

「・・・『嫌でも』は余計だし」

そう呟きつつ、顔を赤くして俺の手を握り返す果南さんなのだっ。

\*\*\*\*\*

「だ、大丈夫・・・?」

「も、もうダメ・・・」

グロッキー状態の俺。

俺は今、ベンチで果南さんに膝枕されながら横になっていた。

「全く、この程度で乗り物酔いしちゃうなんて・・・」

「・・・ジェットコースターに十回ぐらい乗った後、コーヒーカップでベイ●レードばりにスピンスさせたのは誰でしたっけ？」

「き、記憶にございませぬ・・・」

「吐くつもりが無いなら、俺が吐きますね・・・おえっ」

「わあああああっ!?! すいませんでしたあああああっ!?!」

慌てて謝る果南さん。

全く、この人ときたら・・・

「ああ、何か飲みたいなあ・・・」

「待ってて天！今飲み物を買って来るから！」

ダッシュで飲み物を買うに行く果南さん。

やれやれ、あの人ときたら・・・

「君、大丈夫？顔色が優れないみたいだけど・・・」

そのままベンチで横になっていると、見知らぬお姉さんが心配して声をかけてくれた。

ゆるふわロングヘアで、おっとりした感じのお姉さんである。

「ええ、大丈夫です。ちよつと乗り物に酔っちゃって・・・」

「ああ、なるほどく．．．じゃあ、これをあげるねく」

そう言ってお姉さんは、俺にコーラのペットボトルを差し出してきた。

「乗り物酔いにはコーラがオススメだよ。炭酸に含まれる成分が自律神経を整えてくれるし、カフェインには感覚の乱れを抑えてくれる作用があるのく」

「へえ、そうなんですね．．．って、もらっちゃって良いんですか？」

「良いよ。あげちゃうく」

「すみません。いただきます」

俺はお姉さんからペットボトルを受け取ると、コーラを口に流し込んだ。

炭酸の爽快感で、ちよつと気分が良くなったかも．．．

「ありがとうございます。助かりました」

「どういたしまして。でも君にとっては、美人な彼女さんに膝枕されてる方が幸せだったかなく？」

「アハハ．．．見てたんですね」

どうやらバツチリ目撃されていたらしい。

それで果南さんが席を外したタイミングで、俺に声をかけてくれたのか．．．

「まあ果南さん．．．あの女性は、彼女じゃないんですけどね」

「えっ、そうなのく？膝枕までしてたのく？」

「あれくらいのスキンシップは、あの人にとって普通ですから」

「へへ、そうなんだ」

苦笑しているお姉さん。

「・・・普通好きでもない男の子に、膝枕なんてしないと思うけどな」

「ん？何か言いました？」

「何でもな」

笑って誤魔化すお姉さん。

どうしたんだろう？

「よし。彼方ちゃんが君に、とっておきの情報を教えてあげる」

「とっておきの情報？」

「その通り」

胸を張るお姉さん。

おお、大きい・・・じゃなくて。

「実はここの観覧車、結構有名なんだよ」

「観覧車、ですか？」

「そうそう。何でもここの観覧車と一緒に乗った男女は、必ず結ばれるんだって」

「・・・観覧車と一緒に乗るくらいですし、その段階でもう結構良い感じになってるは

「ずですよ？結ばれてもおかしくないと思いますけど」

「まあそうなんだけど。でも、素敵だよね」

微笑むお姉さん。

「特に夜に乗るのがオススメらしいよ。夜景が綺麗なんだってさ」

「へえ・・・それは見てみたいですね」

「フフツ、是非乗ってみてね。じゃあ、彼方ちゃんはそろそろ行くから。良い一日を過ごしてね」

手を振って去っていくお姉さん。

観覧車かあ・・・

「・・・誘ってみるかな」

小さく呟く俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《果南視点》

「おお・・・夜景が綺麗ですね」

「そ、そうだね・・・」

「果南さん？どうしたんですか？」

「ど、どうもしないよ!？」

「ならないですけど・・・」

首を傾げている天。

辺りがすっかり暗くなった頃、天と私は観覧車に乗っていた。

そろそろ帰ろうかという時に、天が『最後に観覧車に乗っていきませんか?』と誘ってくれたのだ。

ゴンドラの中で天と二人きりという状況に、私はもの凄く緊張していた。

(うう、鞠莉のせいだ・・・鞠莉があんなこと言うから・・・!)

『あの遊園地の観覧車に一緒に乗った男女は、必ず結ばれるらしいわよ。夜景も綺麗みたいだし、夜に二人で乗ったら良い雰囲気になるのは間違いないわ。だから果南、必ず天を観覧車に誘いなさい。そして頂上に着いたら、二人で熱い Kiss を・・・キヤーツ♡』

(キヤーツ♡じゃないでしょおおおおおっ?)  
頭を抱える私。

だから観覧車には乗らずに帰ろうと思ったのに、まさか天から誘われるなんて・・・  
まあ、天はそんなこと知らないだろうけどさあ・・・

「果南さん、ホントにどうしたんですか?」

「な、何でもないってば!?!それより体調は大丈夫なの!?!」

「強引に話題を変えましたね・・・もう大丈夫ですよ。コーラパワーで全快です」

「コーラパワー・・・?」

「ああ、こつちの話ですよ」

笑う天。

そういうえば私が飲み物を買って戻ったら、天がペットボトルのコーラを持ってたんだよね・・・

『それどうしたの?』って聞いたたら、『親切な人からの贈り物です』とか言ってたけど・・・

「そういうえば果南さん、知ってます?」



天はそう言うのと、バッグから小さな箱を取り出した。  
コレって……

「誕生日おめでとうございます、果南さん」

「……もしかして、誕生日プレゼント?」

「勿論です。ちゃんと用意してたんですから」

差し出された箱を受け取る。

この遊園地のフリーパスがプレゼントだと思つてたから、他にももらえるなんて考え  
てもみなかった……

「……開けても良い?」

「どうぞ」

恐る恐る箱を開ける。

そこに入っていたのは、エメラルドグリーンのリボンだった。

「色々悩んだんですけど、果南さんといえばポニーテールの印象が強かったので。  
色も果南さんカラーを選んでみました」

「嬉しい!ありがとう、天!」

天からのプレゼントに、つい笑みが零れてしまう。

私は一度ヘアゴムを外し、結つてあつた髪を下ろした。

「早速着けてみる！」

「あ、俺が着けましょうか？」

「えっ、出来るの!？」

驚く私をよそに、天は慣れた手つきで私の髪を梳いていく。

そしてリボンを手に取り、あつという間にポニーテールに結ってしまった。

「はい、出来ました」

「な、何でそんなに手慣れたの・・・？」

「俺の姉を誰だと思ってるんですか？」

「あっ・・・そういえばそうだね」

天のお姉さんの絢瀬絵里さんも、ポニーテールにしていることが多かったっけ・・・

「よく絵里姉にやらされてたんで、ポニーテールの結び方には慣れてるんです。後は

ことりちゃんとか、鞠莉のヘアスタイルぐらいなら出来ますよ」

「いや、『ぐらい』って・・・十分過ぎるでしょ」

あんな独特なヘアスタイル、私だってどうやってるか分かんないのに・・・

「まあそれはさておき・・・良く似合ってますよ」

「ホント？鏡が無いから、自分じゃ見れないんだけど・・・」

「じゃあ写真撮りましょうか。それなら見れますし」

「おっ、ナイスアイデア！」

ポケットからスマホを取り出す私。

「せっかくだし、天も一緒に写ろうよ」

「いや、果南さんを撮るのが目的でしたよね？」

「いいのっ！いいから一緒に写ろっ！」

私は天の隣に移動すると、正面にスマホを掲げた。

「ほら、もつとくつつかないと！」

「急に大胆になったな、この人・・・」

呆れている天。

ふと外の景色を見ると、ちょうど頂上に差し掛かるところだった。

よし・・・

「いくよー！はい、チーズ！」

そう言った瞬間、私は天に顔を近づけ・・・

頬にキスをした。

「っ!？」

ビックリしている天。

パシヤツという音がして、無事に写真を撮り終える。

「ちよ、果南さん!?!急に何を!？」

「アハハ、ビックリした?」

「心臓が止まるかと思いましたがよ!?!」

慌てふためいている天。

フフツ、本当に意識はしてくれてるみたいだね・・・

「いやあ、観覧車の頂上でキスってカップルの定番じゃん? ロマンチックだし、一度やってみたかったんだよね」

「普通マウス・トウー・マウスでは!?!」

「あ、じゃあそつちもやる?」

「やらないわっ! そういうのは本当に好きな人としなさいっ!」

「アハハ、だから頬で妥協したんじゃない」

笑う私。やれやれ・・・

(全く・・・そもそも好きでもない男の子が相手なら、たとえ頬にでもキスしたりしな

いんだけどなあ……)

天は本当に鈍感だ。

私が膝枕してあげても、それが私にとつての普通だと思つてくるくらいだし……

(まあでも……そんな天を、私は好きになつただけだよ)

思わず苦笑してしまう。

この男の子を振り向かせるのは、なかなか大変そうだな。

「全く……果南さんは自由なんだから」

苦笑している天。

「まあ、果南さんらしいですけどね。果南さんのそういうところ、俺は好きですよ」

「っ……」

顔がカアツと赤くなるのを感じる。

ホントにもう……

何でそういうことをサラツと言えちやうかなあ……

「ん? どうかしました?」

「な、何でもないっ!」

天の腕に抱きつき、顔を隠すように縮こまる。

「やれやれ……あつ、果南さん」

「な、何・・・?」

おずおずと顔を上げると、そこには・・・  
優しい笑みを浮かべた天の顔があつた。

「これからも、よろしくお願いしますね」

「っ・・・うんっ!」

額をコツンと合わせ、笑い合う私達。

その日以降、私のスマホの待ち受けは天とのツーショット写真になった。

そこには、驚いた表情をしている天と・・・

愛おしそうに天の頬にキスをする、私の姿が写っていたのだった。

助けられたことは覚えているものである。

《梨子視点》

「天くううううううううんっ！」

「秋穂さああああああんっ！」

茶髪の女性と抱き合う天くん。

雪穂さんに案内されて高坂家の居間にお邪魔していたところ、この女性がやって来たのだ。

この人も穂乃果さんと同じで、雪穂さんのお姉さんなのかしら・・・

「全く・・・お母さんも天くんもはしゃいじゃって・・・」

「お母さん!？」

「うん、ウチのお母さん」

雪穂さんの紹介に、驚きのあまり固まってしまふ私。

嘘でしょ!?!若すぎない!?!

「あら、花陽ちゃんに凜ちゃん!いらっしやい!」

「こんにちは」

「お邪魔してます」

挨拶する花陽さんと凛さん。

と、雪穂さんのお母さんが私を見た。

「あら、貴女どこかで・・・」

「ほらお母さん、A q o u r s の・・・」

「ああつ!?天くんがマネージャーやってるグループの子!?!」

雪穂さんの説明で、雪穂さんのお母さんが大声を上げる。

「は、初めまして!桜内梨子です!」

「や〜ん♡可愛い♡」

「お母さん、年齢を考えよう?気持ち悪いよ?」

「失礼ね!?!いくつになっても私は女よ!?!」

雪穂さんのお母さんはツツコミを入れると、改めて私の方を見た。

「初めまして、高坂秋穂です。ウチの息子がいつもお世話になってます」

「息子!?!」

「ええ、天くんは私の息子同然よ。何だったら、穂乃果か雪穂を嫁にもらってほしいと

思ってるわ」

「ええつ!?!」

「だつてさ、雪穂ちゃん。俺と結婚する？」

「私は構わないけど？」

「ダメええええええええええええつ!？」

思わず天くんを抱き寄せてしまう。

「ちょ、梨子!？」

「ウ、ウチの天くんは渡しませんからねっ!」

「フフツ、冗談よ・・・一割は」

「九割本気じゃないですか!？」

確かにこの人、目が本気だ・・・

油断ならないわ・・・!

「・・・ねえ、何で梨子はこんなに必死なの？」

「それは私達には言えないかな」

「何で気付かないにや・・・」

「ああ、なるほど・・・梨子ちゃんも大変だねえ」

花陽さんが苦笑し、凜さんが溜め息をつく。

雪穂さんも気付いたらしく、私に同情的な視線を送っていた。

うう、難しい戦いに身を投じてしまったわ・・・

「あ、そうそう・・・秋穂さん、いつも和菓子ありがとうございます」

「いえいえ。こちらこそ、いつも注文してくれてありがとうございます」

『穂むら』の和菓子は日本一だと思ってるんで。大将にも挨拶したいんですけど、今大丈夫ですかね？」

「ええ、大丈夫よ。一緒に行きましようか」

「お願いします・・・ちよつと行つてくるね」

「あ、うん」

雪穂さんのお母さんに連れられ、居間を出て行く天くん。

と、雪穂さんがずいと私に顔を近付けてきた。

「そつかあ、梨子ちゃんも天くんにも惚れちゃったかあ」

「うう、はい・・・」

顔を赤くして頷く私。

会ったばかりの雪穂さんにも見破られるなんて・・・

「ひよつとして、他のAqoursの皆も？」

「んー、どうでしょう・・・好意は抱いてると思いますけど・・・」

何しろ皆、一度は天くんにも助けられている身だ。天くんにも惚れていても不思議ではないと思う。

特に曜ちゃんと鞠莉さんは、先輩だけど天くんと呼び捨てにさせてるくらいだし……鞠莉さんなんて、スキンシップが激しいものね……

「天くんはおっぱい星人だから、おっぱいが大きい子に惹かれやすいにや。μsの中でも、一番大きい希ちゃんにももの凄く懐いてるし」

「……今すぐ鞠莉さんを消すべきかしら」

「落ちていて梨子ちゃん!?目が怖いよ!」

花陽さんに宥められる。

いけない、つい思考が危ない方向に……

「にやはは……梨子ちゃんは天くんにゾッコンだにや」

苦笑する凜さん。

「まあ、気持ちに分かるにや。凜も天くんにはずいぶん助けられたにや」

「凜さんですか?」

「うん、たくさん助けてもらったにや」

微笑みながら頷く凜さん。

「凜ね、ずっと自分にコンプレックスを抱いてたんだ。小学生の時、中性的な容姿を男の子にからかわれたりして……それ以来、『女の子らしい服は自分には似合わない』って抵抗を持つようになったにや」

凜さんはそう言うと、天井を見上げた。

「でも天くんは、そんな凜のコンプレックスを粉々に破壊してくれたにや。『誰が何と言おうと、凜ちゃん可愛い女の子だよ』って。『自分のことが信じられないなら、俺の言葉を信じてほしい』って……あんな真つ直ぐな目でそんなこと言われたら、もう天くんを信じるしかないにや」

「凜さん……」

「μ, sに入ってから、悩んだり苦しんだりすることもあつたけど……いつも天くんの言葉に励まされて、背中を押されて進むことが出来たにや。天くんがいなかったら、今の凜はいないにや」

微笑む凜さん。

「凜が一番尊敬する人は、間違いなく天くんにや。だから梨子ちゃんは、本当に良い人を好きになったと思うにや。自信持つて良いにや」

「……ありがとうございます」

何だか凄く勇気づけられた。

改めて、『天くんを好きになって良かった』と思えた。

「だからこそ梨子ちゃん、覚悟するにや……ライバルは多いにや」

「うっ……」

「昨日分かったと思うけど、μ sの中でことりちゃん・海未ちゃん・真姫ちゃんの三人は天くんガチ勢にや。かよちんと希ちゃんは『天くんに求められたら応える』ことを公言している、ある意味ガチ勢より厄介な存在にや」

「いや、厄介って．．．私はただ、天くんが大好きなだけなのになあ．．．」  
溜め息をつく花陽さん。

いや、厄介なことこの上ないんですけど．．．

「凜に関しては心配しなくても大丈夫にや。天くんのごことは大好きだけど、今の関係が一番良いと思ってるし．．．あと、穂乃果ちゃんも大丈夫にや」

「えっ、何で言い切れるんですか？」

「んー、何と言うか．．．あの二人の関係は、ちよつと特別なんだにや」  
笑う凜さん。

「穂乃果ちゃんは天くんのことを、本当に対等な存在として見てるっていうか．．．勿論凜達もそうなんだけど、穂乃果ちゃんはより一層そんな感じなんだにや」

「そうそう。穂乃果ちゃんって、誰よりも天くんを信頼してるっていうか．．．逆に天くんも、穂乃果ちゃんに絶大な信頼を寄せてるもんね」

「．．．さっきの会話を聞くかぎり、信頼なんて微塵も感じなかったんですけど」

「アハハ．．．まあ普段はね」

苦笑する雪穂さん。

「でも何だかんだで、いざという時に天くんが頼るのはお姉ちゃんなんじゃないかな。当てもそうだったもん」

「逆に穂乃果ちゃんも、何かあったら天くんを頼ってたにや」

「あの二人の信頼関係は、私達から見ても特別なものだったよね」

「信頼関係・・・」

そういえば天くんって、穂乃果さんに頼まれて、sのマネージャーをやることになったのよね・・・

当時小学五年生だった天くんに、どうして穂乃果さんはマネージャーを頼んだのかしら・・・？

「まあそんなわけで、あの二人の関係はちよつと特別なんだにや。凛達からすると、あの二人が男女の仲になることが想像出来ないというか・・・まあ梨子ちゃんも実際、穂乃果ちゃんに会ってみたら分かると思うにや」

笑いながらそう言う凛さん。

今の私には、その言葉の意味がよく分からないけど・・・

穂乃果さんに会ってみたい気持ちが強くなる私なのだった。

心配してくれる人がいるというのはありがたいことである。

「おつ、遂に発表の時間だね」

「ヒツヒツフー、ヒツヒツフー……」

「何でラマーズ法!?!」

梨子にツツコミを入れる花陽ちゃん。

いよいよラブライブ予備予選の結果発表の時間になり、俺はスマホでサイトをチェックしていた。

「落ち着いて、梨子ちゃん」

苦笑しながら、梨子の背中を擦る雪穂ちゃん。

「きつと大丈夫だから。仲間を信じてあげて」

「雪穂さん……はいっ!」

笑みを浮かべる梨子。

何かあの二人、距離が近くなったような……

俺が大将に挨拶に行ってる間に、何かあったのかな？

「あつ、発表されてるにや!」

俺の背後からスマホを覗きこんでいた凜ちゃんが、大きな声を上げる。

スマホの画面には、予備予選合格グループの名前が載っていた。

『イーブーエクスプレス』、『グリーンティーズ』、『ミーナーナ』・・・『Aqours』  
!」

「あつたにやあああああつ!」

「やったあああああつ!」

「良かったあああああつ!」

喜ぶ凜ちゃん・花陽ちゃん・雪穂ちゃん。

ああ、良かった・・・

「天くんんんんんんんんつ!」

「うわっ!?!」

勢いよく抱きついてくる梨子。

その目には涙が浮かんでいた。

「やったわっ!予備予選を突破したわよっ!」

「・・・うん、良かった」

梨子の頭を撫でる俺。

「千歌さん達に電話してあげて。今頃皆も喜んでるだろうから」  
「うんっ！」

梨子は嬉しそうに頷くと、スマホを取り出して千歌さんに電話をかけた。  
本当に良かったな・・・

「フフツ、ホツとした顔しちゃって」

さりげなく側に近寄ってくる花陽ちゃん。

「天くん、梨子ちゃんのこと大切に想ってるんだね」

「・・・急にどうしたの？」

「梨子ちゃん、予備予選に参加しないでピアノコンクールに出場したんでしょ？これでもしA q o u r s が予備予選に落ちてたら、梨子ちゃんはピアノコンクールに出場したことを後悔してしまっただかもしれない・・・だからA q o u r s が予備予選を突破して、尚更ホツとしてるんだよね？」

「・・・花陽ちゃんには分かっちゃうかあ」

苦笑する俺。

普段はおっとりしてるのに、こういう時は鋭いんだよなあ・・・

「・・・予備予選を優先させようとした梨子に、心変わりさせるキツカケを作っちゃったのは俺だから。これでもし梨子が傷つくようなことがあったら、俺は梨子に顔向け出

来ないなと思ってさ」

「全く……天くんは変わらないね」

花陽ちゃんは苦笑すると、俺の身体にもたれかかってきた。

「責任感が強いのは良いけど、一人で抱え込み過ぎ。最終的に決断したのは梨子ちゃんなんだから、天くんが責任を感じる必要なんて無いんだよ。梨子ちゃんだって、同じこと言うと思うよ？」

「いや、でも……」

「まあ私がそう言ったところで、天くんの考えが変わることは無いだろうけど……ホント、天くんって絵里ちゃんにそっくりだよね」

「……俺、あんなに石頭かなあ」

「フフツ、せめて『芯がある』って言ってあげなよ」

おかしそうに笑う花陽ちゃん。

「とにかく、A q o u r sは無事に予備予選を突破したんだから。おめでどう、良かったね」

「花陽ちゃん……うん、ありがとう」

「ちよつと待ってね、千歌ちゃん……ほら天くん、皆に何か言っただけで！天くんからの言葉を、皆待ってるよ！」

「はいはい」

テンションMAXの梨子に苦笑しつつ、梨子からスマホを受け取る俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「秋穂さん、お邪魔しました」

「いえいえ。またいつでも遊びにいらっしやい」

笑みを浮かべる秋穂さん。

俺達は『穂むら』を後にし、帰路に着こうとしていた。

「和菓子を食べたくなったら、遠慮なく言ってね。天くんにはサービスしちゃうから」

「秋穂さん・・・愛してます」

「ダ、ダメよ天くん・・・私にはあの人が・・・キャッ♡」

「ワー、才母サン可愛イナー」

「雪穂!?!何でカタコトなのよ!?!」

秋穂さんのツッコミ。

ああ、雪穂ちゃんが遠い目をしてる・・・

「むう・・・この母親キラー・・・」

梨子が不機嫌そうに何かを呟いていた。

何か梨子、感情の起伏が激しくなってる？

「誰のせいだと思ってるにや」

「何で凜ちゃんは俺の心が読めるの？」

呆れている凜ちゃんにツツコミを入れる。

っていうか、俺のせいなの？

「間違いなく天くんのせいだよ」

「花陽ちゃんまで読心術を!？」

何なのこの人達、メツチャ怖いんですけど・・・

「アハハ・・・梨子ちゃん、応援してるからね」

「・・・頑張ります」

苦笑する雪穂ちゃんの言葉に、肩を落とす梨子。

何かあつたのかな？

「雪穂ちゃん、亜里姉のことよろしくね」

「うん、任せて」

笑顔で頷く雪穂ちゃん。

「つていうか、亜里沙には会っていかないの？」

「本当は会うつもりだったんだけど・・・絵里姉が体調を崩してるんじや、亜里姉もバタバタしてるだろうから。次の機会にしようかなって」

「・・・そっか」

雪穂ちゃんはそう言うと、俺のことを抱き締めてきた。

「雪穂ちゃん・・・？」

「・・・今度はちゃんと連絡してよね。天くんがなくて、私も凄く寂しいんだから」

「雪穂ちゃん・・・」

「あと、早く絵里さんと仲直りすること。亜里沙も寂しがってるからさ」

「・・・うん。分かった」

頷く俺。

何か俺、色々な人に心配かけてるな・・・

「ゴメンね、雪穂ちゃん・・・」

「謝らないの」

雪穂ちゃんの額が、俺の額にコツンと当たる。

「言ったでしょ？私は天くんの姉だって。姉が弟を心配するのは当たり前なんだか

ら

「・・・そつか」

微笑む俺。

「ありがと・・・『雪姉』」

「はうっ!?!」

急に雪穂ちゃんが鼻血を噴き出し、そのまま倒れ込んだ。

「ちよ、雪穂ちゃん!?!大丈夫!?!」

「ゆ、ゆゆゆ・・・雪姉・・・フフツ・・・フフツ・・・!」

「雪穂ちゃん!?!しっかりして!?!」

「大丈夫よ、天くん」

秋穂さんが雪穂ちゃんの両脚をガツチリ掴んだ。

「後はこっちで処理しておくわ」

「処理って何ですか!?!」

「じゃあまたね。いつでも待ってるから」

「ちよ、秋穂さん!?!」

秋穂さんにはこやかに手を振ると、雪穂ちゃんを引きずって中に戻っていった。

「行っちゃった・・・雪穂ちゃん、大丈夫かな・・・?」

「大丈夫にや。ちよつと心にクリティカルヒットしただけにや」

「雪穂さんを一撃でK・O・するなんて・・・天くん、恐ろしい子・・・」

「私も天くんに『かよ姉』って呼ばれてみたいなあ・・・」

「何の話!?!」

ツツコミを入れる俺なのだった。

向き合わないといけない時は必ずやって来る。

「送ってくれてありがとね、天くん」

「どういたしまして」

梨子の言葉に、笑みを浮かべる俺。

花陽ちゃんや凜ちゃんとは別れた俺達は、梨子が泊まっているホテルへとやって来ていた。

「今日は楽しかったわ。花陽さんに凜さん、雪穂さんにも会えたし」

「なかなか個性的だったでしょ？」

「フフツ、ホントにね」

クスクス笑う梨子。

「でも皆、本当に天くんのことを大切に想ってるのね。羨ましいわ」

「・・・仲間だからね」

照れ笑いを浮かべる俺。

「ホント・・・良い仲間に恵まれたと思うよ」

穂乃果ちゃんにも会いたかったなあ・・・

まあ、次は会えるかな。

「じゃあ明日は、夕方頃に内浦に帰ろうか」

「私はそれで大丈夫だけど・・・本当に良いの？」

「何が？」

「その・・・お姉さんと会わなくて」

「ああ、そのことね」

苦笑する俺。

「どうやら心配をかけていたらしい。」

「本当は今回、会いに行こうかと思ってたんだけどね・・・体調を崩してるんじや、俺が行くのは良くないと思うから」

「でも、お姉さんは喜ぶんじや・・・」

「・・・喜んでくれたら良いんだけどね」

絵里姉の場合、人に弱つているところを見せたがらないからなあ・・・特に絶賛喧嘩中の俺が相手じや、なおさら意固地になるだろう。

体調が悪い今、気が休まらなくなるような状況にするのは良くない。

「・・・会いに行くのは次の機会にするよ。俺が行ったところで、今の絵里姉にしてあげられることもないから」

「天くん……」

心配そうに俺を見る梨子。

その時……

「天……?」

「え……?」

突然声をかけられ、振り向く俺。

そこに立っていたのは……

「あ、亜里姉!?!」

「やっぱり天だああああああああつ!」

「ぎふつ!?!」

「そ、天くんんんんんんんつ!?!」

亜里姉のとっしん!

急所に当たった!

「天っ!天っ!天っ!」

「ちよ、落ち着いて亜里姉!?!」

亜里姉のほっぺすりすり!

天はまひして技がでにくくなった!

「落ち着けつつつてんだろがあああああああつ！」

「ぐはっ!？」

天のインファイト!

急所に当たった!

亜里姉はたおれた!

「ふう・・・何とか倒したわ」

「何で倒してるのよ!? 『亜里姉』ってことは天くんのお姉さんよねえ!？」

「倒したっていいじゃないか。うざいんだもの」

「相田●つをの名言をパクらないのっ!」

「まあ冗談はさておき・・・亜里姉はこれぐらいじゃビクともしないから大丈夫」

「いえーい!」

「嘘でしょ!？」

早くも復活している亜里姉。

まあちゃんと加減もしたしな。

「天あああああああつ!」

「はいはい」

抱きついてくる亜里姉の頭を、苦笑しながら優しく撫でる。

やっぱりこのプラチナブロードの髪、いつ見ても綺麗だよなあ・・・

「もうっ！東京に来てるなら連絡してよ!? 会いたかったんだよ!」

「ゴメンゴメン。急に来的ることになったもんだから」

「全くもう・・・んっ?」

梨子に気付く亜里姉。

次の瞬間、顔がパアツと輝く。

「もしかして、A q o u r s の桜内梨子ちゃん!」

「は、はい・・・」

「ハラシヨオオオオオツ!」

「キャツ!」

梨子に勢いよく抱きつく亜里姉。

「こんな所で会えるなんて! サインもらって良い!」

「サ、サイン!? 私の!」

「勿論! 今ちよつと色紙を・・・」

「落ち着けや」

「ごふっ!」

天のからてチョップ!

急所に当たった!

亜里姉はたおれた!

「やれやれ、手のかかる姉だな」

「こ、これが絢瀬家の日常なの……?」

ドン引きしている梨子。

いや、別に日常ではないんだけど……

「ほら亜里姉、早く起きて」

「ふっかーっ!」

「……私には理解できない」

頭を抱えている梨子。

まあ梨子のことはさておき……

「ところで亜里姉、何でこんな所にいるの?」

「夕飯の買い出しに来たんだよ。まさか天に会えるとは思わなかったなあ」

「……まさかとは思うけど、亜里姉が夕飯を作ってるわけじゃないよね?」

「え? 最近が私が作ってるけど?」

「……絵里姉が体調を崩した原因は、亜里姉の料理だな」

「酷い!?!」



「・・・うん。横になってないとしんどいんだと思う」

暗い表情の亜里姉。

「仕事の方が忙しいみたいで、ここ最近は帰って来るのも遅かったんだよ。疲れが溜まって夏風邪をひいた挙句、それをこじらせちゃった感じかな」

「そっか・・・」

絵里姉のことだから、また必要以上に頑張ってしまったんだろう。

ホント、昔から変わらないな・・・

「後はまあ・・・ストレスじゃないかな」

「ストレス?」

「・・・職場の方で、あまり上手くいってないみたい。家に帰って来てお酒呑んで酔いが回ると、ポロツとそういう愚痴を零すことがあって。ずっと我慢してきた反動が、今来てるんじゃないかと思う」

「・・・もしそうなら、俺にも責任があるかな」

溜め息をつく俺。

「自分の意見を押し通して、家を出たのは俺だから・・・それも絵里姉にとって、ストレスになったんだろうね」

「天・・・」

心配そうな表情の亜里姉。

すると……

「……行つてあげて」

「え……?」

今まで黙つて話を聞いていた梨子が、俺を見てそう言った。

「お姉さんのことが心配なんですよ? だったら行つてあげて」

「……さつきも言ったけど、俺に出来ることなんてないから。行つても意味無いよ」

「いいから行きなさいッ!」

「っ!?!」

強い口調で叫ぶ梨子。

その剣幕に、俺はビックリしてしまった。

「り、梨子……?」

「天くんに今出来ることがあるとすれば、お姉さんの所へ行くことでしょうがッ! そんなこと、私に言われなくなつて天くんなら分かるでしょ!?!」

「いや、でも……」

「『でも』じゃないのッ!」

俺を睨みつける梨子。

「色々と理由をつけてはいるけど、本当はお姉さんと顔を合わせるのが怖いだけでしょ!?!だからお姉さんの所に行きたくないんでしょ!?!」

「っ……」

一番痛いところを突かれてしまった。

梨子には見抜かれてたか……

「いつまでも逃げてないで、いい加減向き合いなさいッ!今向き合わなかつたら、絶対後悔するわよ!?!」

梨子は怒っているわけじゃない。

俺の為を思って、あえて強い言葉で叱咤激励してくれている。

俺がどうすべきか迷っていると、亜里姉が手を差し出した。

「……はい、これ」

「これって……」

亜里姉が手に持っていたのは……絢瀬家の鍵だった。

「……これ、俺が家を出る時に置いていったやつだよね?」

「うん。いつか天に返そうと思って、ずっと持ってたんだ」

微笑む亜里姉。

「お姉ちゃんね、最近ずっと寝言で天の名前呼んでるの。身体が弱ってるから心も

弱って、つい心の声が漏れちゃうんだろうね。だから……行ってあげて、天。お姉ちゃん、天のこと待ってるよ」

その言葉を聞いて、俺の心は決まった。

亜里姉から渡された鍵を、強く握り締める俺なのだった。

喧嘩した相手と会うのは気まずいものである。

「・・・ここに来るのも、久しぶりだな」

呟く俺。

俺は今、絵里姉と亜里姉が住むマンションへとやって来ていた。

つい数ヶ月前までは、俺も住んでいた場所・・・

「・・・緊張するな」

この家を出てからというものの、絵里姉とは一度も会っていない。

それどころか電話で話したり、ラインでやりとりしたことも無い。

その絵里姉と、俺は今から顔を合わせようとしているのだ。

「・・・よし」

意を決し、亜里姉に渡された家の鍵を取り出す。

震える手で鍵穴に差し込み、ゆっくりとひねった。

ガチャツという音と共に鍵が開き、恐る恐るドアを開ける。

「ただ・・・失礼します」

『ただいま』と言うことを躊躇ってしまい、慌てて言い直しながら中に入る。

中は静まり返っており、本当に人がいるのか疑わしいレベルだった。

「寝てるのかな・・・？」

首を傾げつつ、ゆっくりと廊下を進む。

たった数ヶ月離れていただけなのに、家の中がとても懐かしく感じられた。

感傷に浸りつつ歩いてみると、洗面所の方で音がした。

ドキドキしつつ、洗面所のドアの前に立つ。このドアの向こうに、絵里姉がいるんだ・・・

俺は震える手でドアの取っ手に手をかけ、そして・・・勢いよくドアを開けた。

「絵里姉ッ！」

「えっ・・・？」

そこにいたのは、間違いなく絵里姉だった。

普段はポニーテールにしている金髪を下ろし、滴る水をタオルで拭いて・・・あっ・・・

「そ、天・・・？」

絵里姉の白い肌が、みるみるうちに赤く染まっていく。

大きな胸、くびれた腰、しなやかな太もも・・・全てが露わになっており、完全に生まれのままの姿だった。

「・・・失礼しました」

ゆつくりとドアを閉める。

さて・・・帰ろう。

「待たんかいいいいいいいいいいっ！」

ドアの隙間から伸びてきた絵里姉の手に、襟首を掴まれる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・で？」

「大変申し訳ございませんでした」

ソファに座る絵里姉に見下ろされ、土下座して謝る俺。

俺達は今、リビングへと移動してきていた。

「まさかウチの弟に、姉の裸を覗く趣味があったとは思わなかったわ」

「ご馳走様でした」

「まさかの感謝!?!そこは否定しなさいよ!?!」

「絵里姉、立派になったね」

「私の方が年上よねえ!? 誰目線なの!？」

「元氣そうで安心したわ。それじゃ」

「だから待ちなさいってば!？」

ソファから立ち上がろうとした絵里姉だったが、足元がふらついて倒れそうになっ  
た。

慌てて支える俺。

「・・・体調を崩してるって聞いたけど、ホントにしんどそうだね」

「・・・どうってことないわよ」

俺から離れ、再びソファに座る絵里姉。

そのまま俺を睨みつける。

「・・・何しに来たのよ。この家を出て行ったくせに」

「・・・何してるんだらうね、ホント」

溜め息をつく俺。

こうなることは分かってたのに・・・

「まあとりあえず・・・夕飯でも作ろっか」

「は・・・?」

「冷蔵庫は・・・うわあ、グチャグチャ・・・ちゃんと整理しなよ、亜里姉・・・」  
「ちよ、何してるのよ!？」

「何って・・・夕飯作ろうとしてるんだけど？」

「アンタ本当に何しに来たのよ!？」

絵里姉のツツコミ。やれやれ・・・

「ちゃんと栄養のあるもの食べなきゃ、いつまで経っても体調良くならないよ? とりあえず何か作るから、横になって休んでな」

「勝手なことしないで!今さら何を・・・」

「先に言っておくけど、俺は謝りに来たわけじゃないから」

準備を進めつつ、冷たく言い放つ俺。

「俺はあの時の自分の判断を、間違ってたとは思わない。内浦へ行つて良かったと思ってるし、浦の星に入って良かったと思ってる」

「つ・・・」

「でも絵里姉だって、自分が間違つてるとは思っていないでしょ? だったら話し合つたところで、何の意味も無い。この話は平行線のまま終わるよ」

「・・・じゃあ何でここに来たのよ」

尋ねてくる絵里姉。

やっぱり言葉にしなきゃ伝わらないか・・・

「・・・弟が姉の心配をするのは当然でしょ」

「っ・・・」

「喧嘩してたつて、体調を崩してゐるつて聞いたらそりゃ心配になるよ。弟なんだから当たり前じゃん」

「・・・だつたらッ!」

怒りで表情を歪める絵里姉。

「だつたらッ! どうしてこの家を出て行つたのよッ!? どうして私の言うことも聞かずにッ! 浦の星のテスト生の話を引き受けたりしたのよッ!」

俺に詰め寄り、胸ぐらを掴む絵里姉。

「どうして私をつ・・・置いていったのよおっ・・・!」

絵里姉の頬を涙が伝う。

足に力が入らなくなつたのか、またしても倒れそうになる絵里姉をそつと支える。

「・・・言つたでしょ。今のままじゃ平行線で終わるんだから、話し合つたつて何の意味も無いつて」

俺は絵里姉を抱きかかえると、ソファまで運んで横に寝かせた。

「・・・夕飯ができたら起こすから。それまでゆっくり寝てなよ」

絵里姉の身体に、近くに置いてあったタオルケットをかける。

絵里姉はそれを掴むと、頭まで勢いよく引つ張って顔を隠した。

「ひっぐ……ぐすっ……」

絵里姉のすすり泣く声が聞こえる。

俺は黙ってキッチンへ戻ると、黙々と夕飯作りを進めるのだった。

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「ハラシヨー！このお肉美味しいー！」

「ちよつと亜里沙!?それ私の肉でしょうが！」

「アハハ……」

苦笑する私。

私は今、亜里沙さんと一緒に焼肉を食べにやって来ていた。

そしてこの場には、もう一人の人物がいる。

「ほら、梨子も食べなさい。いい感じに焼けたわよ」

「ありがとうございます、にこさん」

お皿にお肉をのせてくれるにこさんに、お礼を言う私。

あの、sのメンバー、矢澤にこさんが私の目の前に座っていた。

「しつかしまあ、天がまた東京に帰って来てたとはね・・・何でアイツ連絡を寄越さな  
いのよ・・・」

「ホントですよ！言ってくればすぐにでも会いに行つたのに！」

頬を膨らませている亜里沙さん。

「にこさんだつて、あんなに天に会いたがつてましたもんね！」

「わ、私は別に・・・まあ、会いたかつたけど」

急に頬を赤らめ、恥ずかしそうに眩くにこさん。

むっ、もしやにこさん・・・

『天くんのが好きなのかな・・・？』とか思つてるでしょ」

「ええっ?!何で分かつたんですか!?!」

「思いつきり顔に出てるわよ」

呆れているにこさん。

「言つとくけど、私は天に恋愛感情を抱いたことは無いわよ。ことりや海未、真姫みた

いなガチ勢じゃないからね」

「じゃあ厄介勢ですか？」

「・・・なるほど、凜の入れ知恵ね」

溜め息をつくにこさん。

「花陽や希とも違うわよ。っていうか、あの二人もガチ勢みたいなもんでしょ。『求められれば応える』って、多少なりとも恋愛感情が無いと応えられるわけないじゃない」

「た、確かに・・・」

つまり、 $\mu$  sの半分以上が敵っていうこと・・・？

「・・・道は険しいんですね」

「まだ何も聞いてないけど、アンタが天に惚れたってことはよく分かったわ」

「ええっ!?! 梨子ちゃん、天のことが好きなの!?!」

「何でこの流れで気付かなかったのよ・・・」

再び溜め息をつくにこさん。

「じゃあにこさんにとつて、天くんってどんな存在なんですか？」

「んー、そうね・・・」

考え込むにこさんだったが、やがてクスッと笑みを零した。

「・・・光、かしら」

「光・・・？」

「そう、光。一人ぼっちだった時も、嫌になるくらい落ち込んでいた時も・・・どんな時でも、天は私を照らしてくれた。いつだって手を差し伸べてくれた。だから私は、心の底から天を信じていることが出来るわ」

微笑むにこさん。

「だからこそ、私は光を・・・天を守りたい。恋してるわけじゃないけど、あの子の為なら私は何でも出来るわよ」

「っ・・・」

息を呑む私。

そこまで天くんのことを・・・

「だからこそ、これだけは覚えておきなさい」

真顔で私を見るにこさん。

「アンタ達A q o u r sのメンバーが、もし天を傷付けるようなマネをしたら・・・私は絶対に許さないから」

「・・・肝に銘じます」

思わず冷や汗が出る。にこさんの目が、言葉の本気度を物語っていた。

鞠莉さん、殺されるんじゃないかしら・・・

「ちよつとにこさん、梨子ちゃんが怖がつてるじゃないですか。止めてあげて下さい」

「初対面はガツンとかますくらいがちよつと良いのよ。舐められちゃいけないの」

「あつ、お肉もくらいっ♪」

「亜里沙あああああああつ！」

亜里沙さんには思いつきり舐められていた。

凄いわね亜里沙さん……

「気にしないでね、梨子ちゃん。にこさんはこう見えて優しい人だから」

「は、はい……」

「ちよつと!? 『こう見えて』ってどういう意味よ!？」

「そのままの意味です。今のにこさん、メツチャ怖いですからね?」

「うぐつ……」

言葉に詰まるにこさん。

にこさんをやり込めるなんて、凄いわね亜里沙さん……

「つていうか亜里沙さん、今さらですけど帰らなくて良いんですか? そもそも夕飯の買

い出しをしに来たんじゃ……」

「夕飯は天に任せておけば大丈夫だよ。さつき天にも『私は焼肉食べに行くから、お姉

ちゃんの夕飯よろしく』ってラインしといた」

笑う亜里沙さん。

「久々にお姉ちゃんとお会うわけだし、しばらくは二人つきりにしてあげたいからね」

「天くん、大丈夫ですかね・・・？」

「梨子ちゃんが喝を入れてくれたんだもん。大丈夫だよ」

微笑む亜里沙さん。

「・・・ありがとね、梨子ちゃん。天の背中を押してくれて」

「い、いえ・・・私も強く言い過ぎちゃったというか・・・」

「あれくらいがちょうど良かったんだよ。そうじゃなきゃ、天もなかなか覚悟が決まらなかつただろうし」

「天や絵里のことをよく知ってる分、私達は強く言えなかつたからね」

苦笑するにこさん。

「あの二人に必要なのは、ちよつとしたキツカケなのよね。それさえあれば、後は自然と仲直り出来ると思うんだけど」

「そのキツカケを梨子ちゃんが作ってくれたし、何とかかりますよ。二人ともお互いを想い合ってるんですから」

笑いながらそう言う亜里沙さん。

「・・・亜里沙さんは信じてるんですね。天くんのこと、お姉さんのことも」

「勿論」

亜里沙さんはそう言い切ると、柔らかな笑みを浮かべるのだった。  
「私の自慢の弟と、自慢のお姉ちゃんだもん」

弱っている時は優しさが身に染みるものである。

《絵里視点》

「どうして私の言うことが聞けないのッ！」

怒鳴る私。

私と天はリビングで、天の進路について激しく口論していた。

「この家を出て一人暮らし!?!そんなの認められるわけないでしょうがッ！」

「絵里姉の許可なんか要らないんだよッ！」

怒鳴り返してくる天。

いつも温厚でマイペースな天にしては、とても珍しい光景だ。

「親からの許可が出るのに、姉から許可をもらう必要なんて無いだろッ！」

私達の両親は、仕事の都合でロシアに住んでいる。

両親は天の一人暮らしにOKを出したらしく、私は焦っていた。

「理事長に持ち掛けられたからって、静岡の高校に行かなくても良いじゃないッ！せ

めて家から通える範囲で……」

「もう決めたことなんだよッ！」

声を荒げる天。

「自分の道は自分で決めるツ！絵里姉みたいに自分の気持ちを押し殺して、使命感だけで生きていくなんて嫌なんだよッ！」

「っ……」

その一言は、私の心に深く突き刺さった。

色々と思ひ当たる節があつたのだ。

「……絵里姉は、*μ* sで何を学んだんだよ」

私を睨みつける天。

「絵里姉が生徒会長として、音ノ木坂の廃校を阻止しようとした時……何で理事長がそれを止めてたのか、あの時分かつたんじゃないのかよ」

それは私が、自分を犠牲にしようとしたから……

でも、それでも私は……！

「これじゃあ、五年前と何も変わらない。そんなこと、絵里姉だつて分かつて……」  
乾いた音がリビングに響いた。

気付けば私は、天の頬を引っ叩いていた。

「分かつたようなこと言わないでッ！天に私の何が分かるのよッ！」

違う、こんなことが言いたいんじゃない……！

私はただ・・・!

「・・・分かりたくないよ。今の絵里姉の気持ちなんて」  
頬を押さえた天は、そのまま私に背を向けて歩いていく。  
待つて天、行かないで・・・お願いだから、私を・・・  
私を置いていかないで・・・!

「嫌あああああつ!?!」

「うわっ!?!」

飛び起きる私。どうやら夢を見ていたようだ。

「ビックリしたあ・・・急にどうしたの?」

聞き慣れた声とする。

天が私を見て、心配そうな表情を浮かべて・・・

えっ、天?

「な、何で天がここに・・・?」

「・・・寝ぼけてるの?」

呆れている天を見て、段々と記憶が甦ってくる。

「そうだ、天が急に帰って来て……泣きながら怒った私を、ソファまで運んでくれて……私はそのまま、泣き疲れて寝てしまったのね……」

「ちょうど今起こそうと思っただよ。夕飯出来たけど、食べられる？」

「……少しだけなら」

「そう言つて立ち上がる。」

少し足元がふらついたところを、天が優しく支えてくれた。

「ほら、肩貸すから」

「平気だつてば」

「体調が悪い時まで強がらないの」

天は半ば強引に私に肩を貸すと、そのまま椅子に座らせてくれた。

テーブルの上には、蓋をされた鍋が置いてある。

「冷蔵庫の中に、ちゃんとした食材があまり無かつたんだよね……亜里姉にちゃんと

言つておかないと」

溜め息をつきつつ、鍋の蓋を開ける天。

そこには、美味しそうな雑炊が入っていた。

「栄養が取れて、なおかつ身体に優しい料理といったらこれかなつて」

苦笑しつつ、お皿に雑炊を取り分けてくれる天。

天の手料理を食べるのなんて、ずいぶん久しぶりね・・・  
前は毎日食べていたのに・・・

「はい、召し上がれ」

「・・・いただきます」

スプーンで雑炊をすくい、一口食べる。

雑炊の旨味が、口の中に広がると共に・・・何だかとても懐かしい味がした。

「どう？美味しい？」

「・・・天の味がする」

「いや、どんな味・・・絵里姉？」

気が付くと、私の目からは涙が流れていた。

久しぶりに天の手料理を食べて、懐かしくなってしまうからかもしれない。

「え、ちょ・・・何で泣いてるの？」

「な、泣いてないわよっ！」

慌てて目元を拭う。

それでも、涙が溢れて止まらなかつた。

「何で・・・何で涙が・・・」

「・・・もう良いから」

涙を拭い続ける私の手を、天がそつと握った。

「・・・泣きたい時くらい泣きなよ。ただでさえ絵里姉は、そういうの我慢しちゃうんだから」

「天・・・」

泣きながら天を見る私。

天は微笑むと、私を優しく抱き締めて・・・耳元で囁いた。

『全部受け止めてあげるから、今は思いつきり泣きなさい』

「っ・・・」

その言葉を聞き、私の頭の中であの時の光景がフラッシュバックした。

μ s の解散が決まったあの日・・・駅のホームで皆が泣き始める中、天は堪えるように唇を噛んでいた。

そんな天を私は抱き締めて、今の言葉を天に言ったのだ。

それを聞いた天は嗚咽を漏らし、私の胸で号泣した。

そんな天を抱き締めながら、私も涙を流し続けて・・・

「うっ・・・ううっ・・・うああああああああっ！」

もう堪えきれなかった。

私の涙腺は崩壊し、止めどなく涙が流れ出す。

そんな私を、天は優しく抱き締めてくれていた。

「天っ！天あつ！」

「はいはい」

頭を撫でてくれる天。

「俺はちやんとここにいるから、安心して」

「ううっ・・・ぐすっ・・・ひっぐ・・・」

泣きじゃくる私。

これじゃ、どっちが年上か分からないわね・・・

「全く・・・昔から甘えん坊だね、絵里姉は」

苦笑しながらも、優しく背中を擦ってくれる天なのだつた。

\*\*\*\*\*

「・・・そんなことがあつたんやね」

神妙な顔で俺の話聞く希ちゃん。

希ちゃんの家に戻って来た俺は、帰って来た希ちゃんに先程までのことを話していた。

「良かったん？エリチの側にいてあげなくて」

「今日はもう遅いし、亜里姉が側にいてくれてるから」

あの後絵里姉は、泣き疲れたのか再び眠ってしまった。

ベッドまで運んであげたところで亜里姉が帰って来た為、後のことは亜里姉に任せただの。

「明日内浦に帰る前に、また顔を出しに行くよ。一晩経てば、絵里姉も落ち着いてるだろうから」

「そうしてあげて。エリチもきつと喜ぶだろうから」

そんな話をしていると、俺のスマホに着信が入った。

相手は・・・千歌さん？

「ピツ・・・おかけになった電話番号は、現在使われておりません」

『えっ、天くんの番号変わってる・・・って騙されるかあああああっ！』

「チツ、いけると思ったのに」

『まさかの舌打ち!?!』

千歌さんのツツコミ。

夜なのに元気だなあ・・・

「どうしたんですか千歌さん？用件を五文字で簡潔に説明して下さい」

『無理だよ!?五文字で何を説明出来るの!?!』

「千歌、危篤」

『いや確かに五文字だけでも！勝手に人を危篤にしないでくれる!?!』

「まあ冗談はさておき・・・どうしたんですか？」

千歌さんに尋ねる俺。

何かあつたのかな・・・？

『実は私達、明後日東京に行こうと思つて』

「東京に？ずいぶん急ですね？」

『・・・見つけたいんだ』

いつになく真剣な声の千歌さん。

『μ sと私達のどこが違うのか、μ sがどうして音ノ木坂を救えたのか、何が凄

かつたのか・・・それをこの目で見て、皆で考えたいの』

「・・・なるほど」

どうやら千歌さんなりに、色々と考えて決断したらしい。

それなら・・・

「良いんじゃないですか。俺達は明日帰る予定でしたけど、一日延ばしますよ」  
『ゴメンね、急にこんなこと言い出して・・・』

「今に始まったことじゃないでしょ」

『うぐっ・・・』

言葉に詰まる千歌さん。

どうやら自覚はあるらしい。

「・・・リーダーが決めたことですから。付き合いますよ」

『天くん・・・』

「とりあえず、詳しく決まったらまた連絡下さい」

『うん！ありがとう！』

電話が切れる。

ホントに急なんだから・・・

「今の電話、もしかしてA q o u r sのリーダーから？」

「うん。明後日東京に来るんだってさ」

希ちゃんの質問に、肩をすくめて答える俺。

「全く・・・あの人には振り回されっぱなしだよ」

「・・・フフツ」

クスクス笑う希ちゃん。

どうしたんだろう？

「今の天くんの対応、まるで穂乃果ちゃんを相手にしてるみたいやったね」

「・・・何か似てるんだよね、あの二人って」

苦笑する俺。

「穂乃果ちゃんも千歌さんも、周りを巻き込んで行動するっていうか」

「ああ、あの感じか」

納得する希ちゃん。

「でも最終的に、巻き込まれた方も巻き付けられるっていうか・・・それだけ魅力がある人ってことやね」

「・・・そうなんだろうね」

人を惹き付けるカリスマ性・・・

それを持つている二人は、リーダーとしての資質があるんだろう。

「やれやれ・・・騒がしくなりそうだなあ」

苦笑しながら呟く俺なのだった。

## 【国木田花丸】いつか絶対に・・・

「AZALEAの新曲ですか？」

「うん、作詞をお願いできないかな？」

両手を合わせる果南さん。

生徒会室に呼び出された俺は、果南さんとダイヤさんからAZALEAの新曲について相談を受けていた。

ちなみにAZALEAというのは、果南さん・ダイヤさん・花丸の三人で結成されたグループ内ユニットである。

「今回は花丸さんの誕生日記念ということで、花丸さんのことをよく理解している天さんに作詞していただきたいのです」

説明してくれるダイヤさん。

三月にAZALEAでライブをやりたいという話は、前から聞いていたが・・・

どうやら三月四日の花丸の誕生日を記念して、サプライズで花丸をセンターにした新曲を作りたいようだ。

「それは構いませんけど・・・花丸のことだったら、俺よりもルビィや善子の方が詳しく

「いんじゃないですか?」

「勿論二人にも相談してみたんだけど、二人とも『天が適任だろう』ってさ」  
笑う果南さん。

「それに天が作詞してくれたら、花丸ちゃんは絶対に喜ぶと思うんだ」

「そうですかね? ルビィと善子がやった方が喜ぶと思いますけど」

「ハア・・・花丸さんの気持ちに、全く気付いていませんわね・・・」

溜め息をつくダイヤさん。

「どうしたんだろう?」

「とにかく、作詞は天さんにやっていたいただきますので」

「え、決定事項なんですか!」

「当然です。天さんの口からは、『はい』か『YES』しか聞きたくありません」

「まさかの拒否権無し!」

「へ・ん・じ・は?」

「は、はい・・・」

「よろしい♪」

「果南さん・・・ダイヤさんが怖いですう・・・」

「よしよし、こつちおいで。ハグしよ?」

震えながら果南さんに抱きつく。

そんな俺を優しく抱き締め、頭を撫でてくれる果南さん。

こうして俺は、AZALEAの新曲の作詞を担当することになったのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・どうしようかなあ」

バス停で帰りのバスを待ちながら、溜め息をつく俺。

AZALEAの新曲の作詞を引き受けてから、色々と考えていたのだが・・・  
なかなかイメージが湧いてこないのだ。

「よし、花丸でイメージしてみるか・・・本が好き？」

「確かに本は大好きぞら」

「いや、それだとインパクトが無いか・・・大食いとかな？」

「ひ、否定出来ないのが辛いですら・・・」

「んー、花丸の特徴・・・おっぱいが大きい？」

「エ、エツチずらっつ！」

「うおっ!？」

いきなりの大声に驚く俺。

いつの間にか、俺の隣に花丸が立っていた。

「ビックリしたあ・・・あれ、何で顔が真っ赤なの？」

「天くんのせいずらっつ!天くんが変なこと言うからっ!」

「え、何か言ったっけ？」

「まさかの無自覚!？」

よく分かんないけど、珍しく動揺してるなあ・・・

何でだろう？

「っていうか、図書委員の仕事は終わったの？」

「うん、さつき終わってたずら」

頷く花丸。

今日の放課後はA q o u r sの練習が休みだったので、花丸は図書委員の仕事をしていたのだ。

「ところで天くんは、何でこんな時間まで残ってたずら？」

「・・・ちよつと考え事してたんだよ。そしたら煮詰まっちゃってさ」

本当のことは言えないので、適当にはぐらかす。  
嘘は言つてない、うん。

「そういう時は、気分転換した方が良くいら。狭い所に閉じこもつて考えずに、思い切つて外に出掛けてみるとか」

アドバイスしてくれる花丸。

出掛けてみる、か・・・それは名案かもしれないな。

「よし・・・花丸、俺とデートしてくれる？」

「え・・・ええええええええええええつ!？」

顔を真っ赤にして叫ぶ花丸なのだった。

\*\*\*\*\*

「未来ずらあ・・・!」

目をキラキラさせながら、辺りを見回す花丸。

花丸の誕生日当日、俺達は東京へとやって来ていた。

「もう何度も東京に来てるのに、相変わらずその反応だよね」

「東京は何度来てもわくわくするすら！まるで未来都市すら！」

「いや、未来でも何でもないから。現在だから」

「この子は本当に、家でどんな生活を送っているのか・・・」

「でも花丸、本当に東京で良かったの？」

「尋ねる俺。」

「デートの場所に東京を選んだのは、他ならぬ花丸自身だった。」

「それも遊園地や水族館等が目当てなわけでもなく、『ただ東京を散策したい』らしい。」

「勿論すら」

「笑顔で頷く花丸。」

「マルは東京に来ることが出来て満足すら。それに・・・」

「それに？」

「・・・天くんと一緒なら、マルはどこでも楽しいすら」

「っ・・・」

「照れ臭そうに笑いながら言う花丸に、思わずドキッとしてしまう俺。」

「ああ、もう・・・反則でしょ・・・」

「反則？」

「・・・何でもない」

俺はそう言っていると、花丸の手を握った。

「ずらっ!?!そ、天くんっ!?!」

「・・・東京は人が多いし、逸れたりしたら困るから。ただでさえ花丸は、目を離すとすぐどつかに行つちやうし」

「人を子供みたいに言わないでほしいぞら!?!」

「それにほら・・・一応デートだし」

「っ・・・」

俺の一言に、花丸の顔がボンツと赤く染まる。

恥ずかしそうに俯きながらも、俺の手を握り返す花丸なのだった。

\*\*\*\*\*

「美味しいぞらあああああつ!」

幸せそうにハンバーガーを頬張る花丸。

東京を散策していた俺達は、少し遅めのお昼ご飯を食べていた。

「もぐもぐもぐ・・・あつ、もう無くなっちゃったぞら」

「食べるペース早過ぎない？もうちよつとゆっくり・・・」

「追加で買ってくるぞら！」

「人の話聞けや」

俺の心配もどこ吹く風で、いそいそとハンバーガーを追加で買いに行く花丸。

全く、胃袋ブラックホール娘め・・・

「・・・フッフ」

俺が呆れていると、隣の席に座っていた女の子がおかしそうにクスクス笑っていた。

花丸、笑われてるぞ・・・

「すみません、騒がしくて・・・」

「あつ!?私の方こそ、笑っちゃってゴメンなさい！」

慌てて謝る女の子。

ライトピンクのミディアムヘアをハーフアップにし、右サイドを三つ編みお団子でまとめるという独特なヘアスタイルをしている。

高校生くらいかな？

「夢中でハンバーガーを食べてるところが、何か可愛いなあって・・・」

「あの子は食えることが大好きなんですよ」  
苦笑する俺。

「それでいて全く太らないもんですから、友達からは『理不尽よっ!』って怒られるくらいです」

「フフツ、そうなんです」

笑う女の子。

「でも、二人ともずいぶん仲良しですよ。もしかしてカップルさんですか?」

「アハハ、残念ながら違います。まあ仲良しではあるんですけど」

「そうなんですか? 意外ですね」

驚いている女の子。

「私はてつきり、デートしてるカップルさんだと思ってました」

「あ、デート中ではあるんですけど」

「どういうことですか!?!」

女の子のツッコミ。

まあそういう反応になるよなあ・・・

「実はあの子、今日誕生日なんです。それでこうして東京に来たんですけど・・・俺もあの子のことを、もっと知りたいなと思いました」

それも花丸をデートに誘った理由の一つだった。

花丸と一緒に過ごすことで、もっと花丸のことを知る・・・

そうすれば、新曲の歌詞のイメージも浮かんでくるのではないかと思つたのだ。

「・・・大切に想ってるんですね、彼女のこと」

微笑む女の子。

「貴方は何だか、私の幼馴染に似てる気がします」

「幼馴染、ですか？」

「ええ。その子、私のことを凄く大切にしてくれて・・・私の為に、一生懸命になつてくれる子なんです」

「そうなんですか・・・素敵な人ですね」

「フフツ、ありがとうございます」

嬉しそうな女の子。

「だからこそ私は、あの子のことが大好きなんです。だから彼女もきつと・・・貴方のことが大好きだと思いますよ」

「・・・もしそうなら、嬉しいですね」

微笑む俺。すると・・・

「天く〜ん！」

花丸の声が聞こえた。

「どうやらハンバーガーを買ってきたらしい。」

「おかえり。ハンバーガーは買えた……って何それ!？」

トレーの上が、ハンバーガーでぎっしり覆われていた。

「一体何個買ったんだ……」

「代償として、福沢諭吉先生を一人失ったずら……でもマルの辞書に、『後悔』の文字は無いずら!」

「今すぐ辞書に書き込めバカ丸!」

「マルの名前は花丸ずら!」

「フフツ……本当に仲良しだなあ」

ギヤーギヤー騒ぐ俺達を、微笑ましそうに見つめる女の子なのだった。

\*\*\*\*\*

「あゝ、楽しかったずら〜!」

笑顔の花丸。

俺達は帰りの電車に乗り、内浦へと向かっていた。

「東京を散策出来たし、ハンバーガーはたくさん食べられたし・・・マルは満足すら」  
「全く、相変わらず食べ過ぎなんだよ・・・」

溜め息をつく俺。

アレを完食するとか、ホントどんな胃袋してるんだよ・・・

あの女の子も流石に引いてたし・・・

「・・・ありがとね、天くん」

微笑む花丸。

「天くんのおかげで、良い誕生日が過ぎさせたすら」

「・・・それなら良かった」

全く・・・この笑顔は本当に反則だよなあ・・・

「マル、どつちかと言うとインドア派だけど・・・こうやって電車に乗って遠出するの  
も、たまには良いすらね」

外の景色を眺める花丸。

「この世界にはマルが行ったことの無い、知らない場所がたくさんあるすら。想像する  
だけでわくわくするすら」

「・・・その気持ち、分かる気がするな」

行つたことの無い場所が、まだまだたくさんある・・・

どんな場所なのか想像するだけで、何だかとてもわくわくするものだ。

「わくわくつて言えば・・・スクールアイドルもそうずらね」

思い出したように呟く花丸。

「スクールアイドルになつて、今まで知らなかった景色を知つて・・・『今度はどんな景色に出会えるんだろう』つて考えると、凄くわくわくするずら。何だか似てるずら」

「なるほど・・・そう意味で言うスクールアイドルつて、見たことのない景色を探す旅人みたいな存在なのかもしれないね」

「おお、まさにそれが言いたかつたずらー！」

拍手する花丸。

俺は頭の中で、新曲のイメージが出来上がつていくのを感じた。

花丸が題材というわけではないけれど、それでもこれなら・・・

「・・・イケる気がする」

「ぞららー」

首を傾げる花丸。

そもそも、花丸を主体に考え過ぎていたのかもしれない。

AZALEAの新曲なわけだし、果南さんやダイヤさんのことも考えないと・・・  
花丸が知ったら、きつと同じことを言うんだろうな・・・

「やれやれ・・・花丸に助けられちゃったな」

「天くん？どうしたずら？」

「何でもないよ」

俺は笑って誤魔化すと、隣の席に座る花丸の肩を抱き寄せた。

「ずらっ!?!天くん!?!」

「・・・いつもありがとう、花丸」

顔を真っ赤にして慌てる花丸に、俺は感謝の言葉を告げた。

「浦の星に来て、花丸に出会えて・・・本当に良かった」

「天くん・・・」

「改めて、誕生日おめでとう。誕生日プレゼントは、もう少し待ってもらって良い？必ず良いものを作るから」

「・・・うん、待ってるずら」

俺の肩に頭をのせる花丸。

「フフツ・・・こうしていると、いつものバスの中みたいずら」

「花丸、いつも俺の肩を枕にして寝てるもんね」

「つい寝心地が良くて・・・天くんは魔性の男ずら」

「いや、凄い心外なんだけど・・・」

「一体何人の女の子をオトしてきたずら？」

「二人もオトしてないわっ！」

「全く・・・マルをオトした責任は、ちゃんととってほしいずら」

何かを呟く花丸。

どうしたんだろう？

「・・・ねえ、天くん」

「ん？」

「これからもずっと・・・マルの側にいてね？」

「・・・勿論。約束するよ」

笑い合う俺達。

俺達はそのまま手を握り合い、身を寄せ合って眠りにつくのだった。

\*\*\*\*\*

《花丸視点》

「天さあああああんっ!」

「うわっ!」

天くん勢いよく抱きつくダイヤさん。

今日行なわれたAZALEAのライブは、大盛況で幕を閉じた。

ステージ裏へと下がったマル達を待っていたのは、笑顔の天くんだった。

「ちよ、ダイヤさん!」

「最高ですわ! やっぱりライブは楽しいですわね!」

「アハハ・・・テンション上がりすぎて、ダイヤが壊れてるね・・・」

苦笑する果南ちゃん。むう・・・

「ダイヤさん、そろそろ離れるぞら!」

マルは天くんからダイヤさんを引き剥がすと、そのまま天くんを抱きついた。

「ダイヤさんに天くんは渡さないぞら!」

「は、花丸さん・・・ずいぶん積極的になりましたわね・・・」

驚いているダイヤさん。

天くんをオトす為には、積極的にならないといけないということを学んだのだ。

「果南さん、何で花丸はこんなにムキになってるんですか？」

「何で天は気付かないかなあ・・・」

溜め息をつく果南ちゃん。

うう、道は険しいぞら・・・

「ところで三人とも、新曲はどうだった？」

「メツチャ良かった！」

「素晴らしかったですわ！」

絶賛する二人。

天くんが作ってくれたAZALEAの新曲『Amazing Travel DN

A』は、ファンの皆にも大好評の一曲だった。

何より、マル達自身が気に入っていた。

「・・・素敵な曲をありがとう、天くん」

微笑むマル。

「最高の誕生日プレゼントすら」

「それなら良かった」

マルの頭を撫でてくれる天くん。

まさかマルの為に、新曲の歌詞を考えてくれていたなんて・・・

頼んでくれた果南ちゃんとダイヤさんにも、感謝しなくっちゃ。

「果南ちゃん、ダイヤさん・・・ギューッ！」

「わわっ!？」

「花丸さん!？」

天くんも巻き込んで、二人に抱きつくマル。

本当に、良い仲間に恵まれたずら。

「何か花丸、果南さんとダイヤさんの妹みたい」

苦笑する天くん。

「ダイヤさんが長女、果南さんが次女、花丸が三女つてところですかね」

「ちよ、何で私がダイヤの下なのさ!？」

「むしろ何でダイヤさんの上だと思っただんですか」

「ふふん、私が長女なのは当然のことですわ！」

「しっかりしているように見えて、実は抜けている・・・長女の鏡ですね」

「え、もしかして貶されてます!？」

「ハハハ、何ノコトヤラ」

「何でカタコトなんですの!？」

「アハハ、それなら納得かな」

「お黙りなさいゴリラ！」

「ダイヤまでゴリラ呼び!?!いい加減泣くよ!?!」

「はいはい、もうその辺で。そろそろ控え室に戻りましょう」

果南ちゃんとダイヤさんの背中を押して、先に進ませる天くん。

「花丸も行くよ」

「ずら」

マルは天くんの隣に並ぶと、そのまま腕に抱きついた。

「花丸? 胸が当たってるんだけど・・・」

「フフツ、当ててるはずら♪」

「・・・鞠莉みたいなこと言ってるし」

溜め息をつく天くん。

天くんはマルの気持ちに気付いてはいない。

でも、いつか絶対に振り向かせてみせる・・・

「天くん、これからもよろしくずら♪」

「っ・・・うん、よろしく」

何故か顔を赤くする天くんを見ながら、心の中で誓うマルなのだった。

## 【園田海未】特別な貴方へ・・・

「天、起きて下さい。朝ですよ」

穏やかな声が聞こえるのと同時に、優しく身体を揺すられる。

ゆつくりと目を開くと、そこには・・・

「おはようございます、天」

柔らかな微笑む海未ちゃんがいた。

エプロンを着けているところを見ると、朝ご飯を作ってくれていたのだろう。

俺はそんな海未ちゃんに微笑み返すと・・・

再び目を閉じた。

「ちよつと!?!何でまた寝ようとするんですか!?!」

「んー、眠い・・・あと五年寝かせて・・・」

「どれだけ寝る気なんですか!?!いいから起きなさいっ!」

力づくで布団を剥ぎ取られた。

三月の半ばとはいえ、朝は相変わらず冷える。

布団という防具を取られた俺は、寒さで身体を震わせた。

「全く・・・ウチの鬼嫁は今日も鬼畜だなあ・・・」

「誰が鬼嫁ですかっ！寝坊しそうな夫を助けようとする、優しい妻じゃないですかっ！」

「・・・ハッ」

「鼻で笑うの止めてもらえます!?」

人の布団を奪っておいて優しい妻だなんて・・・片腹痛いわ。

「仕方ない・・・鬼嫁がうるさいから起きるか・・・」

「何で上から目線なんですかっ！」

ギャーギャー騒がしい海未ちゃんを無視し、ベッドから起き上がる。

あっ・・・

「そうだ・・・海未ちゃん」

「ふんっ！鬼嫁に何か用ですか？」

完全にへそを曲げてしまった海未ちゃん。

やれやれ・・・

「誕生日おめでとう。大好きだよ」

「っ!?!」

ボンッと顔が赤くなる海未ちゃん。

相変わらず耐性が無いなあ・・・

「そ、そういうことをサラツと言わないで下さい！ 恥ずかしいですから！」

「愛してるよ、海未ちゃん」

「・・・うう」

耳まで真つ赤な海未ちゃん。

俺の嫁は、今日も最高に可愛いのだった。

\*\*\*\*\*

「忘れ物はありませんか？ ハンカチとティッシュは持ちましたか？」

「俺は子供か」

呆れる俺。

仕事に向かう俺を、海未ちゃんが玄関まで見送りに来てくれていた。

「心配しなくても、忘れ物なんかしないって」

「そう言ってお弁当を忘れていった日のことを、私はずっと覚えてますからね」

「その節は大変ご迷惑をおかけしました」

あの時は、海未ちゃんがわざわざ職場に来て届けてくれたっけなあ・・・

「あれからというものの、俺は職場で羨望の眼差しを向けられるようになったよ」

「え、どうしてですか？」

「『あんな綺麗な嫁さんがいて羨ましい』って。皆海未ちゃんに見惚れてたもん」

「そ、そんな・・・恥ずかしいです・・・」

困りながらも、頬を赤く染める海未ちゃん。

振り返ってみると、大学時代もそうだったなあ・・・

海未ちゃんが俺の通う大学まで迎えに来てくれた時、『あんな綺麗な彼女がいて羨ましい』ってよく言われたもんなあ・・・

「・・・ハハッ」

「天？どうしたんですか？」

「海未ちゃんはずっと、俺の自慢でいてくれるんだなあって・・・ありがとね」

「な、何ですか急に・・・」

照れたように俯く海未ちゃん。

「・・・今日は早く帰って来て下さいね。待ってますから」

「うん、なるべく早く帰るよ」

愛する嫁の誕生日だし、早く帰ってきてお祝いしてあげたいもんな・・・

「じゃあ行つてくるね、海未ちゃん」

「あつ・・・」

声を上げる海未ちゃん。

何故か恥ずかしそうにもじもじしている。

「その・・・『ちゃん』は・・・」

「ん？何？」

「な、何でもありません！行つてらっしゃい！」

慌てて笑顔で手を振る海未ちゃんに、何となく違和感を覚える俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《海未視点》

「ハア・・・」

「ちよつと、何で今日の主役がそんなにテンション低いのよ」

溜め息をつく私に、真姫が呆れています。

今日は私の誕生日ということ、真姫とことりがランチに誘ってくれたのです。

「いえ、少し悩みがありました・・・」

「悩み？もしかして、天くんと上手くいってないの？」

「そんなことありません！」

ことりの質問に、思わず大きな声を上げてしまう私。

「私達はラブラブです！毎日イチャイチャしてます！」

「そんな全力で惚気ないでくれる？胸焼けしそうなんだけど」

「アハハ・・・まあ新婚だもんね」

苦い顔をする真姫に、苦笑することり。

私と天が結婚したのは昨年のこと・・・天が二十二歳、私が二十八歳の時でした。

天の大学卒業と同時に籍を入れ、私達は晴れて夫婦となったのです。

もうすぐ結婚して一年が経ちますが、私達の仲の良さに変わりはありません。

ですが・・・

「・・・一つだけ、どうしても気になることがあるんです」

「・・・話してみなさいよ。力になれるかもしれないし」

私を気遣った真姫が、悩みを話すよう促します。

私は意を決して口を開きました。

「その、天が・・・」

「天が・・・？」

「私のことを・・・」

「海未ちゃんのことを・・・？」

「・・・呼び捨てにしてくれないんです」

「ことり、帰りましょうか」

「そうだね、真姫ちゃん」

「待って下さい!？」

席を立とうとする二人を、慌てて引き止める私。

「どうして急に帰ろうとするんですか!？」

「惚気るなって言ったでしょうが。こっちは胸焼けで食事どころじゃないのよ」

「惚気てなかったじゃないですか!？」

「今のが惚気じゃないって思ってるなら、海未ちゃんの頭はおかしいんじゃないかな」

「ことり!?! 辛辣過ぎません!?!」

あのことりまで毒を吐くなんて・・・!

「私は真剣に悩んでるんです! 二人とも真面目に聞いて下さい!」

「真面目について言われてもねえ……」  
呆れている真姫。

「大体、天は昔から私達のことをちゃん付けで呼んでるじゃない。何で今さらそんなことで悩んでるのよ？」

「私は天の妻になつたんですよ!?呼び捨てにしてくれても良いじゃないですか!」

「いや、私に言われても……」

「つていうかそもそも、何で付き合い始めた時に言わなかったの?」

「そ、それは……」

ことりの問いかけに、口ごもってしまふ私。

私と天がお付き合いを始めたのは、天が高校を卒業してすぐのことでした。

根気強く天へのアプローチを続けた私は、遂に天に振り向いてもらうことに成功。

真姫やことりを始めとした、手強いライバル達との勝負を制することが出来たので  
す。

当時は幸せ過ぎて、呼び名のことなんて気にしてもいませんでしたっけ……

「と、とにかくっ!どうしたら天に呼び捨てにしてもらえますでしょうか!?!」

「天に直接言う。以上」

「右に同じ」

「それが出来たら苦労してないんですよおおおおおおおおつ!!」

テーブルに突つ伏す私。

人の苦勞も知らないで・・・!!

「何で出来ないのよ?理由でもあるの?」

「今さら『呼び捨てにしてほしい』ってお願いするのが恥ずかしいんですよ!長い付き合いなんでそれからそれくらい察して下さい!」

「私は察してたけど、『くだらないなあ』って思ったからスルーしてたの」

「今日のことりはどうしてそんなに毒舌なんですか!」

「海末ちゃんがうじうじしてるからだよ」

溜め息をつくことり。

「海末ちゃん・・・何かを得ようとするなら、それと同等の代価が必要なんだよ?」

「ことり、貴女最近『鋼の●金術師』読みました?」

「君のような勘のいいガキは嫌いだよ」

「やっぱり読んでますよねえ!」

「とにかくくっ!天くんと呼び捨てにしてほしいなら、恥ずかしさなんて我慢しなきゃ。自分の気持ちは、ちゃんと言葉にした方が良いよ」

寂しそうに笑うことり。

「・・・私は結局、天くんに自分の気持ちを伝えられなかったから」  
「ことり・・・」

「天くと海未ちゃんが結ばれたことは、本当に嬉しく思ってるよ。でも・・・自分の気持ちを伝えられなかったことについては、今でも後悔してる。どんな結果になっても、ちゃんと伝えておけば良かったって」

「ことりはそう言うと、私を見つめてきました。

「だから海未ちゃんも、後悔だけはしないようにね。『後』で『悔』やんだって、もう遅いんだから」

「すみません、ことり・・・貴女の気持ちも考えずに・・・」

「謝らないの」

私の手を握ることり。

「罪悪感を感じてる暇があるなら、天くと結ばれた幸せを噛み締めてほしい・・・あの時もそう言ったでしょ?」

そうでした・・・

天と結ばれた日、謝る私にことりはそう言ってくれましたね・・・

「全く・・・ずいぶん話が大きさになっちゃったじゃない」

苦笑する真姫。

「海未もいつまでもうじうじしてないで、天にハッキリ言いなさい。あの子はちゃんと受け止めてくれるわよ」

「真姫・・・」

「つていうか、私も天に呼び捨てにされたいわね・・・お願いしてみようかしら？」

「あつ、じゃあ私もお願いしようかな。それぐらいなら許される気がする」

「私を差し置いて許すわけないでしょうがああああああああああつ!？」

全力でツッコミを入れる私なのでした。

\*\*\*\*\*

「そっか、真姫ちゃんもことりちゃんも元気にしてるんだね」

「ええ、相変わらずでした」

夕食後、ソファに並んで座って談笑する俺と海未ちゃん。

今日は早く帰って来られたので、夕食は俺が作った。

いつも海未ちゃんに任せちゃってるし、こういう時ぐらいは俺がやらないとな。

「絵里姉とは定期的に会うけど、他の皆とは結婚式以来会ってないもんなあ……会いたいなあ……」

「むう……」

俺がそう言うのと、海未ちゃんが不機嫌そうな顔で俺に抱き付いてくる。

「私だけでは不満ですか？」

「アララ、嫉妬しちゃって……このこの〜」

「頬をつつかないで下さい！」

怒った顔も可愛い俺の嫁。

「アハハ、海未ちゃんは可愛いなあ」

「……下さい」

「え？」

「……呼んで下さい」

「何て？」

「『海未』って呼んで下さいっ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ海未ちゃん。

きゅ、急にどうした……？

「えーっと……呼び捨てにしてほしい、ってこと？」

俺が問いかけると、恥ずかしそうにコクリと頷く海未ちゃん。

「い、今さらなお願いなのは分かっていますが・・・何と言うか、その・・・」  
言い淀む海未ちゃん。やがて意を決したように口を開く。

「恐らく私は・・・特別感が欲しいんです。『天の妻は私なんだ』と思える、そんな特別感が・・・欲張りだとは分かっています。それでも、私は・・・」

「・・・海未ちゃん」

海未ちゃんを抱き寄せる俺。

恥ずかしがり屋の海未ちゃんのことだから、きつと勇気を振り絞ってくれたんだろう。

それなら、ここから先は俺の番だ。

「・・・俺さ、凄く嬉しかったんだよね。初めて海未ちゃんのことを、『海未ちゃん』って呼べた時が」

昔を思い出す俺。

男性と話すことに慣れていなかった海未ちゃんは、最初は俺ともあまり話してはくれなかった。

俺も最初は『園田さん』と呼んでいたし、少しずつ話せるようになってからも『海未さん』と呼んでいた。

でも、ある時……

「海未ちゃん、自分から言ってくれたよね。『私のことも、皆と同じようにちゃん付けで呼んで下さい』って。そう言われた時、本当に嬉しかったんだ。海未ちゃんから認められたような気がして」

「天……」

「それからは、もつともつと距離が縮まって……今はこうして、海未ちゃんと夫婦になれた。だから俺にとって、海未ちゃんに対してのちゃん付けは……他の誰よりも特別なものだったんだよ」

海未ちゃんを抱き締める腕に力を込める。

「話したことなかったけど、キチンと伝えておけば良かったね……ゴメン」

「そ、天は悪くありませんっ！元はと言えば私が……」

「……『海未』」

「っ……」

初めて呼び捨てにしてみる。

俺にとって特別な、愛する人の名前を……

「『特別感が欲しい』かあ……初めて会った時は、まさかそんなことを言われる日が来るなんて思わなかったよ」

「あ、あの時のことは忘れて下さい！」

「無理。嫁との出会いを忘れるなんて有り得ない」

「うう・・・」

涙目の海未。

こういう恥ずかしがり屋なところも可愛いなあ・・・

「・・・いつもありがとう、海未」

感謝の言葉を伝える俺。

「これから・・・俺と一緒に歩んでくれる？」

「つ・・・勿論です。いつまでも天と共にあります」

涙を浮かべ微笑む海未。

やがてどちらからともなく顔が近付き・・・唇を重ねる俺達なのだった。

\*\*\*\*\*

《海未視点》

「・・・ん」

ふと目が覚めてしまいました。

ゆつくりと目を開けると、窓の外がほんの少し明るくなっています。

早朝でしょうか・・・

「すう・・・すう・・・」

隣を見ると、天が安らかに寝息を立てて眠っていました。

お互いの気持ちを再確認した私達は、良い雰囲気になつてそのまま・・・

「っ・・・」

一気に顔が熱くなります。

何も身に着けていない身体を隠すように、慌てて布団を被り直しました。

うう、恥ずかしいです・・・

「んう・・・海未・・・」

「っ!?!」

天の手が私の背中に回り、抱き寄せられてしまいました。

服を着ていない分、ダイレクトに天を感じてしまいます。

うう、顔から火が出そうなほど恥ずかしいです・・・

「すう・・・すう・・・」

どうやら天は眠ったままのようです。

私の名前を呼んだということは、私の夢を見てくれていたのでしょうか？  
もしそうなら・・・

「フフツ・・・愛されていますね、私」

そう思うと、どうしようもないくらい嬉しさがこみ上げてきます。

好きな人に想われるというのは、やはり幸せなことですね・・・

「・・・天」

天の背中に手を回す私。

昨日天は、私に『ちゃん付けで呼んで欲しい』と言われたことが嬉しかったと言ってくれましたが・・・それは私も良かったです。

周りの皆がちゃん付けで呼ばれる中、私はずっとさん付けで・・・それがどうしようもなくモヤモヤして。

だから初めて天が『海未ちゃん』って呼んでくれた時、本当に嬉しかったんです。

今思えば、あのモヤモヤは嫉妬で・・・あの時から私は、天のことが好きだったんでしようね・・・

「本当に・・・ありがとうございます」

私を選んでくれて、特別だと言ってくれて・・・

今、私は本当に幸せです。

「・・・愛しています、天」

天の胸に顔を埋め、天の温もりに包まれながら・・・再び眠りにつく私なのでした。

不器用な優しさは胸を打つものである。

翌日・・・

「到着つと」

梨子が借りているスタジオへとやって来た俺。

昨日は梨子のおかげで絵里姉と向き合えたので、そのお礼を言おうと思つてやつて来たのだ。

奈々さんに連絡したら、スタジオで私物の片付けをしてるつて言つてたけど・・・

「失礼しまゝす」

「えっ、天くん!？」

俺を見て驚く梨子。

両手に大量の本を抱えていた。

「おはよう、梨子」

「ど、どうして天くんがここに!？」

何故か慌てている梨子。

どうしたんだろう？

「いや、梨子に会いに来ただけど・・・片付け手伝おうか？」

「そ、それは大丈夫・・・きやあつ!？」

「梨子!？」

よろめいて倒れる梨子。

抱えていた本が床に散らばる。

「うう、いったあ・・・」

「大丈夫!？」

「な、何とか・・・」

痛そうにお尻を擦る梨子。

そんな梨子を心配して駆け寄った俺だったが、ふと床に散らばる本に目をやると・・・

『カベドン!〜色々なシチュエーションでのカベドン〜』

『カベクイ!〜これでオチない人はいない〜』

「・・・梨子ってこういうの好きなんだね」

「み、見ないでえええええつ!？」

素早く本を拾い集め、慌てて隠す梨子。



「この変態いいいいっ！」

顔を真っ赤にして攻撃してくる梨子。

危ないなあ・・・

「アハハ、相変わらず梨子は面白いね」

「私はちつとも面白くありませんっ！」

ぷいっつとそっぽを向く梨子。

アララ、怒っちゃった・・・

「ゴメンゴメン。ってか、まだ梨子に言いたいこと言えてなかったわ」

「言いたいこと・・・？」

「うん・・・ありがとうね、梨子」

改めてお礼を言う俺。

「梨子のおかげで、絵里姉と向き合えたよ。まだ仲直り出来たわけじゃないけど、久しぶりに会話も出来たし・・・ホント、ありがとう」

「お、お礼なんて止めてよ・・・」

少し恥ずかしそうに笑う梨子。

「でもまあ・・・天くんの力になれたなら、良かったわ。いつも助けてもらってる分、私も天くんの力になりたいって思ってるから」

笑顔でそう言ってくれる梨子に、不覚にもドキツとしてしまった。

こういう時の笑顔、ホント反則だわ・・・

「ん? どうしたの?」

「な、何でもないよ」

慌てて誤魔化す俺。

「それよりほら、着いたよ」

目の前のマンションを指差す俺。

それを見た梨子の表情が、緊張で強張る。

「ほ、本当に私もお邪魔していいの・・・?」

「え、今さら?」

「だって天くんの実家でしょ!?! しかも、sの絢瀬絵里さんがいるなんて・・・ああ、

何か急に心臓が痛くなってきた・・・」

「いや、そこまで緊張しなくても・・・」

呆れる俺。

大袈裟だなあ・・・

「ほら、行こう」

「ちよ、天くん!?!」

梨子の手を引つ張り、マンシヨンの中へと入っていく。

部屋の前でインターホンを押すと、すぐに亜里姉が出てきた。

「天ああああああああつー！」

「はいはい、おはよう亜里姉」

抱きついてくる亜里姉を受け止める。

朝からテンシヨン高いなあ・・・

「あつ、おはよう梨子ちゃん！昨日は焼肉に付き合ってくれてありがとね！」

「い、いえ！こちらこそ！」

「梨子から聞いたけど、にこちゃんも呼んだんだって？俺も会いたかったんだけど」

「にこさんも会いたがってたよ。帰る前に連絡してみたら？」

「・・・いつまで玄関先で話してるのよ」

呆れたような声が響く。

亜里姉の後ろに、絵里姉が立っていた。

「ちよ、お姉ちゃん!?寝てなきやダメだつて!？」

「大丈夫よ。昨日より少し体調も良くなつたし、問題無いわ」

絵里姉はそう言うと、俺に視線を向けた。

「・・・昨日はゴメンなさい。見苦しい姿を見せたわね」

「絵里姉の見苦しい姿なんて、昨日どころか何度も見てきてるわ」

「いつも見苦しいみたいと言いい方止めなさいよ!？」

絵里姉のツツコミ。

亜里姉がクスクス笑っている。

「とりあえず上がって。今お茶出すから」

「亜里姉（亜里沙）は絶対キッチンには立たせません」

「まさかのハモリ!？」

ショックを受ける亜里姉なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《梨子視点》

「改めまして、絢瀬絵里です。いつも天がお世話になってます」

「さ、桜内梨子ですっ！よろしくお願ひしますっ！」

慌てて自己紹介する私。

私と絵里さんは今、絢瀬家のリビングで向かい合って座っていた。

天くんは『私だってお茶くらい淹れられるもんっ！』とキッチンへ向かった亜里沙さんを心配して、様子を見に行っているところだ。

「そんなに緊張しないで。私まで緊張してきちゃうわ」

苦笑する絵里さん。

長くて綺麗な金色の髪、透き通るように白い肌、吸い込まれそうな碧い瞳、美しすぎる顔立ち……

今まで私が出会ってきた人達の中でも、一・二を争うほどの美女だ。

この人が伝説のスクールアイドルグループ・μ'sのメンバーの一人、絢瀬絵里さんなのね……

「あ、あの……身体の方は大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫よ。まだ本調子とは言えないけれど、だいぶ良くなったわ」  
微笑む絵里さん。

「昨日までは、起きてるのが辛くて寝込んでただけど……今朝起きたら予想以上に回復してたの。自分でもビックリしてるわ」

「それって、もしかして天くんの影響が……？」

「……そうかもしれないわね」

溜め息をつく絵里さん。

「久しぶりに天に会って、天の手料理を食べて、みつともないくらい泣いて・・・それで回復するなんて、本当に単純な姉よね」

「・・・少し分かるような気がします」

ポツリと呟く私。

「天くんって、人を元気にする力があるってというか・・・私も落ち込んだり悩んだりした時、何度も救われましたから」

「・・・フッフ」

私の言葉を聞き、絵里さんが笑みを零した。

「それを聞いて安心したわ。どうやらウチの弟は、A q o u r sでも愛されてるみたいね」

「あ、愛っ・・・!?!」

カアツと顔が熱くなつていくのを感じる。

「そ、そんな・・・私が天くんを『愛してる』だなんて・・・!」

「いえ、そんなことは一言も言っていないのだけれど」

「で、でも・・・確かに天くんのは好きっていうか・・・!」

「聞いてもいないのにぶっちゃけたわね」

「不束者ですがよろしくお願いします、お義姉さん！」

「落ち着きなさい」

「あたっ!？」

頭にチヨップをお見舞いされる。

うう、痛い・・・

「とりあえず、貴女が天に惚れてるってことは分かったわ」

「ええっ!?!何で分かったんですか!?!」

「今すぐ頭のネジを探して来なさい。多分その辺に落ちてるから」

呆れている絵里さん。

「全く、あの子はまた女の子をオトして・・・まあ、それだけ天が愛されてるってこと

なんだろうけど」

「それは間違いありません」

頷く私。

「私を含め、A q o u r sのメンバー全員が天くんを大切に想っています。天くんが

いなかったら、今の私達は・・・A q o u r sは無かったですよ」

「・・・μ， sと同じね」

絵里さんはそう言って笑うと、真剣な表情で私を見た。

「これからも天のことを、よろしくお願いします」

そう言つて頭を下げる絵里さんを見て、私は何だか複雑な気持ちになつてしまった。今の絵里さんの様子を見ていれば、絵里さんの天くんへの愛情が痛いほど伝わってくる。

それなのに……

「……どうして、天くんと喧嘩してしまつたんですか？」

呟く私。

「……絵里さんは、天くんの内浦行きに反対していたんですよね？それなのにどうして、鞠莉さんに天くんのことをお願いしたんですか？今だつて私に頭を下げてまで、天くんのことをお願いして……どうしてですか？」

「そう……鞠莉は全て話したのね……」

物憂げに窓の外を眺める絵里さん。

「一言で言うのなら……罪滅ぼし、かしら」

「罪滅ぼし……？」

「ええ。あの子を縛り付けてしまったことに対しての、ね」

溜め息をつく絵里さん。

「私達の両親はロシアに住んでいて、私は天や亜里沙と三人で暮らしてきたわ。一番

上の姉として、あの子達の面倒を見る……それが私の責任だと思ってた。まあ実際は、あの子達に助けられることの方が多かったけどね」

苦笑する絵里さん。

「私にとつて、天と亜里沙はかけがえのない存在なの。両親が側にいない今、私にとつての家族はあの子達だけ……心から愛しているわ。あの子達がいらない生活なんて、私にはどうしても考えられなかった」

「絵里さん……」

「だから天が『内浦へ行く』って言った時、私は必死で反対したわ。『高校生で一人暮らしなんて早い』とか、『将来を考えたら行くべきじゃない』とか色々言ったけれど……そんなのはただの建前だった」

絵里さんはそう言うのと、自嘲気味に笑った。

「本当はただ、私が天と離れたくなかっただけ……そんな自分勝手な理由で、私はあの子の進もうとした道を全面否定したの。我ながら最低の姉だと思うわ」

「そ、そんなことは……」

「いいえ、私が間違っていたのよ」

キツパリと言い切る絵里さん。

「後になって、激しい自己嫌悪に陥ったわ。どうして私は、天を応援してあげることが

出来なかつたんだろうって」

俯く絵里さんに、私は何も言葉をかけてあげられなかつた。

絵里さんは、ずっと後悔していたのね・・・

「その後すぐ、私達が喧嘩したことを聞きつけた南理事長から連絡があつてね。浦の星の新理事長が、『どうしても天に来てほしい』って言ってるっていう話を聞いたの。それで私は、どうしても話聞きたくて『新理事長に会わせてほしい』ってお願いしたのだけれど・・・まさか鞠莉のことだとは思わなかつたわ」

「ですよねえ・・・」

思わず苦笑してしまふ私。

何かもう慣れちゃつたけど、普通に考えて現役女子高生理事長つておかしいわよね。労働基準法とかどうなってるのかしら・・・

「実際に鞠莉と会つて、鞠莉の願いを知つた私は・・・チャンスだと思つた」

「チャンス・・・？」

「ええ。鞠莉にお願いすれば、天の進みたい道に進ませてあげることが出来る。それと同時に・・・μ、sからも解放してあげられる」

唇を噛む絵里さん。

「知つているのでしょうか？天がμ、sのマネージャーだつたことも、μ、sが解散し

てからスクールアイドルに関わらなくなったことも」

「え、ええ……」

「……それがずっと気がかりだったの。Msのマネージャーという立場に縛られて、スクールアイドルと関わることを避けてるんじゃないかって。だから鞠莉に、天をマネージャーにしてもらうようお願いしたの」

絵里さんは私を見ると、優しく微笑んだ。

「Aqoursのことは、私もチェックさせてもらってるわ。海未や真姫からも話は聞いてるし……天が楽しく過ごせているみたいで、私もホッとしているの」

「……本当に大事に想われてるんですね。天くんのこと」

「当然じゃない。家族だもの」

笑う絵里さん。

それならどうして……

「……どうして天くんと言わないんですか？本当は応援してるってことを」

「……今さら何て言えば良いのか、分からないのよ」

寂しそうに笑う絵里さん。

「あれだけ反対して、引つ叩いたりしたのに……『貴方を応援してる』なんて、そんな都合の良いこと言えないわよ。だから私は、陰ながら天を応援しようって決めたの」

「でも、それじゃ天くんに誤解されたままなんじゃ・・・」

「良いのよそれで」

自分に言い聞かせるように呟く絵里さん。

「たとえば天に嫌われても・・・あの子が元気でいてくれるなら、私はそれで良いの」  
そう言つて笑う絵里さんの姿に、心が痛くなる私なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・つていうのが、お姉ちゃんの本音みたいだよ?」

亜里姉に話を振られるも、何も返すことが出来ない俺。

俺達はリビングへと繋がる扉の前で、今の絵里姉と梨子の会話を全て聞いていた。

「・・・あのバカ姉」

声を振り絞つて呟く。

「ただ不器用なんだよ・・・」

「ホント、不器用にも程があるよね」

苦笑する亜里姉。

「何でもテキパキとスマートにこなす、仕事の出来るクールな女性。それが周りのお姉ちゃんに対する印象なんだろうけど……」

「……実は不器用でおちちよこちよいで、強がりのくせに甘えん坊なただの女の子。それが絵里姉の本当の姿なんだよね」

そんなこと、十分過ぎるほど分かってたはずなのに……

「バカだな、俺……絵里姉のこと言えないわ」

「フフツ、二人揃ってバカなんだから」

亜里姉はそう言って笑うと、俺のことを優しく抱き締めてくれた。

「お互いがお互いのことを想い合っているのに、素直になれなくてすれ違っちゃって。お姉ちゃんも、天に対する本当の気持ちを言わないし……天だってお姉ちゃんに、内浦行きを決めた本当の理由を話してないでしょ？」

「つ……亜里姉、まさか最初から……」

「うん、知ってたよ」

微笑む亜里姉。

「そうなんじゃないかとは思ってたけど、南理事長から話を聞いて確信したよ。そういうことなら、私に相談してほしかったな」

「・・・ゴメン」

「ダメ。謝っても許さない」

俺を抱き締める腕に、キュツと力を込める亜里姉。

「ちゃんとお姉ちゃんと仲直りしてきなさい。そしたら許してあげるから。ね？」

「・・・うん。ありがとう、亜里姉」

亜里姉の優しさが身に染みる俺なのだった。

姉は弟を想い、弟は姉を想う。

「全く・・・何であの子は自分だけ外食しに行っちゃうのかしら・・・」

「亜里姉は自由奔放だからねえ」

絵里姉の愚痴に苦笑する俺。

そろそろ夕飯の支度をしようというところで、亜里姉は梨子を連れて外食しに行ってしまったのだ。

本人曰く、雪穂ちゃんから誘われたとのことだったが・・・

「・・・嘘だろうな」

絵里姉に聞こえないよう、独り言を呟く。

俺と絵里姉を二人きりにする為に、わざわざ梨子を連れて外に出てくれたんだろう。

普段はべったり甘えてくるくせに、こういう時は気を利かせてくれるんだよなあ・・・

「ホント・・・我ながら良い姉をもったよ」

「天？何か言った？」

「何でもないよ」

笑って誤魔化しつつ、テーブルの上に料理を並べていく。

「はい、夕飯出来たよ」

「ハラシヨー！ボルシチじゃない！」

顔をパアツと輝かせる絵里姉。

絵里姉はボルシチが大好物なのである。

「久しぶりに作ったから、上手く出来てるか分かんないけど・・・」

「んー、美味しい！」

「食べるの早いなオイ」

呆れてしまう俺。

まあ、美味しいなら良いけどさ・・・

「・・・何だか懐かしいわね」

しみじみと呟く絵里姉。

「天が内浦へ行つて、まだ四ヶ月なのに・・・ずいぶん久しぶりな感じがするわ」

「絵里姉・・・」

「明日内浦に帰るんでしょう？わざわざお見舞いに来てくれてありがとう。もう大丈夫だから、私のことは心配しないで」

そう言つて笑う絵里姉の姿が、俺には強がっているように見えた。

やれやれ・・・

「・・・心配しないわけではないでしょ」  
ポツリと呟く俺。

「内浦に行つてからも、絵里姉のことを忘れた日なんて無かつたよ。あんな風に喧嘩した手前、会いに行けなかつたし連絡も出来なかつたけど・・・それでも、絵里姉のことが凄く心配だった」

「天・・・」

「ねえ、絵里姉・・・」

俺は絵里姉に問いかけた。

「今の仕事・・・楽しい?」

「っ・・・」

「・・・だよね」

息を呑む絵里姉に、苦笑する俺。

何も言葉を発さなくても、今の反応でよく分かる。

「そりゃ楽しいわけないよね・・・本当にやりたい仕事じゃないんだから」

「ど、どうしてそれを・・・」

「側において気付かないわけじゃないでしょ。俺と亜里姉を舐めないでほしいな」

絵里姉には、興味を持っていた仕事がいくつかあったのだ。

でも絵里姉はそれらを全て諦め、公務員の道を選んだ。

理由は簡単・・・俺と亜里姉がいたからだ。

「家から通えるから、俺と亜里姉を置いていかずに済む・・・収入も安定してるし、両親からの仕送りが無くても俺達を養える・・・だから公務員になったんでしょ？万が一にも家から通えない所に配属されたり、収入が不安定な状況になることを避ける為に」  
本当にやりたい仕事に就けなかった人など、この世の中にはたくさんいる。

しかし、絵里姉は『就けなかった』のではない。『就かなかった』のだ。

「他の企業からも内定を貰ってたのに、全部辞退したことも知ってる。全ては俺と亜里姉の為・・・これからも三人で暮らしていく為、でしょ？」

「・・・どうして？」

わなわなと震えている絵里姉。

「どうしてそれが分かってて、天はこの家を出て行ったのよ・・・私は必死で、今の三人での生活を守ろうとしたのに・・・どうして・・・」

「・・・だからこそ、だよ」

溜め息をつく俺。

「だからこそ、俺はこの家を出て行くべきだと思った・・・絵里姉の足枷になるのは、死んでもゴメンだから」

「っ……」

「絵里姉の気持ちに犠牲にした上での生活なんて、喜べるわけないでしょ。絵里姉が俺の幸せを願ってくれてるように……俺だって絵里姉の幸せを願ってるんだよ」

当然だ。絵里姉は大切な家族なのだから。

「五年前もそう……絵里姉は自分を犠牲にして、音ノ木坂を守ろうとしてた。あの時と言ったはずだよ。『そんな絵里姉は見たくない。もつと自分を大事にしてくれ』って」

「天……」

「だから俺は、この家を出て行こうと思った。俺がいなくなれば、絵里姉は自由になれると思ったから。浦の星のテスト生の話が来た時は、何かの運命かと思ったよ」

だからこそ俺は、南理事長の話に乗った。

南理事長の力になりたいという気持ちは嘘じゃないし、音ノ木坂のように廃校の危機に陥った学校の力になれたらという思いもあったが……

家を出て行くことを考えていた俺にとって、浦の星のテスト生の話は渡りに船だったのだ。

「私の為……だったの……?」

口元を手で押さえ、信じられないという表情を浮かべる絵里姉。

「それで……内浦行きを決めたっていうの……?」

「そうだよ」

頷く俺。

「それで絵里姉が、自分の好きなように生きられるっていうのなら・・・俺はそれで良いと思った。だから引き受けたんだよ」

「そんな・・・どうして私の為にそこまで・・・」

「そんなの決まってるでしょ」

絵里姉の綺麗な碧眼を、しっかりと見据える。

「絵里姉のことが・・・大好きだからだよ」

「っ・・・」

「絵里姉のことが大切だから・・・幸せになつてほしいから・・・だから・・・」  
俺の胸に、絵里姉が勢いよく飛び込んでくる。

力いっぱい俺を抱き締める絵里姉。

「バカ・・・バカバカバカッ！天のバカッ！」

叫ぶ絵里姉。目から止めどなく涙が溢れている。

「大バカよッ！不器用なのはどっちよッ!?人のこと言えないじゃないッ！」

「・・・ゴメン」

「ホントに・・・バカっ・・・！」

俺を抱き締め、号泣する絵里姉。

「でも……私もバカだったわ」

「絵里姉……」

「天や亜里沙に、そんな思いをさせてたなんて……全然気付かなかったどころか、天を否定するようなことまで言って……姉として最低ね、私」

俺の胸に顔を埋める絵里姉。

「ゴメンなさい……本当に……ゴメンなさい……！」

「っ……」

目から涙が零れ落ちる。

泣くつもりじゃなかったんだけどなあ……

「私、置いて行かれたくなくて……お父さんとお母さんだけじゃなくて、天まで私から離れていくのが怖くて……それである時、天を引っ叩いて……！」

「……もういいから」

絵里姉をギュつと抱き締める。

絵里姉の身体が、前よりも小さく感じられた。

「俺がちゃんと、絵里姉に自分の気持ち伝えてたら……『好きなように生きてほしい』って、ちゃんと言えてたら……そしたら……」

言葉が続かなかつた。

涙が止まらず、上手く言葉を話せない。

「ぐすつ……ホント、私達つて不器用よね」

泣きながら微笑む絵里姉。

「本当に似た者同士……似た者姉弟ね」

「……うん」

「でも……だからこそ、私は貴方が愛おしいわ」

お互いの額が触れ合う。

「足枷なわけじゃないじゃない……天と亜里沙を守る為なら、私は何でも出来る。それほ

ど大切な存在がいて……私は本当に幸せよ」

「つ……」

「大好きよ、天……心の底から愛してるわ」

我慢の限界だった。

俺は絵里姉の胸で、声を上げて号泣するのだった。

あの日……μsの解散が決まった時のように。

人は温もりを求めるものである。

「亜里姉、今日は希ちゃんの家に泊まるつてさ。梨子も一緒みたい」

「あの子は本当に自由ねえ……」

呆れている絵里姉。

絵里姉の強い希望で、俺は今晩この家に泊まることになっていた。

それを希ちゃんに伝える為に電話したところ、何と亜里姉と梨子が一緒だったのだ。

亜里姉は俺達の仲直りをとても喜んでくれたのだが、『今日は家に帰らない』と言いついた。

亜里姉曰く、『寂しい思いをさせた分、今日は天がお姉ちゃんを甘やかさない』とのことだった。

それを聞いた希ちゃんの提案で、二人は希ちゃんの家に泊まることになったのだつた。

「ところで絵里姉……そろそろ離れてくれない？」

「嫌よ」

俺の腕にギュっとしがみつくと絵里姉。

さつきからずつとこんな感じなんだよなあ……

「いや、そろそろお風呂に入りたんだけど……」

「じゃあ一緒に入るわ」

「それは止めて下さい。俺の理性が飛びます」

今だって絵里姉の柔らかい胸が腕に押し付けられて、ちよつと危ない感じなのに……

「あら、私は構わないわよ？」

「いや、俺が構うんだけど。俺達姉弟んだけど」

「姉弟の前に、女と男じゃない」

「ちよ、ホント止めて。そうやって俺の理性を崩そうとしないで」

「フフツ、相変わらず天は可愛いわね」

悪戯っぽく笑う絵里姉。

くっ、人を弄びやがって……

「でも相変わらず、理性が強いわねえ……天に惚れている女の子達は、攻略に難航し

そうだわ」

「いや、そんな奇特な人達いないでしょ。俺モテないし」

「……無自覚って恐ろしいわね」

溜め息をつく絵里姉。

何かもの凄く心外なことを言われている気がする。

「それより絵里姉、本当に体調は大丈夫なの？」

「ええ、だいぶ良くなつたわ。これなら仕事にも復帰出来そうよ」

そう言つて笑う絵里姉だったが、どこか乗り気では無さそうだった。

仕事、あんまり上手くないってないみたいだしな・・・

「ねえ、絵里姉・・・仕事、辞めたら？」

「っ・・・」

「今の絵里姉には休息が必要だよ。ここで一度立ち止まって、リフレッシュした方が  
良いと思うな」

「そ、そんなこと言つたつて・・・仕事を辞めたらお金が・・・」

「生活費は毎月送られてきてるでしょ？今は親に甘えても良いんじゃない？」

俯く絵里姉。

俺はそつと絵里姉の手を握つた。

「これから絵里姉がどうしていききたいのか、よく考えた方が良いと思う。絵里姉の人  
生なんだもん。一度立ち止まって、ゆっくりして・・・それから今後を考えたつて、バ  
チは当たらないんじゃないかな。今まで一生懸命頑張つてきたんだから」

「天・・・」

「内浦にも遊びに来てよ。A q o u r s の皆も、絵里姉に会えたら喜ぶだろうし……特にダイヤさんなんて、感激のあまり気絶するんじゃないかな」

「……フフツ、何よそれ」

クスクス笑う絵里姉。

「……少し考えてみるわ。ありがとう、天」

俺に寄りかかってくる絵里姉。

「ホント、貴方には助けられてばかりね……五年前もそうだったけど」

「絵里姉は石頭だから。誰かが言ってあげないとね」

「天だって石頭でしょうが！同類よ同類！」

「絵里姉と一緒にしないでくれる!?!俺は絵里姉ほど石頭じゃないから！」

「十分すぎるほど石頭でしょうが！」

ギヤーギヤー言い合う俺と絵里姉だったが、やがてお互い顔を見合わせ吹き出した。

「フフツ……こんなやりとりも久しぶりね」

「そうだねえ……」

笑っている絵里姉が無性に愛おしくなり、思わずギュつと抱き締めてしまう。

「あら、相変わらず天は甘えん坊ね」

「……姉に甘えるのは、弟の特権だから」

「フフツ・・・じゃあそんな弟を甘やかすのは、姉の特権ね」  
抱き締め返してくれる絵里姉。

変わらない温もりに、心が安らぐ俺なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《梨子視点》

「やれやれ、ようやく仲直りしましたね」

「フフツ、一安心やね」

そう言つて笑い合う亜里沙さんと、紫髪の女性・・・東條希さん。

亜里沙さんに連れられて外へ出た私は、仕事帰りの希さんと遭遇。

そのまま希さんの家へと連れて行かれ、夕飯をご馳走になつていた。

そこへ天くんから希さんへ電話があり、絵里さんと仲直りしたことが分かつたのだ。

「亜里沙さん、本当に家に帰らなくて良いんですか？」

「うん。せっかく仲直りしたんだし、積もる話も色々あると思うから。それに・・・」

「それに?」

「今頃お姉ちゃん、天にベツタリだと思っただよね。二人つきりにしておいた方が、気兼ねなく甘えられるかなって」

「それは間違いないやろうね」

頷く希さん。

「エリチは超がつくほどのブラコンやから。喧嘩してた四ヶ月分、たつぷり天くんに甘えてるんじゃない?」

「そ、そうなんですか? 私の中の絵里さんのイメージって、もっとこうクールビューティーみたいな感じなんですけど・・・」

「それは絶対に無い」

「断言!? そしてまさかのハモリ!?」

「お姉ちゃんって仕事は出来るけど、プライベートではポンコツなところあるから。あとメチャクチャ甘えん坊だから」

「せやね。あと暗いところが苦手で、涙目で抱きついてきたりとか」

「そうそう。見た目は大人、頭脳は子供みたいな?」

「コ●ンくんの逆バージョン!?」

絵里さん、暴露されてますよ!

妹さんとお仲間にメツチャ暴露されてますよ！

「まあ、そこがエリチの可愛いところなんやけどね」

微笑む希さん。

「今頃エリチ、天くんにつたりくつついてるだろうし……一緒にお風呂とか入ってるかもしれないね」

「いや、流石にそれは無いんじゃないや……」

「え、ウチは昨日一緒に入ったよ？」

「ええっ!？」

「お互い身体を隅々まで洗いっこして……キヤツ♡」

「なっ、ななな何ですって!？」

「フフツ、冗談♪」

面白そうに笑う希さん。

「梨子ちゃん、分かりやすく動揺してたね……よっぽど天くんが好きなんやね」

「ちよ、えっ!?!何で分かるんですか!?!」

「凜ちゃん・花陽ちゃん・にこつちから報告は受けてるよ」

「まさかの情報筒抜け!?!」

あ、あの人達……!

「やれやれ、天くんも罪な男やねえ……」

「ええ、我が弟ながら恐ろしいですよ……」

溜め息をつく希さんと亜里沙さん。

「……まあ、惚れちやう気持ちは分かるかな。多分梨子ちゃんも、天くんに救われたクチやろ?」

「え、ええ……まあ色々……」

「やっぱり」

苦笑する希さん。

「天くんってホント、色んな人に手を差し伸べてくれるから……あれは本当にズルいなって、ウチも思うよ」

「ひよつとして、希さんも天くん……?」

「まあね」

天井を見上げる希さん。

「最初はエリチの弟ってことで、ウチにとつても弟みたいな存在だったんだけど……μsとして一緒に活動するようになって、たくさん支えてもらって……いつの間にかウチの中で、弟っていう感覚じゃなくなってる。そんな時に手を差し伸べられたら……分かるやろ?」

頬を赤く染め、照れ臭そうに笑う希さん。  
えっ……

「もしかして希さん、天くんのことが……!?!」

「フフツ、どうやろうね?」

笑ってはぐらかす希さん。

「梨子ちゃんが本当に天くんに惚れてるなら、積極的に天くんの心を掴みに行った方が良いと思うよ? そうじゃないと、隙を突いて横から搔つ攫つていこうとする子がいるかもしれないし……ウチみたいにな、ね♪」

「くっ、油断大敵ってことですか……!」

「希さん、梨子ちゃんを煽らないであげて下さいよ」

呆れている亜里沙さん。

「あと、簡単に天を渡すつもりはありませんからね」

「まさかの亜里沙さんもブラコン!?!」

「あれ? 言ってなかったっけ?」

「そして否定もしない!?!」

「だってブラコンだもん」

「清々しいほど断言しましたね!?!」

お、恐るべし絢瀬姉妹・・・!

絵里さんも亜里沙さんも敵だっていうの・・・!?

「まあ、天が選んだ相手なら文句は無いけどね」

苦笑する亜里沙さん。

「あの子の人を見る目は確かだから。あの天が選んだ人ってことは、それほどの魅力がある人ってことだろうし」

「じゃあもしウチが選ばれたら、亜里沙ちゃんのこと『お義姉さん』って呼ぶね♪」

「違和感しか無いので却下です」

「酷い!?!」

「でも天っておっぱい星人だから、希さんを選ぶ可能性はありそうですね・・・」

「おっぱいが理由で選ばれたくないんやけど!?!」

「・・・希さんはここで消しておくべきかしら」

「何か梨子ちゃんが物騒なこと言ってる!?!」

「私だってB80あるのよおおおおおとおおとおお!」

「サラッと自分のサイズ暴露した!?!落ち着いて梨子ちゃん!?!」

希さんに宥められる私なのだった。

## 仲間とのふれあいは楽しい。

翌日・・・

「天あああああつ！」

勢いよく抱きついてくる鞠莉。

内浦からやって来たAqoursの皆を、俺は東京駅まで出迎えにやって来ていた。

「久しぶり！会いたかったわ！」

「いや、久しぶりって・・・たかだか数日ぶりでしょ」

「こっちの世界ではそうだけど、現実ではもう三ヶ月近く経ってるじゃない！」

「メタ発言止めて」

「フフツ、天々♪」

甘えてくる鞠莉。

俺は苦笑すると、鞠莉を優しく抱き締めて頭を撫でた。

「そ、天・・・？」

「ん？どうしたの？」

「いや、凄く嬉しいんだけど・・・どうしたの？ずいぶんサービスが良いわね？」

「ああ、何ていうか・・・金髪の色白女性を、凄く甘やかしたい気分なんだよね」

「どんな気分!? しかも対象がピンポイントすぎない!？」

「ほれほれ♪甘やかさせろ♪」

「あ〜ん♡ダメになっちゃう♡」

「公衆の面前で何をイチヤイチャしてますの!？」

怒るダイヤさん。

「男女が人前でそんなにくつつくなんて! 破廉恥ですわよ!？」

「ダイヤさんだって海開きの時、俺に思いつきり抱きついてきたじゃないですか」

「びぎやあああああつ!？」

「お姉ちゃん!? 落ち着いて!？」

顔を真っ赤にして絶叫するダイヤさんを、ルビイが必死に宥めている。

大変だなあ・・・

「誰のせいだと思ってるぞら」

「おお花丸、先月は誕生日おめでとう」

「天くんもそういう発言止めるぞら! 今この世界は夏ぞら!」

「いや、アンタも『この世界』とか言うんじゃないわよ」

呆れている善子。

「つていうか天、アンタ連絡くらい寄越しなさいよ。こっちはアンタの動向が気になつて仕方がなかつたんだから」

「え、善子つて俺のストーカーだったの?」

「違うわ!」

「皆心配してたんだよ」

苦笑する果南さん。

「梨子ちゃんから、天が喧嘩中のお姉さんに会いに行つたつていう連絡があつてさ。まさかそんなことになると思わなかつたから、皆ビックリしちゃつて。天からは一度もそんな連絡無かつたからね」

「・・・何で梨子は話しちやうかなあ」

皆には後で報告しようと思つてたのに・・・

「えーつと、心配かけてすみません。実は絵里姉とは昨日・・・」

「それも梨子ちゃんから聞いたよ。仲直りしたんでしょ?」

「アイツ引つ叩く」

「止めたげて!?!」

「つていうか天くん、梨子ちゃんのこと呼び捨てにした?」

首を傾げる曜。

ああ、そういえば知らないんだっけ……

「実は梨子から『呼び捨てにしてほしい』って言われて、そうなったんだよね」  
「むう……最初はマリーだけだったのに……」

「ほれほれ〜♪」

「あ〜ん♡」

頬を膨らませる鞠莉だったが、甘やかすとすぐに機嫌が直った。

あれ、何かチヨロい女になってない？

「ところで天くん、梨子ちゃんは？」

キヨロキヨロと辺りを見渡す千歌さん。

梨子とも連絡を取り、この場所で待ち合わせていたのだが……

「さつき連絡があつて、少し遅れるみたいです。片付けが大変なんですって」

「片付け？」

首を傾げる千歌さん。

すると……

「キャアツ!?!」

近くで悲鳴が上がった。

あれ、今の声って……

「梨子？」

振り向くと、梨子がコインロッカーの側で散らばった本を拾っていた。

「あつ、梨子ちゃん！」

「ち、千歌ちゃん!?!」

キョドる梨子。

もしかしてあの本って・・・

「大丈夫？ それ何の本？」

「キヤアアアアアツ!?!」

「ちよ、梨子ちゃん!?!」

覗きこもうとする千歌さんの目を、慌てて両手で隠す梨子。

梨子の肩越しに覗いてみると・・・案の定『壁ドン』『壁クイ』系だった。

「あー、やつぱり・・・」

「ちよ、天くん!?! これはその・・・」

「大丈夫ですよ桜内さん、何も見てませんから」

「何で急に他人行儀!?!」

「趣味は人それぞれですよね、ええ。僕はちゃんと理解してますよ」

「止めて!?! 何か泣きそうだから止めて!?!」

既に涙目の梨子。

仕方が無いので、本を手早くまとめてコインロッカーに押し込む。

「これで良し・・・梨子、そろそろ千歌さんを離してあげて」

「あっ!?!ゴメン千歌ちゃん!?!」

「もう、梨子ちゃん酷いよ〜!」

目にパンダみたいな痕が残っている千歌さん。

何この人、面白いんだけど。

「それにしても・・・やっとな員揃ったね」

俺達を見回し、笑みを浮かべる千歌さん。

「梨子ちゃん・・・お帰り」

「っ・・・ただいま、千歌ちゃん」

抱き合う二人。

やっぱり、九人揃ってこそそのAqoursだよな・・・

「九人じゃないわ」

俺の心を読んだかのように、鞠莉が微笑む。

「Aqoursは十人よ・・・まあ、私達が勝手にそう思ってるだけなだけどね」

「鞠莉・・・」

「そんな顔しないの」

俺の頬に手を添える鞠莉。

「天は自分のことを、A q o u r s の十人目だとは思っていない……それはちゃんと分かってる。それを分かってて、私達は貴方にマネージャーをお願いしたんだから」

「最初は『お願い』ではなく『脅し』でしたけどね」

「ちよ、ダイヤ!? それ蒸し返しちゃう!?!」

「事実ではありませんか」

鞠莉の反応が面白かったのか、クスクス笑っているダイヤさん。

「天さん、気にする必要はありませんわよ。鞠莉さんの仰る通り、私達が勝手にそう思っているだけ……天さんが考えを改める必要はありませんわ」

「ダイヤさん……」

「私達の側において、支えてくれてるんだもん。それだけで十分すぎるくらいだよ」  
抱きついてくる果南さん。

「そんなわけだから天、私とハグしよ?」

「……ギュー」

「わわっ!?! 今日はずいぶん積極的だね?」

果南さんを抱き締める。

今度は甘やかすんじゃないやなくて、甘えたくなくなってしまった・・・

「ちよ、ズルいわよ果南!」

「鞠莉はいっぱい甘やかしてもらったでしょ?今度は私が天を甘やかすのっ!」

「天くん、次は私とハグしよっ!」

「その次はマルずら!」

「じゃ、じゃあルビイも天くんとハグする!」

「ルビイまで!?!で、では私も・・・」

「フツ、甘えん坊なりトルデーモン・・・ヨハネが甘やかしてあげても良いわよ?」

「あ、間に合ってるんで大丈夫です」

「間に合ってるって何!?!私だけ仲間外れにするんじゃないわよ!?!」

「ちよっと皆!?!私の天くんに何してるの!?!」

「梨子ちゃん!?!さらっととんでもないこと言っていない!?!」

皆との交流を、心から楽しいと感じる俺なのだった。

## 【渡辺曜】 負けないからね！

「えっ、曜の誕生日って四月なんですか!？」

「そうだよ。知らなかった？」

首を傾げる果南さん。

ダイビングショップのアルバイトを終えた俺は、休憩しつつ果南さんと談笑していた。

「意外ですね・・・てつきり七月とか八月だと思ってました」

「アハハ、まあ夏生まれっばいよね」

笑う果南さん。

四月といえれば今月、しかも十七日って・・・

「もうすぐじゃん・・・プレゼントどうしましょう?」

「天の気持ちがかもった物だったら、曜はきつと喜んでくれると思うよ?」

「マジですか。じゃあメツチャ際どい水着をあげます」

「それ気持ちじゃなくて下心こもってるよねえ!？」

「失礼な。曜のエロい姿が見たいだけですよ」

「それを下心と呼ぶんでしょうが!」

「世界はそれを愛と呼ぶんだぜ」

「サンボ●スターかつ!」

「まあ冗談はさておき、本当にどうしようかな・・・」

曜へのプレゼントに悩んでいると・・・

『新しい日々をつなぐのは、新しい君と僕なのさ〜♪』

「ピツ・・・もしもし?」

「タイムリーすぎない!?いつの間にサン●マスターが着信音になったの!?」  
果南さんのツツコミ。

ギヤーギヤーギヤーギヤーやかましいんだよ・・・発情期ですかコノヤロー。

『もっ、もしもし!?天くん!?!』

「曜?」

電話の相手は曜だった。

何故か声が裏返っており、緊張しているのが電話越しでも伝わってくる。

『あ、あの……その……わっ、私とデートしないっ!』

「……はっ。」

呆気にとられてしまう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「とりやーっ!」

曜の投げたボールが綺麗に転がっていき、多くのピンを弾き飛ばす。

「あっ、一本だけ残った!?! ストライクだと思ったのに!?!」

「……何でボウリング?」

呆れる俺。

曜の誕生日当日、俺達は二人でボウリング場へとやって来ていた。

あんな緊張した様子でデートに誘ってきたかと思えば……

「いやあ、久々にやりたかったんだよ……ねっ!」

曜の二投目が、残った一本のピンを倒す。

おつ、スぺアだ・・・

「そっか、ヤリたかったのか」

「気のせいかな!?何か意味合いが違う気がするんだけど!」

「だったら最初から誘ってくれれば良かったのに・・・ホテルに」

「やっぱりかつ!やっぱりそっちの意味かつ!」

「つていうか久々つて何?俺達はそんなことしてないはずだけど」

「だからそっちの意味じゃないんだつてば!?!ボウリングが久々なのつ!」

「まさか曜、過去に別の男と・・・?」

「人の話聞いてくれる!?!私は処j・・・み、未経験だからつ!」

「あつ、言い直した」

「う、うるさいなあつ!それより次、天くんの番だよつ!」

ボールを手渡してくる曜。

そういうえば俺も、ボウリングなんて久々だな・・・

「よし、いっちょやりますか」

「うん、やる気になってくれたのは良いんだけどさ・・・あのプレーヤー名は何?」  
呆れたようにスクリーンを見上げる曜。

ボウリング場で使用申し込みをする際、スクリーンに表示されるプレイヤー名を決めることが出来るのだが・・・

『プレイヤー名：ドラゲナイ2』

「え、カッコ良くない？」

「どこが!?! っていうか完全にセカオワだよねぇ!?!」

「セカオワ? ああ、SEKAI NO OWARIね」

「いや伏せ字おかしくない!?! そもそもなんで2なの!?!」

「1は曜だから」

「え、私のプレイヤー名『ドラゲナイ1』になってるの!?!」

「うん。テキストに決めて良いっていうから、テキストに決めちゃった」

「テキストすぎない!?!」

「どうやら曜は不服らしい。」

「良いセンスだと思っただけだなあ・・・」

「まあ良いや・・・それより天くん、私と勝負しない?」

「勝負?」

俺が首を傾げると、曜が不敵な笑みを浮かべた。

「うん。これから5ゲームやって、先に3ゲーム取った方の勝ちでどう? 負けた方は勝った方の言うことを、1つだけ何でも聞かなくていいこと?」

「ほほう・・・つまり俺が勝った場合、曜にあんなことやこんなことが出来ると?」

「うっ・・・エ、エツチなのはダメっ!」

「えー・・・気乗りしないなあ・・・」

「露骨にテンション下げるの止めてくれる!」

「いや、だつてさあ・・・」

「それとも・・・勝つ自信が無いの?」

曜がニヤリと笑いながら挑発してくる。

ハッ、そんな安い挑発に乗るわけ・・・

「そんなわけあるかあああああ!」

「メツチャ乗ってる!」

俺は勢いよくボールをぶん投げると、全てのピンをぶつ倒した。

「嘘!?!いきなりストライク!」

「舐めんなよ!! ちとらエリーチカ先生のボウリング講座受講者だぞ!」

「何その講座!?! っていうかエリーチカ先生ってお姉さんだよねえ!?!」

「エリーチカ先生から免許皆伝をもらった実力、とくと思いい知るが良いっ!」  
そう言つて俺は、曜にボールを差し出した。

「ほら、早く投げろ。『ドラゲナイー』」

「そのプレーヤー名で呼ばないでくれる!?!」

「まあスペアしか取れないようじゃ、俺には勝てないだろうけど」

「カッチーン・・・上等だよっ! 『ドラゲナイ2』じゃ 『ドラゲナイー』には勝てない  
ことを証明してやろうじゃんっ!」

俺と曜の仁義なき戦いの火蓋が切られたのだった。

\*\*\*\*\*

「つ、疲れた・・・」

「ど、同意であります・・・」

ソファに突っ伏す俺と曜。

ボウリングを終えた俺達は、俺の家へとやって来ていた。

何故なら……

「チクシヨウ、負けた……」

「接戦だったけどね……私が勝ったんだから、言うこと聞いてよ?」

「好きにしなよ……っていうか、ホントにそんなことで良いの?」

「勿論」

頷く曜。

激しい勝負の末に勝利を収めた曜は、俺に『今日は天くんの家に泊めさせてほしい』とお願いしてきたのだ。

「天くんは私の家に泊まったことがあるのに、私が天くんの家に泊まったことが無いのは不公平だと思って。勝負に勝とうが負けようが、今日は最初から天くんの家に泊まるつもりだったんだよね」

「いや、不公平って……」

呆れる俺。

「そもそも年頃の娘が、男の家に泊まるなんて親御さんが……って、星さんなら普通にオツケーしそう」

「アハハ、ご名答・・・」

苦笑する曜。

あの人は本当に大らかというか、そういうこと気にしないというか・・・  
奈々さんや西華さんとかもそうでもないなあ・・・

「まあとりあえず、汗もかいたしお風呂に入りますか・・・曜、先に入ってきなよ」

「いや、天くんの家だし天くんが先の方が・・・」

「・・・もしかして、『私の浸かった湯船に天くんが入るとか嫌だ。きつといかがわしい妄想をするに違いない』とか思ってる？」

「思っていないよ!?!何その被害妄想!?!」

「じゃあ俺が先に・・・って、そうすると『天くんの浸かった湯船に入るとか嫌だ。気持ち悪い』とか思われそうだな・・・」

「何でそんなにネガティブなの!?!」

結局、曜が先に入ることになるのだった。

\*\*\*\*\*

《曜視点》

「おお、今日は満月だね」

「ホントだ・・・綺麗」

空を見上げる私達。

夕飯を済ませ一息ついた私達は、縁側に腰掛けて月を眺めていた。

「やっぱり曜、料理上手だよ。手際が良いもん」

「天くんこそ。凄く慣れてるなって思ったよ」

お互いを褒め合う。

今日の夕飯は二人で作ったのだが、驚くほどやりやすかった。

息が合うというか、凄くスムーズに進んだし・・・何より、一緒に作っていても

楽しかった。

まるで新婚夫婦みたいな・・・

「っ・・・」

「曜? 顔赤いけど大丈夫?」

「だ、大丈夫! 何でもない!」

慌てて誤魔化す。

うう、私ってば何考えてんだろ……

「楽しかったし、また一緒に料理しようね」

そう言つて微笑む天くん。

その笑顔は反則だなあ……

「勿論！」

笑顔で頷く私。

今度は何を作ろうかなあ……

「あつ……そういえば、今日は何で俺を誘つてくれたの？」

尋ねてくる天くん。

「最初に『デートしない？』って誘われた時は、ちよつとビックリしたよ」

「そ、それは言葉の綾つていうか……迷惑だった？」

「まさか。俺は凄く嬉しかったけど、誕生日を過ぎす相手が俺で良いのになつて」

「……天くんじゃなきやダメだったんだよ」

「ん？何て？」

「な、何でもないっ！」

本当のことなんて言えるわけがない……

初めて好きになった男の子に、誕生日を祝ってもらいたかったからなんて・・・

「ほ、ほらっ! 天くんはA q o u r sのマネージャーなわけだから! メンバーの誕生日を祝う義務があるんだよ!」

「どんな義務やねん」

呆れている天くん。

うう、こんなことが言いたいわけじゃないのに・・・

「・・・まあ、ちゃんとお祝いさせてもらうけどさ」

苦笑しながらそう言うと、天くんが小さな箱を取り出した。

「はいコレ、誕生日プレゼント」

「ええっ!？」

驚く私。

そんなもの用意してくれてたんだ・・・

「も、もらっていいの・・・?」

「あ、要らないなら別に・・・」

「要る要るっ！メツチャ欲しいっ！」  
慌ててプレゼントを受け取る。

「あ、開けていい・・・？」

「どうぞで」

震える手で箱を開ける。

中に入っていたのは・・・

「これ・・・ミサンガ？」

「うん、俺の手作り」

「手作り!？」

ライトブルーを基調としたミサンガだった。

色が凄く綺麗なのは勿論のこと、とてもしっかりとした出来映えだ。

これが手作りだなんて・・・

「天くん、ホントにこういうの上手だね・・・」

「それほどでもないよ。もつと早く曜の誕生日を知ってたら、ちゃんとした物をプレゼント出来ただけど・・・ゴメンね」

「そんなことないよ!?!メツチャ嬉しい!ありがとう!」

本当に嬉しかった。

天くんが私の為に作ってくれたんだし、嬉しくないわけがない。

「ねえ、付けてもらって良い?」

「勿論。どこに付ける?」

「んー．．．どこが良いのかな?」

首を捻る私。

すると天くんが、そつとミサンガを手に持った。

「曜、利き足つてどっち?」

「え、右だけど．．．」

「じゃあ右足出して」

天くんに言われるがままに、右足を天くんの前に出す。

すると天くんは、私の右足首にミサンガを結び始めた。

「勝負運を上げたい時は、利き足にミサンガを付けると良いんだって。ラブライブも

そうだけど、曜の勝負事が上手くいくことを願ってここに付けよう」

「勝負運．．．」

「それと色なんだけど．．．基調になってる水色には、『美しさ・爽やかさ・笑顔』の意味があるみたい。曜のイメージカラーだから選んだんだけど、意味的にも曜にピッタリの色だよね」

「っ……」

顔がカアツと熱くなるのを感じる。

もう、何でそうやってサラツと恥ずかしいことが言えるのかなあ……

「曜はA q o u r sのムードメーカーだから。これからもその笑顔で、皆を明るく照らしてほしい。A q o u r sがラブライブで優勝する為には、曜の力が必要不可欠なんだよ」

天くんはミサンガを結び終わると、私に微笑みかけた。

「いつもありがとう。これからもよろしくね」

「っ……うんっ！」

我慢出来ず、勢いよく天くんを抱きつく。

ヤバイ、嬉しくて泣きそう……

「おっと……もう、曜は甘えん坊だなあ」

「良いのっ！誕生日なんだから、もっと私を甘やかさないっ！」

「はいはい」

苦笑しながら抱き締めてくれる天くん。

私の気持ちは、まだ天くんには伝えられない。

でも、いつか必ず伝えるんだ……

「ねえ、天くん・・・私、負けないからね!」

「うん。期待してる」

笑顔を見せる天くん。

負けないっていうのは、ラブライブもそうだけど・・・

「・・・恋の争いも、ね」

「曜?何か言った?」

「何でもないっ!」

笑みを浮かべ、天くんの胸に顔を埋める。

大好きな人の温もりに包まれ、幸せを感じる私なのだった。

## 【西木野真姫】 貴方に出会えて・・・

「天、起きて」

「ん・・・？」

身体を優しく揺すられ、ゆっくりと目を開ける。

顔立ちの整った赤髪の美女が、俺の顔を覗き込んでいた。

「着いたわよ」

「えっ、もう？早くない？」

「アンタが爆睡してたからでしょ」

呆れている美女。

「東京駅から新幹線に乗って三時間半・・・よくもまあそんなに爆睡出来たものね」

「アハハ、ゴメンゴメン」

苦笑しながら謝る俺。

「こういう乗り物に乗ると、つい眠くなっちゃうって言うか・・・大好きな人が隣にいてくれたから、尚更安心して眠れたよ。ありがとね」

「な、何よそれ!?イミワカンナイっ！」

頬を赤く染め、恥ずかしそうに髪の毛先をくるくる弄る美女。

昔と違ってずいぶん髪が長くなったけど、この癖はずっと変わらないなあ・・・

「・・・ハハッ」

「わ、笑うんじゃないわよ!？」

「ああ、ゴメン。やっぱり俺の彼女は可愛いなあって」

「っ・・・も、もう知らないっ!」

顔を真っ赤にして、ぷいっとそっぽを向いてしまう美女。

やれやれ・・・

「さて、行こうか。終点だし、早く降りないと迷惑かけちゃうよ?」

「アンタが爆睡してたせいで遅くなったんでしょうが!」

「アハハ、確かに」

俺は笑いながらそう言うと、美女の手を優しく握った。

「起こしてくれてありがとう・・・真姫」

「っ・・・全く、世話の焼ける彼氏なんだから・・・」

手を握り返してくる美女・・・西木野真姫。

伝説のスクールアイドルグループ・μ'sの一員である彼女は・・・

現在、俺の恋人になっているのであった。

\*\*\*\*\*

「わあ．．．！」

目の前の光景に、驚いている真姫。

「辺り一面、桜だらけじゃない．．．！」

「凄いでしょ？」

笑みを浮かべる俺。

俺達は今、青森県弘前市の弘前公園へとやって来ていた。

『弘前の桜』といえはかなり有名だが、真姫はまだ一度も見たことが無かつたらしい。そこで今回、二人で弘前まで旅行に来たのだ。

『桜なんてどこで見たって一緒でしょ』とか言ってたどこかの誰かさん、今どんな気持ち？ねえどんな気持ち？」

「う、うるさいわね！いいでしょ別に！」

『三時間半も新幹線に乗るの!?イミワカンナイ!』とか言ってたどこかの誰かさん、

今どんな気持ち？ねえどんな気持ち？」

「ああもう、私が悪かったわよ！ごめんなさい！」

「よろしい」

すっかり謝罪の言葉が聞けたので、この辺にしておいてあげよう。

「この公園広いから、お花見ポイントがたくさんあるんだよ。ゆっくり見て回ろう？」

「ええ・・・あんまり歩きたくないんだけど・・・」

「じゃあおんぶしてあげようか？」

「それはそれで嫌なんだけど!?こんな人が多いところで恥ずかしいでしょうが！」

「ワガママだなあ・・・ほら、行こう？」

真姫の手を握って歩く。

このワガママお姫様は、俺が引つ張ってあげないと動かないから困るんだよなあ・・・

「ちよ、ちよつと・・・！」

そう言いながらも、手を握り返してついてくる真姫。

どうやら、最初から手を握られるのを待っていたらしい。

ホント素直じゃないんだから・・・

「それにしても、真姫と旅行に来るなんて久しぶりだね・・・いつ以来だっけ？」

「そうねえ・・・天が大学四年生の時以来だから、三年ぶりってところかしら？」

「おっ、よく覚えてるね」

「た、たまたまよっ!」

顔を赤くする真姫。

俺の高校卒業を機に付き合い始めた俺達は、今年で交際七周年を迎えていた。

俺も今年で二十五歳になるし、真姫は・・・

「遂に三十路か・・・おめでどう、真姫」

「三十路って言われた後に祝福されても嬉しくないんだけど!」

真姫のツツコミ。

真姫は今日、四月十九日めでたく三十歳になった。

今回の旅行は、真姫の誕生日お祝い旅行でもあるのだ。

「ふんっ!どうせもう若くないわよっ!」

「拗ねないの。年齢なんて気にならないくらい、真姫は綺麗だよ」

真姫の手を強く握る。

「それに三十歳なんてまだまだ若いでしょ。『若くない』なんて言わないの」

「・・・ふん」

あつ、ちよつと機嫌直った・・・

頬が赤く染まっているのが良い証拠だ。

「ほら、ここの景色見てみなよ。凄いから」

「えっ？」

川にかかる橋の上で立ち止まる俺達。

向こうまでずっと続く川の両脇は、たくさん桜の木で彩られていた。

さらに川の水面には、鏡のようにクッキリと桜が映っており・・・

とても美しい眺めだった。

「うわぁ・・・！」

感嘆の声を上げる真姫。

「どうやら喜んでもらえたようだ。」

「でも、本番はこれからなんだよね」

「本番？」

首を傾げる真姫。

この景色もとても素晴らしいのだが、お楽しみはこれからなのだ。

「弘前公園の桜つて、夜になるとライトアップされるんだよ。それが本当に綺麗で

さぁ・・・また夜になったら来よう。きつとビツクリすると思うよ」

「そ、そうなの？それは見てみたいわね・・・」

興味を示す真姫。

あの景色は絶景だし、是非とも真姫に見てもらいたい。  
そして……

「……上手くいくと良いな」

「天？何か言った？」

「何でもないよ」

笑って誤魔化す俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「うう、寒い……」

身体を震わせる真姫。

俺達は一度旅館へ行きチエツクインを済ませ、再び弘前公園を訪れていた。

もう四月とはいえ、日が沈んで夜になればだいぶ冷える。

本州最北端に位置する青森県ともなれば尚更だ。

「大丈夫？」

「まあ何とか・・・それに・・・」

そう言つて、俺の腕に抱きついてくる真姫。

「・・・これで少しは温かくなるから」

「・・・それなら良いけど」

真姫にくつつかれて、内心ドキツとしてしまう。

こつやつてさりげなく甘えてくるの、ホントズルいよなあ・・・

「天? どうしたの?」

「な、何でもない・・・」

ドキドキしつつ、真姫と二人で歩き始める。

辺りは多くの人々で賑わつており、皆それぞれ夜桜を楽しんでいた。

「本当に綺麗ね・・・」

感嘆の声を上げる真姫。

辺り一面に咲いた桜はライトアップされ、昼に見たものとはまた一味違う光景がそこにあつた。

ホント、凄いやなあ・・・

「あつ、真姫。あれ見てみなよ」

「え?」

俺が指差した先には少し開けた場所があり、そこも多くの桜の木が立っていた。その中の二本の桜の木の枝が、ハート型を描くように組み合わさっている。そこだけくつきりとハートの形に見えるのだ。

「えっ、凄くない!?!何あれ!?!」

「有名な花見スポットみたい。せつかくだし、アレをバックに写真撮ろうよ」

「ヴェエツ!?!は、恥ずかしいからちよつと・・・」

「すみません、シャッター押してもらって良いですか?」

「ええ、良いですよ」

「人の話聞きなさいよ!?!」

真姫のツツコミをスルーし、手を引いてこちらへ引き寄せる。

シャッターを押してくれるという女性は、俺達の様子を微笑ましそうに眺めていた。

「フフツ、カップルさんですか?」

「ええ、もう七年の付き合いになります」

「そうなんですか?素敵ですね」

ニッコリ笑う女性。

ダークブラウンのロングヘアをお嬢様結びにして、赤いリボンで纏めている。

よく見るとメツチャ美人じゃん・・・

「・・・天？」

「大丈夫、俺は真姫一筋だから」

「まだ何も言っていないんだけど・・・」

呆れている真姫。

女性はクスクス笑うと、俺が渡したスマホを構えた。

「それじゃ撮りますね。お二人とも、思いつきりくつついちゃって下さい」

「はい」

「ちよ、ちよつと!？」

思いつきり真姫を抱き寄せる。

真姫は動揺しながらも、諦めたのかすんなり俺に身を委ねてくれた。

「それではいきまます。はい、チーズ！」

掛け声と共に、パシヤツという音がする。

女性が笑顔で俺にスマホを差し出してきた。

「はい、オツケーです。我ながら上手に撮れたと思いますよ」

「ありがとうございます。助かりました」

「いえいえ。それでは私はこれで・・・全く、かすみさんと璃奈さんだったらどこに行つ

ちやっただらう？」

一礼して去っていく女性。

最後に何か眩いてたけど、何だったんだろう？

何かキヨロキヨロ辺りを見回してるし・・・

「写真、どんな感じ？」

「えーつとね・・・おお、バツチリじゃん！」

真姫と二人で、撮ってもらった写真を眺める。

背景のハートをバックに、仲睦まじく写る二人の姿がそこにあった。

「その・・・後で私にも送ってね？」

少し恥ずかしそうに頼んでくる真姫に、再びドキツとしてしまう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「ここって、昼間に来た場所よね？」

「うん、凄く景色の良かった場所だね」

真姫の問いに頷く俺。

俺達は今、昼間にも訪れた川にかかる橋にやって来ていた。

「昼も凄かったけど、夜の景色はまた格別なんだよ。行ってみよう」

「あつ、ちよつと!？」

真姫の手を引いて橋を渡る。

そして橋の中央で立ち止まり、川の方へと視線を向けた。

「格別つて、そんなに違うもの・・・なの・・・」

目の前の光景に絶句している真姫。

川沿いに咲く桜の木がライトアップされ、まるで桜そのものが光り輝いているようだった。

そして川の水面には、そんな光り輝く桜が映し出されており・・・

まさに絶景と言つて良い、幻想的な風景がそこにはあつた。

「・・・凄いでしょ?」

微笑む俺。

「初めてこの景色を見た時、俺本当に感動しちやつてさ。次は絶対真姫と一緒に見に来たいつて、そう思つたんだ」

「天・・・」

「この景色を、真姫と一緒に見られて良かった。一緒に来てくれてありがとう」

そう言う俺は、着ているコートのポケットから小さな箱を取り出した。それを見た真姫が、驚いたように目を見開く。

「そ、それって．．．!?」

「本当は、もつと早くに渡したかったんだけど．．．七年も待たせちゃつてゴメンね」  
ゆつくりと箱を開く。

そこに入っていたのは、銀色に光り輝く指輪だった。

「真姫．．．いや、西木野真姫さん。貴女のこと大好きです。俺と結婚して下さい」  
「っ．．．」

心臓をバクバクさせながら、真姫からの返事を待っている．．．

真姫の目から、大粒の涙が溢れ出した。

「．．．バカ」

溢れる涙を拭おうともせず、真姫が微笑む。

「こんな景色をバツクにプロポーズなんて．．．カッコつけすぎなのよ。天のくせに」  
「いや、『くせに』って酷くない? これでも色々考えたんだけど．．．」

「考えすぎよ、バカ」

俺の胸に顔を埋める真姫。

「前にも言ったじゃない．．．私が天の頼みを断るわけないでしょ」

「っ・・・それって・・・」

真姫は顔を上げると、嬉しそうに微笑んだ。

「はい・・・喜んで」

「っ・・・」

真姫を抱き締める。

愛おしすぎてどうにかなりそうだった。

「ちよつと、苦しいんだけど・・・」

「ああゴメン、『西木野真姫を抱き締めたい症候群』の症状が出ちゃって・・・」

「どんな病気!？」

「まあ治す気は無いんだけどね」

「無いの!？」

「当たり前じゃん。それとも・・・俺に抱き締められるのは嫌?」

「・・・バカ」

「ちよつと、人のこと『バカ』って言い過ぎ」

「照れ隠しよ。それくらい察しなさい」

「理不尽なあ・・・」

「その理不尽な女に、アンタは今プロポーズしたのよ」

おかしそうにクスクス笑う真姫。

「私のこと、大好きなんでしょ？」

「うん、大好き」

「・・・相変わらず照れずに言うわね」

真姫は肩をすくめつつ、俺の頬に手を添えた。

「でも・・・私も貴方が大好きよ」

「真姫・・・」

「愛してるわ、天・・・世界の誰よりも、貴方を愛してる」

「・・・俺も愛してるよ、真姫」

お互いに顔を近づけ、深い口づけを交わす。

ライトアップされた桜の木々が、俺達を祝福するかのように光り輝いているのだった。

\*\*\*\*\*

《真姫視点》

「すう・・・すう・・・」

「また爆睡してゐるし・・・」

隣で眠る天を見ながら、呆れている私。

楽しかった旅行も終わり、今は新幹線に乗って東京へと戻っている途中だ。

「それにしても・・・ホントによく寝るわね」

まあ確かに、昨日の夜は寝るの遅かったもんね・・・

旅館に戻って祝杯を挙げて、そのまま二人で・・・

「っ・・・」

昨夜の情事を思い出し、思わず顔が赤くなってしまう。

隣の部屋の人に、声とか聞かれてないといいんだけど・・・

「全く・・・あんなに激しくするから・・・」

恨みのこもった目で天を見つめる。

まあスヤスヤと眠る天の顔を見たら、怒る気も失せてしまうのだけれど。

「・・・フフツ」

ふと自分の左手を見て、自然と笑みが零れる。

薬指には、昨日天からもらった指輪がはめられていた。

天からのプロポーズを思い出し、つい顔が緩んでしまう。

「・・・嬉しかったなあ」

思えば初めて出会った頃から、天は私に壁を作ることなく接してくれた。

そんな天だから、人付き合いが苦手だった私も心を開くことが出来たんだろう。

おかげで、*μ*、*s*の皆にも出会えて、かけがえのない仲間や思い出を得られて・・・

今の私があるのは、間違いなく天のおかげだ。

「・・・ありがとね、天」

天の肩に、そつと自分の頭をのせる。

「貴方に出会えて、本当に良かった・・・私は今、凄く幸せよ」

私はこの人の彼女・・・いや、お嫁さんなんだ・・・

そう思うだけでドキドキするし、何とも言えない幸福感に包まれる。

それくらい、私は天にベタ惚れなんだと実感した。

「・・・大好き」

天にもたれかかって体重を預け、天の右手を指輪のはめられた左手でそつと握る。

そのまま目を閉じた私は、幸せを噛み締めながら眠りにつくのだった。

答えは自分で探すものである。

「ええっ!?別行動!?!」

「ええ、すみません」

千歌さんに謝る俺。

俺は今回、A q o u r sの皆とは一緒に行動出来ないのだ。

「実は今日、人と会う約束をしてるんです。なので『μ sとの違いを探せ! A q o u r sの東京弾丸ツアー』には参加出来ないんですよ」

「いつの間にそんなタイトルつけたの!?!」

「それに・・・会うんでしょう? S a i n t S n o wの二人と」

いつの間にか千歌さんは、S a i n t S n o wの鹿角聖良さんと連絡先を交換していたらしい。

ちょうどS a i n t S n o wの二人も東京に来ているらしく、会う約束をしているんだとか。

「俺、あの人達に会いたくないんで。俺の代わりに、皆でプロッコリーを投げつけたいてください」

「そんなことしないよ!? っていうか何でブロッコリー!？」

「聖良さんの苦手なものらしいんで」

「何で知ってるの!？」

「ネットで調べました。Saint Snowの情報は、一通り把握済みです」

「完全にSaint Snowのこと気になってるよねえ!？」

「敵の情報を知っておくのは基本でしょうに・・・まあそんなわけで、俺は別行動をとらせてもらいます」

「ええ、そんなぁ・・・」

「嫌ー! マリーは天と一緒にが良いのー!」

不満げな千歌さんと、俺にしがみつく鞠莉。

苦笑しながら鞠莉の頭をポンポン叩く。

「じゃあお詫びに、一つだけヒント」

「ヒント・・・?」

首を傾げる曜。俺は笑みを浮かべた。

「答えはいたってシンプルだから。難しく考え過ぎないように」

「っ・・・もしかして天くん、答えを知ってるの!？」

「さあ、どうだろうね」

俺は笑ってはぐらかすと、皆に向けて手を振るのだった。

「行つてらっしゃい。自分達の目指すべき道を、見つけておいで」

\*\*\*\*\*

### 《千歌視点》

「お久しぶりです！」

「お元氣そうで何よりです」

握手を交わす私と聖良さん。

私達は今、秋葉原UTXの一室にお邪魔していた。この部屋はゲストルームになっており、学園関係者じゃなくても利用可能らしい。

聖良さん達はA—RISEのファンらしく、東京を訪れる際はA—RISEの母校でもあるこの場所を訪れるのが恒例なんだそうだ。

「予備予選突破、おめでとうございます」

「そちらこそ、おめでとうございます」

お互いを祝福する梨子ちゃんと聖良さん。

Saint Snowもまた、ラブライブの予備予選を突破していた。

動画でその時のパフォーマンスを見たけど、相変わらずカッコ良かったなあ・・・

「とはいえ、動画の再生回数はそちらの方が上なので・・・私達もうかうかしてはいられませんね」

「いえいえ！」

「それほどでも！」

謙遜する曜ちゃんとルビィちゃんだったが、明らかに顔が緩んでいる。

二人とも、気を緩めてる場合じゃないよ・・・

「でも・・・決勝では勝ちますけどね」

「っ・・・」

聖良さんの強気の発言に、その場の空気がピリツとなる。

ここは私も、リーダーとしてビシツと・・・

「鬼はく外っ！」

「キヤアアアアアアアアアアッ!？」

「ちよ、何してるのよ!？」

鞠莉ちゃんが聖良さんにブロッコリーを投げつけていた。

慌てて間に入る理亞ちゃん。

「何で節分気分!? 季節が違うでしょうが!」

「今年の節分の時、マリー海外にいたのよ。だから豆まきしてないの」

「知らないわよ!? っていうかそれ、豆じゃなくてプロッコリーでしょうが! 姉様はプロッコリーが苦手なのよ!」

「知ってるわよ。だからぶつけようと思って」

「まさかの確信犯!? っていうか食べ物を粗末にするんじゃないわよ!」

「大丈夫よ。それ食品サンプルだから」

「逆に何でプロッコリーの食品サンプル持つてるのよ!」

理亞ちゃん怒涛の連続ツツコミ。

一方の聖良さんとはというと、理亞ちゃんの背中に隠れてぶるぶる震えていた。

そんなにプロッコリー苦手なんだ・・・

「鞠莉さん!? 突然何をしているのですか!」

「だって天に頼まれたんだもん」

「あんなもの冗談に決まっているでしょう! 何故真に受けているのですか!」

「冗談? この食品サンプル、天にもらったんだけど・・・」

「天さんんんんんんんんんん!」

黒幕はまさかの天くんだった。

本気だったんだ・・・

「と、とにかくっ！お話を聞かせていただけませんか!？」

「ああ、 $\mu$ 、 $s$ との違いについてですね・・・」

ようやく落ち着いていたのか、理亞ちゃんの後ろから出てくる聖良さん。

何かげつそりしてるけど、大丈夫かなあ・・・

「コホンっ・・・皆さんが $\mu$ 、 $s$ に憧れてスクールアイドルを始めたように、私達もA—RISEに憧れてスクールアイドルを始めました。だから私達も、考えたことはあります。A—RISEや $\mu$ 、 $s$ の何が凄いのか、私達と何が違うのか・・・」

「・・・答えは出ましたか？」

「・・・残念ながら」

首を横に振る聖良さん。

「だから、勝つしかない・・・勝って追いついて、同じ景色を見るしかない・・・そう  
思いました」

「・・・勝ちたいですか？」

「え・・・？」

「ラブライブ、勝ちたいですか？」

素直な質問をぶつけてみる。

聖良さんの隣で、理亞ちゃんが呆れた顔をしていた。

「姉様、この子バカ？」

「鬼はく．．．」

「ヒイツ!?!」

「ストツプううううつ!?!今のは私が悪かったから、おもむろにブロッコリー投げつけようとしなないで!?!姉様が怯えてるから!」

慌てて鞠莉ちゃんを止める理亞ちゃん。

鞠莉ちゃんも容赦ないなあ．．．

「．．勝ちたいからこそ、ラブライブに出場するのよ。A—R—I—S—Eやμ'sだって、そうだったはずよ」

「あら、それはどうかしら？」

「っ!?!」

聞き覚えの無い声がある。

振り向くと、そこに立っていたのは．．．

「き、綺羅ツバサさん!?!」

「あら、私のこと知ってるの?嬉しいわ」

「ピギヤアツ!」

ルビィちゃんやさんとダイヤさんが悲鳴を上げる。

あのA—RISEのメンバー、綺羅ツバサさんがにこやかに手を振っていた。

ほ、本物……!?

「ど、どうしてここに……!?!」

「時々顔を出しに来てるのよ。卒業生として、母校を気にかけるのは当然でしょ?」

理亞ちゃんの質問に答える綺羅さん。

「先月ぶりね、Saint Snowのお二人さん。まさか貴女達が、Aqoursと

会ってるなんて思ってもみなかったわ」

「っ……」

「それとAqoursの皆さん、初めまして。A—RISEの綺羅ツバサよ。よろし

くね」

綺羅さんは笑顔で挨拶すると、誰かを探すように辺りを見回した。

「あら、天はいないみたいね……まああの子の性格上、Saint Snowに会い

たくなかったんでしようね。あの子は基本的に人に対して優しいけど、気に入らない相

手に対してはとことん冷たいもの」

苦笑する綺羅さん。

えっ、今天くんの名前を・・・

「天くんを知ってるんですか!？」

「勿論。私達の最大のライバル、μ sのマネージャーだもの。よく知ってるわ」

「ええっ!？」

「アイツがμ sのマネージャー!？」

衝撃を受けている聖良さんと理亞ちゃん。

そういえば二人とも、そのことを知らないんだっけ・・・

「ところで、さっきの話んだけど・・・ちよつと違うわよ」

理亞ちゃんの方を見る綺羅さん。

「確かに私達A—RISEは、勝ちたくてラブライブに出場してた。それは紛れも無

い事実ね。でも・・・μ sは違ったわ」

「・・・勝ちたくなかったっていうの?」

「それも違う。勿論優勝を目指していた以上、彼女達にも『勝ちたい』という思いはあつたでしょうね。ただ・・・それだけじゃなかったのよ」

「それだけじゃなかった・・・?」

「これ以上の答えは、自分で見つけなさい。一つだけヒントをあげるなら・・・勝ちただけじゃなかったから、μ sはラブライブで優勝することが出来たのよ。私達A—

R I S Eを破って、ね」

綺羅さんの意味深な発言に、疑問の表情を浮かべる私達。

どうということだろう・・・？

「まあそういう意味で言えば、A q o u r sの皆には大きなアドバンテージがあるわよ。何と言つても、あの天がマネージャーなんだもの」

微笑む綺羅さん。

「*Ms*の先頭に立つて皆を引つ張っていたのは、リーダーの穂乃果だったけど・・・メンバーの隣に寄り添い、支えていたのはマネージャーの天だったわ。そして今、天は貴女達のマネージャーをやっている・・・あの子を惹きつける何か、貴女達にあったということでしょうね」

「惹きつける、何か・・・」

そんなこと、考えてもみなかった。

私達がお願いをして、マネージャーをやってもらっているけど・・・

私達を見て、天くんは何かを感じてくれているのかな・・・？

「ああ、そういえば・・・そろそろ、今年のラブライブ決勝大会の会場が発表される時間じゃないかしら？」

時計を見て、思い出したように呟く綺羅さん。

「毎年、こここの大型スクリーンで発表になるのが恒例になってるのよ。見に行ってみたらどうかしら？」

ウインクする綺羅さんなのだった。

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「うわぁ・・・」

「凄い人ずら・・・」

驚いている善子ちゃんと花丸ちゃん。

大型スクリーンの前では、既に多くの人が集まって発表の瞬間を待っていた。

「あっ！」

声を上げる千歌ちゃん。

大型スクリーンに、『Love Live! FINAL STAGE』の文字が映し出される。

そして次に映し出された文字は・・・

「AKIBA DOME・・・」

「本当にあの会場でやるんだ・・・」

呟く鞠莉ちゃんと果南ちゃん。

つまり決勝まで進むことが出来たら、あの広大なステージに立つことが出来る・・・

「・・・ちよつと、想像出来ないな」

千歌ちゃんの口から、珍しく弱気な言葉が漏れる。

他の皆も不安そうで、どこか自信無さげな表情をしていた。

今の私達に、あのステージに立てるだけの实力があるのか・・・

『自分達の目指すべき道を、見つけておいで』

「っ・・・」

天くんの言葉が思い浮かぶ。

ダメダメ、何を弱気になってるの私！

私には・・・私達には、誰よりも頼りになる味方がいるでしょうが！

自分の頬を叩き、気合いを入れ直す。

「ねえ！音ノ木坂、行ってみない？」

「えっ？」

私の言葉に、驚きの表情を浮かべる千歌ちゃん。

「良いの・・・？」

「うん」

笑顔で頷く私。

コンクールで自分らしくピアノを弾けたおかげか、私の中で気持ちが前向きになっていた。

「今はちよつと行ってみたい。自分がどんな気持ちになるか、確かめてみたいの」

「梨子ちゃん・・・」

「皆は？どう？」

皆に問いかける私。

「賛成であります！」

「良いんじゃない？見れば何か思うことがあるかもしれないし」

笑顔で頷いてくれる曜ちゃんと果南ちゃん。

「音ノ木坂……」

「μ、sの……」

「母校!?!」

興奮状態のルビィちゃんとダイヤさん。

本当にμ、sが好きなのね……

「フフツ、元気が出たみたいね」

綺羅さんが笑いながらやってくる。

「発表された瞬間は、皆表情が曇ってたから心配したけど……貴女がAqoursの精神的支柱なのかしら? 桜内梨子さん?」

「いいえ、違います」

綺羅さんの問いに、首を横に振る私。

「私は支えられている側です。私を……私達を支えてくれる人は、離れていても私達を支えてくれるんですよ」

「なるほど……敵わないわね、あの子には」

呆れているようで、どこか嬉しそうな綺羅さん。

「どうやら綺羅さんにも、思うところがあるらしい。」

「ところで綺羅さん、Saint Snowのお二人は……」



お世話になった人には頭が上がらないものである。

「・・・懐かしいな」

廊下を歩きながら、小さく独り言を呟く。

俺は今、音ノ木坂学院へとやって来ていた。

こうやって高等部の校舎を歩いていると、あの頃のことを思い出すな・・・

『今日も練習に行くにやー!』

『ちよ、凜ちゃん!?! 走ったら危ないよ!?!』

『花陽!?! アンタも走るんじゃないわよ!?!』

『全く、困った一年生達ですね・・・』

『フフツ、元気があって良いんじゃないかな?』

『元気なのは良いのだけれど、廊下は走らないでほしいわね・・・』

『全く、子供なんだから・・・』

『まあまあ、放課後で人も少ないし大丈夫やない?』

練習場所の屋上へと向かう皆の後ろ姿を、今でも鮮明に思い出せる。  
そして・・・

『ほら天くん！早く行こう！』

笑顔で俺の手を引く、サイドテールの少女。今頃何してるのかなあ・・・  
そんなことを考えながら歩いていると、目的地である部屋の前へと着いた。  
一息を吐き、ドアをノックする。

「どうぞ〜」

「失礼します」

返事が返ってきたので、ドアを開けて中に入る。  
すると・・・

「天くうううううううんっ！」



「ええ、久しぶり」

笑う女性・・・南ひなさん。

ことりちゃんのお母さんであり、音ノ木坂学院の理事長である。

俺に浦の星のテスト生の話を持ちかけてきた張本人だ。

「天くんったら、全然連絡くれないんだもの。心配してたのよ?」

「いや、定期的に連絡してましたよね? 浦の星のことを報告する為に」

「一ヶ月に一度だけじゃない! 本当なら毎日ほしいわよ!」

「何を彼女みたいなこと言ってるんですか」

「そ、そんな・・・彼女だなんて・・・キヤツ♡」

「照れないで下さい。あと、もう少し自分の歳を考えて下さい」

「ことりちゃんが今年で二十二歳だから、恐らく四十〜五十歳のはずなんだけど・・・」

「二十代〜三十代にしか見えないのが恐ろしい。」

スタイルも良いし、ことりちゃんと並んでも親子ではなく姉妹に見えてしまうほどだ。

「フツ、まあ彼女の座はことりに譲るわ」

「自分の娘を何だと思ってるんですか」

「ゆくゆくはことりが天くんのお嫁さんになって、私は天くんのお義母さんになるの」

！まさに完璧な将来設計ね！」

「俺とことりちゃんの気持ちが無視されている件について」

「あら、ことりじゃ不満かしら？」

「まさか。俺は幸せですけど、ことりちゃんにも相手を選ぶ権利があるでしょうに」

「まだ気付いてないのね・・・まあ天くんらしいけど」

ひなさんは何故か溜め息をつくど、柔らかい笑みを俺に向けるのだった。

「それはさておき・・・お帰りなさい、天くん。浦の星での話、たっぷり聞かせてもらえるかしら？」

\*\*\*\*\*

「そう・・・色々あったのね」

「ええ、まあ」

お茶を飲みながら頷く俺。

俺は内浦での生活について、ひなさんに一通りのことを話し終えていた。

「それにしても、奈々ったら事情を話しちゃって・・・」

「むしろ何で隠してたんですか貴女は」

「その方が面白そうだったんだもくん♪」

「歳を考えろオバさん」

「辛辣!?!」

シヨックを受けるひなさん。

全く、この人ときたら・・・

「っていうか、ひなさんと奈々さんってどういう関係なんですか?」

「学生時代の先輩と後輩よ。卒業してからも交流があつてね」

肩をすくめるひなさん。

「だから奈々の娘さんが音ノ木坂に入ってきた時は、私も嬉しかったんだけど・・・彼女には、ずいぶん苦しい思いをさせてしまったみたいね。奈々から話を聞くまで、私は気付くことが出来なかつたわ」

「・・・そういうのを表に出さずに、抱え込んじゃう人ですからね」  
きつと梨子は周りに気を遣って、元気に振る舞っていたんだろう。

周りの人に頼ることもなく、一人でもがき苦しんでいたんだらうな・・・  
「だからこそ、天くんには感謝してるわ。彼女を救ってくれたんだもの」

「いや、救ったなんて大げさな・・・」

「あら、奈々はそう言つてたわよ？ピアノコンクールが上手くいったのも、天くんのおかげだって感謝してたもの」

「梨子の努力の賜物ですよ。俺は何もしてませんから」

「相変わらず謙虚ねえ・・・まあ、そういうことにおきましようか」  
苦笑するひなさん。

「内浦でも楽しくやつてるみたいで、安心したわ。絵里ちゃんとも仲直り出来たみたいだし、本当に良かった」

「ご心配をおかけしてすみません」

「良いのよ。喧嘩の原因を作ってしまったのは、他でもない私なんだから・・・本当にごめんなさいね」

謝るひなさん。

そんなひなさんに、俺は聞いてみたいことがあった。

「そもそも、どうしてひなさんは俺をテスト生に推薦したんですか？他にも良い生徒はいたでしょうに」

「・・・天くんが一番適任だと思つたのよ」

窓の外を眺めるひなさん。

「μ sの皆を繋ぎ、支え、音ノ木坂の廃校阻止に尽力してくれた天くんなら・・・同じように廃校の危機に直面している浦の星の、力になってくれるんじゃないかって。そう思つて、鞠莉ちゃんに天くんを推薦したの。まさか幼馴染とは思わなかったけどね」

「ひなさんと鞠莉はどういう関係なんですか？鞠莉は小原家のコネクションだつて言つてましたけど」

「鞠莉ちゃんのお父さんとウチの旦那つて、昔からの友人なのよ。私が音ノ木坂の理事長だつていうことを知つた鞠莉ちゃんが、お父さんを通じてコンタクトをとつてきてね。それ以来、色々とアドバイスを求められるようになったの」

「・・・相変わらず凄い行動力だな」

「そうやって自分から積極的に行動を起こせるのが、鞠莉の凄いところだと思う。」

「流石は経営者の娘といったところか・・・」

「でも、天くんをテスト生に推薦して正解だったわ」

「笑みを浮かべるひなさん。」

「A q o u r sのことは、私もチェックさせてもらつてるけど・・・皆本当に活き活きしてる。きつと良いマネージャーがいてくれるからね」

「さあ、どうでしょうね？」

「肩をすくめる俺。」

「果たして俺は、彼女達にとって良いマネージャーなのかどうか・・・」

「フフツ、それなら本人達に聞いてみると良いわ。私には答えが分かる気がするけどね」

ひなさんはそう言うと、柔らかく微笑んだ。

「彼女達の力になってあげて。それはきつと、天くんにしか出来ないことだから」

「・・・仰せのままに」

俺の返事に、満足そうに笑うひなさんなのだつた。

## 過去があるから今がある。

「身体には気を付けるのよ。何かあつたらすぐに連絡すること。それから・・・」  
「俺は貴女の子供ですか」

呆れる俺。

ひなさんとの話を終えた俺は、音ノ木坂を後にしようとしていた。

校門まで見送ってくれるということひなさんもついてきたのだが、まるで母親かのような世話の焼きようだった。

「何言ってるの！貴女は私の息子じゃない！」

「いや、貴女が何言ってるんですか」

「え、だつてことりと結婚してるでしょ？」

「してないわ。妄想と現実を混ぜないで下さい」

「グララララ・・・じゃあ俺の息子になれ！」

「どこの白ひげですか。マンガと現実も混ぜないの」

そんな会話をしながら歩き、校門が見えた時だった。



「結構ですわ！」

「マ、マルはちよつと欲しいかも・・・じゆるり」

「・・・うん、花丸にだけは絶対渡さないわ」

「天くんも来れば良かったのに。A—RISEの綺羅ツバサさんもいたんだよ？」

「マジで？あんじゅちゃんも英玲奈ちゃんも？」

「いや、一人だけだったけど」

「じゃあいいや」

「嘘でしょ!?まさかの興味無し!？」

「分かってないなあ、曜。ツバサちゃんしかいないA—RISEなんて、たこが入ってない上にソースやマヨネーズさえかかってないたこ焼きみたいなもんだよ？」

「そこまで言う!？」

「アハハ・・・あの綺羅さんをそこまで言える人なんて、天くらいしかいないんじゃないかなん？」

「果南さん、前から言おうと思ってたんですけど・・・その語尾、正直寒いですよ」

「酷い!？」

「クツクツクツ、流石はリトルデモン・・・その素直な姿勢は嫌いじゃないわ」

「いや、善子が一番寒いから」

「どういう意味よ!」

「つていうか天くん、A—RISEと知り合いだったなんて聞いてないよ!?! どうして教えてくれなかったの!?!」

「相変わらずルビィはスクールアイドル大好きだね・・・だつて聞かれなかったもん」  
「ねえ、天くん・・・A—RISEの皆さんとは、どういう関係なのかしら・・・?」

「ちよ、梨子!?! 近い近い!?! つていうか目が怖いんだけど!?!」

「・・・フフツ」

俺達のやり取りを聞いて笑うひなさん。

「本当に仲が良いのね・・・何だかμ sを見てるみたいだわ」

「ええっ!?! μ sの南ことりさん!?!」

「いや、私が見た南さんより大人っぽいような・・・」

「フフツ、初めまして。南ことりの母親です」

「「「「ええっ!?!」」」」」

梨子と鞠莉以外の皆が驚きの声を上げる。

まあそういう反応になるよね・・・

「お久しぶりです、ひなさん」

一礼する鞠莉。

「久しぶり、鞠莉ちゃん。すっかり天くとラブラブね」

「はい♡私は天の女ですから♡」

「違うわ」

腕を組んでくる鞠莉に、呆れながらツツコミを入れる。

何言ってるのこの子・・・

「それは聞き捨てならないわね、鞠莉ちゃん」

「そうだよ、鞠莉。簡単に人の女を名乗るなんて・・・」

「天くんの女は、ウチのことりなんだから」

「アンタもかい」

もう嫌だこの人達、話を通じないんだけど・・・

「でも良かったわね、鞠莉ちゃん。最初の頃は『天に嫌われました・・・』って、泣きながら私のところに電話してきてたものね」

「ちよ、ひなさん!?!その話は・・・」

「『どうやったたら天と仲直り出来ると思いますか?』とか、『天と距離を縮める為にはどうすれば良いですかね?』とか・・・」

「止めてええええええええええええ!!?!」

顔を真っ赤にして止めに入る鞠莉。

「鞠莉、そんな相談してたの？」

「うう、恥ずかしい……」

果南さんの問いに、両手で顔を覆う鞠莉。

そんな鞠莉がちよつと愛しくなつてしまい、優しく頭を撫でる。

「……色々ゴメンね、鞠莉。ありがとう」

「……うん」

珍しくしおらしい鞠莉。

頬を赤く染め、されるがままに頭を撫でられている。

「フフツ、良かった……ちよつと安心したわ」

ひなさんはそう言つて微笑むと、今度は梨子へと視線を移した。

「貴女も久しぶりね、桜内さん」

「お、お久しぶりです……南理事長……」

緊張した様子の梨子。

ひなさんが苦笑している。

「そんなに緊張しなくても良いじゃない。今の私と貴女は、理事長と生徒の関係じゃないんだから」

「そ、それはそうなんです……」

「……ねえ、聞かせてもらえるかしら？」

真剣な、それでいてどこか不安そうな顔のひなさん。

「音ノ木坂に入ったこと……後悔してる？」

「……いいえ」

首を横に振る梨子。

「今日ここに来て、分かったんです。私、この学校が大好きだったんだって」

「桜内さん……」

「だから後悔なんてしてません。苦しいことも、辛かったこともあつたけど……それでも、その全てが私の礎になつてるから」

梨子は俺に視線を向け、柔らかく微笑んだ。

「あの時、天くんが言ってくれた言葉……今凄く実感出来てるよ。ありがとう」

「梨子……」

「桜内さん……貴女は今、幸せ？」

「はいっ！」

迷い無く、笑顔で頷く梨子。

「かけがえのない仲間に巡り会えて、大きな目標も出来て……充実した日々を送ることが出来ています。皆と過ごす日々は、私にとっての宝物です」

「っ……そう……」  
微笑むひなさん。

その目には、うつすらと涙が浮かんでいた。

「え、南理事長!? どうして泣いてるんですか!？」

「何でもないので、何でも……」

目元の涙を拭い、笑顔を見せるひなさん。

「それより、もう『南理事長』は止めてちょうだい。後輩の娘に理事長って呼ばれるのは、ちょっと寂しいわ」

「じゃ、じゃあ何とお呼びすれば……」

「名前で呼んでくれたら良いのよ。私も梨子ちゃんって呼ぶから。ね?」

「わ、分かりました……ひなさん」

「よろしい♪」

ひなさんは満足そうに笑うと、Aqoursの皆を見渡した。

「私は他校の理事長だから、貴女達に偉そうなことは言えないけど……後悔することはないように、今を全力で駆け抜けなさい」

「……………はいっ!」

力強く返事をする皆。

頼もしいなあ……

「さあ、そろそろ内浦に帰りましょうか。遅くなりすぎてもいけませんし」

「それもそうだね……あつ」

「どうしました？」

「いや、さつき音ノ木坂の生徒さんが、sについて教えてくれたんだけど……いつの間にかいなくなっちゃったなあつて」

「そういえばそうですわね……」

キョロキョロと辺りを見回すダイヤさん。

「さつきまで側にいたのに、急に消えてしまうなんて……」

「もしかして……幽霊ずら？」

「びぎいつ!？」

「ちよ、ずら丸!? 変なこと言うんじゃないわよ!？」

「アハハ……ひよつとして、音ノ木坂の精霊みたいな？」

「いや、そんなバカな……」

「はいはい、その辺にしておきましょう」

手を叩いて話を止める俺。

「とりあえず駅に向かいましょうか。ひなさん、色々ありがとうございます」

「こちらこそ、天くと久しぶりに会えて良かったわ。また顔を見せに来るのよ？」  
「ええ、分かりました」

「Aqoursの皆も、また遊びに来てね。今度は校内を案内してあげるわ」  
「ありがとうございます！」

「また来ます！」

ひなさんは俺達に向かって手を振ると、校舎へと戻っていった。

「さあ、私達も行こう！」

「ヨーソーロー！」

音ノ木坂を後にし、駅へ向かって歩き始める皆。

俺は皆の背中を見つめながら、ボソリと呟いた。

「……*μ's*について話してたんだね？音ノ木坂の精霊さん？」

「アハハ、すっかり霊的な扱いをされてたね」

ベージュ色の髪の女の子が、校門の陰から顔を覗かせる。

「いおりちゃんが隠れるからでしょ。何で隠れたの？」

「いつの間にか姿が消えてるって、何かカッコ良くない？」

「相変わらずバカだね」

「相変わらず辛辣だね!？」

シヨックを受ける女の子・・・水瀬いおりちゃん。

音ノ木坂の高等部の三年生で、現在のアイドル研究部の部長を務めている子だ。

亜里姉や雪穂ちゃんが三年生だった時の一年生で、二人と仲が良かったこともあり俺もよく知っていた。

「校門の陰にいおりちゃんがいるのを見た時は、何事かと思つたよ。こつちに向かつて『しーっ!』ってジェスチャーしてくるし・・・ひなさんも苦笑いしてたけど」

「うう、理事長に『変な子だ』って思われたかな・・・」

「それは元々でしょ」

「酷い!?!」

やれやれ、いおりちゃんも変わらないなあ・・・

「それにしても、あの子達がA q o u r sか・・・天くんがマネージャーをやるなんて、よほどあの子達に惹かれたんだね」

「・・・それは否定出来ないかな」

最初こそ、μ sへの想いからマネージャーを辞めようとしたが・・・

それでも続けることを決めたのは、俺がA q o u r sに惹かれているからなんだろうな・・・

「おーい、天くん!早く行こうよー!」

少し離れた先で、千歌さんが大きな声で呼びかけてきた。そろそろ行かないとな・・・

「今行きまーす！」

俺は返事をする、いおりちゃんに視線を向けた。

「じゃあいおりちゃん、またね」

「うん。今度私にも、内浦での話を聞かせてね」

「勿論。行ってきます」

「行ってらっしやい！」

微笑むいおりちゃん。

俺も微笑むと、急いで皆の後を追いかけるのだった。

離れていても心は繋がっている。

「天ああああああああつ！」

「天くんんんんんんんんんんつ！」

勢いよく抱きついてくる亜里姉と雪穂ちゃん。

内浦へ帰る俺達を、わざわざ見送りに来てくれたらしい。

そしてそれは二人だけではなく・・・

「貴女が黒澤ダイヤさんね？天から聞いているわ。私のことを応援してくれて、本当にありがとう」

「ほ、本物のエリーチカ・・・!?」

微笑む絵里姉を前に、完全に固まっているダイヤさん。

「フフツ、黒澤ルビイちゃんだよね？推しメンが私だなんて嬉しいな♪」

「は、ははは花陽ちゃんんんんん!!?」

笑みを浮かべる花陽ちゃんを前に、緊張でガチガチになっているルビイ。

「国木田花丸ちゃんだよね!!?凜の写真を見て『キラキラしてる』って言ってくれた子だよね!!?会えて嬉しいにゃー!!?」



鞠莉の事情を知った海未ちゃんの土下座に慌てる鞠莉と、呆れている善子。

「わしわしMAX!!」

「キャアツ!」

「おお、なかなかの大きさ・・・ウチの見込み通りやね♪」

「全然嬉しくないんですけど!」

希ちゃんに胸を揉まれながらも、必死に抵抗している果南さん。

「いい? スクールアイドルっていうのはね・・・」

「ふむふむ、なるほど・・・」

にこちゃんにスクールアイドルについて説かれ、真剣に聞いている千歌さん。

「・・・何この騒がしい集団」

「アハハ・・・」

俺の溜め息に、梨子が苦笑していた。

やれやれ・・・

「それにしても・・・μ、sがここまで揃うなんて、久しぶりじゃない?」

「確かにね。何人かで集まることはあっても、全員が集まることは滅多に無いもの」

「今回も穂乃果ちゃんがいらないもんね」

頷く真姫ちゃんと花陽ちゃん。

穂乃果ちゃんもいたら、全員揃ったんだけど・・・

「あ、電車の時間が近付いてきたね」

曜が声を上げる。

もうそんな時間か・・・

「・・・天くん」

皆と別れることに寂しさを感じていると、希ちゃんに優しく抱き締められた。

「希ちゃん・・・？」

「フフツ・・・天くんが元気で過ごせるように、希パワーを注入してあげる」

「・・・それは有り難いな」

希ちゃんの背中に手を回す。

相変わらず、希ちゃんの側にいると安心するな・・・

「それならことりもっ！」

「私もやりますっ！」

「凜も天くんを抱きつくにやー！」

「し、仕方ないわね・・・私もやってあげるわよ」

「フフツ、じゃあ私も♪」

「ここに抱き締めてもらえることを光栄に思いなさい」

他の皆も、順番に俺のことを抱き締めてくれる。

こうやって皆と触れ合っていると、昔のことを思い出すなあ……

「……天」

絵里姉からも抱き締められる。

「……行つてらっしゃい」

「……行つてきます」

短く言葉を交わす。

絵里姉とはもう、散々お互いの想いをぶつけ合った。

多くを語らなくても、お互いの想いは理解し合っている。

俺は絵里姉から離れ、皆の顔を見渡した。

「ことりちゃん、服飾の勉強頑張つて。また裁縫教えてね」

「うん！次会った時に教えてあげるね！」

「海未ちゃん、絶対に教師になつてね。海未ちゃんはきっと良い教師になれるから」

「フツツ、ありがとうございます」

「真姫ちゃん、メイドに夢中になり過ぎないようにね？」

「大きなお世話よ!?!夢中になつてないから！」

「でも真姫ちゃんのメイド姿、本当に可愛くて好きなんだよなあ……」

「メイド王に私はなるわ!」

「メイド王って何さ……凜ちゃんはもつと勉強に励むこと。花陽ちゃんに迷惑かけたらダメだからね?」

「うっ……善処するにや……」

「やれやれ……花陽ちゃん、凜ちゃんのことよろしくね」

「任せて。留年させないように、責任を持って勉強を教えるから」

「頼んだよ。にこちゃん、あんじゅちゃんと英玲奈ちゃんによろしく」

「ナチュラルにツバサを外してきたわね……あの子そろそろ泣くわよ?」

「冗談だつて。ツバサちゃんに『身体は大事にしろ』つて言つといて。母校を気にかけるのは良いけど、過密スケジュールなんだから休息をとることも大事だよ」

「相変わらず、人のことよく見てるわね……了解。しっかり伝えとくわ」

「よろしく。希ちゃん、泊めてくれてありがとう。楽しかったよ」

「ウチも楽しかったよ。また泊まりに来てな」

「勿論。今度は俺が希ちゃんに料理を作るね」

「フフツ、それは楽しみやなあ♪」

「期待してて。雪穂ちゃん、穂乃果ちゃんによろしくね」

「オツケー。帰ってきたら伝えとくよ」

「あと、亜里姉のことよろしく。アホだけど見捨てないであげて」

「了解。アホだけど何とか面倒みるよ」

「まさかのアホ呼ばわり!? 二人とも酷くない!？」

「事実でしょ。でも・・・ありがとね、亜里姉」

亜里姉を優しく抱き締める。

「絵里姉と仲直り出来たのは、亜里姉のおかげだよ。心配かけてゴメンね」

「フフツ・・・ちゃんと仲直り出来たから、許してあげる」

抱き締め返してくる亜里姉。

そんな俺達を包み込むように、絵里姉が抱き締めてくる。

「・・・離れていても、私達は家族よ。それを忘れないでね」

「・・・うん、ありがとう」

絵里姉の背中に手を回す。

「絵里姉、身体には気を付けて。ただでさえ一度体調を崩してるんだから」

「ええ、もう無茶はしないわ。大事な弟と妹に、心配をかけたくないもの」

「次に無茶したら、亜里姉の手料理を口の中につつ込むからね」

「全力で気を付けるわっ!」

「何か私の扱い酷くない!？」

涙目の亜里姉。

失礼な、こんなに丁寧に扱っているというのに・・・

「鞠莉、天のことよろしくね」

「Of course! 天は私に任せて!」

「鞠莉、暑いんだけど・・・」

「アハハ・・・相変わらず鞠莉は天が好きだね」

俺の腕に抱きつきながら、絵里姉に笑顔を見せる鞠莉。

そんな鞠莉を見て、亜里姉が苦笑している。

すると・・・

「むう・・・」

何故か反対の腕に、梨子が頬を膨らませながら抱きついてきた。

「梨子? どうした?」

「・・・別に」

「フフツ・・・頑張つてね、梨子」

「っ・・・はいっ!」

絵里姉の言葉に笑みを浮かべる梨子。

一体どうしたんだろう?

「やっぱり私も内浦に行くううううっ！」

「ことりちゃん!? ちょっと落ち着くにや!？」

「私も行きますっ! やはり天には私がついていないとっ!」

「海未ちゃん!? だ、誰か助けてえっ!？」

「もしもしパパ? 内浦に引っ越すからお金出して?」

「真姫まで何してんのよ!?! これだから金持ちはっ!」

「フフツ、やっぱり天くんは愛されてるんやね♪」

μ, sの面々も何やら騒いでいた。

何かあったのかな?

「あ、あのっ!」

千歌さんが声を上げた。

意を決した表情で、μ, sの皆の顔を見ている。

「二つ聞きたいんですけど・・・μ, sの皆さんは、どうしてラブライブで優勝するこ

とが出来たんだと思いますか?」

いつになく真剣な千歌さんの問いに、一番最初に答えたのは・・・

「それは勿論、ここが魅力的だったからよ!」

「黙れ矢澤」

「相変わらず辛辣ね天!?!しかもまさかの苗字呼び!?!」

全く、ホントに空気読めないんだから……

「……さあ、どうしてかしらね」

苦笑する絵里姉。

「私達も理由は分からないわ。勿論努力はしていたけれど、それはA—RISEや他の皆にも言えることでしょうし」

「そうですね。私達だけが努力をしていただけではありませんから」

「どっちかかっていうと、私達はやりたいことを自由にやってた感じだよね」

「それは言えてるね。本当に楽しかったもん」

微笑んでいる海未ちゃん・ことりちゃん・花陽ちゃん。

「そもそも、リーダーの穂乃果がそういうタイプだったじゃない」

「確かに、穂乃果ちゃんは本当に自由だったにゃ」

「色々振り回されたりもしたわね」

呆れながら苦笑する真姫ちゃん・凜ちゃん・こちちゃん。

「フツ、答えになってないかもしれないけど……全力で楽しんだから、かな?」

「全力で、楽しむ……」

希ちゃんの言葉を繰り返す千歌さん。

少しはヒントになったかな？

「あの、もう一つだけ・・・天くんが私達のマネージャーをやっていること、皆さんはどう思ってますか？」

「っ・・・」

思わず驚いてしまう。

もしかして千歌さん、気にしてくれてたのか・・・？

「私達が複雑な思いを抱いてるんじゃないか・・・そう思ってる？」

絵里姉の問いに、千歌さんが恐る恐る頷く。

そんな千歌さんに、絵里姉は柔らかな笑みを浮かべた。

「そんなわけないじゃない。天がまたスクールアイドルと関わるようになって、とても嬉しく思ってるわ。貴女達には本当に感謝しているのよ」

「絵里さん・・・」

「ただし、もし天を傷付けるような真似をしたら・・・ねっ？」

「ヒイツ!？」

μ'sの皆、それに亜里姉と雪穂ちゃんが怖い笑みを浮かべていた。

それを見て震え上がるAqoursの皆。

やれやれ、過保護なんだから・・・

「はいはい、そろそろ電車の時間ですよ。早く行きましょう」

「それもそうね・・・皆さん、ありがとうございます！」

「失礼します！」

A q o u r s の皆が一礼し、改札を抜けてホームへと向かう。

俺も後に続くこうとしたところで、後ろを振り返った。

「それじゃ・・・行つてきます！」

「行つてらっしゃい！」

「連絡はマメに寄越しなさいよ！」

笑顔で手を振り見送ってくれる皆に、同じく笑顔で手を振り返す俺なのだった。

昔は昔、今は今である。

「なるほど、学校説明会への応募人数が0だったのね・・・」

「そうなのよ・・・」

憂鬱そうな表情の鞠莉。

帰りの電車の中、俺は今回皆が東京に来た理由について話を聞いていた。

どうやら九月に学校説明会を開くことにしてみたのだが、応募人数がまさかの0だったらしい。

予備予選を突破し、その時の動画の再生回数が伸びていたにも関わらずこの結果・・・  
まあシヨックを受けるのも無理は無いだろう。

「それで東京に来て、*μ*、*s*との違いを探そうとしたと・・・」

「そういうこと。でも*μ*、*s*の何が凄いのか、私達とどこが違うのか・・・ハッキリとは分からなかったかな」

肩をすくめる果南さん。

「どうやら、思うような答えは得られなかったらしい。」

「Saint Snowの二人は、何か言っていました？」

「『勝つしかない』ってさ。『勝って追いついて、同じ景色を見るしかない』って．．．  
そう言ってたよ」

「果南さん、あの子達バカ？」

「何その理亞ちゃんそっくりな発言!?! 辛辣すぎない!?!」

「え、アイツそんなこと言ったんですか? 腹立つわあ．．．後で S a i n t S n o w  
の動画のコメント欄を炎上させておきますね」

「止めて!?! 天なら本当にやりそうで怖いんだけど!?!」

必死に止めてくる果南さん。

チツ、鹿角理亞め．．．覚えてろよ．．．

「ハア．．．どうやら S a i n t S n o w は、完全に A—R I S E ファンみたいです  
ね．．．」

「そういえば、A—R I S E に憧れてスクールアイドルを始めたって言ってたよ」

「やっぱりですか．．．道理で当時のツバサちゃんにそっくりだと思いましたよ。あの  
ブロッコリー嫌い女」

「呼び方が酷い!?!」

果南さんのツツコミ。

鹿角理亞も気に食わないが、鹿角聖良はもつと気に食わない。

それは恐らく、俺が彼女を当時のツバサちゃんと重ねているからなんだろうな．．．俺あの当時、ツバサちゃんのこと嫌いだったんですね。あの自信満々な態度が傲岸不遜に見えるし、余裕綽々っていう感じが鼻につくし、無駄におでこが広いし．．．」

「最後のは別に良くない!？」

「『坊主憎けりやおでこまで憎い』って言うでしょ」

「『おでこ』じゃなくて『袈裟』だよねぇ!？」

「まあそんなわけで、本当に気に食わなかつたんですね。ツバサちゃんだけじゃなくて、英玲奈ちゃんのことでもですけど」

「あれ？優木あんじゅさんは？」

「おっぱいが大きいので許しました」

「判断基準そこ!？」

まあそれは冗談で、あんじゅちゃんのこと最初は気に食わなかった。

ただあんじゅちゃんは大らかな性格だし、柔らかな雰囲気もあつて三人の中で一番早く和解出来たのだ。

「当時のA—RISEは、とにかく勝つことに拘っていたというか．．．『自分達なら勝つて当然だ』って思ってるような感じだったんですね。それが他のスクールアイドル達を見下してるように見えて、俺はどうしても好きになれなかつたんですね」

「へえ・・・でも今は仲が良いんでしょう？よく仲良くなれたね？」

「*Ms*に負けてから、A—R—I—S—Eも少し考え方が変わったみたいですよ。それに俺も、A—R—I—S—Eのことを誤解してましたし」

毎日のハードな練習に、ライブによって得た多くの経験、スクールアイドルの先駆者としての自負・・・

決して他のスクールアイドルを見下していたわけではなく、『負けない』と思えるだけのものを積み重ねてきたという自覚があつてこそあの態度だった・・・

それを知つてからはA—R—I—S—Eへの印象も変わったし、三人と話をすることも増えて自然と仲良くなつていったのだ。

「まあ*Saint Snow*に関しては、誤解してるとは思いませんけどね。ラブライブへの本気度は認めますけど、自惚れてるとしか思えません」

「手厳しいねえ・・・まあ私も、*Saint Snow*の二人みたいには思えないけどさ」

苦笑する果南さん。

「何かあの二人、一年の頃の私みたいなんだよね。勝つことしか考えてなくて、グイグイ前に進もうとして・・・そのせいで、鞠莉に怪我させちゃつてさ・・・」

「果南・・・」

表情を歪める鞠莉。やれやれ・・・

「果南さん・・・おっぱい揉んで良いですか？」

「嘘でしょ!?この流れで唐突なセクハラ発言!？」

「さつき希ちゃんに揉まれてたし、俺も良いかなって」

「良いわけあるかつ！」

「そうよ天!果南のおっぱいは私のものなのよ!？」

「鞠莉!?!何言ってるの!?!」

「おっぱいなら私のを揉みなさい!好きにして良いから!」

「マジで?じゃあ早速・・・」

「ダメに決まってるでしょ!?!」

果南さんに止められてしまう。

ああ、二つのメロンが・・・

「とまあ、1%の冗談はさておき・・・」

「99%は本気だったの!?!」

「人の話を聞きなさい」

「むぐつ!?!」

目の前に座る果南さんの両頬を、両手でガシツと挟みこむ。

「いつまでも過去の失敗を引きずってウジウジしないの。後悔したって過去はやり直せないし、自分の失敗した事実が消えることはないんですから」

「天……」

「それに果南さんが自分を責めることを、鞠莉は望んでないですよ。本当に鞠莉のことを想うなら、鞠莉に申し訳ないっていう気持ちがあるのなら……今の鞠莉を大切にしてください」

「鞠莉を、大切に……」

「簡単な話じゃないですか……おっぱい揉ませれば良いんですから」

「結局そこに辿り着くの!?!」

「あつ、何か足の古傷が痛んできたわ……果南のおっぱい揉んだら治るかも……」

「嘘つけええええっ!?!」

「何か俺も足が痛いな……果南さんのおっぱい揉んだら治るかも……」

「天は関係ないよねえ!?!っていうか、二人ともおっぱい揉みたいだけでしょうが!」

「Of course!」

「英語でハモった!?!」

果南さんの怒涛のツツコミ。

段々ツツコミのレベルが上がってる気がするな……

「アハハ、やつぱり果南さんはそうじゃないと。俺は元気な果南さんが好きですよ」

「っ……もう、サラツと恥ずかしいこと言うんだから……」

「フフツ、それが天デース♪」

「鞠莉、最近果南さん以上のハグ魔になってない？」

笑いながら俺に抱きつく鞠莉の頭を、苦笑しながら優しく撫でる。

本当に、昔と変わらず甘えん坊なんだから……

「ねえ天、前から言おうと思ってたんだけど……私も呼び捨てにしてくれない？」

「え……？」

「鞠莉のことは呼び捨てでタメ口なのに、私のことはさん付けで敬語じゃん？それがちよつと違和感あるっていうか……私も呼び捨てとタメ口の方が良いな」

「……良いんですか？」

「勿論」

頷く果南さん。

本人にこう言われたら、断るのも野暮だよな……

「……分かった。よろしく、果南」

「っ……まだちよつと恥ずかしいけど、悪くないかも……」

照れたようにはにかむ果南。

そんな様子を見て、鞠莉が膨れっ面になっていた。

「もうっ！果南まで呼び捨てにするなんてっ！」

「ほれほれ〜♪」

「あ〜ん♡」

「・・・鞠莉が完全に転がされてる」

呆れている果南。

幼馴染がチヨロすぎる件について。

「アハハ、まあそれはさておき・・・皆よく寝てるねえ」

スヤスヤ眠る他のメンバー達を見て、思わず苦笑してしまう。

壁にもたれかかって眠るダイヤさんと、その肩にもたれかかって眠るルビィ。

その二人の対面の席では、花丸と善子が寄り添い合って眠っていた。

別の席では曜と梨子が、こちらも寄り添い合って眠っている。

そしてその対面の席に座る千歌さんも・・・

「あ、千歌さんは起きてるみたい・・・」

「ホントだ・・・難しい顔して窓の外眺めてるね・・・」

「何か考え事かしら？」

ひそひそと話し合う俺達。

現に千歌さんは真剣な表情をしており、窓の外を眺めながら物思いに耽っているようだった。

「・・・多分、まだ考えてるんじゃないかな。μ、sとA q o u r sの違いを」

「最後にヒントもらってたもんね・・・っていうか、天は答えを知ってるの？」

「勿論。これでも両方のグループのマネージャーだからね」

笑う俺。

「とはいえ、自分達で気付かないと意味が無いから。教えるつもりはないよ」

「むう、天のケチ！」

「鞠莉だつて内浦の魅力について、千歌さん達に教えなかったでしょ」

「そ、それは千歌っちが断ったから！」

そんなやり取りをしているうちに、電車が次の駅に止まった。

この駅って・・・

「・・・懐かしいな」

独り言を呟く。

思い出すのは五年前・・・μ、sが解散を決めた、あの日のことだ。

あの日、この駅のプラットホームで俺達は・・・

『全部受け止めてあげるから、今は思いつきり泣きなさい』

「っ．．．」

絵里姉の言葉を思い出し、涙ぐみそうになつてしまう。

感傷的な気分から何とか抜け出そうと、窓の外に目をやった時だった。

「っ!?!」

窓の外に広がっている、夕陽色に染まった海．．．

その海の砂浜に、一人の女性が佇んでいるのが見えた。

遠目に見えるだけだし、海を眺めているので後姿しか見えない。

それでも、俺には確信があつた。

あの人は．．．

「天?」

俺の様子に気付いたのか、首を傾げている果南。

俺は勢いよく立ち上がると、急いで電車のドアへと向かった。

「ちよ、天!?!」

「どうしたの!?!」

「えっ、天くん!?!」

果南と鞠莉の声に気付いたのか、千歌さんがこちらを見て驚いている。

眠っていた他の皆も起き出したようだ。

「ゴメンっ! 俺はちよつと寄り道して帰るからっ! 皆は先に帰っててっ!」

それだけ言い残して電車を降りた俺は、プラットホームを全力で駆けるのだった。

# 目の前に僕らの道がある。

電車を降りて駅を出た俺は、窓から見えた砂浜へとやって来ていた。

そこにはまだ、あの女性が佇んでいた。

オレンジブラウンのロングヘアを風に靡かせ、夕陽に染まった海を眺めている。

やっぱり……

「……懐かしいよね、この場所」

「っ!?!」

ビクツとしてこちらを振り返る女性。

その表情が驚愕に染まる。

「ええっ!?!天くん!?!」

「久しぶり……穂乃果ちゃん」

そう、この女性こそ高坂穂乃果ちゃん……μ'sのリーダーである。

「な、何でここにいるの!?!」

「実はここ何日か、東京に戻ってたんだよ。今日内浦に帰るんだけど、途中で穂乃果ちゃんを見かけたから挨拶しとこうと思って」

「東京に戻ってたの!？」

「うん。穂乃果ちゃん以外の皆と会ってたよ」

「ずるいよ!？前もって言うてくれれば、私だつて東京に残ってたのに!？」

「アハハ、ゴメンゴメン。それにしても・・・生きてたんだね」

「何その驚いた顔!？そりゃ生きてるよ!？」

「いや、一人で旅行に行つたつていうからさあ・・・もう帰つて来ないと思つてたよ」

「何で!？私そんなに信用されて無いの!？」

「五年前、ニューヨーク、迷子」

「その節は大変申し訳ございませんでしたあああああつ!」

全力で土下座する穂乃果ちゃん。

いやあ、あの時は大変だったなあ・・・

「ん?天くん、今『皆と会つてた』つて・・・ひよつとして、絵里ちゃんも?」

「ああ、うん・・・無事に仲直り出来たよ」

「ホントに!？良かったあ!」

ホツとした様子の穂乃果ちゃん。

俺と絵里姉が喧嘩した時、誰よりも心配してくれてたもんな・・・

「色々心配かけちゃつてゴメンね」

「ううん、仲直り出来たら良いの」  
そう言って微笑む穂乃果ちゃん。

この五年の成長に加え、サイドテールにしていた髪を下ろした穂乃果ちゃんは……  
グツと大人っぽくなっていった。

微笑んだ表情がとても綺麗で、思わずドキッとしてしまう。

「天くん？どうしたの？」

「いや、何と言うか……成長したね、穂乃果ちゃん」

「年下に言われるセリフじゃなくない!？」

穂乃果ちゃんのツツコミ。

いや、まあそうなんだけども。

「ところで穂乃果ちゃん……どうしてここに？」

「帰る途中で、何となくこの景色を見たくなくて……寄り道しちゃった」

苦笑しつつ、再び海へと視線を向ける穂乃果ちゃん。

俺達にとって、ここは忘れられない場所だった。

何故なら……

「……μ, sの解散を決めた場所、だもんね」

「……うん」

五年前、μ s は岐路に立たされていた。

絵里姉・希ちゃん・にこちゃんの卒業を機に解散するのか、それとも残りのメンバーで続けていくのか……

三年生三人は、次の年も学校に残る俺達に選択を委ねてくれた。

穂乃果ちゃん・ことりちゃん・海未ちゃん・真姫ちゃん・凜ちゃん・花陽ちゃんは熟考し、全員が同じ答えを出した。

すなわち、『μ s を解散する』という答えを……

「あの時、天くんは一切口を出さなかったよね。天くんもμ s のメンバーなんだし、天くんの答えも聞きたかったのに」

「俺の答えなら、あの時言ったでしょ」

溜め息をつく俺。

「『俺は皆の意見に従う』って。こういうのは、実際にステージに立つ皆の気持ち尊重されるべきだと思っただから」

「……正直な話、天くんはどうしたかったの?? μ s を続けたかった?」

「いや、それを今言っても……」

「知りたいの。お願い」

真っ直ぐな目で俺を見つめる穂乃果ちゃん。

これは言い逃れ出来ないな・・・

「・・・考えてなかった、つていうのが正直なところかな」

「え・・・？」

意味が分からない、といった様子の穂乃果ちゃん。

「ど、どういうこと・・・？」

「自分がどうしたいのかを考える前に・・・分かっちゃったから」  
海を眺める俺。

「きつと皆は・・・解散を選ぶだろうなって」

「っ!？」

息を呑む穂乃果ちゃん。

「『誰か一人でも欠けたら、それはもうsじゃない』・・・きつと皆、そう言うんだ  
ろうなって」

「ど、どうして・・・」

「これでもマネージャーだから。それぐらい分かるよ」  
苦笑する俺。

「それに・・・俺もそう思ったから。だからあの時、何も言わなかったんだよ」  
それと同時に、心に決めたことがある。

μ、sが解散するというなら・・・俺はもう、スクールアイドルのマネージャーはやらない。

最後までμ、sの・・・皆のマネージャーでいよう。

あの時、自分の中でそう決めたのだ。

「・・・そのはずだったんだけどなあ」

鞠莉に脅されてA q o u r sのマネージャーをやることになり、今は自分の意思でA q o u r sのマネージャーになっている。

五年前の俺が聞いたら、何とやることやら・・・

「穂乃果ちゃん・・・人生っていうのは、何が起きるか分からないものなんだよ」

「急にどうしたの!?!」

「人生を舐めてそんな穂乃果ちゃんに、教えてあげようと思って」

「舐めてないよ!?!天くんは私を何だと思ってるの!?!」

「アホの子」

『『天●の子』みたいな言い方しないでくれる!?!』

「冗談だって。アホ乃果ちゃん」

「喧嘩売ってる!?!」

「おい!天く〜ん!」

ギヤーギヤー騒いでいる穂乃果ちゃんを宥めていると、千歌さんがこちらへ向かって走ってきた。

他の皆も後ろに続いている。

「えっ、何してんの？」

「こつちのセリフだわっ！」

善子のツツコミ。

「何で急に電車を降りたのよ!? ビックリするでしょうが！」

「そうすら！ 善子ちゃんは今泣きだつたすら！」

「『天、どこ行っちゃったのかなあ・・・』って涙目で心配してたんだよ!？」

「ずらまるビィ!?! 余計なことは言うの止めなさいよ!？」

「アハハ、ゴメンゴメン」

苦笑しながら善子の頭を撫でる。

「もう、善子つてば可愛いんだから」

「か、可愛いとか言うなあっ！」

「そうよ天！ そういうのはマリーに言いなさい！」

「おっぱい揉んで良いなら言うわ」

「OK！ 好きなだけ揉みしだきなさい！」

「だからダメだつてば!？」

「ぶっぶー!ですわ!」

果南とダイヤさんに止められてしまう。

チツ・・・

「全く、天くんつてホントにエッチだよね・・・」

「露出狂に言われたくないわ」

「ちよ、まだそれ引きずるの!?!違うつて言ってるでしょうが!」

「朝の学校で水色の下着を晒してたくせに」

「止めてええええええええええつ!?!」

「あぁっ!?!曜ちゃんが海に飛び込もうとしてる!?!」

「落ち着いて曜ちゃん!?!」

必死に曜を止める梨子と千歌さん。

「やれやれ、騒がしい人達だなあ」

「「「「「「天(くん)(さん)のせいでしょうが!」「「「「「」」」」」」」」

「アハハ、皆仲良しだねえ」

楽しそうに笑っている穂乃果ちゃん。

そんな穂乃果ちゃんを見て、千歌さんがピシッと固まってしまった。

「も、もしかして・・・高坂穂乃果さん!？」

「そうだよ!初めまして!」

「「「「「ええっ!?!」」」」」」

驚いている皆。

いやいやいや・・・

「気付いてなかったの?」

「だ、だって雰囲気が違うからっ!」

「ま、まさかでしたわ・・・!」

緊張で震えているルビィとダイヤさん。

まあ確かに、五年前の姿しか知らないんじゃないか・・・

μ'sの中で一番見た目が変わってるの、穂乃果ちゃんだもんなあ・・・

「・・・この子達がAqoursなんだね」

微笑む穂乃果ちゃん。

「何だか凄くキラキラしてる・・・天くんが惹かれるのも、分かる気がするよ」

「・・・そうでしょ?」

微笑み返す俺。

「最高の仲間達だって・・・そう思ってるよ」

「・・・そっか」

穂乃果ちゃんはその言って笑うと、真っ直ぐに俺の目を見つめてきた。

「ねえ、天くん・・・今の天くんは、μ sの十人目？それとも、A q o u r sの十人目？」

試すような穂乃果ちゃんの問いかけ。

他の皆が心配そうに俺を見ているが・・・

「そんなの・・・両方に決まってるでしょ」

俺の答えは決まっていた。

「俺はこれからはずつと、μ sの一員だよ。それと同時に、A q o u r sの一員でもある。μ sの皆のことも、A q o u r sの皆のことも・・・俺は十人目として、全力で支えるよ」

「それでよし！」

穂乃果ちゃん満足気な笑みを浮かべると、皆のこゝろを見回した。

「スクールアイドル、全力で楽しんでね！応援してるから！」

「「「「「は、はいっ！」「「「「「」」

緊張した面持ちで返事をする皆。

その反応に穂乃果ちゃんはクスクス笑うと、心を落ち着かせるかのように深呼吸をし

た。

そして……

「だって～可能性～感じたんだ～♪そうだ～スス～メ～♪」

「っ……」

この歌って……

「後悔～したくない～目の前に～♪」

「……僕らの～道がある～♪」

穂乃果ちゃんに続き、最後の歌詞を口ずさむ。

『ススメ↓トウモロウ』か……

「天くんは天くんの進みたい道を、全力で駆け抜けたら良いよ」  
笑みを浮かべ、拳を突き出す穂乃果ちゃん。

「私はそれを、全力で応援してるから」

「ありがとう」

穂乃果ちゃんと拳を合わせる俺。

「……頑張つてね、マネージャー」

「……頑張るよ、リーダー」

それだけ言葉を交わし、穂乃果ちゃんはその場を去って行った。

全く、こういう時だけカッコ良いんだから・・・

「素敵な歌声だったずら・・・」

「ええ、本当に・・・」

うっとりしている花丸と梨子。

「あれがμ，sのリーダー・・・」

「何と言うか、オーラがあつたね・・・」

呆然としている曜と果南。

「・・・どうしてあの人リーダーなのか、分かる気がするわ」

「・・・綺羅ツバサもそうだったけど、カリスマ性を感じるわね」

感嘆の声を上げる善子と鞠莉。

「ほ、穂乃果さんに会えるなんて・・・！」

「我が生涯に、一片の悔い無し・・・！」

感極まっているルビィとダイヤさん。

そんな中千歌さんは、去っていく穂乃果ちゃんの背中を真剣に見つめていた。

「・・・良かったんですか？色々聞きたいこともあつたでしょうに」

「・・・良いんだよ」

静かに答える千歌さん。

「それに、何となく分かったから．．．μ s の、何が凄かったのか」  
吹っ切れたような表情の千歌さん。

「多分、比べたらダメなんだよ。追いかけてやダメなんだよ。μ s も、ラブライブも、輝きも．．．」

「．．．私もそう思う」

静かに頷く梨子。

「μ s の人達に会って、当時の話を聞かせてもらって．．．それで思ったの。一番になりたいとか、誰かに勝ちたいとか．．．μ s って、そうじゃなかったんじゃないかなって」

「．．．うん」

微笑む千歌さん。

「μ s の凄いところって．．．何も無いところを、何も無い場所を、思いつきり走ったことだと思う。皆の夢を叶える為に、自由に真っ直ぐに．．．だから飛べたんだ！」  
千歌さんはそう言うのと、俺達の方を振り向いた。

「μ s みたいに輝くことは、μ s の背中を追いかけることじゃない．．．自由に走ることなんじゃないかな。全身全霊、何にも囚われずに、自分達の気持ちに従って！」

「自由に……！」

「Run and run……！」

「自分達で決めて、自分達の足で……！」

やる気に満ち溢れている果南・鞠莉・ダイヤさん。

「何かワクワクするぞら！」

「フフツ、そうだね！」

「全速前進であります！」

顔を輝かせている花丸・ルビィ・曜。

「自由に走ったらバラバラになっちゃわない？」

「どこに向かって走るの？」

千歌さんに尋ねる善子と梨子。

その問いに、千歌さんは迷わずに答えた。

「私は……0を1にしたい。あの時のままで……終わりたくない」

「千歌さん……」

あの日、俺が千歌さんに言った言葉……

あの時の悔しさを、千歌さんは未だに忘れてはいないんだろう。

そしてそれは……千歌さんだけじゃない。

「ルビイも！」

「マルもずら！」

「あの時の悔しき、晴らしてやろうじゃない！」

「ええ、やりましょう！」

「何か燃えてきた！」

ルビイ、花丸、善子、梨子、曜・・・

千歌さんと共に悔しさを味わったメンバーが、やってやろうと息巻いている。

「これで本当に一つにまとまれそうな気がするね！」

「フフツ、遅すぎですわ♪」

「皆シャイなんだから♡」

果南、ダイヤさん、鞠莉の三年生組も気合い十分だ。

皆の言葉を聞いて笑みを浮かべた千歌さんは、俺へと視線を向けた。

「これが、私達の出した答え・・・どうかな？」

「満点です」

微笑む俺。

「これで『μ, sを追い抜く』とか言ったら、東京湾に沈めてましたね」

「怖っ!?そんなことするつもりだったの!？」

「いやあ、そんなことにならなくて良かったあ・・・チツ」

「舌打ち!?今舌打ちしたよねえ!」

ギャーギャー喚く千歌さん。

相変わらずうるさいなあ・・・

「フフツ、それより天くん・・・さっきの言葉は本当?」

悪い笑みを浮かべながら、俺の腕に抱きついてくる梨子。

「A q o u r s の十人目になってくれるって、私には聞こえたんだけど?」

「っ・・・いや、それは・・・」

「マリーの耳にもハッキリ届いたわよ」

ニヤニヤしながら、もう片方の腕に抱きついてくる鞠莉。

「どうなのかしら?天?」

「ぐっ・・・」

言葉に詰まる俺。

他の皆も、ニヤニヤしながら俺のことを見ている。

ああもう、コイツらときたら・・・!

「何!?!俺が十人目になっちゃ悪いの!?!」

「フフツ、誰もそんなこと言っていないでしょ?」

優しく俺の頭を撫でてくれる千歌さん。

「ありがとう、天くん・・・ようこそ、A q o u r s へ」

「やったあああああつ！」

「天くんがA q o u r s に入ったあああああつ！」

「ずらあああああつ！」

歓声を上げる曜、ルビィ、花丸。

「全く、はしゃいじやつて・・・ぐすつ」

「あれ？善子ちゃん泣いてる？」

「ヨハネよっ！泣いてないわよゴリラっ！」

「ゴリラじゃないもん！果南だもん！」

「はいはい、落ち着いて下さいな」

「前髪。パツツン堅物ですわ女は黙ってて！」

「戦争ですわあああああああああつ！」

ギャーギャー言い合っている善子、果南、ダイヤさん。

あの人達何してんだろ・・・

「・・・ありがとう、天」

小さな声で呟く鞠莉。肩がわずかに震えている。

「本当に……ありがとう……！」

「……泣かないの」

鞠莉にギョッと身体を寄せる俺。

多分鞠莉は、今でも自分のしたことを後悔してるんだろうな……

「これからも一緒に頑張ろう。ね？」

「っ……うん！」

涙を拭い、笑顔を見せる鞠莉。

と、もう片方の腕を抱き締める力が強くなった。

振り向くと、梨子が頬を膨らませてこつちを見ている。

「もうっ！イチャイチャするの禁止っ！」

「いや、何で怒ってるの？」

「フフツ……やっぱりそういうことなのね、梨子」

笑みを浮かべる鞠莉。

あれ、何か笑顔が怖いような……

「簡単には渡さないわよ……？」

「上等……！」

あれ、何かバチバチしてる？何で？

「よし！天くんも正式にA q o u r sに加入したことだし、円陣組もう！」  
声を上げる千歌さん。

俺も梨子と鞠莉の間に入り、円陣に加わる。

そしてそれぞれが手を重ねたところで……

「あつ……ちよつと良いですか？」

「ん？どうしたの？」

俺の制止に首を傾げる千歌さん。

俺の頭の中には、あるイメージが浮かんでいた。

「指、こうしません？」

右手の親指と人差し指に力を入れ、Lの逆のような形を作る。

「これを皆で繋げば、Oの形になるでしょ？そして手を上に上げる時は、人差し指を上にして……」

「あつ!？」

「OからIへ!？」

曜と梨子が気付き、驚きの声を上げる。

OからIへ……そこへ向かって走ろうとしている俺達にとって、これはピッタリだ  
と思う。

「天くんナイスアイディア！それでいこう！」  
笑みを浮かべる千歌さん。

俺達はそれぞれの指を繋ぎ、0の形を作った。

「0から1へ・・・今、全力で輝こう！」

千歌さんが声を張り上げる。

そして・・・

「A q o u r s ~ !」

「~~~~~サクンシャイン！~~~~~」

天高く、皆で人差し指を突き上げる。

ここは、sが解散することを決めた場所・・・

だからこそ、どうしても切ない気持ちになってしまっていた。

でも今日、新しい思い出が出来た。

俺がA q o u r sに入った場所・・・

皆が一つになれた場所・・・

自分達の、進むべき道を決めた場所・・・

俺にとって、この場所が特別である理由が増えた。

悲しくて寂しい理由だけではなく、前向きな嬉しい理由が・・・

「よし、じゃあ帰ろう！内浦に！」

踵を返し、歩き出す千歌さん。

小さいようできて、皆を引つ張る大きな背中・・・

その背中が、穂乃果ちゃんの影と重なって見えた俺なのだった。

## 【東條希】 一番の幸せは・・・

「天くん、起きて」

「んう・・・」

身体を優しく揺すられる。

俺は起きたくなくて、瞼を閉じたままにしていた。

「もうちよつと寝かせて・・・」

「ダメ♡」

「んむっ!?!」

顔の上に、重量感のある柔らかいものが乗せられる。

あつ、何か幸せな感触・・・

じゃなくて、鼻と口が塞がれて息が出来ない。

「ぶはあっ!?!」

「あんっ♡」

急いで飛び起きて息をする。

ああ、死ぬかと思った・・・

「ちよつと希、起こし方が手荒過ぎない？」

「にししつ、起きない天くんが悪いんだよ」

悪戯っぽく笑う希。

「ところで天くん、ウチのおっぱいで目覚めた感想は？」

「幸せだったけど、やっぱり揉むのが一番だわ」

「もうっ、エッチ♡」

大きな胸を両腕で隠す希。

高校生の時からかなりの大きさを誇っていたその胸は、当時よりさらに成長していった。

本当にありがとうございます。

「フフツ、天くんは相変わらずおっぱいが好きやね♪」

「アハハ、それは否定できないかな」

俺はそう言って笑うと、希の身体を抱き寄せた。

「まあ、俺が一番好きなのは希だけど」

「フフツ、知ってる」

俺に身体を委ねてくれる希。

「ウチが一番好きなのも天くんやから」

「知ってる」

俺達は笑い合うと、そのまま顔を近付けてキスをした。朝から幸せを噛み締める俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「それにしても、内浦は良い所やね」

「俺も本当にそう思う」

手を繋ぎ、海辺を散歩する俺達。

休みの日は、こうして二人で散歩するのが決まりになっているのだ。

「フフツ、こつちに引越して来て良かった」

笑顔の希。

今年の三月に東京の大学を卒業した俺は、四月から沼津で働き始めていた。希はそんな俺についてきてくれて、俺達は今内浦で一緒に暮らしている。

ちなみに家は、俺が内浦で一人暮らしをしていた時に住んでいたあの平屋だ。

本来は小原家の所有物だが、鞠莉に相談したところ快く貸してもらえることになった。

しかも『マリィと天の仲じゃない』の一言で家賃はタダ・・・  
本当に鞠莉には頭が上がらない。

「それにしても、希って行動力あるよね・・・まさかあんなスッパリ仕事辞めるとは思わなかったわ」

呆れる俺。

実は俺は最初、一人で内浦に引越して来ようと思っていた。

希には仕事があるし、それを辞めさせるつもりもなかった。

ところが俺が沼津での就職を考えていることを知った希が、『仕事を辞めて天くんについていく』と宣言。

引き止める俺だったが、『天くんはウチと離れたいの・・・？』と涙目になる希を前にあえなく撃沈。

二人で内浦で暮らすことが決まったのだ。

「天くんは浮気性やからね。目を離したら他の女のところに行きそうやし」

「まさかの信頼度ゼロ？俺は希一筋なんだけど」

「じゃあ聞くけど、志満さんから『今夜どう？』って誘われたらどうするっ？」

「・・・オ、オコトワリシマス！」

「間があつたしカタコトだし信用できません」

ジト目で睨む希。

クツ、まさか女神である志満さんの名前を出してくるとは・・・

真姫ちゃんの真似じゃ騙せなかつたか・・・

ちなみに家が近いこともあり、高海家の皆さんには今でもお世話になっている。

志満さんは若女将として旅館を切り盛りしているし、美渡さんも会社員としてバリバリ働いている。

千歌さんは志満さんの手伝いをしており、よく俺に『志満姉が厳しいんだよお・・・』と愚痴を零していた。

まあ言葉とは裏腹に充実した表情をしているので、何だかんだで今の仕事が楽しいんだらうな。

「それに・・・仕事より、好きな人と一緒にいることの方が大事やから」

「希・・・」

希の両親は共働きなので、子供の頃は寂しい思いをしたという話は聞いていた。

現に高校の時に一人暮らしをしていた希は、俺の目から見てもどこか寂しそうだつた。

そんな希の力になりたいと、あの時強く思ったことをよく覚えている。

「・・・一人になんかしないから」

「天くん・・・？」

希の手を握る手に、ギュっと力を込める。

「これからもずっと一緒だから。ね？」

「・・・もう、天くんはズルいなあ」

笑みを浮かべる希。

「全く・・・天くんに惚れそうや」

「え、惚れてるから付き合ってるんじゃないの？」

「そうなんやけど・・・もう惚れてるけど、それでも惚れそうなんよ」

「イミワカンナイ」

「相変わらず真姫ちゃんのモノマネ好きやね・・・」

呆れている希。

俺達は結婚しておらず、あくまでも同棲中のカップルだ。

勿論お互いに結婚するつもりでいるが、今はまだその時期ではないと思っっている。

俺もまだ社会人一年目だしな・・・

「真姫ちゃんかあ・・・久しぶりに会いたいなあ・・・」

「・・・むう」

ジト目で俺の腕に抱きつく希。

「ウチとのデート中に他の女の子に会いたいだなんて、ええ度胸やね？」

「あ、嫉妬した？」

「・・・ふんっ」

ぷいっとなつぽを向く希。

大人な希がこういう一面を見せてくれると、愛されていることを実感できて嬉しくなるんだよな・・・

いや、当の本人は怒ってるんだけども。

「ゴメンゴメン。どうしたら許してくれる？」

「・・・ん」

目を閉じて唇を突き出す希。

全く、俺の彼女は本当に可愛いんだから・・・

俺は苦笑すると、希の唇に自分の唇を重ねるのだった。

\*\*\*\*\*

「わぁ・・・!」

目を輝かせている希。

俺達の目の前には、夕陽に染まった内浦の海が広がっていた。

「綺麗・・・」

「でしょ?」

笑う俺。

俺達が今いるのは、淡島神社へと続く階段の途中の開けた場所だ。

浦の星時代にダイヤさんから教えてもらったこの場所は、今でも俺のお気に入りスポットである。

「そういうえばこの階段、Aqoursの練習でよく使ってたんだっけ?」

「そうそう。結構キツイんだけど、体力強化にはもってこいだったよ」

苦笑する俺。

まだAqoursが千歌さんと曜と梨子だけだった頃は、ここまで辿り着くのがやっとだったっけ・・・

俺も含め、皆でよくそのベンチでぐったりしてたなあ・・・

この階段を涼しい顔で駆け上っていく果南は、本当に体力お化けだと思う。

「……フツツ」

「希……?」

急に笑う希に、首を傾げる俺。

どうしたんだろう?

「いや、楽しそうな顔してるなあって思っただけ。当時のことを思い出してたんやろ?」

「……まあね」

千歌さん、曜、梨子、花丸、ルビィ、善子、ダイヤさん、果南、鞠莉……

A q o u r s として過ごした日々は、一生忘れられない大切な宝物だ。

勿論、s もそうだが、A q o u r s も俺にとってかけがえのないものなのである。

「……だから内浦に来たかったんよ」

「え……?」

柔らかに微笑む希。

「天くんがここで何を見て、何を感じて過ごしていたのか……ウチは知らなかったか

ら。ここにきて、天くんと一緒に過ごしてみたら分かるかなって……そう思ったんよ」

「それで俺についてきてくれたの……?」

「勿論、天くんと離れたくなかったっていうのが一番の理由だよ?でも、それも理由の

「つだったんよ」

希はそう言うのと、照れたようにはにかんだ。

「大好きな人のことやもん・・・知りたくなるのは当然やろ？」

「っ・・・」

急に愛しさが込み上げてきて、希をギュツと抱き締める。

腕の中の温もりが、どうしようもなく愛おしかった。

「フフツ、天くんは甘えん坊やね」

「大好きな人が相手やもん・・・甘えたくなるのは当然やろ？」

「ウチのモノマネせんといて」

苦笑しつつも、俺を抱き締め返してくれる希。

そんな希に、俺はどうしても聞きたいことがあった。

「・・・ねえ、希」

「ん？なあに？」

「今日のデート、いつも通りだったけど・・・良かったの？今日は希の誕生日なのに」  
六月九日・・・つまり今日は希の誕生日なのだ。

俺は何か特別なことをしようと思っていたのだが、希の希望は『いつも通りのデートが良い』だった。

二人で散歩をしながら、A q o u r s 時代の思い出の場所を巡ったり・・・  
希が望んだのは特別なことではなく、あくまでも普通のことなのだ。

「当たり前やん」

微笑む希。

「大好きな人と一緒に、穏やかな一日を過ごす・・・こんな幸せなこと、他に無いと思う。ウチにとつては、それが何よりの幸せなんよ」

「・・・分かるわあ」

「おっ、分かってくれる？」

「もう惚れてるけど惚れそうな気持ち・・・今なら良く分かるわあ」

「あ、そっち？」

希のツツコミ。

俺は笑うと、希を抱く腕に力を込めた。

「希・・・誕生日おめでとう」

「フフツ、ありがとう」

「こんな俺に着いてきてくれて、本当にありがとう・・・心の底から愛してる」

「・・・ウチも愛してるよ、天くん」

お互いの視線が合い、どちらからともなく顔が近付き・・・その距離がゼロになる。

目の前の愛しい存在を、絶対に離さない・・・心に強く誓う俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《希視点》

翌日・・・

「ふんふんふん♪」

鼻歌を歌いながら、朝ご飯の支度をするウチ。

その時、スマホのアラーム音が鳴った。

「あつ・・・そろそろ天くんを起こさないと」

アラームを止めて寝室へと向かう。

そこでは、天くんが幸せそうな表情で眠っていた。

「フフツ・・・気持ち良さそうやね」

寝ている天くんの側に座り、寝顔を見つめながら頭を撫でる。

「全く・・・普段は穏やかなのに、何で夜になると獣になるんや・・・」

昨夜のことを思い出し、思わず顔が熱くなってしまう。

相変わらずおっぱい大好きやし、これ以上大きくなったらどうしてくれるんや・・・

「・・・まあ、天くんが喜んでくれるなら良いかな」

そんな風に思えてしまうあたり、自分がいかに天くんに惚れているかが分かる。

最初は弟みたくないな存在だと思ってたのに・・・

『希ちゃんのワガママだったら、俺は何でも叶えてあげたい。そう思えるほど、俺にとつて希ちゃんは大切な存在なんだよ』

μ sとして活動していた頃、天くんから言われた言葉だ。

ウチが皆に遠慮していることに気付いた天くんが、屈託の無い笑みを浮かべてかけてくれた言葉・・・

本当に嬉しかった。

ウチのことを、そこまで想ってくれていることが。

「・・・ウチにとつても、天くんは大切な存在だよ」

仕事は好きだった。

でも天くんが再び内浦へ行こうとしていることを知った時、迷い無く辞めることを決めた。

好きな仕事を辞めてついて行きたいと思えるほど、天くんのことが大好きやから。

天くんと一緒にいられるなら、ウチはもう何も要らない。

天くんと何でもない一日を過ごすことが、ウチにとって一番の幸せなんやから。

「・・・ありがとう、天くん」

ウチを誰よりも大切にしてくれて、誰よりも愛してくれて・・・

本当にありがとう。

「いつかちゃんと・・・ウチを天くんのお嫁さんにしてね」

天くんの頬に手を添え、顔をゆっくり近付ける。

そして・・・

「・・・大好き」

重ね合わせた唇から感じられる温もりが、何よりも愛おしく感じるウチなのだった。

## 【小原鞠莉】何年経つても・・・

「たこ焼きが食べたい」

「はい？」

鞠莉の眩きが耳に入り、思わず聞き返してしまふ俺。

俺と鞠莉は今、俺の家でのんびり過ごしていた。

A q o u r s の放課後レッスンを終えて帰宅したところ、いきなり鞠莉が俺の家に押しかけてきたのだ。

「たこ焼きが食べたい」

「いきなりだな・・・」

呆れる俺。

思い返してみると、今日の鞠莉はどこか変だった。

上の空というか、心ここにあらずというか・・・

俺の家に押しかけてきてからも、ずっと俺の太ももに頭を乗せて寝転がってるし・・・

「じゃあ・・・食べに行く？」

「っー！」

鞠莉の頭を撫でながらそう答えると、鞠莉がガバツと飛び起きた。

「いいの!?!」

「うん。俺も食べたいし」

確か花丸が、美味しかったこ焼き屋さんを知ってるって言ってたな・・・  
早速電話して聞いてみるか。

「決まりね!それじゃ行きましよう!大阪に!」

「オツケー・・・ん?」

ちよつと待つて?この子今何て言つた?

「こうしちゃいられないわ!早速準備しなくちゃ!」

「ねえ鞠莉、今大阪つて・・・」

「出発は明日の朝よ!天も準備しておいてね!」

「いや、大阪つて・・・」

「また明日ね、天!Good night!」

「人の話を聞けえええええつ!」

俺のツツコミも虚しく、勢いよく家を飛び出して行く鞠莉。

「・・・何なのあの子」

ポツンと取り残される俺なのだった。

\*\*\*\*\*

翌日・・・

「小原鞠莉が〜？大阪に〜？キタアアアアアアアアッ！」

「ネタが古いな・・・」

やたらテンションの高い鞠莉を、呆れながら眺めている俺。

まさか本当に大阪に来ることになるとは・・・

いきなりヘリに乗せられるこっちの身にもなつてほしい。

「そもそも、今日つて平日だよな？普通に学校あるよね？」

「理事長権限で公欠扱いにするから大丈夫よ」

「職権濫用じゃん!?!」

さつきスマホを見たら、ダイヤさんからえらい数の着信が入ってたんだけど・・・

ラインでも『無事ですか天さん!?!』『鞠莉さんの暴走に巻き込まれていませんか!?!』つ

てきてるんだけど・・・

すみませんダイヤさん、ガッツリ巻き込まれています。

「まあまあ、良いじゃない。今日はマリーの Birthday なんだから♪」

「誕生日だからって何でも許されるわけじゃないからね？」

そう、今日は鞠莉の誕生日なのだ。

せっかくの誕生日だっていうのに、俺と二人で大阪にいて良いんだろうか・・・

「せっかく学校をサボったんだもの！今日はとことん楽しむわよ！」

『サボった』って言っちゃったよ・・・

「ほら天、早く行きましょう！」

俺の手を握り、元気よく歩き出す鞠莉。

やれやれ・・・

「・・・まあ、たまにはこういうのも良いかな」

「おつ、ようやく乗り気になったのかしら？」

「まあね」

鞠莉の手を握り返す俺。

「せっかくのデートだし、楽しまなきゃ損でしょ。可愛い女の子が相手なら尚更ね」

「デ、デート・・・しかも可愛いって・・・」

何故か顔を赤くしている鞠莉。

「鞠莉? どうかした?」

「な、何でもないっ! 早く行きましょうっ!」

慌てて歩き出す鞠莉に、首を傾げる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「Wow! Delicious!」

美味しそうにたこ焼きを頬張る鞠莉。

道頓堀へとやって来た俺達は、たこ焼きの食べ歩きをしていた。

「はい天、あくん♪」

「あくん・・・ん、美味しい!」

「でしょ? さっきのお店のたこ焼きとは、少し違うわよね」

「確かに・・・お店によって違うものなんだねえ」

この辺り一帯のたこ焼き屋さんを片っ端から巡っているが、お店によって少し違うたこ焼きが出てくるので全然飽きなかった。

流石はたこ焼きの本場、恐るべし・・・

「ふう・・・そろそろお腹いっぱいになってきたわ」

「満足した？」

「Yes! 大満足デース！」

「そりゃ良かった」

苦笑する俺。

「それじゃ、そろそろ内浦に帰ろつか」

「えっ?今日は帰らないわよ?」

「えっ?」

「えっ?」

首を傾げている鞠莉。

「いやいやいや・・・」

「あれ、聞き間違いかな・・・今日は帰らないって聞こえたんだけど・・・」

「ええ、だって今日は大阪に泊まる予定だし」

「初耳なんだけど!?!」

「今初めて言ったもの」

悪びれずに答える鞠莉。

「さあ、今日はとことん大阪を楽しむわよ！まずはスリー天閣へ行きましょう！」

「通天閣ね。ツうって数字の2っていう意味じゃないから」

「フフツ、ナイスツツコミ！」

楽しそうに笑いながら、俺の手を引いて歩き出す鞠莉。

まあ、鞠莉が楽しいならそれで良いか・・・

そう思ってしまうほどには、鞠莉に対して甘い俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「あー、疲れた・・・」

ホテルのベッドに横たわる俺。

宣言通り、鞠莉は一日中大阪を楽しんでいた。

通天閣だけではなく、大阪城やアベノハルカスにも行っただけ・・・

完全に観光旅行だよな、これ。

「それにしても・・・このホテル、もの凄く豪華だな・・・」

「フフツ、当然よ」

ちようどバスルームから出てきた鞠莉が、俺の呟きを聞いてクスクス笑う。

「だってここ、ウチの系列のホテルだもの」

「マジか・・・これだから成金一族は・・・」

「だから料金はタダよ」

「成金万歳！」

「清々しいほどの掌返しね・・・」

呆れている鞠莉。

いやあ、持つべきものは金持ちの幼馴染だね！

「・・・フフツ、まあ天らしいけど」

鞠莉はそう言って笑みを零すと、俺の隣に腰掛けた。

バスローブ一枚だけという姿に加え、お風呂上りの濡れた髪を下ろしている鞠莉・・・

大人の色気を醸し出した、一人の女性がそこにはいた。

「ん？どうしたの天？」

「・・・綺麗になったよね、鞠莉」

「っ・・・」

頬を赤らめる鞠莉。

「ど、どうしたの急に．．．?」

「いや、改めて思ったただけだよ。俺の幼馴染は本当に美人だなんて」

「．．．うう」

顔を真っ赤にして俯く鞠莉。

こういうところは変わってないなあ．．．

「じ、じゃあ．．．」

鞠莉は意を決したように顔を上げると、そのまま俺を押し倒してきた。

「うわっ!?! ちよ、鞠莉!?!」

仰向けに倒れた俺の上に、鞠莉が馬乗りになっている。

鞠莉は俺の肩に両手を置くと、衝撃的な言葉を口にした。

「マ、マリーのこと．．．抱いてくれる．．．?」

「．．．はい?」

え、ちよ．．．この子今何て言った?

まさかとは思うが、『抱く』って・・・

「ハグっていう意味じゃないわよ。セック・・・」

「ストップううううっ!? それ以上はストップうううううっ!?」

危ねえ!? もう少少でNGワード出るところだったよ!?

「落ち着いて鞠莉!? 自分が何を言ってるか分かってんの!?!」

「マリーの身体じゃ不満かしら・・・?」

「むしろ不満が無いから困ってるんだけど!?!」

こんなスタイル抜群の身体に、不満なんてあるわけないでしょうがあああああっ!

さつきから大きな双丘の谷間がガッツリ見えてるし、こっちは理性を保つのに必死な

んだよおおおおっ!

「それなら良いじゃない・・・マリーの身体、天の好きにして良いのよ・・・?」

甘い声で囁く鞠莉。

ああ、俺の理性が削られていく・・・

「・・・ハア」

俺は溜め息を一つ零すと、鞠莉の頬に手を添えた。

「ねえ、鞠莉・・・何をそんなに焦ってるの?」

「つ・・・べ、別に焦ってなんて・・・!」

「嘘」

鞠莉の頬を抓る俺。

「いつもの余裕な態度じゃないし、何より……身体が震えてるよ」

「っ……」

俺と鞠莉の身体は密着している為、鞠莉の身体の震えはすぐに分かった。

多分鞠莉は、心の準備が出来ていなかったのだ。

「……離れたくないの」

「え……?」

「もう二度と……天と離れたくないの」

鞠莉の目に、みるみる涙が浮かんでいく。

「離れるって……俺は鞠莉から離れたりしないよ?」

「……そんなの嘘」

首を横に振る鞠莉。

「天の周りには、可愛くて魅力的な女の子がたくさんいる。A q o u r s の皆もそうだし、μ s の皆もそう……特にμ s の皆は、マリーが知らない天をたくさん知ってる。天と心が通じ合ってる。マリーはそれが……たまらなく悔しい」

俺の顔に、鞠莉の涙が次々と零れ落ちてくる。

「もしあの時、引越してなかったら・・・天と離れ離れになってなかったら・・・天の隣に立っていたいたのは、マリーだったのに・・・そんな考え方をしてしまう自分が、本当に嫌になる・・・！」

「鞠莉・・・」

「ごめんなさい、天・・・こんな心の醜い女で、本当にごめんなさい・・・！」  
泣きじやくる鞠莉。

もしかしたらこの旅行も、空いた時間を埋めようとして・・・

「・・・鞠莉」

俺は身体を起こすと、鞠莉を優しく抱き締めた。

「さつきも言ったでしょ？鞠莉は綺麗だよ。外見も・・・内面もね」  
ゆっくりと頭を撫でる。

「鞠莉の心の優しさは、よく分かってるつもりだよ。自分が悪役になってまで、絵里姉の願いを叶えようとしてくれるような人だもん。そんな人の心が、醜いわけないでしょ」

「天・・・」

「ありがたいことに、確かに俺の周りには可愛くて魅力的な女の子がたくさんいるよ。でも鞠莉だって、その中の一人なんだよ？」

笑みを浮かべる俺。

「μ sの皆と過ごした時間は、確かに鞠莉の知らないことだろうけど……逆に俺と鞠莉が過ごした時間は、μ sの皆も知らないことだしさ。俺の小さい頃のことなんて、鞠莉しか知らないことじゃん」

「マリーしか……知らないこと……」

「それに……もし鞠莉が引越してなかったら、鞠莉は果南やダイヤさんに出会えなかったんじゃないかな？」

「っ……」

鞠莉にとつて、かけがえのない親友である二人……

あの時引越していなかったら、きっと出会うことは無かっただろう。

三人がスクールアイドルをやることも無かったし、俺が浦の星へ来ることも無かった……

全ての行動には、絶対に意味があるのだ。

「こうやって鞠莉と再会出来て、繋がる事が出来た……俺はそれが凄く嬉しい」  
鞠莉を抱く腕に力を込める。

「また出会ってくれてありがとう、鞠莉……大好きだよ」

「っ……天っ……!」

泣きじやくる鞠莉。

背中をポンポン叩いてあやしていると、しばらくして鞠莉が俺の身体を離れた。

「落ち着いた？」

「ええ・・・ごめんなさい、みつともないところ見せちゃって」

「幼馴染でしょ。水臭いこと言わないの」

「フフツ・・・ありがと」

小さく笑う鞠莉。

やっぱり鞠莉には、笑顔がよく似合う。

「それより天・・・マリーを抱かなくて良かったの？童貞卒業のチャンスだったのに」

「それなあ・・・惜しいことをしたかもしれないなあ・・・」

「あーあ、マリーの初めてをあげようと思ったのになあ」

「・・・ちよつとタイムマシン探してくるわ」

「真面目な顔して何言ってるの!？」

鞠莉のツツコミ。

ああ、勿体無いことをしてしまった・・・

「全くもう・・・そんなにマリーの初めてが欲しかったの？」

「当たり前やん」

「何で関西弁なのよ．．．仕方ないわね」

鞠莉はそう言うと、俺の頬に両手を添えた。

「初めてじゃないけど．．．これで我慢してちょうだい」

「いや、何言つて．．．っ!？」

「んっ．．．」

鞠莉の唇が俺の唇を塞ぎ、それ以上言葉を紡げなくなってしまう。

こ、これって．．．

「フフツ、ご馳走様♡」

唇を離し、ペロツと舐める鞠莉。

突然の出来事に頭が追いつかず、意識が遠のいていく。

「ちよ、天!?大丈夫!？」

慌てて受け止めてくれる鞠莉。

豊満な胸の谷間に顔を埋め、柔らかい幸せな感触を感じながら意識を失う俺ののだった。

\*\*\*\*\*

《鞠莉視点》

「すう・・・すう・・・」

「フフツ、気持ち良さそうに寝ちやって・・・」

天の頭を撫でる私。

いきなり気絶した時はビックリしたけど・・・

「・・・マリーのこと、意識してくれてるってことかしら」

先ほどまで天の唇と重なっていた自分の唇に触れる。

さつき私・・・天とキス、したのよね・・・？

「っ・・・」

今になって恥ずかしくなってきた。

顔が熱くなつていくのを感じる。

「・・・初めてじゃないのに」

そう、私にとつてはこれがセカンドキスだった。

私のファーストキスは、かれこれ十年ほど前に遡る。

「天、覚えてるかしら・・・？」

当時のことを思い出す。

『ほら鞠莉ちゃん、そんなに泣かないで』

『うう……天と離れたくない……』

引越す直前、私は寂しくて天に抱きついて泣いていた。

もう天に会えないのかと思うと、辛くて辛くてたまらなかつた。

『また会えるって。ねっ?』

『……じゃあ誓って』

『え……?』

『また絶対会えるって、天とマリーはずっと仲良しだって……今ここで誓って』

『えっと……どうすれば良いの?』

困惑している天。

私の答えは決まっていた。

『チューして』

『は……?』

『結婚式ではチューをして、永遠の愛を誓うんだって。天もマリーにチューして』

ここで私と天がチューしたら、私達は永遠の愛を誓うことになる・・・  
つまり離れていても、二人の絆が変わらない何よりの証になる。

『いや、それは違うんじゃない？』

『いいから。それとも、天はマリーとチューしたくないの・・・？』

涙目で天を見つめる私。

天は迷っていたが、私の無言の視線に折れたようだ。

『分かったよ・・・んっ』

『んっ・・・』

二人の唇が重なる。

『・・・また会おうね、鞠莉ちゃん』

『・・・うん、約束』

少し恥ずかしくて、お互い照れたように笑う。

寂しきでいっぱいだった私の心が、天の温かさでいっぱいになった瞬間だった。

「・・・懐かしいわね」

引越す直前、天と交わしたやり取りを思い出す。

あれが私のファーストキスだったなあ……

「……フツ、天は罪な男デース」

思わず笑みが零れる。

この誰よりも心の優しい男の子に、私は生まれて初めて恋をしたのだ。

そしてその恋心は、十年経っても変わることは無かった。

昔も今も……私は天のことが大好きなのである。

「こんなに惚れさせて、ファーストキスとセカンドキスまであげたんだもの……責任は取ってもらわなくちゃね♡」

少し焦ってしまい、天の前で情けない姿を見せてしまったけれど……

天は全てを受け止め、そして受け入れてくれた。

改めて思う……この人を好きになって良かった、と。

「全く……どれだけ惚れさせたら気が済むんだか……」

天の隣に寝そべり、同じ布団にくるまる。

ダイヤに見られたら、『破廉恥ですわ!』って怒られそうだけど……

「今日は私の誕生日だもの……これぐらいは許されるわよね」

天の頭を抱き寄せ、胸元に掻き抱く。

天はおっぱい大好きだし、目が覚めたら喜んでくれるかしら……

「お休みなさい、天・・・」

目を閉じ、眩く私。

「心から、愛してるわ・・・」

大好きな人の温もりを感じ、幸せを感じながら意識を手放す私なのだった。

## 【津島善子】 一番の味方

「善子ちゃん、遅いずらねえ・・・」

教室の時計を眺め、心配そうな表情を浮かべる花丸。

朝のホームルームがあと三分で始まるというのに、善子は登校していなかった。

「善子ちゃん、今日誕生日だもんね・・・早くお祝いしてあげたいなあ・・・」  
呟くルビィ。

そう、本日七月十三日は善子の誕生日なのだ。

善子を祝福すべく、俺と花丸とルビィは少し前からプレゼント等の準備を進めていた。

「でも珍しいよね。善子って厨二病の割にクソがつくほど真面目だから、いつも早めに登校してきてるのに」

「褒めてるのか貶してるのか分からないすら」

呆れている花丸。

「でも、確かに珍しいずらね・・・いつも通りの運の悪さで、登校中に事故に遭ったのかもしれないすら」



「相変わらず不運過ぎるすら．．．」  
頭を抱える俺・ルビィ・花丸なのだった。

\*\*\*\*\*

《善子視点》

「ゴホツ．．．ゴホツ．．．」

ベッドに横たわりながら、咳き込む私。

「うう．．．不幸だわ．．．」

まさか風邪を引いてしまうなんて．．．

しかも誕生日に．．．

「くつ、無理してでも学校に行くべきだったかしら．．．」

本当は体調不良を隠して登校しようとしたのだが、お母さんにバレて首に一撃を食らい気絶。

目が覚めたらベッドの中だったのである。

あんな簡単に人を気絶させるなんて、我が母親ながら恐ろしいわね・・・

「・・・寂しいなあ」

思わず本音が漏れる。

本当なら、A q o u r s の皆やクラスメイト達が祝福してくれただろうに・・・  
それに・・・

「・・・天」

思い浮かぶのは、いつもこんな私の味方でいてくれる人の顔・・・

いつも私を支えてくれる人の顔だった。

「・・・会いたいなあ」

体調が悪いせいか、いつになく気弱になってしまっている自分がいる。

全く、情けないわね私・・・

「とりあえず寝ないと・・・早く風邪を治さなくちゃ」

「そうそう、睡眠は大事だからね」

「分かってるわよ。でも眠れそうにないのよね・・・」

「ちよつと待つて。今クロロホルム持つて来る」

「物騒すぎるわ！何考えてん・・・のよ・・・」

勢いよく振り返った私は、思わず固まってしまった。

そこにいたのは・・・

「お邪魔してまゝす」

笑顔で立っている天だった。

「そ、天あああああつ!?」

「おはよう、善子」

「あ、おはよう・・・じゃなくて！何でアンタがここにいんのよ!?」

「お見舞いに来たんだよ。これ、果物の詰め合わせね」

「あつ、ありがとう・・・じゃなくて！学校はどうしたのよ!?」

『ルフィの兄』った」

「普通に『サボ』ったって言いなさいよ!？」

「ああ、ゴメンゴメン・・・これだと『エース』ったにもなっちゃうよね」

「謝るところが違うわ!」

「大丈夫だって。麻衣先生にはちゃんと『サボります』って言ってきたから」

「どこが大丈夫なの!？」

「だって麻衣先生が『了解！後は私が何とかしておくわ!』って言ってたし」

「バカなのあの人!？」

思わず頭を抱えてしまう。

教師のくせに何考えてるのよ・・・

「ゴホッ!ゴホッ!」

「ほらほら、無理しないの」

「誰のせいよ!?!」

天はツツコミをスルーし、私の身体を支えてベッドに寝かせてくれた。

「・・・私なら大丈夫だから、早く帰りなさい。風邪がうつるわよ」

「善子は相変わらず優しいよね」

笑いながら私の頭を撫でる天。

「心配してくれてありがとう。俺が善子の側にいたいだけだから、気にしないで」

「っ・・・」

顔が赤くなるのを感じる。

何でそういうセリフをサラツと言えるのよ・・・

「あと善恵さんから、『ちよっと出掛けてくるから善子の看病よろしく!』って言われ

てるんだよね」

「何してんのあの人!?!」

恐らく天がお見舞いに来たから、『二人きりにしてあげなくちゃ♪』とか余計な気を回したんだろう。

こんな無防備な状態の娘を、同い年の男と二人きりにするなんて・・・

「そういうわけだから、何かあったら遠慮なく言ってね」

そんなことを欠片も意識してなさそうな天に、少しムツとしてしまう。

「・・・じゃあ、お願いしようかしら」

天に意識させるべく、私はあることをお願いするのだった。

「少し汗かいたから・・・私の身体、拭いてくれない？」

\*\*\*\*\*

「い、良いわよ・・・」

善子に後ろを向いているように言われた俺は、その言葉で再び善子の方を振り向く。上半身裸になった善子が、ベッドにうつ伏せになって寝ていた。

「・・・露出狂二号の誕生か」

「誰が露出狂よ!?!」

「同級生の男子の前で上半身裸になってる時点で、何も言い返さないでしょ」

「うぐつ……」

言葉に詰まる善子。

やれやれ……

「それじゃ、身体拭いてくね」

「お、お願いします……」

耳まで真っ赤になつてゐる善子をよそに、お湯に浸したタオルを絞る。

つていうか、普通に横乳とか見えてるんだけど……

善子は巨乳ではないけど、そこそのモノを持つてるんだよなあ……

そんなことを思いつつ、タオルで善子の背中を拭いていく。

「んっ……」

くすぐつたような声を上げる善子。

善子の背中は白くて綺麗で、とてもスベスベしていた。

自分のことを墮天使とか言つても、やっぱり女の子なんだなあ……

「どう？ かゆいところとか無い？」

「大丈夫……思つたより気持ち良いわ、コレ……」

脱力している善子。

ゆつくり丁寧に拭いていき、やがて背中全体を拭き終わった。

「終わったよ。次は前を拭くから仰向けになってね」

「オツケー・・・ってアホかつ！何ナチュラルに誘導してんのよ!？」

「君のような勘のいいガキは嫌いだよ」

「どこの錬金術師よ!？」

ツツコミを入れながら、ガバツと身体を起こす善子。

あっ・・・

「ん？どうしたの？何で急に固まって・・・」

そこまで言いかけたところで、善子も気付いたようだ。

何も隠されていない善子の胸が、俺の目の前に曝け出されているということに。

「っ・・・キヤアアアアアアアアアアアッ!？」

善子の悲鳴が響き渡るのだった。

\*\*\*\*\*

「よしよし、恥ずかしかったね」

「誰のせいよ!?!」

「善子のせいでしょ」

「うう……」

俺に頭を撫でられつつ、布団にくるまって涙目になっている善子。俺に胸を見られたことが、相当恥ずかしかったらしい。

「とりあえず言っておくね……ごちそう様でした」

「何が!?!」

「まさか目の前で生乳を見られるとは……ありがたや……」

「拝まないでくれる!?!」

「そこそこのモノをお持ちですね」

「そこそこって何よ!?!褒められてるの!?!貶されてるの!?!」

「大ききなんて関係ないんだよ。大事なのは美しさなんだから」

「おっぱい星人に言われても欠片も説得力ないわっ!」

ゼエゼエ喘いでいる善子。

ちよつとツツコミさせ過ぎたかな……

「はいはい、とりあえず落ち着こうね」

善子の背中を優しく擦る。

「それだけ元気なら、風邪なんてすぐ治るって。善子がいないとつまんないし、早く元気になってね」

「・・・うん」

コクリと頷く善子。

「ねえ、天・・・何で学校をサボってまで、私のお見舞いに来てくれたの？」

「・・・『私にそこまでの価値があるのか』って？」

「っ・・・」

どうやら自分に自信が無いところは変わっていないらしい。

やれやれ・・・

「・・・バーカ」

そつと善子を抱き寄せる。

「そこまでの価値があると思うから、わざわざ学校サボってまで会いに来てるんだよ。

少しは察してよ」

「天・・・」

「俺にとつては学校の授業よりも、善子の方が大事なの。まあこんなこと言うと、麻衣先生に怒られ・・・いや、あの人なら『キャーッ！天くんってば大胆♡』とか言いそう」

「ああ、言いそうね・・・」

二人揃って苦笑してしまふ。

全く、良い担任に恵まれたもんだ……

「あつ、そうだ」

俺はあることを思い出し、鞆の中からある物を取り出す。

「はいコレ、誕生日プレゼント」

「えっ……用意してくれてたの……?」

「当たり前でしょ」

俺が苦笑しながら渡すと、善子がおずおずと受け取った。

「……嬉しい」

「いや、まだ開けてもないじゃない」

「中身がどうかじゃなくて……天からもらったことが嬉しいの」

善子はそう言うのと、いつになく柔らかな微笑みを浮かべた。

「ありがとう、天」

「っ……」

いつもとは違う穏やかな笑みに、思わずドキッとしてしまふ俺。

善子って、こんな大人っぽい表情もするんだな……

「天? 顔が赤いけどどうしたの?」

「な、何でもない……」

「え、もしかして私の風邪がうつった!？」

「あー……そうかもしれない」

「ちよ、だから早く帰りなさいって言ったのに！熱あるんじゃないの!？」

「ちよ、近い近い!？」

おでこをくつつけてくる善子。

どうしよう、ドキドキが止まらない……

「ああ、もうっ!」

「ちよ、天!?何で急に抱きついてくるの!？」

「何でも良いからっ!しばらくこのままでっ!」

これ以上赤くなつた顔を見られないよう、力強く善子を抱き締める俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《善子視点》

「すう．．．すう．．．」

気持ち良さそうに眠っている天。

やれやれ．．．

「何でこの状態で寝ちやうのかしら．．．」

呆れる私。

今の私は天に抱き締められた状態で、ベッドに横になっていた。

要は二人で同じベッドに寝ている状態だ。

しかも密着状態で。

「．．．まあ、良いか」

こんな風に思えるのも、相手が天だからだろう。

全く．．．

「ホントに変わった男よね．．．私が惚れた男は」

こんな私を受け入れてくれて、一番の味方になってくれた．．．

そんな誰よりも頼りになる男を、私は好きになってしまったのだ。

「クツクツクツ、このヨハネの心を奪うなんて．．．いけないリトルデーモンね」

天の頭を優しく撫でる。

目の前の存在が誰よりも愛おしくて、この温もりが何よりも心地良かった。

「全く……責任は取ってもらうんだからね」

思い返してみれば、天には恥ずかしい姿をたくさん見られている。情けないところもたくさん見せたし、さつきは胸まで見られたし……

「……まあ、天にだったら良いかな」

そんな風に思えてしまうあたり、いかに天に惚れているかが分かる。

どうやら私は、墮天使以上に天にゾッコンのようだ。

「……何か、また眠くなってきた」

瞼が重く感じる。

気持ち良さそうに眠る天に、影響されちゃったのかしら……

「ちょうど良い抱き枕もあるし……もう一眠りしようかしら」

天の背中に手を回し、抱きつきながら目を閉じる。

「……お休みなさい、天」

小さく呟き、意識を手放す。

「……大好きよ」

翌日、風邪が治った私は元気に学校に登校した。

私の首からは、銀色のロケットペンダントが下げられていた。

中には写真が入られるようになっており、そこには……

楽しそうに笑い合う、私と天のツーショット写真が入っていたのだった。

夏の暑さはハンパない。

「ルビイ、今のところの移動はもう少し早く！」

「はいっ！」

「善子はさらに気持ち急いで！」

「承知！空間移動を使うわ！」

「ああ・・・確かに善子みたいなセリフだわ」

「何で遠い目をしてるの!?!」

東京から帰って来てからというものの、Aqoursは毎日練習に励んでいた。

予備予選を突破した今、次に挑むのは地区予選だ。

それを突破すると、いよいよ決勝・・・あのアキバドームのステージに立つことが出来る。

地区予選の日がすぐそこまで迫っている中、全員今まで以上に気合いが入っていた。

「よし、そろそろ休憩にしようか」

俺の言葉を機に、皆がぐったりとその場に座り込む。

「暑すぎずらあ・・・」

「今日も真夏日だもんねえ．．．」

溜め息をつく花丸とルビィ。

この炎天下の中、屋上で練習はキツイよなあ．．．

「お疲れ。二人とも水分とって」

「ありがとうずら！」

「感謝すルビィ！」

俺がペットボトルの水を手渡すと、二人とも笑顔で受け取ってくれる。

疲れた表情はしているが、その中に充実感が感じられた。

良い傾向だな．．．

「ああ、疲れた．．．」

この炎天下の中、真つ黒なマントを着込み寝そべっている善子。

ものすごい汗かいてるんだけど、大丈夫なんだろうか．．．

「善子、黒い服は止めた方が良いつて。熱を吸収するから余計にしんどくなるよ」

「黒は墮天使のアイデンティティ．．．黒が無くては、生きていけないわ．．．」

「死にそうになつてるヤツが何言つてんの？」

「これで死ぬなら．．．本望よ．．．ガクッ」

「ザオ●ク」

「アババババツ!？」

仰向けに寝ている善子の顔に向かって、ペットボトルの水をぶちまけてやった。

「ちよ、何するのよ!？」

「蘇生してあげました」

「方法が荒くない!？」

「方法は荒いけど、汗をかいた顔の洗いが出来たから良いじゃん」

「全然上手くないわよ!？」

ギャーギャー喚く善子。

これだけ元気なら大丈夫だな。

「はい、千歌ちゃんもお水」

「ありがとう!」

曜からペットボトルの水を受け取る千歌さん。

それを空に向けてかざし、眩しそうに目を細める。

「私、夏好きだなあ・・・何か熱くなれる!」

「うわあ・・・今度から話しかけないでもらって良いですか?」

「何で!？」

「夏なんて暑いだけじゃないですか。四季の中で最も要らない季節じゃないですか。」

「好きになれる理由が分からないんですけど」

「そこまで言う?!? どんだけ夏嫌いなのだ?!?」

「あ、ちよつと近付かないで下さい・・・千歌だけに」

「だから全然上手くないって!?!」

千歌さんまでギャーギャー喚き始める。

暑苦しいなあ、もう・・・

「天つてば、夏嫌いは変わってないのねえ・・・」

呆れている鞠莉。

「昔からそうだったけど、夏になると外に出るのを嫌がっちゃって・・・マリーは外で遊びたかったのに・・・」

「鞠莉の白くて綺麗な肌を、太陽の下に晒して日焼けさせたくないんだよ・・・鞠莉のことが大事だから」

「あくん、天大好き♡マリーと一緒に、涼しい部屋で夏を過ごしましょう♡」

「あれ、鞠莉ってあんなにチョロかったっけ・・・」

「完全に天さんの掌の上ですわね・・・」

呆れている果南とダイヤさん。

失礼な、まるで俺が鞠莉を弄んでるみたいにな・・・

「フフツ・・・涼しい部屋で、マリーと熱くて気持ち良いことしましょ」  
「今すぐ行こうか」

「ダメに決まってるでしょ!？」

何故か慌てて俺を抱き寄せる梨子。

「そ、天くんは渡さないんだからっ!」

「あら〜? 梨子はナニを想像したのかしら〜?」

ニヤニヤしている鞠莉。

あつ、この子遊んでる・・・

「つていうか梨子、そんなに密着されると暑いつてば」

「わ、私は暑くないもんっ!」

「いや、メツチャ汗かいてるけど・・・」

「あっ!?! 汗臭かった!？」

「いや、むしろ凄く良い匂いがしてるんだけどき・・・」

どうして女の子って、こども良い匂いがするんだろうか・・・

「・・・じゃあ良いじゃない。もう少しこうしても」

背後から俺のお腹に手を回し、抱き締める力を強くする梨子。

東京から帰って来てから・・・というか東京にいる時から、どうも梨子が距離を詰め

てくる気がする。

身体的接触が増えたというか．．．甘えたいお年頃なのかな？

まあ背中にも二つの柔らかな感触が感じられて、俺としては万々歳なんだけども。

「天くんって、鋭いのか鈍いのか分かんないよね．．．」

何故か溜め息をつく曜。

よく聞こえなかつたが、何かバカにされた気がするな．．．

「皆ー！今日のアイスは曜が奢ってくれてるってー！」

「ちよつと!?そんなこと一言も言っていないでしょうが！」

「アハハ、まあいつも通り一人百円ずつ出そうよ。十人で合計千円になるしき」

「じゃんけんで負けた一人が、そのお金で皆の食べたいアイスを買ってくるデース♪」

「まあ、負ける人は大体決まっているのですが．．．」

「ちよ、こつち見ないでくれる!？」

「善子ちゃん運の無さも相変わらずなら」

「流石は墮天使、運まで墮ちてるなんて．．．」

「善子言うなっ! ずら丸も天も失礼なこと言うんじゃないわよ!？」

ムキーツと怒る善子なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・何でいつも負けるのかしら」

「墮天使だから」

「関係なくない!？」

善子のツツコミ。

俺と善子は今、近くのコンビニにアイスを買いにやって来ていた。

案の定善子はじゃんけんで負け、アイスを買に行く係になってしまったのだ。

「お会計が1, 268円になります♪」

「ちよ、高いアイス頼んだの誰よ!？」

「まあまあ、これくらい良いじゃん・・・あつ、ハーゲンダ●ツにはスプーン付けても  
らえますか?」

「かしこまりました♪」

「犯人アンタかあああああつ!？」

「アハハ、オーバーした分はちゃんと払うって」

苦笑しながら会計を済ませ、コンビニの外へと出る。

ホントに暑いなあ・・・

「善子、早く学校に戻ろう。干乾びて死んじゃう」

「だったら何で毎回コンビニまでついてくるのよ・・・」

「この炎天下の中、善子一人に行かせるのは可哀想でしょ。しかも十人分のアイスなんて、結構な重さになるんだから」

「・・・ホントにお人好しなんだから」

呆れている善子。

ちよつと頬が赤い気がするけど、この暑さのせいかな？

「それにしても、未だに学校説明会への参加希望者が0とはねえ・・・」

「まあ焦つても仕方ないでしょ。劇的に増えるものでも無いだろうし」

善子の言葉に苦笑する俺。

予備予選の時のライブ映像の再生回数は、あれからかなり伸びていた。

にも関わらず、学校説明会への参加希望者は全く増えていない。

やっぱり浦の星を超えるべきハードルは、音ノ木坂よりも高いようだ。

「地区予選でも良いパフォーマンスが出来たら、結果も変わるかもしれないし。今は目の前のことに集中しよう」

「・・・それもそうね」

頷く善子。

そんな会話をしながら歩いてみると・・・

「浦の星女学院・・・この辺りのはずなんだけど・・・」

「見当たらないねえ・・・」

少し先で、女性二人がスマホと睨めっこをしていた。

この距離だと声がよく聞こえないが、恐らく道に迷っているんだろう。

「ゆけっ！善子！」

「私はポ●モンかつ！何で私に行かせようとするのよ!？」

「人見知りだから」

「これを機に克服しろと!？方法がスパルタ過ぎない!？」

「いや、人見知りの善子がテンパる様子を見たいだけ」

「最低かつ！私は行かないからねっ！」

「うわ、困ってる人を見捨てるなんて最低だね」

「アンタが言うなっ！」

ガルルルル・・・とこちらを威嚇してくる善子。

仕方ないので、俺は女性達の近くへと歩み寄った。

「すみません、何かお困りで……えっ?」

そこまで言いかけたところで、俺は思わず声を上げてしまった。  
何故なら……

「ああ、すみません。ちよつと道が……えっ?」

「あっ!?!」

顔を上げて俺を見るなり、驚いて目を見開く二人。

二人とも帽子を被っていたので、遠くからではよく顔が見えなかったのだが……

「絵里姉!?! 亜里姉!?!」

「天ああああああああっ!」

「ぎっふっ!?!」

絵里姉と亜里姉が、勢いよく俺に抱きついてくる。

な、何で二人がこんなところにいるんだ……?

「会いたかったわ天! 会いたくて会いたくて震えてたわ!」

「どこの西野●ナ!?!」

「会いたかった♪ Y E S ! そららららら♪」

「それはA●Bだよねえ!?!」

「このボケる感じ……やっぱり姉弟ね、この三人」

呆れている善子なのだった。

# 【矢澤にこ】口には出せないけど・・・

「にこ、朝だよ」

「ん、・・・」

気持ち良さそうに眠るにこの身体を、優しく揺する。

にこの瞼がゆつくりと開き、にこの顔を覗き込んでいる俺と目が合った。

「天あ・・・？」

「おはよう、にこ。起きる時間だよ」

「・・・あと五分」

「檸檬●弾」

「ギヤアアアアアツ!!?目がツ!!?目があああああツ!!?」

にこの瞼を手で無理矢理開け、レモンを思いっきり握り潰す。

大量のレモン汁が目に入ったにこが、悲鳴を上げながらのた打ち回っていた。

「おはよう、にこ。誕生日おめでとう」

「祝福するならもつと優しく起こしなさいよ!!?メツチャ目が痛いんだけど!!?」

「ドンマイ」

「誰のせいだと思ってるの!?!」

「にこが起きないせいでしょ」

「うぐっ・・・」

言葉に詰まるに!?!。

やれやれ・・・

「あと、そろそろ身体を隠したら?」

「身体? 何の話・・・っ!?!」

そこでにこもようやく気付いたらしい。

自分が全裸だということに。

「キャアッ!?!」

「いや、そんなに恥ずかしがる? もう何度も見てるんだし、昨日の夜だって・・・」

「そういう問題じゃないわよ!?!」

慌てて布団で身体を隠すにこ。

顔が真っ赤になっている。

「アハハ、俺の嫁は相変わらず乙女だなあ」

「うっさい! 早く出てけバカ旦那!」

「はいはい。もう朝ご飯の準備出来てるからね」

笑いながら部屋を出る俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「お兄様、今日の夕飯のメニューはお決まりですか？」

長い黒髪をサイドテールに結った女性が、隣を歩きながら尋ねてくる。

彼女は矢澤こころちゃん、矢澤家の次女である。

「勿論。今日はこの誕生日だし、にこの好物をフルコースで出すつもりだよ」

「フフツ、お姉様が喜びそうですね」

クスクス笑うこころちゃん。

μsが活動していた当時は小学生だった彼女も、今では大学四年生になっていた。

今日は大学の講義が無いということで、こうして夕飯の買い出しに付き合ってくれているのだ。

「いやあ、お兄は良い旦那さんだねえ」

肩にかかるくらいまで伸びた茶髪を、同じくサイドテールに結った女性がニヤニヤし

ながらそう言う。

矢澤「ここあちゃん、矢澤家の三女である。」

「こんな旦那さんがいるなんて、お姉が羨ましいなあ」

「ここあちゃんはモテるんだし、男なんて選び放題でしょ」

「いや、全然モテないって。そもそも大学に良い男もいないしねえ」

溜め息をつく「ここあちゃん。」

「こころちゃんの双子の妹である彼女も、今では大学四年生になりこころちゃんと同じ大学に通っている。」

「ここあちゃんも今日は大学の講義が無いとのこと、俺に付き合ってくれていた。」

「それにしても、お姉とお兄が結婚してもう一年かあ・・・相変わらず仲良いよね」

「当然。夫婦の営みもバツチリだぜ」

「お、お兄様・・・そういつた話はあまりきれない方がよろしいかと・・・」

顔を赤くしているこころちゃん。

俺とにこが結婚したのは一年前・・・俺が大学を卒業したのと同時に籍を入れ、俺達は晴れて夫婦となった。

その頃には既にバリバリ働いていたにこには当然、仕事を辞めて専業主婦になるという考えは無かった。

そこで逆に俺が就職せず、専業主夫を務めることになったのだ。

それと同時に矢澤家に引越し、今では矢澤ファミリーの一員となっている。

「あれえ？お兄は『夫婦の営み』としか言っていないのに・・・こころつたら、何で顔を赤くしてるのかなあ？」

「だ、だって『夫婦の営み』といったら・・・！」

「こころちゃん・・・俺の知らない間に、君の心は汚れてしまったんだね・・・」

「お兄様!?!」

「俺はあくまでも『夫婦としての関係はバツチリ』って言ったつもりだったのに・・・」

「ええっ!?!」

「アタシもそう捉えてたのになあ・・・」

「嘘でしょう!?!」

「うん、嘘」

「息ぴったりですかっ!」

「こころちゃんのツツコミ。」

「いやあ、こころちゃんは面白いなあ。」

「フツフツ、お兄も悪よのう・・・」

「いやいや、こころあちゃんほどでは・・・」

「も、もう知りませんっ!」

ぷいっと顔を背けてしまうところちゃん。

あー、いじけちゃった・・・

「アハハ、ゴメンゴメン」

苦笑しながら謝り、ところちゃんの手を取る。

「ほら、早く行こう?」

「っ・・・全くもう、お兄様ったら・・・」

「あつ、ズルい!アタシも!」

「はいはい」

もう片方の手をここあちゃんと繋ぎ、三人で歩き出す。

「さて、愛する妻の誕生日を盛大に祝うとしますか」

「なお、その愛する妻の妹二人と手を繋いでいる模様」

「全然やましくないもん。だって家族だもん」

「妻の妹と不倫・・・ありそうな話だよねえ」

「不倫とか無い無い。俺は多目的トイレに女性を呼び出すなんてマネしないから」

「お兄様!?!誰のことをおっしゃっているのですか!?!」

「えっ、こころちゃん知らないの? ネット見る!」

「そのネタもダメです！」

「センテンススプリング！」

「それは別の人ですよねえ!？」

ツツコミが止まらないこころちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

「にこ、誕生日おめでとう！」

「おめでとうございます、お姉様！」

「お姉、おめでとう！」

「おめでと〜」

「あ、ありがと・・・」

少し照れ臭そうにお礼を言うにこ。

にこが仕事から帰って来たところで、俺達はこの誕生日を盛大に祝っていた。

「それにしても、お母様がいないのは残念ですね・・・」

「仕方ないよ。琴乃さんは忙しいもん」

にこの母親にして俺の義母でもある矢澤琴乃さんは、現在仕事で出張中だ。

にこの誕生日に、家に居られないと知った時の琴乃さんの荒れっぷりといったら……  
遅くまでヤケ酒に付き合わされたっけなあ……

「全く、にこは愛されてるねえ……」

「な、何よ急に……」

「俺も愛してるよ、にこ」

「っ……み、皆の前でそういうこと言わないのっ!」

「アハハ、お姉ったら顔真つ赤じゃん!」

「うっさいここあ!」

「お姉様、少しは素直になられた方がよろしいですよ?」

「こころ!」

「にこ姉はツンデレだもんね」

「虎太郎まで!?!」

矢澤家の長男である虎太郎くんにまでイジられ、ショックを受けているにこ。

「アハハ、虎太郎くんも言うようになったねえ……あつ、ご飯おかわり要る?」

「お願い、天兄」

茶碗を差し出してくる虎太郎くん。

今年の四月から大学生になった虎太郎くんは、矢澤家の中で一番の長身になっていた。

出会った当時は幼稚園児だったのに、時が経つのは早いなあ・・・

「オツケー。どんだんご飯を食べて、北●晶みたいな男になつてね」

「いや、あの人女だから。そこは佐々木●介で良くない？」

「おお、流石は矢澤家の人間・・・ツツコミがキレキレだわ」

「いつも天と一緒にいたら、自然にツツコミ力も上がるわ」

溜め息をつくにこ。

「天、私にもご飯のおかわりくれる？」

「25、252円になります」

「有料!?!しかもメツチャ高くない!?!」

「『にっこにっこにー』だけにね」

「別に上手くないわよ!?!」

「アハハ、冗談冗談」

「全く、相変わらずボケ倒すんだから・・・」

呆れているにこ。

一方、他の三人は笑っていた。

「フフツ、これがホントの夫婦漫才ってヤツですね」

「誰が夫婦漫才よ!？」

「いやあ、息ピツタリ！流石は夫婦！」

「ここで褒められても嬉しくないわっ！」

「にご姉、仕事辞めて天兄と芸人を目指したら？」

「無理に決まってるでしょうが！」

「そうだよ虎太郎くん、俺は社長に恫喝されるとか嫌だからね？」

「アンタはどここの会社の話してんのよ!？」

「あっ・・・お前ら、テープ回してへんやろな？」

「止めなさい!？それは危ないわよ!？」

「危ない？反社の人間でもいた？」

「そのネタが危ないって言ってるのよ!？」

ツツコミを入れすぎて、ゼエゼエ息切れしているにこ。

面白いなあ・・・

「流石は俺の嫁、ツツコミのスキルが違うわ」

「誰のせいで鍛えられたと思ってんのよ!？」

「・・・本当にお似合いの二人だよね」

「確かに」

虎太郎くんの眩きに、笑いながら頷くころちやんとここあちやんなのだった。

\*\*\*\*\*

《にこ視点》

「天々、お風呂空いたわよ」

お風呂から上がった私は、キッチンにいる天に声をかけた。

「オツケー、今入るよ」

笑顔で返事をする天。

夕飯の後片付けも終わったというのに、天は何やらキッチンで作業をしていた。

「何してるの？」

「明日の皆のお弁当の準備。今日の余り物とか使えそうだし、今のうちに小分けにして準備しておこうと思って」

手際よく作業している天。

天は毎朝、私達五人のお弁当を作ってくれている。

おまけに家事全般を全てこなしてくれているので、こつちとしては本当に大助かりなのだが……

「……ねえ、天」

「ん？」

「専業主夫……大変じゃない？」

私が今の仕事を続けられるよう、天は今の役目を引き受けてくれた。

本当にありがたいと思うのと同時に……天に対しての申し訳無さもあった。

「もし天が負担を感じてるなら、その……」

「……にこ」

天に抱き寄せられる。

私の身体が、天の腕の中にすっぽりと収まった。

「負担なんて感じてないよ」

微笑む天。

「仕事をしてる時のにこ、凄く活き活きしてる。そんなにこを見られるのが俺は嬉しい、そんなにこの力になれるならいくらでもなりたいと思う」

「天・・・」

「こころちゃんもここあちゃんも、虎太郎くんも琴乃さんも・・・今の俺にとって本当の家族だから。家族の為に頑張るのは当然でしょ？」

天に頭を撫でられる。

「俺は今、凄く幸せだよ。にこと一緒になれて、矢澤家の一員になれて・・・良かったなって、心からそう思う。だからにこは、今の仕事を思いつき頑張ってほしい。それが俺の願いだよ」

「・・・変わらないわね、アンタ」

天の背中に手を回す。

本当に天は、昔と全然変わらない。

「全く、底なしのお人好しなんだから・・・」

この優しさに、私はどれほど救われただろう・・・  
天がいなかったら、きつと今の私はいない。

照れ臭くて、なかなか口には出せないけど・・・本当に感謝していた。

「・・・お風呂」

「え？ああ、うん。今入るよ」

「・・・私も一緒に入る」

「はい？」

首を傾げている天の手を引き、お風呂場へと向かう私。

「さあ、行くわよ」

「ちよ、にこは今上がつたばかりじゃ・・・」

「もう一度入りたい気分なの。夫婦水入らずで、裸の付き合いといこうじゃない」

「いや、俺に裸見られて良いの？」

「良いに決まつてるでしょ。夫婦なんだから」

「朝はメツチャ恥ずかしくてたじやん」

「私、過去は振り返らないから」

「今朝の話だよねえ!？」

「うっさい! 良いから行くわよ!」

本当はメチャクチャ恥ずかしいけど・・・

感謝の言葉を口に出来ないのなら、行動で示すしかない。

「この宇宙No. 1嫁のにこが、アンタの背中を流してあげるわ! 光栄に思いなさい

!」

「いや、気持ち嬉しいんだけどさあ・・・愛する嫁の裸を前に、理性を保てる気がしないんだけど・・・」

「・・・良いわよ」

「え・・・？」

キョトンとする天に、私は顔を赤くしながらもハッキリと告げた。

「・・・天の好きにして良いから」

「っ・・・」

天の顔も赤くなる。

私の誕生日の夜は、まだまだ終わりそうにないのだった。

## 【高海千歌】願わくば・・・

「アルバイト、ですか？」

「うん、お願い出来ないかな？」

両手を合わせる千歌さん。

もうすぐ七月が終わろうとしている中、俺は千歌さんから『十千万』でアルバイトしてほしいとお願いされていた。

「八月一日なんだけど、観光ツアーのお客さんで部屋が満室になっちゃったの。お母さんは東京に行ってていないし、志満姉だけじゃ手が足りなくて・・・美渡姉と私も手伝うんだけど、力仕事もあるから男手が欲しいっていう話になったんだよね」

「なるほど、そういうことですか」

それは確かに大変そうだな・・・

高海三姉妹だけで回せるかどうか・・・

「一日から二日にかけて、力を貸してもらえないかな？ 勿論バイト代は弾むし、ご飯はウチでござ馳走するからさ」

「んー、どうしようかなあ・・・」

「あと志満姉が、『天くんに来てもらえたら嬉しいわ』って・・・」

「行きます」

「急に即答!? 今『どうしようかなあ・・・』って言ってたよねえ!？」

「嫁のピンチに駆けつけない夫がどこにいるんですかっ!」

「サラッと人の姉を『嫁』呼ばわりしないでくれる!？」

「絢瀬志満・・・良い響きですよね」

「人の話聞いている!？」

「あ、高海天も良いですね」

「だから人の話を聞いてっば!？」

「ギャーギャー騒いでいる千歌さん」

「全く、これだからアホみかんは・・・」

「っていうか、八月一日って千歌さんの誕生日じゃないですか。せつかくの誕生日なのに、旅館の手伝いで潰しちやっって良いんですか?」

「仕方ないでしょ。こういう状況なんだから」

「苦笑する千歌さん」

「それに私、『十千万』好きだから。私で力になれるなら、精一杯頑張りたいんだ」

「・・・相変わらずですね、貴女も」

口ではそう言いながらも、密かに感心してしまう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「天くん、こつち手伝ってもらっていいかしら？」

「はい喜んで！」

「天くくん、こつち手伝って〜」

「自分でやって下さい」

「この扱いの差は何!？」

千歌さんのツツコミ。

八月一日、俺はアルバイトの為『十千万』へとやって来ていた。

「当たり前じゃないですか。嫁を大事にしない夫がどこにいるんですか」

「本当に志満姉のこと好きだよね・・・」

「どうしようもなく溢れ出す想いを伝えると、やっぱ大好きしか出てこないです」

「どっかで聞いたことのある歌詞なんでしょう!？」

「まああのグループで一番ファンキーだった人は、嫁は嫁でも他人の嫁を寝取ってましたけどね」

「その話題に触れるのは止めたげて!？」

必死に止めてくる千歌さん。

志満さんがクスクス笑っている。

「あらあら、仲が良いわね。天くんは私と千歌ちゃん、どっちが好きなのかしら？」

「申し訳ございませんが、千歌さんのこともあるので・・・俺の心の内を今ここでしゃべることは、千歌さんを傷つけることになると思いますので・・・申し訳ございません」

「それ絶対『志満姉の方が好き』って言ってるよねえ!?!?っていうか、その質問と回答も最近どつかで聞いたんだけど!?!」

「ずいぶん不倫系のネタに詳しいですね」

「天くんに言われたくないわっ!」

「アハハ、相変わらず漫才やってるねえ」

美渡さんがゲラゲラ笑いながらこちらへやって来る。

「アンタ達、実は結構お似合いのカップルなんじゃない?」

「誰がカップルですか。美渡さんは他人のことより、ガサツな自分のことを好きになつてくれる相手を見つけた方が良いでしょう」

「誰がガサツじやゴラア！」

「カ、カツプル・・・」

何故か顔を赤くしている千歌さんなのだ。た。

\*\*\*\*\*

「ああ、極楽う・・・」

温泉に浸かる俺。

一日の仕事も終わった頃には、すっかり夜遅い時間になっていた。

アルバイトは明日、お客さんが全員チェックアウトするまで続くことになっている。

なので今日は、『十千万』に泊めてもらうことになっていた。

「しかしまあ、旅館の仕事って大変だなあ・・・」

この仕事を毎日やっている志満さんは、本当に凄いなと思う。

俺が改めて志満さんに敬意を抱いていると・・・

「お風呂だっ！」

目の前の扉が勢いよく開き、そこには・・・  
全裸の千歌さんが立っていた。

「・・・え？」

俺と千歌さんの目が合い、お互い硬直する。

いつもとは違い下ろしている髪、意外に大きめな胸、案外スタイルの良い身体・・・

「・・・千歌さんって、実は結構ナイスボディなんですね」

「キヤアアアアアアアアアアアッ!」

顔を真っ赤にして、慌てて身体を隠す千歌さん。

「な、ななな何で天くんがここにいるの!」

「何でって、美渡さんが大浴場に入って良いって言うから・・・もうお客さんが入れる  
時間帯を過ぎてますし」

「ここに女湯だよ!?!男湯は隣だから!」

「いや、ちゃんと男湯の暖簾をくぐりましたけど」

『アハハハハッ!』

竹でできた壁の向こうから、美渡さんの笑い声が聞こえてくる。

「美渡姉!?!そこにいるの!?!」

『いやあ、大成功!』

爆笑している美渡さん。

『天が入る前に暖簾を逆にしておいて、入った後に戻したんだよねー！千歌と鉢合わせするように仕向けたんだけど、上手く行き過ぎてビックリだわ！』

「何してくれちゃってんの!?!」

千歌さんのツツコミ。

やってくれたな、あの人・・・

『千歌！私からの誕生日プレゼント、しっかり受け取りなよ！』

「これのどこか誕生日プレゼントなの!?!」

『ニシシ、それじゃあ後はお二人で♪』

「ちよ、美渡姉!?!」

向こうで扉が開く音がして、美渡さんの声が聞こえなくなる。

逃げたな・・・

「うう、美渡姉のバカア・・・」

「千歌さんもそんなところに蹲ってないで、お湯に浸かったらどうですか?」

「何で天くんは平然としているの!?!ここ一応女湯だよ!?!」

「他の人が入ってこないなら、どっちだって良いでしょ」

「全然良くないよ!?!」

「とにかく、いつまでもそうしてるわけにはいかないでしょ。後ろ向いててあげますから、早くお湯に浸かって下さい」

「うう・・・」

俺が後ろを向くと、諦めたのか千歌さんが温泉に入ってくる音が聞こえた。

「も、もう良いよ・・・」

千歌さんに声をかけられ、再び顔を千歌さんの方へと戻す。

この温泉は乳白色なので、浸かってしまえばお互いの身体が見えることはないのだ。

「み、見苦しいものをお見せしました・・・」

「御馳走様でした」

「御馳走様って何!?!」

「おかげでしばらくは困らないと思います」

「何に!?!」

ツツコミを連発する千歌さんだったが、やがてクスツと笑みを零した。

「・・・フフツ」

「急に笑うの止めてもらえますか? 気持ち悪いんで」

「ホント辛辣だね・・・まあ、天くんらしいけど」

苦笑する千歌さん。

「何て言うか、思い出しちゃってき……初めて出会った時から、天くんとはこんな感じだったなあって」

「……そう言えばそうでしたね」

浦の星にやって来た俺を、千歌さんが不審者と勘違いして……  
今にして思えば、あの出会いが全ての始まりだった。

「……一度しか言わないんで、よく聞いて下さいね」

「天くん？」

首を傾げる千歌さん。

せつかくの誕生日なんだから、日頃なかなか照れ臭くて言えない気持ちを言ってみるのも良いだろう。

「内浦に来て、浦の星に入って……千歌さんに出会えて良かった」

「っ……」

「今、俺がここで充実した日々を過ごしているのは……あの日、千歌さんに出会えたからです。千歌さんがいつも明るく、元気に俺の手を引いてくれたから……俺はここまですることが出来ました。本当に感謝してます」

千歌さんが驚きで目を見開く中、俺は笑みを浮かべた。

「誕生日、おめでとうございます。これからよろしくお願いしますね……リーダー」



スマホを取り出す志満さんを、慌てて制止する俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《千歌視点》

翌朝・・・

「ふわぁ・・・」

ベッドから起き上がり、大きな欠伸をする。

ふと横を見ると、隣に敷いた布団で天くんがスヤスヤと眠っていた。

「フフツ、よく寝てるなあ・・・」

客室がいつぱいで泊まる場所が無かったので、昨夜は私の部屋で寝てもらったのだ。

美渡姉の策略に嵌まるわ、天くん裸に見られるわ、志満姉に勘違いされるわ・・・

ホント散々だったなあ・・・

「・・・ま、いつか」

昨日の天くんの言葉を思い出し、思わず顔が綻んでしまう。

『出会えて良かった』と言ってくれたことが、どうしようもなく嬉しかった。

「そんなの・・・私も一緒だよ」

あの日天くんに出会えたから、今の私がいる・・・

天くんがいなかったら、きつと私はここまで来られなかった。

だからこそ、天くんには本当に感謝しているのだ。

「全く・・・天くんは罪深い男の子だよ、ホント」

A q o u r s のメンバーは多かれ少なかれ、天くんに好意を寄せている。

梨子ちゃんや鞠莉ちゃんなんて、本当に分かりやすいアピールをしているほどだ。

そして私も例に漏れず・・・天くんのことを想っていた。

「・・・こんな気持ち、初めてだな」

今まで恋なんてしたことなかったけど・・・

私は天くんに対して、生まれて初めての恋心を抱いていた。

それを察した美渡姉が、美渡姉なりに気を利かせてあんなことをしたんだろうけ

ど・・・

流石にアレはやり過ぎだと思う。

「・・・まあ、そのおかげで昨日の言葉が聞けたんだけどさ」

それに免じて、昨日のことは許してあげることにする。

私はベッドを抜け出すと、天くんの枕元に座り込んだ。

「・・・いつもありがとう、天くん」

天くんの頭を撫でる。

「これからもずっと・・・私を支えてね」

願わくば、いつまでも天くんと一緒にいたい・・・

心からそう思う私なのだった。

## 【高坂穂乃果】素直な気持ちを・・・

「んー・・・今日も良い天気だなあ・・・」

玄関から外に出た俺は、空を見上げながら身体を伸ばしていた。  
すると・・・

「おはようございます、天」

不意に声をかけられる。

ランニングウェア姿の海未ちゃんが、こちらに向かって走ってくる所だった。

「おはよう、海未ちゃん。毎朝よくランニング続けられるね」

「日課ですから。天こそ毎朝早いですね」

「仕込みがあるからね」

他愛も無い会話をする俺達。

「穂乃果は・・・まだ寝てそうですね」

「うん、まだ熟睡してたよ」

俺が苦笑しながら言うと、海未ちゃんが溜め息をついた。

「穂乃果も起きないといけない時間でしょくに・・・叩き起こした方が良いのでは？」

「まあお店が開くまでまだ時間あるし、大丈夫でしょ」

「ハア・・・天は穂乃果に甘すぎます。もう少し厳しくした方が良いと思いますよ？」

「海未ちゃんが厳しくしてくれるし、俺は甘くても良いでしょ」

「天だけでなく、ことりも甘いのでダメです。全然相殺出来てません」

「大丈夫。その分雪穂ちゃんが厳しいから」

そんな会話をしていると・・・

『いつまで寝てるのお姉ちゃんっ！いい加減起きなさいっ！』

『ギャアアアアアッ!?!』

雪穂ちゃんの大声と、穂乃果の悲鳴が聞こえてきた。

ああ、やつぱり・・・

「ほらね？」

「流石は雪穂です」

感心している海未ちゃん。

「天もあれくらいやってしまつて良いと思います」

「俺には無理かなあ・・・」

苦笑しながら答える俺なのだった。

「何と言つても・・・愛する妻だもん」

\*\*\*\*\*

「うう、雪穂に苛められたあ・・・」

「よしよし、こつちおいで」

涙目の穂乃果を優しく抱き締める。

俺達は今、『穂むら』の開店準備をしていた。

「えへへ、やっぱり天くんは温かいなあ」

「母親の前で、よく平然と甘えられるわねえ・・・」

俺の胸元に顔を埋める穂乃果を見て、秋穂さんが呆れていた。

「全く、見てるこつちが恥ずかしいわ・・・」

「夫婦なんだから良いじゃん！」

「はいはい」

溜め息をつく秋穂さん。

俺と穂乃果が結婚したのは、今から一年半ほど前のことだ。

俺の大学卒業と同時に結婚した俺達は、穂乃果の実家での暮らしをスタートさせた。それと同時に、俺は『穂むら』に就職。

義父となった大将に弟子入りし、和菓子職人となる為に日々修行をさせてもらっている。

穂乃果も『穂むら』での仕事を秋穂さんから本格的に教わり始めており、ゆくゆくは二人で『穂むら』を継ぎたいと考えていた。

「さて、そろそろ大将の手伝いに行つてくるかな」

「お願いね、天くん。ほら穂乃果、天くんから離れなさい」

「僕は嫌だ！」

「何で不●和音!？」

「殴れば良いさ！」

「ホントに殴つて良いかしら!？」

「穂乃果、また後で。ね？」

「うう・・・」

名残惜しそうに俺から離れる穂乃果。

俺は穂乃果に顔を近付けると・・・そのまま穂乃果の唇を奪った。

「っ!？」

「御馳走様。今日も一日頑張ろうね」

「う、うん・・・」

「・・・天くんの方が大胆だったわね」

顔を真っ赤にする穂乃果と、苦笑する秋穂さんなのだった。

\*\*\*\*\*

「今日も疲れたあ・・・」

「そうだねえ・・・」

穂乃果と二人揃って、ベッドに横たわっている俺。

お店の仕事も終わり、俺達はまったりと自分達の時間を過ごしていた。

「それにしても、天くんもすっかりこの家に馴染んでるよね」

「それは自分でも思うわ」

元々大将や秋穂さん、雪穂ちゃんとは仲良くさせてもらってたけど・・・

今では心から皆を『家族』と呼ぶことが出来る。

俺はもうすっかり、高坂家の一員になったようだ。

「・・・フツッ」

「穂乃果？」

突然笑みを零した穂乃果に、首を傾げる俺。

「天くんが家族になるなんて、あの頃は想像もしてなかったよ」

「確かにねえ・・・」

あの穂乃果と結婚することになるなんて、当時は思ってもみなかった。

俺と穂乃果は、そういう関係になることは無いだろうと思っていたから。

「俺達が初めて会った時のこと、覚えてる？」

「勿論覚えてるよ」

笑う穂乃果。

「私が店番してた時に、まだ小さかった天くんが一人でお店に入ってきてき。目をキラキラさせながらウチの和菓子を見つめてて・・・可愛かったなあ」

「アハハ、初めて見る和菓子に感動しちゃって」

苦笑する俺。

その時に穂乃果が試食させてくれて、その美味しさにまた感動して・・・

その日以来度々店を訪れるようになって、穂乃果や高坂家の皆と仲良くなって・・・

ことりちゃんや海未ちゃんにも出会えたんだよな・・・

「今にして思えば・・・あの日穂乃果と出会えたことが、全ての始まりだったような気がするよ」

「・・・私もそう思う。あの日天くと出会えたから、今の私があるんだなって」  
俺の手をギュツと握る穂乃果。

「μ sとして駆け抜けることが出来たのも、天くんのおかげだもん」

「・・・それは違うよ」

穂乃果の手を握り返す。

「μ sが駆け抜けることが出来たのは・・・穂乃果が先頭を走ってくれたから。だからこそ皆、迷わずに全力で走れたんだよ」

「天くん・・・」

「・・・ありがとね、穂乃果」

穂乃果を優しく抱き締める。

「穂乃果に出会えて良かった。あの時の経験は、穂乃果と出会えてなかったら絶対に経験出来なかったことだから」

微笑む俺。

「出会ってくれてありがとう。穂乃果に出会えて、夫婦になれて・・・俺は幸せだよ」

「っ・・・」

穂乃果の顔が真っ赤になる。

「もう・・・天くんはズルいよお・・・」

「せつかくの誕生日なんだもん。素直な気持ちを伝えなきゃね」

そう、今日は穂乃果の誕生日なのだ。

素直な気持ちを口にするのは恥ずかしいが、こういう時くらいは素直にならないと。

「素直に、か・・・」

穂乃果は小さく呟くと、俺の上に馬乗りになつてきた。

「ほ、穂乃果・・・？」

「素直になつて良いんだよね・・・？」

「え？あ、うん・・・」

「だったら・・・えいつ」

穂乃果に唇を奪われる。

あまりの速さについていけない。

「ぶはっ・・・ちよ、穂乃果!？」

「天くん・・・今夜は寝かさないからね・・・？」

「え、ちよ・・・」

「覚悟おおおおおおおつ!」

「うわあつ!」

この日の夜、全然眠れなかったことは言うまでもないのであった。

\*\*\*\*\*

《穂乃果視点》

翌朝・・・

「・・・ちよつとハッスルし過ぎた」

うつ伏せの状態で固まっている私。

うう、腰が痛い・・・

「私はまあ良いとして・・・天くん大丈夫かなあ・・・」

隣で気絶している天くんに目をやる。

流石にやり過ぎたかな・・・

「・・・ま、いつか」

苦笑しながら天くんの顔を眺めていると、昨日天くんが言ってくれた言葉が蘇った。

『μ、sが駆け抜けることが出来たのは……穂乃果が先頭を走ってくれたから。だからこそ皆、迷わずに全力で走れたんだよ』

「私が先頭を走れたのは……天くんのおかげなんだよ」  
呟く私。

「いつでも天くんが私を支えてくれたから、いつでも天くんが皆に寄り添ってくれたから……だから私は先頭を走れたし、皆も全力で走れたんだよ」

μ、sが駆け抜けることが出来たのは、天くんのおかげだ。  
でもそれを本人に言っても、昨夜のように『そんなことない』と否定することだろう。本当に謙虚な人だと思う。

「……まあ、そこが天くんの良いところなんだけどさ」  
天くんの頭を撫でる私。

「私の方こそありがとう、天くん」

昨夜彼に伝えられなかった言葉を、今ここで口に出す。

「私も天くんに出会えて、夫婦になれて・・・本当に幸せだよ」

「・・・それは良かった」

「っ!?!」

天くんの目が開き、穏やかな微笑を浮かべていた。

「お、起きてるなら言つてよ!?!」

「アハハ、おかげで嬉しい言葉が聞けたよ」

天くんはそう言うと、私を抱き締めた。

「・・・大好きだよ、穂乃果」

「・・・私も大好きだよ、天くん」

天くんの腕の中で、幸せを噛み締める私なのだった。

家族というものは特別である。

「ハラシヨー！ここが浦女なんだね！」

目をキラキラ輝かせている亜里姉。

俺と善子は絵里姉と亜里姉を連れ、学校へと戻って来ていた。

今はAqoursの皆と、図書室で休憩中である。

「ううっ……まさかエリーチカのサインをいただける日が来るなんてっ……！」

「な、何も泣かなくても……」

絵里姉のサインが描かれた色紙を握り締め、号泣しているダイヤさん。

そんなダイヤさんを見て、絵里姉が若干引いていた。

「お姉ちゃん、東京で絵里さんのサインをもらわなかったことを凄く後悔してたんだ。

『緊張し過ぎてお願いするのを忘れた』って」

「分かる！私も穂乃果さんのサインもらうの忘れて、あの後凄く後悔したもん！」

ルビイの説明に頷く千歌さん。

二人とも既に絵里姉のサインをもらっており、ダイヤさんと同じく色紙を大事そうに抱えていた。

「天くん、また穂乃果さんや他のみんなの皆さんの皆さんに会わせて！お願い！」

「えー、どうしようかなあ・・・」

「天くん、お願いすルビィ！」

「オツケー、ルビィには会わせてあげるよ」

「やったあ！」

「ちよつと!?何でルビィちゃんには甘いのだ!?」

「天使だからです」

「じゃあ女神の志満姉とデートさせてあげるから！」

「今すぐ全員内浦に呼びます」

「落ち着きなさい」

俺の頭に亜里姉のチョップが入った。

「そんなことしたら、迷惑がかかるでしょ？」

「そ、そうだよ天！皆さん忙しいだろうし、来てくれるわけ・・・」

「穂乃果さん達大学生組は夏休み中だから良いとして、にこさんと希さんは社会人なんだから。急に仕事を早退したら、職場の人達に迷惑がかかるでしょ？」

「そつちですか!?来ることを前提に話が進んでません!?」

「え、当たり前でしょ？」

果南のツツコミに、キョトンとした顔で首を傾げる亜里姉。

「あの天が呼んでるんだよ？ 講義中だろうが仕事だろうが、飛んで駆けつけるに決まってるじゃない」

「ちよつと亜里沙、何を言ってるのよ」

「あつ、絵里さん・・・良かった、否定してくれr・・・」

「そんなの当たり前のこと、今さら言わなくても良いじゃない」

「まさかの全肯定だったあああああつ!？」

「果南うるさい。さつきから何をそんなにツツコミ入れてんの？」

「天のせいでしょうが！ どんだけ愛されてんの!？」

「え、嫉妬してる?」

「違うわ!」

何かよく分からないが、果南がギャーギャー騒いでいた。

発情期ですかコノヤロー。

「つていうか、何で二人が内浦にいるの?」

「天が『遊びに来なよ』つて言うから来ちゃった♡」

「お姉ちゃんが『天に会いに行く』つて言うから、付き添いで来ちゃった♡」

「キモツ」

「ちよっと!?!」

絵里姉と亜里姉のダブルツツコミ。

いい歳して♡マークとか・・・雪穂ちゃんが秋穂さんに辛辣だった理由が分かったわ。  
「まあ良いや・・・せっかく元スクールアイドルが二人いることだし、有効に利用させてもらおうかな」

「え、今この子『利用』って言った? 実の姉を『利用する』って宣言した?」

「練習再開しましょう。都合の良い手駒が二つ増えたんで」

「今『手駒』って言ったわよねえ!?! さっきから扱いが酷くない!?!」

「鞠莉、今すぐ絵里姉と亜里姉の練習着を用意して」

「OK! すぐに家の者に用意させるわ!」

「そこで小原家の力を使わないでくれる!?!」

「エリーチカに練習を見てもらえる・・・フフツ・・・フフツ・・・!」

「何か笑ってる子がいる!?! 怖いんだけど!?!」

「千歌さん、曜、果南、その金髪ポニーテール連行して」

「「アイアイサー!」」

「ちよ、止め・・・キャアアアアッ!?!」

「ア、アハハ・・・」

連行されていく絵里姉を見て、亜里姉が苦笑している。

「全く、天つてば強引なんだから・・・」

「デスクワーク続きで身体も鈍ってただろうし、たまには運動させないとね」  
肩をすくめる俺。

「とはいえ病み上がりだし、無茶させるつもりは無いよ。適度に運動させて、後は見学  
してもらおうから」

「ちゃんと考えてくれてたんだ？」

「当然でしょ。また倒れられたら困るからね」

溜め息をつく俺。

そんな俺を見て、亜里姉がニヤニヤしている。

「いやあ、天がお姉ちゃん想いで嬉しいなあ♪」

「亜里姉はずいぶん元気みたいだし、ハードなメニューでもこなせるよね？」

「えっ」

「花丸、ルビィ、善子、連行よろしく」

「「アイアイサー！」」

「いやああああああああああつ!?!」

一年生三人組に連行されていく亜里姉。

これで良し、と。

「い、良いの・・・？」

一人残った梨子が、若干引きながらこっちを見ていた。

「良いの良いの。どうせウチに泊まるんだろうし、たっぷりコキ使わないと」  
苦笑する俺。

「A q o u r s にとつても良い機会でしょ？ スクールアイドルの先輩二人に、練習を  
見てもらえるわけだし」

「それはまあ、確かに・・・」

「それに・・・久しぶりに見てみたくて。二人のダンスを」

「フフツ・・・何だかんだ言つて、天くんもお姉さん達のこと好きよね」

「・・・からかわないでよ」

クスクス笑う梨子に対し、気まぎらくなって顔を逸らす俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「も、もうダメ……」

「あ、足が……」

ソファに突っ伏し、ピクピク震えている絵里姉と亜里姉。

練習も終わり、俺は二人を連れて家に帰って来ていた。

「……これが老いるってことなんだね」

「ちよつと!? お姉ちゃんはともかく、私はまだ二十歳だよ!?!」

『『ともかく』って何よ!? 私だってまだ二十二だからね!?!』

「はいはい、体力の衰えた人達は黙っててね」

「うぐっ……」

言葉に詰まる二人。

やれやれ……

「まあ、ダンスのキレに関しては健在だったけどね。千歌さん達にとつても良い刺激になっただろうし、良い練習になったんじゃないかな」

「そういえば、そろそろ地区予選が近いんだっけ? 突破出来そう?」

「……ハッキリ言って、難しいだろうね」

「っ……」

俺の冷淡とも取れる発言に、亜里姉が息を呑む。

「ど、どうして・・・」

「二人一人のレベルは、最初の頃と比べたら格段に上がってるよ。過去にスクールアイドル経験のある三年生三人が入ったことで、グループとしての安定感も出てきた。それでも・・・決勝に進むには、まだ足りないかな」

「・・・そうね。私もそう思うわ」

絵里姉が静かに頷く。

「ラブライブも年々レベルが上がって、予備予選から実力のあるグループがひしめいてる状況よ。それを勝ち上がって地区予選に進んでくるグループは、当然かなりのレベルに達しているわ。今のAqoursが、他のレベルが高いグループに勝てるかどうか・・・」

「何しろ三年生が加入したのは、ここ一ヶ月の話だからね。今の体制になってまだ日が浅いし、グループとしてまだまだ熟してはいないから」

勿論、可能性が無いわけじゃない。

素晴らしいパフォーマンスを見せて、決勝に進む可能性だってある。

いつだってAqoursは、奇跡を起こしてきたのだから。

「皆が諦めないかぎり、俺も諦めずに皆を支えるよ。μ'sっていう諦めの悪い人達に感化されたせいで、俺も諦めが悪くなっちゃったから」

「天の諦めが悪いのは元々でしょうが！私達のせいにはしないでくれる!？」

「ほら、そもそもリーダーが『諦める』っていうことを知らない人じゃん」

「それは否定出来ないけども！」

「俺の頭が固いのも、絵里姉のせいだからね」

「だから人のせいにはしないで!？」

「私から言わせると、二人とも似た者同士だと思っただけだなあ」

「アンタにだけは言われたくない」

「何でそこだけハモるの!？」

亜里姉のツッコミ。

ふと三人で顔を見合わせ、思わず吹き出してしまふ。

「フフツツ……何か久しぶりね、この感じ」

「天が内浦に引つ越してから、こういうの無かったもんね」

「いつそ二人とも、内浦に引つ越してくれば？亜里姉が大学辞めれば済む話じゃん」

「軽い感じでもんでもないこと言うの止めてくれる!？辞めないからね!？」

「亜里沙……家族より大学を選ぶのね……」

「何でお姉ちゃんは本気にしてるの!？」

「【悲報】姉が家族を蔑ろにしている件について」

「炎上しそうな眩き止めて!？」

「アハハ、まあ冗談はさておき．．．そろそろ寝ようか」

「明日も朝から練習だし、早く休んでおかないとな．．．」

「ねえ、久しぶりに川の字に寝ない?」

「賛成!じゃあ真ん中は天ね!」

「いや、一番小さい亜里姉が真ん中で良いんじゃない?」

「くっ．．．身長を抜かしたからってそんな嫌味を．．．」

「．．．ハッ」

「腹立つ!この子腹立つ!」

「はいはい、いいから寝るわよ」

苦笑する絵里姉。

久しぶりに過ごす姉弟三人での時間に、居心地の良さを感じる俺なのだった。

身内を褒められて悪い気はしない。

翌日・・・

「花丸、少し遅れてるよ！気持ち早く！」

「はいずらっ！」

「曜は逆に少し早い！周りに合わせて！」

「了解！」

「あとゴリラ、元気良すぎ！もうちよっと抑えて！」

「ゴリラ言うなっ！元気良く踊るのが私の持ち味なのっ！」

「いや、元気良すぎて腕メツチャ大振りになってるから。隣で踊ってるダイヤさんの命が危険に晒されてるから」

「し、心臓に悪いですわ・・・」

「そこまで!？」

「もう、果南はもう少し周りを見た方が良いわよ？」

「B87も人のこと言えないでしょ」

「バストサイズで呼ばないでくれる!？」

「動きが激しすぎて、さつきからルビイとぶつかりそうに怖いんだよ。もうちょい抑えめで頼むわ」

「こ、怖かったよお・・・ぐすつ・・・」

「ル、ルビイ!? I'm sorry!」

「全く、三年生なんだからしつかりしてもらわないと・・・」

「あ、堕天使もどきが何か言ってる」

「『もどき』じゃないもんっ！立派な堕天使だもんっ！」

「もう、皆だらしないなあ」

「一番だらしないリーダーが何言ってるんですか」

「ええっ!? 私ちゃんとやってたよ!」

「ええ、ちゃんとやってきましたね・・・寝坊して練習に遅れたこと以外は」

「すいませんでしたあああああっ!」

「だから昨日『早く寝た方が良いよ』って言ったのに・・・」

「うう、梨子ちゃん・・・今日は早く寝るね・・・」

「はいはい、気を付けようね」

和気藹々と練習に励むAqoursの皆。

天も含め、メンバー同士の仲が良いグループなのだと感じる。

何より、天がとても楽しそうにしているのが印象的だった。

「・・・懐かしいね」

私の隣で練習を見ている亜里沙が呟く。

「μ sのマネージャーをやった頃の天みたい・・・」

「・・・ええ、そうね」

頷く私。

あの頃の光景が蘇ってくる。

『花陽ちゃん、ちよつとズレてる！周りとか合わせることを意識して！』

『は、はいっ！』

『凜ちゃん、今の部分は慌てないで！落ち着いて踊れば大丈夫だから！』

『わ、分かったにゃ！』

『ふふん、花陽も凜もまだまだね！』

『まだまだなのは、にこちゃんの胸の方だけどね』

『しばき倒すわよ!?!』

『天・・・貴方は今、胸の小さい女性を敵に回しましたね・・・』

『胸の大きさに関わらず、俺は海未ちゃんのが大好きだよ』

『私も大好きです天あああああつ!』

『アンタはチョロすぎんのお!?都合の良い女かつ!』

『そうだよ海未ちゃん!ことりだつて天くんのこと大好きなんだから!』

『ここにも似たような子がいた!』

『ことりちゃああああんつ!』

『天くうううんつ!』

『ここで甘々空間作り出すの止めなさいっ!』

『天、良い子だからこつちに來なさい。お小遣いあげるから』

『マジで!?真姫ちゃん大好き!』

『アンタはお金で釣らないのっ!天もホイホイついて行かないっ!』

『天くん、ウチはお金持つてないけど・・・大きいおっぱいなら持つてるよ?』

『やっぱり希ちゃんが一番だと思うんだ(キリツ)』

『何キメ顔してんのよ!?このエロガキ!』

『にこ・・・私の可愛い弟に、何を言ってくれているのかしら・・・?』

『ヒイツ!?ここにブラコンがいることを忘れてたあつ!』

『アハハ、やっぱり天くんは面白いなあ』

『ちよつと穂乃果!?!笑つてないで助けなさいよ!?!』

「・・・あの頃は、本当に楽しかったわね」

「お姉ちゃん・・・」

気遣わしげにこちらを見つめる亜里沙。

すると・・・

「おっ、頑張ってるねえ」

「皆、お疲れ!」

「お母さん!?!」

「ママ!?!」

屋上に現れた二人の女性を見て、果南と曜が驚いた声を上げる。  
どうやら二人のお母さんのようだ。

「何でここにいるの!?!」

「差し入れを持って来たのさ。ほら、スポーツドリンク」

「アイスもあるから、皆食べてね!」

「わーい!」

「ありがとうございます！」

歓声を上げて駆け寄るAqoursの皆。

ふと天の方を見ると、果南と曜のお母さん達と談笑していた。

「ありがとうございます。助かります」

「いいよお礼なんて。アタシ達と天の仲じゃないか」

「そうそう、娘達もお世話になってるし・・・曜、ちゃんと天に対して夜のお世話してあげてる？」

「ぶふうっ!？」

飲んでいたスポーツドリンクを盛大に吹き出す曜。

「な、何言ってるの!?! そんなことするわけないでしょうが!！」

「ハア、全く・・・これだから制服バカは・・・」

「娘に対する扱い酷くない!?!」

「果南、アンタはちゃんとヤツてるよね?」

「昼間から何言ってるの!?! そんなわけないでしょ!?!」

「ハア、全く・・・これだからゴリラは・・・」

「遂に実の母親にまでゴリラ扱いされた!?!」

「星さんも西華さんも安心して下さい。そのうち二人まとめて美味しくいただきます」

す

「天くん!?まさかの二股宣言!?!」

「それならよし!」

「それを聞いて安心したよ」

「何が良いの!?!何が安心なの!?!」

曜と果南のツツコミが止まらない。

メンバーの母親まで味方につけるなんて・・・

天、恐ろしい子・・・!

「あれ・・・?」

私と亜里沙の存在に気付いた果南のお母さんが、不思議そうに首を傾げている。

「天、あの二人は・・・?」

「あ、そういえばまだ紹介してませんでしたね・・・二人とも俺の姉です」

「姉!?!あの美女二人が!?!」

「こんにちは♪」

「初めまして。弟がいつもお世話になっていきます」

亜里沙と二人で挨拶をする。

そんな私達を、しげしげと見つめる曜のお母さん。

「ひよつとして、曜達が憧れてるμ、sのメンバーの・・・?」

「あ、はい。絢瀬絵里といます」

「やっぱり!」

「ひやあつ!」

いきなり手を掴まれる。

何?!何事!!

「ちよつと曜!?!本物のμ、sのメンバーがいるんだけど!?!」

「ちよつとママ!?!いきなり失礼でしょ!?!すみません絵里さん、ママは最近μ、sの動  
画を観ることにハマってて・・・」

「うわあ、本物だあ!」

「人の話聞いてくれる!?!絵里さんから離れなさい!」

「好きなものに対して、急に見境が無くなるこの感じ・・・やっぱり親子だなあ」

「天くんはそこで納得しないでくれる!?!全然嬉しくないんだけど!?!」

曜のツツコミ。

曜もこんな風になることがあるのかしら・・・?

「つてことは、アンタが亜里沙ちゃんか。天から話は聞いてるよ」

「はい、絢瀬亜里沙です♪天はどんな話をしてるんですか?」

「アホの子だつて」

「酷い!?!」

果南のお母さんの言葉に、シヨックを受けている亜里沙。

「ちよつと天!?! どういうこと!?!」

「いやあ、酷い話もあつたもんだね」

「何で他人事なの!?!」

「全く、姉の顔が見てみたいわ」

「目の前にいるでしょうが!」

相変わらずおちよくられる亜里沙。

完全に天に遊ばれてるわね・・・

「天くくん! アイス溶けちゃうよ!」

「今行きます。ほら、曜と果南も早く行くよ」

「ちよ、手を引つ張らないでよ!?!」

「もう、強引なんだから・・・」

曜と果南の手を引き、千歌達のところへ行く天。

手を引かれてる二人も、苦笑しているが嫌がつてはいなかった。

むしろ何だか楽しそうというか・・・

「相変わらず仲良しだねえ」

笑っている果南のお母さん。

「果南と天、早くくつつかないかなあ・・・」

「何言ってるの西華ちゃん！天とくつつくのは曜だからね！」

「それは聞き捨てならないね、星。天は渡さないよ？」

「こつちのセリフだわ！」

何故かお母さん同士でバチバチやっていた。

「二人とも何言ってるんですか!?天は渡しませんからね!？」

「アホの子は黙ってて！」

「何でそこでハモるんですか!？」

シヨックを受ける亜里沙に、思わず同情してしまう。

それにしても天ったら、メンバーのお母さんにホント好かれてるわね・・・

こういうところも、*μ*s時代と変わらないわ・・・

「お二人とも、ずいぶん天を気に入っていらっしやるんですね」

「当然じゃん！」

頷く曜のお母さん。

「あんな良い子なかないよ。今まで男の影さえ無かった曜が、初めて家に連れ

て来たぐらいだし・・・最初は本当にビックリしたわ」

「アタシもだよ。果南から『お店のアルバイトに来てほしい男の子がいる』って聞いた時は、思わず自分の耳を疑ったもんさ」

同調する果南のお母さん。

「自分からアタシに紹介するなんて、よつぽど気に入ってるんだろかなとは思ったけど・・・実際に天に会ってみて納得したよ。『ああ、果南が気に入るわけだ』ってね」

「そうそう、天には不思議な魅力があるよね。初対面だったのに、気が付いたら仲良くなってたもん」

笑っている曜のお母さん。

確かにあの子は、人の懐に入るのが上手いのよね・・・

「それに曜も、ずいぶん天に心を許してるみたいだしね。今までは口を開けば『千歌ちゃん』だったけど、最近じゃ天のことも同じぐらい話してるもん」

「果南もさ。いくらハグ大好きとはいえ、男にハグなんてしなかったのに・・・天には隙あらばハグしてるからね。それに・・・」

果南のお母さんが、ダイヤや鞠莉と談笑している果南に視線を向けた。

「・・・果南がああやって笑っていられるのは、天のおかげだから。本人も天には恩義を感じてるみたいだし、少なからず好意を抱いてはいると思うんだ。だからまあ、くっ

ついてくれたら嬉しいなあって」

「曜もそうだよ。いつも親身になつて寄り添つてくれて、間違つたことを言つた時は叱つてくれて・・・そんな天を凄く信頼してるし、天に対しての想いつていうのはあるんじゃないかな。あの二人がくつついてくれたら、私としては嬉しいんだけどね」

「フフツ、天も罪な男だねえ」

「アハハ、それは言えるね！」

面白そうに笑う二人。

自分の可愛い娘を、天に任せようとしている・・・

それだけで、二人がいかに天を信頼しているかが窺えた。

「・・・変わらないなあ、天は」

どこか嬉しそうな亜里沙。

大切な弟を褒められて、悪い気のする姉などいない・・・

亜里沙同様、嬉しく思う私なのだった。

人から愛されるというのは幸せなことである。

《絵里視点》

「美味っ！これ美味っ！」

「フフツ、たくさん食べてね」

美味しそうに料理を食べる天を見て、嬉しそうに笑う梨子のお母さん。

私達は今、桜内家で夕食をご馳走になっていた。

「亜里沙ちゃんと絵里ちゃんも、いっぱい食べてね」

「ありがとうございます！」

「すみません、初対面でいきなり夕飯をご馳走になってしまって・・・」

「そんなこと気にしないの。天くんは私の息子みたいなものだし、それなら二人も私の娘みたいなものでしょ」

「そうですよ、お義姉さん！」

「梨子!? 何ちゃっかり『お義姉さん』呼びしてるの!？」

「この子つたら東京から帰って来てから、天のことになると急にポンコツになっちゃうんです・・・すみません」

隣に座る梨子を見て溜め息をつき、私に頭を下げる善子。

夕食の席には、善子と善子のお母さんも同席していた。

「ちよつと善子ちゃん!? 誰がポンコツですって!？」

「アンタよ。あと善子じゃなくてヨハネ」

「私のどこがポンコツだって言うの!？」

「気付いてない時点で立派なポンコツじゃない」

「容赦ないほどの毒舌ぶりね!？」

シヨックを受けている梨子。

自分のことを『墮天使ヨハネ』なんて名乗る割に、意外と常識人なのね善子・・・

「ヨハネです」

「貴女人の心が読めるの!？」

「どれだけ『善子』って呼ばれたくないのかしら・・・」

「ちよつと善子、アンタも梨子ちゃんを見習つてもつとアピールしなさいよ。このま

まだと天くん取られちゃうわよ?」

「娘の色恋沙汰に首突つ込むんじゃないわよ。あとヨハネ」

母親からの言葉に、溜め息をつく善子。

「今さらアピールも何も無いでしょ。私のみつともないところは、もう全部天に見ら

れちゃってるんだから」

「善子？さつきから何話してんの？」

「何でもないわ。それより天、口元にご飯粒ついてるわよ．．．はい、取れた」  
「ありがと」

あれ!?!何かこの二人良い感じ!?!

「ナイスよ善子！流石は私の娘！」

「ヨハネだつてば。何がナイスよ」

「ぐぬぬぬ．．．悔しいけど、今のは流石だったわ善子ちゃん．．．」

「だからヨハネだつて。ホントにどうしちゃったのよアンタ．．．」

呆れている善子。

「ご馳走様でした。洗い物は私がやります」

「手伝うよ、善子。梨子、食器はどこにしまえば良い？」

「あ、えつとね．．．」

三人がキツチンへと消える。

そのその光景を見て、善子のお母さんが微笑んでいた。

「フフツ、善子も変わったわね．．．天くん感謝しなくっちゃ」

「天に、ですか？」

「ええ、あの子を変えてくれたのは天くんだもの」

笑う善子のお母さん。

「善子はああ見えて人見知りだから、自分の殻に閉じこもりがちでね．．．でも天くんは、そんなあの子を殻から引つ張り出してくれた。母親である私にさえ出来なかつたことを、天くんはいとも簡単にやってのけてくれたわ」

「天が．．．」

「だからこそ、善子は天くんに心を許してるのよ。私達が『善子』って呼ぶと『ヨハネ』って言い返してくるくせに、天くんには何も言い返さなかつたでしょ？」

「あつ．．．」

そう言われてみれば、天にだけは『ヨハネ』って言わなかつたような．．．

「善子の方から天くんに、『善子って呼んでほしい』って言ったんですって。今までのあの子だったら、考えられないようなお願いだけど．．．自分からそんなことを言い出すなんて、よっぽど天くんに心を許したのね」

どこか嬉しそうな善子のお母さん。

「あの子が天くん、恋をしているかまでは分からないけど．．．母親としては、あの二人がくつついてくれたらって思うのよね。天くんだったら、安心して善子のことを任せられるし」

「フフツ、その気持ち分かるわ」

笑顔で頷く梨子のお母さん。

「私も天くんだったら、安心して梨子のことを任せられるもの。まあ実際、梨子は天くんにハートを撃ち抜かれちゃったみたいだし」

「梨子ちゃん、天と何かあったんですか？」

「善子ちゃんと同じで、あの子も天くんに救われてるのよ」

亜里沙の問いに答える梨子のお母さん。

「あの子も元々は、絵里ちゃんや亜里沙ちゃんと同じで音ノ木坂の生徒だったんだけど・・・思うようにピアノが弾けなくなつて、浦の星に転校したの」

「えっ、そうだったんですか!？」

「ええ。でも内浦に引越して来て、あの子は本当に明るくなったわ。前みたいに、楽しくピアノを弾くようになった。それは勿論、千歌ちゃん達に出会えたおかげでもあるけど・・・一番は、天くんが梨子に寄り添ってくれたからだと思う」

微笑む梨子のお母さん。

「あれだけ親身になってくれて、否定していた自分を全力で肯定してくれたら・・・惚れちゃつてもおかしくないわよね。だからこそ母親としては、あの子の恋が実つてくれることを願つてるのよ」

「・・・やっぱりここでも、天は天だったんだ」

嬉しそうに呟く亜里沙。

私も同じ気持ちだった。

「それにやっぱり、天くんみたいな子が息子に欲しいもの」

「分かるわ。何ならもう息子みたいに思ってるし」

「そうそう。A q o u r sのお母さん達は、皆同じ気持ちなんじゃないかしら」

「フフツ、間違いないわね」

楽しそうに話す二人。

「どうやら、マダム・キラールぶりも相変わらずのようだった。」

「・・・愛されてるわね、あの子」

自然と笑みが零れる私なのだった。

\*\*\*\*\*

《絵里視点》

「ああ、極楽・・・」

「年寄り臭いわよ、亜里沙」

苦笑する私。

私達は今、千歌の実家である『十千万』の温泉に浸かっていた。

「フフツ、気に入ってもらえたなら嬉しいわ」

「すみません、突然お邪魔してしまって・・・」

「遠慮しないで良いのよ。天くんの身内は、私達の身内みたいなものなんだから」

ニコニコしている志満さん。

桜内家を出て帰ろうとした時、天のスマホに千歌から着信が入ったのだ。

何でも新曲の歌詞について相談したかったらしく、だったら直接会おうということ

高海家にお邪魔することになった。

そこで初めて千歌の家が旅館だということを知った私達は、志満さんと美渡さんの勸

めで温泉に入らせてもらうことになったのだ。

「それにこの時間はお客さんも来ないから、ゆっくり浸かってもらって大丈夫よ」

「そうそう、いつもアタシ達が使ってる時間だしね」

笑っている美渡さん。

「それにしても・・・本当にスタイル抜群だね」

「な、何ですか急に・・・」

「いや、女から見ても惚れ惚れするような身体してるなって・・・えいつ」

「ひゃんっ!?ど、どこ触ってるんですか!？」

「おお、大きくて柔らかい・・・Fか」

「揉むだけで分かるんですか!？」

「美渡さん正解!μ, s時代はEだったんですけど、さらに成長してるんですよ」

「亜里沙!?私のプライベートはどこへいったの!？」

「マジかあ・・・っていうか、亜里沙ちゃんもスタイル良いよね」

「いえいえ、お姉ちゃんとは比べたら全然ですよ」

「いやいや、十分過ぎるくらい良いって・・・えいつ」

「あんっ♡」

「ふむふむ・・・Dか」

「おお、正解!」

「どんな特技ですか!？」

へ、変態だわ!

「ここにとんでもない変態がいるわ!」

「美渡、その辺でおしまいにしなさいね?」

「アハハ、ゴメンゴメン」

志満さんの言葉に苦笑する美渡さん。

「それにしても、ホント天はどういう星の下に生まれてきたんだろうねえ……こんな美女二人が姉で、海未ちゃんや真姫ちゃんみたいな美女達に大事に想われて……しかもA q o u r s という美少女グループと大の仲良しとか……」

「そんなの、天くんが良い子だからに決まってるじゃない」  
微笑む志満さん。

「『類は友を呼ぶ』って言うでしょ？天くんが良い子だから、周りに集まってる子達も良い子ばかりなのよ。その良い子達が偶然、美女か美少女なだけじゃないかしら」

「いや、その偶然が凄い奇跡だと思うんだけど。ここまできるともう、天文学的な数字だと思っただけだ」

「『天』くんだけに？」

「何も上手くないからね!？」

「アハハ……」

苦笑する私と亜里沙。

まあ確かに、天の周りに可愛い子が多いのは間違いない。

μ s の時からそうだったわけだし……

「流石は私の未来の旦那様、やっぱりスケールが違うわ」

「未来の旦那様!？」

「どういうことですか!？」

「あー・・・天は志満姉にも凄く懐いてて、会う度にプロポーズしてんのよ溜め息をつきながら説明してくれる美渡さん。」

「志満姉も満更でもない態度とるし・・・お互い本気じゃないでしょうに・・・」

「あら、それは心外ね」

笑う志満さん。

「天くんが本気で結婚したいと言ってくれるのなら、私は応えるつもりよ?」

「はい!？」

「一緒にいて凄く楽しいし、私のことを大切にしてくれそうだし・・・美渡や千歌ちゃんとも仲が良いじゃない。結婚相手として申し分ないと思ってるわ」

「ちよ、嘘でしょ!？」

「フフツ、甘いわね美渡。貴女が思ってる以上に、私は天くんのが大好きなのよ?」

クスクス笑っている志満さん。

「こ、こんなところに思わぬ伏兵が・・・!」

「そういうわけだから、絵里ちゃんや亜里沙ちゃんを『お義姉さん』って呼ぶ日が来るかもしれないわね」

「そ、そんなの認めませんからねっ!」

グルルル・・・と唸る亜里沙。

全く、天つたらどこまで人タラシなの・・・

「というか、美渡だって天くんのこと好きでしように」

「す、好きって・・・まあ好きだけどさ・・・」

「ええっ!?!美渡さんまで!?!」

「いや、恋愛的な意味じゃないよ!?!」

慌てて否定する美渡さん。

「絵里ちゃん達がいるのに、こんなことを言うのもどうかと思うけど・・・アタシは天のこと、弟みたいに思ってるんだよね。身内感覚っていうかさ・・・」

「フフツ、二人は仲が良いものね」

「・・・まあ、アタシはそう思ってるけど」

恥ずかしそうに俯く美渡さん。

天のこと、大切に想ってくれてるのね・・・

「だからこそアタシは、天と千歌がくつつかないかなあつて思ってるんだよね。そう

すれば、晴れて天はアタシの義弟になるし」

「あら、義兄じゃダメなの？」

「だから何で志満姉が結婚する気満々なの!？」

「うう、まさか妹が幸せを邪魔するなんて．．．お姉ちゃん悲しいわ．．．」

「あれ!?!アタシ悪者扱い!?!」

「．．．仲の良い姉妹ねえ」

茶番を繰り広げる二人を見て、思わず苦笑してしまう私。

すると私の側に、亜里沙がスツと近付いてきた。

「ねえ、お姉ちゃん．．．天、愛されてるね」

「．．．ええ、本当に」

A q o u r s のメンバーだけでなく、その家族からも愛されている．．．

そんな天を、姉として誇らしく思う私なのだった。

「全く、あの子は本当に人たらしなんだから．．．」

仲間がいるというのは幸せなことである。

「くしゅんっ！」

「大丈夫？」

心配してくれる千歌さん。

俺達は今、千歌さんの家で新曲の歌詞について話し合っているところだった。

「大丈夫ですよ。誰かが噂でもしてるんじゃないですか？」

「志満姉達かな？絵里さん達と一緒にお風呂入ってるみたいだし」

「あつ、何か身体が冷えてきた気がする・・・お風呂お借りしますね」

「ちよつと!?!完全に覗く気だよねえ!?!」

「ハア・・・千歌さん、人を覗き魔扱いするの止めてもらえますか？」

「あ、ゴメン・・・そうだよね、天くんはそんなことしな・・・」

「一緒に入るに決まってるじゃないですか」

「余計に悪いわっ！」

「ぎゅっ!?!」

思いつきり頭を引っ叩かれる。

「全く、天くんは本当にエッチなんだから・・・」

「男は皆そうですよ。さつきから千歌さんの胸の谷間がチラチラ見えているにも関わらず、鋼のような理性で手を出さない俺はまともな部類だと自負してます」

「胸を見てる時点でアウトだからね!？」

慌てて胸元を隠す千歌さん。

だったらそんな胸元の緩い服着なきや良いのに・・・

「ほら、遊んでないで作詞しましょうよ」

「誰のせいだと思ってるのっ!」

唸る千歌さん。

やれやれ・・・

「それで?何か閃きましたか?」

「アハハ、ビックリするくらい何も閃かないんだよね」

「うらあっ!」

「グハアツ!」

今度は俺が千歌さんの頭を引つ叩く。

全く、このアホミカンめ・・・

「立てよド三流。俺達とお前の格の違いってやつを見せてやる」

「どこのエ●ワードさん!？」

「かかってこいよ、アホの錬金術師」

「そんな不名誉な二つ名は要らないよ!？」

千歌さんは一通りツツコミを入れると、大きな溜め息をついた。

「ハア・・・考えれば考えるほど、頭がグチャグチャになるよお・・・」

「いや、そんなに難しく考えなくても・・・」

「ねえ、天くんはどうやって作詞してたの?」

尋ねてくる千歌さん。

「『未熟DREAMER』とか凄く良い歌詞だったし、μsの曲も作詞してたって聞いたし・・・実は前から気になってたんだよね」

「どうやって、と聞かれても・・・」

答えに困る俺。

「特に変わったことはしてませんよ。まずはテーマを決めて、そこから膨らませていくというか・・・『未熟DREAMER』は三年生の一件があったんで、それを基に作詞した感じでしたけど」

「テーマかあ・・・」

「何かテーマにしたいこととか無いんですか?」

「それがまとまらなくてさあ……」

机に突つ伏す千歌さん。

「何かこう……気持ちを上手く言葉にできないっていうか……」

「ああ、小田●正現象ですか」

「どんな現象!?!確かに『言葉にできない』って曲を歌ってるけども!」

「とりあえず、考えてることを教えてもらって良いですか?どんなに曖昧でも良いですから、まずは俺に伝えてみて下さい」

「う、うん……」

「おやおずと口を開く千歌さん。」

「……新曲はね、前向きな明るい曲にしたいんだ」

「前向きな明るい曲、ですか?」

「うん。皆が一つになれるような、そんな曲にしたいの」

微笑む千歌さん。

「だってこの曲は……Aqoursが十人になってから、初めて歌う曲だもん」

「っ……」

千歌さん、そんな風に考えてくれたのか……

「天くんがAqoursに入ってくれた時、思ったんだ。『これで全員揃ったな』って。」

『ここからが本当のスタートだな』って」

「千歌さん……」

「だから今回の曲は、皆で前を向いて進めるような……未来に向かって歩いて行けるような、そんな曲にしたいんだ」

そう言つてニッコリ笑う千歌さんに、俺は不覚にもドキツとしてしまった。

こういうことをハッキリ言えるなんて、本当にズルい人だよな……

「どうしたの天くん？何か顔が赤くない？」

「夕陽のせいです」

「いや、もう夜なんだけど……」

「じゃあ月のせいです」

「月の光は赤くないよ!？」

「何当たり前のこと言ってるんですか？頭おかしくなりました？」

「腹立つ!この子腹立つ!」

机をバンバン叩く千歌さん。

やれやれ……

「まあ、千歌さんの頭がおかしいのは置いといて……」

「置かないでよ!?!そもそもおかしくないから!」

「今の千歌さんの話を聞いて、ちよつと思ひ浮かんだんですけど……」  
ギヤーギヤー騒ぐ千歌さんを見無視して、ノートを開く俺。

「シャーペンを持ち、思いついた歌詞を書き連ねていく。」

「こういうのどうですか？」

「どれどれ……おお、良いね！」

「でしょ？ イメージ的にはこんな感じで……」

「なるほど……じゃあこんな歌詞はどうかかな？」

「あ、良いですねそれ。採用しましょう」

「やった！ じゃあこんなのはどう？」

「オツケーです。もしくはこんな感じで……」

千歌さんと二人で、新曲の作詞に励む俺なのだ。

\*\*\*\*\*

《絵里視点》

「ふう……」

ベランダに置いてあるベンチに腰掛け、空を見上げる私。

満天の星が輝く夜空は、とても綺麗だった。

「東京じゃ、こんなの見られないわね……」

「でしょ？」

背後から声が出したかと思うと、私の肩に薄手のブランケットがかけられた。

「夏とはいえ、夜に外にいと湯冷めしちゃうよ？」

「ありがとう」

私の隣に腰掛ける天にお礼を言う。

我が弟ながら、相変わらず気が利くわね……

「亜里沙は？」

「速攻で寝ちやつたよ」

苦笑する天。

「幸せそうな顔しちやつてき……どんな夢を見てるんだか」

「……嬉しかったのよ、きつと」

微笑む私。

「今日会った人達は皆、天のことを凄く褒めてた。弟があんなに褒められたら、姉とし

ては嬉しいもの」

「・・・そっか」

照れ臭そうに笑う天。

「それならまあ・・・良かったかな」

「ええ。『ウチの娘を救ってくれた』って、皆感謝してたわよ?」

「そんな大層なこととはしてないよ。俺は俺のやりたいようにやっただけだし」

「・・・相変わらずね」

苦笑する私。

天が『やりたいようにやった』結果、*μ* sもA q o u r sも救われてるんだけど：

本人に『救った』という実感は無いらしい。

『ウチの娘とくっついてほしい』とも言ってたわよ?」

「アハハ、そう言ってもらえるのは嬉しいんだけど・・・あれだけ可愛くて魅力的な女の子達だし、他にもっと良い男がいるでしょ。俺じゃ釣り合わないよ」

「・・・本当に相変わらずね」

自己評価が著しく低いのは、天の昔からの悪い癖だ。

もっと自分に自信を持つても良いのに・・・

「気になる子とかいないの?例えば・・・鞠莉とか」

「いや、何でそこで鞠莉が出てくるの?」

「だって幼馴染だし、昔から凄く仲良かったじゃない」

「まあ仲は良いけど・・・あくまで幼馴染としてだよ? まあすつかりスタイル抜群の美女になつちやつたから、ちよつと意識はするけどさ・・・」

「ふうん・・・じゃあダイヤは? 天の好きそうな『大人の女性』って感じだけだ」

「お姉さん、かな。ダイヤさんは絵里姉に似てるところがあつて、初めて会った時から他人とは思えないというか・・・支えたいと思う人だね」

「ふむふむ・・・果南は? よくハグしてるらしいけど」

「果南はハグ魔だからねえ・・・まあ美少女にハグしてもらえるわけだし、俺としては役得だと思ってるよ。バイトでもお世話になつてるし、頼れるお姉さんって感じかな」

「なるほど・・・善子はどうなの? 天には『ヨハネ』って言い返さないそうじゃない」

「まあ善子の方から『名前で呼んで』って言われてるからね。それだけ信頼してもらつてるってことだろうし、ありがたく思ってるけど・・・一言で言うとう相方かな? どんなボケでも拾つてツツコミ入れてくれるし」

「いや、芸人じゃないんだから・・・まあそれは置いといて、花丸はどう? 練習でも結構気にかけていたような気がするけど」

「花丸がA q o u r sに入る時、『サポートする』って約束したからね。俺が落ち込ん

だ時とか、花丸が励ましてくれたりしたし・・・信頼出来る友達だと思ってるよ」

「へえ・・・ならルビイは？花丸と同じくらい、ルビイのことも気にかけていたような気がしたけど」

「まあルビイも、俺が引き込んだみたいなどころがあるから・・・それに何か、ルビイのことは放っておけないんだよね。同級生だけど、妹みたいな感じかな？」

「妹ねえ・・・じゃあ曜は？仲は凄く良さそうだったけど」

「曜は人と壁を作らない分、俺も絡みやすいからそう見えるのかもね。まあ実際仲は良いし、良い意味で年上って感じがしないというか・・・悪友みたいなの？」

「いや、悪友って・・・それなら千歌はどうなのよ？さん付けしてる割には、もの凄くフランクに接してるように見えるけど」

「穂乃果ちゃんと同じ。以上」

「簡潔!?!でも分かりやすい!?!」

「アハハ・・・まあでも、千歌さんはやっぱり凄い人だと思っよ。いざって時に頼れる人だと思っし・・・『この人について行こう』って思えるリーダーだよ、あの人は」

「・・・そう。じゃあ最後に、梨子はどっなの？この間東京に来たのも、ピアノ発表会に出場する梨子を応援する為だったって聞いたわよ？」

「まあね。それも俺がそうさせたみたいなのころがあつたし、ずっと苦しんできたこ

とも聞いてたから・・・まあ結果的に、俺が梨子に助けられちゃったんだけど」  
「どういふこと？」

「絵里姉と会う決心がつかない俺に、喝を入れてくれたのが梨子だったんだよ。おかげで決心がついて、絵里姉に会えて仲直りも出来て・・・本当に感謝してる。梨子には色々助けられてるし、俺にとっては・・・恩人かな」

「・・・そうだったのね」

今度私からも、改めてお礼を言った方が良いかしら・・・  
それにしても・・・

「・・・良い仲間に巡り会えたわね」

「・・・うん」

頷き、星空を見上げる天。

「内浦に来て、本当に良かったと思う。A q o u r sの皆は勿論、ここで出会った人達は皆良い人達ばかりで・・・俺はこの町が、本当に好きだよ」

そう語る天の顔は、とても活き活きしてして・・・家を出る前より、何だか大人びて見えた。

「どうやら今回の内浦行きは、天を成長させてくれたようだ。」

「フフツ・・・そう」

私は小さく笑うと、天の肩に寄りかかった。

「・・・それを聞いて安心したわ。楽しく過ごさせているなら良かった」

「ゴメンね、色々と心配かけて・・・」

「謝らないの」

天の腕にギュッと抱きつく。

「私は天のお姉ちゃんなんだから。弟の心配くらいさせてよ」

「・・・ありがと」

お互いに身を寄せ合い、星空を眺める私達なのだった。

【南ことり】 貴方がいてくれたから・・・

「・・・ん」

目が覚める俺。

カーテンの隙間から光が差し込んでいると、どうやらもう朝のようだ。俺は起き上がろうとして、布団に手をかけて・・・  
むにっ。

「やんっ♡」

何か柔らかいものを掴んだ。

マシユマロのようなその感触が心地良くて、思わずにぎにぎしてしまう。

「んっ・・・あっ・・・あんっ♡」

「ん?」

何やら声が聞こえる。

そつと布団をめくってみると・・・

「おはよう、天くん♡」

女神のような美女が、俺に微笑みながら挨拶してくれる。

おお・・・

「おはよう、ことり。今日も綺麗だね」

「フフツ、ありがとう。天くんもカッコ良いよ」

そんなことを言ってくれることり。

女神や・・・

「それはそうと天くん・・・ことりのおっぱい、そんなに気持ち良い？」

「え？」

その言葉を聞いて、ようやく自分の掴んでいるものを確認する。

今のことりは全裸であり、俺が掴んでいたのは・・・ことりのおっぱいだった。

「あー・・・道理でいつまでも揉んでいたい感触だと思った・・・」

「もうっ、天くんのエッチ♡」

そう言いつつ、揉まれるがままになっていることり。

揉んでる俺が言うのもアレだが、心が広いなあ・・・

「ああ、これはヤバイ・・・邪な気持ちになるわ・・・」

「フフツ、じゃあ・・・昨日の夜の続き、しちやう？」

「・・・お願いします」

「了解♡」

ことりはそう言うのと、勢いよく布団に潜り込んだ。

「キャツ♡天くんつてば、朝から元気なんだから♡」

そう言つて笑ふことりに、何も言えずに苦笑する俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「はい天くん、あゝん♡」

「あゝん」

「・・・見せつけてくれるわねえ」

苦笑するひなさん。

俺達は今、三人で朝食を食べていた。

「流石は新婚夫婦・・・つて、結婚する前からこんな感じだったわね」

「だつてことりと天くんの仲だもん♪」

俺の腕に抱きつくことり。

俺とことりが結婚したのは、今から半年前・・・

俺が高校を卒業したのと同時に交際をスタートさせ、大学を卒業したのと同時にゴールインした。

そして結婚と同時に南家へ引っ越し、ことりやひなさんと三人で暮らしているのだ。

「仲が良いのは結構だけど・・・夜はもう少し静かにしてくれないかしら？誰かさんの喘ぎ声が、私の部屋まで聞こえるんだけど？」

「っ!?!」

ボンツとことりの顔が真っ赤に染まる。

まああれだけ大きい声で喘いでたら、そりや普通に聞こえるよなあ・・・

「全く、いやらしい娘になっちゃって・・・」

「そ、天くんのせいだもんっ！天くんががつついてくるからっ!」

「ことりの身体がエロいのが悪い」

「エ、エロっ・・・!?!」

「あら、そんなにエロいの？」

「ええ、それはもう・・・男の理性を崩壊させる、悪い身体の持ち主ですよ」

「あらあら、我が娘ながら恐ろしいわね・・・」

「も、もうっ!二人ともその辺にしてっ!」

涙目のことり。



ファンで埋め尽くされていた。

「天くんなんて知らないもんっ！」

「好きだよ、ことり」

「そ、そんな言葉に騙されないんだから！」

「大好きだよ、ことり」

「う、うう・・・」

「愛してるよ、ことり」

「私も愛してるううううっ！」

勢いよく抱きついてくることり。

ウチの嫁がチョロ可愛い件について。

「それにしても・・・相変わらず凄い人気だね、スクールアイドル」

「最初にどこかの誰かさん達が、スクールアイドルブームを巻き起こしたからね。今じゃ凄まじい人気だよ」

苦笑する俺。

その『どこかの誰かさん達』の中の一人が、客席にいるなんて・・・

ここに集まったスクールアイドルファンの皆は、想像もしてないだろうな・・・

「天くん、よく決勝のチケット取れたね？凄い倍率だつて聞いたけど・・・」

「ああ、ツバサちゃんを脅s・・・お願いしたらくれたよ」

「何か今物騒なこと言いかけなかった!？」

「いやいや、『チケットくれなきや週刊誌にデマを流す』なんて脅してないって」

「完全に脅してるよねえ!?!何してるの!？」

「いやあ、持つべきものは権力を持った友達だよね」

「最低な発言してるけど大丈夫!？」

「ことりのツツコミ。」

A—R—I—S—Eはラブライブの初代王者であり、スクールアイドルの先駆者とも呼ばれている存在だ。

その上今ではプロのトップアイドルグループになってるので、運営にかけあつてチケットを手に入れるなど容易いことなのである。

流星はツバサちゃん、毛根は腐つてもトップアイドルだけはある。

「それにしても・・・アキバドームか」

前方のステージを見て、懐かしい気持ちになる。

あれからもう何年経つつけ・・・

「・・・もしかして、Aqoursの皆を思い出してた?」

「・・・うん」

千歌さん、曜、梨子、花丸、ルビィ、善子、ダイヤさん、果南、鞠莉・・・  
今でも連絡を取り合っている、かけがえのない仲間達の顔が思い浮かんだ。

「・・・ことりとのデート中に、他の女の子のこと考えるの禁止」

嫉妬の言葉とは裏腹に、俺の肩に頭を乗せることり。

「・・・今度、内浦まで旅行に行こっか。ことりも皆に会いたいし」

「・・・ありがとう」

ことりの腰に手を回し、優しく抱き寄せる。

ホント、良い嫁を持ったよ・・・

「よし、今日は思う存分楽しもうか！」

「うんっ！いっぱい応援しよっ！」

「よっしやー！応援するぞー！」

「千歌さん、はしやぎ過ぎですわっ！ステージが始まるまでは抑えませんかっ！」

「そう言うお姉ちゃんこそ、テンションの高さが隠し切れないよね」

「何を言ってますのルビィっ！私はいつも通りですわっ！」

「すみません、ちよつと近付かないでもらって良いですか？」

「あああああっ!?!最愛の妹が反抗期突入ですわあああああっ!?!」

「・・・」

「ア、アハハ・・・」

背後から聞こえる声に無言になる俺と、苦笑していることり。

人が懐かしさに浸つてるところを、思いつきりぶち壊してくれやがって・・・

「歯を食い縛れよ、最強・・・！」

「え、天くん!？」

「天さん!?!何故ここに!?!」

「俺の最弱は・・・ちつとばつか響くぞおおおおおおおおっ!」

「ちよ、どこの上条さん・・・ギヤアアアアアッ!」

「イヤアアアアアアアアアアッ!?!」

全力で千歌さんとダイヤさんをしばく俺なのだつた。

\*\*\*\*\*

「あ、頭が・・・」

「い、痛いですわ・・・」

呻いている千歌さんとダイヤさん。

ラブライブの決勝も終わり、俺達は会場の外へと出てきていた。

「いやあ、ラブライブも年々レベルが高くなってるねえ」

「ホントだよね！どのグループが優勝してもおかしくなかったよ！」  
ルビィと盛り上がっている俺。

一体どこまで進化するんだ、ラブライブ・・・

「つていうか、よく決勝のチケット取れたね？」

「千歌ちゃんが奇跡的に引き当てたんだよ。しかも三枚も・・・凄くない？」  
「何でそんなに運が良いんだろう・・・日頃の行いはアホみたいに悪いのに」

「ちよつと!?!それは聞き捨てならないんだけど!?!」

「ああ、すみません・・・『みたい』じゃなくて本当にアホでしたね」

「喧嘩売ってる!?!」

「全く・・・天さんも千歌さんも、子供みたいな言い合いはお止めなさい」

「残念お嬢様は黙ってて下さい」

「その喧嘩まとめて買い上げてやりますわあああああつ！」

「アハハ・・・」

苦笑しているルビィ。

一方、ことりはクスクス笑っていた。

「フフツ、皆相変わらず仲良しだね．．．ちよつと妬いちゃうかも」

「ねえ、今のセリフ聞いた？俺、嫁に愛され過ぎて幸せなんだけど」

「出たよ、天くんの惚気自慢．．．」

「幸せなのは結構なのですが、聞いているこちらは胸焼けが酷くて．．．」

「お姉ちゃん、天くんに電話で一時間以上聞かされてたもんね．．．その後ぐったりして、すぐ寝込んだじゃったけど」

ああ、そういえばダイヤさんに電話で話したっけ．．．

『新生活はいかがですか？』って聞かれたから、ありのままを話したんだけどなあ．．．

「つていうか皆、電車の時間大丈夫？」

「ああっ!？」

「びぎいつ!？」

「すっかり忘れてましたわ!？」

時計を見て慌てる三人。

やれやれ．．．

「じゃあ天くん、またね！」

「ことりさんも、またお会いしましょう！」

「今度ゆっくりお話しようね！」

「うん、またね」

「気を付けて帰ってね！」

こちらに手を振り、慌てて走っていく三人。

変わらないなあ・・・

「・・・フフツ」

笑みを零すことり。

「やっぱり仲良しだね、A q o u r s の皆と」

「・・・まあ、仲間だからね」

皆と共に過ごした時間は、俺にとっての宝物だ。

μ s もそうだし、A q o u r s もそう・・・

皆かけがえのない仲間達なのである。

「・・・ただ、ことりは別だけど」

「ええっ!?!ことりだけ仲間外れ!?!」

「いや、そうじゃなくて・・・」

俺は苦笑しつつ、ことりの頭を撫でた。

「勿論、ことりも大切な仲間だけど・・・愛する妻だから。他の皆とは少し違う、特別な存在なんだよ」

「っ・・・」

「誕生日おめでとう、ことり・・・愛してるよ」

そう、今日はことりの誕生日なのだ。

この後はダイナーの予約もあり、お祝いする準備はバッチリである。

「・・・ずるいなあ、天くんは」

ことりはそう言って呟くと、俺の腕に抱きついてきた。

「私も愛してるよ、天くん・・・これからもずっと、ことりの側にいてね？」

「勿論」

笑い合う俺達。

やがてどちらからともなく顔が近付き・・・その距離がゼロになる。

唇に触れる柔らかな感触に、幸せを噛み締める俺なのだ。

\*\*\*\*\*

《ことり視点》

「ふんふんふん♪」

「上機嫌だね、ことり」

鼻歌を歌う私を見て、天くんが笑っている。

今夜は私の誕生日ということとで、何と天くんが高級ホテルを予約してくれていたのだ。  
だ。

「だって凄く良いホテルなんだもん！よくこんなところ予約できたね？」

「だってここ、ホテルオハラシリーズのホテルだもん」

「ええっ！そうなの!？」

「うん、鞠莉に頼んで予約させてもらったんだ」

「あ、鞠莉ちゃんのこととは脅してないんだね・・・」

「ハハハ、俺は人を脅したことなく一度も無いヨ」

「嘘だよねえ!?!ツバサさんのことは脅してたよねえ!?!」

「いやあ、持つべきものはお金持ちの幼馴染だよね」

「だから発言が最低だってば!?!」

全く、天くんったら・・・

「あ、鞠莉といえば……」

何かを思い出した様子の天くん。

「どうしたの？」

「ああ、いや……昔、色々あつてさ」

苦笑する天くん。

「詳細は省くけど、鞠莉と果南が喧嘩してた時期があつてさ。それもお互いのことを想い合つた結果のことだったから、見てる方は何だかいたたまれなくて……」

「へえ、そんなことがあつたんだ？」

「そうなんだよ。お互い素直じゃなかったつていうか……そんな二人を見てたら、ことりと穂乃果ちゃんの喧嘩を思い出したんだよね」

「ああ、あの時の……」

高校時代、私のところに留学の話が持ち上がった。

それを受けるべきか穂乃果ちゃんに相談したかったけど、あの当時の穂乃果ちゃんはラブライブに出ようと必死で……

結果として留学することが決まった後の報告になつてしまい、それが原因で私は穂乃果ちゃんと喧嘩してしまったのだ。

「あの時はことりも穂乃果ちゃんも、自分の気持ちに素直になつて仲直りも出来たけ

ど・・・あの二人はどっちも素直になれなくて、仲直りするのに二年もかかったんだよ」  
「そうだったんだね・・・」

他人事じゃない。

下手をすれば、私達もそうなっていたかもしれない。

でも、そうならなかったのは・・・

「・・・天くんがいてくれたから」

「え・・・？」

「あの時、天くんがいてくれたから・・・私は思い留まることが出来たんだよ」

『本当の気持ちに蓋をしたまま過ごしたって、辛い思いをするのはことりちゃんなんだよ!? そんな辛そうなことりちゃんを見るのは、俺も辛いんだよッ!』

当時の記憶は、未だに鮮明に思い出せる。

あの天くんが、顔を歪めて泣き叫ぶその姿に・・・私も涙が止まらなくなっていた。

『俺、ことりちゃんの写真が好きなんだよ……でも、そんな辛そうな顔で笑ってほしくない……行かないでよ、ことりちゃん……!』

そうやって私の手を掴む天くんを……気付けば思いっきり抱き締めていた。

その後穂乃果ちゃんも来てくれて、私達は仲直りすることが出来たのだ。

「あの時、天くんが来てくれなかったら……穂乃果ちゃんに会う前に、飛行機に乗ってたかもしれない。天くんの気持ちを聞いてなかったら、素直になれてなかったかもしれない。だから……」

私は天くんに近付くと、思いっきり抱き締めた。

あの時と違い、身長は抜かされてしまったけど……

あの時に感じた温もりが、確かにそこにあつた。

「ありがとう、天くん……大好き」

「……俺も好きだよ、ことり」

抱き締め返してくれる天くん。

ああ……私、幸せだなあ……

「ねえ、天くん・・・誕生日プレゼント、欲しいんだけど」

「あれ？さつきネックレスあげたよね？」

「・・・赤ちゃん、欲しいな♡」

「っ・・・」

耳元でそう囁くと、天くんの顔がカアツと赤くなる。

その反応に我慢出来なくなった私は、勢いよく天くんの唇を奪い・・・  
そのまま二人で、ベッドへと倒れ込むのだった。

# 【桜内梨子】ありがとう

## 《梨子視点》

「天くんに告白しようと思います！」

「へー」

「興味無し!?!」

千歌ちゃんと曜ちゃんの反応にショックを受ける私。

ある日のお昼休み、私達三人は部室でお昼ご飯を食べていた。

「ちよつと!?!少しは興味持つてよ!?!」

「そりゃ興味も無くなるよ」

溜め息をつく千歌ちゃん。

「だって梨子ちゃん、そうやって宣言しても結局告白しないじゃん」

「うっ……」

言葉に詰まる私。

そう、私が告白を決意したのは今日が初めてではない。

ずいぶん前から決意はしていたのだが……

「これまで何度も告白を断念してきたもんねえ……」  
呆れている曜ちゃん。

「『今日はお化粧のノリが悪い』から始まり、『前髪が決まらない』『少し汗をかいた』とか……挙句の果てには、『星座占いで一位じゃなかった』『黒猫が横切った』とか言い始めてさあ……」

「し、仕方ないじゃない！完璧なコンディションで告白したいんだもん！」

「『天くんが忙しそう』っていう理由もあつたよね」

「夕、タイミングを大事にした方が良くはなつて……」

「そういうのめんどいから、早く告つて玉砕してくれない？」

「何てこと言うの曜ちゃん!? しかも何で玉砕前提なの!？」

「じゃあ私が天くんに言つてあげるよ。『梨子ちゃんが天くんのこと好きらしいから、その幻想をぶち殺してあげて』って」

「どこの上条さん!? そして何で千歌ちゃんも私の恋を終わらせようとするの!？」

「私だつて彼氏いたこと無いのに、梨子ちゃんに先を越されたくないなつて」

「あれ!? 千歌ちゃんつてこんなゲスい子だつたっけ!？」

「まあ冗談はこれぐらいにして……そろそろ覚悟を決めなよ、梨子ちゃん」  
溜め息をつく曜ちゃん。

「A q o u r s メンバーは皆、梨子ちゃんの恋を応援してるけどさあ・・・ライバルは多いし、ハッキリ言って強敵だよ？」

「うっ・・・」

言葉に詰まる私。

曜ちゃんの言うライバルとは、恐らくμ s メンバーのことだろう。

ガチ勢と言われることりさん・海未先生・真姫さんは勿論のこと、厄介勢と言われる花陽さんと希さんもいる。

全員かなりの美女であり、世の男性陣が絶対に放っておかないであろう存在・・・

まさかそんな人達が皆、天くんのことを狙っているなんて・・・

「・・・よし、豊胸手術を受けてくるわ」

「あつ、梨子ちゃんの頭のネジが外れた・・・」

「天くんのことになると、ホント緩くなっちゃうんだから・・・」

溜め息をつきつつ、私の襟首を掴む千歌ちゃんと曜ちゃん。

「とりあえず、まずは天くんをデートに誘うところから始めない？もうすぐ梨子ちゃんの誕生日だし、『一緒に出掛けよう』って言えば天くんならオツケーしてくれるでしょ」

「『いや、梨子と二人はちよつと・・・』とか言われないかしら・・・?」



\*\*\*\*\*

「なるほど・・・梨子らしくない文面だと思っただけど、曜の仕業だったのね・・・」

「うう、恥ずかしい・・・」

顔を真っ赤にして恥らっている梨子。

梨子の誕生日当日、俺達は二人で東京へとやって来ていた。

真姫ちゃんがピアノコンクールに出場することになり、梨子がそれを見に行きたいと言い出したのだ。

「それにしても、曜ったらふざけ過ぎでしょ。『愛しの天くん』だの『情熱的なデート』だの・・・梨子みたいな可愛い女の子にそんな誘われ方したら、普通は勘違いしてもおかしくないっていうのに」

「・・・逆に何で天くんは勘違いしてくれないのかしら」

「ん？何か言った？」

「何でもないわ・・・ハア」

何故か溜め息をついている梨子。

曜のヤツ、梨子に迷惑かけやがって・・・  
帰ったらお仕置きしてやろうかな。

「それにしても、真姫ちゃんがコンクールに出場するなんて珍しいな・・・『医大生は忙しいのよ』とか言つて、進学してからはこういう大会に参加してなかったはずだけど」  
「ほら、私が出場したコンクールを真姫さんも見に来てくれたじゃない？その時の演奏を聴いて『刺激を受けた』つて言つてくれて、コンクールへの出場を決めたんですつて」

「ああ、なるほど。そういうことだったのね」

「ええ。それで事前に連絡をくれて、『梨子に聴いてほしい』つて招待してくれたの、嬉しそうに話す梨子。

自分の誕生日だというのに、誘いを断らず律儀に知り合いの応援に来るなんて・・・

「・・・良い女だね、梨子つて」

「つ!?ど、どうしたの急に!」

「いや、前々から思つてはいたけど・・・改めてそう思つたよ」

「や、止めてよ・・・恥ずかしいじゃない・・・」

耳まで真っ赤にして、困つたような表情で俯く梨子。

可愛すぎかオイ。

「あつ、そろそろ始まるわよ！演奏は静かに聴かなくちゃ！」

「はいはい」

慌てて話を終わらせようとする梨子を見て、思わず苦笑してしまう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「素晴らしい演奏でした！」

「フフツ、ありがとう」

顔を輝かせている梨子に、笑みを浮かべる真姫ちゃん。

コンクールも終わり、俺達は真姫ちゃんが会いに来ていた。

「やっぱり真姫さんは凄いです！あんなに人を惹きつける演奏が出来るなんて！」

「そ、そんなことないわよ……」

少し俯き、髪の毛先を弄り出す真姫ちゃん。

あ、照れてるな……

「そんなことあるって。俺は真姫ちゃんが弾くピアノ、凄く好きだよ」

「待ってて天！日本一のピアノ奏者になってみせるから！」

「急に意欲的になりましたね!？」

梨子のツツコミ。

相変わらずチョロ可愛いな・・・

「真姫ちゃん？」

真姫ちゃんそつくりな女性が、笑顔でこちらへやって来る。

「お疲れ様・・・つて天くん!？」

「お久しぶりです、美姫さん」

「久しぶり〜っ！」

「むぐっ!？」

勢いよく抱き締められ、豊満な胸に顔が押し付けられる。

ああ、幸せ・・・じゃなくて呼吸が出来ない・・・

「ちよ、何してるのよ!？」

「あら、真姫ちゃんったら嫉妬してるの？可愛い〜♡」

「いいから早く天を離しなさい！」

「フツツ、は〜い♪」

「ぶはあっ!？」

ようやく解放され、息が出来るようになる。

死ぬかと思った・・・

「ごめんなさいね、天くん。久しぶりに会えたのが嬉しくて」

「いえ、幸せだったので大丈夫です」

「あら、相変わらずおっぱいが好きなの？」

「大好きです」

「どんな会話してんのよ!？」

慌てて真姫ちゃんに抱き寄せられる。

一方、梨子は困惑していた。

「えーつと・・・真姫さんのお姉さんですか？」

「・・・母親よ」

「ええっ!？」

「初めまして、西木野美姫です♪」

微笑む美姫さん。

ホントに真姫ちゃんそっくりの美女というか・・・

真姫ちゃんも髪が伸びたし、ますます美姫さんに似たよなあ・・・

「は、初めまして・・・桜内梨子といいます・・・」

「ああ、A q o u r s の . . . もしかして、天くんの彼女!？」

「そうです」

「違うでしょうが!」

梨子の頭を思いつきりはたく真姫ちゃん。

ナイスツツコミ。

「梨子、こんなところでボケなくても . . .」

「 . . . そうよね。どうせ天くんは勘違いしないものね」

何故か落ち込んでいる梨子。

今日の梨子、何かおかしくない . . . ?

「ねえ真姫ちゃん、もしかしてこの子 . . .」

「 . . . お察しの通りよ」

「ああ、やつぱり . . . 変わらないわねえ、天くん」

苦笑している美姫さんと、溜め息をついている真姫ちゃん。

何話してるのかな？

「あー、久しぶりのコンクールで疲れたわね . . . 悪いけど、私は帰って休ませてもら

うわ。行きましょう、ママ」

「はいはい。それじゃ天くん、また会いましょうね」

「ええ、またご挨拶に伺います」

一礼する俺。

美姫さんは俺に笑みを向けると、真姫ちゃんの側へと駆け寄った。

「良いの真姫ちゃん？恋のライバルを、天くと二人きりにさせちゃうなんて」

「・・・せっかくの誕生日に、わざわざ私の演奏を聴きに来てくれたんだもの。今日は梨子に譲るわ」

「フフツ、やつさしー♪」

小声なので聞こえないが、何かを話しながら仲睦まじく帰路に着く二人なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《梨子視点》

「いや、やっぱり真姫ちゃんが弾くピアノは素敵だよね」

「そ、そうね・・・」

天くんの言葉に相槌を打つ私。

私達は今、内浦へと帰る電車の中にいた。

「どうしたの梨子？何か表情が固くない？」

「そ、そんなことないわよ？」

「そう？ならいいけど・・・」

不思議そうな表情の天くん。

一方の私は、これから自分がしようとしていることに不安しかなかった。

(が、頑張らなくちゃ・・・勇気を出して告白しなくちゃ・・・！)

私は今、これまでの人生の中で一番緊張していた。

手の震えが止まらない・・・

(ちゃんと天くんに伝えるんだ・・・『貴方のことが好きです』って・・・)

天くんはどんな反応をするだろうか・・・

想像するのがとても怖い。

(それでも・・・ハッキリ伝えないと)

意を決して天くんに視線を向け、口を開こうとしたその時・・・

窓の外を見つめる天くんの表情が、とても寂しげなものであることに気が付いた。

私も窓の外へと目を向けてみると・・・

「あっ・・・」

とある駅のホームだった。

前に天くんが穂乃果さんを見つけて、慌てて電車を降りていった駅だ。

後で天くん聞いたが、この駅は……

「……μ，sが解散を決めた日に訪れた駅、よね？」

「……うん」

この駅の近くにある浜辺で、μ，sは解散することを決めたそうだ。

この駅を通過する度に当時は思い出すんだって、前に天くんが教えてくれたつけ……

「駅で電車を待つ間、もの凄く寂しい気持ちを押し寄せてきて……皆で抱き合って、

人目も憚らずに号泣したんだよね」

苦笑する天くん。

「俺が今までで一番泣いたのは、間違いなくあの時だよ。子供みたいにわんわん泣い

てさ……まあ小五だったから、『みたい』じゃなくてホントに子供だったんだけど」

「天くん……」

「あの時、改めて気付いたんだ。俺にとつて、μ，sがどれほど大切だったか……だ

からこそ、『μ，sの一員で終わりたい』って思ってたけど……梨子達に出会った」

微笑む天くん。

「今度はA q o u r sでマネージャーをやることになって、最初は葛藤もあったけ

ど……今は良かったと思ってる。マネージャーを辞めようとした時、梨子達が引き止めてくれたおかげだよ……ありがとう」

「っ……」

気が付いたら、思いつきり天くんを抱き締めていた。

天くんの背中に手を回し、力いっぱい抱き締める。

「梨子……?」

「……『ありがとう』はこっちのセリフよ」

眩く私。

「私は天くんに救ってもらって、今ここにいます。私だけじゃなくて、皆そう……私達を繋いでくれたのは、間違いなく天くんなのよ」

「梨子……」

「だから……ありがとう、天くん」

天くんへの想いが、ドツと胸から溢れてくる。

天くんがとても愛おしくて、ずっとこうしていたい。

きつと今なら、自分の気持ちを素直に言葉に出来るだろう。

でも……

「……私達、頑張るから。統廃合を阻止して、ラブライブで優勝してみせる。だから

これからも、私達のことを支えてね」

「・・・勿論」

私の背中に天くんの手が回され、優しく抱き締められる。

「俺は、*us*の十人目であり・・・*Aquors*の十人目だから。皆の力になってみせるよ」

天くんの温もりを感じ、心が温かくなっていくのが分かる。

この温もりを感じる事が出来たら、今はそれで良い・・・

自分の気持ちを伝えられなくても。

「・・・ありがとう」

私が天くん伝えたい言葉は、こうして伝えられたんだから。

気持ちを伝えるのは、もう少し後・・・

きつといつか、そのタイミングがやってくる。

その時は・・・

(絶対に伝えるから・・・『大好きです』って)

心に誓う私なのだった。

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

翌日・・・

「そんなわけで、告白はしませんでした！」

「へー」

「だから興味持ってたってば!？」

部室で昨日の報告をした私を待っていたのは、千歌ちゃんと曜ちゃんのとてつもなく冷たい反応だった。

「どうせ告白しないとは思ってたけど・・・」

「改めて聞くと、梨子ちゃんのヘタレっぷりが分かるよね・・・」

「ヘタレって言わないでくれる!？」『今じゃないな』って思ったただだから!」

「そこは『今でしょ!』って思わなくちゃ」

「懐かしい流行語ね!？」

「今度からヘタレ内さんって呼んで良い?」

「良いわけないでしょ!？」

「全く、これだからハタレ子ちゃんは・・・」

「今度は苗字じゃなくて名前の方!?!」

「失礼しまーす」

私がツツコミを連発していると、部室に天くんが入ってきた。

「あれ? どうしたの天くん?」

「いや、梨子に呼ばれたんだよね」

曜ちゃんの質問に答える天くん。

そう、天くんを呼んだのは私だった。

それにはちゃんとした理由があつて・・・

「実は今日、天くんにお弁当を持ってきたのよ」

「お弁当?」

「ええ、私の手作りよ」

「マジで!?!」

驚いている天くん。

フツフツ、感動して言葉も出ないかしら・・・

「梨子って料理出来たの!?!」

「そつち!?! 私だって料理くらい出来るわよ!?!」

「いや、だって中の人……」

「ストップううううっ!? 『中の人』とかNGワードだから!」  
あ、危ない……

この子は何を言い出すのかしら……

「そ、それよりお弁当よ! ほら、食べて食べて!」

「じゃあ遠慮なく……」

お弁当のフタを開ける天くん。

そこには……

「ふふん、どう? ハンバーグ弁当よ?」

「……スーパで買った出来合いのやつ?」

「違うわよ!?! 昨日ちゃんと自分で作ったんだから!」

「いや、だって中の人……」

「だからそれはNGワードだって言ってるでしょうがあああああっ!?!」

「落ち着きなよ、先生」

「そうだよ画伯、ヒートアップし過ぎだって」

「二人も『先生』とか『画伯』とか止めてくれる!?!」

「ちよつと、静かにしなよポトラー」

「絶対分かつてるわよねえ!?!分かつててそういうこと言ってるわよねえ!?!」  
全く、これ以上のツツコミは身体に悪いわ・・・

「ほら、食べさせてあげるから・・・あくん」

「あくん・・・あ、美味しい」

「でしょ?どんどん食べてね!」

「・・・ねえ曜ちゃん、この二人つて付き合つてないんだよね?」

「千歌ちゃん、そこに触れるのは止めよう・・・ツツコミを入れたいところだけど」  
ヒソヒソ声で会話している二人。

何を話してるのかしら・・・

「梨子つて料理上手いんだね・・・良いお嫁さんになりそう」

「じゃ、じゃあ・・・天くんのお嫁さんになってあげても良いわよ・・・?」

「アハハ、ありがと。お世辞でも嬉しいよ」

「・・・お世辞じゃないのに」

「あれ?何で落ち込んでんの?」

「・・・険しい道のりだねえ」

「・・・同感であります」

千歌ちゃんと曜ちゃんから、憐憫の眼差しを向けられる私なのだった。

## 【黒澤ルビィ】心を掴まれた人

「ええっ!? ルビィの誕生日って明日なんですか!？」

「ええ、そうですわ」

頷くダイヤさん。

俺達は今、生徒会室で仕事をしていた。

「マジですか・・・昨日は梨子の誕生日で、明日はルビィの誕生日ですか・・・」

「同じグループで、よくここまで誕生日が近いメンバーがいるものですね」

「ホントですよ・・・誕生日回の執筆が間に合わないんですけど・・・」

「メタ発言は止めていただけます!？」

ダイヤさんのツツコミ。

「コホンツ・・・ところで天さん、明日は何かご予定がお有りでしょうか?」

「ありったけの夢をかき集めて、捜し物を探しに行く予定です」

「どこのワン〇ースですか!?! 真面目に答えて下さいます!？」

「いや、特に何も無いんですけど・・・」

「それでしたら、ルビィと一緒に過ごしていただけませんか?」

「はい？」  
首を傾げる俺。

「だって明日、ルビイの誕生日なんですよね？ だったら俺と過ごすより、ダイヤさんと過ごした方が良いんじゃないですか？」

「ハア・・・やはりルビイの気持ちには気付いていないのですね・・・」  
何故か溜め息をつくダイヤさん。

何やら呟いていたが、何を言っていたんだろう・・・

「実はあの子、東京のスクールアイドルシヨップに行きたがってまして。一人で東京に行かせるのは不安なので、天さんに同行していただきたいのですわ」

「ああ、なるほど・・・って、ダイヤさんじゃダメなんですか？」

「私はその・・・そう！家の用事でどうしても行けないのですわ！」

「家の用事ってことは、ルビイも行けないんじゃない・・・」

「ルビイは大丈夫です！私だけで十分なのです！」

何故か必死なダイヤさん。

まあ、俺としては全然問題無いけど・・・

「分かりました。後でルビイに連絡しておきますね」

「お願いします・・・ルビイ、チャンスメイクはしておきましたわよ」

何故か満足気な表情を浮かべているダイヤさんなのだった。

\*\*\*\*\*

翌日・・・

「来ないなあ・・・」

駅前でルビィを待っている俺。

あの後ルビィとも連絡をとり、集合場所と時間を決めたのだが・・・  
約束の時間を、既に十分ほど過ぎていた。

「・・・電話してみるか」

スマホを取り出し、ルビィに電話をかけようとすると・・・

「天く〜ん！」

ルビィの声が聞こえる。

振り向くと、ルビィが急いで走ってくる場所だった。

「ハア・・・ハア・・・遅くなってゴメンなさい！」

「そんなに待ってないから大丈夫だよ」

勢いよく頭を下げるルビイに、思わず苦笑してしまう俺。

「それより、誕生日おめでとう」

「あ、ありがとう・・・」

照れ臭そうに笑うルビイ。

そこで俺は、あることに気付いた。

「あれ？ルビイ、今日はツインテールじゃないんだね？」

そう、今日のルビイは髪をサイドテールに結っていた。

いつもと髪型が違くと、何か新鮮だなあ・・・

「うん、偶には違う髪型にしてみようかなって・・・似合わなかったかな？」

「いや、最高に可愛い」

「ふえっ!？」

率直な感想を述べると、ルビイの顔が真っ赤になった。

照れてるなあ・・・

「やっぱり可愛い女の子は、どんな髪型にしても似合うんだね」

「か、可愛いって・・・」

「あ、でも坊主は止めてね？」

「しないよ!?急にどうしたの!？」

「いくらアイドルが好きだからって、熱愛報道のケジメで坊主になったアイドルを  
ファイチャーしないでね？」

「だからしないって!?!っていか何年前の話!？」

ツツコミが止まらないルビィなのだった。

\*\*\*\*\*

「わぁ・・・!？」

目を輝かせているルビィ。

東京へとやって来た俺達は、秋葉原にあるスクールアイドルショップを訪れていた。

「このお店凄い!レアな商品がいっぱい置いてある!」

「でしょ?良いお店だよね」

実はここに、にこちゃんや花陽ちゃんの行きつけのお店だったりする。

亜里姉も度々訪れており、俺もよく付き合わされていた。

「あつ、A—RISEのグッズ！」

小走りで駆けて行くルビィ。

いまやプロのアイドルとして有名なA—RISEだが、スクールアイドル時代のグッズは今でも販売している。

まあ既に生産はされていないので数は少ないし、値段もそこそこするのだが。

「た、高い……！」

声が震えているルビィ。

その視線の先には、スクールアイドル時代のA—RISEのクリアファイルが置いてあった。

その下の値札には、女子高生のお小遣いでは払えないであろう金額が……

あ、鞠莉は別ね。アイツは最早チーター……いや、ビーターだから。

「どこのキ〇トくん!？」

「よく心の声が読めたね……それにしても高いなあ」

「うう……欲しいけど手が出ない……」

物欲しそうな目でクリアファイルを見つめるルビィ。

やれやれ……

「ルビィ、ちよつとここで待っててね」

「え．．．?」

首を傾げるルビィを置いて、俺は別のコーナーでわざとらしく商品整理をしている店員さんの耳に顔を近づけ．．．

「．．．ふうっ」

「ひゃんっ!?!」

そつと息を吹きかけた。

店員さんが変な声を上げて飛び上がる。

「ちよ、何するの天くん!?!」

「いや、音ノ木坂の精霊（笑）に挨拶しようと思つて」

「バカにしてるよねえ!?!」

そうツツコミを入れるのは、水瀬いおりちゃん．．．

音ノ木坂アイドル研究部の現部長だ。

厨二病のような考え方の持ち主で、A q o u r s の皆からは音ノ木坂の精霊（笑）だと思われている。

こう見えても、一応はスクールアイドルだ。

「一応って何!?!れっきとしたスクールアイドルだから!」

「ざらつと心の声を読んでいくスタイルは置いといて．．．何してんの?」

「私がここでバイトしてること、天くんも知ってるでしょ!? 何でA q o u r sのメンバーを連れてきたのよ!」

「いおりちゃんと遭遇させようかなって」

「やつぱり確信犯かつ!」

「このままだと、いおりちゃんが精霊(笑)でも何でもないことが判明しちゃうね」

「くっ、脅しをかけてきたか・・・A—R I S Eのクリアファイルが目的なら、私を脅したところで無駄よ! バイトにどうにか出来る力なんて無いわ!」

「いや、脅すつもりは無いんだけど。そもそも、いおりちゃんごときがどうにか出来るなんて思っていないし」

「何か凄いい見下されてる! 事実だけど腹立つわね!」

「悪いんだけど、店長呼んで来てくれる? 下っ端じゃ話にならないから」

「ホントに腹立つううううっ! 絶対呼んであげないんだからあつ!」

「おーいルビィ、ここに音ノ木坂の精霊(笑)が・・・」

「店長おおおおおおおおつ!」

血涙を流して店長さん呼びに行くいおりちゃん。

やがてバックヤードから、若い女性が姿を現した。

「お待たせしました・・・って天くんじゃないですか! お久しぶりです!」

「お久しぶりです、五月さん」

俺を見てパアツと顔を輝かせる女性・・・上杉五月さん。

このお店の店長さんで、俺もこのお店に通ううちにすっかり顔馴染みとなっていた。

「いおりちゃんから話は聞いてますよ！今はA q o u r sのマネージャーをやってる  
そうじゃないですか！」

「ええ、まあ色々あります」

「それを聞いてから、A q o u r sのことは要チエックしてますよ！この間の新曲も  
素晴らしかったです！」

「ありがとうございます」

他愛無い雑談をしたところで、俺は本題を切り出すことにした。

「ところで五月さん、あそこに置いてあるA—R I S Eのクリアファイルですけ  
ど・・・」

「ああ、あれですか・・・えっ、あの赤髪の子はまさか・・・！」

「ええ、A q o u r sの黒澤ルビィです」

「やつぱりそうですよね!? ああ、可愛い・・・じゅるり」

「店長、涎が垂れてます」

うつとりしている五月さんを見て、呆れているいおりちゃん。

この通り、五月さんはスクールアイドルに目が無いのである。

「あのクリアファイル、ルビイが欲しがってて……どうにかありません？」

「あげちゃいます！」

「ちよ、それは流石にマズいですよねえ?」

「だ、だっていおりちゃん……!」

「じゃあ、こういうのはどうでしょう?」

提案する俺。

「このお店で売っているA q o u r sのグッズ……その中のルビイのグッズ全てに、ルビイ本人の直筆サインを入れてもらいましょう」

「ええっ!」

驚きの声を上げる二人。

「ちよ、良いんですか天くん!」

「まあ決めるのはルビイですけど、嫌とは言わないと思いますよ? 本人の直筆サインが入るとなると、グッズの価値は格段に跳ね上がるわけで……クリアファイルをもらせるだけの価値ある仕事だと思いますが?」

「わ、私もサインもらって良いですかね……?」

「店長!? 公私混同してません!」

「勿論です。五月さんにはお世話になってますし、俺からルビィにお願いしますよ」  
「ああ、天くんが神様に見えます・・・！」

「ハツハツハツ」

「・・・何この茶番」

俺の手を号泣しながら握る五月さんを見て、溜め息をつくいおりちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

「ほ、本当にもらって良かったのかな・・・？」

恐る恐る、しかし大事そうに紙袋を抱えるルビィ。

スクールアイドルシヨップ巡りを終えた俺達は、内浦へと帰る電車に乗る為に駅へとやって来ていた。

「大丈夫だって。店長さんが良いって言ったんだから」

「で、でも・・・ルビィのサインなんて、価値あるのかな・・・？」

不安そうなルビィ。

やれやれ・・・

「ホント・・・ルビイは花陽ちゃんに似てるね」

「えっ、花陽ちゃんに・・・？」

「うん。花陽ちゃんも自分に自信が無くて、よくそういうネガティブな発言してたよ」  
苦笑する俺。

「初めて会った時から、何となく重なるなあとは思ってたけど・・・ルビイが花陽ちゃんに憧れてるって知った時は、不思議と納得したよ」

多分ルビイは花陽ちゃんに、自分と近いものを感じたんだと思う。

そんな花陽ちゃんがスクールアイドルとして活躍する姿を見て、憧れを抱いたんだろう。

「自分に自信が無くて、何かを目指してひたむきに頑張る・・・そういう人の姿は、人の心を掴むものだと思う。だからルビイの頑張る姿を見て、心を掴まれた人が絶対いるはずなんだよ」

「そ、そうかな・・・？」

「うん。そういう人達にとって、ルビイのサインはとつても価値のあるものだから。だからルビイは、もっと自分を誇って良いんだよ。ルビイの頑張りは皆見てるし、マネージャーの俺だってよく知ってるんだから」

「天くん……」

瞳を潤ませるルビィ。

俺はルビィに笑顔に向けた。

「改めて誕生日おめでとう、ルビィ。これからもよろしくね」

「っ……こちらこそ！」

笑顔で頷いてくれるルビィ。

やっぱりこの子には、笑顔がよく似合う。

「さあ、帰ろうか」

「うんっ！」

二人並んで歩き出す俺達なのだった。

\*\*\*\*\*

《ルビィ視点》

「すう……すう……」

「フフツ、気持ち良さそう・・・」

ルビイの肩に寄りかかって眠る天くんを見て、思わず笑みが零れる。ルビイ達は今、電車に乗って内浦へ帰る途中だった。

「・・・楽しかったな」

まさか誕生日に、天くんと二人で過ごせるとは思わなかった。

お姉ちゃんから『喜びなさいルビイ！天さんとデートの約束を取り付けてきましたわ！』って言われた時は、本当にビックリしたけど・・・

お姉ちゃんに感謝しなくっちゃ。

「・・・んう」

天くんの目がうつすら開く。

「あ、ゴメン・・・寝ちゃってた」

「大丈夫だよ」

天くんの眠そうな顔が、何だか愛おしくて仕方ない。

そう思うのはやっぱり・・・

ルビイが天くんに、恋してるからなんだろうなあ・・・

『ひよつとして、スクールアイドルやりたいんじゃない？』

ルビィの本当の気持ちを見抜いて、そつと背中を押してくれた・・・

『我慢しなくて良いよ・・・気が済むまで泣いて良いから』

落ち込んだ時、ずつと側に寄り添ってくれた・・・

『だからルビィは、もつと自分を誇って良いんだよ』

自信を持ってないルビィを、優しく励ましてくれた・・・

いつの間にかルビイの心は、天くんに掴まれてたのかもしれないなあ・・・

「えいつ！」

「うわっ!?!」

天くんの身体を横にさせ、頭をルビイの太ももに乗せて膝枕してあげる。

「ちよ、ルビイ!?!」

「フフツ、どうしたの天くん？顔真つ赤だよ？」

「いや、だって・・・」

恥ずかしそうな天くん。

これはまだ、ルビイにもチャンスがあるかな・・・

そんなことを考えつつ、クスクス笑いながら天くんの頭を撫でるルビイなのだつた。

いつだって太陽は皆を照らしてくれる。

「名古屋だあああああつ！」

「だぎやあああああつ！」

「テンション高っ!？」

はしゃぐ俺と花丸にツツコミを入れるルビイ。

遂に迎えた地区予選の日、俺達は会場のある名古屋へとやって来ていた。

「みそかつ食べたい！」

「手羽先も外せないぞら！」

「落ち着きなさい」

呆れているダイヤさん。

「私達はこれから地区予選なのですよ？グルメツアーをしている暇などありませんわ」

「うわあ、これだからお嬢様は・・・どうせ『そんな庶民の食べ物、お嬢様である私はいつでも食べられますわ』とか思ってるんでしょ？」

「天さん!？何ですかその私に対する偏見は!？」

「天くん、ダイヤさんに庶民の気持ちを理解してもらうのは無理ずら。頭も固いから尚更無理ずら」

「花丸さん!?そこまでストレートに人を貶す方でしたか!?!」

「じゃあ終わったら、皆で何か食べに行きましょう!マリーが奢りマース♪」

「鞠莉大好き!」

「キャツ♡もう、天つてば抱きついてきちゃって♡情熱的なんだから♡」

「流石は本物のお嬢様!前髪パツツン堅物ですわ女とは大違いずら!」

「ぐすん・・・だいやはもう、おうちにかえりたいですわ・・・」

「ああっ!?!ダイヤさんがシヨックのあまり幼児退化してる!?!」

「しっかりしてダイヤ!?!」

慌ててダイヤさんを励ます曜と果南。

大変だなあ・・・

「誰のせいだと思ってるの?」

俺の心の声を読んだらしい梨子が、何故か不機嫌そうな顔で俺と鞠莉を引き剥がす。

「ダイヤさんの言う通りよ。私達は遊びに来たわけじゃないんだから」

「そっかあ・・・梨子とグルメデートしたかったのになあ・・・」

「今すぐ行きましょう天くん!まずは何が食べたい!?!」

「ああ、梨子ちゃんが壊れた・・・」

「早速頭のネジを外してんじゃないわよ」

呆れている千歌さんと、梨子の頭を引つ叩く善子。

「それより天、絵里さんと亜里沙さんは？」

「ああ、ママ軍団の皆と一緒に行動してるよ」

「ママ軍団って何よ!？」

「え、皆のお母さん達だけど？」

「あの人達来てるのかあああああつ！」

頭を抱える善子。

来てくれたことがよっぽど嬉しかったらしい。

「いや違うから!その逆だから!」

「何で皆ナチュラルに人の心を読めるの?」

俺ってそんなに分かりやすいかなあ・・・

「あと、今日は浦の星の全校生徒が集まったそうですよ。さつきいつきさんから連絡

があつて、全員で応援してくれるそうです」

「全校生徒?!よく集まったね!？」

「麻衣先生と翔子先生が呼び掛けてくれたんですつて。二人から鬼のようにラインが

飛んできてるんですよ……全部既読スルーしてますけど」

「何で?! 返事してあげてよ!」

千歌さんのツツコミ。

いや、だって面倒なんだから。

「まあそれはさておき……覚悟は出来ましたか?」

「勿論!」

「準備万端だよ!」

「いつでも行けるわ!」

「大丈夫すら!」

「頑張ルビィ!」

「ヨハネの辞書に不可能の文字は無いわ!」

「いざ参りますわ!」

「やってやろうじゃん!」

「絶対に勝ち進んでやりマース!」

皆の頼もしい言葉に、思わず口元が緩む俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「気合い入れて応援するぞおおおおっ！」

「「「「おおおおおおおっ！」「」」」」

「何でアンタはメンバーのお母さん達のリーダーみたいになってんのよ!？」  
美渡さんのツツコミ。

観客席に移動した俺は、応援に来てくれた皆と合流していた。

「何言ってるの美渡ちゃん。『みたい』じゃなくて、ママ軍団のリーダーは天くんよ?」

「ええっ!？」

善恵さんの指摘にビックリしている美渡さん。

「何でママじゃないヤツがリーダーなんですか!？」

「だって私達を繋いでくれたの天だし」

「私達をまとめてくれたの天くんだし」

「ラインのグループ立ち上げてくれたの天だし」

西華さん・奈々さん・星さんが口々に言う。

「な、何なの?この天に対する全幅の信頼は・・・」

「今さら何を仰っているのですか、美渡さん」

「そうだよ美渡ちゃん、ここにいる皆が天くんを信頼してるんだから」

「サラツと話しかけてきましたけど、お二人は初対面ですよねえ!？」

あ、そういえばこの二人は美渡さんと会ったことなかったっけ・・・

「紹介しますね、美渡さん。黒澤真珠さんと、国木田満点さんです」

「初めまして」

「よろしくね」

挨拶する二人。

真珠さんはダイヤさんとルビイの、満点さんは花丸のお母さんだ。

「真珠さんと満点さんも、来て下さってありがとうございます。お忙しいでしょうに」

「娘達の晴れ舞台ですもの。黒澤家の用事は完全にすっぽかして来たので大丈夫で

す」

「何が大丈夫なんですか!?! 黒澤家って結構な名家ですよねえ!？」

「私も大丈夫だよ。おばあちゃんは置き去りにしてきたから」

「こつちも大丈夫じゃなさそうなんだけど!？」

「うう、娘の為に何かを犠牲に出来るなんて・・・親の愛って素晴らしい!？」

「犠牲にしてるものがとんでもないけど大丈夫!？」

美渡さんのツツコミが止まらない。

何をギャーギャー騒いでいるのやら・・・

「天くん、お待たせ〜♪」

俺達が楽しくお喋りしていると、俺の嫁がこちらへ駆け寄ってきた。

「だからアンタの嫁じゃないって!?!」

「ダーリン、遅くなつてゴメンなさい」

「ハハハ、構わないよハニー」

「何でノリノリなの!?!」

美渡さんのツツコミはスルーして、手を取り合う俺達。

俺の嫁が美しすぎる・・・

「フフツ、ラブラブねえ」

「ええっ!?!お母さん!?!」

志満さんの背後から現れた人物を見て、驚愕する美渡さん。

千歌さんを一回り小さくしたような女性が、笑顔でこちらに手を振っている。

「こんにちは、天くん。一応、初めまして・・・になるのかしら?」

「確かにそうですね。では改めて・・・初めまして、理恵さん」

この人は高海理恵さん・・・千歌さん達のお母さんだ。

普段は仕事で東京に行っていることが多いらしいが、今日はA q o u r sを応援する為にわざわざ駆けつけてくれたのだ。

「天!? アンタいつの間にお母さんと知り合いになったの!?!」

「志満さん経由でグループプラインに入ってくれたんで、ラインではずっとやり取りしてたんですよ。こうして顔を合わせるの、今日が初めてです」

「まあラインでは、既に仲良くなってたけど」

「ね〜♪」

「・・・何なの、この子の交流の広さ」

呆れている美渡さん。

志満さんがクスクス笑っている。

「フフツ、流石は天くんね」

「お〜い、天〜!」

今度はむつさんがやって来る。

よしみさんといつきさんも一緒だ。

「全員応援する準備バツチりなんだけど、本番まだ始まらないの?」

「まだ時間ありますから。いつきさんに一発ギャグでもやってもらって下さい」

「何で私なの!?!」

「一番スベリそうですし」

「最低だよこの子!? 私がスベるのを見て楽しもうとしてるんだけど!」

「アハハ、私も見てみたいかも!」

「よしみまで何言ってるの!」

「あつ、いた!」

「天くん!」

よいつむトリオと話していると、今度は麻衣先生と翔子先生がやって来た。

「ちよつと!? 何でライン既読スルーするの!」

「だって面倒なんだから」

「み●をみたいに言わないでくれる!? 私達凄く寂しかったんだから!」

「そうよ!? ウサギさんは寂しいと死んじゃうのよ!」

「どこにウサギがいるんですか。ハイエナの間違いでしょ」

「酷い!」

爆笑している皆。

良い雰囲気になってきたな・・・

「さて・・・俺もそろそろ行きますかね」

「行くってどこに?」



皆の歓声に、とても勇気付けられる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《絵里視点》

「・・・凄いなあ、天は」

私の隣で呟く亜里沙。

その表情は、どこか誇らしげだった。

「浦の星に入学して、まだ半年も経ってないのに・・・皆の中心にいるなんて」

「・・・ええ、本当に」

頷く私。

Aquoursメンバーのご家族、浦の星の全校生徒、さらには教師陣・・・

今その中心に立っているのは、間違いなく天だった。

「本当に・・・変わらないわね」

μsのリーダーである穂乃果には、人を惹き付けるカリスマ性があった。

穂乃果が先頭を走り、私達はどこまでもついていく……それがμ sだった。  
その穂乃果と同様のカリスマ性を持ちながらも、先頭には立たず私達を支えてくれた  
人……

いつでも側に寄り添ってくれて、私達を強く惹き付けた人……  
それがμ sのマネージャー……絢瀬天だった。

「……ねえ、天」

天には聞こえないだろうが、天に向けて想いを口にする。

「貴方は本当に謙虚で、自己評価が恐ろしく低いけど……私達にとって貴方は、本当  
に大きな存在なのよ？」

周囲に遠慮しがちなことが、ありのままの自分でいられ……

男性が苦手な海未が、すっかり心を許し……

あまり人と関わりたがらない真姫が、力になってあげたいと全力で動き・・・

ムードメーカーの凛が、本当に心から楽しそうな笑顔を見せ・・・

引つ込み思案な花陽が、大胆に甘えられ・・・

人に対して手厳しいにこが、その人柄を心底気に入る・・・

いつも大人の雰囲気を纏う希が、少女のような初々しい反応を見せる・・・

そんな相手はただ一人・・・天しかないのだ。

『天くんがいてくれるから、私も全力で突っ走れるんだよ。だから私にとって天くんは……背中を預けることの出来る相棒、かな』

その昔、穂乃果が言っていたことを思い出す。

穂乃果・天という太陽コンビに照らされながら、*μ's*はラブライブ優勝を勝ち取ったのだ。

「……行ってきたさい、天」

そう呟く私は……当時と同じくらい、気持が昂ぶっているのだった。

「今の貴方は*Aqours*の一員……*Aqours*の魅力を存分に引き出して、私に……会場の皆に、最高のパフォーマンスを見せてちょうだい……！」

人から感謝されると嬉しいものである。

「墮天使ヨハネとリトルデーモン・・・ラブライブに降臨ッ！」

「誰か絆創膏持つて来て！人一人包みこめるくらいのヤツ！」

「痛い子扱いは止めなさいよ!？」

善子のツツコミ。

A q o o r r s の控え室になっているブースを訪れたところ、善子がまた痛い発言をしていたのだ。

「全く、善子とききたら・・・ん？何でルビィは涙ぐんでるの？」

「アハハ、ちよつとね」

目元の涙を拭うルビィ。

「善子ちゃんに『ありがとね』って言われて、ちよつとウルツときちやつて」

「ちよ、ルビィ!?!言わなくていいから!?!」

「情熱的に抱き締められて、マルも感激しちゃったずら」

「ずら丸も余計なこと言うんじゃないわよ!?!」

慌てる善子。

なるほど、そんなことが・・・

「良いなあ・・・俺も善子に抱き締められたいなあ・・・」

「なっ!?!何言ってるのよアンタ!?!」

「情熱的に愛を囁かれないなあ・・・」

「誰も愛は囁いてないんだけど!?!」

「アハハ、冗談だつて」

思わず笑つてしまう俺だったが、善子は一つ溜め息をつく・・・

俺に近付き、思いつきり抱き締めてきた。

「ちよ、善子!?!」

「・・・何よ。『抱き締められたい』つて言ったのは天でしょ」

「いや、そうなんだけど・・・良いの?」

「良いから抱き締めてるんじゃない。野暮なこと聞くんじやないわよ」

「・・・何か真姫ちゃんを思い出すわ」

「この素直じゃない感じ・・・」

「真姫ちゃんそつくりだな・・・」

「・・・ありがとね、天」

「え・・・?」

善子が腕にキュツと力を込めてくる。

「私の味方でいてくれて、支えになってくれて……本当にありがとう。天がいなかったら、私は今ここにいないから……凄く感謝してる」

「善子……」

「……感謝なら、マルもしてるぞら」

左側から花丸が抱きついてくる。

「天くんに出会って、背中を押してもらって……スクールアイドルになれて、本当に幸せぞら。ありがとう、天くん」

「花丸……」

「……ルビィだつてそうだよ」

右側から抱きついてくるルビィ。

「自分の気持ちに正直になれたのも、大好きなお姉ちゃんと一緒にスクールアイドルが出来るのも……全部天くんのおかげだから。本当にありがとう」

「ルビィ……」

同級生三人の温もりで、心まで温まっていくのを感じる。

緊張をほぐしに来たつもりだったのに、俺がほぐされちゃったな……

「……ありがとう、三人とも」

両腕を伸ばし、三人を包み込むように抱き締める。

「少しでも三人の力になれたのなら、凄く嬉しいよ。俺が浦の星に入った時、クラスで真っ先に俺のこゝを受け入れてくれたのは……この三人だったから」  
抱き締める腕に力を込める。

「善子、花丸、ルビィ……三人と同級生で、本当に良かった」

人一倍心の優しい善子……

いつも笑顔で寄り添ってくれる花丸……

どんなことにも努力を惜しまないルビィ……

俺はそんな三人のことが大好きだし、心から尊敬していた。

「今日のステージ、ちゃんと見てるから。全力で楽しんできな」

「勿論よ！」

「やってやるぞら！」

「最高のステージにしてみせるから！」

俺の言葉に、笑顔で頷いてくれる三人。

そんな同級生達が、とても頼もしく見える俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「あの時置いてきたものを．．．もう一度取り戻そう」

果南がそう呟き、ダイヤさんと鞠莉を抱き寄せている。

会場の裏手を覗いてみると、三年生三人組が身体を寄せ合っていた。

これは邪魔しない方が良くないかな．．．

「勿論ですわ」

そつと踵を返した時、ダイヤさんの力強い言葉が聞こえた。

「その為に、力を貸して下さいますわよね．．．天さん？」

「っ!？」

ビックリして振り向くと、三人が笑いながらこつちを見ていた。

「な、何で分かったんですか？」

「フフツ．．．何となく、でしょうか」

クスクス笑っているダイヤさん。

「何となく、天さんが側にいるような気がして．．．見えていたわけではないのに、妙な確信がありましたわ」

「何それ怖い」

「フフツ、それだけ私達の感覚が鋭いってことよ♪」

背後から抱きついてくる鞠莉。

「特に天は存在感があるから、すぐ分かっちゃいマース♪」

「鞠莉のおっぱいの存在感には負けるわ」

「いやん♡天のエッチ♡」

豊満な胸を、ぐりぐりと背中中に押し付けてくる鞠莉。

ご馳走様です。

「全く、セクハラ発言は相変わらずだね．．．」

果南はそう言って、溜め息を一つつくど……

真正面から俺に抱きついてきた。

「おっと……そういうことすると、今度は果南のおっぱいが当たるんだけど？」

「でも嬉しいんでしょ？」

「勿論」

計四つのマシユマロを味わえるとか、もう天にも昇る気持ちだわ……

「もう……エッチ」

果南はそう言って苦笑すると、腕にキュツと力を込めてきた。

「……これでも、天には本当に感謝してるんだよ？」

「え……？」

「一度は諦めたスクールアイドルを、またこうやってやれてるのは……天のおかげだから。ありがとね」

「果南……」

「本当に……感謝してもしきれないわ」

俺の背中に額をくっつける鞠莉。

「こんな私の為に動いてくれて、果南やダイヤと仲直り出来るようにしてくれて……またスクールアイドルが出来るようにしてくれた。ありがとう、天」

「鞠莉……」

「……私も、本当に感謝しています」

俺の手を握るダイヤさん。

「天さんの仰った通り、あの時諦めなくて本当に良かった……今こうして、果南さんや鞠莉さんとスクールアイドルが出来て……本当に幸せですわ。ありがとうございます。すす」

「ダイヤさん……」

参ったなあ……

これ以上心を温められると、泣いちゃいそうなんだけど……

「……『ありがとう』はこっちのセリフだよ」

素直に三人に身を委ねる。

「三人が入ってくれたから、A q o u r s はもつと成長することが出来た。俺自身、三人に助けられたことがたくさんあったよ」

明るく元気で、頼りがいのある果南……

天真爛漫で、困っている時にさりげなく動いてくれる鞠莉……

しっかり者で、よく相談に乗ってくれるダイヤさん……

大人な三年生達には、本当にいつも助けられている。

感謝しているのは俺の方だ。

「果南、鞠莉、ダイヤさん……三人がいてくれて、本当に良かった。ありがとう」  
俺は感謝の言葉を述べると、三人の顔を見た。

「今日のステージも、よろしく頼むよ」

「オツケー！最高のステージを見せてあげる！」

「マリー達の気合いは十分よ！」

「お任せ下さいませ！」

満面の笑みで、力強く頷いてくれる三人。

そんな最上級生達を見て、とてつもない安心感を覚える俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「全部を楽しんで、皆と進んでいきたい！それがきつと、輝くってことだと思う！」  
ステージ裏を訪れると、千歌さんがそう宣言しているのが聞こえた。

本当にこの人は、穂乃果ちゃんそっくりだな・・・

「えいつ」

「あたっ!？」

千歌さんのアホ毛に、軽くチョップをかます。

「ちよ、天くん!?!いきなり何するの!?!」

「いや、ちよつと昔を思い出して・・・よくこうやって、穂乃果ちゃんをしばいてたんですよね」

「何で!?!」

「こうやって止めるしか無かったんですよ。あの暴走機関車は」

「呼び方が酷い!?!」

千歌さんのツツコミ。

俺は苦笑すると、曜と梨子の方を見た。

「そんな穂乃果ちゃんを優しく見守ることりちゃん、厳しく諭す海未ちゃん……この三人を見てると、当時のあの三人を思い出すよ」

「私、そんなに厳しく千歌ちゃんを諭してるかしら……」

「千歌さん、どう思います?」

「メツチャ厳しいよね」

「千歌ちゃん!」

「アハハ……」

シヨックを受けている梨子に、苦笑している曜。

ホント、似てるよなあ……

「何かこうしていると、思い出すなあ……ファーストライブの時のこと」

「ああ、確かに……」

思い返してみれば、最初はこの四人で始めたんだよな……

「……あの時みたい、円陣組んでみます?」

「おつ、良いね!やろうやろう!」

お互い手を繋いで円になる。

そうそう、こんな感じだったっけ……

「……ありがとう、天くん」

「え……?」

俺の左側に立っている梨子が、俺の手を強く握った。

「私、内浦に引越して来て良かった。スクールアイドルになれて、ピアノとも向き合えて……天くんのおかげよ。本当にありがとう」

「梨子……」

「……私も、天くんには感謝してるよ」

右側に立っている曜も、同じように俺の手を強く握る。

「いつも力になってくれて、悩んでる時は寄り添ってくれて……いつも本当に助けられてる。ありがとうね」

「曜……」

「……私からもありがとう、天くん」

俺の前に立っている千歌さんが、優しく微笑んでいた。

「スクールアイドルになりたいという夢を、こうやって叶えられたのは……間違いなく天くんのおかげだよ。天くんが浦の屋に来てくれて、私と出会ってくれて……本当に良かった。ありがとう」

「千歌さん……」

不覚にも、ちよつと涙ぐんでしまった。

他の皆から感謝の言葉を掛けられた後だったこともあり、余計に感動してしまう。

「ところで、前々から気になってただけどきあ……」

何故か急に膨れっ面になる千歌さん。

「天くん、いつまで私のことさん付けで呼ぶの？相変わらず敬語のままだし」

「いや、いつまでって……千歌さんは先輩じゃないですか」

「曜ちゃんや梨子ちゃんのことと呼び捨てじゃん！タメ口じゃん！」

「強制されたんで」

「ちよ、天くん!？」

「人聞きの悪いこと言わないでくれる!？」

「事実でしょ。ゴリ押してきたのは誰だっけ？」

「うぐっ……」

言葉に詰まる二人。

やれやれ……

「じゃあ私も強制する！リーダーの特権を使うもん！」

「ただの独裁者じゃないですか」

「良いのっ！とにかく強制っ！」

子供のようにダダをこねる千歌さん。

全く、強引なんだから・・・

「ホント、こういうところもそっくりだな・・・」

『さん付け禁止！敬語も禁止！他人行儀なのは嫌！』

その昔、穂乃果ちゃんにダダをこねられた時のことを思い出す。

こんなところまで似なくても良いのに・・・

「はいはい、分かったから。改めてよろしくね・・・千歌」

「っ・・・うんっ！」

笑みを浮かべる千歌。

一方、何故か梨子が不機嫌そうな表情を浮かべていた。

「むう・・・アドバンテージが無くなっていくわ・・・」

「まあまあ梨子ちゃん、落ち着いて」

苦笑しながら宥める曜。

何かあったのかな？

「それじゃ、掛け声は天くんによってもらおうかな」

「え、千歌じゃないの？」

「偶には良いじゃん。ねっ？」

「頼んだよ、天くん」

「気合いが入るヤツ、よろしくね」

三人からそう言われ、俺は一つ息を吐く。

「コホンッ、それじゃ・・・皆、ありがとう」

感謝の言葉を述べる俺。

「この三人に出会えたから、今こうしてここにいられる・・・本当に感謝してる」

いつも優しく、俺の身を案じてくれる梨子・・・

どんな時も明るく、俺を笑顔にしてくれる曜・・・

力強く前に進み、俺を引っ張ってくれる千歌……

この三人に出会えて、本当に良かった。

「さあ、行こう！今、全力で輝こう！」

声を張り上げる。

三人の背中を、少しでも押せるように。

「A q o u r s ！」

「「サ〜ンシャイ〜ン！」」

あの時と同じようで、あの時とは違う・・・  
力強さを感じさせる先輩達の声に、心が震える俺なのだった。

人の底力は侮れない。

「ただいま〜」

「あつ、天！」

「おかえりなさい」

観客席へと戻った俺は、亜里姉と絵里姉の間に座った。

「A q o u r s の皆、どうだった？」

「思ったより落ち着いてたよ。あれなら良いパフォーマンスが出来るんじゃないかな」

俺がそう言った瞬間、会場の照明が暗くなる。

次のグループ・・・A q o u r s の出番がやってきたのだ。

「・・・ハイレベルだね」

「・・・そうだね」

真剣な表情の亜里姉と、短く言葉を交わす。

ここまで何組かのパフォーマンスが終わっているが、やはりどのグループもレベルが高い。

地区予選でこのレベルだなんて、正直恐ろしいな……

「東海地区の予選は初めて見たけど、関東地区のレベルと何ら変わらない高さだよ。これを勝ち抜くのは、至難の業と言って良いと思う」

いつになく厳しい表情の亜里姉。

亜里姉はアイドル研究部時代から、ラブライブ出場グループをこと細かくチェックし続けている。

その分析力は、あのにこちゃんや花陽ちゃんが一目置くほどだ。

その亜里姉がここまで言うとは……

「じゃあやつぱり、Aqoursが決勝へ行ける確率は……」

「……ハッキリ言って、かなり低いと思う。練習を見させてもらったかぎりではね」  
絵里姉の問いに、首を横に振る亜里姉。

まあ正直、俺も同意見ではあるが……

「……諦めないよ、あの人達は」

「え……?」

「今に分かるよ……Aqoursの底力が」

ステージにスポットライトが当たり、Aqoursの皆が姿を現す。

そして曲のイントロが流れ出した。

「さあ・・・思う存分楽しんできな」

千歌と俺が二人で作詞した新曲、『MIRAI TICKET』・・・

そのパフォーマンスの反響が目に見え、思わず口元が緩む俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・で?」

「すいませんでしたあああああああああつ!」

俺の目の前で、床に額を擦り付けて土下座している千歌。

地区予選も終了し、後は後日発表される結果を待つのみ・・・

だが、既にA q o u r sの結果は決まっていた。

「テンションが上がりすぎて、パフォーマンス中に非常口から外に飛び出すバカがど

こにいるんだこの腐れアホみかんがああああああああああつ!」

「本当にすみませんでしたああああああああああつ!どうしようもないバカがここに

いましたああああああああつ!」

床にガンガン額をぶつけて謝罪する千歌。

このアホみかん、パフォーマンス中にいきなり走り出して非常口を飛び出していったのだ。

どうやらテンションが限界値を超え、ハイになった結果の行動らしい。

「どこの薬物中毒者？伊●谷なの？」

「ストツプううううっ!?そのネタは危険だから止めてえええええっ!」

「じゃあエ●カ様？」

「それもダメだつてば!」

「そうだね。決勝進出がダメになったね。誰かさんのせいだね」

「返す言葉もございせんんんんんんんんんっ!」

再び土下座を敢行する千歌。

ステージ終了後、Aqoursは運営側から厳しくお叱りを受けた。

それは千歌の行動についてだけではなく・・・

「アンタらも何してくれちゃってんの？」

「ごめんなさああああああああいっ!」

二人揃って土下座している麻衣先生と翔子先生。

この二人もテンションが上がり過ぎた結果、ステージの至近距離まで押しかけて応援

するというタブーを犯していた。

『ステージに近付いて応援してはいけません』って、あちこち注意書きもしてあったのに・・・アンタらが先導するもんだから、全校生徒も同じことしちやっただろうがこの単細胞教師共があああああああああつ！』

「面目ありませんんんんんんんんつ！」

「穴があつたら入りたいてすうううううううううつ！」

全力で頭を下げ続ける二人。

全く、コイツらときたら・・・

「出場者も応援者もルール違反とか、前代未聞過ぎるでしょ・・・運営側の心象が最悪になった今、決勝進出は無いだろぅし・・・」

頭を抱える俺。

せつかく良いパフォーマンスしてたのに・・・

「まあまあ天くん、落ち着きなよ」

「仕方ないって。皆テンション上がってたんだしさ」

苦笑しながら俺の背中を叩く曜と果南。

いや、仕方ないって・・・

「まあ楽しかったし、今の実力は出し切れたんじゃない？」

「Yes! 周りのレベルも実感出来たし、収穫はあったわね」  
あっけらかんと言う善子と鞠莉。

「いやいやいや・・・」

「緊張したけど、マル達らしいパフォーマンスが出来たぞら!」

「うん! この経験を次に生かさないかね!」

「何で皆そんなに前向きなの!?!」

「こんな形で決勝進出の道が絶たれて、悔しくないんだろうか・・・」

「勿論、残念ではありますが・・・悔しさはありませんわ」

俺の心を読んだのか、笑みを浮かべるダイヤさん。

「今の私達の全てを、間違いなく出し切りましたから。むしろ清々しいですわ」

「それに・・・まだ終わりじゃないでしょ?」

ニッコリ笑う梨子。

「確かに今回は、決勝に行けないかもしれないけど・・・私達には、もう一回チャンスがある。リベンジの機会が残されてるじゃない」

梨子の言う通り、リベンジの機会は確かに残されている。

ラブライブは一年に二回開催されており、今回の大会は今年一回目・・・

つまり、まだ二回目があるのだ。

「課題も見えたり、次の大会までもっと力を付けないと。やることは山積みよ」

「・・・アハハ、前を見据えるの早過ぎでしょ」

「思わず苦笑してしまおうが・・・頼もしさを感じている自分がいた。」

「仕方ない・・・また明日から頑張るとしようか」

「よし！私も頑張っちゃおうよー！」

「！」

「はあっ?」

千歌をしぼき倒す俺なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《絵里視点》

「まさかの展開だったわね・・・」

「アハハ・・・確かに」

苦笑する私と亜里沙。

千歌は非常口から飛び出して行くし、先生方は全校生徒を誘導してステージの近くに押しかけちゃうし……

「千歌も先生方も、大丈夫かしら……」

「いや、絶対大丈夫じゃないと思う。今頃天にしばかれてるでしょ」

「……そうよねえ」

天つたら、無言で先生方を引きずりながら出て行つたし……

千歌も無事ではすまないでしょうね……

「ライブの運営は、こういうルール違反に厳しいから……残念だけど、A q o u

r sは決勝には進めないだろうね」

肩をすくめる亜里沙。

「でも……良いステージだった」

「ええ……本当に」

会場全体が一つになるような、素晴らしいパフォーマンスだった。

正直、先生方や生徒達が興奮してしまうのも頷ける。

他の出場グループにも引けを取らない、レベルの高いパフォーマンスだったと思う。

「ステージに立つと、あそこまで変わるなんて……私もまだまだ見る目が無いなあ」

溜め息をつく亜里沙。

「多分、天は分かってたんだろうね・・・」

「でしようね・・・マネージャーだもの」

『今に分かるよ・・・Aqoursの底力が』

ステージが始まる前、天が言っていたことを思い出す。

Aqoursはこれほどのパフォーマンスが出来るということ、天は確信していたのね・・・

「・・・私も、立ち止まっている場合じゃないわね」

弟とその仲間達が、これほど頑張ったのだ。

姉として、情けない姿は見せられない。

「いい加減、前を向いて進まないかね」

「・・・うん」

そんな私の手を、微笑みながらギュッと握ってくれる亜里沙なのだった。

物語は始まったばかりである。

「色々ありがとう」

「こちらこそ、ありがとうございました！」

握手を交わす絵里姉と千歌。

地区予選の日から数日後、絵里姉と亜里姉が東京へ帰る日がやって来た。

俺達は二人を見送りに、駅までやって来ていた。

「うう・・・絵里さん、どうかお元気で・・・！」

「ダイヤ!?何で号泣してるの!?!」

「お姉ちゃん、絵里さんと別れるのが寂しいみたいで・・・」

苦笑しながら、ダイヤさんの背中を擦っているルビィ。

まあダイヤさん、すっかり絵里姉に懐いたもんな・・・

元々ファンだったけど、『実際にお会いしてますます惚れ込んでしまいましたわ!』と

か言ってたし・・・

「もう・・・泣かないで、ダイヤ」

優しくダイヤさんの頭を撫でる絵里姉。

「今度はダイヤが東京に来てちようだい。その時は、私がたくさんもてなすから」  
「ぐすつ・・・約束ですわよ？」

「ええ、約束」

お互いの小指を絡める二人。

あのダイヤさんが、すっかり絵里姉の妹みたいに・・・

恐るべし、絵里姉・・・

「うわあああああんっ！亜里沙さああああんっ！」

「曜ちやああああんっ！」

「こっちはこっちで、今生の別れみたいになつてる・・・」

「この二人、仲良かったもんねえ・・・」

号泣しながら抱き合う曜と亜里姉を見て、呆れている果南と善子。

この二人は似たような性格の為か波長が合ったらしく、すっかり意気投合していた。

「また絶対会いましょうねええええっ！」

「勿論だよおおおおっ！全速前進んんんんっ!？」

「ヨーソロおおおおおっ！」

「からのおおおおっ!？」

「ハラシヨおおおおおっ！」

「何か新しい掛け声が生まれてるすら」

花丸の冷静なツツコミ。

やれやれ、騒がしいなあ・・・

「絵里も亜里沙も、また遊びに来てちようだい。いつでもWelcomeよ」

「ええ、またお邪魔させてもらうわね」

「ぐすつ・・・ありがとう、鞠莉」

二人と抱き合う鞠莉。

「天のこと、よろしく頼むわね」

「Of course! 妻が夫を支えるのは当然デース!」

「誰が妻で誰が夫やねん」

「あたっ!?!」

鞠莉の頭にチョップをかます俺。

「ちよつとダーリン!?! DVは良くないわよ!?!」

「人の嫁気取りも大概にしろや、B87」

「だからバストサイズで呼ばないでってば!?!」

「そうよ鞠莉さん! 本妻は私なんだから!」

「梨子まで何言ってるの?」

何で梨子まで悪ノリしてるんだろう……

鞠莉の悪い癖がうつったかな？

「出たわね、梨子……言つとくけど、マリーの方がおっぱい大きいわよ……？」

「ぐぬぬ……そこは否定出来ない……！」

「まあまあ、梨子も大きい方ですよ。B80あるんだし」

「ちよ、天くん!?何で私のサイズ知ってるの!？」

「希ちゃんに聞いた」

「μ sの人達って口が軽すぎない!？」

「……希にはお説教が必要ね」

溜め息をつく絵里姉。

ドンマイ、希ちゃん。

「まあ、それはさておき……天、身体には気を付けるのよ」

「そのセリフ、そっくりそのまま返すわ」

苦笑する俺。

「元気になったとはいえ、また無茶して体調を崩さないようにね」

「分かってるわ。天こそ無茶しないでね」

「俺が無茶したことなんて、人生で一度も無いんだけど」

「へえ、どの口がそんなことを言うのかしら．．．？」

「いふあいふあい（痛い痛い）」

絵里姉にジト目で両頬を抓られる。

「私も大概だけど、貴方も無茶する方でしょうが。人に無茶するなって言うなら、自分も無茶しないようにしなさい」

「はいはい」

「『はい』は一回！」

「は〜い」

「伸ばさない！」

「このPEめんどくさっ!?!」

「めんどくさいって何よ!?!っていうかPEって何!?!」

「P（ポンコツ）E（エリーチカ）」

「誰がポンコツよ!?!それならせめてK（可愛い）を付けなさいよ!?!」

「自分で自分のこと『可愛い』とか引くわあ．．．」

「そ〜ら〜ッ!」

「やれやれ、二人とも子供なんだから．．．」

「アンタだけには言われたくないんだけど」

「だから何でそこだけハモるの!？」

亜里姉のツツコミ。

もうテツパンの流れである。

「ほら、そろそろ時間だよ」

「あつ、本当ね・・・」

時計を見ると、電車が来る時間が迫ってきていた。

それを確認した絵里姉は、少し寂しそうな表情を浮かべると・・・

俺に近付き、そつと抱きついてきた。

「・・・また会いに行くから。ね？」

「・・・ええ」

絵里姉の頭を撫でる俺。

ホント、寂しがりやなんだから・・・

「亜里姉もまたね」

「うん。天も頑張つて」

亜里姉も抱きついてくる。

しばらく三人で抱き合っていた俺達は、やがて別れを惜しむようにゆっくり離れた。

「それじゃあ・・・またね！」

「皆もまた会おうね！」

「はいっ！」

「またお会いしましょう！」

笑顔で手を振る皆。

絵里姉と亜里姉も笑顔で手を振ると、改札を通り抜けてホームへと向かった。

やがて二人の姿が見えなくなる。

「……ふう」

一つ息を吐く俺。

すると、背後から優しい温もりに包まれた。

「……寂しい？」

「……ちよつとね」

果南が抱き締めてくれていた。

大人しく果南に身体を預ける俺。

「まあ、またすぐ会えるだろうから……寂しがることもないんだけどさ」

「フフツ……素直じゃないんだから」

抱き締める力を強くする果南。

「私達が側にいるんだから……寂しがる時間なんて、与えてあげないんだからね」

「アハハ・・・それは残念」

果南の優しさが染みる。

ありがたいな・・・

「あー、何か今日は一人になりたくないなあ・・・」

「それならマリイの家に泊まってちょうだい。一緒にお風呂に入りましょー」

「採用」

「不採用！天くんはウチに泊まるんだから！」

何故か不機嫌そうに話に割り込んでくる梨子。

何かさつきから、やたら鞠莉に対抗心を燃やしているような・・・

「それじゃ天くん、ウチ来る？志満姉が喜びそうだし」

「行く行く！」

「ダメっ！」

鞠莉と梨子の二人に止められる。

何でや・・・

「天くん、相変わらず鈍感ずら・・・」

「アハハ・・・まあ、それが天くんだもんね」

「どうやら、天の病気は治りそうにないわね・・・」

同級生三人が、何やらヒソヒソ話をしていた。

よく聞こえないが、何か失礼なことを言われている気がする……

「それでしたら、今日は全員で天さんのお家に泊まらせていただきましょうか」

「どうしたんですかダイヤさん？ 頭でも打ちました？」

「天さん!?! 失礼ですわよ!?!」

ダイヤさんのツツコミ。

あの堅物のダイヤさんが、男女のお泊りを提案するとは……

「べ、別に良いでしょう？ な、仲間なので……」

「ダイヤさん……結婚して下さい」

「ふえっ!?!」

ダイヤさんの顔が真っ赤に染まる。

おお、なかなか見られない光景だな……

「ちよ、天!?!」

「何しれっとプロポーズしてるの!?!」

何故か猛抗議してくる鞠莉と梨子。

「やれやれ、天くんときたら……」

「また無意識にやらかしてるし……」

何故か呆れている千歌と曜。

「まあ、これが天だよね」

「ホント、変わらないわねえ」

何故か苦笑している果南と善子。

「天くんがお義兄ちゃん・・・悪くないかも」

「ルビイちゃん、気が早いぞら」

ルビイにツツコミを入れる花丸。

賑やかだなあ・・・

「そ、天さん!?!そういうものは、キッチンとした順序を踏んでから・・・!」

「ふむふむ、順序を踏んだらオツケーしてくれるんですか?」

「そ、それは・・・うう・・・!」

これ以上無いほど顔を真っ赤にして、涙目になっているダイヤさん。

何この人、メツチャ可愛いんですけど。

「と、とにかくっ!全員準備をして天さんの家に集合ですわっ!」

「「「「「「はーい」」」」」」

素直に返事をする皆。

どうやら異議は無いようだ。

「・・・ホント、良い仲間を持ったよ  
改めて思う。」

内浦に来て、皆に出会えて・・・本当に良かった。

「・・・よし、円陣組もうか」

「急にどうしたずら?」

「そういう気分なんだよね」

「どんな気分ずら!?!」

「まあ良いじゃん。次のラブライブに向けて、気合い入れなきゃいけないしさ」  
ツッコミを入れる花丸の背中を、曜が笑いながら押す。

全員で円陣を組むと、千歌が大きな声を張り上げた。

「それじゃ、いくよ・・・1!」

「2!」

「3!」

「4!」

「5!」

「6!」

「7!」

「8!」

「9!」

曜、梨子、花丸、ルビイ、善子、ダイヤさん、果南、鞠莉が続き……全員が俺の方を見る。

最初は、Aqoursの一員になることを拒否していた。

この数字は、自分が名乗ってはいけないと思っていた。

でも……

「……10!」

今は胸を張って名乗ることが出来る。

俺は、絢瀬天は……Aqoursの10人目のメンバーなのだ。

「0から1へ……今、全力で輝こう!」

それぞれの指を繋ぎ、0の形を作る。

そして……

「A q o u r s ！」

「「「「「「サ～ンシャイ～ン！」「「「「「「」」

天高く人差し指を・・・1を掲げる。

次のラブライブに向け、決意を新たにする俺達なのだつた。

\*\*\*\*\*

《《梨子視点》》

「鞠莉さん、カメラの準備出来ました？」

「OKよ。これでバッチリね」

笑顔で返事をしてくれる鞠莉さん。

私達は今、千歌ちゃんの家の中の前の浜辺に集まっていた。

Aqoursの集合写真を撮る為だ。

「それにしても、急に『写真を撮ろう』だなんて・・・どうしたのかしら、天くん」

そう、これは天くんの発案なのだ。

さっきの円陣といい、急にどうしたのかしら・・・

「・・・多分、懐かしくなっただんじやないかしら」

向こうでルビィちゃんや花丸ちゃんと談笑している天くんを見て、鞠莉さんが微笑む。

「絵里や亜里沙と触れ合って、昔を思い出したんだと思うわ。μ'sが活動してた頃は、よく皆で一緒に写真を撮ってたみたいだし・・・あの二人が帰っちゃって寂しいから、人との繋がりを感じてたいんじゃない？」

「なるほど・・・っていうか鞠莉さん、天くんのことよく理解してますね」

「Of course! 幼馴染だもの♪」

「ぐぬぬ・・・」

悔しいが、認めざるをえない。

私よりも鞠莉さんの方が、天くんのことをよく理解している。

これが幼馴染の力なのね．．．

「フフツ、梨子は本当に天が好きなのね」

「．．．そういう鞠莉さんはどうなんですか？」

「それは勿論．．．ね」

再び天くんへと視線を向ける鞠莉さん。

その視線の先では、天くんが善子ちゃんに追いかけていた。

「．．．私の初恋は、十年前から全く色褪せていないわ。昔も今も、変わらず天のことを想ってる」

「鞠莉さん．．．」

「．．．とはいえ、私はあの子を傷付けたから。そんな資格は無いんだけどね」

苦笑する鞠莉さん。

そのこと、まだ引きずってるのね．．．

「．．．資格なんて要らないでしょう」

「え．．．？」

「大事なのは、天くんのが好きかどうかです。違いますか？」

「梨子．．．」

「そして選ぶのは天くんです。私を選ぶのか、鞠莉さんを選ぶのか、違う誰かを選ぶのか……だから誰が選ばれたとしても、恨み言は無しですからね」

私の言葉に、鞠莉さんはキョトンとした後……

面白そうにクスクス笑い出した。

「フフツ……梨子、貴女本当に良い女ね」

「そう思つてると、そのうち鞠莉さんのこと出し抜いちやうかもしれませんよ?」

「あら、怖い怖い」

鞠莉さんはひとしきり笑うと、私に手を差し出してきた。

「改めてよろしく、梨子。仲間としても……恋のライバルとしても、ね」

「フフツ……負けませんからね、鞠莉さん」

差し出された手を握る私。

「さん付けは要らないわよ」

「え……?」

「あと、敬語も要らないから。仲間なんだし、何より……ライバルとして公平に、対等に勝負しましょう?」

ウインクする鞠莉さん。

全く、どつちが良い女なんだか……

「お〜い！鞠莉〜！梨子〜！」

私達を呼ぶ声がある。

天くんがこちらへ向かって、大きく手を振っていた。

「準備出来た〜？」

「バッチリよ！今ボタン押すから！」

鞠莉さんはそう返事をする、シャッターボタンを押した。

タイムマーのカウントダウンが始まる。

「さあ、行きましょう梨子！」

笑みを浮かべ、私の手を取る鞠莉さん。

「っ・・・うん、鞠莉ちゃん！」

鞠莉ちゃんの手を握り、二人で走り出す。

そして・・・

「えいっ！」

「シャイニー☆」

「うおっ!？」

二人でそれぞれ、天くんの両腕に抱きつくのだった。

新鮮な気持ちで臨むことは大事である。

「Hello, everybody!」

マイクの前に立ち、全校生徒に挨拶する鞠莉。

「本日より、2nd seasonのStartレース!」

「メタ発言すら」

「いや、多分『二学期』って言いたいだけだから」

花丸のツツコミにツツコミを入れる善子。

夏休みも終わり、今日から二学期・・・

浦の星では全校生徒が集まり、体育館で始業式を行なっていた。

「鞠莉さん!?!理事長挨拶なのですから、そこは節度をもって・・・」

「雪像?」

「節度!」

ステージ上でダイヤさんに注意されている鞠莉。

それを見て果南が呆れていた。

「だから『鞠莉には挨拶を任せない方が良い』って言ったのに・・・」

「アハハ・・・まあ一応理事長だし、立場的に挨拶は必要らしくて・・・」  
苦笑するルビィ。

一方、曜は心配そうに体育館の入り口を見つめていた。

「それにしても、千歌ちゃん遅いね・・・」

『『これからは一人で起きるから』って、言ったそばから遅刻するなんて・・・』  
溜め息をつく梨子。

「どうやら千歌は、まだ登校してないらしい。」

「っていうか・・・」

「凄く今さらなんだけどさあ・・・学年ごととに並んでなくて良いの?」

今の俺達、学年関係無しにA q o u r sで固まっちゃってるんだけど。

何なら俺達だけじゃなくて、他の生徒達も学年バラバラで集まってるんだけど。

もう既に列とか存在してなくて、あちこちで集団が形成されてる状態なんだけど。

「良いんじゃない? 鞠莉が『堅苦しいのは無しにしましょー♪』って言い出して、こういう形になったらしいし」

「その一声が通ってしまふ浦の星って一体・・・」

肩をすくめる果南に、溜め息をつく俺。

そんな俺の両肩に、ポンツと手が置かれる。

「まあまあ、良いじゃない天くん」

「そうよ天くん、自由であつてこそその浦の星なんだから」

「自由すぎてルール違反を犯した人達が何か言つてるんですけど」

「その節は大変申し訳ありませんでした!」

土下座する麻衣先生と翔子先生。

相変わらず土下座するの早いな・・・

「ハア・・・頭上げて下さい。もう氣にしてないんで」

「流星は天くん!」

「懐の深い男の子つて素敵!」

抱きついてくる二人。

暑苦しいなあ、もう・・・

「ちよつと!?!何してるんですか!?!」

慌てて二人を引き剥がし、俺を抱き寄せる梨子。

「先生が生徒に抱きつかないで下さい!」

「いや、梨子も俺に抱きついてるじゃん」

「私は良いのっ!」

「梨子ちゃん、ずいぶん積極的になつたね・・・」

『天くんは鈍感だから、積極的にアピールしないと気付いてもらえない』って学んだらしいよ。『二学期からは、今まで以上にガンガン行くわ！』って言ってたくらいだし』ルビィと曜が何やら話している。

内容はよく聞こえないが、身の危険を感じるのは気のせいだろうか・・・

「つていうか、麻衣先生も翔子先生もこんなところにおいて良いんですか？先生方は端の方に整理してたはずじゃ・・・」

「そんなもの、最初の五分で崩れたわよ」

「おい大人達」

翔子先生の言葉通り、他の先生方も散り散りになって仲の良い生徒達と一緒にいる。

この学校、本当に大丈夫なんだろうか・・・

「それにしても・・・惜しかったわよね、ラブライブ」

「うん・・・あともう少いで、決勝に行けたかもしれないぞら」

そんなことを話している善子と花丸。

ルール違反により間違いなく敗退と思われていたA q o u r sだったが、実際はかなり惜しいところまでいっていた。

会場の観客による投票で予想以上の票数を獲得し、決勝へ進んだグループの票数に肉薄していたのだ。

運営側の評価が下がっていなかつたら、もしかすると・・・

「・・・たらればを言っても仕方ないか」

首を横に振る俺。

結果として、地区予選で敗退したことが全てだ。

次の大会では決勝に進んで、優勝出来るように頑張らないと・・・

「あの憎き Saint Snow が、決勝に進出してそこそこ良い順位に入ったからね。あの生意気な小娘達には、絶対に負けられない・・・確実に潰す」

「え、今『潰す』って言った？ 言ったよね？」

「決勝に進出して・・・とにかく Saint Snow をぶつ潰したいです」

「どこのエ●ン!? 不穏過ぎるわ!」

「とりあえず、ブロッコリーの食品サンプルを大量購入しておかないと」

「本気で聖良さんを潰す気じゃん!? 止めてあげて!」

全力で止めてくる曜。

その時・・・

「シヤラアアアアアアアアップ!」

「うるせええええええええええつ!」

「(づ)ふっ!」

『檸檬●弾』用に持っていたレモンを全力でぶん投げ、鞠莉の顔面にクリーンヒットさせる。

耳がキンキンするし、火花が散ったみたいに目の前がパチパチするわ・・・

「ちよつと天!?!何するのよ!?!」

「マイクに向かつて大声で叫んだら、今みたいにハウリングが発生するだろうが!ハウつた衝動で火花が散るとか、『革命デユ●リズム』の歌詞だけにしてくんない!?!」

「何の話!?!私はただ注目を集めようとしただけなんだけど!?!」

「金髪巨乳ハーフ美女なんて、むしろ注目しか集めないだろうが!」

「そんな、美女だなんて・・・キャツ♡」

「はいはい、鞠莉さんは引っ込んでいて下さい」

面倒になったのか、鞠莉を押し退けてマイクの前に立つダイヤさん。

「決勝に行けなかったことは残念ですが・・・0を1にすることは出来ましたわ」

「ええ、それは間違いないですね」

今回Aqoursは、たくさんの票を集めることが出来た。

誰一人投票してくれなかった、あの時と違って。

「入学希望者も、今では10人になったもんね」

背後から俺に抱きついたままの梨子が、嬉しそうに笑う。

今まで0人だった入学希望者が、10人になったのだ。これはかなりの前進と言える。

「そして本日、発表になりました・・・次のラブライブが！」

「ええっ!?!」

「ホントに!?!」

ダイヤさんの言葉に、驚いている曜と果南。

やっぱり、ダイヤさんは知ってたか・・・

「今回と同じく、決勝はアキバドーム・・・やるしかありませんわ！」  
やる気が漲っているダイヤさん。

その時、体育館の扉が勢いよく開かれた。

「出ようっ!ラブライブっ!」

千歌が息を切らしながら駆け込んでくる。

全く、本当にタイミングが良いな・・・

「フフツ、遅いよ千歌ちゃん」

「千歌ちゃんらしい登場の仕方すら」

「待たせるんじゃないわよ」

笑っているルビィ、花丸、善子。

千歌は息を整えると、ガバツと顔を上げた。

「1を10にして、10を100にして、学校を救って……そしたらきつと、私達だけの輝きが見つかると思う!」

笑顔で言い切る千歌。

「どうやらウチのリーダーも、やる気満々のようだ。」

「だから出よう! ラブライブ! 今度こそ優勝しよう!」

「勿論であります!」

「やってやるわ!」

「マルも気合い入ってるぞら!」

「今度は負けないもん!」

「墮天使たるヨハネに、二度目の敗北は許されないわ!」

「Saint Snowにも負けてられないしね!」

「優勝も浦の星も諦めませんわ!」

「二兎を追って二兎とも得てやりマース!」

「どうやら、皆の思いは一つのようなだ。」

Aqoursの皆の視線が、俺に向けられる。

「ほら天くん、皆待ってるわよ……Aqoursの十人目の言葉を」

麻衣先生に背中を押される。

俺は一つ息を吐き・・・笑みを浮かべた。

「このままじゃ終われない・・・勝つよ、皆」

「「「「「「おーっ！」」」」」」」

こうして、俺達の新たな挑戦が始まるのだった。

「それはさておき・・・何遅刻してんだこの腐れアホミカンがあああああつ！」

「本当に申し訳ありませんでしたああああああああつ！」

## 【絢瀬絵里】 一生忘れない・・・

「お姉ちゃん、そっちはどう？」

「もう少しで終わりそうよ」

亜里沙の問いに返事をする私。

私達は今、クローゼットの奥から冬用の服を引っ張り出していた。

これからどんどん寒くなってくるし、準備は早めにおかないとね・・・

「それにしても・・・今日はこんなことしなくてもいいんじゃない？」

呆れている亜里沙。

「せっかくの誕生日なんだよ？これから、sの皆が、お姉ちゃんの誕生日パーティーをやってくれるっていうのに・・・」

「集合までまだ時間があるじゃない。こういうのは時間がある時にやっておかないと」

そう、今日は私の二十三歳の誕生日だ。

皆のことだから、きつと今頃張り切って準備してくれてるんでしょね・・・

本当にありがたいわ・・・

「・・・天も来られたら良かったのにね」

「仕方ないでしょう。平日だし、普通に学校があるんだから」

「まあね・・・大学生は自由がきくけど、高校生はそうもいかないか・・・」  
残念そうな亜里沙。

天は内浦で頑張ってるんだし、元気でやってくれていればそれで良い。

お祝いのラインだってもらったし、私にはそれだけで十分だ。

「あっ・・・」

天のことを考えていると、衣装ケースの中から一本のマフラーが出てきた。

少し色がくすみ、ところどころ解れてしまっている水色のマフラー・・・

それは私にとって、とても大切なマフラーだった。

「・・・懐かしいね、そのマフラー」

微笑んでいる亜里沙。

「まだ持ってたんだ？」

「・・・捨てられるわけじゃないじゃない」

マフラーを手に取り、ギョツと胸に抱く。

「大事な・・・大事なプレゼントなもの」

「フッフ・・・そうだね」

私の背中に手を添えてくれる亜里沙。

胸に抱いたマフラーを見つめながら、これをもらった五年前のことを思い出す私なのだ。だった。

\*\*\*\*\*

「はい、今日の練習はここまで！」

「つ、疲れたあ・・・」

「も、もう無理・・・」

「う、動けないよお・・・」

へたり込む穂乃果・にこ・花陽。

μ s は今日も、放課後に屋上で練習に励んでいた。

「みつともないですよ、穂乃果。シャキツとして下さい」

「うう、海未ちゃんが厳しい・・・」

「情けないわねえ、にこちゃん・・・」

「何ですって!?! そういう真姫こそ足ガクガクじゃない!」

「こ、これぐらいどうってことないわよ!」

「かよちゃん、お水持つてきたにや」

「ありがとう、凜ちゃん」

練習も終わり、わいわい騒いでいる皆。

私も水分補給をしていると、天とことりが二人で私のところにやって来た。

「絵里姉、今日は先に帰っててくれる? 俺はことりちゃんの家へ寄っていくから」

「えっ、また?」

「うん、次の曲の衣装について打ち合わせしたいし」

「ここ最近、天はことりの家に行くことが増えていた。」

「マネージャーとしての仕事を、頑張ってくれるのはありがたいけれど・・・」

「最近多くない? そんなに打ち合わせしないといけないことがあるの?」

「ま、まあ色々・・・」

「き、今日は作詞についての打ち合わせもあるので! 私もお邪魔する予定なんです!」

急に割り込んでくる海未。

何を慌てているのかしら・・・

「大丈夫だよ、絵里ちゃん」

天を背後から抱き締めつつ、私に笑顔を向けることり。

「そんなに遅くならないようにするし、帰りはお母さんに車で送ってもらおうから」

「それなら良いけど・・・じゃあことり、お願いね」

「フフツ、任せて♪天くん、行こう？」

「うん」

「わ、私も行きます！」

天の手を引き、部屋へと戻っていくことりと海未。

何か怪しいわね・・・

「そういえば、この前は真姫も一緒だったわよね？」

「ま、まあね・・・作曲について相談したくて・・・」

何故か目を逸らす真姫。

ひよつとして、何か隠してる・・・？

「まさか・・・天にいかかわしいことをしているの!？」

「してるわけないでしょ!?!何でそういう発想になるわけ!?!」

「ことりも海未も真姫も、三人共ガチ勢じゃない!そんな三人が天と一緒に部屋で過

ごすなんて、あの子の貞操の危機だわ!」

「喧嘩売ってる!?!いくら何でもそんなことしないから!」

「抵抗する天を押しえつけて、天の天高くそびえ立つ天を・・・」

「ストツプううううっ!? アンタさつきから何言ってるのよ!?」

「『天くん、ことりで卒業しようね・・・』みたいな展開が容易に想像出来るわ!」

「アンタの脳内はピンク一色かっ! 何を卒業させようとしているの!?」

「じゃあ『天、大丈夫ですよ・・・私も初めてですから・・・』みたいな?」

「だから違うってば!? 何が初めてなのよ!?」

「まさか『し、仕方ないわね・・・私が捨てさせてあげるわよ・・・』のパターン!?」

「どんなパターン!? 何を捨てさせようとしているわけ!?」

「ナニよ! そんなの分かっているでしょ!?」

「ナニソレ、イミワカンナイ! アンタ本当に絵里よねえ!?」

「エリチ、心配しなくても大丈夫やって。天くんはウチの旦那さんになる子なんやから」

「ちよつと希!? アンタまで何言ってるのよ!?」

「そうだよ希ちゃん! 私だって天くんのお嫁さんに立候補してるんだからね!」

「花陽まで!」

真姫のツツコミが止まらない。

何か最近天のせいで、メンバーのキャラがおかしくなってる気がするのだけれど・・・

「いや、絵里ちゃんが一番おかしいよね・・・」

「無自覚って恐ろしいわ・・・」

「何気に、崩壊の危機だにや・・・」

呆れている穂乃果・にこ・凜なのだった。

\*\*\*\*\*

「ハア・・・」

溜め息をつく私。

あれから数日経つが、天は練習が終わると必ずことりの家に寄るようになっていた。ここまできると、まず間違いない・・・

天は私に何かを隠している。

「どうしたんエリチ？溜め息なんてついちゃって」

首を傾げる希。

生徒会の仕事を終えた私達は、学校からの帰り道を歩いていた。

「いや、何て言うか・・・最愛の弟に隠し事されるって、姉として辛いなって・・・」  
「ああ、天くんのことやね」

苦笑する希。

「そんなに心配なん？」

「当たり前じゃない！毎日あの独特サイドテールの家に入り浸っているのよ!?!しかも登山家もどきと毛先クルクル女も一緒・・・あの子の貞操が奪われていても、何ら不思議じゃないわ!」

「あれ、エリチってそんなストレートに仲間をデイスる子やったっけ・・・」

「ああ、どうしよう・・・あの子にもしものことがあつたら・・・!」

「まあまあエリチ、ちよつと落ち着いて・・・」

「B90は黙ってて!」

「バストサイズで呼ぶの止めて!」

B90のツッコミ。

私より2センチ大きいだけなのに、私より遥かに大きく見えるのは気のせいかしら・・・

「全く、エリチは本当にブラコンやね・・・」

「誰がブラジャーコンプレックスよ!?!可愛いのが着けてるから!」

「胸の話から離れてもらっていい!? ブラジャーじゃなくてブラザーね!」  
呆れている希。

「そんな心配しなくても、天くんは大丈夫。天くんがしっかりしてるのは、エリチが一番知ってるじゃん?」

「そ、それはそうだけど……」

「ほら、家に着いたよ?」

希に言われて初めて気付く。

私達は既に、私の住むマンションに到着していた。

「天くんも待つてるんじゃない?」

「……どうせことりの家でしょ」

今日は生徒会の仕事があったので、私と希は、sの練習を休んでいた。

他の皆はいつも通り練習していたはずだが……

恐らく天は今日も、練習終わりにことりの家に寄ってくるのだろう。

「でも、連絡は来てないやろ?」

「……遂に連絡も超越さなくなったのね」

「今日のエリチは、ずいぶんネガティブやね!」

「ネガティブにもなるわよ! うう、天あ……」



「・・・えっ?」

盛大なクラツッカーの音と共に、何人もの声が響き渡る。

な、何!? 何事!?

「フフツ、サプライズ成功やね」

後ろでクスクス笑っている希。

ど、どういうこと・・・?

「今日はμ、sの練習をお休みして、皆ここで誕生日会の準備をしてくれてたんだよ

?」

「その通りにや!」

「いやあ、大変だったあ・・・もぐもぐ」

「花陽!? 何つまみ食いしてるのよ!」

「そうだよ花陽ちゃん! 私も食べたい!」

「いけません穂乃果! 今日の主役は絵里ですよ!」

「ハラショー! 早く食べたいな!」

μ、sの皆と亜里沙が、わいわい騒いでいる。

なるほど、そういうことだったのね・・・

「希ちゃん、お疲れ様」

「あつ、天くん♡」

「むぐつ!?!」

劳いの言葉をかける天を、思いっきり抱き締める希。

「エリチに悟られないようにするの、大変だったんだあ・・・褒めて欲しいな♪」

「ふあふあふおふおふいふあん、ふあふおふいふいふあふふあ（流石希ちゃん、頼りになるわ）」

「あんっ♡そんなところで喋らんといて♡」

希の胸に顔が埋まった状態の天が、何やらふがふが言っている。

「はいはい、その辺にしときなさい」

希と天を引き剥がすにこ。

「早く料理食べるわよ。お腹も空いたし、冷めちゃったら勿体ないじゃない」

「これ、全部にこが作ってくれたの・・・?」

「私と天の二人がかりよ。優秀な弟子のおかげで、思ったより早く作れたわ」

「にこちゃんのおかげだよ。間に合って良かった」

ハイタッチを交わすにこと天。

天も作ってくれたのね・・・

「・・・てつきり今日も、ことりの家に行ったんだと思ってたわ」

「絵里姉の誕生日を、スルーするわけないでしょ」

天はそう言って苦笑すると、ラッピングされた箱を差し出してきた。

「誕生日おめでとう、絵里姉」

「あ、ありがとう・・・」

おずおずと箱を受け取る。

これ、誕生日プレゼントよね・・・？

「あ、開けて良いかしら・・・？」

「どうぞ」

天に促され、ゆっくりとラッピングを剥がしていく。

そして箱を開けると・・・

「っ・・・」

そこにあっただのは・・・鮮やかな水色のマフラーだった。

「なかなかの出来映えでしょ？」

ニコニコしていることり。

「そのマフラー、天くんが編んだんだよ？」

「編んだって……えっ、天が!？」

驚愕する私。

これを天が……?」

「ことりちゃんに編み方を教えてもらいながら、少しずつ編んでたんだよ。編み物は初めてだったから、相当苦戦したけどね」

「初めてとは思えない出来映えだよ!天くんにはセンスがあるね♪」

天を褒めることり。

えっ、じゃあもしかして……

「……最近、ことりの家に寄ってたのって……」

「ああ、うん。ずっとこれを編んでたんだよね……ゴメンね、打ち合わせなんて嘘ついちゃって」

申し訳なさそうな天。

ふと周りを見ると、皆ニコニコしている。

「まさか……皆知ってたの!？」

「すみません、絵里」

「私と海未はカモフラージュの為に、天と一緒にことりの家にお邪魔してたのよ」  
苦笑している海未と真姫。

そういうことだったのね・・・

「あれ、私は何も聞いてないよ？」

「凜も聞いてないにや」

「穂乃果ちゃん、凜ちゃんには言わなかったもん」

「ちよ、天くん!？」

「何でにや!？」

「絶対顔に出るから」

「信頼度ゼロ!？」

「いや、むしろマイナスなんだけど」

「酷いにや!？」

「天!？私も聞いてないよ!？」

「あつ・・・亜里姉に伝えるの忘れてた」

「純粹に忘れられてた!？そっちの方がシヨックなんだけど!？」

亜里沙のツッコミ。

不憫ね、亜里沙・・・

「それより絵里ちゃん、せつかくだしマフラー巻いてみたら?？」

「せやね。天くん、巻いてもらったらええやん」

花陽と希がそんなことを言う。

「・・・お願いしても良いかしら？」

「勿論」

天はそう言うと、箱の中のマフラーを取り出し・・・

私の首に優しく巻いてくれた。

「おお、良いね！」

「似合ってるにゃ！」

穂乃果と凜が褒めてくれる。

首元以上に・・・心が温まるのを感じる。

「やはり絵里には、水色が良く似合いますね」

「絵里ちゃんのカラーだもんね」

微笑んでいる海未と花陽。

私は天に視線を向けると、笑みを浮かべた。

「ありがとう、天・・・とつても嬉しいわ」

「喜んでもらえて良かった・・・ことりちゃんのおかげだね」

「そんなことないよ。天くんが頑張ったからだよ」

ニッコリ笑うことり。

ことりの言う通り、きつと天は頑張ってくれたんだろう。

他でも無い、私の為に・・・

「っ・・・」

「おつと・・・絵里姉？」

思わず天に抱きついてしまう。

私は今、この子が愛おしくて仕方なかった。

「絵里姉・・・泣いてるの？」

「・・・泣いてないもん」

「・・・そっか」

涙声で返事をする、天が抱き締め返してくれた。

「・・・いつもありがとう。大好きだよ、絵里姉」

「天・・・」

「さあ、ご飯食べよう？絵里姉の好きなもの、たくさん作ったから」

「フフツ・・・それは楽しみね」

目元の涙を拭い、天と笑い合う。

かけがえのない仲間に、家族にお祝いされて・・・

今日という日を、一生忘れないだろうと思う私なのだった。

\*\*\*\*\*

「「「誕生日、おめでとう！」「」」」

「ありがとう、皆」

笑みを浮かべる私。

私と亜里沙は、ことりの家にお邪魔していた。

「悪いわね、ことり。家を使わせてもらっちゃって」

「気にしないで。お母さん出張中だから、今は私一人だけだし」

微笑むことり。

「でも、全員は揃えなかったね・・・」

「仕方ないわよ。にこちゃんも希も仕事があるんだし」

残念そうな花陽に、肩をすくめる真姫。

二人は仕事の為、今回の誕生日会は欠席している。

前もって謝罪のラインが来ていたが、仕方の無いことだ。

休職中の私と違って、あの二人はバリバリ働いているのだから。

「でもにこがない割に、美味しそうな料理が並んでるわね？誰が作ってくれたの？」

「フツフツフツ、実は・・・」

「凜、ストツプです」

「むぐっ!？」

海未に口を押さえられる凜。

どうかしたのかしら？

「絵里ちゃん、一口食べてみなよ」

「えっ・・・？」

「多分絵里ちゃんなら、分かるんじゃないかな・・・誰が作ったのか」

そんなことを言い出す穂乃果。

そんなに分かりやすい味付けなのかしら・・・

「ほら絵里ちゃん、あ〜ん」

「あ、あ〜ん・・・」

穂乃果が側にあつたボルシチをスプーンですくい、私の口元に運んでくれる。

恐る恐る口を開け、食べてみると・・・

「っ・・・ええっ!？」

美味しい……

いやそれより、この味はまさか……!

「そ、天……?」

「大当たり」

「っ!?!」

キッチンからひよっこり顔を出したのは……

内浦にいるはずの天だった。

「ど、どうしてここにいるの!?!」

「……前にも言ったじゃん」

微笑む天。

「絵里姉の誕生日を、スルーするわけないでしょ」

「っ……」

「あ、ちなみに学校はサボったから」

「何してるの!?!」

一気に涙が引っ込んでしまう。

そんな堂々と『サボった』って……

「鞠莉に許可はもらったから大丈夫。『マリーの分もお祝いしといて♪』だっさ」

「軽くない!? 理事長がそれで良いの!？」

「ちなみに担任の麻衣先生にも、ちゃんと話はしておいたから。『東京のお土産よろしくね!』だつてさ」

「担任までそんな感じなの!？」

流石に心配になってくるレベルである。

浦の星、本当に大丈夫かしら・・・

「昨日 A q o u r s の練習が終わった後、新幹線でこつち来てことりちゃんの家泊めてもらったんだよね。で、朝から料理の仕込みをしてたつてわけ」

「フフツ、サプライズ大成功♪」

天に抱きつくことり。

「昨日の晩御飯は天くんが作ってくれたんだけど、本当に美味しくて・・・天くん、私と結婚して専業主夫やってくれない?」

「はい喜んで!」

「ダメですっ!」

「天も受諾しないのっ!」

二人を引き剥がす海未と真姫。

ガチ勢三人は相変わらずね・・・

「アハハ、相変わらず天くんはモテモテやね」

「本当に罪な男だにや」

「フフツ、私も後で甘えちゃおっ♪」

わいわい話している皆。

皆も知ってみたいね・・・

「ちよつと天!?!私は何も聞いてないんだけど!?!」

「あつ・・・亜里姉に伝えるの忘れてた」

「まさかの二回目!?!そろそろ泣いていい!?!」

「フツフツフツ・・・残念だったね、亜里沙ちゃん!」

「凜達はちゃんと聞かされてたにや!」

「二人は絵里姉と会わないだろうから、教えても良いかなつて。会う機会があるよう

だったら、絶対教えてないけど」

「酷い!?!」

「全然信用されてないにや!?!」

「アハハ・・・」

思わず苦笑してしまう私。

そんな私に、天がラッピングされた箱を差し出してきた。

「誕生日おめでとう、絵里姉」

「・・・開けても良いかしら？」

「どうぞ」

既視感を覚えるその光景に、私は箱の中身が分かるような気がした。

ゆつくりラッピングを剥がし、箱を開けると・・・

そこには、鮮やかな水色のマフラーがあつた。

「五年前にプレゼントしたマフラー、色もくすんで解れが目立つちゃつてるでしょ？」

絵里姉、メツチャ使つてくれてたもんね」

天は苦笑すると、箱の中からマフラーを取り出し・・・

あの時と同じように、私の首に優しく巻いてくれた。

「うん・・・やっぱり絵里姉には、水色がよく似合うね」

「っ・・・」

「おっと・・・絵里姉？」

天を思いつきり抱き締める。

嬉しくて嬉しくて、涙が止まらない。

「絵里姉・・・泣いてるの？」

「こんなことされたら、泣くに決まつてるじゃない・・・」

天を抱く腕に力を込める。

「ありがとう、天・・・大好きよ」

「・・・俺も好きだよ、絵里姉」

抱き締め返してくれる天。

そして抱き合う私達を、温かく見守ってくれている皆。

また一つ、一生忘れないであろう思い出が増えた私なのだった。

## 【星空凜】世界で一番・・・

「起きるにやあああああああつ！」

「ぞっふっ!？」

腹部に大きな衝撃を受け、思わず目を覚ましてしまう。

視線を向けると、凜が俺の腹部にまたがっていた。

「おはよう天くん！今日も良い天気だにや！」

「重いから早く退くにや」

「女の子に何てこと言うにや!?!そして語尾をパクらないでほしいにや！」

ツツコミを入れる凜。

やれやれ・・・

「うりやあつ！」

「にやあつ!?!」

勢いよく身体を起こすと、凜が俺の身体から落ちてひっくり返る。

ベッドに倒れ込む凜に覆い被さり、顔を近付けて笑う。

「形勢逆転」

「そ、天くん!?か、顔が近いにや！」

「何今さら恥ずかしがってんの? あんなことやこんなこともしてるのに」

「そ、それとこれとは話が別にや！」

顔を赤くして叫ぶ凜。

相変わらず乙女だなあ……

「それにしても凜……ずいぶん髪が長くなったよね」

凜の髪を手取る。

μ s 時代はショートヘアだった凜も、今では腰の辺りまであるロングヘアになっていた。

「フフツ、頑張つて伸ばしたんだ」

笑う凜。

「だって天くん、ロングヘアの女の子好きでしょ?」

「えっ、俺の為だったの?」

「勿論」

俺の頬に手を添える凜。

「好きな男の子を振り向かせる為なら、女の子は何でも出来ちゃうんだから」

「……顔が近いだけで恥ずかしがるくせに、そういうセリフはサラツと言えるのね」

今度は俺が恥ずかしくなってしまうのだった。

\*\*\*\*\*

「シュート！」

「えいつ」

「にやあああああつ?!」

シュートをブロックされ、悲鳴を上げる凜。

俺達は今、家の近くにある体育館でバスケットボールを楽しんでいた。

「くつ、普通のシュートは天くんにブロックされてしまうにや・・・!」

「俺の方が身長高いからね」

悔しがる凜に苦笑する俺。

相変わらず負けず嫌いだなあ・・・

「つていうか、せっかくの誕生日デートが体育館で良いの?」

「今日は身体を動かしたい気分だったんだにや!」

「『今日は』っていうか毎日そうじゃん」  
呆れる俺。

今日は凜の誕生日ということで、凜にどこへデートに行きたいか聞いたんだけど……  
まあ凜らしいけどね。

「それに凜は、天くんと一緒ならどこに行っても楽しいにゃー！」

「……そっか」

少し照れ臭くなってしまう。

俺と凜が付き合い始めたのは、俺が高校を卒業してすぐのことだった。

もう交際四年目になるが、こうやってストレートに好意をぶつけてくるところは全く  
変わらない。

俺としては、凄く嬉しいんだけども。

「っていうか天くん、遊んでて大丈夫？大学の単位が足りないとか無い？」

「ギリギリ中のギリギリで卒業した人に言われたくないわ」

「うぐっ……」

言葉に詰まる凜。

今でこそ社会人として立派に働いている凜だが、大学時代は遊びすぎて本当に留年し  
そうになったこともあった。

同じ大学に花陽ちゃんが通ってなかったら、どうなっていたことやら・・・

「俺は問題なく単位取得してるから大丈夫。後は卒論さえちゃんと書けば、無事に卒業出来るよ。もう就職先の内定だってもらってるしね」

「くっ、これだから優等生は・・・！」

「うわ、劣等生が吠えてる」

「にやあああああつ！腹立つにやあああああつ！」

地団駄を踏む凜。

「こうなったら、バスケットで思いっきり叩きのめしてやるにや！」

「かかってこいや」

「おおっ！やる気満々だねー！」

「・・・ん？」

いつの間にか、金髪の女性が目を輝かせながら俺達を見ていた。

「これからバスケットで勝負するの!?愛さんも混ぜて混ぜて！」

「・・・こんな人懐っこい子、凜以外にいるんだね」

「凜もビツクリしてるにや・・・」

「愛?何してるの?」

金髪の女性の後ろから、青みがかった髪のお姉さんが現れた。

「あ、果林！この二人がバスケット決するらしいから、愛さん達も混ぜてもらおうよ！」

「初対面の人にいきなり絡むんじゃないわよ・・・お邪魔してゴメンなさいね」

「全然大丈夫です。それよりバスケットやりましょう」

「早くペア分けするにや！」

「受け入れるの早くない!？」

お姉さんのツツコミ。

一方、俺達はやる気満々だった。

「とりあえず凛は、絶対に天くんに勝つにや！」

「上等だよ。完膚なきまでに叩きのめしてやるわ」

「良いねー！愛さん燃えてきたー！」

「もう仲良くなってるし・・・」

呆れているお姉さん。

あんまり乗り気じゃないのかな？

「もしかしてお姉さん、勝つ自信無いの？」

「なっ・・・!？」

「そっかそっか、それなら無理しなくても・・・」

「無いわけないでしょ!？貴方なんか捻り潰してあげるんだから！」

「そうこなくっちゃ！」

「おお、あの果林を乗り気にさせるとは・・・」

「人を煽るのが上手いだけにや」

感心している女性に、溜め息をつく凜なのだった。

\*\*\*\*\*

「にゃあっ！」

高くジャンプして、ダンクシュートを決める凜。

流星の跳躍力だな・・・

「ナイスよ凜ちゃん！」

「ありがとう！果林ちゃんのパスのおかげだにゃ！」

喜ぶ凜とお姉さん・・・朝香果林ちゃん。

俺を倒すことに意欲を見せていた二人は、ペアを組んで全力で勝ちにきていた。

「おお、凄いねリンリン！」

「凜は身体能力が高いからね」

感心している女性・・・宮下愛ちゃんに、苦笑しながら答える俺。

そういうこの子も、何気に良い運動神経してるんだよね・・・

「愛さんも負けてられない！行くよ天っち！」

「はいはい」

今度はこちらが攻める番だ。

愛ちゃんからのパスが回ってくる。

「天っち！」

「オツケー！」

そのままドリブルで進もうとしたところ、目の前を果林ちゃんに塞がれてしまう。

「イカせないわよ？」

「ええっ!? そんなあ・・・」

「私が素直にイカせてあげると思ってるのかしら？」

「お願い・・・イカせて・・・」

「フフツ、そんな切なそうな顔しちゃって・・・そんなにイキたい？」

「イキたい・・・!」

「バスケの話だよねえ!? 何かエロく聞こえるのは凜だけ!？」

「アハハ・・・」

ツツコミを入れる凜と、苦笑している愛ちゃん。  
あの二人の心が汚れているのはさておき・・・  
俺も本気を出すとしよう。

「雷の呼吸、壱ノ型・・・」

「いやそれ違う作品だから！」

「『霹●一閃』！」

「ええっ!？」

果林ちゃんをツツコミと共に置き去りにする。

そのままシュートを決め・・・

「させないにや！」

ブロックしてくる凜。

来ると思つてたよ・・・

「終わりにや黒子おとおおっ！」

「いやそれも違う作品だから！」

「いいえ、まだです・・・ボクは、影だ」

「何で天くんもノリノリなの!？」

再び果林ちゃんのツツコミを置き去りにし、愛ちゃんへとパスを出す俺。

「頼んだ愛ちゃん！」

「あいよっ！愛だけにっ！」

ダジャレを言いながらダンクシュートを決める愛ちゃん。

マジかつけえ・・・

「ナイス愛ちゃん！」

「天つちもナイスパス！」

ハイタツチを交わす俺達。

やっぱ愛ちゃん凄いわ・・・

「くっ、負けてられないわ！」

ボールを手にしてドリブルする果林ちゃん。

そんな果林ちゃんの前に立ち塞がる俺。

「捻り潰してあげる！」

「おお、果林ちゃんは紫原か」

「マネしてるわけじゃないわよ!？」

ツツコミを入れつつ、俺をドリブルで抜きにかかる果林ちゃん。

俺は止めようと、ボールへと手を伸ばし・・・

むにゅっ。

「あっ・・・」

「あんっ!?!」

甘い声を上げる果林ちゃん。

ボールの前に果林ちゃんの身体が来た結果、俺の手は果林ちゃんの胸を思いつきり掴んでしまった。

指が沈んでいくこの感覚・・・

柔らかい・・・っていうかデカいな・・・

「いつまで揉んでるにやああああああああああっ!」

「ぐはあっ!?!」

凜に全力の飛び蹴りをお見舞いされる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「本当に申し訳ありませんでした」

「も、もう良いから！頭上げて！ねっ!?」

床に額を擦り付けて土下座する俺を見て、慌てて頭を上げさせようとする果林ちゃん。  
ん。

「わざとじゃないんだし、全然気にしてないから！」

「果林ちゃん、思いつきり頭を踏みつけてやると良いにや」

「凜ちゃん!？」

絶賛不機嫌モードの凜。

まあこうなるよね・・・

「小さいはずのリンリンから、凄い威圧感を感じる・・・まさにビ●グ・ママ・・・リンリンだけに」

「ああん・・・?」

「つまらないこと言ってすいませんでした！」

俺の隣に並んで土下座する愛ちゃん。

「ハア・・・天くんのラッキースケベっぷりは、本当に変わらないにや」

「日頃の行いが良いと、こういうご褒美が待ってるんだね」

「反省しろセクハラ野郎」

「調子に乗ってすいませんでした」

遂に語尾から『にや』が消えた凜。  
怖すぎる・・・

「・・・フフツ」

不意に果林ちゃんが笑う。

どうしたんだろう？

「凜ちゃんったら、本当に天くんのが好きなのね」

「か、果林ちゃん!?何を言い出すにや!？」

「そんなに怒るほど嫉妬しちゃうって・・・可愛いんだから♪」

「い、いきなり抱きつかないでほしいにや!」

顔を赤くして抵抗する凜。

その様子を見て、愛ちゃんがニヤニヤしていた。

「リンリンみたいな可愛い女の子に慕われて・・・羨ましいぞ、天っち♪」

「でしょ?自慢の彼女だもん」

「アハハ、言い切ったねー!」

笑みを浮かべる愛ちゃんなのだった。

「全く・・・天っちも羨ましいけど、リンリンも羨ましいなあ・・・」

\*\*\*\*\*

「疲れた・・・」

「にやあ・・・」

家に帰るなり、二人揃ってベッドに倒れ込む。

俺と凜は既に同棲しており、マンションの一室に二人で住んでいた。

「果林ちゃんも愛ちゃんも、体力ありすぎでしょ・・・」

「流石の凜もヘトヘトにや・・・」

あの後もバスケットを続け、ペアを変えて何度もミニゲームをやった。

かなり白熱したから夢中になってやってたけど、終わった後の疲労感ハンパないな・・・

「・・・フフツ」

「凜? どうした?」

急に笑い出した凜に、首を傾げる俺。

「今日のバスケットで、改めて思ったんだけど・・・やっぱり凜、天くんととの相性が一番良

「気がするにや」

「アハハ、俺もそう思ったよ」

「愛ちゃんや果林ちゃんも、ペアを組んでいて凄くやりやすかったけど・・・」

「一番しつくりきたしたのは、やっぱり凜とペアを組んだ時だった。」

「実際その時は凜も俺も無双状態で、愛ちゃんや果林ちゃんから『ゲームにならない』とクレームが来たほどだった。」

「・・・凜」

「凜の頭を撫でる俺。」

「改めて、誕生日おめでとう・・・いつもありがとね」

「・・・それは凜のセリフだにや」

「俺の胸に顔を埋める凜。」

「これからもずっと、凜の側にいてね？」

「勿論」

「凜を優しく抱き締める。」

「歳上だけど、良い意味で歳上な感じがしない・・・」

「いつも等身大で、全力で好意をぶつけてきてくれる凜・・・」

「そんな凜を、俺は好きになったのだ。」

「……大好きだよ、凜」

「……凜も大好きだよ、天くん」

笑い合う俺達。

大好きな凜の温もりを感じ、幸せを噛み締める俺なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《凜視点》

「ふんふんふん♪」

朝ご飯を作っている凜。

ご飯を作るのは当番制で、今日は凜が当番の日だった。

「それにしても……よく眠ってるにゃ」

後ろを振り返ってみると、ベッドで爆睡している天くんの姿があった。

昨日はよほど疲れたらしい。

「……フフッ」

料理する手を一度止め、寝ている天くんに近寄る。

「相変わらず、可愛い寝顔だにゃ」

普段はのほほんとしている天くんだけど、凜は知っている。

誰よりも凜の顔を見てくれていることも・・・

誰よりも凜のことを想ってくれていることも・・・

『誰が何と言おうと、凜ちゃんは可愛い女の子だよ』

自分に自信が無かった凜に、天くんがかけてくれた言葉だ。

自分の容姿にコンプレックスを抱いていた凜にとって、その言葉は救いだっただ。

『自分のことが信じられないなら、俺の言葉を信じてほしい。俺は凜ちゃんに、嘘なんかつかないから』

その言葉通り、天くんはいつも凜に対して正直でいてくれた。

だからこそ凜も、天くんに対して正直でいようと思った。

天くんのが好きだという気持ちも、正直に伝えようと思ったのだ。

「ホント・・・天くんは罪な男だにゃ」

まさか自分が、こんなに人を好きになるなんて思わなかった。

今までショートだった髪を伸ばしてロングにするなんて、天くんを好きになっ  
ていなかったらしなかったと思う。

前までは『短い方が良い』と置いていたが、天くん『可愛い』と言われたら『長  
ても良いかな』なんて思ってしまっただけ・・・

自分の変化に、自分でも驚いてしまうほどだ。

「・・・天くん」

目の前でスヤスヤと眠る大好きな人に、優しく語り掛ける。

「いつも凜を肯定してくれて、正直でいてくれて・・・ありがとう」

天くんの頭を撫でる。

「世界で一番・・・天くんのが大好きにゃ」

笑みを浮かべる凜なのだ。



失礼な、これでも手加減はしてるのに。

「よし！次のラブライブに向けて頑張るぞー！」

「フフツ、気合いが入るわね」

やる気に満ち溢れている曜と梨子。

そこへダイヤさんが割り込む。

「ぶつぶー！」

「ですわ！」

「天さん!?私のセリフを取らないで下さいますか!？」

「ごめんなさいですわ！」

「バカにしますの!？」

「そんなわけありませんわ！」

「ムキイイイイツ!？」

「あつ、遂にダイヤまで天のおもちやになった・・・」

「完全に遊ばれてるわね・・・」

呆れている果南と鞠莉。

まあ、ダイヤさんイジリはこれくらいにして・・・

「ラブライブの前に、学校説明会があるのを忘れないでね？」

「あつ・・・」

思い出した様子の曜と梨子。

入学希望者を増やす為には、この学校説明会で浦の星の魅力を存分にPRしなくては  
いけない。

その為には・・・

「学校説明会でライブをする・・・それが一番良いPRになるんじゃないかな」

「それ良い！」

背後から声がする。

振り向くと、顔を輝かせた千歌が立っていた。

「それ、凄く良いと思う！」

「うらあつ！」

「がはあつ!？」

ハリセンをフルスイングし、千歌の頭に叩き込む。

床に突つ伏す千歌。

「ちよ、天くん!?!いきなり何するの!?!」

「何しれつと練習に遅れて来てんの? スクールアイドル舐めてんの?」

「ゴメンつて!?!ちよつとトイレに行つてて・・・」

「何『トイレ』なんてワードを口にしてんの？スクールアイドル舐めてんの？」

「そこ!?!そりや人間なんだからトイレくらい・・・」

「スクールアイドル舐めんじゃねえええええっ！」

「ぐはあっ!?!」

「天くん、千歌ちゃんに対してホント容赦ないね・・・」

「いつも思うんだけど、あのハリセンどこから出してるのかしら・・・」

ひそひそ話している曜と梨子。

ちなみに、ハリセンの隠し場所は企業秘密である。

「ほら、皆早く柔軟体操を済ませて。善子はもつと身体を柔らかくして」

「フツ、仮初めの身体を柔らかくしたところで・・・」

「＼10tヴァ●ス＼！」

「いやあああああああああっ!?!」

「あつ、今度はトントンの実の能力者になった・・・」

「善子さんが死にそうな顔してますわ・・・」

「ほら、そこで転がってるアホも早く済ませて」

「遂に『ミカン』が抜けてただの『アホ』になった!?!」

千歌がギャーギャー騒ぐ中、鞠莉のスマホが鳴り始める。

「鞠莉、電話なら出なよ。先に始めてるから」

「Thank you! すぐ済ませてくるわ」

スマホを手にとって席を外す鞠莉。

この電話が重大なニュースをもたらすことになるなど、この時の俺達は知る由もないのだった。

\*\*\*\*\*

翌日・・・

「うわぁ・・・!」

目を輝かせている千歌。

放課後、俺達は沼津にあるスタジオにやって来ていた。

「広〜い!」

「(ここ)鏡張りだ〜!」

梨子とルビィも興奮気味だ。

善子なんてテンションが上がりが過ぎたせいかな、鏡に向かってクラウチングスタートの構えを・・・

「いぎ、鏡面世界へ！」

「待てや厨二病」

「ギャアツ!？」

走り出す瞬間にシニオンを掴み、善子の動きを止める。

「ちよ、痛い痛い痛いっ！引きちぎれるっ！」

「ブリ●レさんじゃないんだから、鏡の中に入れるわけないでしょ。ミラミラの実を食べてから出直してきな」

「フツ・・・ヨハネの力をもつてすれば、鏡に入ることなど造作も無いこと・・・」

「花丸、マツチ」

「はいずら」

「ごめんなさあああああいつ！調子に乗ってすみませんでしたあああああつ！」  
土下座する善子。

チツ、シニオン燃やしてやろうと思ったのに・・・

「ここ、パパの知り合いが借りてるスタジオなんだ。しばらく使わないから、好きに使ってもらって構わないってさ」

説明してくれる囉。

これからの季節は日没が早い為、内浦から沼津へ出るバスの最終時間が早まってしま  
うらしい。

つまり今まで通り浦の星で練習すると、今までより早い時間に切り上げなければいけ  
なくなってしまうのだ。

そこで考えたのが、沼津で場所を借りて練習するという案だった。

沼津から出るバスの時間は変更が無いとのことで、遅い時間までバスが出ているらし  
い。

そんなわけで俺達は、囉の紹介で練習が出来る広さのスタジオを見に来たのだ。

「じゃあここを借りよう！ここなら近くにお店もたくさんあるし！」

「そんな遊ぶことばかり考えてちゃダメでしょ？」

「本屋もあるすら」

「ええっ!? やったあ！」

「梨子も人のこと言えないじゃん」

「あたっ!？」

梨子の頭を軽く叩く。

「梨子を買う本って、また壁ドンとか顎k・・・」

「キヤアアアアッ!?」

慌てて俺の口を塞ぐ梨子。

やれやれ……

「まあそれはさておき……ちょっと真面目な話をしようか」

俺はそう言うのと、さつきから一言も喋っていない三年生三人に視線を向けた。

「……三人とも、何かあった?」

「「「っ……」」」

息を呑む三人。

「ど、どうして……」

「そんな暗い表情してたら、誰だつて気付くわ」

戸惑った様子の鞠莉に、溜め息をつく俺。

昨日電話を終えて戻ってきたところから、鞠莉の様子がどこかおかしかったのだ。

今日になって、果南やダイヤさんまで浮かない顔してるし……

「スタジオに来てからも、曇った表情のまま一言も喋らないし……何かあったとしたか

思えないんだけど」

「えっ、そうだったの?」

「おい腐ったミカン」

「酷い!?!」

シヨックを受ける千歌。

すると意を決したように、鞠莉が口を開いた。

「実は・・・学校説明会が、中止になるの・・・」

「・・・え?」

その言葉に、呆然とする皆。

中止・・・?

「ど、どういふこと!?!」

「・・・言葉通りの意味だよ」

戸惑った様子の梨子に、淡々と答える果南。

「学校説明会は中止・・・浦の星は、正式に来年度の募集を止めるんだって」

「そんな!?!」

「いきなりすぎない!?!」

「・・・学校側は、二年前から統合を模索していましたからね」

曜と善子の抗議の声に、俯きながら答えるダイヤさん。

「鞠莉さんがお父様を説得して下さって、先延ばしになっていたのですが・・・遂に限界が来たということでしょう」

「でも、入学希望者はゼロじゃないぞら!」

「そうだよ! 徐々に増えてきてるでしょ!?!」

「それは勿論言っただけど・・・本来の定員数には到底満たない以上、決定を覆すことは出来ないと言われたわ」

花丸とルビィの訴えに、うなだれる鞠莉。

そんな鞠莉の肩を、千歌が勢いよく掴む。

「鞠莉ちゃんツ! お父さんはどこにいるのツ!?!」

「ど、どこって・・・アメリカだけど・・・」

「ツ!」

スタジオを飛び出そうとする千歌。

そんな千歌を、曜と梨子が必死に止める。

「千歌ちゃん!?! 落ち着いて!?!」

「離してツ! 私が鞠莉ちゃんのお父さんと話してくるツ!」

「鞠莉ちゃんのお父さんはアメリカにいるのよ!? アメリカまで行く気なの!?!」

「志満姉や美渡姉やお母さんに言つて、お小遣い前借りしまくるツ! それでアメリカに行つて鞠莉ちゃんのお父さんに会つて、『もう少しだけ待つてほしい』つて話すツ!」

「そんなこと、本当に出来ると思う!?!」

「出来るツ! だから早く離s・・・」

「落ち着けバカ千歌ツ!」

「っ・・・」

大声で怒鳴ると、暴れていた千歌がビツクリして固まった。

他の皆も、驚いたように俺へと視線を向ける。

「そ、天くん・・・?」

「・・・動揺するのは分かるけど、少し冷静になりなよ」

気持ちを落ち着かせる為、一つ大きな息を吐く俺。

「鞠莉のお父さんは浦の星の運営に顔が利くだけであつて、何でもかんでも介入でき

るわけじゃない。最終的な決定権は、あくまでも浦の星の運営にあるんだよ。鞠莉がお願いしてくれたこともあって、何とか今まで時間を稼いでくれてたみたいだけど……鞠莉のお父さんの力をもってしても、そろそろ限界ってことなんだろうね」

運営が二年前から統廃合を模索していた中、よくここまで引き延ばしてくれたと思う。

鞠莉のお父さんでなければ、絶対に出来なかつたことだ。

「だから鞠莉のお父さんに会って、どんなに話をしたところで……状況は変わらないと思う。もう鞠莉のお父さんの力だけじゃ、どうにも出来ない段階なんじゃないかな」  
「でも……でもっ……!」

「実の娘である鞠莉の頼みでも、『限界だ』って言うくらいなんだよ？ 初対面の千歌が会って、『もう少しだけ待ってほしい』って頼んだとして……応えてくれると思う？」

「それは……」

俯いてしまう千歌。

酷な質問だったかもしれないが、これが現実だ。

鞠莉の頼みでさえ応えてくれない以上、俺達が何を言ったところで応えてはもらえないだろう。

「……ゴメンね、千歌っち。てへぺろっ」

「っ……」

笑って舌を出す鞠莉。

無理して笑っているのが見え見えだし、今にも泣き出しそうな顔をしている。

千歌もそんな鞠莉を見て表情を歪め、何も言えなくなってしまうた。

「……その癖も相変わらずだね」

俺は溜め息をつくつと、鞠莉をそつと抱き締めた。

「そ、天!?今はちよつと……」

慌てて離れようとする鞠莉だったが、俺は鞠莉の身体を離さなかった。

やがて鞠莉の目に、じわりと涙が浮かんでくる。

「本当につ……これ以上はっ……!」

「……俺達の前でくらい、無理しなくて良いんだよ」

「っ……!」

堪えきれなくなつたのか、声を上げて号泣する鞠莉。

辛くて泣きそうな時、鞠莉はいつも笑って誤魔化そうとするのだ。

全く、本当に不器用なんだから……

「さて……どうしたもんかな……」

鞠莉の頭を撫でながら、今後について思いを巡らせる俺なのだ。

大切なものが無くなってしまうのは悲しい。

翌日、急遽として全校集会が開かれた。

その場で鞠莉が学校説明会の中止、及び統廃合の件を正式に発表。生徒達の間にも、大きな衝撃が走ったのだった。

「じゃあ、先生方も統合先の学校に異動するんですか？」

「ええ、そういう話になってるわ」

放課後、俺は麻衣先生と一緒に校内を回っていた。

各クラスの担任と学級委員長で、校内に貼られた学校説明会のポスターを回収することになったのだ。

ウチのクラスの委員長は何故か俺になっていた為、こうして麻衣先生と一緒に行動しているのだった。

「統合先に知ってる先生がいた方が、生徒達も安心するでしょ？その辺りはちゃんと配慮してくれてるみたいよ」

「じゃあ、麻衣先生も一緒なんですわ……良かった……」

「そ、天くん……そんなに私を慕ってくれてたのね……！」

「クビになって路頭に迷った挙句、ウチに転がり込んできたらどうしようかと・・・」

「そっちの心配!?! っていうか、そうなら受け入れてよ!?!」

「ズボラ女を二人も養えません」

「誰がズボラ女ですって!?!」

「ぐえっ!?!」

麻衣先生に背後から羽交い絞めにされる。

俺がもがいていると、不意に麻衣先生の力が弱くなり・・・

そのままそつと抱き締められた。

「麻衣先生・・・?」

「・・・この学校、本当に無くなっちゃうのね」

麻衣先生の眩き。

その声は、いつになく弱々しかった。

「私、この学校が大好きなのになあ・・・」

「麻衣先生・・・」

前に聞いた話だが、麻衣先生と翔子先生は浦の星の卒業生なんだそうだ。

二人とも当時から仲が良く、共に教師の道を志すことを決めたんだとか。

そして大学で教員免許を取得し、卒業後に二人揃って浦の星への赴任が決まったらし

い。

『あの時は嬉し過ぎて号泣しちやつたわ』なんて言いながら、二人とも懐かしそうに語っていた姿が印象深い。

それだけこの学校に思い入れがあるのなら、当然寂しくもなるだろうな……

「……今夜の晩御飯、ウチで食べませんか？麻衣先生の好きなもの作りますから」

「フフツ……ありがとう、天くん」

俺を抱き締める腕に、ギユツと力を込める麻衣先生。

すると……

「あーっ!?!」

廊下に響く大きな声に、二人揃ってビクツとなつてしまう。

翔子先生がこつちを指差して、隣にいるダイヤさんに訴えかけていた。

「見てダイヤちゃん！不純異性交遊の決定的瞬間よ!?!しかも教師と生徒!」

「鶴見先生、廊下であまり大きな声は出さない方がよろしいかと……」

「私も混ぜてええええええっ!」

「混ざりにいくのですか!?!そして廊下を走らないで下さいます!?!」

翔子先生がダツシュで俺達に駆け寄り、真正面から俺に抱きつく。

俺は今、翔子先生と麻衣先生に挟まれる形になっていた。

「ちよ、苦しいんですけど・・・」

「良いじゃない。こんな美女二人に挟まれてるんだから」

「自分で美女って言っちゃったよ・・・」

「フフツ・・・それで天くん、おっぱいサンドイッチの感想は？」

「幸せです」

前には翔子先生の、後ろには麻衣先生の大きくて柔らかかなモノが当たっている。

これ以上の幸せは無い。

「アハハ、翔子ちゃんは元氣ねえ」

「麻衣ちゃんはそんな暗い顔しないの」

「あたっ!？」

苦笑する麻衣先生の頭を、翔子先生が軽く小突く。

「・・・こんな時だからこそ、私達教師は明るく振る舞わなきゃ。私達が暗い顔してたら、生徒達が余計不安になるでしょ」

「・・・ゴメンなさい。その通りだわ」

「分かればよろしい。まあ私だっと思うところは色々あるし、そこら辺は今晚語り合おうとしましょう・・・天くんの家で」

「何で俺の家なんですか」

「あら、麻衣ちゃんは誘ってたのに私はダメなの?」

「・・・どこから聞いてたんですか」

「『じゃあ、先生方も統合先の学校に異動するんですか?』から」

「最初からじゃない」

「あ た つ ! ?」

今度は麻衣先生が翔子先生の頭を小突く。

やれやれ・・・

「お三方共、仲がよろしいのは結構ですが・・・」

いつの間にか側に来ていたダイヤさんが、怒りで頬をピクピクさせていた。

「いつまでその体勢でいるつもりですの・・・?」

「「・・・何か問題でも?」」

「大アリですわよ!?!早く離れて下さい!」

何故か怒っているダイヤさん。

何をカッカしてるんだろう・・・?」

「あらダイヤちゃん、もしかして嫉妬?」

「なっ!?!そんなわけないでしょう!?!」

麻衣先生がニヤニヤしながらそう言うと、ダイヤさんの顔が真っ赤に染まった。

「ああ、そういうこと・・・愛されてるわねえ、天くん」

「だから違うと言ってるでしょう!？」

「いやあ、ダイヤさんに愛されてるなんて幸せだなあ」

「天さんも調子に乗らないで下さい!」

「そうですね・・・ダイヤさんは俺みたいなヤツのこと、好きでも何でもないですよ・・・むしろ嫌いですよ・・・調子に乗ってすみませんでした・・・」

「ちよ、天くん!？」

「あーあ、天くんが落ち込んだじゃった・・・」

「ダイヤちゃん、今のは酷いわよ・・・」

「私が悪いのですか!？」

「あたふたするダイヤさん。」

やがて顔を赤らめ、恥ずかしそうに制服の裾を握り締めた。

「き、嫌いなわけではないでしょう・・・天さんは私にとって、その・・・た、大切な方なのでですから・・・」

「可愛すぎかオイ」

「ひゃあつ!？」

顔を真っ赤にして恥じらうダイヤさんに、思いつきり抱きつく。

そんな俺達を、微笑ましそうに見つめる麻衣先生と翔子先生なのだった。

\*\*\*\*\*

「さて、早く帰って夕飯の支度しなくちゃ・・・」

最寄りのバス停から、家までの道のりを歩く俺。

麻衣先生と翔子先生は仕事が終わりに次第来るって言うし、それまでに準備しておかないとな・・・

「わんっ!」

『十千万』の前に差し掛かると、しいたけが勢いよくこちらへ走ってきた。

「ただいま、しいたけ」

「わんっ!」

じゃれついてくるしいたけ。

そんなしいたけに構っていると・・・

「あら天くん、お帰りなさい」

「ただいまです、志満さん」

ちようどしいたけの毛繕いをしていたらしい志満さんが、声を掛けてくれた。

「今日は千歌ちゃんも早めに帰ってきたけど、A q o u r s の練習はお休み？」

「ええ。今は皆、練習に熱が入らないでしょうから」

「・・・統廃合の件ね」

溜め息をつく志満さん。

「自分の母校が無くなるっていうのは、やっぱり寂しいわ・・・」

「えつ、志満さんも浦の星の卒業生なんですか？」

「あら、言つてなかったかしら？」

首を傾げる志満さん。

「そうだったんだ・・・」

「私だけじゃなくて、美渡やお母さんもそうよ」

「へえ・・・じゃあ高海家の女性陣は、皆浦の星出身なんですね」

「ええ、皆浦の星で青春時代を過ごしてるの」

懐かしそうな表情の志満さん。

「思い出がたくさん詰まった学校だから、無くなってほしくないんだけどね・・・」

「志満さん・・・」

寂しそうな志満さんに何も言えずにいると、玄関から美渡さんが出てきた。

「志満姉、やっぱりダメだった・・・って天じゃん。お帰り〜」

「ただいまです、ダメ人間美渡さん」

「ちよ、誰がダメ人間よ!?!」

「いや、今自分で『ダメだった』って・・・」

「私のことじゃないわよ!?!」

「ダウト」

「しばき倒すっ!」

「ちよつと美渡、私の未来の旦那様を苛めないでちょうだい」

「志満姉の方から旦那呼ばわり!?!」

「当然じゃない! 私はずくんのお嫁になるべき女よ!」

「何でそんなに自信満々なの!?!」

「だってアンケートでぶつちぎりの一位だったもの。しかも三回連続で」

「何の話!?!」

美渡さんのツツコミが止まらない。

やれやれ、話が進まないじゃないか・・・

「それで? 何がダメだったんですか?」

「・・・千歌を元氣付けようとしたのよ」

溜め息をつく美渡さん。

「統廃合の件でずいぶんショックを受けてて、今日も帰って来るなり部屋に閉じ籠もっちゃってさ・・・何とか励まそうとしたんだけど、完全に心ここにあらず状態なのよ。今は何を言っても無駄だろうから、そっとしておくのが賢明ね」

「ですよね。じゃ、俺は家に帰って夕飯の支度するんで」

「あれ!?メツチャあつさりしてない!?!」

「いや、美渡さんも『そつとしておくのが賢明ね』って言ったじゃないですか」

「いやそうだけでも!そこは『俺に任せて下さい』って言う場面じゃないの!?!」

「甘えんなダメ人間」

「だから誰がダメ人間よ!?!」

ギャーギャー騒ぐ美渡さん。

やれやれ・・・

「・・・千歌のことは、美渡さんだってよく分かってるでしょうに」

「え・・・?」

「これくらいで心が折れる人じゃないって言ってるんです。むしろ本番はこれからでしょうに」

キョトンとしている美渡さんと志満さんに、笑みを浮かべる俺なのだった。  
「まあ見て下さい。A q o u r s も、浦の星も……このままじゃ終わりませんから」

諦めたらそこで試合終了である。

翌日・・・

「・・・眠い」

欠伸をしつつ、家からバス停までの道を歩く俺。

今朝は早くに目が覚めてしまった為、いつもより早めに登校することにしたのだ。

「・・・じつとしていられない、ってことかな」

浦の星の統廃合の話を聞いて、これからどうすべきなのかを考えて・・・

いてもたってもいられない気持ちだが、俺の中にあるのかもしれない。

「・・・ずいぶん影響されたもんだな」

思わず苦笑を漏らす俺。

すると・・・

「あれ？天くん？」

「え？」

バス停の前で、梨子がキョトンとした顔でこちらを見ていた。

「梨子？もう登校するの？」

「うん、何か早くに目が覚めちゃって・・・ひよっとして、天くんも？」  
「・・・まあね」

俺達が偶然に驚いていると、バスがやってきた。

バス停に到着したバスに、梨子と二人で乗り込むと・・・

「あつ、天くん！」

「梨子ちゃんも一緒ずらー！」

「凄い偶然だね！」

後ろの席に、曜・花丸・ルビイが座っていた。

善子とダイヤさんの姿も見える。

「何で皆こんなに早いのか？」

「今朝は妙に早く目が覚めてしまつて・・・」

苦笑するダイヤさん。

「ルビイも目が覚めてしまつたということ、二人で早めに登校することにしたのですが・・・まさか皆さんがいるとは思いませんでしたわ」

「クツクツクツ・・・皆、そんなにヨハネに会いたかつたのね」

「・・・会いたかつたよ、善子」

「ふえっ!？」

善子に顔を近づけ、目を合わせる。

「ちよ、天!? 近いってば!」

「・・・会いたかったよ、善子」

「ごめんなさい! 私の負けです!」

「よし、勝った」

善子を照れさせ、負けを認めさせる。

「これで对善子用の新戦法である。」

「善子ちゃん、顔真つ赤ずら」

「照れ屋だもんねえ、善子ちゃん」

「うるさいっ! あとヨハネっ!」

「そ、天くんは大胆だなあ・・・」

「み、見てるこちらがドキドキしましたわ・・・」

朝からワイワイ盛り上がる皆。

一仕事を終えた俺は、梨子の隣に座った。

「・・・女つたらし」

「ん? 何か言った?」

「何も」

そつぽを向く梨子。

あれ？何で機嫌悪いんだろう？

「・・・えいつ」

「ひやつ!?!」

梨子の頬を引つ張る。

相変わらず柔らかいなあ・・・

「ふあ、ふあふいふふおふお!? (な、何するのよ!?)」

「いや、何となく」

「ふあふあふあふあふいふえふお!? (早く離してよ!?)」

「おお、柔らかいしすべすべ・・・クセになりそう」

「ふいふおふおふあふあふいふいふいふえふ!? (人の話聞いている!?)」

梨子が抗議してくるので、仕方なく離してあげる。

梨子は自分の手で両頬を擦ると、俺の方を睨んだ。

「むう・・・」

「アハハ、ゴメンゴメン」

謝りながら梨子の頭を撫でる。

これも拒否されるかと思つたが、何故か頬を赤く染めて撫でられるがままになってい

る梨子なのだった。

\*\*\*\*\*

「おはようのハグっ！」

「はいはい、おはよう」

抱きついてくる果南の頭を撫でる俺。

学校に着いた俺達が部室に向かうと、既に果南と鞠莉がいたのだ。

「それにしても、果南も鞠莉も早いね？」

「いやあ、何か早くに目が覚めちゃってさあ・・・鞠莉もだよね？」

「ええ」

頷く鞠莉。

あれ以来、鞠莉は元気が無い状態が続いていた。

勿論他の皆も落ち込んでいたのだが、誰よりも憔悴していたのが鞠莉だったのだ。

統廃合にショックを受けただけでなく、理事長としての責任も感じているんだろう。

「あといないのは、千歌ちゃんだけだけど．．．」

「あの寝坊常習犯が、こんな朝早くに来るかなあ．．．」

曜と果南がそんな話をしている中、俺には妙な確信があった。

「．．．来るよ、絶対」

「え．．．？」

「いてもたってもいられない気持ちは．．．あの人が一番感じてるはずだから」

『がおおおおおおおおッ  
!!!!!!』

大きな叫び声が聞こえた。

今の声は．．．

「千歌ちゃんだ!」

「校庭の方ずら!」

「行きましよう!」

皆が続々と部室を飛び出す中、俺は鞠莉に視線を向けた。

「……どうやら、ウチのリーダーは諦められないみたいだよ」

「……そうみたいね」

苦笑する鞠莉に、俺は手を差し出した。

「ほら、俺達も早く行こう？」

「フフツ……ええ」

俺の手を握る鞠莉。

俺も鞠莉の手を握り返すと、そのまま皆の後に続いて校庭に向かうのだった。

\*\*\*\*\*

「起こしてみせるッ！奇跡を絶対にッ！」

校庭に到着すると、千歌が力強く叫んでいた。

走ってきたらしく息も絶え絶え、汗もびっしりで目元には涙が浮かんでいた。

「それまで泣かないッ！泣くもんかッ！」

「泣いてんじゃん」

「ごふっ!？」

千歌の背後から手刀を振り下ろす。

やれやれ・・・

「え、天くん!?!何でここに!？」

「早朝からやかましいどこかの誰かさんを、警察に突き出そうかと思って」

「止めて!？」

「全く、天くんも素直じゃないんだから」

「曜ちゃん!？」

クスクス笑っている曜を見て、千歌が驚く。

「さっきは信頼のこもった言葉で、『・・・来るよ、絶対』って・・・」

「『檸檬●弾』」

「ギャアアアアアッ!?!目がツ!?!目があああああッ!?!」

悶える曜。

「ざまあみやがれ。」

「相変わらず容赦ないね・・・」

「恐ろしいすら・・・」

「ルビイちゃん!?!花丸ちゃん!?!」

「アレ、ホント目に染みるんだよねえ．．．」

「もう天さんの武器みたいになってますわね．．．」

「果南ちゃん!? ダイヤさん!?」

「全く、天くんをいじろうとするからそうなるのよ．．．」

「ある意味、曜の自爆ね．．．」

「梨子ちゃん!? 善子ちゃん!?」

「ヨハネっ!」

皆が続々と登場し、驚きを隠せない千歌。

さらに俺の後ろから、鞠莉が顔を出す。

「千歌っち、Good morning♪」

「鞠莉ちゃんまで．．．」

呆然としている千歌。

これで全員揃ったな．．．

「結論は出たみたいだね」

笑う俺に、千歌は力強く頷く。

「鞠莉ちゃんは頑張ってくれたけど．．．私も皆も、まだ何も出来てない。だから無駄かもしれないけど、最後まで頑張って．．．足掻きたい!」

「やれやれ、千歌は昔から諦めが悪いんだから」

「果南さんもですけどね」

「お姉ちゃんもね」

「ぴぎやつ!？」

果南にツツコミを入れたダイヤさんが、ルビイからツツコミを入れられてしまう。

まあそれを言ったら・・・

「そもそもAqoursって、諦めの悪い人間の集まりじゃん」

「アハハ、確かに!」

俺の言葉に皆が笑う中、突然背後から首を絞められた。

「そくらくくくく?」

「ぐえつ!？」

曜が遠慮なくグイグイ首を絞めてくる。

「よくもやってくれたね!?!覚悟おとおおっ!」

「良い雰囲気をぶち壊さないでくれる!?!この露出狂!」

「だから露出狂じゃないって言ってるでしょうが!」

「朝の学校で水色の下着を晒してたヤツが何言ってるの!?!」

「ちよ、色をバラすなあっ!」

「おまけに人の背中に胸を押し付けてくるなんて！完全な痴女じゃん！」

「押し付けてないから！たまたま当たっちゃってるだけだから！」

「うわ、朝から『たまたま』なんて卑猥・・・」

「だから違うって言ってるでしょうがああああつ！」

「はいはい、仲がよろしくて結構」

俺と曜をぐいっと引き剥がす梨子。

あれ、また不機嫌になってる・・・

「とにかく、私達は最後まで諦めない・・・良いわね？」

「勿論！最後まで足掻きまくってやろうじゃん！」

意気込む果南。

他の皆も頷く中、突然千歌が鉄棒に向かって走り出す。

そして鉄棒を掴み、そのまま勢いよく一回転した。

「千歌ちゃん！」

ビククリしている曜と梨子。

そんな様子を気にもせず、千歌は笑っていた。

「起っ！そう！奇跡を！足掻こう！精一杯！」

叫ぶ千歌。

「全身全霊！最後の最後まで！皆で輝こおおおおっ！」

「・・・ハハッ」

思わず笑ってしまふ俺。

今の千歌の姿は、まるで・・・

「ホント似てるよ・・・穂乃果ちゃんに」

力強く皆を引つ張ってくれた、*M* *S*のリーダーを思い出す。

まさに今の千歌は、*A* *q* *o* *u* *r* *s*を照らしてくれる太陽だった。

「・・・私もしよぼくれている場合じゃないわね」

俺の側に立っていた鞠莉が呟く。

その目には、再び力が宿っていた。

「もう一度。パパと話をして、もう少し待ってもらえるようお願いしないと」

「・・・今度は一人で抱え込み過ぎないでね」

そつと鞠莉の手を握る俺。

「鞠莉は一人じゃないんだから。辛い時はちゃんと行って」

「・・・ありがとう、天」

手を握り返し、俺に身を寄せる鞠莉。

「あ、そうそう・・・千歌っち、今思いつきりパンツ見えてたわよ」

「ええっ!？」

「まあスカートの状態で、あんなことやったらねえ……」

「ビツクリしたわよ、もう……」

苦笑する曜に、溜め息をつく梨子。

千歌が恐る恐る俺の方を見た。

「も、もしかして……天くんも、見た……?」

「みかん愛が強いのは知ってたけど、まさかパンツまでみかん色とは……」

「いやああああああああつ!？」

千歌の悲鳴が、早朝の校庭に響き渡るのだった。

やるしかないからやるしかない。

「うう、恥ずかしい・・・」

「ドンマイ。そんなこともあるさ」

「誰のせいだと思ってるの!？」

「スカートであんなことをした千歌のせいだと思ってるけど?」

「うぐっ・・・」

言葉に詰まる千歌。

俺達は今、理事長室の前にいた。

その理由は・・・

「鞠莉、大丈夫かな・・・」

心配そうな表情の果南。

理事長室の中では、鞠莉が鞠莉のお父さんと電話で話をしている最中だった。

内容は当然、浦の星の統廃合についてである。

「・・・大丈夫だよ」

理事長室のドアを見つめる俺。

「千歌の言葉を聞いて、表情が引き締まっても。あの顔になった時の鞠莉は……  
本当に凄いなだから」

「フフツ……幼馴染の天さんが仰るなら、間違いないですわね」  
クスツと笑うダイヤさん。

一方、梨子は何故かムスツとしていた。

「……よく理解してるのね。鞠莉ちゃんのこと」

「まあ幼馴染だからね。ちなみに、梨子のこととも理解してるつもりだよ」

「えー、ホントにいい？」

「ホントホント。今日のパンツの色が黒つても、ちゃんと理解してるから」

「ちよ、何で分かるのよ!？」

「あのね梨子ちゃん、言うべきか迷ったんだけど……体育座りしてるせいで、さつき  
からパンツ丸見えだよ?」

「ええっ!？」

ルビイの指摘に、慌てて立ち上がる梨子。

気付くの遅いなあ……

「朝からご馳走様です」

「天くんの変態っ!スケベっ!」

「曜といい千歌といい梨子といい．．．二年生組って、露出狂の集まりなの？」

「「そんなわけあるかっ！」」

三人による一斉ツッコミ。

仲が良いなあ．．．

「お待たせ．．．ん？何かあったの？」

理事長室から出てきた鞠莉が、キョトンとしながらこちらを見つめる。

「何でもないよ。梨子が自爆しただけ」

「自爆？」

「そ、それよりっ！お父さんとの話し合いはどうだったの!？」

慌てて口を挟む梨子。

鞠莉は溜め息をつくくと、重い口を開いた。

「．．．100人」

「え．．．？」

「今年の終わりまでに、入学希望者を100人集めること．．．それが統廃合を取り止めにする、最低条件だって言われたわ」

「マジか．．．そうすると、学校説明会は？」

「開催して良いそうよ。パパが運営に掛け合ってくれるって」

「なるほど・・・チャンスをくれるってわけか」

心の中で、鞠莉のお父さんに深く感謝する。

どうやら俺達には、まだ希望が残されているようだ。

「でも今、入学希望者は10人しかないはず・・・」

「それを年末までに100人って・・・」

花丸と善子の表情が曇る。

確かに、相当難しい条件と言わざるをえない。

でも・・・

「でも・・・可能性は繋がった」

千歌が呟く。

「可能か不可能かなんて、今はどうでもいい。だって・・・やるしかないんだから！」

そう力強く言い切る千歌の表情は、やる気に満ち溢れていた。

「まあ、それもそうだね」

「ええ、やるしかありませんわ」

果南とダイヤさんも笑っている。

皆も笑みを浮かべる中、千歌が鞠莉に笑いかけた。

「鞠莉ちゃん、ありがと！」

「千歌っち……」

千歌は目の前の階段を駆け上がると、途中でこちらを振り向いた。

「可能性がある限り、信じて頑張ろう！学校説明会も、ラブライブも頑張つて……集めよう、100人！」

「0から1へ！」

「1から10へ！」

曜と梨子が声を上げる。

それを聞いた千歌は、笑みを浮かべると……

「10から……100！」

階段からジャンプし、スタツと着地する。

うん、まあカッコ良かったけど……

「……そんなにパンツを見せつきたいの？」

「ああつ!？」

慌ててスカートを押さえる千歌。

いや、今さら押さえても意味無いんだけど……

「ジャンプした時にスカートがフワツてなって、完全に見えたら……」

「階段を駆け上がった時も、下からパンツ丸見えだったよね……」

「どんだけ見せびらかしたら気が済むのよ……」

「ち、違うのっ！そんなつもりじゃなくてっ！」

花丸・ルビィ・善子が呆れている中、必死に言い訳している千歌。

やれやれ……

「フフツ、天は相変わらずエッチデース」

「いや、これは俺のせいじゃないから」

クスクス笑う鞠莉に、ツツコミを入れる俺。

「まあそれはさておき……お疲れ様。結構粘ったんじゃない？」

「当然でしょ？マリーの諦めの悪さは、天もよく知ってるじゃない」

「まあね。ホント悪質な女だと思うよ」

「ちよ、言い方!？」

「冗談だつて」

俺は笑うと、鞠莉の頭を撫でた。

「……頑張ってくれてありがとう、鞠莉」

「天……」

「ここからは、俺達も一緒に頑張らせてよ。ね？」

「……うん」

寄りかかってくる鞠莉。

そんな鞠莉の腰に手を回し、そつと抱き寄せる。

「浦の星は、絶対廃校になんかさせない・・・やるよ、鞠莉」

「ええ、勿論」

力強く頷く鞠莉なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・やっぱ無理」

「朝のやる気はどこへ行ったの!？」

机に突っ伏す千歌にツツコミを入れる曜。

放課後、俺達は部室に集まっていた。

「だってさあ・・・ラブライブの予備予選の日が、近すぎるんだよお・・・」

「千歌だけにね」

「そのダジャレ好きだね!？」

俺の眩きにツツコミを入れる千歌。

それはさておき、何故予備予選の日が近いと困るのかというところ……

「まあ確かに、短期間で二曲分の作詞はキツイよね」

苦笑する果南。

ラブライブの予備予選の日は来月の始めであり、その一週間前には学校説明会が開催されることになっている。

つまり学校説明会で披露する新曲と、予備予選で披露する新曲の二曲を作らないといけないのだ。

「同じ曲じゃダメずら?」

「ラブライブで披露する曲は、必ず未発表の曲であること……大会の規定で、そう定められているのですわ」

花丸の疑問に答えるダイヤさん。

厳しいルールだよなあ……

「いっそのこと、学校説明会のライブは過去の曲で良いんじゃない? ラブライブと違って、新曲である必要も無いんだし」

「それはダメ! 新曲じゃなきゃインパクトが無いもん!」

「そう思うならさっさと作詞しろや腐ったミカン」

「当たりが強くない!？」

シヨックを受ける千歌。

まあ確かに新曲じゃないと、インパクトや新鮮さには欠けるかもしれないけど・・・  
「とはいえ、やつぱり二曲作るの大変だと思うよ？ 作詞担当の千歌もそうだけど、作曲担当の梨子もしんどいだろうし・・・」

「アハハ、それは否定出来ないかな・・・」  
苦笑する梨子。

そんな様子を見ていた鞠莉の目が、怪しく光った。

「フッフッフ・・・マリーに Good idea がありマース!」

「はいはい、飴ちゃんあげるから大人しくしてようね」

「わーい・・・って何で子供扱い!？ マリーの方がお姉さんなんだけど!？」

「精神年齢三歳の子が何か言ってるんだけど」

「どれだけ低く見積もられてるのよ!？」

鞠莉は一通りツツコミを入れた後、コホンツと咳払いをした。

「千歌たち達に任せつきりなのは申し訳ないし、マリー達にも手伝わせてちょうだい」

「いや、手伝わせてって・・・鞠莉ちゃん、曲作れるの?」

「Yes! これでも二年前、作曲を担当してたのよ?」

「ちなみに、私は作詞担当ね」

「私は衣装担当でしたわ」

それぞれ手を挙げる果南とダイヤさん。

なるほど、つまり・・・

「二手に分かれて作業するってことね」

「その通りデース！」

頷く鞠莉。

「学校説明会用の曲作りは、千歌つちと梨子に任せるわ。衣装作りも曜にお願いするとして・・・残りのメンバーで、予備予選用の曲作りと衣装作りをやりましょう！」

「賛成！せっかくだし、どっちが良い曲を作れるか勝負しない？」

「それは面白そうですわね。俄然やる気が出てきましたわ」

ノリノリの三年生達。

まあ確かに、良い考えかもしれないな・・・

「マルも頑張るぞら！」

「フフツ、何か楽しそう！」

「クツクツクツ・・・墮天使の血が騒ぐわ・・・」

「マジで？じゃあ『墮天使の血ぜんぶ抜く大作戦』でもやってみる？」

「殺す気かつ！池の水と同じノリでやろうとしてんじやないわよ!？」

「いやほら、墮天使もある意味外来種だし」

「駆除する気満々じゃない!？」

「アハハ、それじゃあ決まり！」

パンツと手を叩く千歌。

「二手に分かれて、どっちが良い曲を作れるか競争だーっ！」

「「「「「「おーっ!」「「「「「」」

やる気満々の皆なのだった。

## 【黒澤ダイヤ】新たな年が始まった日に・・・

2021年、元旦・・・

「ゲホツ・・・ゴホツ・・・」

ベッドに身体を横たえ、激しく咳き込む俺。

新たな年が始まったその日に、どうやら風邪を引いてしまったらしい。

「ああ、しんどい・・・ずびっ・・・」

身体はダルいし、鼻水は止まらないし・・・

これは辛いなあ・・・

「絵里姉・・・亜里姉・・・」

東京にいる二人の姉の顔が思い浮かぶ。

A q o u r s の練習もある為、今年の年末年始は東京へ帰らず内浦に残ったのだ。

身体が弱っているせいかな、二人に会いたくてたまらない。

会いたくて会いたくて震える・・・って、震えてるのは寒気を感じてるせいだろうな。

一人でそんなことを考えていると・・・

『コホンツ・・・天さん、お電話ですわ!』

「ん?」

俺のスマホが振動し、聞き慣れた声が流れる。

あれ、この声って・・・

『コホンツ・・・天さん、お電話ですわ!』

「・・・ああ、電話か」

スマホを手取る俺。

着信音代わりに使う為に、ダイヤさんのボイスを録らせてもらったことをすっかり忘れていた。

ダイヤさんも最初は嫌がってたのに、いざ録音が始まったら拘っちゃって・・・  
10回は録り直したような気がするが、まあそれはさておき・・・

「ピッ・・・もしもし?」

『あつ、もしもし天さん? 明けましておめでとうございます』

「・・・あれ、こんなボイス録ったっけ?」

『録音の音声じゃありませんわよ!』

電話越しにダイヤさんのツッコミが聞こえる。

録音じゃないってことは・・・

「えっ、本物?」

『本物ですわよ!?!録音と聞き間違えないで下さいます!?!』

「ああ、ビックリした・・・A q u o u r sのメンバーから、そういう電話が自動的に来るサービスかと思いました」

『そんなサービスやってませんわよ!?!』

「ですよねえ・・・ああ、あけおめです。ことよろ」

『軽い!?!新年の挨拶くらいキッチンとなさい!』

「そしてハピバ」

『それも略されるのですか!?!』

ダイヤさんのツッコミ。

言わずもがな、本日1月1日はダイヤさんの誕生日である。

「アハハ、ダイヤさんは面白い・・・ゲホッ!ゴホッ!」

『えっ、天さん!?!大丈夫ですか!?!』

「ああ、すみません。栗きんとんが変なところに入っちゃって・・・ずびっ」

『ちよ、鼻水!?もしかして風邪を引いたのですか!?!』

「違います。お雑煮を嚙った音です」

『普通そんな音しませんわよ!?!やっぱり風邪ですわよねえ!?!』

「アハハ、そんなわけないでしょう。確かに咳は出るし鼻水は出るし、身体はダルいし寒気を感じますけど・・・風邪なんて引いてないんで大丈夫です」

『絶対引いてますわよねえ!?!何故頑なに認めないのですか!?!』

「そのセリフ、どこかの政治家さんに言っただけで下さい」

『誰のことを仰っているのですか!?!』

ダイヤさんは一通りツツコミを入れた後、溜め息をついた。

『ハア・・・今からお伺いしますから、大人しく寝ていて下さい』

「ちよ、大丈夫ですって!?!わざわざ来てもらわなくても・・・」

『ああ、破廉恥な本やDVDはしまっておいて下さいね』

「そういうことじゃなくて!?!風邪がうつるから来ないで下さい!!--」

『ようやく風邪だと認めましたわね・・・十分気を付けますから、心配ご無用ですわ』  
「心配しかないんですけど!?!そもそも今日は元旦ですし、黒澤家の用事で忙しいんじゃないんですか!?!」

『父と母とルビィに丸投げしますから、何の問題もありません』

「大問題でしょうが！そもそも、せっかくの誕生日なんですから・・・」

『ああもう、つべこべ言わないっ！行くと言ったら行きますっ！』

イラツとしたような大声と共に、勢いよく電話が切られる。

「・・・マジかあ」

呆然とする俺なのだった。

\*\*\*\*\*

一時間後・・・

「お邪魔しますわ」

ブーツを脱ぎ、俺の家にかかるダイヤさん。

まさか本当に来るとは・・・

「・・・風邪がうつつても知りませんよ」

「私は天さんと違って、貧弱ではありませんので。ご心配には及びませんわ」

「胸が貧弱な人が何言ってるんですか」

「喧嘩売ってます!?! これでもB80はありますわよ!?!」

「尚、同級生はB83とB87な模様」

「水ゴリラや成金変態娘と一緒にしないで下さい!」

「罵倒がストリート過ぎません?」

何だろ、今日のダイヤさんはご機嫌斜めな気がする・・・

「ダイヤさん、何か怒ってますん?」

「・・・別に」

「ダイヤさん・・・いや、ダイヤ様」

「様付けは止めて下さいます!?!」

「アハハ、ツツコミがキレツキレ・・・ゴホツ!」

「ああもう! いいから寝てなさい!」

ダイヤさんに手を掴まれ、ベッドまで連れて行かれる俺。

そのまま寝かされた俺は、ベッドの側に立つダイヤさんを見上げた。

「やれやれ、ダイヤさんは強引ですねえ」

「・・・こんな時まで茶化さないで下さい」

ダイヤさんはその場に座り込むと、俺の手をそつと握った。

「身体、相当辛いのでしょうか? 顔を見たら分かりますわ」

「・・・だから今、ダイヤさんに会いたくなかったんですよ」  
溜め息をつく俺。

「どんなに取り繕って誤魔化したところで、ダイヤさんには絶対に見抜かれますから。だから来てほしく無かったのに・・・」

「それも嘘、ですわね」

握る手にキュツと力を込めるダイヤさん。

「本当は、一人でいるのが寂しかったのでしょうか？電話越しに聞いた天さんの声、とっても心細そうでしたわよ？」

本心を見抜かれ、思わず黙り込んでしまう。

これだから察しの良い人は・・・

「・・・どうして頼ってくれないのですか」

俯くダイヤさん。

「寂しいなら、辛いなら・・・正直にそう言って欲しかった。『会いたい』と、『助けて欲しい』と・・・そう言って欲しかった」

「ダイヤさん・・・」

ひよつとして、ダイヤさんが怒ってたのは・・・

「俺がダイヤさんを頼らなかつたから、怒ってたんですか・・・？」

「……大切な人に頼ってもらえないなんて、悔しいに決まっているでしょう」  
俺を睨むダイヤさん。

そういうことだったのね……

「……家族と過ごすであろう元旦を、邪魔出来るわけないでしょう」  
苦笑する俺。

「それに元旦は、ダイヤさんにとって特別な日で……」

「その特別な日に、私は家を抜け出して貴方に会いに来たのですわ」  
俺の言葉に被せるダイヤさん。

「他でも誰でも無い……貴方の側にいたかったです」

「つ……」

ズルいなあ……

そんなこと言われたら、勘違いしちゃうじゃん……

俺が、ダイヤさんにとつての『特別』なんだって……

「……勘違い、ではありませんわよ」

俺の心を読んだのか、ダイヤさんが眩く。

恥ずかしいのか、頬が赤く染まっていた。

「私に……まで言わせておいて……何も仰って下さらないのですか？」

そのセリフは本当にズルいと思う。

そんなことを考えつつ、俺も覚悟を決め・・・

ダイヤさんの手を握り返した。

「俺の側に、いてくれますか？俺は貴女と、一緒にいたいんです。他の誰でも無い・・・

『特別』な貴女と」

「っ・・・喜んで」

照れたようにはにかむダイヤさんなのだった。

\*\*\*\*\*

《ダイヤ視点》

『天くんの具合はどう？』

「まだ辛そうではありませんけれど、少しは落ち着いたようです」

私は今、天さんの家のリビングでルビイと電話していました。

ルビイも天さんが心配だったようで、こうして私に電話をかけてきたのです。

「ごめんなさい、ルビイ。貴女に家の用事を押し付けてしまつて・・・」  
『気にしないで。ルビイの方から引き受けたんだから』

そう、ルビイは自分から引き受けてくれたのです。

『ルビイがやるから、お姉ちゃんは天くんの所に行つてあげて』と・・・

『お父さんとお母さんも、天くんのこと心配してたよ？家の用事なんてどうでもいいから、早く天くんのお見舞いに行きたいって』

「・・・黒澤家の人間にあるまじき発言ですわね」

頭を抱える私。

あの人達、完全に天さんを自分達の息子だと思つてますわね・・・

『フフツ・・・お姉ちゃんだつて、家のことそつちのけで天くんの所に行つたじゃん』

「そ、それは・・・！」

『お姉ちゃんつてば、天くんにゾツコンだもんね』

「なっ・・・!?!」

『唇の一つでも奪つて帰つて来るんだよ？じゃあね』

「ちよ、ルビイ!?!」

電話を切られ、呆然としてしまう私。

く、唇つて・・・

「うう、破廉恥ですわ・・・」

「何が破廉恥なんですか？」

「ぴぎやあつ!？」

背後から声をかけられ、飛び上がってしまいます。

慌てて振り向くと、キョトンとした顔をした天さんが立っていました。

「そ、天さん!?! 起き上がって平気なのですか!?!」

「ええ、身体が少し楽になったので。ダイヤさんが作ってくれた、愛情たっぷりのお粥を食べたおかげですね」

「あ、愛情たっぷりって・・・」

「ピツ・・・『他の誰でも無い・・・貴方の側にいたかったです』」

「ぴぎやあああああああああつ!?!」

あまりの恥ずかしさに、悲鳴を上げてしまう私。

い、いつの間に録音を!？」

「け、消して下さいっ!？」

「永久保存させていただきます」

「嫌あああああああつ!?!」

天さんからスマホを奪い取ろうと、手を伸ばす私。

天さんはそれを避けると、私の方へ一歩踏み込み……次の瞬間、私は天さんの腕の中にいました。

「っ……」

「……ありがとうございます。ダイヤさん」

優しく私を抱き締める天さん。

「会いに来てくれて、側にいたいと言ってくれて……本当に嬉しかったです」

「天さん……」

「ダイヤさんには、いつも助けてもらってばかりですね」  
頭を撫でられる私。

助けてもらってばかり、ですか……

「……それは私のセリフですわ」

「え……?」

首を傾げる天さんの頬に、そっと手を添える。

思い返してみれば、どれほどこの人に助けられたことでしょう。

スクールアイドルをやりたいという、ルビイと向き合うことが出来たのも・・・

果南さんと鞠莉さんを、仲直りさせることが出来たのも・・・

またもう一度、スクールアイドルが出来ているのも・・・

この人がいなかったら、どれも成しえなかったことです。

「・・・ありがとうございます、天さん」

「ダイヤさ・・・んっ!？」

顔を近付け、唇同士を触れ合わせます。

突然のことに、驚いて固まる天さん。

しばらくした後、私はゆっくりと天さんから離れました。

「・・・フフツ」

照れ笑いを浮かべる私。

「お慕い申しておりますわ、天さん・・・今年もよろしくお願い致します」  
私の言葉に、顔を真っ赤にしている天さん。

新たな年が始まったこの日・・・

私達の関係もまた、新たなものになろうとしているのです。

人の性格は十人十色である。

「……何でこうなつたんですか？」

「……色々あつたのですわ」

俺の眩きに、溜め息をつきながら答えるダイヤさん。

俺達の目の前には……

「「ふんっ！」」

お互いにそっぽを向く花丸・善子ペアと、果南・鞠莉ペアがいた。

二年生組に学校説明会用の新曲製作を任せ、残りのメンバーは予備予選用の新曲製作に取り組む為、黒澤家へとやって来ていた。

俺は一度家に帰り、参考になりそうな資料を持ってきたのだが……

黒澤家に到着した俺が見たのは、一年生ペアと三年生ペアが喧嘩している現場だった。

「そんな激しい曲調、マルには無理ずら！」

「もつと落ち着いた曲調にしなさいよ!?!」

「それじゃ今までと変わらないじゃない！」

「そうだよ！今までやってこなかったジャンルの曲をやることで、新しいA q o u r sを開拓できるかもしれないじゃん！」

「激しいのはアンタの動きだけで十分よ！このゴリラ！」

「ちよ、誰がゴリラよ!?このエセ墮天使！」

「エセじゃないもんっ！エセはこっちの成金お嬢様でしょうが！」

「W h a t!?マリーのどこがエセなのよ!?!」

「そうやって英語を混ぜるの止めるすら！そんなにアメリカの血が流れてることを強調したいすらか!?!」

「そんなつもりじゃないから！ただのクセだから！」

「そういう花丸ちゃんだつて、語尾に『すら』って付けるじゃん！」

「これはマルのアイデンティティすら！果南ちゃんの寒い語尾に比べたらマシすら！」

「寒くないもんっ！可愛い語尾だもんっ！」

ギャーギャー言い合う四人。

何か罵り合い始めたんだけど・・・

「ど、どうしよう天くん・・・！」

俺の腕にしがみつき、オロオロしているルビィ。

よし、とりあえず・・・

「〃雷鳴●卦〃！」

「〃〃〃はあっ!?!〃〃〃」

四人の頭に、全力でハリセンを叩き込む俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・で？」

「すみませんでした・・・」

正座している花丸・善子・鞠莉。

そんな中・・・

「な、何で私だけこんな目に・・・」

「何か言ったか水ゴリラ」

「何でもありません！本当にすみませんでした！」

床に両手両膝をついた状態の果南。

俺はそんな果南の背中の上に座っていた。

「とりあえず胃袋ブラックホール娘、今日一日のつぽパン食べるの禁止な」

「そ、そんな殺生な!？」

「ルビイ、鞆から没収しといて」

「ゴ、ゴメンね花丸ちゃん・・・」

「堪忍ずらあああああああああつ!？」

「次に厨二病女、今日一日『ヨハネ』と口にする度に百円の罰金な」

「嘘でしょ!？名乗っちゃいけないって言うの!？」

「ダイヤさん、貯金箱の用意を」

「善子さん、ご健闘をお祈りしておりますわ・・・」

「ヨハネよ・・・はっ!？」

「はい、罰金」

「嫌あああああああああつ!？」

「それからおっぱいお化け、今日一日英単語を口にする度におっぱい十秒揉むから」

「天さん!？さりげなくセクハラしようとしなくて下さい!？」

「そうよ天!言ってくれればいつでも揉ませてあげるのに!？」

「鞠莉さん!？」

「じゃあ納豆キムチを食べさせるに変更で」

「最悪じゃない!? マリーの嫌いなもの二つを組み合わせるなんて!」

「この美味しさが分からないとか、頭だけじゃなくて味覚もイカれてるね」

「何か今日もの凄く冷たくない!」

「そして水ゴリラ、今日一日俺のペットね」

「私だけ罰が重過ぎない!」

「ああ、奴隷の方が良かった?」

「良くないよ!? むしろ酷くなってるじゃん!」

「俺のことは『ご主人様』って呼んでね」

「呼ぶわけないでしょうが!」

「うらあつ!」

「あんつ!?! ちよ、どこ叩いてんの!?!」

「うわ、お尻をハリセンで叩いただけで喘ぐとか引くわ・・・」

「喘いでないから! ちよっと変な声出ちやっただけだから!」

「さて、果南が変態なのはさておき・・・」

「さておかないでくれる!?! 違うから!」

「おらあつ!」

「あんっ!？」

とりあえず果南を黙らせ、話を続ける。

「まあこの辺りで、ちよつと真面目な話をするよ……一年生組と三年生組つて、コミュニケーション不足だと思うんだよね」

「うっ……」

「確かに……」

呻く善子と果南。

同じグループで活動するようになって、約二ヶ月……

勿論会話はしているが、どこかよそよそしいところがあるのは否めない。

「しかもお互い、性格が正反対じゃん。それで自分達の好みを主張し始めたら、そりや意見が食い違つて衝突するだろうよ」

「せ、正論ずら……」

「返す言葉も無いデース……」

顔を顰める花丸と鞠莉。

だからこそ、もつと親交を深めるべきだと思うんだよな……

「これまでは二年生組が間にいたから、特に問題も無かったけど……これも良い機会だし、まずはお互いを理解するところから始めない？その上で話し合いが出来れば、お

互いに歩み寄って曲作りが出来るでしょ？」

「天さんの仰る通りですわ。私達はまず、お互いを知るところから始めましょう」

「ル、ルビイもそれが良いと思う！」

「ダイヤさんとルビイが賛成してくれる。

さて、そうなると・・・」

「まずはどこかへ出掛けるとしようか・・・どこへ行きたい？」

「図書館！」

「手芸用品店！」

「墮天使ショップ！」

「着物専門店！」

「ダイビング！」

「America！」

「ホントにバラバラだな・・・あと鞠莉、納豆キムチね」

「ああっ!？」

「顔面蒼白の鞠莉。

「ちよ、違うの！今のはつい・・・」

「真珠さん」

「こちらに」

どこからともなく真珠さんが現れる。

その手には、納豆キムチが入った器を持っていた。

「お母様!?!いつの間に!?!」

「黒澤家の女たるもの、気配を完璧に消す術くらい身に付けていますから」

「そんなくノ一みたいな術が本当に必要なのですか!?!」

「ああ、ちなみにミスディレクションも習得済みです」

「それ黒澤家っていうか、黒子家になってない!?!」

「あとはフアントムシユートに、イグナイトパスが使えるようになれば・・・」

「幻の六人目でも目指してるの!?!」

母親に対するツッコミが止まらない娘達。

そんな中、俺は真珠さんから器を受け取る。

「さて、お仕置きだべ〜」

「どこのドク●ベエ!?! た、助け・・・」

「水ゴリラ、押さええといて」

「はい、ご主人様」

「ちよ、果南!?! 『ご主人様』呼びはしないって・・・」

「うらあっ！」

「もぐおおおおおおおおおおおおっ!？」

鞠莉の悲鳴が、黒澤家の屋敷に響き渡るのだった。

## 【小泉花陽】 ありのまままで・・・

「とりやあつ!」

「ぐほつ!」

腹部への衝撃で目を覚ます俺。

視線を向けてみると・・・

「パパ、おはよう♪」

ニコニコ笑っている女の子が、俺のお腹の上に乗っていた。

「おはよう、陽菜。起こし方が乱暴じゃない?」

「らんぼーってなあに?」

「凜ちゃんみたいな人のことだよ」

「どういう意味だにや!」

扉が勢いよく開かれ、凜ちゃんがツツコミを入れながら入ってくる。

「ほら、扉さんが可哀想でしょ?」

「ホントだろ。凜ちゃん、メツ!」

「ゴ、ゴメン・・・じゃなくて! ひなちゃんに余計なことを教えないで欲しいにや!」

「教育は父親としての役目だもん。っていうか、何で凜ちゃんがいるの？」

「今日が何の日か忘れたのかにや!?!連絡してきたのは天くんだにや!」

「・・・あっ」

そういうえば、陽菜を一日預かってもらうんだった・・・

何故なら今日は・・・

「天くくん?起きた〜?」

ひよっこり顔を覗かせたのは・・・俺の愛する嫁だった。

「ママ〜♪」

「陽菜、パパを起こしてくれてありがとう♪」

駆け寄ってくる陽菜を、嬉しそうに抱っこする嫁。

「かよちゃん、母親オーラ全開にや」

「アハハ、確かに」

凜ちゃんの言葉に笑う俺。

そんな俺に、嫁が笑いかけてくれる。

「おはよう、天くん」

「おはよう、花陽」

同じように笑いかける俺。

大人気スクールアイドルグループ、μ's・・・  
そのメンバーの一人だった、小泉花陽は今・・・  
俺の嫁になっているのだった。

\*\*\*\*\*

「ん〜、美味しい〜♪」

幸せそうな表情を浮かべ、ご飯をパクパク食べている花陽。

俺達は今、ランチビュッフェに来ているのだった。

「幸せそうだねえ」

「だって美味しいんだもん！白米に合うおかずがいっぱい・・・ああ、幸せ〜♪」  
「相変わらず白米好きだね」

苦笑する俺。

「こんなに食べてるのに、このスタイルの良さ・・・」

栄養はどこへ行っているのやら・・・

「多分、天くんの大好きなところだろうね」

「人の思考を読むの止めてくれる？」

まあ確かに、μ s時代より一層大きくなってるとても・・・

「こんなに大きくなったのは、天くんのせいでもあるんだからね？」

「もつと育ててあげようか？」

「もうっ、私の旦那さんはエッチだなあ♪」

クスクス笑う花陽。

俺達が結婚したのは、今から三年前に遡る。

俺の高校卒業を機に交際を始めた俺達は、そのまま四年ほど交際を続けた。

結婚するのは、俺が社会人になってから・・・そんな風に考えていた時期が俺にもあつたが、俺が大学四年生の時に花陽の妊娠が発覚。

俺の大学卒業を機に、俺達は結婚することになったのだった。

「あの時は大変だったなあ・・・絵里姉にどんだけ怒られたことやら・・・」

「アハハ・・・二人揃って『何やってるの!？』って延々と説教されたよね・・・」

「そうそう・・・でも花陽の両親は、メチャメチャ喜んでくれたよね」

「二人とも天くんのこと息子だと思ってたし、早く結婚してほしかったみたい。私が妊娠したから、『これで結婚だ!』って喜んじゃって」

苦笑する花陽。

ホント、理解のある人達で良かった・・・

「それで言うと、亜里沙ちゃんも喜んでくれたよね」

「ちゃらんぽらんだからね」

「相変わらず酷い言い様だね!？」

「アハハ、でも助かったよ。亜里姉が仲裁に入ってくれたおかげで、絵里姉の怒りも落ち着いたわけだし」

今じゃ陽菜のことを溺愛してるもんな、絵里姉・・・

『二人目はいつ!』とか平気で聞いてくるし・・・

「今日も陽菜のことを預かる気満々だったんだけど、生憎仕事が忙しいみたいでさ。号泣してたよ」

「いや、号泣って・・・」

ちよつと引いている花陽。

『こうなったら仮病を使って・・・』とか不穏なことを言い始めたから、珍しく亜里姉にしばかれてたけど。

「だから凜ちゃんに預かってもらってたんだけどね。陽菜も凜ちゃんに凄く懐いてるし」

「フフツ、歳の離れた姉妹みたいだよね」

ちなみに陽菜の読みは、『ひな』ではなく『はるな』である。

凧ちゃんの『はなよ』を『かよ』と呼ぶスタイルは、陽菜が相手でも変わらないらしい。

「でも、凧ちゃんには申し訳ないな・・・せつかくのお休みなのに・・・」

「その分、報酬はちゃんと弾んでおいたから大丈夫だよ」

「報酬？ 一日五万円とか？」

「いや、ラーメン五杯」

「安くない!？」

「目を輝かせて喜んでたよ」

「それで良いの凧ちゃん!？」

花陽のツツコミ。

まあ凧ちゃんも陽菜のこと溺愛してるし、『報酬なんて要らないからひなちゃんと遊びたいにや!』って言うてくれたんだけどね。

「まあ陽菜のことは凧ちゃんに任せて、たまには二人でゆっくりしようよ。せつかくの誕生日なんだしさ」

そう、今日は花陽の誕生日なのだ。

せつかくだし二人でデートしようということ、今日は陽菜を凜ちゃんに預かってもらったのだ。

「それもそうだね．．．あつ、天くん動かないで」

「え？」

首を傾げる俺に、花陽はそつと手を伸ばし．．．俺の口元を指で拭った。

「フフツ、ご飯粒ついてたよ．．．ぱくっ」

「っ．．．」

取ったご飯粒を口にし、微笑む花陽。

思わずドギマギしてしまう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「あゝ、幸せだったな〜♪」

「食べ過ぎでしょ．．．うつぶ」

家への帰り道を歩く俺達。

買い物もそこそこに、ただひたすら食べ歩くグルメツアーみたいになってたもんな・・・

おかげでこっちはお腹パンパンだ。

「家に帰ったら、この間花丸ちゃんにもらったのっぽパン食べようつと♪」

「・・・胃袋ブラックホールシスターズめ」

花陽といい花丸といい、本当に食べ過ぎだと思う。

花陽もそうだけど、花丸も栄養がどんどん胸回りにいつてるし・・・

隣のルビィ、死んだ魚みたいな目してたっけ・・・

「・・・ルビィか」

「天くん? どうしたの?」

「ちよつと思いい出してさ・・・ルビィと花陽を重ねてたこと」

「ああ、そういえばそんなこと言ってたね」

人見知りで、自分に自信が無くて・・・

それでも勇気を出して、前に踏み出して・・・

そんな二人を、俺は重ねて見ていた。

「ルビィ自身も、花陽と自分を重ねてたんだろうね。だから花陽に心惹かれて、ファン

になって・・・スクールアイドルになったんだと思うよ」

「フフツ、それなら嬉しいな」  
笑みを零す花陽。

「少しでも力になれたのなら・・・あの時勇気を出して、スクールアイドルになって良かった。私の勇気は、無駄じゃなかったってことだもん」

「・・・無駄なわけではないでしょ」

そつと花陽の手を握る。

「花陽がいなきや、*ム* *s*は無かったよ。それは花陽だけじゃなくて・・・誰か一人でいなくなったら、*ム* *s*として成立しなかった」

「天くん・・・」

「だから花陽の勇気は、俺達にとつて凄く大きな意味があったんだよ。ルビイにしてもそう・・・ルビイがいなきや、A q o u r sは無かったんだから。そのルビイは花陽に影響を受けたんだから、花陽がいなきやA q o u r sは無かったかもね」

「アハハ、何か話が大きくなったね」

クスクス笑いつつ、俺の手を握り返す花陽。

「ありがとう、天くん・・・ホント、天くんには敵わないや」

「え・・・？」

「天くん！かよちくん！」

大きな声がする。

いつの間にか俺達は家のすぐ近くまで来ており、玄関先で凜ちゃんが大きく手を振っていた。

「お帰りにや〜!」

「パパー! ママー!」

陽菜が元気に駆け寄ってくる。

俺は陽菜を受け止めると、そのまま抱っこした。

「ただいま、陽菜。凜ちゃんの良い子にしてた?」

「天くん!? 何で凜が子供扱いされてるにや!?」

「凜ちゃん悪い子〜! おうちで暴れてた〜!」

「ひなちゃん!? 一緒に遊んでただけだよねえ!?」

「あと、花丸ちゃんがくれたのっぽパン食べちゃった〜!」

「ちよ、ひなちゃんそれは・・・」

「凜ちゃん・・・?」

花陽の目から光が消えた。

あつ、ヤバイ・・・

「ゴ、ゴメンなさああああいつ!?」

全速力で逃げて行く凜ちゃん。

相変わらず足速いな・・・

「今度会ったらタダじゃおかない・・・」

「落ち着きなよ」

怖いことを眩く花陽を、苦笑しながら宥める。

「花丸に頼んで、のっぽパンを大量に送ってもらおうから。『東京でご飯ご馳走する』つて言えば、喜んで送ってくれるでしょ」

「ホント!? やったあ!」

「パパー、おなかへったあ」

「はいはい、すぐ作るからね」

「天くん、私もお腹空いちやった」

「食いしん坊キヤラも大概にしてくんない!」

全力でツツコミを入れる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《花陽視点》

「陽菜を寝かしつけてきたよ」

「お疲れ様」

リビングに戻ってきた私を、天くんが労ってくれる。

凜ちゃんと一日中遊んで疲れたのか、今日の陽菜はすぐに寝てしまった。

そこは凜ちゃんに感謝しないといけないが・・・

「あの猫人間・・・のつぽパンの恨みは忘れない・・・」

「顔が怖いんだけど」

天くんが引いていた。

食べ物への恨みは恐ろしいんだからね、凜ちゃん・・・

「全く、花陽は本当に食べることが好きだよね」

「当然だよ！食べなきゃ生きていけないもん！」

「俺とどつちが好き？」

「天くん！」

「そこは俺を選んでくれるのね」

「アハハ、勿論」

私は天くんの側に寄ると、甘えるように天くんの胸に寄りかかった。そんな私を、包み込むように抱き締めてくれる天くん。

幸せだなあ・・・

「ホント・・・天くんと一緒にいると、凄く安心するよ」  
「そう?」

「うん、何と言うか・・・ありのままの自分でいられる」

「花陽・・・いや、アナ陽」

「『ありのまま』だけに!?!何も上手くないよ!?!」

「少しも寒くないわ」

「だろうね!暖房効いてるからねこの部屋!」

「雪の女王っぽい海未ちゃんでも呼んでみる?」

「確かに似合いそうだけでも!」

全く・・・

昔から天くんと一緒にいると、ツツコミが大変だなあ・・・

「・・・昔かあ」

「ん?」

首を傾げている天くん。

思い返してみれば、天くんは昔から私の味方でいてくれた。

『花陽ちゃんは可愛いんだから、もっと自信持つて良いんだよ』

自信の無い私を、いつも勇気付けてくれた・・・

『スクールアイドル、やりたいんでしょう？だったらやってみようよ』

尻込みしている私の背中を、そっと押してくれた。

『遠慮なんてしないで、甘えたい時は甘えて良いんだよ。花陽ちゃんだったら、俺がいくらでも甘やかしちゃうから』

遠慮して一歩下がろうとする私に、いつも手を差し伸べてくれた・・・

私の側には、いつだって天くんがいてくれたのだ。

「・・・ありがとう、天くん」

「花陽・・・？」

「私、天くんに出会えて本当に良かった・・・天くんに出会えて、結婚出来て・・・本当に幸せだよ」

心からの感謝を伝えると、天くんが照れ臭そうに笑った。

「・・・俺も花陽に出会えて良かったよ」

「天くん・・・」

「改めて、誕生日おめでとう。生まれてきてくれて、俺と出会ってくれて、結婚してくれて・・・本当にありがとう」

「っ・・・」

思わず涙ぐんでしまう。

私は今、心から幸せを感じていた。

「俺と花陽と陽菜と・・・これからも、三人で一緒に生きて行こうね」

「はいっ」

笑顔で頷く。

三人で一緒に、か・・・

「・・・三人で良いの？」

「え・・・？」

「そろそろかなあつて思ってるんだけど・・・二人目」

「・・・マジで？」

「この部屋暖かいし、『ありのまま』の姿になっても風邪引かないよね？」

「え、ちよ・・・」

「フフツ、いただきます♪」

「おわあっ!?!」

私の誕生日の夜は、  
まだまだ終わらないのだった。

## 【松浦果南】バカじゃないの

「ねえ天、二月十日って何の日か知ってる？」

「えっ、去年の果南の誕生日回と同じ質問から始まるの？」

「メタ発言止めてくれる!？」

鞠莉のツツコミ。

「俺達は今、生徒会室で仕事をしていた。」

「いや、勿論知ってるけど・・・誕生日でしょ？」

「Great! 流石は天ね！」

「市●由衣さんの」

「そっち!?! 似たようなボケを去年の誕生日回でも聞いたわよ!?!」

「貴女もメタ発言はお止めなさい」

呆れているダイヤさん。

まあ言わずもがな、二月十日は果南の誕生日である。

「天さん、当日のご予定は？」

「平日なんで、普通に学校に来ますけど」

「ここは小説の中ですわよ!? 夢の無い話をしてどうするのですか!？」

「遂に『小説の中』って言っちゃいましたね」

「ダイヤが一番メタ発言してマース」

「休日に変えてしまいなさい! 現実が平日でも、そんなの関係ありませんわ!」

「そんなの関係ねえ!」

「はい、オツパツピ〜♪」

「ネタが古いですわよ!？」

ノリノリで踊る俺と鞠莉に、ツツコミを入れるダイヤさん。

まあふざけるのはこれぐらいにして・・・

「果南に誘われて、当日の放課後は一緒に出掛けることになってるんですよ」

「あら、もう決まっていたのですか?」

「ええ、とりあえずホテルに行く予定です」

「なっ・・・は、破廉恥ですわよ!？」

「いや、ホテルオハラの日イナービュツフエを食べに行くだけなんですけど」

「破廉恥なのはダイヤの思考回路デース」

「ハメラれましたわあああああああああつ!？」

ニヤニヤしている俺と鞠莉を前に、真っ赤な顔を両手で覆うダイヤさんなのだった。

\*\*\*\*\*

「つていうことがあつたんだよね」

「二人して何やってんの・・・」

呆れている果南。

誕生日当日、俺達はホテルオハラでビュッフェを楽しんでいた。

「ダイヤは純情なんだから、あんまりからかったら可哀想でしょ」

「3／9の純情な出来心だったんだよ」

「SIAM SH●DEの名曲っぽく言われても困るんだけど。つていうか約分しなよ」

「何だかんだツツコミを入れてくれるところホント好き」

「バカじゃないの」

ぶつきらばうに言いつつ、ちよつと頬が赤くなる果南。

可愛いヤツめ。

「つていうか、改めて思ったんだけど……果南のそういう格好、何か新鮮かも」  
果南の姿に目をやる俺。

制服や衣装でスカートは穿くものの、果南の私服は基本的にパンツスタイルが多い。そんな果南が今日は、ネイビーブルーのワンピースを着用しているのだ。

しかも髪型は、ポニーテールではなくサイドテール……  
いつもとはちよつと違う果南の姿がそこにはあつた。

「いや、私はいつも通りの服装で来るつもりだったんだけど……鞠莉が呼んだ小原家のスタイリストさん達の手によって、こういう格好になつちやつて……」

「学校が終わつた後、小原家のへりで連行されてたのはそういうことか……」  
流星は我が幼馴染、グツジヨブ。

「うう、やつぱり落ち着かないなあ……似合つてないでしょ?」

「バカじゃないの」

「さっきの私のセリフそのまま言われた!?!」

「メチャクチャ似合つてるわ。何ならドキドキし過ぎてこっちの方が落ち着かないわ」

「……よくそういうセリフをサラツと言えるよね」

「だって本心だもん。俺が嘘をつけない性格だって、果南ならよく知ってるでしょ?」

「・・・バカじゃないの」

さつきより顔が赤い果南。

つていうか・・・

「果南？」

「何？」

「いや、どんどん顔が赤くなってる気がするんだけど・・・大丈夫？」

「大丈夫らろ〜」

「いや滑舌う！」

アカン！この子大丈夫じゃない！

「ちよ、果南!?もしかしてお酒呑んでる!?!」

「未成年はお酒呑めらいっれ〜」

笑っている果南の手からグラスをひったくり、少し口をつけてみる。

うん、ノンアルのシャンパンだよね・・・

「アハハ、間接キス〜♪」

「何で酔ってんのこの子」

「果南は雰囲気で酔える子なのよ」

「いや、雰囲気って・・・えっ？」

第三者の声があったので振り向くと、鞠莉がニコニコしながら立っていた。

「チャオ、天♪楽しんでる？」

「何で鞠莉がここに・・・って、家だから当然か」

「Of course! 離れた席から二人の様子を眺めて楽しんでたわ!」

「今度から鞠莉だけ練習メニュー増やしとくわ」

「すみません勘弁して下さい死んでしまいます」

その場で土下座する鞠莉。

「この悪趣味成金お嬢様め・・・」

「むう・・・私を放置しないで!」

「おいアメリカかぶれ、許して欲しかったら何とかしろ」

「そういうと思って、予め策は用意しておいたわ!」

鞠莉はそう言うのと胸の谷間に手を突っ込み、一枚のカードを取り出した。

「天と果南の為に、このホテルの部屋を用意したの。ありがたく受け取りなさい」

「『どこにしまってるの?』っていうツッコミは、去年やったから今年はしないわ」

「だからメタ発言は止めなさいよ!」

鞠莉のツッコミはスルーした俺は、果南を背負って立ち上がった。

「わ〜い、おんぶ〜♪」

「はいはい、大人しくしててね．．．じゃ、ありがたく使わせてもらうわ」  
「ごゆっくり〜♪」

ニヤニヤしている鞠莉を放置して、部屋へと向かう俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「．．．どんな部屋用意してんの？」

呆れる俺。

二人で過ごすには広すぎる部屋に、クイーンサイズのベッドが一つ．．．

しかも照明がピンクで、無駄にムーディーな雰囲気．．．

ラブホかここは。

「とりあえず、果南を寝かせてっと．．．」

「ていつ」

「うおっ!?!」

仰向けに寝た果南が俺の肩を掴み、思いつきり抱き寄せてくる。

俺の顔は、果南の胸に埋まる形になってしまった。

「ちよ、果南!？」

「あんっ♡くすぐったいよお♡」

色気のある声を出す果南。

ああ、理性が吹っ飛びそう・・・

「ねえ、天・・・」

俺の耳元で囁く果南。

「天の好きにして、良いんだよ・・・?」

「っ・・・」

完全な殺し文句だった。

こんな据え膳、勿論・・・

「オコトワリシマス」

「ええっ!？」

断固拒否するよね、うん。

「何ですよ!?!何が不満なの!?!」

「さっきまでのほろ酔い口調はどこへ行ったのかなん?」

「ギクツ!？」

身体をビクツと震わせる果南。

やっぱり・・・

「酔ったフリをして、男をこんな部屋に連れ込むなんて・・・果南ちゃんは経験豊富なのかなん？」

「いや違うから！経験ゼロだから！」

「だろうね。そんな経験が少しでもあつたら、こんな心臓ドキドキしてるわけないし」  
果南の胸に埋まっていることもあり、きつきから果南の心音がよく聞こえている。

うるさいくらいバクバク言ってるんだよなあ・・・

「どうせ鞠莉の入れ知恵でしょ？事前に部屋を用意してたみたいだし、現れるタイミングもバツチリだったしね」

「・・・ご明察の通りです」

うなだれる果南。

「でも、何で酔ったフリをしているのが分かったの？」

「麻衣先生や翔子先生が酔い潰れた姿を何度も間近で見てきた俺が、酔ったフリを見抜けないとでも思った？」

「・・・苦労してるんだね、天」

ホントだね。もう介抱にも慣れたもんだよ。

「とりあえず、鞠莉には地獄を見てもらうとして・・・何でこんな計画に乗ったの？」

「うう、言わなきやダメ・・・？」

「黙秘権の行使は認められません」

「マジかあ・・・」

溜め息をつく果南。

「いや、その・・・私って、ちゃんと女として見られてるのかなあって・・・」

「張り倒すぞB83」

「バストサイズで呼ぶの止めてくれる!?っていうか何で知ってるの!?」

「翔子先生が酔っ払った勢いで暴露してたから」

「生徒のプライバシーはどこへ行ったの!?」

「ちなみにW58、H84であることも暴露済みだから」

「今度あの人しばいて良いかな!？」

「どうぞどうぞ、やっっちゃって下さい。」

「そもそも、何で女として見られてないって思ったのかなあ・・・」

「だ、だって！私のことゴリラって呼ぶじゃんっ！」

「もうテツパンネタだもん」

「『おっぱいが大きい』とか言う割に、一度も触ってこないじゃんっ！」

「同意無しで触ったらただの犯罪でしょ」

「『可愛い』とか『美少女』とか言う割に、全然口説いてこないじゃんっ！」

「それを言ったら、俺はμ、sもA q o u r sも全員口説かないといけなくなるんだけど」

つていうか、それで『女として見られてない』はおかしくない？

「ハア……何考えてんのマジで……」

「うう……だつてえ……」

涙目の果南。

どうやら果南にとつても、相当恥ずかしい告白だったらしい。

「……あのね、果南」

果南も本音をぶちまけてくれたことだし、俺も本音をぶちまけるかな……

「正直に言つて、俺は今かなりムラムラしてる」

「ムラっ……!?!」

一気に顔が真っ赤になる果南。

ダイヤさんに負けないくらい純情だなあ……

「そりやそうでしょ。スタイル抜群のお姉さんに抱き締められて、胸が思いつきり顔に押し付けられて、甘い喘ぎ声を聞かされて、『好きにして良いんだよ……?』な

んて聞かされてみなよ？欲望のままに襲いたくなるわ」

「じゃ、じゃあ何で・・・」

「・・・果南が大切だから」

「っ・・・」

息を呑む果南。

「・・・こういうことは、ちゃんとした関係になつてからしたい。今の関係のまま、欲望のままに襲いたくない。それで果南のことを傷つけたら、きつと後悔するだろうから。俺はこれからも果南と仲良くしたいし、果南のことを大切にしたいんだよ」

「・・・バカじゃないの」

ちよつと涙声の果南。

今日、何回同じセリフ聞いたっけ・・・

「『据え膳食わぬは男の恥』って言うじゃん」

「据え膳を考え無しに食う方が恥だと俺は思うけど」

「フフツ、何それ」

果南はクスクス笑うと、俺を抱き締める腕にキュツと力を込めた。

「・・・愛されてるなあ、私」

「・・・当然でしょ」

「あ、照れてる！可愛い〜♪」

「うるさいなあ！」

「怒ってるけど顔真っ赤〜♪」

やたらと楽しそうな果南なのだった。

\*\*\*\*\*

《果南視点》

「天、機嫌直してよ」

「ふんっ」

頭から布団を被り、いじけている天。

どうやらからかい過ぎたようだ。

「もう果南なんか知らない。内浦の海に沈んでしまえ」

「何気に怖いこと言わないでよ!?!」

「とりあえず、あの成金女は確実に沈める」

「止めたげてよお!」

天の目がマジだった。

ゴメン鞠莉、覚悟しといた方が良いかもしれない……

「どいつもこいつも……人を何だと思ってるんだ……」

ブツブツ恨み言を呟く天。

完全に機嫌を損ねちゃったな……

「アハハ……ゴメンって」

背後から天を優しく抱き締める。

「でも……嬉しかった。私のこと、大切に思ってくれて」

「……大切じゃないわけじゃないでしょ」

ぶつきらぼうに言う天。

「言わなくても分かっていると思ってたのに……」

『言葉にしなくても分かるだなんて、そんなのはただの甘えだ』って言ってたのは、どの誰だったかなん?」

「うぐっ……」

言葉に詰まる天。

やれやれ……

「・・・まあ、分かってたけどさ。天が私を大切にしてくれてることは

「じゃあ何で鞠莉の計画に乗ったのさ・・・」

「大切に思われてることと、女として見られてることは別問題じゃん」

「それで俺に襲われたらどうするつもりだったんだよ・・・」

「そのまま流れに身を任せるつもりだったよ？」

「嘘でしょ!?それで良いの!？」

「初めての相手が天なら良いかなって」

「軽くない!?そういうのは好きな人に捧げるものじゃないの!？」

「アハハ、天はお堅いねえ」

天を抱き締める腕に、キュツと力を込める。

「・・・私だって、軽い気持ちでこんなことしたわけじゃないんだよ？」

「・・・どういう意味?」

「いや、だから・・・」

ああもう、言葉にするの恥ずかしいのにつ!

「今日、初めてを捧げても良いかなって・・・その・・・私の好きな人に・・・」

「っ・・・」

天の顔が赤く染まる。

まあそういう私の顔も、きつと真っ赤になつてゐるだらうけど。

「もう・・・言わせないでよ、バカ・・・」

天の背中におでこをくつつける。

うう、恥ずかしい・・・

「・・・実は俺、愛されてたのかなん？」

「・・・茶化さないでよ」

私にここまで言わせたのだ。

天にはちゃんと答えてもらわないと・・・

「・・・返事は？」

「捧げられたいです」

「そういう答え方!？」

「あつ、俺も初めてなんだつた・・・捧げたいし捧げられたいです」

「そういうことじゃないよ!？」

「冗談だよ」

天は一度私から離れ、こちらへ向き直ると・・・

そのまま私を抱き締めてきた。

「・・・好きだよ、果南」

「っ……」

「これからもずっと……俺の側にいてくれる？」

「……当たり前じゃん」

笑みが零れる私。

「だって私……天が大好きだもん」

私の返事に、笑顔を見せる天。

やがてどちらからともなく顔が近付き……その距離がゼロになる。

私が18歳の誕生日は、一生忘れられない日になったのだった。

ちなみに翌日、鞠莉は天の手によって本当に地獄を見せられるハメになるのだが……

それはまた別の話である。

一人として同じ人はいない。

↳ 図書館の場合

「天国ずら〜！」

たくさんの本に囲まれて、幸せそうな花丸。

とりあえず行きたい場所へ行ってみようということ、俺達はまず図書館を訪れてい

た。

「花丸ちゃん、オススメの本ってある？」

「ルビイちゃんには、この本がオススメずら〜！」

「花丸さん、私にも紹介して下さいな」

「ダイヤさんには、この本をオススメしたいずら〜！」

ルビイとダイヤさんに、オススメの本を紹介する花丸。

そんな中で善子は、キョロキョロと何かを探してた。

「う〜ん・・・墮天使的な本とかないのかしら・・・」

「善子、ここにあるよ」

「ホントに？タイトルは？」

「ハイス●ールD×D」

「いや確かに墮天使出てくるけども！主人公は悪魔だから！」

「イツセーと小猫ちゃんが結婚するなんて、あの頃は思わなかったなあ」

「それは中の人の話でしょうが！」

流石は善子、話が分かるようだ。

それに比べて・・・

「スヤア・・・」

読書していたはずなのに、いつの間にか机に突っ伏して寝ている果南。

コイツ・・・

「やっぱり、ゴリラに活字は難しかったか・・・」

「本人に聞かれたらしぼかれるから止めなさい」

「しかも『スヤア・・・』って、どこの彼方ちゃんだよ」

「いや、ニジガクメンバーの名前でツツコミ入れられても・・・」

「よし、今のうちに竹筒を啜えさせよう」

「まさかの中の人繋がり!?!どこの禰豆子よ!?!」

善子のツツコミが止まらない。

一方・・・

「うう．．．匂いが．．．口の中が．．．」  
納豆キムチの余韻に悶えている鞠莉なのだった。

\*\*\*\*\*

く手芸用品店の場合く

「わあ．．．!」

目を輝かせているルビィ。

次はルビィのリクエストで、手芸用品店を訪れていた。

「見て見てお姉ちゃん!生地の種類がたくさんある!」

「本当ですわね．．．これは迷ってしまいますわ．．．」

真剣な眼差しで吟味している黒澤姉妹。

そんな二人の様子を見ていたら、つい昔のことを思い出してしまった。

「．．．懐かしいなあ」

「天?」

「どうしたずら?」

不思議そうに首を傾げる果南と花丸。

「いや・・・俺も昔ことりちゃんと一緒に、あんな風に色々見て回ってたなあつて」

μ sの衣装担当だったことりちゃんは、休日になるとよく手芸用品店を訪れていた。

俺もよく同行させてもらって、二人で次の衣装について話し合ってたっけ・・・

「・・・今度東京に行ったら、久しぶりにことりちゃんを誘ってみようかな」

「フフツ、良いんじゃない?」

「きつと喜んでくれるわよ」

微笑む果南と善子。

喜んで付き合ってくれると良いなあ・・・ん?

「何かラインきた・・・あれ、ことりちゃんからだ」

「おお、噂をすれば・・・何だつて?」

「ええつと、なになに・・・『天くんからのデートのお誘い、ことりはいつでも待つてるからね!』だつて」

「嘘でしょ!?!何で分かったの!?!」

「ことりちゃんっておっとりしてるけど、勘はメチャクチャ鋭いんだよね」

「勘っていうレベルじゃないぞら!？」

「スマホに盗聴器とか仕掛けられてないわよねえ!？」

震えている果南、花丸、善子。

一方・・・

「ゴクゴク・・・プハアッ! コーラで全てを打ち消してやりマース!」  
全力でコーラを飲む鞠莉なのだつた。

\*\*\*\*\*

く墮天使シヨップの場合く

「フフツ・・・フフツ・・・フフフフツ!」

「善子が壊れたんだけど」

呆れる俺。

墮天使シヨップとか初めて来たわ・・・

「何ですの、この怪しげな雰囲気のお店は・・・」

「ちよつと怖いずら．．．」

若干引いているダイヤさんと花丸。

そんな中、ルビイがある物を発見する。

「見て見て果南ちゃん、鞭があるよ」

「鞭!?!」

よく見ると、壁際に長めの鞭が置いてあつた。

墮天使つて鞭とか使うんだっけ．．．

「な、何で鞭なんてあるの．．．?」

「ルビイ、ちよつと欲しいかも」

「嘘でしょ!?!何に使うの!?!」

「果南ちゃんのお尻を叩いてあげたいなって」

「何で!?!」

「だつてさつき天くんに、ハリセンでお尻叩かれて鳴いてたから」

「天あああああつ!ルビイちゃんが汚れちゃったでしょうがあああああつ!」

「うゆ?」

果南の絶叫に対して、首を傾げるルビイ。

「どうしたの果南ちゃん?またお馬さんごっこやりたくなつちやつた?」

「・・・え？」

「ハリセンより鞭を使う方が、本物のお馬さんっぽく鳴けそうだもんね！今度はルビイを背中に乗せてほしいな！」

なるほど・・・

ルビイはさつきのやりとりを、お馬さんごっこだと思つてたのね・・・

「・・・汚れてるの、果南の方じゃん」

「うわああああああああんっ！」

耳まで赤くなつた顔を両手で覆い、その場に崩れ落ちる果南。

一方・・・

「うっぶ・・・飲み過ぎたわ・・・」

コーラを飲み過ぎて、苦しそうに呻く鞠莉なのだった。

\*\*\*\*\*

く着物専門店の場合く

「やはり着物は良いですわね」

赤い着物を身に纏ったダイヤさんが、嬉しそうに呟く。

試着をさせてもらえるということで、各々気に入った着物を試着させてもらっていた。

「やっぱりダイヤさんは着物が似合いますね。凄く綺麗です」

「フフツ、ありがとうございます」

少し照れ臭そうなダイヤさん。

そんな中、他の皆はというと・・・

「な、何か落ち着かない・・・」

「うう、動きにくいすら・・・」

「この着物、海桜石でも仕込まれてるの・・・？」

「悪魔の実の能力者か」

善子にツツコミを入れる俺。

女子力の低いヤツらめ・・・

「アハハ・・・まあ着慣れてないとそうなるよね」

苦笑するルビィ。

そういうルビィは着慣れているだけあって、特にそわそわしたりもせず普通にしてい

た。

流石は名家・黒澤家の娘である。

「名家の娘つていえば、海未ちゃんもよく着物を着てたっけなあ・・・」

「そういえば海未先生の家は、日本舞踊の家元だったよね？」

「そうそう、だから稽古の時はいつも着物を着ててさ。その佇まいが凛としてて、凄く綺麗だったんだよね」

普段とは違う海未ちゃんの姿に、ちよつとドキドキしたっけ・・・

「今度久々に、着物姿を見せてもらおうかなあ・・・」

「フフツ・・・天くんが相手なら、海未先生は喜んで見せてくれるだろうね」

ルビィとそんな会話をしていると、俺のスマホが鳴った。

あれ、またラインだ・・・

「おつ、海未ちゃんからだ・・・『家にある着物を全て用意して待ってます』だって」

「だから何で分かるの!?!」

「怖いぞら! おかしいぞら!」

「やつぱり盗聴器が仕掛けられてるんじゃないの!?!」

涙目で震えている果南、花丸、善子。

一方・・・

「くっ……あれだけコーラを飲んだのに、まだ打ち消せないっていうの……!?!」  
無駄に険しい表情で口を押さえる鞠莉なのだった。

\*\*\*\*\*

「ダイビングショップの場合」

「ダイビング最高おおおおおとおおとおおっ!」

「ダイビングホリックが暴走してるんですけど」

「完全に人が変わってますわね……」

海から顔を出して叫ぶ果南を見て、小型船の上で呆れる俺とダイヤさん。

まあここまでインドア系だったし、アウトドア派の果南としては退屈だったのかもしれないな……

「すみません西華さん、付き合ってもらっちゃって」

「構わないさ。ちようどお客さんもいなかったからね」

笑っている西華さん。

果南さんがダイビングする気満々だったので、西華さんが船の操縦を買って出てくれたのだ。

「それにしても……その子達は大丈夫なのかい？」

西華さんの視線の先には……

「う、うゆう……」

「グラグラ揺れてるぞらあ……」

「気持ち悪い……うぶっ……」

甲板の隅でグロッキー状態になっている、一年生三人組がいた。

「とりあえずコーラを飲ませたんで、大丈夫だと思えます」

「そのコーラに対する信頼はどこから来てますの……?」

「彼方ちゃんからです」

「今日はやたらとニジガクメンバーの名前を出しますわね!」

「あれ、ダイヤさん……もしかして嫉妬してます?」

「何故そのような結論に至りましたの!?!」

「ダイヤ、アンタも果南のライバルなんだね……」

「勝手にライバル認定しないで下さいな!?!」

「ふう、楽しかったあ……ん? 何の話してんの?」

「うるさいですわよ水ゴリラ！さっさと海に帰りなさい！」

「酷い!?!」

シヨックを受ける果南。

一方・・・

「・・・海水を飲んだら消えるかしら」

遂に血迷い始めた鞠莉なのだった。

\*\*\*\*\*

「さあ、次はA m e r i c aへ行きまシヨー！」

「却下」

「むぐうっ!?!」

再び鞠莉の口に納豆キムチをぶち込む俺。

流石に海外は無理である。

「っていうか、それぞれの行きたい場所に行ってみて思ったけど・・・私達、やっぱり

バラバラだよね」

「フツ・・・ヨハネは誰とも混ざらない、孤高の存在なの・・・」

「善子さん、罰金百円ですわ」

「だからヨハネ・・・ハッ!？」

「もう百円追加ですわね」

「嫌あああああああつ!？」

「どんどん善子の懐が寂しくなっていく。

哀れだなあ・・・」

「でも天くんは、どこへ行っても楽しんでたずらね」

「そう?。」

花丸とオススメの本を紹介し合ったり・・・

ルビイと新曲の衣装で使う生地について話し合ったり・・・

善子とタロットカードで盛り上がったり・・・

ダイヤさんの着物の着付けを手伝わせてもらったり・・・

果南とダイビングを楽しんだり・・・

あつ、普通に楽しんでたわ。

「本は絵里姉に勧められてよく読んでたし、生地とかはことりちゃんの影響で・・・タ

ロットカードは希ちやんが詳しく教えてもらってたし、着物の着付けは海未ちゃんから教わったことがあって・・・ダイビングは果南のお店でアルバイトを始めてから、暇な時に連れてってもらったりしてたから」

「私、タロットカードで人と盛り上がったの初めてなんだけど・・・」

「普通に着付けの手順を理解されていて、驚きましたわ・・・」

「そんなに特別なことでもないと思うけど」

「アハハ・・・流石は天くんだよね」

苦笑するルビィ。

「じゃあ、次は天くんの行きたい場所に行こっか。どこへ行きたい？」

「んー、そうだなあ・・・」

俺は少し考えた後、ある場所を思いつくのだった。

心を温めてくれるのは仲間である。

「・・・ふう」

お湯に浸かり、温まっている俺。

行きたい場所として温泉を希望した俺は、皆と一緒にホテルオハラへとやって来た。  
た。

それにしても、温泉まであるのかこのホテル・・・

「贅沢なホテルだなあ・・・」

「ウチのホテルだもの。当然じゃない」

「だよねえ・・・じゃなくて」

ごく自然に会話をしてしまったが、この状況は全く自然ではなかった。

「・・・何で鞠莉が男湯にいるの？」

「来ちゃった♡」

「ハウス」

「ここが私の家なんだけど!？」

鞠莉のツッコミ。

ああ、確かに・・・

「つていうか、納豆キムチの匂いがするんだけど」

「それは天のせいでしょうが！」

「もう一度ぶち込んであげようか？」

「許して下さい」

お湯から上がって土下座する鞠莉。

ちゃんと身体にバスタオルを巻いてあるので、問題は無い・・・

いや、そもそも男湯にいるのが問題なんだけど。

「へえ、こっちはこうなってるんだねえ」

「未来ずらく！」

「いや、未来ではないでしょ」

「ほらお姉ちゃん、早く早く」

「ル、ルビィ!? 引っ張るのはお止めなさい！」

ぞろぞろと入ってくる皆。

「いやいやいや!?!」

「何で皆来てんの!?!」

「いやほら、天一人じゃ寂しいだろうなって」

「いやマズいでしょ!?!ここ男湯だよ!?!」

「大丈夫よ。今の時間だけ貸切にしてもらったから」

「こんなところで権力使わないでくれる!?!」

ホテルオハラの方皆さん、迷惑かけてすみません・・・

「つていうか、一番反対しそうなダイヤさんまで何してるんですか・・・」

「や、やはり全員で楽しむべきではないかと思ひまして・・・まあ、完全な裸の付き合い  
いとはいきませんけれど」

少し恥ずかしそうなダイヤさん。

全員バスタオルを着用しているとはいえ、やることが大胆すぎないか・・・?

「タオルをお湯につけるのはマナー違反だけど・・・まあ、今日はちよつと許してもら  
うとしようか」

「良いお湯ずらく♪」

「クツクツクツ・・・地獄の釜に比べたら生温いわ!」

「ああ、極楽う・・・」

「ルビィ、年寄り臭いですわよ」

次々とお湯に入ってくる皆。

まあ乳白色の温泉なので、入ってしまったえばタオルを巻いていようがいまいが見えない

んだけでも。

「フフツ・・・どんな気分？」

俺の腕に抱きついてくる鞠莉。

バスタオルしか身につけていない為、ほぼダイレクトに胸の柔らかい感触が伝わってくる。

「こんな可愛い女の子達と一緒に混浴なんて・・・天は幸せ者デース♪」

「いや、まあ確かに幸せなんだけど・・・ある意味生殺しだよね」

「あら、じゃあマリーはバスタオル外しましょうか？マリーの身体、好きなだけ弄んどちようだい♡」

「いただきます」

「ブツブツ！ですわ！」

俺と鞠莉の間に割って入ってくるダイヤさん。

チツ・・・

「アハハ、相変わらず天は正直だねえ」

いつの間にか隣に来ていた果南が、面白そうにクスクス笑っている。

「でもまあ・・・寂しそうにしてるより、そっちの方が天らしくて良いよ」

「え、俺いつ寂しそうにしてた？」

「最初からずら」

苦笑する花丸。

「楽しんでる時、ふと寂しそうな顔を見せる瞬間があつたずら」

「まあさっきの話聞いて、合点がいったけどね」

溜め息をつく善子。

「アンタ、*μ*、*s*のメンバーのこと思い出してたでしょ」

「うっ……」

そういえば、ちよいちよい思い出してたな……

ことりちゃんや海未ちゃんもそうだけど、希ちゃんとか絵里姉とか……

「……ゴメン」

「謝ることなんてないよ。それだけ*μ*、*s*が、天くんにとって大きな存在だつてこと

だもん。それはルビィ達だつて分かってるから」

首を横に振るルビィ。

「だから天くんが寂しさを感じないように、皆で一緒にいようつてことになったの」

「それでわざわざ来てくれたの……?」

「そういうことですわ」

ダイヤさんが俺の顔を覗き込む。

「恥ずかしい思いをしてまで、こうして天さんのお側に来たのですから。ちゃんと私達を見て下さらないと・・・ブッブー、ですわよ?」

「っ・・・」

その優しい微笑みに、思わずドキッとしてしまう。

改めて思うけど、本当に美人だよなダイヤさん・・・

「ちよつとダイヤ!? マリーの天を取らないでちょうだい!」

「あら、私の天さんでもありますわよ? 同じ生徒会の仲間なのですから」

「それなら、私の天でもあるよね。ウチのお店のアルバイトなんだからさ」  
笑いながら背後から抱きついてくる果南。

ちよ、胸の感触がっ!?

背中でもムニユって潰れる感触がっ!?

あと何かコリッとした感触がっ!?

「それを言ったら、天はヨハネのリトルデーモンなんだからっ!」

「善子ちゃん、罰金百円だね」

「だからヨハネ・・・ってまたやっちゃったあああああっ!?!」

「学習能力ゼロずら」

呆れている花丸。

「まあそれはともかく、天くんはマル達の天くんずら！同じ一年生組の仲間ずら！」

「三年生組の皆には負けないよ！」

「それなら天を賭けた勝負、デース！」

「バトルロワイヤルですわ！」

「面白そうじゃん！受けて立つよ！」

「堕天使の力、思い知るが良いっ！」

何故かその場で水掛け合戦……もといお湯掛け合戦が始まる。  
楽しそうだなあ……

「……懐かしいなあ」

『天くんは渡さないよっ！』

『いぎ、尋常に勝負です！』

『負けるもんですかっ！』

『フフツ、面白そうやん♪』

『だ、誰か助けてえ！』

『いっくにゃー！』

『ちよつと、お風呂場では静かにしへぶつ!?!』

『あつ、にこちゃんがK・O・された!?!』

『ハラショー! ウチの可愛い弟は誰にも渡さないわ!』

「・・・ハハッ」

あんな騒がしい日々を、またこうして過ごせるとは思わなかったなあ・・・

「・・・ありがとう、皆」

そんな感謝の言葉は、騒がしい声達に掻き消されてしまったけれど。

その気持ちは、ちゃんと皆に届いたような気がした。

「これでも食らうがいい! 堕天使奥g・・・キヤアッ!?!」

善子が足を滑らせる。

慌ててどこかに掴まろうとした手が、隣にいたダイヤさんが身に付けていたバスタオルを掴み・・・思いつき剥ぎ取ってしまう。

あつ・・・

「・・・えっ?」

俺の目の前に、全裸のダイヤさんが立っていた。

全てが丸見えの状態である。

「えーつと．．．ご馳走様です」

「びっ．．．びぎやあああああああああつ!？」

ダイヤさんの絶叫が、大浴場に響き渡るのだった。

皆違つて皆良い。

「うう……もうお嫁に行けませんわ……」

耳まで真つ赤にしたダイヤさんが、枕に顔を埋めて羞恥心に悶えている。

お風呂から上がった俺達は、鞠莉の部屋へとやって来ていた。

「ご、ごめんなさい……」

流石に申し訳なく思っているのか、気まずそうに謝る善子。

まさか善子の不幸体質の影響が、ダイヤさんにいつてしまうとは……

「元氣出しなさいよ、ダイヤ。裸を見られたぐらいで何を落ち込んでるの?」

「『ぐらい』とは何ですか?! 乙女が裸を見られるなんて一大事ですわよ!」

「私は天にだつたら、裸ぐらい平気で見せられるけど?」

「マジで? じゃあ見せてもらつて良い?」

「OK♡すぐに服を脱ぐわね♡」

「フアントムシユートおおおおおっ!」

「むごおっ!」

鞠莉の口に納豆キムチをぶち込むダイヤさん。

いや、フアントムシユートでも何でもない気がするんだけど・・・

「えーつと・・・ダイヤさん、何かすみません・・・」

「天さんは完全に不可抗力でしたので、何も悪くありませんわ・・・こちらこそ、見苦しいものをお見せして申し訳ありません・・・」

「見苦しいですつて!?!張り倒しますよ!?!」

「天さん!?!何故怒つてらっしやるのですか!?!」

「雪のように白い肌、慎ましい胸、美しくくびれた腰、しなやかな太もも、柔らかそうなお尻・・・ダイヤさんの裸のどこが見苦しいつて言うんですかつ!?!」

「びぎやああああああああつ!?!」

「あれ?」

何故かのたうち回っているダイヤさん。

おかしいな、フオローしたつもりなのに・・・

「あーあ、天が完全にトドメをさしちゃった・・・」

「もうダイヤさんのHPは0すら・・・」

「無自覚つて、時には凶器になるんだね・・・」

呆れている果南、花丸、ルビィ。

解せぬ・・・

「それより鞠莉、本当に泊めてもらって良いの？」

「ええ、構わないわよ・・・」

納豆キムチにげんなりしながら、鞠莉が頷いてくれる。

俺達が温泉に入っている間に、強い雨が降り始めてきましたのだ。

更に風も吹き始めてしまったことで、淡島から出る船は全てストップしてしまつたらしい。

帰れなくなつてしまつた俺達は、鞠莉の厚意でホテルオハラに泊めてもらうことになつたのだつた。

「とはいえ、他の部屋が空いてないみたいで・・・マリーの部屋に泊まつてもらふことになるんだけど、大丈夫？」

「最上階のスイートルームに泊まれるのに、『大丈夫じゃない』なんて言う人はいないと思うけど」

むしろここを自分の部屋にしてるとか、どんだけリッチな生活してんのこの子・・・

ドオオオオオンッ！

「きやあつ!?!」

「ずらあつ!?!」

大きな雷の音に悲鳴を上げ、抱き合う果南と花丸。

結構大きな雷だったな・・・

「二人とも、雷ダメなの?」

「う、うん・・・ちよつと怖くて・・・」

「おへそ取られちやうずら・・・」

「可愛いなオイ」

ちよつとほっこりしていると、フツと部屋の電気が消えた。

「ちよ、停電!」

「真つ暗ずら!」

「びぎいつ!?!」

「おつと・・・落ち着いて、ルビイ」

「クツクツクツ・・・やはりヨハネには闇が似合うわ・・・」

「そう言いつつ、私に抱きついているではありませんか・・・あと、罰金百円ですわ」

「しまったあああああつ!?!」

善子の悲鳴は無視するとして・・・

「鞠莉、どうにか出来る？」

「ちよつと待つててちようだい」

鞠莉はそう言うと言とスマホを取り出し、どこかへ電話をかけ始めた。

「うん・・・うん・・・了解。よろしくね」

電話を切る鞠莉。

「ホテルの従業員が、すぐに予備電源で電力を復旧させてくれるわ。それまで待機ね」

「了解」

返事をした俺はスマホのライトを点けると、その上にさつき買った水入りのペットボ

トルを置いた。

すると・・・

「おお・・・！！」

「凄いですらあ・・・！！」

感嘆の声を上げる果南と花丸。

こうすると光が水に反射して、ライトのように広範囲に拡散されるのだ。

おかげで少しは明るくなった。

「天、よくこんな技知ってたわね？」

「絵里姉つて、暗いところ本当にダメな人なんだよ。だからこういう時の為に、色々調べたことがあつて」

苦笑する俺。

まさかこんなところで活きるとは……

「明りがあるつてありがたいね……」

「ホツとするずらあ……」

抱き合いながら笑みを見せる果南と花丸。

「大丈夫よルビィ、マリーが側にいるわ」

「ありがとう、鞠莉ちゃん」

ルビィを背後から抱き締める鞠莉と、鞠莉の腕の中にすっぽり収まっているルビィ。

「善子さん、もつとくつついても良いのですよ?」

「……じゃあ遠慮なく」

「あら、『ヨハネ』とは言い返さないのですか?」

「これ以上の罰金はゴメンよ」

「フフツ、それは残念ですわ」

「あの、さつきはゴメン……その、お風呂場で……」

「……思い出させないで下さいまし」

「わあああああつ!? ゴメンゴメン!」

真つ赤な顔を両手で覆うダイヤさんを、慌てて慰める善子。

あれ、この光景・・・

『絵里ちゃん!』

『きやつ・・・もう、凜ったら甘えん坊なんだから』

『花陽ちゃん、また育ったんじゃない? わしわしちやうぞく?』

『の、希ちゃん!? 誰か助けてえ!』

『ぐぬぬ・・・もう一回勝負よ、真姫!』

『はいはい・・・もう、にこちゃんは負けず嫌いなんだから』

「・・・何だ、もう良い関係になつてるじゃん」

「天さん? 何か仰いましたか?」

「ダイヤさんの身体は綺麗だったなあつて」

「びぎやあああああつ!」

「ちよつと天!? 思い出させないでよ!」

「アハハ、ゴメンゴメン」

これは俺が指摘するのも野暮だし、言わないでおこうかな・・・

「そういえばさあ・・・」

果南が思い出したように口を開く。

「結局私達、思いつきり遊んじやつたけど・・・曲作り、どうしよつか?」

「結果的に、マル達のタイプはバラバラってことが分かっただけすら」

「意見が統一出来たわけじゃないもんね・・・」

ちよつと弱気な皆。

やれやれ・・・

「バラバラだつて良いじゃん」

「え・・・?」

俺の発言に、首を傾げる鞠莉。

「そりゃ同じ人なんていないんだから、意見だつてバラバラにもなるよ。そこからどうすり合わせていけるかじゃない?」

「で、でもどうやつて・・・」

「そこは話し合いでしょ。お互いの意見を尊重した上で、どこまでお互いが歩み寄れ

るのか・・・今の皆なら、それが出来ると俺は思うけど」

俺の言葉に、顔を見合わせる六人。

やがて・・・

「・・・あんまり激しい曲調は止めようか」

「じゃあその代わり、今までの A q o u r s に無い曲調にするぞら！」

「良い意味でアイドルらしくない曲、みたいな？」

「それは面白そうですね。となると・・・」

「カツコ良い曲、かな？」

「それは盛り上がりそうデース♪」

「そう言えば今日、着物専門店に行ってみて思ったんだけど・・・『和』を取り入れた衣装を作ってみたくないかって」

「『未熟 D R E A M E R』みたいな？」

「あれよりもっと『和』っぽい・・・それこそ、着物っぽい感じかな？」

「ねえルビィ、それって踊りやすい衣装に出来るかしら？アツプテンポな曲でも、踊れちゃうような感じが良いんだけど」

「うん、出来ると思う。お姉ちゃん、手伝ってくれる？」

「勿論ですわ。腕が鳴りますわね」

「それならマリーは、『和』テイストのアップテンポなカッコいい曲を作るわ！それなら、衣装と曲が合うでしよう？」

「何か楽しそうぞら〜！」

「花丸も手伝ってちょうだい！最高の曲を作るわよ！」

「了解ぞら！」

「何か燃えてきた！善子ちゃん、カッコいい振り付け考えるよ！」

「はいはい、とことん付き合うわよ」

わいわい盛り上がる皆。

μ'sもAqoursも、基本的に皆のタイプはバラバラだ。

だからこそ……皆が一つになった時、その魅力が何倍にも増すのだ。

要はこの十人十色こそ、μ'sやAqoursの最大の強みなのである。

つていうか……

「ちよつと皆、作詞を忘れてない？」

「あら、忘れてないわよ？」

微笑む鞠莉。

「良い歌詞を書いてくれる人なら、もういるじゃない……マリー達の目の前に」

鞠莉も果南もダイヤさんも、善子も花丸もルビイも……笑顔で俺を見ていた。

やれやれ、最初からそのつもりだったのね・・・

「仕方ない・・・俺も一年生組として、一肌脱ぎますかね」

こうして俺達は身を寄せ合いながら、次の曲について話し合うのだった。

究極の選択は突然迫られるものである。

翌朝・・・

「眠い・・・」

「完全に睡眠不足だね・・・」

フラフラしている果南とルビィ。

あの後盛り上がりまくった俺達は、徹夜で新曲を完成させていた。

振り付けやフォーメーション、衣装のデザインまでバッチリである。

「気付いたら朝だったわね・・・」

「のめり込み過ぎたわ・・・」

善子と鞠莉も眠そうだ。

まあ、電気が復旧したことにさえ気付かなかったくらいだもんなあ・・・

「ずらあ・・・」

「花丸さん、よく眠ってますわね・・・」

「限界だったんでしょうね・・・ダイヤさんは大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとうございます」

花丸をおんぶしつつ、ダイヤさんと話す俺。

微笑んではいるものの、ダイヤさんも明らかに疲労の色が見えた。

「・・・学校は休もうか」

「そう言うと思つて、既に手配済みデース」

「流石だぜ幼馴染」

「いや、休むのはマズいのは・・・」

「このままだと、生徒会長が授業中に爆睡するという事件が起きますよ」

「・・・偶には休息が必要ですわね」

あつさり方針転換したダイヤさん。

流石にそんな事態になるのは嫌らしい。

「おつ、着きましたよ」

そうこうしているうちに、目的地である『十千万』に到着した。

二年生組の三人は、ここに泊まって曲作りをしていたらしい。

「あれ、屋根の上にいるの千歌じゃない？」

果南がそんなことを言い出す。

「いやいやいや・・・」

「いくら何でも、屋根の上なんて危ない場所にいるわけ・・・」

「あつ、皆！お〜い！」

屋根の上から手を振っている千歌。

あんにやろう・・・

「落ちてしまえば良いのに」

「天くん!?何でそんなこと言うの!?!」

「逆にそんなところで何してんの？」

「輝いてる」

「鞠莉キング・・・あのアホ毛、撃ち抜け」

「了解」

「どこのエニエス・ロビー!?鞠莉ちゃんもパチンコでこつち狙わないでくれる!?!」

「千歌、まだお前の口から聞いてねえ!『落ちたい』と言えエ!」

「落ちたいっ・・・つて言うかあああああつ!」

「・・・何この茶番」

「どれだけワンピ●ースが好きなのよ・・・」

いつの間にか『十千万』から出てきた曜と梨子が呆れている。

大好きに決まってるわバカヤロー。

名シーンなんだぞこい。

「つていうか・・・何か皆、距離が近くなってない？」

「色々あったんだよ、色々」

果南とルビイは手を繋いでるし、善子と鞠莉は互いの腰に手を回して支え合っている。

ダイヤさんは俺の背中で眠る花丸の頭を、微笑みながら優しく撫でてるし・・・

この一晩で、皆の距離がグッと縮まったのは間違いない。

「新曲もバツチり出来上がったから、楽しみにしてて」

「フフツ、期待してるわ」

笑顔を見せる梨子。

その時、鞠莉のスマホが鳴った。

「ピッ・・・もしもし？」

電話に出る鞠莉。

「うん・・・うん・・・ええっ!？」

「うおっ!？」

急に大声を上げる鞠莉。

ビックリしたあ・・・

「ど、どうしたの・・・？」

「今度は何・・・?」

おずおずと尋ねるルビイと果南。

鞠莉の表情を見ると、良い知らせではなさそうだ。

「・・・学校説明会が、一週間延期になるって」

「ええっ!?!」

「そんな!?!」

善子とダイヤさんが悲鳴を上げる。

「ってことは・・・」

「次の週の日曜日になる、ってことよね・・・」

「でも、次の週の日曜日って・・・」

顔を見合わせる曜と梨子。

そう、これは非常にマズい事態だったりする。

「昨晩の雨の影響で、道路の方に影響が出てるみたい・・・復旧に少し時間がかかりそうだから、一週間延期した方が良いつて・・・」

険しい表情の鞠莉。

マジか・・・

「・・・厳しいな」

正直、こういう事態は予想していなかった。

どうするべきか・・・

「どうしたの皆？そんな難しい顔しちやって」

キョトンとしている千歌。

「その分もつと良いパフォーマンスが出来るように、頑張れば良いじゃん」

「・・・マジで言ってる？」

「大マジですつ」

ドヤ顔で胸を張る千歌。

やっぱり大きい・・・じゃなくて。

「・・・どうやら状況が分かかってないみたいですね」

「アハハ・・・まあ千歌らしいけど」

溜め息をつくダイヤさんと、呆れている果南。

何で気付かないの、アイツ・・・

「耳の穴かっぽじってよく聞け、腐ったミカン」

「また腐ったミカンって言われた!?!」

「俺、金●先生をリスペクトしてるから」

「あの人は『腐ったミカンなんかじゃない』って言ってる人なんだけど!?!」

「あつそう」

「リスペクトしてるんじゃないの!?」

ギヤーギヤー騒がしい千歌。

発情期なら相手になるぞコノヤロー。

「ラブライブの予備予選がいつ行なわれるか、ちゃんと覚えてる?」

「学校説明会の次の日曜日でしょ?」

「『何を今さら聞いてんの?』みたいな顔しないでくれる?マジで屋根から突き落とし  
たくなるから」

「さっきより不機嫌になってない!」

何でそれが分かってて、今の状況が分からないのか・・・

「じゃあ、学校説明会が一週間延期になったら・・・どうなる?」

「どうなるって、学校説明会とラブライブの予備予選が重なる・・・ああ!」  
ようやく気付いたらしい千歌が悲鳴を上げる。

それと同時に、千歌の体勢が崩れた。

「うわあつ!」

「つ・・・曜、パスっ!」

「うわっ!」

曜に花丸をパスし、勢いよく駆け出す俺。

屋根から落ちる千歌の下へと滑り込み、何とかそのまま千歌をキャッチした。

「天くん!? 千歌ちゃん!」

「大丈夫!」

駆け寄ってきてくれる皆。

いったあ・・・

「痛・・・くない?」

目をギョツと閉じていた千歌が、恐る恐る目を開ける。

「つて天くん!? 大丈夫!」

「平気平気・・・それより千歌は? 怪我してない?」

「う、うん・・・大丈夫・・・」

「・・・良かったあ」

思わず千歌を抱き寄せる。

危ないところだった・・・

「あんな高いところに上るから・・・危険なマネはしないこと。いい?」

「ご、ごめんなさい・・・」

何故か顔が赤い千歌。

あれ、何か右手が柔らかいものを．．．むにつ。

「あつ．．．」

何やら声を出す千歌。

もしかして、今の衝撃でどこか痛めて．．．

「どうした!?!どこか痛い!?!」

「そうじゃなくて．．．んっ．．．胸．．．あつ．．．」

「胸って．．．あつ」

俺は今、千歌をお姫様抱っこしている状態なのだが．．．俺の右手が、千歌の左胸を揉んでいる状態だった。

おお、大きくて柔らかい．．．

しかもこの感触、恐らくノーブラだな．．．

その証拠に、中心にコリコリしたものが．．．

って感触を味わってる場合じゃなかったあああああつ!?

「すみませんわざとじゃないんです勘弁して下さい!」

「ちよ、大丈夫だから!」

急いで千歌を下ろして土下座する俺。

やってしまった．．．

「全然怒ってないから！むしろ助けてくれて感謝してるから！」

「さて、警察に自首してくるか・・・」

「ストツプううううっ！」

千歌に羽交い絞めにされる俺。

一方、他の皆は苦笑していた。

「アハハ、相変わらずのラッキースケベっぷりだね・・・」

「これが天デース」

「昨日のダイヤの裸とかね」

「びぎやあああああっ!?!」

「だから思い出させないでっつてば!?!」

「お姉ちゃんしつかり!?!」

「全く、これだから天くんは・・・」

「ずらあ・・・」

いや、花丸はいい加減起きろや。

何であんな乱暴にパスしたのに寝てられんの？

「でもホント、無事で良かったわ・・・」

「あ、ありがと・・・」

何故か再び顔が赤くなる千歌。

俺が胸を揉んだせいか・・・

「こういうところが鈍感なんだよなあ・・・」

曜が何やら呟いていたが、聞こえなかつたのでスルーして・・・

「それで本題に戻るけど・・・千歌、どういう状況か理解出来た？」

「っ・・・はい、出来ました・・・」

一気に表情が青褪める千歌。

学校説明会が開催される日と、ラブライブの予備予選が行なわれる日が重なる・・・

つまり、俺達は選択しなければならないのだ。

「学校説明会と予備予選・・・どっちを優先する？」

「どうしよおおおおおおおっ!?」

頭を抱える千歌なのだった。

簡単には決められないこともある。

「さて、整理しようか」

部室にて、大きな地図を広げる俺。

放課後、俺達は部室に集まっていた。

ちなみにすっかり目が冴えてしまったので、結局皆ちやんと登校して授業も受けていた。

偉い偉い。

「今回のラブライブ予備予選が行なわれる場所が・・・ここだね」

「えっ、山の中じゃん！」

「ここに特設ステージを作って開催するんだって。バカみたいだよね」

「ストリートにデイスるね!？」

曜のツツコミ。

何でこんな山の中を会場にしたんだか・・・

「で、浦の星が・・・ここか」

二つの地点を丸で囲み、線で結ぶ。

分かってはいたけど、距離があるよなあ・・・

「バスや電車を使うというのは・・・」

「調べてみましたけど・・・ちよつと厳しいですね」

ダイヤさんの提案に、首を横に振る俺。

予備予選の会場も浦の星も、交通の便が良いとは言えない場所にある。

どうすべきか・・・

「だったら、空は？」

「・・・俺だけど？」

「天くんのことじゃないわよ!？」

梨子のツツコミ。

海未ちゃんみたいなこと言っちゃった・・・てへっ。

「空だったら、鞠莉ちゃんの家のはりはどう？」

「パパには『自力で入学希望者を集める』って言っちゃってるし、今さら『力貸して』

とは言えませーん・・・」

千歌の問いに、うなだれながら答える鞠莉。

だよねえ・・・

「クツクツクツ・・・それなら、この墮天使の翼で・・・!」

「あー、その手があつたねー」

「墮天使ヨハネの翼で大空から会場入りずらー」

「流石はヨハネ様、そこに痺れる憧れるー」

「嘘よ嘘!?!常識で考えなさいよ!?!」

ルビィ・花丸・俺の気の抜けた相槌に、気まづくなつた善子がツツコミを入れる。

日頃から墮天使を名乗つてるヤツに、常識を説かれてもねえ・・・

「そうずら〜?」

「ふ〜ん?」

「へ〜?」

「ぐぬぬぬ・・・アンタ達、わぎとやつてるでしょう!?!」

「びぎいつ!?!」

「ずらあつ!?!」

「うおつ!?!」

善子が両腕でルビィと花丸の首を絞め、ルビィと花丸の間に俺が挟まれる形になつた。

後頭部には善子の、左頬にはルビィの、右頬には花丸の胸が押し付けられて・・・

うん、幸せなんだけど息苦しいわ・・・

「じゃあ海は？」

「・・・私ですが？」

「海未先生のモノマネしなくていいから！」

再び梨子のツッコミ。

我ながら、今のモノマネは似てたな・・・

「ウチの船は仕事があるから使えないなあ・・・」

「パパの船、しばらく帰って来ないんだよねえ・・・」

果南と曜が首を横に振る。

「これもダメか・・・」

「・・・まあ実は一つ、間に合う方法があるんだよね」

「ええっ?! そんな方法あるの!?!」

驚く千歌。

「まあね」

「何?!? どんな方法!?!」

「予備予選の一番最初に歌うこと・・・終わり次第すぐに会場を出ると、ギリギリ乗れるバスがあるんだよ。そのバスに乗れたら、学校説明会には間に合う」

これなら、予備予選と学校説明会の両方に出ることが可能だ。

ただ・・・

「次のバスは三時間後だから、学校説明会には間に合わない・・・一番以外の順番になったら、もうアウトだね」

「順番って、どうやって決まるの・・・？」

恐る恐る尋ねてくる梨子に、俺は意を決して答えるのだった。

「それは・・・」

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

翌日・・・

「・・・抽選かあ」

溜め息をつく私。

私達は、予備予選の順番を決める抽選会へとやって来ていた。

これで運命が決まるかと思うと、緊張してくるわね・・・

「つていうか、天くんはどこへ行ったの？」

「うさ耳リボンを着けたお姉さんとお話した後、一緒にどっか行っちゃった」

「・・・あの女つたらし」

千歌ちゃんの答えに、舌打ちしたくなる私。

この大事な時に・・・！

「皆さん、お待たせしました！ただ今より、抽選会を行ないます！」

進行役らしいお姉さんが、ステージの上に登場する。

オレンジ色のボブカットの髪に、緑色のうさ耳リボンを着けて・・・

うさ耳リボン？

「あつ、あのお姉さんだ！」

お姉さんを指差す千歌ちゃん。

あのお姉さん、天くんと知り合いなの・・・？

「進行役は私、上杉四葉が務めさせていただきます！そして本日はスペシャルゲストとして、こちらの方に来ていただいています！どうぞ！」

「こんにちは、絢瀬天です」

「何してるのあの子!？」

思わず全力でツツコミを入れてしまう。

スペシャルゲストってどういうこと!?

天くんのことを知らない他のスクールアイドル達がキョトンとしてるんだけど!?

『え、誰?』と思った皆さん、驚くことなかれ! 彼はあの伝説のスクールアイドル・μ'sのメンバー、絢瀬絵里の弟だあああああつ!

「ええええええええええつ!」

「あのエリーチカの弟!」

会場がざわざわしている。

まあそうなるわよねえ・・・

「自慢ではありませんが私、第一回ラブライブから運営に携わっているのです! 天くんとはその当時にラブライブを通じて知り合い、すっかり顔見知りになっておりまして・・・それにしても天くん、またおつきくなつたね♪」

「四葉さん、親戚のおばさんみたいになってますよ」

「誰がおばさん!? まだ若いんだけど!」

「五月さんもそうですけど、貴女達姉妹は本当に変わりませんねえ」

「あつ、五月に会ったの? 最近会えてないんだけど、元気にやつてる?」

「相変わらずスクールアイドルに目がないみたいですね、あの人・・・つて、普通にプライベートな会話してていいんですか?」

「あつ、イベント中だった!？」

会場が笑いに包まれる。

あのお姉さんも自由な人ね・・・

「つていうか、五月さんつて誰？」

「秋葉原のスクールアイドルシヨップの店長さん。天くんの知り合いなんだつて」

「ルビイちゃん、知ってるずら？」

「うん、前に天くんと遊びに行つたことがあつて」

一年生三人組がそんな話をしている。

ルビイちゃん、いつの間に・・・!？」

「それではただ今より、抽選会を始めます!名前を呼ばれたグループの代表者は、ステージが上がつて抽選をお願いします!」

「えーつと、最初のグループは・・・スリーマーメイドさん?」

「はーい!よろしくお願ひします!」

「・・・何かすいませんでした」

「何が!？」

謝る天くん。

その名前のグループ、実在したのね・・・

「それより……誰が行く?」

千歌ちゃんの問いに、全員固まってしまふ。

一番以外の順番を引けないという、この責任重大なミッション……

誰も行きたくないわよね……

「……やっぱりリーダーが行くべきじゃない?」

「梨子ちゃん!」

シヨックを受けている千歌ちゃん。

「ごめんなさい千歌ちゃん、汚い私を許して……」

「でも今日の獅子座の運勢、超凶みただけど……」

「すみません無理です勘弁して下さい」

曜ちゃんの言葉を受け、土下座する千歌ちゃん。

それなら仕方ないか……

「じゃあ、最上級生の三人の誰かが……」

「わ、私達は途中参加の身だからっ! 最初から参加している後輩達に任せたいなっ!」

「右に同じ!」

ダラダラ汗を流している三人。

このすれ違い娘ども……!

「マ、マル達も途中参加ずら!」

「ここ、ここは曜ちゃんか梨子ちゃんが良いんじゃないかな!」

胃袋ブラックホール娘と抜け駆け娘まで、そんなことを言い出す始末・・・

くつ、この後輩達・・・!

「・・・曜ちゃんの方が、早く参加してたわよね?」

「ちよ、それはないよ梨子ちゃん!? A q o u r s になった時は三人一緒だったじゃん!?!」

「ヨースローパワーで何とかしてよ!?!」

「だからヨースローパワーって何!?!」

私達が醜い押し付け合いをしていると・・・

「待ちなさい」

横から声が掛かる。

こ、この声は・・・!」

「A q o u r s 最大のピンチに、墮天使界のレジエンドアイドル・・・ヨハネ、行つき

まあああああすつ!」

「シニヨン引きちぎるわよ? エセ墮天使」

「当たり前強くない!?!」

シヨックを受けている善子ちゃん。

この子ときたら・・・

「ないすら」

「ぶつぶー、ですわ」

「何でよ!?!何がダメなの!?!」

「逆に聞くけど、夏の間アイスじゃんけんで負け続けた子が良い理由って何さ?」

「誕生日に風邪を引くような子が良い理由って何?」

「マリー達がLUCKYなのは、善子がUNLUCKYを引き受けてくれるからデース」

「流星は上条善子、不幸体質を受け継ぐ者・・・」

「上条じゃなくて津島だしっ!善子じゃなくてヨハネだしっ!」

「善子ちゃん、罰金百円」

「それこの間終わったから!っっていうかヨハネっ!」

「善子ちゃんのツツコミが止まらない。」

「本気なのこの子・・・?」

「普段は運を貯めてるのよっ!いざという時の私の力を見せてやるわっ!」

「・・・では、私と勝負ですわ」

善子ちゃんの前に進み出るダイヤさん。

「私にじゃんけんで勝つことが出来たら、貴女に抽選をお願いしますわ。ただし……私の山羊座の本日の運勢は、超吉ですわよ？」

「面白いじゃない！受けて立つわ！」

睨み合う二人。

つていうか、ダイヤさんも星座占いチェックしてるのね……

しかも超吉なら、ダイヤさんが行くべきなんじゃ……

「いきますわよ……じゃらんけんぼんつ！」

ダイヤさんがグー、善子ちゃんがパー……

つていうことは……

「善子ちゃんの勝ちずら！」

「凄い善子ちゃん！」

花丸ちゃんとルビイちゃんが喜んでいるが、当の善子ちゃんは呆然としていた。まさか本当に勝つちゃうなんて……

「続きまして、A q o u r s ……ほら誰か、ステージ上来て」

天くんの声がする。

いよいよ私達の番ね……

「……引いてらっしやい、栄光の一番を」

「……任せなさい！」

善子ちゃんの背中を、微笑みながら優しく押すダイヤさん。

これはもう、善子ちゃんを信じるしかない。

背中を押された善子ちゃんが、意気揚々とステージに上がる。

「チエンジで」

「ちよつと!?!」

天くんがこつちを見て、『何考えてんの?』という顔をしていた。

ゴメンね天くん、色々あったのよ……

「続きましては、浦の星女学院のスクールアイドル・A q o u r s です!天くんがマネージャーをやってるグループなんだよね?」

「そうなんですけど、今凄く辞めたくなくなってます」

「何ですよ!」

「アハハ、仲が良いね!それじゃ、引いちゃって下さい!」

ガラガラに手をかける善子ちゃん。そして……

「ヨハネ……行っきまあああああすっ!」

勢いよく回す善子ちゃんを、固唾を呑んで見守る私達なのだった。

\*\*\*\*\*

「・・・終わった」

肩を落とす千歌。

抽選会も終わり、俺達は会場近くのカフェに来ているのだが・・・

「二十四番なんて中盤じゃん・・・ど真ん中じゃん・・・」

そう、善子が引いた順番は二十四番・・・

完全にアウトだった。

「フツ、仕方ない・・・堕天使の力がこの数字を引き寄せたのだから・・・」

「本音は？」

「申し訳ありませんでしたあああああつ！」

土下座する善子。

やれやれ・・・

「ほら、頭上げる。善子が悪いわけじゃないんだから」

抽選なんて完全な運だし、好きな数字を引こうと思つて引けるものじゃない。

ましてや今回の場合、一番以外は全てアウト……

どんなに運が良かったとしても、引ける可能性はかぎりなく低かったのだから。

「うう、天あ……！」

「はいはい」

涙目で抱きついてくる善子を、優しくあやす。

今くらいは甘やかしてやろう……

「つていうか天くん、あのお姉さんとういう関係なの？」

「ああ、四葉さん？五年前のラブライブの時から進行役やってたんだけど、向こうから声を掛けられてさ。それ以来顔見知りになったんだよ」

四葉さん的には、小学生の男の子がμ、sと一緒にいるのが気になったらしい。

マネージャーだつて知った時は、流石にビックリしてたけど……

それ以来ラブライブの観戦に行くと、気軽に声を掛けてくれるようになったのだ。

「まさか今回は、こつちの地区で進行役をやつてるなんて……驚いたよ」

「あの人、店長さんのお姉さんなんだよね？」

「そうそう、実は五月さんのお店を紹介してくれたのは四葉さんなんだよ。『妹がスクールアイドルショップ始めたから、良かったら遊びに行つてあげて』つて言われてさ」

「・・・相変わらず年上の女性に好かれるのね」

「梨子？何か怒ってる？」

「別に」

出た、梨子様モード・・・

間違いなく不機嫌な時の梨子だ・・・

「まあそれはさておき・・・こうなった以上、本気で考えないといけないね」  
険しい表情で口を開く果南。

「説明会を取るのか・・・ラブライブを取るのか・・・」

「つ・・・」

俯く皆。

まあ、そうなるよな・・・

「・・・どっちかを選べってこと？」

「残念ですが・・・現実的に考えて、両方は選べませんわ」

千歌の問いに、複雑な表情で頷くダイヤさん。

勿論両方とも出たいところだが、現状不可能と言わざるをえない。

「・・・そう考えると、学校説明会かしら」

「学校を見捨てるわけにはいかないからね」

「ですが、今必要なのは入学希望者を集めること・・・効果的なのは、ラブライブなのはではありませんか？」

「たくさんの人に見てもらえるし、注目されるもんね」

「説明会の方は、先生方に任せるっていうのはどうずら？」

「勿論、学校の説明は先生方がやってくれるけど・・・注目を集めるには、やっぱりライブをやる方が効果はあると思う」

「しかも学校説明会は、私達がワガママを言って開催してもらうんだもんね・・・」

「でも、ラブライブを諦めるなんて・・・」

皆の意見がバラバラになる。

学校説明会寄りの意見と、ラブライブ寄りの意見・・・

それでも、誰も強く主張しないのは・・・

「・・・どっちも大切だもんね」

千歌が呟く。

そう、どっちも大切・・・

だからこそ皆、完全にどちらかに心を傾けることが出来ない。

どっちも同じくらい大切に、同じくらい出たいものだから。

「こんなの・・・選べないよ」

重苦しい雰囲気に包まれる。

今の千歌の言葉が、皆の総意だった。

「……とりあえず、今日はもう解散しない？家に帰って、皆それぞれもう一度よく考えて……明日また話し合おう。ね？」

「……うん」

俺の言葉に頷く皆。

その表情が晴れることは、最後まで無かったのだった。

解決の糸口は意外なところにある。

「赤城麻衣、歌いますっ！」

「イェーイ！」

「この酔っ払いども・・・」

ハイテンションで盛り上がっている麻衣先生と翔子先生。

抽選会が終わって帰宅したところ、麻衣先生から『お寿司食べない?』というお誘いの電話がかかってきたのだ。

どうやらお寿司が食べたい気分だったらしく、結構な量のお寿司を注文したらしい。たくさんのお酒を手に我が家へとやって来た麻衣先生達は、既に出来上がっていた。

「お寿司を奢ってくれるのはありがたいんですけど・・・届け先が俺の家になつてる時点で、もう突撃してくる気満々でしたよね」

「一応止めたんですけど・・・ゴメンなさい」

申し訳なさそうに謝ってくる、グレーのロングヘアの女性・・・金剛榛名先生。二年生のクラス担任で、温厚で優しい先生である。

麻衣先生や翔子先生が時々連れてくるので、俺も親しくさせてもらっていた。

「ああ、榛名先生はいつでも大歓迎ですよ。こんな美人な女性と一緒に夕飯が食べられるなんて、一人で食べるよりずっと嬉しいですから」

「びじっ・・・お、大人をからかつちゃダメですよっ!」

恥ずかしそうに顔を赤くする榛名先生。

この感じ、たまらん・・・

「ちよつと天くん、私達の可愛い後輩を口説かないでくれる?」

ジト目で背後から抱きついてくる翔子先生。

榛名先生も浦の星のOGで、麻衣先生や翔子先生の一学年下だったらしい。

学生時代から交流があったらしく、二人とも榛名先生を可愛がっていたんだとか。

「っていうか、私と麻衣ちゃんは美女扱いしてくれないの?」

「顔が良いのは認めます。ただし性格が残念過ぎて差引きゼロです」

「そこまで!」

「むしろマイナスまであります」

「酷くない!?!」

「その点、榛名先生は見た目も性格も完璧な PERFECT HUMAN・・・いや、

PERFECT WOMANです」

「ちよ、天くん!?!何を言い出すんですか!?!」

「We live in UCHIRA?」

「ha, ru, na, haruna?」

「I, ma perfect woman. . . って何を言わせるんですか!」

「「お〜」」

「拍手とか要りませんから!」

顔を真っ赤にして叫ぶ榛名先生。

やだこの人、可愛いんですけど。

「翔子先生と麻衣先生じゃ、こんな反応出来ないでしょ?」

「私達だって、それくらい出来るんだからねっ♡」

「本気を出しちゃうぞっ♡」

「おえっ」

「ちよっと!?!」

「海未ちゃん、帰って来て下さい. . . 私一人では限界です. . .」

ぐったりしている榛名先生。

榛名先生、海未ちゃんと仲良かったもんなあ. . .

浦の星の教師陣の中で一番年下の榛名先生にとって、海未ちゃんは可愛い後輩みたいな存在だったらしい。

海未ちゃんも榛名先生を慕ってたし、良いコンビだったなあ・・・

「この前電話で話したんですけど、海未ちゃんも榛名先生に会いたがってましたよ。今度また内浦に来たいって言っていましたから、その時は会ってあげて下さい」

「本当ですか!?! 勿論です!」

「あつ、ズルい! 私も海未ちゃんに会いたい!」

「私も!」

「はいはい、じゃあ皆様でご飯でも食べて来て下さい」

「逃がしませんよ天くん! 天くんには先輩達の相手になつてもらわないと!」

「それは後輩である貴女の仕事でしょうが!」

「私には・・・私には、天くんが必要なんです!」

「くっ・・・そんなお願いされたって、俺の心は・・・!」

「ダメ、ですか・・・?」

「・・・分かりました」

「やったあ! 天くん、大好きっ!」

「あつ、天くんが負けたわ・・・」

「涙目で上目遣い、それもあんな甘えた声で・・・榛名ちゃん、恐ろしい子・・・」

うなだれた俺に抱きつく榛名先生を、麻衣先生と翔子先生が恐ろしいものを見るかの

ような目で見ていた。

これを計算じゃなくて素でやってるから、榛名先生には敵わないんだよなあ．．．  
「ところで天くん」

真面目な表情に戻った麻衣先生が、心配そうに尋ねてくる。

「学校説明会が一週間延期になって、ラブライブの予備予選の日と重なっちゃったけど．．．どうするの?」

「．．．どうしましょうね」

色々考えてはみたが、結局良い案が思いつかないんだよな．．．

「両方とも出られるのが、一番良いんですけどね．．．」

「．．．少し背負い過ぎなんじゃない?」

気遣ってくれる翔子先生。

「貴方達は学生なんだから、もっと自分のことを考えて良いのよ?説明会はAqoursのライブが無くて、私達教師陣が何とか出来るだろうし．．．」

「本音は?」

「Aqours抜きとかオワタ」

「私達だけじゃ無理ぽ」

「びえん」

「正直でよろしい」

勿論、教師陣による説明だけで乗り切れることは出来るだろう。

問題は、それで入学希望者が増えるかどうかだが・・・

増えないから統廃合の危機に直面しているわけで、やはりライブをやった方がインパクトは大きいはずだ。

その方が期待も持てるだろうし・・・

「んー・・・両方に出られる方法って、何か無いのかしら」

「・・・あまり良い方法ではないですけど、一応ありますよ」

「「ええっ!?!」」

驚く三人。

そう、一応あることはあるのだ。

「あるの!?!」

「どんな方法!?!」

「二手に分かれる方法です。片方は学校説明会でライブをやつて、もう片方はライブの予備予選に出る・・・九人いますから、可能な方法ではあるんですよ」

ライブ用の曲を作った二年生組が説明会担当で、予備予選用の曲を作った一年生&三年生組が予備予選担当・・・

これなら、一応は両方に出られる。

しかし……

「それは……どうなのかしら」

「もしそれで、予備予選を突破出来なかったら……」

「だから言ったでしょう。あまり良い方法じゃないって」

顔を顰める麻衣先生と翔子先生に、溜め息をつく俺。

勿論、全員が両方のステージに立てるのがベストなんだけど……

「車はダメなんですか？」

「予備予選の会場が山の中なんで、山道を走ることになるんですけど……遠回りになっちゃうんで、ちょっと時間がかかっちゃいそうなんですよ。他の手段よりかは早いでしょうけど、どの道説明会には間に合いませんね」

予備予選がもつと早い順番なら、ワンチャンあったかもしれないが……

「山の中を突っ切れたら、早いんでしょうけどねえ……」

「突っ切る、ですか？」

「ええ、木々の間を突っ切るみたいなの……それが出来たらメツチャ時短ですよね」

「いつそ燃やさない？」

「良いわね。車で走りやすくなりそうだし」

「よし、ガソリン用意しましょう」

「それですっ！」

「「ええっ!?!」」

榛名先生の肯定に驚く俺達。

完全にネタだったのに……

「あつ、燃やす方じゃないですよ!?!木々の間を突っ切る方です！」

「いや、それも無理でしょ……」

「それが無理じゃないんです！だってこの辺りの山は、いたるところがみかん畑になつてるんですから！」

「「ああっ!?!」」

合点がいったらしい麻衣先生と翔子先生。

え、分かってないの俺だけ？

「すみません、話が見えないんですけど……どういふことですか？」

「実はですね、天くん……」

そう言つて話し始めた榛名先生のアイデアに、驚きを隠せない俺なのだった。

## 正攻法が正解とは限らない。

「浦の星女学院へようこそ！」

「説明会の会場はこちらです！」

「後で我が校のスクールアイドル、A q o u r s のライブもありますよ！」

「よろしく願います！」

学校説明会当日、俺はよいつむトリオと一緒にピラ配りに励んでいた。

思ったよりも多くの人が来てくれており、浦の星をアピールするには絶好の機会と言えた。

「すみません、手伝ってもらっちゃって・・・」

「何水臭いこと言ってるの！アタシ達だってこの生徒なんだよ？」

「そうだよ天くん！統廃合を阻止する為なら、私達は何だってやるよ？」

「いつも天達に頼りっぱなしなんだし、こんな時くらい一緒に頑張らせてよ！」  
笑顔でそう言ってくれるよしみさん、いつきさん、むつさん。

良い先輩達だなあ・・・

「おっ、天くん！」

翔子先生が駆け寄ってくる。

「ビラ配りは順調？」

「ええ、もう少しで配り終わる勢いです」

「本当!?!凄いわね!?!」

驚く翔子先生だったが、すぐに気遣わしげな表情に変わる。

「・・・本当に良かったの? 予備予選の方に行かなくて」

「人手が少ない中、榛名先生をお借りしますからね。せめて穴埋めくらいししないと」

「そんな気を遣わなくても良いのに・・・」

「大丈夫ですよ。どの道向こうに行つたところで、俺に出来ることも無いですし」

「でも天くん、本当に大丈夫なの?」

「いつきさんも心配そうな表情をしていた。」

「予備予選の会場つて、山の中なんですよ? 出番が終わつてすぐに会場を出ても、こつちの時間には間に合わないんじゃないや・・・」

「ああ、それなら大丈夫です。その為に榛名先生をお借りしてるんで」

「え、どういうこと?」

「え、どういうこと?」

怪訝な表情を浮かべるよいつむトリオに対し、俺はニヤリと笑うのだった。

「まあ見て下さい・・・必ず間に合いますから」

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「お、お待たせしました・・・」

「わあ・・・！」

本番前に衣装に着替えたダイヤさんを見て、感嘆の声を上げる私達。

「綺麗・・・」

「素敵・・・」

「そ、そんなに見ないで下さい・・・」

千歌ちゃんと曜ちゃんのキラキラした眼差しに、恥ずかしそうに俯くダイヤさん。

これは見惚れるわ・・・

「流石はルビイちゃん、衣装が凝ってるよね」

「職人技デース♪」

「お、大袈裟だよお・・・」

果南ちゃんと鞠莉ちゃんに頭を撫でられ、恥ずかしがりながらも嬉しそうなルビィちゃん。

あの日以来、凄く距離が縮まったわね・・・

「それにしても、この曲・・・『MY舞☆TONIGHT』って、今までのAqoursには無かったタイプの曲よね」

「そうそう。でも良い曲だよね」

私の言葉に、曜ちゃんが頷く。

こんな和テイストな曲を、あの鞠莉ちゃんが作曲したなんて・・・

「鞠莉ちゃん・・・日本人の心があったのね」

「梨子!? どういう意味よ!?!」

「いや、身も心もアメリカ一色だと思ってたから」

「違うわよ!?! これでもハーフなのよ私!?!」

「ニューヨークとワシントンのハーフ?」

「それハーフって言わない! 完全にアメリカ人!」

鞠莉ちゃんのツッコミ。

鞠莉ちゃんもなかなかのツッコミスキルの持ち主よね。

「梨子、アンタ天みたいなボケしてるわよ・・・」

呆れている善子ちゃん。

あれ、私だんだん天くんに似てきた？

「天くんって言えば、この曲の作詞は天くんがしたんだよね？」

「そうすら」

千歌ちゃんの問いに答える花丸ちゃん。

「ちなみに、ダイヤさんとルビィちゃんをセンターにしたのも天くんすら」

「えっ、そうなの!？」

「ええ、『この曲のセンターは二人が良い』と仰って・・・」

「当然じゃない。この曲のイメージにピッタリなもの」

戸惑った様子のダイヤさんの肩を、笑いながら叩く鞠莉ちゃん。

確かに、二人ほど和のイメージにピッタリな人はいないわね・・・

「この曲で会場を沸かせて、その勢いのまま説明会に直行デース♪」

「それにしても・・・大胆な作戦を思いついたもんだよね」

苦笑する果南ちゃん。

「みかんトロッコに乗って山の中を突っ切るなんて・・・考えもしなかったよ」

そう、それこそが説明会に間に合う為の奇策だった。

私も初めて知ったのだが、山の中のみかんを収穫する為のみかんトロッコというもの

があるらしい。

その線路が山の中のものに敷かれているらしく、それに乗って山の中を突っ切ろうというのが今回の作戦なのだ。

こんな作戦、よく思いついたわね・・・

「金剛先生、本当に良いんですか？」

「フフツ、勿論です」

ニコニコしている金剛先生。

今日は天くんの代わりに、私達の付き添いとして来てくれているのだ。

「説明した通り、この辺りの山はウチの実家が所有しているんです。みかんトロッコもウチのものなので、好きに使っちゃって大丈夫ですよ」

そう、金剛先生がここに来ている最大の理由はそれだ。

私達は本番が終わり次第、金剛先生にみかんトロッコまで案内してもらおうことになっているのである。

「でも先生、みかんトロッコって大人数で乗れるんですか？」

「そもそも、そんなにスピードが出る乗り物じゃないような・・・」

不安そうな曜ちゃんとルビィちゃん。

「大丈夫ですよ。荷台を下ろしたので、皆ちゃんと乗れます。スピードもしっかり出

るので、問題ありません・・・安全は保障出来ませんがね（ボソツ）」

「何か不穏なこと言いませんでした!？」

怯える私達なのだった。

\*\*\*\*\*

《梨子視点》

「こつちです！急いで下さい！」

「し、しんどいすらあ・・・!!」

息切れしながらも走る花丸ちゃん。

予備予選の出番を終えた私達は、すぐに会場を出てダッシュでみかんトロツコに向かっていた。

「でも、良いステージだったね！」

笑っている曜ちゃん。

「あれなら、無事に突破出来るんじゃない？」

『MY舞☆TONIGHT』のパフォーマンスは大好評で、会場は大盛り上がりだった。

私達は、確かな手応えを掴んでいたのだった。

「着きました！ここです！」

先頭を走っていた金剛先生の声が聞こえる。

あれがみかんトロツコ・・・

「乗って下さい！」

金剛先生が先頭に乗る、私達も後ろの席に乗り込む。

「さて・・・しっかりと掴まっついて下さいね」

「こ、金剛先生・・・？」

何だろう、先生の雰囲気が変わったような・・・

「ここから先は・・・フルスロットルで飛ばしマース」

「・・・え、鞠莉ちゃん？」

「私はここにいるんだけど!?!」

鞠莉ちゃんのツッコミ。

いや、分かつてはいるんだけど・・・

金剛先生、口調が変わってない・・・？



「到着しました！」

「あつ、口調が元に戻った……」

「し、死ぬかと思つたわ……」

呆然としている善子ちゃん。

ルビイちゃんとダイヤさんなんて、白目を剥いて気絶しているくらいだし……

「おい！」

「こつちこつちー！」

「急いで！」

前方に車が三台止まっており、曜ちゃんのお母さん・美渡さん・志満さんが手を振っていた。

そういえば、協力を要請したって天くんが言つてたっけ……

「私はみかんトロッコを元の場所に戻すので、皆は早く行って下さい！」

「分かりました！ありがとうございます！」

気絶した二人を鞠莉ちゃんと果南ちゃんが抱え、私達は車へと走る。

「ママ、お願い！」

「任せなさい！」

「美渡姉！志満姉！よろしく！」

「オツケー！」

「勿論よ！旦那様のお願いを叶えるのが、妻の仕事なんだから！」

「志満さん!? 天くんの奥さんになるのは私ですよ!?!」

「NO! マリーデース！」

「いくら梨子ちゃんやんと鞠莉ちゃんでも、正妻の座は譲れないわ！」

「どうでもいいから早くしてくれろ!?!」

ギャーギャー騒ぎつつ、浦の星へと向かう私達なのだった。

君のこころは輝いてるかい？

「ま、間に合った・・・」

「お疲れ」

へトへトになってる皆を、苦笑しながら出迎える俺。

ちやんとライブの時間に間に合ったな・・・

「予備予選、ずいぶん盛り上がったみたいだね」

「えっ、何で知ってるの？」

「奈々さんと満点さんから報告もらってたから」

「お母さん!?!」

「来てたはずら!?!」

梨子と花丸のツッコミ。

今回は志満さん達に車をお願いしていたので、現地で応援出来たママ軍団員は二人だけだったのだ。

他のママさん達は仕事があり、今回は泣く泣く不参加だったし・・・

「もう少しで説明会が終わるから、今のうちに衣装に着替えてスタンバイして」

「オツケーー！」

部室へと向かう皆。

あつ、そうだ・・・

「千歌、曜、梨子」

「ん？」

「何？」

「どうしたの？」

振り向く三人。

そんな三人に、俺は笑顔で親指を立てた。

「あの曲、歌詞もメロディも凄く良いと思うよ。衣装も凝つてて可愛いし・・・素敵な曲と衣装をありがとう」

「っ・・・うんっ！」

「ヨーソロー！」

「フフツ、嬉しいわ」

三人とも笑顔で親指を立てると、そのまま皆の後を追って部室へと向かっていく。

「ふくん・・・良いマネージャーやつてるじゃん？」

「ニヤニヤするの止めてもらえますか？気持ち悪いんで」

「辛辣!」

シヨックを受ける美渡さん。

やれやれ・・・

「志満さんも星さんも、力を貸していただきありがとうございます」

「フフツ、私達の仲じやない。お礼なんて要らないわよ」

「そうだよ天、水臭いこと言わないの」

「ちよつと天、私にお礼の一言は無いわけ?」

「志満さんと星さんを見習えや。このズボラ女が」

「アンタどんどん辛辣になつてない!」

「冗談ですよ。美渡さんもありがとうございます。助かりました」

おかげでこうして間に合ったのだ。

感謝の気持ちでいっぱいである。

「フフツ、天は相変わらずですね」

この場にいるはずの無い人の声がした。

えっ……

「時間ギリギリになってしまいました。A q o u r sのライブに間に合つて良かったです」

「海未ちゃん!?!」

そこにいたのは何と海未ちゃんだった。

悪戯っぽい笑みを浮かべ、こつちを見ている。

「ちよ、何でここに居るの!?!」

「今日が学校説明会だというのは、麻衣さんからの連絡で知っていましたから。日曜日で大学もお休みですし、少し顔を出そうかと思ひまして」

「わあ、海未ちゃん久しぶり!」

「元氣そうで良かったわ!」

「美渡さん、志満さん、ご無沙汰しています」

「μ sの園田海未ちゃんだあああああつ!」

「きやあつ!?!」

星さんの興奮ぶりに、驚いている海未ちゃん。

やれやれ……

「全く、来るなら連絡してくれば良かったのに・・・」

「いつも連絡してこない人が何を言っているんですか」

「うぐっ・・・」

言葉に詰まる俺を、海未ちゃんがジト目で睨んでくる。

「学校説明会が今日だってこと、教えてくれませんでしたよね？」

「すみません・・・」

「ラブライブの予備予選が今日だってことも、教えてくれませんでしたよね？」

「すみません・・・」

「『すみません』しか言えないんですか貴方は」

「それしか言えなくてすみません・・・」

「こんな怒られ方、少し前にもあった気がする・・・」

「おお、あの天が完全に押されてる・・・」

「海未ちゃんの庄、ハンパないわね・・・」

「私も妻として、あれくらい言わないといけないのかしら・・・」

「何やら咳いている三人。」

とりあえず、志満さんは海未ちゃんを参考にするの止めて下さい。

俺は鬼嫁の尻に敷かれたくないので。

「ハア・・・まあこの辺にしておきましょう」

溜め息をつく海未ちゃん。

「それにしても、説明会と予備予選の日が重なるなんて・・・大変でしたね」

「まあね」

苦笑する俺。

「どつちかを選択しないといけないところだったけど・・・何とかなって良かったよ」

「フフツ、お疲れ様です」

海未ちゃんはそう言つて微笑むと・・・優しく俺を抱き締めてくれた。

「海未ちゃん・・・？」

「・・・天のことですから、よほど頭を悩ませたんでしよう？」

そつと頭を撫でてくれる海未ちゃん。

「解決することが出来て、良かったですね・・・本当にお疲れ様でした」

「海未ちゃん・・・」

参ったなあ・・・

海未ちゃんの優しさが心に沁みるわ・・・

「・・・少し、このままでもいい？」

「ええ、喜んで」

海未ちゃんの腰に手を回す。

ありがたいなあ・・・

「フフツ・・・あの天が、あんなに素直に甘えるなんて」

「流石は海未ちゃん、天のことをよく分かつてるよね」

「ちよつと妬げちゃうなあ・・・でも、海未ちゃんなら仕方ないわね」

そんな俺達を、微笑ましそうに見つめる三人なのだつた。

\*\*\*\*\*

「わあ・・・!」

感嘆の声を上げる海未ちゃん。

視線の先にあるステージ上では、A q o u r s が新曲『君のこころは輝いてるかい?』を披露している真つ最中だ。

「(こ)までレベルが上がってるなんて・・・!」

「ビックリでしょ?」

海末ちゃんが最後に生で見たのは、『未熟DREAMER』の時だったからな．．．あの時に比べたら、A q o u r s はグループとして格段に成長を遂げている。

「お疲れ様です、天くん」

「あつ、榛名先生！」

榛名先生が俺達のところへ歩いてくる。

「ありがとうございます。おかげで間に合いました」

「いえいえ、お安い御用です」

「榛名さん、お久しぶりです！」

「海末ちゃん?!? 会いたかったですっ！」

海末ちゃんに抱きつく榛名先生。

相変わらず仲が良いなあ．．．

「それにしても．．．たくさん集まってくれたなあ」

予想より多くの人が集まり、A q o u r s のライブを楽しんでくれている。

中学生と思わしき女の子達も多くいるし、少しでも浦の星を気に入ってくれると良い

なあ．．．

「フフツ、盛り上がって良かった」

「流星はA q o u r s、人気が凄いわね」



曲が終わり、ステージ上で一礼する皆。

そんな皆に、お客さん達から惜しみない拍手が送られる。

「・・・良かった」

「ホツとした？」

「ええ」

翔子先生の問いに、笑いながら答える俺。

「予備予選も説明会も、どっちも諦めなくて良かった・・・榛名先生、ありがとうございました」

「フフツ、どういたしまして」

微笑む榛名先生。

「困っている生徒の力になれたのなら・・・教師としては本望ですよ」

「流石は PERFECT WOMAN・・・いや、 PERFECT TEACHER」

「天くん!？」

「We live in UCHIRA?」

「ha, ru, na, haruna?」

「I, m a p e r f e c t t e a c h e r・・・って、だから何を言わせるんで

すか!？」

「「お〜」」

「だから拍手とか要りませんって!？」

「・・・榛名さんも苦労してますね」

「うう、海未ちゃん・・・この苦労を分かってくれるのは海未ちゃんだけです・・・」  
そんなやり取りをしていると、ふとステージ上の千歌と目が合った。

千歌はフツと微笑むと・・・俺に拳を突き出してくる。

『これからも、諦めずに頑張っていこう!』

そんな声が聞こえた気がした。

「・・・了解、リーダー」

同じように拳を突き出す俺。

ライブも浦の星も、絶対に最後まで諦めない・・・

改めて決意を固める俺のだった。

## 【中須かすみ】 大好きな人に・・・

「おはようございます、天先輩！」

虹ヶ咲学園に登校してきた俺は、正門の前で後輩の中須かすみから声をかけられた。今日も元気だなあ・・・

「おはよう、かすかす」

『『かすかす』って呼ばないで下さい！』  
頬を膨らませて怒るかすみ。

『かす』という言葉によほどトラウマがあるのか、『かすかす』や『かす子』と呼ばれるのを極端に嫌がるんだよなあ・・・

「おはよう、かつすー」

「新しいあだ名を試みてもダメですよ!？」

「おはよう、中須院長」

「それ『高須』ですよねえ!? かすみんはクリニックとかやってないんですけど!？」

「おはよう、中須さん」

「シンプルだけが一番他人行儀な呼び方されたあああああつ!？」

ギヤーギヤー騒いでいるかすみ。

ワガママな後輩だなあ・・・

「つていうか、今日はずいぶんゆつくりだね？いつもは朝練の為に早く来てるのに」

「頑張るだけじゃなくて、休むことも必要だと思ひまして」

「ああ、寝坊したのね」

「何で分かつたんですか!？」

「今のと全く同じセリフを、この間寝坊で遅刻してきた果林さんが言つてたから」

「・・・納得です」

溜め息をつくかすみ。

果林さん、ホント朝に弱いからなあ・・・

苗字に『朝』つていう漢字が入つてるのに・・・

「で、でもでもっ!かすみんはちゃんと時間には間に合つてますからっ!」

「まあね。学校的には遅刻じゃないし、全然大丈夫でしょ。それに・・・」

俺は一度言葉を切ると、かすみの頭を優しく撫でた。

「朝から後輩の可愛い顔が見られたんだから、俺的にはラッキーだよ」

「っ・・・」

途端に顔を赤らめ、恥ずかしそうに俯いてしまうかすみ。

俺の後輩は、今日もとても可愛いのだった。

\*\*\*\*\*

「お疲れ〜」

「あつ、天さん」

放課後にスクールアイドル同好会の部室へ行くと、後輩の天王寺璃奈が座っていた。

「あれ、りな子一人？」

「かすみちゃんとしずくちゃんも来てるよ。他の皆はまだ来てないけど」

「その二人はどこ行っただん？」

「更衣室で着替え中だけど・・・覗いてきたら？」

「先輩を犯罪者にしようとするのは止めなさい」

「璃奈ちゃんボード『わくわく』」

「何でわくわくしてんの？」

「あつ、天さん！来てたんですね！」

そんなやり取りをしていると、同じく後輩の桜坂しずくが現れた。どうやら着替え終わり、更衣室から出てきたらしい。

「おお、しず子。お疲れ」

「お疲れ様です。ずいぶん楽しそうでしたけど、璃奈さんと何をしていたんですか？」

「犯罪者にされそうになつてた」

「犯罪者にしようとしてた」

「本当に何をしていたんですか!？」

しず子のツツコミ。

まあビックリするよねえ・・・

「ところで、かすみん(笑)は？」

「何で笑ってるんですか・・・もうすぐ着替え終わると思いますよ」

「お待たせく♪」

そんな話をしていると、噂の人物がやって来た。

「どう? 似合ってる?」

「っ・・・」

姿を現したかすみを前に、俺は驚いてしまった。

真新しい衣装に身を包み、いつもと違って後ろで髪を結んだ姿のかすみに・・・

思わず見惚れてしまったのだ。

「それ、今度の新曲の衣装だよね？勝手に着て良いの？」

「良いの良いの！侑先輩からも許可はもらってるし！」

りな子の問いに、上機嫌で返すかすみ。

「この衣装を着て登場したら、きつと天先輩もビックリする・・・はず・・・」

そこで初めて、かすみが俺の存在に気付いた。

「そ、天先輩?!?いつからいたんですか?!?」

「天さんなら、『お待たせ〜♪』からずっといたよ？」

「最初からじゃん!?部室に入って来た瞬間、この格好で現れてビックリさせる計画が

台無しだよお!」

「かすみちゃん、計画なら上手くいったみたいだよ？璃奈ちゃんボード『ニヤニヤ』」

「え？」

ニヤニヤしながら俺を見るしず子とりな子。

二人にはバレていたようだ。

「フツツ、天さんでもそんな顔をすることがあるんですね」

「しず子、そのリボン燃やしていい？」

「照れ隠しで後輩に当たるの止めて下さいよ!?!」

「りな子も、璃奈ちゃんボード燃やすね？」

「天さん怖い!? 璃奈ちゃんボード『ガクガクブルブル』」

「やかましいっ! 先輩命令じゃあああああっ!」

「嫌ああああっ!?!」

「助けてえええええっ!?!」

「ちよ、天先輩!? 急にどうしたんですか!?!」

「後輩と戯れてるだけだよバカヤロオオオオッ!」

「お疲れ様です」

そこへ同じく後輩の、三船栞子が入って来た。

「あつ、栞子さん!」

「助けて栞子ちゃん! 璃奈ちゃんボード『SOS』」

「しお子お! 天先輩が変になっちゃったあ!」

「はい!?!」

「しお子も生徒会長の腕章を燃やしてやるううううっ!」

「ちよ、天さん!?! 何があっただんですか!?!」

この後、しお子によって事態は沈静化。

俺達は四人揃って正座させられ、しお子に説教されるハメになったのだった。

\*\*\*\*\*

《かすみ視点》

「もうっ！天先輩のせいで、しお子に怒られちゃったじゃないですかあ！」

「しお子怖すぎワロタ」

「ホントに反省してます!?!」

同好会の練習も終わり、かすみ達は電車に乗って家に帰る途中でした。

あれだけ怒られたというのに、天先輩はケロツとしています。

「っていうか、何で急に暴走しちやっただんですか!?!かすみんビックリですよ！」

「んー・・・かすみのせいかな」

「かすみんが何をしたっていうんですか!?!」

「・・・かすみって罪深い子だよね」

「何ですか!?!」

うう、天先輩は酷いです・・・

「アハハ、ゴメンゴメン」

天先輩は苦笑すると、かすみんの頭を優しく撫でてくれました。

「っ……もう……」

天先輩はホントにズルいです。

だって……

大好きな人にこんな優しく頭を撫でられたら、何も言えないじゃないですか……

「……罪深いのは天先輩の方です」

「失礼な、こんな清い先輩に向かつて」

「どこがですか!？」

そんなやり取りをしていると、かすみんの最寄り駅に到着してしまいました。

もつと天先輩とおしゃべりしたかったなあ……

「じゃあ、天先輩……また明日」

そう言つて、電車を降りようとしたかすみんの手を……

天先輩が掴みました。

「えっ……天先輩?！」

驚いて振り返ると……

あの天先輩が、真剣な表情でかすみんを見していました。

「ゴメン、もう少し・・・あともう少しだけ、かすみと一緒にいたいんだけど」  
「っ・・・」

顔が一気に熱くなるのを感じます。

かすみ達の顔は、『夕陽のせい』では誤魔化せないほど真っ赤になっているのでした。

## 【上原歩夢】 夢に向かつて歩く

「うわああああんっ！天先輩いいいいっ！」

「天さん・・・ひつぐ・・・ご卒業、おめでとうございます・・・ぐすっ・・・！」  
「かすみ、しずく・・・ありがとう」

泣いているかすみとしずくを、苦笑しながらそつと抱き寄せる。

今日は俺達三年生にとつて、最後の登校日・・・

虹ヶ咲学園高等部の、卒業式当日だった。

「天さん、卒業おめでとう。璃奈ちゃんボード『ニッコリ』」  
笑っている表情のボードを出す璃奈。

いつもと変わらないように見えるが、俺は気付いていた。

ボードの脇から見える璃奈の頬を、涙が伝っていることに。

「・・・ありがとう、璃奈」

あえて指摘はせず、璃奈の頭を優しく撫でる俺。

「卒業しても、凶々しく遊びに来るから。この人達みたいに」

「天!? どういう意味よ!？」

「アハハ、天くんは手厳しいなあ」

抗議の声を上げる果林さんと、苦笑しているエマさん。

去年卒業したこの人達は、『卒業しましたよね?』と疑問に思うほど頻繁に遊びに来ていた。

今日も俺達の卒業式ということで、こうして来てくれている。

「でも天くん、嬉しそうにしてくれるじゃ〜ん♪」

「誰も『嬉しくない』とは言っていないでしょ」

「照れちゃって〜♪このこの〜♪」

抱きついてくる彼方さん。

相変わらず距離が近いなあ・・・

「そういうえば、愛とかせつ菜はどうしたのよ?」

「愛は運動部の後輩達に挨拶してくるそうです。せつ菜も生徒会の後輩達に呼ばれるみたいで、葉子と一緒に生徒会室に行きましたよ」

「あら、モテモテじゃない。どこかの誰かさんと違って」

ニヤニヤしている果林さん。

やれやれ・・・

「俺だってモテモテでしょう。こんなに寂しがってくれる可愛い後輩達と、卒業して

るのにこうして来てくれる美人な先輩達がいるんですから」

「つ……よ、よくそんな恥ずかしいことを言えるわね……」

「えっ、照れてます？自称クールビューティーな果林さん、照れてます？」

「う、うるさいっ！っっていうか、自称した覚えないからっ！」

「果林ちゃん、天くんをからかうのは止めておきなよ。果林ちゃんじゃ敵わないよ」

「うう、エマあ……」

「二人の絡みも相変わらずだね」

先輩達と戯れていると、涙を拭いたしずくがキョロキョロと辺りを見回した。

「ところで、歩夢さんと侑さんはどちらですか？」

「私ならここにいますよ？」

「うわっ!？」

俺の背後からひよっこり現れた侑を見て、ビックリするしずく。

「おお、侑。歩夢はどうした？」

「中庭で桜を見てるよ」

侑はそう言うのと、ニッコリ笑った。

「……行つてあげて。歩夢は天を待つてるはずだから」

「……了解」

ホント、良い幼馴染を持ったよ・・・

「じゃ、ちよつと行つて来るわ。後で合流するから、皆で卒業パーティーやろう」  
「オツケー！」

「彼方ちゃん、腕によりをかけてご馳走作っちゃうよ〜♪」

「かすみんもコツペパンたくさん用意しますね！」

「私もスイスの郷土料理でも作ろうかなあ」

「飾りつけは任せて。璃奈ちゃんボード『むんっ』」

「私も手伝うよ、璃奈さん」

「あんまり遅くなるんじゃないわよ？」

「分かつてますよ、果林母さん」

「誰が母さんよ!？」

「分かつてますよ、果林婆さん」

「しばき倒すわよ!？」

「冗談ですつて。行つてきます」

俺は苦笑しながらそう言うと、中庭へ向かうのだった。

もう一人の幼馴染・・・愛しの彼女に会いに行く為に。

\*\*\*\*\*

「凄いなあ．．．」

感嘆の声を上げる俺。

中庭はたくさんさんの桜が咲き誇っており、美しい光景が広がっていた。

そしてひらひらと桜の花びらが舞い落ちる中に佇む、可憐な美少女．．．

「っ．．．」

あまりにも絵になるその姿に、俺は思わず見惚れてしまった。

桜を見つめていた彼女だったが、視線に気付いたのか俺の方を振り向く。

「あつ、天くん！」

歩夢がニツコリ笑い、こちらへ歩み寄ってくる。

「もう、来てたなら声かけてよ」

「ああ、ゴメン．．．ちよつと見惚れて」

「フフツ、分かるよ．．．綺麗だよね、桜」

再び桜を見上げる歩夢。

見惚れていたのは桜じゃなくて……と言うのは、何だか恥ずかしかつたので言わないでおいた。

「……卒業なんだね、私達」

少し寂しそうな歩夢。

「何だか、あつという間だったなあ……」

「思い返してみると、なかなか濃い高校生活だったよね」

「アハハ、確かに」

幼馴染三人で同じ高校に入って、侑がスクールアイドルにハマって、俺も歩夢も巻き込まれて……

スクールアイドル同好会に入って、皆に出会って、一緒に頑張って……  
本当にあつという間だった気がする。

「……歩夢はさ、いつも一生懸命だったよね」

「えっ、そうかな？」

「うん。いつも一生懸命で、いつも真剣で……凄くなって思ってた」

出来ないことは出来るまでやろうとするし、こつちが止めないといつまでも練習して  
るし……

歩夢の性格は分かってるつもりだったけど、スクールアイドルとしての上原歩夢は俺

の想像以上だった。

「歩夢は昔から、真つ直ぐで一途だったもんなあ．．．幼稚園の頃『大きくなったら、天くんのお嫁さんになる!』って宣言してから、全くブレなかったもんね」

「うう．．．思い返してみると、ちよつと恥ずかしいかも．．．」

頬が赤くなる歩夢。

今さら恥ずかしかるのか．．．

「小学生の時、クラスの男子達に『お前アイツのこと好きなんだろうー!』ってからかわれたけど．．．歩夢が当たり前みたいな顔して『うん、そうだよ?』って首を傾げるもんだから、男子達も『お、おう．．．』ってなつてたよね」

「だ、だつて本当に好きだったし．．．」

「中学の時も、『バカツプルがきたぞ!ヒューヒュー!』って囁し立てられたりしたけど．．．『えへへ、ありがとう♪』って照れ臭そうにお礼を言うもんだから、周りも『あ、うん．．．』ってなつてたし」

「て、てつきり祝福されてるんだと思つて．．．」

「高校に入つてからも．．．」

「もう止めてえええええつ!?!」

真つ赤な顔を両手で覆う歩夢。

可愛すぎかオイ。

「……まあ、俺は嬉しかったけど」

そつと歩夢の腰に手を回す。

「いつも俺のことを好きでいてくれて、本当にありがとう……俺も好きだよ、歩夢」  
「天くん……」

甘えるように、俺に寄りかかってくる歩夢。

歩夢は本当に、俺の自慢の彼女だ。

俺なんかには勿体無いくらいなの、本当に素敵な子だと思う。

だからこそ俺は、歩夢を幸せにしたいと強く思うのだ。

「来月から大学生活が始まるけど、頑張つて勉強するから。それでしつかり就職して、お金を稼げるようになるから。そしたら、ちゃんと歩夢に言うよ……『俺のお嫁さんになつて下さい』つて」

「つ……」

「その時、歩夢の気持ちが変わつてなかったら……その先の人生を、俺と一緒に歩んでほしい。だから、少し待つててくれると嬉しいな」

「……うん、待ってる」

涙を拭う歩夢。

「つていうか、私の気持ちは変わらないよ？」

「いや、分かんないじゃん？ 大学で超が付くほどのイケメンに出会うとか・・・」

「フフツ、分かってないのは天くんだよ」

クスクス笑う歩夢。

「ねえ天くん、私の名前は？」

「いや、名前つて・・・歩夢でしょ？」

「そう、『夢』に向かって『歩』く・・・それで『歩夢』だよ」

微笑む歩夢。

「『天くんのお嫁さんになる』つていう私の夢は、昔からずっと変わらないよ。その夢に向かつて、私はここまで歩いてきたんだもん。私の歩みは、今さら止まらないんだから」

「・・・ズルいなあ」

思わず歩夢を抱き締める。

こういうことをサラツツと言える俺の彼女は、本当に良い女だと思う。

これ以上惚れると、歩夢依存症になりそう・・・

「天くん・・・」

「歩夢・・・」

目を閉じる歩夢。

俺はそんな歩夢に顔を近付け．．．唇を重ね合わせた。

唇から伝わってくる歩夢の温もりが、愛おしくて仕方ない。

「っ．．．フフツ、学校でしちゃったね」

「アハハ．．．しかも中庭でね」

こんな開けた場所、誰に見られてもおかしくないよな．．．

「わお、大胆．．．！」

「はわわわわ．．．！」

「ちよ、せつつー!?しっかりして!？」

案の定、見られていたようだ。

感心している侑、顔を真っ赤にして悶えるせつ菜、慌てている愛の姿が目映った。

「侑ちゃん!?愛ちゃんとせつ菜ちゃんも!?いつの間にな!？」

「二人を見かけて声を掛けようとしたんだけど、何か良い雰囲気だったから声を掛け

辛くて．．．ゴメン」

「お、お二人が．．．キ、キキキキスして．．．！」

「はいはい、せつ菜ちゃんしっかり」

謝る愛に、せつ菜を介抱する侑。

うん、何かゴメン・・・

「つていうか、愛とせつ菜の挨拶は済んだの？」

「は、はい・・・さつき終わったところですよ」

「じゃあ、皆に合流しようか。卒業パーティーの準備してくれてるだろうし」

「よっしゃー！愛さんお腹ペコペコだよー！」

「私もー！」

「どんな料理が出るのか楽しみですね！」

わいわい盛り上がる三人。

あつ、そうだ・・・

「侑、愛、せつ菜」

「ん？どうしたん天つち？」

首を傾げる愛。

俺は三人の顔を見渡し、笑みを浮かべた。

「卒業おめでとう。皆が同級生で、同好会の仲間で・・・本当に良かった。これからも付き合いは続いていくだろうから、今後もよろしく」

俺の言葉に、三人はキョトンとした後・・・涙腺が崩壊した。

「ぢよっどおとおおおっ！泣がせないでよおとおおおっ！」

「侑!?!」

「天つぢいいいいいっ! ウチらはズツ友だよおおおおっ!」

「天ぎああああんっ! 大好きですううううっ!」

「愛とせつ菜も落ち着いてくれない!?!」

「ちよつと皆!?! 私の旦那さんに抱きつくの止めてくれる!?!」

「歩夢は嫉妬してる場合じゃないから!?! っていうかまだ結婚してないから!」

何とか皆を落ち着かせる。

やれやれ、コイツらときたら・・・

「ぐすっ・・・ねえ、ちよつと青春っぽいことやらない?」

涙を拭った侑が、卒業証書の入った筒を突き出す。

あつ、なるほど・・・

「よし、やろうか!」

「実は私、こういうの憧れてたんです!」

「愛さん全力出しちゃうよー!」

「フフツ、無くさない程度にしてね?」

五人で円形に並び、それぞれの筒を突き出す俺達。

そして・・・

「せーのっ！」

「「「卒業、おめでとー！」「」」」

大きく響く俺達の声。

五本の筒が、桜の花びらと共に宙を舞うのだった。

## 【国木田花丸】背中を押す

「んー、どうしようかなあ．．．」

自分の家で、白紙のノートを前に悩んでいる俺。

次のA q o u r sの新曲の作詞を、千歌から任されてしまったのだ。

「新曲ねえ．．．」

もう3月だし、卒業ソングが良いかなあ．．．

いや、桜ソングも良いかも．．．

頭の中で、色々と考えていた時だった。

『ピーンポーン』

「ん?」

玄関のチャイムが鳴った。

もう夜だつていうのに、一体誰だろう？

『ピーンポーン』

「はい」

とりあえず玄関へ行つて、ドアを開けてみる。

そこに立っていたのは・・・

「・・・ずらあ」

何故かしよぼくれている花丸だった。

今にも泣き出しそうな顔をしている。

「は、花丸・・・？」

「っ・・・ずらああああつ！」

「うおっ!？」

花丸が泣きながら抱きついてくるので、慌てて受け止める。

「ど、どうした!?!何かあった!?!」

「ぐすつ……家出……してきたずら……ひつぐ……」  
「家出!?!」

そういえば、やたら大きい荷物を持つてるな……

まさか花丸が家出なんて……

「……何があつたの?」

「うう……お母さんが……」

「満点さんが……?」

「……マルのひなあられ、勝手に食べちやつたずら」

「帰れ食いしん坊娘」

「酷いずら!?!」

シヨックを受ける花丸なのだった。

\*\*\*\*\*

『本当に申し訳ないっ!』

謝ってくる満点さん。

とりあえず花丸を家に招き入れた俺は、満点さんに電話して事情を説明したのだった。

「花丸は、ひなあられがどうか言ってみましたけど・・・」

『あ、ありのまま今起こったことを話すよ・・・私はテレビの前でひなあられを食べていたと思ったら、いつの間にか消えていた・・・何を言っているのか分からないと思うけど、私も何が起きたのか分からなかった・・・頭がどうにかなりそうだった・・・マジックだとかミステリーだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてない・・・もつと恐ろしいものの片鱗を味わったよ・・・』

「長々とポル●レフのセリフをパクりましたけど、貴女がテレビ見ながらひなあられ全部食べちゃっただけですよね。いつの間にか消えていたって、貴女の胃袋に消えていっただけの話ですよね」

『・・・そうとも言う』

「そうとしか言いません」

思わず溜め息をついてしまう。

そういえば、今日はひなまつりだけ・・・

『・・・花丸、やっぱり怒ってる?』

「さつきまでは怒ってたんですけど・・・」

「美味しいすらぁ・・・!」

「・・・夕飯を食べてないって言うのでご馳走してあげたら、機嫌が直りました」

『アハハ、あの子は食べ物に目が無いから・・・』

「この親にしてこの子あり、ですね」

『うぐっ・・・』

言葉に詰まる満点さん。

やれやれ・・・

「どうするんですか?今から迎えに来ます?」

『・・・悪いんだけど、今夜は花丸を泊めてあげてくれないかな?』

「俺は構いませんけど、年頃の娘を男の家に泊めさせるのは親として良いんですか?」

『責任を取ってくれるなら、手を出しても良いよ?』

「おい母親」

『B83を誇る豊満な胸を、満足するまで揉みしだいても良いよ?』

「サラツと娘のバストサイズを暴露しないで下さい」

『アハハ、まあ私は天くんを信頼してるから。それに明日は花丸の誕生日だし、花丸も

天くんと一緒に過ごせた方が嬉しいだろうしね』

そう、明日は3月4日・・・花丸の誕生日なのだ。

普通に学校でお祝いしようと思っていたが、まさかこんな形になるとは・・・

『とうわけで、孫の顔を楽しみにしてるからね!』

「なるほど、孫から満点おばあちゃんって呼ばれたいんですね」

『そ、それは何か嫌だっ!満点お姉ちゃんって呼んでもらうもんっ!』

「はいはい、ポツシユートポツシユート」

『ちよ、天くん!』

何か喚いていたが、無視して電話を切る。

今度満点おばあちゃんって呼んであげよう。

「天くん?お話は終わったずら?」

夕飯を食べ終えたららしい花丸が、ちよこんと首を傾げる。

「ああ、うん。とりあえず、今夜はウチに泊まっていきなよ。もう夜遅いし」

「・・・迷惑じゃないずら?」

「押しかけといて何言ってるの?」

「うぐっ・・・」

言葉に詰まる花丸。

やれやれ・・・



「そんな部屋の隅にいらなくても……」

「近付かないで欲しいすら……むしやむしや……天くんは危険人物すら……もぐもぐ……」

「警戒するか食べるかどっちかにしたら？」

こつちを睨みながらお菓子を食べる花丸に、思わず呆れてしまう。

やれやれ……

「じゃ、俺は作詞の続きでもしようかな」

再び新曲について考えを巡らせる。

さつきは卒業ソングとか、桜ソングとか考えてたんだよな……

「……卒業かあ」

俺もいずれ高校を卒業するわけだけど、卒業後はどういう道を進むんだらうなあ……

「花丸はさ、高校を卒業した後のことって考えてる？」

「……急にどうしたずら？」

「いや、何となく気になってさ」

「んー……とりあえずマルは、大きな図書館がある大学に進みたいずら」

首を傾げながらも、俺の質問に答えてくれる花丸。

「それで卒業後は、本に携わる仕事に就けたら良いなつて……まだ漠然とした考えだけど、そう思つてゐるすら」

「なるほど……花丸らしいね」

「何だかんだ、ちゃんと考えてるんだなあ……」

「天くんは考えてるすら？」

「真姫ちゃんか鞠莉と結婚して、逆玉の輿に乗つて毎日遊んで暮らしたい」

「ヒモになる気満々!?最低な人間の発想すら!」

「冗談だつて。まあお金とか関係無しに、真姫ちゃんや鞠莉みたいな美女と結婚出来たら幸せだろうけど……あの二人は男なんて選り好みだし、俺なんて相手にされないよ」

「……天くんが鈍感で良かったすら。これで鋭かったら、本当にヒモ生活を実現させてしまふところだったすら」

「何故かホツとしている花丸。」

「何をぶつぶつ言つてるんだらう？」

「まあ真面目な話、ちゃんと決めてないんだよね。高校を卒業して就職するのか、それとも大学に進学するのか」

「やりたいことが無いすら？」

「いや、その逆。色々あるんだよね」

『やってみたい』と思うことは、実は結構多かつたりするのだ。

例えば……

「穂乃果ちゃんのお父さんみたいな和菓子職人に、真姫ちゃんのお父さんみたいなお医者さん……にこちゃんみたいな芸能事務所の裏方さんとか、海未ちゃんみたいに教師を目指すのも良いよね」

「け、結構多いからね……」

「そうなんだよ。果南の影響でダイビングの楽しさにも気付いたし、ダイビングのインストラクターも良いなって」

そう考えると、やりたいことがたくさんあるんだよね……

何を指すかによって、就職か進学か決まってくるし……

「ただ……どの道、一度内浦を離れることになると思う」

「つ……東京に行くずら……?」

「そうなるかな。就職にせよ進学にせよ、いつまでもこの家を借りてるわけにはいかないし……」

元々、この家は小原家の所有物だ。

まあ鞠莉のことだから、俺が頼めば引き続き貸してもらえとは思いますが……

ずっと厚意に甘えているわけにもいかなからな。

「まあ卒業後の話だし、まだまだ先……」

「嫌ずらっ！」

「うおっ!？」

花丸が勢いよく抱きついてくる。

身体が小刻みに震えていた。

「ちよ、花丸! 『近付くな』 って言ってなかったっけ!？」

「もうどうでもいいすら! 思う存分マルに手を出すと良いすら!」

「はい!？」

「マルの胸を好きナだけ揉みしだくと良いすら!」

「何言ってるの!？」

「大きさが物足りないなら、頑張ってもっと大きくなるすら!」

「これ以上大きくしようとしてんの!？」

「鞠莉ちゃんを超えて、A q o u r s で一番の巨乳になってみせるすら!」

「いやもう十分だから! 無理しなくて良いから!」

「だから……だから……!」

涙声の花丸。

「行つちやヤダ・・・ひつぐ・・・マルを、置いていかないで・・・ぐすつ・・・！」  
「・・・可愛いなあ、花丸は」

しつかりと花丸を抱き締める。

俺は今、花丸が愛おしくて仕方なかった。

「ねえ、花丸・・・一緒に行かない？」

「え・・・？」

目に涙を浮かべたまま、キョトンとする花丸。

「一緒について・・・」

「東京だよ。花丸も一緒にどうかなくて」

花丸の目元の涙を、指でそつと拭う。

「東京の大学なら、大きな図書館があるところもたくさんあるだろうし。花丸が気に入る大学が、きつとあるんじゃないかな」

「マ、マルが・・・東京の大学に・・・？」

息を呑む花丸。

「で、でも・・・マル、東京でやっていけるか・・・」

「大丈夫。花丸は一人じゃないでしょ」

花丸の頭を撫でる俺。

「俺がいるし、*μ* sの皆だっている。ダイヤさんも東京の大学に進学するって言うし、それならルビイも同じことを考えるんじゃないかな？」

「オ、オラ……一人暮らし、出来るかな……？」

「じゃあ……俺と一緒に住む？」

「っ……」

花丸の顔が、ボンツと真つ赤に染まる。

可愛いなあ……

「まあさつきも言っただけど、まだ先の話だから。ゆっくり考えてくれたら良いよ」

「わ、分かったずら……」

花丸はそう言うと、俺の胸に顔を埋めた。

「もうちよつと……もうちよつとだけ、こうしても良いずら……？」

「……勿論」

お互いを抱き締め合う、花丸と俺なのだった。

\*\*\*\*\*

## 《花丸視点》

「おつ、もうすぐじゃん」

天くんが時計を見ながら呟く。

もうすぐ深夜0時……つまり日付が変わり、マルの誕生日になるのだ。

「つていうか、大丈夫？寒くない？」

「平気すら」

マル達は今、縁側に座って夜空を眺めていた。

もう3月とはいえ、夜はまだ冷える時期だ。

マル達は身を寄せ合い、同じ毛布にくるまっていた。

「何もこんな時間に、夜空を見なくても良いんじゃない？」

「せっかくの満月なんだから、見なきゃ損すら」

そう、今夜は満月だった。

真ん丸な黄色いお月様が、真つ暗な夜空に綺麗に浮かび上がっている。

「そういえば天くん、新曲の作詞はどうするずら？」

「んー……方向性は決まったかな」

微笑む天くん。

「3月は卒業シーズンだけど……卒業つて『別れ』であるのと同時に、新しい『始まり』でもあるでしょ？」

「確かにそうずらね」

「だから卒業して、ここからスタートする人達……前に進もうとしている人達に向けた、応援ソングにしたいなって」

「応援ソング……」

それは良いアイデアかもしれない。

マル達の歌で、そういった人達の背中を少しでも押し上げてあげることが出来たら……「これまでの思い出を抱きつつ、前に進もうとする人達……まだ自分達の知らない、未体験の世界に飛び込もうとしている人達……そんな人達を少しでも応援出来たら、凄く素敵なことだと思うんだよね」

そう言いながら月を見上げる天くんの横顔を見て、思わずドキツとしてしまうマル。こういうことを語る時の天くんは、普段よりカッコ良く見えるのだ。

うう、『惚れた方が負け』ってやつずら……？

「そういうわけだから花丸、新曲のセンターは君に決めた！」

「そんなサ●シミたいなノリで!？」

「相棒のよしチュウやルビチュウと一緒に頑張つて」

「善子ちゃんトルビイちゃんをピ●チュウみたいに呼ぶのは止めるぞら!」

「内浦タウンにサヨナラバイバイ」

「マルは天くんと東京に出る・・・ハッ!」

「はい、言質いただきました」

「ち、違うぞら!今のはノリで・・・」

「えー?ノリでそういうこと言っちゃうのー?」

「うぐっ・・・」

「アハハ、冗談だつて。ちゃんと考えて決めてね」

頭を撫でてくれる天くん。

うう、思わず本音が・・・

本当はもう、答えなんてとっくに出来るぞら・・・

「・・・新曲のセンターを花丸に任せたいっていうのは、本気だよ。応援ソングを作るなら、センターは花丸が良い」

「ど、どうして・・・?」

「花丸が一番、そういう人の背中を押せそうだから」

微笑む天くん。

「『自分には無理だ』っていう思いを振り切つて、勇気を出してスクールアイドルの世

界に飛び込んだ……これまで触れたことのない、未体験の世界に飛び込んだ……そんな花丸だからこそ、あの時の花丸みたいな人の背中を押せると思うんだ」

「マルが……背中を押す……」

「同じように、ルビイと善子も勇気を出して一步を踏み出したでしょ？だからこそ、一年生三人が中心になって歌ってほしいなって……俺はそう思うんだけど」

「……やっぱり天くんはズルいぞら」

そんな風に言われたら、もう『オラには無理』なんて言えない。

『やってみたい』って思ってしまう。

「……あの時もそうだったぞらね」

「あの時？」

「マルがA q o u r sに入る時ぞら」

あの時、天くんがマルに言ってくれたこと……今でも忘れることはない。

『花丸はスクールアイドルをやりたいの？やりたくないの？』

『一番大切なのは、出来るかどうかじゃない・・・やりたいかどうかでしょ』

「天くんがマルの背中を押してくれたから、マルは今スクールアイドルとして活動出来るはず。だから・・・」

決意を固める。

今度はマルの番だ。

「マルも背中を押してあげたい・・・センター、頑張るぞら」

「・・・ありがとう」

笑顔の天くん。

その時・・・

ピ。ピ。ピ。ピッ・・・

「あつ、日付が変わった！」

0時になり、日付が3月4日に変わる。

つまり……

「誕生日おめでとう、花丸」

「フフツ、ありがとうずら」

マルの16歳の誕生日だ。

天くんに祝福され、照れ臭くなってしまうマル。

「天くと二人で、月を見ながら誕生日を迎えるなんて……想像してなかったずら」

「ひなあられを食べちゃった満点さんに感謝だね」

「マルのバストサイズを暴露したから差引きゼロ、むしろマイナスまであるずら」

「アハハ……満点さん、ドンマイです」

苦笑する天くんを横目に、月を見上げるマル。

今のマルには、どうしても天くんに言いたいセリフがあった。

「……月が、綺麗ずらね」

このフレーズの意味を、天くんは知らないかもしれない。それでもマルは、どうしても言っておきたかった。

例えば天くんに、マルの気持ちが届かなかつたとしても・・・

「・・・花丸と見る月だから」

「っ・・・！」

微笑む天くん。

どうやらマルの気持ちは、天くんに届いたようだ。

天くんの顔がゆつくりとマルに近付き、マルはそつと目を閉じる。

そして・・・マルの唇が、優しい温もりを確かに感じたのだった。

後日、天くんが作詞したA q o u r s の新曲が完成した。

曲名は、『未体験HORIZON』・・・

センターを任されたマルは、全力で皆の背中を押すことを誓うのだった。

## 【桜坂しずく】理想のヒロインに・・・

「先輩、おはようございます！付き合ってください！」

「おはよう、しずく。無理」

朝の挨拶と共にされた告白を、あっさり断る俺。

告白を断られたしずくは、不満そうな表情を浮かべた。

「むう・・・自然に告白出来たと思ったのに・・・」

「今のが自然だと思ふなら、しずくの頭はおかしいと思う」

「辛辣!?!」

「・・・朝から何してるんですか」

いつの間にか近くへやって来ていた葉子が、呆れた表情で俺達を見ていた。

「聞いてよ葉子さん！先輩が私の告白をまた断ったんだよ!?!」

「聞いてましたよ。情緒も何も無い告白でしたね」

「葉子さんまで辛辣過ぎない!?!」

「っていうか、もう何回告白してるんですか・・・」

「今回で十五回目だよ」

「・・・覚えてる時点でドン引きです」

「何で!?!」

「それよりしずく、今日はリボンの色が違うくない?」

今日のしずくの髪を結んでいるのは、いつもの赤いリボンではなく白いリボンだった。

「気付いてくれました!?!その違いに気付いてくれるのはポイント高いです!三百億ポイントあげちゃいます!」

「ポイント数がバカみたいに高いんですけど」

「実はあの赤いリボン、昨日切れちゃって・・・でも大丈夫です!赤いリボンは切れても、先輩との赤い糸は切れてないので!」

「俺にはそんな糸見えないわ」

「私には見えます!」

「センチー!ここに幻覚が見えてる子がいます!」

「ちよつと!?!私は正常ですつてば!?!」

「・・・相変わらず仲は良いんですよねえ」

何とも言えない表情で俺達を見る葉子なのだった。

\*\*\*\*\*

「美味っ！この卵焼き美味っ！」

「フフツ、た〜んと召し上がれ〜♪」

彼方さん特製の卵焼きを頬張る俺。

昼休み、俺は三年生三人と昼ご飯を食べていた。

「そういえば天、またしずくちゃんとの告白を断ったそうじゃない。さつき栞子ちゃんから聞いたわよ?」

「ふいふおふおふいふえふ（いつも通りです）」

「まず卵焼きを飲み込んでから話さないよ!」

「アハハ、お茶どうぞ」

「ふおふお（どうも）」

果林さんからツツコミを受けてしまったので、エマさんからお茶をもらい卵焼きと共に流し込む。

ふう・・・

「いつも通りです。後輩とのコミュニケーションですよ」

「いや、そんなコミュニケーション聞いたことないんだけど」

呆れる果林さん。

一方、エマさんは不思議そうな表情を浮かべていた。

「しずくちゃんは可愛いし、性格も良いと思うんだけど・・・天くんとも仲良しだし、逆にどこが不満なの？」

「おっぱいです」

「そこ!？」

「ああ、別に高望みはしてませんよ? 最低でもB85は欲しいだけです」

「十分高望みだと思うよ!?! 彼方ちゃんと同じサイズでことですよ!？」

「エマちゃん、しれつと彼方ちゃんのバストサイズを暴露しないでほしいなあ・・・」  
ちよつと恥ずかしそうな彼方さん。

恥ずかしがる彼方さん、新鮮だなあ・・・

「まあ真面目な話、しずくに不満なんて無いですよ。しずくみたいな子が彼女になつてくれたら、きつと幸せなんだろうなと思います」

「じゃあ何で告白を断るのよ?」

「・・・そうですねえ」

果林さんの問いに、俺は苦笑いを浮かべた。

「しづくがどこまで本気なのか、分からないから・・・ですかね」  
俺の言葉に、首を傾げる三年生三人なのだった。

\*\*\*\*\*

《しづく視点》

「そんなわけで、またしても断られてしまいました」

「アハハ・・・」

何故か苦笑している侑さん。

私は二年生の先輩方と一緒に、お昼(ご)飯を(ご)一緒にさせていただきました。

「そつかあ、愛さんが考えた告白も上手くいかなかったかあ・・・」

「えつ、愛ちゃんが考えた告白だったの？」

「そうなんだよ。なかなか良い考えだと思ったんだけど」

「・・・愛ちゃんって、見た目の割に恋愛偏差値低いよね」

「歩夢に酷いこと言われた!？」

シヨックを受ける愛さん。

歩夢さんでも、そんな辛辣な言葉を口にすることがあるんですね・・・

「ですが天さんは、どうして頑なにしずくさんからの告白を断るんでしょう?」  
首を傾げるせつ菜さん。

「しずくさんほどの美少女からの告白であれば、普通はすぐOKしそうですが・・・」  
「び、美少女って・・・」

恥ずかしくなってしまう私。

せつ菜さんはストレートに褒めて下さるので、嬉しい反面ちよつと恥ずかしいんですよね・・・

「歩夢とゆうゆは、天つちと幼馴染だよね? 心当たりとかある?」

「おっぱい」

「はい!？」

同時に返ってきた答えに絶句する愛さん。

いや、おっぱいって・・・

「天はおっぱい星人だからなあ・・・最低でも、B85は求めてると思うよ」

「最低ライン高過ぎない!？」

「同好会で言うとは、三年生三人以外は眼中に無いんじゃないかな」

「それはそれで何か腹立つんだけど!？」

「愛ちゃんはB84だし、あと一步じゃん。頑張つて」

「ゆうゆ!?!何で愛さんのバストサイズ知ってるの!？」

愛さんのツツコミが止まらない。

B85かぁ・・・

「よし、ちよつと高●クリニック行つてきます」

「しずくさん!?!早まらないで下さい!！」

せつ菜さんに止められる。

良い案だと思つたのに・・・

「まあ冗談はさておき、心当たりはあるよ」

私を見つめる歩夢さん。

「多分だけど・・・しずくちゃんが本気なのか、疑ってるんだと思う」

「ええっ!?!」

驚く私。

疑ってるって・・・

「私が本気じゃないと思われてるってことですか!?!」

「そうだと思ふよ」

頷く侑さん。

「しずくちゃん、何度も天に告白してるけどさ・・・断られることを前提に告白してる  
ところがあるよね」

「っ・・・」

侑さんの指摘に、何も言えなくなってしまう私。

実際・・・その通りだったから。

「ど、どういうことですか・・・？」

「つまりね、OKしてもらえないなんて思ってたこと。もつと言っちゃうと、本気で  
気持ちを伝えにいつてないってことだよ」

せつ菜さんの疑問に答える歩夢さん。

「だから天くんも断ってるんだと思う。しずくちゃんの本気度が見えないから」

「そもそも、本当に好きなのかどうかも疑ってるんじゃないかな」

「そんな!？」

侑さんの言葉に慌ててしまう私。

「それは本当です！私は先輩のことが好きなんです！」

「だったら、真剣に伝えなきゃダメだよ」

真面目な表情の侑さん。

「天はそういうところ、本当に鋭いから。しずくちゃんが真剣に気持ちを伝えなきゃ、天だって真剣に向き合ってくれないよ」

真剣に・・・気持ちを伝える・・・

「・・・分かりました。やってみます」

覚悟を決める私なのでした。

\*\*\*\*\*

「ちよ、かすかす!?!引つ張らないでよ!?!」

「誰がかすかすですか?!いいから早く来て下さい!」

「天さん、早く早く」

放課後、俺はかすみと璃奈に連行されていた。

一体どこへ連れて行かれるのか・・・

「ふう・・・よし、到着です!」

「いや、到着して・・・」

連れて来られた場所は、校舎の外の広場だった。

こんなところに連れて来て、一体何だと言うのか・・・

「天さん、あそこ見て」

璃奈が二階のテラスを指差す。

そこには・・・

「え、しずく・・・?」

何やら覚悟を決めた表情のしずくが立っていた。

しずくは深く息を吸うと、大きな声で叫び始めた。

「皆さん、こんにちは! 虹ヶ咲学園一年、桜坂しずくです!」

下校しようとしていた生徒達が、何事かと足を止めてしずくに注目する。

「私は今、二年の絢瀬天先輩に恋をしています!」

「ちよつとおおおおおっ!?! 何してんのアイツううううっ!?!」

慌てて止めに行こうとした俺の両腕を、かすみと璃奈がガシツと掴んだ。

「ダメです先輩! しずくの子の話を最後まで聞いて下さい!」

「お願い天さん! 璃奈ちゃんボード『ウルウル』」

「いや、だって・・・」

「私は先輩のことが大好きです！心の底から愛してます！」

「恥ずかしいから止めてえええええっ!？」

何なのアイツ!？」

羞恥心はどこへ行ったの!？」

「先輩と付き合いたい！先輩の恋人になりたい！その気持ちに嘘はありません！で

も……」

俯くしずく。

「私が本気で告白して、先輩にフラれてしまったら……今のような仲良しな関係では  
いられなくなる……私はそれが怖かったです」

独白を続けるしずく。

「だからいつも、本気とも冗談ともつかないような告白をして……先輩に受け入れて  
もらえなくて当然です。そんな曖昧な告白をして、真剣な答えを返してくれるはずがあ  
りません。私はそれが分かっていたながら、ずっと逃げてきました」

「しずく……」

「でもっ……!？」

涙声で叫ぶしずく。

「もう逃げたくないっ！もしこの気持ちを受け入れてもらえなくてもっ！もし今みた

いな関係でいられなくなってもっ！それでも私はっ・・・！！」  
顔を上げるしずく。

その目からは、涙が溢れていた。

「先輩っ！私は先輩のことが大好きですっ！だから・・・だから私を・・・私を先輩の彼女にして下さいっ！絶対に、先輩の理想のヒロインになつてみせますからっ！」

「っ・・・」

しずくの言葉が、心に響いた。

こうしちゃいられない・・・！！

「かすみ！璃奈！手を離してくれ！」

「了解です！」

「行つてらっしやい！」

二人の手が離れた瞬間、ダツシユで二階へ続く階段へと向かう。  
階段を駆け上がり、テラスへと出ると・・・

目を真っ赤にしながらも、凜とその場に立つしずくがいた。

「しずくっ！」

「っ!?!先輩?！」

驚いた表情のしずく。

俺はしずくに駆け寄ると・・・思いつきりしずくを抱き締めた。

「ふえっ!？」

しずくの顔が真っ赤に染まるが、そんなのお構いなしに強く抱き締める。

「・・・ありがとう、しずく」

「せ、先輩・・・?」

「しずくの気持ち・・・ちゃんと伝わったから」

俺はそう言うのと、自分の素直な気持ちを言葉にした。

「・・・好きだよ、しずく」

「っ・・・」

「俺の彼女に・・・俺だけのヒロインになってほしい」

微笑む俺。

「俺と・・・付き合ってくれる?」

「っ・・・はいっ・・・!」

涙を流しながらも、嬉しそうに微笑むしずく。

「喜んで・・・!」

抱き合う俺達。

すると・・・

『パチパチパチパチ！』

広場にいた生徒達が、一斉に拍手し出した。

「おめでとー！」

「お幸せにー！」

「彼方ちゃん、感動しちゃったよー！」

「二人とも愛してるよー！愛だけにー！」

「・・・何か聞き覚えのある声があるんだけど」

「奇遇ですね先輩。私も同じことを思いました」

姿は見当たらないが、確実にいるな・・・

恐らく、同好会メンバーは全員揃っているんだろう。

「・・・ま、いつか」

俺は溜め息をつくつと、しずくを抱き寄せた。

「わわっ!?!先輩、ちよつと大胆過ぎませんか!?!」

「こんなところで公開告白したヤツに言われたくないんだけど」

「うう、それを言われると・・・」

顔を真つ赤にするしずく。

やれやれ・・・

「・・・これからもよろしくね」

「っ・・・はいっ！」

俺の言葉に笑みを浮かべたしずくは、勢いよく俺に抱きついてくる。

そして・・・

「先輩、大好きです・・・んっ」

「んんっ!!」

『おおっ!!』

公衆の面前で、愛おしそうに俺の唇を奪うのだった。

結果発表は緊張するものである。

「うう……」

明らかに具合が悪そうな海未ちゃん。

ラブライブ予備予選&学校説明会の翌朝、俺は東京へ帰る海未ちゃんを見送りに沼津駅までやって来ていた。

「だから『飲み過ぎるな』って言ったのに……」

海未ちゃんを支えつつ、溜め息をつく俺。

学校説明会終了後、海未ちゃん・麻衣先生・翔子先生・榛名先生の四人は俺の家で飲み会を敢行していた。

俺は早々に寝たのだが、四人は明け方まで飲んでいたらしい。

今朝起きてリビングに行ったら、四人とも床に転がって爆睡してたもんな……

全員「雷鳴●卦」で叩き起こしたけども。

「先生方は仕事だから仕方ないけど、海未ちゃんはもう少し休んでから帰ったら？」

「そうしたいのは山々なんですけど、今日は午後から講義があつて……二日酔いで休むなんて嫌ですから……」

「真面目だねえ……」

俺だったら絶対サボるけどな……

そんなことを考えながらホームへ向かうと、ちょうど電車が到着するところだった。ドアが開き、海未ちゃんがフラフラしながら乗り込む。

「すみません、天……これから学校があるのに、わざわざ送ってもらって……」

「気にしないの。俺と海未ちゃんの仲でしょ」

申し訳なさそうにする海未ちゃんの頭を、苦笑しながら優しく撫でる。

「電車の中でちゃんと休むんだよ。お茶とサンドイッチも渡しておくから」

「すみません、何から何までありがとうございます……」

海未ちゃんに手提げ袋を渡す。

「ああ、そうでした……A q o o r sの皆に伝言をお願い出来ますか？『決勝ステー

ジは必ず見に行きます』と」

「いや、気が早くない？まだ予備予選を突破したかも分からないのに……」

「突破しますよ、必ず」

断言する海未ちゃん。

「動画は見せてもらいましたが、素晴らしいパフォーマンスでした。あれなら予備予選突破は間違いありません。それに加えて、昨日の学校説明会でのパフォーマンス……」

あれほどの力があるのなら、地区予選突破も難しくないでしょう。まず間違ひなく、決勝まで勝ち進むでしょうね」

「珍しく自信満々だね？いつもなら『油断は禁物です』とか言うのに」

「ですが、油断など微塵もしていないでしょう？」

「勿論。ラブライブが甘くないことは、全員身を持って知ってるからね」

「フフツ、それなら大丈夫です」

微笑む海未ちゃん。

「私も応援していますから。頑張ってくださいね」

「ありがとう。頑張るよ」

どちらからともなく抱き合う俺達。

「また遊びに来てね。待ってるから」

「ええ。天の方こそ、たまには帰って来て下さい。皆会いたがってるんですから」

「そうそう。ウチも天くんには会えないのは寂しいんよ」

「うん、また今度東京に・・・ん？」

「え？」

第三者の声に、思わず固まってしまふ俺と海未ちゃん。

恐る恐る振り向くと・・・

「おはようさん♪」

キャリーバッグを持った希ちゃんが、にこやかに手を振っていた。

「ええっ!?!希ちゃん!?!」

「何故希がここに!?!」

「フフツ、サプライズ大成功やね」

クスクス笑う希ちゃん。

「実はウチ、今日からしばらく連休なんよ。まだ取ってなかった夏季休暇プラス、有給も使ってガッツリ仕事休んだからね」

「そうだったんだ・・・それで遊びに来てくれたの?」

「うん。早く天くんに会いたくて、始発に乗って来ちゃった」

楽しそうな希ちゃん。

これはまさかの展開だな・・・

「海未ちゃんが来てるのは知らなかったなあ・・・具合悪そうやけど大丈夫?」

「ええ、何とか・・・それより希、その荷物が多さ・・・しばらく内浦に滞在するつもりですか?」

「勿論。連休中はずっとこっちで過ごすつもりやしね」

「・・・その間、どこに泊まるつもりですか?」

「天くんの家やけど？」

「だったら私も残りますすううううっ！」

「ちよ、海未ちゃん!？」

慌てて電車を降りようとする海未ちゃんを、必死に電車内に押し留める。

「講義あるんでしょ!?!何で降りようとしてんの!?!」

「天と希を二人きりにするわけにはいきません! 確実に間違いが起きます!」

「間違いって何!?!」

『ドアが閉まります。ご注意ください』

音楽と共にアナウンスが流れる。

すると希ちゃんが、素早くドアに近付き……

「〃わしわしMAX〃!」

「きやあつ!?!」

海未ちゃんの両胸を揉んだ。

悲鳴を上げた海未ちゃんは、慌てて後ずさり希ちゃんから離れ……

海未ちゃんと希ちゃんの間を、ドアが遮った。

「ああつ!?!」

「気を付けて帰ってな〜♪」

『しまった』という表情の海未ちゃんを乗せて出発した電車を、手を振って見送る希ちゃん。

うわあ……

「希ちゃん、相変わらず策士だねえ……」

「海未ちゃんを安全に帰せる上に、海未ちゃんの胸も堪能出来る……一石二鳥やね」

「……変態親父め」

「おっぱい星人に言われたくないなあ」

クスクス笑う希ちゃん。

それを言われると否定できない……

「まあそんなわけで、しばらくお世話になるからよろしくね」

「はいはい……っつか、俺はこれから学校に行かないといけないんだけど……希ちゃん

はどうする？俺の家知らないよね？」

「せやね……そしたら、天くんと一緒に浦の星に行こうかな。鞠莉ちゃんにお願いし

て、校内を見学させてもらいたいんやけど」

「まあ、鞠莉なら即OKするだろうね……じゃ、一緒に行こっか」

「うんっ♪」

嬉しそうに笑う希ちゃんなのだっだ。

\*\*\*\*\*

「ふんふんふん♪」

「フフツ、ご機嫌やね？」

「だって希さんに会えたんですよ!?! テンション上がっちゃいます！」

「嬉しいこと言ってくれるやん、千歌っち♪」

ニコニコしながら会話している千歌と希ちゃん。

放課後、俺達は部室に集まっていた。

「千歌ちゃん、浮かれてるねえ・・・」

「全く、浮かれている場合ではないというのに・・・」

「希ちゃんにサインもらって、千歌と一緒に浮かれてた姉妹が何を言っているのやら」

「ぴぎいつ!?!」

悲鳴を上げる黒澤姉妹。

海未ちゃん・真姫ちゃん・絵里姉に続いて、希ちゃんまで四人目のサイン・・・

千歌も黒澤姉妹も、μ sメンバーのサインをコンプリートする気満々なんだよなあ……

「むむむ……」

一方、何やら真剣な表情で希ちゃんを見つめる鞠莉。

曜が首を傾げる。

「鞠莉ちゃん？ どうしたの？」

「やっぱり凄いわね……」

「ああ、希さん？ オーラがあるよね」

「どうやったたらあんな風になるのかしら……」

「んー、経験を積むしか無いんじゃないかな？」

「経験……確かにマリーは経験ゼロだし、もつと経験するべきかも……」

「いや、ゼロではないでしょ。場数は結踏んでるじゃん」

「ちよつと曜、失礼なこと言わないでちようだい！」

「ええっ!?!」

怒る鞠莉に戸惑う曜。

「何?! 私何か失礼なこと言った!?!」

「場数なんて踏んでるわけないでしょ!?!人をビッチみたに言わないで!」

「誰もそんなこと言っていないよ!? スクールアイドルとして何度もステージに立ってきているわけだし、場数は踏んでるでしょ!?!」

「・・・What? 何の話をしているの?」

「いやだから! 希さんみたいにオーラのあるスクールアイドルになるには、どうしたらいいのかっていう話でしょ!?!」

「いや、どうしたらあんな大きな胸になるのかっていう話なんだけど」

「そっち!?!」

「だって凄いじゃないあの胸! マリーの目測だと、B92のGカップよ!?!」

「何で目測で分かるの!?!」

「おっ、マリチ正解! 流石やね!」

「Yes!」

「まさかのドンピシャ!?! しかも認めちゃうんだ!?!」

曜のツツコミが止まらない。

大変そうだなあ・・・

「希、胸を大きくする秘訣を教えてください!」

「んー、ウチも経験ゼロでこれやけど・・・天くんに触ってもらったおかげかな?」

「いや、触った覚えなんて・・・」

「覚えなんて？」

「・・・さて、飲み物買ってくるかな」

「ちよつと!?!」

部屋を出て行こうとした俺を、果南が慌てて引き止めてくる。

「何で急に話を逸らしたの!?! 確実に触ってるよねえ!?!」

「それでもボクはやつてない」

「映画じゃん!?!」

「天、今すぐマリーの胸を揉みしだいて!」

「オツケー」

「オツケーじゃないぞら!」

花丸に止められる。

チツ・・・

「くつ、今の私じゃ勝ち目が無い・・・ちよつと●須クリニツク行ってくる!」

「はいはい、落ち着きなさい」

「ぐえつ!?!」

溜め息をついた善子が、梨子の襟首を掴んで止める。

何してんの梨子・・・

「もう、皆落ち着きなよ」

呆れた表情の千歌。

「そろそろ予備予選の結果が発表されるからって、気持ち昂ぶり過ぎだつて」

「よく覚えてたね。一番忘れそうなのに」

「天くん!?! 酷くない!?!」

千歌のツツコミ。

てつきり忘れてると思つてたけど・・・

「つていうか、何でそんなに落ち着いてるの? 千歌のくせに」

『くせに』つて何さ!?! 私が落ち着いてちゃいけないの!?!」

「いけないでしょ。キャラ的に」

「どんなキャラ!?!」

「暴走機関車キャラ」

「そんなキャラになつた覚えはないんだけど!?!」

一通りツツコミを入れた千歌が、コホンツと咳払いをする。

「実は昨日、聖良さんと電話したんだよ。そしたら聖良さん、『トップ通過間違い無し』つて言つてくれたんだ。だから大丈夫だよ、きつと」

「.....」

「露骨に嫌そうな顔しないでくれる!?! ホントに聖良さんのこと嫌いだね!?!」  
 どうやら顔に出ていたらしい。

あのブロッコリー嫌い女め……

「アハハ、噂には聞いてたけど……本当に毛嫌いしてるんやね、Saint Sno  
 Wのこと」

苦笑する希ちゃん。

「ホント、当時のA—RISEに対する反応にそっくりやん」

「天くん、そんなにA—RISEを嫌ってたんですか?」

「うん、それはもう凄かったよ。特にツバサちゃんなんて、天くんに会う度に心バッキバキに折られてたしね」

「ツバサちゃんが豆腐メンタルだっただけでしょ」

「いや、ウチがツバサちゃんの立場でもキツかったと思うよ?」

「希ちゃんにはそんなことしないよ。大好きだもん」

「フフツ、ウチも天くんが大好きだよ。はい、お茶どうぞ」

「ありがと。『穂むら』の和菓子あるから、一緒に食べよっか」

「うんっ♪」

「……何この落ち着いた感じ」

「確かに、ことりさんの時みたいなの甘々過ぎる感じじゃないね……」

「前に海未先生が言ってたこと、何となく分かったかも……」

二年生組が、何やらヒソヒソ話している。

すると……

「あつ！結果発表きた！」

パソコンの前に陣取っていたルビイが、大きな声を上げる。

皆が慌ててパソコンの画面を覗き込む中……

「予備予選通過グループ、一組目……A q o u r s！」

「やったあ！」

「しかも一組目ってことは、トップ通過ってことだよな!？」

「そういうことだね」

抱きついてくる梨子の頭を撫でつつ、曜の言葉に頷く俺。

数多くのグループが参加する中、トップで通過というのは誇って良いことだと思う。

まずは第一関門突破だな……

「果南ちゃん！やったぞら！」

「嬉しいね！花丸ちゃん！」

「マリー！」

「Yes!」

抱き合いながら喜ぶ花丸と果南に、ハイタッチを交わす善子と鞠莉。一年生組と三年生組も、すっかり仲良くなつたなあ・・・

と、そんな皆を何故か複雑そうな表情で見つめるダイヤさん。

あれ・・・?

「やったね!千歌ちゃん!」

「ふふん、言つた通りだつたでしょ?」

千歌はルビイとハイタッチを交わすと、ダイヤさんにも手を向けた。

「ほら、ダイヤさんも!」

「え、ええ・・・」

戸惑いながらも、千歌とハイタッチを交わすダイヤさん。

「よし、今日も練習頑張るぞー!」

「ヨースロー!」

「地区予選も突破出来るように頑張ろうね!」

「海未先生に、決勝ステージの応援に来てもらおうね!」

盛り上がる皆。

俺も予備予選突破を喜びつつも、様子のおかしいダイヤさんがどうも気になるのだつ

1946 結果発表は緊張するものである。

た。

『何でもない』は何でもなくない。

「ほら善子ちゃん、もつと身体を倒して」

「いたたたたたつ!?あとヨハネっ!」

善子の背中を押す希ちゃん。

練習に参加してくれることになった希ちゃんは、善子とペアを組んで柔軟体操をやっていた。

「じゃあヨハネちゃんね。ウチのことはノゾミエルとでも呼んでもらおうかな」

「フフツ・・・ではノゾミエル、貴女を我が眷属に迎え入れましょう」

「ありがたき幸せ・・・それでは契約の証として、お胸を拝借させていただきます」

「え、ちよ・・・キャアツ!!」

「おお、この手に収まるちようど良い大きさ・・・五年前の真姫ちゃんみたいやね」

「ちよ、止め・・・あんっ!?!」

じゃれあう二人。

楽しそうだなあ・・・

「すっかり仲良しだね。良かった良かった」

「仲良しっていうか、ただセクハラされてるようには見えなんだけど」  
「梨子も揉んできてもらったら？」

「嫌よ!?!何でわざわざ揉まれに行かなきゃいけないの!?!」

「希ちゃんに胸を揉まれると、大きくなるっていうジンクスが・・・」

「希さん!私もお願ひします!」

「はいはい、落ち着いて」

「ぐえっ!?!」

ペア相手の千歌に襟首を掴まれる梨子。

千歌といたさっきの善子といい、何か梨子の扱いが雑になつてるような・・・

「・・・」

「ルビイちゃん?どうしたずら?」

一方ルビイは、ペア相手の花丸をじつと見つめていた。

花丸が首を傾げる中、ルビイが花丸の両胸を掴んだ。

「ひゃんっ!?!ちよ、ルビイちゃん!?!」

「・・・同じ一年生なのに、何でこうも違うんだろう」

「そ、そんなこと言われても・・・んあっ!?!」

「希さん、ルビイもお願ひします」

「ルビィちゃん!? 早まっちゃダメずら!」

目の死んだルビィを必死に止める花丸。

その様子を見て、果南が首を傾げる。

「何でそんなに胸を大きくしたいの? 運動の邪魔になるし、あんまり大きくない方が  
良いんじゃない?」

「余計なこと言うんじゃないやねえええええつ!」

「ギャアアアアアアツ!」

「檸檬●弾」をお見舞いし、果南を黙らせる。

やれやれ……

「鞠莉、そこのKYゴリラ回収しといて」

「Yes, sir!」

果南の足を持ち、引きずっていく鞠莉。

これで平和が保たれたな……

「……相変わらず賑やかですわね」

「アハハ……」

呆れるダイヤさんに、苦笑する曜。

すると曜が、何かを思い出したような顔をする。

「あつ、そうだ！今週の日曜日なんだけど、皆ヒマだったりする？」

「日曜日？何かあるの？」

「実は私がバイトしてる水族館で、人手が足りなくなっちゃったみたいでさあ……一日だけで良いから、バイトしてくれる人を募集してるんだよね」

困った表情の曜。

「そういえば曜は、水族館でバイトしてるんだっけ……」

「俺で良かったら行こうか？」

「えっ、良いの？天くんは果南ちゃんのお店のバイトがあるんじゃない？」

「あれ、辞めたって言わなかったっけ？」

「ええっ!?辞めたの!？」

驚く曜。

「そう、俺はダイビングショップのアルバイトを辞めていた。」

「果南のお父さんが本格的に仕事に復帰した為、人手が要らなくなったのだ。」

「夏の間は繁忙期だったこともあり続けさせてもらっていたが、夏休みが終わるタイミングで正式に辞めたのだった。」

「全く、天つてばこういう時にかぎって遠慮するんだから」

「復活したらしい果南が、呆れた顔で俺を見る。」

「お父さんは『これからも続けてくれたら良い』って言ってたのに・・・」  
「西華さんや果南のサポートがあれば、どう見ても俺は要らないでしょ。余計なお金を払う必要は無いんだしさ」

苦笑する俺。

果南のお父さんも西華さんも、ずいぶん残念がつてたっけなあ・・・  
人手が足りなくなつた時は、喜んで手伝いに来るとは言つておいたけども。

「最後のアルバイトの日は、豪勢な夕飯を、ご馳走になつた上に食材もいっぱいもらつちやつて・・・逆に申し訳なかつたよ」

「これまで天に助けられてきたんだもん。当然の報酬だよ」

笑う果南。

「これからも、ちよいちよいうちにご飯食べに来てね。お母さんが寂しがるから」

「勿論。まあそんなわけで、日曜日は空いてるから手伝いに行けるよ」

「ありがとう！助かるよ！」

そんなやり取りをしていると・・・

「私も行くー！」

「私も行きたいな」

「ルビイも水族館行ってみたい！」

「マルもお魚を・・・じゆるり」

「食べられないからね？まあ仕方ないから、ヨハネも手伝ってあげるわ」

「ウチの店も日曜日はヒマだし、私も行こうかな」

「面白そうだから全員で行きましょー！」

皆が次々に手を上げる。

「いやいやいや・・・」

「流石に全員で行くのはご迷惑なのは・・・」

ダイヤさんが真つ当な意見を口にするが、曜が首を横に振る。

「全然大丈夫です！人手が多い方が助かるって、館長も言ってますから！」

「そうなのですか？それでしたら、私も参加させていただきますね」

「ありがとうございます！」

曜の言葉で、全員参加が決まる。

一方、唇を尖らせている希ちゃん。

「むう・・・ウチも行きたいなあ・・・」

「いや、希ちゃんも社会人だからマズいんじゃない？」

「じゃあお客さんとして、皆が働く姿を冷やかしに行こうかな」

「冷やかしのお客様は入場禁止となっております」

「おっぱい揉んでもええよ?」

「一名様ご案内しまーす!」

「方針転換早過ぎない!?!」

「フフツ、欲望に忠実な天くんがウチは大好きだよ?」

曜のツツコミに、クスクス笑う希ちゃん。

「働くことは出来ないけど、お邪魔して大丈夫かな?」

「大歓迎です!館長にも伝えておきますね!」

「水族館かぁ・・・楽しみだね、果南ちゃん!」

「フフツ、ルビイちゃんったら嬉しそうだね」

目を輝かせるルビイの頭を、クスクス笑いながら撫でる果南。

「お魚食べたいずらぁ・・・じゅるり」

「花丸はFishが食べたいの?それなら今度、マリーの家で夕飯食べる?シェフにリクエストしておくわ」

「鞠莉ちゃん大好きずら!」

鞠莉に抱きつく花丸。

「果南ちゃん・・・鞠莉ちゃん・・・」

それぞれの様子を見ていたダイヤさんが、何やら小さく呟いていた。

「ダイヤさん？」

「っ．．．な、何ですか天さん!？」

「いや、何か様子がおかしいなって．．．どうかしました？」

「な、何でもありませんわよ!？」

「そうですか．．．?」

「そうです!それより日曜日、楽しみですわね!」

「ええ、まあ．．．」

慌てて笑みを浮かべるダイヤさん。

本当にどうしたんだろう．．．?」

「．．．何かおかしいよね、ダイヤ」

柔軟体操に戻るダイヤさんの背中を見ていると、不意に果南が近付いてきた。

「．．．果南もそう思う?」

「うん、鞠莉も気付いててさ．．．後でそれとなく、探ってみようと思ってる。ここは

私達に任せてもらって良いかな？」

「．．．了解。頼んだよ」

頷く俺なのだった。

## 【渡辺曜】一緒にいたい・・・

「メイドさんになりたい！」

「じゃあ俺は小林さんになるわ」

「メイドドラゴンになりたいわけじゃないよ!？」

放課後、俺と曜は珍しく二人で帰路に着いていた。

今日はA q o u r sの練習は休みで、他の皆は各々やることがあるということとで学校に残っている。

「メイド服を着て、メイドさんみたいなことをやりたいの!」

「なるほど、ご主人様とあんなことやこんなことをやりたいと・・・この変態が」

「今何で罵倒されたの私!? 変なことを妄想してる天くんの方が変態だからね!？」

「まあ真面目な話、メイドカフェとかでバイトしてみたら良いんじゃない?」

「それは考えたんだけど、今やってる水族館のバイトも好きだからさあ・・・A q o u r sの練習もあるから掛け持ちは難しいし、どうしたものか・・・」

頭を悩ませている曜。

んー、そうだなあ・・・

「短期バイトはどう？一日だけみたいなの」

「それならありがたいけど、メイドカフェでそういうの募集してるかなあ・・・」

「天くん？」

首を傾げる曜をよそに、俺はスマホを取り出した。

「曜、今週の土曜日って空いてる？」

「空いてるけど・・・急にどうしたの？」

「いや、曜の誕生日じゃん。一緒に出掛けない？」

「ああ、そういうこと・・・何？デートのお誘い？」

「デートかどうかはともかく、曜の希望は叶えられるかもしれないよ」

「え？」

キョトンとしている曜に、俺はぐいっと顔を近付けた。

「ちよ、天くん!?近いつてば!」

「行くの？行かないの？」

「い、行くっ！行かせていただきますっ！」

「オッケー」

何故か顔を赤くしている曜。

俺は曜から離れると、ある人に電話をかけるのだった。

\*\*\*\*\*

「真姫ちゃん可愛いかきくけこ」

「は、恥ずかしいからあんまり見ないでっ！」

顔を真っ赤にしている真姫ちゃん。

土曜日、俺は曜と一緒にことりちゃんや真姫ちゃんが働くメイドカフェへとやって来ていた。

「そんなに恥ずかしがることないじゃん。真姫ちゃんのメイド姿、凄く可愛いのに」

「知り合いに見られるのが恥ずかしいのっ！しかもよりによって今日は・・・」

「まさかのネコ耳姿、ご馳走様です」

「うう・・・！」

涙目の真姫ちゃん。

今日はネコ耳デーらしく、働いているメイドさん達は全員ネコ耳カチューシャを着け

ていた。

本当にありがとうございます。

「天、あまり真姫をいじめないの」

「人聞きの悪いことを言わないで下さい。褒め称えているだけです」

「完全に逆効果でしょうが」

呆れている猫耳メイド姿の女性。

姫カットの赤いロングヘアを、黒いリボンでツインテールに結っているのが特徴的だ。

「それにしても・・・アンタから連絡が来るなんて珍しいと思ったら、『友達を一日だけ働かせてほしい』なんてお願いされるとはね」

「急なお願いですみません、二乃さん」

「まあ構わないわよ。ことりと真姫も知ってる子だつて言うし・・・アンタとアタシの仲でもあるしね」

そう言つてフツと微笑む女性・・・上杉二乃さん。

四葉さんや五月さんのお姉さんで、このメイドカフェの店長さんだ。

前に曜とここに来た時は会えなかつたので、俺も今日久しぶりに会つた。

「そういえば、四葉と会つたんだつて？元気にしてた？」

「ええ、相変わらず元気でしたよ。二乃さんは会ってないんですか？」

「あの子はラブライブの運営メンバーとしてあちこち飛び回ってるから、なかなか会えないのよ。五月は近くで働いてるから、いつでも会えるんだけどね」

「あの人も相変わらず、スクールアイドルに目が無いですよね」

「変わらないわよねえ」

二乃さんとそんな会話をしていると・・・

「お待たせしました！さあ曜ちゃん、早く早く！」

「ちよ、ことりさん!？」

ニコニコしていることりちゃんに手を引かれ、曜が姿を現した。

「っ・・・」

「うう、何か落ち着かないかも・・・」

モジモジしている猫耳メイド姿の曜。

しかもウィッグを被っているらしく、いつもと違いロングヘア・・・  
大人っぽい姿の曜がそこにいた。

「あら、よく似合ってるじゃない」

「可愛いわ、曜。凄く綺麗よ」

「あ、ありがとうございます・・・」

曜は照れながらお礼を言うと、恥ずかしそうに上目遣いで俺を見てきた。

「あの、天くん・・・どうかな？」

「いや、その・・・うん、凄く似合ってる。正直見惚れてた」

「っ・・・あ、ありがと・・・」

顔を真っ赤にして俯く曜。

そういう反応されると、こっちも恥ずかしいんだけど・・・

「むう、私の天くんが・・・！」

「くっ、やるわね曜・・・！」

「はいはい、嫉妬しないの」

溜め息をつきながら二人の頭を撫でる二乃さん。

「そろそろ交代の時間よ。曜はことりや真姫と一緒に、ホールで接客をお願いね。天はアタシと一緒に、キッチンで調理を手伝ってちょうだい」

「わ、分かりましたっ！」

「了解です」

実は俺も二乃さんの提案で、曜と一緒に働かせてもらえることになっていた。

俺も一緒にいた方が、曜も安心するだろうという二乃さんなりの気遣いなんだろうな。

「曜ちゃん、ことり達がついてるから大丈夫！一緒に頑張ろう！」

「リラックスしていきましよう」

「よろしくお願ひします！」

こうして、俺達の一日バイトが始まるのだった。

\*\*\*\*\*

「つ、疲れたあ・・・」

「お疲れ」

ぐったりしている曜を、苦笑しながら労う俺。

無事にバイトを終えた俺達は、内浦へと帰る電車の中にいた。

「つていうか、あんなにお給料もらっちゃって良かったのかなあ・・・」

「二乃さんが良いって言うんだから、ありがたくもらっておこうよ」

バイトを終えた二乃さんからもらったのは、とても一日分とは思えない額のお給料だった。

二乃さん曰く、『往復の交通費とアタシからの気持ちをはひつくるめたお給料』らしい。まあ曜はお客さん達から大人気だったし、おかげでいつもより客足が多いつて二乃さんも喜んでたもんな・・・

「しかもことりさんから、このウィッグまでもらっちゃったし・・・こういうのって、結構高いと思うんだけど・・・」

ウィッグの毛先を弄る曜。

何とこのウィッグ、実はことりちゃんの私物だったらしい。

『最高に似合ってるもん！』ということりちゃんのススメもあり、曜が譲り受けることになったのだ。

「良いじゃん。よく似合ってるし」

「・・・天くんって、実はロングヘアが好きだったりする？」

「大好きです」

「言い切ったね!？」

黒髪に限らず、ロングヘアは素晴らしいと思います。

「・・・髪伸ばそうかな」

「ん？何か言った？」

「な、何でもないっ！」

何故か慌てる曜。

一体どうしたんだらう？

「まあそれはさておき、メイドカフェでのバイトはどうだった？」

「凄く楽しかった！」

顔を輝かせる曜。

「もつとあのお店で働きたいくらいだよ！高校卒業したら東京の大学に進学して、あのお店でバイトしようかなあ・・・」

「それが目的で東京の大学に行くのはどうなのよ・・・」

「いや、まあそれは冗談なんだけど・・・東京の大学に進学するっていうのは、選択肢の一つとして考えてはいるんだよね」

真面目な表情の曜。

「内浦は好きだけど、外の世界を知ってみたいとも思ってたき。一度東京に出て、勉強してみるのもアリかなって」

「・・・なるほどねえ」

「フフツ、天くんも一緒に来る？」

「良いよ」

「ええっ!？」

悪戯っぽく笑っていた曜が、ビックリした表情を浮かべる。

「ちよ、ホントに!？」

「まあ俺の方が一年後になっちゃうけど、それでも良いなら良いよ」

「そんなあつさり!？」

「別に迷うこともないから」

俺はそう言つて笑うと、曜の手をそつと握つた。

「曜と一緒になんだもん。絶対楽しいでしょ」

「っ・・・」

顔を赤くする曜。

可愛いヤツめ。

「うう、何でそういうことを平気で言えるかなあ・・・」

「先に誘つてきたのは曜だろうに」

「こんなあつさり返されると思つてなかつたのっ!」

「曜は俺と一緒に嫌？」

「・・・嫌なわけではないですよ」

手を握り返してくる曜。

そのまま身体を倒し、俺の肩に寄りかかってくる。

「……これから、私と一緒にいてくれる？」

「勿論。曜が望むまで、いつまでも」

「……じゃあ、一生だね」

曜はそう言つて笑うと、幸せそうに目を閉じた。

内浦に着くまでの間、俺達は身を寄せ合つて眠るのだった。

\*\*\*\*\*

《曜視点》

(ああああああああああつ!?)

恥ずかしさで悶える私。

私は今、天くんの家にお邪魔していた。

内浦に着いたのが遅い時間だったこともあり、今夜は天くんの家に泊めさせてもらうことになったのだ。

(メツチャ恥ずかしいこと口走つたあああああつ!?)

『・・・これからも、私と一緒にいてくれる?』とか!

『・・・じゃあ、一生だね』とか!

もう告白じゃん!

むしろプロポーズじゃん!

何言ってるの私いいいいいつ!?

「何布団の上で悶えてんの?」

隣の布団で寝る準備をしていた天くんが、キョトンとした様子で首を傾げている。

何でこの子は平然としていられるのか・・・

「ところでさあ、曜・・・」

「な、何・・・?」

「・・・初夜を迎える準備は出来た?」

「うらあつ!」

「ぶっふっ!」

天くんの顔面に枕をぶち込む。

「何言ってるの!?! 訴えるよ!?!」

「果南みたいなこと言うね」

「他の女の子の名前出すの禁止!」

「めんどくさいなコイツ」

呆れている天くん。

いや、それよりも・・・

「初夜って何さ!?!いかかわしいこと考えすぎでしょうが!」

「いや、だって俺達将来を誓い合つたじゃん?」

「アレ誓い合つた内に入るの!?!」

「一生一緒だって曜が言つたんじゃん」

「あああああつ!?!そうだったあああああつ!?!」

再び恥ずかしさに悶える。

うう、思い出すだけで顔が真っ赤に・・・

「つまり俺達は夫婦同然・・・そして夫婦同然になつて初めての夜・・・結論はいつも

一つだよね」

「『真実はいつも一つ』みたいな言い方止めてくれる!?!どこのコナンくん!?!」

「ああ、男の子が欲しいのね」

「曲解し過ぎてて怖いわ!」

全くこの子は・・・

いつもいつもこうなんだから・・・

「・・・アハハ」

「曜?」

首を傾げている天くん。

そう、天くんはいつもこうだ。

どンドンボケるし、それに対するツッコミが大変だし・・・

普通にエッチなこと言うし、それにどう反応して良いか分かんないし・・・  
でも・・・

「・・・楽しいんだよなあ」

一緒にいて凄く楽しい・・・

出来ればずっと一緒にいたい・・・

そんな風に思える天くんだからこそ、私は恋をしたんだろうなあ・・・

「全く・・・天くんには敵わないや・・・」

「何が?」

「何でもない・・・よっ!」

「うおっ!」

天くんを押し倒す。

そのまま天くんのお腹に馬乗りになった。

「ちよ、曜!？」

「にひひ、いつも主導権が天くんにあるとは思わないことだね」  
私はそう言つて笑うと、勢いよく天くんの唇を奪つた。

「んぐっ!？」

ビククリしている天くん。

私は天くんから離れると、自分の唇をペロツと舐めた。

「フフツ、ご馳走様♪」

「・・・曜が小悪魔に見えるんだけど」

「小悪魔ねえ・・・じゃあこんなこともしちやおっ！」

「うっ!?!ちよ、どこ触つて・・・」

「アララ、もうこんなにしちやつて・・・私のも触る?」

「いや、ちよ・・・」

「あんっ♡もう、いやらしいなあっ♡」

「あっ・・・もう無理・・・」

理性が吹き飛んだ私達。

その後のことは・・・まあ語るまでもないのだった。

# 簡単に出来たら苦労しない。

日曜日・・・

「みんな、楽しんでる〜?」

『イエーイ!』

「次はあつちに移動するから、一列に並んでね〜」

『はーい!』

幼稚園児達を誘導する俺。

俺達は曜のアルバイト先である、伊豆・三津シーパラダイスへとやって来ていた。

「へえ、子供の扱いが上手だね」

「俺も心は子供なんです」

「フフツ、何それ」

クスクス笑う女性。

セミロングの髪を風に靡かせ、懐かしそうな表情で俺を見る。

「それにしても、こんなところで天に会えるなんて思わなかったよ」

「俺だって、ここの館長が三玖さんだなんて思いませんでしたよ」

苦笑する俺。

彼女は上杉三玖さん……二乃さんの妹で、四葉さんや五月さんの姉にあたる人物だ。俺のμs時代からの知り合いであり、今は何とここの館長を務めているらしい。

曜に紹介された時は、お互いビックリしたもんな……

「三玖さん、こつちにいたんですね。それが分かってたら、もつと早く会えたのに」

「私もまさか、天がこつちに来てるとは思わなくて……四葉や五月と違ってスクールアイドルに疎いから、A q o u r s のことも『曜が所属してるグループ』程度の認識で……」

肩を落とす三玖さん。

三玖さんは自分の好きなものにとことん熱中するタイプだから、それ以外のことには本当に疎いんだよなあ……

「館長——準備出来ました——」

「あつ、行かなきゃ……じゃあ天、今日はよろしくね」

「こちらこそ。頑張つて働かせてもらいます」

「フフツ、期待してるから」

俺の頭を撫で、その場を立ち去る三玖さん。

すると……

「むう・・・」

「希ちゃん？」

何故か膨れっ面の希ちゃんが、背後から抱きついてきた。

どうしたんだろう？

「・・・あの美人な館長さん、知り合いやったんやね？」

「まあね。四葉さんのお姉さんだし」

「四葉さんはウチも知ってるし、二乃さんや五月さんとも面識はあるけど・・・あの館長さんのことは知らなかったよ？」

「ああ、皆は会ったことないんだっけ」

お店に遊びに行つて知り合った二乃さんや五月さんと違って、三玖さんとは四葉さんの紹介で知り合ったもんな・・・

水族館で働いているとは聞いてたけど、まさかこの館長をやっていたとは・・・

「ウチの知らないところで、綺麗なお姉さんの知り合いを着々と増やしてたんやね」

「希ちゃんだって『綺麗なお姉さん』だろうに」

「・・・バカ」

ちよつと顔が赤くなる希ちゃん。

照れる希ちゃんって新鮮だなあ・・・

「ところで、果南と鞠莉はどこへ行ったの？さつきまで一緒に誘導係をやってたはずなんだけど……」

「ああ、あの二人ならあそこやね」

希ちやんが指差した方向にいたのは……

「きゅー！」

「アツハツハツ！」

ステージ上でアザラシのモノマネをしている鞠莉と、それに爆笑している果南だった。

「〴〵羊肉シヨ●トヅ！」

「ぐはあっ!？」

ステージ周りの水の中に蹴り落としてやった。

何やってんだコイツら……

「げほっ……ごほっ……ちよつと天!?!いきなり何するのよ!？」

「アザラシなんですよ？泳いでみるやクソカネモチが」

「何か別のギャグ漫画の話してない!？」

「つていうか、何で鞠莉だけじゃなくて私まで落とされたの!？」

「やかましいんだよ擬人化ワカメが。水中に帰れ」

「酷い!？」

シヨックを受けつつも、自力でステージの上に這い上がってくる二人。当然のごとくビシヨビシヨである。

「そんなに濡らしちゃって・・・このド変態共が」

「その言い方止めてくれる!？」

「誰のせいだと思ってるの!？」

ギャーギャー抗議してくる二人。

まあそれは置いといて・・・

「ところで、ダイヤさんの様子がおかしい理由は分かったの?」

「ああ、アレねえ・・・」

「分かったんだけど、そんなに大した理由じゃなかったってどうか・・・」

苦笑する鞠莉と果南。

大した理由じゃなかった・・・?

「どういうこと?」

「天、私達のこと何て呼んでる?」

『『成金』と『ゴリラ』』

「ネタに走らなくていいから!」

「いや、割とこれでも呼んでるよね」

「確かにそうだけでも！普段は何て呼んでるかってことよ！」

「普通に『鞠莉』と『果南』じゃん」

「じゃあダイヤは？」

『『ダイヤさん』・・・えっ、まさか・・・』

「そのまさかよ」

溜め息をつく鞠莉。

「一年生組や二年生組も、『鞠莉ちゃん』や『果南ちゃん』に対して『ダイヤさん』でしよ？本人はそこに距離を感じちやってるのよ」

「それに加えて皆、私達にはタメ口でダイヤには敬語を使うでしょ？それもずいぶん気にしてるみたい」

「・・・そういうことね」

納得する俺。

それで元気が無かったのか・・・

「ウチも気になってたんよ。何で皆ダイヤちゃんには敬語でさん付けなんだろうって」

「俺の場合は出会った時からそうだったからなあ・・・それに先輩だから、タメ口とか

呼び捨ては違うかなって」

「でも幼馴染のマリチはともかく、果南ちゃんにはタメ口で呼び捨てやん」

「果南は俺のペットだから」

「その設定まだ続いてたの!？」

「まあ冗談はさておき、果南の方からそうしてほしいって言われたんだよ。二年生三人もそうだったんだよね」

「そういえば俺、当初は皆にさん付けと敬語を使ってたんだよな・・・  
今じゃバリバリ呼び捨て&タメ口だけだ。」

「とはいえ、ダイヤさんと距離なんかとってないんだけどなあ・・・」

「私達もそう言ったんだけど・・・ダイヤは自分が怖がられると思ってるんだよね」  
肩をすくめる果南。

メンバーを注意する役目は、基本的にダイヤさんがやってくることが多い。

俺もそうだが、ダイヤさんの前では皆『ちゃんとしてよう』という意識が強くなることは否めない。

それが『怖がられている』と捉えられてしまったのかな・・・

「じゃあダイヤさんは、さん付けと敬語を止めてほしいって思ってるってこと?」

「そうみたい。『ダイヤちゃん』って呼ばれたいんですって」

苦笑する鞠莉。

「だから今日のアルバイトで、皆ともっと距離を縮めなさいって言うておいたわ。今頃奮闘してる頃じゃないかしら」

「奮闘するのは良いんだけど、ダイヤってああ見えてドジなところがあるから・・・気が合いが空回りして、変なことにならなきゃいいんだけど・・・」

果南も苦笑いしている。

距離を縮める、ね・・・

「・・・それが簡単に出来たら、苦労しないだろうに」

「え?」

「何でもない」

肩をすくめる俺。

「とりあえず、二人とも着替えてきなよ。ボディラインがくつきり浮き出てる上に、下着が透け透けの状態だから」

「「ええっ!?!」」

自分達の惨状に気付き、慌てて着替えに走る二人。

やれやれ・・・

「・・・じゃ、ダイヤちゃんの様子を見に行こっか」

「・・・そうやって俺の気持ちを察してくれるところ、ホント好き」  
「フフツ、ありがと」

微笑みながら俺の手を握る希ちゃんなのだった。

気合いが空回りしてしまふこともある。

く千歌&花丸の場合く

「千歌さん、今日も良いお天気ですわね♪」

「そ、そうですね・・・」

「花丸さん、うどんは苦手？」

「め、麺類はちよつと・・・」

「フフツ・・・苦手なもの一つや二つ、誰にでもありますわ♪」

「ず、ずらあ・・・」

水族館内の飲食店で調理や皿洗いを担当している千歌と花丸が、ニコニコしているダイヤさんに怯えていた。

「千歌ちゃんと花丸ちゃん、顔が引き攣ってるんやけど・・・」

「・・・あれは俺でも引き攣るわ」

「そこまで!?!」

希ちゃんのツツコミ。

あんな語尾に『♪』が付くような喋り方、普段のダイヤさんならしないもんな・・・

逆にメチャクチャ怒ってるようにしか見えないし・・・  
そんなことを考えていると、俺達が様子を窺っていることに気付いた二人が目で訴えてきた。

(助けて天くん!ダイヤさんがメチャクチャ怒ってる!)

(マル達は何もしてないぞら!どうしたらいいぞら!?)

多分こんな感じのことを言ってるな、アレ。

とりあえず・・・

(大丈夫だよ二人とも。俺はそんな二人を応援してる)

(どこの滝壺さん!?)

これでよし、と。

「いや、全然良くなさそうなんやけど。もの凄く必死に助けを求めてるんやけど」

希ちゃんのツツコミ。

仕方ないなあ・・・

「ダイヤさくん!向こうの人手が足りないんで、手を貸して下さいさ〜い!」

「は〜い、今行きますわ〜♪」

ニコニコしながらやって来るダイヤさん。

うわあ・・・

「千歌さん、花丸さん、少し席を外しますわね♪」

「ご、ごゆつくり♪」

引き攣った笑顔で手を振る二人なのだった。

\*\*\*\*\*

く曜&善子の場合く

「お疲れ様ですわ♪」

「あつ、ダイヤさん！」

曜と善子に合流するダイヤさん。

二人はたくさんの風船を持ち、子供達に配っていた。

「ところで曜さん・・・その着ぐるみは何ですか？」

「ああ、これですか？」

何故か誇らしげに胸を張る曜。

「この水族館のマスコットキャラ、ウチツチーです！」

「……ああ、ことりさんの中の人ですわね」

「ウッチーじゃないですよ!?! っていうか『中の人』とか言うの止めて下さい!」  
曜のツツコミ。

遂にダイヤさんまでメタ発言を……

「アハハ、ダイヤちゃんもあんなこと言うんやね」

「気付かれちゃうから静かにしようね、くつすん」

「まさかの便乗!?!」

希ちゃんのツツコミはスルーして、再びあちらの様子を見守る。

曜がダイヤさんに風船の一部を差し出した。

「ダイヤさんも配ります?」

「あ、ありがとうございます……」

おずおずと受け取るダイヤさん。

そして……

「……曜『ちゃん』」

「……」

あつ、曜がフリーズした……

何が起きたか分からない顔してるわ……

「ダ、ダイヤさん・・・?」

「何ですの? 曜『ちゃん』?」

「ひいっ!?!」

悲鳴を上げる曜。

一方のダイヤさんは、そんなことは気にもせずニコニコしている。

ちゃん付けで呼べたことがよっぽど嬉しいらしい。

「さあ、頑張りますわよ!」

「は、はい・・・」

「ふう、子供の相手も大変ねえ・・・って曜? どうしたの?」

風船を配ってきたらしい善子が、キョトンとした顔で曜を見る。

ダイヤさんはニコニコしながら、そんな善子に話しかけ・・・

「お疲れ様ですわ、善子『ちゃん』♪」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あつ、善子もフリーズしたわ・・・

やはりダイヤさんは気にせず、スキップをしながら風船を配りに行ってしまった。

「・・・・・・・・ヨハネよ」

「そっ!?!」

ようやく動いた善子の一言目がそれだった。  
流石だぜ墮天使。

「何なの、今の背筋に冷たいものが走る違和感・・・」

「分かる・・・」

「天界からの使者によって、もう一つの世界が現出したかのような・・・」

「それは分からない・・・」

「アハハ、酷い言われようやね・・・」

「まあ違和感しか無いからね」

「希さん!?!」

「天まで!?!」

ダイヤさんが去ったところで、希ちゃんと一緒に物陰から出る。

やれやれ・・・

「ちよつと天くん、ダイヤさんがおかしいんだけど!?!」

「一体何があつたのよ!?!」

「かくかくしかじか」

「ああ、なるほど・・・って分かるかつ!」

「それで通じるのはアニメやマンガの世界だけだって、前も言ったでしょうが!」

「まあまあ、曜ちゃんも善子ちゃんも落ち着きなよ」

「な、何で天くんまでちゃん付けなのさ・・・／＼／＼」

「い、いつもは呼び捨てのくせに・・・／＼／＼」

「何で照れてんの？」

「この反応の差・・・ダイヤちゃんが可哀想になつてきたんやけど・・・」  
呆れる希ちゃんなのだつた。

\*\*\*\*\*

く 梨子&ルビイの場合く

「バウツ！」

「いやあああああつ!?!」

「ぴぎいいいいつ!?!」

何故かアシカから逃げ回っている梨子とルビイ。

ダイヤさんが風船配りに夢中になつてゐるから、ちよつと離れてこつちの様子を見に来

ただんど．．．

「助けてえええええっ!？」

「梨子ちゃん、掴まって!」

一足先に少し高い足場に乗ったルビイが、梨子に向かって手を伸ばす。

その手を掴む梨子だが、ルビイの力では持ち上げられないようだ。

「ぐぬぬぬ．．．梨子ちゃん、重い．．．!」

「ルビイちゃん!? その言葉は心に突き刺さるから止めて!？」

「いや、曜が学校のベランダから落ちかけた時のことを思い出すわ」

「あつ、天くん! 梨子ちゃんを引き上げるの手伝って!」

「えー、面白いところなのに」

「人が逃げ回るところを見て面白がるの止めてくれる!? こっちは必死なのよ!？」

「『助けてくれたら何でもします』って言うなら良いよ」

「い、嫌よ! 私に乱暴する気でしょう! エロ同人みたいに! エロ同人みたいに!」

「梨子ちゃん、何でちよつと顔が赤くなってるん?」

「ねえ天くん、えろどーじんってなあに?」

「ルビイは知らない方が良いから、とりあえず梨子の手を離そっか」

「ホントに止めてよおっ! 何でもするからあつ!」

「はいはい」

今にも泣き出しそうな顔をする梨子の手を掴み、足場まで引き上げる。

「うう．．．ぐすつ．．．」

「そんなに怖かったの？」

「だつてえ．．．何か犬みたいでえ．．．」

「ああ、分からなくもないかな．．．」

しかも犬より大きいし．．．

梨子にアシカはハードルが高かったかな．．．

「よしよし、もう大丈夫だから。俺が側にいるからね」

「うん．．．ぐすつ．．．」

「．．．天くんつて、μ sの時からこうだったんですか？」

「うん。だから周りに遠慮しちゃうことりちゃん、男性が苦手な海未ちゃん、なかなか人に心を開けない真姫ちゃんのハートでさえも撃ち抜いてしまつたんだよ」

「なるほど．．．」

俺が梨子を優しく抱き締めている一方、何やらルビイと希ちゃんがヒソヒソと話していた。

よく聞こえないんだけど、何を話してるのかな？

『ピィィィィィィィィッ!』

いきなり笛の音が鳴った。

下を見ると、ダイヤさんが笛を片手にアシカをキツと睨みつけていた。

「今すぐプールにお戻りなさい!」

「クウーン……」

いそいそとプールに戻るアシカ。

凄いな……

「ダイヤさん、どうしてここに? っていうか、その笛どうしたんですか?」

「騒ぎに気付いて駆け付けたのですわ。笛はステージの上に落ちていたので、調教用のものではないかと思いましたが」

「あつ、ルビイがスタッフさんに借りたやつ!」

「やはりそうでしたか……でしたら慌てたりせず、キチンと笛を吹かなければいけませんよ? きつとアシカさんは、ルビイ達に遊んでほしかったのですわ」

「うう、ごめんなさい．．．」

シユンとするルビィ。

俺はルビィの頭を撫でた。

「後で一緒にご飯あげよっか。きつと喜ぶよ」

「っ．．．うんっ！」

「それにしても、一瞬で言うことを聞かせるなんて．．．流石はダイヤさんですね！」

「ハッ!? やつてしまいましたわ．．．」

「え?」

急にうなだれるダイヤさんを見て、首を傾げる梨子。

アララ．．．

「道のりは険しそうやねえ．．．」

苦笑する希ちゃんなのだった。

頑張っても上手くいかないこともある。

「ダイヤ、ちゃん・・・？」

呆然としている千歌。

これ以上皆を混乱させるのは良くないということ、果南と鞠莉が皆を集めて事情を説明したのだった。

「皆ともう少し距離を近づけたらいいってことだと思っけど・・・」

「ここまで空回りするとはねえ・・・」

溜め息をつく果南と鞠莉。

一方、皆はホツとした様子だった。

「あの笑顔は、怒ってたわけじゃなかったはずらね・・・」

「フフツ・・・ダイヤさん、何か可愛いかも」

「ホントにね。言ってくれば良いのに」

「でしょ？だから小学校の頃から、私達以外はなかなか気付かなくてさあ」

苦笑する果南。

「真面目でちゃんとしてて、頭が良くてお嬢様で・・・頼れる存在ではあるけど、皆に

とつては雲の上の存在だったんだよね」

「だからダイヤもそう振る舞って、どんどん皆と距離をとつていったの。本当は凄く寂しがりやなのにね」

肩をすくめる果南と鞠莉。

なるほどねえ・・・

「・・・他人とは思えないわ」

「天くん？何か言つた？」

「何でもないよ」

首を傾げるルビィにそう返事をすると、俺は立ち上がった。

「あれ？どこ行くの？」

「ダイヤさんのところ。そろそろ希ちゃんと交代しようかなって」

上手くいかないことに落ち込んでしまったダイヤさんを、希ちゃんが気分転換させる為に連れ出したのだ。

希ちゃんのことだから、ダイヤさんを立ち直らせる為のお膳立てはしてくれていることだろう。

後は俺の役目である。

「少し放っておいた方が良くないんじゃないかな」

そんなことを言う果南。

「これはダイヤの問題だし、私達がでしゃばり過ぎるのも良くないっていうか・・・」  
「マリもそう思うわ。ダイヤが自分で動かなきゃ、意味が無いんじゃないかしら」  
果南の言葉に頷く鞠莉。

二人なりにダイヤさんの為を思い、良かれと思つて言つてるんだらうけど・・・

「二人とも、ダイヤさんの悩みを軽く見過ぎてるんじゃない？」

「え・・・？」

ポカンとする二人。

「ど、どういうこと・・・？」

「そりや自分で動けるなら、その方が良いだらうけどさ・・・それが出来なくて困つて  
るから、ダイヤさんは二人に相談したんじゃないの？」

「それは・・・」

言葉に詰まる鞠莉。

俺は尚も言葉を続けた。

「人と距離を縮めるつて、そんなに簡単なことじゃないよ。そういうのが苦手つてい  
う人からしたら、尚更大変なことだと思う。それが簡単に出来たらダイヤさんだつて苦  
勞しないし、二人に相談することも無かつたんじゃないかな」

ダイヤさんからすると、きつと二人に相談することさえ勇気が必要だっただろう。人に弱味を見せたがらず、人に甘えることが苦手な人・・・それがダイヤさんなのだから。

それにも関わらず・・・

「ダイヤさんの悩みを『大したことじゃない』の一言で片付けて、『とにかく距離を縮めろ』としか言わない・・・どうやったらそれが出来るか悩むダイヤさんを見ていながら、一緒に悩んであげることもしない・・・それでも本当に親友なの?」

「っ・・・」

俺の言葉に、気まずそうな表情を浮かべる二人。

今頃になって、『ちよつとマズかったかな・・・?』とでも思い始めているんだろう。「二人とも、ダイヤさんとは長い付き合い合いなんですよ?その二人が、真剣に相談に乗ってくれないなんて・・・流石にダイヤさんが可哀想過ぎるよ」

黙り込んでしまう二人。

俺はそんな二人に背を向けた。

「・・・じゃ、ちよつとダイヤさんのところに行つてくる。すぐに合流するから、引き続き仕事よろしくね」

「・・・了解。ダイヤさんのこと、任せたよ」

「勿論」

千歌の言葉に頷き、歩き出す俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《ダイヤ視点》

「ハア・・・」

「ダイヤちゃん、元気出して」

溜め息をつく私に、優しい言葉をかけて下さる希さん。

私達は外のベンチに座り、風に吹かれながら海を眺めていたのでした。

「そんなに気に病まなくても大丈夫。ダイヤちゃんの気持ちは、きつと皆に届くから」

「・・・そうでしょうか」

肩を落とす私。

私なりに頑張ったつもりですが、こうも上手くいかないとは・・・

「・・・ツケを払う時がきた、ということでしょうかね」

「え・・・？」

「これまで人と向き合うことから逃げてきた・・・そのツケが回ってきたのですわ」  
そう、この結果は必然・・・上手くいくはずがなかったのです。

「私は幼い頃から、周りの方達から『しっかり者のお嬢様』として見られてきました。ありがたいことに、頼られることは多かったです。・・・気軽に親しく話しかけて下さる方は、果南さんや鞠莉さんしかいませんでした」

「ダイヤちゃん・・・」

「ですがそれは、私にとっても都合でした・・・何せ私は大の人見知りで、人付き合いというものが苦手だったのですから」

だからこそ、私は周りの方達のイメージ通りに振る舞い続けました・・・  
関わり合うことを避ける為に・・・

「でも、果南ちゃんやマリチとは仲良しだよね？」

「果南さんは幼馴染ですし、鞠莉さんはああいふ性格なのでグイグイ来られて・・・私にとつて友人と呼べる存在は、あの二人だけですわ」

私にとつての友人は、あの二人だけで良い・・・

そんな考えもあったからこそ、私は他の方達と向き合うことを避けてきたのです。

「そんな私が、距離を縮められるはずがありませんわ。これまでそこから逃げてきた

というのに……」

うなだれる私。

すると……

「フフツ……なるほど」

クスクス笑う希さん。

どうしたのでしょうか……？

「天くんの言ってたこと、今ならよく分かる」

「……何の話ですか？」

「天くんにA q o u r sの皆の話を聞いた時、言ってたんよ。『ダイヤさんは絵里姉に

そっくりなんだよ』って」

そういえば、前に私も言われたような……

そんなに似ているのでしょうか……？

「周りから『しっかり者で近寄りやすい』って思われてるところも、本当は寂しがりや

なところも……ホント、エリチそっくりやね」

私の頭を撫でる希さん。

「ウチも最初は大変やったよ？エリチが心を開いてくれるまでに、どれだけ時間がか

かったことか……」

「そ、そうだったのですか・・・?」

「ダイヤちゃんも、果南ちゃんやマリチに心を開くのには時間かかったんやない?」

「・・・言われてみれば」

確かに心を開くまでに、少し時間がかかったような・・・

まあ二人とも遠慮なく来るので、心を開かされたと言った方が正しい気がします  
が・・・

「二人とも気が強そうに見えて、実はとっても怖がりなんだよね。だからこそ人を信じるのに時間がかかるし、簡単には心を開かない・・・そんなところもそっくりやね」  
苦笑する希さん。

「だからこそ天くんは、ダイヤちゃんを気にかけるんやと思うよ?」

「私に絵里さんを重ねているから、ですか?」

「それもあるけど・・・エリチがそういう性格のせいで苦労するところを、天くんは見  
てきているから。だからダイヤちゃんがなるべく苦労しないように、出来る限り力になっ  
てあげたい・・・そう思ってるんじゃないかな」

柔らかに微笑む希さん。

天さんの考えを、そこまで読むことが出来るなんて・・・

「・・・天さんのこと、よく理解されているんですね」

「勿論。天くんのこと、大好きやもん」

笑顔で言い切る希さん。

「ダイヤちゃんだって、天くんのこと好きやろ？」

「す、すすすす好きって．．．そ、そそそそそんな．．．!?」

「じゃあ嫌いなん？」

「嫌いなはずありませんわ！」

「ほら、好きやん」

ニヤニヤしている希さん。

うう、やりづらいですわ．．．

「す、好きと言っても．．．こ、恋では無いというか．．．!」

「ふ〜ん？」

「た、大切な方ではあるのですが．．．!」

「へ〜？」

「あ、あくまでも仲間として．．．!」

「ほ〜？」

「ニヤニヤするの止めていただけます!?!」

明らかに楽しんでる希さん。

全く、この人ときたら．．．！

「フフツ、ダイヤちゃんは面白いなあ♪」

「私で遊ばないで下さい！」

「アハハ、ゴメンゴメン」

希さんは苦笑しながら謝ると、ベンチから立ち上がりました。

「さて、ダイヤちゃんの元気が少し出たところで．．．ウチの役目は終わりやね」

「え．．．？」

「もうすぐ天くんがここに来るから、後は天くんと話してな」

「何故分かるのですか!？」

「スピリチュアルパワーのおかげや」

「希さんが仰ると冗談に聞こえないのですが!？」

「アハハ、ダイヤちゃんは本当に面白いなあ♪」

クスクス笑う希さん。

どうにも調子が狂いますわ．．．

「今のダイヤちゃんの気持ち、そのまま素直に話したらええよ。天くんなら、きつと受

け止めてくれるから」

「希さん．．．」

「じゃ、皆のところに行ってるね」

そう言って私に背を向ける希さん。

そんな希さんの背中に、私は大声で叫びました。

「あのっ・・・ありがとうございます！」

こちらを振り向かず、手をひらひらと振り去っていく希さんなのでした。

## 【宮下愛】 愛だけに！

「そ、天つちー！」

「ん？」

登校中に声をかけられる。

振り向くと、何故か愛が顔を赤くして立っていた。

「おお、おはよう愛・・・何か顔赤くない？」

「き、今日は暑いねー！」

「むしろ肌寒いんだけど」

「メ、メツチャ晴れてるねー！」

「生憎の曇り空なんだけど」

何か今日の愛、様子がおかしいな・・・

もしかして・・・

「ちよつと失礼」

「ひゃあっ!？」

愛に近付き、おでこをくつつけてみる。

うん、何か熱い気がする。

「愛、ひよつとして熱があるんじゃない．．．」

「だ、大丈夫だからっ!」

慌てて俺から離れる愛。

何か挙動不審だなあ．．．

「そ、それよりっ!天つちに話があるのっ!」

「何?」

「そ、それは．．．」

「それは?」

「．．．うう」

何故か恥ずかしそうに口ごもってしまふ愛。

本当にどうしたんだろう．．．

「や、やつぱりここじゃ言えないっ!」

「はい?」

「今日の放課後、屋上に来て!そこで話すから!」

「いや、放課後は同好会の練習が．．．」

「そんなに時間は取らせないからっ!待ってるからねっ!」

それだけ言うと、愛は慌てて走り去ってしまった。

「・・・何なのあの子」

首を傾げる俺なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《愛視点》

「じゃあ、天さんを屋上に呼び出すことには成功したんだね」

「やるじゃない、愛」

「うう、恥ずかし過ぎて死ぬかと思った・・・」

机に突っ伏すアタシ。

昼休み、アタシは学食でりなりーや果林と昼ご飯を食べていた。

「どうしよう・・・絶対おかしい子だと思われたよ・・・」

「はい璃奈ちゃん、あーん」

「あーん・・・うん、なかなかイケる」

「そこ!愛さんが悶え苦しんでる時にイチャイチャしない!」

「愛さんが悶え苦しんでいるのを見ながら食べるご飯は美味しい」

「りなりー!?何てこと言うの!?!」

「人の不幸は蜜の味ってやつね」

「果林まで!?!」

くっ、他人事だと思って・・・!」

「フフツ、何だかんだで愛も乙女だったのね」

面白そうに笑う果林。

「天への恋心に翻弄されちゃって・・・可愛いんだから♪」

「面白がらないでよお・・・」

再び机に突っ伏すアタシ。

果林の言う通り、アタシは天つちに恋をしてしまったのだ。

その恋心に、自分でもビックリするくらい振り回されてしまっている。

うう、自分が自分じゃないみたい・・・

「でも、あとは簡単。屋上へやって来た天さんに告白するだけ」

「簡単じゃないよ!?!それが一番難しいんだってば!?!」

「『好きです。付き合ってください』・・・うん、三秒あれば余裕」

「それが言えたら苦労しないんだけど!？」

「愛さんはチキン。ケン●ツキーでバイトしたら良い」

「喧嘩売ってる!?!そしてケ●タツキーをバカにしてる!?!」

「ケンタ●キーはバカにしてない。愛さんをバカにしてる」

「表出ろやゴラァ!」

「はいはい、落ち着きなさい」

呆れた表情の果林に宥められる。

「仕方ないわね。私が絶対に成功する告白方法を伝授してあげるわ」

「マジで!?!教えて教えて!」

流石は果林! 大人の女性は一味違う!

「よく聞きなさい。まずはそつと相手の手を掴むの。右でも左でも構わないわ」

「ふむふむ」

「次にその手を自分の胸元に持って行って・・・おっぱいを揉ませなさい」

「何言ってるの!?!」

果林に期待したアタシがバカだった!

完全に痴女路線に走ったよこの子!

「そして上目遣いでこう言うの。『バラされなくなかったら付き合いなさい』ってね」

「ただの脅しじゃん!？」

「これなら絶対に成功するわ」

「だろうね! 断るっていう選択肢が潰されてるからね!」

「相手に言うことを聞かせたい時は、弱味を握るのが一番よ」

「最低な発言してるけど大丈夫!？」

汚い! 大人って汚い!

「まあ冗談はさておき、自分の気持ちはちゃんと伝えなさい」

真剣な表情になる果林。

「いつまでもうじうじしてるのは、愛らしくないわよ。ここまで来たら、覚悟を決めて

ぶつかるとは思わないんだから」

「それはそうだけど・・・」

それでも、アタシは怖い・・・

天つちにフラれて気まずくなつて、今までみたいに仲良しでいられなくなつたら・・・

「大丈夫。どんな答えにせよ、天さんは愛さんの気持ちをちゃんと受け止めてくれる」

りなりーが優しく手を握ってくれる。

「愛さんが好きになつた天さんを、信じてあげて」

「りなりー・・・」

「そうだよね・・・」

「まずアタシが天つちを信じななきゃダメだよね・・・」

「・・・ありがとう、二人とも。気持ち、ちゃんと伝えてくる」  
腹をくくるアタシなのだった。

\*\*\*\*\*

### 《愛視点》

「うう・・・緊張する・・・」

放課後、屋上で天つちを待つアタシ。

腹をくくったとはいえ、緊張するものは緊張するのだ。

ああ、落ち着かない・・・

「深呼吸してみるか・・・」

「愛の呼吸、壺の型」

「いやそれ全集中の呼吸・・・って天つち!？」

いつの間にか、アタシの後ろに天つちが立っていた。

「ちーっす!」

「ちよつと!? 愛さんの挨拶パクンないでよ!?」

「ちよりーっす!」

「その挨拶もダメ! 色々問題あるから!」

「わがままだなあ・・・こうなったら、こつちも事務所総出でやりますね」

「その発言がダメだつて言ってるんだけど!? 蒸し返さないであげて!」

「はいはい・・・それで、話つて何? タピオカ店でも始めるの?」

「だから蒸し返すなつて言つてんでしようがあああああつ!」

何でこの子は際どいラインを超えようとするの!? バカなの!?

「アハハ、やつと愛らしくなつた」

「え・・・?」

キョトンとするアタシに、天つちは笑いながら言葉を続ける。

「しおらしい愛も悪くないけど・・・やつぱり、元気で明るい愛が俺は好きだよ」

「っ!」

一気に顔が赤くなつてしまう。

何でこういうセリフをサラツと言えるのかなあ・・・

「あれ、照れてる？」

「て、照れてないしっ！」

「え〜？ホントに〜？」

「ニヤニヤしないっ！あと顔近いからっ！」

「良いではないか〜」

恥ずかしがる様子も無い天つち。

むう、アタシだけ意識してるのがバカみたいじゃんか・・・

よし、こうなったら・・・

「えいっ！」

「っ!？」

天つちの手を掴み、思いっきり自分の胸に押し当てる。

天つちの手は、アタシの胸を触っている状態だった。

「ちよ、愛!?!何してんの!?!」

「そ、天つちがいけないんだからね!?!」

「何が!?!つてか離してくんない!?!」

「愛さんのおっぱいじゃ満足出来ないの!?!」

「はい!?!」

「そりゃ三年生組には及ばないけどさ!愛さんだつて大きいんだから!」

「分かったつてば!?!良いから手を離して!?!」

「ダメ!離さない!」

「何で!?!」

「離してほしかったら・・・愛さんと付き合いなさい!」

遂に言つてしまった。

それを聞いた瞬間、天つちの動きがピタリと止まる。

「い、今何て・・・?」

「愛さんはね、天つちに惚れちゃつたんだよ」

開き直つたアタシは、思いの丈をぶつけることにした。

「はつちゃけたい時は一緒にバカ騒ぎしてくれて、悩んでる時はそつと寄り添つてくれて、全力で打ち込みたい時は強く背中を押してくれて・・・そんな天つちを、愛さんは好きになつちやつたんだよ」

「愛・・・」

「好きで好きでたまらなくて、胸がドキドキして・・・こんな気持ち初めてなの。こんなに誰かを好きになるなんて、思いもしなかった」

天つちの肩に、コテツとおでこをぶつける。

「好きだよ、天つち・・・大好き」

自分の気持ち、正直に言つちやつたなあ・・・

もしこれで天つちにフラれて、今までみたいな関係でいられなくなつたら・・・

「・・・ありがとう」

「つ・・・」

天つちが優しく抱き締めてくれる。

「そんなストレートに好意をぶつけられるなんて、思つてもみなかったから・・・ちよつと照れ臭いけど、嬉しいよ」

「天つち・・・」

「愛が本心を話してくれたんだから、俺もちゃんと話さないとね」  
アタシの目を見つめる天つち。

そして・・・

「俺も好きだよ、愛」

「っ!」

「元気で明るくて、一緒にいると楽しくて・・・落ち込んでる時とか体調が悪い時は、いつも本気で心配してくれて・・・そんな優しい愛を、俺は好きになったんだよ」

微笑む天つち。

「俺で良かったら・・・付き合ってくれませんか?」

「っ・・・うんっ」

微笑み返すアタシ。

涙で視界が滲んでいた。

「愛さんを・・・天つちの彼女にしてほしい」

「喜んで」

抱き締め合うアタシ達。

幸せ過ぎておかしくなりそう・・・

「ねえ、天つち・・・愛してるよ」

「愛だけに?」

「茶化さないの。愛さんは本気なんだから」

「ゴメンゴメン」

天つちは苦笑しながら謝ると、アタシの涙を指で拭ってくれた。

「ほら、泣かないで。俺は愛の笑顔が好きなんだから」

「アハハ、よくそういうセリフを平気で言えるよね」  
思わず笑みが零れる。

まあ、こういうところが天つちらしいんだけどね。

「・・・隙ありっ」

「っ!？」

悔しいので、天つちの唇を奪う。

顔を真っ赤にする天つちを見て、悪戯っぽく笑うアタシなのだった。

「フフツ・・・愛してるぞ、天つち！愛だけにっ！」

## 【エマ・ヴェルデ】あの時の約束

「うわあああああん！天くううううん！」

「泣かないで、エマ」

号泣するエマの頭を、優しく撫でる俺。

今日は俺の家にホームステイしていたエマが、母国であるスイスに帰国する日だった。

「うう．．．寂しいよお．．．」

「おっと．．．今日のエマは甘えん坊だなあ」

抱きついてくるエマを受け止める。

いつも笑顔を絶やさず、同い年なのにお姉さんのような包容力を持つ女の子．．．そんなエマも、今日ばかりは歳相応の一面を見せていた。

まあ俺の身体に押し付けられているモノは、歳相応とは言えないほど大きいのだが．．．

まだ中一でこれなら、将来はどれほど大きくなるんだろうか．．．

「ぐすつ．．．天くんは寂しくないの．．．？」

「・・・寂しいよ」

ギュツとエマを抱き締める。

一緒に過ごした時間は短かったが、俺にとってエマは大切な存在になっていた。寂しくないわけがない。

「でも、これが永遠の別れじゃないから。またきつと会える」

「・・・ホントに？」

「うん、また日本に遊びに来てよ。俺も大きくなったらスイスまで遊びに行くからさ」  
「・・・また会ってくれる？」

「当たり前でしょ。俺とエマの仲なんだから」

優しくエマの背中を擦る。

少し落ち着いたようだ。

「もし俺がスイスにお邪魔する時は、案内よろしくね。エマがオススメの場所とか食べ物とか、いっぱい紹介してよ」

「っ・・・任せて！たくさん紹介してあげるね！」

ようやく笑顔を見せてくれるエマ。

うん、やっぱり・・・

「俺はやっぱり、エマの笑顔が一番好きだよ」

「っ!？」

顔を赤くするエマ。

そして服の裾をキュツと握り締めると、恥ずかしそうにしながらも意を決したように口を開くのだった。

「ねえ、天くん．．．もし、また会えたら．．．その時は私を、天くんの．．．」

\*\*\*\*\*

「．．．ん」

目が覚める俺。

どうやら、いつの間にか眠ってしまっていたようだ。

「あら、お目覚め？」

頭上から声がする。

見上げると、大きな山が二つ．．．

「．．．この大きさは果林しかないな」

「何を見て判断してるのよ・・・」

山の間から、果林の呆れた顔が現れた。

つていうか・・・

「何で俺、果林に膝枕されてんの？」

「ベンチじゃ固くて寝づらいだろうと思って。迷惑だったかしら？」

「本当にありがとうございます」

「この柔らかさ、まさに至高の枕や・・・」

「つていうか、モデルの仕事は？」

「今日は休みだから、読書でもしようと思って静かな場所を探してたのよ。そしたら

天を発見したつてわけ」

「ああ、なるほど」

「ところで、エマって誰のことかしら？」

「えっ、何でその名前知ってるの？」

「寝言で呼んでたわよ。『エマ・・・エマ・・・』って」

「マジか」

そう言えば、あの時の夢を見ていたような・・・

「中一の時、俺の家にホームステイしてた女の子だよ。スイスの子なんだけど」

「あら、もしかして初恋の相手とか?」

「初恋ねえ……」

あの時の言葉、エマは覚えているだろうか……

もし覚えていたら……

「婚約者、かな?」

「はい?」

首を傾げる果林。

すると……

「えーつと……学生寮の地図は……」

「ん?」

何やら荷物を漁っている女の子が目に残った。

今『学生寮』って聞こえたし、あのスーツケース……

麦わら帽子で顔は見えないけど、もしかして新しい転入生の子かな?

「場所が分からないのか……ちよつと行ってくるわ」

「はいはい、相変わらずお人好しねえ」

立ち上がり、女の子の元へ近づく俺。

「すみません、転入生の方ですか?」

「あ、はい！学生寮の場所が分からなくて・・・キャツ!」

突然強い風が吹き、女の子が被っていた麦わら帽子が飛ばされてしまう。

「ああっ!?!私の帽子!?!」

「大丈夫よ。今取ってくるわ」

「頼んだ果林」

果林が帽子を拾いに行ってくれる。

再び女の子へと視線を戻した俺は、思わず固まってしまった。

赤毛の三つ編みおさげ、透き通るような青い目、特徴的なそばかす・・・

もしかして・・・

「すみません、ご迷惑をおかけして・・・えっ?」

向こうも俺の顔を見た瞬間、動きが固まってしまった。

やっぱりこの子・・・

「エ、エマ・・・?」

「天・・・くん・・・?」

お互いをまじまじと見つめ合う俺達。

そして・・・

「そ・・・天くうううううううんっ!」

「うおっ!?!」

勢いよく抱きついてくるエマ。

何とか受け止めるが、エマの勢いは止まらない。

「天くんっ!天くんっ!天くんっ!」

「ちよ、エマ!?!」

さつきからメチャクチャ当たってるんだけど!?

つていうか何だこの大きさ!?

発育の暴力すぎない!?

どんだけ成長してんの!?

「天くううううんっ!」

「頼むから落ち着いてええええええっ!?!」

「何してるのよアナタ達・・・」

取ってきた麦わら帽子を片手に、呆れながら俺達を見る果林なのだった。

\*\*\*\*\*

「フフツ、天くんっ♪」

嬉しそうに俺の腕に抱きついていているエマ。

俺達は今、学生寮にある俺の部屋へとやって来ていた。

ちなみに果林は空気を読んでくれたのか、『ごゆっくり』という言葉を残して帰って行った。

どうやら出来る女は一味違うらしい。

「それにしても、まさかここでエマに会えるとは・・・何で虹ヶ咲に？」

「スクールアイドルになりたくて」

微笑むエマ。

「虹ヶ咲がスクールアイドル活動に力を入れるっていう話を聞いて、転入することにしたの。ずっと憧れだったから」

「そういえば、スクールアイドルが大好きだったね」

あの頃のエマ、スクールアイドルの動画を食い入るように見てたもんなあ・・・

「日本に来たら、天くんに会いに行こうと思ってたけど・・・まさかここで会えるなんて、思ってもみなかったよ」

「ホントにね」

俺は苦笑すると、そのままエマを抱き締めた。

「そ、天くんっ!？」

「・・・会いたかったよ、エマ」

エマを抱き締める腕に、ギュツと力を込める。

「また会えて・・・本当に嬉しい」

「・・・私も」

優しく抱き締め返してくれるエマ。

「ねえ、天くん・・・あの時の約束、まだ覚えてる・・・？」

「・・・勿論」

『ねえ、天くん・・・もし、また会えたら・・・その時は私を、天くんのお嫁さんにしてほしいな』

『・・・俺で良ければ、喜んで』

「・・・好きだよ、エマ」

「私も・・・天くんが大好き」

見つめ合う俺達。

その距離がゼロになるのに、時間はかからないのだった。

\*\*\*\*\*

「つていうことがあってね」

「うう・・・ひつぐ・・・！」

「感動じまじだああああ・・・！」

「何で侑とせつ菜はガチ泣きしてんの？」

呆れる俺。

俺達は同好会の部室で、俺とエマの馴れ初めについての話をしていた。

つていうか、こういうの話すの恥ずかしいんだけど・・・

「でも、本当に良い話だと思います」

「お二人が羨ましいです」

歩夢と少しずつ目が潤んでいる。

何も泣かなくても・・・

「天つちとエマつちがラブラブな理由、愛さんよく分かったよ！」

「璃奈ちゃんボード『納得』」

「本当は『スクールアイドルは恋愛禁止!』って言いたいところですけど、そんな話聞かされたら何も言えないじゃないですかー!」

「フフツ、純愛って良いよね」

ワイワイ盛り上がっている皆。

人の恋愛ネタで盛り上がっちゃって・・・

「まあ確かに『婚約者』よね。あの時の天の言葉、ようやく意味が分かったわ  
ニヤニヤしている果林。

「エマはともかく、天も案外一途なところあるのね」

「男をとつかえひつかえしてそんなヤツに言われたくないわ」

「人聞きの悪いこと言わないでくれる!?!そんなことしてないから!」

「分かっているって。彼氏いない歴〓年齢だもんね・・・ハツ」

「あつ、鼻で笑ったわね!? 腹立つううううっ!」

「はいはい、落ち着いて果林ちゃん」

苦笑しながら宥める彼方。

「さあ皆、そろそろ練習を始めるよ」

「よし! やつたるぞー!」

「かすみん頑張っちゃいますよー!」

「璃奈ちゃんボード『むんっ』」

「ほら侑ちゃん、これで涙拭いて」

「せつ菜さんもティッシュどうぞ」

「ありがとう、歩夢・・・」

「しずくさん、すみません・・・」

ぞろぞろと部室を出て行く皆。

さて、俺もサポートに行きますか・・・

「フフツ・・・」

「エマ?」

笑みを零すエマに、首を傾げる俺。

どうしたんだろう?

「ねえ、天くん……私ね、今凄く幸せだよ」

「え……?」

「自分のやりたいことが出来て、一緒に頑張り合える仲間がいて……支えてくれるのが、大好きな人で……本当に幸せ」

「エマ……」

「私、もつと頑張るから。だからこれからも一番近くで、私のことを見ててね」

「……勿論」

エマをそつと抱き寄せる。

「俺はこれからもずつと、エマの一番近くにいるから」

「天くん……」

「それと……あの時の約束、ちゃんと果たすから」

「っ……」

エマの目が潤む。

あの時の約束は、エマを俺のお嫁さんにする……

晴れて恋人同士になった俺達だが、結婚となるとそう簡単には出来ない。

お互いまだ高校生だし、やりたいこともたくさんある。

それでも……お互いの気持ちは変わらない。

「もしその時が来たら・・・俺のお嫁さんになってくれる？」  
「・・・勿論」

身を寄せてくるエマ。

「私はずっと、天くんの側にいるから」

「ありがとう」

笑い合う俺達。

そして・・・

「Ti Amo」

お互いの唇を重ね、愛を誓い合う俺とエマなのだった。

## 【小原鞠莉】唯一無二の存在

「今日も雨かあ……」

窓の外を見ながら、溜め息をつく俺。

先日梅雨入りしてからというものの、しばらく雨の日が続いていた。

雨が降っていると屋上が使えない為、Aqoursの練習も休みとなる。

そんなわけで今日も練習は中止となり、こうして早めに帰宅したのだが……

「暇だなあ……」

正直やることも無いし、何より身体を動かしたい気分だった。

しかしこうして雨が降っているのは、外で遊ぶことも出来ない。

さて、どうしよう……

「とりあえず、勉強でもするか……」

「天は真面目ねー。まるでダイヤみたい」

「いや、ダイヤさんほどじゃ……ん？」

自然にそう返してしまってから、ふと声が出た方を振り向くと……

「チャオ♪」

いつの間にか、鞠莉が俺の隣でにこやかに手を振っていた。

「ピツ・・・もしもし、警察ですか？」

「ちよつと!?!何で通報してるの!?!」

「自宅に不法侵入者がいます。住居侵入罪で捕まえて下さい」

「ゴメンって!?!勝手に入ったのは謝るから!」

「金髪の独特な髪型が特徴的で、恐らく『ONE P●ECE』のMr. 3をリスペクトしているものと思われまます」

「いや違うから! それでこんな髪型にしてるわけじゃないから!」

「あと、おっぱいがやたら大きいです。いやらしく強調して見せつけてくるので、公然猥褻罪でも捕まえて下さい」

「別に強調はしてないわよ!?!逆にセクハラで訴えても良い!?!」

「おお、まさか鞠莉が果南みたいなセリフを言うとは・・・歩くセクハラのくせに」  
「酷い!?!」

シヨックを受ける鞠莉。

まあ冗談はさておき・・・

「鍵は閉めてたはずなんだけど、どうやって入ったの?」

「この家の所有権は小原家にあるのよ? 合鍵くらい持つてるわ」

「俺のプライバシーはどこへ行ったの？」

「緊急事態でもないかぎり使うことはないから、安心してちょうだい」

「緊急事態でもないのに使った人に言われても、安心出来ないんだけど」

「マリーは特別だから」

「特別な変態？」

「変態は余計よ!?!」

鞠莉のツツコミ。

「やれやれ、鞠莉にも困ったもんだ・・・」

「それで？何かあったん？」

「雨で暇だから遊びに来ちゃった♪」

「鞠莉大好き」

「キヤツ♡天つてば大胆♡」

思わず鞠莉に抱きつく。

流石は俺の幼馴染、思いは一つだったらしい。

「外で身体を動かすことも出来ないし、退屈よねえ」

「それな」

頭を撫でてもらいながら、鞠莉の言葉に頷く俺。

ホント、この退屈な時間をどうしたものか……

「そこで提案なんだけど、今からマリーの家に遊びに来ない？」

「鞠莉の家に？」

「ええ、とっておきの遊び場があるのよ。ついでに泊まっていつてちようだい」

「天使……いや、女神か……」

「フフツ、結婚したい？」

「あ、結構です」

「何でよ!?そこは『結婚しよ』っていう場面でしょうが!」

「俺はラ●ナーじゃないし、鞠莉はク●スタじゃないでしょ」

「同じ金髪だもん!あと、クリ●タじゃなくてヒス●リアだから!」

「同じ金髪だから何だよっていう話なんだけど……あとそれはネタバレになりかねな

いから、あんまり訂正しないで」

俺は苦笑しながらツツコミを入れると、頬を膨らませて拗ねている鞠莉の頭を撫でた。

「まあ、鞠莉みたいな人と結婚出来たら良いな……とは思うけどね」

「っ……」

顔を赤くする鞠莉なのだった。

\*\*\*\*\*

「シャイニーツー！」

「うおっ!？」

鞠莉のスマッシュが決まり、ピンポン球が俺のラケットの先を通り過ぎる。

俺と鞠莉は今、卓球で勝負していた。

「強いね、鞠莉」

「Of course! 体育の授業じゃ、マリーの相手になるのは果南かダイヤくらいよー。」

「果南はともかく、ダイヤさんも?」

「ダイヤはああ見えて、結構運動神経良いのよ? テニスや卓球みたいなラケットを使うスポーツなら、マリーや果南よりダイヤの方が上なんじゃないかしら」

「マジでか」

ダイヤさんの意外な一面を知ったな・・・

「意外って言えば、ここも意外なんだよなあ……」  
周りを見回す俺。

俺と鞠莉がいるのは、まるで体育館のような仕様の場所だった。  
ホテルオハラの下地にある場所で、小原家専用のスペースらしい。

その無駄に広いスペースの中心に卓球台を広げ、俺達は卓球を楽しんでいるのだ  
た。

「まさか地下にこんな場所があったとは……」

「普段はスタッフのレクリエーションなんかで使ってるわ。スタッフ同士の交流を深  
めてもらおう為に、定期的にスポーツ大会を開いたりしてるのよ」

「何その楽しそうなイベント」

「賞金や景品も出るから、スタッフ達は本気で熱いバトルを繰り広げてるわね」

「……俺、鞠莉のお父さんの会社に就職しようかな」

「マリーと結婚すれば就職は勿論、次期社長候補になれるけど？」

「あ、結構です」

「だから何でよ!?!」

「隙あり!」

「ああっ!?!」

俺のサーブが決まる。

よし、点を取り返したぜ。

「ちよ、今のずるくない!？」

「鞠莉に比べたらずるくないわ」

「What!?! マリーのどこがずるいつて言うの!?!」

「そんな胸元の緩い服を着て、谷間をガッツリ見せて誘惑してくるなんて・・・鞠莉にスポーツマンとしての心は無いのか!？」

「誘惑してないしスポーツマンでもないんだけど!?! つていうかどこ見てんのよ!?!」

「うわ、そのネタ懐かしい・・・分かる人いるかな?」

「青木さ●かのネタをやったわけじゃないから!」

鞠莉のツツコミが止まらない。

やれやれ・・・

「かかってこいや、アメリカかぶれ。そんな独特なサイドテール、ことりちゃんだけで十分なんだよ」

「あつ、ことりの髪型も独特だとは思ってるのね・・・」

「良いんだよ独特でも。ことりちゃんはどんな髪型でも可愛いんだから」

「坊主でも?」

「週刊誌に写真を撮られて坊主にしたアイドルの話は止めなさい！」

「そんな具体的なこと一言も言っていないわよ!？」

「そういえば、つい最近グループを卒業したんだよな・・・  
本当にお疲れ様でした。」

「そんなわけで鞠莉、俺に負けたら坊主ね」

「どんなわけよ!?!嫌に決まってるでしょ!?!」

「じゃあ坊主以外で、俺が指定した髪型にしてみらおうか」

「・・・まあ良いわ。髪を切ったりするのは無しよ?」

「そんなことするわけじゃないじゃん。何言ってるの?」

「さつき坊主にしろって言ったのを忘れたの!?!」

「ツッコミを入れつつ、サーブを打ってくる鞠莉。

「フツ、甘いな・・・」

「坊主の呼吸、壺の型・・・」

「何で坊主じゃない人が坊主の呼吸使ってるの!?!」

「『終完分瞬』!」

「漢字が違うだけで読み方は一緒でしょうが!」

「ツッコミも虚しく、鞠莉のラケットが空を切る。」

よし、一点追加。

「さあ、センチメンスなスプリングを始めようか」

「それは別の人の事件よねえ!？」

ツツコミが止まらない鞠莉なのだった。

\*\*\*\*\*

《鞠莉視点》

「はい、出来た」

「相変わらず手慣れてるわねえ」

思わず感心してしまう私。

私達は今、ホテルオハラの最上階にある私の部屋へとやって来ていた。

勝負に勝った天が、私を好きな髪型にする為だ。

その髪型というのは・・・

「ポニーテール・・・本当に絵里のことが好きなのね」

「否定はしないけど、シスコンみたいな言い方止めてくんない？」

「実際シスコンじゃない」

「髪は女の命・・・そして今、鞠莉の髪は俺が握っている・・・」

「すいませんでした！」

全力で謝る私。

危なかったわ・・・

「絵里姉で見慣れてるっていうのもあるけど、ポニーテール好きなんだよね。女の子がポニーテールにしていると、可愛いなって思うもん」

「あら、じゃあ果南のことも？」

「勿論。まあ果南は普段からポニーテールだから、逆に他の髪型も見たいけどね。髪を下ろしてる姿を見た時は、ちよつとドキツとしちゃったよ」

「ふうん・・・今度髪を下ろしてみようかしら・・・」

「ん？何か言った？」

「何でもありません」

はぐらかす私。

全く、天つてば鈍感なんだから・・・

「でも鞠莉、ポニーテール似合ってるよ。凄く可愛いと思う」

「っ……そ、そうかしら……?」

「うん、たまにはこういう髪型にしてみても良いんじゃないかな?」

「そ、天がそう言うなら……」。

もう、何でそういうことはサラッと伝えるのよ……

聞いているこつちが恥ずかしいじゃない……

とつても嬉しいけど。

「……ハハッ」

「天?」

「ああ、ゴメンゴメン。ちよつと思ひ出しちゃつて」

急に笑い出す天。

どうしたのかしら?

「小さい頃、こうやって鞠莉の髪をいじったことがあつたじゃん」

「そういえばそうね」

「鞠莉つてば『髪は女の命デース!天はマリーの旦那になる男だから、特別に触ることを許可しマース!』とか言つててき」

「フフツ、覚えてるわ」

「私もつい笑つてしまう。」

我ながら上から目線なセリフだと思うし、天と結婚する気満々だったなと思う。

「・・・今も変わらないけどね」

「鞠莉？」

「今も変わらないって言ったのよ」

首を傾げる天に、今度ははぐらかさずちゃんと伝える。

「マリーが髪を触らせる男なんて、天しかないんだから。マリーにとって、天は特別な人・・・唯一無二の存在なの」

真っ直ぐ天を見つめる。

自分の気持ち、しっかりと伝えられるように。

「大好きよ、天・・・旦那にするなら、嫁になるなら・・・天しか考えられない」

「鞠莉・・・」

呆然としている天。

その時・・・

ゴーン・・・ゴーン・・・

部屋に置いてある時計の鐘の音が鳴り響く。

日付が変わり、六月十三日になったのだ。

つまり今日は……

「……誕生日おめでとう、鞠莉」

微笑む天。

そう、私の十八歳の誕生日……

まさか告白の真つ最中に迎えることになるなんて……

「誕生日プレゼント、渡さないかね」

「……じゃあ天をちようだい」

「アハハ、そうきたか」

天は面白そうに笑うと……おもむろに両腕を広げた。

「俺で良ければ……喜んで」

「っ！」

勢いよく天の腕の中に飛び込み、天の身体を強く抱き締める。

「あーあ、鞠莉のモノになっちゃった」

「不満なの？」

「まさか」

抱き締め返してくれる天。

「好きな人と一緒になれるんだもん。不満なんか無いよ」

「・・・じゃあ、ちゃんと『好き』って言って」

「・・・好きだよ、鞠莉」

「っ・・・」

耳まで赤くなるのが、自分でもよく分かる。

好きな人に『好き』って言われるだけで、こんなにドキドキするなんて・・・

「ずっと大切にしてね。永久保証の俺だから」

「どこの西野●ナ!? しかもそれ女の子側のセリフじゃないの!」

「ほら、俺は養ってもらおう側の人間だから」

「ヒモになる気満々!」

思わずツツコミを入れてしまう。

もう、こんな時まで・・・ってあれ?

「天?」

「ん?何?」

「何でこんなに心臓バクバクなの?」

「……言わせないでよ」

視線を逸らす天。

抱き合っているからこそ分かる、今の天の状態……

もしかして……

「天もドキドキしてるの？」

「だから言わせないでっば……」

「そっかそっかあ……ふくん？」

「な、何そのニヤニヤ顔……」

「別に……可愛いなんて思っただけだよ？」

「うわ、うざっ……」

「ちよつと!?嫁に向かって何てこと言うの!?」

「結婚してないし!まだ嫁じゃないし!」

「ゆくゆくは結婚するんだから良いでしょ!?浮気したら承知しないんだから!」

「するわけないじゃん!?旦那を信じられないの!」

「じゃあ果南に『おっぱい揉んで良いよ?』って言われたらどうするのよ!?」

「揉む」

「即答!?完全にアウトでしょうが!」

「揉んで良い」って言うなら揉むのが礼儀でしょうが！」

「どんな礼儀!? だったらマリーのおっぱいを揉んで良いわよ！」

「うわ、痴女かよ」

「礼儀はどこへいったの!?!」

ギャーギャー言い合う私達。

全く、天ときたら・・・

でも・・・

「・・・フフツ」

つい笑ってしまった私は、天の胸に顔を埋めた。

「ねえ、天・・・マリー、今とっても幸せ」

「鞠莉・・・」

「好きな人と想いが通じ合うって、こんなにも幸せなことなんだって・・・今、凄く実感してる」

天を見つめる私。

「マリーの想いに応えてくれて・・・ありがとう」

「・・・こちらこそ」

微笑む天。

「好きになってくれて・・・ありがとう」

やがて私達の顔がゆっくりと近付き・・・そのままゼロになる。

「っ・・・」

顔を離れた私達だったが、物足りなくて再び唇を重ねる。

何度も何度も・・・

「っ・・・ねえ、天・・・マリーのおっぱい、本当に揉んで良いの・・・？」

「っ・・・本当に理性が崩壊するんだけど・・・」

「えいつ」

「ちよっ・・・あっ・・・！」

「・・・やんっ♡」

そこから先のことは、あまりよく覚えていないけれど・・・

幸せに溺れた夜を過ごしたことだけは、しっかりと覚えている私なのだった。

## 【朝香果林】素直に・・・

「あれ？果林さん？」

「あら、せつ菜じゃない」

放課後に部室で読書をしていると、後輩のせつ菜がやって来た。

今日の同好会は休みになったから、誰も来ないと思っていたんだけど・・・

「どうして部室に？」

「昨日忘れ物をしてしまったので、回収にきたんです。果林さんはどうしてここに？」

「彼の付き添いよ」

そう言つて、視線を膝元に落とす。

そこには・・・

「すう・・・すう・・・」

私の膝枕でスヤスヤ眠っている、天の姿があつた。

それを見たせつ菜が微笑む。

「フフツ・・・天さん、気持ち良さそうに眠ってますね」

「ここ最近、夜遅くまで曲作りしてくれてるみたいなのよ。今日もさつきまで作業し

てたんだけど、眠そうだったから強制的に仮眠をとらせたの」

「次のライブ、近いですもんね・・・本当に、天さんと侑さんには頭が上がりません」  
「全くよね」

天の頭を撫でる私。

相変わらず無茶するんだから・・・

「フフツ・・・果林さんは、本当に天さんが大好きなんですわね」

「なっ!?!いきなり何を言い出すのよ!?!」

「しーっ、天さんが起きちゃいますよ」

「あっ・・・」

慌てて口元を押さえつつ、せつ菜を恨みがましく睨む。

「アハハ、ごめんなさい」

「もう・・・」

溜め息をつく私。

まあ、その通りなんだけどね・・・

「そういえば果林さんと天さんって、同好会が始まる前からお付き合い合いましたよね?お二人の馴れ初めって、どういった感じだったんですか?」

「急に切り込んできたわね・・・まあ、隠すことでも無いんだけど」

目をキラキラさせながら尋ねてくるせつ菜に呆れつつ、天と出会ったあの日のことを思い出す私なのだった。

\*\*\*\*\*

一年前・・・

「・・・参ったわ」

溜め息をつく私。

今日は学校も仕事も休みだったから、気分転換で動物園にでも行こうと思って外へ出てきたんだけど・・・

「・・・どこかしら」

完全に迷子になってしまった。

必死にスマホのマップと睨めっこしていると・・・

「えーつと・・・朝香先輩？」

急に声を掛けられる。

振り向くと、見覚えの無い男の子が立っていた。

「貴方は・・・？」

「あ、虹ヶ咲学園一年の絢瀬天です」

「・・・ああ、虹ヶ咲唯一の男子生徒！」

今年から共学となった虹ヶ咲だが、入学した男子はたった一人・・・

その一人がこの男の子、絢瀬天くん。

そういえば噂には聞いてたけど、顔は見たことなかったわね・・・

「よく私のことが分かったわね？会ったこと無いのに」

「朝香先輩は有名人ですから」

「そう？まあ読者モデルやつてるから、顔は知られてるかもしれないけど」

「いえ、歩く公然猥褻罪として有名です」

「何それ!？」

「ちよっと待って!？」

私そんな不名誉な称号で有名なの!？」

『スタイルが良過ぎて目の毒』『目のやり場に困る』『無駄にエロい』『色気がありすぎ

ていけない方向に走ってしまいそう』等々、あちこちで意見を聞きますよ」

「どんな意見!？っていうか、最後の意見は身の危険を感じるんだけど!？」

虹ヶ咲のモラルが不安になる内容だった。

大丈夫かしら・・・

「ところで先輩、ひよつとして道に迷われてます？」

「え、何で分かったの？」

「拳動が明らかに迷子でしたけど」

「うっ・・・」

何も言い返せない私。

「ここは素直に頼ろうかしら・・・」

「実は動物園に行きたくて・・・場所、分かるかしら？」

絢瀬くんスマホを見せると、何故かポカンとした表情を浮かべた。

「いや、先輩・・・後ろを見て下さい」

「え？」

絢瀬くんに言われて後ろを振り返ると・・・

すぐ目の前に、目的地の動物園があった。

「・・・」

汗がダラダラ流れる。

嘘でしょ・・・？

「・・・さようなら」

「ちよつと待つて!？」

哀れな子を見るような目をしながら立ち去ろうとする絢瀬くんを、全力で引き止める。

「違うの!これは違うの!」

「大丈夫です先輩。先輩はきつとナイスバディを得る為の代償として、頭のネジを十本くらい失つたんですよね。俺はちゃんと分かつてますから」

「何も分かってないじゃない!? っていうか十本つて多くない!?」

「何かを得る為には、それと同等の代償が必要・・・等価交換の法則ですもんね」

「どこのハガレンよ!? お願いだから話を聞いて!？」

「マズいわ・・・!」

このままじゃ、先輩としての威厳が・・・!」

「そうだわ絢瀬くん! 貴方今日暇かしら!？」

「無限大の地図を広げて、果てしないあの場所へ行かないといけないんで忙しいです」

「どこのD●—iCE!?! 『ONE P I ●CE』の主題歌じゃない!？」

「そういうことなんで帰りますね」

「ちよつと待ちなさい!」

絢瀬くんの腕を掴む。

こうなったら・・・！

「今日一日、私に付き合いなさい！これは先輩命令よ！」

「パワハラで訴えて良いですか？」

「美人な先輩と一日デート出来るんだから、役得だと思いなさい！」

「自分で美人とか言っちゃう時点でドン引きなんですけど」

「お昼ご飯奢ってあげるから！」

「何してるんですか朝香先輩！早く行きますよ！」

「急に態度が変わったわね!？」

掌返し早い絢瀬くんなのだった。

\*\*\*\*\*

「見て絢瀬くん！パンダよパンダ！」

「はしやぎっぷりが凄いですね・・・」

苦笑する絢瀬くん。

動物園へやって来た私達は、色々な動物を見て回っていた。

「朝香先輩がパンダ好きって、何か意外ですね」

「うっ・・・どうせ『キャラじゃない』って言いたいでしょ?」

「人相の悪い強面のオジサンが、実は大の子供好きだった時くらいの衝撃です」

「そこまで!?!」

絢瀬くんの中で、私ってどういうイメージなのかしら・・・

「まあでも、可愛いなって思いました」

「っ・・・き、急に何を言い出すのよ・・・」

「思いつきり抱きつきたいです」

「ええっ!?!そ、そんないきなり・・・!」

「あの白黒の毛をモフモフしたいですよね」

「パンダの話!?!」

「そうですけど?」

首を傾げる絢瀬くん。

わ、私としたことが・・・

とんでもない勘違いをしてたわ・・・

「つていうか、人メツチャ多いですね」

「休日の動物園だもの。これくらい普通・・・キヤツ!」

人だかりに押され、よろけてしまう私。

すると・・・

「大丈夫ですか？」

絢瀬くんが私を受け止め、優しく支えてくれた。

「あ、ありがとう・・・」

「いえいえ。はぐれても困りますし、とりあえず人だかりから離れましょうか」

絢瀬くんはそう言うと、私の手を握った。

「あ、絢瀬くん!」

「ん? 何ですか?」

「な、何でもない・・・」

私だけ意識しているのが恥ずかしくて、言葉を飲み込んでしまう。

意外にも大きな手の温もりを感じながら、そつと絢瀬くんの手を握り返す私なのだっ

た。

\*\*\*\*\*

「いやあ、楽しかったですね」

「そ、そうね・・・」

「先輩？どうしました？」

「な、何でもないわよ!?!」

すっかり日も暮れ、私達は学生寮への帰路に着いていたのだが・・・

私はさっきの手の温もりを思い出し、未だにドキドキしていた。

(うう、何でこんなにドキドキしてるのよ・・・)

周りからは『恋愛経験が豊富そう』などとよく言われるが、実は完全にゼロだというのはここだけの話だ。

男性と付き合ったことはおろか、手さえ繋いだこともない。

そもそも恋をしたことすらないのである。

(初めて男の子と手を繋いだ結果、この有り様・・・うぶすぎるでしょ・・・)

何だか顔が熱いし、とても恥ずかしい・・・

でも、不思議と嫌な気分ではない・・・

そんなモヤモヤを抱えている間に、いつの間にか学生寮に着いていた。

「それじゃ、今日はありがとうございました」

「・・・ごめんなさいね。一日付き合わせちゃって」

「役得だと思えって言ったのは先輩でしょうに」

「あ、あれはもう忘れて！」

「アハハ、先輩は面白いですね」

笑っている絢瀬くん。

全くもう・・・

「あ、そうだ」

絢瀬くんは何かを思い出すと、鞆の中から袋を取り出した。

「これ、さっきの動物園で買ったんです。良かったらどうぞ」

「私に・・・？」

驚きながらも受け取る。

いつの間に・・・

「開けても良いかしら？」

「どうぞぞ」

ゆつくりと封を開けると、中にはパンダのストラップが入っていた。

「可愛い・・・」

「でしょ？偶然見つけたんで、先輩にどうかなくて」

微笑む絢瀬くん。

「・・・お世辞でも何でもなく、今日は本当に楽しかったです」

「え・・・？」

「朝香先輩って、クールで大人な女性っていう印象がありましたけど・・・本当は凄く可愛い女の子なんだなって思いました」

「なっ・・・!？」

「アハハ、今度はパンダのことじゃないですよ」

笑う絢瀬くん。

この子、最初から気付いて・・・

「また学園で会ったら、声掛けて下さいね。それじゃ」

そう言つて立ち去ろうとする彼の手を、気付いたらギュツと掴んでいた。

「先輩・・・？」

「・・・ライン」

「え・・・？」

「ライン、教えなさい・・・休みの日、また付き合つてちょうだい・・・」

小さな声で呟く。

恥ずかしくて顔を上げられない。

「か、勘違いしないでよね!?! 私がパンダ好きだなんて知ってるの、貴方しかいないんだから! 責任取ってパンダ巡りに付き合えって言ってるの!」

「何だ、ただのツンデレか」

「誰がツンデレよ!?!」

「はいはい、落ち着いて下さい」

いきり立つ私に苦笑しつつ、絢瀬くんはスマホを取り出してラインを教えてくださいました。

「これでよし、と・・・それじゃ、デートのお誘いを楽しみにしてますね」

「だからデートじゃないから!」

絢瀬くんは私のツツコミに笑いながら、一礼して去っていった。

全くもう・・・

「・・・楽しかったわね、今日」

一人呟く。

気を遣うことなく自然に、一人の女の子として私を見て接してくれた絢瀬くん・・・

私には、それが何よりも嬉しかったのだ。

「フフツ・・・次はどこへ付き合ってもらおうかしら?」

思わず笑みが零れる。

この気持ちを何と呼ぶのかわからないまま、次に彼と出掛ける日を心待ちにしている私  
なのだった。

\*\*\*\*\*

「そんなことがあってから、天と二人で遊びに出掛けるようになって・・・」

「へ〜?」

「『私は天が好きなんだ』って気付いて、アプローチするようになって・・・」

「ほ〜?」

「それで、その・・・私の方から告白して、今に至るといっか・・・」

「なるほど〜?」

「そのニヤニヤ顔を今すぐ止めなさい!」

「しーっ、天さんが起きちゃいますって」

「あっ・・・」

慌てて口元を押さえる私。

うう、何を暴露させられているのかしら・・・

「それにしても、果林さんって案外純情なんですねえ」

「わ、悪い!?!」

「全然。むしろキュンとしちゃいました」

せつ菜はそう言って微笑むとその場にしゃがみ、天の頬をツンツン突いた。

「天さんは幸せ者ですねー。あの果林さんに想ってもらえるなんて」

「ちよつと、人の彼氏の頬を突くの止めてちよつと」

「フフツ、嫉妬ですか?」

「・・・何とでも言つてちよつと」

「アハハ、ちよつとからかい過ぎましたね。すみません」

苦笑しながら謝るせつ菜。

全く・・・

「本当に、お二人はお似合いのカップルだと思います。私も恋愛したいなあ・・・」

「・・・天は渡さないわよ?」

「どれだけ天さんが大好きなんですか・・・つてもうこんな時間!?!すみません、予定が

あるので失礼します!」

慌てて部屋を出て行くせつ菜。

それで目が覚めたのか、天の目がゆっくり開く。

「んっ・・・」

「あら天、おはよう」

「・・・おはよう、果林」

寝たまま身体を伸ばす天。

「今誰かいなかった・・・？」

「せつ菜よ。忘れ物を取りに来たんですって」

「ああ、せつ菜か・・・俺も会いたかったな・・・」

「あら、彼女の前で浮気宣言？」

「違うって。新曲のことで話し合いたくて」

天は苦笑すると、手を伸ばして私の頬に触れた。

「全く、俺の彼女は妬いてくれるねえ」

「重くて悪かったわね」

「そうやって自虐的にならないの」

優しく頬を撫でてくれる天。

「まあ、そういうところも好きなんだけど」

「っ……だ、騙されないんだから！」

顔が赤くなる私。

我ながらチョロい女ね……

「そういえば果林、ライブの次の週の日曜日って空いてる？」

「え？ええ、仕事も休みだから空いてるわよ」

「じゃあ、久々に動物園行こつか。パンダ見たいでしょ？」

「……天がどうしてもって言うなら、付き合つてあげるわ」

「アハハ、じゃあお願い」

「し、仕方ないわね……」

言葉とは裏腹に、胸が高鳴る私。

その日が待ち遠しくて仕方ない。

「もう、俺の彼女は素直じゃないんだから」

笑う天。

素直じゃない、か……

「……そうね。たまには素直になってみようかしら」

「え……？」

私は笑みを浮かべ、そのまま上半身を倒すと……

天の唇に自分の唇を重ねた。

「っ・・・」

「んっ・・・」

やがて名残惜しく思いながらも唇を離し、至近距離で天の瞳を見つめる。

「いつもありがとう、天・・・大好きよ」

赤くなる天の顔を見ながら、改めて天が大好きなのだ実感する私なのだった。

自分の気持ちからは逃げられない。

《ダイヤ視点》

「ここにいたんですね、ダイヤさん」

「・・・希さんの仰った通り、本当に来ましたわね」

「ん？何か言いました？」

「いえ、こちらの話ですわ」

溜め息をつく私。

まさか本当に来て下さるとは・・・

「それより、よくここが分かりましたわね？」

「希ちゃんのことだから、風に当たれる眺めの良い場所に連れて行くだろうと思って」

「どうして分かりますの!？」

「それでダイヤさんのことをいじった挙句、カツコ良いこと言っ立ち去ったんでしよう? 『後は天くんと話してな』とか言って」

「エスパーですか!？」

「いや、カバンには入れませんが」

「エスパ―●東のことではありませんわよ!？」

ツツコミが止まらない私。

勘が鋭いなどというレベルではありませんわね・・・

「希ちゃんとは長い付き合いですから。それくらい分かりますよ」

「そ、そういうものですか・・・?」

それにしても、希さんのことを理解されすぎているような気が・・・

まあ、これ以上は考えないことにしましょう・・・

「・・・座りましょうか」

「・・・ええ」

お互いベンチに座り、海を眺める。

そういえば、あの時も・・・

「そういえば・・・前にもダイヤさんと、こうして海を眺めたことがありましたね」

「フフツ、ちょうど私も思い出していたところですよ」

スクールアイドル部に体験入部したルビィを追いかけて、淡島神社へ続く階段を上っ

て・・・

その途中にあるベンチに座って、二人で夕陽に照らされる海を眺めて・・・

「あの時は、天さんに怒られてしまいましたわね。『言葉にしなくても分かるだなん

て、そんなのはただの甘えだ』って」

「言いましたねえ・・・先輩を相手に、ずいぶん偉そうなことを言ったもんです」  
「ですが、そのおかげでルビィと向き合うことが出来ました。感謝してますわ」  
微笑む私。

「あの時、天さんに初めて呼び捨てにされましたわね。タメ口も使われました」

「・・・ホントすいませんでした」

「フフツ、怒ってませんわよ」

申し訳なさそうにする天さんの頭を撫でる私。

「嬉しかったですわ。先輩や生徒会長としてではなく、黒澤ダイヤという一人の人間として見ていただけた気がして・・・」

「ダイヤさん・・・」

「今にして思えば・・・私が天さんに心を開いたのは、あの時からだったのかもしれないわね」

自分では『いつの間にか』などと思っていました、思い返してみればちゃんとしたキツカケがあったのですね・・・

「本当に・・・天さんの仰る通りですわ」

「え・・・？」

「言葉にしなければ伝わらない・・・それなのに、言葉にすることもせずただウジウジして・・・これではダメですわ」

私は深呼吸で気持ちを落ち着かせると・・・

両手で勢いよく自分の頬を叩きました。

「ちよ、ダイヤさん!?!何してるんですか!?!」

「自分に喝を入れました。天さんには天晴れを差し上げますわ」

「どこの張●さん!?!っていうか頬大丈夫ですか!?!」

心配して下さる天さん。

私はそんな天さんの顔へ手を伸ばし、両頬に手を添えました。

「ダ、ダイヤさん・・・?」

「・・・ダイヤ」

「え・・・?」

「ダイヤ、と呼んで下さいな。敬語も不要ですわ」

それは私が、ずっと思っていたこと・・・

Aquarsメンバーの中で、私だけが天さんにさん付けと敬語を使われていて・・・

私も他の皆さんと同じが良いと、ずっと思っていたのです。

「・・・『ダイヤちゃん』じゃなくて良いんですか?」

「他の皆さんをちゃん付けで呼ぶなら、それでも良いですわよ？」

「今さらそれはないかなあ・・・」

「でしたら、呼び捨てですわね」

クスクス笑う私。

天さんも苦笑し、一つ息をつくとき・・・

「じゃあ、改めてよろしくね・・・ダイヤ」

「っ・・・」

顔が赤くなるのが、自分でもよく分かります。

少し気恥ずかしいですけど・・・

それと同時に、嬉しさがこみ上げてきました。

「フフツ・・・こちらこそよろしく願いますわ、天さん」

「・・・天、で良いよ」

「え・・・？」

ポカンとする私。

天さんは悪戯っぽい笑みを浮かべています。

「あれ、俺だけ呼び捨てで呼ばせるつもりなの？」

「っ・・・」

そのセリフに、初めて天さんとお会いした日の記憶が蘇ってきました。

『これからよろしく願いますわね・・・天さん』

『よろしく願います、会長』

『ダイヤ、で結構ですわ』

『え・・・？』

『あら、私だけ名前で呼ばせるつもりですか？』

『・・・まさか。よろしく願います、ダイヤさん』

『よろしい』

どうやら、天さんに一本取られてしまったようですわね・・・

「・・・まさか。よろしく願いますわ、天」

「よろしい」

満足そうに笑う天。

「敬語も要らない・・・って言いたいけど、それがダイヤの素だもんね」

「ええ。ですが、少々砕けた口調でも構いませんか？」

「勿論。遠慮しなくて良いからね」

天はそう言うのとベンチから立ち上がり、私に手を差し伸べてきました。

「一緒に戻ろう？ 皆心配してるから」

「ええ」

天の手を取り、ベンチから立ち上がる。

「皆さん、ちゃん付けで呼んで下さるでしょうか・・・」

「大丈夫だよ。まあ善子は呼び捨てにしそうだけど」

「フフツ、確かに」

私は小さく笑うと、天の手をギュツと握りました。

「・・・しばらく、このままでも良いですか？」

「・・・勿論」

天は照れ臭そうに笑うと、私の手を引いて歩き出しました。

ドキドキしている一方、不思議と安心感もあつて・・・

(・・・困りましたわね)

そんなことを思いながら、一人苦笑してしまいます。

(こころもハッキリと、自分の気持ちを自覚してしまつたら・・・逃げられませんわ)

私は今、自分の中に芽生えた気持ちをハッキリと認識してしまいました。

『す、好きと言つても・・・こ、恋では無いというか・・・!』

『ふ〜ん?』

『た、大切な方ではあるのですが・・・!』

『へ〜?』

『あ、あくまでも仲間として・・・!』

『ほ〜?』

『ニヤニヤするの止めていただけます!?!』

先ほどの希さんとの会話を思い出します。

天に対しての『好き』は恋ではないと、そう思っていた・・・

いえ、そう思おうとしていた・・・

ですが・・・

(・・・認めざるを得ませんわね)

私は、天に・・・

家柄や立場に関係無く、黒澤ダイヤという一人の人間に向き合ってくれるこの人に・・・

こんな私を大切にして下さる、この殿方に・・・

惚れてしまったのだと。

(これが恋、ですか・・・)

これ以上無いほど胸がドキドキしているのに、天の手から伝わる温もりに幸せを感じ

てしまいます。

表情が緩んでしまいそうになるのを必死で堪えながらも、天の手を離すまいとしつかり握り直す私なのでした。

頼りになる人がいると安心できる。

「・・・何この状況」

ダイヤと一緒に戻ってきた俺は、目の前の光景に呆れていた。

そこには・・・

「わー!!」

「きゃー!!」

「ちよ、皆?!」

「落ち着いて!?!」

はしやぎまぐる幼稚園児達を相手に、てんやわんやする皆の姿があった。

うわあ・・・

「あつ、天!」

困り顔の三玖さんが慌てて駆け寄ってくる。

「どうしよう・・・全然収集つかなくて・・・」

「三玖さん、俺の左手に手を乗せて・・・せーの!」

「バルス・・・って何させるの!?!」

「いや、水族館が滅んだら収集つくかなって」

「発想が怖いよ!? 収集つくどころか全てが終わるんだけど!」

「天!? 助けて!」

三玖さんがツツコミを入れる中、善子が助けを求めてくる。

「あの女の子とルビイが泣き止まないの!」

「うええええんっ!」

「うわああああんっ!」

善子が指差した先では、何故か女の子とルビイがわんわん泣いていた。

幼稚園児と女子高生が揃って泣くという、何とも言えない光景がそこにはあった。

「何でルビイまで泣いてんの?」

「善子ちゃんがお尻を触った女の子を怒ったら泣いちゃって、それにつられてルビイ

ちゃんも泣いちゃったずら」

「なるほど、つまり善子のせいじゃん」

「女の子はともかく、ルビイも私のせいなの!」

「罰としてお尻ぺんぺん百回な。ほら、早くお尻出して」

「ここで脱げって言うの!? 何しれつとセクハラしようとしてんのよ!」

「いや、誰も脱げなんて言っていないけど」

「えっ」

「お尻を突き出してもらって、花丸にぺんぺんしてもらうつもりだったんだけど」  
善子の顔が羞恥で真っ赤に染まっっていく。

あらら・・・

「じゃあ花丸、よろしく」

「了解ずら。ほら痴女子ちゃん、早くお尻をこっちに向けるずら」

「誰が痴女子よ!?!」

「ずらっ!」

「あんっ!?!」

花丸によるお尻ぺんぺんが始まる。

とりあえず、公開SMプレイは放っておいて・・・

「A q o u r s 集合!」

「あつ、天くん!?!」

俺に気付いた皆が、慌てて駆け寄ってくる。

「大変なのよ・・・って、花丸ちゃんと善子ちゃんは何してるの?」

「気にしないで」

「いや、凄く気になるんだけど・・・しかもルビィちゃん泣いて・・・」

「気にしないで」

「ひゃあっ!？」

おでこと鼻をくつつけ、梨子を強引に黙らせる。

今はそれどころじゃないからね。

「とりあえず全員待機で。すぐにこの状況は落ち着くから、動くのはそれからね」

「いや、このままじゃ落ち着かないと思うよ!？」

「そうよ! マリー達も動かないと!」

「〃鳴●〃!」

「がふっ!？」

ハリセンで顎に一撃をもらった果南と鞠莉が地面に倒れる。

「他に異論のある人いる?」

「「いませんっ!」」

千歌・曜・梨子の三人が、冷や汗をダラダラ流しながら返事をする。

「やれやれ・・・」

俺は溜め息をつきつつ、オロオロしている引率の先生に歩み寄った。

そのすぐ側には、涙目になっている女の子の姿があった。

「皆、ちゃんとしてよお・・・!」

他の子達が自由に動く中、この子だけは勝手な行動をとっていなかったのだ。恐らく、普段からとてもしつかりした子なんだろう。

そしてそんな姿は・・・先ほどまで会話していた、彼女の姿を思い起こさせた。

「・・・大丈夫だよ」

「ふえ・・・？」

優しく頭を撫でると、女の子がキョトンとした顔でこちらを見る。

「頼りになるお姉ちゃんが、すぐに助けてくれるから」

『ピイイイイイイイッ!』

辺りに笛の音が鳴り響く。

幼稚園児達が動きを止め、視線を向けた先には・・・

「さあ皆、集まれー!」

ステージの上に立ったダイヤが、幼稚園児達に呼びかける姿があつた。

「走ったり大声を出すのは、他の人の迷惑になります! ブッブー、ですわ!」

興味をそそられた幼稚園児達が、ダイヤのいるステージの前に集まっていく。

「皆、ちゃんとしましようにね？」

『はーい！』

元氣よく返事をする幼稚園児達。

よし・・・

「ほら、出番だよ」

「あつ、うん！」

慌てて幼稚園児達の誘導を始める皆。

俺は女の子の背中を押した。

「行っておいで。楽しんできてね」

「っ・・・うんっ！」

笑顔で皆のところへ行く女の子。

引率の先生も俺に頭を下げ、女の子を追いかけていった。

ルビイも泣き止んで、泣いていた女の子を誘導してあげている。

一件落着だな・・・

「お疲れさん」

いつの間にか俺の側にいた希ちゃんが、笑顔で労ってくれる。

「希ちゃん、今までどこにいたの？」

「水族館を満喫してた」

「その無駄に大きい乳は何の為にあると思ってるの？ 暴れ回る幼稚園児達を大人しくさせる為でしょうか」

「何そのピンポイントな使用目的!?!」

「でもその場合、あの子達に希ちゃんのおっぱいが弄ばれるのか・・・それはちよつと許可出来ないわ」

「天くんの立ち位置はどこなん!?!」

「アハハ、天は相変わらずだね」

三玖さんがクスクス笑いながらやってくる。

「ありがとう。助かったよ」

「俺は何もしてませんよ。お礼はダイヤに言ってあげて下さい」

俺が三玖さんにそう言うのと、呼び捨てに気付いた様子の希ちゃんが優しく微笑んだ。

「フフツ、ダイヤちゃんの問題は解決出来たみたいやね」

「希ちゃんがお膳立てしてくれたおかげだね。ありがとう」

「どういたしまして」

コツンと拳を合わせる俺達。

そんな俺達を、三玖さんが眩しそうに見つめている。

「流石はμ，s・・・絆が深いね」

「勿論。だからこそ、三玖さんには天くんを渡しませんからね」

俺の腕に抱きついてくる希ちゃん。

思ったより嫉妬してたのね・・・

「フフツ、それは残念・・・騒ぎを収めてくれたお札に、天には私のおっぱいを揉ませてあげようと思ってたのに」

「喜んでご馳走になります」

「天くん!?それは許可出来へんよ!?!」

「希ちゃんの立ち位置はどこなの?」

「アハハ、さつきとツツコミが逆になってるよ」

「三玖さんも天くんを誘惑しないで下さい!」

おかしように笑う三玖さんに、ムキになって怒る希ちゃん。

珍しい光景にちよつとほっこりしつつ、声を出して幼稚園児達を誘導するダイヤに目を向ける。

すると視線に気付いたのか、ダイヤがこちらを振り向き俺達の目が合う。

ダイヤはニッコリ笑うと、俺に向かってウインクしてきた。

「ハハツ・・・流石ダイヤだわ」

笑いながらダイヤに手を振る俺。

一瞬で場を収めてみせたその行動力に、改めてダイヤに尊敬の気持ちを抱く俺なのだっただった。

距離が縮まるのは嬉しいものである。

《ダイヤ視点》

「皆、今日は本当にありがとうございます」

お礼を言ってお下さる三玖さん。

伊豆・三津シーパラダイスも閉館時間となり、私達のアルバイトも終わりを迎えていたのです。

「これ、今日のお給料。受け取って」

「わーい！」

「ありがとうございます！」

お給料を受け取り、喜んでいる皆さん。

そんな中……

「ダイヤ……」

何故か妙な顔をした果南さんと鞠莉さんが、私に近付いてきました。

「お二人とも、そんな顔をしてどうしたのですか？」

「いや、その……ゴメン」

「はい?」

謝ってくる二人に、思わず首を傾げてしまう私。

何を謝っているのでしょうか・・・?

「ダイヤが真剣に悩んでるのに、真面目に相談に乗ろうともしないで・・・無責任なことだけ言つて、ダイヤを助けようとしなくて・・・本当にゴメン」

「それでも親友なのかつて、天に怒られちゃつて・・・本当にその通りだと思うわ。ダイヤと一緒に悩むべきだったのに・・・ゴメンなさい」

頭を下げる二人。

なるほど、そういうことでしたか・・・

「お二人とも、頭を上げて下さい。そんなに謝られると気持ち悪い・・・じゃなくて、こつちが申し訳なくりますわ」

「今気持ち悪いって言わなかった!」

「良いから頭を上げて下さい。キモいので」

「隠すこともなく断言した!」

「そんな胸元の緩い服を着て、頭を下げることで胸の谷間を見せつけるなんて・・・嫌味ですか? 優越感に浸りたいんですの?」

「そんなつもり微塵も無かったんだけど!」

「誰の胸が微塵も無いですって!?!ぶっ飛ばしますわよ!?!」

「言つてないから!?!どうしちゃったのダイヤヤ!?!」

ツツコミが止まらない二人。

まあ冗談はこれくらいにして・・・

「・・・気にしないで下さいな」

微笑む私。

「そもそも、私がウジウジしていたのがいけないのです。おかげさまで吹っ切れましてので、もう大丈夫ですわ」

「ダイヤ・・・」

「それより・・・私も、鞠莉さんには謝らないといけませんわね」

「え・・・?」

「あつ、いたいた」

鞠莉さんが首を傾げる中、天が私を見つけて近付いてきます。

「ダイヤ、これダイヤの分のお給料だって」

「ありがとうございます、天」

「えつ、『ダイヤ』・・・!?!」

「しかも今、天のことを呼び捨てに・・・!?!」

ビツクリしている二人。

私は悪戯つぼく笑うと、天の腕に抱きつきました。

「鞠莉さん、大変申し訳ありませんが・・・負けませんわよ？」

「え、ちよ・・・ええっ!？」

「うわあ、あのダイヤをオトすとか・・・ヤバいね、天」

「ん？何の話？」

「フフツ、何でもありませんわ」

キョトンとしている天の表情に、思わず笑ってしまいます。

全く、天は相変わらずなんですから・・・

「ちよ、ダイヤちゃん!？」

「え・・・？」

不意にちゃん付けで呼ばれ、驚いて振り向くと・・・

梨子さんが慌ててこちらへ駆け寄ってくるところでした。

「何で天くんを抱きついてるの!?!」

「大変よ梨子!ライバルが増えてしまったわ!」

「ええっ!?!」

何やら焦った様子で話し合う二人をよそに、私はポカンとしてしまいました。

「梨子さん、今……」

「あつ、ダイヤちゃんずら!」

「ダイヤちゃん、お給料もらった!?!」

花丸さんと曜さんに話しかけられました。

二人とも、ダイヤ『ちゃん』って……

「ダイヤ、さっきは助かったわ。ありがとうね」

笑顔でお礼を言って下さる善子さん。

呼び捨て、しかもタメ口……?!

「あ、あの……皆さん、どうしたんですの……?」

「フフツ、お姉ちゃんこそどうしたの?」

悪戯っぽく笑うルビィ。

「果南ちゃんも鞠莉ちゃんも、ちゃん付けで呼ばれてるしタメ口で話してるでしょ?」

お姉ちゃんだってそうなくてもおかしくないんじゃない?」

「ルビィ・・・」

「そういうこと」

ルビィの後ろから、千歌さんがニコニコしながらやってきます。

「改めて、これからもよろしくね・・・ダイヤちゃん」

「っ・・・ええ、勿論ですわ！」

笑みを浮かべる私。

本当に、良く出来た後輩達ですわ・・・

「そうだ皆、これからご飯食べに行かない？私が奢るから」

「マジですか！三玖さん愛してる！」

「ちよ、天!？」

「簡単に愛してるとか言わないのっ！」

「ご飯・・・じゆるり」

「花丸ちゃんは食欲に忠実過ぎない!？」

「まあそれがずら丸よね・・・」

「でも、お腹空いたであります！」

「確かにね。お言葉に甘えよつか」

「よーし！食べるぞー！」

わいわい盛り上がる皆さん。

元気ですわねえ・・・

「フフツ・・・良かったね、ダイヤちゃん」

いつの間にか、希さんがすぐ側に立っていました。

「皆との距離も縮まったし、天くんへの気持ちにも気付けたし・・・一件落着やね」

「ええ、おかげさまで」

苦笑してしまう私。

「希さん、こうなることが分かっていたのではありませんか？」

「さあ、どうやろうね？」

クスクス笑う希さん。

全く、この人には敵いませんわ・・・

「それよりダイヤちゃん、天くんに告白しないの？」

「・・・今はまだ、心の準備が出来ていませんので」

何しろ、先ほど自分の気持ちを自覚したばかりなのです。

今はまだ、告白する勇気を持つことが出来ません。

ですが・・・

「これからしつかり、自分の気持ちに向き合っていきます。逃げたりしません」

「それなら良し。頑張つてね」

「はい！」

「希ちゃん！ダイヤ！早く行くよ！」

「はい」

「今行きますわ」

天に声を掛けられ、皆さんのところへ向かう私達。

今はまだ、貴方に気持ちを伝えることは出来ませんが……

ですが……

「天」

「ん？」

振り向いた天に、私は手を差し出しました。

「……ん」

「はいはい」

天は意図が分かったのか、笑いながら私の手を取りました。

そのままそつと握られ、優しく引かれます。

「ダイヤったら、急に甘えん坊になったね」

「私だって、たまには甘えたいんです」

「アハハ、じゃあ喜んで甘えられようかな」

「ええ、覚悟して下さいな」

この人を好きになって、本当に良かった・・・

笑顔で天の手を握り返しつつ、心からそう思う私なのでした。

## 可愛いは正義である。

「天くん、色々ありがとう」

「こちらこそ。楽しかったよ」

駅のホームで抱き合う希ちゃんと俺。

東京へ帰る希ちゃんを見送る為、俺はA q o u r sの皆と沼津駅へやって来ていた。

「希さん、ありがとうございました！」

「まだいつでも遊びに来て下さい！」

「楽しみに待ってます！」

「フフツ、ありがとう。千歌つち、曜ちゃん、ルビイちゃん」

嬉しそうに笑う希ちゃん。

そんな希ちゃんの前に、善子がゆつくり進み出る。

「ノゾミエル、貴女にこれを授けましょう・・・」

そう言って善子が手渡したのは、いかにも善子が好きそうな形のペンダントだった。

「ヨハネのリトルデーモンとなった証です。受け取りなさい」

「ありがたき幸せ・・・感謝致します、ヨハネ様」

「・・・何で希さんはノリノリずら？」

「希ちゃん、昔から悪ノリ大好きだから」

呆れている花丸に、苦笑しながら答える俺。

まああんな風にもノリが良いから、希ちゃんは色々な人と仲良くなれるんだけども。

「それではヨハネ様、お別れのわしわしをさせていただきます」

「え、ちょ・・・あんっ!？」

「流石はヨハネ様、相変わらず手に収まるちょうど良い大きさ・・・」

「いや、それ褒めてない・・・んあっ!？」

「・・・相変わらずおっぱいが好きだね」

善子の胸をわしわしする希ちゃんを見て、果南が若干引いていた。

「もしかして天のおっぱい好きは、希さんの影響なんじゃ・・・」

「『そうだ』って言ったら、果南のおっぱいをわしわししても良い？」

「良いわけないでしょうが！」

「そうよ天！わしわしするのはマリーのおっぱいにしなさい！」

「鞠莉!？」

「天くん、私のおっぱいをわしわしして！大きくなるかもしれないし！」

「梨子ちゃんも何言ってるの!？」

「その、天が『どうしても』と言うのなら……私の胸をわしわししても、良いのですよ……?」

「ダイヤまで壊れたあああああつ!?!」

悲鳴を上げる果南。

あのダイヤがそんなことを言うとは……

「じゃあ『どうしても』で」

「し、仕方ありませんわね……」

「ダメだつてば!?!」

「大和撫子はどこへ行ったずら!?!」

必死に止める果南と花丸。

その様子を見た希ちゃんが、クスクス笑っている。

「フフツ……ダイヤちゃん、すっかり乙女やね」

「出遅れてしまった分、アピールしなくてはいけませんので」

楽しそうに笑うダイヤ。

「希さん、色々とお世話になりました」

「こちらこそ。頑張つてね」

「はいっ」

握手を交わす二人。

ずいぶん仲良くなったなあ・・・

「ところで、『出遅れた』とか『アピール』って何の話？」

「天くんに言つたところで、理解出来るとは思えないすら」

「そんな冷たいこと言うなよ花丸」

「ウザ絡みは止めるすら！」

花丸に抱きついてみる。

恥ずかしそうだが、拒否はしてこない。

可愛いヤツめ。

「ちよ、天!？」

「何で花丸ちゃんに抱きついてるの!？」

「そういう関係なんだよ」

「「「「「ええっ!」「」「」「」」」」」

「ちよつと待つすら!前にもこんなやり取りやったことあるすら!」

「おつ、よく覚えてたね。よしよし」

「えへへ・・・じゃないすら!誤解を招く発言は止めるすら!」

「アハハ、仲がええなあ」

笑っている希ちゃん。

そんなやり取りをしている内に、ホームに電車が入ってくる。

「あつ、電車来ちゃった。それじゃ、ウチはそろそろ・・・」

「希い・・・!」

「え・・・?」

別れの挨拶をしようとした希ちゃんを呼ぶ声が出た。

声のした方を振り向くと・・・

「えっ、海未ちゃん!」

そこにいたのは海未ちゃんだった。

恨みのこもった眼差しで希ちゃんを睨んでいる。

「あの時は、よくもやってくれましたね・・・!」

「ア、アハハ・・・ゴメンゴメン・・・」

「許しませんよお!」

「キヤアツ!」

希ちゃんに後ろから抱きつき、両胸をガシツと掴む海未ちゃん。

「ちよ、海未ちゃん!何してるん!」

「わしわしMAX!」

「人の技。パクらんといて!？」

悲鳴を上げる希ちゃん。

美女と美女が絡み合いながら、美女が美女のおっぱいを揉んでいるなんて・・・

「うん、ご馳走様です」

「何が!？」

千歌のツツコミ。

まあそれはさておき・・・

「海未ちゃんが復讐の為に来たのは分かったけど、何で今来たの？海未ちゃんが東京に帰ってから、もう一週間経つけど」

「ずっと大学の講義があっただんです！休むことなど出来ません！」

「真面目か」

「どれほど日曜日を心待ちにしたことか！さあ希、覚悟しなさい！」

「ああんっ!？」

胸を揉まれて喘ぐ希ちゃん。

なかなかレアなシーンだな・・・

「鞠莉」

「No Problem! バッチリ録ってるわ！」

「流石だぜ」

「そんなやり取りしてる場合かつ！この変態幼馴染コンビっ！」  
焦っている善子。

「それより、早く海未先生を止めなさいよ!？」

「やだねったら〜?」

「やだね〜・・・って氷川き●しかつ！いいから止めなさい!」

「そんなこと言われても、海未ちゃんを止められるのはことりちゃんの『お願い』くらいなんだよねえ・・・」

「呼んだ?」

「うわっ!？」

急に背後から誰かに抱きつかれる。

俺の肩からひよっこり顔を出したのは・・・

「えっ、ことりちゃん!？」

「おはよー♪」

笑っていることりちゃん。

まさかのご本人登場だった。

「な、何でことりちゃんがここに・・・?」

「秋休みを利用して、天くんに会いに来ちゃった♡」

「ことりちゃん・・・」

「天くん・・・」

「二人の世界に入っていないで、早くあっちを止めてくんない!?」  
「ギャーギャーうるさい善子。」

「チツ、良いところだったのに・・・」

「じゃ、サクツと終わらせちゃおつか・・・海未ちゃん!」

「えっ、ことり!?!」

希ちゃんの胸をわしわししていた海未ちゃんが、驚いてこちらを振り向く。

「な、何故ことりがここに!?!」

「そんなことより、希ちゃんに乱暴しないの!メツ!」

「で、ですが・・・!」

食い下がるうとする海未ちゃんを、ことりちゃんが涙目で見つめる。

「ことりのお願い、聞いてくれないの・・・?」

「そ、そういうわけではなく・・・!」

「海未ちゃん・・・お願いあいつ!」

「っ・・・!」

雷に撃たれたような表情の海未ちゃん。

あつ、陥落した……

「分かりました……」

「ありがとう、海未ちゃん。希ちゃんを連れて、気を付けて東京に帰ってね」

「はい……」

「希ちゃん、生きてる?」

「ハア……ハア……た、助かったあ……」

息を切らしている希ちゃん。

顔も紅潮してるし、服も胸元が乱れてるし……

「うん、エロいね」

「真面目な顔して何言ってるのっ!」

曜に頭を叩かれる。痛い。

「さあ希、帰りますよ」

「はい……」

海未ちゃんと希ちゃんが電車に乗り込む。

「……とりちゃん、ありがとう。助かつちやった」

「気にしないで、希ちゃん」

「それよりことり、貴女も早く乗って下さい。そろそろ出発してしまいますよ」  
「乗らないよ?」

「はい?」

首を傾げる海未ちゃん。

ことりちゃんは満面の笑顔で、俺の腕に抱きつく。

「だつてことり、天くんのお家に泊まりに来たんだもん♪」

「ハアツ!?!」

「天くん、秋休みの間はお世話になつても良いかな?」

「勿論。ことりちゃんなら大歓迎だよ」

「フフツ、ありがと♪」

ことりちゃんは微笑むと、俺の耳元に口を寄せて囁いた。

「じゃあお礼に・・・天くんの好きなこと、何でもさせてあげるねっ♡」

「オツケー、今すぐ家に行こうか」

「何するつもりですかっ!」

「はいはい、動かんといて」

慌てて電車を降りようとする海未ちゃんを、希ちゃんが羽交い絞めにする。

「ちよ、希!?!」

「ことりちゃん、これで借りは返したからね」

「ありがとう、希ちゃん。帰り道は海未ちゃんを自由にして良いから」

「それじゃあ、お言葉に甘えて・・・海未ちゃんにも借りを返さんとね」

「ひいっ!？」

悲鳴を上げる海未ちゃん。

希ちゃんの笑顔から圧力を感じる・・・

さっきのわしわし、怒ってるんだろうなあ・・・

「そ、天っ！助けて下さいっ!！」

「海未ちゃん、君のことは忘れない」

「天あっ!？」

「さっ、行こうか海未ちゃん・・・天くん、またね」

「うん、またね希ちゃん」

「嫌あああああっ!？」

無情にも電車の扉が閉まる。

ニコニコしている希ちゃんと絶望の表情を浮かべる海未ちゃんを乗せ、電車は走っていった。

「海未先生、大丈夫かな・・・?」

「これが元気な海未ちゃんを見る最後の機会になることを、この時のA q o u r sは知る由も無いのであった」

「不穏なナレーション止めてくれる!？」

ルビイのツツコミ。

まあ、それはさておき……

「ことりちゃん、とりあえず俺の家に行こつか」

「うんっ♪天くんのお家、楽しみだなあ♪」

再び俺の腕に抱きついてくることりちゃん。

幸せだなあ……

「ぐぬぬぬぬ……!」

「強敵現るデース……!」

「やはり私も、もつと積極的に行くべきでしょうか……!」

「はいはい、梨子ちゃんと鞠莉ちゃんは落ち着いて。お姉ちゃんは今以上に壊れたら

アウトだから気を付けようね」

何故かこちらを睨んでいる梨子と鞠莉の頭を撫でつつ、何故か真剣な表情を浮かべているダイヤに呆れているルビイなのだった。

## 【優木せつ菜】どつちが好き？

「菜々、書類出来たよ」

「ありがとうございます」

俺から出来上がった書類を受け取る菜々。

放課後、俺達は生徒会室で業務を行っていた。

よって今の彼女はスクールアイドル・優木せつ菜ではなく、虹ヶ咲学園生徒会長・中川菜々なのである。

「後は何か仕事ある？」

「そうですね・・・」

菜々は少し考え込むと、俺に向かって手招きをした。

「少しこちらへ来ていただいても良いですか？」

「ん？どうした？」

菜々の近くに歩み寄る俺。

その瞬間、菜々の両手が俺の腰をガツチリ掴む。

俺は今、菜々に抱きつかれている状態だった。

「……………、生徒会室なんだけど」

「……………良いじゃないですか。今は誰もいないんですし」

俺の腰を抱く手にキュツと力を込める菜々。

俺と菜々が付き合っていることは、スクールアイドル同好会のメンバーしか知らないことだ。

他の生徒会役員達には内緒にしている為、この場でこういうことをするのはあまり良くないのだが……………

「ダメ、ですか……………？」

「……………少しだけなら」

菜々に上目遣いで甘えられると、ダメとは言えなくなってしまう。

この場にかすみでもいたら、『天先輩はせつ菜先輩に甘過ぎです！』とか怒られてしまいそうだ。

まあ実際、甘やかしているのは間違いないんだけども。

「全く、菜々は甘えん坊だなあ」

「私だって甘えたいお年頃なんです」

「どんなお年頃だよ」

呆れつつ、菜々の頭を優しく撫でる。

サラサラな髪感触が心地良かった。

「フフツ……天さんに頭撫でられるの、好きだなあ……」  
幸せそうに微笑む菜々。

そんな菜々の顔をもつと見ていたくて、菜々の頭を優しく撫で続ける俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「せつ菜、スカーレットストームツ！」

「ぐはあっ!？」

せつ菜の投げたクツションが、かすみの顔面に直撃する。

生徒会業務を終えた俺達は、そのままスクールアイドル同好会の練習に合流していた。

「かすみさん!?!大丈夫ですか!？」

「せつ菜、それかすみやない。屍や」

「誰が屍ですか!？」

ガバツと起き上がるかすみ。

あつ、生きてたんだ・・・

「つていうかせつ菜先輩!?いきなり危ないじゃないですか!」

「す、すみません!投げるつもりは無かったんですが、カッコつけてたらつい・・・」

「まあまあ、かすみが犠牲になっただけだから良しとしよう」

「天先輩!?全然良しと出来ないんですけど!」

「かすみに当たったおかげで、後ろで寝てる彼方さんに当たらずに済んで良かったよ」

「天先輩はかすみと彼方先輩のどっちが大切なんですか!」

「彼方さん」

「即答!?つていうか彼方先輩は何で寝てるんですか!」

「彼方さんだから」

「・・・納得したくないのに納得です」

「すやあ・・・」

熟睡している彼方さん。

相変わらず気持ち良さそうに寝てるなあ・・・

「ほら、練習再開するよ。彼方さんも起きて下さい」

「んう・・・」

「あつ、遙ちゃんだ」

「えつ、どこ!？」

「嘘です。ほら、練習やりますよ」

「うう・・・嘘つくなんて酷いよ天くん・・・」

落ち込みつつ、寝ていたソファから立ち上がる彼方さん。

やれやれ・・・

「むう・・・」

「ん?」

何故かせつ菜が不機嫌そうな表情で俺を見ていた。

「せつ菜?どうした?」

「・・・仲良いですよ。かすみさんや彼方さんと」

「そりや同好会の仲間だし」

「しかも『彼方さんが大切』って・・・浮気ですか?」

「あれ、妬いてます?せつ菜さん、妬いてます?」

「ニヤニヤしながらこつち見ないで下さい!」

膨れっ面でそっぽ向いてしまうせつ菜。

やれやれ・・・

「……俺にとつての一番はせつ菜だよ」

「つ……」

耳元でそう囁くと、せつ菜の顔がカアツと赤く染まる。

可愛いヤツめ。

「おやおや〜?」

背後から彼方さんに抱きつかれる。

「同好会の練習中にイチヤイチャするなんて、破廉恥ですな〜?」

「なつ……だ、誰が破廉恥ですかっ!」

「全く、見てるこつちが恥ずかしくなつちやうわ」

呆れた表情を浮かべる果林さん。

「バカツプルなのは結構だけど、二人きりの時にやってちようだい」

「頭がバカな人が何か言ってるんですけど」

「天!? 喧嘩売ってるの!?!」

「そんなわけないでしょ、バ果林さん」

「そろそろっ!」

「せつ菜スカーレットストームッ!」

「ごふっ!?!」

せつ菜の投げたクッションが、果林さんの顔面に直撃する。

「私の恋人に手を出すことは許しません！」

「良いぞせつ菜、もつとやつちやえ！」

「くっ・・・こうなったら、全面戦争よ！」

「遊んでないで練習して下さいいいいいいいいいっ！」

かすみに怒られる俺達なのだった。

\*\*\*\*\*

### 《せつ菜視点》

「うう、まだ顔が痛いわ・・・」

「ゴ、ゴメンなさい・・・ついやりすぎてしまって・・・」

「良いんだよせつ菜ちゃん、果林ちゃんの自業自得なんだから」

「彼方!?! 自業自得って何よ!?!」

果林さんのツツコミ。

練習を終えた私達は、更衣室で着替えているところでした。

「そういえば、前から気になってたんですけど……」

かすみさんが会話に加わってきます。

「天先輩って同好会の時、せつ菜先輩のこと『せつ菜』って呼んでますよね？普段からそうなんですか？」

「いえ、普段は『菜々』って呼ばれますよ。『優木せつ菜』として活動している時は、『せつ菜』って呼んでくれてるんです」

「……何かややこしく不是吗か？」

「アハハ……まあ『優木せつ菜』の正体は秘密ですから」  
苦笑する私。

実際、そこは天さんに申し訳ないと思ってるんですよ……  
状況に応じて呼び方を変えてもらうなんて……

「変わったカップルよね、貴女達」

呆れたように言う果林さん。

「天は『中川菜々』と『優木せつ菜』、どっちを好きになったのかしらね？」

「え……？」

「いや、だってキャラが全然違うじゃない？天のタイプはどっちゴフツ!!」

「はくい、余計なこと言わなくい」

彼方さんが果林さんの顔面にクツションを投げつけていました。

「果林ちゃんはそのことを心配する前に、自分の心配をしようね」

「なっ、何よ自分の心配って!?!」

「恋愛経験豊富そうに見えて実はゼロなんだから、悪い男の子に騙されないようにしないといけないよ」

「彼方あああああっ!」

ギャーギャー騒ぐ果林さん。

私は呆然としつつも、先ほどの果林さんの言葉が頭から離れないのでした。

\*\*\*\*\*

《せつ菜視点》

「……菜……つ菜……せつ菜!」

「……はっ!?!」

名前を呼ばれていることに気付いて顔を上げると、隣に座っている天さんが心配そうな表情を浮かべてこちらを見ていました。

「大丈夫？何かボーっとしてるみたいだけど・・・」

「す、すみません！ちよつと考え事をしていて・・・」

他の皆さんは帰宅し、部室には私達二人しかいません。

練習終了後は、最終下校時間まで二人で過ごすのがいつもの流れになっているので、す。

「ホントに大丈夫？練習は終わったのに、まだ『せつ菜』スタイルだけど・・・」

いつもは練習が終わると、眼鏡をかけて髪を結んで『中川菜々』に戻るんですが・・・

今日の私は、まだ『優木せつ菜』の格好のままでした。

「・・・天さんは、『菜々』の方が好きですか？」

「え・・・？」

「それとも・・・『せつ菜』の方が好きですか？」

「はい・・・？」

首を傾げる天さん。

「天さんが好きになったのは、『中川菜々』ですか？『優木せつ菜』ですか？」

頭の中から離れないその疑問を、思わず天さんにぶつけてしまいます。

天さんが好きになってくれた私が、どちらの私なのか分からない……だからこそ『菜々』に戻れず、『せつ菜』のまま葛藤を続けている……どちらが正解なのか、私には分かりませんでした。

天さんはそんな私を見て、一つ溜め息をつくと……

「天、スカーレットストームッ！」

「ふっ!？」

私の顔面にクツションを叩き込んできました。

「ちよ、何するんですか!？」

「『菜々』は眼鏡してるから遠慮しちゃうけど、『せつ菜』なら遠慮なく叩き込めるわ」「全く嬉しくないんですけど!？」

「あとストレートに甘えてくる『せつ菜』も良いけど、しおらしく甘えてくる『菜々』ってキュンとするんだよなあ……どっちかを選ぶって難しいね」

「真面目に答えてもらえます!?!こっちは真面目に聞いてるんですよ!?!」

「いや、結構真面目に答えてるんだけど」

呆れたように言う天さん。

「だって俺、『菜々』も『せつ菜』も大好きだし」

「え……?」

「そりやそうでしょ。それぞれ良いところがあるんだし、比べられるものでもないし。どっち『が』好きとかじゃなくて、どっち『も』好きだよ」

当然と言わんばかりの天さんに、私は思わずポカンとしてしまいます。

「そもそもだけど、『中川菜々』と『優木せつ菜』って同一人物じゃん。別人格とかじゃなくて、一人の人間の違う一面同士じゃん。それなら彼氏である俺が、彼女のどっちの一面も好きなのは自然なことじゃない？」

「っ……」

「『菜々』と『せつ菜』のどっちが好きって、『優しいところ』と『明るいところ』のどっちが好きって聞いているようなもんだよ？大好きな彼女なんだから、そりやどっちも好きに決まってえっ!？」

喋っている途中の天さんに、思いつきり抱きつく私。

そのまま力のかぎり抱き締めます。

「ちよ、苦しいんだけど……」

「……天さんはズルいです」

「はい……?」

「いつもいつも、甘い言葉で私を誘惑して……」

「誰がいつ誘惑したよ!？」

「この人たらし・・・責任取って下さい」

「理不尽!？」

ギヤーギヤー喚く天さんの胸に、顔を押し付ける私。

顔から火が出そうなほど恥ずかしくて・・・

でも涙が出そうなほど嬉しくて・・・

こんな顔、天さんには見せられません。

「ありがとう、天さん・・・大好き」

「・・・俺も大好きだよ」

優しく抱き締めてくれる天さん。

お互いに見つめ合い、そつと唇を重ね合わせます。

私の全てを受け入れ、『大好き』と言ってくれる人がいる・・・

その幸せを噛み締めながら、天さんの温もりに身を委ねる私なのでした。

## 【近江彼方】大好きな人

「・・・ん」

ふと目を覚ます俺。

部屋のカーテンの隙間から、日が差し込んでいた。

「もう朝か・・・」

ゆっくり起き上がろうとする俺だったが、身体が重くて起き上がることが出来ない。つていうか、身体が何やら柔らかい感触に包まれているような・・・

「もしかして・・・」

布団の中へ視線を向ける。

そこには・・・

「すやあ・・・」

オレンジブラウンのロングヘアの女の子が、俺を抱き枕にして熟睡する姿があった。

やっぱりかあ・・・

「かな姉、起きて」

「んう・・・」

名前を呼ぶと、女の子の目が徐々に開いていく。そして俺の顔を見上げると、優しい笑みを浮かべた。

「ふわぁ・・・おはよう、天くん」

「おはよう」

苦笑する俺。

彼女は近江彼方・・・通称かな姉。

俺の近所に住んでいる幼馴染で、俺より一つ上の高校三年生だ。

同じ学校に通っていることもあり、朝は一緒に登校するのが日課になっているのだが・・・

「毎回聞いてるんだけど、何で俺の布団で一緒に寝てんの？」

「毎回答えてるんだけど、天くんの寝顔を見てたら眠くなっちゃったから〜♪」

楽しそうに笑うかな姉。

この年中睡眠不足め・・・

「わざわざ早起きして、俺の家まで迎えに来なくて良いんだよ？何だったら、俺がかな姉の家まで迎えに行くのに」

「色々と準備しなくちゃいけないし、どの道早起きはするから〜。それに〜・・・」

かな姉は俺の頬に手を添え、いつものようにふわりと笑った。

「天くんの寝顔を見ながら添い寝するのは、彼方ちゃんの特権だもくん♪」  
「・・・何それ」

何だが気恥ずかしくなってしまう、かな姉から顔を背ける俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「すやあ・・・」

「また寝てるし・・・」

電車に乗るやいなや、俺の右肩にもたれかかって熟睡するかな姉。

俺が溜め息をついていると、俺の左隣に座る茶髪ツインテールの女の子が苦笑していた。

「アハハ・・・何かゴメンね、お兄ちゃん」

「はるちゃんが気にすることじゃないよ」

苦笑しながら返す俺。

彼女は近江遥・・・通称はるちゃん。

俺の幼馴染で、かな姉の妹だ。

俺より一つ下の高校一年生で、俺達とは違う高校に通っている。

俺のことを『お兄ちゃん』と呼んで慕ってくれる奥ゆかしい子で、俺も本当の妹のよう  
うに可愛がっていた。

「ところでお兄ちゃん、いつお姉ちゃんに告白するの?」

「奥ゆかしさはどこへいったの?」

いきなりド直球な質問をぶちかましてくるはるちゃん。

何この子、怖いんだけど。

「『聞きにくい質問こそストレートに聞くべきです』って、綾小路さんに言われたから」  
「果林さんにアイツ宛のサイン書いてもらって、アイツの目の前で破り捨ててやろう」  
「止めてあげて!?!綾小路さんがショックで立ち直れなくなっちゃうよ!?!」

姫乃エ……

はるちゃんに余計なことを吹き込んだ罪は重いぞ……

「それで?告白しないの?」

「……告白ねえ」

隣で幸せそうに眠る、かな姉の寝顔をじっと眺める。

俺はかな姉のことが、異性として好きだ。

でもかな姉にとって、俺はあくまでも幼馴染……それも弟みたいなもの、といったところだろう。

異性として意識されているなら、毎朝ベッドに潜り込んできて添い寝なんてしないだろうし……

「……告白して今の関係が壊れるなら、このままの方が幸せなんじゃないかな」

「お兄ちゃん……」

「はるちゃん、駅に着いたよ」

「あつ、ホントだ！じゃあお兄ちゃん、行つてきます！」

「行つてらっしゃい」

電車を降りていくはるちゃんを見送る。

俺の右腕を抱きながら眠るかな姉の手に、少し力が入ったような気がしたのだった。

\*\*\*\*\*

《彼方視点》

「彼方、聞いてる?」

「え・・・?」

果林ちゃんの声にハツとする彼方ちゃん。

果林ちゃんが心配そうな表情をしている。

「大丈夫? 一つになくポーっとしてるけど・・・」

「ゴ、ゴメンね・・・ちよつと考え事してて・・・」

「何か悩み事? 相談に乗るよ?」

エマちゃんも心配してくれる。

うう、やつちやつたなあ・・・

「た、大したことじゃないから大丈夫だよ・・・」

「ホント・・・?」

「ホントホント〜! それより、早くお昼ご飯食べちやお〜!」

慌てて誤魔化しながら、ご飯を頬張る彼方ちゃん。

お昼休み、彼方ちゃんは果林ちゃんやエマちゃんにご飯を食べに食堂へやって来ていた。

「それもそうだね・・・って、あれ天くん達じゃない?」

「え・・・?」

エマちゃんが見ている方へ顔を向けると・・・

「歩夢のお弁当って、いつ見ても美味しそうだよね」

「フフツ、ありがと。良かったら卵焼き食べる？天くん卵焼き好きだもんね」

「えっ、良いの？やった！」

「天つちく、せっかくだから歩夢に『あくん』してもらったらく？」

「やかましいわ金髪ギャル。髪色をライトピンクにして出直してきな」

「何でさ!？」

「いや、やつぱライトピンクは止めて。歩夢が汚される」

「当たり前強過ぎイ！」

「アハハ・・・じゃあ天くん、あくん」

「え、ちよ・・・良いの？」

「勿論。あくん」

「あくん・・・うん、結婚しよう歩夢」

「ふえっ!？」

「ちよつと天!?!歩夢を嫁にするのは私だから！」

「侑ちゃん!?!」

「侑とは決着をつけないといけないみたいだな・・・!」

「望むところだよ・・・!!」

「まあまあお二人とも、ここはせつ菜特製スペシャル卵焼きでも食べて・・・」

「味オンチはお呼びびじやないから引つ込んでな」

「ダークマター製造人間は黙っててくれる?」

「酷過ぎません!?!」

「フフツ、どうやらここはランジュの出番・・・」

「「国に帰れ」」

「何でよおっ!?!」

二年生組がわいわい騒いでいた。

楽しそうだなあ・・・

「あらあら、ずいぶん仲良しねえ」

笑っている果林ちゃん。

「それにしても・・・天と歩夢って、何か良い感じよね」

「っ・・・」

「モテモテよねえ、天って・・・侑に信頼されてるし、愛も心を許してるし・・・せつ菜には慕われてるし、ランジュにも気に入られてるしね」

「か、果林ちゃん!?!もうその辺にしとこう!?!」

慌てて制止しようとするエマちゃんをよそに、果林ちゃんがじつとこちらを見る。

「それで？彼方はどうなのかしら？」

「・・・天くんは、彼方ちゃんの弟みたいな存在だよ」

「だったら、何でそんな悲しそうな顔をしてるのかしら？」

「っ・・・」

「どうやらお見通しだったらしい。

参ったなあ・・・」

「まあ彼方がそう言うなら、私が天をいただきますこうかしら」

「え・・・？」

「とりあえず、誘惑してみようかしら・・・身体で」

「ダメええええええええええええっ！」

慌てて立ち上がる彼方ちゃん。

「果林ちゃんに天くんは渡さないもんっ！」

「ちよ、彼方ちゃん!？」

「天くんは彼方ちゃんの・・・彼方ちゃんの・・・大好きな人もんっ！」

果林ちゃんを睨みつける彼方ちゃん。

果林ちゃんがフツと笑みを零す。

「フフツ、大好きな『人』ね……弟みたいな存在じゃないってこと、自分でもよく分かっているじゃない」

「あつ……」

果林ちゃんに指摘されて気付く。

そつか……彼方ちゃん、天くんのこと……

「素直になりなさい、彼方。じゃないと後悔するわよ」

「……うん。ありがとう、果林ちゃん」

決心がつき、果林ちゃんと笑い合っていると……

「えーつと……二人とも？」

エマちゃんがおずおずと割って入ってくる。

「一件落着いたところ悪いんだけど……周りを見てくれる？」

「え……？」

果林ちゃんと二人で首を傾げつつ、周りを見回す。

彼方ちゃん達に、食堂中の視線が向けられていた。

「……あつ」

二人でダラダラと冷や汗を流す。

そういえば、大きな声で叫んじやったつけ……

しかも天くんのこと、『大好きな人だ』って……

「っ!?!」

慌てて天くんの方に視線を向けると……

「……………」

天くんが呆気にとられた表情で彼方ちゃんを見ていた。

あつ、終わった……

「か、彼方ちゃん……………」

顔を真っ赤にした彼方ちゃんをフォローしようと、エマちゃんが優しく声をかけてくれるが……

「か……果林ちゃんのバカあああああつ!」

「ちよ、私のせいなの!?!」

「彼方ちゃん!?!」

全速力で食堂を出て行く彼方ちゃんなのだった。

\*\*\*\*\*

放課後……

「……………」

「……………」

気まずい雰囲気の中、かな姉と二人で帰り道を歩く。

エマさんや二年生組の気遣いもあり、俺達は今日の同好会の練習を休んで帰ることにした。

ちなみにあの一年中迷子には、全力で『雷鳴●卦』をぶちかましておいた。

それにしても……

『天くんは彼方ちゃんの……彼方ちゃんの……大好きな人だもんっ!』

「……………」

顔が赤く染まるのが分かる。

まさかあんな形で、かな姉の気持ちを知ることになるとはなあ……

ふとかな姉の方を見ると・・・

「っ!？」

偶然目が合ってしまった、かな姉が恥ずかしそうに俯いてしまう。

やれやれ・・・

「ねえかな姉、この後時間ある？」

「え・・・？」

俺の質問に、キョトンとしているかな姉。

「大丈夫だけど・・・どうして？」

「ちよつと寄り道して帰らない？行きたいところがあつてさ」

「行きたいところって？」

「それは行つてからのお楽しみ」

「えく、教えてくれないのく？」

「アハハ、行けば分かるよ」

俺はそう言うのと、かな姉の手を握った。

「ふえっ!?!ちよ、天くん!？」

「行くよかな姉!ダツシユ！」

「えっ、走るの!？」

「同好会の練習休んでるんだし、これくらいの運動はしないと！」

「そ、そんなあ!？」

「ほら、急ごう！」

かな姉の手を引つ張り、走り出す俺なのだった。

\*\*\*\*\*

「到着〜」

「ハアツ・・・ハアツ・・・つ、疲れたよ・・・」

息切れしているかな姉。

やれやれ・・・

「情けない・・・明日から練習メニュー増やすからね」

「か、勘弁してよ〜!？」

悲鳴を上げるかな姉だったが、周りの景色を見てハツとした表情を浮かべる。

「あれ、ここって・・・」

「懐かしいでしょ?」

笑う俺。

俺達がやって来たのは、何の変哲も無い小さな公園・・

それでも俺達にとつて、ここは思い出の場所だった。

「昔はよく、この公園で遊んだよね。はるちゃんも一緒に三人で」

「うん、懐かしいね・・・あつ、ブランコ!」

かな姉がブランコの方に駆け寄っていく。

「昔はよくこれで遊んだな」

「久しぶりに乗ってみなよ。俺が押してあげるから」

「じゃ、じゃあ少しだけ・・・」

少し恥ずかしそうにブランコに座るかな姉。

俺はかな姉の後ろに立つと、ゆっくり背中を押した。

かな姉を乗せたブランコが小さく揺れる。

「フフツ・・・こうしてると、昔に戻った気分だね」

「アハハ、ホントにね。昔はよくかな姉に押ししてもらってたっけ」

「昔は彼方ちゃんの方が背が大きかったもんね。すっかり抜かされちゃったけど

」

「成長期だもん」

「むう・・・彼方ちゃんも成長してるのにい・・・」

ちよつと悔しそうなかな姉。

まあ成長はしてるよね・・・どこが、とは言わないけど。

「天くんはすっかり大きくなつちやつて・・・カツコ良くなつちやつてさ。今じゃモテモテだもんね」

「いや、別にモテないよ?」

「同好会の二年生組の女の子達と、凄く仲良しじゃくん」

「まあ同い年だし」

あれ、かな姉ちよつとご機嫌斜め?

「皆可愛いもんね。この女つたらしく」

ちよつと拗ねたような態度のかな姉。

やれやれ・・・

「・・・かな姉」

「っ!?!」

押すのを止め、かな姉を背中からギユツと抱き締める。

かな姉がビツクリしていた。

「そ、天くんっ!？」

「・・・好きだよ、かな姉」

「っ・・・」

息を呑むかな姉。

「歩夢も侑も、愛もせつ菜もランジュも・・・皆可愛いと思う。凄く魅力的な女の子達だと思う。それでも・・・」

かな姉を抱く腕に力を込める。

「それでも俺が好きなのは、かな姉なんだよ。昔からずっと想ってるのは、かな姉ただ一人なんだよ」

「天くん・・・」

「好きだよ、かな姉・・・大好き」

かな姉が俯く。

後ろからなので表情は見えないが、耳が真っ赤になっていた。

「・・・彼方ちゃんの良いの？」

「え・・・？」

「本当に・・・彼方ちゃんの良いの？」

震えているかな姉。

俺はハッキリと告げた。

「うん．．．俺はかな姉が良い。かな姉じやなきや嫌なんだよ」

「っ．．．」

俺はかな姉を離すと、正面に回りかな姉の顔を見た。

かな姉は．．．泣いていた。

「え、ちよ．．．何で泣いてんの!？」

「うう．．．天くんのバカあ．．．」

「はい!？」

「女つたらしく．．．鈍感く．．．」

「急に罵倒の嵐!？」

「ううく．．．」

抱きついてくるかな姉。

「実はねく．．．今朝の天くんと遙ちゃんの話、聞こえちゃってく．．．」

「えっ、起きてたの!？」

「最初は寝てただけど、途中で起きちゃってく．．．でもあんな会話してるから、起きるに起きられなくてく．．．」

「oh．．．」

ってことは、俺のかな姉への気持ちは知られてたのか・・・

そういうえばエマさんから、『朝から彼方ちゃんの様子がおかしいんだけど、天くん何か知ってる?』って連絡きてたっけ・・・

エマさんゴメン、原因は俺だったわ・・・

「・・・何かゴメン」

「もう良いの・・・彼方ちゃんも今日のお昼休みに、食堂で公開告白しちゃったから  
」

「ああ、皆から質問攻めにされたやつね・・・」

「な、何かゴメンね・・・」

「大丈夫大丈夫。歩夢以外は『雷●八卦』ぶちかましたから」

「よ、容赦ないね・・・」

ちよつと引いているかな姉。

いや、アイツらはあれくらいやつても良いと思う。

特に愛とランジュには、全力でぶちかましてやったし。

「・・・かな姉」

かな姉を見つめる俺。

「俺と・・・付き合ってくれませんか?」

「・・・彼方」

「え・・・？」

「彼方って呼んでくれなきや、付き合ってあげないもくん」  
そっぽを向くかな姉。

俺は苦笑すると、最愛の彼女の名前を呼んだ。

「俺と付き合ってほしい・・・彼方」

「っ・・・はいっ♪」

屈託の無い笑みを浮かべる彼方。

やがてどちらからともなく、二人の顔の距離が近付いていき・・・ゼロになった。  
唇に触れる温もりが、愛おしくてたまらない俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《彼方視点》

「ふんふんふん♪」

「ご機嫌だね」

鼻歌を歌いながら寝る準備をしていると、天くんが苦笑していた。

「勿論だよ〜♪」

笑顔を返す彼方ちゃん。

「だって天くんと、二人きりの夜を過ごせるんだも〜ん♪」

そう、今夜天くんは近江家に泊まることになった。

そもそものキツカケは、遥ちゃんに電話で天くんと恋人になったことを報告したことだった。

泣いて喜んでくれた遥ちゃんだったが、『今夜は友達の家にお泊りするから、お兄ちゃんは近江家にお泊りするように!』と言い出したのだ。

しかもお母さんに連絡してくれたらしく、帰ってきた彼方ちゃん達を待っていたのはお母さんの熱烈なハグだった。

『これで天くんも近江家の一員ね!』と喜びを爆発させたお母さんは、『今夜は二人きりでごゆっくり〜♪』と言いながら夜勤へ行ってしまったのだ。

つまり今夜、この家には彼方ちゃんと天くんの二人だけしかない。

「何か展開が急過ぎて、ついていけないんだけど・・・」

「むう・・・天くんは嬉しくないの?」

「いや、勿論嬉しいんだけど……まさか朝の電車ではるちゃんと話してた時、夜にこんな状況を迎えてるとは思わなかったからさあ……」

「フフツ、まあ確かにね〜」

本当に色々なことがあった一日だったと思う。

ちなみに同好会の皆にも、天くんとのことをちゃんと報告しておいた。

皆凄く喜んでくれて、嬉しかったな〜

「明日の朝は〜、久しぶりに彼方ちゃんが手料理を振る舞ってしんぜよう〜」

「マジで？じゃあ卵焼き食べたい！」

「オツケ〜。あつ、卵焼きといえば……」

彼方ちゃんは、今日のお昼休みのことを思い出した。

「天くん、食堂で歩夢ちゃんに『あ〜ん』してもらってたでしよ〜?」

「ぎくつ……あ、あれは愛が余計なことというから……」

「『結婚しよう歩夢』って言ってたでしよ〜?」

「そ、それは流れというか何というか……」

「むう……この浮気者……」

つい膨れっ面になってしまう。

彼方ちゃん、結構独占欲が強いのかも……

「アハハ、ゴメンゴメン……歩夢の卵焼きも美味しかったけど、俺の中で卵焼きと言えれば彼方の味なんだよなあ」

「そ、そうなの〜?」

「うん、あの優しい味が凄く好きでさ……毎日食べたいなって思うよ」

「ま、毎日!?!」

そ、それって……もしかしてプロポーズ!?

「あ、そういうんじゃないやなくて! いや、ゆくゆくはそうなたら良いなどは思うけど!」  
慌てて弁解する天くん。

「彼方がずっと側にいてくれたら、それだけで幸せなのになって……あの頃から、ずっと思ってたから」

「天くん……」

「だから今日食堂で、彼方が俺を『大好きな人』って言ってくれた時……本当に嬉しかったんだよ」

彼方ちゃんの手を握る天くん。

「ありがとう……彼方」

「っ……」

思わず天くんを抱きつく。

優しく抱き締めてくれる天くん。

ああ、幸せだなあ・・・

「ねえ、天くん・・・彼方ちゃん、もう我慢出来ない」

「え・・・むぐつ!?!」

「んっ・・・」

天くんの唇を、彼方ちゃんの唇で塞ぐ。

そのままベッドに倒れ込んだ。

「ぶはっ・・・フフツ、今夜は寝かさないよ〜?」

「彼方が一番言わないであろうセリフを口にしてる!?!」

「お母さんに、本当に見せてあげよっか〜・・・孫の顔♪」

「ちよ、俺の理性がもう・・・」

「彼方ちゃんの身体・・・天くんの好きにして?」

「っ・・・」

「あんっ♡もう、天くんのエッチ♡」

翌日、二人揃って寝坊したことは言うまでもないのであった。

## 【朝香果林】一生の付き合い

「果林ちゃんの様子がおかしい？」

首を傾げるエマ。

ある日の昼休み、俺は彼方やエマと一緒に学食で昼食を食べていた。

ちなみに果林はライブが近い為、昼食もそこに部室へ練習に行っていた。

「そうなんだよ。ここ最近、何か思いつめてるっていうかさ」

「何だろう・・・ダイエツトのせいでお腹空いてるのかな？」

「エマの脳みそってパンで出来てんの？」

「酷くない!？」

シヨックを受けるエマ。

食欲と発育の怪物に聞いたのが間違이었다・・・

「まあ、心当たりはあるかな」

俺達のやりとりに苦笑しつつ、顎に手をやる彼方。

「何だかんだ言って、二人も心当たりあるんじゃないの？」

「・・・そりゃまあ」

「意識する時期だもんねえ．．．」  
表情が曇る俺とエマ。

既に十二月に入り、季節はすっかり冬となっている。

この冬が明け、春になってしまえば．．．

「卒業、か．．．」

溜め息をつく俺。

三月になれば、俺達三年生は卒業．．．

果林がそれを寂しがっていることくらい、皆最初から分かっていた。

「こくら、天くんまで落ち込まないの〜」

彼方が両手で俺の両頬を挟む。

「果林ちゃんを元気付けたいんでしょ〜？天くんがそんな顔してちや、メツ！だよ〜」

「．．．ゴメン」

果林だけじゃない。

俺も彼方もエマも、本当は凄く寂しい。

それでも．．．

「．．．果林のあんな顔、見たくない。果林には、心から笑ってほしい」

「フフツ、よく言えました♪」

俺の頭を撫でるエマ。

「果林ちゃんに伝えよう？ 私達の気持ちを」

「・・・うん」

頷く俺なのだった。

\*\*\*\*\*

《果林視点》

「・・・ハア」

溜め息をつく私。

放課後の練習も終わり、職員室へ行った天の帰りを部室で待つ。

その間、私の頭の中を占めていたのは・・・

「・・・もうすぐ、終わっちゃうのね」

部室を見渡す私。

卒業すれば、もうこの部室でスクールアイドルの練習をすることもない。

「同好会の皆と、ここで一緒に過ごすこともない。それがたまらなく寂しかった。」

「・・・留年しちやおうかしら」

「縁起でもないこと言わない」

「あたっ!?!」

頭を小突かれる。

見上げると、天が呆れた顔をして立っていた。

「天!?!いつからいたの!?!」

『・・・ハア』から」

「最初からじゃない!?!いつの間に部屋に入ってきたのよ!?!」

「普通に入ってきたよ。まあどこかの誰かさんはボーつとしてて、全然気付いてくれなかったけど」

「うぐっ・・・」

言葉に詰まる私。

天は溜め息をつくくと、私の隣に腰を下ろした。

「留年したって、いつかはここを去らなきゃいけないのは変わらないよ。それが早いか遅いかだけの違いなんだから」

「・・・分かってるわよ」

「あとかすみに『果林せんばあい、留年ですかあ?』って煽られるよ」  
「絶対卒業するわ」

あの子が絶対に言いそうなセリフが脳内再生され、思わず顔を顰める。  
それを見て、天がクスクス笑っていた。

「ホント、果林は負けず嫌いだねえ」

「面倒くさい女で悪かったわね」

「うん、ホント面倒くさい」

「そこは否定しなさいよ!?!? これでも貴方の彼女なのよ!?!」

「知ってるよ」

笑いながら私の頭を撫でる天。

「そんな果林のことを、俺は好きになったから」

「つ・・・」

この男はホント・・・

何でそういうセリフをサラツと言えるのかしら・・・

こっちの顔が赤くなりそうになっていると、突然天が私を抱き寄せた。

「ちよ、天!?!」

「・・・俺もね、ホントは寂しいよ」  
ポツリと呟く天。

「かすみをからかえなくなるのも、しずくのお芝居に付き合えなくなるのも、璃奈の璃奈ちゃんボード作りを手伝えなくなるのも、栗子の仕事を手伝えなくなるのも・・・凄く寂しい」

「天・・・」

「侑のひたむきに突っ走る姿を見れなくなるのも、そんな侑を見守る歩夢の優しい顔を見れなくなるのも、愛のダジャレを聞けなくなるのも、せつ菜とアニメ話で盛り上がれなくなるのも、ランジュのワガママに付き合えなくなるのも・・・凄く寂しい」

天の言葉からは、仲間達への愛が溢れていた。

「ミアとハンバーガーを食べに行けなくなるのも、エマの美味しそうに食べる姿を見れなくなるのも、彼方の幸せそうに昼寝する姿を見れなくなるのも・・・凄く寂しい」  
そう言うと、天が私の方を見た。

「それに・・・果林のスクールアイドル姿を見れなくなるのも、凄く寂しい」  
「っ・・・」

「でも、寂しいことばかりじゃないよ」

微笑む天。

「大学生活は少し不安だけど・・・果林が一緒だから。凄く楽しみにしてるんだ、俺」  
「天・・・」

「それに・・・ここに来れば、また皆に会えるから」  
部室を見渡す天。

「これで終わりじゃない。サヨナラじゃない。だから・・・」  
天が私の頬に手を当てる。

「そんな悲しそうな顔しないでよ。俺まで悲しくなっちゃう」

「・・・ごめんなさい」

気付けば涙が溢れていた。

天の手をギョツと握る。

「そうよね・・・これで終わりじゃないのよね・・・サヨナラじゃないのよね・・・」

「当たり前でしょ」

あやすように、背中を優しく叩いてくれる天。

「だから俺達は、胸を張って笑顔で卒業しよう。最後まで、後輩達に先輩のカッコいいところ見せなくちや」

「フフツ・・・そうね」

涙を拭う私。

「それを言ったら、私は天の方が心配よ。貴方絶対卒業式で泣くでしょ」

「それは否定出来ないかなあ・・・まあエマと彼方の方が泣きそうだけど」

「それは心外だなあ」

「彼方ちゃん、こう見えても結構強い子なんだぜ」

「っ!?!」

慌てて振り向くと、エマと彼方が笑いながら立っていた。

「二人とも!?!いつからいたの!?!」

『・・・ハア』から」

「まさかの最初から!?!」

「フッフッフ、天くんと一緒に入ってきたのだく」

「・・・そくら〜?」

「ドツキリ大成功!」

「それで済むかあっ!」

「ぎゃあっ!?!」

「あつ、果林ちゃんが天くんを押し倒した!?!」

「果林ちゃん、ここでR―18展開はマズいんじゃないの〜?」

「違うわよ!?!」

「キヤーツ、果林に襲われるう！」

「天は人聞きの悪いこと言わないのっ！」

「よし、彼方ちゃんも天くんを襲つちやうぞ〜」

「何でそうなるのよ!？」

「じゃあ私は果林ちゃんを襲つちやうぞ〜！」

「エマまで!？」

彼方が天に抱きつき、エマが私に抱きついてくる。

何なのよもう・・・

「あとは・・・」

「こうしよつか！」

「うわっ!？」

「きやあっ!？」

彼方が天の背中を、エマが私の背中を押す。

私と天が再びくつつき、四人で抱き合う形になった。

「ちよ、何するのよ!？」

「フフツ、良いではないか〜」

「天くんも幸せそうな顔してるしね」

「ああ、ここが天国か……」

「彼女の前で鼻の下伸ばしてゐるんじゃないわよ!？」

全く、天ときたら……

「……ハハッ」

「天……?」

不意に笑う天。

どうしたのかしら……?」

「ホント……幸せ者だよ、俺は」

「あら、そんなに女の子の身体を堪能出来ることが幸せなのかしら?」

「それは間違いない」

「断言したわね……」

「天くんはブレないね……」

「いっそ清々しいよね……」

彼方とエマも苦笑している。

やれやれだわ……

「アハハ、まあそれもそうなんだけど……出会いに恵まれたな、と思つてさ」

笑う天。

「果林がいて、彼方がいて、エマがいて……三人が同級生で、本当に良かった」  
「天……」

「大好きな彼女ができて、大切な親友が二人もできて……幸せだよ、俺は」  
私達を抱き締める天。

「果林、彼方、エマ……ありがとう」

「っ……」

「も……天くんはズルいな……ぐすっ」

「まだ卒業式じゃないのに……う……」

涙ぐむ私達。

ホント、ズルいんだから……

「……卒業で終わりじゃない。俺達はこれから、一生の付き合いになるんだから。寂しがることもないでしょ」

「フフツ……それもそうね」

「エマちゃん聞いた？天くんがしれっと果林ちゃんにプロポーズしたぜ？」

「勿論♪果林ちゃんのOKの返事までバツチり聞いちゃった♪」

「プ、プロポーズ!?!」

「いや、その……間違っではない、かな……」

珍しく照れている天。

え、今のプロポーズだったの!?

「まあ、ちゃんとしたプロポーズはまたするけど……俺はこの先もずっと、果林と一緒に歩いていきたいと思ってるよ」

真剣な表情でそう言われ、これ以上ないほど顔が熱くなる私。

そんな私達を見て、彼方とエマがニヤニヤしていた。

「二人が結婚する時は、彼方ちゃんが盛大にお赤飯を炊いてあげるね」

「天くと果林ちゃんの子供、抱っこしたいな」

「うう……」

恥ずかしすぎて顔から火が出そうだった。

でも……

「アハハ……まあ先の話だし、ゆっくり考えてくれたらいいから」

苦笑する天の頬を両手で挟む。天がキョトンとした顔をした。

「果林? どうして……んっ!?!」

「おお……!」

天の言葉を遮るようにキスをすると、彼方とエマが感嘆の声を上げていた。

ゆっくり天から離れると、精一杯の言葉を紡ぐ。

「これが私の答えだから・・・その・・・これからも、よろしくね・・・？」  
嬉しさと恥ずかしさが混ざり合い、心臓バクバクな私なのだった。